

鳥羽遺跡

L・M・N・O区

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第31集—

《本文編》

1990

群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

資料	(財)群馬県埋蔵文化財	01-320
	調査事業団保管	54
No. 98-4933	平成10年5月13日	(9)

鳥羽遺跡

L・M・N・O区

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第31集—

《本文編》

1990

群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

関越自動車道新潟線は、太平洋側の首都東京と日本海側の新潟市を結ぶ高速自動車道として、昭和60年10月1日に開通いたしました。本道路の開通に際しては、数多くの埋蔵文化財が道路建設工事に先立って調査されました。本県でも58箇所の埋蔵文化財包蔵地が発掘調査され、記録保存されています。

本報告による鳥羽遺跡は、前橋市鳥羽町・群馬郡群馬町塚田に所在する埋蔵文化財包蔵地であり、昭和53年4月から昭和59年3月にかけて群馬県教育委員会及び当事業団が調査しました。縄文時代後期を一部含む古墳時代から平安時代にかけて継続的に営まれた集落跡等が調査され、古代における本県の歴史、特に本遺跡が上野国府に隣接することから、奈良・平安時代を知る上での数々の貴重な資料が得られました。これら資料は昭和59年4月から、平成3年3月までの予定で報告書作成のための整理作業が行われています。既に整理が終了したものについては2分冊の報告書が刊行されていますが、今回は遺跡の北部に相当する地域の整理が終了しましたので、ここに鳥羽遺跡の第3分冊の報告書を刊行することができました。

発掘調査から報告書の刊行に至るまで、日本道路公団東京第二建設局、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、群馬町教育委員会、地元関係者等から種々のご援助、ご指導、ご協力を賜りましたことに対し、深甚なる感謝の意を表し、併せて本報告書が広く県民各位、研究者、教育機関等に活用され、本県の歴史を解明するための資料として、役立てられることを願い序とします。

平成2年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水 一郎

例 言

1. 本書は関越自動車道（新潟線）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査域は前橋市鳥羽町から群馬郡群馬町大字塚田に至る地域の約1,200mの区間で、A～Oに区分してある。
3. 発掘調査は昭和53年4月から昭和59年3月にわたって実施した。但し、昭和53年4月から昭和55年3月までは群馬県教育委員会がこれにあたり、ひきつづき勅群馬県埋蔵文化財調査事業団が事業を行った。
4. 本書は全4巻のうちの第3巻である。この報告は昭和56年・57年度調査によるものであり、対象区はL～O区で群馬郡群馬町大字塚田地内にある。
5. 鳥羽遺跡発掘調査報告書のうち第1巻のG・H・I区は昭和61年9月に、第2巻のI・J・K区は63年3月に各々刊行した。調査経過・調査概要・遺跡の立地・環境の項は第1巻を参照されたい。
6. 事業主体者 日本道路公団
7. 調査主体者 群馬県教育委員会・勅群馬県埋蔵文化財調査事業団
8. 発掘調査体制は昭和61年9月刊行の第1巻を参照されたい。
9. 発掘調査及び本書作成にあたっては次の諸氏・諸関係ほか多くの方々の御指導を賜った。
穴澤義功・新井房夫・石井栄一・石井則孝・稲葉和也・岡田精司・小川貴司・大澤正巳・金子真土・川原純之・倉田芳郎・斉藤孝正・酒井清治・関 茂・玉口時雄・利根川章・戸根与八郎・仲野泰裕・檜崎彰一・西宮秀紀・馬淵久夫・水村孝行・宮本長二郎・渡辺 一。 (五十音順・敬称略)
文化庁文化財保護部記念物課・東京国立文化財研究所・奈良国立文化財研究所
10. 発掘調査にあたって次の諸氏・諸機関ほか多くの方々に御協力を賜った。
石井喜平次・石川道緒・加藤和四郎・斉藤一正・篠田わし・砂長実治・砂長竹男・関谷林造・塚田正雄・藤井英男・藤井立一・堀江俊江・本多房松・真塩宇一・真塩義美。 (五十音順・敬称略)
日本道路公団東京第二建設局高崎工事事務所・前橋市教育委員会・群馬町町役場・群馬町教育委員会・群馬町国府農業協同組合・群馬町稻荷台地区・前橋市元総社地区
11. 本書作成のための整理作業は昭和63年4月より平成2年3月まで行った。
12. 本書作成のための事務及び整理作業構成員は次の通りである。
事務関係：白石保三郎・邊見長雄・松本浩一・田口紀雄・上原啓巳・神保侑史・住谷 進・平野進一・真下高幸・笠原秀樹・小林昌嗣・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏・野島のぶ江・今井もと子・松井美智子・角田みずほ
整理関係：綿貫邦男・佐子昭子・福島和恵・牧野裕美・大塚とし子・黒沢美樹子・伊藤淳子・高橋フジ子・小久保ヒロミ
13. 石器の石材鑑定は飯島静男氏にお願いした。
14. 本書に使用した遺物写真は佐藤元彦技師が担当したほか、一部は委託した。なお遺構の写真撮影は調査担当者が行い、遺跡航空写真は委託した。
15. 金属製品の保存処理は、関 邦一技師・北爪健二嘱託員・小材浩一がこれにあたった。
16. 本書に用いた地図は、国土地理院発行の『前橋』1：5,000である。
17. 発掘調査・整理作業に関する史・資料は総て群馬県埋蔵文化財センターにこれを保管してある
18. 本書作成にあたって、縄文時代の遺構執筆を巾隆之氏に遺物の実測・執筆を谷藤保彦氏にお願いした。

また、木器・板碑観察表については大西雅広・新倉明彦両氏の手をわずらわせた。

19. 本書の編集は綿貫があたり、本文執筆は断りがない限り綿貫が行った。

凡 例

1. 本報告書の掲載は鳥羽遺跡のL・M・N・O区の4区域を主な対象にしている。なお第1巻（第11集）G・H・I区と第2巻（第21集）I・J・K区に掲載できなかった竪穴住居跡以外の諸遺構も併せて本書で報告する。
2. 本書における遺構名称には数字を用いた通番でこれを示した。
例：N1号住居跡～L100号住居跡
但し、最初のAlphabetは区名を表し、数字は調査時に付与されたものをそのまま使い、両者を併記して個々の遺構名とした。よって数字そのものは本書の中では時期その他の有機的意味はもたない。またAlphabet順と数字順が対応しないのはL～O区の調査過程によるものである。
3. 本書における遺構図版にはそれぞれ比例尺を付したが、基本的には次のようである。
竪穴住居跡：1/60、竪穴住居跡竈：1/30、井戸：1/60・土坑：1/40・墓跡：1/20
但し遺構によってはこの限りではない。
4. 本書における遺物図版にはそれぞれ比例尺を付したが、基本的には次のようである。
土器・石器：1/3、金属製品・その他小形遺物：1/2
但し遺物によってはこの限りではない。
5. 本書における遺構図版中の断面基準は標高でこれを表した。単位はmである。
6. 本書における遺物記述は表組でこれを示した。計測単位はcm・gである。
7. 遺物図版中の番号は、遺構図版の遺物出土位置の番号及び遺物写真図版中の番号と同一である。
8. 土器の色調は「標準土色帖」農林省農林水産技術会議事務所・財団法人日本色彩研究所監修によった。
9. 土器の実測図は原則として四分画法をとった。残存量が二分の一以下の遺物の場合は180°展開して図上復元として、中心線は点線で示した。
10. 遺物の拓影は基本的には一角法によって貼付した。

目 次

序	7 その他 ……433
例 言	第2節 H区の遺構と遺物 ……437
凡 例	1 掘立柱建物跡 ……439
第1章 L・M・N・O区の概要と調査… 1	2 井戸跡 ……441
第1節 L・M・N・O区の概要 …… 1	3 土 坑 ……446
第2節 L・M・N・O区の調査概要 …… 2	4 溝 跡 ……555
第2章 遺 構 と 遺 物 …… 7	5 その他 ……460
第1節 竪穴住居跡と出土遺物 …… 7	第3節 I区の遺構と遺物 ……461
第2節 その他の遺構と出土遺物 ……354	1 掘立柱建物跡 ……462
1 竈構築材採掘坑 ……354	2 井戸跡 ……462
2 炉 跡 ……358	3 墓 跡 ……464
3 掘立柱建物跡 ……359	4 土 坑 ……470
4 井戸跡 ……360	5 溝 跡 ……476
5 墓 跡 ……360	6 その他 ……487
6 土 坑 ……362	第4節 J区の遺構と遺物 ……497
7 溝 跡 ……369	1 井戸跡 ……498
8 M・N区第2台地下 ……381	2 墓 跡 ……500
9 その他 ……369	3 土 坑 ……502
10 掘立柱建物跡(M1号) ……405	4 溝 跡 ……509
第3章 G・H・I・J・K区の	5 その他 ……517
遺構と遺物……406	第5節 K区の遺構と遺物 ……520
第1節 G区の遺構と遺物 ……406	1 井戸跡 ……521
1 掘立柱建物跡 ……407	2 墓 跡 ……521
2 井戸跡 ……411	3 土 坑 ……523
3 墓 跡 ……421	4 溝 跡 ……526
4 土 坑 ……424	5 その他 ……540
5 溝 跡 ……430	第4章 ま と め ……547
6 さく状遺構 ……430	

插 图 目 次

N 1 号住居跡	(Fig. 7~10)	L 68号住居跡	(Fig. 133・134・137・138)
N 3 a・b 号住居跡	(Fig. 7・11)	L 84号住居跡	(Fig. 133・135・139・140)
N 2 号住居跡	(Fig. 12・13)	L 109号住居跡	(Fig. 133・136・141)
N 4 号住居跡	(Fig. 14~16)	L 129号住居跡	(Fig. 133・142)
N 6 号住居跡	(Fig. 17・18)	L 70号住居跡	(Fig. 143~145)
M 7 号住居跡	(Fig. 19~22)	L 71号住居跡	(Fig. 146・147)
M 9 号住居跡	(Fig. 19・23)	L 72号住居跡	(Fig. 148~150)
M10号住居跡	(Fig. 24~26)	L 73号住居跡	(Fig. 151~154)
M19号住居跡	(Fig. 24・27)	L 74号住居跡	(Fig. 155~157)
M11号住居跡	(Fig. 28~31)	L 75号住居跡	(Fig. 158・161)
M12号住居跡	(Fig. 32~36)	L 79号住居跡	(Fig. 158・160・162・163)
M13号住居跡	(Fig. 32・37)	L 80号住居跡	(Fig. 158・159・164)
M20号住居跡	(Fig. 32・38)	L 122号住居跡	(Fig. 158・165)
M25号住居跡	(Fig. 32・39)	L 77号住居跡	(Fig. 166・168・169)
M14号住居跡	(Fig. 40・41・43)	L 78号住居跡	(Fig. 166・167・170・171)
M24号住居跡	(Fig. 40・42・44)	L 81号住居跡	(Fig. 172~174)
M15・16号住居跡	(Fig. 45・47・49)	L 143号住居跡	(Fig. 172・175)
M17号住居跡	(Fig. 45・46・50)	L 83号住居跡	(Fig. 176~180)
M30号住居跡	(Fig. 45・48・51)	L 87号住居跡	(Fig. 181・182・184)
M18号住居跡	(Fig. 52~55)	L 110号住居跡	(Fig. 181・183・185)
M21号住居跡	(Fig. 56・57・61)	L 89号住居跡	(Fig. 186・187・189・190)
M34号住居跡	(Fig. 56・58・62)	L 90号住居跡	(Fig. 186・191)
M35号住居跡	(Fig. 56・59・63)	L 92号住居跡	(Fig. 186・188・192)
M37号住居跡	(Fig. 56・60・64)	L 94号住居跡	(Fig. 193~196)
M22号住居跡	(Fig. 65・66)	L 95号住居跡	(Fig. 197~200)
M29号住居跡	(Fig. 65・66)	L 96号住居跡	(Fig. 197・201)
M23号住居跡	(Fig. 67~70)	L 97号住居跡	(Fig. 202・203)
M60号住居跡	(Fig. 67)	L 98号住居跡	(Fig. 202・204)
M26号住居跡	(Fig. 71~73)	L 99号住居跡	(Fig. 205~208)
M27号住居跡	(Fig. 71・74・75)	L 100号住居跡	(Fig. 209~211)
M39号住居跡	(Fig. 71)	L 123号住居跡	(Fig. 209・212)
M28号住居跡	(Fig. 76・77)	L 102号住居跡	(Fig. 213~215)
M36号住居跡	(Fig. 78・79・81・82)	L 103号住居跡	(Fig. 216・217)
M53号住居跡	(Fig. 78・80・83)	L 124号住居跡	(Fig. 216)
M40号住居跡	(Fig. 84~86)	L 104号住居跡	(Fig. 218・219)
M41号住居跡	(Fig. 87~89)	L 107号住居跡	(Fig. 220・221)
M42号住居跡	(Fig. 90・91・92・93・94)	L 108号住居跡	(Fig. 222・223)
M49号住居跡	(Fig. 90・92・95)	L 111号住居跡	(Fig. 224・225・228・229)
M50号住居跡	(Fig. 90・92・96)	L 153号住居跡	(Fig. 224・230)
M52号住居跡	(Fig. 90・92)	L 154号住居跡	(Fig. 224・226・231・232・233)
M43号住居跡	(Fig. 97~99)	L 159号住居跡	(Fig. 224・227・234)
M44号住居跡	(Fig. 97・100)	L 171号住居跡	(Fig. 224)
M45号住居跡	(Fig. 101・103)	L 112号住居跡	(Fig. 235)
M46号住居跡	(Fig. 101・102・104・105)	L 115号住居跡	(Fig. 236~238)
M56号住居跡	(Fig. 101・106)	L 119号住居跡	(Fig. 236・239・240)
M47号住居跡	(Fig. 107・109)	L 120号住居跡	(Fig. 236・241)
M48号住居跡	(Fig. 107・108・110・111)	L 118号住居跡	(Fig. 242~245)
M51号住居跡	(Fig. 107・111)	L 121号住居跡	(Fig. 246~252)
M54号住居跡	(Fig. 112・113・115)	L 126号住居跡	(Fig. 253~258)
M55号住居跡	(Fig. 112・116)	L 127号住居跡	(Fig. 253・259)
M57号住居跡	(Fig. 112・114・116・117)	L 128号住居跡	(Fig. 260~263)
M59号住居跡	(Fig. 118~120)	L 130号住居跡	(Fig. 264・265・266・268)
M61号住居跡	(Fig. 118・121)	L 151号住居跡	(Fig. 264・267・269)
M65号住居跡	(Fig. 118)	L 167号住居跡	(Fig. 264・270)
M62号住居跡	(Fig. 122・123)	L 131号住居跡	(Fig. 271~274)
M63号住居跡	(Fig. 122・123)	L 139号住居跡	(Fig. 271・275・276)
M64号住居跡	(Fig. 124・125)	L 142号住居跡	(Fig. 271・277)
M66号住居跡	(Fig. 126・127)	L 132号住居跡	(Fig. 278・279・281)
L 67号住居跡	(Fig. 128~132)	L 157号住居跡	(Fig. 278・279・282)

- L 168号住居跡 (Fig. 278・280・283)
L 133号住居跡 (Fig. 284・285)
L 194号住居跡 (Fig. 284・286)
L 134号住居跡 (Fig. 287~289)
L 135号住居跡 (Fig. 290・291)
L 136号住居跡 (Fig. 292~294)
L 174号住居跡 (Fig. 292・295)
L 219号住居跡 (Fig. 292・296)
L 137号住居跡 (Fig. 297・298)
L 138号住居跡 (Fig. 299~301)
L 140号住居跡 (Fig. 302・303)
L 141号住居跡 (Fig. 302・304)
L 144号住居跡 (Fig. 305~307)
L 145号住居跡 (Fig. 308・309)
L 146号住居跡 (Fig. 308・310・312・313)
L 185号住居跡 (Fig. 308・311・314・315)
L 147号住居跡 (Fig. 316・317)
L 148号住居跡 (Fig. 318)
L 149号住居跡 (Fig. 319・320)
L 152号住居跡 (Fig. 321・323・324)
L 180号住居跡 (Fig. 321・322・325・326)
L 158号住居跡 (Fig. 327・328)
L 163号住居跡 (Fig. 327・329)
L 160号住居跡 (Fig. 330~333)
L 161号住居跡 (Fig. 334・335)
L 162号住居跡 (Fig. 336~339)
L 176号住居跡 (Fig. 336・340・341)
L 165号住居跡 (Fig. 342~344)
L 166号住居跡 (Fig. 345・346・348・349)
L 184号住居跡 (Fig. 345・347・350・351)
L 206号住居跡 (Fig. 345・352)
L 169号住居跡 (Fig. 353・354)
L 170号住居跡 (Fig. 355~358)
L 178号住居跡 (Fig. 359・360)
L 179号住居跡 (Fig. 361・362・364)
L 186号住居跡 (Fig. 361・363・365)
L 181号住居跡 (Fig. 366~370)
L 182号住居跡 (Fig. 371~376)
L 208号住居跡 (Fig. 371・377)
L 183号住居跡 (Fig. 378~381)
L 187号住居跡 (Fig. 382・383・385・386)
L 203号住居跡 (Fig. 382・387)
L 212号住居跡 (Fig. 382・384・388・389)
L 222号住居跡 (Fig. 382・390)
L 188号住居跡 (Fig. 391~393)
L 189号住居跡 (Fig. 394・395・397・398)
L 200号住居跡 (Fig. 394・396・399・400)
L 190号住居跡 (Fig. 401・402)
L 191号住居跡 (Fig. 403・404・406)
L 195号住居跡 (Fig. 403・405・407)
L 192号住居跡 (Fig. 408~410)
L 193号住居跡 (Fig. 411・412)
L 196号住居跡 (Fig. 413~415)
L 197号住居跡 (Fig. 416~419)
L 198号住居跡 (Fig. 420~423)
L 199号住居跡 (Fig. 424~427)
L 201号住居跡 (Fig. 428・429・434)
L 204号住居跡 (Fig. 428・430・434)
L 213号住居跡 (Fig. 428・431・435)
L 215・218号住居跡 (Fig. 428・432・433・436・437)
L 217号住居跡 (Fig. 428・437)
L 202号住居跡 (Fig. 438)
- L 205号住居跡 (Fig. 439・440)
L 207号住居跡 (Fig. 441・442)
L 214号住居跡 (Fig. 441・443・444)
L 209号住居跡 (Fig. 445~447)
L 220号住居跡 (Fig. 445)
L 210号住居跡 (Fig. 448~450)
L 216号住居跡 (Fig. 448・451・452)
L 211号住居跡 (Fig. 453~456)
L 221号住居跡 (Fig. 457~459)
N 5号住居跡 (Fig. 460・461)
N 2・4・8号土坑 (Fig. 462・463)
M・N区第2台地縦文土坑 (Fig. 462・463)
K74号住居跡 (Fig. 465・466)
O区第1台地竈構築材採掘坑群 (Fig. 467・471)
O区第1台地採掘坑 (Fig. 468)
L区第4台地採掘坑群 (Fig. 469・471)
O 1号炉跡 (Fig. 472・473)
N 1号掘立柱建物跡 (Fig. 474)
L 1号井戸跡 (Fig. 475・476)
M 1号墓跡 (Fig. 477・479)
L 2号墓跡 (Fig. 478・480)
M 1・2・3・4・5
6号土坑 (Fig. 481・485・486・487)
M 7・8・9・L 10
11・12・13・14号土坑 (Fig. 482・487)
L 15・16・17・18・19
20号土坑 (Fig. 483・487・488)
L 21・22号土坑 (Fig. 484)
O区第1台地溝跡 (O 1・2・3・4号溝) (Fig. 489)
N 5・6号溝跡 (Fig. 462)
M 7号溝跡 (Fig. 490・495)
M 9号溝跡 (Fig. 491・496)
M 10・11号溝跡 (Fig. 492・497・498)
L 12・13号溝跡 (Fig. 493・499)
L 14号溝跡 (Fig. 494)
M・N区第2台地下出土遺物 (土器) (Fig. 500~505)
M・N区第2台地下出土遺物 (木器) (Fig. 506~509)
M・N区第2台地出土遺物 (Fig. 510)
M区第3台地出土遺物 (Fig. 511)
L区第4台地出土遺物 (Fig. 512~516)
M 1号掘立柱建物跡 (Fig. 52)
G・H・I・J・K区全体図 (Fig. 517)
G区全体図 (Fig. 518)
G 1号掘立柱建物跡 (Fig. 519)
G 2号掘立柱建物跡 (Fig. 520)
G 3号掘立柱建物跡 (Fig. 521)
G 5号掘立柱建物跡 (Fig. 522)
G 1号柱列跡 (Fig. 523)
G 1・2号井戸跡 (Fig. 524)
G 3・5・6号井戸跡 (Fig. 525・527・528・529・530・531・532)
G 7号井戸跡 (Fig. 526・533)
G 1・2・3・4号墓跡 (Fig. 534・536・537)
G 5号墓跡 (Fig. 535)
G 1・2号土坑 (Fig. 538)
G 3・4・5・6・7
8・9・10・11号土坑 (Fig. 539・543)
G 12・13・14・15・16・17・18
19・20・21・22・23号土坑 (Fig. 540)
G 24・25・26・27・28
29・30・31・32・33
34・35・36・37号土坑 (Fig. 541)
G 38・39・40・41・42

43·44·45·46号土坑	(Fig. 542)	J 11号井戸出土遺物	(Fig. 612)
G 1号溝·出土遺物	(Fig. 544)	J 1号墓跡	(Fig. 613·614)
2号溝·棚状遺構	(Fig. 544·545)	J 1·2·3·4·	
G区出土遺物	(Fig. 546~548)	5·6号土坑	(Fig. 615·620)
H区全体図	(Fig. 549)	J 7·8·9·10·	
H 2号掘立柱建物跡	(Fig. 550)	11·12·13·14·	
H 3号掘立柱建物跡	(Fig. 551)	15·16·17号土坑	(Fig. 616·620)
H 1·2·4·5号		J 18·19·20·21·	
井戸跡	(Fig. 552·557)	22·23·24·25·	
H 6·7·8·9·		26·27号土坑	(Fig. 617)
10号井戸跡	(Fig. 553·556·558·559)	J 28·29·30·31·	
H11号井戸跡	(Fig. 554·559)	32·33号土坑	(Fig. 618)
H12号井戸跡	(Fig. 555)	J 34·35·36·37·	
H 1·2·3·4·		38·39号土坑	(Fig. 619·621)
5·6·7·8·		J 1·2·3·4·	
9·10号土坑	(Fig. 560)	6号溝跡	(Fig. 622·624·625·626·628·629·630·
H11·12·13·14·			631)
15·16·17·18·		J 5号溝跡	(Fig. 623·627)
19·20·21·22·		J区出土遺物	(Fig. 632)
23·24号土坑	(Fig. 561)	J区表採遺物	(Fig. 633·634)
H25·26·27·28·		K区全体図	(Fig. 635)
29·30·31·32·		K 1号井戸跡	(Fig. 636)
33·34·35号土坑	(Fig. 562)	K 1·2号墓跡	(Fig. 637·638)
H36·37·38·39·		K 1·2·3·4·	
40·41·42·43·		5·6·7号土坑	(Fig. 639·641·642)
44·45·46·47号		K 8·9·10·11号土坑	(Fig. 640·643·644)
土坑	(Fig. 563)	K 1·2·3·4·5	
H48·49·50·51·		号溝跡	(Fig. 645·649·650·651·652·653·654·
52·53·54·55·			655)
56·57·58·59号		K 6·7·8号溝跡	(Fig. 646·656·657·658)
土坑	(Fig. 564)	K 9·10·11号溝跡	(Fig. 647·656·659)
H60·61·62·63·		K12号溝跡	(Fig. 648·660)
64·65号土坑	(Fig. 565)	K区出土遺物	(Fig. 661~663)
H66·67号土坑	(Fig. 566)	K区表採	(Fig. 664)
H 1·2·3·4·			
5·6·7号溝跡	(Fig. 567·568·569·570·571)		
H 8·9号溝跡	(Fig. 549·572)		
H区出土遺物	(Fig. 573)		
I区全体図	(Fig. 574)		
I 1号掘立柱建物跡	(Fig. 575)		
I 1·2号井戸跡	(Fig. 576)		
I 1号墓跡	(Fig. 577)		
I 2号墓跡	(Fig. 578)		
I 3号墓跡	(Fig. 579)		
I 4·5·6号墓跡	(Fig. 580·582·583·584·585)		
I 7号墓跡	(Fig. 581)		
I 1·2·3·4号			
土坑	(Fig. 586·591)		
I 5·6·7·8·			
9·10·11·12·			
13·14·15号土坑	(Fig. 587)		
I 16·17·18·19·			
20·21号土坑	(Fig. 588)		
I 22·23·24号土坑	(Fig. 589)		
I 25·26号土坑	(Fig. 590)		
J·I 1·I 2号溝跡	(Fig. 592·596·597·599)		
I 1号溝跡	(Fig. 593·598)		
I 3·4号溝跡	(Fig. 594·599)		
I 5·6·7号溝跡	(Fig. 595·600·601·602)		
I区出土遺物	(Fig. 603~609)		
J区全体図	(Fig. 610)		
J 3·5·6号井戸跡	(Fig. 611)		

第1章 L・M・N・O区の概要と調査

第1節 L・M・N・O区の概要

調査の経緯

鳥羽遺跡の発掘調査は昭和53年度から開始され、昭和59年3月末日に至るまで6年間という長期に渡っている。その間、調査主体者は群馬県教育委員会から(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団へと移り、継続して実施された。

当遺跡の調査経過については、昭和61年に刊行された『鳥羽遺跡』G・H・I区の中で既に述べられてある。しかし当報告の主体区であるL～O区に関しては、一時的に鳥羽II遺跡として別班体制で調査を実施した。このような経緯から、ここでは再度当該区の調査経過を記述する。

L～O区は昭和55年度末に試掘班を編成し試掘調査を実施し、低地と台地地形からなる調査区では、台地上に古墳～奈良・平安時代にかけての竪穴住居跡を中心とする遺構群を確認した。昭和56年4月、本調査に当たって県道前橋一足門線を境に南側を鳥羽I、北側当該区を鳥羽IIとして並行調査にはいった。ただし調査成果としては鳥羽遺跡として一体になるものとされた。鳥羽IIは4つの台地縁辺地形を主に調査を進め、縄文時代・古墳時代～奈良・平安時代の竪穴住居跡60軒余り、またO区では凝灰岩質層を切り出した竈構築材採掘坑群などを検出・調査した。昭和57年4月、鳥羽I・IIの分割調査を解消し、今年度より1班体制で調査に当たり遺跡名称も鳥羽遺跡に統一し

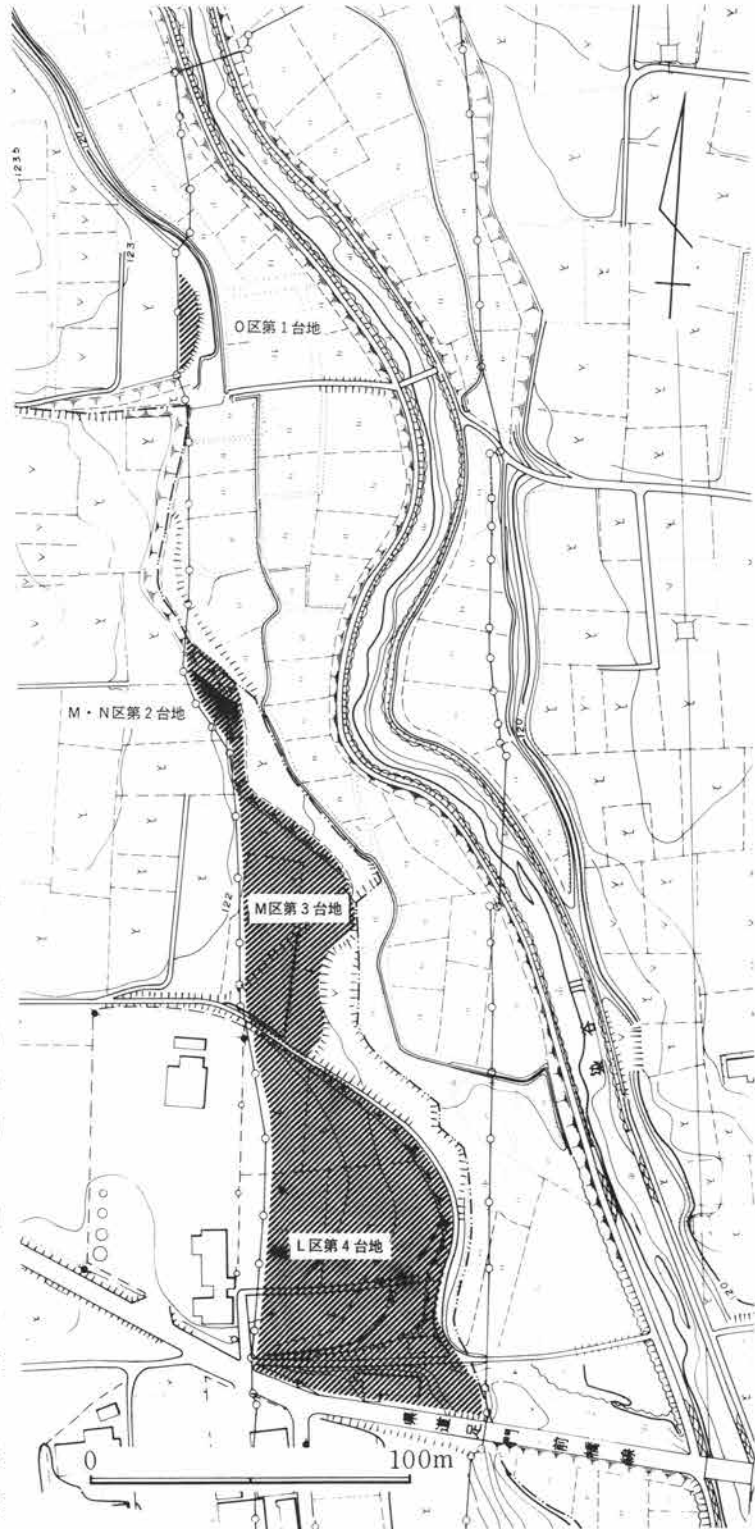


Fig. 1 L・M・N・O区調査区

第1章 L・M・N・O区の概要と調査

た。L～O区に関しては昨年度からの引き継ぎとしてL区をとり込み、G・H・I・J・K区との並行調査とし、同年8月で終了した。L区は当該調査区で最も広い面積をもつが、遺構数も多数にのぼり重複関係は著しい。検出された遺構は竪穴住居跡を中心とするもので131軒を数え、古墳時代前半期から平安時代末期までほとんど絶え間なく続き、時代を追うごとに住居跡数が増加する傾向にある。また台地突端部ではO区に匹敵する規模で竈構築材採掘坑群が検出された。

概要と調査

鳥羽遺跡はほぼ南北走る関越自動車道建設地、前橋 Interchange から北へ約1.2kmの範囲である。この遺跡地を三分するように二本の主要県道、前橋—安中線と前橋—足門線が横断する。当該調査区であるL～O区の約250mの範囲は遺跡の北側を東西走る前橋～足門線を境にその北側に延びる地域である。

遺跡は榛名山東南麓に水源をもつ諸河川の1つ、染谷川の右岸台地上に立地する。染谷川は榛名山麓よりほぼ南東方向に流走し鳥羽遺跡の北限を画しているが、当該調査に対峙し対岸の推定上野国府を擁する台地にさえぎられ南へ流路を変える部分である。従前“あばれ川”の異名をとったとされるこの川はここから落差を緩め下流には上流には見られない幅広な低地帯を形成している。当該区の範囲では左岸に広い低地を作り、流路は右岸台地側に寄っている。

遺跡地の台地は河床より約4mの比高差をもつ。縁辺はかなり侵蝕を受け、また幾筋かの狭小な台地形が入り込み小さな蛇行線を作り出している。関越自動車道の路線は台地の先端部をかすめる形になり、従ってL～Oの調査区は大小の4つの台地に分断される形状になる。

L～O区にまたがる4つの台地は、最も北側を第1台地、順次南へ第2・第3・第4台地と仮称し調査を行った。報告文中でもこの仮称名とAlphabetによる区名を併記して用いてある。

台地上調査区の土層堆積状況は既に報告してある各区と基本的に変わるころはなく、I耕作土・II砂質暗褐色土（浅間山降下軽石B混じり）・III暗褐色土（浅間山降下軽石C混じり）・IV暗褐色土・V Loamである。台地縁辺部については厚さ30cm前後の耕作土下直ちに凝灰岩質層に達しており、Loam層を含む標準的土層は遺存していない。通常ではV層Loam下に属するものである。このことは地勢上堆積土を維持できず常に流出した結果とも考えられるが、縁辺に比べ台地内部では凝灰岩質層への到達が深くなっており、また存在していない。このことは微地形的には凝灰岩質層が台地縁辺をとりまく堤状あるいは独立丘状に存在した可能性もある。O区第1台地・L区第4台地に検出された竈構築材採掘坑群の選地は凝灰岩質層の分布状態を示すと考えられる。

台地下の土層はM・N区第2台地下の低地に設定した試掘溝調査によれば、37の層序が得られ、榛名二ツ岳降下灰層（FA）をはさみ上層は砂利と砂の互層に、下層は砂と泥炭の互層で構成され以下無遺物の砂利層となる。

第2節 L・M・N・O区の調査概要

O区第1台地 (Fig. 4・PL. 2)

当該調査区の最北端の台地で、鳥羽遺跡の北限でもある。O区対象域のうち調査対象となった台地面積は約273m²の狭小な範囲で南側は小さな谷地形が入る。検出された主な遺構は奈良～平安時代にかけての竪穴住居跡の竈構築に供したと

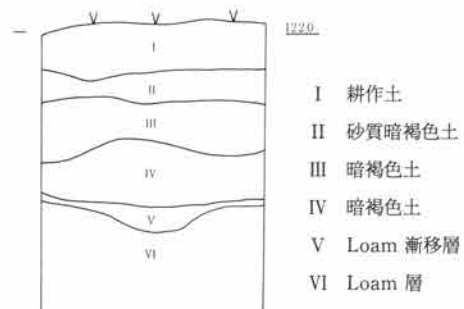


Fig. 2 M・N区第2台地土層

考えられる構築材採掘坑群である。採掘坑群は台地上中央部やや南部に集中しており、北半にはほとんどその痕跡を認めることができない。また採掘坑群の範囲は調査区域外へも拡大する様相が見られその規模は現状をさらに上回ると考えられる。土坑群は幾重にも重複しており採掘した構築材の実数は不明とせざるを得ないが、採掘面積はおよそ100㎡である。採掘坑から窺われる材の形態は長方形で厚みのある板状のものが主になると推定される。また大きさに関しては大・小4種類程度と思われる。当台地上では採掘坑群を除いては目立った遺構は確認されていないが、焼土粒を含む炉跡状土坑1基と溝4条が検出されている。

M・N区第2台地 (Fig. 4・PL. 2)

当台地はM・Nの両区にまたがり調査対象面積は最も小さく約250㎡である。現状の染谷川が台地寄りに大きく蛇行し、流路が最も近づく部分となっている。第2台地ではLoamまでの層序が整っており、凝灰岩質層の存在は確認されず、第1・3・4台地に多少とも見られる竈構築材の採掘坑は当台地では皆無である。検出された遺構は平安時代後半期の竪穴住居跡8軒・縄文晩期の住居跡1軒・掘立柱建物跡1棟・火葬墓1基・溝2条が検出され、N1号住居跡からは和鏡八稜鏡が出土している。台地下の低地には約250㎡の範囲に廃棄されたとされる多量の土器群が出土している。榛名山二ツ岳降下火山灰 (FA層) をはさみ弥生時代後期、古墳時代初頭から奈良・平安時代に至る各時期の土器群である。しかし第2台地上の調査範囲内には弥生・古墳・奈良の各時代に相当する遺構は検出されず、台地下の遺物群の出処は台



Fig. 3 M・N区第2台地下試掘溝土層

第1章 L・M・N・O区の概要と調査

地内部にあらうか。台地下の遺物群からは裏留板の残る黒漆塗り銅製丸柄が出土している。

M区第3台地 (Fig. 4・PL. 3)

調査対象面積は1,400㎡の台地で、南のL区第4台地との間には狭い谷地形が入り込む。台地上での遺構検出状況は竪穴住居跡を中心に密集状態であるが、南西～北東走るM9号溝を境に南側は遺構が少ない。竪穴住居跡は古墳時代後期から平安時代末期までの57軒が著しい重複をみせている。その他、掘立柱建物跡1棟・溝跡6条などが検出されている。台地縁辺部は表土下直に凝灰岩質層が露呈し、小規模な竈構築材の採掘坑が4～5箇所に検出された。



Fig. 4 M・N・O区全体図

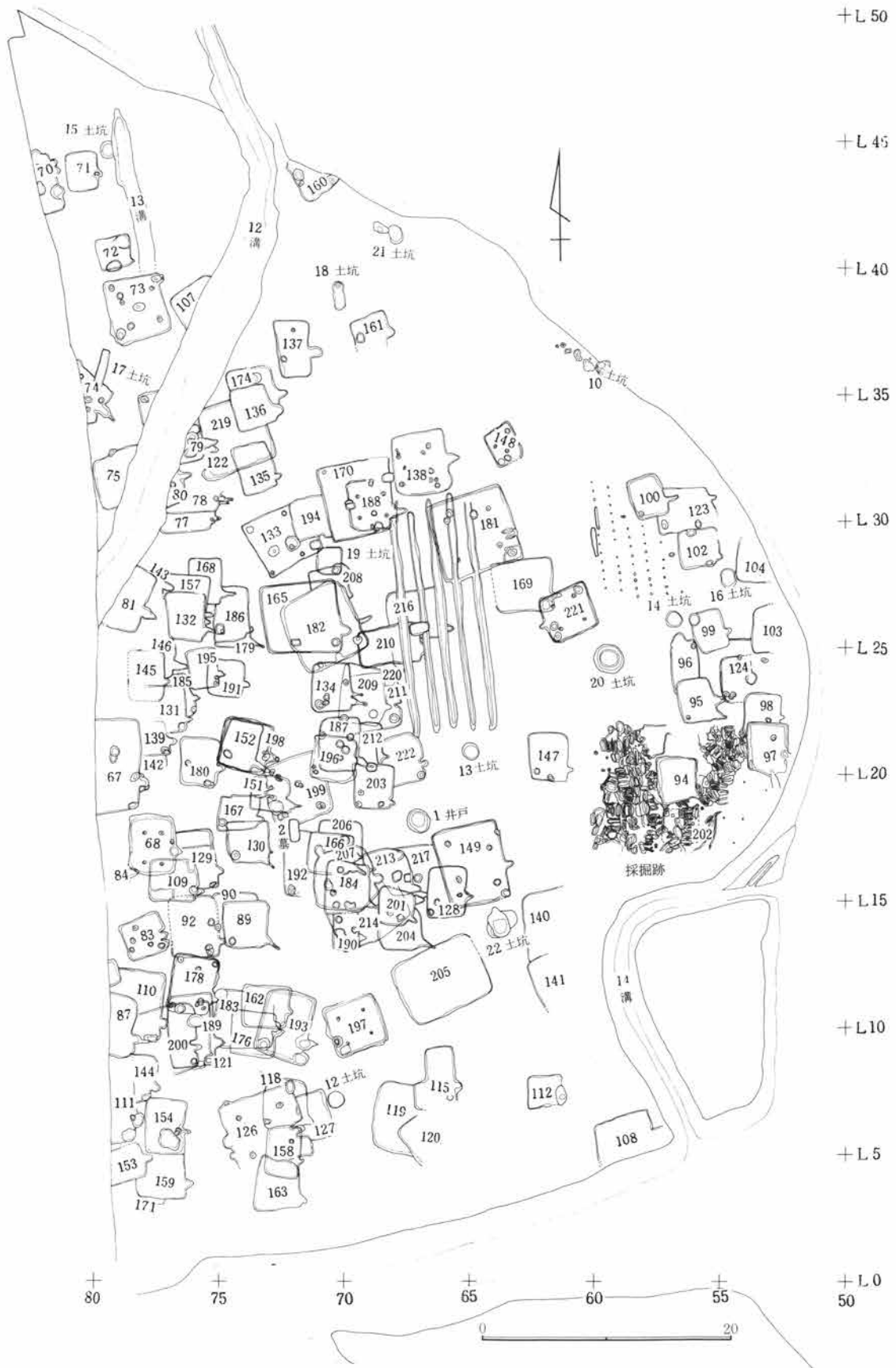


Fig. 5 L区全体図

L区第4台地 (Fig. 5・PL. 3)

4つの台地の中で調査対象面積は最大で5,227m²である。南・北には谷地形が入り、南側では現在流水路が通る。検出された遺構は古墳時代前期から平安時代末期に至る竪穴住居跡130軒で、各時代ごとに軒数の増減がみられるものの空白期が少なく、かなり継続的なあり方を示す。特に注目される遺構には榛名山降下火山灰FA層を前後する古墳時代の竪穴住居跡、また平安時代後半に属し多量の灰釉陶器・須恵器大形甕などをもつ火災住居などがある。その他、M区第3台地東側下端に沿って掘削される大規模な溝は、当区では台地上に、及び北部から台地内部へ延びる様相を見せる。また台地南東部では縁辺をL字状に開削する溝が検出されている。また東部縁辺では第1台地の竈構築材採掘坑に次ぐ規模で採掘坑群がある。採掘面積は約65m²の広さである。井戸跡・土墳墓・土坑などの検出もあるが、その数は少ない。

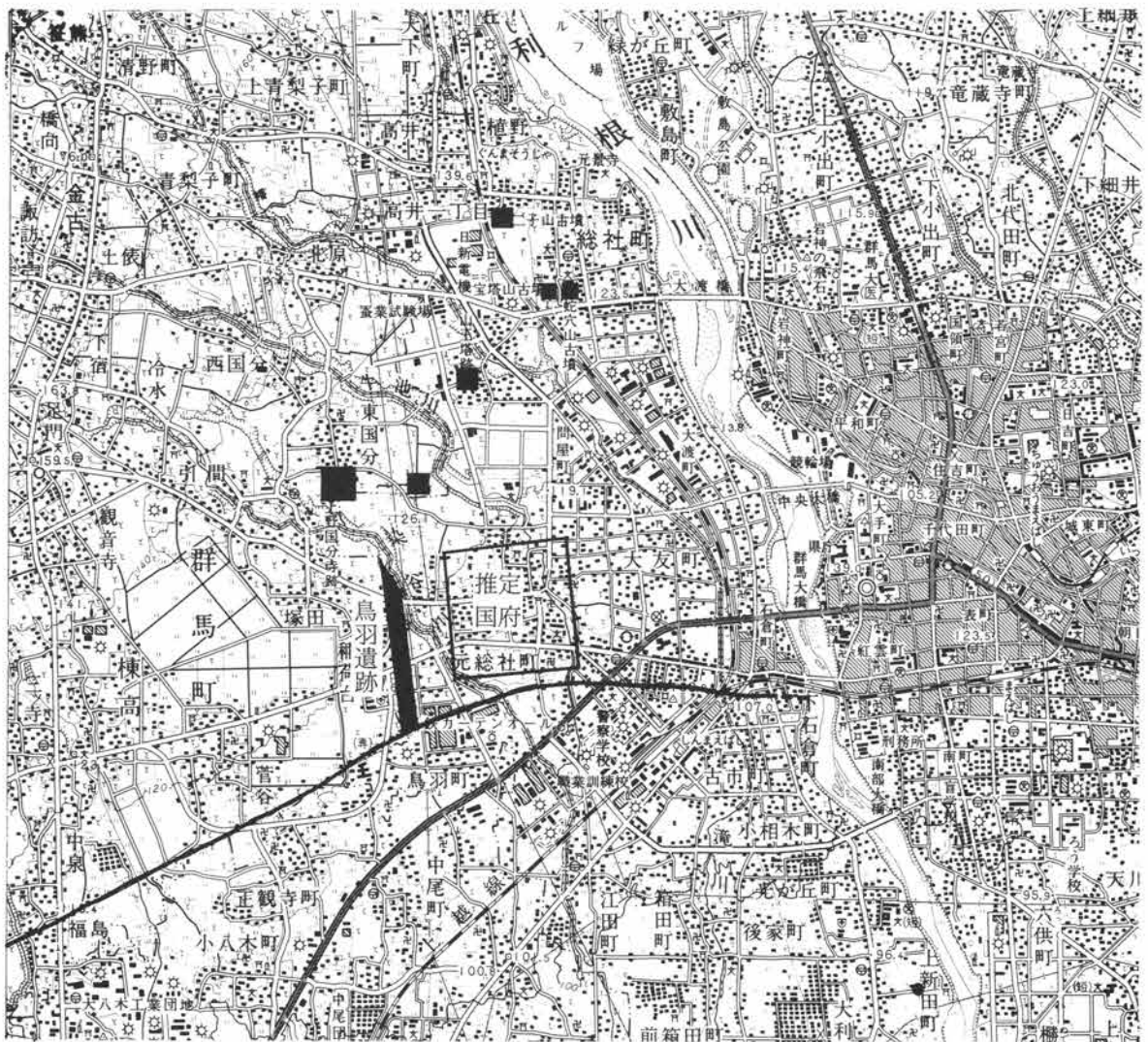


Fig. 6 遺跡周辺図

第2章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居と出土遺物

N1号住居跡 (Fig. 7~10・PL. 4、35)

N区南東隅、第2台地上東端部に位置し、91~93N0~2の範囲にある。N3a号・N3b号住居跡と重複しており、両者より新しい時期の所産である。

平面形は北東~南西軸がやや長く、3.9×3.6mの略方形を呈し、略東西軸方位はN-45°-Wを示す。壁高は約12cmを測り、床面は平坦でやや軟弱な踏み締りである。貯蔵穴は南西隅にあり、84×60cmの略方形を呈し、深さ約40cmである。

竈は南東壁の南に偏って付設され、袖部が住居内に張り出す形態をもつ。袖部は住居構築基盤土を掘り残り壁線からの長さは左袖約50cm・右袖約20cmである。燃烧部内法幅50cm・奥行き60cm、煙道部は長さ35cmを測り、燃烧部から約15cmの段差をもって急角度で立ち上がり短い平坦面をなす。燃烧部前面に火床を形成し、これに接して深さ20cmの焼土粒・炭化粒を含んだ Pit が検出されている。また燃烧部内左に偏って凝灰岩質の加工材が埋設されているが、大きさ・位置から側壁構築材の一部と考えられる。

出土遺物は少量であるが北東壁立ち上がり肩面より銅製八稜鏡（和鏡）が検出されている。

N3a・3b号住居跡 (Fig. 7、11・PL. 4)

91~93N0~2の範囲にある。N1号住居跡と重複しており、これより古い時期の所産である。N3a号・N3b号住居跡は構築の位置を変えず建替えが行われたと考えられる。N3a号・N3b号住居跡の新旧関係は、N3b号住居跡に伴うと考えられる壁下溝が竈前面を横切って設けられており疑問点が残るものの、N3b号住居跡からN3a号住居跡への拡張がなされたとしたい。

N3b号住居跡は壁下溝の範囲から推定するに、平面形は南北に長軸をもち4.2×3.2mの隅丸方形を呈する。東西軸方位はN-94°-Eを示す。壁高は約15cm残存し、壁下溝は幅10~18cm・深さ8~11cmで、南東部を除いて巡る。貯蔵穴は南西隅に設けられるがN1号住居跡の竈前 Pit によって全容は知り得ない。径65cm・深さ38cmの略円形を呈する。

竈は東壁のほぼ中央部に付設され半円形に掘り込まれるが、焼土粒など僅かに認められた程度で遺存状態は不良である。竈内左に径35cm・深さ40cmの Pit が穿たれるが竈施設か否かは不明である。竈幅90cm・奥行き約50cmを測る。

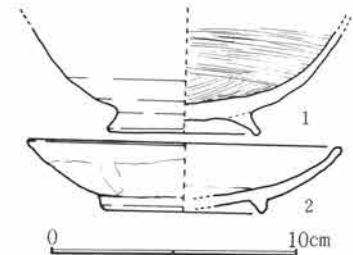
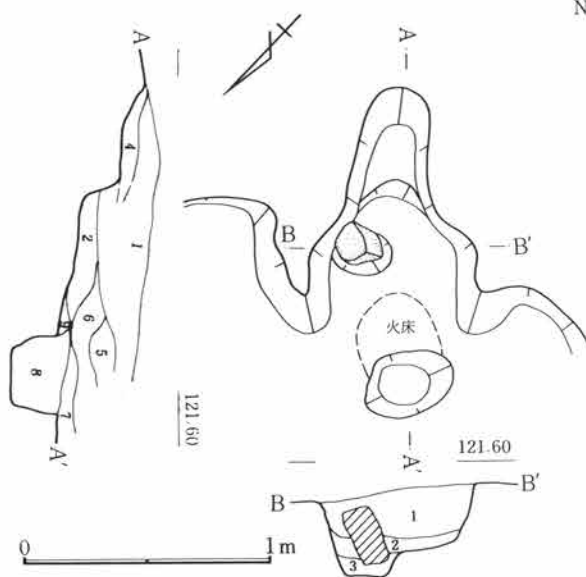
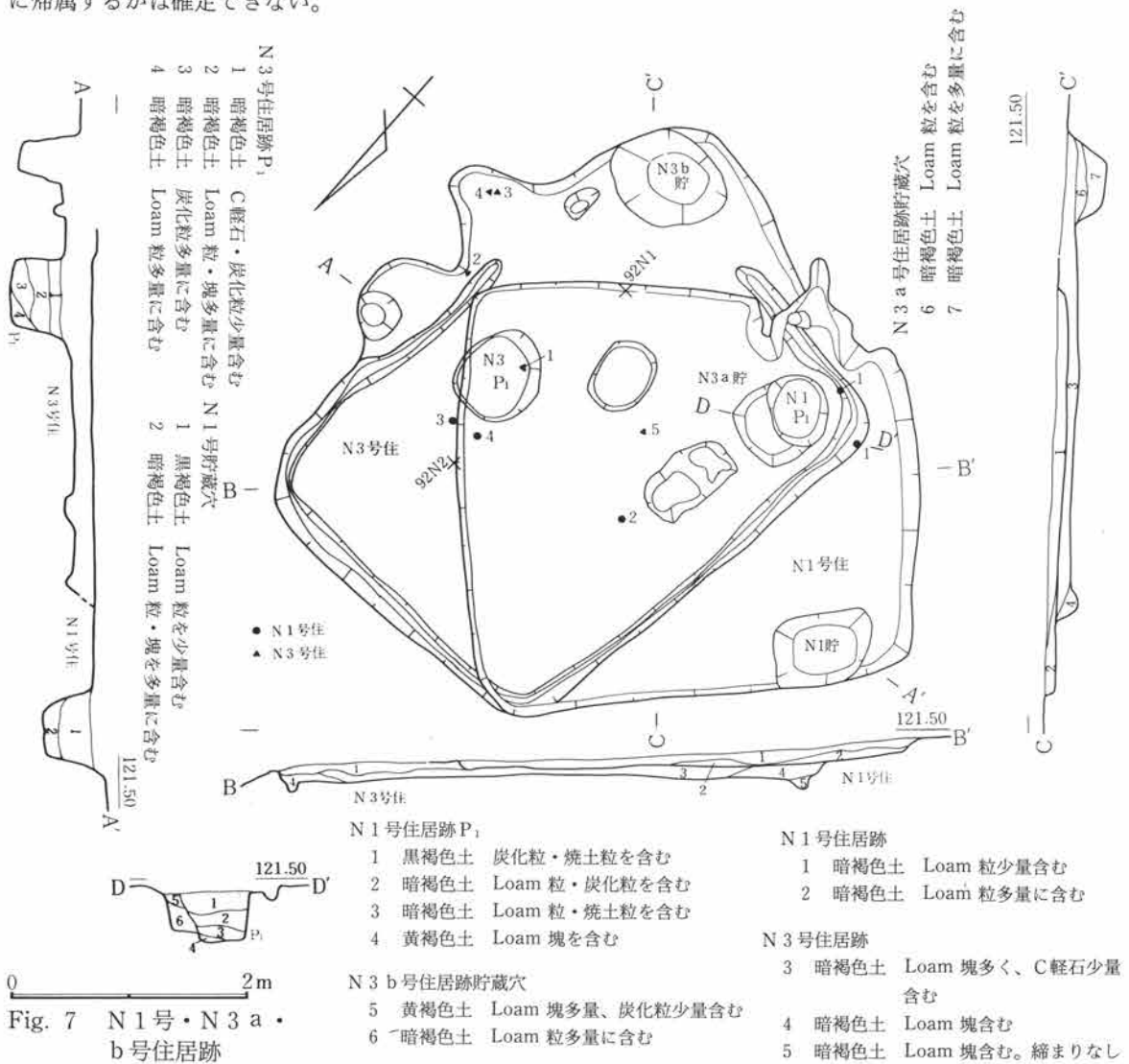
N3a号住居跡はN3b号住居跡の東・西・北壁線をそのまま踏襲し、南壁線とくに南東部を拡張した様相が窺われる。平面形は南北に長軸をもち、4.8（南北最大）×3.3mの隅丸方形を呈する。東西軸方位はN3b号住居跡とほぼ同一方向を示す。また壁高・床面などの状況も同様であるが、壁下溝は南壁にはまったく設けられていない。貯蔵穴と考えられる土坑は南東部隅に設けられ、径90×80cm・深さ30cmの楕円形を呈すが、埋土中には焼土・灰などの堆積はみられない。

竈はN3b号住居跡のものと接しており東壁中央部僅かに南に偏って付設される。幅約1m・奥行き50cmを測る。構築材などは存在しない。

N3a号・N3b号住居跡とも出土遺物は少なく、灰釉陶器などが検出されているが、厳密な意味でいずれ

第2章 遺構と遺物

に帰属するかは確定できない。



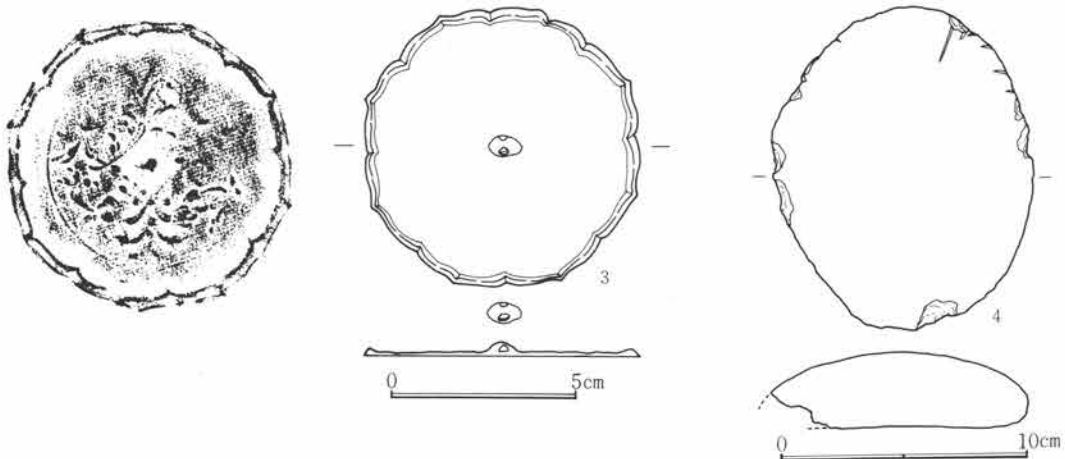


Fig. 10 N 1号住居跡出土遺物(2)

N 1号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
9-1 35-1	黒色土器 椀	¼	—×6.2 ×(4.2)	竈埋土	腰部丸味をもって開く。付高台、大きく開く。内面黒色処理。見込部放射状・体部横方向筥磨き。轆轤成形。	①酸化・良好 ②鈍い黄橙 ③細砂混る
9-2 35-2	灰釉陶器 皿	¾	12.6×6.2 ×2.7	+6	体部丸味をもって開き、口縁端部丸まり僅かに外反。付高台、低く断面三角。見込無釉、重ね焼き痕。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③密
10-3 35-3	銅製品 八稜鏡	完形	径7.7 重35.5	+17 北壁肩部	鏡背文は唐草。遠山形素鈕。細線単圈。和鏡。摩滅著しい	
10-4 35-4	石製品 砥石		幅10.3長12.8 厚3.0	+26	偏平楕円形の砥石。凸面全面摩滅。縁辺に多少の刀痕。	粗粒安山岩

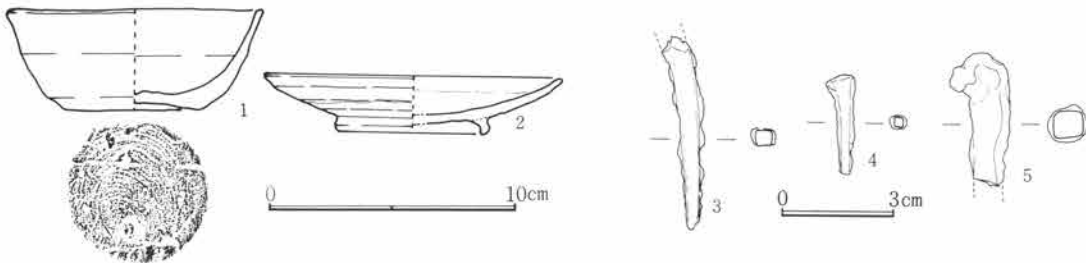


Fig. 11 N 3 a・b号住居跡出土遺物

N 3 a・b号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
11-1 35-1	須恵器 杯	¾	11.2×5.6 ×4.0	Pit内	体部深い。口縁部細まり端部丸まる。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②橙 ③小石混る
11-2 35-2	灰釉陶器 皿	¼	12.0×5.8 ×2.3	埋土	体部やや内湾気味に開き口縁端部僅かに外傾。体部外面回転筥削り。付高台内湾気味。見込部無釉。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③密
11-3 35-3	鉄器 角釘	頭部欠損	長(5.2)幅 0.5×0.4	埋土	頭部形状不明。	
11-4 35-4	鉄器 角釘	身部欠損	長(2.6) 幅0.3	埋土	頭部形状折頭式。	
11-5 35-5	鉄器 角釘	身部欠損	長3.5 幅0.7	埋土	頭部錆び著しく不明。折頭式か。	

N 2号住居跡 (Fig. 12、13・PL. 4、35)

N区第2台地上北縁に位置し、92・93N 3～5の範囲にある。台地縁辺の崩潰あるいは開削のためか対角線北東半は消滅し、南壁は東西走るN 5号溝によって消失している。

第2章 遺構と遺物

平面形はおよそ隅丸方形を呈すと考えられ、東西長3.7m・南北長3mが認められる。西壁を基軸にする東西軸方位はN-85°-Eを示す。壁高は約30cmを測り、南・西壁下には幅10cm・深さ8cm程度の溝が認められる。床面はほぼ平坦をなし堅い凝灰岩質層を基盤にしている。貯蔵穴と考えられる土坑は南西隅に穿たれ、径70×55cm・深さ33cmの楕円形を呈す。竈は検出されていないが、構築に供したと思われる石材が住居内南東部に散乱状態で検出されており、南・東壁いずれかに付設された可能性がある。

出土遺物は少量で、羽釜・砥石がある。

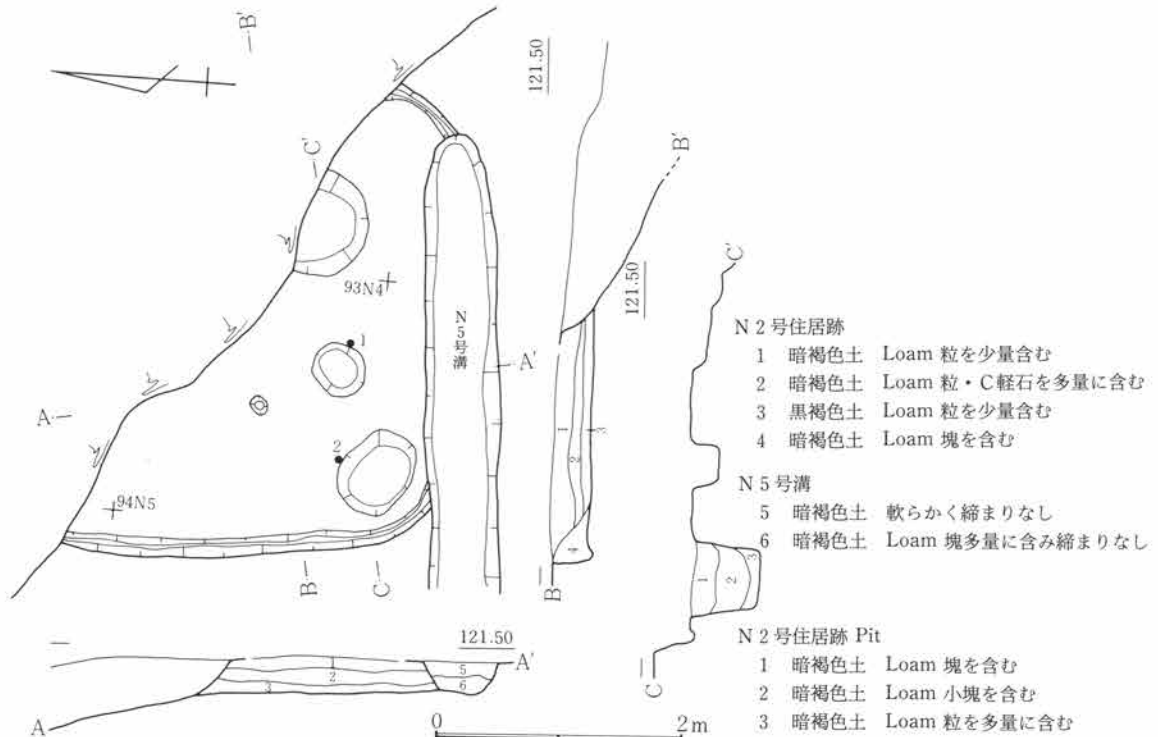


Fig. 12 N 2 号住居跡

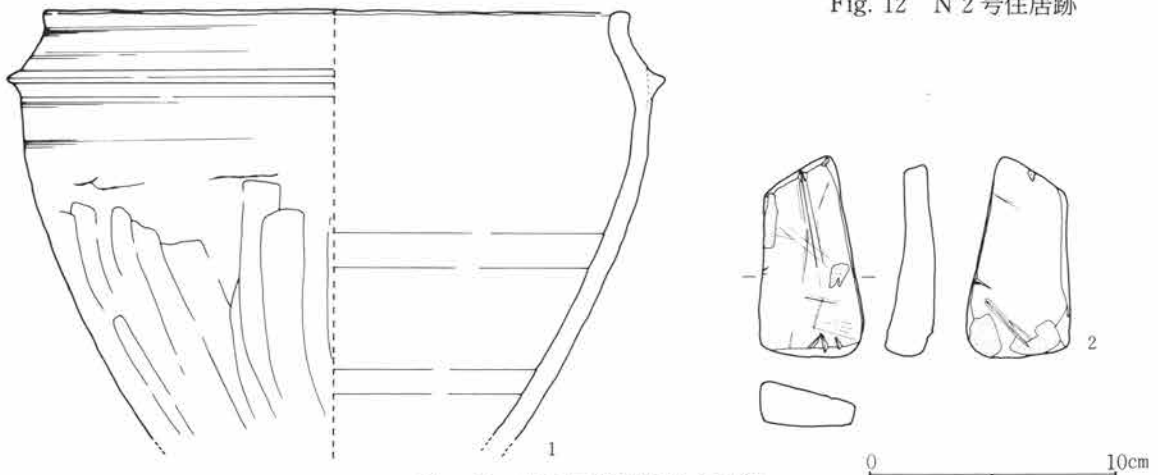


Fig. 13 N 2 号住居跡出土遺物

N 2 号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
13-1 35-1	羽釜	胴部破片	23.2×— ×(17.0)	+16	体部上半腹らみ短胴形。鏝は低く三角に付き口縁部内傾し端部直立。上端部水平。胴部回転調整後下半縦位篋削り。	①酸化・良好 ②鈍い黄橙 ③細砂混
13-2 35-2	石製品 砥石		8.0×4.1 ×1.7	+19	全面使用。刀痕あり。重72g	流紋岩

N 4号住居跡 (Fig. 14~16・PL. 4、35)

M・N区第2台地上調査区の西縁に位置し、南西の一部は調査区域外に入る。94~96M49~N1の範囲に検出されている。当跡の東に接するように、柱穴と考えられる Pit 群とともに土器埋設炉が検出され縄文時代の住居跡が想定できる。位置的には重複するであろう。

N 4号住居跡の平面形は東西方向に長軸をもつ長方形を呈する。南北長約3.8mを測り、東西長は4.7mまで確認されている。東西軸方位はおよそN-90°-Eを示す。検出面での壁高は約15cmで、東壁の北半から北壁にかけて幅10~13cm・深さ5cmの壁下溝が巡る。床面は住居中央部が僅かに低くなるがほぼ平坦をなす。南壁に接して、径85cm・深さ43cmの略円形土坑が穿たれるが貯蔵穴としての認定はできない。

竈は南東部に付設され、軸方位はおよそN-129°-Eを示す。袖部は住居跡の掘形を小さく住居内へ突出させる形態をとる。燃烧部は大きく楕円形に掘り込み、煙道部は短く先尖りをなす。右袖部及び燃烧部右側壁には埋設された大小の川原石の遺存が良く、竈構築には石材を主体的に用いた様相が窺われる。燃烧部前面は焼土粒・灰が混在する径30cm・深さ17cmの略円形 Pit が穿たれる。燃烧部は小さく窪み、緩傾斜で煙道部に至る。燃烧部幅約80cm・奥行き90cm、煙道部長さ25cmを測る。

出土遺物は少なく散在的で、灰釉陶器段皿の他土師器土釜などがある。

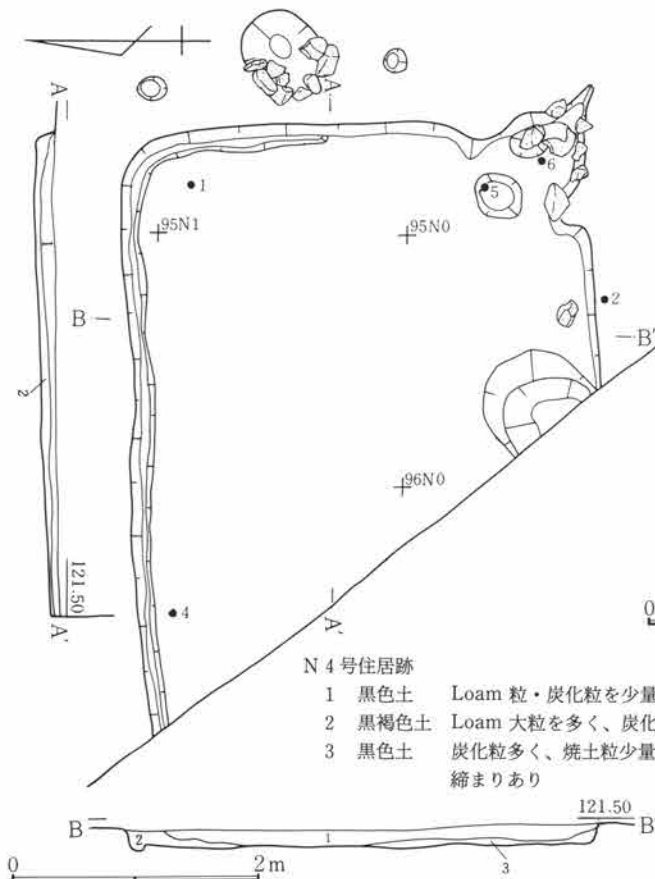


Fig. 14 N 4号住居跡

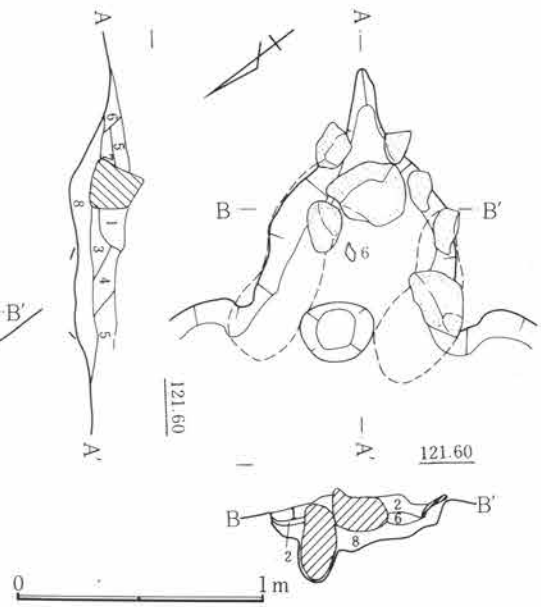


Fig. 15 N 4号住居跡竈

- | | | | |
|---------|----------------------------|----------|--------------------|
| N 4号住居跡 | | N 4号住居跡竈 | |
| 1 | 黒色土 Loam 粒・炭化粒を少量含む | 1 | 暗褐色土 焼土粒・炭化粒を多量に含む |
| 2 | 黒褐色土 Loam 大粒を多く、炭化粒を少量含む | 2 | 暗褐色土 焼土粒を多く含む |
| 3 | 黒色土 炭化粒多く、焼土粒少量含み、粘性・縮まりあり | 3 | 暗褐色土 焼土粒・炭化粒を含む |
| | | 4 | 暗褐色土 焼土粒・炭化粒を少量含む |
| | | 5 | 黒褐色土 C 軽石粒を含む |
| | | 6 | 暗褐色土 焼土粒を少量含む |
| | | 7 | 暗褐色土 Loam 粒を少量含む |
| | | 8 | 暗褐色土 焼土粒を多量に含む |

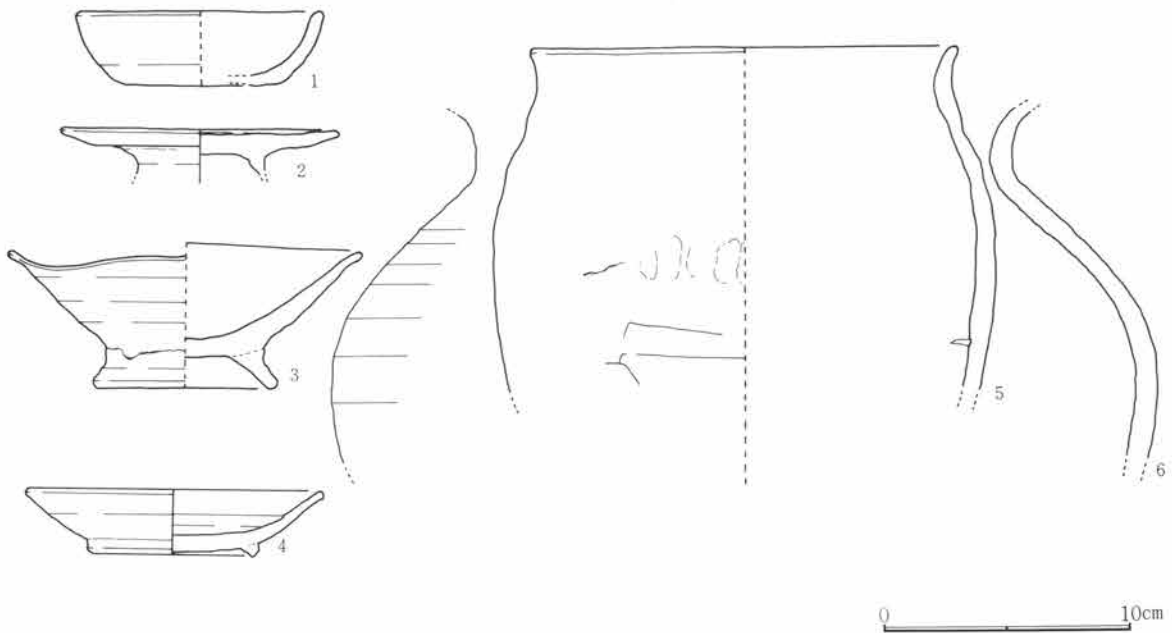


Fig. 16 N 4号住居跡出土遺物

N 4号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
16-1 35-1	須恵器 杯	¼	9.9×5.8 ×3.0	+2	体部丸味をもち内湾して開く。口唇部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②灰白 ③細砂多混
16-2 35-2	須恵器 皿 or 托	ほぼ完	11.2×-× (1.8)	+24	体部ほぼ水平に開く。付高台端部細る。轆轤目強い。右回転。	①酸化・良好②灰白 ③極細砂
16-3 35-3	須恵器 椀	¼	14.2×7.3 ×5.4	埋土	体部直線的に外傾。口縁部僅かに外屈。付高台、高くハの字状に開く。轆轤成形。右回転?	①酸化・やや軟 ②橙 ③細砂混る
16-4 35-4	灰釉陶器 段 皿	¼	11.9×6.8 ×2.6	+1	体部内面中位で段をなし緩く外反して開く。付高台、低く略三角。底部回転篋調整。漬け掛け施釉。見込部摩滅著しく、転用碗の可能性強い。	①良好 ②灰白 ③密
16-5 35-5	土師器 甕	胴部破 片	17.0×-× (13.6)	Pit	胴部緩く張り口縁部直立気味に外反。胴部に接合痕・指頭痕。下方横位篋削り。内面は撫でと接合痕。	①良好②橙 ③やや密
16-6 35-6	須恵器 甕	胴部破 片	-×-×(13. 9)最大径33.0	埋土	胴部丸く張り頸部短く直立し口縁部強く外反するか。外面回転篋調整。二次被熱。	①酸化気味・やや軟 ②鈍い褐 ③やや粗

N 6号住居跡 (Fig. 17、18・PL. 4、36)

N区第2台地ほぼ中央部に位置し、94~96N 2・3の範囲にある。東西走る2条の溝によって一つは東壁と西壁の一部、他は南西部隅と竈の一部が消失している。また西壁は、大・小土坑と重複が著しい。

平面形は東西長3.2m・南北長3.5mの略方形を呈し、東西軸方位はおおよそN-97°-Eを示す。検出面での壁高は約10cmと浅く、遺構全体の遺存状況は不良である。床面は平坦をなし、踏み締まりは比較的良好である。

竈は東壁の南に大きく偏って付設されているが、削平が深く及んだためか残存状況は極めて悪く、焼土などの痕跡からおおよその形状を捉えたにすぎない。袖部は住居内に短く張り出し、全体の形状は略三角を呈している。袖間内法約45cm、竈全長約1.2mを測ろうか。

出土遺物は少ない。

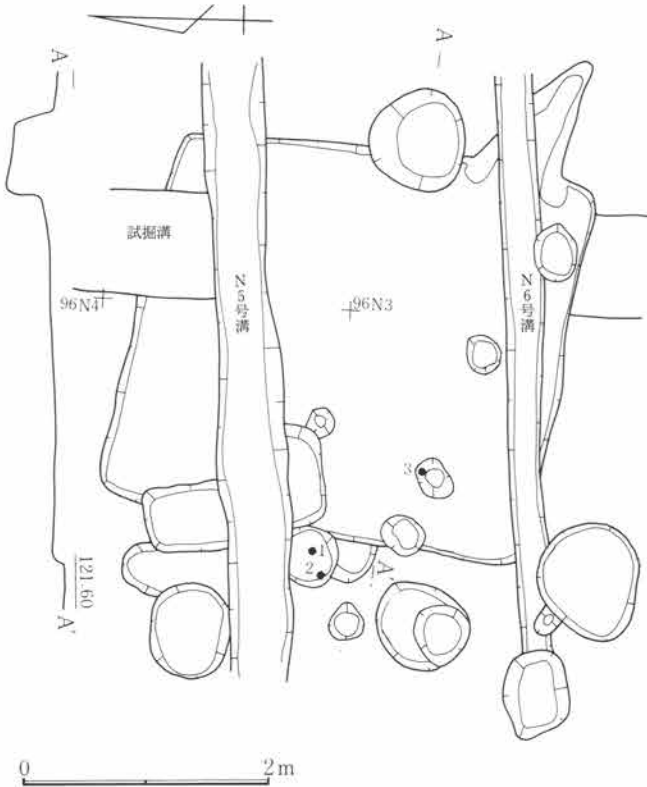


Fig. 17 N 6号住居跡

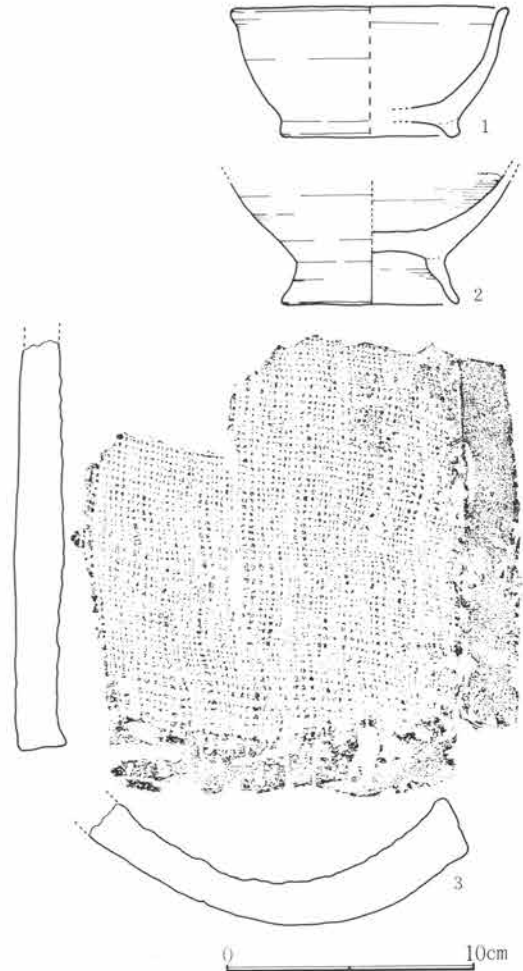


Fig. 18 N 6号住居跡出土遺物

N 6号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
18-1 36-1	須恵器 椀	1/3	11.0×7.0 ×5.1	遺構外 Pit	体部丸味をもつ。口縁部くびれて僅かに外反。付高台、低く断面丸い。轆轤成形。内外面燻し処理か。	①良好 ②暗灰 ③やや密
18-2 36-2	須恵器 椀	2/3	—×7.0 ×(4.9)	遺構外 Pit	体部中位で緩く丸味をもつ。付高台、高くハの字状に開く。轆轤成形。内面調整痕明瞭。	①酸化・良好 ②橙 ③やや密
18-3 36-3	瓦 丸瓦		厚1.9	南西 Pit内	凹面粗い布目。凸面撫で調整。側面寛調整。	①酸化気味 ②明褐 灰 ③やや粗・小石

M 7号住居跡 (Fig. 19~22・PL. 4、5、36)

M区第2台地南端に位置し、92~94M46~48の範囲にあり南側の一部は調査区域外に入る。M 9号住居跡とM 1号土墳墓と重複しており、これらより古い時期の所産である。M 9号住居跡より東・西部の規模が大きいものの掘形が浅く重複の度合は著しく、検出範囲は住居西側と竈周辺部である。また、東壁・北壁線の一部はM 9号住居跡と軌を一にしている。

平面形は南北方向に長軸をもち、東壁の南側がやや不整になる略方形と考えられる。東西長約3.3m・南北長は3.85mまで確認できた。東西軸方位はおおよそN-110°-Eを示す。検出面での壁高は約10cmを測る。

竈は東壁に付設され楕円形に掘り込まれ、煙道部に当たる部分は検出されていない。袖部は壁線上にあり凝灰岩質の加工材を埋設して作られる。袖材間内法約45cm、燃烧部奥行き約60cmを測る。

第2章 遺構と遺物

出土遺物は竈内より灰釉陶器段皿・土釜などが検出されている。

M9号住居跡 (Fig. 19、23・PL. 36)

M7号住居跡とほぼ同じ位置で、92・93M46～48の範囲にあり、南側の一部は調査区域外に入る。M7号住居跡とM1号土墳墓と重複しており、前者より新しく後者より古い時期の所産である。

平面形は南北方向に長軸をもつ隅丸の略方形を呈するが、南半部の壁線の歪みが著しい。東西軸方位はN-125°-Eを示す。壁高は35cmを測り直線的に立ち上がる。床面はほぼ平坦をなし踏み締まりは全体に良好である。

竈は東壁にあり楕円形に掘り込まれるが、煙道部は検出されない。袖部は壁線上にあると考えられ、右袖部には凝灰岩質の加工材が残る。また燃焼部内には焚口部の天井を構っていたと思われる角柱状の石材が見られる。燃焼部幅55cm・奥行き50cmを測る。

出土遺物は灰釉陶器段皿の他竈内より須恵器碗型土器が検出されている。

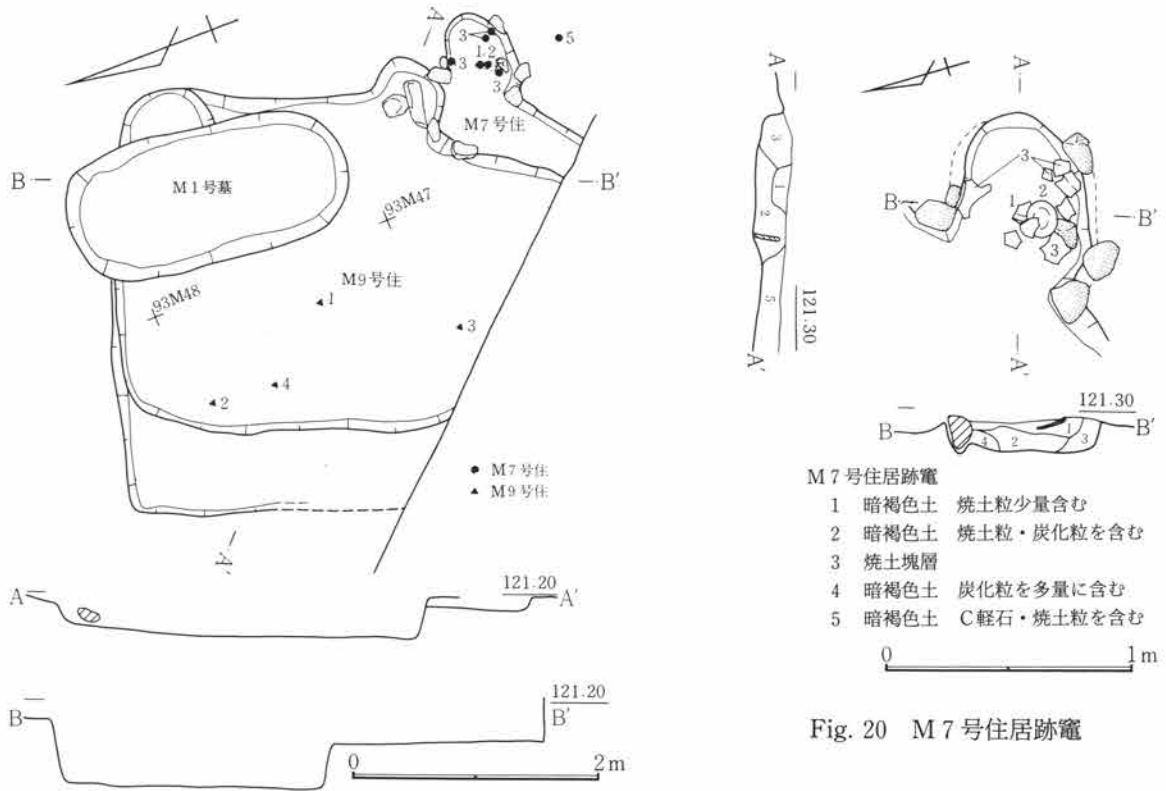


Fig. 19 M7号・M9号住居跡

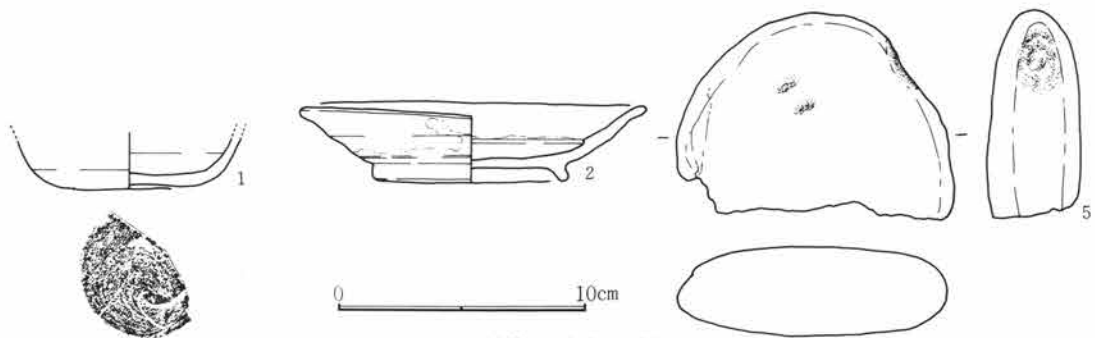


Fig. 21 M7号住居跡出土遺物

第1節 竪穴住居跡と出土遺物

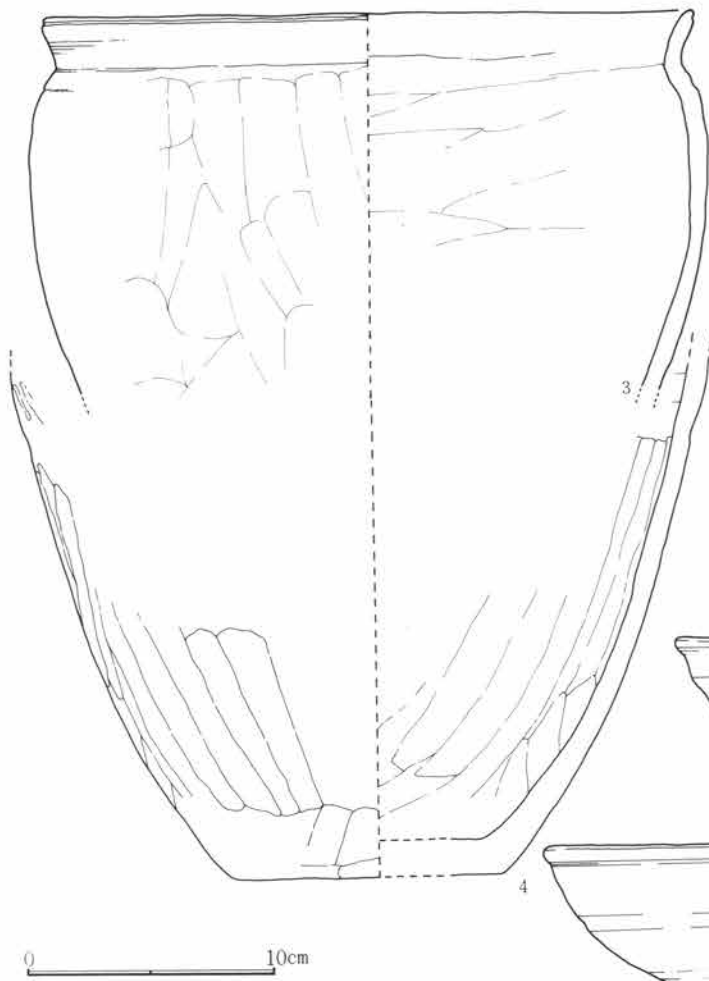


Fig. 22 M 7号住居跡出土遺物(2)

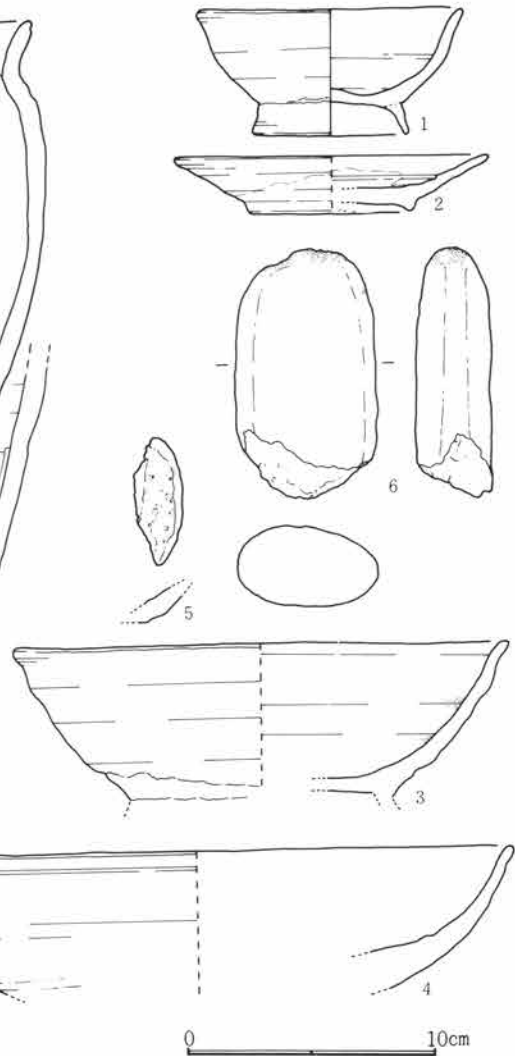


Fig. 23 M 9号住居跡出土遺物

M 7号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
21-1 36-1	須恵器 杯	1/2	—×5.0 ×(1.9)	竈内	腰部丸味をもつ。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②橙 ③やや粗
21-2 36-2	灰釉陶器 段皿	完形	13.9×7.8 ×3.6	竈内	体部中で段をなし緩く外反して開く。付高台、短くハの字状に開き端部丸い。漬け掛け施釉。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③密
22-3 36-3	土師器 甕	胴部破片	26.0×— ×(15.0)	試掘溝内	肩部僅かに張り気味。口縁部短く直線的に外傾。口縁部横撫で。胴部不定方向篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗・小石混る
22-4 36-4	羽釜? 石	下半1/2	—×10.5 ×(20.0)	竈	底部厚みのある平底。胴部やや脹らみをもつ。胴部外面縦位篋削り。内面篋撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③やや粗
21-5 36-5	石	1/2?	長(8.2)幅11.0 厚3.5重475.2g	竈	側面にくぼみ。自然か?表裏面摩擦。被熱痕あり。	石英閃緑岩

M 9号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
23-1 36-1	須恵器 碗	1/2	10.6×6.2 ×5.0	+39	体部丸味をもち口縁部僅かに外反。付高台、高くハの字状に開く。轆轤成形。口縁部横撫で。	①酸化気味・良好 ②灰白 ③やや密

第2章 遺構と遺物

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
23-2 36-2	灰釉陶器 段 皿	¼	12.4×6.8 ×2.3	+26	底部肥厚。体部中位で段をなし直線的に開く。付高台、低く略三角。漬け掛け施釉。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密
23-3 36-3	須恵器 椀	¼	19.8×— ×(6.2)	+5	腰部やや張る。体部内湾して開き口縁端部僅かに外反。付高台剝離。轆轤成形。内面撫で。	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③やや密
23-4 36-4	須恵器 鉢	¾	25.2×— ×(5.5)	+12	底部肥厚し浅い。体部丸く、口縁部直線的に外傾。	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③やや密
23-5 36-5	須恵器 転用坩堝	小片	厚0.7	埋土	内面に銅滓附着。胎土発泡著しい。底部回転糸切り痕。	①二次還元 ②灰 ③やや密
23-6 36-6	石 叩打具?	½	長10 幅5.6 重249.8g	埋土	先端に叩打痕?片端欠損。	粗粒安山岩

M10号住居跡 (Fig. 24~26・PL. 5、36)

M区第3台地の北端、台地北縁部に位置し、83・84M32~34の範囲にある。住居跡の北側は台地縁辺の崩潰か開削のため消失している。南西部でM19号住居跡と重複しておりこれよりも新しい時期の所産である。

平面形は方形を呈すると思われ、東西長は2.5mを測り、南北は2.6mまで確認できた。東西軸方位はN-81°-Eを示す。壁高は約25cmを測り、床面の踏み締まりは良好である。東壁の一部と西壁には壁下溝が巡る。貯蔵穴と考えられる土坑は南西部に設けられ径65×60cm・深さ40cmの略円形を呈する。

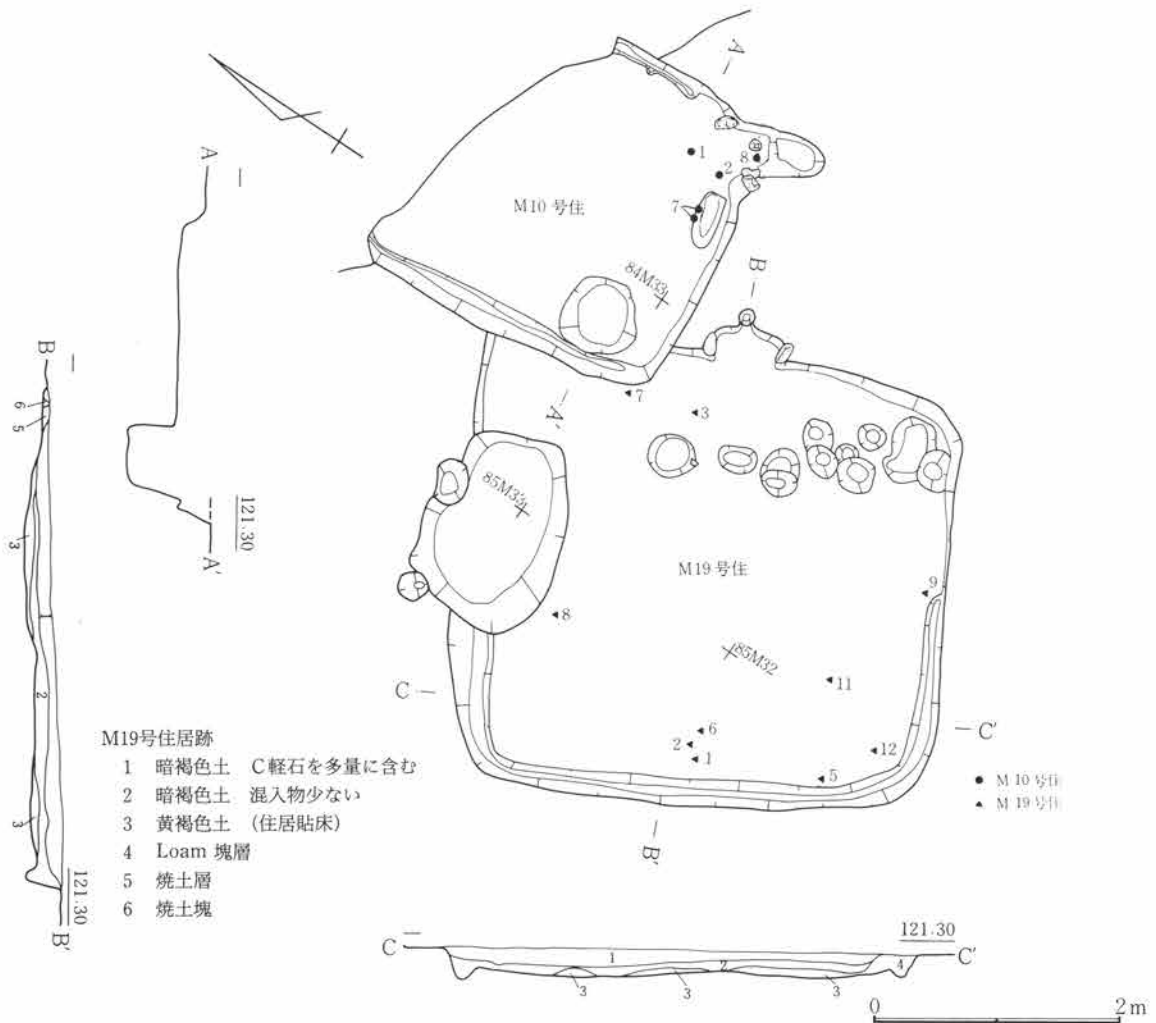
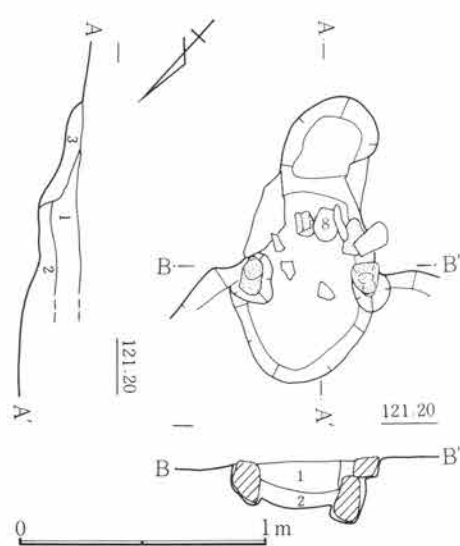


Fig. 24 M10号・M19号住居跡



竈は東壁と南壁の変換部の南東隅にある。竈軸のおおよその方位は $N-150^{\circ}-E$ を示す。袖部はほぼ壁線上にあり左右とも凝灰岩質の加工材を、また燃焼部の側縁も同質材を埋設して構築されている。燃焼部は袖部より僅か手前から若干の窪みをなし、10cm前後の緩い段差をもって幅広の煙道部へ至る。袖石間内法約35cm、燃焼部奥行き80cm、煙道部長さ30cm・幅35cmを測る。

出土遺物は竈周辺部から多く検出されており、酸化炭焼成の須恵器小杯が目立つ。

M10号住居跡竈

- 1 暗褐色土 Loam 粒を含む
- 2 暗褐色土 焼土・炭化粒を含む
- 3 暗褐色土 焼土粒少量、Loam 塊を含む

Fig. 25 M10号住居跡竈

M19号住居跡 (Fig. 24、27・PL. 5、37)

M区第3台地の北端に位置し、83~85M31~33の範囲にある。北東部でM10号住居跡と重複しておりこれより古い時期の所産である。また、当跡中央部を北西~南東走るM8号溝の底面によって北壁の一部あるいは床にかなりの凹凸がある。

平面形は南北方向に若干長い隅丸方形を呈し、南北長3.95m・東西長3.6mを測る。東西軸方位はおよそ $N-65^{\circ}-E$ を示す。壁高は約15cmを測り、床面は5cm前後の緩やかな高低差をもち踏み締まりは比較的良好である。西壁を中心に北壁・南壁の一部に最大幅15cm・深さ10cm未満の壁下溝が巡る。貯蔵穴は確定できないが南東隅に穿たれる不整楕円形のP₁が相当すると思われる。柱穴は検出されていない。

竈は東壁のほぼ中央に設けられ、やや幅広で奥行き小さい燃焼部と小径の煙出し孔よりなる。袖部は東壁線上にあり、人頭大の川原石を埋設する。現存する燃焼部面は住居床面より緩い傾斜をもっており本来の燃焼部の範囲はより住居内部に位置していた可能性が考えられる。現状での竈各所の計測値は袖石間内法約45cm、燃焼部奥行き約30cm、煙出し孔径12cmを測る。

出土遺物は散在的で土師器杯類・甕の他流文岩製砥石・敲打石などがある。

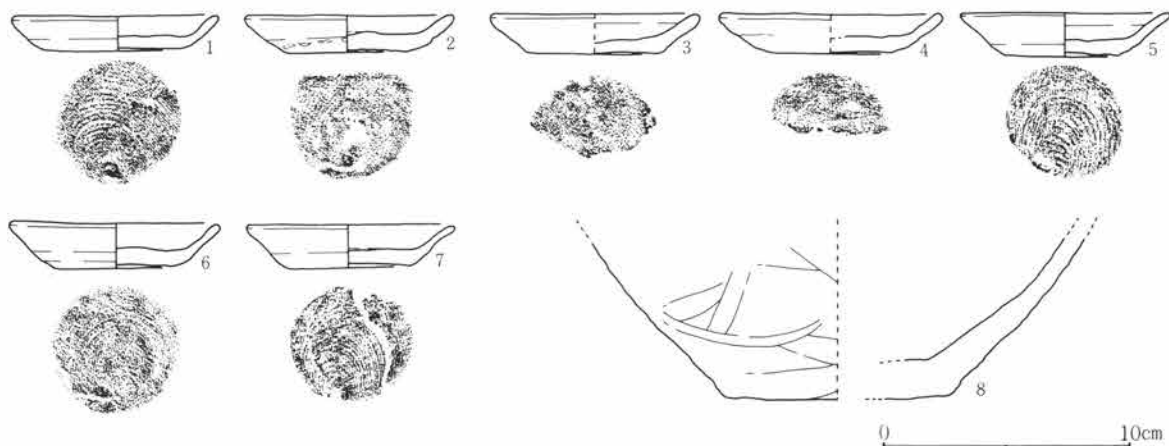


Fig. 26 M10号住居跡出土遺物

M10号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
26-1 36-1	須恵器 杯	ほぼ完 形	8.2×4.7 ×1.5	+2	底部やや肥厚し、短かい体部直線的に開く。見込部凸状に盛り上る。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
26-2 36-2	須恵器 杯	¾	8.3×4.8 ×1.5	+4	底部・体部やや肥厚し、体部外傾。轆轤成形。左回転糸切り。腰部接合痕？	①酸化・良好 ②淡黄 ③やや粗
26-3 36-3	須恵器 杯	¾	8.4×5.2 ×1.6	埋土	底部器肉薄く体部肥厚し直線的に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化・良好②淡黄 ③やや粗
26-4 36-4	須恵器 杯	¾	8.8×5.0 ×1.6	竈	底部やや肥厚し体部は直線的に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化・良好②淡黄 ③やや粗
26-5 36-5	須恵器 杯	ほぼ完 形	8.3×4.5 ×1.7	埋土	底部やや肥厚し体部緩く外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
26-6 36-6	須恵器 杯	ほぼ完 形	8.4×4.9 ×1.9	埋土	底部肥厚し体部やや細まり開く。口縁端部やや肥厚。轆轤成形。左回転糸切り。	①酸化・良好 ②淡 黄 ③細砂混る
26-7 36-7	須恵器 杯	¾	8.3×4.9 ×1.8	+2	底部やや肥厚し体部器肉薄く外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②浅 黄橙 ③細砂混る
26-8 36-8	土師器 甕	底部破 片	-×9.0 ×6.2	竈・埋土	底部から腰部肥厚し胴部丸く張るか。腰部斜・横位篋割り。内面篋撫で。	①良好②明赤褐 ③やや粗・砂混る

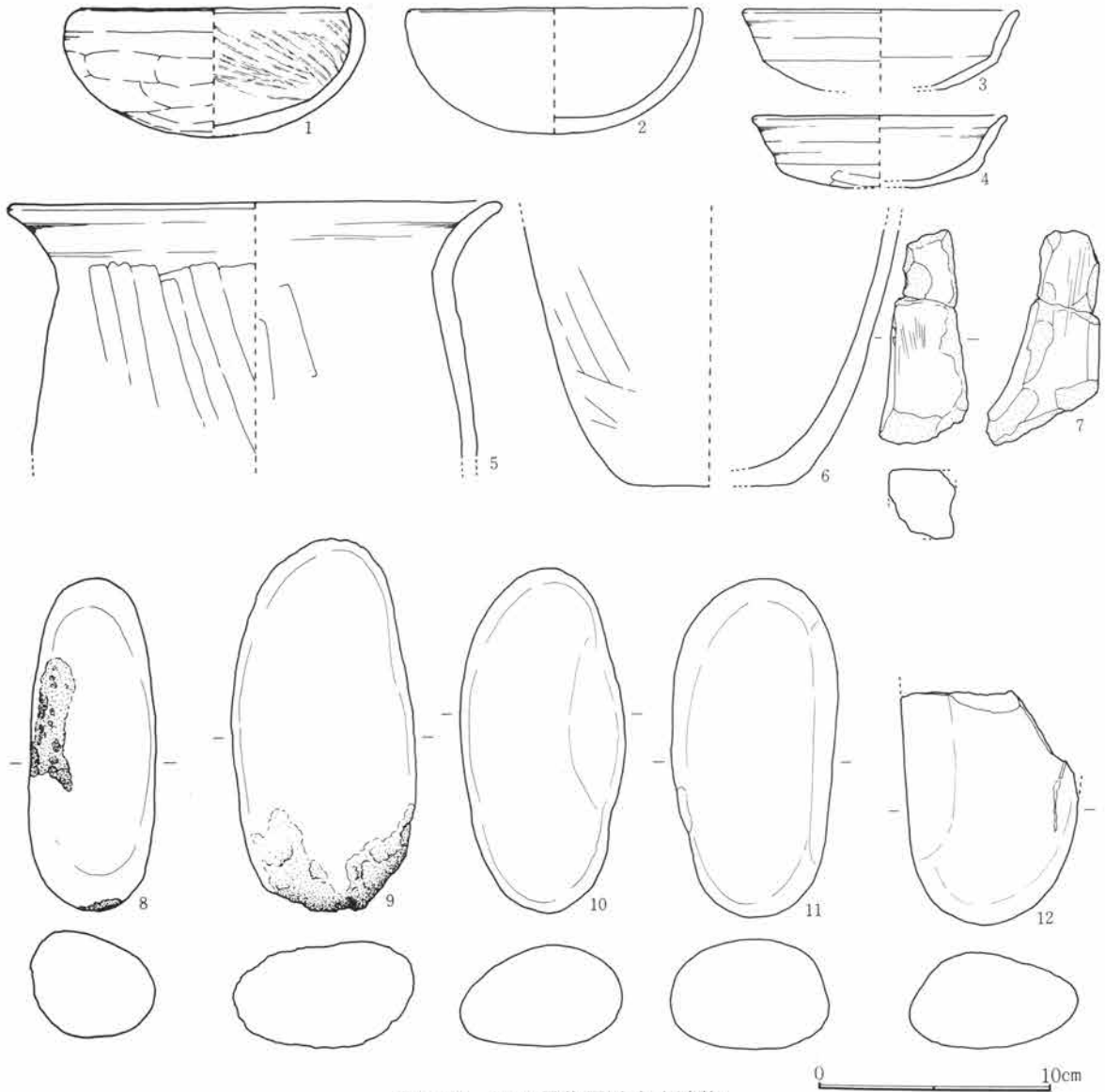


Fig. 27 M19号住居跡出土遺物

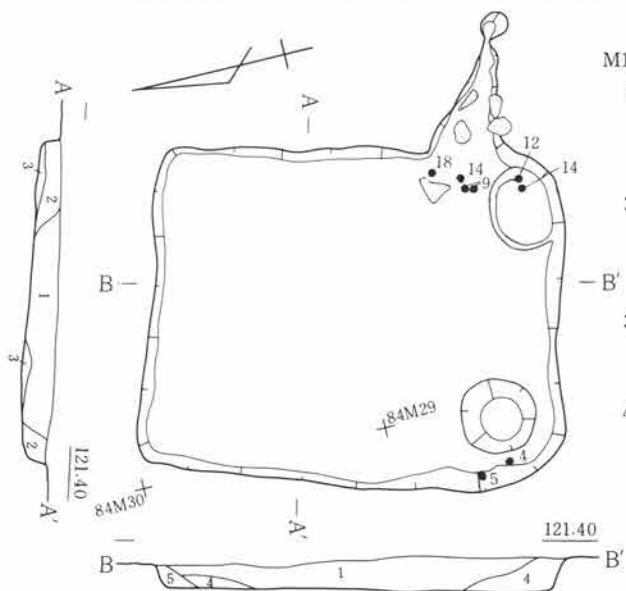
M19号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
27-1 37-1	土師器 杯	1/4	11.4×- ×5.5	+19	底部丸く体部から口縁にかけ強く内湾。口唇部尖る。口縁部横撫で。底部篋削り。内面斜行篋磨き。	①良好 ②明赤褐 ③密・小石混る
27-2 37-2	土師器 杯	3/4	12.2×- ×(5.3)	埋土・ +7	底部から体部丸味強く口縁部内湾気味に立つ。全体的に摩滅顯著。	①やや軟 ②橙 ③細砂混る
27-3 37-3	土師器 杯	1/4	10.8×- ×(3.0)	埋土 +5	底部浅く偏平気味。受け部で屈し口縁部緩く外傾。端部くびれて細まる。口縁部横撫で。底部不定方向篋削り。	①良好 ②橙 ③密
27-4 37-4	土師器 杯	1/4	11.8×- ×(3.4)	埋土	底部浅く丸い。受け部で強く屈し口縁部緩く外反。口縁部横撫で。摩滅。	①良好②橙 ③密
27-5 37-5	土師器 甕	口縁部	21.0×- ×(10.5)	+13	胴部張り少なく撫で肩。口縁部外反。口唇部丸い。口縁部横撫で。体部外面縦位篋削り。内面撫で。	①良好②浅黄橙 ③砂混る
27-6 37-6	土師器 甕	底部	-×6.6 ×(10.8)	+7	腰部やや丸みを帯び胴部直線的。胴部下方縦位篋削り。腰部やや斜方向篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③砂混る
27-7 37-7	石製品 砥石		最大長8.4最大 幅3.5最大厚2.9	埋土	4面使用。 重114g	流紋岩
27-8 37-8	石	完形	13.9×5.3 ×4.4	+1	側縁及び一端部に打撃痕あり。重528.6g	ひん岩
27-9 37-9	石	完形	15.5×7.7 ×4.3	+1	一端部に左右からの打撃痕あり。重821g	ひん岩
27-10 37-10	石	完形	14.4×7.0 ×4.3	埋土	重646g	溶結凝灰岩
27-11 37-11	石	完形	14.1×7.0 ×4.6	+8	重716g	石英閃緑岩
27-12 37-12	石	1/2?	(9.7)×7.2 ×4.0	+7	片端欠損。重(474.7)g	ホルンフェルス

M11号住居跡 (Fig. 28~31・PL. 5、37、38)

M区第3台地の北側に位置し、82~84M28・29の範囲にある。重複関係はなく単独遺構である。

平面形は南北方向に長軸をもち、南東・南西部が隅丸をなし略方形を呈する。南北長3.45m・東西長2.65mを測り、東西軸方位はN-106°-Eを示すが竈中心軸はこれよりやや東への振れが大きくN-113°-Eで



- M11号住居跡
- 1 暗褐色土 Loam 粒・炭化粒を含む
 - 2 暗褐色土 Loam 粒を少量含む
 - 3 黄褐色土 Loam 粒含む
 - 4 黒褐色土
 - 5 黒褐色土 Loam 塊を多量に含む

Fig. 28 M11号住居跡

M11号住居跡竈

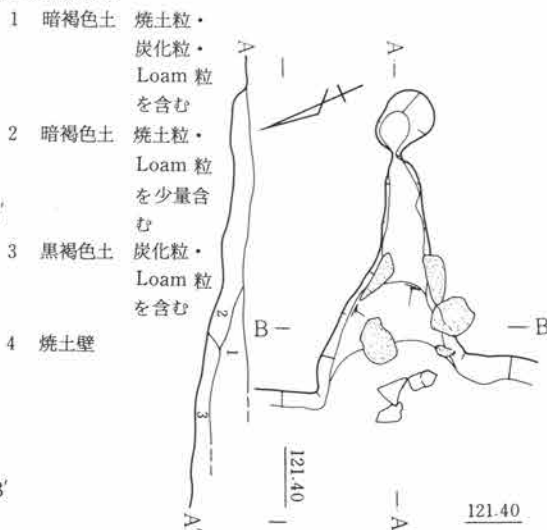


Fig. 29 M11号住居跡竈

第2章 遺構と遺物

ある。壁高は良好な箇所約27cmを測る。床面はほぼ平坦をなし、踏み締まりは良好である。南東部隅に径65×50cm・深さ10cmの楕円形を呈する土坑が穿たれ、土器類の他川原石などの遺物が多い。また南西部隅に径60cm・深さ38cmの土坑が検出されているが、出土遺物から推定される該当期の貯蔵穴位置からすれば後者が一般的である。

竈は東壁の南に偏って付設される。壁線外に掘り込まれた燃焼部から、段差の小さい立ち上がりをもって水平で長い煙道部が延び、先端部には煙出し孔と考えられる円形部が形成される。燃焼部側縁には凝灰岩質の加工材が埋設されている。燃焼部幅60cm、壁線よりの奥行きは45cm、煙道部長さ75cm、煙出し孔径約20cmを測る。

出土遺物は酸化炎焼成の須恵器小杯を中心に硯として転用した灰釉陶器皿・甕片などの他平瓦などが検出されている。

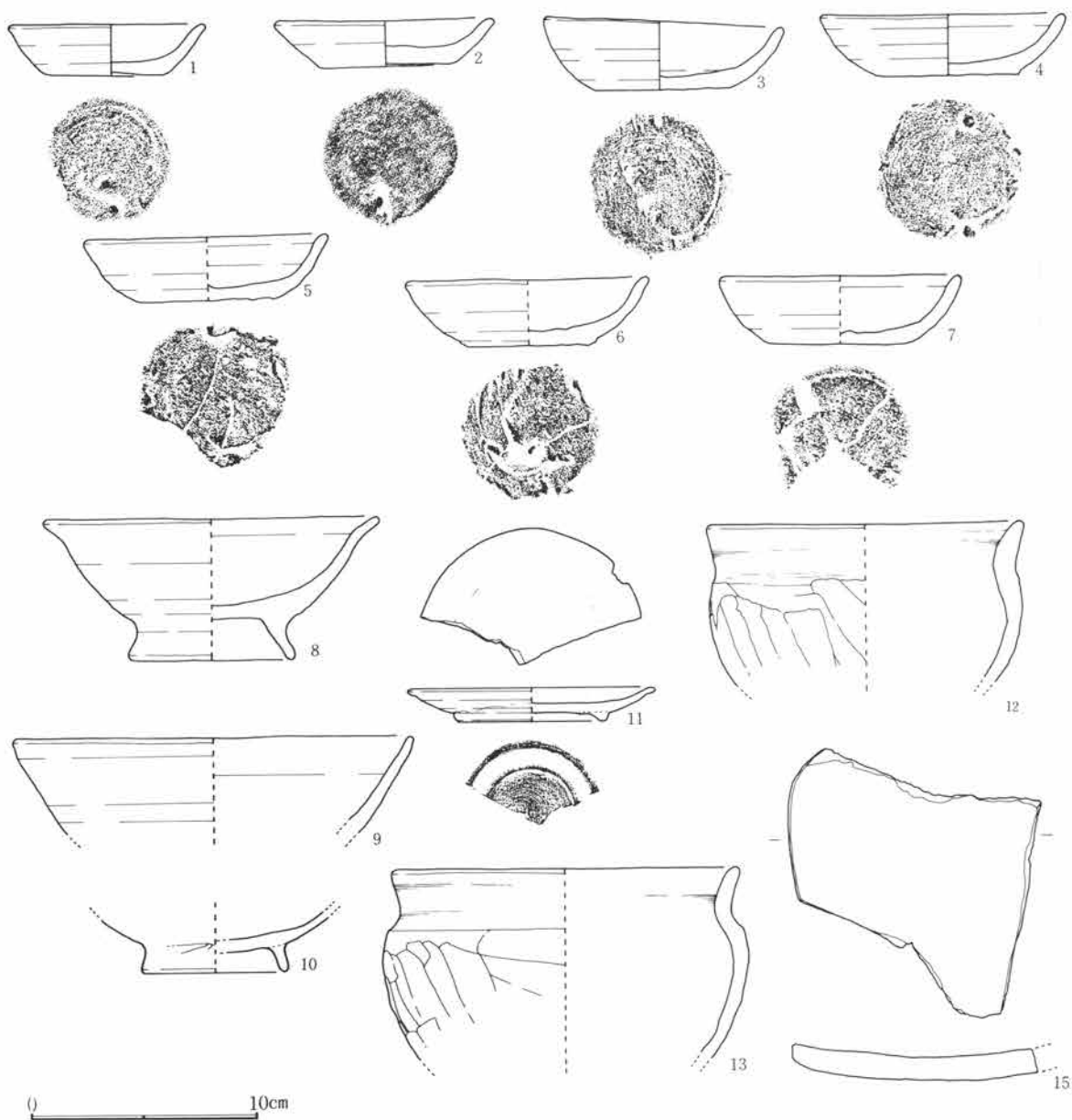


Fig. 30 M11号住居跡出土遺物(1)

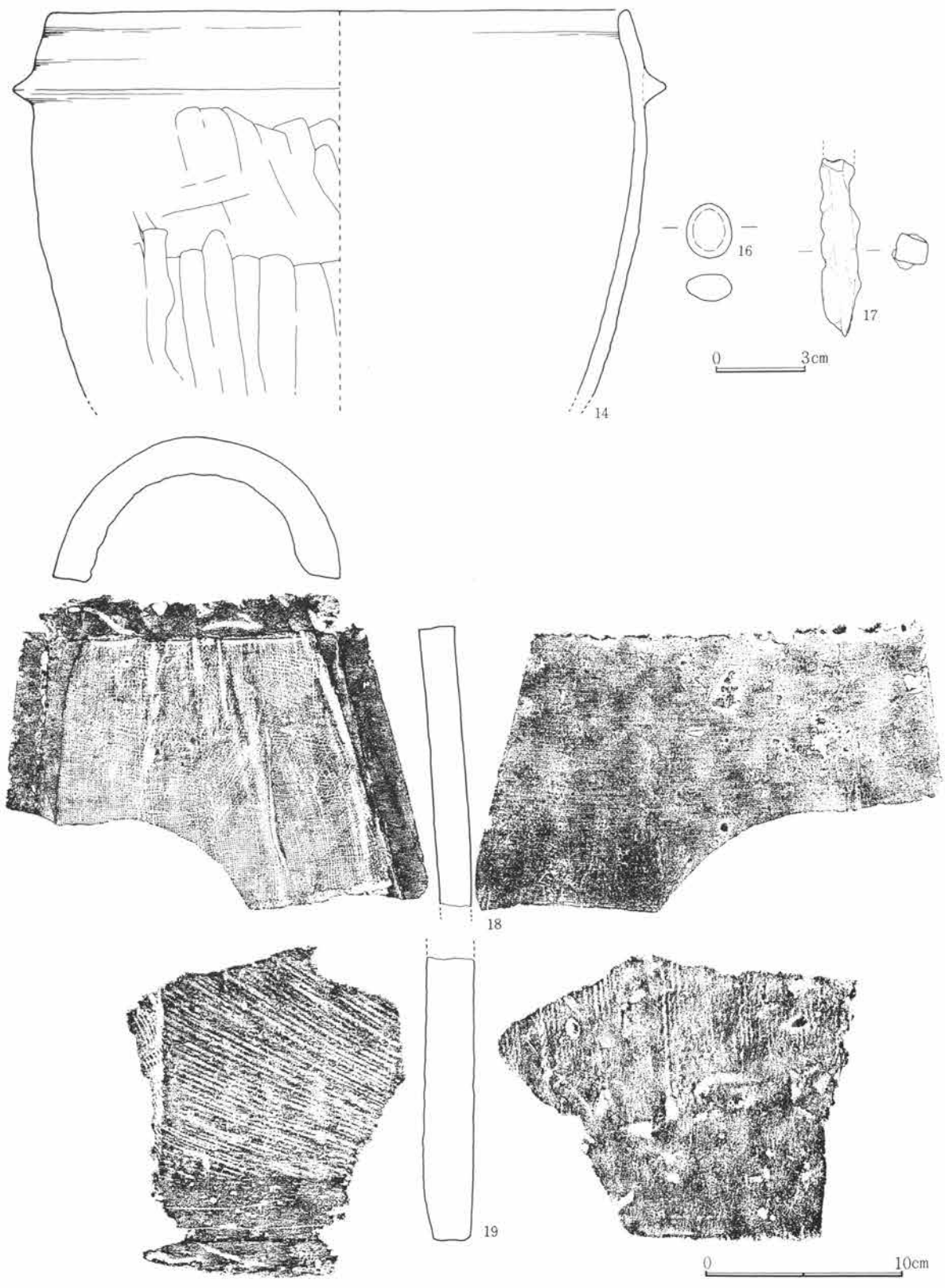


Fig. 31 M11号住居跡出土遺物(2)

第2章 遺構と遺物

M11号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
30-1 37-1	須恵器 杯	ほぼ完形	8.6×5.1 ×2.2	埋土	体部肥厚し口縁部小さく外反気味。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②浅黄橙 ③細砂混る
30-2 37-2	須恵器 杯	完形	9.6×5.8 ×2.1	埋土	底部から体部肥厚し口縁部小さく外反気味。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②灰白 ③やや密
30-3 37-3	須恵器 杯	¾	10.5×5.8 ×3.2	埋土	体部から底部肥厚し腰部丸味強くやや深い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好②浅黄橙 ③粗・砂混る
30-4 37-4	須恵器 杯	ほぼ完形	10.7×6.2 ×2.7	+1	体部丸味を帯びる。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好②浅黄橙 ③粗・砂混る
30-5 37-5	須恵器 杯	¾	10.6×5.8 ×2.7	+7	体部丸味をもち口縁部小さく外傾。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好②浅黄橙 ③粗・砂混る
30-6 37-6	須恵器 杯	½	10.6×5.4 ×2.9	埋土	底部から体部肥厚気味。体部丸味を帯び口縁部小さく外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好②浅黄橙 ③粗・砂混る
30-7 37-7	須恵器 杯	½	10.6×6.2 ×3.0	埋土	体部丸味を帯びる。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好②浅黄橙 ③粗・砂混る
30-8 37-8	須恵器 碗	¾	14.6×7.2 ×6.2	埋土	腰部肥厚。体部内湾し丸味をもつ。口縁部大きく外傾して開く。付高台、高くハの字状に開く。轆轤成形。右回転？	①酸化・良好 ②鈍い黄橙 ③細砂混る
30-9 37-9	須恵器 碗	破片	17.2×— ×4.2	+4~5	体部やや内湾気味に開く。轆轤成形。	①酸化・良好②灰白 ③やや粗・細砂混る
30-10 37-10	灰釉陶器 碗	底部破片	—×6.4 ×2.6	埋土	底部から腰部丸味あり見込部小さく凹む。付高台、やや高くハの字状に開き端部丸い。接合部明瞭。	①良好 ②灰白 ③密
30-11 37-11	灰釉陶器 皿・転用硯	¾	10.8×6.4 ×1.4	埋土	体部大きく開き口縁部強く外屈。付高台、断面丸い。轆轤成形。回転糸切り。見込部朱墨付着。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③密
30-12 37-12	土師器 小形甕	体部	13.8×— ×(7.0)	貯蔵穴	体部丸く張り肩部僅かに段をなす。口縁部肥厚し緩く外傾して開く。口縁部横撫で。胴部篋削り。内面撫で。	①良好 ②暗赤褐 ③小石混る
30-13 38-13	土師器 小形甕	体部	15.2×— ×(8.2)	埋土	胴部丸く張り肩部に段をなす。口縁部緩く外傾して開く。口唇部丸い。口縁部横撫で。体部篋削り。内面撫で。	①良好 ②鈍い赤褐 ③小石混る
30-15 38-15	須恵器 転用硯		9.5×10.6 ×1.0	埋土	甕内面転用。内面摩擦著しく光沢あり。側縁摩擦調整。	①良好 ②灰 ③小石混る
31-14 38-14	羽 釜	胴部	28.8×— ×(16.2)	+7	胴部張り少なく口縁部直線的に内傾。銜略三角で水平に突出。胴部上方篋撫で・下方篋削り。内面撫で。	①良好②鈍い赤褐 ③小石混る
31-16 38-16	碁石	完形	径1.5×1.9 厚0.9	埋土	やや楕円形。黒色。	チャート
31-17 38-17	鉄器	片端欠損	長(5.8) 幅0.8×1.0	埋土	錆び著しく詳細は不明だが先端部尖り角釘か。	
31-18 38-18	瓦 丸瓦		厚1.8	+13	凹面布目。凸面撫で。側面篋調整。模骨痕あり。焼成堅緻。	①良好 ②灰 ③密・黒色粒混る
31-19 38-19	瓦 平瓦		厚1.6	埋土	凹面布目、布合せ痕あり。撫で。凸面縄目叩き。側面・側縁篋調整。凸面吸炭。	①軟 ②白灰 ③密

M12号住居跡 (Fig. 32~36・PL. 5、38、39)

M区第3台地の北縁部やや東方に位置し、79~81M29~32の範囲にある。重複関係は著しくM13号・M20号・M25号の各住居跡と切り合っている。新旧関係は当跡が最も新しい時期の所産である。

平面形は南北に長軸をもつ略方形を呈するが東・北・西壁線が僅かに脹らみ北東・北西隅に丸みをもつ。南北長4.65m・東西長4.05mを測り、東西軸方位はN-103°-Eを示す。壁高は約34cmを測り、西壁から連続して北壁・南壁下の一部と、東壁下には切れ切りに溝が巡る。幅10cm・深さ5cmを測る。床面はほぼ平坦をなし踏み締まりは良好であるが、当跡より深い掘形をもつM20号住居跡と重複する北東部はやや軟弱である。北西部に検出されたT字状の溝は当跡に伴うかは確定できない。貯蔵穴は南西部に設けられ、径75cm・深さ50cmで円形を呈す。床面上、南東部に多く炭化材が検出され、床面直上・貯蔵穴埋土中にも焼土粒・炭化粒が多く混在しており火災住居の可能性がある。

竈は東壁の南に偏って付設され、燃焼部は住居外に張り出して掘り込まれる。燃焼部の先端は細まって煙出しを形成し直に立ち上がる。袖部は東壁線上に川原石を埋設する。袖石間内法35cm、燃焼部奥行き約85cm

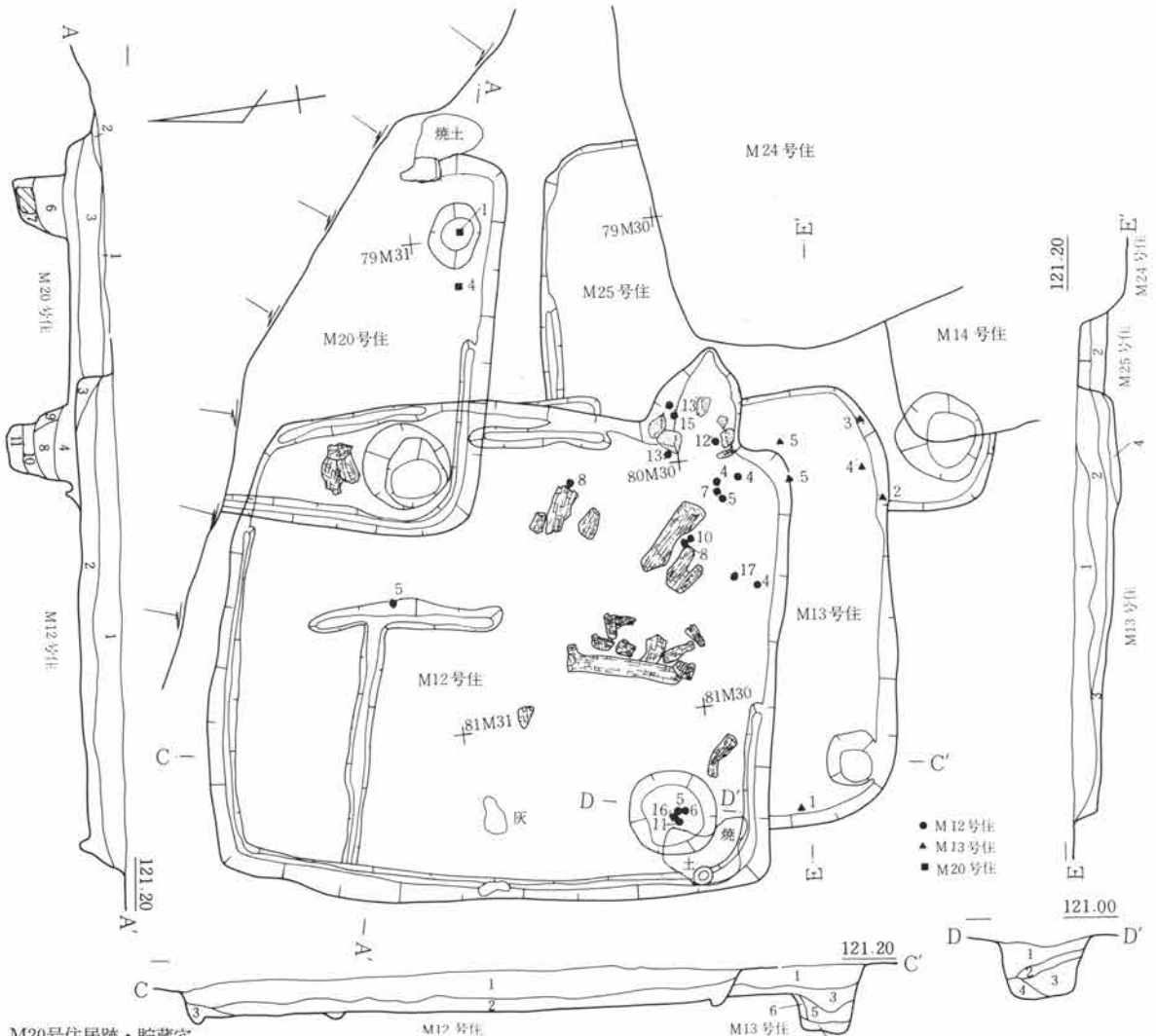
を測る。

出土遺物は須恵器小杯・土師器鉢・大形甕・平瓦など竈内に多く検出されている。

M13号住居跡 (Fig. 32、37・PL. 40)

M区第3台地の北縁に位置し、79~81M29・30の範囲にある。M12号・M25号住居跡と重複しており、新旧関係はM12号より旧く、M25号住居跡より新しい時期の所産である。北側のほとんどは掘形の深いM12号住居跡による消失部分が多く南壁沿いの狭小な範囲を知るのみである。

平面形は隅丸方形を呈すると考えられ、東西長約3.5mを測り、東西軸方位はおおよそN-94°-Eを示す。壁



M20号住居跡・貯蔵穴

- 1 暗褐色土 C軽石少量含む
- 2 焼土層
- 3 黄褐色土 Loam 塊多量に含む
- 4 暗褐色土 Loam 塊少量含む
- 5 黒褐色土 Loam 粒を含む
- 6 暗褐色土 Loam 塊・粒多量に含む
- 7 黒褐色土 Loam 塊少量含む。粘性あり
- 8 黒褐色土 炭化粒多量に含む
- 9 黄褐色土 Loam 粒多量に含む
- 10 暗褐色土 Loam 小塊含む
- 11 黄褐色土 Loam 粒多量に含む

M12号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・炭化粒少量含む
 - 2 暗褐色土 炭化粒多量に含む
 - 3 暗褐色土 Loam 塊含む
- M12号住居跡貯蔵穴**
- 1 暗褐色土 Loam 塊・炭化粒含む
 - 2 暗褐色土 炭化粒多量に含む
 - 3 暗褐色土 Loam 塊・焼土粒・炭化粒を含む
 - 4 暗褐色土 焼土粒・炭化粒を含む

M25号住居跡

- 1 黒褐色土 C軽石・Loam 粒含む
- 2 黒褐色土 Loam 粒少量含む

M13号住居跡・貯蔵穴

- 1 暗褐色土 Loam 塊・炭化粒含む
- 2 暗褐色土 Loam 粒含む
- 3 暗褐色土 黒味強く、Loam 小塊多量に含む
- 4 灰・炭化粒混じり層
- 5 黒色土
- 6 黒色土 Loam 塊含む
- 7 黒色土 Loam 塊含む、粘性あり

0 2m

Fig. 32 M12号・M13号・M20号・M25号住居跡

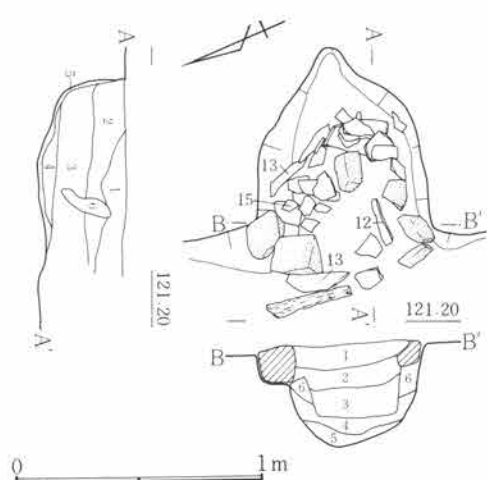


Fig. 33 M12号住居跡竈

高は約25cmを測り、床面は凝灰岩質層を基盤にしており安定しているが、東側に向って低くなり緩やかな起伏がある。

竈は検出されていないがM12号住居跡東壁外に当跡の壁線が僅かに検出され内側に折れる様相がみられ、竈の位置が予想される。南西部隅には径40cm・深さ30cmの円形土坑が穿たれる。

出土遺物には須恵器小杯・甑底部などがある。

M12号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土粒含む
- 2 暗褐色土 焼土粒・Loam 粒含む
- 3 暗褐色土 焼土粒・Loam 塊含む
- 4 暗褐色土 焼土粒・炭化粒多く含む
- 5 暗褐色土 焼土粒・炭化粒少量含む
- 6 焼土塊

M20号住居跡 (Fig. 32、38・PL. 41)

M区第3台地の北端、台地縁辺に位置し、79～81M30・31の範囲にある。北半及び東側は台地縁辺の崩潰か開削のため消失あるいは削平が著しい。南西部でM12号住居跡と重複しており、これより古い時期の所産である。M12号住居跡より掘形が深く南壁から西壁の一部にかけて検出されている。

平面形は方形を呈すると考えられ、東西長3.15m、南北は2mの範囲まで確認されている。東西軸方位はN-103°-Eを示す。壁高は約35cmを測り、床面は凝灰岩質層が基盤となっており安定的でほぼ平坦をなす。西壁から南壁の一部にかけて幅10cm・深さ5cm程度の壁下溝が巡る。貯蔵穴と考えられる土坑は南西部隅に設けられ径70cm・深さ50cmの円形を呈する。また南東部には径52×40cmの楕円形 Pit が検出されたが性格は確定できない。竈に近接しているが埋土中に焼土・灰などの混入がなく当跡に伴うかは不明である。

竈は東壁のごく南に偏った位置で壁線外に焼土の分布がみられたが、形態・規模などは明らかでない。

M25号住居跡 (Fig. 32、39・PL. 41)

M区第3台地の北端に位置し、78～80M28～30の範囲にある。重複関係は著しくM12号・M13号・M14号・M24号住居跡と各々切り合い、これらのいずれよりも古い時期の所産である。掘形が浅く遺存するのは北東部と南西部の狭小な範囲である。壁線は東壁から北壁にかけての一部と西壁から南壁にかけての隅部が確認された。

平面形は南北方向に長軸をもつ方形と考えられ、南北長約3.7m・東西長約3mの規模が推定される。北壁線を基軸にする東西軸方位はN-95°-Eを示す。壁高は約20cmを測り、北壁の一部には幅12cm程度の壁下溝が巡る。貯蔵穴と考えられる土坑は南西部隅に設けられ、径70×65cm・深さ35cmの不整形を呈す。

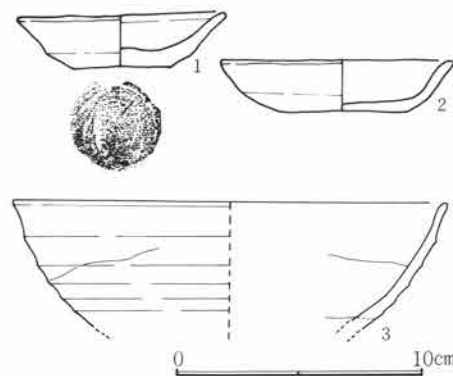


Fig. 34 M12号住居跡出土遺物(1)

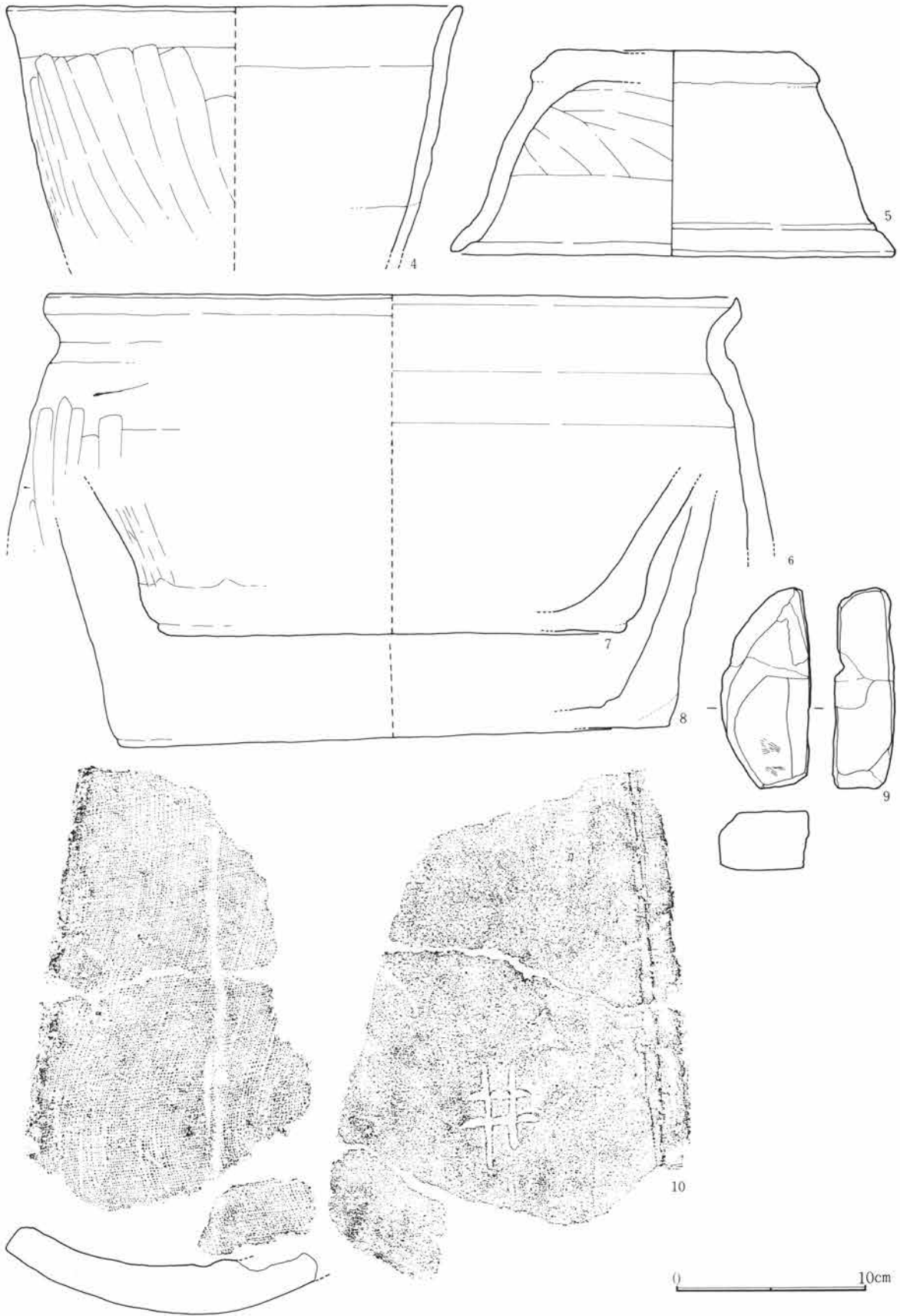


Fig. 35 M12号住居跡出土遺物(2)

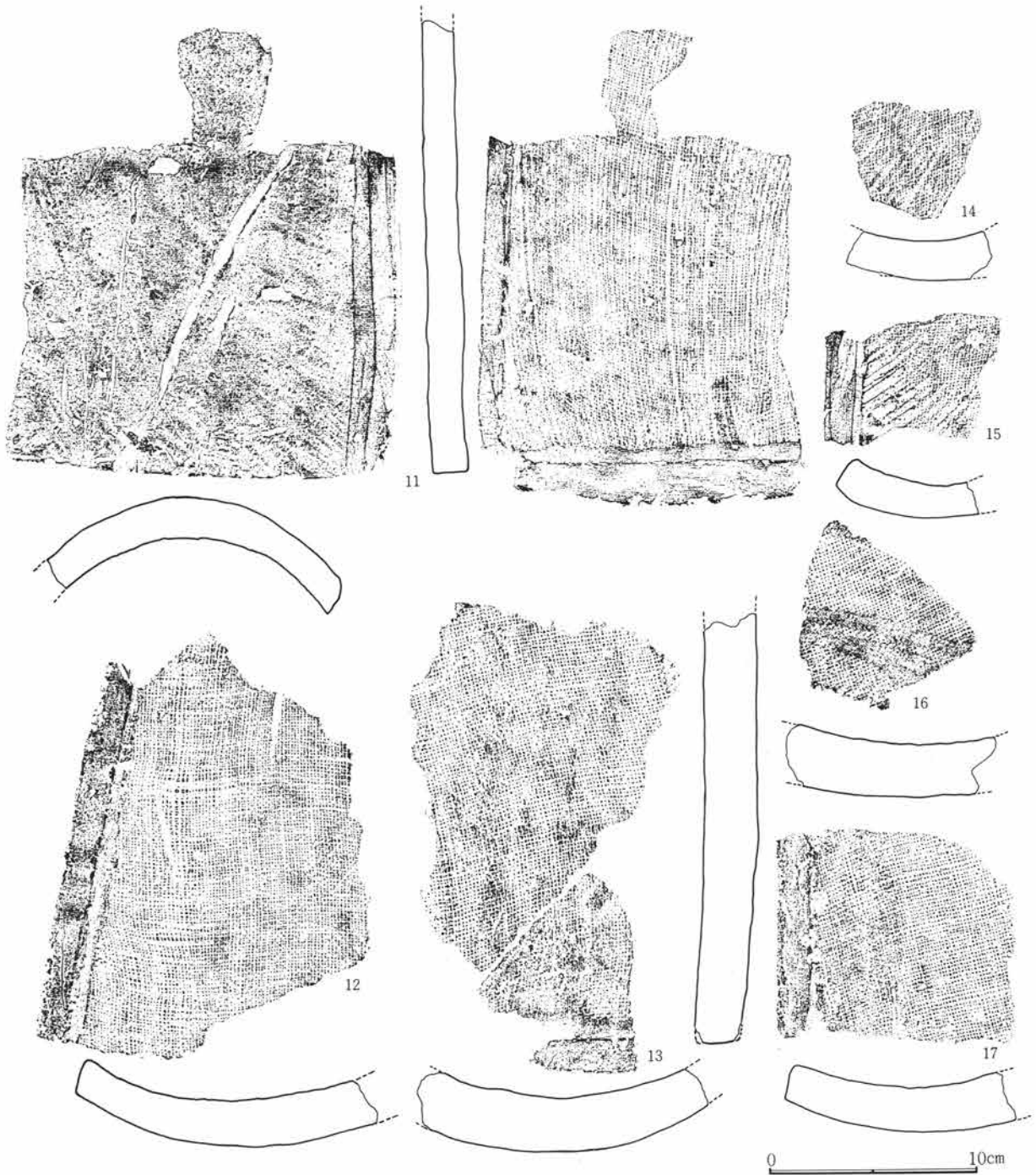


Fig. 36 M12号住居跡出土遺物(3)

M12号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
34-1 38-1	須恵器 杯	片	8.4×3.8 ×2.1	埋土	底部肥厚。体部緩い段をなし口縁部外反気味に開く。口唇部丸まる。口縁部横撫で。右回転糸切り。	①良好・酸化気味 ②浅黄橙 ③やや粗
34-2 38-2	須恵器 杯	片	9.2×5.0 ×2.05	埋土	腰部やや丸味をもち体部外反気味に開く。口唇部丸い。轆轤成形。糸切り後調整か？	①良好・酸化気味 ②黄橙 ③やや粗
34-3 38-3	灰釉陶器 碗	体部小 片	17.2× ×(5.0)	埋土	体部丸味をもち内湾して開く。口縁部は直線気味に弱く外傾。刷毛塗り施釉。	①良好 ②灰白 ③やや密・細砂混る
35-4 38-4	土師器 鉢	胴部片	23.8× ×(12.7)	埋土 +4~14	体部直線的に開く。口縁部僅かに外傾。口唇部上端面水平気味。口縁部横撫で。体部縦位篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②黄橙 ③やや粗・小石混る

第1節 竪穴住居跡と出土遺物

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
35-5 39-5	土師器 鉢	台部 $\frac{1}{2}$	23.0×12.2 ×10.5	Pit +7	台部僅かに張り端部くびれて外屈。端部内面に段。底部肥厚。袖部横撫で。台部内外面篋撫で。鉢型土器台部か？	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
35-6 39-6	土師器 甕	上半 $\frac{1}{4}$	35.7×— ×(13.0)	Pit	肩部張りなく口縁部短く外傾し口唇部は尖り直立。口縁部横撫で。胴部縦位篋削り。8と同一か？	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
35-7 39-7	土師器 鉢	底部小片	—×23.4 ×(7.6)	+5	底径大きく腰部著しく肥厚。胴部直線的に外傾。体部外面縦位篋削り。内面撫で。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや密
35-8 39-8	土師器 甕	底部破片	—×28.6 ×(11.5)	+6~12	底径大きく腰部著しく肥厚。体部直線的に外傾。内外面篋撫で。単位不明。6と同一か？	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
35-9 39-9	石製品 砥石	片端部欠損	長10.3 幅4.6 厚3.0	埋土	両面使用。仕上砥。刃痕あり。重202.6g	流紋岩
35-10 40-10	瓦 平瓦		厚2.3	竈	凹面布目。凸面撫で調整。「井」刻文あり。側面・側縁篋調整。模骨痕あり。二次被熱。	①やや軟 ②灰 ③やや密・小石混る
36-11 40-11	瓦 丸瓦		厚1.8	Pit	凹面布目。凸面篋撫で。側面・側縁篋調整。	①良好 ②灰 ③密
36-12 39-12	瓦 丸瓦		厚2.1	竈	凹面布目。凸面篋撫で調整。側面・側縁篋調整。	①良好 ②灰白 ③やや密・白色粒混
36-13 39-13	瓦 平瓦		厚2.55	埋土	凹面布目。凸面篋削り・撫で調整。側面・側縁篋調整。	①やや軟 ②灰 ③やや密・砂混る
36-14 39-14	瓦 平瓦		厚1.85	埋土	凹面布目。凸面撫で調整。	①良好 ②灰 ③密
36-15 39-15	瓦 平瓦		厚1.65	埋土	凹面布目。凸面篋撫で。側面・側縁篋調整。11と同一個体か。	①良好 ②灰 ③密
36-16 39-16	瓦 平瓦	小片	厚2.5	Pit	凹面布目、布継目痕。凸面撫で調整。	①やや軟 ②灰 ③やや密
36-17 39-17	瓦 平瓦	小片	厚2.0	床直	凹面布目。凸面撫で調整。側面篋調整。	①やや軟 ②灰 ③やや粗・小石混る

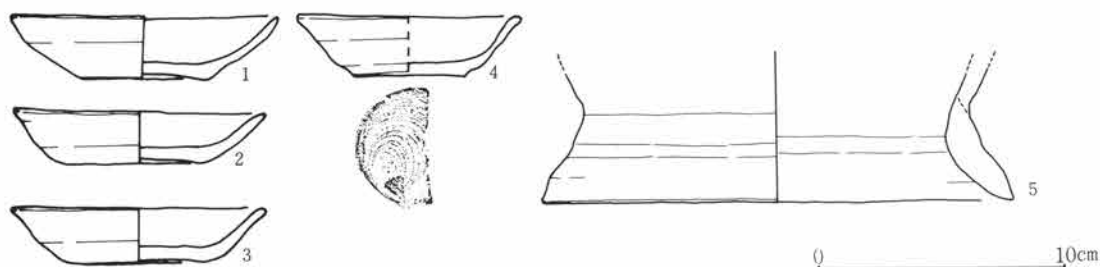


Fig. 37 M13号住居跡出土遺物

M13号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
37-1 40-1	須恵器 杯	完形	10.7×2.6 ×2.6	床直	腰部緩くくびれ体部丸味をもち内湾気味に大きく開く。口唇部細る。轆轤成形。右回転糸切り。	①還元気味 ②灰白 ③細砂混る
37-2 40-2	須恵器 杯	完形	10.0×5.8 ×2.1	床直	体部直線的に開き口縁部僅かに外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①還元気味 ②灰白 ③白色粒混る
37-3 40-3	須恵器 杯	$\frac{1}{2}$	10.2×5.4 ×2.2	床直	体部大きく開き口縁部僅かに外反。轆轤成形。	①酸化気味 ②明褐色 ③小石混る
37-4 40-4	須恵器 杯	$\frac{3}{4}$	9.0×4.4 ×2.4	床直	腰部張りをもって開く。口縁部肥厚気味に丸まり僅かに外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②浅黄橙 ③砂混る
37-5 40-5	土師器 甕	底部	18.6×— ×(5.0)	埋土	底端部著しく肥厚し外屈して開く。端部尖り気味。	①酸化気味 ②鈍い黄橙 ③やや密

第2章 遺構と遺物

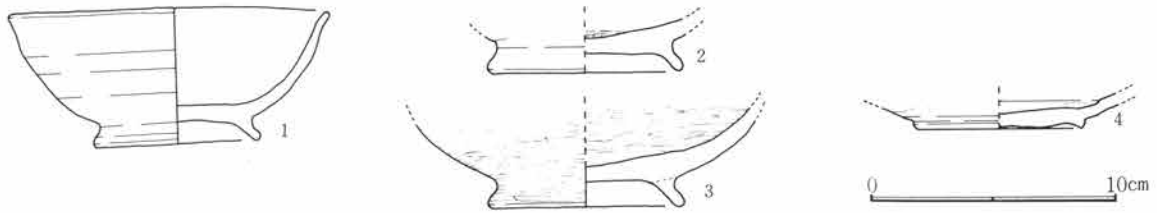


Fig. 38 M20号住居跡出土遺物

M20号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
38-1 41-1	黒色土器 椀	1/4	12.8×6.7 ×5.4	竈前 Pit	体部丸味強く口縁部緩く外反。付高台。轆轤成形。内面黒色処理及び筥磨き痕。	①良好 ②暗灰 ③やや密
38-2 41-2	内黒土器 椀	高台部	—×7.8 ×(2.0)	竈	付高台、端部丸まる。内面弱い黒色処理・筥磨き。轆轤成形。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや粗
38-3 41-3	須恵器 椀	口縁部 欠損	—×7.8 ×(3.8)	竈	器肉厚い。腰部丸味強い。付高台、端部丸くハの字状に開く。轆轤成形。内外面に横位筥磨き顕著。	①酸化・やや軟 ② 鈍い黄橙 ③やや密
38-4 41-4	灰釉陶器 皿転用硯	体部欠 損	—×6.6 ×(1.3)	埋土	段皿。略三角の低い高台。漬け掛け施釉。見込部摩滅著しく光沢あり。	①良好 ②灰白 ③密

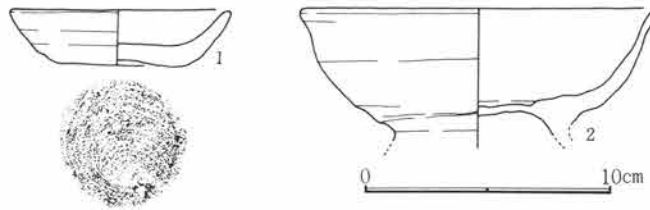


Fig. 39 M25号住居跡出土遺物

M25号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
39-1 41-1	須恵器 杯	完形	8.8×5.0 ×2.3	+5	腰部丸く体部直線的に外傾。轆轤成形。右回転糸切り。口唇部に吸炭あり。灯明皿か？	①酸化 ②くすんだ 橙 ③やや粗
39-2 41-2	須恵器 椀	高台欠 損	14.2×— ×(5.2)	貯蔵穴	腰部丸く口縁部薄く緩く外傾。付高台欠損。轆轤成形。	①酸化 ②浅黄橙 ③粗

M14号住居跡 (Fig. 40、41、43・PL. 6、41)

M区第3台地の北縁に近く位置し、77~79M27~29の範囲にある。北東半はM24号、北西部はM25号住居跡と重複しているが、これらよりも新しい時期の所産である。

平面形は南北にやや長い方形を呈するが、南西部壁線が歪む。南北長3.3m・東西長3.1mを測り、東西軸方位はN-85°-Eを示す。壁高は約20cmを測る。床面はほぼ平坦をなし竈前面から南半は良好に踏み締まるが、M24号住居跡と重複する北東部はやや不安定である。貯蔵穴と考えられる土坑は南西部隅に設けられ、径45×35cm・深さ47cmの楕円形を呈する。

竈は東壁の南端に偏って付設され、東壁線直交軸から約10°ほど南へ傾き、竈軸方位はN-97°-Eを示す。燃焼部は大きく楕円形に掘り込まれ、緩い傾斜をもつ長い煙道部が延びる。燃焼部幅55cm・奥行き62cm、煙道部長さ85cm、煙出し孔径23cmを測る。

出土遺物は、大形羽釜・鉢類が検出されている。

M24号住居跡 (Fig. 40、42、44・PL. 6、41)

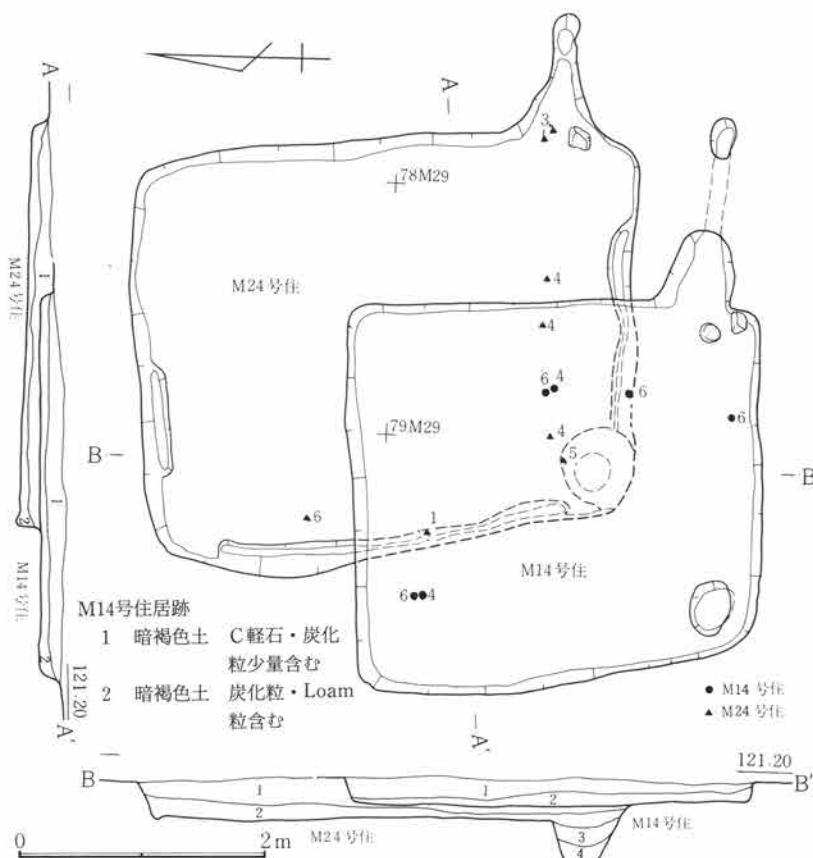
M区第3台地の北縁に近く位置し、77~79M28・29の範囲にある。南西部でM14号住居跡と重複しこれより古い時期の所産である。

平面形は南北に長軸をもち南西部が歪む隅丸方形を呈する。南北長約4m・東西長3.4mを測り、東西軸方

位はおよそN-88°-Eを示す。掘形はM14号住居跡より深く全体の形状は確認されている。壁高は約30cmを測り、床面はほぼ平坦をなす。西壁及び南壁下にかけてと北壁のごく一部分に壁下溝が巡り、幅7~12cm・深さ約5cmを測る。貯蔵穴は南西隅の壁際に設けられ径60cm・深さ30cmの円形を呈す。

竈は東壁の南端に付設され、略三角形に掘り込まれた燃烧部から、やや長い煙道部が延びる。袖部は東壁線上にあると考えられるが構築材は元位置をとどめず、燃烧部の浅い窪みは壁線より内側にある。燃烧部幅約55cm・奥行き80cm、煙道部長さ40cmを測る。

出土遺物は須恵器小杯などがある。



M24号住居跡

- 1 暗褐色土 焼土粒・炭化粒少量含む
- 2 暗褐色土 炭化粒・Loam 粒含む
- 3 黒褐色土 炭化粒・Loam 粒含む
- 4 黒褐色土 Loam 塊含む

Fig. 40 M14号・M24号住居跡出土遺物

M14号住居跡竈

- 1 黒色土 C軽石多量含む
- 2 黒色土 焼土粒・炭化粒・Loam 塊を含む
- 3 灰層
- 4 焼土 (煙道部天井・焼土壁)

M24号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土粒少量含む
- 2 暗褐色土
- 3 暗褐色土 焼土粒・炭化粒含む
- 4 暗褐色土 焼土粒・炭化粒・Loam 粒含む
- 5 焼土

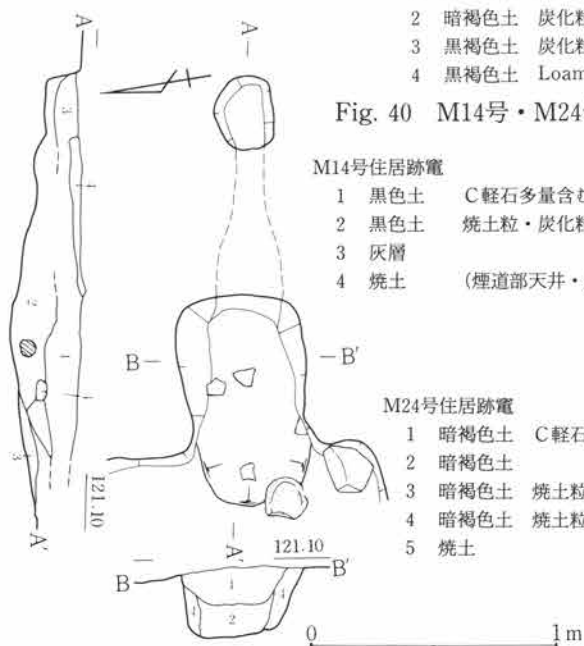


Fig. 41 M14号住居跡竈

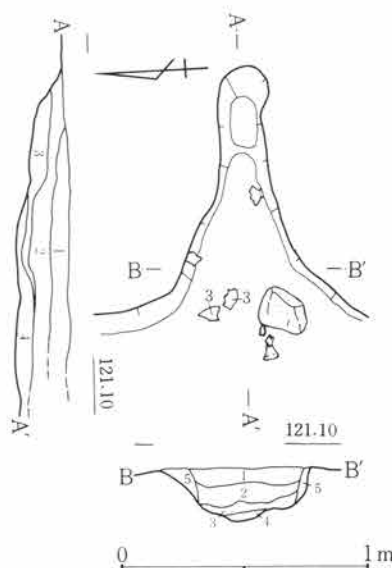


Fig. 42 M24号住居跡竈

第2章 遺構と遺物

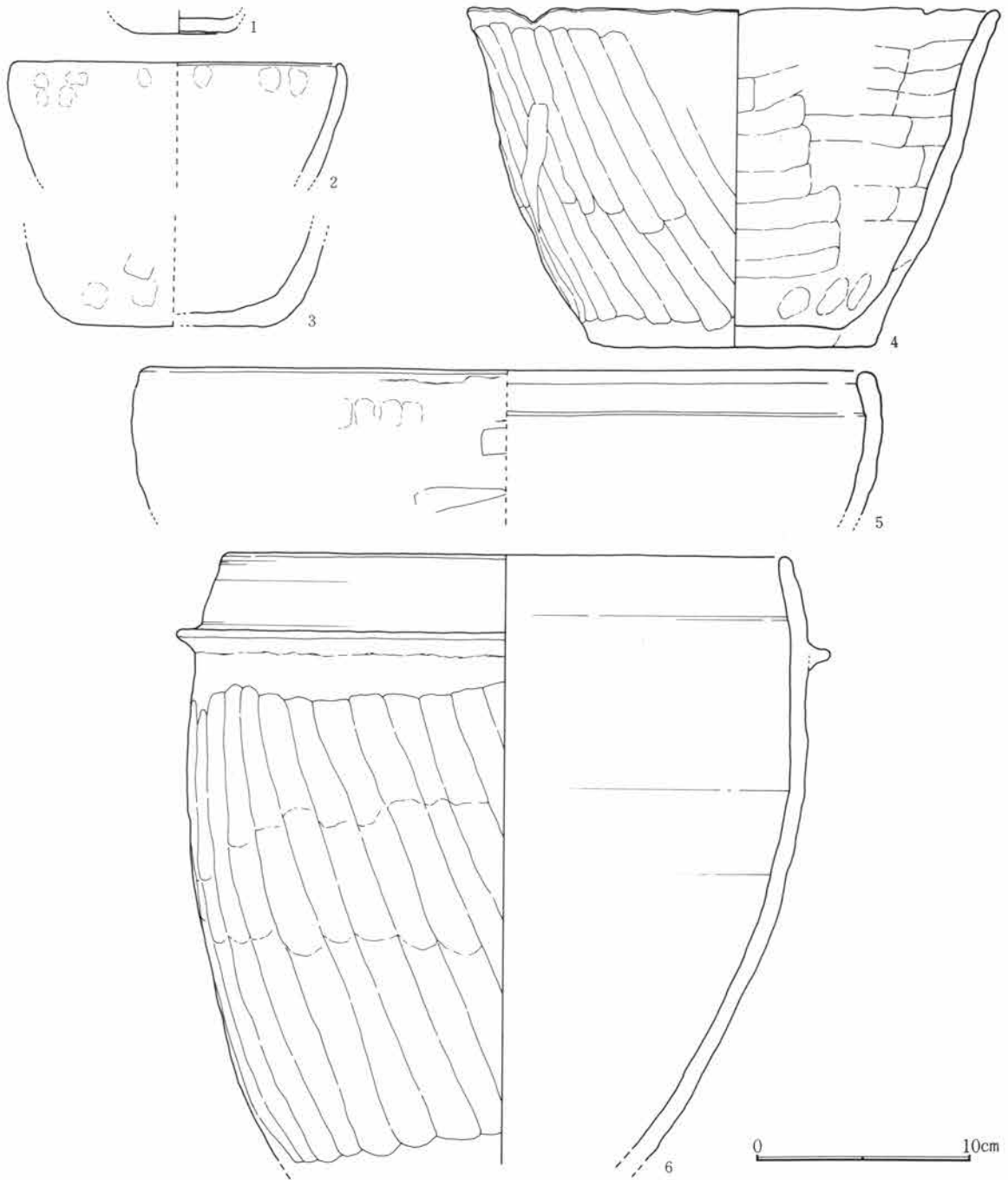


Fig. 43 M14号住居跡出土遺物

M14号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
43-1 41-1	須恵器 杯	底部	—×4.3 ×(0.8)	埋土	轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好②鈍い 橙 ③細砂混る
43-2 41-2	土師器 鉢	体部破 片	15.0×— ×(5.2)	埋土	体部から口縁部内湾して開く。口縁部指頭痕。3と同一個 体。	①良好②鈍い赤褐 ③砂混る
43-3 41-3	土師器 甕	底部	—×8.6 ×(4.4)	埋土	平底。腰部肥厚。外面篋撫で・指頭痕。内面撫で。2と同 一単位。	①良好 ②鈍い橙 ③砂混る
43-4 41-4	土師器 鉢	完形	24.4×13.1 ×15.3	埋土	底部平坦。体部直線的に開き上半部で緩くくびれ口縁部僅 かに外反気味。外面斜位の強い撫で。内面は横位撫で。	①やや軟 ②鈍い橙 ③やや粗

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
43-5 41-5	土師器 鉢	口縁部	33.2× ×(6.5)	埋土	口縁部内湾し端部丸まる。外面口縁部に接合痕、その下方に指頭痕・篋撫で。内面口縁部やや段をなす。	①良好 ②鈍い赤褐 ③砂混る
43-6 41-6	羽釜	%底部 欠損	26.2× (27.5)口径30.0	埋土	胴部やや丸く張る。銜端部丸く断面略三角。口縁部内傾気味に立つ。口唇部はやや丸い。胴部外面縦篋削り。	①酸化・良好 ②橙 ③やや粗

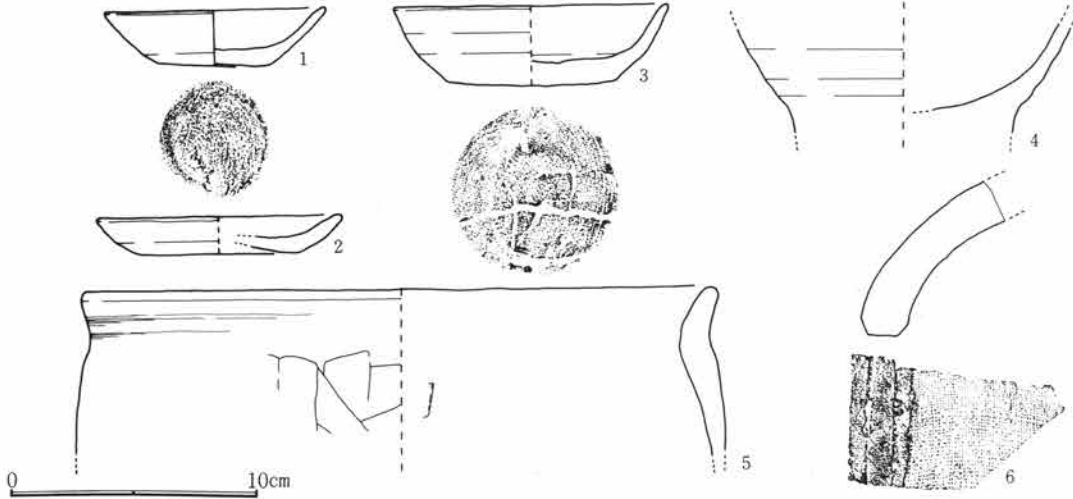


Fig. 44 M24号住居跡出土遺物

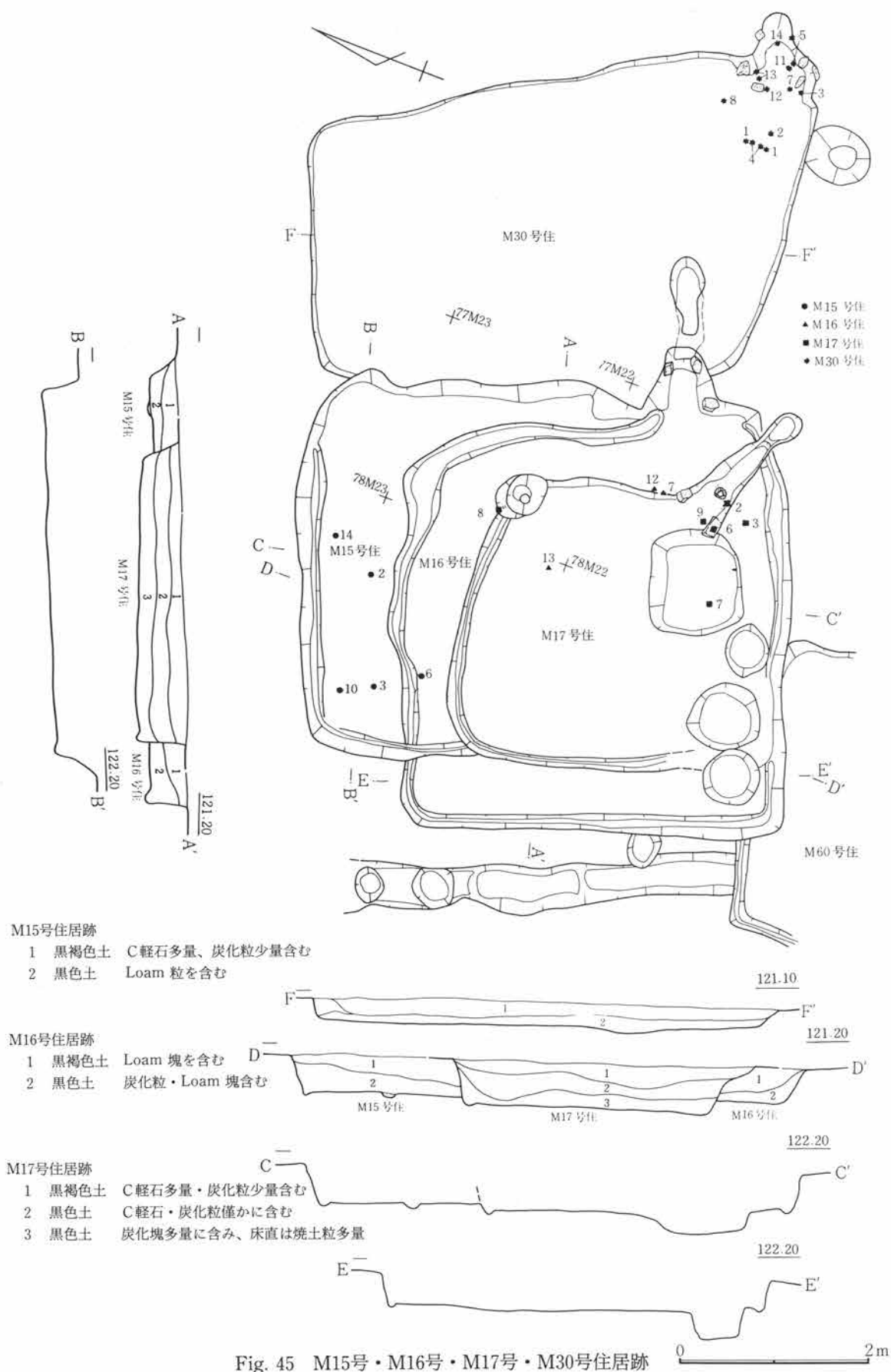
M24号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
44-1 41-1	須恵器 杯	ほぼ完 形	8.8×4.3 ×2.3	+1	底部やや肥厚し体部直線的に外傾。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②鈍い黄橙 ③粗
44-2 41-2	須恵器 杯	1/4	9.8×6.2 ×1.5	埋土	器肉厚い。体部浅く大きく開く。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや粗
44-3 41-3	須恵器 杯	%	10.9×6.6 ×3.1	竈	底部器肉厚い。腰部緩くくびれて体部外傾。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味・軟 ②灰白 ③密
44-4 41-4	須恵器 椀	底部	-×- ×(4.2)	+1~11	轆轤成形。高台欠損。	①酸化気味 ②灰白 ③やや密
44-5 41-5	土師器 鉢	小片	25.4× ×(6.7)	+3	肩部張りなく口縁部肥厚し短く外傾。口縁部横撫で。胴部縦篋削り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗
44-6 41-6	瓦 丸瓦	小片	厚1.7	+5	凹面布目。凸面撫で。側縁篋調整。	①良好 ②灰 ③密 ・黒色粒多量に混る

M15号住居跡 (Fig. 45、47、49・PL. 6、42)

M区第3台地のほぼ中央部東側に位置し、76~79M20~23の範囲にある。重複関係は著しく、M16号・M17号とともに東側ではM18号と、南西部で僅かにM60号の各住居跡と切り合っている。新旧関係はM17号住居跡より旧く、他より新しい時期の所産である。M16号住居跡との関係は竈の位置を同じくしていると考えられ、重複関係とするより、長軸の設定が東西から南北方向に変化したものの両者は拡張・建替えの範疇で捉えることができよう。

M15号住居跡の平面形は南北に長軸をもつ隅丸方形を呈する。南北長約5.15m・東西長約4mを測り、東西軸方位はN-70°-Eを示す。壁高は約40cmを測り、北・西・南壁には壁下溝が巡る。西壁はM17号住居跡によって消失しているが本来は存在したと考えられる。床面は平坦をなすが中央部から南西半は掘形の深いM17号住居跡によって消失している。また北から東側にかけてM16号住居跡の壁下溝が検出されている。貯



蔵穴は南西部隅に設けられる土坑が相当するかと考えられるがM17号住居跡に所属するような位置にあり、両者に共有の可能性もある。径約75cm・深さ35cmを測り略円形を呈す。

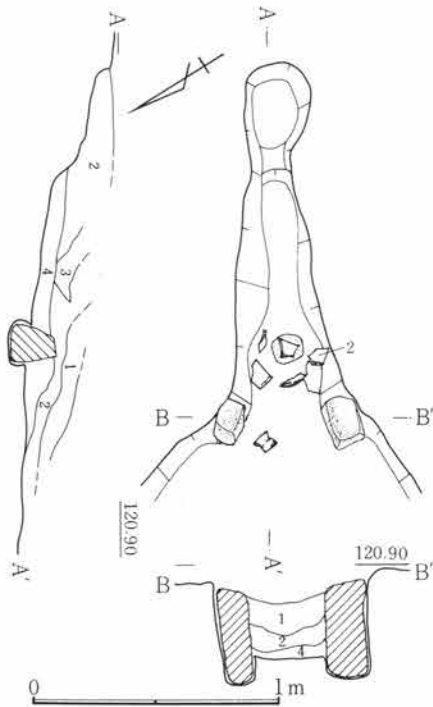


Fig. 46 M17号住居跡竈

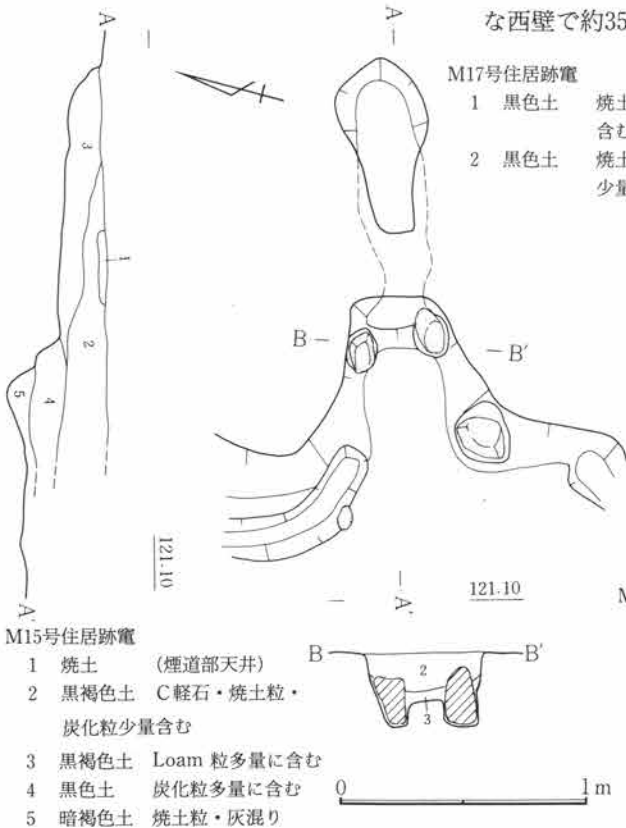
竈は東壁の南に偏って付設される。壁線上に袖部が位置し、右袖には凝灰岩質の加工材が、また燃焼部奥壁左右の煙道部との交換部には同材質が埋設されている。煙道部は燃焼部より急角度で立ち上がり水平に長く延びる。燃焼部幅80cm・奥行き70cm、煙道部長さ約1.1mを測る。

出土遺物は須恵器小杯の他、足高高台碗片・灰釉陶器片・羽釜などがある。

M16号住居跡 (Fig. 45、49・PL. 6)

M区第3台地の中央部東側に位置し、77~79M20~22の範囲にある。M15号・M17号・M60号住居跡と重複しているがM15号・M17号住居跡より旧く、M60号住居跡より新しい時期の所産である。M15号住居跡との関係については、切り合い関係とするより、拡張・建替えの範疇でとらえている。

平面形態は、M15号住居跡が南北に長軸をもつのに対し当跡は東西長・南北長とも約4.2mの方形を呈している。東西軸方位はM15号住居跡と同じくN-70°-Eを示し、壁高は遺存の良い西壁で約35cmを測る。南壁線はM15号住居跡と同じくする。



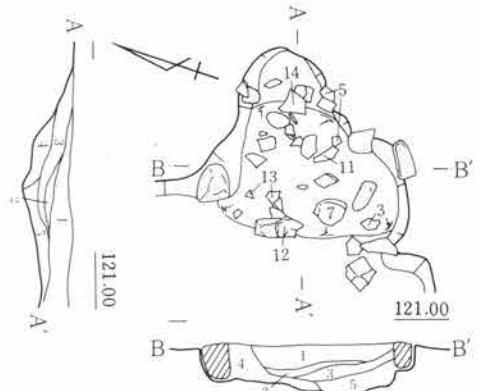
M15号住居跡竈

- 1 焼土 (煙道部天井)
- 2 黒褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒少量含む
- 3 黒褐色土 Loam 粒多量に含む
- 4 黒色土 炭化粒多量に含む
- 5 暗褐色土 焼土粒・灰混り

Fig. 47 M15号住居跡竈

M17号住居跡竈

- 1 黒色土 焼土粒・炭化粒・Loam 粒 含む
- 2 黒色土 焼土粒・炭化粒・Loam 粒 少量含む
- 3 焼土塊 (煙道部天井の崩落か)
- 4 焼土粒 灰混り層



M30号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石・Loam 細粒少量含む
- 2 暗褐色土 Loam 大粒含む
- 3 黒褐色土 C軽石・Loam 細粒少量含む
- 4 黒褐色土 C軽石・Loam 細粒多量含む
- 5 暗褐色土 C軽石・Loam 細粒・焼土粒を含む

Fig. 48 M30号住居跡竈

第2章 遺構と遺物

床面は中央部の広い範囲は掘形の深いM17号住居跡によって消失しているが遺存部分についてはほぼ平坦をなす。壁下溝は幅10~20cm・深さ約10cmを測り、全壁を巡ると考えられ東・北壁部分はM15号住居跡の床面に検出され北壁部は溝線に小さな蛇行が見られる。貯蔵穴は南西部隅に穿たれる土坑が該当すると考えられ、径60cm・深さ32cmの円形を呈する。

竈は検出されていないが、M15号住居跡の竈位置にあたると考えられる。

当跡に直接伴う出土遺物は少ない。

M17号住居跡 (Fig. 45、46、50・PL. 6、42)

M区第3台地の中央部東側に位置し、77・78M20~22の範囲にある。M15号・M16号住居跡と重複しており、両者より新しい時期の所産である。

平面形は南壁線が確認されていないが、東西長・南北長とも約3m程度で北壁線にやや張らみをもつ小規模な略方形を呈する。東西軸方位はおよそN-77°-Eを示す。壁高は約50cmを測り遺存は良好である。床面は平坦をなし全体に堅く踏み締まる。壁下の溝は北壁から西壁にかけて巡り幅約8cm・深さ5cmを測る。貯蔵穴と考えられる土坑は南西部隅に設けられるがM15号住居跡との関係からいずれに属するかは確定できない。また北東隅に径50cm・深さ34cmの楕円形 Pit が検出されているが当跡に関係する施設かは不明である。南東部に検出された1.1×1m・深さ25cmの方形土坑は当跡に伴うとは考えられないが、前後関係は不明である。

竈は東壁と南壁との変換部に付設され、南西部隅のほぼ対角線上にある。袖材は壁線上にあり、凝灰岩質の角柱状加工材が埋設される。燃烧部はやや狭長な形をなし、袖石前面から約40cm奥まった箇所に袖材と同質の支脚が設置される。燃烧部と煙道部の区別は不明瞭で、平面的には袖材から約60cmで僅かなくびれをなして幅が狭くなり、断面形では支脚から奥へ向かって緩やかな傾斜をもっていることで認識される程度である。煙出し孔は煙道部より急角度で立ち上がっており、当遺跡での竈の形態としてはあまり類例のないものである。袖材間内法30cm、燃烧部奥行き約60cm、煙出し孔を含む煙道部長さ約90cm、煙出し孔径25cmを測る。

出土遺物は須恵器小杯・平瓦片などがある。

M30号住居跡 (Fig. 45、48、51・PL. 6、43)

M区第3台地の中央部東縁辺に位置し、75~77M21~23の範囲にある。当跡の西壁縁でM15号住居跡と重複しており、これよりも古い時期の所産である。なお西壁はM15号住居跡によって消失している。

平面形は南北方向に長軸をもつが、南壁線が大きく歪み不整形を呈する。各壁線長は不統一で、東壁5.3m・西壁4.4m・南壁3.2m・北壁2.5mである。東西長約3.3m・南北長約5.5mを測る。東壁線を基準にしてこれに直交する東西軸方位はおよそN-60°-Eを示す。壁高は約25cmを測り、床面はほぼ平坦をなすが踏み締まりは竈前面を除き全体に軟弱である。壁下の溝や貯蔵穴などの諸施設は検出されていない。

竈は東壁の南端に付設され、袖部は掘形を小さく突出させる形態をもち右袖は南壁に沿うような形である。袖部には凝灰岩質の加工材を埋設するが右袖のものは散乱状態である。煙道部にあたる部分は小さく張り出す。竈袖は東壁線に対して直交せず、およそ10°南へ傾く。袖部幅約65cm、燃烧部奥行き65cm、煙道部は約20cmを測る。

出土遺物は竈内あるいは周辺に多く、灰釉陶器碗・羽釜などのほか須恵器杯類がある。

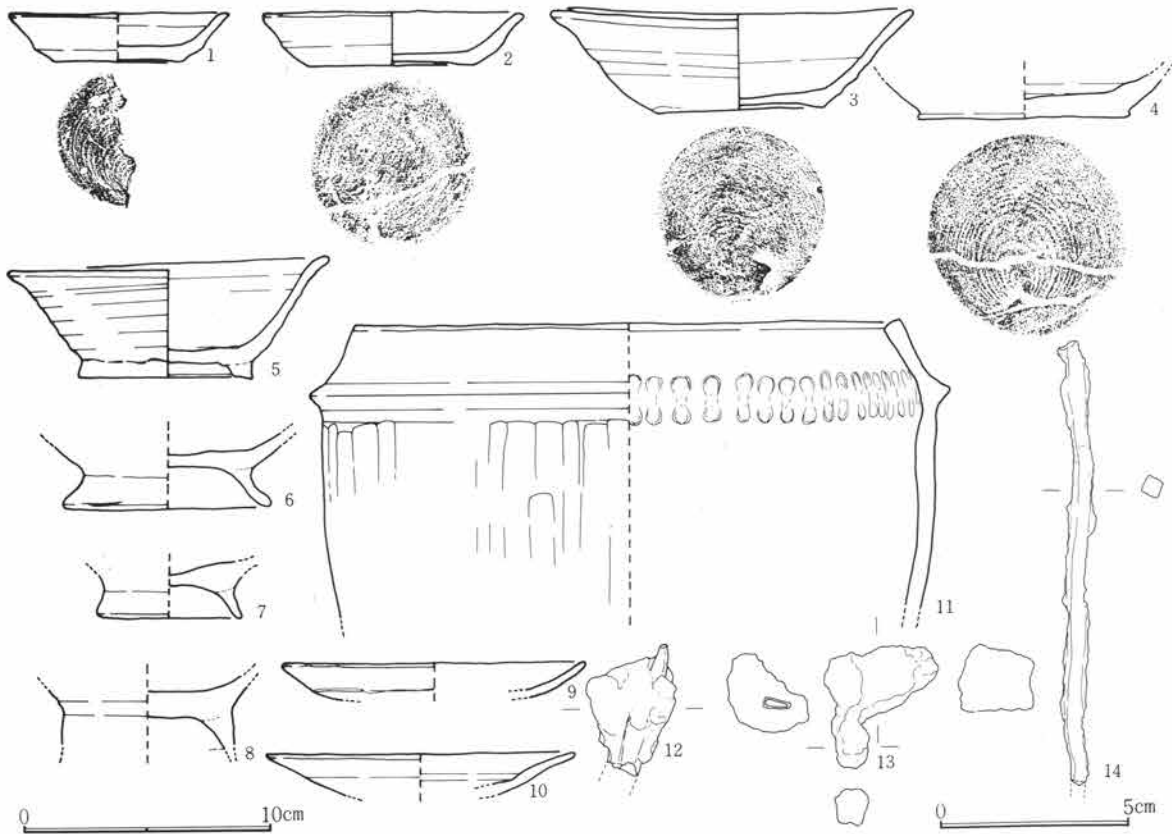


Fig. 49 M15号・M16号住居跡出土遺物

M15・16号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
49-1 42-1	須恵器 杯	1/4	8.8×5.0 ×(1.9)	埋土	腰部くびれ体部外反して開く。見込部に僅かな段をなす。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③やや粗
49-2 42-2	須恵器 杯	ほぼ完形	10.4×6.4 ×2.1	+10	体部中位でくびれ上半は外反して開く。器肉やや薄手。轆轤成形。回転糸切り。	①良好・酸化気味 ②浅黄橙 ③やや粗
49-3 42-3	須恵器 杯	ほぼ完形	14.5×6.6 ×3.8	埋土	体部直線的に開き口唇部外傾。端部やや丸まる。底部器肉極めて薄い。右回転糸切り。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密・細砂混る
49-4 42-4	須恵器 杯	底部	—×8.4 ×1.65	埋土	底部肥厚。体部器肉薄い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②淡黄 ③やや密
49-5 42-5	須恵器 椀	完形	12.7×6.9 ×4.5	貯蔵穴	腰部張り気味で体部大きく開き口縁部外反。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②橙 ③やや密
49-6 42-6	須恵器 椀	底～台	—×8.2 ×(3.2)	+17	付高台、大きく外反気味でハの字状に開く。端部丸まる。轆轤成形。内外面撫で調整。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・細砂混る
49-7 42-7	須恵器 椀	底～台	—×5.8 ×(2.3)	+12	付高台。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②淡黄 ③ やや密・細砂混る
49-8 42-8	須恵器 椀	台部の み	—×—×(3.0) 台部径6.7	貯蔵穴	付高台。轆轤成形。	①良好 ②橙 ③や やや密・細砂混る
49-9 42-9	灰釉陶器 皿	小片	12.2×— (1.4)	埋土	腰部に僅かな段をなし体部は直線的に開く。轆轤成形。内外面ほぼ全体に施釉。	①還元気味・良好 ②灰白 ③やや密
49-10 42-10	灰釉陶器 皿	口～体 小片	12.4×— ×1.7	+28	体部直線的に開き内面緩い段をなし外反気味に開く。端部丸まる。内面全体施釉。	①還元気味・良好 ②灰白 ③やや密
49-11 42-11	羽 釜	口～体	21.8×— ×(11.5)	埋土	胴部張りなく口縁部強く内傾。上端面内傾。鋳低く断面略三角。口縁横撫で。胴部縦位篋削り。内面指頭痕・撫で。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密・細砂混る
49-12 42-12	鉄器 不明		長(3.5) 幅0.8厚0.3	埋土	板状鉄器に鑄著しく詳細不明。	
49-13 42-13	鉄器 角釘?	頭部	長(3.2) 幅0.8	埋土	頭部形状折頭式の角釘か。	

第2章 遺構と遺物

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
49-14 42-14	鉄器 不明		長(11.7) 幅0.6	埋土	角棒状鉄器。	

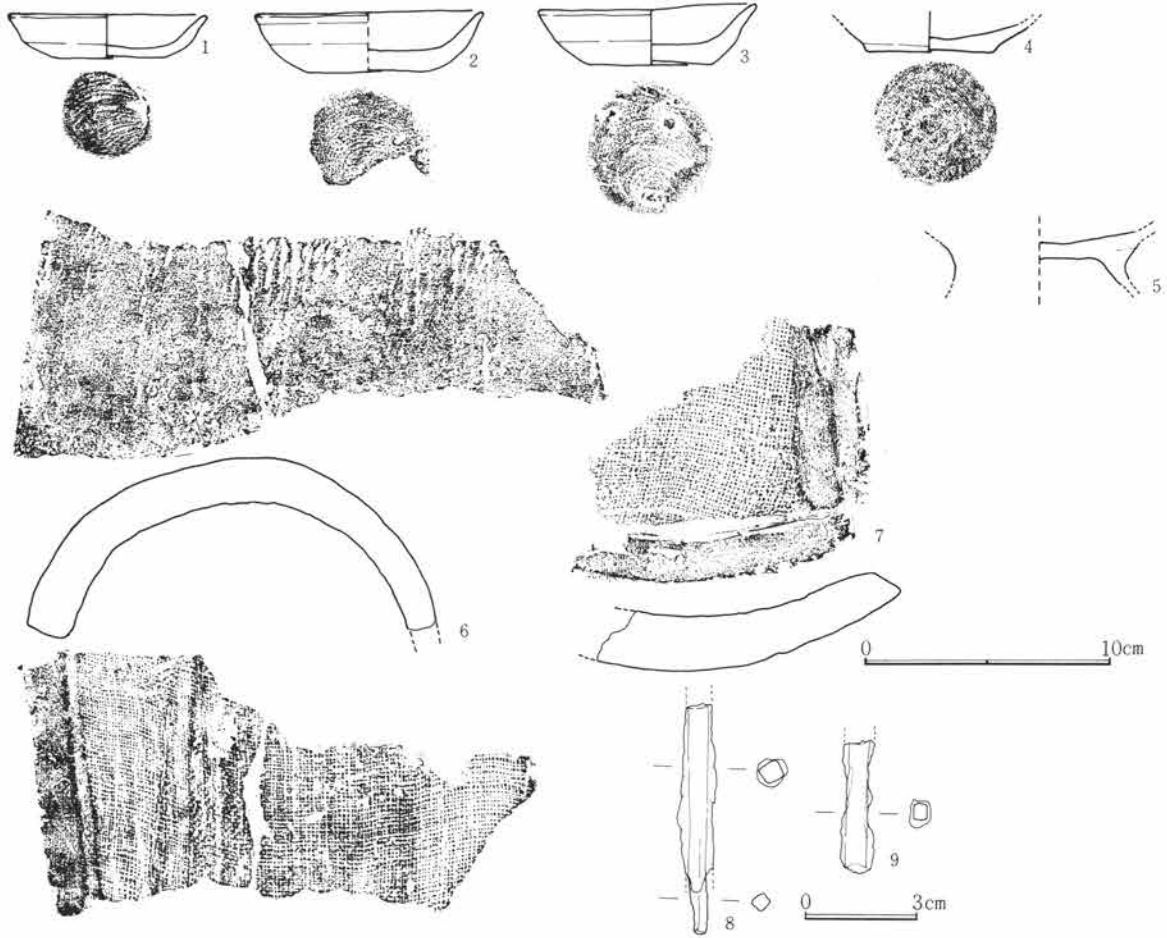


Fig. 50 M17号住居跡出土遺物

M17号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
50-1 42-1	須恵器 杯	破片	7.9×4.0 ×1.75	Pit	腰部やや丸味をもち屈し口縁部直線的に開く。器肉薄め。口唇部丸まる。口縁部横撫で。摩滅著しく調整不明。	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③やや粗
50-2 42-2	須恵器 杯	1/2	9.0×5.0 ×(2.35)	竈	全体に肥厚し体部やや丸く口縁部細り緩く短かく外反。口縁部横撫で。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②橙 ③やや粗
50-3 42-3	須恵器 杯	完形	8.6×5.0 ×2.2	+29~30	底部から腰部肥厚し口縁部は細まり緩く外反。端部やや丸い。口縁部横撫で。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②黄橙 ③やや粗
50-4 42-4	須恵器 杯	底部	-×5.0 ×(1.0)	埋土	器肉薄い。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③やや粗
50-5 42-5	須恵器 碗	底部	-×-(1.6) 台部径6.8	埋土	轆轤成形。回転糸切り。付高台。足高になるか。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密・小石混る
50-6 42-6	瓦 丸瓦		厚1.8	竈	凸面縄目文圧痕。凹面布目。側面篋調整。	①酸化・良好 ②橙 ③やや密・小石混る
50-7 42-7	瓦 平瓦	小片	厚2.0	竈脇	凹面布目。凸面撫で。側面篋調整。	①酸化・良好 ②橙 ③やや密
50-8 42-8	鉄器 角釘?	頭部欠損	長(6.0) 幅0.5	埋土	頭部・端部欠損し詳細不明。	
50-9 42-9	鉄器 角釘?		長(3.5) 幅0.4	埋土	頭部・端部欠損し詳細不明。	

第1節 竪穴住居跡と出土遺物

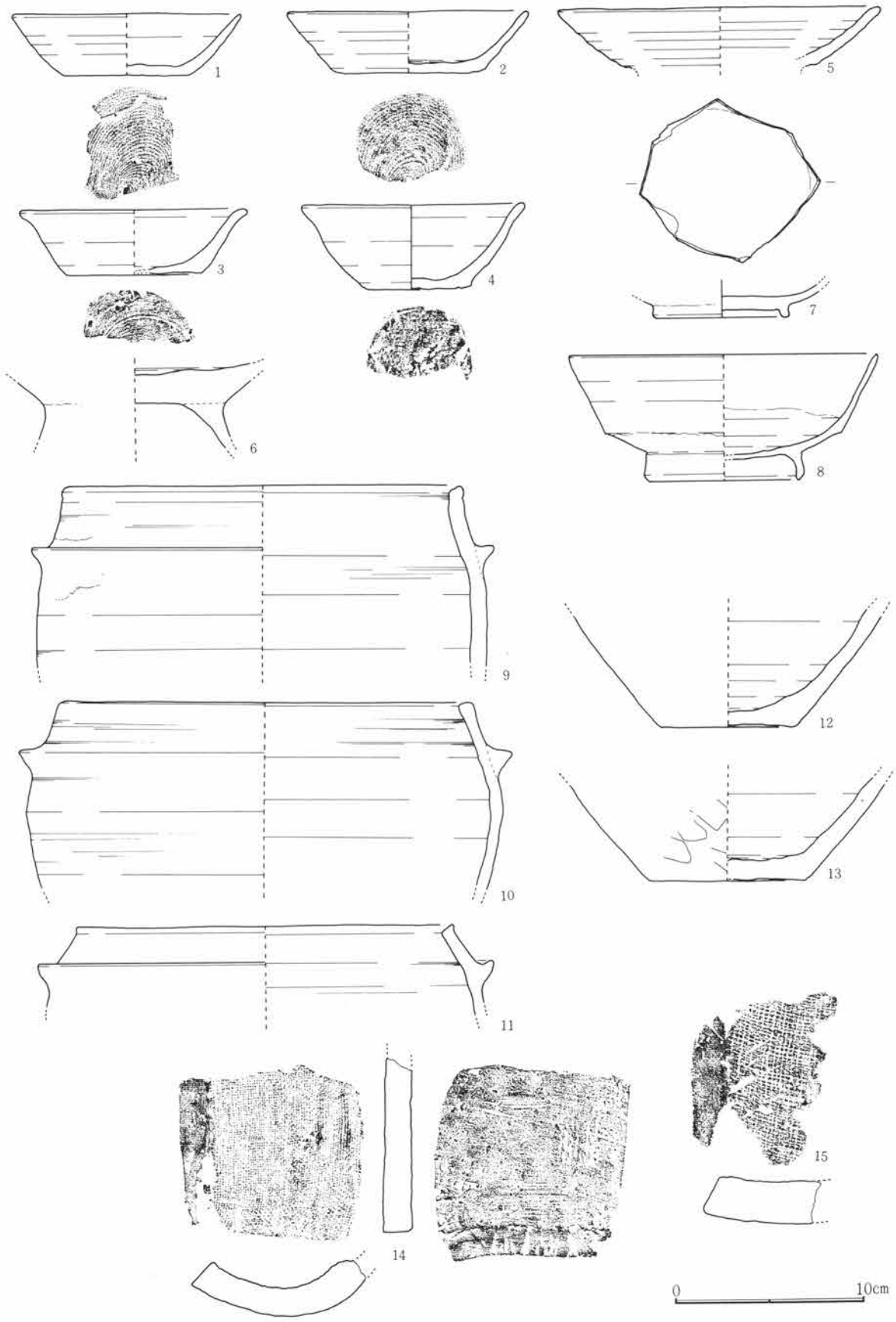


Fig. 51 M30号住居跡出土遺物

第2章 遺構と遺物

M30号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
51-1 43-1	須恵器 杯	1/4	12.0×6.7 ×3.2	竈	底径大きく体部直線的に外傾。口唇部細る。轆轤成形。右回転糸切り。底部平ら。	①酸化・軟 ②鈍い 黄橙 ③細砂混る
51-2 43-2	須恵器 杯	1/4	12.5×6.5 ×3.2	竈	底径大きく体部は直線的で大きく外傾して開く。口唇部丸い。回転糸切り。	①やや軟 ②黒褐 ③やや粗・細砂混る
51-3 43-3	須恵器 杯	1/4	11.9×7.1 ×3.4	竈	腰部やや丸味をもち口縁部大きく外反して開く。口唇部丸まる。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③粗砂混る
51-4 43-4	須恵器 杯	1/4	11.6×5.7 ×4.5	竈	体部丸味をもち口縁部は緩く外反。口唇部丸まる。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・軟 ②淡黄 ③粗砂混る
51-5 43-5	須恵器 椀	1/4	16.7×— ×(3.1)	竈	体部内湾気味に大きく開く。口唇部断面丸い。内外面轆轤目強い。付高台か。	①酸化・軟 ②橙 ③粗砂混る
51-6 43-6	須恵器 台付鉢?	底部	—×— ×(4.3)	竈	底部肥厚。付高台、高くハの字状に開く。轆轤成形。	①酸化・良好 ②灰白 ③やや粗
51-7 43-7	灰釉陶器 椀転用碗	体部欠 損	—×7.1 ×(1.7)	埋土	底部肥厚。付高台、低く断面矩形。底部回転篋削り。轆轤成形。見込部摩滅著しく光沢あり。転用碗。	①良好 ②灰白 ③密
51-8 43-8	灰釉陶器 椀	1/4	16.0×8.3 ×6.5	竈	腰部大きく開き強く屈して体部直線的に外傾。腰部～体部中位まで回転篋削り。付高台、高く端部は内屈し尖る。面取り明瞭。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③やや密
51-9 43-9	羽 釜	口縁部 破片	20.9×— (9.3)口径24.1	埋土	胴部やや張る。口縁部外反気味に内傾。鏝僅かに上向き。口唇部断面矩形。	①酸化・良好 ②鈍 い黄橙 ③小石混る
51-10 43-10	羽 釜	上半部 破片	21.5×— (9.7)口径25.7	埋土	胴部丸味強く鏝断面三角で水平につく。口縁部内傾し口唇部断面矩形。口縁・胴部回転篋調整。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
51-11 43-11	羽 釜	口縁部	19.6×— (4.7)口径23.7	竈	鏝上向き。口縁部直線的で大きく内傾し口唇部断面矩形。口縁部・胴部回転篋撫で。	①酸化・良好 ②鈍 い橙 ③細砂混る
51-12 43-12	羽 釜?	底部	—×7.0 ×(6.2)	竈	体部直線的に外傾。外面撫で。底部平底で篋削り。内面撫で。	①酸化・良好 ②鈍 い黄橙 ③やや密
51-13 43-13	羽 釜?	底部	—×8.2 ×(5.3)	竈	体部直線的に外傾。外面斜位篋撫で。底部平底で篋削り。内面撫で。	①良 ②鈍い黄橙 ③密
51-14 43-14	瓦 丸瓦		厚1.7	竈	凹面細布目。凸面縄目と篋調整。側面篋削り。	①やや軟 ②灰白 ③やや密
51-15 43-15	瓦 平瓦		厚2.3	埋土	凹面布目。凸面撫で。側面篋削り。	①酸化・軟 ②鈍い 黄橙 ③密・小石混

M18号住居跡 (Fig. 52~55・PL. 7、44)

M区第3台地の東端に位置し、73~75M23~25の範囲にある。台地縁辺部にあるため被覆土が貧しい。周辺は、当遺跡の住居跡に付設される竈に多く用いられている凝灰岩の加工材の採掘坑群が著しく、当跡のかなりの部分にもその痕跡が及んでいる。また北側ではM1号掘立柱建物跡と重複している。M1号掘立柱建物跡との新旧は判然としないが採掘坑群とはこれより古い時期の所産と考えられる。なお西壁線は検出されず全体の範囲は不明である。

平面形は東壁線がやや脹らみ方形を呈すると考えられ、南北長は3.7mを測り、東西は約2.5mの範囲まで確認されている。東西軸方位はおおよそN-73°-Eを示す。壁線は削平によってほとんど痕跡程度であるが最も遺存の良好な箇所では壁高約30cmを測る。床面は採掘坑による凹凸が多いものの凝灰岩質層を基盤にしていると考えられる。南壁線に平行する深い落ち込み線は当跡に付随するものではなく別遺構と考えられる。

竈は東壁の南側に偏って付設されるが東壁線には直交せず、竈軸は約16°南へ振れN-16°-Eを示す。袖部には構築材がみられず、燃焼部右側壁に須恵器壘片が沿わせた状態で検出されており補強材の可能性もある。僅かに窪む燃焼部から緩い傾斜で煙道部が延びる。煙道部は天井が残り、先端には煙出し孔が形成される。燃焼部幅50cm・奥行き55cm、煙道部長さ70cm、煙出し孔径20cmを測る。

出土遺物は竈内に多く検出され、内黒土器・灰釉陶器皿・椀・羽釜・土釜などがある。

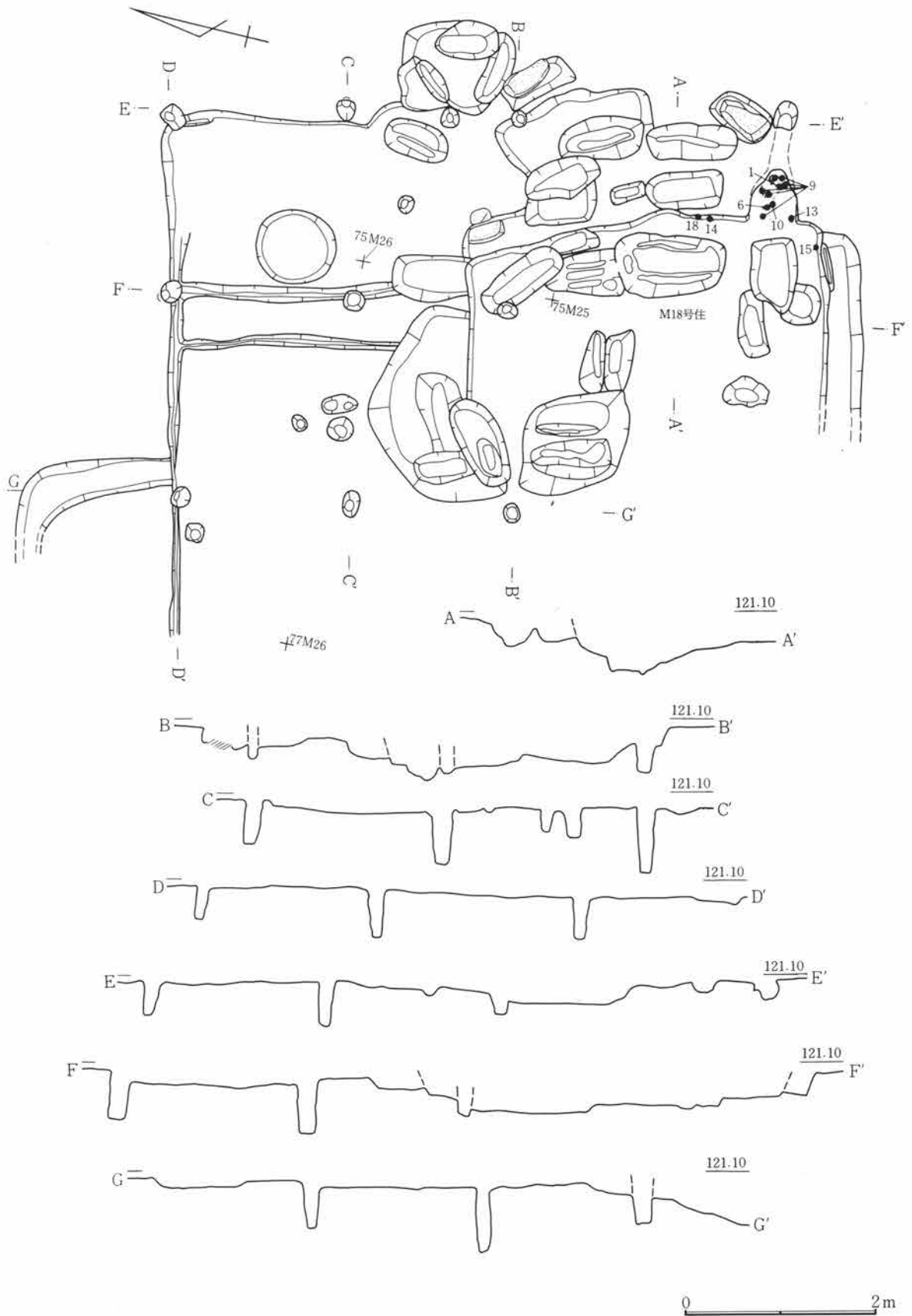
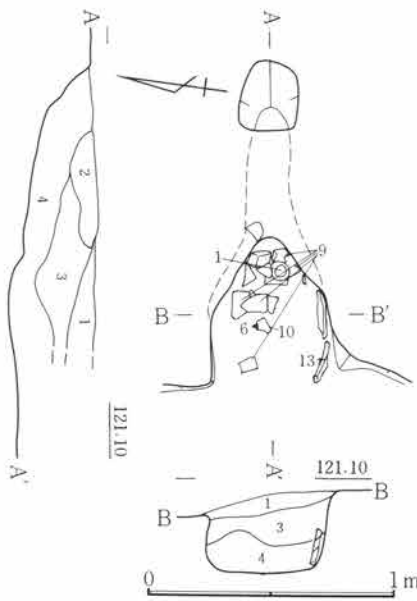


Fig. 52 M18号住居跡・M1号掘立柱建物跡・竈構築材採掘坑



M18号住居跡竈

- 1 黒色土 C軽石・焼土粒少量含む
- 2 焼土 (煙道部天井)
- 3 黒色土 焼土塊・C軽石・Loam 塊を含む
- 4 黒色土 焼土粒・炭化粒含む

Fig. 53 M18号住居跡竈

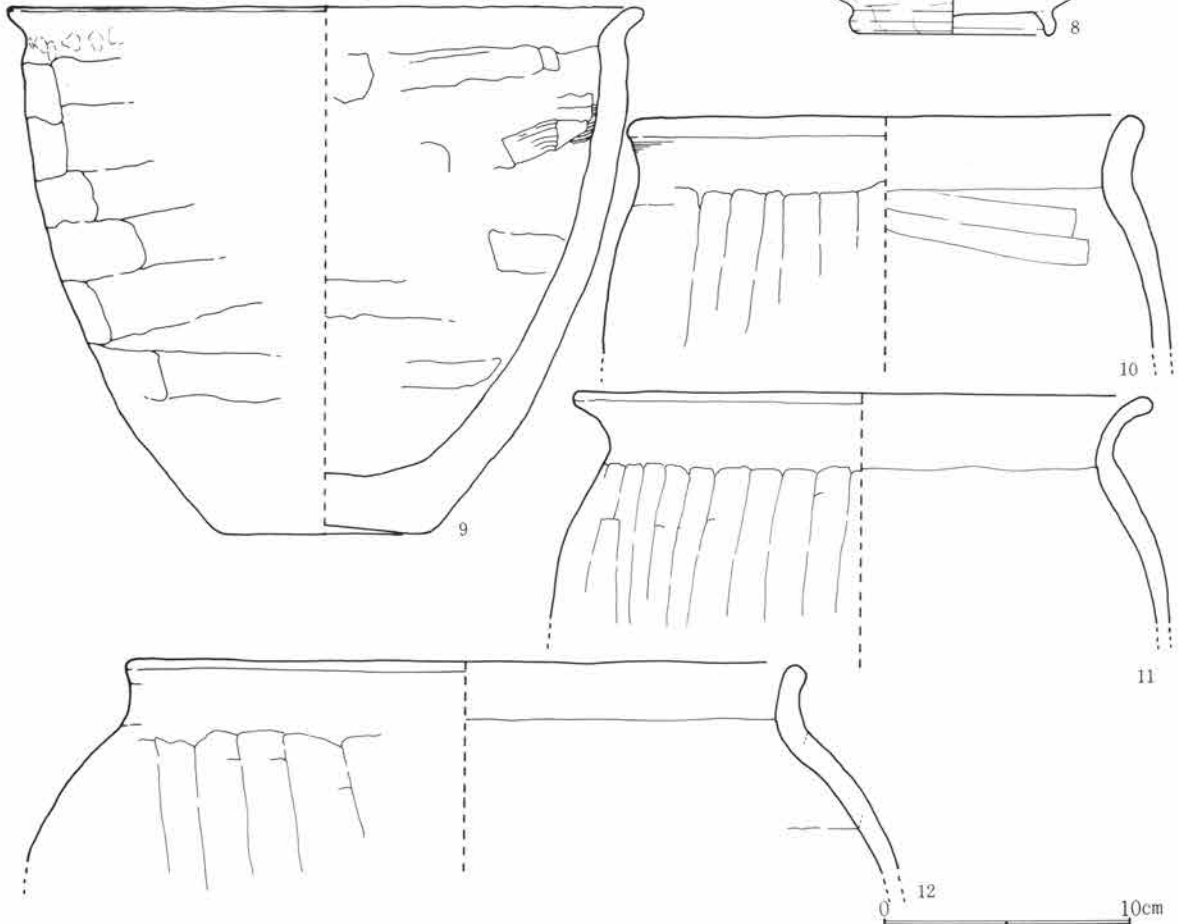
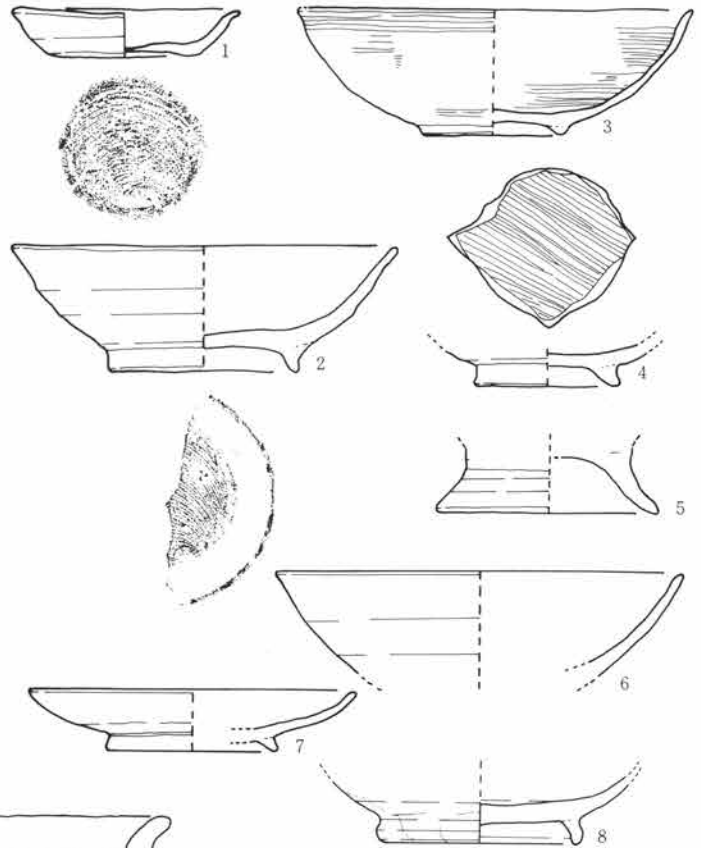


Fig. 54 M18号住居跡出土遺物(1)

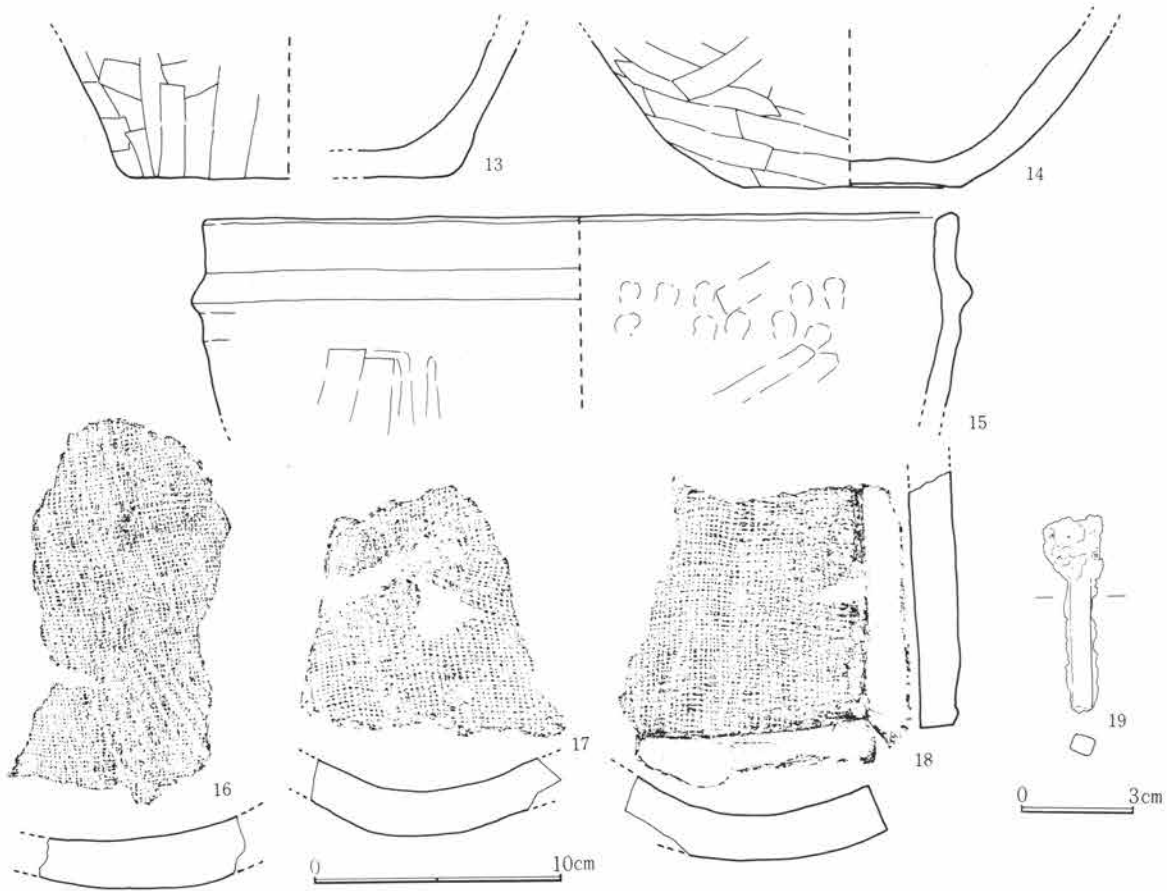


Fig. 55 M18号住居跡出土遺物(2)

M18号住居跡遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
54-1 44-1	須恵器 杯	完形	9.0×6.0 ×1.9	竈	体部中で緩くびれ口縁部僅かに外反。底部上底気味で中央極めて薄い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②鈍い橙 ③小石混る
54-2 44-2	須恵器 椀	1/2	15.3×7.8 ×5.0	土坑	体部中で緩く丸味もちやや偏平。口唇部丸い。付高台。体部轆轤目強い。右回転糸切り。	①還元 ②灰白 ③ 黒色粒・白色粒混る
54-3 44-3	内黒土器 椀	1/2	15.8×5.6 ×5.0	埋土	器肉薄い。体部丸く内湾して大きく開く。口縁部外反して開く。口唇部内面に弱い凹線。低い付高台。内外面黒色処理。内面横・部分的に斜方向篋磨き。外面横篋磨き。	①良好 ②黒色 ③ 密・輝性細粒混る
54-4 44-4	内黒土器 椀	底部	—×5.8 ×(1.3)	+14	付高台、端部丸くハの字状に開く。轆轤成形。内面一方向篋磨き。	①酸化気味 ②浅黄 橙 ③砂混る
54-5 44-5	須恵器 椀	台部	—×8.8 ×(2.5)	埋土	足高高台、外反して大きく開く。轆轤成形。	①酸化 ②橙 ③砂混る
54-6 44-6	灰釉陶器 椀	1/2底部 欠損	16.3×— ×(4.1)	+10	体部張りをもって大きく外傾。口縁部僅かに外反。口唇部細り丸い。内外面施釉。腰部回転篋削り。	①軟 ②灰白 ③やや粗
54-7 44-7	灰釉陶器 皿	1/4	13.0×6.8 ×2.4	埋土	体部内湾気味に開く。口唇部細る。付高台、低くハの字状に開く。体部内外面施釉。体部上位まで回転篋削り。	①軟 ②灰白 ③やや粗
54-8 44-8	灰釉陶器 椀	上半欠 損	—×8.2 ×2.7	+18	器肉厚い。腰部丸く張る。面取り弱い三日月高台。漬け掛け施釉。腰部・底部回転篋削り。畳付けの摩滅著しい。	①やや軟 ②灰白 ③やや粗
54-9 44-9	土師器 土釜	1/2	25.2×7.9 ×20.8	竈・+20 竈内埋土	底部極めて厚く全体に肥厚。底部中央やや盛り上がる。体部緩く膨らみ外傾。口縁部ややくびれた後強く外反。口唇部丸い。内面横位篋撫で。外面横位篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・白色粒混る
54-10 44-10	土師器 土釜	上半部 破片	20.6×—×(9.3) 胴径22.6	埋土	胴部丸味をもつ。口縁部肥厚し緩く外反。口唇部丸い。胴部縦篋削り。口縁部横撫で。内面篋撫で。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや粗
54-11 44-11	土師器 土釜	上半部 破片	23×—×(9.0) 胴径24.6	竈	胴部上位で緩やかに張る。口縁部強く外反。口唇部丸い。外面頸部から胴部縦位篋削り。口縁部横撫で。内面撫で。	①酸化 ②橙 ③やや粗
54-12 44-12	土師器 土釜	上半部 破片	27×—×(8.0) 胴径34.4	埋土	胴部丸味をもつ。口縁部肥厚し緩く外反。口唇部丸い。胴縦篋削り。口縁部横撫で。内面横篋撫で。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや粗

第2章 遺構と遺物

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
55-13 44-13	土師器 土釜	底部破片	—×13.0 ×(5.3)	+5	胴部直線的に外傾して立ち上がる。内面不定方向篋削り。内面撫で。	①酸化・軟 ②鈍い 橙 ③白色粒混る
55-14 44-14	土師器 土釜	底部	—×8.8 ×(6.0)	+9	底部やや薄く胴部肥厚し丸味をもつ。底部篋調整。腰部斜位篋削り。内面横位指撫で・指頭痕。	①酸化・軟 ②鈍い 橙 ③粗・小石混る
55-15 44-15	羽釜	口縁部	30×— (7.8)口径31.0	+25	胴部張りなく口縁部僅かに内傾。罅部低く鈍い。胴部縦位篋削り。内面指頭痕。斜位篋撫で。	①酸化気味 ②鈍い 橙 ③粗
55-16 44-16	瓦 平瓦		厚2.0	埋土	凹面布目。凸面篋調整。	①良好 ②灰 ③やや粗
55-17 44-17	瓦 平瓦	小片	厚1.8	埋土	凹面布目。凸面篋調整。18と同一か。	①酸化・良好 ②橙 ③縞状・白色粒混る
55-18 44-18	瓦 平瓦		厚1.7	竈	凹面布目。凸面篋調整。側面篋調整。17と同一か。	①酸化・良好 ②橙 ③縞状・白色粒混る
55-19 44-19	鉄器 角釘?	端部欠損	長(5.2) 幅0.5	埋土	頭部形状折頭式の角釘か。	

M21号住居跡 (Fig. 56、57、61・PL. 7、45)

M区第3台地のほぼ中央に位置し、79～81M26～28の範囲にある。南西部隅でM34号・M37号住居跡と重複しており、新旧関係はM34号より旧く、M37号住居跡より新しい時期の所産である。

平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈するが、脹らみ気味の壁線をなし隅丸となる。東西長約3.3m・南北長4.15mを測り、東西軸方位はN-80°-Eを示す。壁高は約15cmで、床面はほぼ平坦をなす。北壁の一部から西壁にかけて幅10cm・深さ5cm程度の壁下溝が巡る。貯蔵穴は南西部隅に検出され、径90×65cm・深さ約30cmの楕円形を呈する。北西部隅には薄い焼土層の散布が見られるが壁際より住居内に向かって流れ込む状況である。

竈は東壁のやや南に偏って付設され、半円形で幅広に掘り込まれる。袖材を埋した Pit は右袖では壁線に、左袖では壁線より僅かに外の位置に検出されている。また燃焼部中央には支脚材を据えた小穴がある。燃焼部前面は浅い窪みをなし少量の炭化粒が混じる。袖材埋設痕内法45cm、燃焼部奥行き65cmを測る。

出土遺物は少なく、竈内に甕類の破片が検出された他床面からは鉄器2点が出土している。

M34号住居跡 (Fig. 56、58、62・PL. 7、45)

M区第3台地のほぼ中央部に位置し、81～83M25～27の範囲にある。住居南半でM21号・M35号・M37号住居跡と各々重複している。新旧関係は、M21号・M37号住居跡より新しくM35号住居跡より古い時期の所産である。

平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈するが、東・西壁線は緩く波うち、南壁線は僅かに脹らむ。東西長約3.4m・南北長約4.9mを測り、東西軸方位はおおよそN-76°-Eを示す。壁高は浅く約12cmを測る。床面はほぼ平坦をなすが踏み締まりは総じて弱い。また南西部は、当跡よりやや深いM35号住居跡によって消失している。壁下の溝や貯蔵穴などの諸施設は検出されていない。

竈は東壁にあり大きく南に偏って付設される。半楕円形に掘り込まれ、袖部の埋設や痕跡は検出されなかった。竈手前から浅い窪みをなし、燃焼部を形成している。平面的には先端部の変化は明瞭でないものの、底面は僅かな段をなし煙出し部に相当するものと思われる。焚口部幅70cm・全奥行き90cmを測る。

出土遺物は少なく、灰釉陶器の皿・碗の2点があり、いずれも見込み部に朱痕があり摩滅が著しく硯に転用されたものと考えられる。

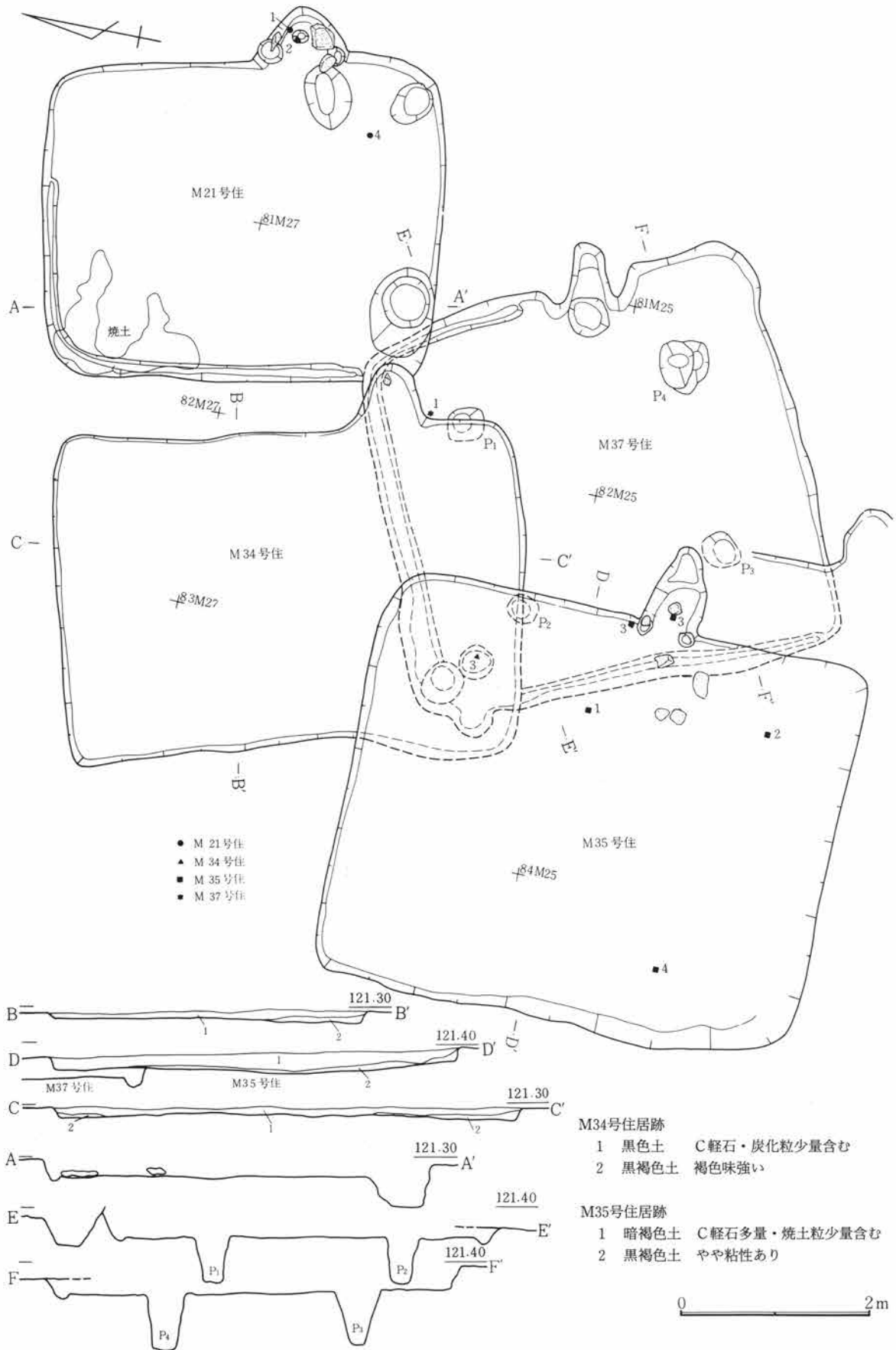
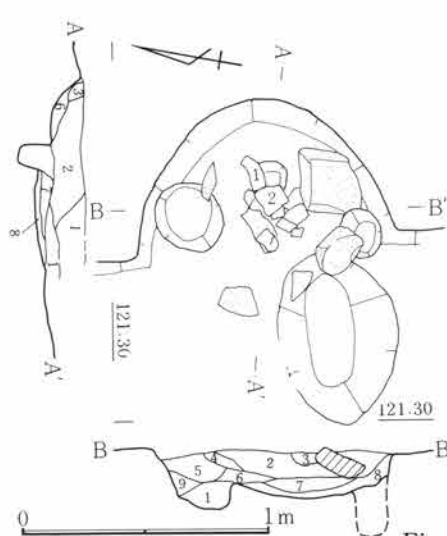
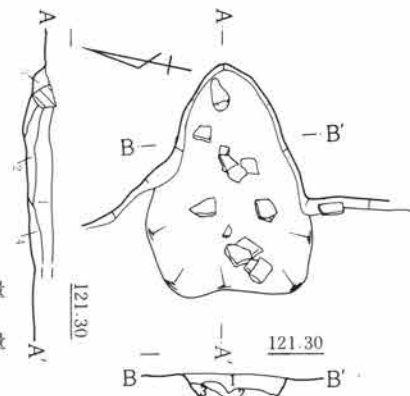


Fig. 56 M21号・M34号・M35号・M37号住居跡



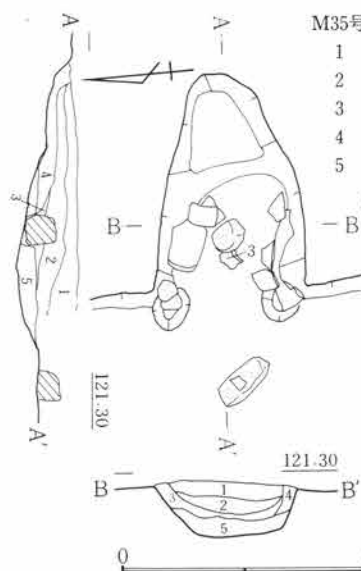
- M21号住居跡竈
- 1 暗褐色土
 - 2 暗褐色土 焼土塊含む
 - 3 焼土
 - 4 暗褐色土 C軽石含む
 - 5 黒色土 C軽石・焼土粒少量含む
 - 6 黄色土 C軽石・焼土粒少量含む
 - 7 炭化粒層
 - 8 黄色土 黒色土塊・焼土塊含む
 - 9 黄色土 C軽石・焼土粒少量含む
 - 10 黄色土 黒色土塊を含む
 - 11 黒褐色土 C軽石・焼土粒含む

Fig. 57 M21号住居跡竈



- M34号住居跡竈
- 1 黒色土 焼土粒・炭化粒含む
 - 2 焼土層
 - 3 黒色土 Loam 粒含む
 - 4 灰層 炭化粒含む

Fig. 58 M34号住居跡竈



- M35号住居跡竈
- 1 黒色土 C軽石粒多量に含む
 - 2 黒色土 C軽石粒・炭化粒少量含む
 - 3 黒色土 焼土塊・炭化粒を含む
 - 4 焼土層
 - 5 暗褐色土 焼土・炭化粒を多量に含む

- M37号住居跡竈
- 1 黒色土 C軽石多量に含む
 - 2 黒褐色土 Loam 粒多量、焼土粒少量含む
 - 3 明褐色土 焼土粒・Loam 粒多量に含む
 - 4 黒褐色土 焼土粒・Loam 粒少量含む
 - 5 焼土
 - 6 明褐色土 焼土粒・Loam 塊多量に含む
 - 7 暗褐色土 焼土粒・Loam 粒少量含む
 - 8 明褐色土 焼土粒・Loam 粒を含む

Fig. 59 M35号住居跡竈

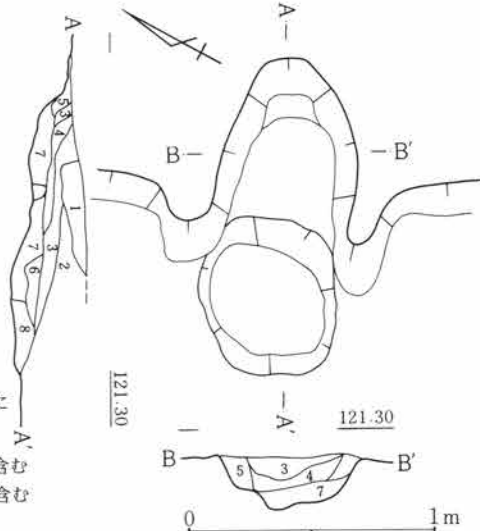


Fig. 60 M37号住居跡竈

M35号住居跡 (Fig. 56、59、63・PL. 7、45)

M区第3台地のほぼ中央部に位置し、82~84M23~25の範囲にある。東・南部にかけて、M34号・M36号・M37号住居跡と重複しており、新旧関係はいずれよりも新しい時期の所産である。

南壁線の検出がやや不鮮明であるが、南北方向に長軸をもつ比較的整った方形を呈すると思われる。東西長約4.35m・南北長約5.1mを測り、東西軸方位はおおよそN-90°-Eを示す。壁高は15~20cmで床面は中央部が緩く窪み踏み踏み締まりは良好であるが、深い掘形をもつM37号住居跡と重複する北東部はやや軟弱である。壁下の溝・貯蔵穴などの諸施設は検出されていない。

竈は東壁のほぼ中央に付設され長楕円形に掘り込まれ、床面より緩く窪む火床面より極めて小さい段差をもって緩い傾斜で延びる煙道部に至る。煙道部は幅広な形状を呈す。袖部は壁線上にあり、左袖には凝灰岩質の加工材が埋設されその基部が残る。また燃焼部には同質の支脚が埋設されるが、明瞭な焼土層を伴う火床は残らず掘形は土粒や炭化粒の混在層となっていた。袖部内法約30cm、燃焼部奥行き80cm、煙道部長さ35cmを測る。

出土遺物は少なく、竈内に甕類が、また床面上より足高高台椀などが検出されている。

M37号住居跡 (Fig. 56、60、64・PL. 6、46)

M区第3台地のほぼ中央部に位置し、80~83M23~26の範囲にある。M21号・M34号・M35号・M36号住居跡と重複しており、いずれよりも古い時期の所産である。当跡の北・西部にかけての重複が顕著であるが、掘形が深く遺存は比較的良好である。

平面形は東西軸・南北軸ともほぼ同規模で、南東部隅と北西部隅が僅かに脹らむものの整った方形を呈する。東西長4.4m・南北長4.45mを測り、東西軸方位はおよそN-65°-Eを示す。壁高は最も良好な部分で約35cmを測る。床面はほぼ平坦をなし、竈前面から中央部にかけて踏み締まりは良好である。東壁北半から北壁・西壁にかけて幅10~20cm・深さ10cm程度の壁下の溝が巡る。柱穴はP₁~P₄が検出されている。P₁・P₂は上径35cm・下径20cm・深さ50cm、P₃は上径40cm・下径20×30cm・深さ55cm、P₄は掘形が2重になり内側は上径45×50cm・下径15×20cm・深さ65cm、外側は深さ50cmを測る。柱間は東西方向のP₁・P₂とP₃・P₄は2m、南北方向のP₁・P₄とP₂・P₃はやや長く2.3mである。

竈は東壁にあり僅かに南に偏って付設される。袖部には石などの構築材はみられず掘形を残し住居内に約35cm~45cm張り出す形態である。火床部分は床面より若干低く窪み状を呈するが焼土層は残存しない。燃烧部の先端には小さな段が観察され、煙道部を形成すると考えられる。袖部内法45cm、火床部より燃烧部の奥行き約1m、煙道部は短く約20cmを測る。貯蔵穴は検出されていない。

出土遺物は少量で、須恵器蓋・土師器杯がある。

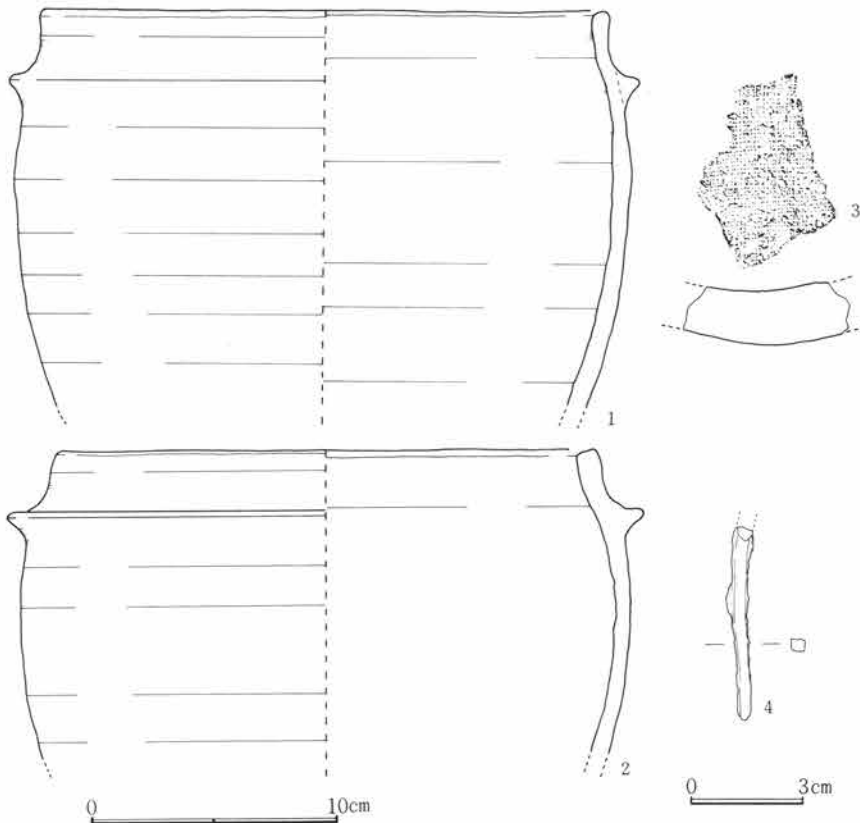


Fig. 61 M21号住居跡出土遺物

第2章 遺構と遺物

M21号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
61-1 45-1	羽釜	下半欠損	22.4×— ×(15.7)	竈	胴部やや張りをもち口縁部は内傾気味に直立。口唇部丸味のある矩形。上端面は水平。鏝略三角。口縁部・胴部回転撫で調整。胴部に縦篋撫であり。	①酸化・軟 ②鈍い橙 ③やや密
61-2 45-2	羽釜	下半欠損	21.4×— ×(12.1)	竈	1と同一個体か。	①酸化気味 ②鈍い橙 ③やや密
61-3 45-3	瓦 平瓦		厚2.1	埋土	凹面布目。凸面弱い篋撫で。	①酸化気味 ②灰白 ③やや密
61-4 45-4	鉄器 角釘?	頭部欠損	長(5.3) 幅(0.3)	+1	頭部形状不明。角釘か。	

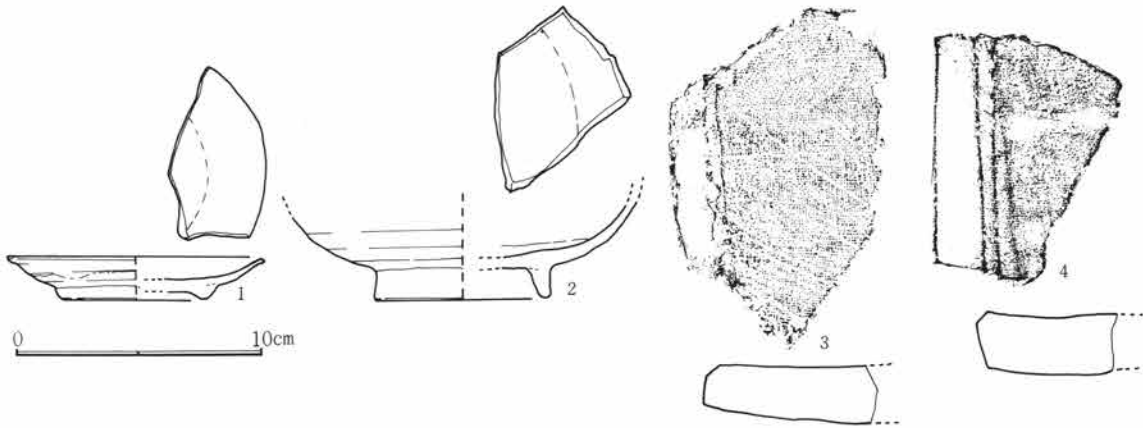


Fig. 62 M34号住居跡出土遺物

M34号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
62-1 45-1	灰釉陶器 皿・転用硯	片	10.2×6.0 ×1.6	埋土	底部肥厚。体部内湾気味に開き口縁部外反。内外面施釉。見込部朱痕。転用硯。摩滅著しい。付高台低く断面丸い。	①良好・軟 ②灰白 ③やや粗
62-2 45-2	灰釉陶器 椀・転用硯	底部片	—×7.0 ×(3.6)	埋土	腰部丸く強く張り外面轆轤目強い。付高台、高く直線的で僅かに開く。内外面施釉。見込部朱痕摩滅著しく転用硯。	①良好 ②灰白 ③やや密
62-3 45-3	瓦 平瓦	小片	厚2.3	+7	凹面布目。凸面篋撫で調整。	①良好 ②褐灰 ③粗・白色小石多い
62-4 45-4	瓦 平瓦	小片	厚2.3	竈	凹面布目。側面・側縁篋調整。	①酸化気味・軟 ②淡黄 ③やや密

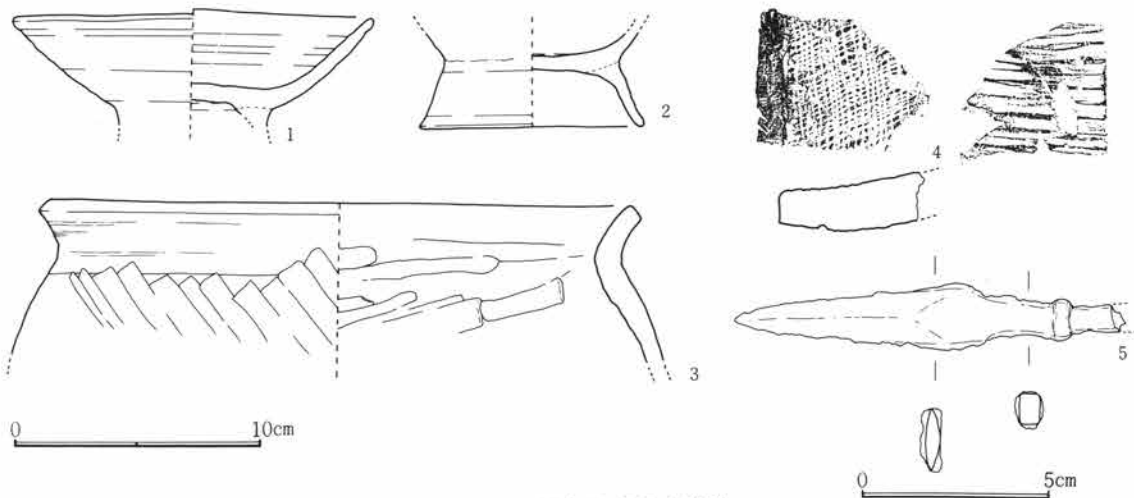


Fig. 63 M35号住居跡出土遺物

M35号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
63-1 45-1	須恵器 椀	高台部 欠損	14.4× ×(4.5)	+8	体部やや内湾気味に開き口唇部丸まる。見込部高まる。付高台、器肉厚く高くなるか。轆轤成形。右回転。	①酸化・軟 ②橙 ③やや粗・黒色粒混
63-2 45-2	須恵器 椀	高台部	—×8.9 ×(3.7)	+10	付高台、高くハの字状に開く。器肉薄い。内面底部に篋無で。轆轤成形。右回転。	①軟 ②灰白 ③粗砂混る
63-3 45-3	土師器 甕	口縁部 ¼	24.0× ×(6.2)	竈 +2	肩部丸味をもつ。口縁部強く外傾。口唇部断面矩形。外面口縁部横無で。体部斜位篋削り。内面横位篋削り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③粗・白色粒多い
63-4 45-4	瓦 平瓦		厚1.9	+7	凹面布目。凸面平行叩き目。側面篋削り。	①良好 ②褐灰 ③ やや密・縞状
63-5 45-5	鉄器 鉄鉄?	柄部欠 損	長(10.5) 刃幅1.3	埋土	鎌の可能性あり。	

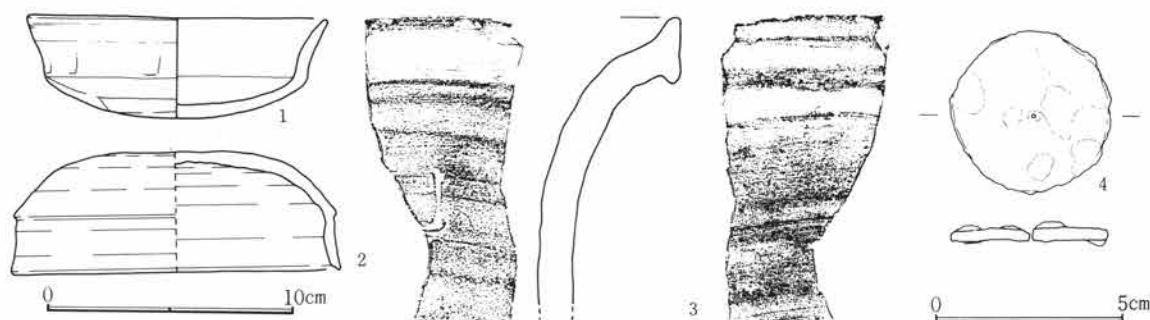


Fig. 64 M37号住居跡出土遺物

M37号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
64-1 46-1	土師器 杯	¼	12.0× ×4.0	床直	浅い丸底から口縁部外反して開く。口縁部・内面横無で。底部不定方向篋削り。	①良好 ②橙 ③緻密・軟質
64-2 46-2	須恵器 蓋	¼	13.1× ×4.8	埋土	天井部僅かに平坦をなし体部深い。口縁部外反気味に立ち口唇部内面に段をもつ。天井部右回転篋削り。	①やや軟 ②灰 ③粗砂混る
64-3 46-3	須恵器 甕	口縁部 小片		埋土	頸部内外面横位篋無で。口唇部垂直に立ち上がる。	①還元 ②灰 ③粗砂混る
64-4 46-4	鉄器 紡錘車		径4.4 厚0.3	埋土	紡輪部。中央に小孔。	

M22号住居跡 (Fig. 65、66・PL. 8、46)

M区第3台地の北西部に位置し、87・88M28～30の範囲にある。西半は調査区域外に入り全体は検出されていない。北側でM29号住居跡と重複しているが、これよりも新しい時期の所産である。

平面形は比較的整った方形を呈すると考えられる。南北長3.3m、東西は1.7mの範囲まで検出できた。東西軸方位はおよそN-85°-Eを示す。壁高は検出面で約35cmを測る。床面はほぼ平坦をなすが竈周辺を除きやや軟弱である。壁下の溝や貯蔵穴などの諸施設は検出されていない。

竈は東壁にありやや南に偏って付設される。略三角形に掘り込まれた燃焼部先端には煙出し孔と考えられる凸部が付く。袖部には材の痕跡はないが、竈前面には構築材らしき凝灰岩質の加工材が散乱している。焚口部幅約50cm、燃焼部奥行き30cmを測る。

出土遺物は少量である。

M29号住居跡 (Fig. 65、66・PL. 8、46)

M区第3台地の北西部に位置し、88M30・31の範囲にある。当跡の西側はそのほとんどが調査区域外に入

第2章 遺構と遺物

り、明らかになったのは東側の僅かな部分である。またM29号住居跡より新しい時期の構築になるM22号住居跡との重複によって検出された少範囲もその南側は消失している。このため平面形状・規模などの詳細はまったく不明である。東西はおおよそ50cm、南北は2mの範囲しか確認できない。東西軸方位はおおよそN-84°-Eを示すと考えられる。壁高は約25cmを測り、床面は軟弱である。

竈は東壁に付設されるが南半はM22号住居跡との切り合いで消失しており、左袖部と燃烧部の一部が判明しただけである。袖部は石などの構築材は見られず、略三角形に残された掘形が住居内に壁線より約40cm張り出す形態である。燃烧部は長楕円形に掘り込まれ奥行き約55cmを測る。

出土遺物は少量である。

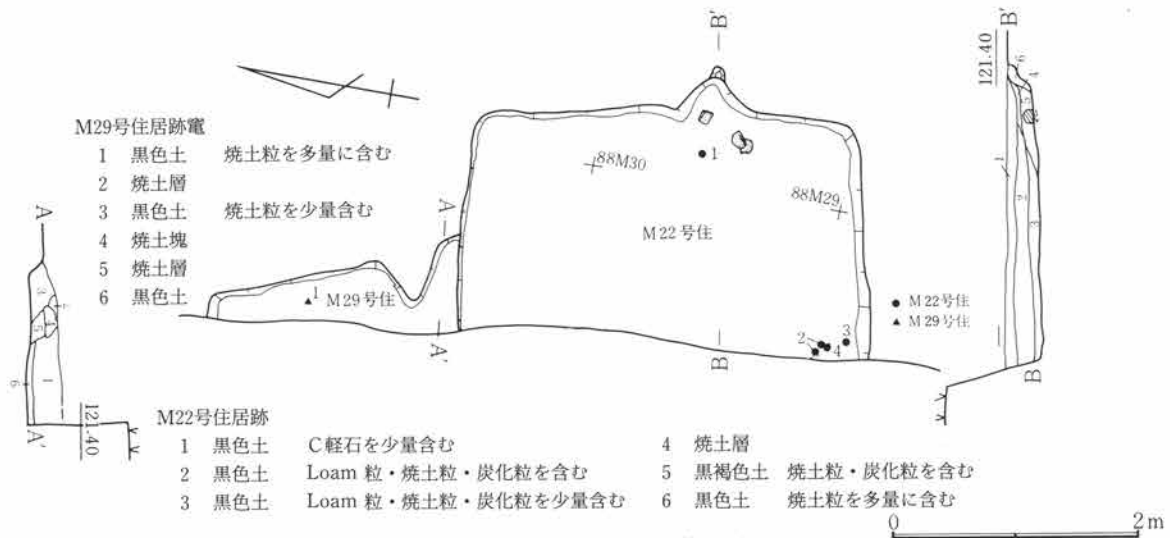


Fig. 65 M22号・M29号住居跡

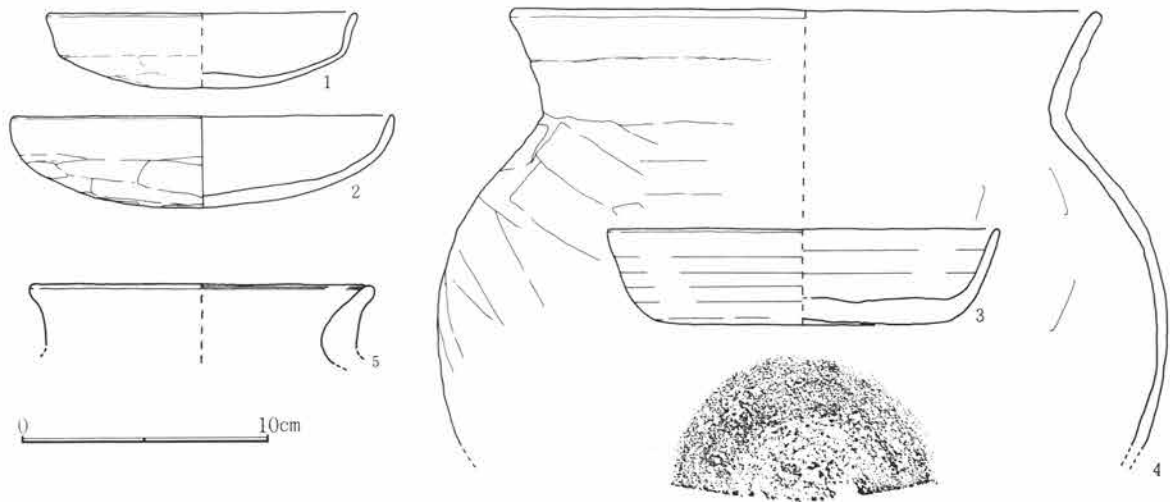


Fig. 66 M22号1~4・M29号5住居跡出土遺物

M22号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
66-1 46-1	土師器 杯	1/3	12.4× ×(3.0)	+11	底部偏平。口縁部緩く外傾して立つ。口縁部横撫で。底部 篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗
66-2 46-2	土師器 杯	ほぼ完 形	15.2× ×3.7	+1~4	底部偏平。口縁部緩く外傾して開く。口縁部横撫で。底部 篋削り。	①良好 ②鈍い赤褐 ③やや粗

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
66-3 46-3	須恵器 杯	1/2	15.6×11.6 ×3.8	+7	底部肥厚。腰部丸く底部浅く直線的に外傾。轆轤成形。回転窰切り後回転窰削り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
66-4 46-4	土師器 甕	下半欠 損	23.6×— ×(17.4)	埋土 +4	胴部強く張り球胴を呈す。口縁部は直線的でくの字状に開く。口縁部横無で。胴部横・斜位窰削り。内面窰撫で痕。	①良好 ②橙 ③やや密

M29号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
66-5 46-1	須恵器 甕	口縁部 破片	(13.7)×— ×—	+15	器肉厚く歪み多い。口縁部緩く外傾。口唇部丸い。口縁部横無で。	①良好 ②淡黄 ③ やや密

M23号住居跡 (Fig. 67~70・PL. 8、46、47)

M区第3台地の東縁にあり、やや南に偏って位置し、76~78M18~20の範囲にある。当跡西側でM60号住居跡と重複しており、これより新しい時期の所産である。また周辺は、凝灰岩質層まで比較的浅い被覆土のため凝灰岩質加工材の採掘に利用されたりしく、採掘坑や削平の痕跡も顕著で東部から南部にかけて地勢は若干低くなる。また北西部にはM1号土坑があり一部は消失している。

平面形は南北軸が僅かに長いが整った方形を呈する。東西長約2.7m・南北長約2.8mを測り、東壁線を基

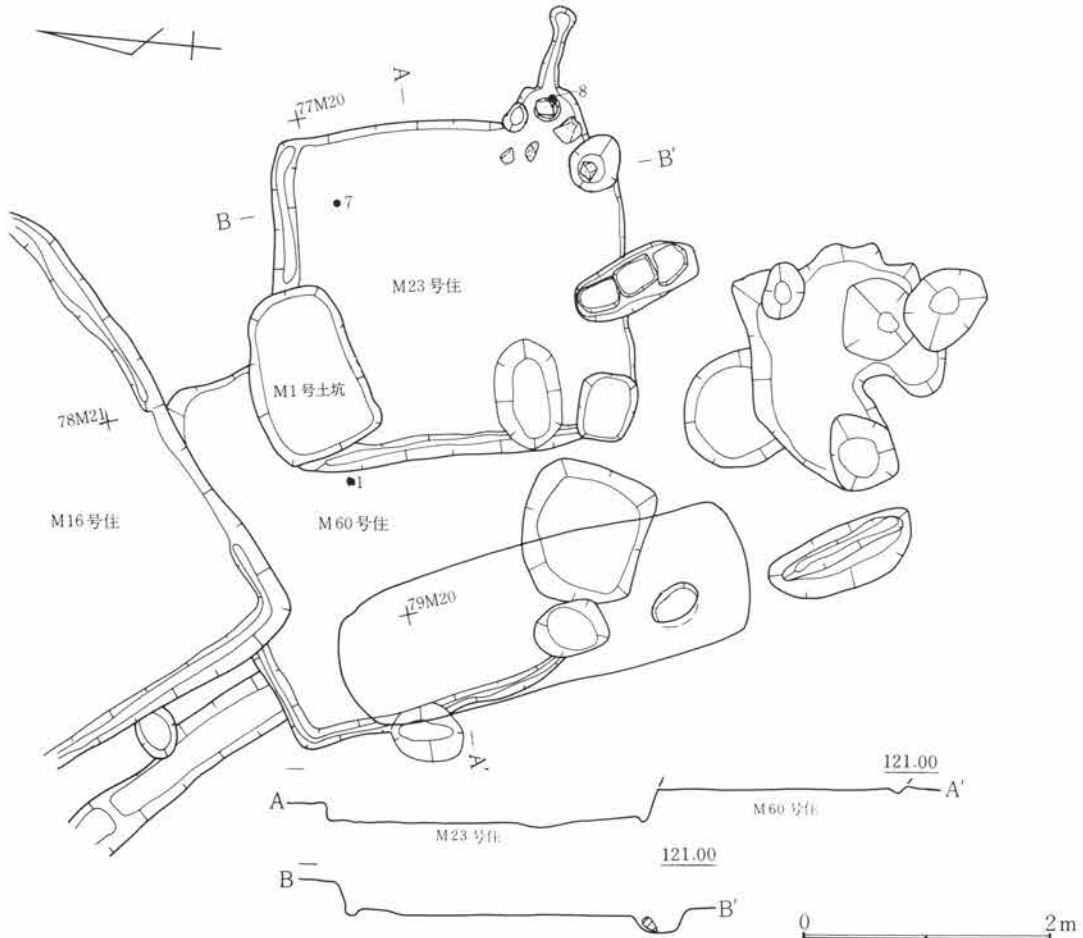


Fig. 67 M23号・M60号住居跡

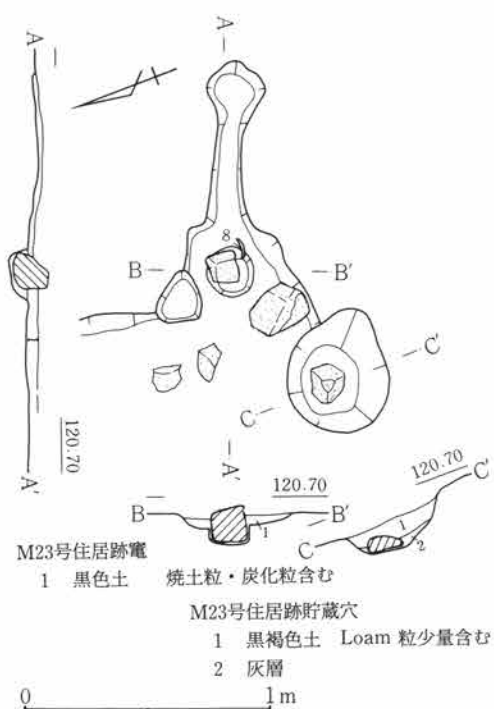


Fig. 68 M23号住居跡竈

M60号住居跡 (Fig. 67・PL. 8)

M区第3台地の東縁にあり、南に偏って位置し、およそ77~79M19・20の範囲にある。東側でM23号と、また北側ではM16号、西側ではM65号の各住居跡と重複し、前二者より旧く後者より新しい時期の所産である。周辺部はM23号住居跡と同様に凝灰岩質の加工材採掘のため削平など著しく、とくに南壁線はその検出もできなかった。また土坑類による消失範囲も多い。

平面形は方形を呈すると考えられるが詳細は不明である。東西長3.05m・南北長は約2.5mの範囲まで確認できる。遺存する壁線から想定される東西軸方位はおよそN-82°-Eを示す。壁線は立ち上がりとして確認できず北壁から西壁にかけて壁下の溝として認め得た程度である。壁下の溝は幅約15cm・深さ5cmを測る。床面は平坦をなし凝灰岩質層を基盤とするため堅緻である。竈をはじめ貯蔵穴などの諸施設については検出及び認定できない。

出土遺物は極めて少量である。

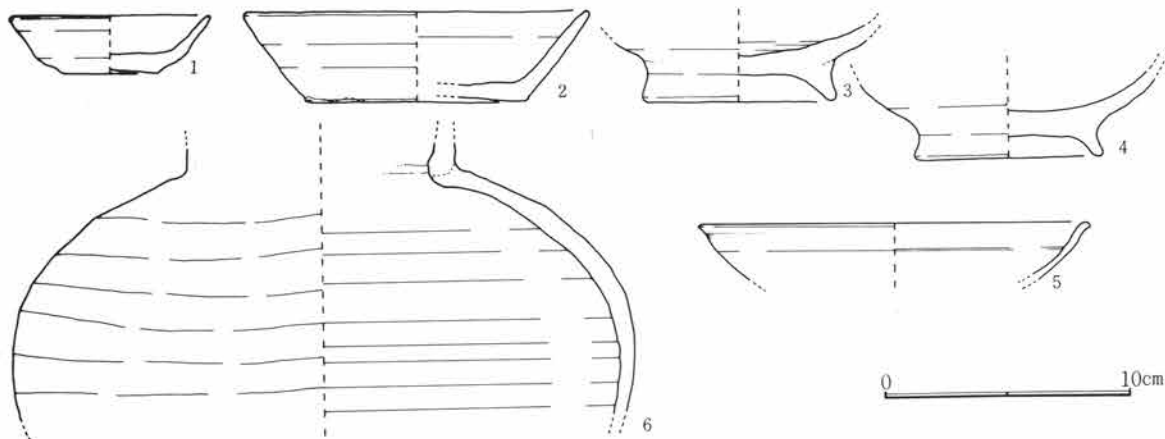


Fig. 69 M23号住居跡出土遺物(1)

軸にする東西軸方位はN-97°-Eを示す。壁高は最も遺存の良好な西壁で約35cmを測る。床面は凝灰岩質層のため堅緻で平坦をなす。北壁から西壁にかけては幅20cm程度・深さ5cmの壁下の溝が巡る。貯蔵穴は南東部にあり、壁線より外側へ突出するような位置で竈構築材であろう石材が検出されている。径40×50cm・深さ約15cmの楕円形を呈する。

竈は東壁の南端に付設され、中心軸は東壁線との直交軸からおおよそ17°南へ傾きN-114°-Eとなる。燃烧部は略方形に掘り込まれ、ほとんど段差なく長い煙道部が延びる。煙道部先端は円形に脹らみ、煙出し孔を形成する。袖部は壁線上にあり右袖部には角石が埋設され、左袖には埋設痕が検出されている。また燃烧部中央には角石の支脚が設置される。袖部内法20cm、燃烧部奥行き45cm、煙道部長さ60cm、煙出し孔径23cmを測る。

出土遺物は極めて少ない。

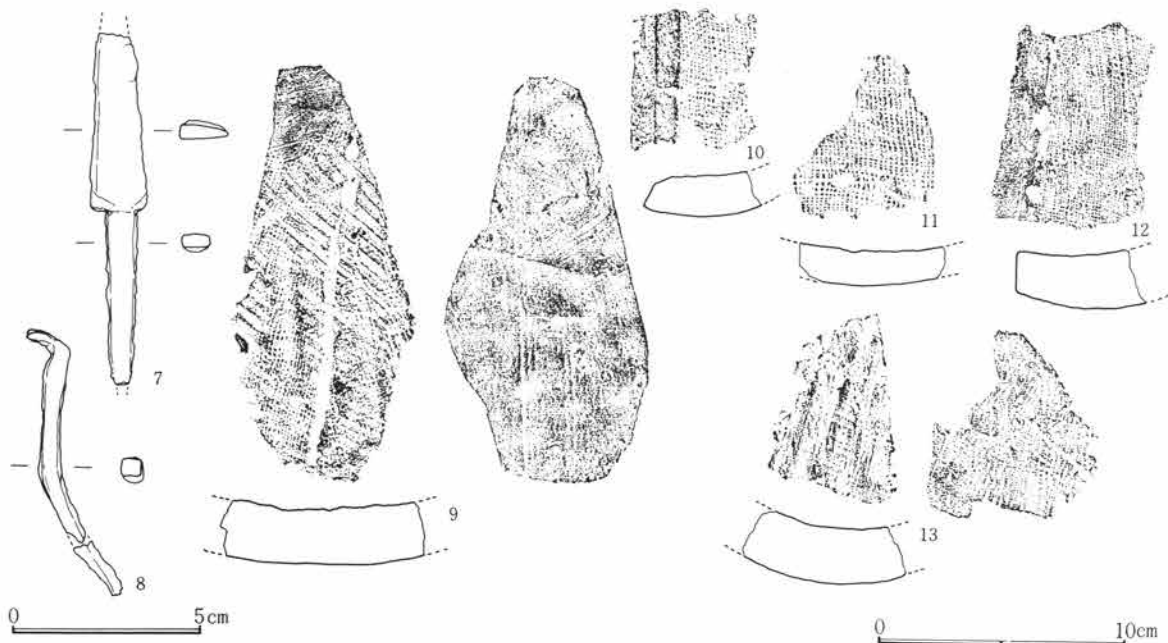


Fig. 70 M23号住居跡出土遺物(2)

M23号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
69-1 46-1	須恵器 杯	1/2	8.0×3.6 ×2.3	+16	底部やや肥厚。腰部でくびれ体部は直線的に外傾。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや粗
69-2 46-2	須恵器 杯	1/4	13.8×8.8 ×3.6	+7	体部直線的に外傾。轆轤成形。底部回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
69-3 46-3	須恵器 碗	上半欠 損	—×7.7 ×(3.0)	+6	付高台、やや高くハの字状に開き端部丸い。轆轤成形。	①酸化気味 ②灰白 ③やや粗
69-4 46-4	内黒土器 碗	口縁部 欠損	—×7.5 ×(3.3)	埋土	腰部丸く張る。付高台、ハの字状に開く。内面黒色処理及び磨き。見込部に刻線あり。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや密
69-5 46-5	灰釉陶器 碗	底部欠 損	15.6×— ×(2.3)	埋土	器内薄い。体部丸味をもち口唇部緩く外屈。施釉。	①良好 ②浅黄 ③やや密
69-6 46-6	灰釉陶器 瓶	胴部上 半	最大径24.8	+5	胴部丸く張る。頸部直立するか。胴部は肩まで回転？篋削り。外面施釉。	①良好 ②オリーブ 灰 ③やや粗
70-7 46-7	鉄器 刀子	刃端・柄 端欠損	長(9.5) 刃幅1.5	床直	棟区・刃区とも直角で茎部に続く。茎部幅0.8・厚0.3	
70-8 46-8	鉄器 角釘		長7.5 幅0.5	竈	頭部形状折頭式。	
70-9 47-9	瓦 平瓦		厚2.2	+3	凹面布目。縫目あり。凸面縄目押し後篋撫で。	①良好 ②灰 ③やや密
70-10 47-10	瓦 平瓦		厚1.6	床直	凹面やや粗い布目。凸面篋撫で。側面・側縁篋調整。	①良好 ②灰 ③やや粗
70-11 47-11	瓦 平瓦		厚1.4	+28	薄い。凹面布目。	①酸化気味・やや軟 ②灰 ③やや粗
70-12 47-12	瓦 平瓦		厚2.1	埋土	凹面布目。側面篋調整。	①良好 ②灰 ③やや粗
70-13 47-13	瓦 平瓦		厚2.2	埋土	凹面布目。凸面縄目押し後無で。	①酸化気味 ②灰白 ③密

M26号住居跡 (Fig. 71~73・PL. 8、47、48)

M区第3台地の西部やや北側に位置し、85~88M26~28の範囲にある。M27号・M39号住居跡と重複しており、両者より新しい時期の所産である。

平面形は北壁及び西壁がやや短く南北軸が長い不整隅丸方形を呈する。東西長約3.8m・南北長4.5mを測

第2章 遺構と遺物

り、東西軸方位はN-70°-Eを示す。掘形は深く、壁高45cmを測る。床面は緩く波うつが総じて踏み締まりは良好である。壁下の溝・貯蔵穴などの諸施設は検出されていない。住居跡床面の南東・南西・北西部に各々2つの小穴が穿たれ、上屋構造に関する施設の可能性もあるが、深さ10cm前後から50cmとかなりの差がある。また北側に、径1.2×1.0m・深さ20cmの楕円形土坑が検出されている。性格は不明である。

竈は東壁にあり、南に偏って付設される。燃烧部は楕円形に掘り込まれ、袖部は壁線上左右に凝灰岩質の加工材が埋設されている。また燃烧部奥の左右にも同質の加工材が袖材と対になるような位置に埋設される。袖材間内法約50cm、燃烧部奥行き75cmを測る。燃烧部奥の埋設材間内法は袖部よりも若干狭く40cmである。煙道部は検出されていない。

出土遺物は比較的少量で、散在してみられる。土師器杯・須恵器椀・蓋などがある。

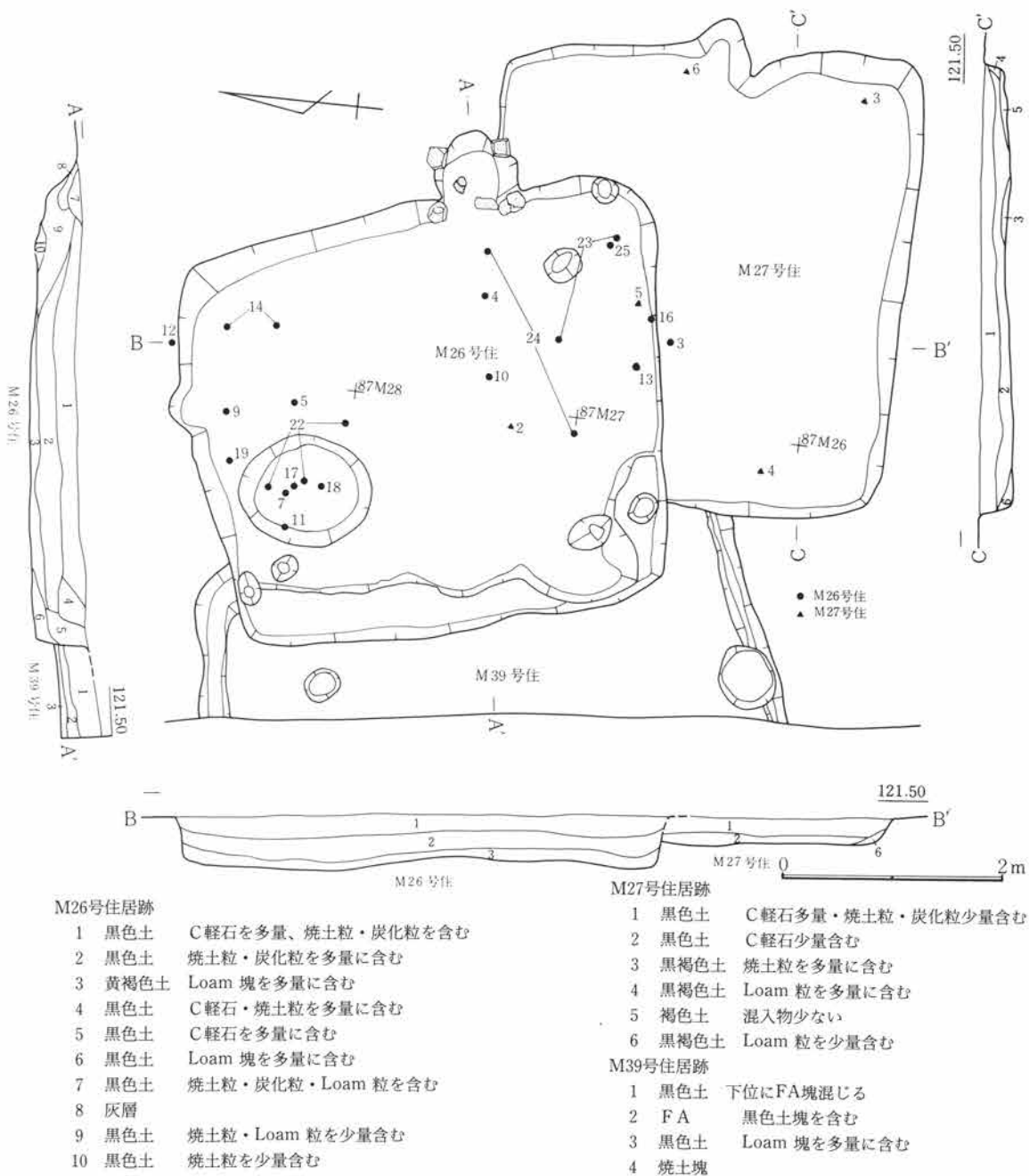


Fig. 71 M26号・M27号・M39号住居跡

M27号住居跡 (Fig. 71、74、75・PL. 8、43)

M区第3台地の西部やや北側に偏って位置し、85～87M25～27の範囲にある。M26号・M39号住居跡と重複しているがM26号住居跡より旧く、M39号住居跡より新しい時期の所産である。北西部は掘形の深いM26号住居跡によって消失している。

平面形は東西方向に長軸をもつ方形を呈すると考えられる。東西長約4.15m・南北長約3.9mを測り、東西軸方位はN-85°-Eを示す。壁高は遺存の良好な箇所で約30cmを測る。床面はほぼ平坦をなすが、踏み締まりは総体的に軟弱である。壁下の溝・貯蔵穴などの諸施設は検出されていない。

竈は東壁のほぼ中央に付設されるが、遺存は悪く竈構築材・灰などの分布もなく燃烧部内の焼土化も希薄であるため詳細は知り得ない。右袖部分は壁線が住居内に張り出し、掘形を袖部として突出させる形態をとると思われる。左袖部は痕跡も残さないが甕型土器が倒置した状態で出土しており、袖芯として用いられたと考えられる。右袖部は壁線より約40cmの長さ、また燃烧部は壁線外へ僅か30cmほど掘り込まれる。甕型土器を左袖とすれば燃烧部幅約50cm・奥行き70cmを測る。

出土遺物は少量である。

M39号住居跡 (Fig. 71・PL. 8)

M区第3台地の西部やや北側に偏って位置し、87・88M26～28の範囲である。M26号・M27号住居跡と重複しており両者より古い時期の所産である。住居跡のほとんどは西側の調査区域外に入り、また東辺はM26号・M27号住居跡によって消失しており検出部分は希少である。

平面形は壁線の状態から方形を呈すると考えられる。南北長は約5.1mを測り、東西は約2mの範囲まで確認されている。南壁線からみる東西軸方位はおよそN-68°-Eを示す。壁高は約30cmを測り、床面は検出範囲内では平坦をなす。確認された壁下には明瞭な溝が巡る。幅約15cm・深さ5cmを測る。竈など諸施設は検出されていない。

出土遺物は極めて少量である。なお埋土上層にはFAの混入がある。

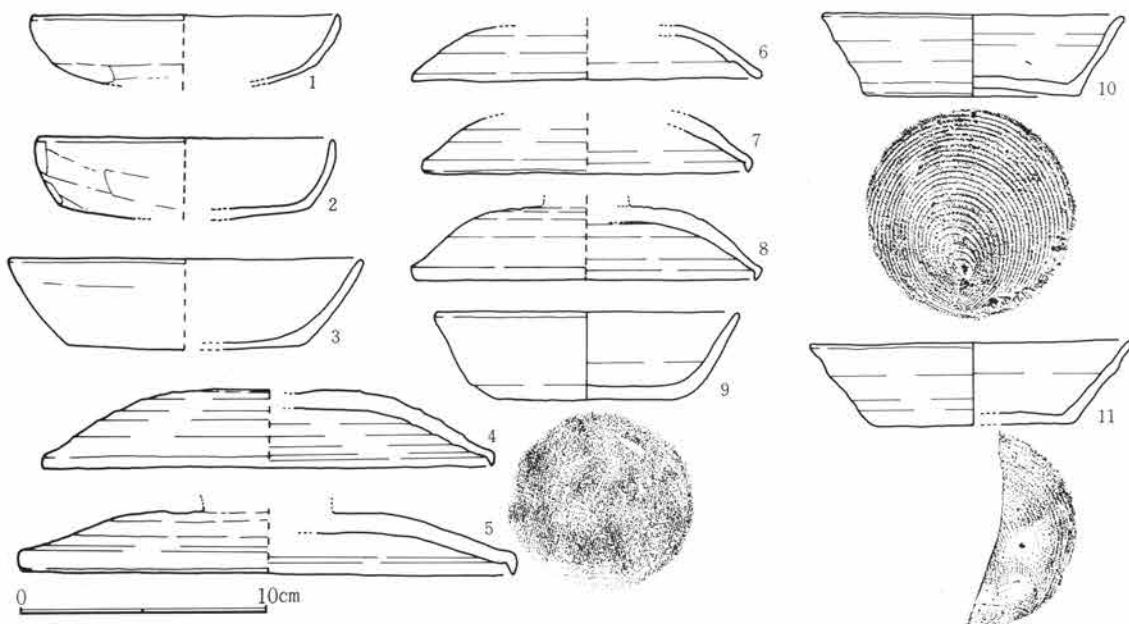


Fig. 72 M26号住居跡出土遺物(1)

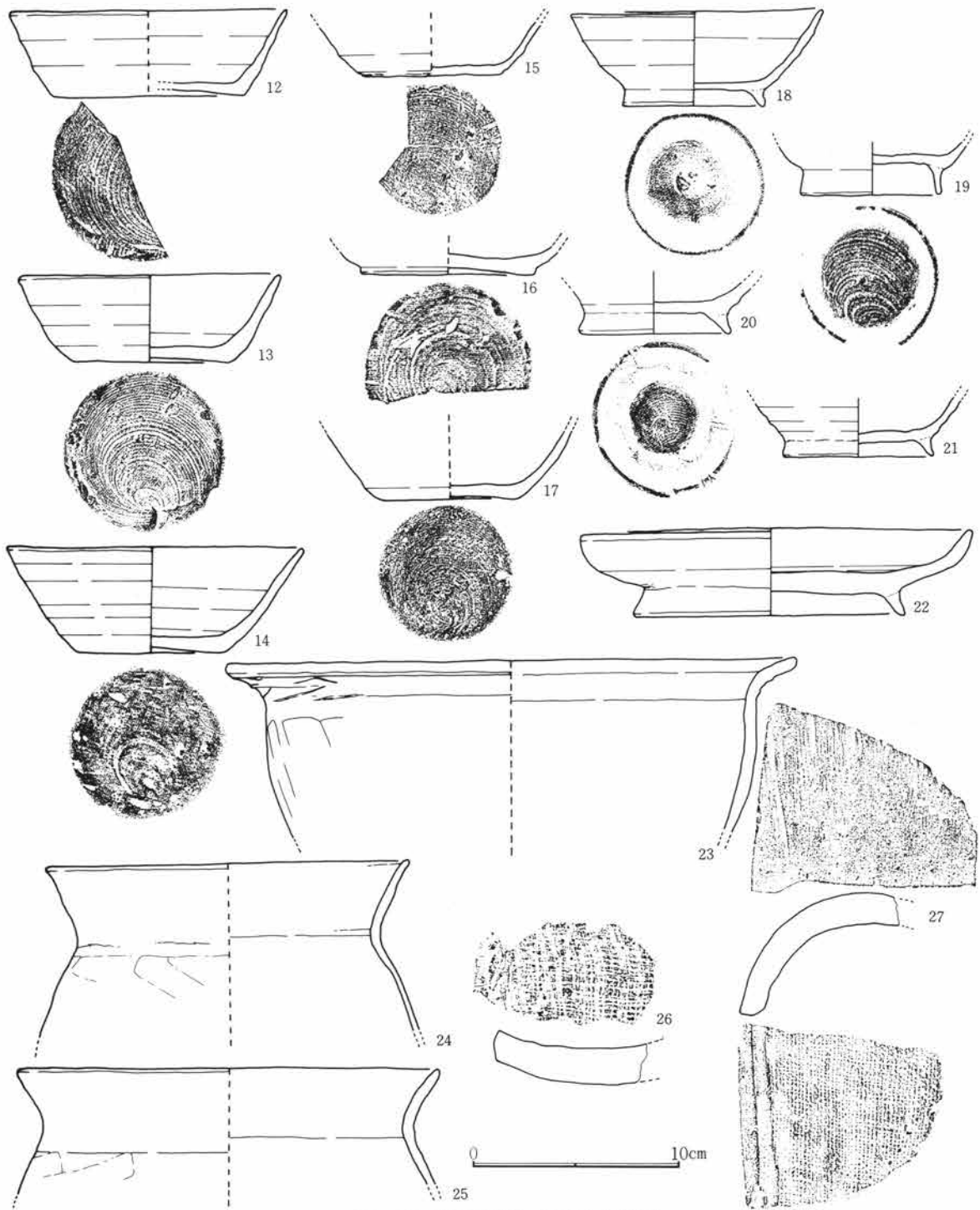


Fig. 73 M26号住居跡出土遺物(2)

M26号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
72-1 47-1	土師器 杯	1/2	12.4×— ×(2.7)	埋土	体部内湾気味に開き口縁部やや長く外屈。口唇部丸まる。口縁部横撫で。底部薄く弱い篋削り・内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗・細砂混る
72-2 47-2	土師器 杯	1/2	11.8×— ×(3.2)	竈	丸めの平底。体部直線的に外傾。口縁内傾気味に立ち口唇部細る。体・口縁部2段の横篋削り。内面黒色物付着か。	①良好 ②黄橙 ③やや密・細砂混る
72-3 47-3	土師器 杯	1/2		+4	平底。器肉薄い。体部直線的に外傾。体部幅広横篋削り。口縁部横篋削り。	①良好 ②黄橙 ③やや密・細砂混る

第1節 竪穴住居跡と出土遺物

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
72-4 47-4	須恵器 蓋	摘欠損 1/2	14.0×— ×(3.0)	+10	器肉厚い。体部やや丸味を帯びて開き口縁部短く直に折れ 端部細る。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密・細砂混る
72-5 47-5	須恵器 蓋	摘欠損 1/4	19.6×— ×(2.5)	埋土・ +9	器肉厚い。体部やや直線的に開く。口縁部直に折れ、厚味 あり。轆轤成形。天井から体部中位回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや粗 細砂混る
72-6 47-6	須恵器 蓋	摘欠損	14.0×— ×(2.1)	埋土	丸く張る天井部。口唇部丸くやや肥厚。内面に丸く低いか えり。轆轤成形。天井部底部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密・細砂混る
72-7 47-7	須恵器 蓋	摘欠損	13.0×— ×(2.3)	埋土・ Pit内	器肉やや厚い。体部やや丸味を帯びて開き口縁部内傾気味 に折れる。端部丸い。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密・粗砂混る
72-8 47-8	須恵器 蓋	摘欠損 1/2	13.6×— ×(2.9)	埋土	器肉厚い。体部丸味を帯びて開きやや深目。口縁部内傾気 味に折れる。端部やや細る。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密・細砂混る
72-9 47-9	須恵器 杯	ほぼ完 形	12.2×7.0 ×3.5	+23	腰部強いおさえて緩い段をなす。体部直線的に外傾。端部 細り丸まる。轆轤成形。底部全面回転篋調整。	①やや軟 ②灰白 ~灰 ③細砂混る
72-10 47-10	須恵器 杯	1/2	12.0×8.6 ×(3.2)	+21	腰部直立気味。体部やや丸味をもち外傾し、深い。口縁部 緩く外反。底径大。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密・小石混る
72-11 47-11	須恵器 杯	1/2	12.8×7.8 ×(3.2)	埋土・ Pit内	体部直線的で大きく開き深い。口縁部外反し丸味を帯び る。底径大。轆轤成形。右回転糸切り。自然釉かかる。	①良好 ②青灰 ③やや密・黒色粒浮
73-11 47-12	須恵器 杯	1/2	13.2×9.0 ×(4.1)	+36	体部深くやや直線的に開き深い。口唇部細く丸まる。底径 大。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密・細砂混る
73-13 47-13	須恵器 杯	ほぼ完 形	12.4×7.4 ×4.1	+15	体部深く直線的に開く。底径大。腰部やや丸味。体部外反 気味に開く。端部丸まる。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密・小石混る
73-14 47-14	須恵器 杯	ほぼ完 形	14.2×7.0 ×5.0	埋土・ +8~25	体部深く直線的に外傾。轆轤成形。右回転糸切り後底部・ 腰部篋調整。	①酸化・軟 ②橙 ③やや粗・小石混る
73-15 47-15	須恵器 杯	1/2	—×6.6 ×(2.5)	埋土	体部直線的に外傾。器肉薄い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密・細砂混る
73-16 47-16	須恵器 杯	底部1/2	—×8.2 ×(1.4)	+7	底部肥厚し腰部に丸味。底径大。轆轤成形。回転糸切り。 内外面燻し処理。	①やや軟 ②灰 ③やや密・細砂混る
73-17 47-17	須恵器 杯	1/2	—×6.0 ×(3.2)	Pit内	体部深く丸味をもち内湾して開く。轆轤成形。右回転糸切 り。	①良好 ②灰白 ③やや粗・粗砂混る
73-18 48-18	須恵器 碗	1/2	12.0×6.8 ×4.5	埋土・ Pit内	体部内湾気味に大きく開く。口縁部小さく外反。付高台、 やや高くハの字状に開く。轆轤成形。回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密・細砂混る
73-19 48-19	須恵器 碗	底部	—×6.6 ×(2.3)	+22	付高台、器肉薄い。やや高く直線的に直立。端部丸まる。 腰部張り体部直立気味。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密・細砂混る
73-20 48-20	須恵器 碗	底部	—×7.0 ×(2.1)	埋土	付高台やや高く内湾気味に開く。器肉厚い。轆轤成形。回 転糸切り後一部篋調整。	①良好 ②灰白 ③やや密・細砂混る
73-21 48-21	須恵器 碗	底部	—×7.2 ×(2.6)	埋土	体部内湾気味。付高台やや高く直線的に開く。断面丸い。 器肉薄い。轆轤成形。回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密・細砂混る
73-22 48-22	須恵器 盤	ほぼ完 形	18.8×13.0 ×4.2	埋土・ Pit内	器肉厚い。腰部水平気味に開き体部折れて僅かに外傾。体 部内湾気味で丸味をもち口唇部に至る。付高台、やや高く 外反して開く。回転篋削り後一部回転篋調整。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密・細砂混る
73-23 48-23	土師器 鉢	体部	27.2×— ×(8.3)	床直~+ 11	胴部丸味をもち口縁部弧を描いて強く開く。口唇部丸い。 口縁部横撫で。胴部縦篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗・小石混る
73-24 48-24	土師器 甕	口縁部	17.2×— ×(8.1)	+19~23	肩部張りなく口縁部緩いハの字状に外傾。口唇部丸まる。 器肉薄い。口縁部横撫で。胴部斜篋削り、内面篋撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗・細砂混る
73-25 48-25	土師器 甕	口縁部	20.0×— (5.5)	埋土 +2	口縁部やや肥厚し外反して開き口唇部は丸まる。胴部やや 脹らむか。口縁部横撫で。肩部篋削り・篋撫でか。	①良好 ②橙 ③やや粗・細砂混る
73-26 48-26	瓦 平瓦	小片	厚1.3	埋土	凹面粗い布目。凸面篋調整。側面篋調整。	①良好 ②灰 ③白色小石混る
73-27 48-27	瓦 丸瓦	小片	厚1.2	埋土	凹面布目。凸面篋削り。側面篋調整。	①やや軟 ②灰黄 ③やや粗・白色細粒

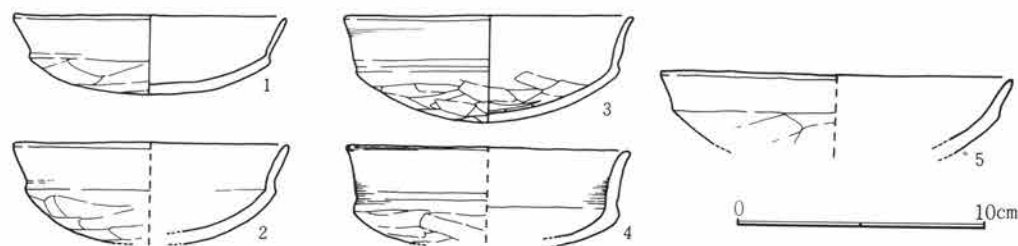


Fig. 74 M27号住居跡出土遺物(1)

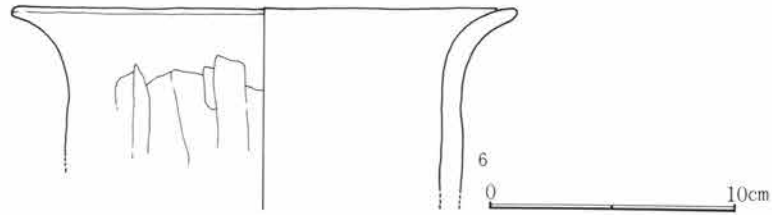


Fig. 75 M27号住居跡出土遺物(2)

M27号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
74-1 48-1	土師器 杯	3/4	11.8×- ×(3.1)	埋土	底部浅く段をなし口縁部直線的に外傾。口縁部器肉薄い。口縁部内外面横撫で。底部不定方向笕削り。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
74-2 48-2	土師器 杯	3/5	11.0×- ×(3.95)	+15	小形。底部に丸味。口縁部緩い段をなし外傾。口唇部丸まる。口縁部内外面横撫で。底部不定方向笕削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
74-3 48-3	土師器 杯	完形	11.5×- ×4.2	床直	底部丸味をもつ。受け部で強く屈し口縁部緩く外反。器肉薄い。口縁部横撫で。底部不定方向笕削り。内面笕撫で。	①良好 ②橙 ③細砂混る
74-4 48-4	土師器 杯	口縁部 3/4	(11.3)×- ×-	+25	底部浅く受け部をなす。口縁部高く外反気味に外傾。口唇部丸い。器肉厚い。底部笕削り。口縁部内外面横撫で。	①やや軟 ②橙 ③やや密
74-5 48-5	土師器 杯	小片	14.0×- ×(2.9)	+26	口縁部くびれて外反気味に開く。口唇部丸味を帯びる。口縁部横撫で。底部笕削り・撫で。	①良好 ②橙 ③やや密 細砂混る
75-6 48-6	土師器 甕	口縁部	20.1×- ×-	埋土 +3	胴部脹らみなく長胴を呈すか。口縁部は大きく外反して開く。口縁部横撫で。胴部縦方向笕削り。	①良好 ②明赤褐 ③やや密・白色粒混

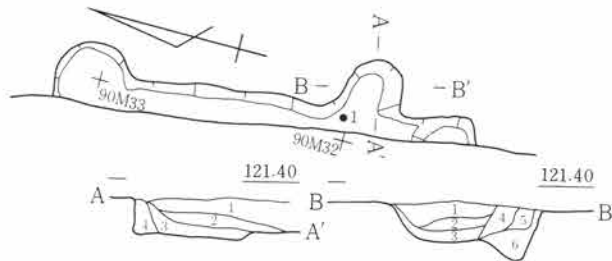
M28号住居跡 (Fig. 76、77・PL. 48)

M区第3台地の北西部に位置し、89・90M31~33の範囲にある。南でM29号住居跡と重複関係にあると思われるが新旧は不明である。西側は調査区域外に入り、検出部分は竈を含めた東壁線沿いの狭小な範囲である。

平面形・規模など詳細は不明であるがおおよそ方形を呈する。北東部隅は円形に張り出すが土坑などとの重複による可能性もある。南北長は約3.4mを測り、東西は東壁より約30cmの範囲である。壁高は約15cmで浅い掘形である。南東隅には貯蔵穴と考えられる落ち込みがある。

竈は東壁にあり南に偏って付設される。袖部の痕跡はなく、燃烧部は楕円形に掘り込まれる。燃烧部の周囲は幅広い焼土帯で囲まれ被熱による焼土化が著しい。焚口部幅40cm、燃烧部奥行き45cmを測る。

出土遺物は少量である。



M28号住居跡竈

- 1 黒色土 Loam 塊含む
- 2 焼土 焼土塊状
- 3 黒色土 焼土粒・炭化粒を少量含む
- 4 焼土
- 5 焼土
- 6 黒色土 焼土粒を少量含む



Fig. 76 M28号住居跡

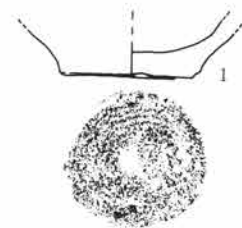


Fig. 77 M28号住居跡出土遺物

M28号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
77-1 48-1	須恵器 杯	底部の み	—×5.6 ×—	+10	腰部くびれ体部やや直線的に外傾。器内極めて厚い。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②淡黄 ③やや密

M36号住居跡 (Fig. 78、79、81、82・PL. 9、49)

M区第3台地のほぼ中央部に位置し、81～83M23・24の範囲に検出された。M35号・M37号・M53号住居跡と重複しており新旧関係はM35号・M53号住居跡より旧く、M37号住居跡より新しい時期の所産である。確認された壁線は竈を含む東壁の一部分で、南壁線・北壁線は各々掘形の深いM53号・M35号住居跡によって消失しており、西壁線は確認が遅れ削平してしまった。このため平面形・規模などは不明である。東壁線は南北方向に沿って延び、確認長は約2.7mである。壁高は約17cmを測り、床面は平坦をなすが竈前面を除き軟弱である。

竈は東壁に付設され、燃烧部は楕円形に掘り込まれる。軸方位は、ほぼ東壁に直交しておりN-90°-Eを示す。袖部は東壁線上にあり左右とも川原石を埋設する。また右袖部に架けられ焚口部の天井を構成していたと考えられる長方形の凝灰岩質加工材が、燃烧部内あるいは竈前方に崩落している。袖石間内法約40cm、燃烧部奥行き約70cmを測る。

出土遺物は竈内及びその周辺に多く検出され、灰釉陶器片・土釜・羽釜などの他、須恵器甕片の周縁に丁寧な調整を施した転用硯がある。

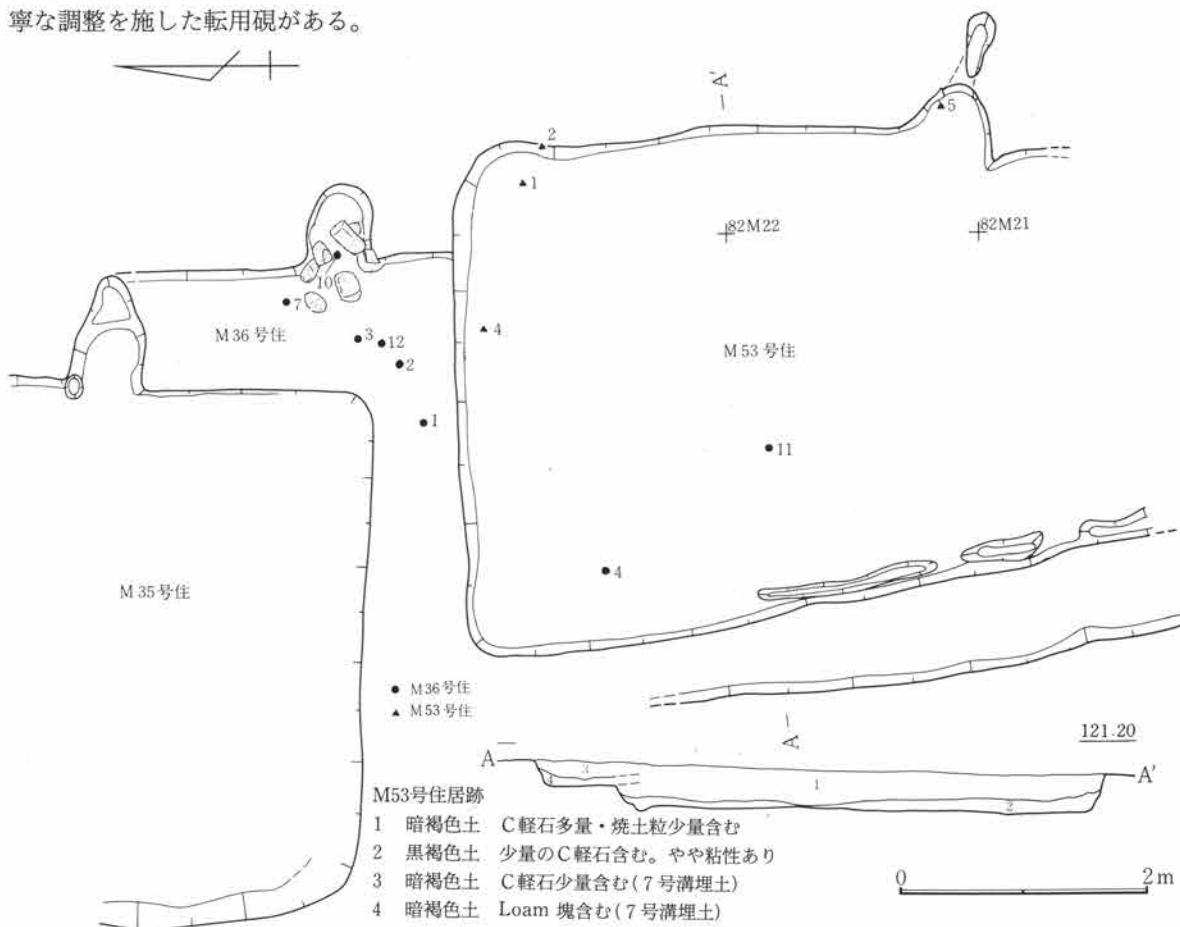
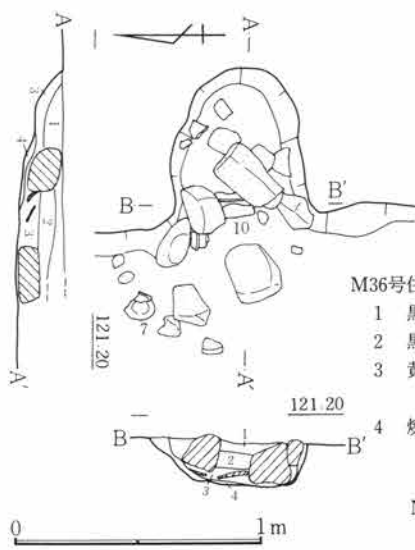


Fig. 78 M36号・M53号住居跡



- M36号住居跡竈
- 1 黒色土 C軽石含む
 - 2 黒色土 焼土粒少量含む
 - 3 黄褐色土 Loam 塊・少量の焼土粒を含む
 - 4 焼土塊層 炭化粒含む

- M53号住居跡竈
- 1 暗褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒含む
 - 2 暗褐色土 焼土塊含む
 - 3 焼土塊層
 - 4 黒褐色土 灰多量に含む
 - 5 焼土層 (天井)

Fig. 79 M36号住居跡竈

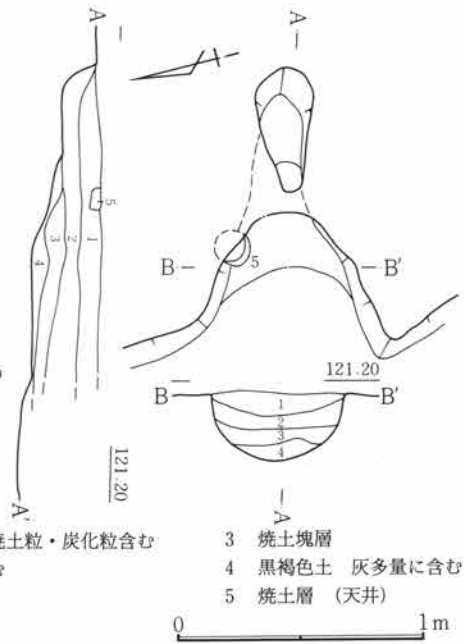


Fig. 80 M53号住居跡竈

M53号住居跡 (Fig. 78、80、83・PL. 9、49)

M区第3台地のほぼ中央部に位置し、81～83M20～23の範囲に確認される。北側でM36号、南から南東部にかけてはM54号・M55号住居跡と重複しており、これらのいずれより新しい時期の所産である。また当跡南側に検出されたM57号住居跡と重複していると思われるが、双方とも対する壁線を検出できていない。

南壁線は前述したようにその限界を確認できなかったが南北方向に長軸をもち、西壁線は北壁線に対し鋭角をもって延びるため、南壁線が短くなることが想定され平面形は不整形を呈すると考えられる。東西長約4.2m、南北は北壁より5.5mの範囲まで検出した。東西軸方位はおよそN-90°-Eを示す。壁高は約30cmを測る。床面はほぼ平坦をなすが踏み締まりは全体に軟弱である。西壁沿いの一部に断続的な壁下の溝が検出されたほかは貯蔵穴などの諸施設は確認されなかった。

竈は東壁にあり、南に偏った位置の付設と思われる。竈軸線は東壁線に直交せずおよそ16°南へ振れている。燃焼部は楕円形に掘り込まれ、緩い傾斜をもって煙道部に至る。燃焼部と煙道部のほぼ変換部に焼土化した天井が残る。焚口部幅約70cm、壁線よりの燃焼部奥行き約65cm、煙道部長さ35cm、煙出し孔径22cmを測る。出土遺物は北東部に多く散在して検出されたが、足高台碗類の小片のほか平瓦・甕類などで見るべきものは少ない。

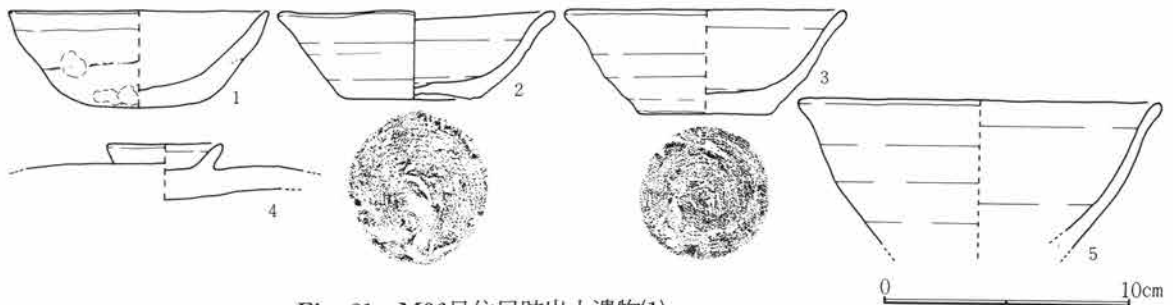


Fig. 81 M36号住居跡出土遺物(1)

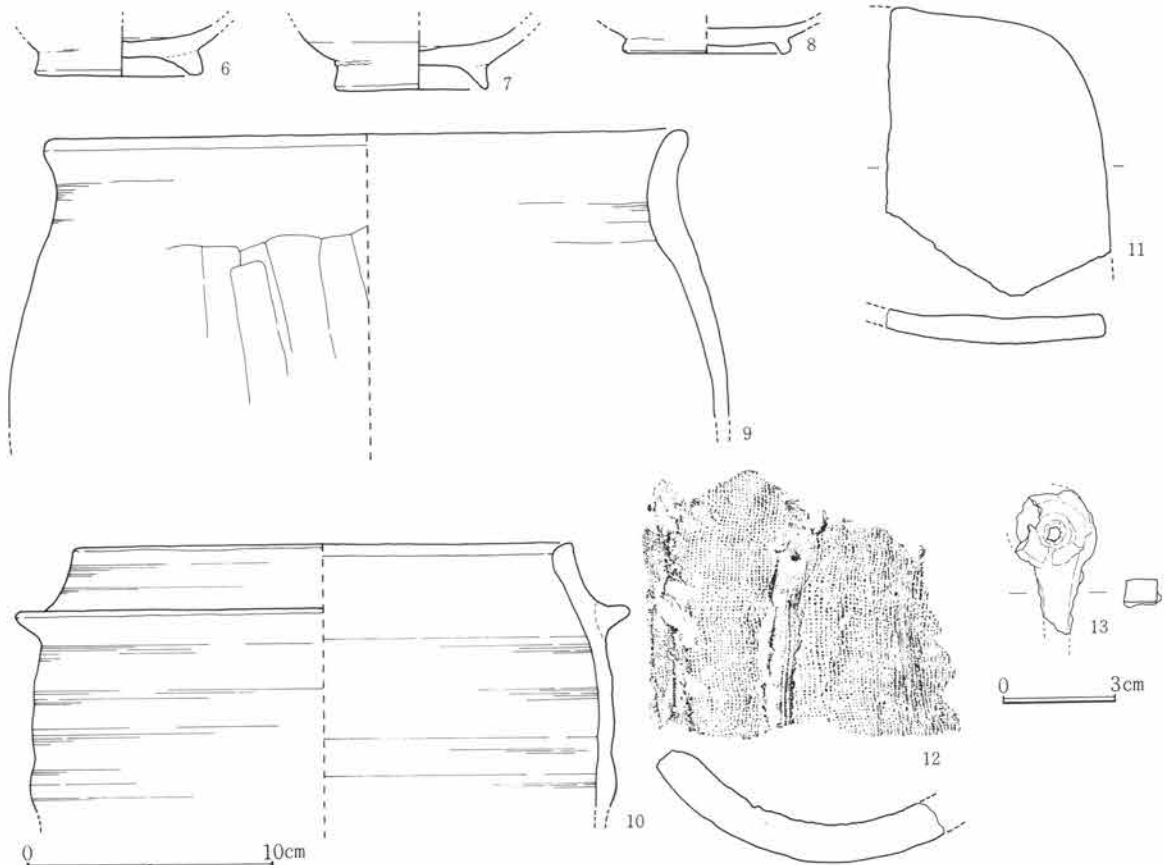


Fig. 82 M36号住居跡出土遺物(2)

M36号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
81-1 49-1	土師器 杯	1/2	10.3×4.6 ×3.9	床直	器肉厚い。底部から体部は丸味をもって開く。口唇部やや細る。口縁部横撫で。体部に指頭痕。中位に紐作り痕。	①軟 ②鈍い橙 ③やや粗
81-2 49-2	須恵器 杯	完形	11.1×5.0 ×3.6	+8	器肉肥厚するが見込中心部薄い。体部丸味をもち口縁部大きく外反し口唇部丸まる。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②明 黄褐 ③粗砂混る
81-3 49-3	須恵器 杯	1/4	10.3×5.3 ×4.1	+2	体部丸味をもち深目。口縁部は緩く外反し口唇部丸まる。底部器肉厚い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②灰 白 ③細砂混る
81-4 49-4	須恵器 蓋	1/4	—×4.6 ×(2.2)	床直	環状摘。天井部回転篋削りで平坦。器肉厚い。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③密
81-5 49-5	須恵器 椀	口縁部 1/2	14.5×— ×(5.7)	埋土	体部深くやや丸味をもち口縁部緩く外反し口唇部丸まる。轆轤成形。	①酸化気味・良好 ②鈍い黄橙 ③細砂
82-6 49-6	須恵器 椀	高台部	—×6.6 ×(2.1)	埋土	付高台、雑な作りで楕円形に接合。轆轤成形。	①酸化・良好 ②橙 ③粗
82-7 49-7	須恵器 椀	高台部	—×6.1 ×(2.5)	+10	腰部に丸味をもつ。付高台、ハの字状に開く。轆轤成形。底部回転撫で調整。	①酸化・軟 ②明赤 褐 ③粗砂混る
82-8 49-8	灰釉陶器 皿 ?	底部	—×6.7 ×(1.4)	埋土	付高台、低く断面丸味あり。轆轤成形。底部回転篋調整。	①良好 ②灰白 ③密
82-9 49-9	土師器 土釜	口縁部 破片	25.7×— ×(11.4)	埋土	体部緩く脹らみ口縁部は器肉厚く緩く短く外反。口唇部丸い。口縁部横撫で。体部縦方向の篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③粗砂混る
82-10 49-10	羽釜	口縁部 1/4	20.0×— ×(10.4)	埋土	胴部やや張り気味。鋳僅かに上向き。口縁部外反気味に内傾。口唇部幅広く断面矩形。内外面撫で調整。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る
82-11 49-11	須恵器 転用硯	破片	厚1.1縦11.4 横8.8	+9	礫片転用縁辺は丁寧な擦り調整。硯面は内面使用。摩滅顕著で光沢あり。	①良好 ②灰 ③細砂混る
82-12 49-12	瓦 丸瓦		厚1.6	+19	凹面布目、1条の指撫で痕あり。凸面篋撫で。側面・側縁篋調整。	①良好 ②灰白 ③やや密
82-13 49-13	鉄器		長(4.0) 幅0.9厚0.6	埋土	頭部環状。身部は角状。	

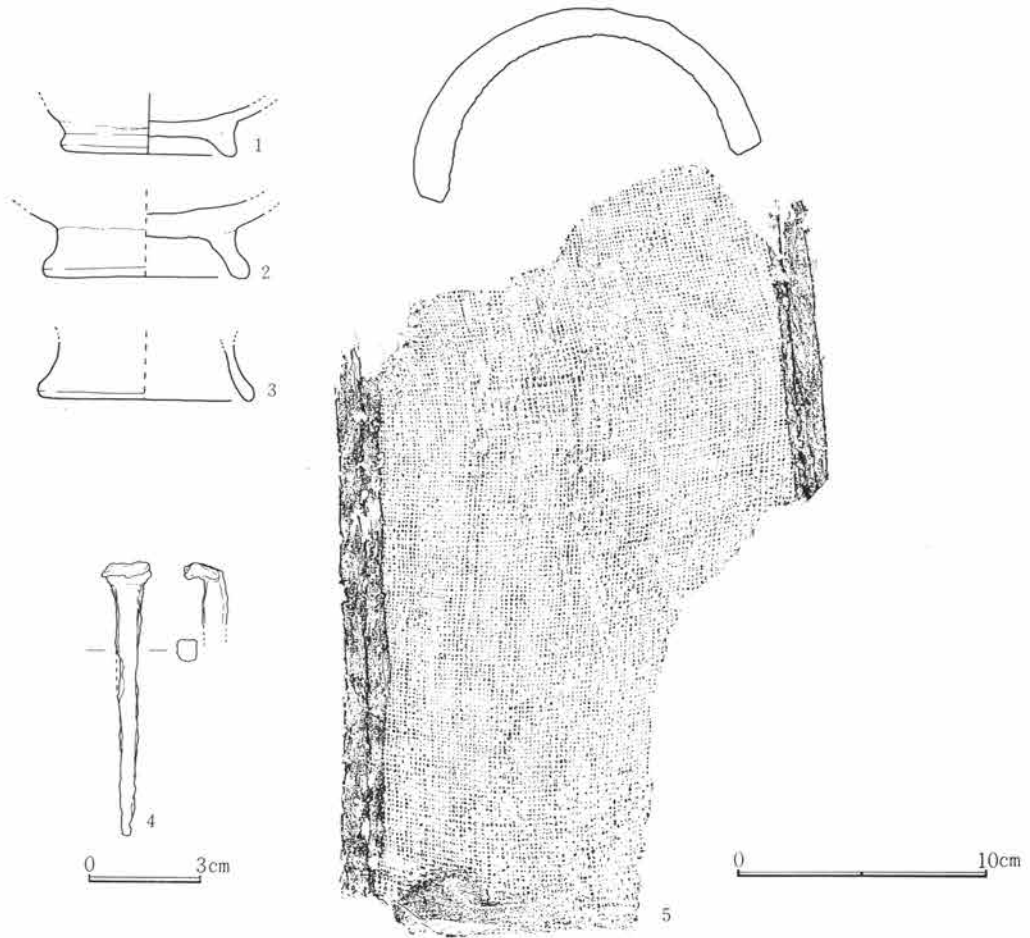


Fig. 83 M53号住居跡出土遺物

M53号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
83-1 49-1	須恵器 椀	底部	—×7.0 ×(2.1)	床直	付高台、外反気味に開き肥厚し端部丸まる。	①酸化・良好②鈍い 黄橙 ③粗砂混る
83-2 49-2	須恵器 椀	底部	—×8.2 ×(3.1)	床直	付高台、高く緩く外反して開く。端部丸まる。底部肥厚。	①酸化・良好②鈍い 橙 ③やや粗砂混る
83-3 49-3	須恵器 椀 ?	高台	—×8.7 ×(2.3)	竈埋土	付高台、器肉薄く高い。緩く外反して開く。端部丸まる。	①酸化・良好 ②鈍 い黄橙 ③細砂混る
83-4 49-4	鉄器 角釘	完形	長7.3 幅0.5	床直	頭部形状折頭式。	
83-5 49-5	瓦 丸瓦		厚1.2	竈	凹面布目。凸面撫で。側面窠調整。	①良好 ②灰 ③粗・小石混る

M40号住居跡 (Fig. 84~86・PL. 9、50)

M区第3台地の調査区西端でやや南寄りに位置し、86・87M16~19の範囲にある。西側は調査区域外に入り、検出部分は竈及び東壁間際の狭小な範囲である。当跡南側で東西走るM9号溝と重複しているがM9号溝の掘形が浅く住居跡の埋土中にとどまっている。

全体の形状は不明であるがおおよそ方形を呈すると考えられる。南北長は約5.4mを測り、東西は東壁線より

約55cmの範囲まで検出された。東西軸方位はN-85°-Eを示す。壁高は調査区域外にかかる土層面の観察によれば約60cmを測る。床面はほぼ平坦をなすが北東部隅に僅かな窪みがある。竈前面の踏み締まりは良好である。貯蔵穴は南東部隅に設けられ、径50cm・深さ20cmを測り、楕円形を呈すると考えられる。

竈は東壁にあり南に偏って付設される。袖部は凝灰岩質の残片から、壁線上にあると思われる。燃烧部は楕円形に掘り込まれ、先端部には幅広で板状の凝灰岩質加工材が垂直状態で立て掛けられる。燃烧部底面には厚く灰層が堆積している。焚口部幅70cm、燃烧部奥行き65cmを測る。煙道部は検出されていない。

出土遺物は少量である。

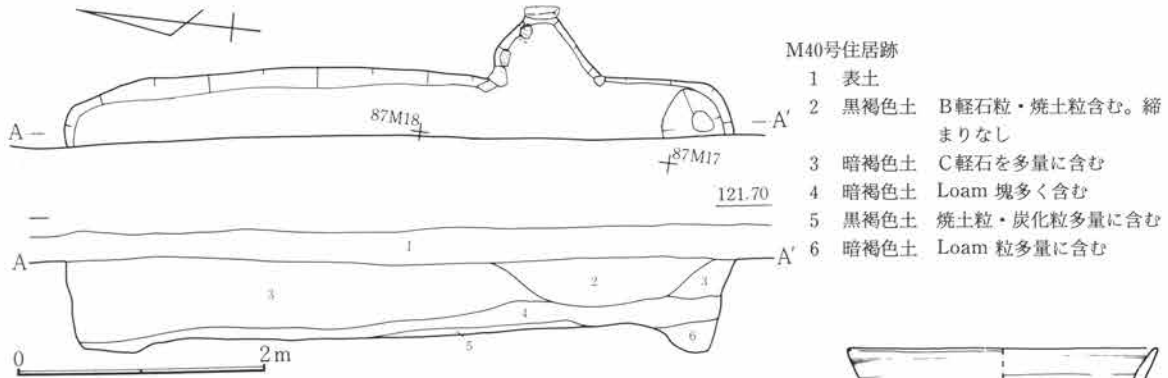
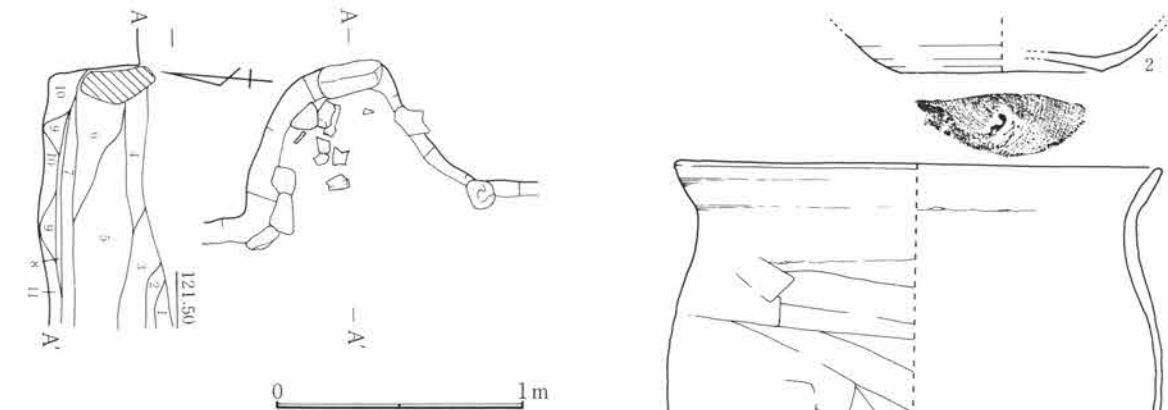


Fig. 84 M40号住居跡



M40号住居跡竈

- 1 黒色土 焼土粒少量含む
- 2 焼土層 塊状に締まる
- 3 黒色土 C軽石・焼土粒を含む
- 4 黒色土 C軽石を含む
- 5 黒色土 Loam 粒多量、炭化粒少量含む
- 6 黒色土 焼土粒多量に含む
- 7 灰層
- 8 焼土層 (火床面)
- 9 黒色土 焼土粒・Loam 粒を少量含む
- 10 黒色土 Loam 塊・焼土粒・炭化粒・C軽石を多量に含む
- 11 黒色土 Loam 粒・焼土粒含む

Fig. 85 M40号住居跡竈

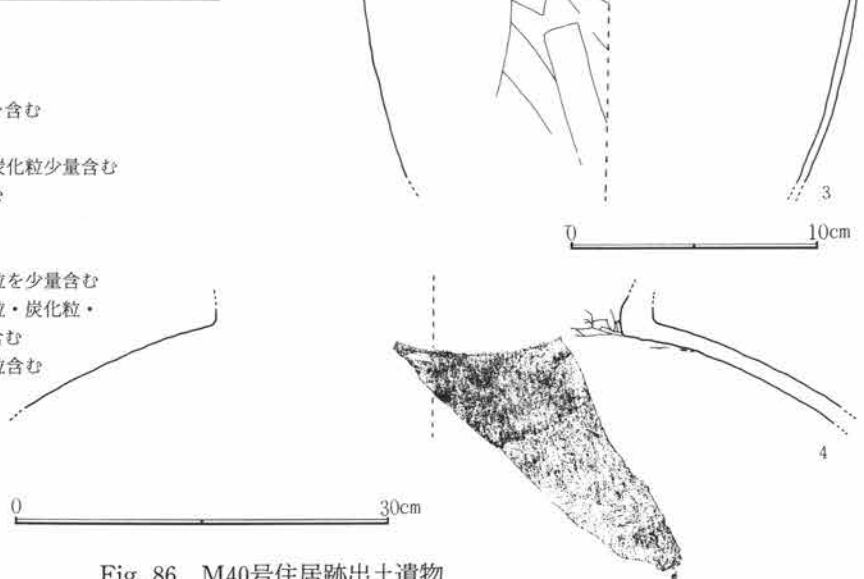


Fig. 86 M40号住居跡出土遺物

第2章 遺構と遺物

M40号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
86-1 50-1	土師器 杯	1/4	12.4×— ×(3.0)	埋土	腰部に丸味。体部直線的に開き口唇部僅かに内傾。口縁部横撫で。体部指頭痕後篋削り。底部篋削り。	①良好 ②鈍い赤褐 ③細砂混る
86-2 50-2	須恵器 杯	腰~底	—×(8.2) ×(1.5)	埋土	器肉薄い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
86-3 50-3	土師器 甕	胴部	(19.4)×— ×(16.8)	竈	胴部丸味をもち上やや張る。肩部内傾し口縁部外傾して開く。頸部接合痕。体部上位横、中位斜位篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗
86-4 50-4	須恵器 甕	肩部	頸部径34.6	埋土	頸部内面撫で。肩部内面青海波。外面肩部に降灰。	①良好 ②灰 ③やや粗・白色小石混る

M41号住居跡 (Fig. 87~89・PL. 9、50)

M区第3台地の調査区西端でやや南に偏って位置し、85・86M13~15の範囲にある。住居跡西側は調査区域外に入り全体の平面形状は不明であるが、南・北壁線にやや脹らみが見られ、また東壁線は竈構築との関連のためか北壁から鈍角になり不整形を呈すると思われる。南北長約3.7m、東西は東壁線より最大1.5mの範囲まで検出された。東壁線に直交する東西軸方位はおよそN-80°-Eを示す。掘形は明瞭であり、調査区域外に面する土層観察では壁高は約50cmを測る。床面は竈前面が僅かに窪む程度で踏み締まりは良好である。

竈は東壁の南寄りに付設され、竈軸は東壁線に直交せず5°程度南へ振れている。袖部を含め遺存は良好ではなく、燃焼部の状態も悪い。東壁を若干掘り込み、10cmほど立ち上がり緩い勾配をなす長い煙道部が延び

る。竈の形状から袖部が長く住居内に突出する形態であることが推測される。煙道部長さ1mを測る。

出土遺物は散在的で須恵器高盤・蓋などが検出されているが、いずれも床面よりかなり高く埋土中の出土である。

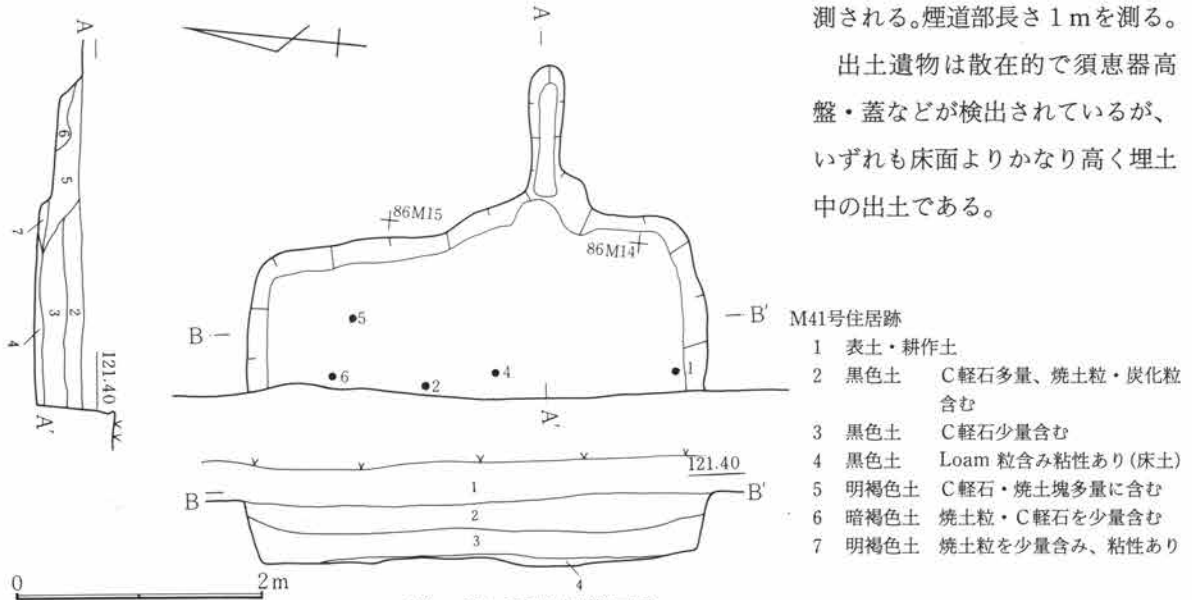


Fig. 87 M41号住居跡

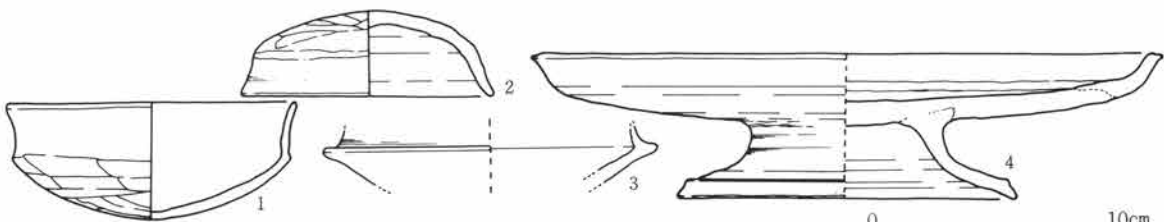


Fig. 88 M41号住居跡出土遺物(1)

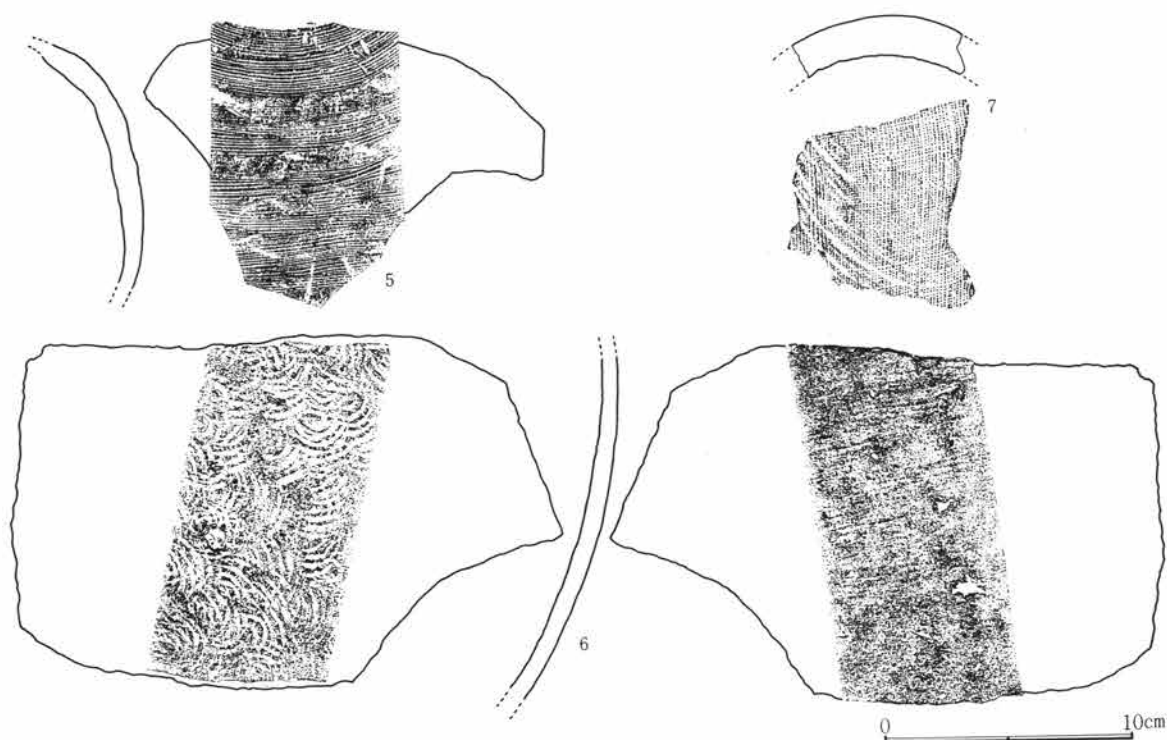


Fig. 89 M41号住居跡出土遺物(2)

M41号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
88-1 50-1	土師器 杯	1/2	11.4×— ×4.6	床直	底部丸く深い。受け部で段をなす。口縁部は外反気味に立つ。口縁内外面横撫で。底部不定方向篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
88-2 50-2	須恵器 蓋	3/4	10.0×— ×3.3	+6	天井部は丸くやや深い。体部やや丸味をおび、口縁部は外反して開く。天井部不定方向篋削り。器内厚い。	①良好 ②赤灰 ③密・細砂混る
88-3 50-3	須恵器 杯	小片	最大径 (13.4)	埋土	体部直線的に口縁部に至り受け部は短かく丸まる。かえりは緩く外反。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③密
88-4 50-4	須恵器 高盤	1/2	(25.2)×(13.5) ×(5.8)	+16	底部大きく水平気味に開き口縁部は短かく外傾し皿状を呈す。口唇部上端凹む。端部は外側に細る。脚部ハの字状に開き端部段をなして細る。轆轤成形。底部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③密
89-5 50-5	須恵器 横瓶?	小片		+24	外面掻き目後部分的に回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密・黒色粒混る
89-6 50-6	須恵器 甕	胴部		+33	外面平行叩き。内面同心円の当て目。	①良好 ②灰 ③粗白色小石混
89-7 50-7	瓦 丸瓦		厚1.6	埋土	凹面細かい布目。凸面撫で。	①良好 ②褐灰 ③やや密

M42号住居跡 (Fig. 90、91、93、94・PL. 9、51、52)

M区第3台地の西部やや南に偏って位置し、84~86M15~17の範囲にある。M49号・M50号・M52号住居跡と各々重複しており、これらより新しい時期の所産である。また北側を東西走するM9号溝は掘形が深く、底面は当跡の埋土中にある。

平面形は南北方向に長軸をもつが北壁線が歪む不整の隅丸方形を呈する。東西長約2.8m・南北長約4.75mを測り、東西軸方位はN-82°-Eを示す。壁高は約35cmを測り、床面はほぼ平坦をなし、竈前面をはじめ踏み締まりは比較的良好である。当跡のほとんどの範囲がM49号住居跡上にあるものの床面に対する貼床など特別な施工は行われていないようである。貯蔵穴・柱穴・壁下の溝など諸施設を伴っていない。挿図中あるいは写真図版中に見られるPitや壁下の溝は重複しているM49号住居跡に属するものである。

第2章 遺構と遺物

竈は東壁にあり、南に大きく偏って付設される。袖部、とくに右袖部には凝灰岩質の加工材が壁線の上に埋設される。燃焼部は楕円形に掘り込まれ、中央部には支脚として袖部と同質の円柱形加工材が設置される。支脚より緩い傾斜をなしてやや長目の煙道部が延び、天井部が遺存する。焚口部幅約50cm、燃焼部奥行き40cm、煙道部長さ約50cmを測る。

出土遺物は比較的多く、とくに竈周辺部に集中している。小形皿・鉢・鏝付き土釜・須恵器甕転用硯などがある。転用硯は北側に隣接するM48号住居跡の片身と接合する。

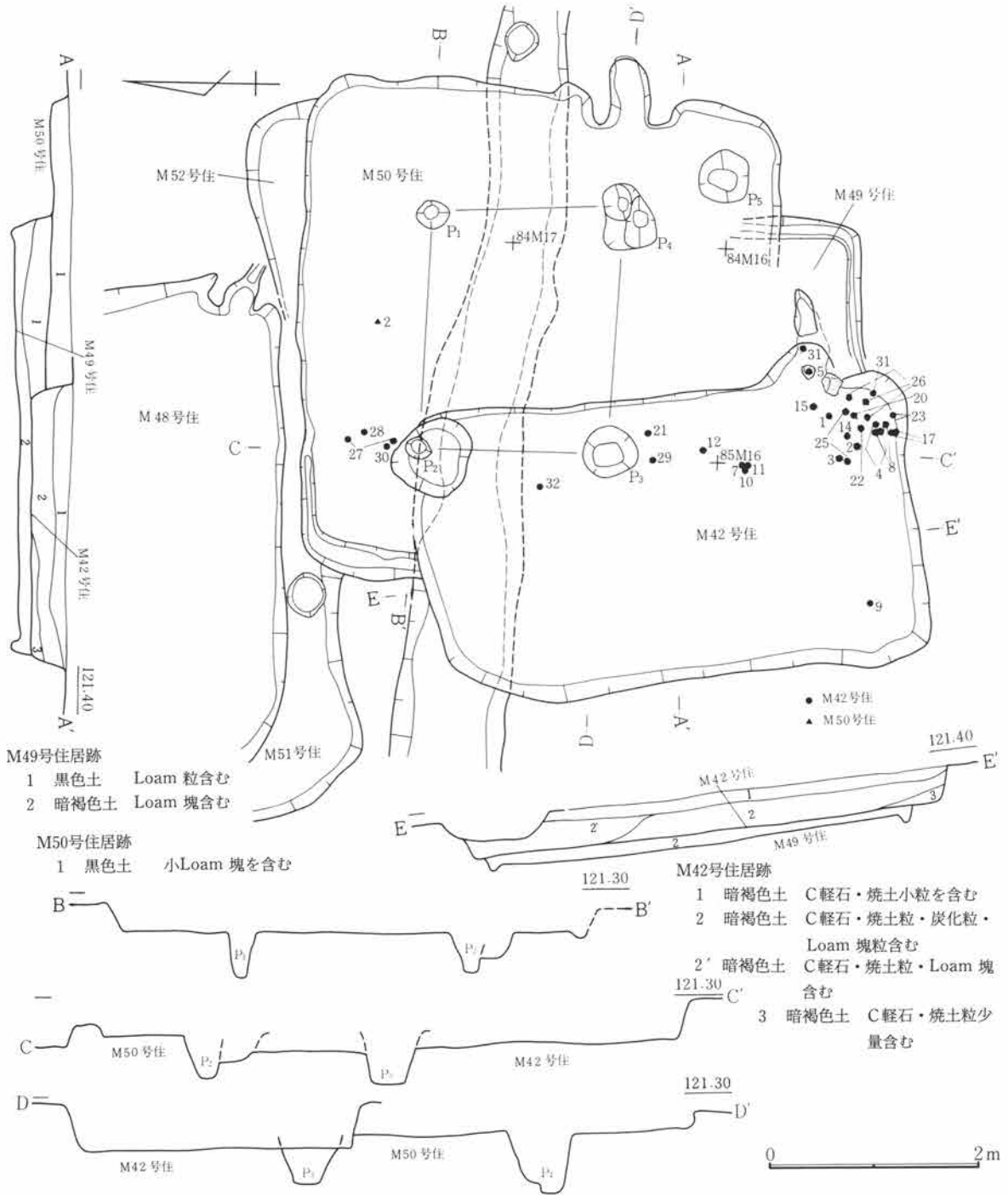
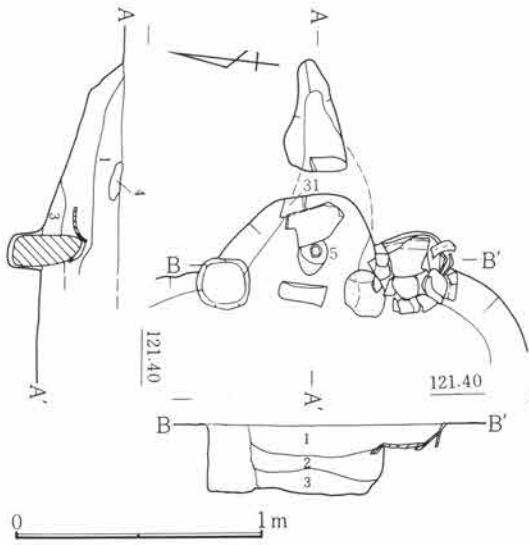


Fig. 90 M42号・M49号・M50号・M52号住居跡

M49号住居跡 (Fig. 90、92、95・PL. 10、53)

M区第3台地の西部やや南に偏って位置し、83~85 M15~17の範囲にある。M42号・M50号・M52号住居跡と重複しており、新旧関係はM42号・M50号住居跡より古い時期の所産であるが、M52号住居跡との関係は不明である。東壁から北壁にかけての部分は掘形の深いM50号住居跡によって消失している。また西半の



M42号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒・Loam 粒含む
- 2 暗褐色土 大粒C軽石・Loam 粒・焼土粒含む
- 3 黒褐色土 焼土塊含む
- 4 焼土 (天井部)

Fig. 91 M42号住居跡竈

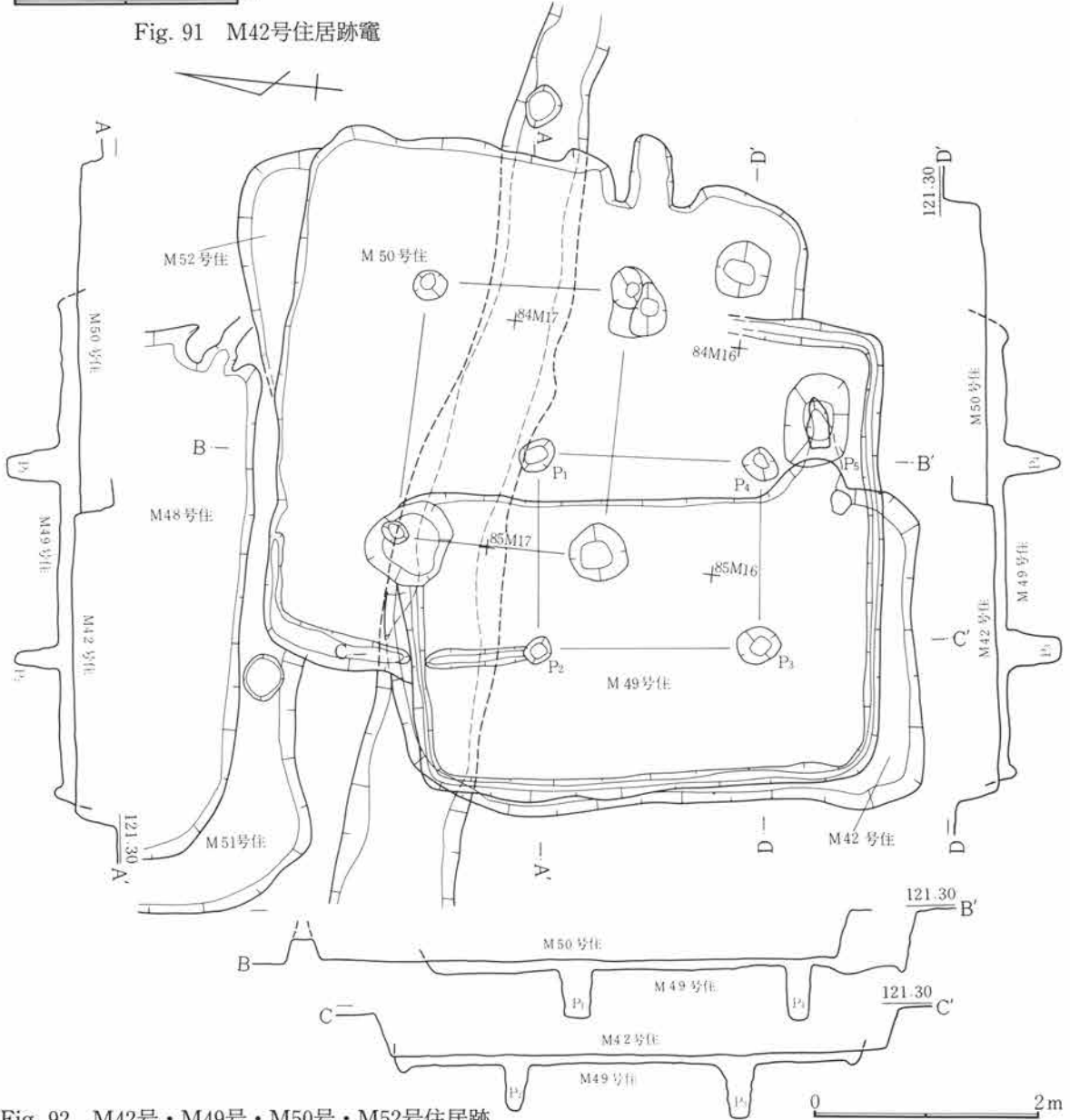


Fig. 92 M42号・M49号・M50号・M52号住居跡

第2章 遺構と遺物

ほとんどはM42号住居跡と重なり壁線の立ち上がりは僅かな部分で確認されたにすぎず、大半は壁下溝として検出されている。

平面形は東西・南北長とも4.25mを測り、比較的整った正方形の形状をなす。東西軸方位はおよそN-84°-Eを示す。壁高は重複を免れた南東部で約40cmを測る。床面はほぼ平坦をなし、全体に踏み締まりは良好である。東壁の一部から南・西壁と北壁の一部にかけて明瞭な壁下の溝が巡るが、本来的には全周していたと思われる。幅約15cm・深さ7cmを測る。貯蔵穴は南東隅に穿たれ、径80×55cm・深さ55cmの楕円形を呈する。柱穴はP₁~P₄の4個が検出されており、掘形はやや小さ目である。P₁は上径30cm・下径20×15cm・深さ40cm、P₂は上径25×20cm・下径12cm・深さ40cm、P₃は上径30×35cm・下径17cm・深さ48cm、P₄は上径25×30cm・下径10cm・深さ48cmを測る。柱間は南北方向に若干長い距離をとり、P₁・P₄とP₂・P₃は約2m、P₁・P₂は1.7m、P₃・P₄は1.6mである。竈は検出されていないが、東壁ないしは北壁に付設されたと想定される。

M50号住居跡 (Fig. 90、92、96・PL. 10、53)

M区第3台地の西部やや西に偏って位置し、83~85M15~17の範囲にある。M42号・M49号・M51号・M52号住居跡と重複関係にあり、M42号住居跡より旧く、他者よりは新しい時期の所産である。

平面形は南壁から西壁にかけて消失しているが、東西・南北軸長ともほぼ同じ方形を呈すると考えられる。東西長4.7m・南北長約4.5mを測り、東西軸方位はN-93°-Eを示す。壁高は約35cmを測り、床面は平坦で竈前面を除き踏み締まりは全体に弱い。北壁の一部から西壁にかけて幅10~20cm・深さ5cmの壁下の溝が見られる。南東隅にP₅が検出されているが貯蔵穴としてはやや小規模で、径50cm・深さ34cmを測る。柱穴はP₁~P₄が検出されている。P₁は上径25×30cm・下径12cm・深さ45cmを測る。P₂は上径20cm・下径14cm・深さ38cmで、径75cm・深さ35cmの不整楕円形の土坑内に穿たれているが、土坑はP₂の掘形に関係するかは不明である。P₃はM42号住居跡の範囲内にあつて床面の削平を受けているため本来の大きさを示していないが、上径50cm・下径20cm・推定深さ45cmを測る。P₄は掘形あるいは抜き取りと考えられる痕跡が見られるが上径30cm・下径10cm・深さ60cmである。柱間は東西方向に長い距離をとる。P₁・P₂は2.2m、P₃・P₄は2.3m、P₁・P₄及びP₂・P₃は各々1.8mである。

竈は東壁にあり南に偏って付設される。袖部は掘形を残し住居内に張り出す形態をとり、燃焼部はやや狭長である。焼土化の度合いは少なく、焼土粒・灰層などの残りは少ない。袖部長さ約30cm・内法35cm、燃焼部奥行き約70cmを測る。

出土遺物は少量であるが石製紡錘車がある。

M52号住居跡 (Fig. 90、92・PL. 10)

M区第3台地の西部やや南に偏って位置する。重複関係が著しく、検出範囲は83・84M18の極めて僅かな部分である。M42号・M49号・M50号住居跡との重複が想定される。掘形が浅く全体把握が不可能であるがM42号・M50号住居跡より古い時期であろう。M49号住居跡とは不明である。M50号住居跡の北側に僅かに東壁線から北壁線が確認されたにすぎず平面形・規模などを知ることはできない。壁高は約20cmを測る。

出土遺物はない。

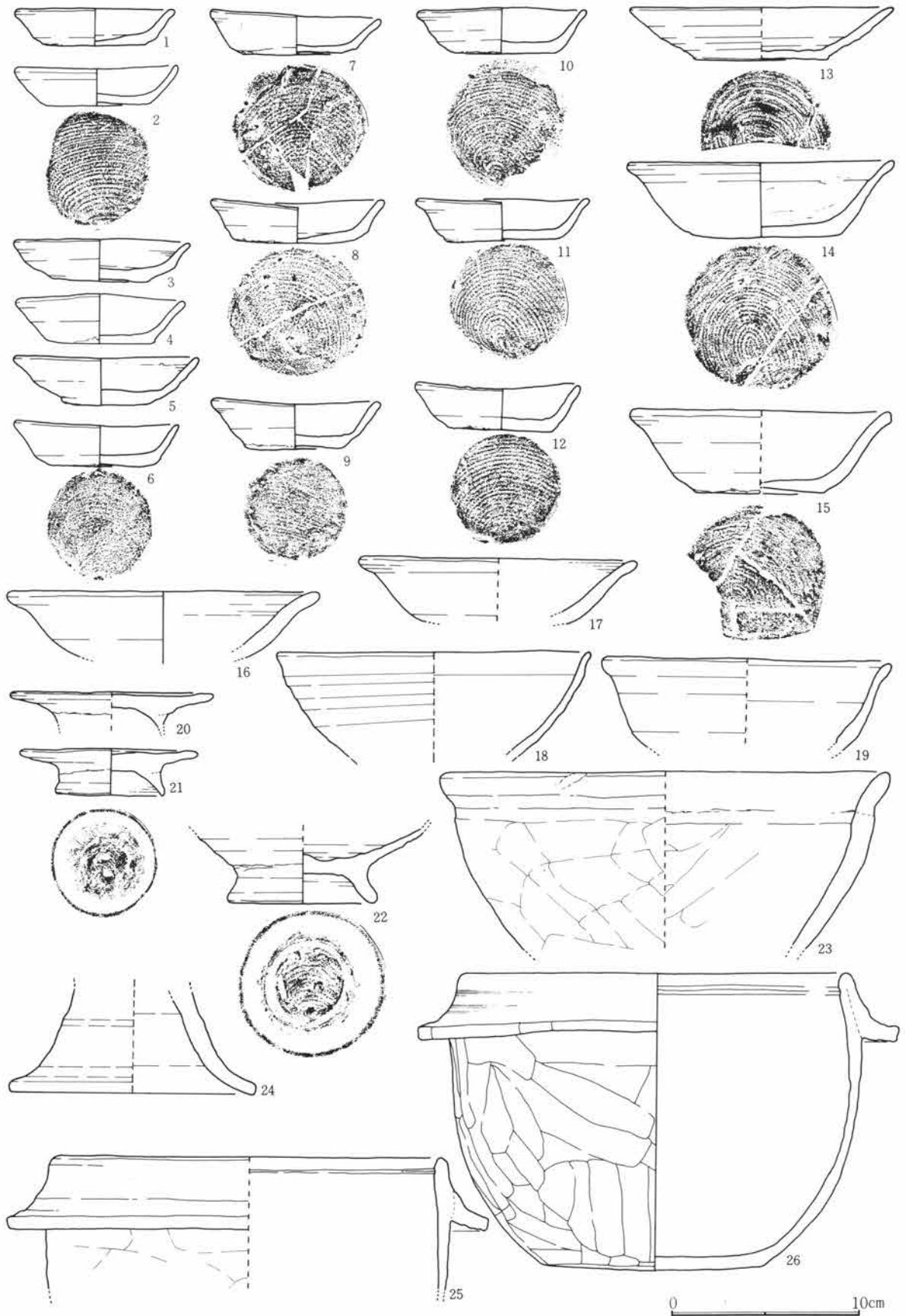


Fig. 93 M42号住居跡出土遺物(1)

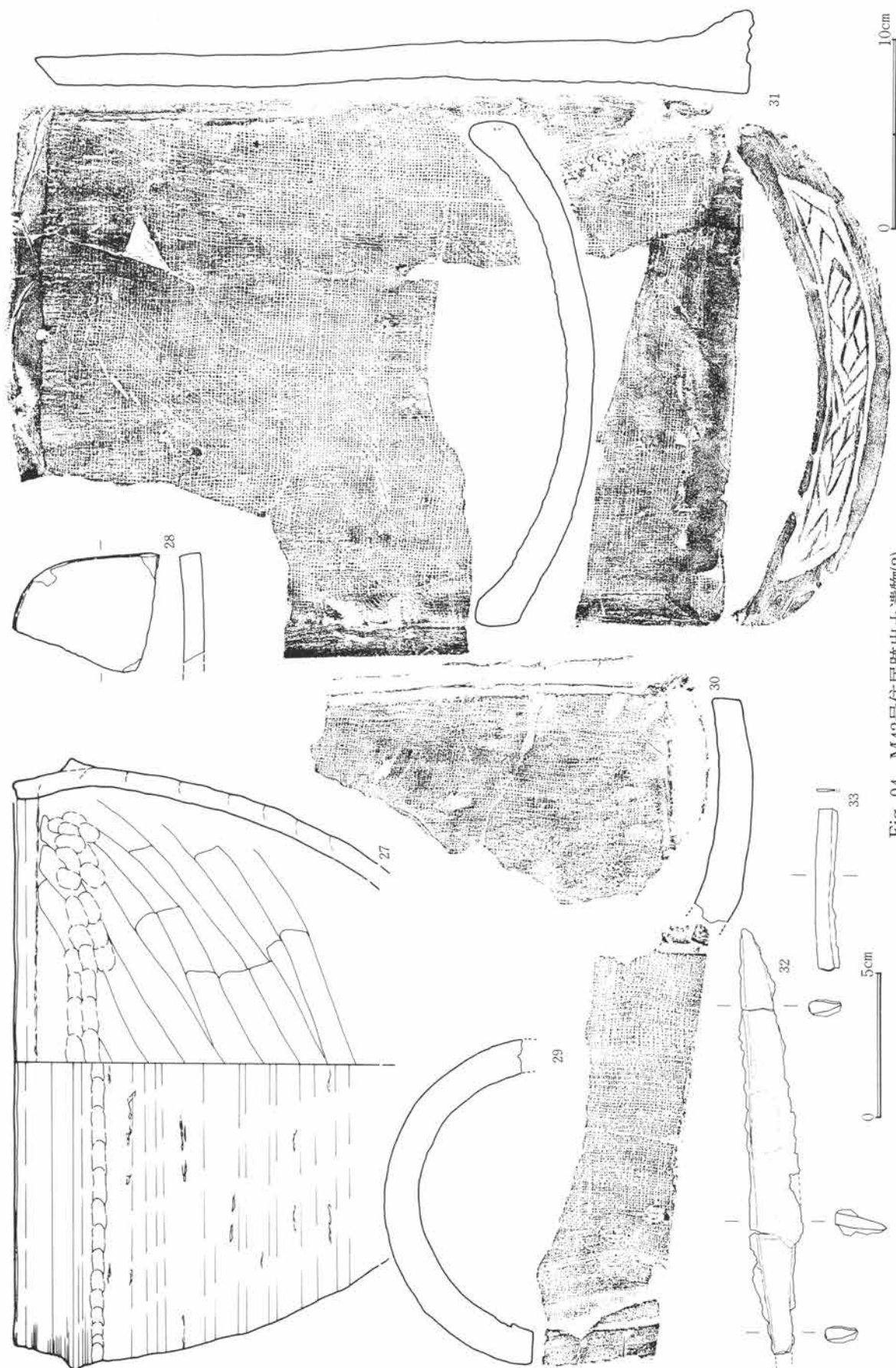


Fig. 94 M42号住居跡出土遺物(2)

M42号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
93-1 51-1	須恵器 杯	1/2	8.4×5.4 ×1.9	埋土	底部切り直し痕。体部直線的に外傾し僅かに外反。見込部僅かにへこみ極めて薄い。轆轤成形。	①酸化気味・良好② 灰白 ③やや密
93-2 51-2	須恵器 杯	3/4	8.6×5.4 ×1.9	床直	体部直線的に外傾。轆轤成形。静止糸切り。	①酸化気味・良好 ②灰白 ③やや密
93-3 51-3	須恵器 杯	3/4	9.2×5.0 ×2.4	埋土・ +19	底径小さく体部中位でくびれ口縁部緩く外反気味に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②灰白 ③やや密
93-4 51-4	須恵器 杯	3/4	8.9×5.7 ×2.6	+12	体部ほぼ直線的に外傾。口唇部肥厚し丸まる。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②灰白 ③やや密
93-5 51-5	須恵器 杯	3/4	9.7×4.0 ×2.4	竈	底部肥厚し小径。体部ほぼ直線的に外傾し端部丸まる。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味・良好② 灰白 ③やや密
93-6 51-6	須恵器 杯	3/4	8.6×5.0 ×2.1	埋土	底部やや肥厚し体部直線的に外傾。口唇部丸まる。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②灰白 ③やや密
93-7 51-7	須恵器 杯	3/4	9.0×6.3 ×2.0	床直	体部直線的に外傾。口唇部丸まる。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②灰白 ③やや密
93-8 51-8	須恵器 杯	完形	9.1×7.2 ×2.0	+10~14	器肉厚く体部短く外反気味に開く。口唇部丸まる。見込部へこむ。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②灰白 ③やや密
93-9 51-9	須恵器 杯	完形	8.9×5.1 ×2.3	+11	底部肥厚し体部直線的に外傾。口唇部丸くやや肥厚。轆轤成形。静止糸切り。	①酸化気味・良好 ②淡黄 ③やや密
93-10 51-10	須恵器 杯	完形	9.0×5.4 ×2.4	床直	体部直線的に開き口縁部やや外傾し口唇部丸まる。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②灰白 ③やや密
93-11 51-11	須恵器 杯	完形	9.1×6.0 ×2.2	床直	体部内湾気味に開き口唇部丸まりやや外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②灰白 ③やや密
93-12 51-12	須恵器 杯	完形	8.7×5.5 ×2.2	床直	体部直線的に外傾し口唇部丸まる。歪み大。轆轤成形。静止糸切り。	①酸化気味・良好 ②灰白 ③やや密
93-13 51-13	須恵器 杯	1/2	13.8×7.0 ×(2.7)	埋土	底径大きい。体部浅く直線的に大きく外傾。轆轤成形。底部回転糸切り。	①酸化気味 ②鈍い 橙 ③やや密
93-14 51-14	須恵器 杯	完形	14.0×7.6 ×3.9	床直	体部僅かに丸味もち大きく外傾。口縁部更に外傾し開く。轆轤成形。口縁部横撫で。内面寛撫で。右回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②灰白 ③やや密
93-15 51-15	須恵器 杯	1/2	13.6×6.8 ×4.3	埋土・ +27	体部丸味をもち口縁部は僅かに外傾。轆轤成形。口縁部無で。右回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③やや密
93-16 51-16	須恵器 碗?	底部1/2	16.4× ×(3.4)	埋土	全体に肥厚。腰部丸味をもち体部大きく開く。口縁部外反して大きく開き口唇部丸まる。轆轤成形。内外面横撫で。	①酸化気味・軟②浅 黄橙 ③やや密
93-17 51-17	須恵器 碗?	1/2	14.6× ×(3.3)	+14~21	全体に肥厚。腰部丸く張る。口縁部強く外傾して開く。口唇部丸まる。轆轤成形。	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③やや密
93-18 51-18	須恵器 碗	1/2	16.5× ×(7.2)	埋土	器肉薄い。体部丸味をもち内湾気味に開く。口縁部緩く外反し口唇部丸い。口縁部横撫で。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③や や粗・砂混る
93-19 51-19	須恵器 碗?	1/2	15.0× ×(4.7)	埋土	腰部に丸味をもち体部深い。口縁部くびれて緩く外傾。口唇部肥厚し丸まる。轆轤成形。	①酸化気味・良好 ②灰黄褐 ③やや密
93-20 51-20	須恵器 皿	1/4	10.6× ×(1.6)	埋土	体部ほぼ水平。口唇部丸まる。付高台。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③やや粗
93-21 51-21	須恵器 皿	完形	9.3×5.8 ×2.4	+7	体部肥厚し直線的で水平に開き口唇部丸まる。付高器肉やや薄い。高くハの字状に開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味・やや軟 ②明褐灰 ③やや密
93-22 52-22	須恵器 碗	底部	—×7.8 ×(3.7)	床直	腰部直線的に外傾。付高台、肥厚し高くハの字状に開き端部丸い。轆轤成形。	①酸化・良好 ②橙 ③やや密
93-23 52-23	土師器 鉢	底部欠損 1/2	23.6× ×(9.3)	+11	器肉厚く体部やや丸味をもち開く。口縁部くびれて外傾。口唇部丸まる。体部斜方向篋削り。内面寛撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・粗砂混る
93-24 52-24	須恵器 ?	脚部	—×12.6 ×5.3	埋土	台部ハの字状に開く。端部やや直立気味。轆轤成形。	①酸化気味 ②鈍い 橙 ③やや密・長石
93-25 52-25	羽釜	胴部1/4	20.4× ×(7)口径25.2	+14~27	胴部から口縁部直立。鈔幅広く下方に張り出し断面矩形。口縁部肥厚し口唇部丸まる。胴部篋削り。	①酸化・良好 ②淡 橙 ③粗・赤色粒混
93-26 52-26	羽釜	1/4	19.8×11.3 ×15.4 口径25.0	+20~38	底部平底。体部丸味もつ。鈔幅広く下方に張り出し断面矩形。口縁部内傾し口唇部丸まる。底部無で。体部篋削り。鈔端・下面篋削り。口縁部横撫で、内面凹帯巡る。内面無で。	①酸化・良好 ②鈍 い橙 ③砂・小石混る
94-27 52-27	羽釜	1/4	28.6× ×19.1	埋土	胴部やや張り気味。口縁部内傾し口唇部幅広い。内面上位指頭痕。胴部篋撫で。外面鈔低く断面三角。下位指頭痕。	①酸化気味 ②鈍い 橙 ③粗
94-28 52-28	転用硯 須恵器片	破片		埋土	硯面著しく摩滅し光沢あり。側面は丁寧な調整。	①還元 ②灰 ③や や密
94-29 52-29	瓦 丸瓦		厚1.8	+12	凹面布目。凸面無で。	①良好 ②灰 ③や や密

第2章 遺構と遺物

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
94-30 52-30	瓦 平瓦		厚1.8	埋土	凹面布目。凸面篋撫で。側面篋削り。	①酸化気味 ②鈍い橙 ③密・縞状
94-31 52-31	瓦 軒平瓦		長37.5最大 幅26 厚1.6	竈・ +28	有頸。凹面布目。凸面縄目。頸部篋削り。綾杉文。	①良好 ②灰 ③やや密
94-32 52-32	鉄器 刀子	柄部欠 損	長(14.8) 刃幅1.8	床直	棟区は認められず刃区は鈍角で茎に至る。茎部幅1.2・厚0.3	
94-33 52-33	銅製品 銅碗	口縁部 小片	厚0.1	埋土	銅碗口縁部か？口縁部脹らみ体部極めて薄い。	

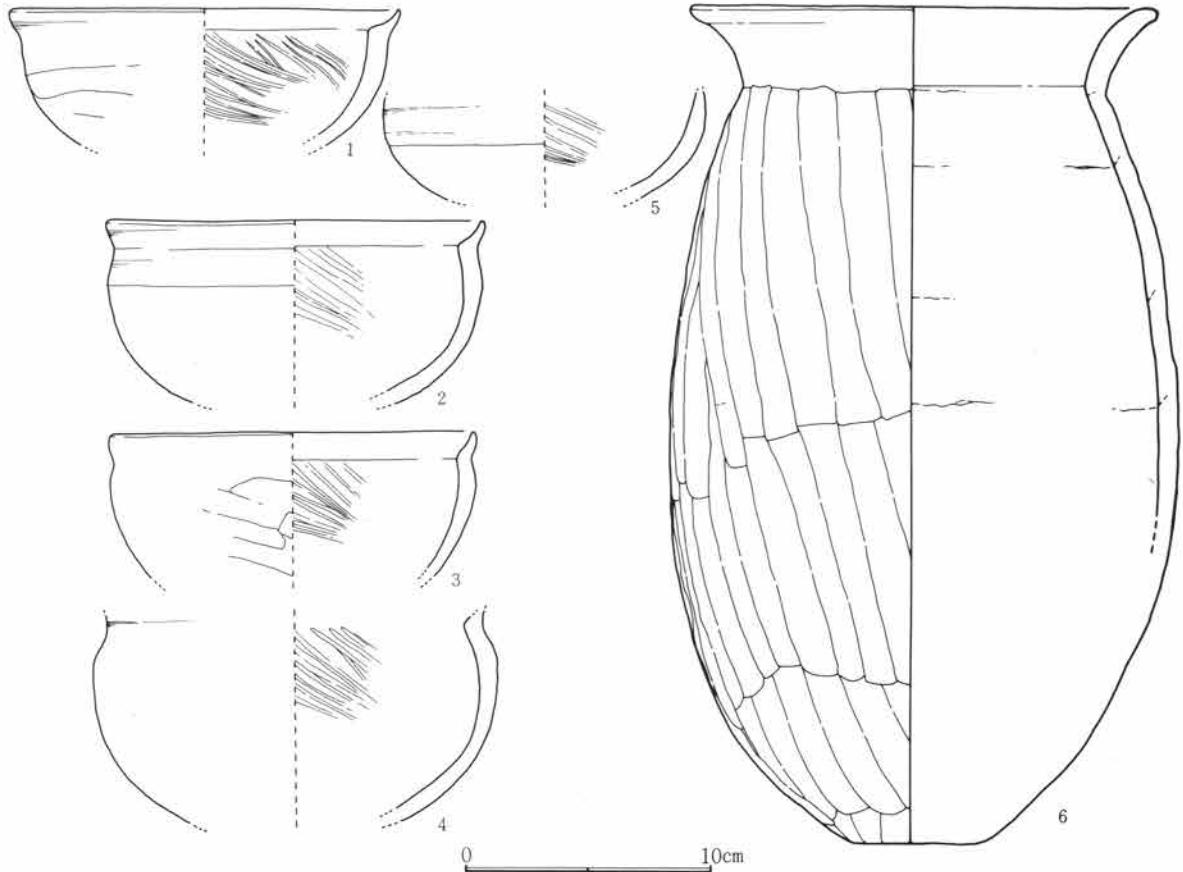


Fig. 95 M49号住居跡出土遺物

M49号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
95-1 53-1	土師器 杯	破片	15.6×— ×5.4	埋土	体部丸く張り口縁部強く屈して内湾気味の内斜口縁。口唇部尖る。口縁部内外面横撫で。体部外面横位篋削り。内面斜行篋磨き。	①良好 ②赤褐 ③細砂混る
95-2 53-2	土師器 杯	破片	15.2×— ×(7.3)	竈埋土・ 埋土	体部丸く張る。口縁部強く外屈し内湾気味の内斜口縁。口唇部丸まる。内面斜行篋磨き。口縁部横撫で。	①良好 ②赤褐 ③細砂混る
95-3 53-3	土師器 杯	破片	14.6×— ×(4.7)	埋土	体部丸く張り口縁部強く屈し内湾気味の内斜口縁。口唇部やや丸まる。体部外面篋削り。内面斜行篋磨き。	①良好 ②赤褐 ③細砂混る
95-4 53-4	土師器 杯	破片	体部最大径 16 高(8.3)	埋土	体部丸く張る。口縁部強く屈す。内面斜行篋磨き。口縁部横撫で。	①良好 ②赤褐 ③細砂混る
95-5 53-5	土師器 杯	破片	体部最大径 12.8高(4.1)	埋土	体部内湾して開く。口縁部横撫で。内面斜行篋磨き。	①良好 ②明赤褐 ③細砂混る
95-6 53-6	土師器 甕	完形	18.6×5.0× 32.8最大径20.2	埋土	胴部中位に張りをもち下脹れ。口縁部緩く外反して開く。口縁部横撫で。胴部縦位3段の篋削り。腰部横位篋削り。	①やや軟 ②鈍い橙 ③粗・砂混る

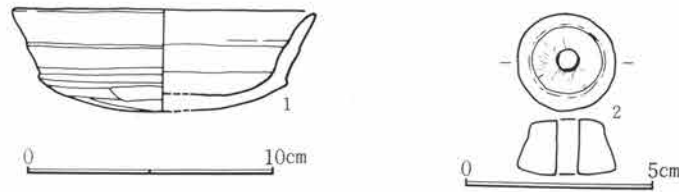


Fig. 96 M50号住居跡出土遺物

M50号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
96-1 53-1	土師器 杯	破片	12.2× ×4.0	埋土	底部丸い。受け部で段をなす。口縁部外傾し上半部外反。口縁内面横撫で。底部篋削り。	①酸化 ②浅黄 ③やや粗
96-2 53-2	石製品 紡錘車	完形	縦3.8×横3.8 厚2.15	床直	上下面不定方向の調整側面縦の削り後横擦痕。孔径0.8・重44.2g	滑石質結晶片岩

M43号住居跡 (Fig. 97~99・PL. 10, 53, 54, 55)

M区第3台地の調査区西端のほぼ中央部に位置し、85~88M22~25の範囲にある。西側は調査区域外に入り全容は不明である。東側でM44号・M46号と、また南側でM45号住居跡と各々重複しているが新旧関係の認定は調査段階では確定できなかった。図上ではM43号住居跡が最も新しいものとして表されているが、出土遺物の平面的・立体的位置からは、当跡が最も古い時期の所産である。当跡は竈施設がA・B2基検出されている。建替えあるいは重複の可能性も考えられるが壁線その他からの識別ができない。ここではM43号住居跡で一括して扱うこととする。また、当跡出土遺物とした中にはかなり時代的に隔たりのある新しい遺物の混在がみられ、層位的上位にあった別な遺構(M44号住居跡)を検出できなかった可能性もある。

平面形はほぼ方形を呈すると考えられるが、北・南壁線に対し東壁は鈍角をなす。また南東部隅は丸味の強い壁線となっている。南北長約6m、東西は東壁より最大3.3mの範囲まで確認できた。竈を基軸とした主軸方位はA・B竈ともN-79°-Eを示す。掘形は比較的深く、壁高約60cmを測る。床面は緩く波打つが、踏み締まりは良好である。床土としてLoam塊を多量に含む黒褐色土を敷固め、床下には径1.7mから1.5mの楕円形土坑が穿たれ、Loam塊を混じえる黒褐色や黄褐色の粘性のある土質で埋めている。柱穴はP₁・P₂の2個が検出されている。P₁は上径50×60cm・下径20cm・深さ50cm、P₂は上径45×55cm・下径20cm・深さ65cmを測り、P₁・P₂の柱間は約2.6mである。各々の柱穴には対になって小掘形のPitが付し、建替えが考えられた。しかしP₂に付随するものは浅い掘り込みであるため柱穴とは思われず柱材の抜き取り痕であろう。貯蔵穴・壁下の溝などは検出されていない。

竈は東壁にA・B2基検出されている。両者とも類似する形態をもち燃焼部は楕円形に掘り込まれ、煙道部をもたない。壁外への突出はA竈が大きい。袖部は東壁線上にあり、A竈の右袖部には凝灰岩質の加工材が埋設され、またB竈の燃焼部奥には同質材の支脚がみられる。A竈は燃焼部幅約75cm・奥行き85cmを、B竈は燃焼部幅80cm・奥行き約60cmを測る。

出土遺物は豊富にあるが散在している。

M44号住居跡 (Fig. 97, 100・PL. 10, 56)

M区第3台地の調査区西端のほぼ中央部に位置し、85~87M23~25の範囲にあると考えられる。西側でM43号住居跡と重複している。調査段階での新旧はM43号住居跡より古い時期の所産として認識されているが、

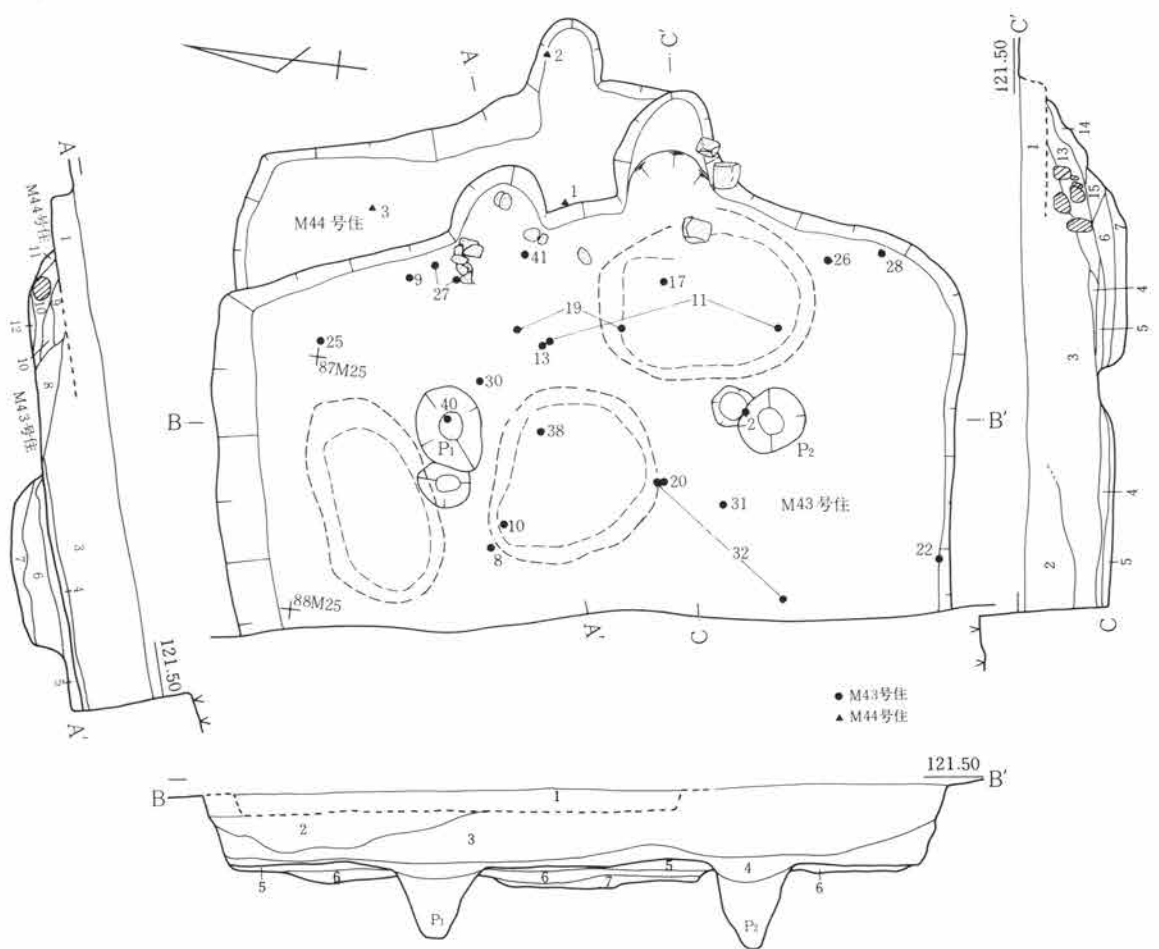
第2章 遺構と遺物

出土遺物やM43号住居跡の竈検出状況などの再検討から、M44号住居跡がM43号住居跡より新しい時期のものである公算が大である。

平面形は上述したように、M43号住居跡の検出時に西側のほとんどが失われており全容を知ることはできない。僅かに確認された東壁と北壁から想定すれば南北長約3.5mほどの略方形を呈する。東西軸方位はおよそN-77°-Eを示す。壁高は約20cmを測り、床面の踏み締まりは弱く軟弱である。貯蔵穴・壁下溝などの諸施設は検出されていない。

竈は東壁に付設されやや南に偏った位置にあると思われる。袖部など構築材も見られず、燃烧部が楕円形に掘り込まれただけの形状である。また灰・焼土などの散布も少なかった。燃烧部幅約65cm・奥行き90cmを測る。

出土遺物は比較的少量であるが、M43号住居跡として取り上げられた遺物中にも混在している。



M43号住居跡

- 1 黒色土 C軽石多量、焼土粒・炭化粒含む
- 2 黒色土 C軽石・焼土粒・炭化粒含む
- 3 黒色土 C軽石少量、Loam 粒を含む
- 4 黒色土 Loam 粒を多量に含む。粘性あり
- 5 黒褐色土 Loam 塊多量に含む(床土)
- 6 黒褐色土 Loam 塊多量に含む。粘性あり
- 7 黄褐色土 粘性あり
- 8 暗褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒含む
- 9 暗褐色土 細C軽石・焼土粒・炭化粒少量含む

- 10 褐色土 焼土塊を含む
- 11 褐色土 粘性あり
- 12 黒色灰層
- 13 焼土粒層
- 14 暗褐色土 焼土粒多量に含む
- 15 暗褐色土 Loam 塊多量、焼土粒・炭化粒少量含む

M44号住居跡

- 1 黒褐色土 C軽石多量に含む
- 2 黒色土 Loam 塊を含む

0 2m

Fig. 97 M43号・M44号住居跡

第1節 竪穴住居跡と出土遺物

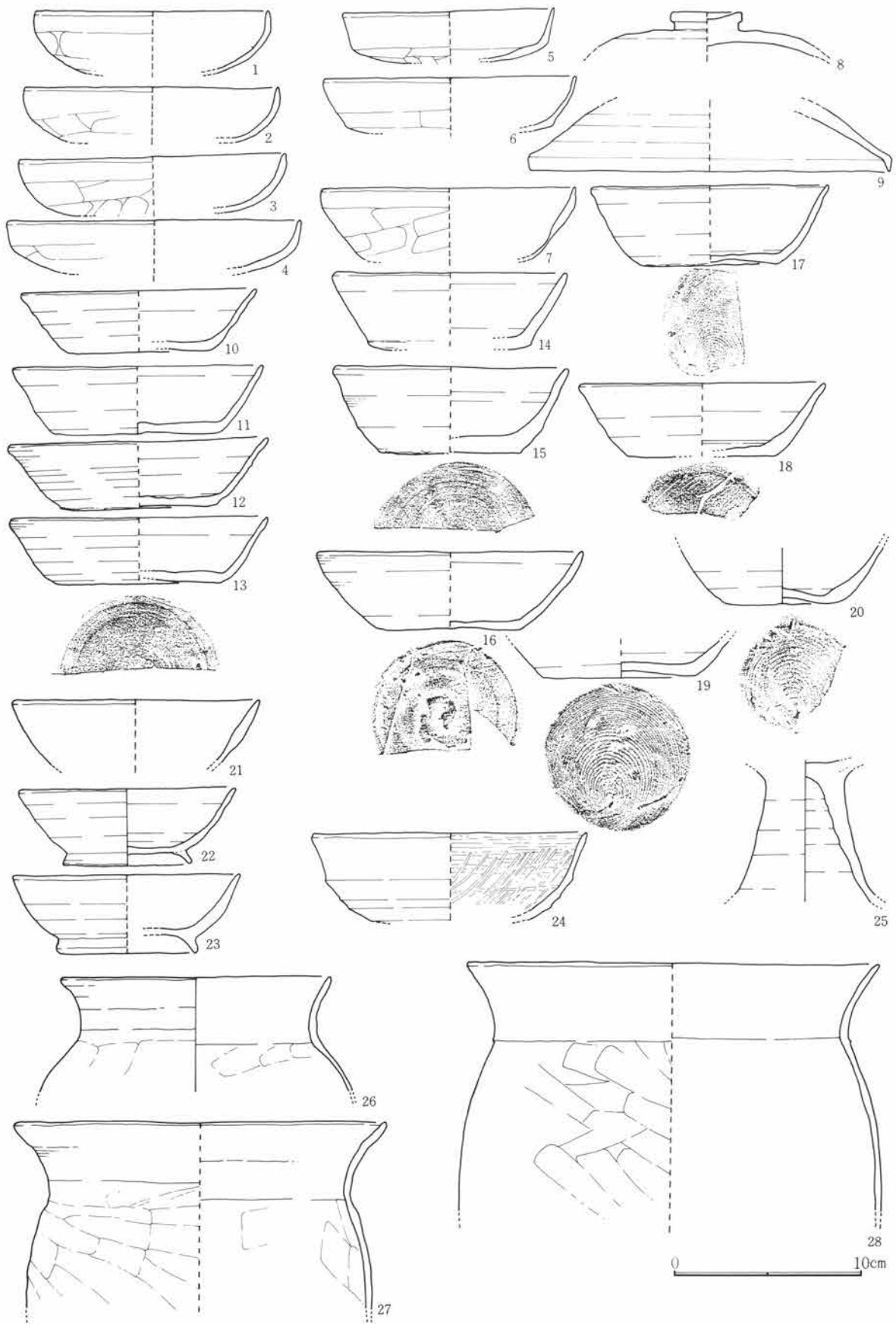


Fig. 98 M43号住居跡出土遺物(1)

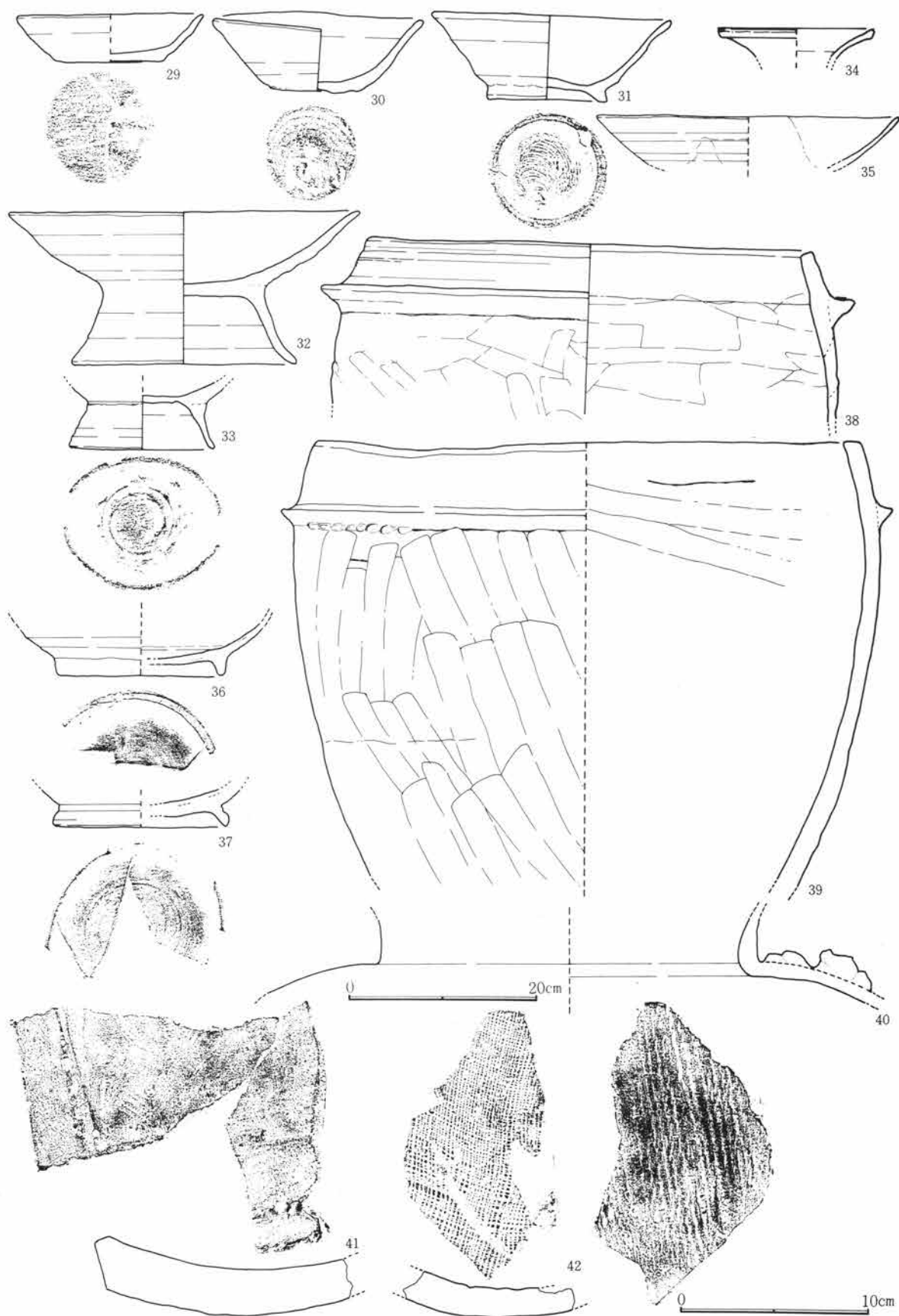


Fig. 99 M43号住居跡出土遺物(2)

M43号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
98-1 53-1	土師器 杯	1/4	12.4×— ×(3.2)	埋土	器肉薄く底部丸く深め。口縁部短かく直立。端部丸まる。口縁部横撫で。体部篋削り。内面撫で。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや密
98-2 53-2	土師器 杯	1/4	13.4×— ×(2.9)	掘形・埋 土・-27	腰部丸く口縁部内湾気味に直立。口縁部横撫で。体部外面篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
98-3 53-3	土師器 杯	1/4	14.0×— ×3.0	埋土	底部偏平。腰部丸く口縁部内湾気味で緩く外傾。口縁部横撫で。体部篋削り。内面撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・細砂混る
98-4 53-4	土師器 杯	1/4	15.6×— ×(2.7)	埋土	底部偏平。口縁部やや直立気味。口唇部丸まる。口縁部横撫で。体部外面篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
98-5 53-5	土師器 杯	1/4	11.2×— ×2.7	埋土	底部浅く口縁は折れて直線的に外傾。口唇部はやや細く丸まる。口縁部横撫で。体部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
98-6 53-6	土師器 杯	1/4	13.2×— ×(2.9)	埋土	器肉薄く平底で浅い。口縁内湾気味に立ち上がる。端部細る。口縁部横撫で。体部篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
98-7 53-7	土師器 杯	1/4	13.4×— ×(3.7)	掘形埋土	平底か。器肉薄く体部上半やや肥厚し直線的に外傾。口縁部横撫で。体部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
98-8 53-8	須恵器 蓋	端部欠損	—×—2.3 摘径3.6	+22	天井部平坦をなす。疑環状摘、断面矩形。天井部右回転篋削り。轆轤成形。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・小石混る
98-9 53-9	須恵器 蓋	摘欠損	19.0×— ×3.4	+5	器肉厚い。体部直線的に開き、口縁部直に折れる。端部細る。轆轤成形。口縁部一部・内面全体に自然釉かかる。	①良好 ②灰 ③やや密・細砂混る
98-10 54-10	須恵器 杯	1/4	12.4×7.6 ×3.2	+7	器肉薄く体部直線的に外傾。轆轤成形。底部回転篋削り後篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密・小石混る
98-11 54-11	須恵器 杯	1/4	13.2×8.8 ×3.5	埋土・ +7~25	底径大きく体部直線的に外傾。轆轤成形。底部回転篋削り後回転篋削り調整。	①良好 ②灰 ③やや密・小石混る
98-12 54-12	須恵器 杯	1/4	13.8×8.2 ×3.5	埋土	腰部弱い丸味。体部ほぼ直線的に外傾。轆轤成形。底部回転篋削り後周縁回転篋削りで調整。	①良好 ②灰白 ③密
98-13 54-13	須恵器 杯	1/4	13.6×8.6 ×3.5	埋土・掘 形-10	底径大。体部直線的に外傾。轆轤成形。底部切り離し後周縁調整。	①良好 ②灰 ③密 黒色粒混る
98-14 54-14	須恵器 杯	1/4	12.4×8.4 ×4.0	B電・埋 土	器肉厚い。体部直線的に外傾し深目。轆轤成形。底部回転篋削り?口縁部横撫で。	①良好 ②灰 ③やや密
98-15 54-15	須恵器 杯	1/4	12.4×7.4 ×4.5	埋土	全体に肥厚。体部深く緩く内湾し口縁部緩く外反。轆轤成形。底部篋削り後回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③密・粗砂混る
98-16 54-16	須恵器 杯	1/4	14.0×7.6 ×4.0	埋土	体部内湾気味に外傾。轆轤成形。口縁部横撫で。底部回転篋削り。	①良好 ②灰白③密・黒色粒混る
98-17 54-17	須恵器 杯	1/4	12.4×7.0 ×4.1	掘形 -12	器肉薄い腰部やや丸味をもち体部やや直線的に外傾。体部外面自然釉。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③密・黒色粒混る
98-18 54-18	須恵器 杯	1/4	12.8×7.6 ×3.8	埋土	腰部やや丸味をもち。体部緩く外反して開く。轆轤成形。静止糸切り。	①良好 ②灰白 ③密
98-19 54-19	須恵器 杯	1/4	—×8.1 ×(1.8)	+5	底部径大きい。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
98-20 54-20	須恵器 杯	1/4	—×5.8 ×(2.9)	埋土・ +29	腰部丸味。見込部隆起顕著。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②鈍い橙 ③やや密
98-21 54-21	土師器 杯	1/2	13.0×— ×(3.3)	掘形・埋 土	腰部やや脹らみをもち体部上半直線的に外傾。端部細る。内外面撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
98-22 54-22	須恵器 椀	1/2	11.4×7.8 ×4.0	+5	器肉薄く体部内湾気味に開き浅目。付高台、直線的でハの字状に大きく開く。轆轤成形。底部右回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③密
98-23 54-23	須恵器 椀	1/4	12.0×7.2 ×4.1	埋土	腰部やや丸味をもち体部内湾気味に外傾しやや浅め。口唇部細まって丸まる。付高台内湾気味に開く。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③やや密
98-24 54-24	内黒土器 椀	1/4	14.4×— ×(4.5)	埋土	体部中位で緩く丸味をもち。口縁部僅かに外反。高台部欠損。口縁部横撫で。轆轤成形。内面横・斜行篋削り。	①良好 ②淡黄 ③やや密・細砂混る
98-25 54-25	須恵器 脚付盤?	脚部	—×—34 ×(7.3)	+15	付高台、高くハの字状に開く。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③密・白色粒混る
98-26 54-26	土師器 甕	1/4	14.2×— (6.0)	床直	器肉極めて薄い。肩部丸く張り口縁直立し上半は外反して開く。肩部外面横方向篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや密
98-27 54-27	土師器 甕	1/2	19.6×— ×(9.8)	+7~8	器肉薄い。肩部張りなく長胴か。口縁部緩く外傾し上半内湾気味に開く。口縁部横撫で。肩部横篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや密
98-28 54-28	土師器 甕 破片	胴部破片	21.6×— ×(13.0)	埋土	器肉薄い。肩部張りなく僅か脹らむ長胴か。口縁部外反し大きく開く。口縁横撫で。胴部外面斜篋削り。内面撫で。内面篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
99-29 54-29	須恵器 杯	1/4	9.8×5.6 ×2.5	埋土	体部直線的に外傾。轆轤成形。底部糸切り後篋削りか。	①酸化気味・良好 ②淡黄 ③やや粗

第2章 遺構と遺物

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
99-30 54-30	須恵器 杯	完形	11.0×4.8 ×4.1	+5	底径小さく腰部に弱い丸味をもつ。口縁部外反気味。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②灰白 ③やや密
99-31 54-31	須恵器 椀	ほぼ完形	12.6×6.2 ×4.4	+32	体部僅かな丸味をもち大きく外傾し口縁部外反。口唇部丸い。付高台、低目。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味・やや軟 ②灰白 ③やや密
99-32 55-32	須恵器 椀	1/2	18.4×11.8 ×7.9	埋土	付高台、やや高くハの字状に開く。体部直線的で大きく開き口縁部さらに外傾。足高高台。轆轤成形。	①酸化・軟 ②橙 ③やや密・細砂混る
99-33 55-33	須恵器 椀	台部	-×7.7 ×(3.2)	埋土	轆轤成形。付高台、高くハの字状に開く。	①良好 ②灰白 ③密・小石混る
99-34 55-34	灰釉陶器 長頸瓶	口縁部 1/4	8.2×- ×(1.5)	埋土	口縁部大きく外反。口唇部外傾気味に立つ。端部尖る。外面施釉。	①良好 ②灰白 ③密
99-35 55-35	灰釉陶器 椀	小片	15.8×- ×2.5	埋土	体部直線的に開き、端部細く丸まる。轆轤成形。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③やや密
99-36 55-36	灰釉陶器 椀	1/2	-×8.8 ×(2.5)	埋土	見込部緩くくぼむ。付高台、低く断面矩形。	①良好 ②灰白 ③やや密・細砂混る
99-37 55-37	灰釉陶器 椀	台部	-×9.2 ×(1.9)	埋土	見込部緩くくぼむ。付高台、外面に段をもちハの字状に開く。内外面施釉。	①良好 ②灰白 ③密
99-38 55-38	羽釜	口縁部 1/2	23.2×- ×8.7 鏝径27.8	埋土・ +20	胴部僅かに張る。口縁部内傾。口唇部幅広く上端面平らで内斜。胴部煤付着。口縁横撫で。胴上位斜〜縦位篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密
99-39 55-39	羽釜	1/4	28.6×-(23)鏝径31.8	埋土	胴部やや張り口縁内傾し口唇部断面矩形。上端面水平。鏝小さく上方へ反る。口縁横撫で。胴部篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや密・小石混る
99-40 55-40	須恵器 甕	肩部 1/2	-×-(8.7) 頸部径39.0	床直	大形甕肩部。自然釉。窯壁の付着が著しい。	①良好 ②灰白 ③やや密・黒色粒浮
99-41 55-41	瓦 平瓦		厚2.3	B電	凹面は布目を強い篋撫でで消す。凸面篋撫で。側面篋調整。	①良好 ②黄灰 ③やや密・白色細粒
99-42 55-42	瓦 平瓦		厚1.4	埋土	凹面布目。凸面縄目後弱い篋撫で。	①やや軟 ②灰白 ③密

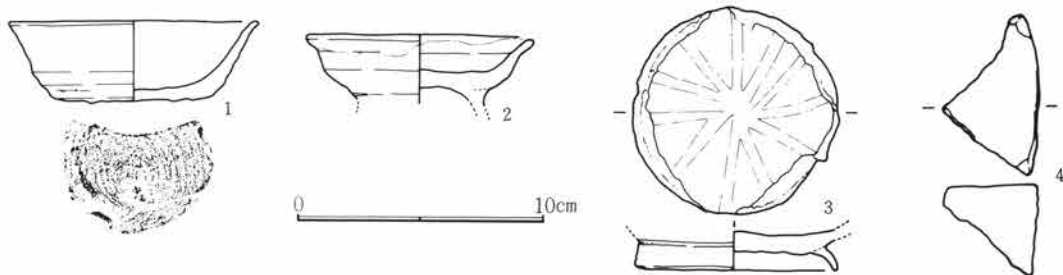


Fig. 100 M44号住居跡出土遺物

M44号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
100-1 56-1	須恵器 杯	1/2	10.0×6.4 ×3.2	床直	底部肥厚し体部下半に丸味をもつ。口縁部僅かにくびれて外傾。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好・酸化気味 ②黄橙 ③やや密
100-2 56-2	須恵器 椀	台部欠損	9.0×- ×(2.8)	竈	体部内湾し上半はややハの字状に開く。台部欠損のため？轆轤成形。内外面燻し付着。	①良好 ②浅黄橙 ③やや粗・細砂混る
100-3 56-3	内黒土器 椀	体部欠損	-×8.0 ×(1.7)	床直	付高台、器肉薄くハの字状に開く。内面黒色処理。放射状篋磨き。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密
100-4 56-4	石製品 砥石		3.8×6.4 ×3.6	埋土	1面使用。重95g	流紋岩

M45号住居跡 (Fig. 101、103・PL. 10、56)

M区第3台地の調査区西端のほぼ中央に位置し、85〜87M20〜22の範囲にある。西側は調査区域外にかかる。重複関係はM43号・M46号・M56号住居跡と切り合う。新旧関係はM46号・M56号住居跡より新しい時期の所産である。M43号住居跡との関係は、調査段階では当跡が古い時期のものとして認識されており、北壁線が消失した状態である。しかし出土遺物からみるかぎり両者には明らかな時間差があり、新旧の関係は

逆転する。

平面形は西側の未調査部分とM43号住居跡の深い掘形によって全容を知ることができないが、南壁に脹らみをもち南東隅が丸くなる略方形を呈すると考えられる。東西は東壁線より約2.7m、南北は南壁線より約3.6mの範囲を検出した。東西軸方位はおよそN-82°-Eを示す。掘形は深く壁高約45cmを測り、床面はほぼ平坦をなし踏み締まりは良好である。南東部隅には貯蔵穴が穿たれ、径約50cm・深さ40cmの略円形である。

竈は東壁のやや南に偏って付設される。燃烧部は楕円形に掘り込まれ、中央部に僅かな段をもつ。遺存は悪く、袖部をはじめ細部の構築状況は不明である。また灰・焼土などの残存も少ない。燃烧部幅約70cm・奥行き65cmを測る。燃烧部内にみられる段が燃烧部と煙道部の境となるものかは不明である。

出土遺物は少量であるが、内面黒色土器のほか灰釉陶器片などがある。

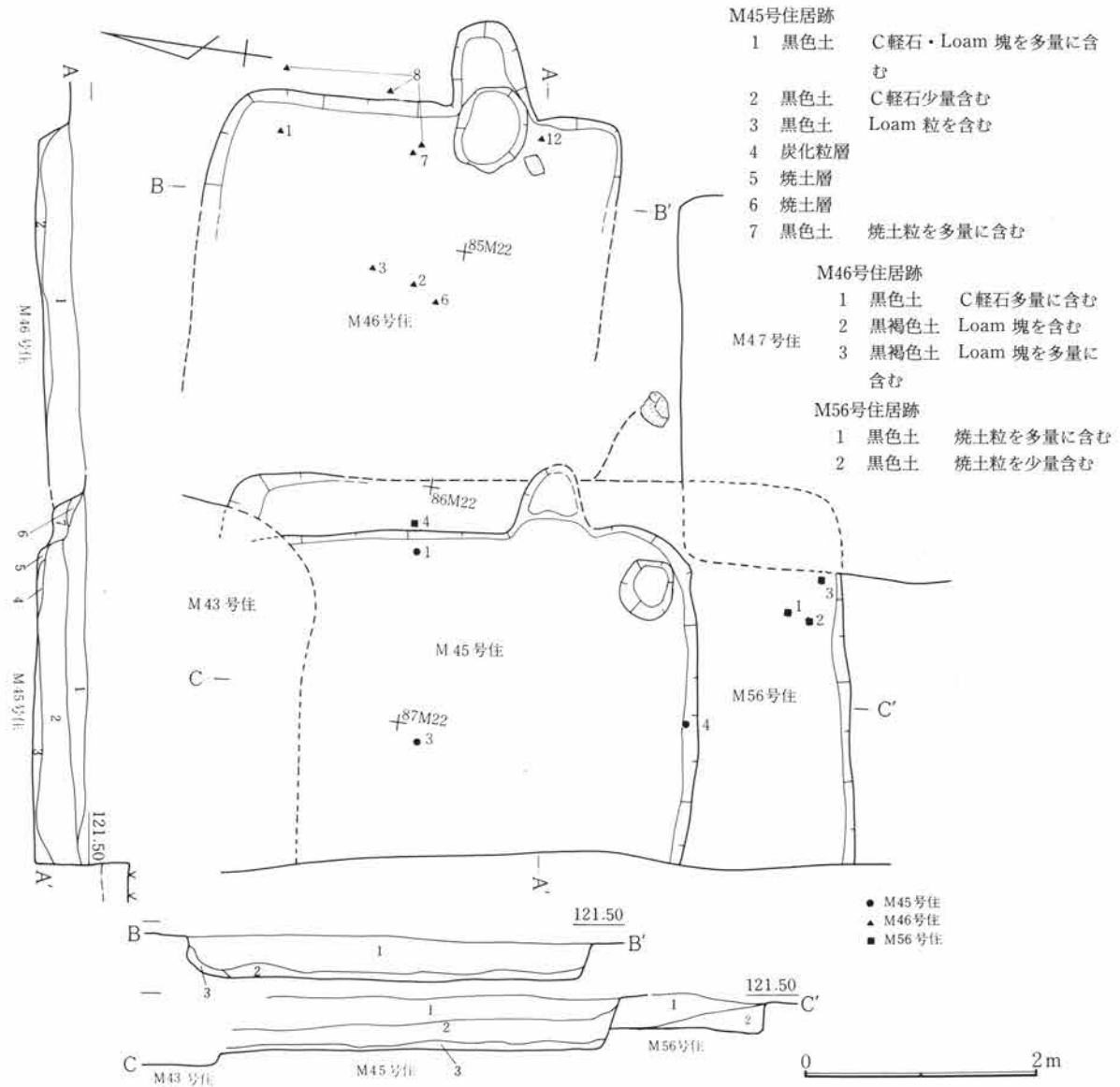
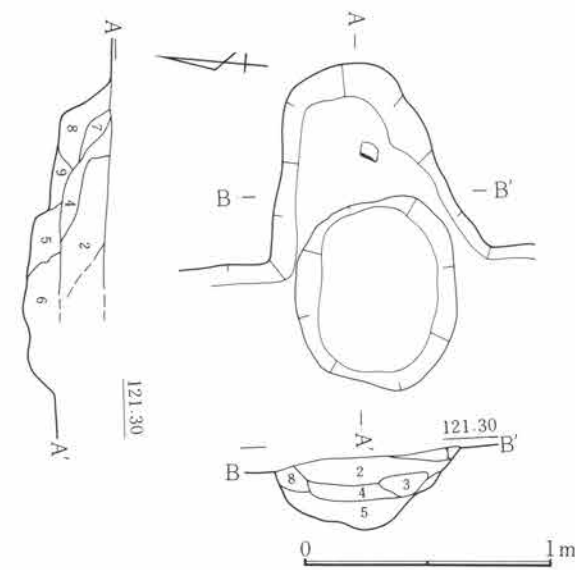


Fig. 101 M45号・M46号・M56号住居跡

第2章 遺構と遺物



M46号住居跡竈

- | | | |
|---|------|-----------------|
| 1 | 黒色土 | 焼土粒含む |
| 2 | 黒色土 | 焼土粒少量含む |
| 3 | 焼土塊層 | |
| 4 | 黒色土 | |
| 5 | 暗褐色土 | C軽石・焼土粒・炭化粒含む |
| 6 | 黒色土 | Loam塊・焼土粒・炭化粒含む |
| 7 | 焼土粒層 | |
| 8 | 暗褐色土 | 焼土粒・炭化粒含む |
| 9 | 褐色土 | Loam塊・焼土粒含む |

Fig. 102 M46号住居跡竈

M46号住居跡 (Fig. 101、102、104、105・PL. 10、56)

M区第3台地の西側中央部に位置し、84・85M 21～23の範囲にある。M43号・M45号・M56号住居跡と重複関係にあると思われるが、調査段階では南・北壁の西側及び西壁線を検出できず新旧の確認はしていない。出土遺物の比較によればM45号・M56号住居跡より旧く、M43号住居跡より僅かに新しい時期の所産である。

平面形は全体を検出できなかったため詳細は不明であるが略方形が想定される。南北長約3.5mを測り、東西は東壁線より約2.7mの範囲まで床面が認められた。東壁線と直交する東西軸方位はN-87°-Eを示すが、竈軸は東壁線と直交せずおよそ10°北へ傾く。壁高は約32cmを測り、床面は全体に軟弱である。貯蔵穴・壁下の溝などの諸施設は検出されない。

竈は東壁にありやや南に偏って付設される。燃焼部は大きく楕円形に掘り込まれ、袖部等の遺存は悪く、構築の状況は不明である。燃焼部前面には60×70cmの浅い楕円形の窪みがあり、火床面の掘形と考えられる。燃焼部幅65cm・奥行き80cm、窪みからの奥行きは1.3mを測る。

出土遺物は竈周辺及び東壁中央部壁際に検出されている。

M56号住居跡 (Fig. 101、106・PL. 10、57)

M区第3台地の西端ほぼ中央に位置し、85～87M20～22の範囲にある。M43号・M45号・M47号住居跡と、またM46号住居跡とも重複していると考えられる。新旧関係はM45号住居跡より旧くM46号住居跡より新しい時期の所産である。なお調査段階ではM43号・M47号住居跡との切り合いでは両者より旧く表されているが、出土遺物の検討からは新旧が逆転する。

平面形は北東隅と南壁の一部を確認したのみで判然としないが略方形を呈すると考えられる。南北長は約5.3mを測り、東西の3.2mの範囲まで検出した。南壁線による東西軸方位はN-88°-Eを示す。壁高は約35cmを測り、床面は踏み締まりが弱い。

竈は検出されていないが推定東壁線よりおよそ60cm東の壁外に人頭大の川原石及び少量の焼土粒の分布が認められており当跡の竈痕の可能性はある。これが該当するとすれば、東壁のやや南に偏った位置に付設されたと考えられる。

出土遺物は少なく、五葉素弁蓮花文の鑑瓦・灰釉陶器片など少量にすぎない。



Fig. 103 M45号住居跡出土遺物

M45号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
103-1 56-1	須恵器 杯	1/2	10.8×3.2 ×4.2	+11	腰部やや丸味をもち体部内湾気味に外傾し深い。底部糸切り、切り損ない。外面轆轤目・内面撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③粗・細砂混る
103-2 56-2	須恵器 椀		13.6×8.6 ×5.2	埋土	体部丸味をもつが大き目に開く。口縁部緩く外反し端部肥厚し断面丸い。付高台、肥厚し低い。内外面燻し。	①良好 ②黒灰 ③やや粗
103-3 56-3	内黒土器 椀	1/2	12.0×6.6 ×5.1	+5	体部内湾して開く。端部丸まる。付高台、大きくハの字状に開き端部断面矩形。轆轤成形。内面黒色処理。	①酸化・良好 ②橙 ③やや粗・細砂混る
103-4 56-4	内黒土器 椀	ほぼ完 形	14.4×8.6 ×6.6	埋土	体部丸味強く口縁部僅かに外反。付高台、高くハの字状に大きく開く。内面見込部格子状・体部横方向篋磨き。内面黒色処理。口縁部煤状附着物。	①良好 ②淡黄 ③やや密・細砂混る
103-5 56-5	灰釉陶器 椀	小片	—×8.6 ×(2.0)	埋土	高台ややハの字状に開く。端部丸まる。内面に少し施釉。	①良好 ②灰白 ③やや密・細砂混る
103-6 56-6	瓦 丸瓦	小片	厚1.1	埋土	凸面撫で。凹面布目痕と篋による撫で。側面篋調整。	①酸化気味・軟 ②鈍い黄橙 ③密

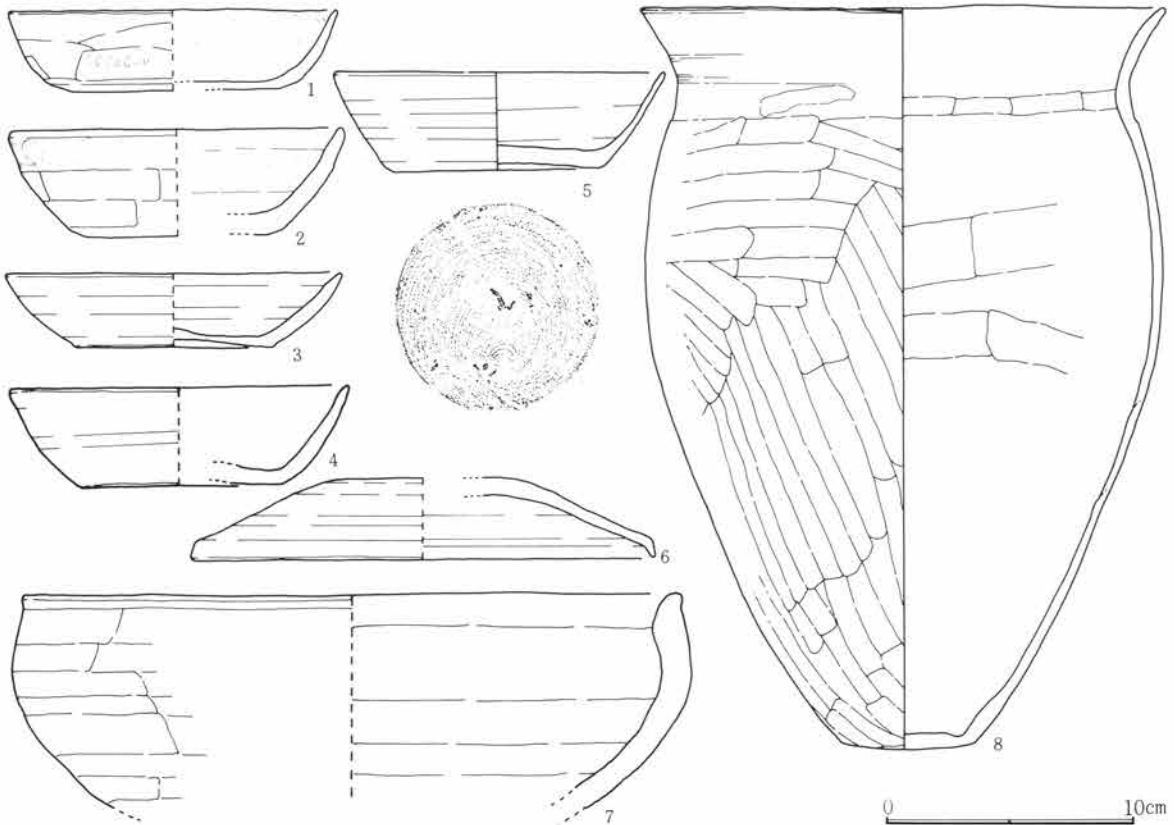


Fig. 104 M46号住居跡出土遺物(1)

第2章 遺構と遺物

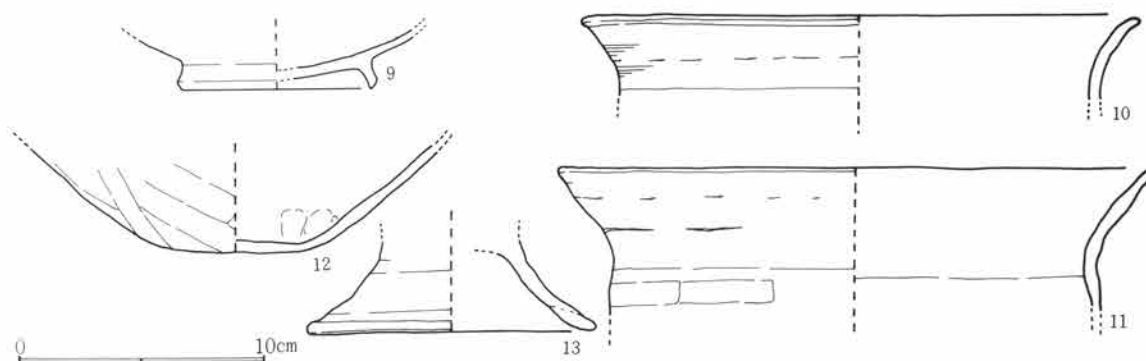


Fig. 105 M46号住居跡出土遺物(2)

M46号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
104-1 56-1	土師器 杯	¼	13.0×8.0 ×3.2	+21	平底気味。体部直線的。口唇部細る。口縁部横撫で。体部2段の横・底部不定方向の笥削り。	①良好 ②鈍い橙 ③密
104-2 56-2	土師器 杯	⅓	13.6×8.0 ×4.2	+8	平底、肥厚する。体部直線的で口縁部強い横撫でで緩く屈する。体部横位2段・底部笥削り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③白色細粒混る
104-3 56-3	須恵器 杯	⅓	13.6×8.0 ×3.0	埋土・ +14	体部中位に緩い脹らみ。口唇部尖る。轆轤成形。回転笥切り後撫で調整。	①良好 ②灰 ③やや密
104-4 56-4	須恵器 杯	¼	13.6×8.0 ×3.9	埋土	体部丸味をもち口縁部緩く外傾。内面口唇部に重ね焼痕。轆轤回転右廻り。底部回転笥切り後笥調整。	①良好 ②灰 ③やや密
104-5 56-5	須恵器 杯	⅓	13.2×8.4 ×3.9	埋土	体部直線的に外傾。底径大きくやや肥厚。体部細る。轆轤成形。左回転糸切り。	①還元 ②灰 ③やや密
104-6 56-6	須恵器 蓋	摘欠損 ⅓	18.6× ×(3.2)	埋土・ +11	天井部平坦をなす。回転笥削り。体部直線的に開き端部は強く折れ直線的で細る。	①良好 ②灰 ③やや密・細砂混る
104-7 56-7	須恵器 鉢	小片	26.2× ×8.5	+5	全体に肥厚。丸味をもつ扁平な体部。口縁部短く内傾気味に立ち口唇部小さく外屈。体部横笥削り。口縁部横撫で。	①良好 ②灰白 ③白色細粒混る
104-8 56-8	土師器 甕	⅓	20.8×5.4 ×29.1	+2~9	底部小さい平底。胴部上位に張りもつ。口縁部緩く外反。胴部上位横位笥削り。下半縦位笥削り。内面横位笥撫で。	①良好 ②橙 ③やや密
105-9 56-9	灰釉陶器 椀	底部	—×8.0 ×(2.3)	埋土	底部から腰部丸味をもつ。付高台、稜明瞭で略三ヶ月。見込部黒色付着物。底部笥調整。刷毛塗り？	①良好 ②鈍い黄 ③密
105-10 56-10	土師器 甕	口縁部	22.2× ×(3.3)	埋土	口縁部緩く外反して開く。内外面横撫で。器肉薄い。	①良好 ②橙 ③粗 白色細粒混る
105-11 56-11	土師器 甕	口縁部	23.8× ×(5.8)	埋土	肩部張りなく長胴か。口縁部長く外反し大きく開き僅か屈し上半外傾。肩部横笥削り。口縁部横撫で。接合痕顕著。	①良好 ②鈍い橙 ③細砂混る
105-12 56-12	土師器 甕	底部	—×7.0 ×(4.1)	+3	底部丸味のある平底。底部から腰部大きく外傾して丸く張る胴を呈すか。腰部縦笥削り。底部笥削り。器肉薄い。	①良好 ②橙 ③細砂混る
105-13 56-13	土師器 台付甕	台部	—×11.5 ×(3.6)	埋土	大きく外反して開く。端部丸い。二次被熱の可能性あり。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗

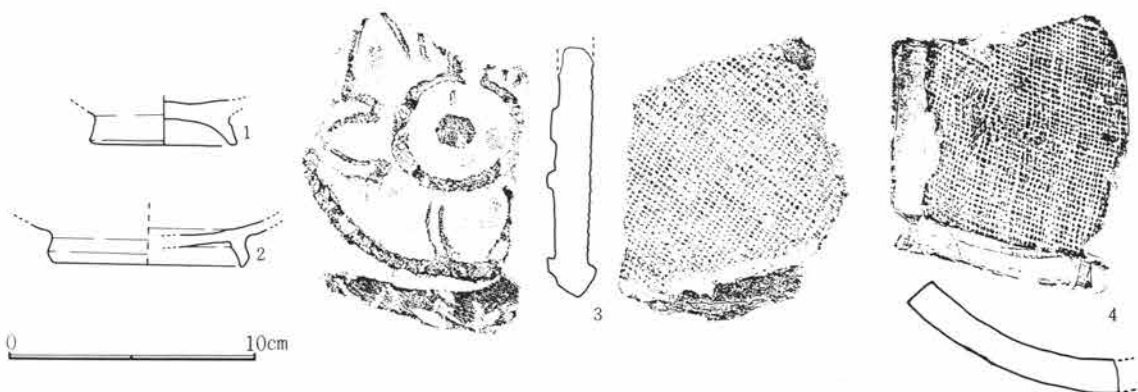


Fig. 106 M56号住居跡出土遺物

M56号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
106-1 57-1	須恵器 椀	底部	—×5.9 ×(1.8)	+19	見込部やや高まる。付高台、やや高く直線的に外傾して開く。	①良 ②灰白 ③細砂多量混る
106-2 57-2	灰釉陶器 椀	底部	—×7.6 ×(1.9)	+10	見込部やや凹む。付高台、僅かに内湾して開き稜が明瞭で略三ヶ月。先端細る。見込部重ね焼き痕。	①良好 ②灰白 ③密
106-3 57-3	瓦 鏝瓦		厚1.5 径15.4	+12	表面五葉単弁蓮花文。裏面布目。	①良好 ②灰白 ③やや密
106-4 57-4	瓦 平瓦		厚1.3	埋土	凹面布目。凸面寛調整、僅かに布目痕。側面寛調整。	①酸化気味・やや軟 ②赤褐 ③やや粗

M47号住居跡 (Fig. 107、109・PL. 10、57)

M区第3台地の調査区西側ほぼ中央に位置し、84～86M19～21の範囲にある。M48号・M51号・M55号住居跡と重複している。新旧関係はM48号住居跡より古い時期の所産で南壁は消失している。M51号住居跡とは不明である。またM43号住居跡との関係は調査段階で当跡が新しいと認識されていたが、出土遺物の検討では古い時期の所産になる。

平面形は東西長・南北長とも約3.4mを測り方形を呈すると思われる。東西軸方位はおおよそN-82°-Eを示す。壁高は約40cmを測り、床面の踏み締まりはやや弱い。床土は中央部に Loam 塊を混じえ、粘性のある暗褐色土を貼床として用いている。貼床下には径90cm・深さ約30cmの楕円形を呈す床下土坑が検出されている。土坑内は Loam 塊を多量に含み粘性の強い黒褐色土で埋められていた。Pit は8個みられるが支柱穴はP₁～P₄である。P₁は上径30cm・下径20cm・深さ45cm、P₂は上径20cm・下径15cm・深さ42cm、P₃は上径20cm・下径10cm・深さ35cm、P₄は上径35cm・下径10cm・深さ42cmを測り、P₂・P₃・P₄は略方形を呈す。各柱間はP₁・P₂は1.5m、P₂・P₃は1.75m、P₃・P₄は1.65m、P₁・P₄は1.6mである。またP₁とP₂の間に穿たれるP₅は補助柱と考えられる。竈・炉などは検出されなかった。

出土遺物は少なく、ほとんど埋土中のものである。

M48号住居跡 (Fig. 107、108、110、111・PL. 10、57、58)

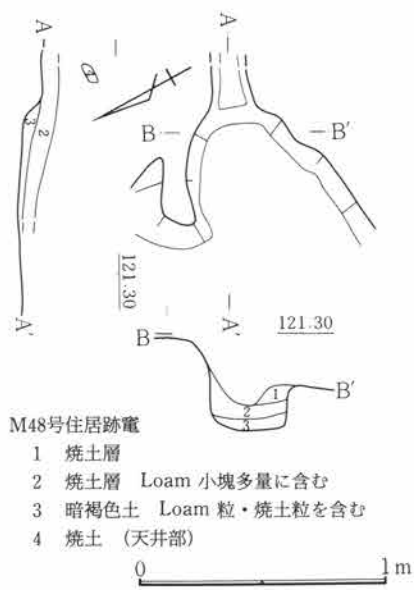
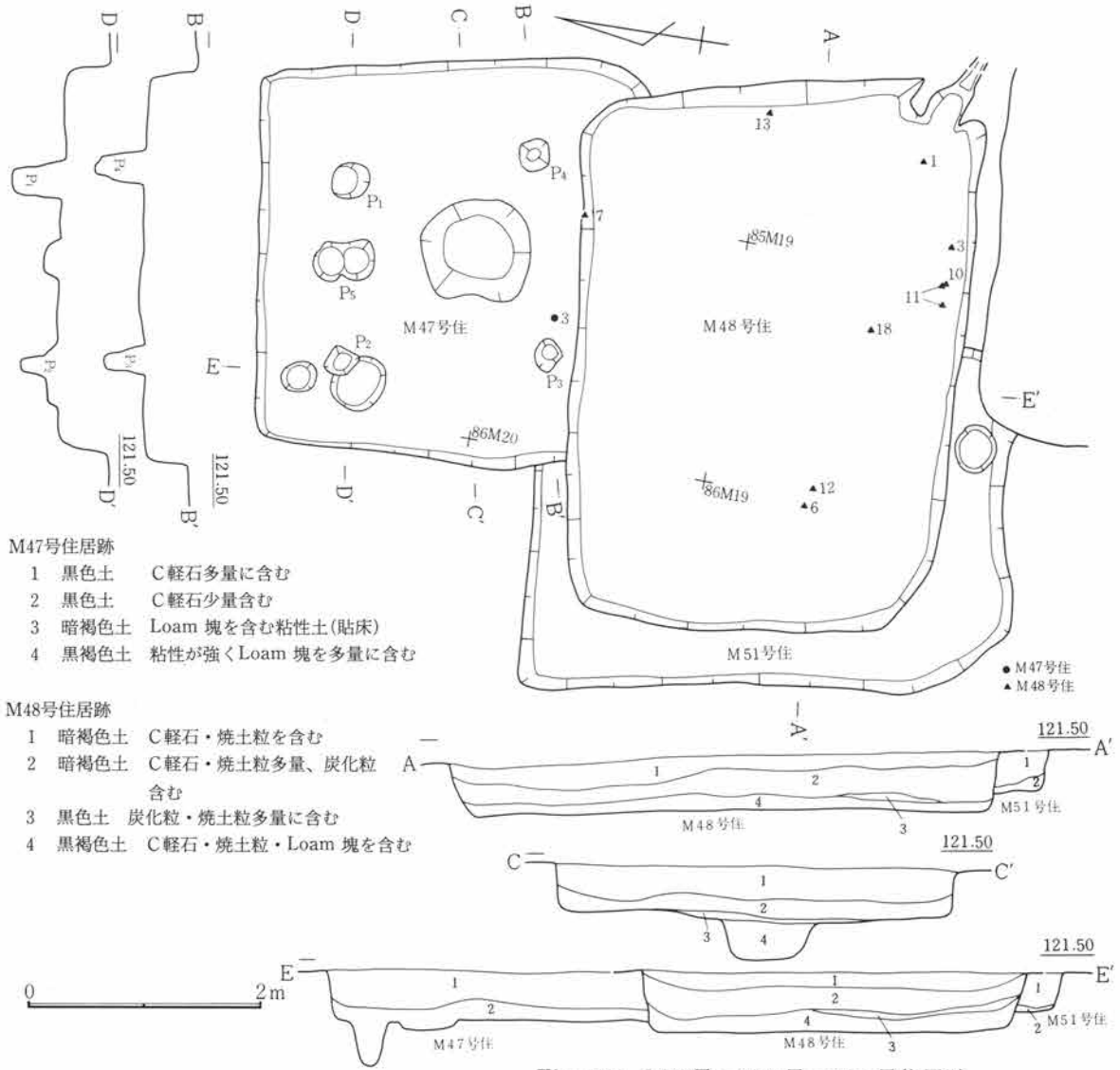
M区第3台地の調査区西側ほぼ中央に位置し、84～86M18・19の範囲にある。M47号・M51号住居跡と重複関係にあり、また竈の煙道先端部が僅かにM52号住居跡にかかると見られる。新旧は三者より新しい時期の所産である。

平面形は東西に長軸をもつ方形を呈するが南西部隅はやや歪んで隅丸を呈する。東西長4.6m・南北長約3.35mを測り、東西軸方位はおおよそN-83°-Eを示す。壁高は約50cmを測り深い掘形である。床面はほぼ平坦をなし比較的堅い踏み締まりである。貯蔵穴・壁下の溝などの諸施設は検出されない。

竈は東壁と南壁の変換部に付設され、竈軸線は北西隅と対角線上にある。袖部は掘形を残し、住居内に張り出す形態であり、左袖の張り出しが顕著で壁線から約35cmである。燃焼部は幅狭く作られ僅かに立ち上がって煙道部に至る。煙道部は水平に近く、僅かに天井部が残る。先端部分がM52号住居跡との切り合いで確認が遅れ全体は検出されなかった。燃焼部幅約60cm・奥行き55cm、煙道部は約25cmまで確認された。

出土遺物は埋土中のものが多く、当跡とかなり時間差を示すものもある。なお須恵器甕片の転用硯2点があり、うち1点は丁寧な成調整を施し風字を形取ったものである。この転用硯は南に隣接するM42号住居跡の片身と接合する。

第2章 遺構と遺物



M51号住居跡 (Fig. 107、111・PL. 10、58)

M区第3台地の調査区西側ほぼ中央に位置し、85・86M17~19の範囲にある。M47号・M48号・M50号住居跡と重複している。新旧関係はM48号住居跡より旧く、他よりは新しい時期の所産である。

平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈すると考えられるが、東壁線と床面のほとんどは掘形の深いM48号住居跡によって消失している。また南西部隅は大きく歪む。南北長約4.1m・東西長2.9mを測り東西軸方位はおよそN-80°-Eを示す。壁高は約30cmを測り、床面の検出範囲は壁際のためか踏み締めりは弱い。

竈の存在は確認できないが、消失部分の大きい東壁にあったと思われる。その他貯蔵穴などの諸施設は検出されていない。

出土遺物は極めて少量である。

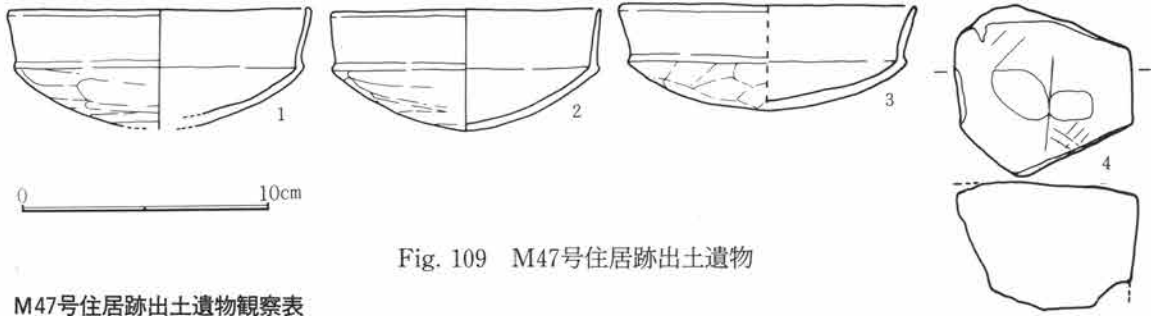


Fig. 109 M47号住居跡出土遺物

M47号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
109-1 57-1	土師器 杯	1/4	12.0×— ×(4.7)	埋土	底部浅く偏平。受け部鋭く稜をなす。口縁部高く直線的で僅かに外傾。端部は強く内屈。口縁部横撫で。底部笕削り。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
109-2 57-2	土師器 杯	1/4	10.8×— ×4.7	埋土	底部深く尖り気味。受け部鋭く稜をなす。口縁部高く直線的で僅かに外傾。口縁部横撫でで底部笕削り。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
109-3 57-3	土師器 杯	1/4	11.8×— ×4.2	+12	底部浅く偏平。受け部鋭く稜をなす。口縁部高く外反して開く。口縁内外面横撫で。底部笕削り。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
109-4 57-4	石製品 砥石		厚5.0 重103g	埋土	1面に刃傷痕あり。2面に使用痕。	流紋岩

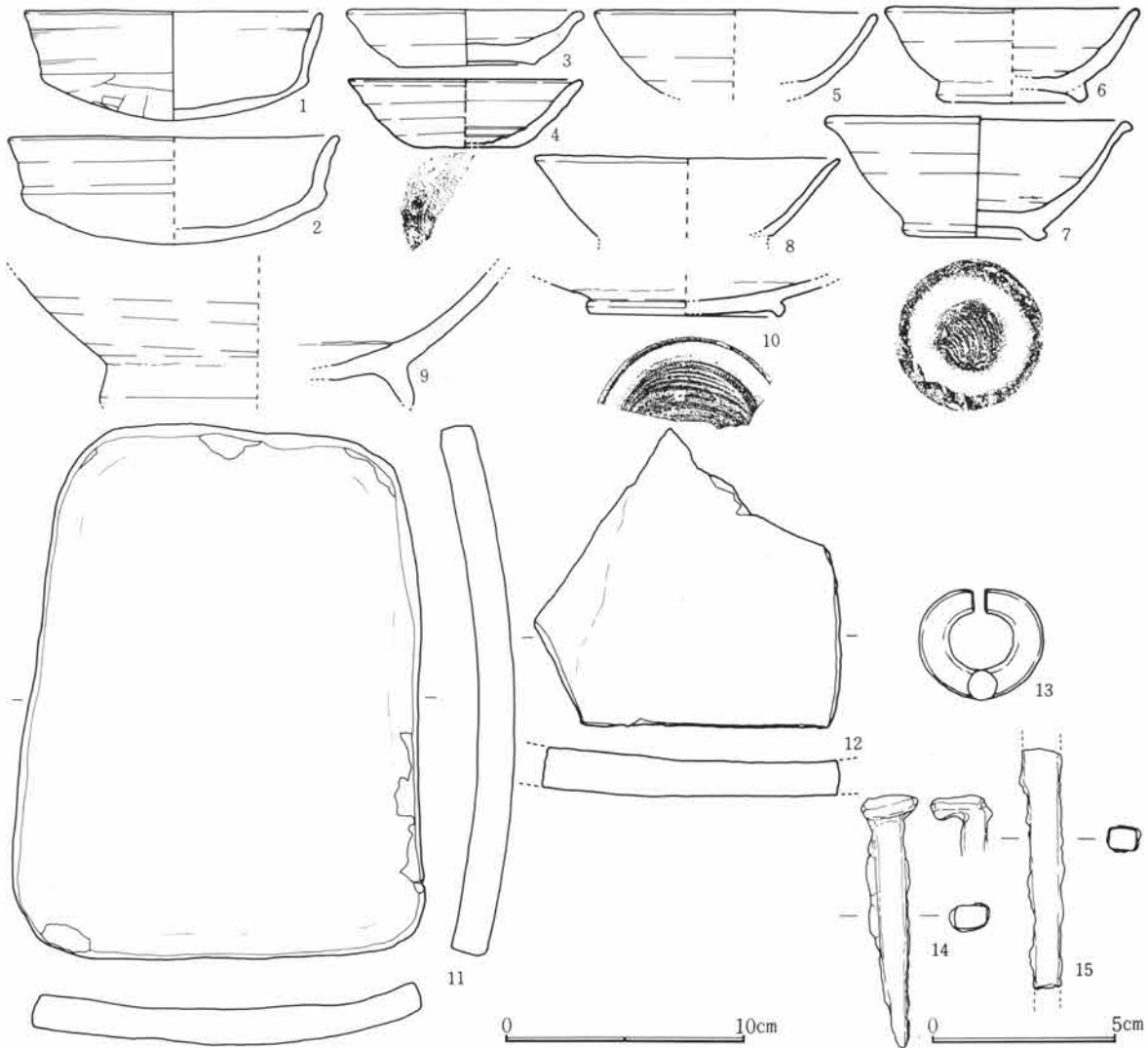


Fig. 110 M48号住居跡出土遺物(1)

第2章 遺構と遺物

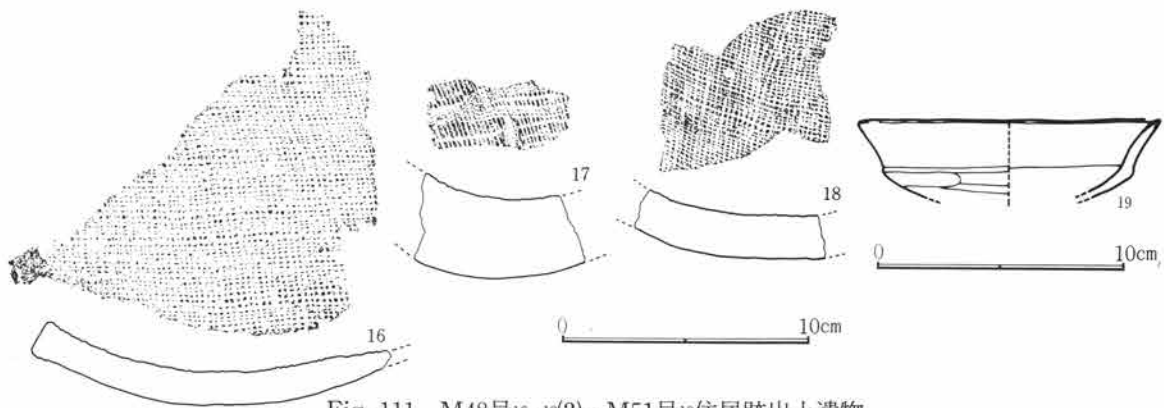


Fig. 111 M48号¹⁶⁻¹⁸⁽²⁾・M51号¹⁹住居跡出土遺物

M48号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
110-1 57-1	土師器 杯	完形	12.2× ×(4.5)	+12	底部やや浅く受け部で強く屈し口縁部高く僅かに外傾して開く。底部不定方向の篋削り。	①良好 ②橙 ③細砂混る
110-2 57-2	土師器 杯	ㄨ	13.6× ×(4.4)	埋土	底部浅く受け部で強く屈し口縁部中位は弱く屈して凹線状をなす。口縁部緩く外反して開く。摩擦顕著。	①良好 ②橙 ③細砂混る
110-3 57-3	須恵器 杯	ほぼ完形	9.8×5.6 ×2.4	埋土	全体に肥厚。体部中位で屈し口縁部緩く外反。口唇部丸まる。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③細砂混る
110-4 57-4	須恵器 杯	ㄨ	9.6×4.4 ×2.8	埋土	腰部丸味をもち底部薄い。口縁部緩く外反。轆轤成形。回転糸切り。内面見込部3状凹線。	①還元気味 ②灰白 ③やや粗・砂粒含む
110-5 57-5	須恵器 杯?	破片	11.6× ×3.4	埋土	体部丸味をもち内湾して開く。口唇部やや矩形。	①良好 ②鈍い黄橙 ③細砂混る
110-6 57-6	須恵器 碗	ㄨ	10.4×6.2 ×3.8	+19	全体に肥厚。体部浅く丸味をもって開く。口縁部僅かに外反。付高台、断面矩形。やや雑な作り。	①良好 ②灰白 ③やや粗・小石混る
110-7 57-7	須恵器 碗	ほぼ完形	12.5×5.9 ×5.0	埋土	体部やや丸味。口縁部緩く外反し口唇部丸まる。付高台、低く作り雑。内外面黒色の燻し。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②黒灰 ③やや粗
110-8 57-8	須恵器? 碗?	ㄨ	12.4× (3.2)	埋土	体部僅かに丸味をもち口縁部は緩く外傾して開く。碗形土器の底部剥離か。回転糸切り痕残る。	①酸化・良好 ②黄橙 ③やや粗・細砂
110-9 57-9	灰釉陶器 壺?	底部	—×— ×5.4	埋土	腰部丸味をもつか。腰部回転篋削り。内面に重ね焼き痕あり。付高台、やや高くハの字状に開く。	①良好 ②灰白 ③やや粗
110-10 57-10	灰釉陶器 皿?	底部	—×7.6 ×(1.5)	+25	底部肥厚。付高台、低く丸まる。底部調整雑。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③密
110-11 57-11	須恵器甕 転用硯	完形	最大幅17.8最大 長21.6厚1.4	埋土	甕内面を転用。硯面摩擦顕著で光沢あり。側面丁寧な擦調整。接地面は耗り痕あり。	①良好 ②灰 ③密
110-12 57-12	須恵器甕 転用硯	破片	最大幅12.5最大 長12.0厚1.5	+19	甕内面を転用。硯面摩擦顕著。光沢あり。	①良好 ②灰 ③密
110-13 57-13	銅製品 耳環	完形	径3.3×3.0 身径0.6	埋土	鍍金なし。重31.6g	
110-14 57-14	鉄器 角釘	完形	長7.0 幅0.6×0.9	埋土	頭部形状折頭式。身部やや偏平。	
110-15 57-15	鉄器 角釘?	身部	長(6.5)	埋土	頭部・端部欠損。角釘身部か。	
111-16 58-16	瓦 平瓦	破片	厚1.3	埋土	凹面布目。凸面撫で・篋削り。側面篋削り。二次焼成を受ける。	①酸化気味・良好 ②鈍い橙 ③やや密
111-17 58-17	瓦 丸瓦	破片	厚3.2	埋土	凹面布目。凸面撫で。	①良好 ②灰 ③密
111-18 58-18	瓦 平瓦	破片	厚1.7	+20	凹面布目。凸面撫で。	①良好 ②灰白 ③やや密

M51号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
111-19 58-1	土師器 杯	ㄨ	(12.0)× ×(3.0)	埋土	浅い丸底から弱く外反して大きく開く口縁。底部篋削り。口縁部横撫で。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや密

M54号住居跡 (Fig. 112、113、115・PL. 11、58)

M区第3台地調査区域のほぼ中央に位置し、80~82M19~21の範囲にある。M53号・M55号・M57号住居跡と重複している。新旧関係はM53号より旧く、M55号住居跡より新しい時期の所産である。またM57号住居跡との新旧は調査段階で判然としなかったため両者とも壁線は不明である。遺物の比較からも近接した時期と考えられる。当跡の西半部はM53号・M57号住居跡との重複のため全容を知ることはできない。かろうじて竈の周辺部分が検出できたにすぎない。

平面形・規模は不明である。竈の基軸方位はN-87°-Eを示す。壁高は約18cmを測り、竈周辺部は比較的良好に踏み固まる。南東隅に土坑が検出され、当初M57号住居跡の床下土坑と認識されていたが、位置的には当跡に所属すると考えられ、貯蔵穴として扱う。径1×0.6m・深さ約24cmを測り不整楕円形を呈する。

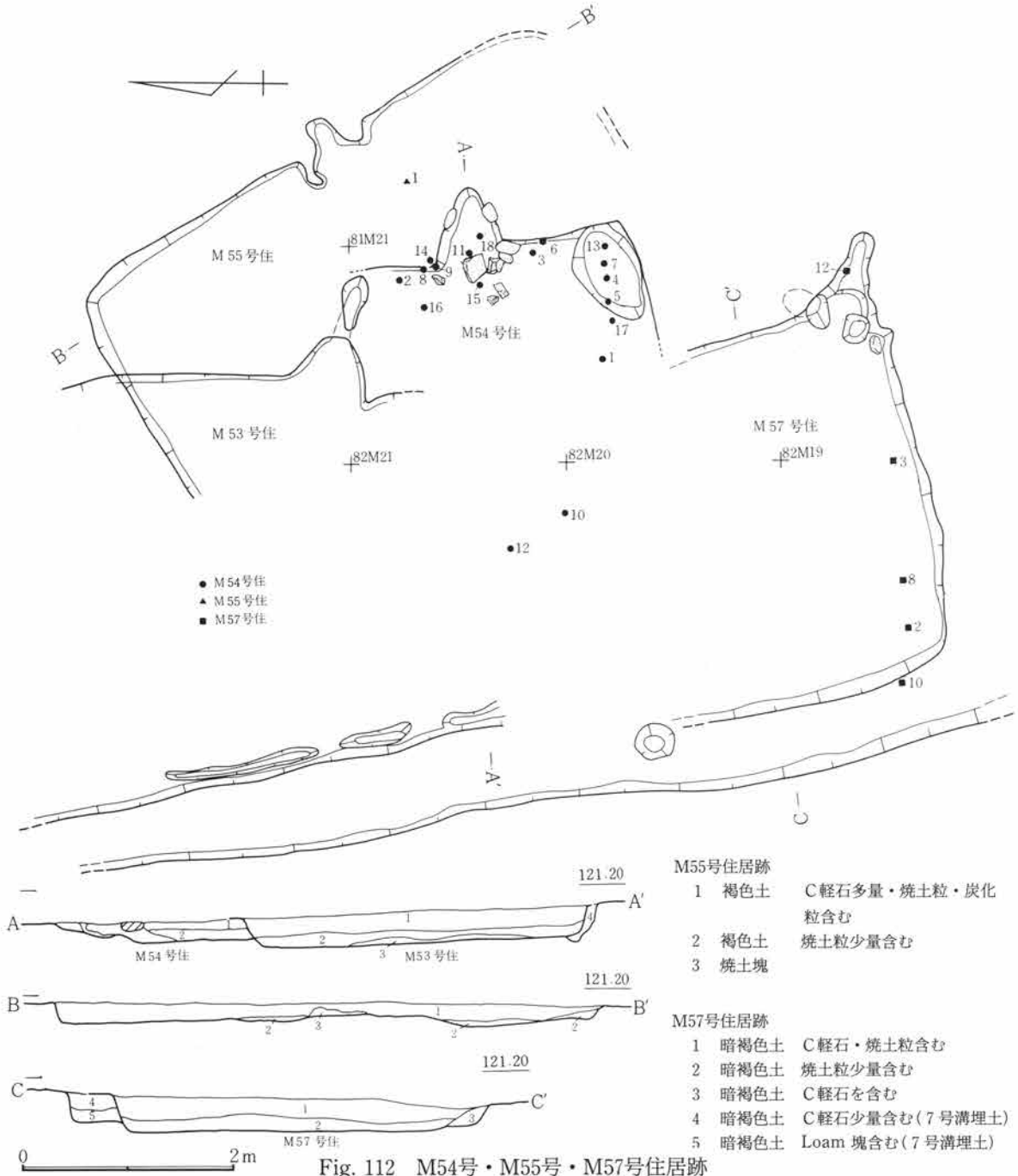


Fig. 112 M54号・M55号・M57号住居跡

第2章 遺構と遺物

竈は東壁に付設され、袖部は壁線上にあり、右袖には凝灰岩質の加工材が埋設される。また燃焼部の奥まった両側にも同質の加工材が埋設される。燃焼部のやや手前に火床部と思われる僅かな窪みがある。焚口部幅約80cm・燃焼部奥行き約90cmを測る。

出土遺物は、竈周辺部及び貯蔵穴に多い。

M55号住居跡 (Fig. 112、116・PL. 11、59)

M区第3台地調査区域のほぼ中央に位置し、80・81M19～22の範囲にある。M53号・M54号・M57号住居跡と重複しており、これらより古い時期の所産である。西半での重複が著しく、東壁を除き南・北壁はその一部の壁線を検出したのみであり、とくに西壁は全くたどることはできない。

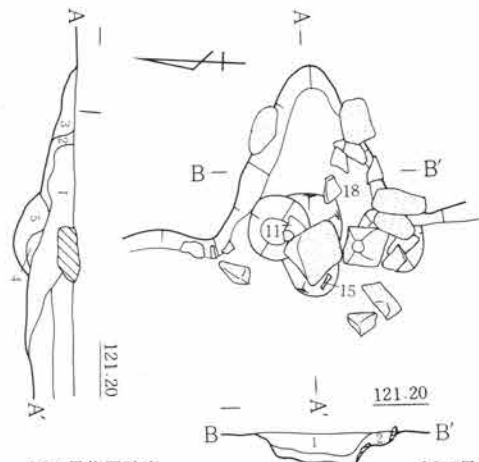
平面形はほぼ方形を呈するものと思われる。南北長は約4.9mを測り、東西は東壁線より約3.4mの範囲まで確認できた。東壁線に直交する東西軸方位はおよそN-61°-Eを示す。壁高は約20cmを測り、床面は東半部についてのみ例えば竈前面の中央部が比較的強く踏み締まり、南・北側はやや軟弱で僅かに窪む。柱穴・貯蔵穴などの諸施設は検出されていない。

竈は東壁のほぼ中央部に付設される。袖部は掘形を住居内に突出させる形態をもつが、右袖部の遺存は悪い。焼土・灰などの分布は薄く、竈内の焼土化もそれほど顕著には残っていない。袖部の長さは東壁より左袖で約35cm・右袖で20cm突出する。袖間内法約40cm、燃焼部奥行き約60cmを測る。

出土遺物は少量である。

M57号住居跡 (Fig. 112、114、116、117・PL. 11、59)

M区第3台地調査区のほぼ中央に位置し、81～83M18・19の範囲にある。M54号・M55号住居跡と重複しており、新旧関係はM55号住居跡より新しい時期の所産である。M54号住居跡との新旧関係は調査段階でも判然とせず、このため東から北にかけてその壁線をあきらかにできなかった。また出土遺物の検討からも接近した時期様相があり明らかではない。



M54号住居跡竈

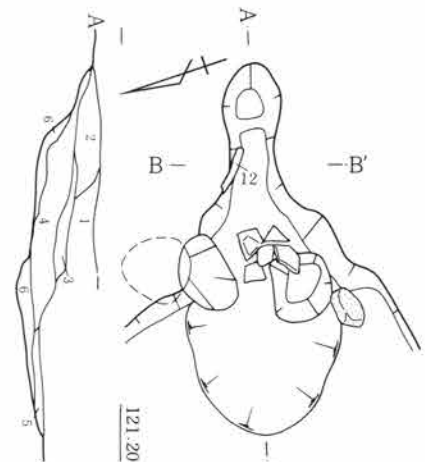
- 1 黒色土 焼土粒多量に含む
- 2 黒褐色土 焼土粒多量に含む
- 3 黒色土 Loam 粒含む
- 4 黒色土 焼土を若干含む
- 5 明褐色土 多量の焼土を含む

M57号住居跡竈

- 1 黒色土 焼土粒・Loam 粒含む
- 2 黒色土 多量の焼土含む
- 3 黒色土 炭化粒を含む
- 4 黒色土 焼土粒・炭化粒・Loam 塊含む
- 5 暗褐色土 Loam 粒・焼土粒を含む
- 6 焼土



Fig. 113 M54号住居跡竈



M57号住居跡竈

- 1 黒色土 焼土粒・Loam 粒含む
- 2 黒色土 多量の焼土含む
- 3 黒色土 炭化粒を含む
- 4 黒色土 焼土粒・炭化粒・Loam 塊含む
- 5 暗褐色土 Loam 粒・焼土粒を含む
- 6 焼土



Fig. 114 M57号住居跡竈

平面形はほぼ方形を呈すると考えられ、東西長約3.5mを測り、南北は南壁線より約3mの範囲まで確認できた。東西軸方位はおよそN-78°-Eを示す。壁高は約30cmを測り、床面はほぼ平坦をなすが、北側の踏み締まりは弱く全体を追跡できていない。貯蔵穴・壁下の溝などは検出されなかった。

竈は東壁と南壁の変換部南東隅に付設され、竈軸線は東壁線との直角軸から28°南へ振れておりN-106°-Eを示す。方形気味に掘り込まれた燃焼部から短い煙道が延びている。東・南壁の壁線に構築材を埋設した掘形がある。左側の掘形は大きく外側へ傾斜しているが、住居跡の廃棄時か後に強い重圧がかかったものと思われる。この掘形から住居内に焼土層が形成されておりこれが燃焼部の火床面とすれば、袖部は住居内に突出するようになり左右の掘形は袖部にはならない。火床面幅60cm、火床面西端からの燃焼部奥行き約90cm。煙道部は燃焼部から緩い傾斜で幅狭く延び、先端部で10cm程度の段差をもつ。煙道部長さ50cmを測る。

出土遺物は少量であるが、灰釉陶器片が目立つ。

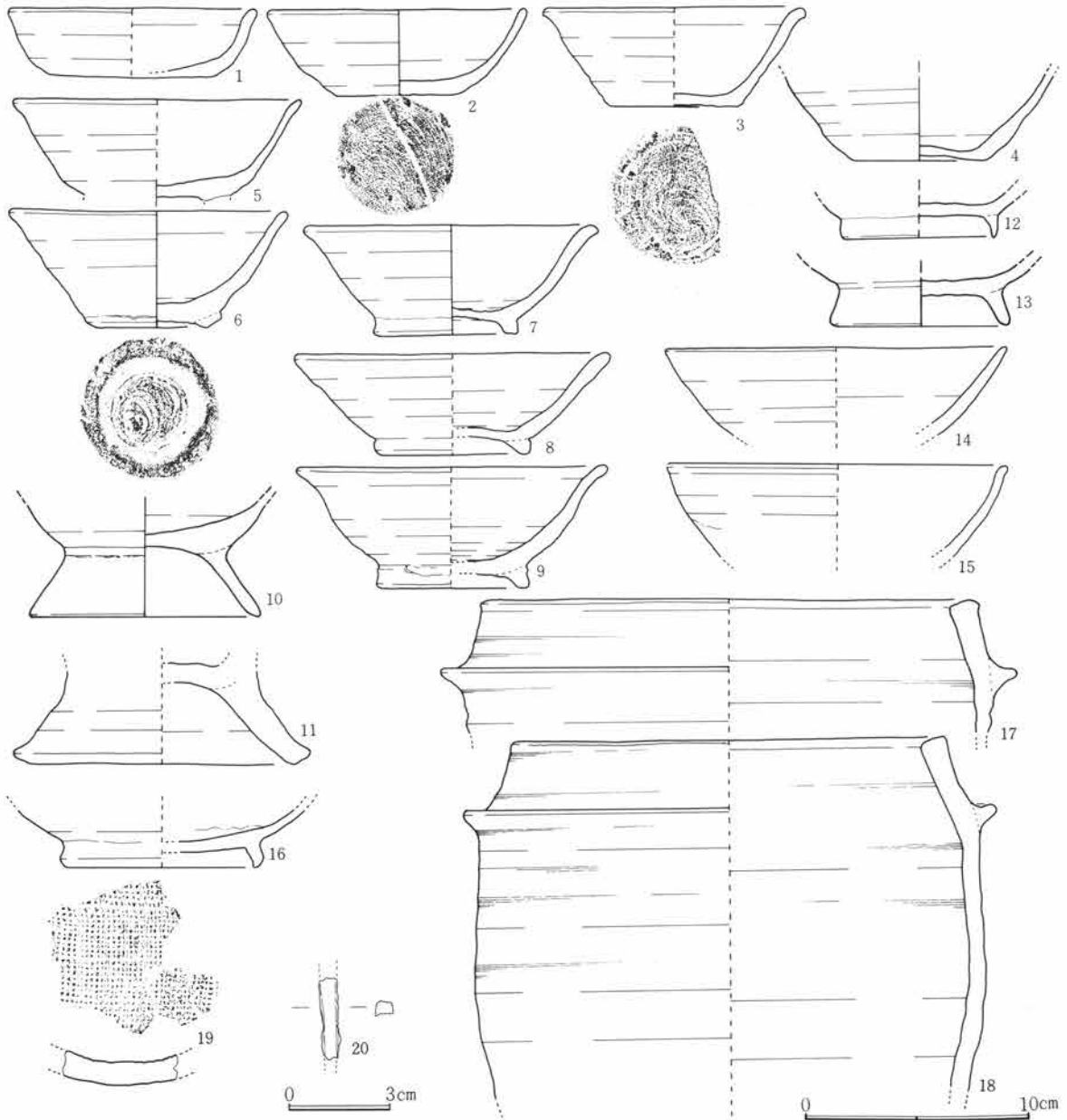


Fig. 115 M54号住居跡出土遺物

第2章 遺構と遺物

M54号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
115-1 58-1	須恵器 杯	1/4	10.9×7.2 ×3.0	+9	体部丸味をもち口縁部は僅かに外反。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
115-2 58-2	須恵器 杯	1/4	11.4×5.2 ×3.8	埋土 +6	体部丸味をもち内湾して開く。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②浅 黄橙 ③細砂混る
115-3 58-3	須恵器 杯	3/4	11.5×5.6 ×4.3	+13	体部深く直線的に外傾。口縁部やや外反し口唇部肥厚し外屈気味。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②鈍 い黄橙 ③細砂混る
115-4 58-4	須恵器 杯	口縁部 欠損	—×5.8 ×(3.7)	床下土坑	深目の体部。腰部に張りをもちくびれて体部内湾気味に開くか。轆轤成形。底部右回転糸切り。	①還元・良好 ②灰 ③やや粗
115-5 58-5	須恵器 碗	1/4	12.6×(6. 4)×(4.4)	床下土坑	腰部に丸味をもち体部器肉薄く直線的に開く。口縁部僅かに外反。付高台欠落。轆轤成形。底部右回転糸切り。	①酸化気味・やや軟 ②灰褐 ③白色粒混
115-6 58-6	須恵器 碗	ほぼ完 形	12.3×4.9 ×5.2	埋土	+2 腰部くびれて体部やや深く直線的に開く。轆轤目強い。付高台、低く極めて雑。右回転糸切り。二次被熱。	①酸化・やや軟 鈍い橙 ③小石混る
115-7 58-7	須恵器 碗	3/4	13.1×6.3 ×4.9	床下土坑	轆轤成形。右回転糸切り。付高台。内面見込部に渦巻痕顕著。	①還元 ②灰白 ③白色粒混る
115-8 58-8	須恵器 碗	3/4	13.9×6.4 ×4.4	+2	底部薄い。体部やや浅く僅かに丸味をもつ。口縁部肥厚し外傾する。口唇部丸まる。付高台、雑な接合。断面丸い。轆轤成形。見込部に底部・体部の接合痕残る。	①良好 ②灰白 ③細砂混る
115-9 58-9	須恵器 碗	1/4	13.7×6.7 ×5.3	+6	器肉厚い。体部やや浅く丸味をもち大きく開く。口縁部外反し口唇部丸まる。轆轤成形。付高台、接合雑、断面矩形。	①酸化・やや軟 ② 鈍い橙 ③細砂混る
115-10 58-10	須恵器 碗	底部	—×10.1 ×(5.1)	埋土	付高台、高く大きくハの字状に開く。底部渦巻き痕あり。見込部に鉄分附着。	①酸化気味 ②淡黄 ③白色粒混る
115-11 58-11	須恵器 碗	高台部	—×13.0 ×(4.4)	竈	大形。付高台、器肉厚く高くハの字状に開く。端部断面矩形。轆轤成形。	①酸化・良好 ②浅 黄橙 ③細砂混る
115-12 58-12	内黒土器 碗	底部	—×6.8 ×(1.9)	床下土坑	付高台、内湾気味に立つ。内面黒色処理、光沢なし。轆轤成形。	①酸化気味 ②浅黄 橙 ③赤色粒混る
115-13 58-13	須恵器 碗	台部	—×7.8 ×(2.7)	床下土坑	付高台、やや高く直線的に開く。端部丸い。底部糸切り痕僅かに残る。轆轤成形。	①酸化気味 ②灰白 ③やや密
115-14 58-14	須恵器 碗	1/4	15.0×— ×(3.8)	埋土・ +15	体部丸味をもち大きく開く。口唇部細る。轆轤成形。	①酸化・良好 ②浅 黄橙 ③細砂混る
115-15 58-15	灰釉陶器 碗	破片	15.0×— ×(4.1)	竈	端部内湾し口唇部丸まり緩く外屈。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③密
115-16 58-16	灰釉陶器 碗	高台部	—×8.9 ×(2.5)	+18	腰部やや丸味をもつ。付高台、やや高目で端部は内傾して立つ。断面矩形。轆轤成形。底部篋削り。	①良好 ②灰白 ③密
115-17 58-17	須恵器 羽釜	口縁部	22.0×— ×(5.8)	+26	鏝ほぼ水平につく。口縁部肥厚し内傾する。口唇部幅広く断面矩形。口縁・胴部回転篋調整。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る
115-18 58-18	須恵器 羽釜	胴部	19.0×— ×(15.5)	竈埋土	鏝上方へ僅かに外反し断面丸い。体部丸味少ない。口縁部外反気味に内傾。口唇部幅広く断面矩形。	①酸化・良好 ②淡 黄 ③細砂混る
115-19 58-19	瓦 平瓦		厚1.0	埋土	凹面粗い布目。凸面撫で。薄い。	①酸化気味 ②浅黄 橙 ③やや粗
115-20 58-20	鉄器		幅0.5×0.4 長(2.5)	埋土	両端部欠損。角釘身部か。	

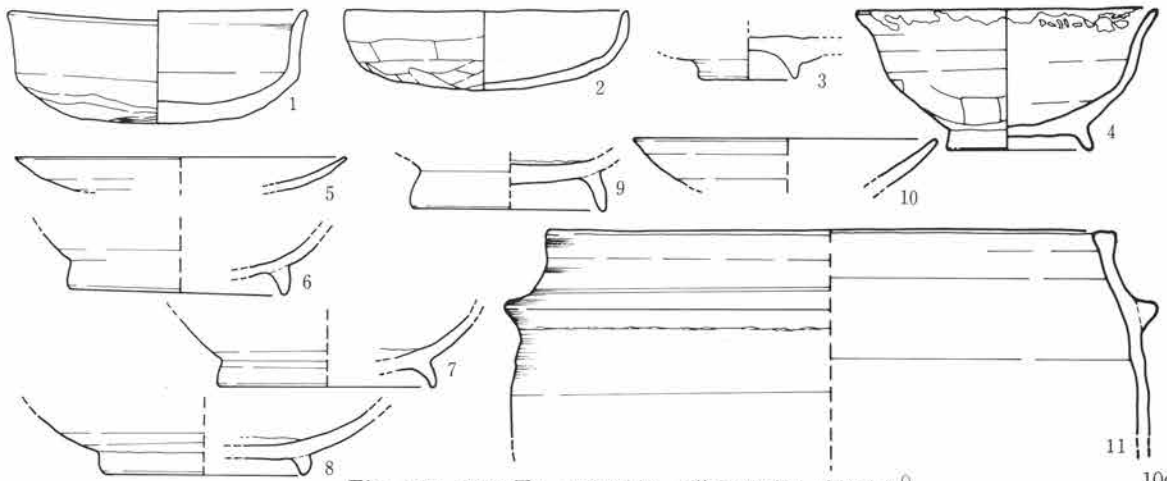


Fig. 116 M55号1・M57号2~11住居跡出土遺物(1)

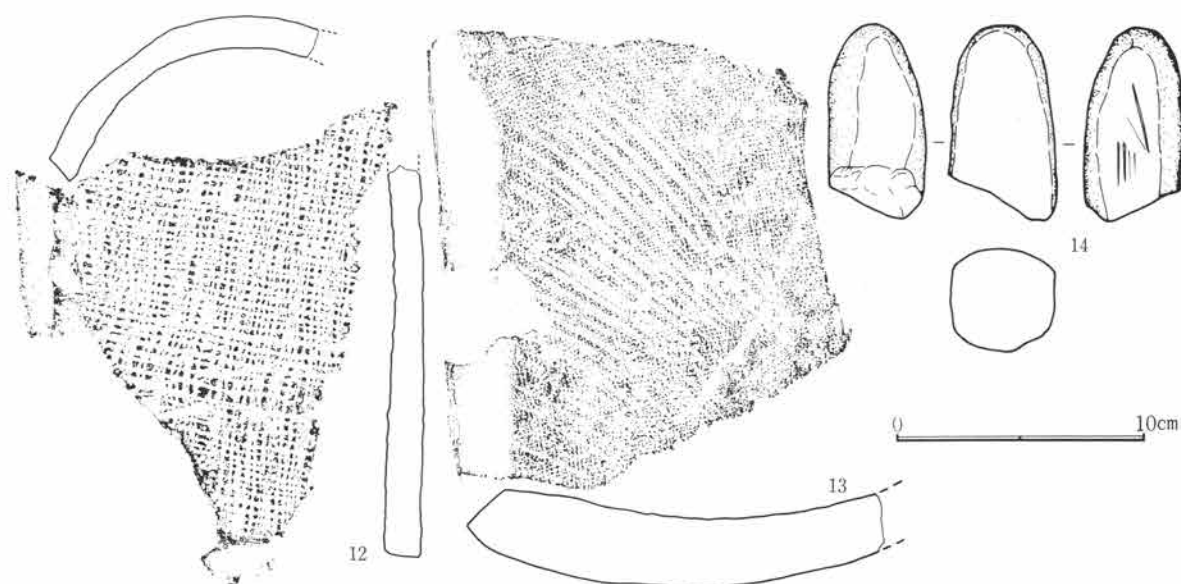


Fig. 117 M57号住居跡出土遺物(2)

M55号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
116-1 59-1	土師器 杯	1/2	12.1×— ×(4.5)	+6	器肉厚目。底部浅く丸味をもつ。受け部で強く屈し口縁部直立気味に緩く外反し口唇部さらに反る。口縁部内外面横撫で。底部篋削り。	①良好・軟 ②橙 ③密

M57号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
116-2 59-1	土師器 杯	完形	11.3×— ×3.2	埋土	底部丸く口縁部短く直立。口唇部細る。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗
116-3 59-2	須恵器 蓋?	摘部	—×—(2.2) 摘径4.0	+24	撫で調整。蓋摘の可能性あり	①酸化気味 ②浅黄 橙 ③やや粗
116-4 59-3	須恵器 椀	1/2	12.0×5.8 ×5.6	床直	体部中位に脹らみをもち口縁部は外傾して開く。口唇部丸い。付高台、端部丸くハの字状に開く。口唇部内外面に黒色付着物(油煙)。腰部篋削りか。轆轤成形。	①酸化気味 ②淡黄 ③やや粗
116-5 59-4	灰釉陶器 皿	小片	13.2×— ×(1.4)	埋土	腰部で僅かに屈し上半は直線的に開く。器肉薄く口唇部尖る。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③密
116-6 59-5	灰釉陶器 椀	小片	—×8.8 ×(2.3)	埋土	高台部内湾気味に開く。端部丸い。	①良好 ②灰白 ③密
116-7 59-6	灰釉陶器 椀	底部	—×8.8 ×(2.8)	埋土	腰部丸い。付高台、内湾して開く。端部丸い。	①酸化気味 ②淡黄 ③密
116-8 59-7	灰釉陶器 椀	小片	—×8.4 ×(2.3)	埋土	内面体部施釉。付高台、低く内湾気味。	①良好 ②灰白 ③密
116-9 59-8	灰釉陶器 椀	台部 1/2	—×7.8 ×(1.8)	床直	付高台、やや高く内湾気味に開く。端部丸い。底部と高台の胎土異なる。見込部摩滅著しく光沢あり、転用碗か。	①還元 ②灰白 ③やや密
116-10 59-9	灰釉陶器 皿	小片	12.2×— ×(1.9)	埋土	体部内湾気味に開く。口唇部丸い。口縁外面施釉。	①良好 ②灰 ③や や密
116-11 59-10	羽釜	口縁部 1/2	22.8×— ×(8.2)	南西壁際 埋土+16	胴部やや張り気味。鈎低く断面丸い。口縁部外反気味に内傾。口唇部幅広い。口縁から胴部横撫で。	①還元 ②灰 ③や や粗
117-12 59-11	瓦 丸瓦		厚1.5	埋土	凹面粗い布目。凸面篋調整。側縁篋調整。二次被熱。	①酸化・軟 ②灰白 ③やや粗・小石混る
117-13 59-12	瓦 平瓦		厚3.0	竈	凹面布目。凸面篋調整。側縁篋調整。二次被熱。	①酸化・軟 ②淡橙 ③密・縞状
117-14 59-13	石製品 砥石		長(7.2) 幅4.0厚4.0	埋土	3面使用。刃痕あり。重121g	流紋岩質凝灰岩

M59号住居跡 (Fig. 118~120・PL. 11、59、60)

M区第3台地の中央部やや東に位置し、79・80M18・19の範囲にある。M61号・M65号住居跡と重複しているが、これらより新しい時期の所産である。また西に近接してあるM57号住居跡の竈先端部が僅かにかかっているが新旧は判然としない。当跡中央部には南北に長い楕円形のM6号土坑が検出されており、これより

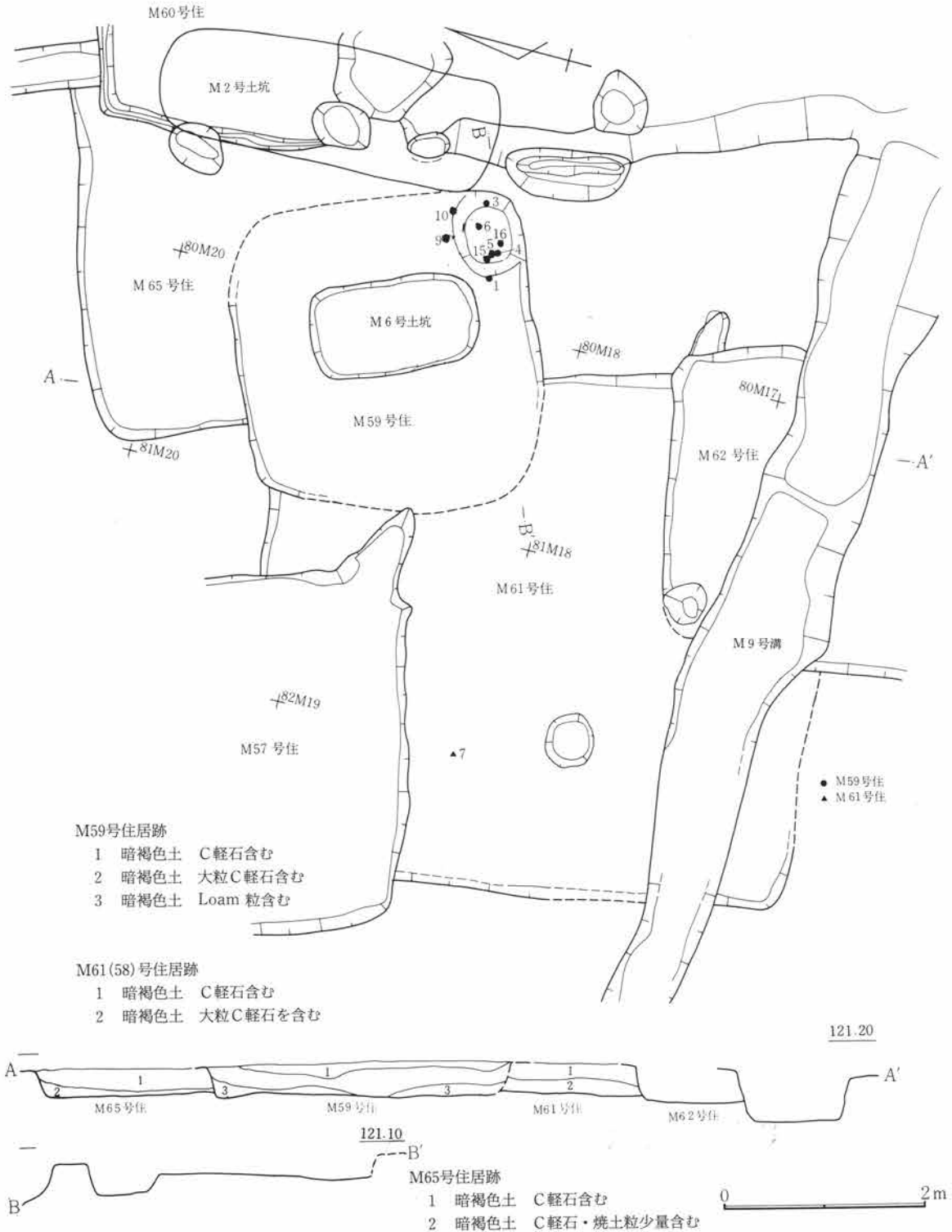


Fig. 118 M59号・M61号・M65号住居跡

も新しい時期の所産である。壁線は南壁から東壁にかけてと、北壁から西壁にかけての一部が検出されている。

平面形は隅丸の方形を呈し東西・南北長とも3mの規模である。東西軸方位N-68°-Eを示す。壁高は約30cmを測り、床面は中央部が僅かに低くなるが基盤を凝灰岩質にするため安定している。南東隅には円形の土坑が穿たれ貯蔵穴と考えられる。径70×80cm・深さ20cmを測る。

竈・炉などの施設は認められなかったが、貯蔵穴周辺には凝灰岩質の大形加工材が見られ、また貯蔵穴周辺から出土する遺物類は二次被熱を受けた痕跡のあるものもみられ、東壁に竈様の施設があったと想定される。出土遺物は貯蔵穴周辺に多く、酸化炎焼成の須恵器小形甕・杯類のほか、灰釉陶器段皿などがある。

M61号住居跡 (Fig. 118、121・PL. 11、60)

M区第3台地の中央部やや東に位置し、79~82M16~19の範囲にある。M57号・M59号・M62号の各住居跡と重複しており、いずれより古い時期の所産である。また調査区内を東西走るM9号溝が南端を通る。このため壁線は分断され、四壁は各々部分的に検出されたにすぎない。

平面形は南北に長軸をもつ方形を呈し、比較的大形の住居跡である。東西長約5.1m・南北長約5.5mを測り、東西軸方位はおよそN-81°-Eを示す。壁高は約30cmを測り、床面はかなり凹凸をなすが、基盤が凝灰岩質層で安定している。貯蔵穴・柱穴などの諸施設は検出されていない。

竈は東壁にありやや南に偏って付設されるが、M62号住居跡によって削平されており、煙道部と思われる先端部を確認したにとどまる。竈の先端部は東壁線より約70cm突出している。

出土遺物は灰釉陶器などの他鉄器がある。

M65号住居跡 (Fig. 118・PL. 11)

M区第3台地の中央部東縁近くに位置し、79・80M18~20の範囲にある。南西部でM59号住居跡とまた東部でM60号住居跡やM2号土坑と重複しており、壁線が確認されたのは西壁にかけての一部である。新旧関係はいずれより古い時期の所産である。

僅かな部分の検出のため平面形・規模などの詳細は不明であるが、ほぼ方形を呈すようである。東西約3.5m・南北およそ4mの範囲まで確認できた。北壁線からみる東西軸方位はN-71°-Eを示す。壁高は25cmを測り、床面は平坦をなし、凝灰岩質層が基盤となって安定している。竈その他諸施設は検出されない。

出土遺物は少なく形状を知り得るものはない。

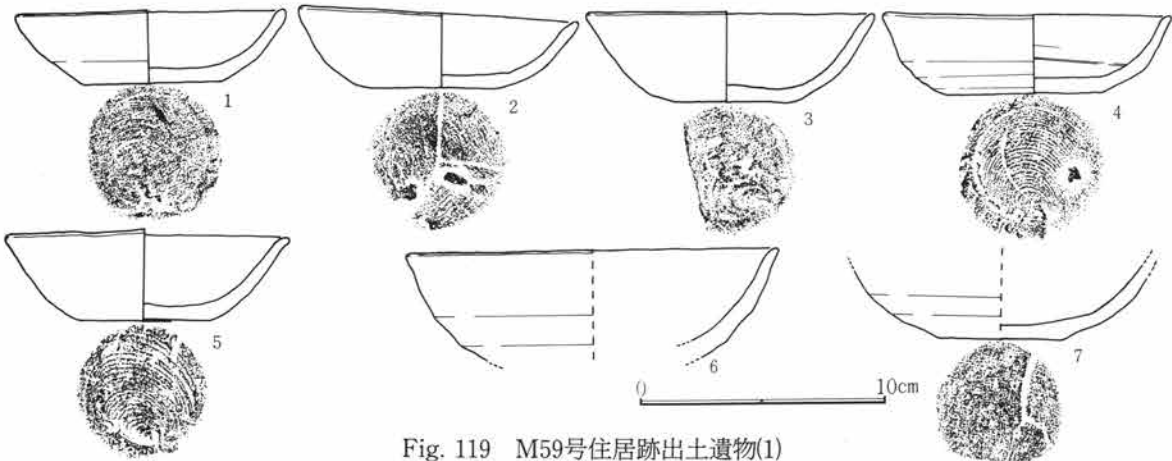


Fig. 119 M59号住居跡出土遺物(1)

第2章 遺構と遺物

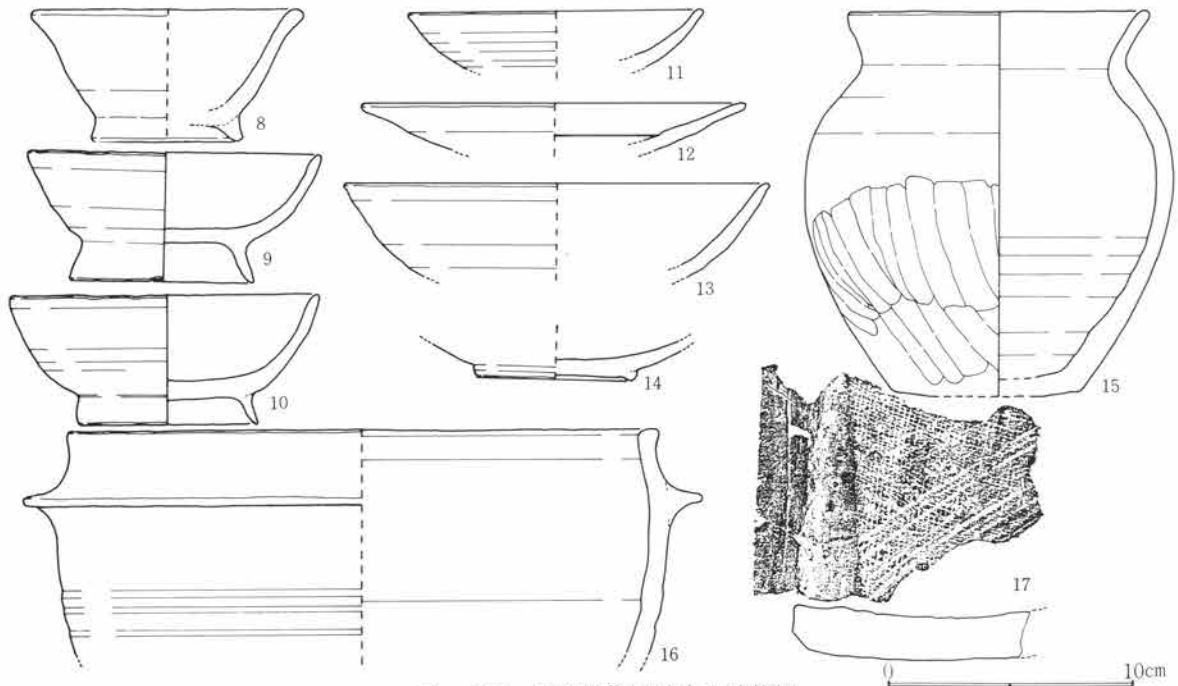


Fig. 120 M59号住居跡出土遺物(2)

M59号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
119-1 59-1	須恵器 杯	3/4	10.8×5.4 ×2.9	貯蔵穴内	底径小さく体部丸味をもつ。口唇部丸い。轆轤成形。右回 転糸切り。	①酸化・良好 ②淡 黄 ③やや粗
119-2 59-2	須恵器 杯	3/4	11.2×5.5 ×3.3	埋土	底径小さく腰部丸味をもち口縁部やや直線的に外傾。口唇 部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗・砂混る
119-3 59-3	須恵器 杯	3/4	11.5×4.8 ×3.6	貯蔵穴内 埋土	底径小さく腰部丸味をもち口縁部直線的に外傾。口唇部丸 い。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化・良好 ②灰 白 ③やや粗・砂混
119-4 59-4	須恵器 杯	ほぼ完 形	11.4×5.9 ×3.4	貯蔵穴内	底径小さく腰部丸味強い。口縁部直線的に外傾。口唇部丸 い。轆轤成形。右回転糸切り。口唇部に油煙附着。	①酸化気味・良好 ② 淡黄 ③やや粗
119-5 59-5	須恵器 杯	完形	11.3×5.0 ×3.6	貯蔵穴内	底径小さく腰部丸味をもつ。口唇部丸く小さく外屈。轆轤 成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②淡 赤橙 ③粗・小石混
119-6 59-6	須恵器 碗	3/4	14.8×— ×—	貯蔵穴内	体部丸味強い。口縁部やや直線的に僅かに外反。口唇部尖 り気味。轆轤成形。	①酸化・良好 ②灰 白 ③やや粗・砂混
119-7 59-7	須恵器 杯	3/4	—×4.9 ×—	埋土	底径小さく体部丸味をもつ。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・軟 ②浅黄 橙 ③やや粗・砂混
120-8 59-8	須恵器 碗	3/4	10.9×6.0 ×5.2	埋土	体部深く下位で僅かに膨らみ口縁部は外反。口唇部肥厚し 丸い。付高台ハの字状に開き断面矩形。轆轤成形。作り雑。	①良好 ②灰 ③粗 ・小石混る
120-9 59-9	須恵器 碗	3/4	11.7×7.8 ×5.1	貯蔵穴内	体部丸味をもち内湾気味に開く。口唇部丸い。付高台、や や高くハの字状に開く。端部尖り気味。轆轤成形。	①酸化・軟 ②鈍い 橙 ③やや粗・砂混
120-10 60-10	須恵器 碗	3/4	12.4×7.2 ×5.1	埋土・ 貯蔵穴内	体部丸味強く内湾気味。口縁部やや直線的に外傾。付高台、 ハの字状に開き端部細る。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや密・砂混る
120-11 60-11	灰釉陶器 皿?	口縁部 破片	(11.8)×— ×—	埋土	体部浅く大きく開く。口唇部僅かにくびれ外反。口唇部丸 い。内面口縁部施釉。	①良好 ②灰白 ③密
120-12 60-12	灰釉陶器 皿?	口縁部 破片	(15.3)×— ×—	埋土	体部浅く大きく開く。内面段をなす。口唇部丸い。体部内 外面・見込部施釉。猿投産?	①良好 ②灰白 ③密
120-13 60-13	灰釉陶器 碗	口縁部 破片	16.9×— ×—	埋土	体部丸味をもち大きく開く。浅め。口唇部僅かにくびれて 外反。内外面施釉。	①良好 ②灰白 ③密。
120-14 60-14	灰釉陶器 皿?	底部3/4	—×(6.1) ×—	埋土	付高台、極めて低く端部丸い。	①良好 ②灰白 ③密
120-15 60-15	土師器 甕	完形	11.9×7.4×15. 0最大径18.5	貯蔵穴内	胴部強く張り最大径胴部上位。口縁部くの字状に外屈。胴 部中〜下位縦位2段寛削り。上位回転調整。底部寛削り。	①酸化・良好 ②鈍 い橙 ③やや密
120-16 60-16	羽 釜	破片	(23.5)×—× —銚径26.9	貯蔵穴内	胴部やや張り気味。口縁部外反気味に内傾し口唇部断面矩 形。上端面内傾。銚長く水平。	①還元気味・良好 ② 鈍い黄橙 ③やや密
120-17 60-17	瓦 平瓦		厚2.0	埋土	凹面布目。凸面寛撫で、砂多く附着。側面寛調整。	①良好 ②灰 ③や や密

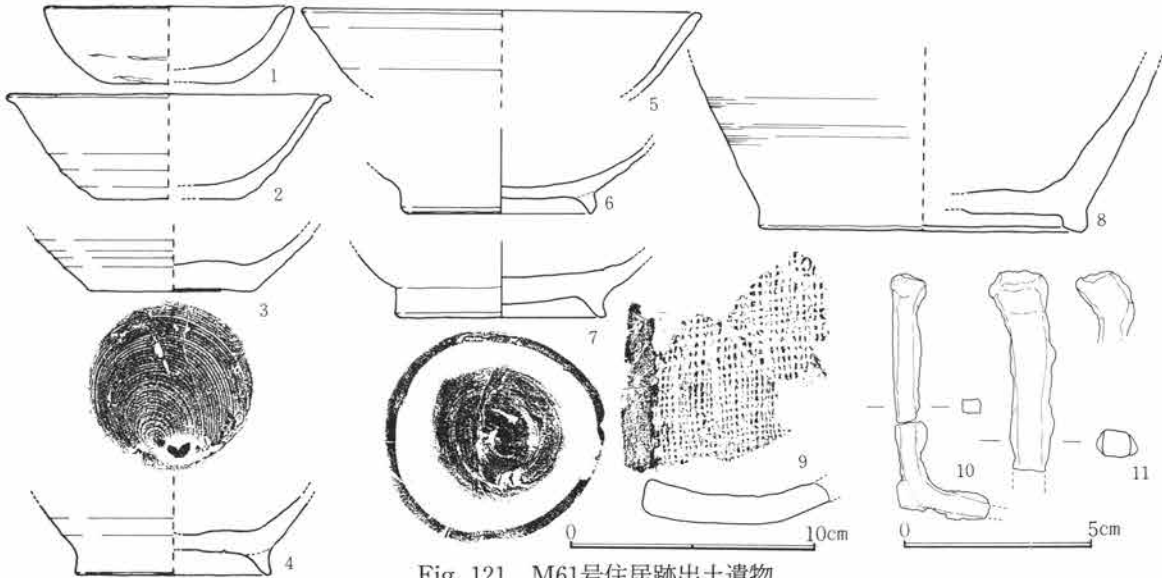


Fig. 121 M61号住居跡出土遺物

M61号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
121-1 60-1	須恵器 杯	¼	9.9×5.2 ×3.1	埋土	体部器内厚く内湾気味に開く。外面体部に巻き上げ痕。轆轤成形。底部回転糸切り。	①酸化気味・軟 ②灰褐 ③やや粗
121-2 60-2	須恵器 杯	⅓	12.9×5.7 ×4.2	埋土	腰部やや丸味をもち体部やや直線的に外傾。口唇部外屈し丸い。轆轤成形。回転糸切り。外面轆轤目顕著。	①良好 ②灰白 ③やや密
121-3 60-3	須恵器 杯	底部のみ	—×6.3 ×—	埋土	底部肥厚。体部直線的に外傾。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや密・黒色粒混る
121-4 60-4	須恵器 碗	底部⅓	—×7.8 ×—	埋土	体部直線的に外傾。付高台、ハの字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③や や密
121-5 60-5	灰釉陶器 碗	破片	16.0×— ×—	埋土	腰部丸味をもち体部上位やや直線的に外傾。口唇部丸い。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③密
121-6 60-6	灰釉陶器 碗	体部欠損	—×7.8 ×—	埋土	体部やや直線的に開く。高台端部丸い。底部回転糸切り後無で。	①良好 ②灰白 ③密
121-7 60-7	灰釉陶器 碗	体部欠損	—×8.3 ×—	+10	腰部やや丸味をもつ。付高台、畳付摩滅著しく丸味もつ。見込部に重ね焼き痕あり。底部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③密
121-8 60-8	灰釉陶器 瓶	台部破片	—×13.0 ×—	埋土	体部直線的に外傾。付高台、低く幅広な矩形。底部・体部回転篋削り。内面接合痕残る。	①良好 ②灰白 ③密
121-9 60-9	瓦 平瓦		厚1.1	埋土	薄手。凹面布目。凸面撫で。側面篋調整。M57号住居跡出土と同一個体か。	①酸化気味・軟 ②淡橙 ③やや粗
121-10 60-10	鉄器 角釘	端部欠損	長(8.0) 幅0.5×0.4	埋土	頭部形状折頭式。身部L字状に曲がる。	
121-11 60-11	鉄器 角釘	身部欠損	長(5.0) 幅0.7	埋土	頭部折頭式。	

M62号住居跡 (Fig. 122、123・PL. 11、60)

M区第3台地のやや南寄り東縁近くに位置し、79～81M16・17の範囲にある。M61号・M63号住居跡と重複しており両者より新しい時期の所産である。また調査区を東西走るM9号溝によって住居跡中央部は分断されており、南壁線上には2基の土坑によって僅かながら壁線が消失する。南西隅に穿たれる土坑埋土はB軽石である。

平面形は東西方向に若干長い略方形を呈する。東西長3.1m・南北長2.9mを測り、東西軸方位はN-81°-Eを示す。壁高は34cmを測る。床面は平坦をなし、凝灰岩質層を基盤とするため安定している。貯蔵穴・壁下の溝などは検出されない。

竈は東壁にあり、南に偏って付設される。北半はM9号溝によって消失しており知ることはできない。袖材などの遺存もなく東壁線より約65cm突出している。出土遺物は少量である。

M63号住居跡 (Fig. 122、123・PL. 11、60、61)

M区第3台地のやや南寄り東縁近くに位置し、およそ79~81M14~16の範囲にある。M62号住居跡と重複しており、これより古い時期の所産である。南東部は南西から北東方向へ走るM12号溝によって消失している。また東縁部はやや地勢が低くなっており、壁線は削平されていると考えられる。

平面形は東西に長軸をもつ略方形を呈し、南北長約3.5m、東西はおよそ3.7mの範囲まで確認した。東西軸方位はN-76°-Eを示す。壁高は約30cmを測る。床面はほぼ平坦をなし、凝灰岩質層を基盤とし安定している。

竈その他の施設は検出されないが、南西隅に径60cm・深さ10cmの土坑が穿たれる。

出土遺物は灰釉陶器碗類がある。

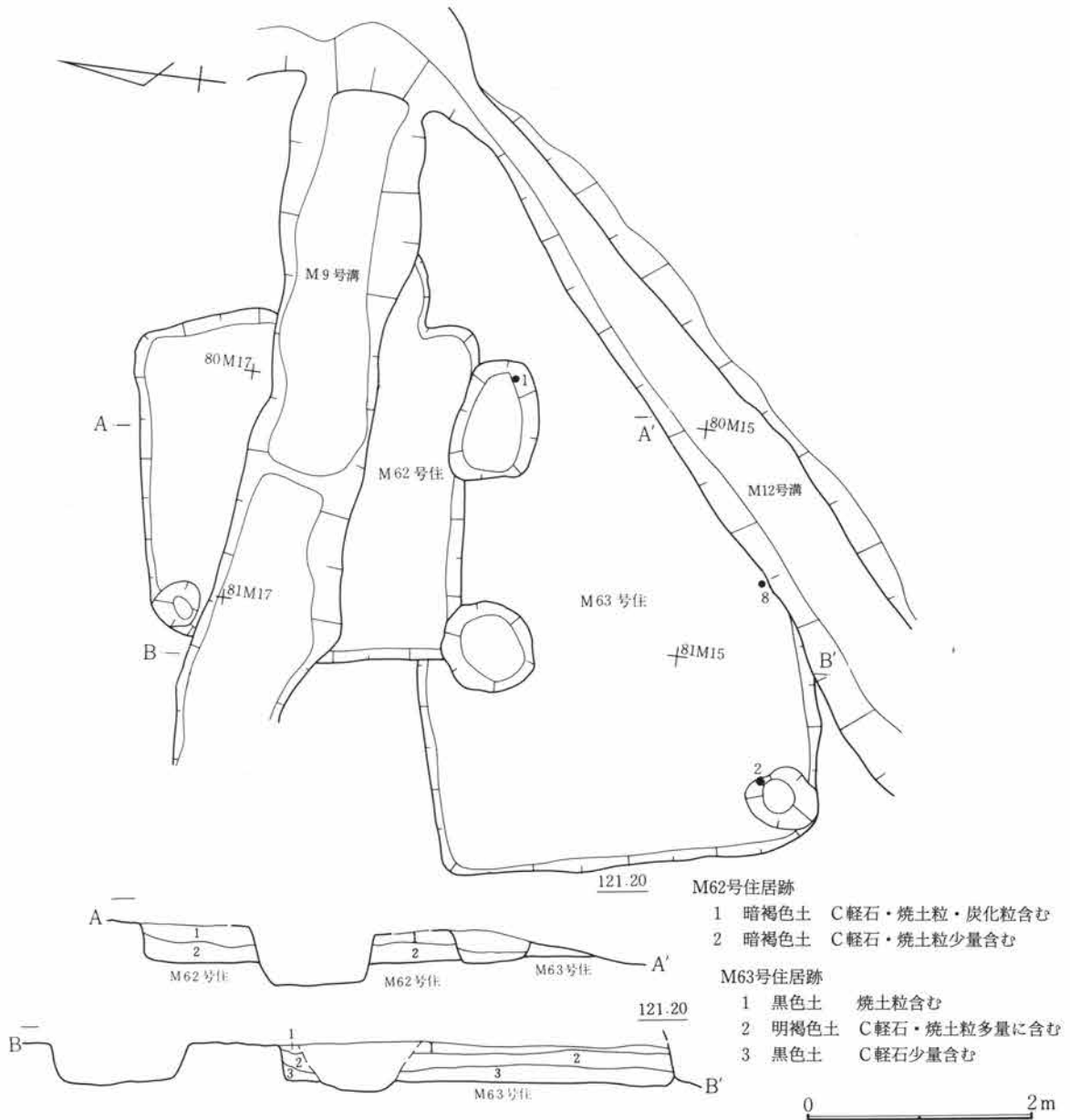


Fig. 122 M62号・M63号住居跡

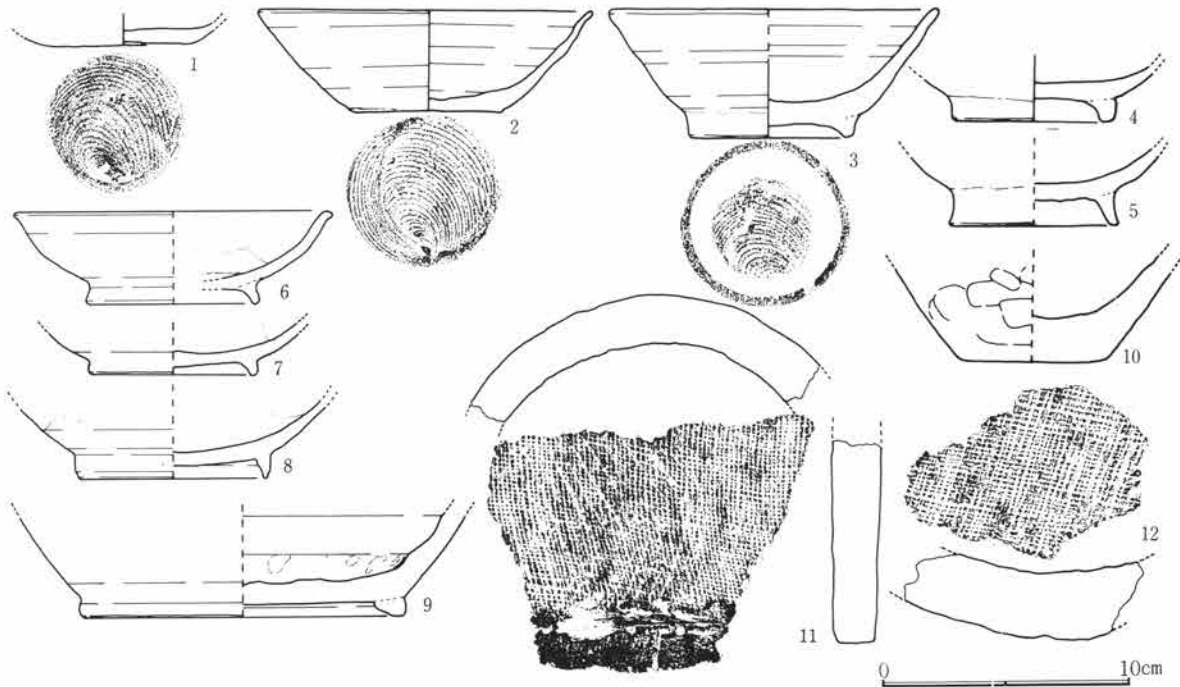


Fig. 123 M62号1・M63号2-12住居跡出土遺物

M62号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
123-1 60-1	須恵器 杯	底部のみ	—×5.4 ×—	埋土	器肉薄い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②淡黄 ③やや粗・小石混る

M63号住居跡出土遺物観察表

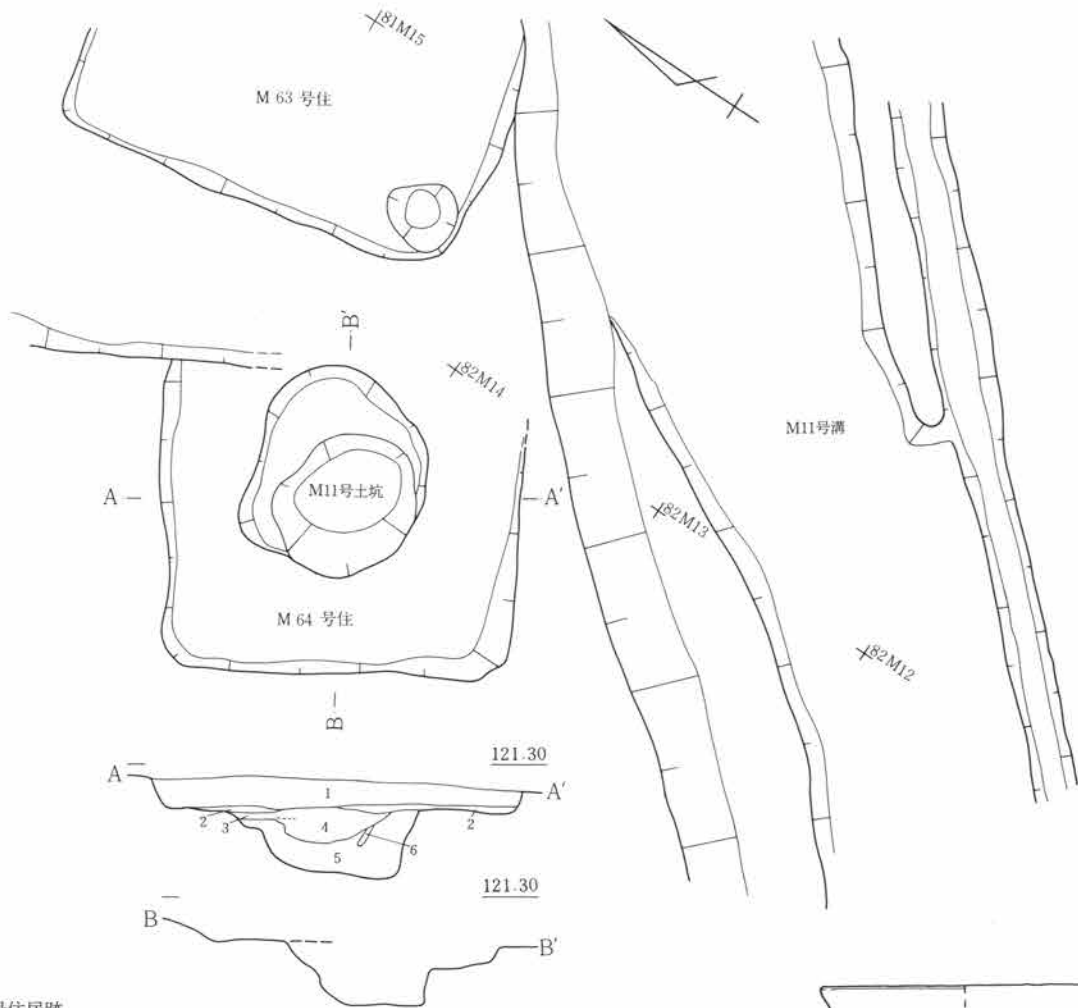
Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
123-2 60-1	須恵器 杯	1/4	13.4×6.0 ×4.1	土坑	体部やや丸味をもち直線的に外傾。口縁部細まり僅かに外反。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。二度切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
123-3 60-2	須恵器 碗	1/2	13.2×6.6 ×5.1	+4	体部直線的に開く。口縁部僅かに外傾。口唇部丸い。付高台、低く断面矩形。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗・小石混る
123-4 61-3	須恵器 碗	体部欠損	—×6.4 ×—	埋土	体部丸味をもつ。付高台、断面矩形。轆轤成形。回転糸切り。内面煤状付着物。	①酸化・軟 ②鈍い黄橙 ③やや密
123-5 61-4	須恵器 碗	台部	—×6.7 ×—	埋土	体部丸味をもつ。付高台、やや高くハの字状に開く。端部丸い。轆轤成形。	①酸化・軟 ②淡黄 ③やや密・黒色粒混
123-6 61-5	灰釉陶器 碗	1/4	12.7×6.9 ×3.7	埋土	体部浅く丸味もつ。口縁部短く外反。付高台、断面矩形。見込部に重ね焼き痕。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③やや密
123-7 61-6	灰釉陶器 碗	1/2	—×7.7 ×—	埋土	腰部丸味をもつ。高台端部細る。見込部に重ね焼き痕。漬け掛け施釉。腰部・底部回転篋調整。	①良好 ②灰白 ③密
123-8 61-7	灰釉陶器 碗	1/2	—×6.8 ×—	埋土	腰部丸味をもつ。高台低く端部丸い。見込部に重ね焼き痕あり。漬け掛け施釉?腰部・底部回転篋調整。	①良好 ②灰白 ③密
123-9 61-8	土師器 甕	底部	—×6.0 ×—	埋土	器肉厚い。体部直線的に外傾。外面横篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗・黒色粒混る
123-10 61-9	須恵器 甕	1/2	—×13.0 ×—	+6	体部直線的に外傾。高台低く端部丸い。腰部回転篋削り。内面指頭痕あり。	①良好 ②灰白 ③密・白色粒混る
123-11 61-10	瓦 丸瓦	小片	厚1.9	埋土	凹面布目。凸面撫で。側面篋調整。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや密
123-12 61-11	瓦 平瓦	小片	厚2.6	埋土	凹面布目。凸面撫で。	①酸化・軟 ②浅黄橙 ③密・縞状
61-12	緑釉陶器 不明	細片		埋土	細片のため器形不明。内外面磨き。銀化が見られる。釉調は深緑。	①良好 ②灰 ③密

M64号住居跡 (Fig. 124、125・PL. 11、61)

M区第3台地の中央部やや南寄り東縁近くに位置し、82・83M13・14の範囲にある。台地の縁辺に近いため東側の壁線は削平され検出できなかった。

平面形は方形を呈し、南北長1.45m、東西は1.2mの範囲まで確認した。東西軸方位はN-58°-Eを示す。壁高は約20cmを測る。住居跡中央部にはM11号土坑が重複しており、その範囲には Loam を突き固めた貼床を施してある。この貼床は土坑周縁部では明瞭に認められたが、中心部では薄くなっていた。土坑の性格に関しては床下土坑に属するか、否かは不明である。

竈をはじめ諸施設は検出していない。また出土遺物は極めて少量で土師器杯1点である。



M64号住居跡

- 1 黒褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒含む
- 2 褐色土 Loam 粒含む硬質粘性土
- 3 黄褐色土 Loam 貼床

M11号土坑

- 4 黒褐色土 C軽石僅か、焼土粒・炭化粒含む
- 5 褐色土 Loam 塊多く含む
- 6 暗褐色土塊

0 2m

10cm

Fig. 124 M64号住居跡・M11号土坑

Fig. 125 M64号住居跡出土遺物

M64号住居跡出土遺物観察表

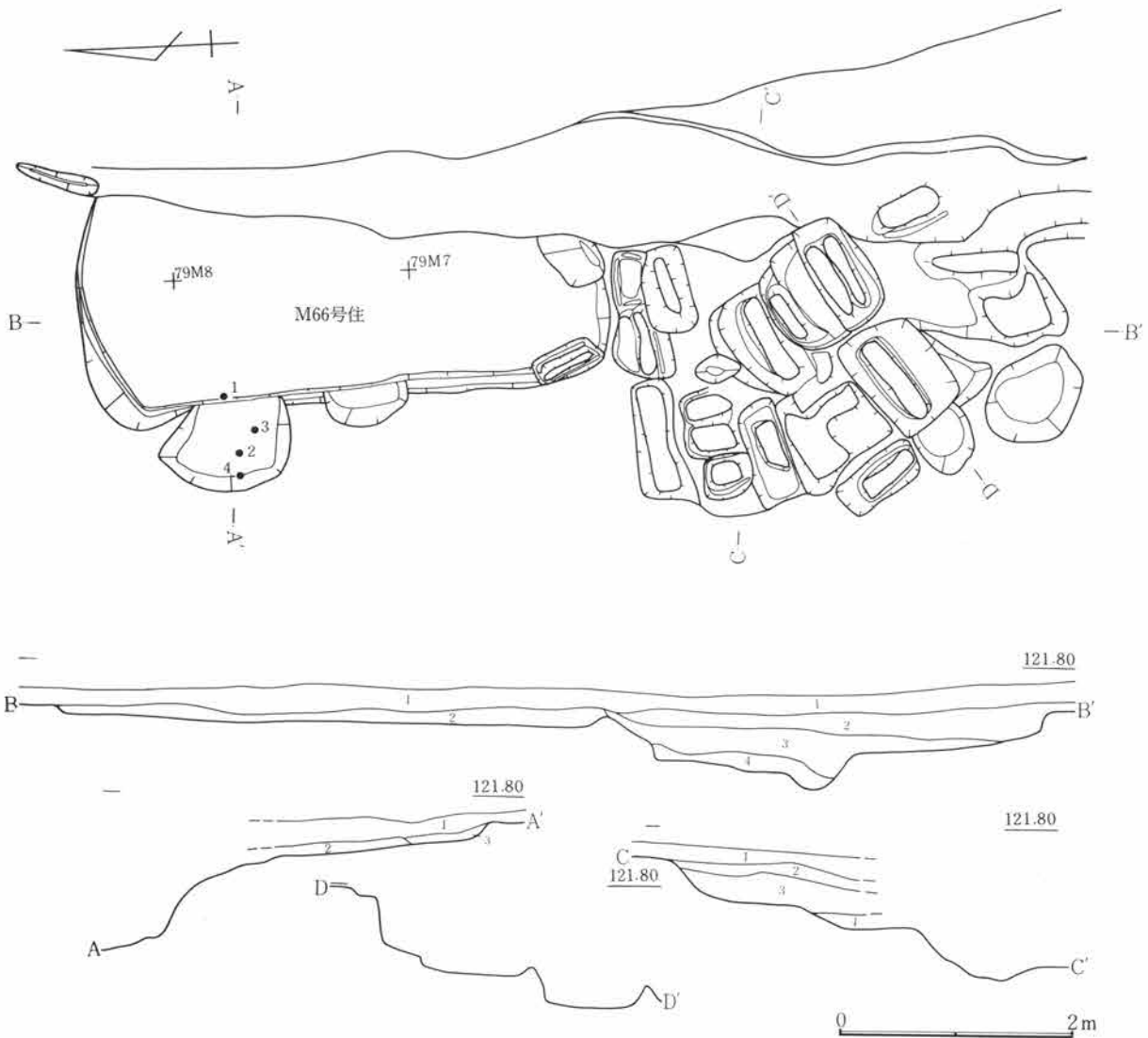
Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
125-1 61-1	土師器 杯	1/3	11.5× ×	埋土	底部浅め。受け部で段をなす。口縁部は直線的に外傾し上半部は僅かに外反。口縁部横撫で。底部寛削り。	①良好 ②橙 ③やや密

M66号住居跡 (Fig. 126、127・PL. 11、61)

M区第3台地中央部東縁に位置し、78・79M6～8の範囲にある。南に接して凝灰岩質層の採掘坑群が存在し、一部は当跡内にも及んでいる。

平面形はほぼ方形を呈すると思われるが、規模などは台地縁辺の開削あるいは流出によって東半が消失しており詳細は不明である。南北長は約4.5mを測り、東西は西壁線より約2mの範囲を確認した。西壁線に直交する東西軸方位はN-88°-Eを示す。壁高は浅く約8cmを遺すにすぎない。床面はほぼ平坦をなし、凝灰岩質層が基盤となり安定している。北壁の一部から西壁にかけて壁下溝を巡らす。幅約14cm・深さ5cmを測る。

竈その他諸施設は検出されず、出土遺物は少量で灰釉陶器瓶・足高高台などがある。



M66号住居跡	M1号採掘跡
1 黒色土 C軽石含む砂質土	1 黒色土 C軽石含む砂質土
2 黒色土 大粒C軽石・Loam塊含む	2 黒色土 C軽石・Loam塊含む
3 黒褐色土 Loam塊含む	3 黒褐色土 Loam塊多量に含む
	4 黒褐色土 Loam塊多量に含み黒味強い

Fig. 126 M66号住居跡・竈構築材採掘坑

第2章 遺構と遺物

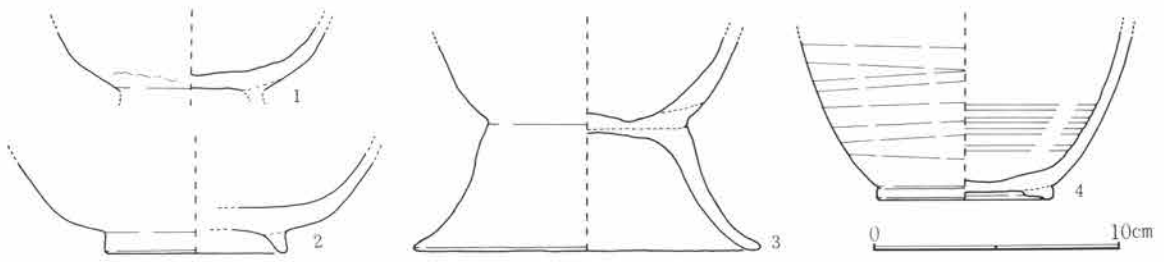


Fig. 127 M66号住居跡出土遺物

M66号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
127-1 61-1	須恵器 碗	底部のみ	-×6.0 ×-	+14	体部丸味強い。内面体部横位・見込部一定方向の篋磨き。	①酸化・軟 ②鈍い橙 ③やや粗・白色粒混
127-2 61-2	内黒土器 碗	底部欠	-×7.3 ×7.3	+5	腰部やや強く張り丸い。内面黒色処理。篋磨き。付高台、低い。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや粗・白色粒混
127-3 61-3	須恵器 碗	口径縁部欠損	-×7.4 ×-	+7	台部轆轤成形回転糸切りと体部平板+巻き上げを接合。腰部丸味をもつ。付高台、高くハの字状に大きく開く。	①酸化・軟 ②橙 ③やや粗
127-4 61-4	灰釉陶器 瓶	下半部破片	-×7.0 ×-	+16	体部僅かに丸味をもって外傾。付高台、低く平ら。端部丸い。内面回転篋磨で。外面底部回転篋削り。見込部に釉。	①良好 ②灰白 ③密

L 67号住居跡 (Fig. 128~132・PL. 12、61~63)

L区第4台地調査区の中央部西端に位置し、77~79L18~22の範囲にある。西半は調査区域外にかかり全容は不明である。調査当初竈の痕跡が重なるように3箇所確認され重複関係を想定したが、竈の遺存度合いや壁線の検討から少なくとも2度の建替えないしは拡張に伴う現象と考えた。ここでは建替え・拡張の視点を

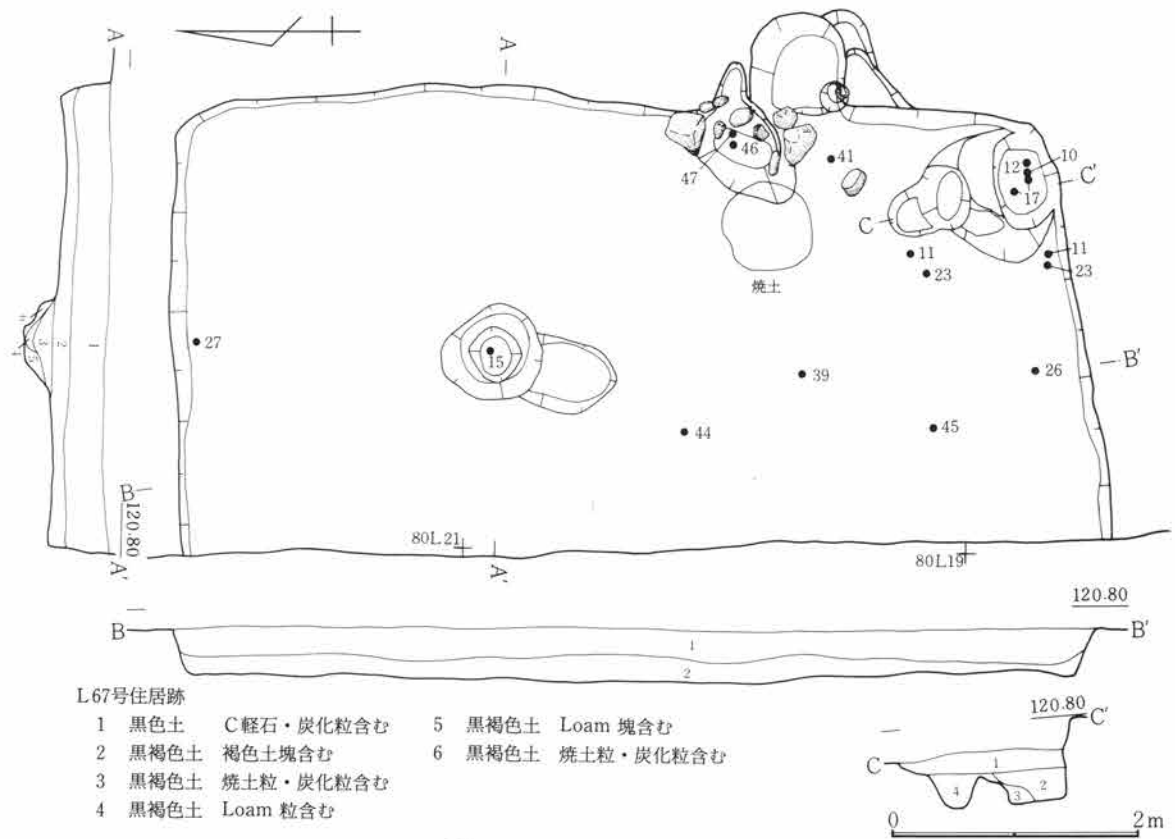


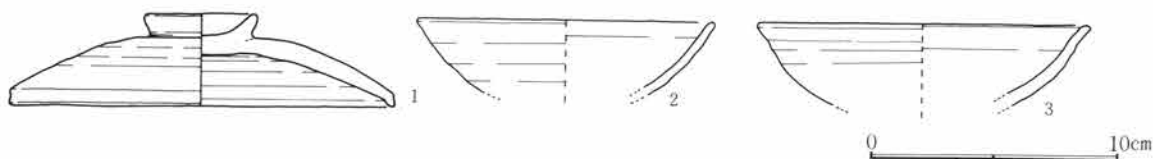
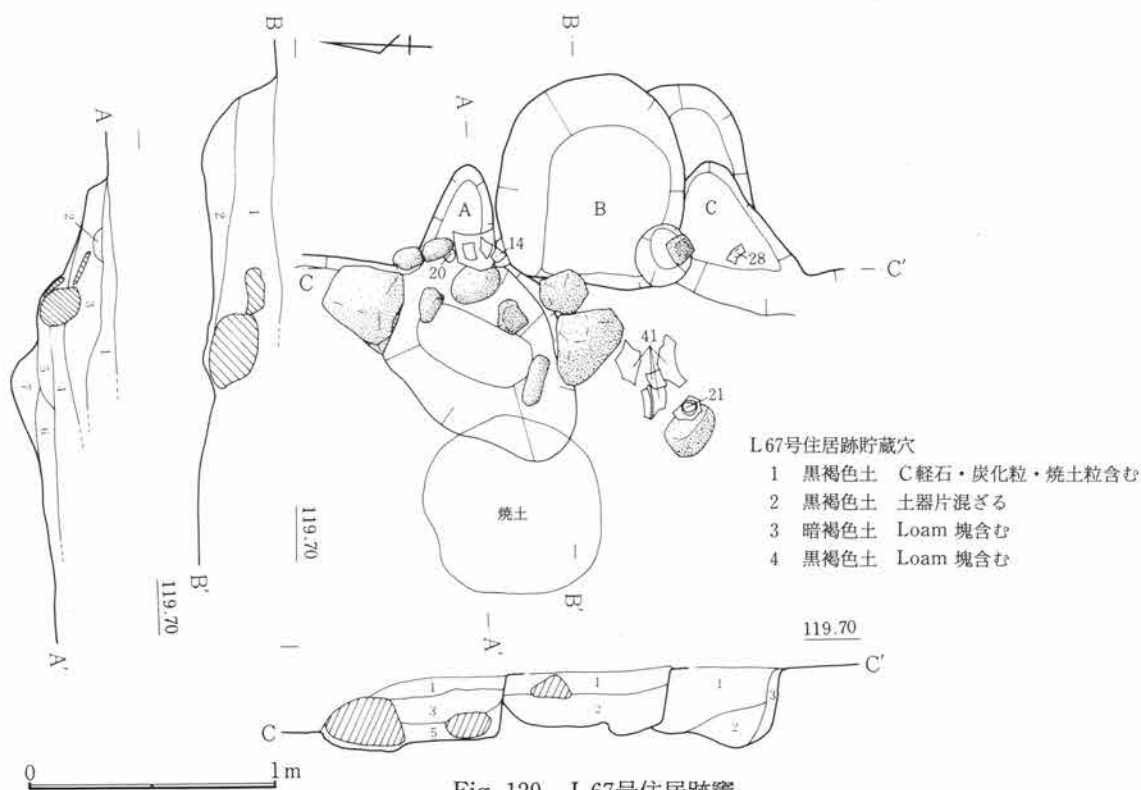
Fig. 128 L 67号住居跡

から記載する。

平面形はおおよそ方形を呈し、南北長7.35mを測る。東西は東壁線より3.7mの範囲まで確認した。比較的大形の住居跡である。東西軸方位はN-89°-Eを示す。壁高は約35cm、床面はほぼ平坦をなすが竈前面を除き踏み締まりは弱い。貯蔵穴は南東隅にあり、平面的には3回の掘形が確認されている。最終段階が最も平面規模が小さく、径50×75cmの楕円形を呈し、深さは最も深く45cmを測る。床面中央部やや北東寄りに径80cm・深さ25cmの略円形土坑を検出したが性格は不明である。床下には径1m前後・深さ20~25cmの円形土坑が穿たれる。その他小穴が数箇所に検出されているが、柱穴を想定できるような規模・位置関係ではとらえられない。

竈は東壁にありやや南に寄って付設される。新しい段階のものからA・B・C竈と3基認められるが、付設位置は僅かづつ北へ移動している。B・Cとも焼土層などの残存は少なくほとんど構築状況を知ることはできない。A竈は壁線内の袖部に大形の角状川原石を据えるため住居内に突出する形態になる。燃烧部は大きく造られるがほぼ住居内に収まり、短い煙道部が壁外に出る。燃烧部は若干窪み、手前に灰の分布がある。煙道部は緩い傾斜をもって立ち上がる。袖石間内法70cm、燃烧部奥行きは窪みを限りとすると約70cm、煙道部長さ40cmを測る。

出土遺物は比較的多く須恵器類の他灰釉陶器・鉄器・石製銚帯巡方がある。



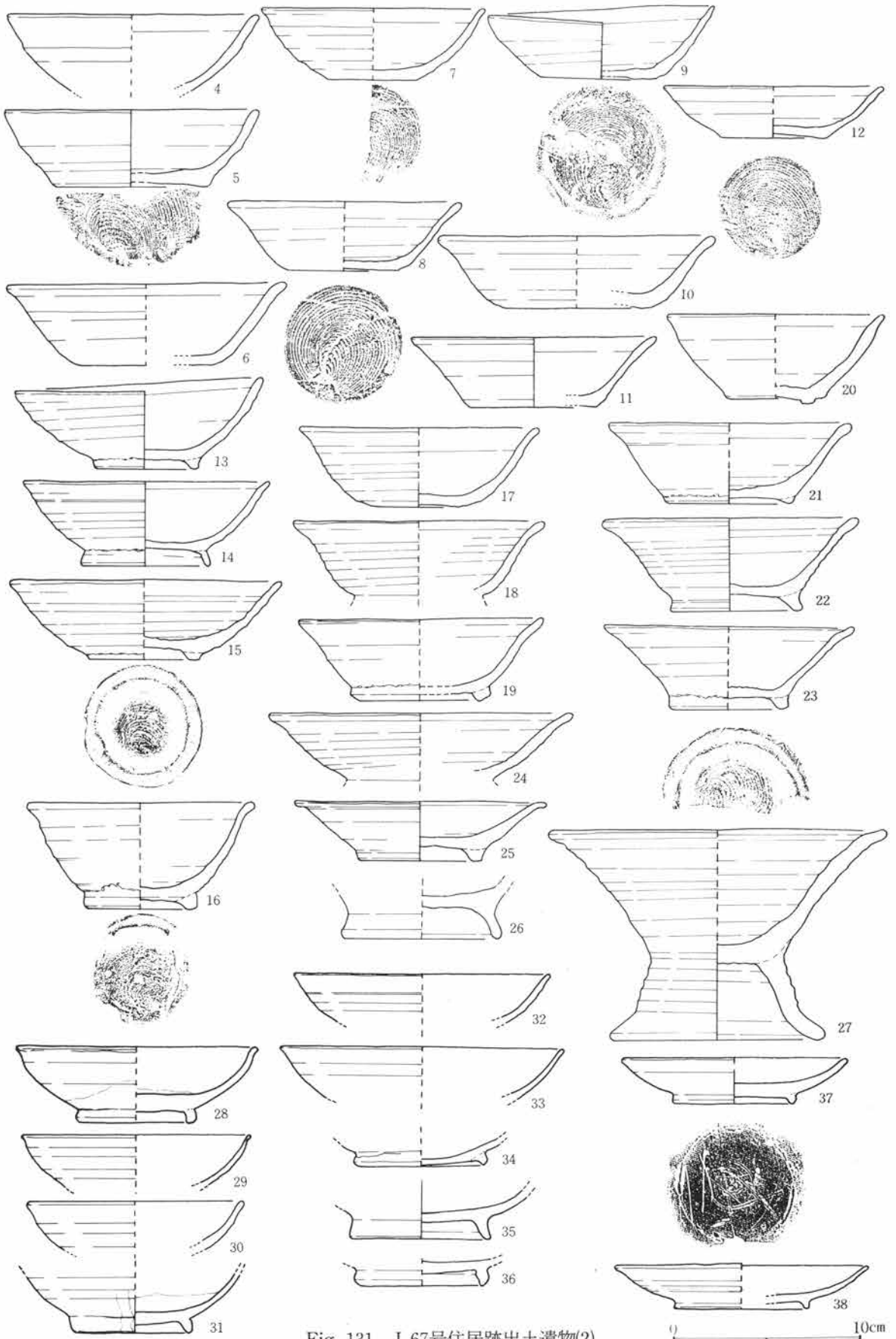


Fig. 131 L67号住居跡出土遺物(2)

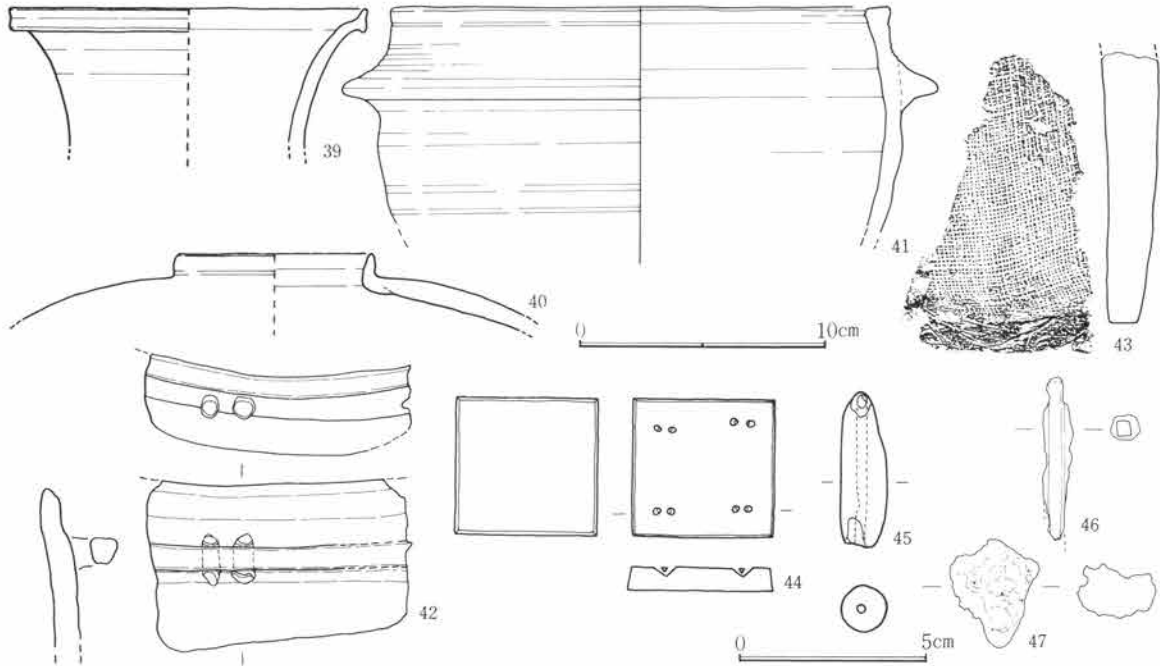


Fig. 132 L67号住居跡出土遺物(3)

L67号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
130-1 61-1	須恵器 蓋	1/2	15.3×-× 3.7摘径4.5	埋土	天井部やや丸味をもち体部直線的。口縁部直に折れて断面略三角。体部上位笠削り。環状摘。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密
130-2 61-2	須恵器 杯	体部1/2	12.0×- ×3.0	竈・埋土	体部丸味をもつ。口縁部弱く外傾。轆轤成形。	①酸化気味 ②鈍い ③砂粒
130-3 61-3	須恵器 杯	体部1/2	13.2×- ×3.2	竈・埋土	体部浅く丸味強い。口縁部外反気味。口唇部丸い。轆轤成形。	①還元気味 ②灰白 ③やや粗
131-4 61-4	須恵器 杯	体部1/2	13.4×- ×4.0	埋土	体部丸味強い。口唇部丸く、口縁部やや直線的に外傾。	①酸化・軟 ②橙 ③やや密
131-5 61-5	須恵器 杯	1/2	13.4×8.0 ×4.0	埋土	底径大きく体部直線的で中位で僅かに屈す。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
131-6 61-6	須恵器 杯	1/2	4.7×7.0 ×4.2	埋土	底径小さい。体部深く直線的。口縁部緩く外反して開く。口唇部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味 ②灰褐 ③やや粗
131-7 62-7	須恵器 杯	1/2	11.7×4.5 ×3.7	埋土	底径小さく体部丸味強い。口唇部丸く僅かに外反。轆轤成形。右回転糸切り。内面煤付着。	①酸化気味・やや軟 ②灰白 ③やや密
131-8 62-8	須恵器 杯	体部一 部欠損	12.4×5.8 ×3.6	埋土	腰部に丸味。口縁部外反気味に開く。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
131-9 62-9	須恵器 杯	完形	11.9×6.7 ×6.0	埋土	体部直線的か、歪みあり。口唇部細まる。轆轤成形。左回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③や や粗・輝性黒色角粒混
131-10 62-10	須恵器 杯	体部1/2	12.0×6.0 ×4.1	埋土・ Pit	腰から体部丸味をもち肥厚。口縁部外反して開き口唇部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味 ②浅黄 ③やや密
131-11 62-11	須恵器 杯	底部欠 損	12.8×6.6 ×3.6	床直	体部直線的に大きく開き口縁部緩く外反。口唇部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味・やや軟 ②灰褐 ③やや密
131-12 62-12	須恵器 杯	体部一 部欠損	11.6×5.4 ×2.7	貯蔵穴	底径小さく腰部縮まる。体部上半に僅かに丸味。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや密
131-13 62-13	須恵器 椀	完形	13.0×5.5 ×4.8	埋土・貯 蔵穴・竈	底径小さい。体部丸味強い。口唇部丸い。付高台、低い。轆轤成形。回転糸切り。	①還元 ②灰白 ③やや粗
131-14 62-14	須恵器 椀	完形	13.0×6.8 ×4.4	埋土	器肉薄い。体部丸味強く口縁部緩く外傾。付高台、端部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①還元 ②灰白 ③やや密
131-15 62-15	須恵器 椀	完形	14.2×5.8 ×4.1	埋土	腰部丸味をもち口縁部緩く外反。付高台、低く断面矩形で雑。輪状の接合痕あり。轆轤成形。回転糸切り。歪み大。	①酸化気味・やや軟 ②灰白 ③やや粗
131-16 62-16	須恵器 椀	体部一 部欠損	12.0×6.0 ×5.6	埋土	体部丸く張り深め。口縁部外反して開く。口唇部丸い。付高台、雑。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化・軟 ②灰白 ③やや粗
131-17 62-17	須恵器 椀	高台欠 損	12.6×- ×4.1	貯蔵穴	体部に丸味をもつ。口縁部外反気味。轆轤成形。回転糸切り。高台欠落。	①酸化気味 ②灰白 ③やや密

第2章 遺構と遺物

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
131-18 62-18	須恵器 椀	底部欠損	13.2×— ×4.0	埋土	体部強く丸味をもち口縁部大きく外反。口唇部丸い。轆轤成形。内面強い回転痕で痕。	①良好 ②灰白 ③やや粗
131-19 62-19	須恵器 椀	1/2	12.8×7.4 ×4.3	埋土	体部やや丸味。口縁部内湾気味に大きく開く。付高台、幅広く雑。輪状接合痕。回転糸切り。内外面焼成か。	①酸化気味 ②褐灰 ③やや粗
131-20 62-20	須恵器 杯	1/2	11.4×5.0 ×4.5	埋土	体部肥厚。底径小さく体部僅かに丸味をもち深い。口縁部細り外反気味。口唇部丸まる。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味 ②灰白 ③やや密
131-21 62-21	須恵器 椀	体部一部欠損	12.8×6.6 ×4.2	竈・埋土	体部やや丸味をもち大きく開き口縁部外反。口唇部肥厚し丸まる。付高台、極めて低く雑。	①還元気味 ②灰白 ③やや密
131-22 62-22	須恵器 椀	完形	13.4×7.0 ×4.9	埋土	体部直線的で口縁外反気味。口唇部僅かに肥厚し丸まる。付高台端部丸い。轆轤成形。外面轆轤目強い。焼し焼成。	①酸化・軟 ②褐灰 ③やや密
131-23 62-23	須恵器 椀	1/2	13.2×6.3 ×4.3	床直	体部直線的に大きく開く。口縁部僅かに外反。付高台、幅広く雑。轆轤成形。回転糸切り。見込部うず巻き状。	①酸化気味。②灰白 ③やや密
131-24 62-24	須恵器 椀	底部欠損	16.0×— ×(3.5)	埋土	体部僅かに丸味をもち大きく外傾して開く。口縁部緩く外反。口唇部丸い。轆轤成形。高台欠落。	①酸化気味 ②灰白 ③やや密
131-25 62-25	須恵器 皿	完形	13.5×6.5 ×3.1	埋土	端部直線的に大きく開き口唇部薄く水平に外屈。付高台、低く雑。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味・軟 ②鈍い褐 ③やや密
131-26 62-26	須恵器 椀	台部	—×8.5 ×(2.8)	+10	付高台、高く直線的に開く。端部丸まる。内外面焼し焼成か。回転糸切り。	①酸化気味 ②褐灰 ③やや密
131-27 62-27	須恵器 台付鉢	体部一部欠損	17.8×11.4 ×11.0	竈・埋土 +3	器肉厚い。体部外反気味に大きく開く。口縁部更に開く。口唇部丸い。高台高く中位やや脹らみ気味に開き下位は大きく開く。端部丸い。	①酸化・良好 ②橙 ③やや密
131-28 62-28	灰釉陶器 椀	1/2	12.8×6.3 ×4.0	竈内埋土	体部丸味をもつて開き口唇部緩く外屈。端部丸い。底部著しく肥厚。高台低く端部丸い。漬け掛け施釉。底部回転糸切り。見込部に重ね焼き痕。	①良好 ②灰白 ③やや密
131-29 62-29	灰釉陶器 椀	口縁部破片	12.1×— ×(2.8)	埋土	体部丸味をもち口唇部丸まって外屈。内外面体部施釉。	①良好 ②灰白 ③密
131-30 62-30	灰釉陶器 椀	口縁部破片	11.4×— ×(2.5)	埋土	器肉厚目。体部丸味をもち口縁部は僅かに外反。口唇部丸い。	①良好 ②灰白 ③密
131-31 62-31	灰釉陶器 椀	底部	—×6.4 ×(3.0)	埋土	腰部丸味をもつ。付高台、作り雑で端部丸まる。底部筥調整。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③密
131-32 62-32	灰釉陶器 椀	口縁部破片	13.4×— ×(2.6)	埋土	器肉薄い。腰部丸味をもち体部上位やや直線的に開く。口唇部丸い。外面口縁・内面施釉。	①良好 ②灰白 ③密
131-33 62-33	灰釉陶器 椀	口縁部破片	15.0×— ×(2.7)	埋土	器肉薄い。体部丸味をもち緩く開く。口縁部緩く外反。口唇部丸い。外面口縁・内面施釉。	①良好 ②灰白 ③密
131-34 63-34	灰釉陶器 椀?	高台部 1/2	—×7.1 ×(1.5)	埋土	付高台、低く端部丸い。見込部凹む。底部筥調整。	①良好 ②灰白 ③密
131-35 63-35	灰釉陶器 椀	底部	—×7.4 ×(2.6)	埋土	腰部丸味をもつ。付高台、やや高くハの字状に開く。端部丸い。底部筥調整後撫で。	①良好 ②灰白 ③やや密
131-36 63-36	灰釉陶器 皿?	高台部 1/2	—×7.1 ×(1.4)	埋土	付高台、内湾気味で端部丸い。底部筥調整。	①良好 ②灰白 ③やや粗
131-37 63-37	灰釉陶器 皿	3/4	11.9×6.5 ×2.5	貯蔵穴・埋土	体部内湾気味に開く。口唇部丸い。底部肥厚。高台低く端部丸い。見込部に筥描き・重ね焼き痕。漬け掛け施釉。	①良好 ②明オリ ブ灰 ③密
131-38 63-38	灰釉陶器 皿	1/2	13.4×7.2 ×2.4	埋土	器肉薄い。体部僅かに丸味をもち口縁部僅かに外反。高台低く断面矩形。刷毛塗り施釉。	①良好 ②灰白 ③やや密
132-39 63-39	灰釉陶器 瓶	口縁部破片	14.4×— ×(5.5)	床直	頸部上半強く外反。口唇部上下端は突出。	①良好 ②灰白 ③密
132-40 63-40	灰釉陶器 短頸壺	口縁部破片	8.0×— ×(2.6)	埋土	肩部張り、丸味強い。口縁部短く直に立ち上がる。肩部撫痕顕著。外面施釉。	①良好 ②明オリ ブ灰 ③密
132-41 63-41	羽釜	上半	20×—×8.5 鏝径23.7	埋土	胴部張り少ない。鏝断面丸く大きく水平に突出。口縁部直線的に内傾。口唇部肥厚し水平。歪み大きく口径異なる。	①還元気味 ②灰白 ③やや密
132-42 63-42	羽釜	口縁部破片		竈・埋土	短胴か。口縁部直立。鏝部断面矩形で大きく水平に突出。鏝部に2連の穿孔あり貫通。径8mm、胴部縦位筥削り。	①酸化・良好 ②橙 ③やや粗
132-43 63-43	瓦 丸瓦	厚1.8		竈・埋土	凹面布目。凸面撫で調整。	①酸化気味 ②鈍い 橙 ③小石混る
132-44 63-44	石帯 巡方	完形	3.65×3.8 ×厚0.6	埋土	表側面磨き丁寧光沢あり。裏面やや粗い調整。裏面四隅に2対の留孔を穿つ。	変玄武岩
132-45 63-45	土製品 土錘	完形	長4.1幅1.25 穴径0.25	埋土	手捏ね。表面撫で。重5.9g	①良好 ②灰 ③やや密
132-46 63-46	鉄器 角釘	端部欠損	長(4.3) 幅(0.4)	埋土	頭部形状は角頭式か。	
132-47 63-47	鉄塊	小塊	2.5×2.5 厚1.5	埋土	気泡多く磁気弱い。重12g	

L 68号住居跡 (Fig. 133、134、137、138・PL. 12、63～65)

L区第4台地調査区域の中央部西側に偏って位置し、76～78 L 16～18の範囲にある。L 109号・L 129号住居跡と重複しており、両者より古い時期の所産である。調査段階では掘形が浅く当跡と重なる部分の平面形を明瞭にできなかったため図上では新旧を逆転して示されている。

平面形は南北方向に長軸をもち、四壁線がやや脹らむが比較的整った方形を呈する。東西長3.75m・南北長4.85mを測る。東西軸方位はおよそN-88°-Eを示す。壁高は最も遺存の良好な箇所で約50cmを測る。床面はほぼ平坦をなし踏み締まりは良好である。壁下の溝は東壁北半から北壁を巡り西壁北半まで検出されている。幅15cm・深さ10cmを測り明瞭である。柱穴はP₁～P₄でいずれも床土除去後に確認されたためとくに平面径規模は多少小さい計測値を示す。P₁は上径30cm・下径14cm・深さ65cm、P₂は傾斜をもち上径27cm・下径15cm・深さ55cm、P₃は上径28cm・下径17cm・深さ50cm、P₄は上径25cm・下径12cm・深さ45cmである。各柱間はP₁・P₂が1.4m、P₂・P₃が2.3m、P₃・P₄が1.4m、P₁・P₄が2.45mを測る。

竈は東壁の僅か南に偏って付設される。燃焼部は床面よりかなり低く掘り込まれ、明瞭な楕円形の範囲を示す。壁外の突出は略三角形を呈し、先端部はやや傾斜を緩め煙出し孔としている。袖部は東壁線に接して凝灰岩質加工材を埋設しており、左袖部には埋設痕がある。また燃焼部最奥部にも同質の加工材が2段重ねで据えられ煙出しの境を成形するようである。また中央部には支脚痕かと思われる円形窪みがある。袖部内法は約50cm、燃焼部奥行き90cmを測る。

出土遺物は須恵器杯・椀類や土師器甕が多く、灰釉陶器・鉄器・石帯丸軋などがある。

L 84号住居跡 (Fig. 133、135、139、140・PL. 65)

L区第4台地西側のほぼ中央部に位置しているが竈を検出したのみで壁線は確認していない。竈は78 L 15・16の範囲にある。L 68号住居跡と重複しているがこれよりも新しい時期の所産である。

竈は東壁に付設される。袖材などの痕跡はなく、燃焼部幅約70cm・奥行き90cmを測る。

出土遺物は瓦片・灰釉陶器などがあるが、竈内出土の他、当跡の範囲内出土と思われる遺物を図示した。

L 109号住居跡 (Fig. 133、136、141・PL. 12、65)

L区第4台地の中央部やや西側に偏って位置し、75～77 L 15・16の範囲にある。L 68号・L 129号住居跡と重複しており両者より新しい時期の所産である。また南壁線はL 92号住居跡と接するような位置にある。

平面形は東西に長軸をもつ略方形を呈する。東西長4m・南北長3.35mを測り、東西軸方位はおよそN-90°-Eを示す。壁高は約20cmである。床面は南西部と北東部及び竈脇の南東部が各々高まり他の部分とかなりの高低差が生じてしまい、床の検出面に疑問がもたれた。しかし竈の火床面から確認したところでは各隅の高まりは掘形をそのまま残しており、住居内の意図的な施設と考えられる。南西部の高まりが最も顕著であり、南壁に沿って長方形を呈する。東西1.9m・南北90cmの大きさで平坦をなすが踏み締まりはさほど堅くない。床面とはおよそ10cm前後の高低差がある。貯蔵穴などは検出されない。

竈は東壁にあり大きく南に偏って付設される。袖部は住居内に小さく突出するように掘形を残すが、石材などの痕跡は見あたらなかった。焚口部は楕円形に窪み、燃焼部には支脚を据えたと思われる小穴がある。袖部幅約65cm、焚口の窪みからの奥行き1.1mを測る。

出土遺物は少量である。

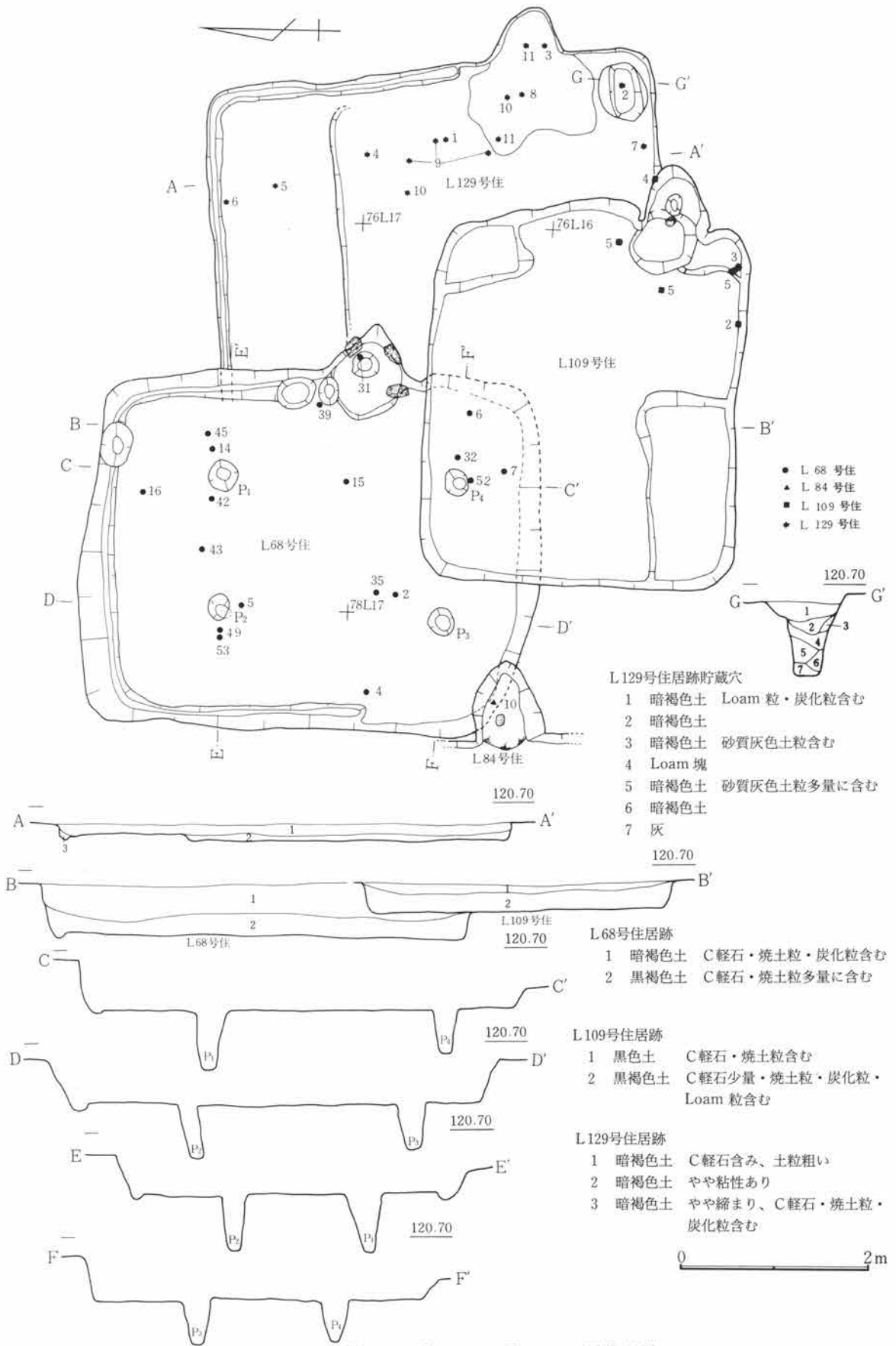


Fig. 133 L 68号・L 84号・L 109号・L 129号住居跡

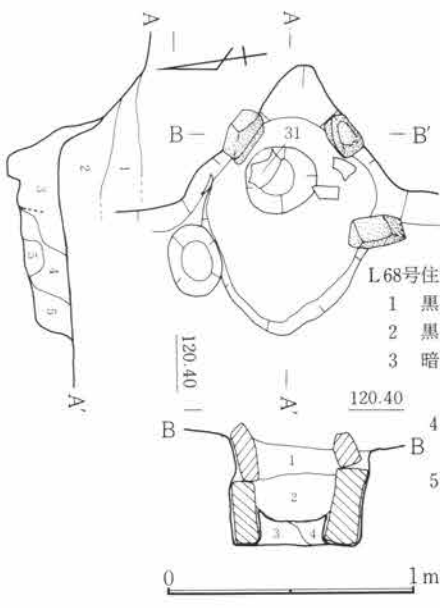


Fig. 134 L68号住居跡竈

- L68号住居跡竈
- 1 黒褐色土 Loam 小塊含む
 - 2 黒褐色土 Loam 小塊・炭化粒含む
 - 3 暗褐色土 Loam 塊・炭化粒・焼土粒
を含み粘性あり
 - 4 暗褐色土 焼土粒・炭化粒を少量
含み粘性あり
 - 5 暗褐色土 Loam 塊を多量に含む
- L84号住居跡竈
- 1 黒褐色土 C軽石・焼土粒多量に含む
 - 2 黒褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒含む
 - 3 焼土・炭化粒層
 - 4 焼土塊
 - 5 焼土層

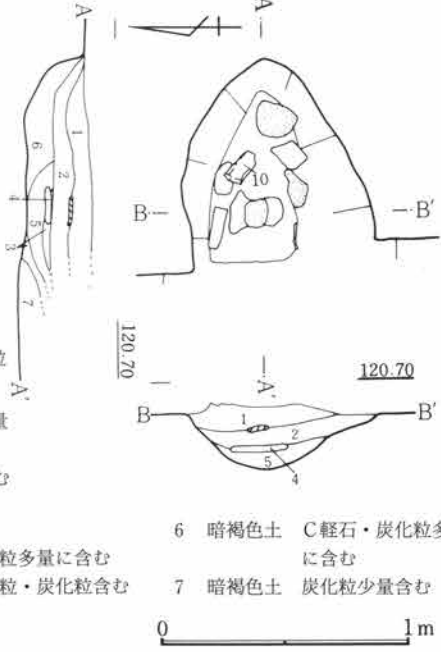


Fig. 135 L84号住居跡竈

- 6 暗褐色土 C軽石・炭化粒多量
に含む
- 7 暗褐色土 炭化粒少量含む

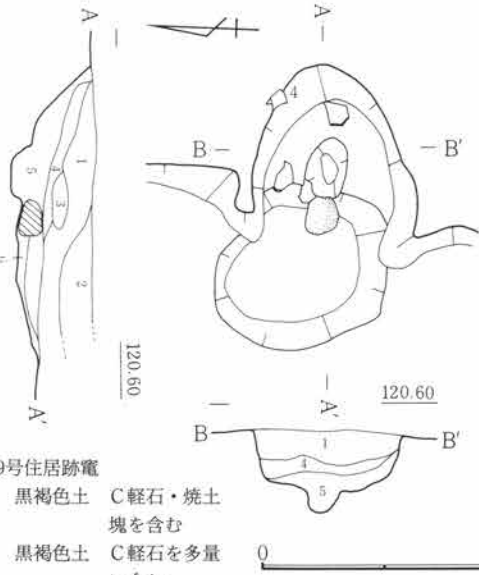


Fig. 136 L109号住居跡竈

- L109号住居跡竈
- 1 黒褐色土 C軽石・焼土塊を含む
 - 2 黒褐色土 C軽石を多量に含む
 - 3 暗褐色土塊
 - 4 暗褐色土 焼土塊含む
 - 5 暗褐色土 焼土粒を多量に含む
 - 6 明褐色土 砂質、締まりなし

L129号住居跡 (Fig. 133、142・PL. 12、66)

L区第4台地の中央部やや西側に偏って位置し、75・76L15~17の範囲にある。L68号・L109号住居跡と重複している。新旧関係はL109号住居跡より旧く、L68号住居跡より新しい時期の所産である。図上ではL68号住居跡との新旧が逆に表現されているが、これは調査段階で当跡の平面確認を誤ったためであり西壁線を検出できていない。

平面形はほぼ方形を呈すると思われる。北壁線より約1.3m内側に平行して段差が認められ、重複や建替の可能性もあるが、ここでは単一住居として扱う。南北長4.7mを測り、東西は2.5mの範囲まで確認した。東西軸方位はおよそN-84°-Eを示す。壁高は良好な箇所約10cmと浅い掘形である。床面は竈前面を除き踏み締まりは弱い。前述したように北壁線を平行に段差をもち南側との高低差は約5cm程度である。壁下の溝は東壁から北壁

にかけて巡り、幅10cm・深さ5cmを測る。貯蔵穴は南東隅に穿たれ上径50×60cm・下径20×45cm・深さ50cmの楕円形を呈する。埋土中最下層は厚い炭化粒層となっている。

竈は東壁の南側に偏って付設されるが、検出面での掘形が浅く外輪線として認められたのみである。竈内には青灰色の灰層が残り前面に広く散布していた。燃焼部幅約80cm、東壁線より約50cm突出している。

出土遺物は竈内の他床面上に散在していた。

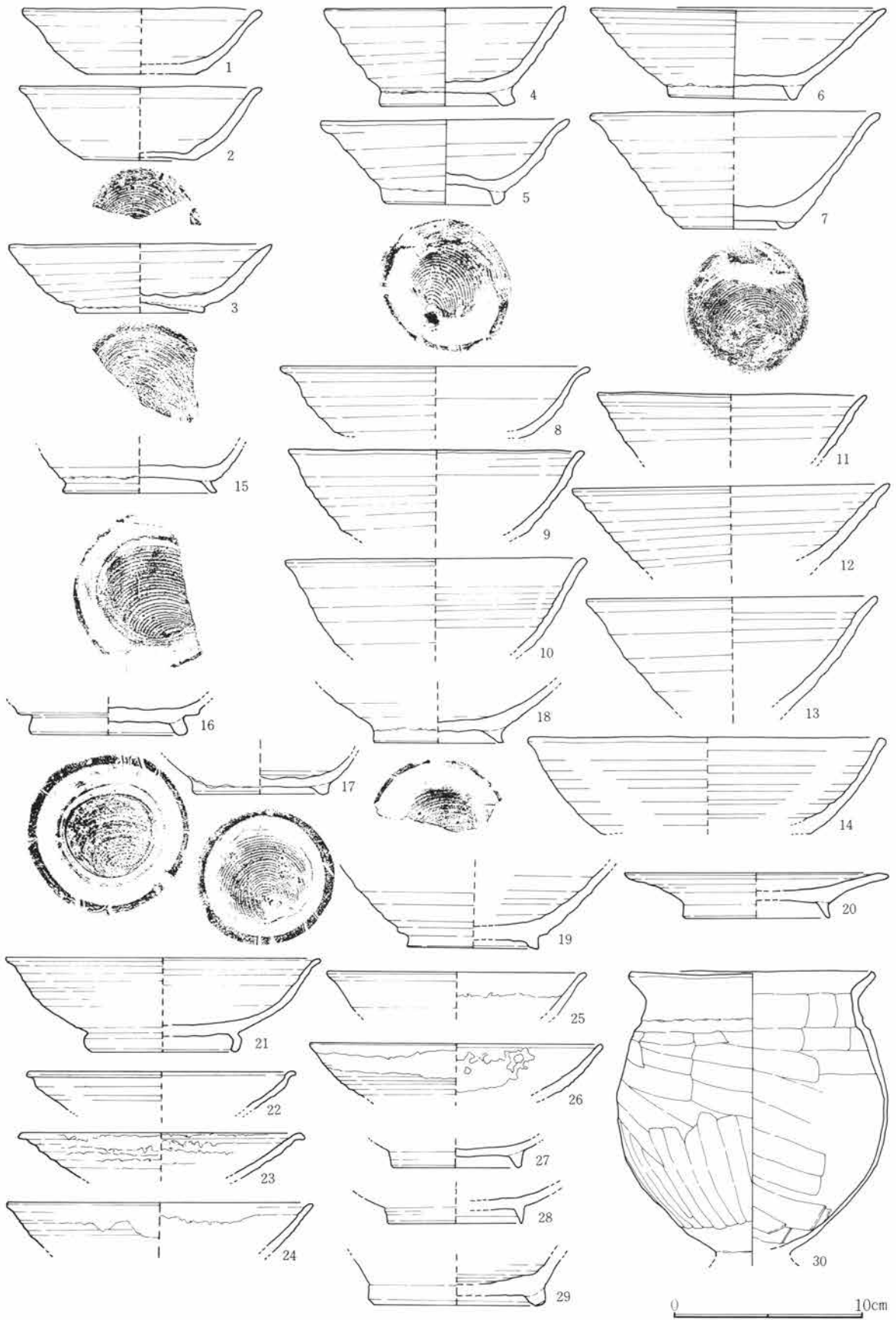


Fig. 137 L68号住居跡出土遺物(1)

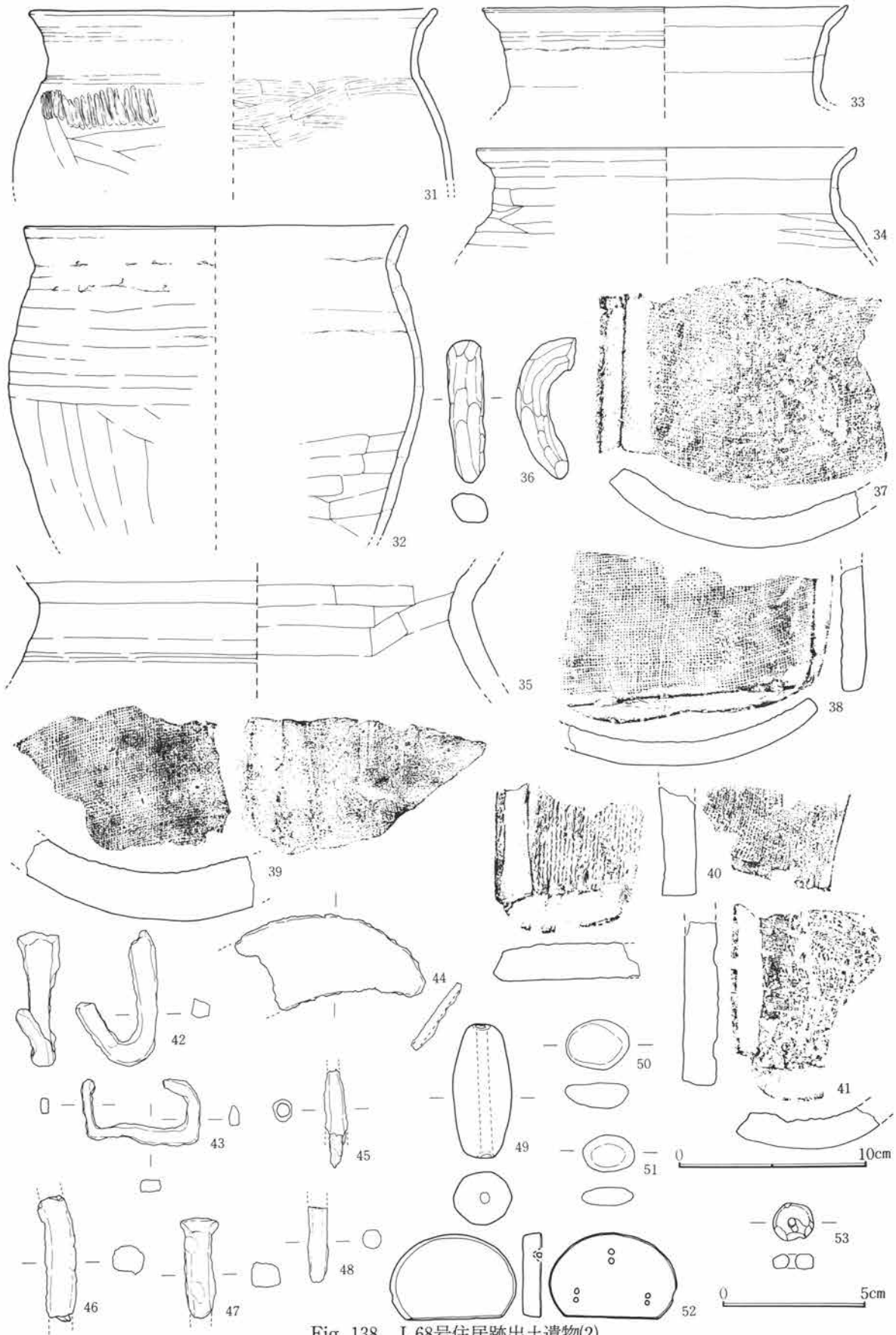


Fig. 138 L68号住居跡出土遺物(2)

第2章 遺構と遺物

L 68号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×高さ	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
137-1 63-1	須恵器 杯	1/4	12.3×5.6 ×3.3	埋土	体部丸味をもち口縁部緩く外反。口唇部丸い。轆轤成形。回転糸切り。内外面燻し焼成。	①良好 ②灰 ③やや粗
137-2 63-2	須恵器 杯	1/4	12.8×6.0 ×3.8	+31	腰部丸く張り口縁部外反。口唇部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①やや軟 ②灰 ③やや密
137-3 63-3	須恵器 杯	1/4	13.7×6.6 ×3.6	埋土	腰部やや丸味をもち体部上半は直線的。体部やや肥厚し口唇部細る。轆轤成形。回転糸切り、切り直し痕あり。	①良好 ②灰 ③やや密
137-4 63-4	須恵器 碗	完形	12.4×7.0 ×4.9	埋土 +12	体部肥厚し直線的。口唇部丸い。付高台、低く幅広。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
137-5 63-5	須恵器 碗	完形	13.0×6.3 ×4.3	床直	体部轆轤強く波打つ。口縁部やや強く外反し口唇部丸い。付高台、雑。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 ②灰 ③やや密
137-6 63-6	須恵器 碗	完形	15.1×6.6 ×4.5	埋土・床直	体部直線的で大きく外傾し浅め。口縁部やや外反気味。口唇部細る。付高台低く断面矩形。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
137-7 63-7	須恵器 碗	体部一部欠損	15.0×5.8 ×6.0	埋土	体部深く直線的。口縁部緩く外反気味。口唇部丸まる。付高台、極めて低く雑。右回転糸切り。	①やや軟 ②灰 ③やや粗
137-8 63-8	須恵器 碗	1/4	(15.8)× ×(3.5)	埋土	体部丸味強くやや浅め。口縁部大きく外反して開く。口唇部丸い。轆轤成形。	①酸化気味②鈍い橙 ③やや密・輝性細粒
137-9 63-9	須恵器 碗	1/4	15.2× ×(4.4)	埋土	体部丸味をもち口縁部外反気味。口唇部丸い。轆轤成形。	①還元・やや軟 ②灰 ③やや密
137-10 63-10	須恵器 碗	体部1/4	15.5× ×4.6	埋土	体部やや丸味を帯び口唇部丸く僅かに外屈。轆轤成形。轆轤目強い。	①還元・やや軟 ②灰 ③密・輝性細粒
137-11 63-11	須恵器 碗	1/4	13.8× ×(3.1)	埋土	器肉薄い。体部直線的。口唇部丸い。轆轤成形。轆轤目強い。	①良好 ②灰 ③やや密
137-12 63-12	須恵器 碗	1/4	16.2× ×(4.1)	埋土	大形品。体部直線的に開く。口唇部丸い。轆轤成形。轆轤目顕著。	①良好 ②灰 ③やや粗・小石混る
137-13 64-13	須恵器 碗	体部1/4	15.0× ×(5.7)	埋土	体部中位で弱く脹らむが、深く直線的で底径小さいか。口縁部緩く外反。口唇部丸い。轆轤成形。	①還元 ②灰 ③やや密
137-14 64-14	須恵器 碗	体部1/4	20.0× ×(4.5)	埋土	体部丸味をもつ。口縁部緩く外反し口唇部丸まる。轆轤成形。内面轆轤目強い。	①良好 ②灰 ③やや密
137-15 64-15	須恵器 碗	底部1/4	×8.0 ×(2.3)	+26	付高台、低く器肉薄い。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密・黒色鉱物
137-16 64-16	須恵器 碗	底部	×8.2 ×1.5	+7	付高台、肥厚し断面丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗・黒色鉱物
137-17 64-17	須恵器 碗	底部	×7.0 ×2.0	埋土	腰部丸味をもつ。付高台、低く断面矩形。左回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗
137-18 64-18	須恵器 碗	底部1/4	×6.8 ×2.8	埋土	付高台、端部細る。轆轤成形。回転糸切り。見込部摩耗著しく転用弱か。	①良好 ②灰 ③やや粗・黒色鉱物多い
137-19 64-19	須恵器 碗	1/4口縁部欠損	×6.8 ×(4.1)	埋土	体部直線的か。付高台、断面矩形。畳付に段あり。轆轤成形。見込部に「しった」痕か。	①良好 ②灰 ③やや粗
137-20 64-20	須恵器 皿	1/4	13.5×7.5 ×2.3	埋土	体部直線的で大きく開口口縁部は水平に近い。口唇部丸い。付高台、端部尖る。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗
137-21 64-21	灰釉陶器 碗	1/4	16.4×7.4 ×(4.9)	埋土	体部緩く張り丸味をもち浅め。口唇部強く外屈。高台やや高く内湾気味に立つ。腰部回転篋削り。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰 ③やや粗
137-22 64-22	灰釉陶器 皿	体部小片	14.6× ×(2.0)	埋土	体部僅かに丸味。口唇部強く外屈。内外面施釉。	①良好 ②灰 ③やや密
137-23 64-23	灰釉陶器 皿	体部小片	15.0× ×(2.4)	埋土	体部僅かに丸味。口唇部強く外屈し端部尖る。内外面刷毛塗り施釉。	①良好 ②灰 ③やや粗
137-24 64-24	灰釉陶器 碗	体部小片	16.0× ×2.5	埋土	体部僅かに丸味。口唇部丸く外反気味。口縁内外面施釉。	①良好 ②灰 ③やや粗
137-25 64-25	灰釉陶器 碗	体部1/4	13.5× ×2.3	埋土	体部緩やかに張り口唇部丸く外反。内外面施釉。	①良好 ②灰 ③やや密
137-26 64-26	灰釉陶器 碗	体部1/4	15.2× ×(2.8)	埋土	胴部緩やかに張り口唇部丸く外反気味。内外面施釉。刷毛塗り?腰部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密
137-27 64-27	灰釉陶器 碗	底部	×6.6 ×1.1	埋土	高台断面三角。直立気味に立つ。見込部僅かにくぼむ。底部回転篋調整。内面施釉。	①良好 ②灰 ③やや密
137-28 64-28	灰釉陶器 碗	底部1/4	×7.0 ×1.9	埋土	高台直立する。断面三角。内外面施釉。底部回転篋調整。	①還元 ②灰黄 ③やや密
137-29 64-29	灰釉陶器 瓶	底部1/4	×9.2 ×2.7	埋土	底部~腰部にかけて釉付着。内面見込部も部分的に釉が付着。高台低く断面丸い。	①良好 ②灰白 ③やや粗

第1節 竪穴住居跡と出土遺物

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
137-30 64-30	土師器 台付甕	台部欠損	12.6×— ×14.4	埋土	胴部丸張りほぼ中位に最大径をもつ。口縁部下半は直線的に内傾し上半はくの字状に外屈。口縁部横撫で。胴部上半横～斜・下位は縦方向の篋削り。内面横～斜篋撫で。	①酸化気味 ②鈍い橙 ③やや粗
138-31 64-31	土師器 甕	口縁部 1/2	(21.0)×— ×(8.8)	竈・埋土	胴部僅かに張る。口縁部直立気味に外傾し上半強く外傾。口縁部横撫で。胴部篋削り。内面横篋撫で。	①酸化 ②橙 ③やや密
138-32 64-32	土師器 甕	口～胴部 1/2	20.2×— ×(16.2)	埋土	胴部上位張り気味。口縁部直線的で短く外傾。口縁部横撫で。胴部上半横・中～下位縦篋削り。内面横篋撫で。	①酸化 ②橙 ③石英・赤色粘土粒
138-33 64-33	土師器 甕	口縁部 1/2	19.2×— ×(4.9)	埋土	口縁部直立気味で上半は強く外傾するコの字口縁。口唇部尖る。口縁部横撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗
138-34 64-34	土師器 甕	口縁部 1/2	20.0×— ×(5.5)	埋土	肩部張り気味。口縁部直立後上半は内湾気味に外傾。コの字口縁。口縁部横撫で。肩部横位篋削り。	①良好 ②灰褐 ③赤色粘土粒
138-35 64-35	須恵器 甕	頸部1/2	—×— ×(6.1)	埋土	内面頸部篋撫で調整。二次被熱。	①酸化気味 ②赤褐色 ③やや密
138-36 64-36	須恵器 把手		長7.2 断面径1.8	埋土	篋状工具による面取り。	①良好 ②灰 ③やや粗
138-37 64-37	瓦 平瓦		厚1.5	埋土	凹面布目。凸面撫で調整。側面篋撫で調整。	①良好 ②黒褐 ③粗・白色砂多い
138-38 64-38	瓦 平瓦		厚1.2	竈・埋土	凹面布目。凸面撫で調整。側面篋調整。	①酸化気味・軟 ②黄褐 ③密・小石混
138-39 65-39	瓦 平瓦		厚2.5	+5	凹面布目。凸面篋撫で、一部に布目あり。	①酸化・軟 ②黄灰 ③やや密・小石混る
138-40 65-40	瓦 平瓦		厚1.8	埋土	凹面布目。凸面布目。側面篋削り調整。	①良好 ②オリーブ灰 ③やや粗
138-41 64-41	瓦 不明		厚1.5	埋土	凹面布目。凸面篋撫で。	①良好 ②灰白 ③やや粗
138-42 65-42	鉄器 不明		長(4.5) 幅(0.6)	埋土	断面矩形。U字状に曲がる。	
138-43 65-43	鉄器 不明		長4.2 幅0.4×0.8	埋土	両端は鋸状に曲がる。	
138-44 65-44	鉄製品 鎌?	片端欠損	長(6.5) 幅3 厚0.3	埋土	鎌と思われるが刃部認められず不確定。	
138-45 65-45	鉄器 不明	両端欠損	長(3.3) 径0.4	埋土	断面形丸い。先細り。釘か。	
138-46 65-46	鉄器 不明	両端欠損	長(4.5) 径(1)	埋土	欠損部に角状断面が不明瞭で観察される角釘か。	
138-47 65-47	鉄器 角釘	身部欠損	長(3.5) 幅0.7	埋土	頭部形状角頭式か。	
138-48 65-48	鉄器 不明	片部欠損	長(2.5) 径(0.6)	埋土	断面丸く先端部僅かに細る。	
138-49 65-49	土製品 土垂	完形	長4.7径2.0 孔径0.4	埋土	手捏ね。	①酸化・良好 ②鈍い橙 ③やや密
138-50 65-50	石製品 碁石		径1.7×2.3 厚0.9	埋土	不整楕円形。乳白色。自然石。重4.9g	石英
138-51 65-51	石製品 碁石		径1.3×1.8 厚0.6	埋土	不整楕円形。乳白色。自然石。重2.3g	石英(玉髓?)
138-52 65-52	石製品 丸靱	完形	長4.6幅2.9 厚0.7	埋土	表側面磨き丁寧光沢あり。裏面粗い調整。裏面に3箇所、2対の留孔を穿つ。	変玄武岩
138-53 65-53	石製品 白玉	ほぼ完形	径1.3厚0.6 孔径0.3	埋土	側面磨き調整顕著。両平面は調整雑。両面穿孔か。	滑石

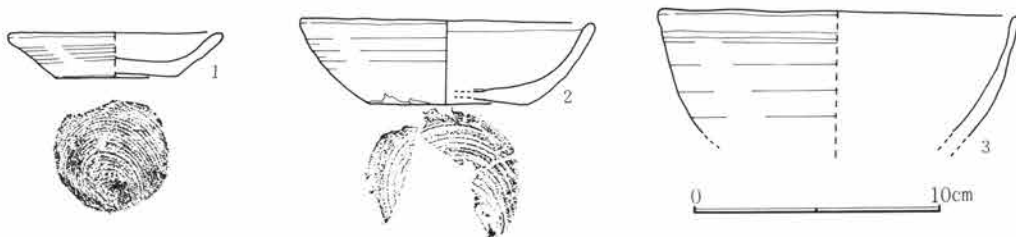


Fig. 139 L84号住居跡出土遺物(1)

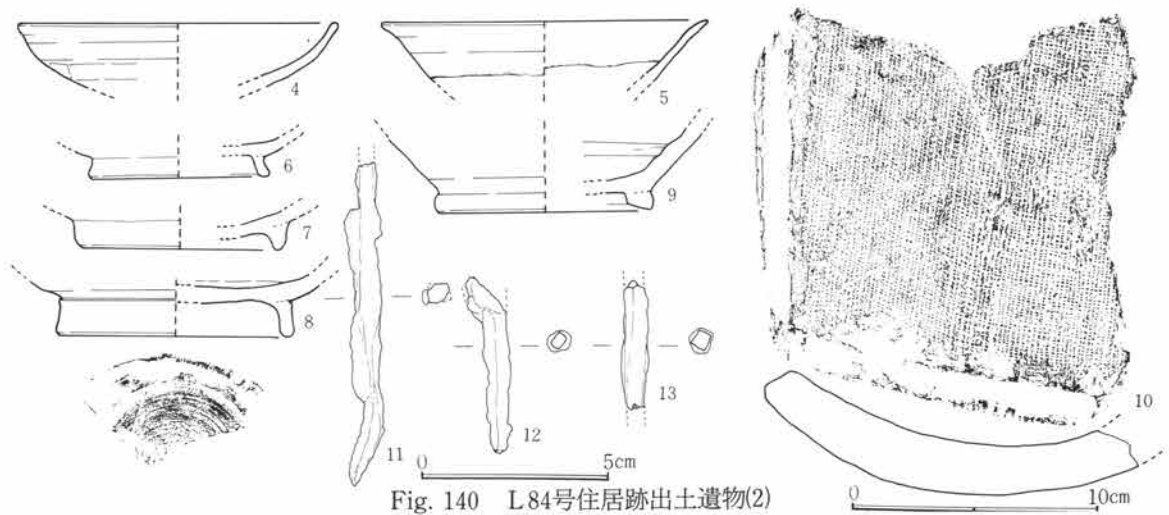


Fig. 140 L 84号住居跡出土遺物(2)

L 84号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
139-1 65-1	須恵器 杯	1/2	8.6×4.8 ×1.8	埋土	体部直線的。口唇部丸い。底部右回転糸切り。	①酸化 ②浅黄橙 ③白色粒少量混る
139-2 65-2	須恵器 杯	1/2	11.8×6.2 ×3.3	埋土	体部丸味をもって外傾。口唇部丸い。右回転糸切り。	①酸化気味 ②浅黄橙 ③赤色粘土混る
139-3 65-3	須恵器 椀	体部1/4	14.4×— ×(4.8)	埋土	体部丸味強く立ち上がり口唇部細り端部丸い。轆轤成形。内外面横撫で。	①酸化 ②浅黄橙 ③細砂混る
140-4 65-4	灰釉陶器 皿	体部1/4	12.8×— ×(2.5)	埋土	口縁部僅かに外反。口唇部丸い。体部外面横篋削り。	①還元 ②灰白 ③やや密
140-5 65-5	灰釉陶器 椀	小片	13.0×— ×(2.4)	埋土	体部張りなく直線的に外傾し口縁部僅かに外反。口唇部丸い。刷毛塗り施釉。	①還元 ②灰白 ③やや密
140-6 65-6	灰釉陶器 椀	底部1/4	—×9.4 ×(2.1)	埋土	付高台、やや高く直線的で僅かに開く。端部丸い。器肉厚い。	①還元 ②灰白 ③白色粒混る
140-7 65-7	緑釉陶器 椀	小片	—×7.2 ×(1.5)	埋土	付高台、僅かにハの字状に開く。端部接地面僅かに内斜。全面施釉。	①還元 ②灰白 ③緻密
140-8 65-8	灰釉陶器 椀	小片	—×8.2 ×(1.5)	埋土	高台低く肥厚し端部丸い。内面施釉。	①還元 ②灰白 ③細砂混る
140-9 65-9	灰釉陶器 椀	小片	—×8.8 ×(3.3)	埋土	高台幅広く下面平坦。体部は直線的に大きく外傾。器肉厚い。見込部に施釉。	①還元 ②灰白 ③やや密
140-10 65-10	瓦 平瓦		厚2.1	竈	凹面布目。凸面撫で。側面篋調整。	①良好 ②灰 ③粗・小石混る
140-11 65-11	鉄器 角釘	頭部欠損	長(8.4) 幅0.5	埋土	頭部形状不明。	
140-12 65-12	鉄器 角釘	端部欠損	長(4.8) 幅0.4	埋土	頭部形状折頭式か。	
140-13 65-13	鉄器 角釘?	身部	長(3.4) 幅0.4	埋土	頭部形状不明。	

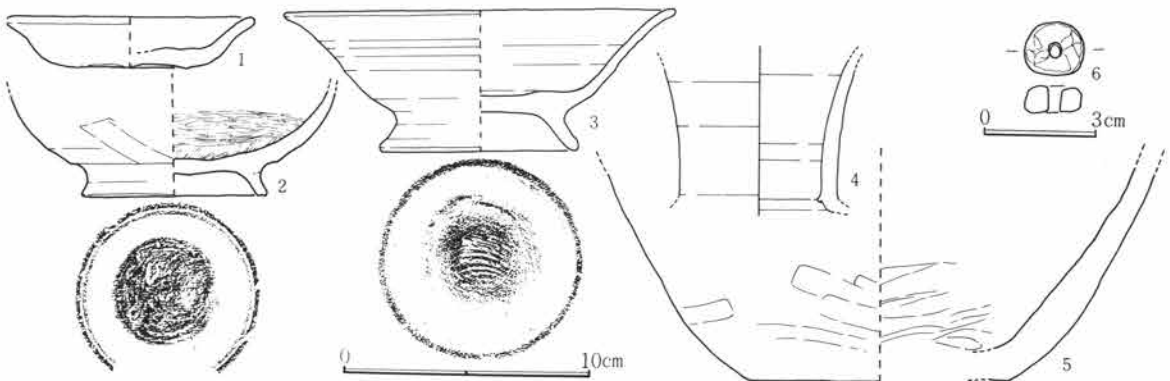


Fig. 141 L 109号住居跡出土遺物

L 109号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
141-1 65-1	須恵器 杯	1/2	9.9×4.8 ×2.0	埋土	腰部丸味強く口縁部外反。口唇部丸い。轆轤成形。回転糸切り。切り直し痕あり。	①酸化 ②鈍い黄橙 ③やや密・小石混る
141-2 65-2	内黒土器 椀	底部	—×7.5 ×4.0	+3	腰部丸味強い。部分的に篋削り。体部丸味あり。内面見込一定方向・体部横方向篋研磨。付高台、疊付に弱い沈線。内面の黒色化不完全。	①酸化・良好 ②鈍い褐 ③やや密・砂混る
141-3 65-3	須恵器 椀	1/2	15.6×7.9 ×5.6	埋土	腰部張り体部緩く外反気味に大きく開く。付高台、高くハの字状に開く。端部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化・やや軟②鈍い褐③密・小石混る
141-4 65-4	灰釉陶器 瓶	頸部1/2	頸基径6.3	竈・埋土	頸部内面接合痕顕著。施釉。	①良好 ②灰白 ③密
141-5 65-5	土師器 甕	底部破片	—×10.2 ×(8.5)	竈・埋土	器肉厚い。胴部丸味をもつ。外面篋削り。内面篋撫で。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや密
141-6 65-6	石製品 白玉	完形	1.6×1.4 厚0.7	埋土	略円形を呈するが側面取りが顕著。両平面は調整が雑。穿孔は一定方向か。孔径3mm。	滑石

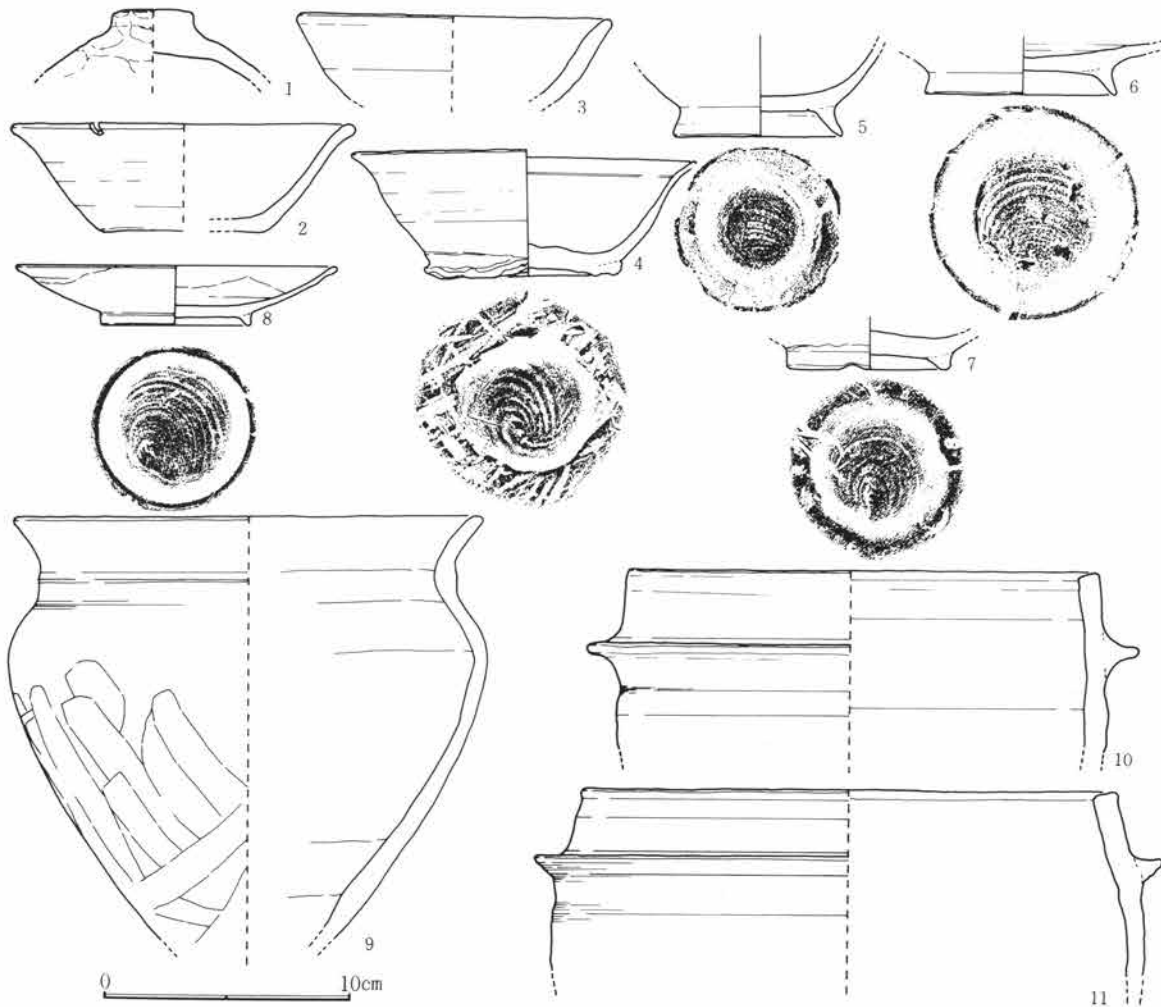


Fig. 142 L 129号住居跡出土遺物

L 129号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
142-1 66-1	須恵器 蓋	1/2	摘径3.2	床直	手捏ね。摘周辺に指頭痕あり。内面回転撫で調整。	①酸化・良好 ②鈍い橙 ③やや粗
142-2 66-2	須恵器 杯	1/2	13.2×6.2 ×4.3	貯蔵穴	腰部僅かに丸味もち体部直線的に外傾。口縁部緩く外反。口唇部丸い。轆轤成形。回転糸切り。口縁部に切り込み。	①良好 ②灰白 ③やや粗・砂混る

第2章 遺構と遺物

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
142-3 66-3	須恵器 杯	破片	12.6×— ×(3.4)	竈	体部下半丸味をもち上半は直線的に外傾。口唇部丸い。器肉厚い。轆轤成形。	①酸化気味・軟 ②浅黄 ③やや粗
142-4 66-4	須恵器 椀	ほぼ完形	13.7×7.8 ×5.1	+1	腰部丸味をもち口縁部は細り大きく外反。付高台、低く幅広。作り雑で歪み大。轆轤成形。左回転糸切り。	①酸化・軟 ②鈍い 褐 ③やや密・細砂
142-5 66-5	須恵器 椀	体部欠損	—×6.8 ×(3.5)	竈	腰部丸味強く体部深いか。付高台。やや高くハの字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味 ②灰白 ③やや粗・砂混る
142-6 66-6	須恵器 皿	体部欠損	—×7.6 ×(2.1)	埋土・ 床直	体部直線的に大きく開く。付高台、薄くハの字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。見込部に重ね焼き痕。	①良好 ②灰 ③やや粗・砂混る
142-7 66-7	須恵器 椀	高台部	—×6.5 ×(1.5)	床直	見込部やや高まる。付高台、低く肥厚して作り雑。轆轤成形。右回転糸切り。内外面燻し。	①良好 ②灰 ③密
142-8 66-8	灰釉陶器 皿転用硯	3/4	12.8×6.0 ×2.4	+2	器肉薄く体部僅かに丸味。口縁部緩く外反し口唇部丸い。高台低い。回転糸切り。漬け掛け施釉。見込部転用硯。	①良好 ②灰黄 ③密
142-9 66-9	須恵器 甕	3/4	18.8×— ×(16.8)	+1~3	肩部強く張り、胴部急激に細る。口縁部くの字状に外反し口唇部丸い。口縁部・肩部回転撫で。胴部斜位篋削り。	①良好 ②灰褐 ③ やや粗・砂混る
142-10 66-10	羽 釜	口縁3/4	19×—×(7.1) 口径22.1	床直	口縁部僅かに内傾し口唇部幅広く断面矩形。上端面内傾。銹水平に突出。口縁部撫で。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗
142-11 66-11	羽 釜	口縁3/4	21.5×—× (7.2)口径25.0	竈・埋土	口縁部内傾し口唇部断面矩形。上端面内傾。銹部上方へはねる。口縁部撫で。内外面燻し。	①良好 ②オリーブ 黒 ③やや粗

L70号住居跡 (Fig. 143~145・PL.

13、66)

L区第4台地の北西端に位置し81・82L42~44の範囲にある。住居跡西半は調査区域外に入り全容は不明である。

平面形はほぼ方形を呈すると考えられるが南東隅は丸味をもち、北東隅から北壁にかけて壁線が歪む。東壁北寄り2基の浅い円形土坑が検出されているが当跡に伴うものではない

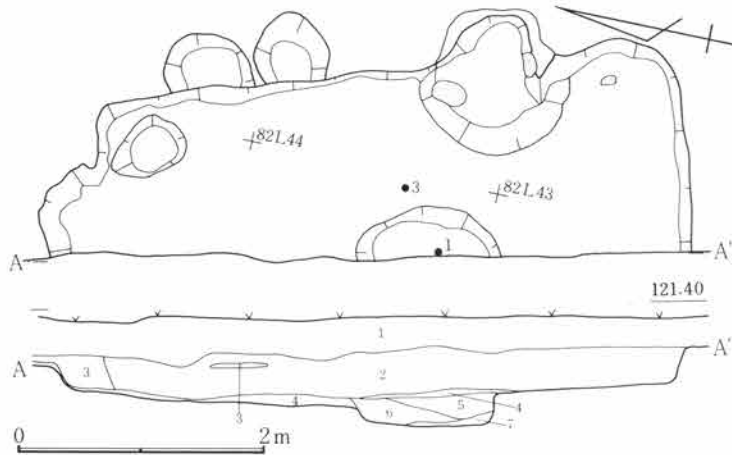


Fig. 143 L70号住居跡

L70号住居跡

- 1 耕作土
- 2 黒褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒含む
- 3 黒褐色土 塊状で硬い
- 4 暗褐色土 Loam 粒多量に含み硬く締まる(貼床)
- 5 暗褐色土 大粒C軽石と焼土粒を多量に含む
- 6 暗褐色土 C軽石・焼土粒を含む
- 7 暗褐色土 C軽石・焼土粒少量含む

L70号住居跡竈

- 1 暗褐色土 砂質・焼土粒含む
- 2 黒褐色土 C軽石含む粘性土層
- 3 暗褐色土 焼土塊含む
- 4 黒色土 焼土粒・炭化粒含む
- 5 焼土 (火床面?)
- 6 暗褐色土 C軽石含む
- 7 黒色土 粘性土
- 8 暗褐色土 焼土粒多量に含む(掘形)
- 9 暗褐色土 C軽石含む(掘形)

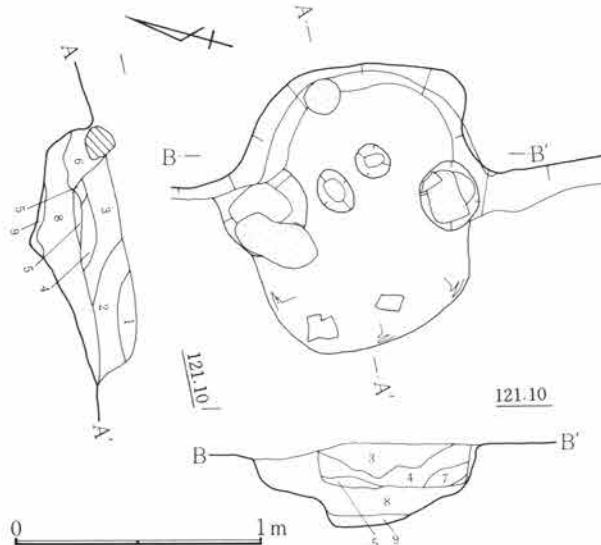


Fig. 144 L70号住居跡竈

い。南北長5.2m、東西は東壁線より1.7mの範囲まで検出した。東西軸方位はN-72°-Eを示す。壁高は約28cmを測る。床面はほぼ平坦をなし竈前面の踏み締まりは良好である。床下には径1.2m以上、深さ25cmの円形を呈すると考えられる土坑が穿たれる。埋土には多量に焼土粒・炭化粒が混入しており一部には塊状の焼土も見られる。土坑上には Loam 塊混じりの黒褐色土が貼床される。

竈は東壁にあり大きく南に偏って付設される。袖部は壁線上に凝灰岩質の加工材が埋設される。燃烧部は幅広く掘り込まれ、煙道部は検出されない。袖材間内法50cm、燃烧部奥行き約70cmを測る。

出土遺物は少量である。

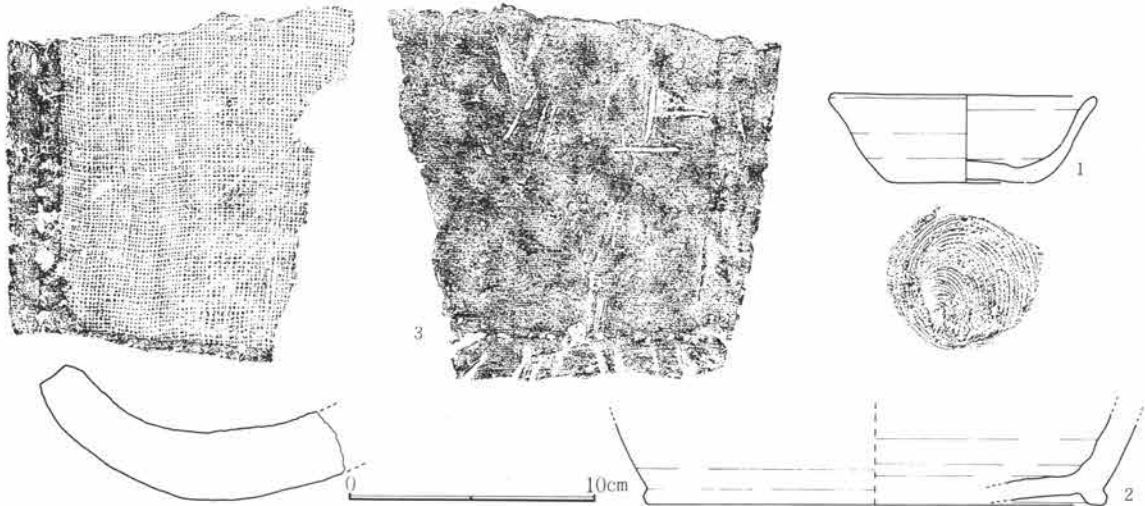


Fig. 145 L70号住居跡出土遺物

L70号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
145-1 66-1	須恵器 杯	1/2	10.6×5.7 ×3.5	+22	腰部丸味をもち体部深い。口縁部緩く外反気味。口唇部丸い。見込部高まる。内外面轆轤目。底部右回転糸切り。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る
145-2 66-2	灰釉陶器 壺?	底部1/4	—×18.2 ×(3.6)	埋土	体部直線的に外傾。付高台、やや厚く低い。底部回転篋削り。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③密
145-3 66-3	瓦 丸瓦		厚2.7	+21	凹面布目。凸面撫で、「上」の篋描き。側縁篋調整。	①良好 ②オリーブ 黒 ③粗・縞状

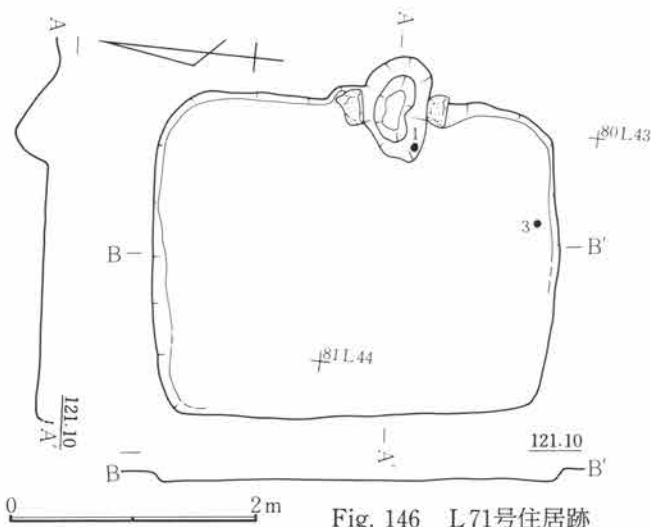


Fig. 146 L71号住居跡

L71号住居跡 (Fig. 146、147・PL. 13、66)

L区第4台地の北西端に位置し、79~81L43・44の範囲にある。重複関係はなく単独の検出である。

平面形は南北に長軸をもち隅丸の略方形を呈する。検出面での掘形は浅くろうじて確認できた。とくに南壁線から西壁線にかけては痕跡程度でしかたどれなかった。東西長2.5m・南北長3.2mを測り、東西軸方位はN-86°-Eを示す。壁高は最も良好な箇所でも5cm程度、床面はほとんど使用面に達し西半は部分的に床土下の面が露呈する場面もあった。

第2章 遺構と遺物

竈は東壁にあり南に偏って付設される。燃焼部には灰層が直かに表されていた。また東壁線上にある凝灰岩質の面まで削平されていた。燃焼部の掘形は50×80cm・深さ50cmの楕円形を呈している。袖材間内法は約50cmを測る。

出土遺物は少量である。

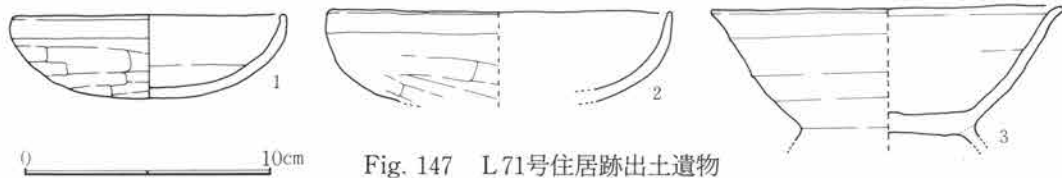
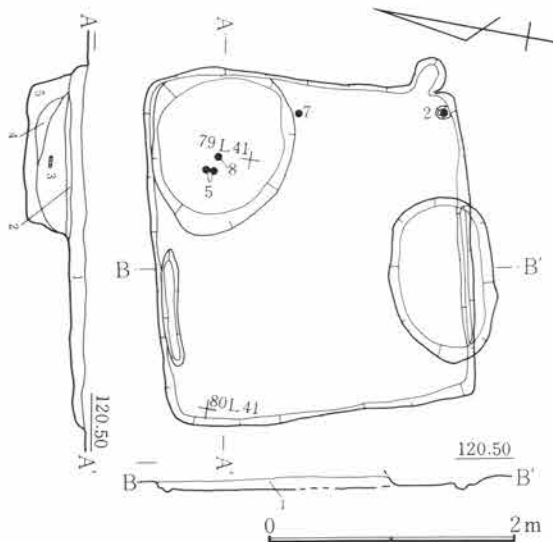


Fig. 147 L71号住居跡出土遺物

L71号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
147-1 66-1	土師器 杯	1/2	10.6× ×3.3	竈	底部丸く口縁部内湾する。口唇部小さく丸まり内屈。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗
147-2 66-2	土師器 杯	小片	13.5× ×3.5	埋土	底部丸味をもつ。口縁部直立気味。口唇部細る。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗
147-3 66-3	須恵器 椀	1/4	14.0× ×(5.4)	埋土	体部直線的。口縁部折れて外傾。高台部欠損。轆轤成形。	①酸化気味 ②灰白 ③やや粗



L72号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒含む
- 2 暗褐色土 Loam 粒多量に含む硬質土層(貼床)
- 3 黒褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒含む軟質土層
- 4 暗褐色土 Loam 塊を含む軟質土層
- 5 暗褐色土 Loam 塊を多量に含む軟質土層

Fig. 148 L72号住居跡

L72号住居跡 (Fig. 148~150・PL. 13, 67)

L区第4台地の西端に位置し、78~80 L40・41の範囲にある。南側で楕円形のL10号土坑と重複しているが土坑の掘形が床面直上にあり壁線をたどることができる。埋土中には少量の焼土粒・炭化粒を含むが、遺構内には竈・炉などの施設はなく住居跡と確定できない。小堅穴状遺構とすべきかもしれない。

平面形は東西に長軸をもつ略方形を呈し、東西長2.8m・南北長2.5mを測る。東西軸方位はN-76°-Eを示す。掘形は浅く壁高約10cmを測る。床面はほぼ平坦をなすが踏み締まりは弱い。北東部に楕円形の大形土坑が検出されたが貼床などの施工を確認できず開放していたと考えられる。埋土には焼土粒・炭化粒を含む締まりのない砂質層がみられる。径1.45m・深さ35cmを測る。

出土遺物は小形皿・内黒研磨の土器・鉄器などがある。

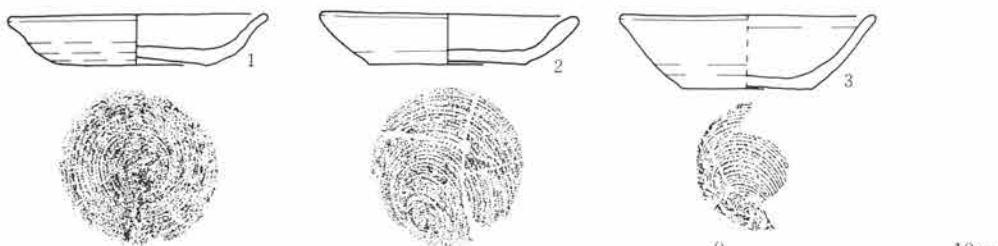


Fig. 149 L72号住居跡出土遺物(1)

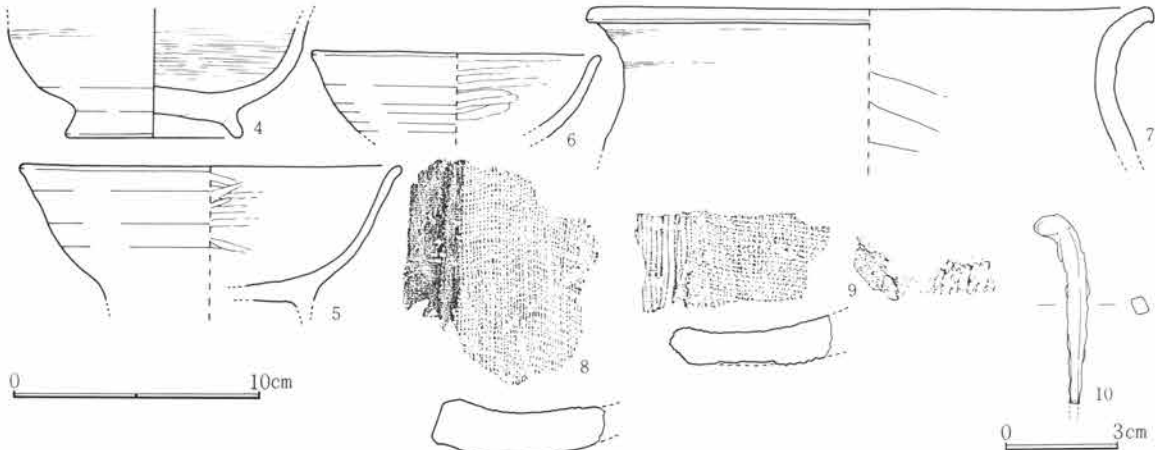


Fig. 150 L72号住居跡出土遺物(2)

L72号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
149-1 67-1	須恵器 杯	1/4	10.3×5.9 ×2.1	埋土	体部浅く口縁部は緩く外反。腰部弱い回転篋削り。轆轤成形。右回転中心糸切り。	①酸化・良好 ②灰白 ③細砂混る
149-2 67-2	須恵器 杯	ほぼ完形	10.3×6.2 ×2.1	埋土	体部浅い。口縁部肥厚し口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②灰白 ③やや密・細砂混る
149-3 67-3	須恵器 杯	1/4	(10.2)×(5.2) ×(2.9)	埋土	体部深くやや丸味をもつ。口縁部僅かに外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②橙 ③やや粗・細砂混る
150-4 67-4	内黒土器 碗	口縁部欠損	—×7.0 ×(4.7)	埋土	底部肥厚。腰部張り丸味強い。口縁部緩く外反するか。内面・底部篋磨き。付高台、端部丸い。内面黒色処理。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや密・細砂混る
150-5 67-5	須恵器 碗	1/4	(15.2)×— ×(5.6)	床下埋土	器肉薄い。体部丸味強く、口唇部緩く外屈。外面弱い轆轤目。内面篋磨き。付高台。回転糸切り。	①酸化・良好 ②橙 ③やや粗・細砂混る
150-6 67-6	内黒土器 杯?	1/4	(11.6)×— ×(3.2)	埋土	体部丸味強く口縁部僅かに外反して開く。口唇部丸い。内面黒色処理、横位篋磨き。	①良好 ②灰褐 ③やや密・細砂混る
150-7 67-7	土師器 甕破片	口縁部破片	(22.0)×— ×(5.7)	埋土	口縁部僅かに外傾し上半は強く外反して開く。口縁部横撫で。肩部篋削り。内面篋撫で。	①酸化 ②鈍い黄橙 ③やや粗・小石混る
150-8 67-8	瓦 平瓦		厚1.6	埋土・床下土坑	凹面布目。凸面撫で。側縁篋調整。	①酸化・やや軟 ②橙 ③やや密
150-9 67-9	瓦 平瓦		厚1.5	埋土	凹面布目。凸面縄目叩き締め。	①良好 ②灰白 ③密
150-10 67-10	鉄器 角釘	端部欠損	長(5.0) 幅(0.4×0.5)	埋土	頭部形状折頭式。	

L73号住居跡 (Fig. 151~154・PL. 13、67、68)

L区第4台地の北西部に位置し、77~79L37~39の範囲にある。重複関係はないが住居跡中央部を東西方向に溝状の攪乱が走り、床面及び東壁・西壁線の一部が不明瞭である。

平面形は南北方向に長軸をもち整った方形を呈する。東西長4.3m・南北長5.1mを測り、東西軸方位はN-80°-Eを示す。壁高は約30cmを測り、床面はほぼ平坦をなすが踏み締めは弱い。貯蔵穴と考えられる施設は南西隅と北東隅にある。南西隅のものは径65×90cm・深さ63cmで楕円形を呈する。北東隅のそれもほぼ楕円形であるが、東壁線より約30cm・幅80cmの突出部にある。突出部の先端はさらに若干の平坦部を作っている。貯蔵穴は径50×70cm・深さ35cmを測る。支柱穴はP₁~P₄と考えられる。P₁は上径55cm・下径15cm・深さ66cm、P₂は上径35cm・下径18cm・深さ29cm、P₃は上径47cm・下径20cm・深さ43cm、P₄は上径60cm・下径35cm・深さ16cmを測るが中心部は小さくさらに深く穿たれ44cmに達する。P₅はP₂に接して穿たれ、いずれが支柱となるか決し難い。上径40cm・下径20cm・深さ34cmを測る。柱間はP₁・P₂が2.4m、P₂・P₃が2.5m、P₃・P₄が2.6m、P₁・P₄が2.6mである。

第2章 遺構と遺物

竈は検出されていないが、西壁のやや南に偏った位置が想定され、ここには溝状の攪乱が及んでいる。
出土遺物は大型土師器甕類が多い。

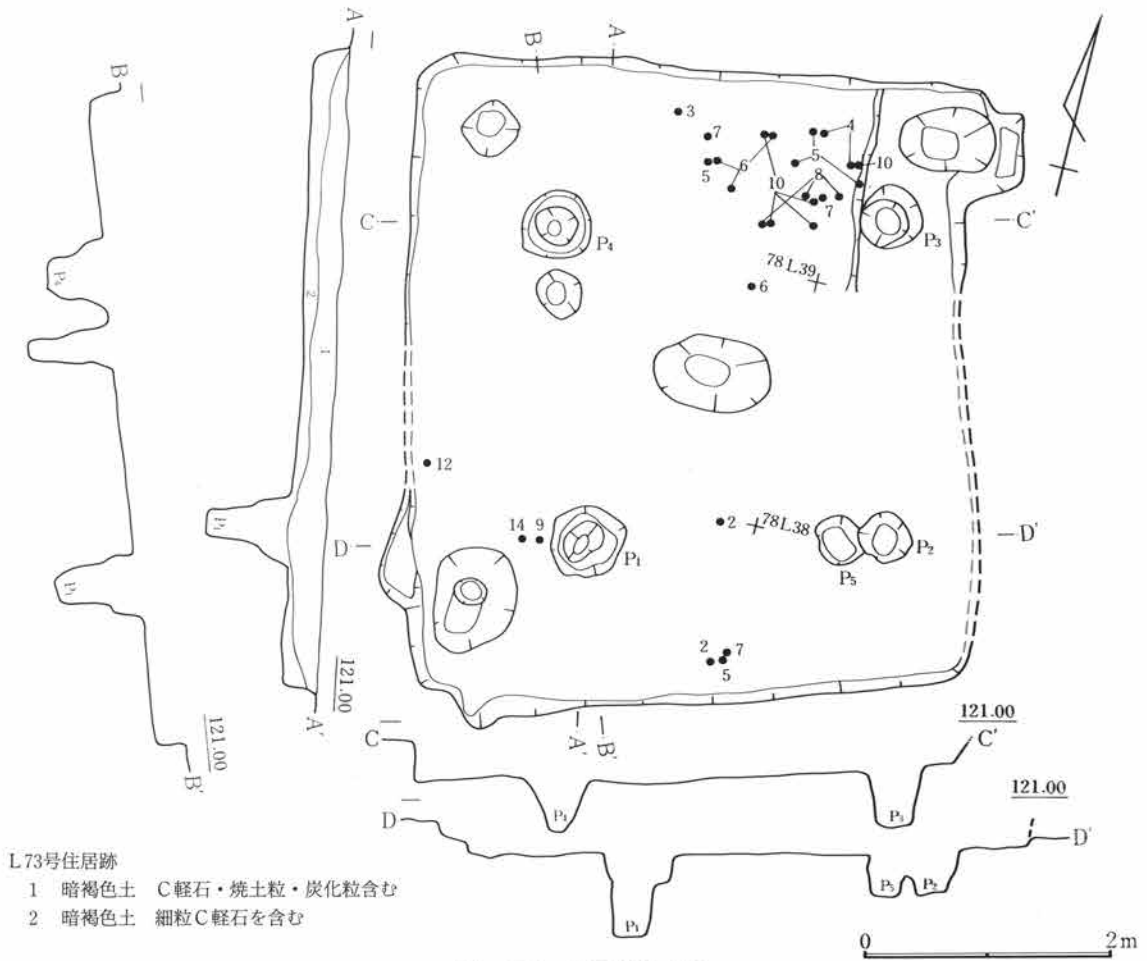


Fig. 151 L73号住居跡

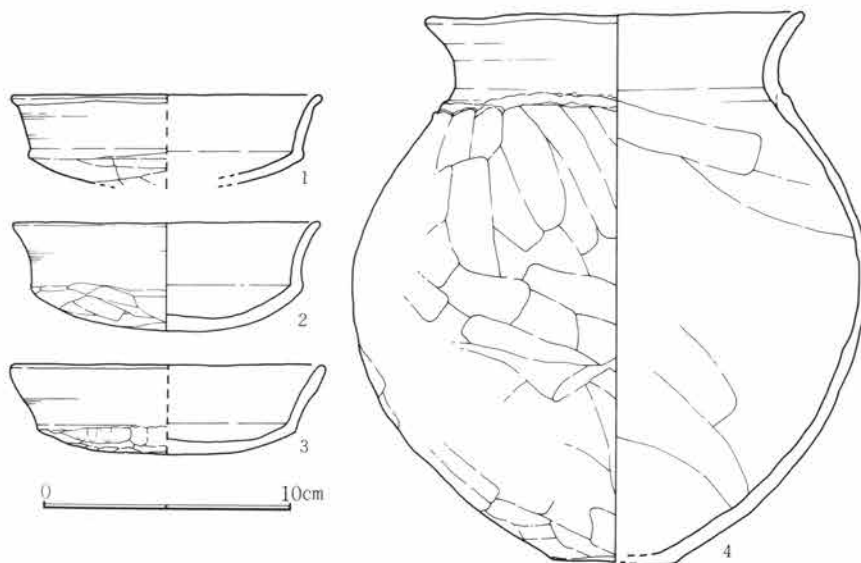


Fig. 152 L73号住居跡出土遺物(1)

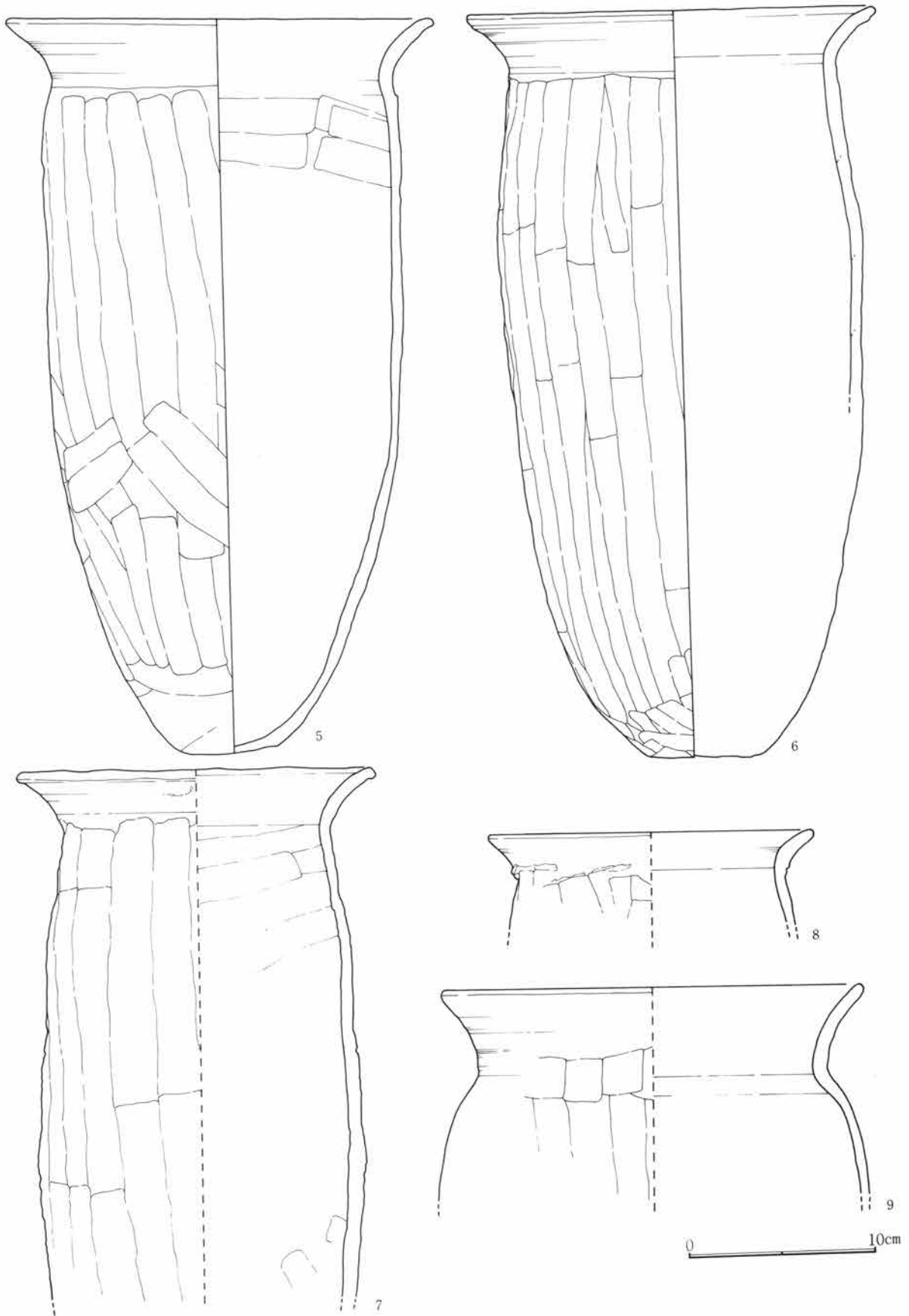


Fig. 153 L73号住居跡出土遺物(2)

第2章 遺構と遺物

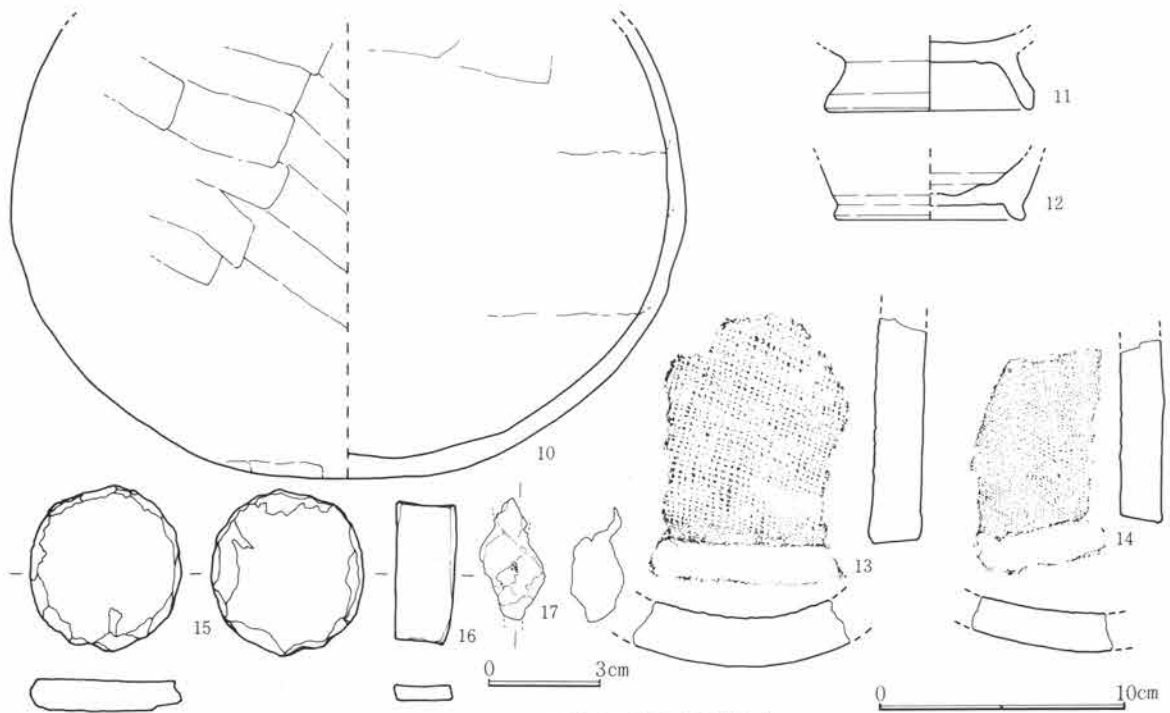


Fig. 154 L73号住居跡出土遺物(3)

L73号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
152-1 67-1	土師器 杯	小片	12.4×-× (3.5)口径高2.2	Pit埋土	底部浅く丸い。口縁部は受部で屈して外反気味に外傾。口唇部丸まり外屈。口縁部横撫で。底部不定方向笕削り。	①良好 ②橙 ③密・小石混る
152-2 67-2	土師器 杯	完形	12.2×-× 4.2口径高2.5	+2~4	底部丸く口縁部は受け部で屈し外反して開く。口縁部横撫で。底部不定方向の笕削り。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
152-3 67-3	土師器 杯	1/2	12.5×-× (3.5)口径高2.5	+5	底部浅い。口縁部屈して直線気味に外傾。口唇部は丸い。口縁部横撫で。底部不定方向の笕削り。	①酸化・良好 ②黄橙 ③やや密
152-4 67-4	土師器 甕	1/2	15.1×5.1× 21.8最大径20.5	+6~15	小さな平底。球胴を呈し口縁部は外反して開く。口唇部丸い。最大径胴中位。胴部不定方向笕削り。内面笕撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
153-5 67-5	土師器 甕	1/4	22.5×4.8 ×38.6	+4~11	胴部張りなく長胴形。口縁部強く屈し緩く外反して開く。口縁部横撫で。胴部縦位・下位横位笕削り。内面撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③砂多量に混る
153-6 68-6	土師器 甕	ほぼ完形	21.6×6.2 ×39.1	+5~11	胴部張りなく長胴形。口縁部大きく外反して開く。口縁部横撫で。胴部縦位笕削り。腰部斜位笕削り。	①やや軟 ②褐 ③やや粗・小石混る
153-7 68-7	土師器 甕	1/4	19.0×- ×(27.8)	埋土・ +4~10	胴部張りなく長胴形。口縁部外反して大きく開く。口唇部断面矩形。口縁部横撫で。胴部縦位笕削り。内面笕撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗・小石混る
153-8 68-8	土師器 甕	口縁部 1/4	17.2×- ×(5.0)	+10~14	口縁部僅かに外反。器肉厚い。肩部笕削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗・砂混る
153-9 68-9	土師器 甕	口縁部 1/4	22.2×- ×(11.0)	+9	胴部やや張る。口縁部やや高くくの字状に外反。最大径を胴部にもつ。肩部から胴部は縦位のやや幅広笕削り。	①良好 ②鈍い赤褐 ③小石多く混る
154-10 68-10	土師器 甕	胴部1/4	-×4.0 ×(17.7)	+8~15	丸底の底部。胴部は強く張り球胴を呈す。胴部中位は斜位笕削り。下位は摩耗のため不明瞭。	①やや軟 ②橙 ③やや粗・小石混る
154-11 68-11	須恵器 椀	高台部	-×8.4×- 高台高2.7	埋土	付高台、高くハの字状に開く。轆轤成形。	①良好 ②浅黄橙 ③やや粗
154-12 68-12	緑釉陶器 瓶	小片	-×7.0 ×(2.5)	埋土	腰部直線的。付高台、低く幅広。轆轤成形。腰部・底部回転笕削り。釉調はくすんだ暗緑色。	①良好 ②灰白 ③密
154-13 68-13	瓦 平瓦		厚1.9	埋土	凹面粗い布目。凸面笕撫で。側縁笕調整。	①良好 ②灰 ③やや粗
154-14 68-14	瓦 平瓦		厚1.6	埋土	凹面布目。凸面笕撫で。側縁笕削り。	①良好 ②灰 ③やや粗

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
154-15 68-15	須恵器 円盤状		6.6×6.0 厚1.3	埋土	甕片転用。全側面に両面からの人為的な打撃成形痕あり。 外面平行叩き、内面掻き目。	①良好 ②灰 ③やや密
154-16 68-16	須恵器 転用砥石		5.6×2.4 ×0.6	埋土	2側面使用。内面青海波状当て目。外面平行叩き目。	①良好 ②白灰 ③やや密
154-17 68-17	鉄塊			埋土	磁気強い。赤色錆び付く。重11g	

L74号住居跡 (Fig. 155~157・PL. 13、68)

L区第4台地の北西部に位置し、79・80L34~36の範囲にある。南西部は調査区域外に入り全容は明らかにできない。重複はなく単独の検出である。

平面形は東西方向に長軸をもつ方形を呈すと考えられる。南北長約3.4m、東西は東壁線より約4mの範囲まで確認した。東西軸方位はおよそN-123°-Eを示す。壁高は約28cmを測る。床面は緩く波うち踏み締まりは弱い。床面には数個のPitを検出しているが、配置及び規模、とくに深さの点で柱穴とは考えにくい。いずれも円形で深さ10cm前後で最も深いPitで27cmを測る。

竈は東壁に付設される。袖部は住居内に小さく張り出す掘形を残す。燃烧部は比較的大きく壁外に突出し、長めの煙道部が水平に延びる。左袖のやや奥まった箇所凝灰岩質の加工材が埋設される。袖部内法約80cm、燃烧部奥行き1.1m、煙道部長さ55cmを測る。

出土遺物は少量で、羽釜・鉄器などである。

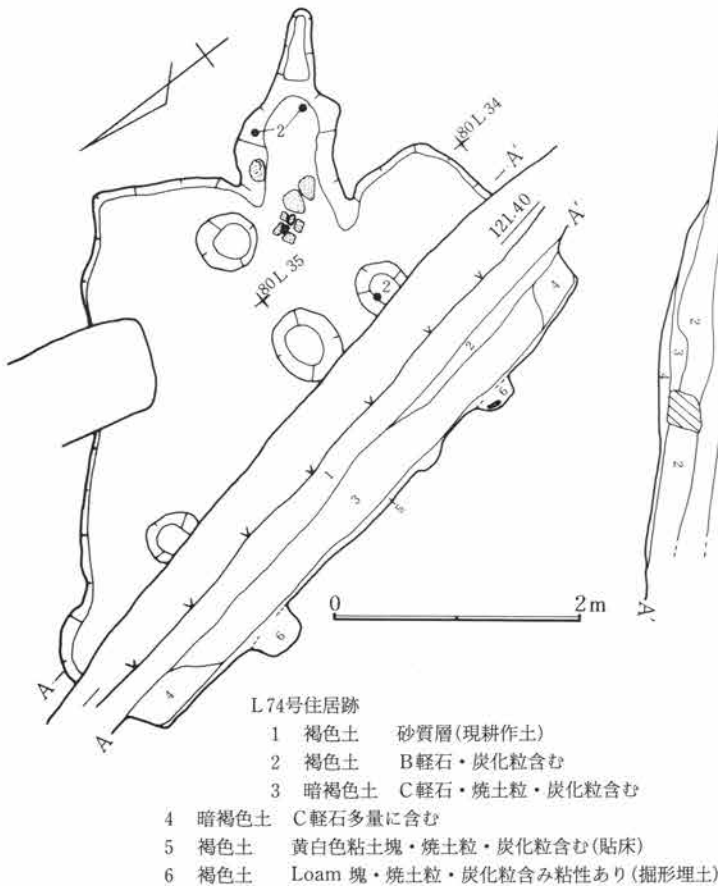


Fig. 155 L74号住居跡

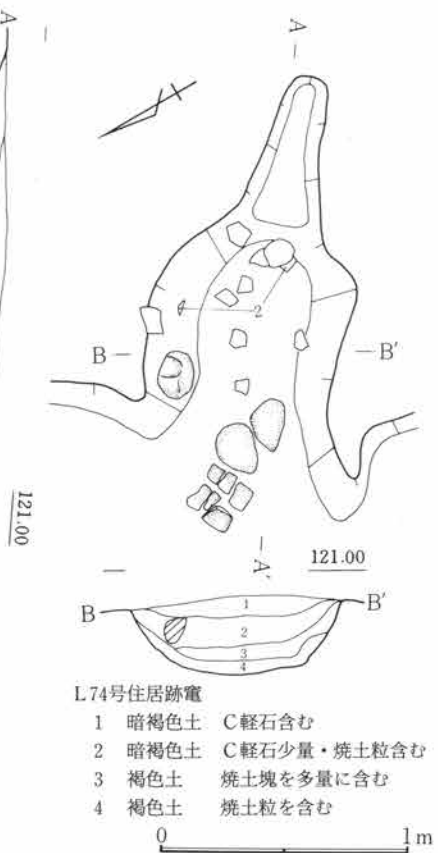


Fig. 156 L74号住居跡竈

第2章 遺構と遺物

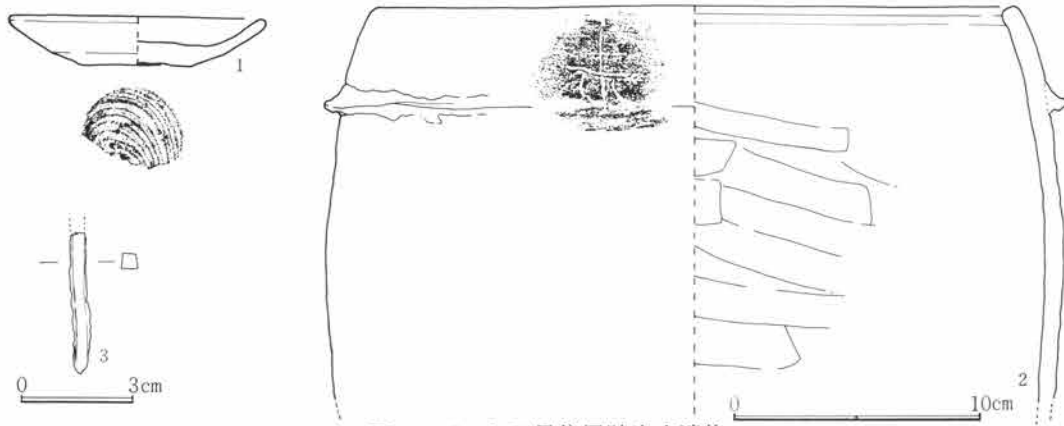


Fig. 157 L74号住居跡出土遺物

L74号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
157-1 68-1	須恵器 杯	¼	10.3×4.3 ×1.9	掘形埋土	底部肥厚し体部大きく外傾して開く。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化・良好 ②灰白 ③密
157-2 68-2	羽釜	¼	25.3×— ×(15.5)	床下・竈埋土	胴部やや内湾する。鏝下向きにつき作り極めて雑。口縁部内湾して内傾。口唇部断面矩形。外面撫で。内面篋撫で。口縁部に「ホ」の篋描き。	①良好 ②橙 ③砂混る・粗
157-3 68-3	鉄器 角釘	頭部欠損	長(3.8) 幅0.4	埋土	頭部欠損し形状不明。	

L75号住居跡 (Fig. 158、161・PL. 13、69)

L区第4台地の北西部に位置し、78・79 L30～32の範囲にある。東半は台地の北西部を北東～南西走する大溝L12号溝によって消失しており全容は不明である。

平面形は方形を呈すると考えられ、南北長は約4.1mを測り、東西は西壁線より4mの範囲まで確認した。東西軸方位はN-76°-Eを示す。壁高は34cmを測る。床面は緩く波うつが踏み締まりは良好である。床土は厚さ7～8cmで暗褐色土を主体にして焼土粒・炭化粒・Loam粒を含み、ほぼ全面に突き固めたようである。床下は規則的な床下土坑状のものはみられないが深さ30cm程度に凹凸がある。西壁際中央部には床面直上に焼土粒・炭化粒の分布がみられるが、床面が被熱した様子はない。

出土遺物は小片で多く検出されたが、形状を知るものは少ない。

L79号住居跡 (Fig. 160、162、163・PL. 13、14、69、70)

L区第4台地の北西部に位置し、75～78 L32～35の範囲にある。L80号・L122号・L219号住居跡と重複しておりL122号・L219号住居跡より新しい時期の所産である。また台地の北西部を北東～南西走する大溝L12号溝によって東西に分断され、L80号住居跡との重複は遺構面からは確認されていない。出土遺物からは当跡が新しい時期の所産である。調査段階では溝によって分断された両者を別遺構として認識したが、ここでは一連のものとして扱う。

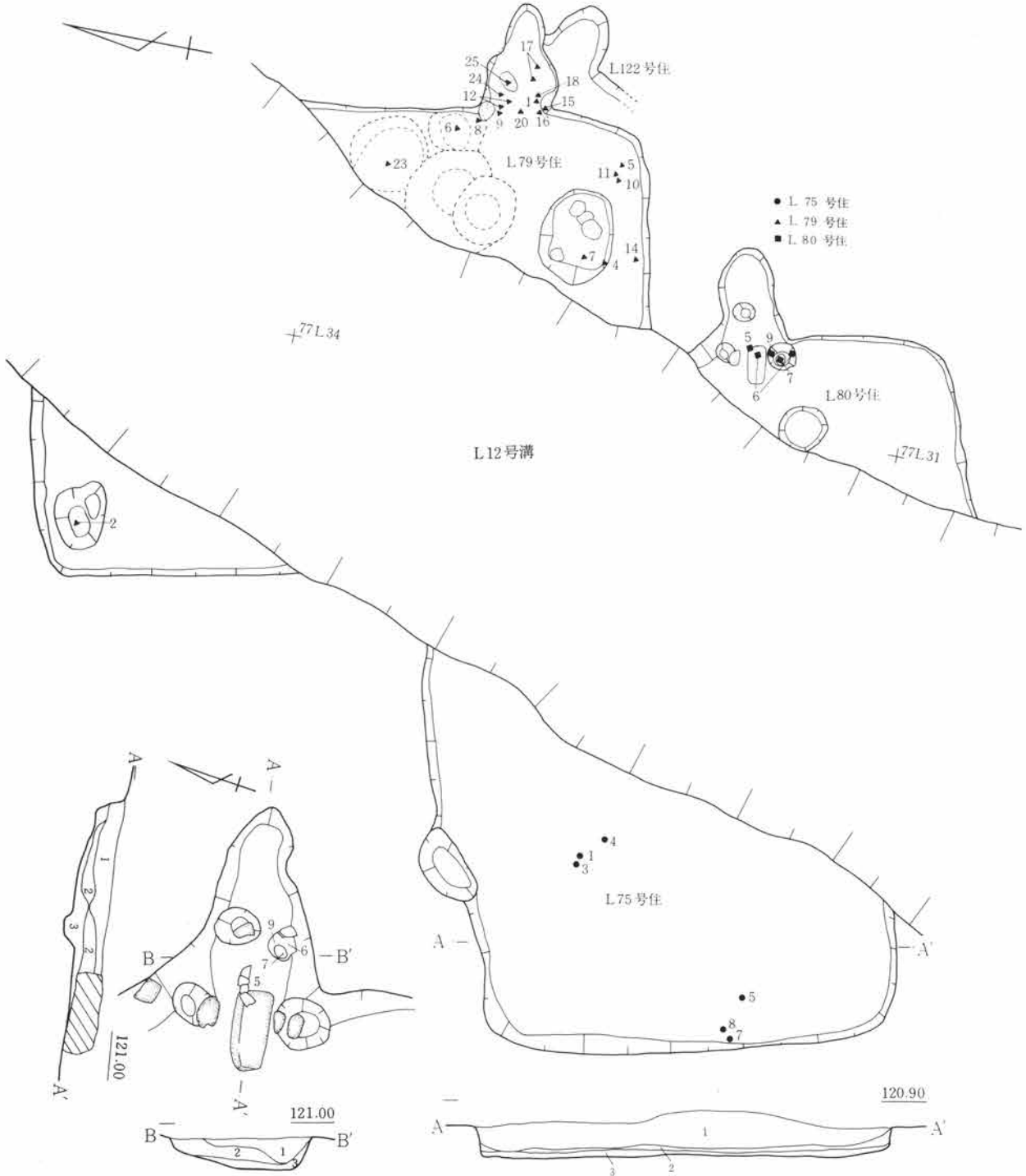
平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈する。東西長4.6m・南北長約6mを測る。東西軸方位はN-80°-Eを示す。検出面からの掘形は浅く壁高は17cmを測る。床面はほぼ平坦をなす。貯蔵穴は南東隅に設けられ径70×85cm・深さ54cmの楕円形を呈する。貯蔵穴内には土器類のほか、竈構築材と考えられる人頭大の石が見られた。竈前面には数個の床下土坑が検出されている。

竈は東壁にあり、南に大きく偏って付設される。袖部は壁線上にあり、左袖には川原石が埋設されている。

第1節 竪穴住居跡と出土遺物

燃焼部は楕円形に掘り込まれ緩やかな傾斜をもって幅広い煙道部へつづく。袖部内法約50cm・燃焼部奥行き約1m、煙道部長さ30cmを測る。

出土遺物は須恵器小杯が目立ち竈内や周辺に多い。



L80号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土粒を多量に含む
- 2 暗褐色土 焼土粒を多量に含む
- 3 暗褐色土 Loam 粒含む

0 1m

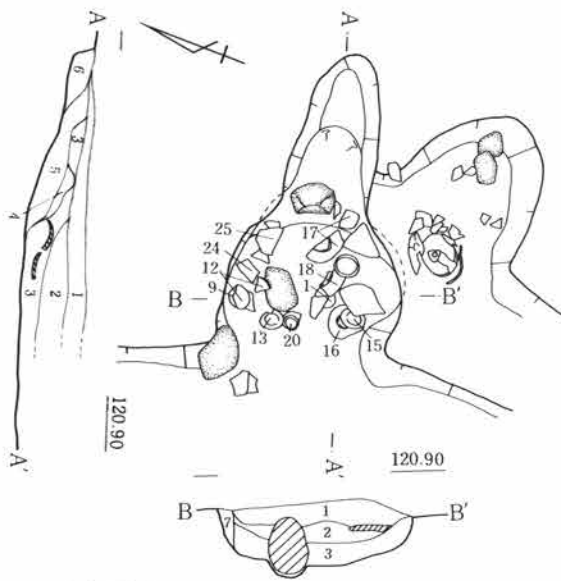
Fig. 159 L80号住居跡竈

L75号住居跡

- 1 黒褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒を含む
- 2 黒褐色土 C軽石多量・焼土粒・炭化粒含む
- 3 暗褐色土 硬く締まり床土。炭化粒・焼土粒・Loam 粒含む

0 2m

Fig. 158 L75号・L79号・L80号・L122号住居跡



L79号住居跡竈

- 1 黒褐色土 C軽石・焼土粒を含む
- 2 黒褐色土 焼土粒含む
- 3 黒褐色土 焼土塊を多量に含む
- 4 黒褐色土 Loam 粒・焼土粒を含む
- 5 黒褐色土 焼土粒・塊を多量に含む
- 6 黒褐色土 C軽石・焼土粒を多量に含む
- 7 焼土壁

0 1m

Fig. 160 L79号・122号住居跡竈

L80号住居跡 (Fig. 159、164・PL. 14、70)

L区第4台地北西部に位置し、76・77L30・31の範囲にある。台地北西部を北東～南西走する大溝のL12号溝によって、南東部の狭小な範囲を除きほとんどは消失している。L78号住居跡と重複しているが、当跡の掘形が深く遺存していたものである。またL79号住居跡と平面位置的には重複しているが、L12号溝のため遺構上からの新旧は不明である。出土遺物の比較によれば当跡が古い時期である。

消失部分が多く平面形は確認しえないがほぼ方形を呈すると思われる。東西長1.7m・南北長2.7mの範囲まで確認した。東西軸方位はN-72°-Eを示す。壁高は約23cmを測る。貯蔵穴は南東隅に設けられ、径40cm・深さ52cmの円形をなす。

竈は東壁に付設され、袖部は若干住居内にある。袖材の埋設痕には凝灰岩質の小片が残る。燃焼部は大きく張り出し煙道部との区別は不明瞭である。中央部やや左に偏って支脚の痕跡がある。また焚口部には天井材と思われる長方形に加工された凝灰岩質

材が落ち込んでいる。袖部内法約30cm、袖部からの奥行き1.1mを測る。

出土遺物は篋磨き調整を施した土師器類が竈内より出土している。

L122号住居跡 (Fig. 158、165・PL. 70)

L区第4台地の北西部に位置し、75L32の範囲にある。L79号住居跡と重複しているが、これより古い時期の所産である。平面形はほとんど確認できず竈のみ検出し、L79号住居跡竈の南に接してある。燃焼部は楕円形を呈し袖材などの痕跡はない。燃焼部幅・奥行き55cmを測る。

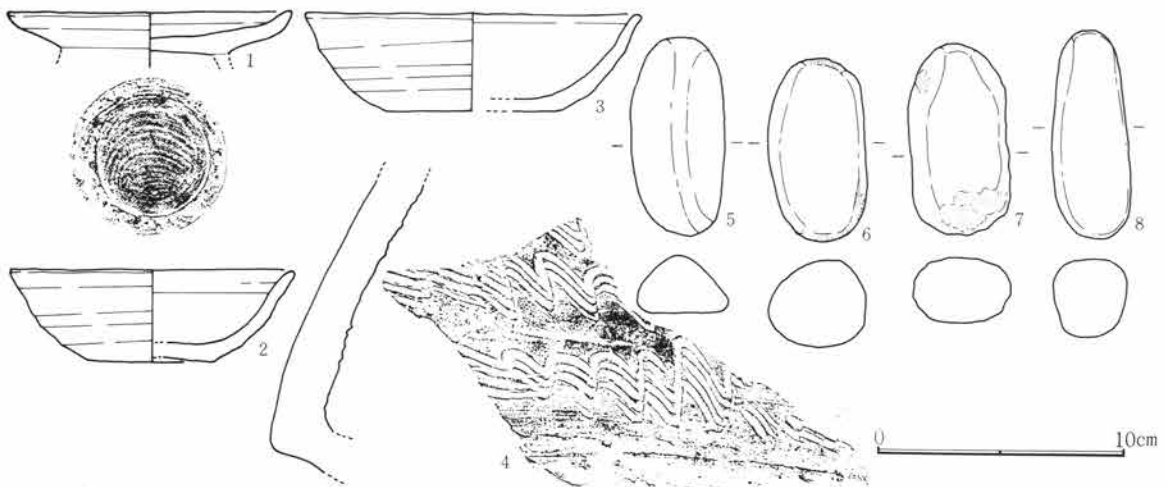


Fig. 161 L75号住居跡出土遺物

L 75号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
161-1 69-1	須恵器 皿	台部欠損	11.2× ×(1.7)	+25	内面一部に煤附着。体部偏平。口縁部僅かに内屈し口唇部細る。付高台欠損。底部右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
161-2 69-2	須恵器 杯	¾	11.4×5.0 ×3.6	埋土	体部丸味をもち口縁部僅かに外傾して開く。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②淡黄 ③やや密
161-3 69-3	土師器 杯	¾	13.4×6.8 ×3.8	+12	腰～体部丸く口縁部外反気味。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・やや軟 ②鈍い橙 ③やや密
161-4 69-4	須恵器 甕	肩部破片		+28	頸部に5条単位の波状文3段あり。	①良好 ②オリーブ 灰 ③やや密・砂混
161-5 69-5	石	完形	長7.6幅3.6 厚2.2	床直	使用痕不明。重93.7g	粗粒安山岩
161-6 69-6	石	完形	長7.5幅3.8 厚3.3	埋土	両端部に敲打痕らしきものあり。重133.6g	粗粒安山岩
161-7 69-7	石	完形	長7.5幅3.8 厚2.6	床直	一端に打撃痕らしきものあり。重115.5g	粗粒安山岩
161-8 69-8	石	完形	長8.2幅3.0 厚3.0	埋土	使用痕不明。重113.7g	粗粒安山岩

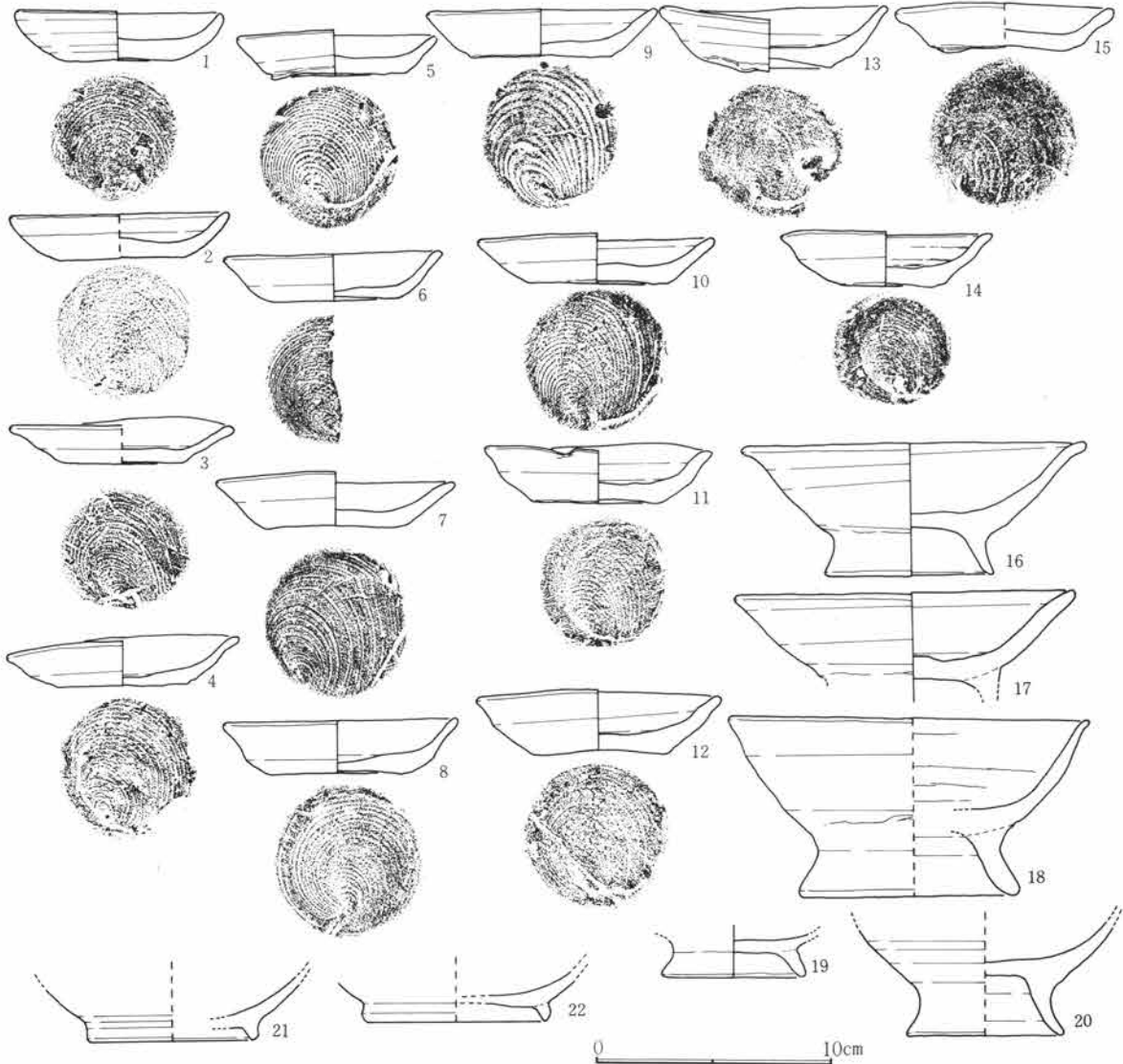


Fig. 162 L 79号住居跡出土遺物(1)

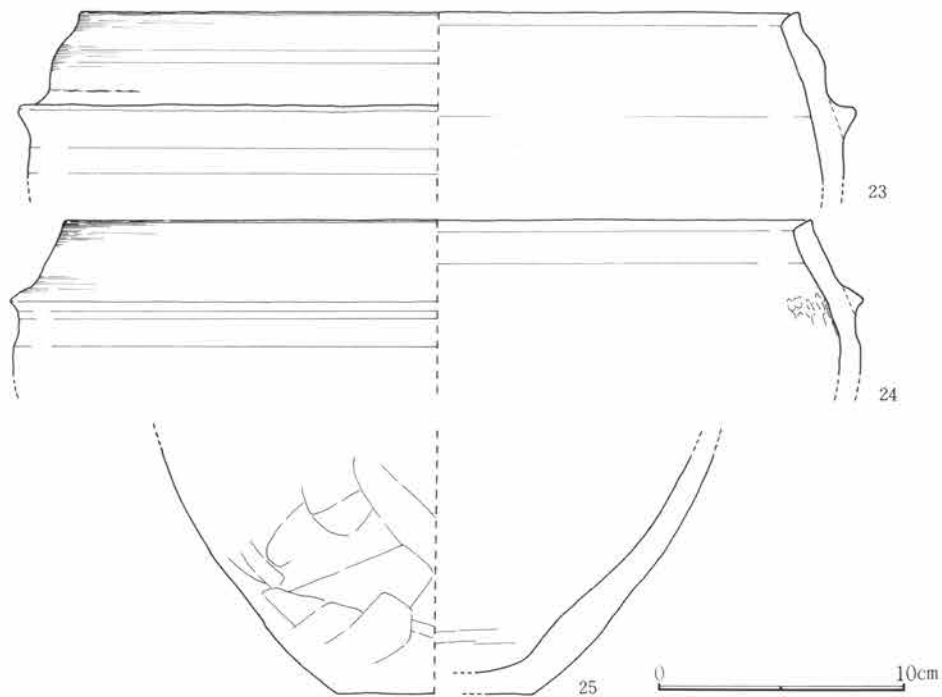


Fig. 163 L79号住居跡出土遺物(2)

L79号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
162-1 69-1	須恵器 杯	完形	8.7×4.4 ×2.1	竈	体部丸味をもち器肉厚い。口縁部内湾気味。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②鈍い橙 ③やや密・細砂
162-2 69-2	須恵器 杯	完形	9.2×5.2 ×1.9	掘形 -14	底部やや肥厚。体部丸味をもつ。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②浅黄橙 ③やや粗・細砂
162-3 69-3	須恵器 杯	¾	9.4×5.0 ×2.0	掘形 -13	器肉薄い。体部直線的に大きく開く。口縁部僅かに外反し口唇部丸まる。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・やや軟 ②鈍い橙 ③やや密
162-4 69-4	須恵器 杯	ほぼ完形	9.7×5.6 ×2.2	掘形 -27	器肉薄めで歪み大。体部中位で屈し口縁部外反して大きく開く。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・やや軟 ②鈍い赤褐 ③やや密
162-5 69-5	須恵器 杯	ほぼ完形	8.4×5.6 ×2.0	埋土	底部肥厚。体部直線的に開き浅い。口唇部は丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②淡黄 ③やや密
162-6 69-6	須恵器 杯	¾	9.1×5.1 ×2.0	掘形 -33	器肉薄い。腰部丸味をもち口縁部やや外反。口唇部細る。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②鈍い橙 ③やや密・砂
162-7 69-7	須恵器 杯	完形	10.0×5.7 ×2.4	掘形	体部直線的に大きく開く。口縁部僅かに外反。口唇部は丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②灰白 ③やや密
162-8 69-8	須恵器 杯	口縁一部欠損	9.8×5.2 ×2.2	掘形 -42	腰部肥厚し強い撫でで屈し口縁部薄く外反。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②鈍い橙 ③やや密・砂
162-9 69-9	須恵器 杯	完形	9.7×5.8 ×2.0	竈	体部直線的に開き口縁部僅かに内湾気味。口唇部丸い。粗い轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③やや密
162-10 69-10	須恵器 杯	完形	9.9×5.7 ×2.1	竈	体部やや直線的に開く。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。二次被熱。	①酸化・良好 ②浅黄橙 ③やや密
162-11 69-11	須恵器 杯	完形	9.5×5.2 ×2.5	+6	器肉厚い。体部中位で屈し上半は外反して開く。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②鈍い橙 ③やや密
162-12 69-12	須恵器 杯	口縁一部欠損	10.3×5.6 ×2.7	竈・埋土	器肉厚い。体部直線的に広がり中位で屈し口縁部は外反気味。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②灰黄褐 ③やや密
162-13 69-13	須恵器 杯	ほぼ完形	9.6×6.1 ×2.9	竈	体部やや直線的に開く。口縁部緩く外反し口唇部細まって丸い。内面撫で。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②鈍い黄橙 ③やや密
162-14 69-14	須恵器 杯	完形	8.8×4.3 ×2.3	+6	体部中位で屈し口縁部外反して開く。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②鈍い黄橙 ③やや密
162-15 69-15	須恵器 杯	完形	9.0×5.6 ×2.0	竈	体部やや直線的に開き口縁外反。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。内面銅溶解物附着。転用増埴。二次被熱。	①良好 ②灰白 ③やや密・砂混る
162-16 69-16	須恵器 椀	口縁一部欠損	14.3×7.0 ×5.5	埋土	体部やや丸味もち浅め。口縁部大きく外反し開く。口唇部丸い。付高台高くハの字状に開く。端部丸い。轆轤成形。	①酸化気味・良好 ②鈍い橙 ③やや密

第1節 竪穴住居跡と出土遺物

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
162-17 69-17	須恵器 椀	口縁一 部欠損	14.1× ×(3.6)	竈	体部浅く腰部丸味もち上半外反気味に大きく開き口唇部丸い。見込部円形に突出。付高台。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味 ②明褐色 ③やや密黒色粒
162-18 69-18	須恵器 椀	1/2	14.9×9.1 ×7.6	竈	体部丸く深め。口縁部緩く外反し口唇部丸い。付高台高く肥厚しハの字状に開く。端部丸い。二次被熱。轆轤成形。	①酸化・良好 ②橙 ③やや密・砂混る
162-19 69-19	須恵器 椀	底部	—×6.0 ×(1.8)	埋土	付高台、直線的に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化・良好 ②橙 ③やや粗・細砂混る
162-20 69-20	須恵器 椀	下半	—×6.5 ×(4.6)	竈	体部緩い丸味をもつ。付高台、高くハの字状に開く。端部丸い。轆轤成形。	①酸化気味・良好 ②鈍い橙 ③やや密
162-21 69-21	灰釉陶器 椀	底部片	—×7.4 ×(1.7)	埋土	底部回転糸切り。内外面施釉。付高台、低く内傾気味に立つ。	①良好 ②灰白 ③やや密
162-22 69-22	灰釉陶器 椀	底部片	—×7.1 ×(2.2)	掘形埋土	高台低めで端部丸い。見込部に重ね焼き痕。	①良好 ②淡黄 ③密
163-23 70-23	羽釜 破片	口縁部 破片	28.6×— ×(6.8)	掘形	胴部やや丸味をもつ。鏝上方へ向く。口縁部内傾し口唇部幅広く断面矩形。上端面内傾。口縁部撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③やや粗・砂混る
163-24 70-24	羽釜 破片	口縁部 破片	29.8×— ×(6.2)	竈	胴部やや張り気味。鏝低く下向き。口縁部内傾し口唇部幅広く断面矩形。上端面内傾。口縁部撫で。内面に指頭痕。	①酸化・良好 ②橙 ③やや粗・砂混る
163-25 70-25	羽釜? 片	下半破 片	—×7.8 ×(9.6)	竈	器肉肥厚し胴部下位斜位篋削り。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや粗・白色粒

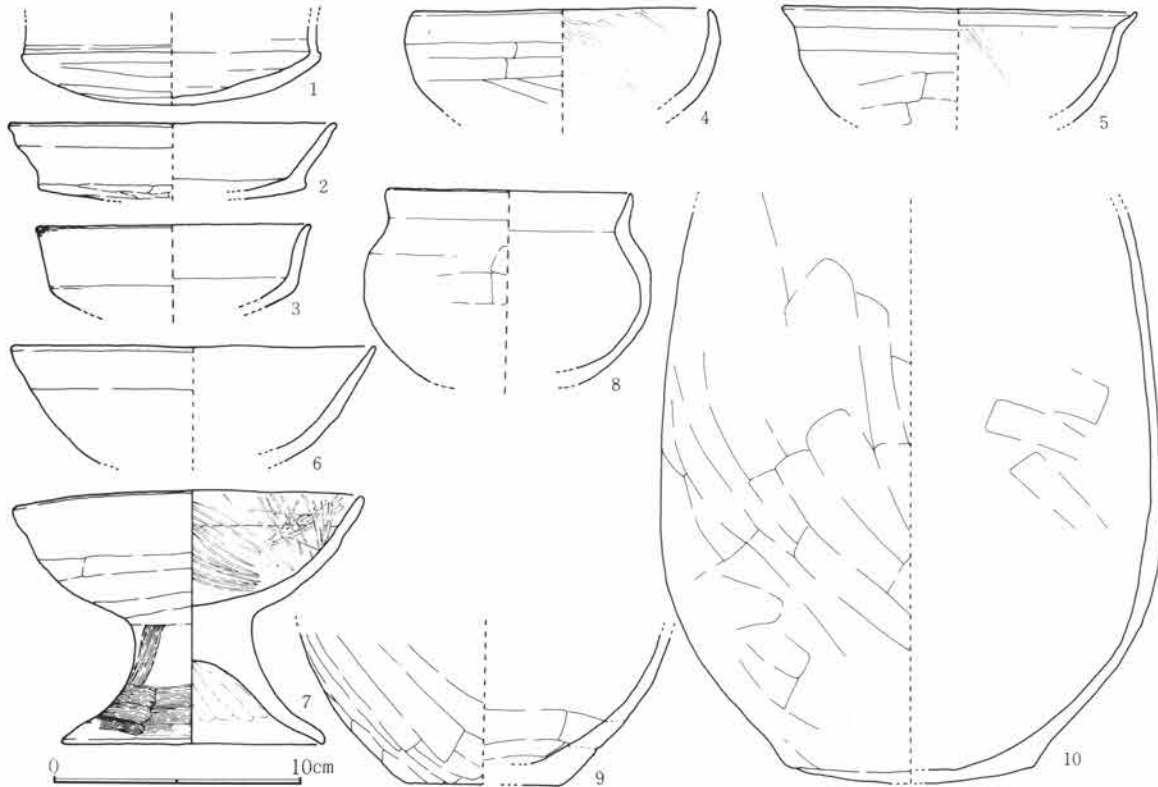


Fig. 164 L80号住居跡出土遺物

L80号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
164-1 70-1	土師器 杯	体部1/4 口唇欠	—×— ×(3.2)	埋土	口縁部直立気味に立つ。口縁部横撫で。底部篋削り。底部内面に黒色附着物。	①酸化 ②橙 ③砂混る
164-2 70-2	土師器 杯	1/2	13.0×— ×(3.0)	埋土	底部扁平。口縁部緩く外反して開き上半は弱くくびれる。口縁部横撫で。底部手持ち篋削り。	①酸化 ②橙 ③砂混る
164-3 70-3	土師器 杯	口縁部 破片	11.0×— ×(3.3)	竈埋土	底部浅く丸い。口縁部直線的で僅かに外傾して立つ。口唇部細まり丸い。口縁部撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・砂混る

第2章 遺構と遺物

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
164-4 70-4	土師器 杯	1/2底部 欠損	11.7×— ×(4.0)	竈埋土	体部丸く張る。口縁部内湾し口唇部細る。内面斜行篋磨き口縁部横撫で。外面横位篋削り。	①良好 ②明赤褐 ③やや密
164-5 70-5	土師器 杯	1/2	14.0×— ×(4.6)	+6	体部丸い。口縁部外屈する内斜口縁。口唇部は細り内屈。内面斜行篋磨き。外面篋削り。内外面一部に黒色付着物。	①酸化 ②橙 ③細砂混る
164-6 70-6	土師器 杯	1/2 底部欠	14.0×— ×(4.6)	+10	腰部丸く口縁部僅かに内湾して開く。	①酸化 ②明赤色 ③やや粗
164-7 70-7	土師器 高杯	ほぼ完 形	14.0×10.5 ×10.0	竈	腰部丸く口縁部は僅かに段をなし内湾気味に開く。脚部裾は内湾気味に開く。杯部内面斜行・斜格子状篋磨き。外面口縁部横撫で。体部篋削り。脚部外面刷毛目状撫で。内面指押さえ。杯内面黒色付着物。	①良好 ②橙 ③やや密
164-8 70-8	土師器 壺?	破片	9.8×— ×(7.6)	埋土	体部丸く球形を呈す。口縁部やや内湾気味に外傾。口縁部横撫で。体部篋削り。	①良好 ②鈍い赤褐 ③やや粗・砂混る
164-9 70-9	土師器 甕?	上半欠 損	—×5.7 ×6.0	埋土	胴部丸く張る。外面縦位篋削り。内面横位篋撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗
164-10 70-10	土師器 甕	1/2口縁 部欠損	—×9.8 ×(22.4)	埋土	底部やや脹らむ。胴部下半に張りをもち下膨れ。外面不定方向篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗・粗砂混る

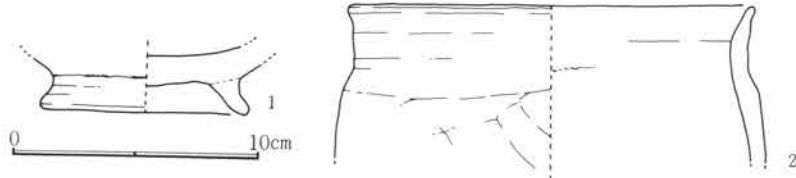


Fig. 165 L122号住居跡出土遺物

L122号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
165-1 70-1	内黒土器 碗	1/2体 部欠損	—×8.2 ×(2.7)	埋土	付高台、やや高く肥厚し大きくハの字状に開く。高台部横撫で。内面黒色処理。	①良好 ②明褐灰 ③やや粗・細砂混る
165-2 70-2	土師器 甕	小片	16.2×— ×(6.3)	埋土	口縁部短く直立気味に外反。口縁部横撫で。胴部不定方向篋削り。	①良好 ②明褐灰 ③やや粗・粗砂混る

L77号住居跡 (Fig. 166、168、169・PL. 14、70)

L区第4台地の北西部に位置し、75~77L29・30の範囲にある。L78号住居跡と重複しており、これより古い時期の所産である。北半は掘形の深いL78号住居跡によって、また西端はL12号溝で消失している。

平面形はほぼ方形を呈すると考えられる。東西長約4.1m・南北長1.6mの範囲まで確認した。東西軸方位はN-86°-Eを示す。確認面よりの掘形は極めて浅く壁高は約8cmにすぎない。床面はほぼ平坦をなすが踏み締まりは弱い。

竈は東壁にあり、著しく南に偏って付設される。竈右袖に続く東壁線は段をなして東壁と南壁の変換部を作る。右袖部には壁線上に凝灰岩質の加工材を埋設する。焚口部には火床にあたると思われる円形の窪みを形成している。燃焼部幅約50cm、火床窪みからの奥行き約90cmを測る。

出土遺物は少量で、甗片の他緑釉陶器の底部円形に調整した製品などがある。

L78号住居跡 (Fig. 166、167、170、171・PL. 14、71)

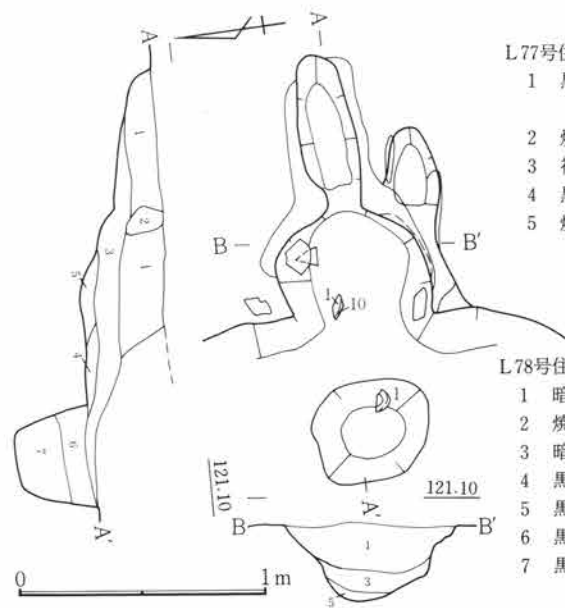
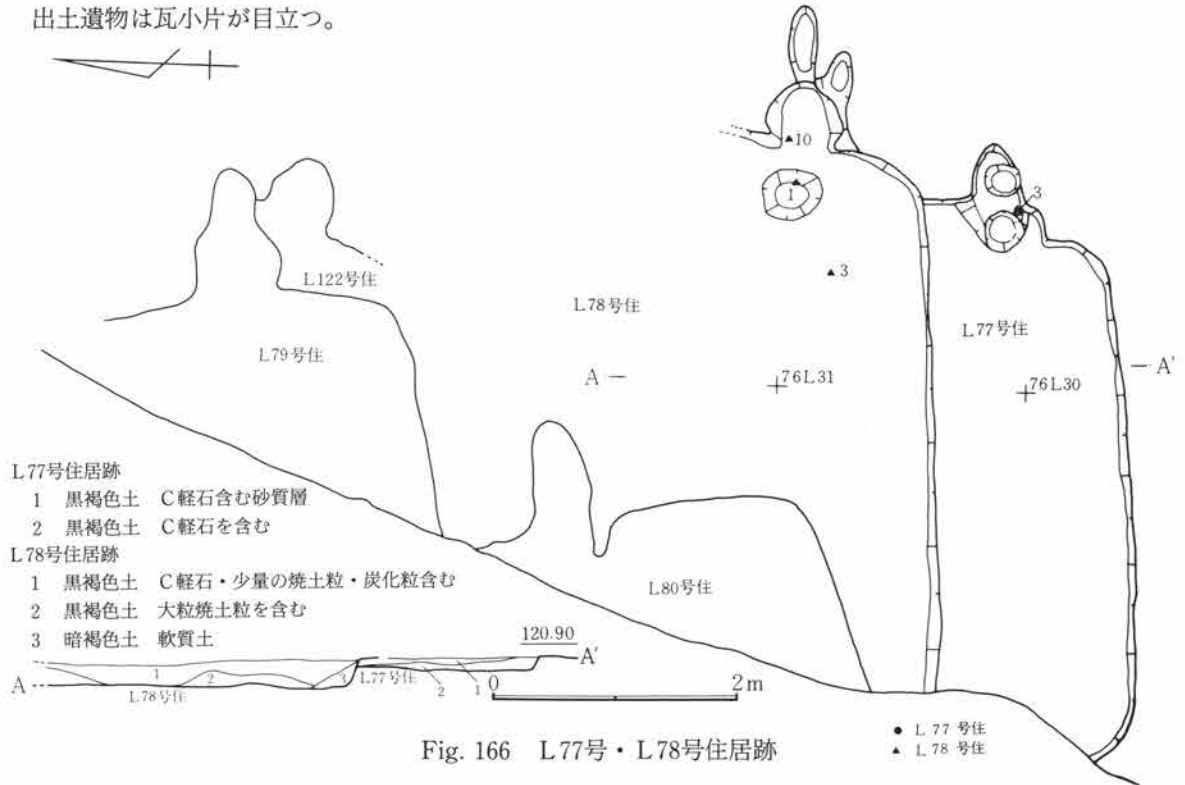
L区第4台地の北西部に位置し、74~76L30・31の範囲にある。L77号・L80号住居跡と重複しており、両者より新しい時期の所産である。西側はL12号溝によって消失している。また北側は東壁線から北壁線のほとんどが検出できていないため全容は不明である。

平面形はほぼ方形を呈すると考えられる。東西長約4.3m・南北長約2mの範囲まで確認した。東西軸方位

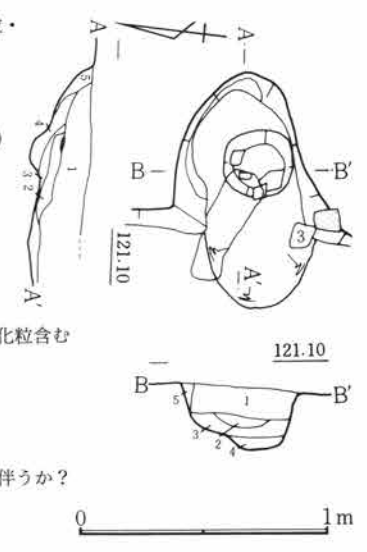
はN-90°-Eを示す。壁高は約20cmを測る。床面は僅かに波うち、踏み締まりは弱い。貯蔵穴などの諸施設は検出されていない。

竈は東壁にあり、著しく南に偏って付設される。楕円形に掘り込まれた燃焼部より緩い傾斜をもって立ち上がり、長めの煙道部が延びる。また右側には別の竈のものと思われる煙道部が僅かに検出された。他住居との切り合いは認められず竈の作り替えによるものと考えられる。燃焼部前面に径50cm・深さ30cmの円形土坑が穿たれるが、燃焼部との間隔が大きすぎ旧竈に伴うものと思われる。埋土は焼土粒を多量に含む黒色土である。燃焼部幅60cm・奥行き60cm、煙道部長さ54cmを測る。

出土遺物は瓦小片が目立つ。



- L77号住居跡竈
- 1 黒褐色土 C軽石多量、焼土粒・炭化粒少量含む
 - 2 焼土 火床面
 - 3 褐色土 焼土塊含む(掘形)
 - 4 黒褐色土 Loam塊含む(掘形)
 - 5 焼土 (竈壁)
- L78号住居跡竈
- 1 暗褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒含む
 - 2 焼土 (天井部)
 - 3 暗褐色土 焼土塊多量に含む
 - 4 黒褐色土 焼土粒含む
 - 5 黒褐色土 C軽石・焼土粒含む
 - 6 黒色土 焼土粒含む。旧竈に伴うか?
 - 7 黒色土 炭化粒多量に含む 旧竈に伴うか?



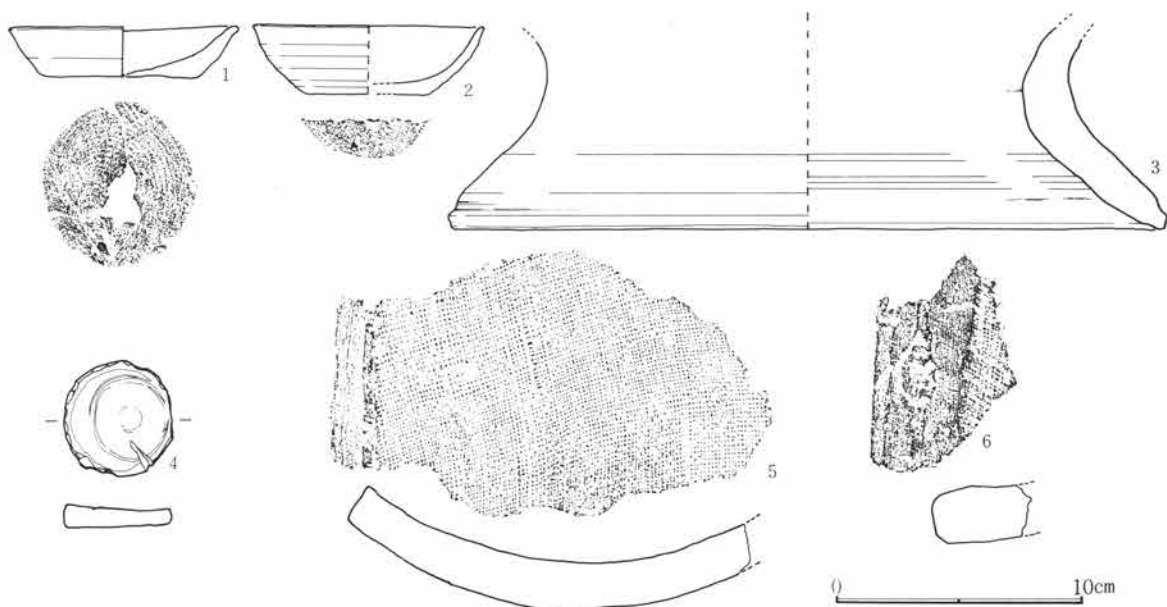


Fig. 169 L77号住居跡出土遺物

L77号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
169-1 70-1	須恵器 杯	ほぼ完 形	9.2×6.1 ×2.1	埋土	体部張りみ少なく直線的に開く。口縁部小さく外反し口唇部丸い。底部中心部薄い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密・砂混る
169-2 70-2	須恵器 杯	小片	9.2×4.8 ×2.7	竈床下埋 土	体部丸味をもちやや内湾気味に開く。口縁部細まり口唇部尖り気味。器肉薄い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②淡黄 ③やや粗
169-3 70-3	須恵器 甌	底部 破片	—×28.3 ×(8.0)	竈	器肉極めて厚く裾部大きく外反。裾端部に段をなし端面断面矩形。裾部撫で。	①良好 ②淡黄 ③やや粗・砂混る
169-4 70-4	緑釉陶器 椀	底部の み		埋土	底部縁辺を細かく打ち欠き摩滅調整を加え円盤状に作る。底部及び見込部磨き、全面施釉浅緑。底部回転糸切り状の痕跡。	①良好・軟質 ②浅 黄橙 ③密
169-5 70-5	瓦 平瓦	小片	厚2.0	埋土	凹面布目。凸面篋撫で。側面篋調整。二次被熱。	①酸化・良好 ②橙 ③やや密
169-6 70-6	瓦 平瓦	小片	厚2.2	埋土	凹面布目。凸面撫で。側面篋調整。	①良好 ②鈍い黄褐 ③やや密

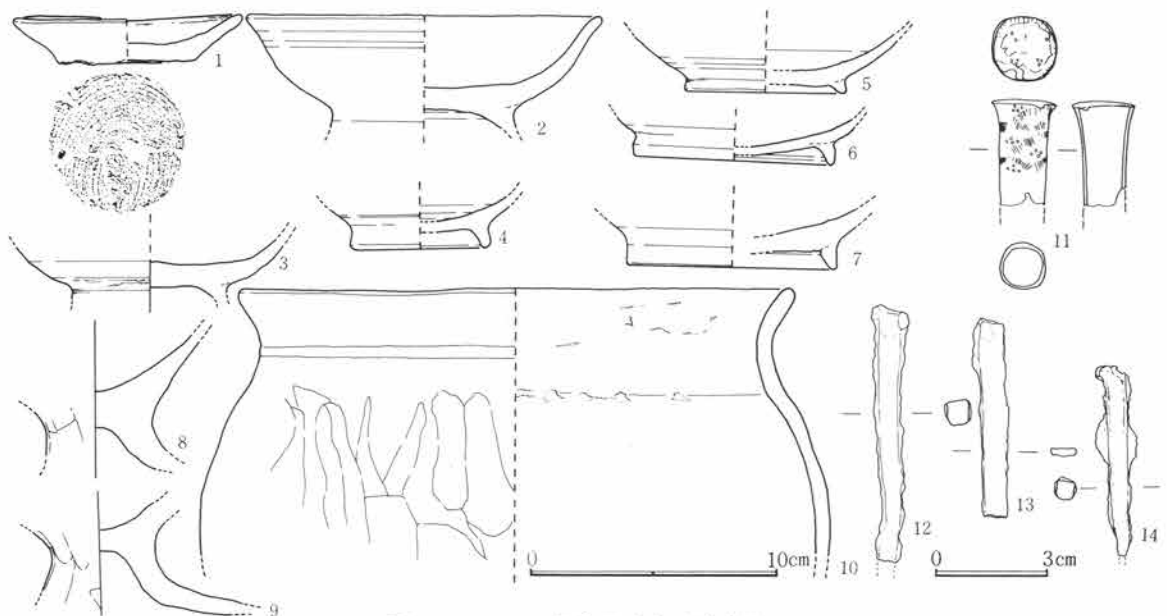


Fig. 170 L78号住居跡出土遺物(1)

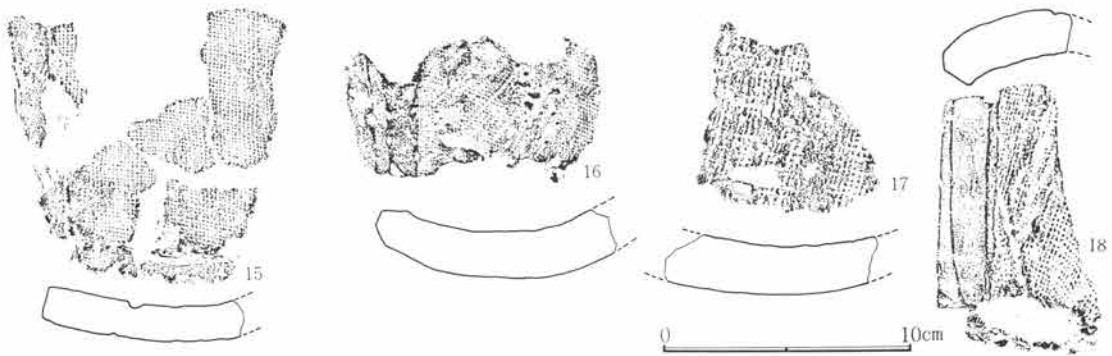


Fig. 171 L78号住居跡出土遺物(2)

L78号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
170-1 71-1	須恵器 杯	ほぼ完	9.1×5.5 ×2.0	竈	器肉厚い。体部直線的で大きく外傾。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密・砂混る
170-2 71-2	須恵器 椀	欠	14.2×— ×(4.4)	埋土	体部浅目。下半に丸味をもち上半は外反して開く。口唇部丸い。付高台、端部欠損。ハの字状に開く。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密・砂混る
170-3 71-3	須恵器 椀	底部欠	—×— ×(2.3)	埋土	腰部やや張る。付高台、端部欠損。轆轤成形。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや密・砂混る
170-4 71-4	灰釉陶器 椀	底部破片	—×5.6 ×(2.0)	埋土	底部凹む。体部内湾気味。高台ハの字状に開き端部丸い。	①良好 ②灰白 ③密
170-5 71-5	灰釉陶器 椀	底部欠	—×6.4 ×(2.4)	埋土	体部緩く丸味をもって開く。見込部に重ね焼き痕あり。高台低目で緩くハの字状に開く。	①良好 ②灰白 ③密
170-6 71-6	灰釉陶器 椀	底部破片	—×7.9 ×(1.8)	埋土	底部凹む。高台緩く稜をなし内湾気味に立つ。見込部に重ね焼き痕。	①良好 ②灰白 ③密
170-7 71-7	灰釉陶器 椀	底部破片	—×8.3 ×(2.4)	埋土	体部やや直線的に開くか。底部凹む。高台部垂直気味に立つ。端部丸い。	①良好 ②灰白 ③密
170-8 71-8	土師器 台付甕	台部欠	—×4.3 ×(5.3)	埋土	台部篋削り。	①酸化 ②橙 ③やや粗・砂混る
170-9 71-9	土師器 台付甕	台部欠	—×4.1 ×(4.6)	埋土	台部ハの字状に開いた後平らに大きく広がる。外面縦位篋削り。	①やや軟 ②鈍い橙 ③やや粗・砂混る
170-10 71-10	土師器 甕	上半	22.4×— ×(10.4)	埋土	胴部張り弱く口縁部外反して開く口縁部横撫で。胴部縦位篋削り。内面横篋撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗
170-11 71-11	銅製品 経軸端		径1.8 長2.8	埋土	銅地鍍金。楔形軸端。頂部・側面に松葉状毛彫。4個単位の魚々子文打ち出す。	
170-12 71-12	鉄器 角釘	下端欠損	長(6.8) 径0.6	埋土	頭部形状折頭式。	
170-13 71-13	鉄器 板状		長5.2幅0.6 厚0.2	埋土	板状製品。	
170-14 71-14	鉄器 角釘	下端欠損	長5.0 径0.5	埋土	頭部形状折頭式。	
171-15 71-15	瓦 平瓦	小片	厚1.4	埋土	凹面布目。凸面撫で。側面篋調整。表裏面吸炭。	①軟 ②灰白 ③やや密
171-16 71-16	瓦 平瓦	小片	厚1.8	埋土	凹面布目。凸面撫で。側面篋調整。	①酸化 ②鈍い橙 ③密
171-17 71-17	瓦 平瓦	小片	厚1.9	埋土	凹面布目。凸面撫で。表裏面吸炭。	①軟 ②白灰 ③やや密
171-18 71-18	瓦 丸瓦		厚1.8	竈埋土	凹面布目。凸面撫で。側面篋調整。凹面に布合わせ目。	①良好 ②灰白 ③密

L81号住居跡 (Fig. 172~174・PL. 14、71、72)

L区第4台地西側のほぼ中央部に位置し、77~79L25~28の範囲にある。西半は台地北西部を北東~南西走するL12号溝によって消失しているため全容は不明である。また位置的には当跡北東部に竈のみが検出されているL143号住居跡と重複関係にあり、これより新しい時期の所産と考えられる。

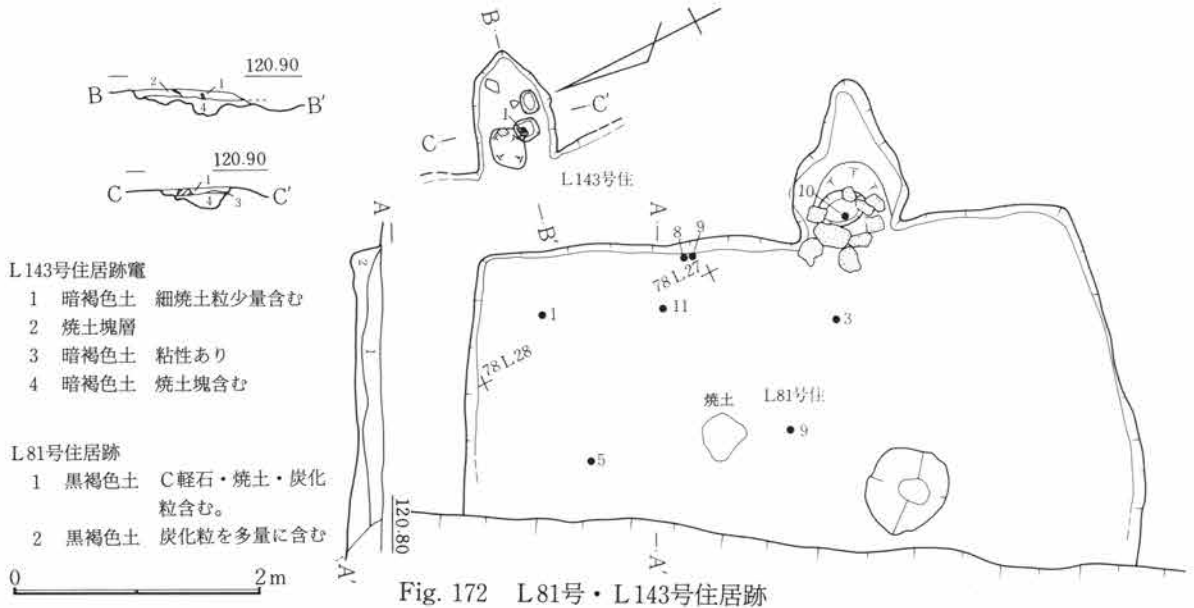
平面形はほぼ方形を呈すると思われるが西壁線に若干の脹りみがある。南北長5.4mを測り、東西は約2.8

第2章 遺構と遺物

mの範囲まで確認した。東西軸方位はおよそN-116°-Eを示す。壁高は約20cmを測る。住居内やや北側で小範囲に焼土の分布が認められたが床面より5~6cm高い位置にある。南寄りに径65cm・深さ57cmの楕円形 Pit が検出されたが位置的に柱穴とは考えられない。

竈は東壁にありやや南に偏って付設され、大きく壁線から突出する。燃烧部内には凝灰岩質の構築材が散乱しているが元位置を保つものは少ない。燃烧部はやや深めに落ち込み厚い炭化物が堆積している。煙道部は長い傾斜をもって立ち上がる。焚口部幅80cm、燃烧部幅1m・奥行き70cm、煙道部長さ50cmを測る。

出土遺物は散在していた。

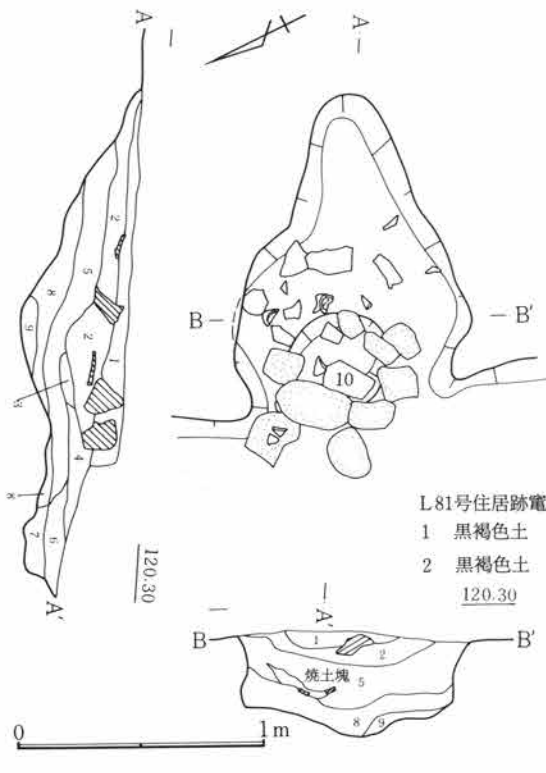


L143号住居跡 (Fig. 172、175・PL. 14、72)

L区第4台地西側のほぼ中央部に位置し、76・77L27の範囲にある。本来掘形が浅く、なおかつ調査段階での検出面が深すぎたためか竈跡のみが明らかにされた。L81号住居跡と重複関係にあると思われるが、壁線をまったく確認できなかったため確定することはできない。出土遺物からは当跡が古いと考えられる。

竈は東壁に付設されており、東西軸方位はN-100°-Eを示す。燃烧部幅65cm・奥行き90cmを測る。

出土遺物は 須恵器碗 1点である。



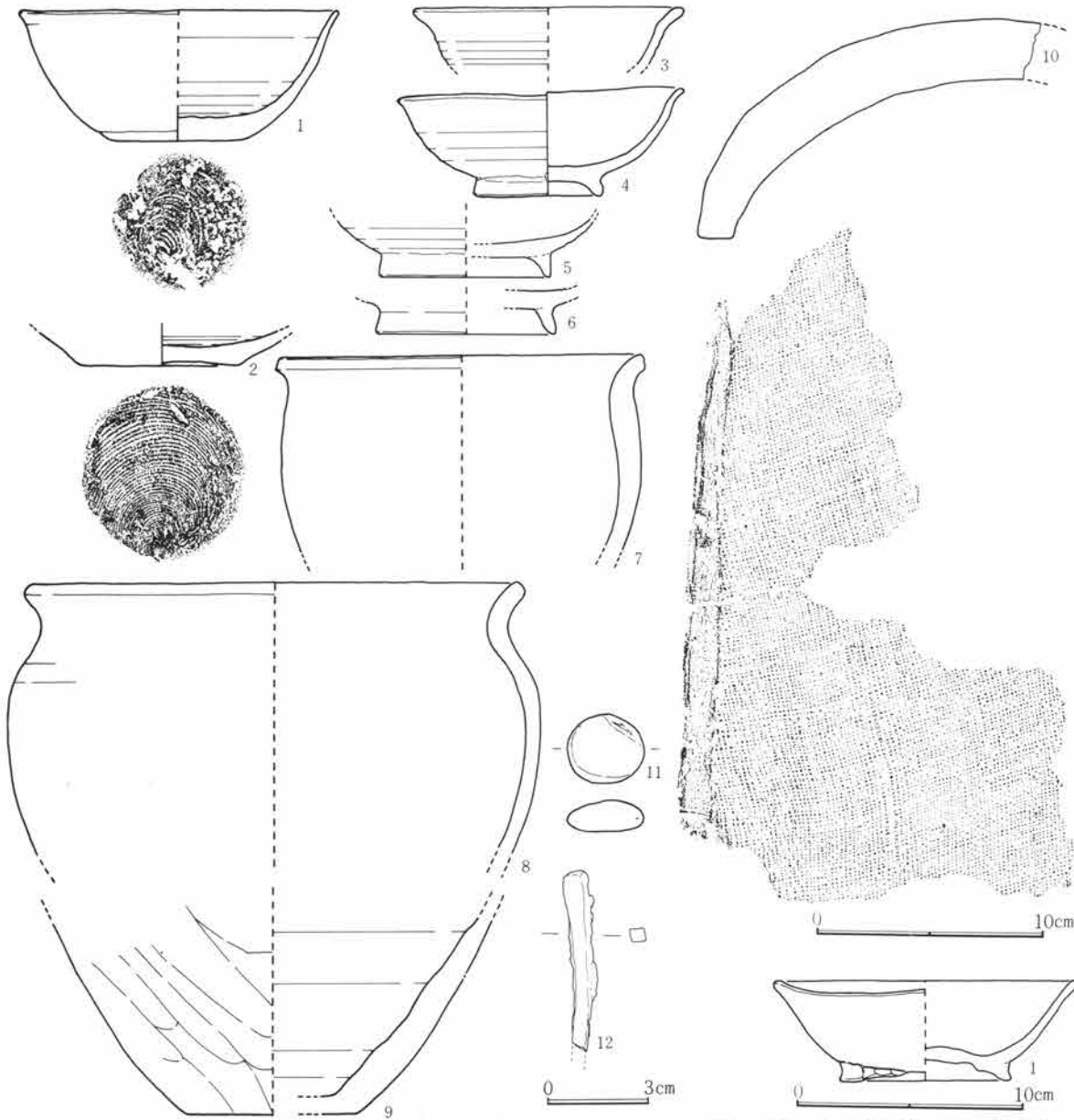


Fig. 174 L81号住居跡出土遺物

Fig. 175 L143号住居跡出土遺物

L81号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
174-1 71-1	須恵器 杯	1/2	14.0×5.3 ×5.6	埋土	腰部から体部丸味強く深い。口縁部細り緩く外反し開く。底部器肉厚い。内面黒色処理。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好・酸化気味 ②浅黄橙 ③やや密
174-2 71-2	須恵器 杯	底部	-×7.0 ×(1.5)	竈	腰部やや直線的に外傾。底部部分的に凹む。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 ②橙 ③やや粗・砂混る
174-3 71-3	須恵器 杯	口縁部 1/4	11.9×- ×(2.5)	掘形	体部丸味強い。口縁部肥厚し大きく外反して開く。轆轤成形。内外面黒色処理。	①良好 ②黒褐 ③やや粗・砂混る
174-4 71-4	須恵器 椀	口縁一 部欠損	12.6×5.7 ×4.7	掘形	腰部丸味強くやや内湾気味に開く。口縁部はくびれて大きく外反。口唇部尖る。付高台、端部丸い。轆轤成形。	①良好 ②黄灰 ③やや密
174-5 71-5	灰釉陶器 椀	底部1/2	-×7.5 ×(2.6)	埋土	腰部丸味強い。付高台。見込部に重ね焼き痕あり。	①良好 ②黄灰 ③密
174-6 71-6	灰釉陶器 椀	台部破 片	-×7.9 ×(2.0)	竈	付高台。見込部に重ね焼き痕あり。	①良好 ②灰黄 ③密
174-7 71-7	須恵器 甕	口縁部 破片	16.1×- ×(8.4)	掘形	胴部上半肥厚し口縁部小さく外反。口唇部断面矩形。体部上半横撫で。	①酸化 ②鈍い赤褐 ③やや粗・砂混る

第2章 遺構と遺物

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
174-8 71-8	須恵器 甕	下半欠 損	21.8× ×(11.8)	掘形・竈	肩部丸味をもち球胴。口縁部肥厚し短くくの字状に開き端部やや角張る。口縁部横撫で。	①酸化 ②橙 ③やや粗・砂混る
174-9 71-9	須恵器 甕	胴部破 片	—×7.2 ×(8.5)	掘形・床 下	底部平ら。体部肥厚し直線的に外傾。外面下半斜位篋り。	①良好②灰黄褐 ③やや密
174-10 72-10	瓦 丸瓦		厚2.8	竈	凹面布目。凸面撫で。側面篋調整。二次被熱。	①酸化・良好 ②橙 ③粗・砂多量に混る
174-11 72-11	石製品 基石?		径2.0×2.3 厚0.9	埋土	不整楕円形。黒色自然石。重5.3g	頁岩
174-12 72-12	鉄器 角釘	端部欠 損	長(5.2) 幅0.4	埋土	頭部形状角頭式か。	

L 143号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
175-1 72-1	須恵器 椀	欠	13.2×7.5 ×4.4	埋土	体部やや丸味もち口縁部緩く外反。口唇部丸い。底部歪み大。付高台、低く雑な作りで端部僅かに外反。轆轤成形。	①酸化気味 ②鈍い 黄橙 ③やや密

L 83号住居跡 (Fig. 176~180・PL. 14、72、73)

L区第4台地西側のやや南に寄って位置し、77・78 L12~14の範囲にある。

平面形は東西方向が僅かに長い方形を呈するが南東部隅の壁線は丸みが強い。東西長3.5m・南北長3.3mを測り、東西軸方位はおおよそN-69°-Eを示す。壁高は約40cmを測る。床面は中央部が緩く窪むが踏み締まりは良好である。Pitは大小5箇所に検出されているが相互の平面的位置からは柱穴とは認め難い。貯蔵穴は南東部にあり径50×60cm・深さ10cmの楕円形を呈する。

竈は東壁にありやや南に偏って付設される。燃烧部は壁線外に張り出さないが、袖部は掘形を住居内に突出して残す。僅かに窪む燃烧部から明瞭に段をなし、煙道部を形成しないまま煙出し孔に至る。竈の構築のための石・粘土などは検出されていない。袖部長さ75~80cm・内法55cm、燃烧部奥行き60cm、煙出し孔径20cmを測る。

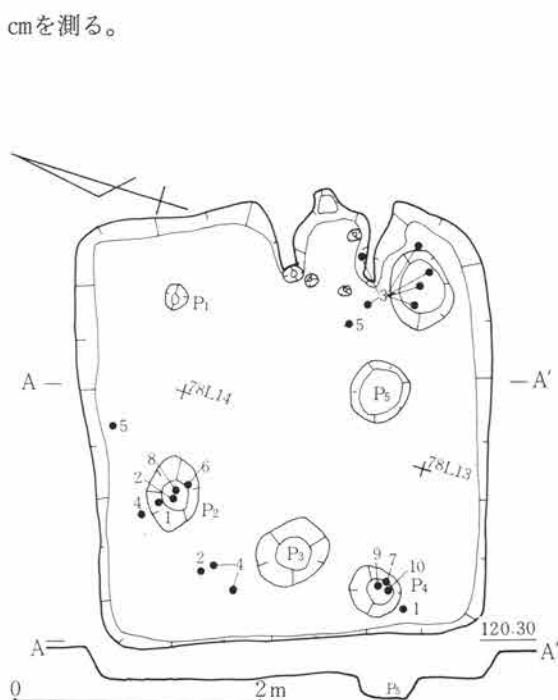


Fig. 176 L83号住居跡

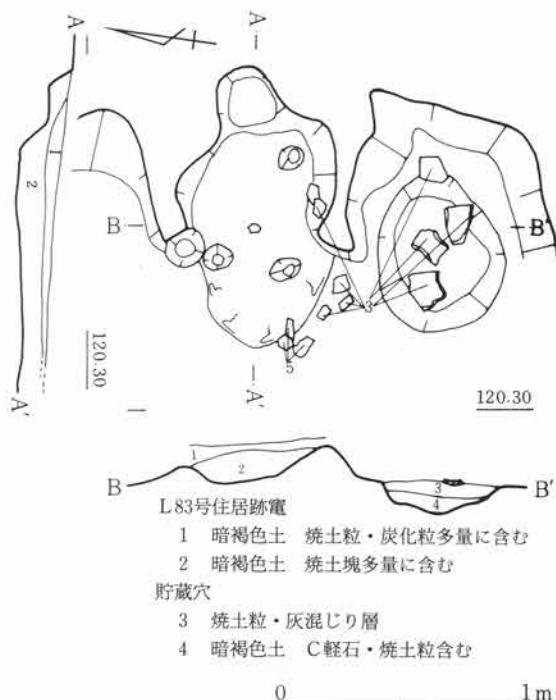


Fig. 177 L83号住居跡竈

出土遺物は竈周辺及び貯蔵穴内と西壁近くに散在してみられた。なお北西部にあるP₂内とその周辺には当跡に属する遺物の時代相とはかなり差のある新しい時期の遺物が出土している。その位置的偏在性から重複している遺構が存在した可能性が強いが確認はできなかった。

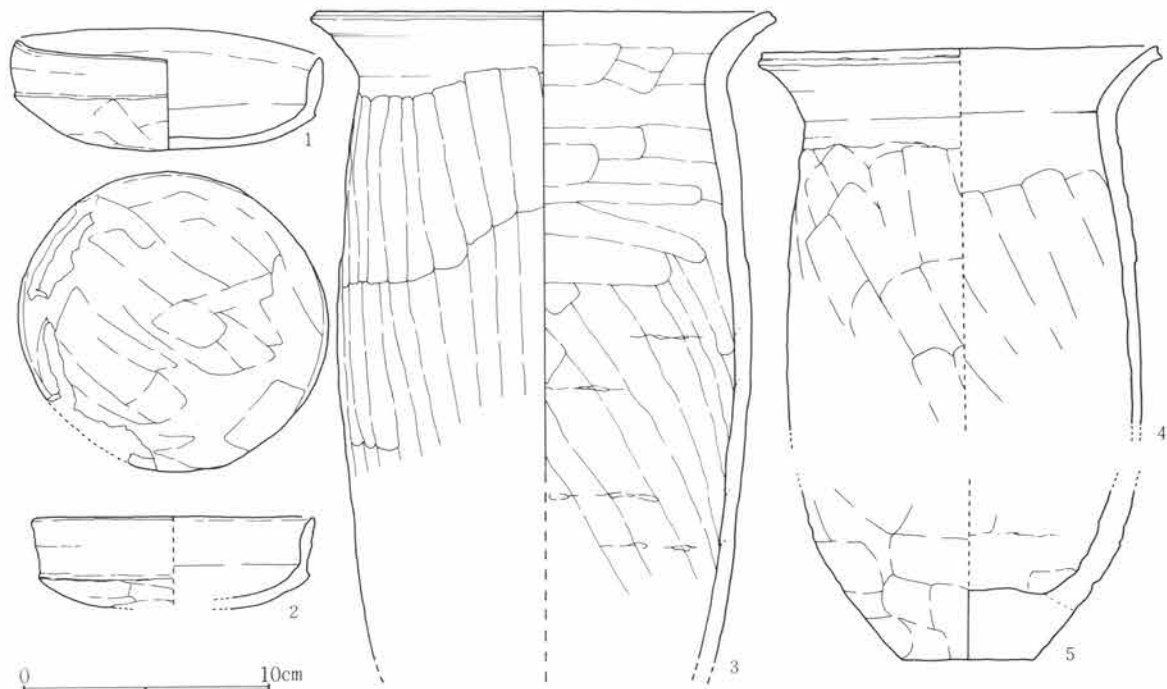


Fig. 178 L83号住居跡出土遺物

L83号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
178-1 72-1	土師器 杯	ほぼ完 形	10.1× ×4.7	貯穴・南竈 Pit・埋土	底部丸い。受け部でやや内湾。口縁部は肥厚し直立。底部不定方向篋削り。口縁部内面横撫で。	①良好 ②淡黄 ③やや粗・白色粒混
178-2 72-2	土師器 杯	小片	11.2× ×(3.6)	埋土	底部浅く偏平。受け部で段をなす。口縁部やや外反気味に立つ。口縁部内面横撫で。底部不定方向篋削り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗
178-3 72-3	土師器 甕	底部 欠損	18.6× ×(25.7)	埋土	胴部張りなく長胴。口縁部大きく外傾し開く。口唇部段をなす。口縁部横撫で。胴部外面縦位篋削り。内面横撫で。	①良好 ②橙 ③白色小石多く混る
178-4 72-4	土師器 甕	下半欠 損	16.0× ×(14.9)	埋土	胴部張りなく口縁部大きく外反。口唇部上下端尖る。胴部斜位篋削り。内面横撫で。口縁部横撫で。	①良好 ②橙 ③や や密・白色粒混る
178-5 72-5	土師器 甕	底部	-×5.2 ×(6.7)	埋土	底部極めて肥厚。胴部張りなし。胴部不定方向篋削り。内面撫で。	①良好 ②灰褐 ③粗・小石混る

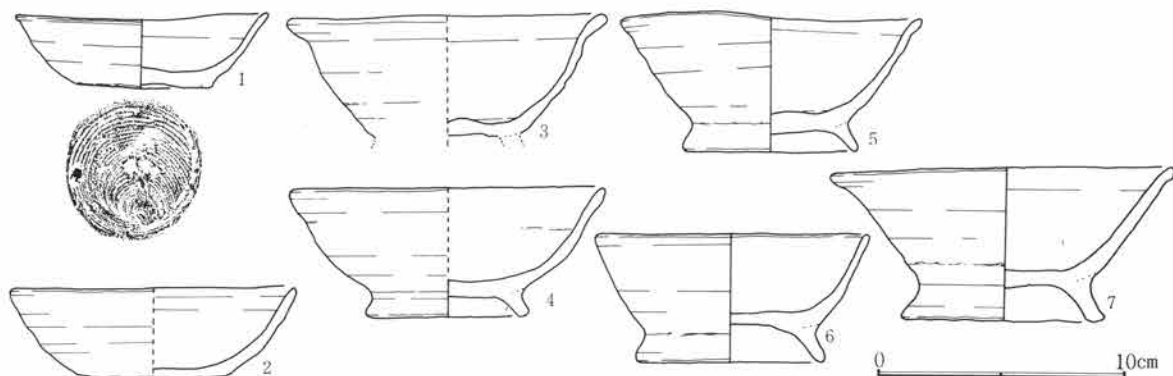


Fig. 179 L83号住居跡内土坑周辺出土遺物(1)

第2章 遺構と遺物

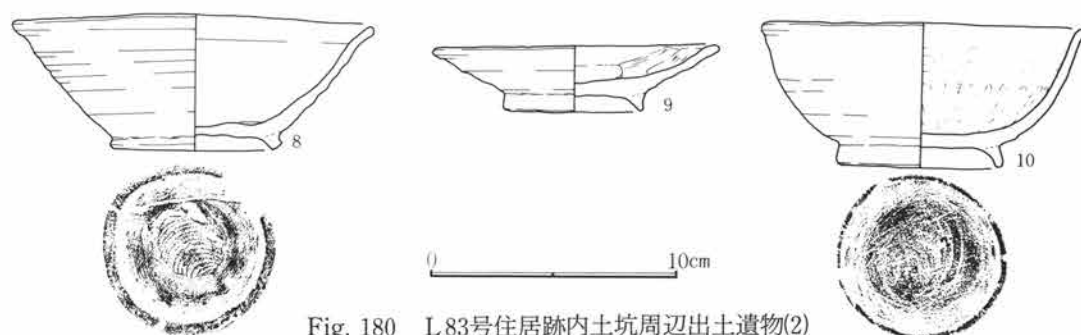


Fig. 180 L 83号住居跡内土坑周辺出土遺物(2)

L 83号住居跡内土坑周辺出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
179-1 72-1	須恵器 杯	完形	10.0×5.4 ×2.7	埋土	底部やや肥厚し見込部丘状。体部薄く僅かに丸味をもつ。口縁部ややくびれ小さく外傾。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②橙 ③密・赤色粒混る
179-2 72-2	須恵器 杯	¾	11.4×5.8 ×3.5	埋土	腰から体部にかけて丸味をもって開く。口唇部やや尖る。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③やや粗
179-3 72-3	須恵器 碗	¾	12.8×— ×(4.6)	埋土	底部肥厚し見込部凸状。体部丸味強く口縁部肥厚して丸く大きく外反。付高台剝離。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③粗・小石混る
179-4 73-4	須恵器 碗	¾	12.6×6.6 ×5.1	埋土	腰部僅かに張る。体部緩く外反して開く。口縁部肥厚。付高台、ハの字状に開く。端部丸い。轆轤成形。	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③密
179-5 73-5	須恵器 碗	¾	12.0×7.0 ×5.3	埋土	体部直線的に外傾。口縁部僅かに外反。付高台、やや高く直線的にハの字状に開く。端部丸い。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや粗・小石混る
179-6 73-6	須恵器 碗	¾	11.6×7.6 ×5.1	埋土	腰部緩く丸味をもつ。体部上半は直線的に開く。付高台、高くハの字状に開く。端部丸い。轆轤成形。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・細砂混る
179-7 73-7	須恵器 碗	¾	13.7×8.0 ×6.1	埋土	体部直線的に外傾。口縁部小さく外屈。付高台、高くハの字状に開く。断面矩形。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗・夾雑物混る
180-8 73-8	須恵器 碗	完形	14.4×6.8 ×5.3	埋土	腰部僅かに丸味。口縁部外反。付高台、低く断面矩形。轆轤成形。回転糸切り。内面撫で。高台部横撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗・小石混る
180-9 73-9	須恵器 皿	¾	11.4×5.6 ×2.6	埋土	体部僅かに丸味をもち大きく開く。口縁部水平気味。口唇部丸い。付高台、低く断面三角。内面篋撫で。	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③やや密
180-10 73-10	内黒土器 碗	¾	12.8×6.6 ×5.6	埋土	腰～体部丸い。付高台、内湾気味に開く。轆轤成形。底部篋削り。内面黒色処理。内面上半横・下半放射状篋磨き。	①良好 ②淡橙 ③やや粗・赤色粒混

L 87号住居跡 (Fig. 181、182、184・PL. 73)

L区第4台地調査区西端の南寄りに位置し、78・79L 8～11の範囲にある。西半は調査区域外に入り全容は不明である。L110号・L144号・L200号住居跡と重複しており、前二者より旧くL200号住居跡より新しい時期の所産である。調査段階で平面確認が比較的容易な当跡を新しい遺構として確認したため、浅い掘形のL110号住居跡の床面を掘り抜いてしまった。このため挿図では新旧を逆転して示さざるを得なかった。

平面形は略方形を呈すると考えられるが、壁線は緩く脹らみをもち、南東・北東の隅は丸みをもつ。南北長4.9m、東西は東壁線より約2mの範囲まで確認した。東西軸方位はN-95°-Eを示す。壁高は約50cmを測り、床面は緩く波うつが踏み締まりは良好である。貯蔵穴その他の施設は検出されていない。

竈は東壁にあり南に偏って付設される。袖部はやや住居内に張り出し気味であるが明瞭な形で掘形を残していない。楕円形の燃焼部より長めの煙道部が延びる。煙道部は小さく段をなし、さらに急傾斜で立ち上がり水平になる。袖材などの痕跡はない。燃焼部幅35cm・奥行き約30cm、煙道部長さ35cmを測る。

出土遺物は少量である。なお当跡出土の緑釉陶器小片とL121号住居跡出土のものと接合した。

L 110号住居跡 (Fig. 181、183、185・PL. 15、73、74)

L区第4台地調査区西端の南に偏って位置し、77～79L 9～12の範囲にある。西側は調査区域外に入り全

容は不明である。L87号住居跡と重複しているが、これより新しい時期の所産である。調査段階では掘形の浅い当跡の確認が遅れ、L87号住居跡との新旧を誤認し、南西部床面を消失してしまった。よって挿図中では逆転して示してある。また北西端で性格不明の落ち込みと重複し壁線の一部は消失している。

平面形はほぼ方形を呈すると考えられ、南北長5.6m、東西は東壁線より2.2mの範囲まで確認した。東西軸方位はN-97°-Eを示す。壁高は約25cmを測り、床面はほぼ平坦をなすが竈前面を除き踏み締まりは弱い。貯蔵穴は南東隅に設けられ、径60×110cm・深さ37cmの楕円形を呈する。埋土上面には竈内からの流出と思われる灰層が覆い、内部には須恵器碗類が検出されている。また東壁と北壁の一部には壁下の溝が巡り、幅10cm・深さ2～5cmを測る。

竈は東壁にあり南に偏って付設される。袖材を埋設したと思われる小穴は壁線上にあり、燃烧部は大きく方形気味に掘り込まれ、僅か天井部を残し煙出し孔に通じる。燃烧部幅90cm・奥行き70cm、煙出し孔径22cmを測る。

出土遺物は貯蔵穴内及び周辺部に多く、須恵器碗類の他、灰釉陶器が目立つ。

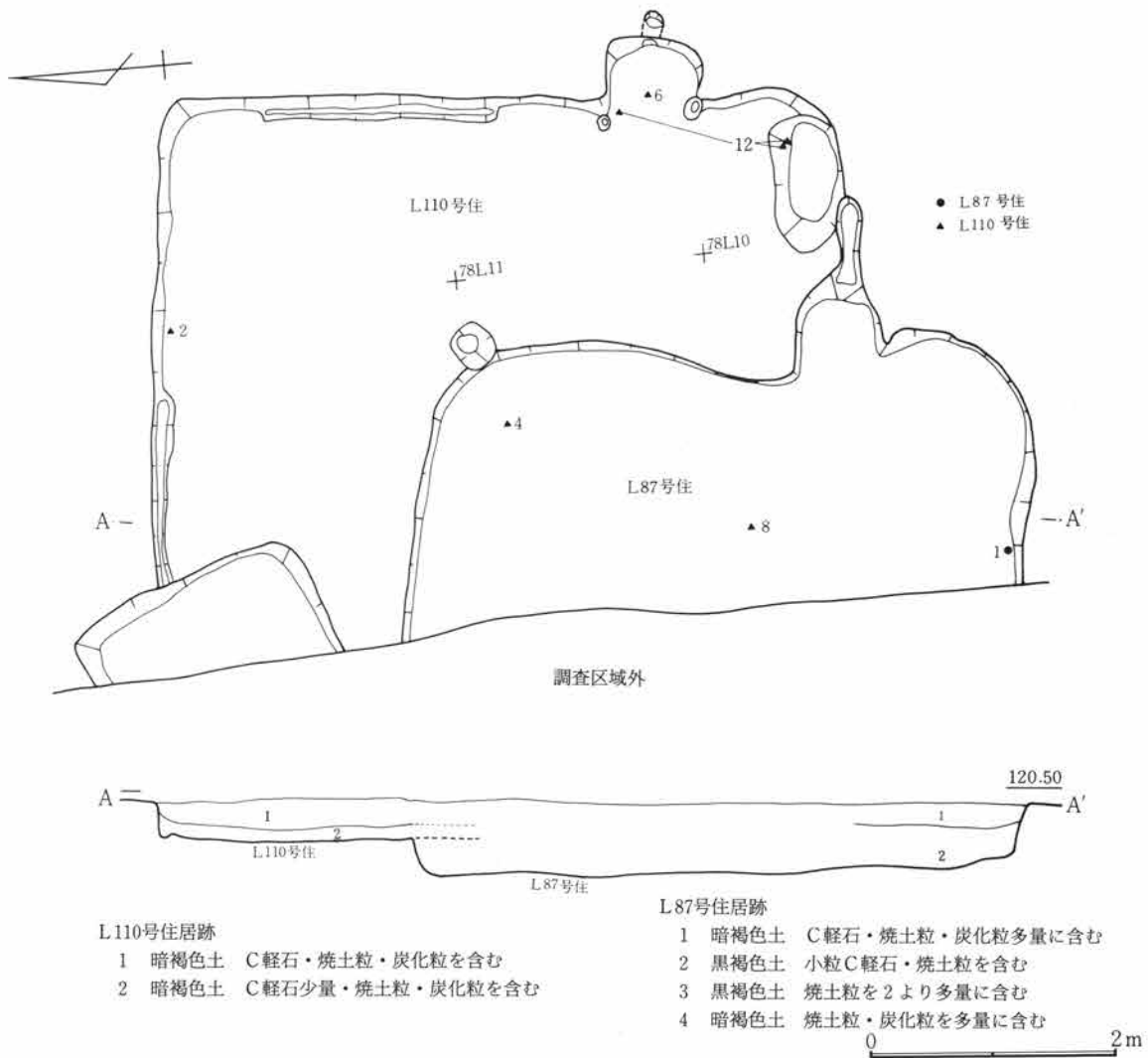


Fig. 181 L87号・L110号住居跡

第2章 遺構と遺物



Fig. 182 L87号住居跡竈

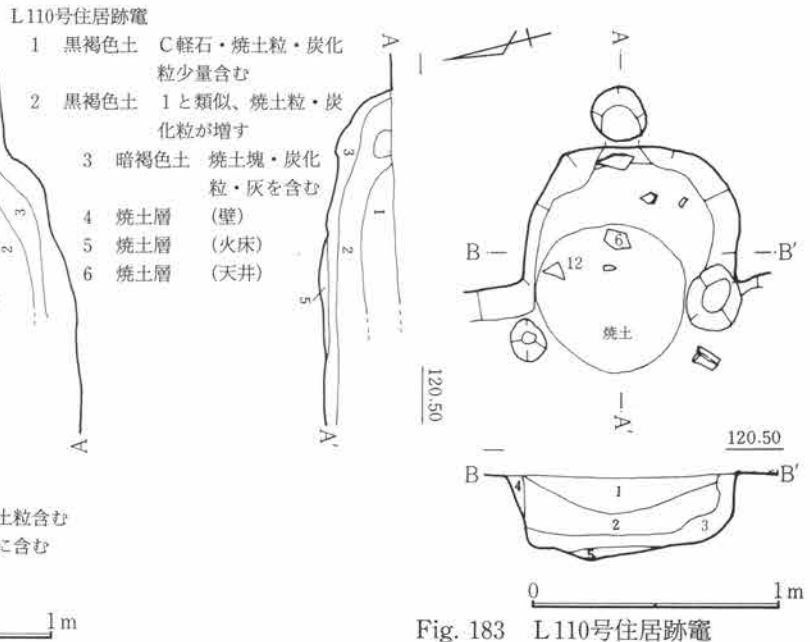


Fig. 183 L110号住居跡竈

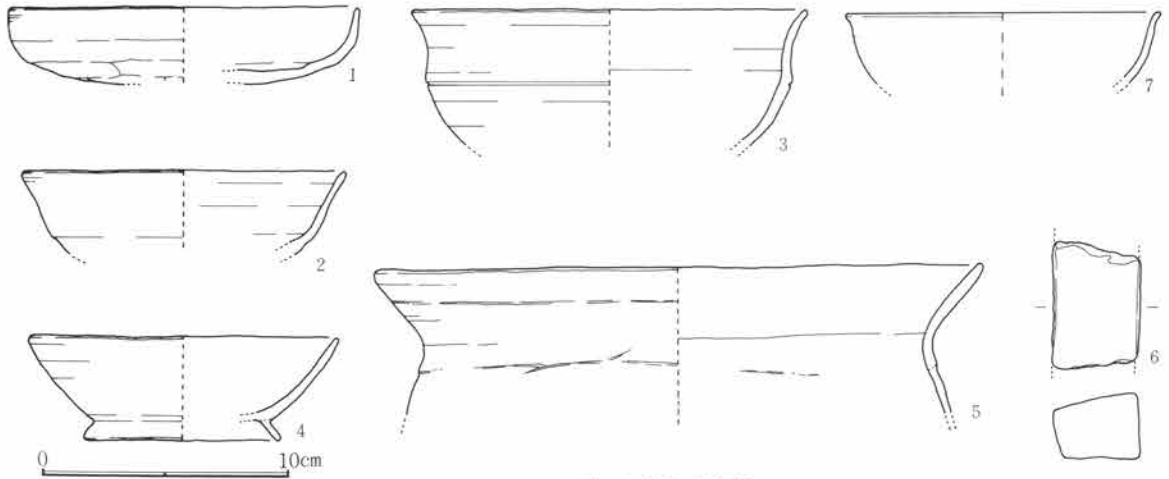


Fig. 184 L87号住居跡出土遺物

L87号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
184-1 73-1	土師器 杯	1/4	14.0×— ×(3.0)	埋土	底部扁平で平底気味。口縁部直立し口唇部僅かに細る。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
184-2 73-2	須恵器 椀?	1/4	11.0×— ×(3.3)	埋土	腰部に張りをもつ。体部薄く内湾気味に外傾。口縁部僅かにくびれて外反。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密・細砂混る
184-3 73-3	須恵器 鉢?	小片	15.8×— ×(5.4)	埋土	器肉薄い。体部丸く張り口縁部外反して開き下位に凹線巡る。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③やや密・粗砂混る
184-4 73-4	須恵器 椀	1/4	10.4×7.8 ×4.1	埋土	体部浅めで内湾気味に開く。付高台、ハの字状に大きく開く。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密・黒色粒混
184-5 73-5	土師器 甕	1/4	24.2×— ×(5.8)	竈埋土	肩部張りなく胴やや張り気味。口縁部直線的に大きくくの字状に開く。器肉薄い。口縁部横撫で。肩部横位篋削り。内面横撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・黒色粒混
184-6 73-6	石製品 砥石		長(4.9) 幅 3.4 厚2.6	埋土	4面使用。重70g	流紋岩
73-7	緑釉陶器 椀?	小片		埋土	椀腰部か。内外面施釉。内面篋磨きあり。釉調は浅緑色。	①良好 ②灰 ③やや密

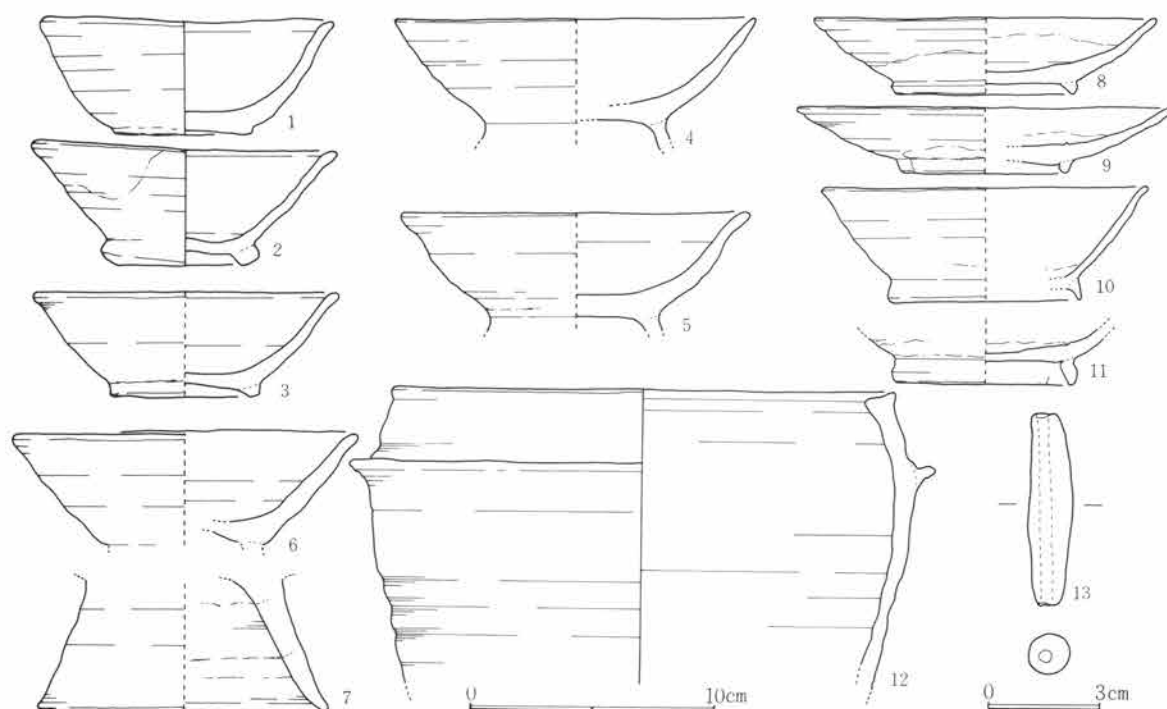


Fig. 185 L110号住居跡出土遺物

L110号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×口径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
185-1 73-1	須恵器 杯	1/4	11.4×5.6 ×4.4	埋土	底部肥厚し、腰～体部丸味をもって開く。口縁部小さく外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②赤灰 ③やや粗・白色粒混
185-2 73-2	須恵器 碗	完形	12.2×6.3 ×4.5	埋土	体部直線的に大きく開く。口縁部緩く外反。付高台肥厚し歪む。断面矩形。炭化物付着。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗・小石混る
185-3 73-3	須恵器 碗	1/4	12.2×6.0 ×4.1	埋土	体部やや丸味を帯び上半は外反気味に大きく開く。口唇部丸まる。付高台、低く作り雑。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③やや密
185-4 73-4	須恵器 碗	1/4	14.4×— ×(4.8)	埋土	体部やや丸味をもち口縁部直線的に外傾。口唇部尖る。付高台、端部欠損、やや高くハの字状に開く。轆轤成形。	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③やや密
185-5 73-5	須恵器 碗	1/4	14.0×— ×(4.7)	埋土	腰部丸く張り、体部上半は外反して大きく開く。口唇部丸まる。付高台。轆轤成形。口縁部横撫で。内面撫で。	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③密
185-6 73-6	須恵器 碗	台部欠損	13.8×— ×(4.5)	竈	全体的に肥厚。体部直線的に外傾する。付高台欠損。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗・小石混る
185-7 74-7	須恵器 鉢?	台部1/4	—×11.6 ×(5.1)	埋土	高台部高く肥厚しハの字状に開く。轆轤成形。接合部回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②鈍い橙 ③やや密
185-8 74-8	灰釉陶器 皿	1/4	13.6×7.2 ×3.0	埋土	体部やや厚く丸味を帯び体部上半は薄く直線的に外傾。付高台、低く断面三角。漬け掛け施釉。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③密
185-9 74-9	灰釉陶器 皿	1/4	15.0×6.8 ×2.6	埋土	腰部厚く僅かに丸味。体部上半薄く直線的に開く。付高台低く断面丸い。漬け掛け施釉。見込部重ね焼き痕。	①良好 ②灰白 ③密・粗砂混る
185-10 74-10	灰釉陶器 碗	1/4	13.0×7.8 ×4.5	埋土	体部直線的に外傾。口唇部僅かに外屈。高台は腰部に付きハの字状に開く。断面尖る。全面に漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③密
185-11 74-11	灰釉陶器 碗	1/4	—×7.4 ×(1.8)	埋土	腰部に丸味。付高台、やや肥厚し直線的に開く。刷毛塗り施釉。轆轤成形。高台部横撫で。	①良好 ②灰白 ③密
185-12 74-12	羽 釜	上半1/4	20×—(11.7) 口径23.4	埋土	胴部張り少なく口縁部内湾気味に内傾する。口唇部幅広く断面矩形。上端内傾。鏝薄くやや上向きに付く。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密・小石混る
185-13 74-13	土製品 土垂	完形	径1.1長5.1 孔径0.3	埋土	手握ね。重5.9g	①良好 ②暗灰 ③やや密

L89号住居跡 (Fig. 186、187、189、190・PL. 15、74)

L区第4台地の調査区域西側でやや南に偏って位置し、72～74L13・14の範囲にある。L90号住居跡と重複し、これよりも新しい時期の所産である。また南西隅に近く僅かにL92号住居跡の竈先端部が切り合う。

遺構としては新旧の確認は定かでないが、出土遺物から当跡が古い様相をもつ。

平面形は東西長・南北長とも約3.5mを測り、比較的整った方形を呈する。東西軸方位はほぼN-90°-Eを示す。壁高は約35cmを測り、床面は大きく緩い窪みをなす。貯蔵穴は南西隅に設けられ、径60cm・深さ50cmの円形である。精査段階で床面のほぼ中央部の床下より焼土面及び灰の分布が認められた。平面的な位置関係から、重複するL90号住居跡の竈部分にあり燃焼部の残欠と考えられる。

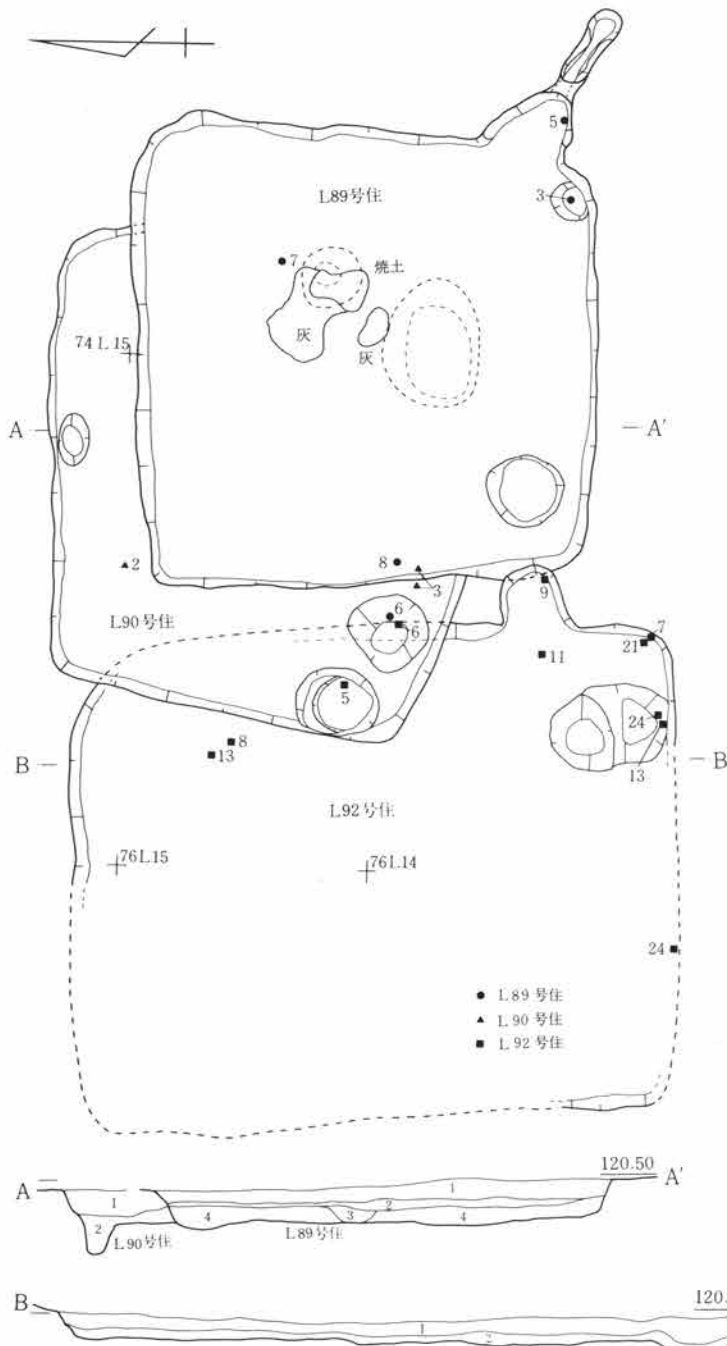
竈は南東隅にあり、軸線は北西隅と対角をなす。東壁線の直角軸より南へおよそ28°の傾きをなす。明瞭な袖部は形成されず、壁外に突出する燃焼部より長い煙道部が延びる。燃焼部・煙道部の側縁の焼土化が著しく一部天井が残る。燃焼部幅65cm・奥行き約60cm、煙道部長さ40cmを測る。

出土遺物は少量で灰釉陶器片・鉄釘などの他竈内より土釜片が検出されている。

L90号住居跡 (Fig. 186、191・PL. 15、74)

L区第4台地調査区域西側でやや南に偏って位置し、73~75 L13~15の範囲にある。L89号・L92号住居跡と重複しており、両者より古い時期の所産である。掘形の深いL89号住居跡のため東・南壁線をはじめ南東部の大半は消失している。

平面形は東西方向に長軸をもつ略方形を呈するが、西壁線は北壁線に対し鈍角をなし、南壁線が多少脹らむ様相がみられる。現状で東西長約3.8m・南北長約3.3mを測る。北壁線による東西軸方位はおよそN-85°-Eを示す。壁高は約23cmを測



L89号住居跡

- 1 黒褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒含む
- 2 黒褐色土 土器片・炭化粒多量に含む
- 3 焼土塊層
- 4 暗褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒含む

L90号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒含む
- 2 暗褐色土 焼土粒・炭化粒を含みC軽石少量

L92号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石多量に含み、土粒粗い
- 2 暗褐色土 C軽石少量含み、やや粘性あり

Fig. 186 L89号・L90号・L92号住居跡

り、残存部分の床面は平坦をなすが踏み締まりは弱い。南西隅に2基の土坑が検出されているが、西壁に接する土坑は土坑内の出土遺物より当跡に属するとは考えられない。土坑1は埋土に炭化粒・焼土粒を少量含み、径60cm・深さ23cmで楕円形を呈する。

竈はL89号住居跡の床面精査の段階で焼土面及び灰の広がり方が確認されており、おおよその位置を知ることができる。これによれば東壁に付設される。検出は火床と思われる焼土面で、掘形は径50cmの範囲で僅かに窪む。また竈の右に近接して径80×100cm・深さ30cmの楕円形の落ち込みがあり、貯蔵穴と考えられる。

出土遺物は散在的である。

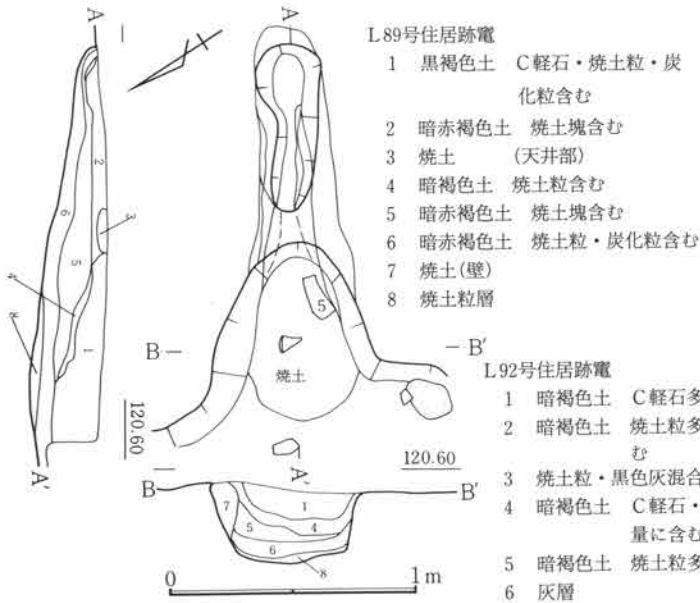


Fig. 187 L89号住居跡竈

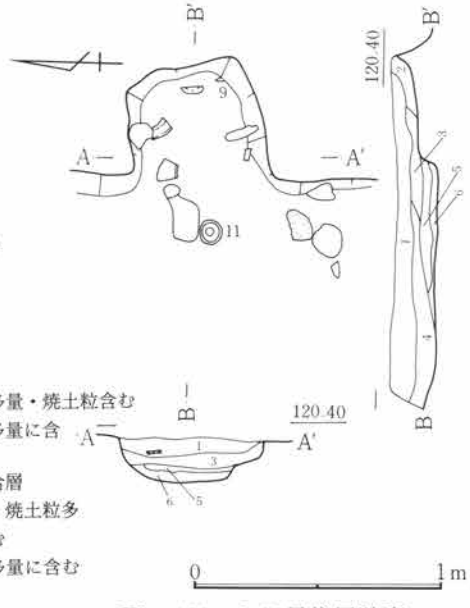


Fig. 188 L92号住居跡竈

L92号住居跡 (Fig. 186、188、192・PL. 15、75)

L区第4台地の調査区西側の南に偏って位置し、74~76L12~15の範囲にある。L89号・L90号住居跡と重複しており、両者より新しい時期の所産である。調査段階で全体の壁線を確認することができず、四壁とも部分的な検出である。

推定される平面形は南北方向に長軸をもつ略方形を呈する。推定規模は東西長4m・南北長4.8mを測り、東西軸は方位N-87°-Eを示す。検出面からの掘形は浅く壁高約18cmを測る。床面は緩く波うち、踏み締まりは弱い。貯蔵穴は南東部にあり径65×90cm・深さ30cm程度で楕円形を呈する。

竈は東壁にあり大きく南に偏って付設される。袖材などの施設は見られず、燃焼部は小さく掘り込まれる。燃焼部幅50cm・奥行き50cmを測る。

出土遺物は竈及びその周辺と北東側に散在して検出された。灰釉陶器片が多く、埋土中より古墳時代に属する土師器杯類の小破片がある。

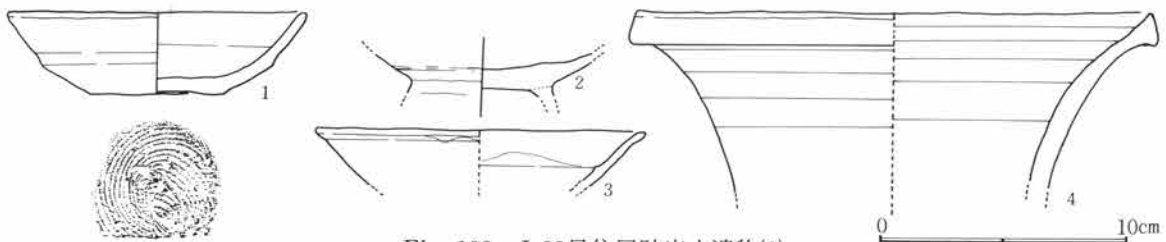


Fig. 189 L89号住居跡出土遺物(1)

第2章 遺構と遺物

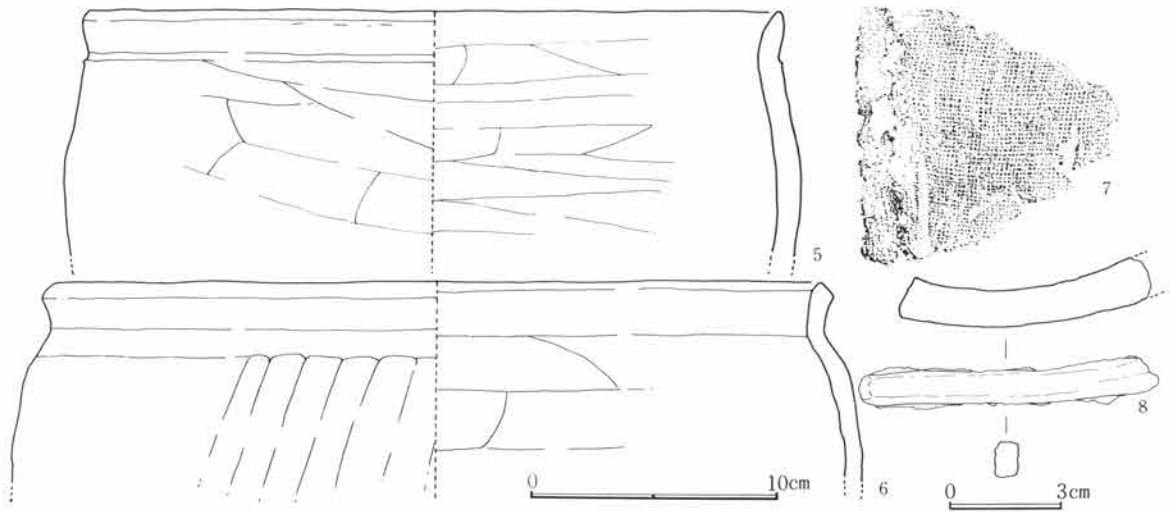


Fig. 190 L89号住居跡出土遺物(2)

L89号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
189-1 74-1	須恵器 杯	1/4	12.0×5.2 ×3.2	埋土	底径小さく腰部丸味をもつ。体部緩く外反して開き口唇部丸まる。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 ②黄橙 ③やや粗
189-2 74-2	内黒土器 椀	底部	—×—× (1.5)	埋土	体部上半・台部欠損。付高台。轆轤成形。回転糸切り。内面黒色処理。見込部一定方向篋磨き。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや密
189-3 74-3	灰釉陶器 段皿?	底部欠損	13.2×— ×(2.2)	埋土	体部直線的に開き口縁部は小さく外反。体部内面に凸線巡る。内外面施釉。	①良好 ②灰白 ③やや密
189-4 74-4	灰釉陶器 壺	口縁部	20.4×— ×(7.0)	埋土	頸部直線的に外傾し上半は強く外反。口唇部上下端は尖り突出。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密
190-5 74-5	土師器 土釜	下半欠損	17.6×— ×(10.6)	竈	器肉厚く体部張りなし。口縁部短く外傾し口唇部丸まる。口縁部横撫で。胴部内面横篋撫で。外面横位篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗・夾雑物混る
190-6 74-6	土師器 土釜	小片	30.4×— ×7.9	埋土	口縁部短く外傾気味。口唇部上端面は外斜し断面矩形。胴部斜位篋削り。	①良好 ②黄橙 ③やや粗・夾雑物混る
190-7 74-7	瓦 平瓦	小片	厚1.5	埋土	凹面布目。凸面撫で。側面篋調整。	①良好 ②灰 ③粗・小石多量に混
190-8 74-8	鉄器 不明		長8.0幅0.9 厚0.6	埋土	棒状製品。	

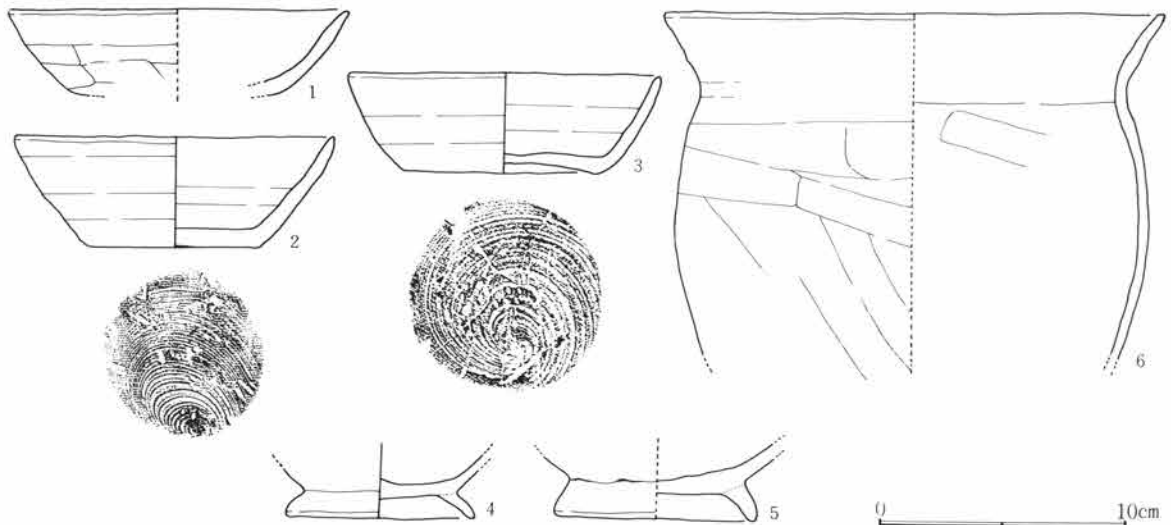


Fig. 191 L90号住居跡出土遺物

L 90号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
191-1 74-1	土師器 杯	底部欠損	13.6× ×3.4	床下埋土	底部やや丸味。腰部で屈し体部内湾気味。口縁部直線的に外傾。口縁部横撫で。体部横位篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
191-2 74-2	須恵器 杯	完形	12.7×6.4 ×4.3	埋土	器肉厚く体部直線的に外傾。口唇部細り小さく内傾気味。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
191-3 74-3	須恵器 杯	%	12.4×7.4 ×3.9	床下埋土	体部緩く内湾して外傾。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗・小石混る
191-4 74-4	須恵器 碗	体部欠損	—×7.4 ×2.0	埋土	付高台、やや高く内湾気味に大きく開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密・細砂混る
191-5 74-5	須恵器 碗	体部欠損	—×8.0 ×(3.0)	埋土	付高台、高く内湾気味に開く。端部肥厚し断面丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
191-6 74-6	土師器 甕	小片	20.0×— ×(13.5)	埋土	胴部上半丸く張り気味。口縁部直線的で外反して開く。口縁部横撫で。胴部横・斜位篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗・夾雑物混る

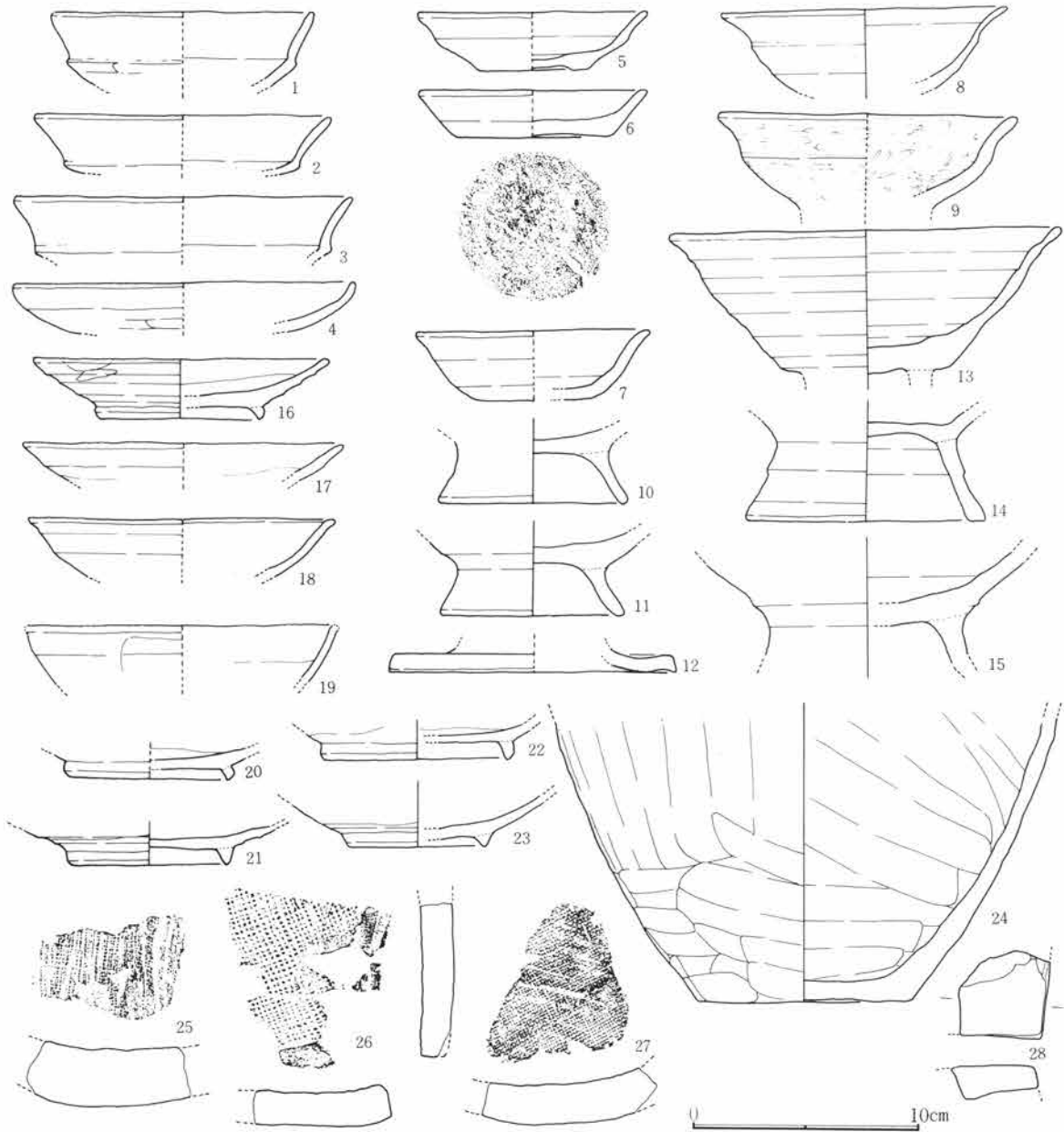


Fig. 192 L92号住居跡出土遺物

第2章 遺構と遺物

L 92号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
192-1 75-1	土師器 杯	小片	11.4×— (3.2)	埋土	底部丸く浅い。受け部鋭く稜なす。口縁部高く外反し開き上半内湾気味。口唇部丸まる。口縁部横撫。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
192-2 75-2	土師器 杯	小片	13.0×— ×(2.6)	埋土	底部極めて浅い。受け部で強く屈し口縁部外反して開く。口縁部横撫で。	①良好 ②橙 ③細砂混る
192-3 75-3	土師器 杯	小片	14.6×— ×(2.6)	埋土	体部浅いか。弱い受け部をなす。口縁部は外反して開く。口唇部丸まる。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
192-4 75-4	土師器 杯	小片	15.0×— ×(2.19)	埋土	偏平な体部で皿型。口縁部短く端部は小さく内屈。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗・細砂混る
192-5 75-5	須恵器 杯	片	10.0×4.8 ×2.5	埋土	腰部くびれ体部中位で緩く屈する。口唇部丸く外反気味。轆轤成形。底部回転糸切り後周辺撫で。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗
192-6 75-6	須恵器 杯	ほぼ完	10.0×6.6 ×2.0	埋土	器肉肥厚。体部浅く外反気味に外傾。口縁部僅かに外反。口唇部丸まる。轆轤成形。右回転糸切り後撫で。	①良好 ②灰白 ③ やや粗・夾雑物混る
192-7 75-7	須恵器 杯	片	10.2×5.0 ×3.0	埋土	体部やや深く腰部から体部に丸味。口縁部外反して開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②鈍 橙 ③やや密
192-8 75-8	須恵器 椀	底部欠損	12.4×— ×(3.5)	埋土	体部丸味強く口縁部細り大きく外反して開く。轆轤成形。	①酸化気味 ②淡黄 ③やや粗・夾雑物混
192-9 75-9	土師器 椀	片	13.0×— ×4.0	埋土	器肉厚く腰部丸く体部中位で屈し口縁部外反して開く。付高台剝離。内面口縁部横・体部放射状篋磨き。轆轤成形。	①酸化 ②鈍い黄橙 ③やや粗・夾雑物混
192-10 75-10	須恵器 椀	高台部	—×8.4 ×3.2	埋土	付高台、高くハの字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②淡黄 ③やや密
192-11 75-11	須恵器 椀	体部欠損	—×8.0 ×3.6	埋土	付高台、高く外反して大きく開く。端部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味 ②浅黄 ③やや密・細砂混る
192-12 75-12	須恵器 蓋or脚端		—×12.6 ×(1.0)	埋土	裾部大きく開き水平。端部やや矩形。	①良好 ②灰白 ③やや密・細砂混る
192-13 75-13	須恵器 椀	片	17.0×— ×6.0	埋土	底部肥厚。轆轤目強く丸味をもち大きく開く。口縁部僅か折れて外傾。付高台剝離。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味 ②鈍い 黄橙 ③やや粗
192-14 75-14	須恵器 椀	台部片	—×10.4 ×4.7	埋土	付高台、高く直線的に開く。端部矩形。轆轤成形。底部糸切り後撫で調整。	①良好 ②灰白 ③やや粗・細砂混る
192-15 75-15	須恵器 椀	底部	—×—×(5.0) 底部径8.6	埋土	体部丸く内湾気味に開く。付高台先端部欠損。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味 ②鈍い 黄橙 ③やや密
192-16 75-16	灰釉陶器 皿	片	12.8×7.0 ×2.6	埋土	体部やや内湾気味に開く。口唇部丸まる。付高台、低く断面矩形。轆轤目強い。回転糸切り。内外面施釉。	①良好 ②灰白 ③やや密
192-17 75-17	灰釉陶器 皿	底部欠損	14.0×— ×(1.6)	埋土	体部直線的に開き口縁部外反。口唇部丸まる。轆轤成形。内外面施釉。	①良好 ②灰白 ③やや密
192-18 75-18	灰釉陶器 椀	小片	13.4×— ×2.5	埋土	体部やや丸味をもって開く。端部強く外屈し丸まる。轆轤成形。内面施釉。	①良好 ②灰白 ③やや密・細砂混る
192-19 75-19	灰釉陶器 椀	小片	13.6×— ×(2.4)	埋土	体部丸味をもち上半でやや張る。口縁部緩く外反。口唇部外屈するか。轆轤成形。内外面漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③やや密
192-20 75-20	灰釉陶器 椀	高台部片	—×7.0 ×(1.3)	埋土	付高台、低く断面矩形。轆轤成形。内面一部施釉。	①良好 ②灰白 ③やや密・細砂混る
192-21 75-21	須恵器 椀	高台部	—×7.0 ×1.7	埋土	付高台、やや直立気味に立つ。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰黄 ③やや密・細砂混る
192-22 75-22	須恵器 椀	高台部	—×8.2 ×1.4	埋土	付高台、端部丸くハの字状に開く。内外面施釉。縁辺を打撃。	①良好 ②灰白 ③やや密・細砂混る
192-23 75-23	須恵器 椀	上半欠損	—×6.0 ×(2.2)	埋土	付高台、低く肥厚し略三角。轆轤成形。右回転糸切り。内外面漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③ やや密・夾雑物混る
192-24 75-24	土師器 甕	下半片	—×9.0 ×12.0	埋土	胴部やや張り気味。胴部中位縦位篋削り。下位は横位篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②橙 ③や や密・夾雑物混る
192-25 75-25	瓦 平瓦	小片	厚2.45	埋土	凹面布目。凸面篋撫で。	①酸化気味 ②橙 ③やや粗
192-26 75-26	瓦 平瓦	小片	厚1.4	埋土	凹面布目。凸面篋撫で。側面篋調整。	①良好 ②灰白 ③やや粗
192-27 75-27	瓦 平瓦	小片	厚1.7	埋土	凹面布目。凸面篋撫で。	①良好 ②灰白 ③やや密
192-28 75-28	石製品 砥石	小片	3.7×3.7× 1.2	埋土	3側面使用。重23g	流紋岩

L 94号住居跡 (Fig. 193~196・PL. 15、76)

L区第4台地の東縁近く中央部に位置し、55~57L 18~20の範囲にある。重複はなく単独遺構である。

平面形は壁線にかなり凹凸がみられ西壁が長く台形を呈する。東西長約3.15m・南北最大長3.9m・最狭長3mを測る。東西軸方位はN-89°-Eを示す。壁高は約25cmを測り、床面は緩く波うつが、部分的に基層の凝灰岩質層が露呈する箇所もみられる。東・北壁の一部及び北壁から西壁にかけて幅広な壁下の溝が巡る。最大幅25cm・深さ10cmを測る。

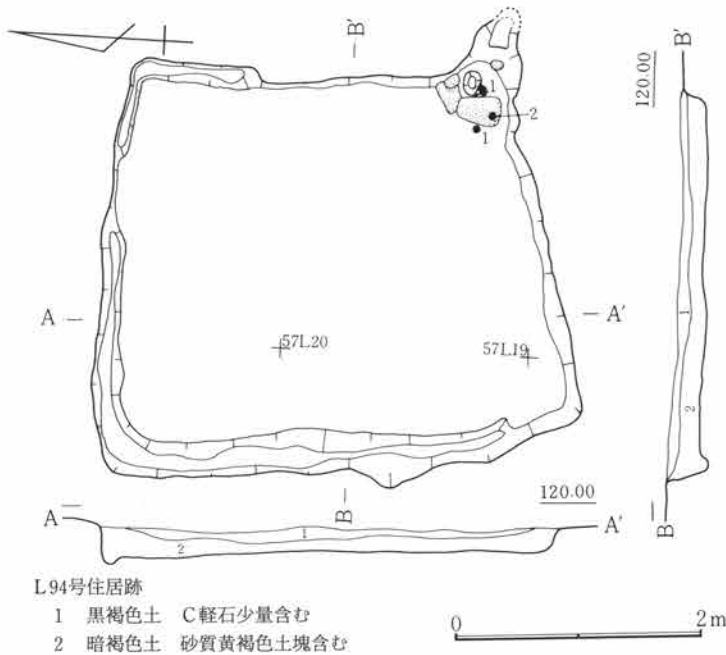


Fig. 193 L94号住居跡

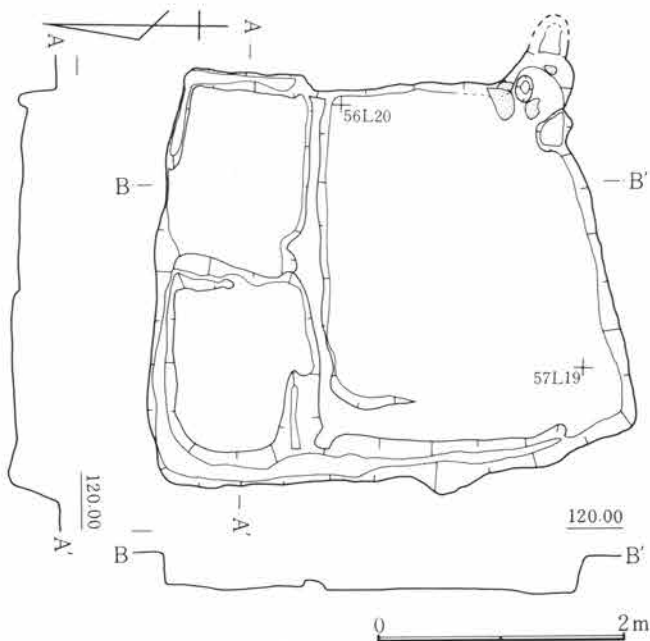


Fig. 194 L94号住居跡掘形

竈は東壁と南壁の変換部、南東隅に付設される。燃烧部には凝灰岩質の加工材が検出され、風化が著しいため旧態をとどめていないが、焚口部の天井材と思われる。煙道部は先端部が消失するが短く突出する。燃烧部幅50cm・奥行き55cm、煙道部長さ約30cmを測る。

床下の構築は北側に東西方向に高さ10cm・幅20cm程度の小さな堤を設け、南・北を区切っている。さらに北側の区画は東・西の小区画に分かれ、西の区画は東の区画より5~10cm低くなっている。

出土遺物は少なく竈内より丸瓦片・鉄滓などが検出されている。

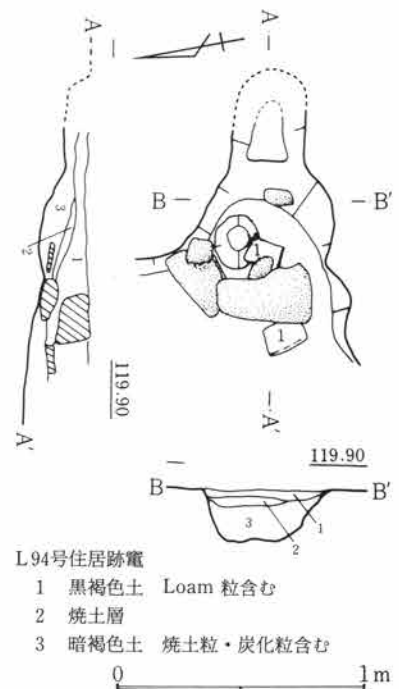


Fig. 195 L94号住居跡竈

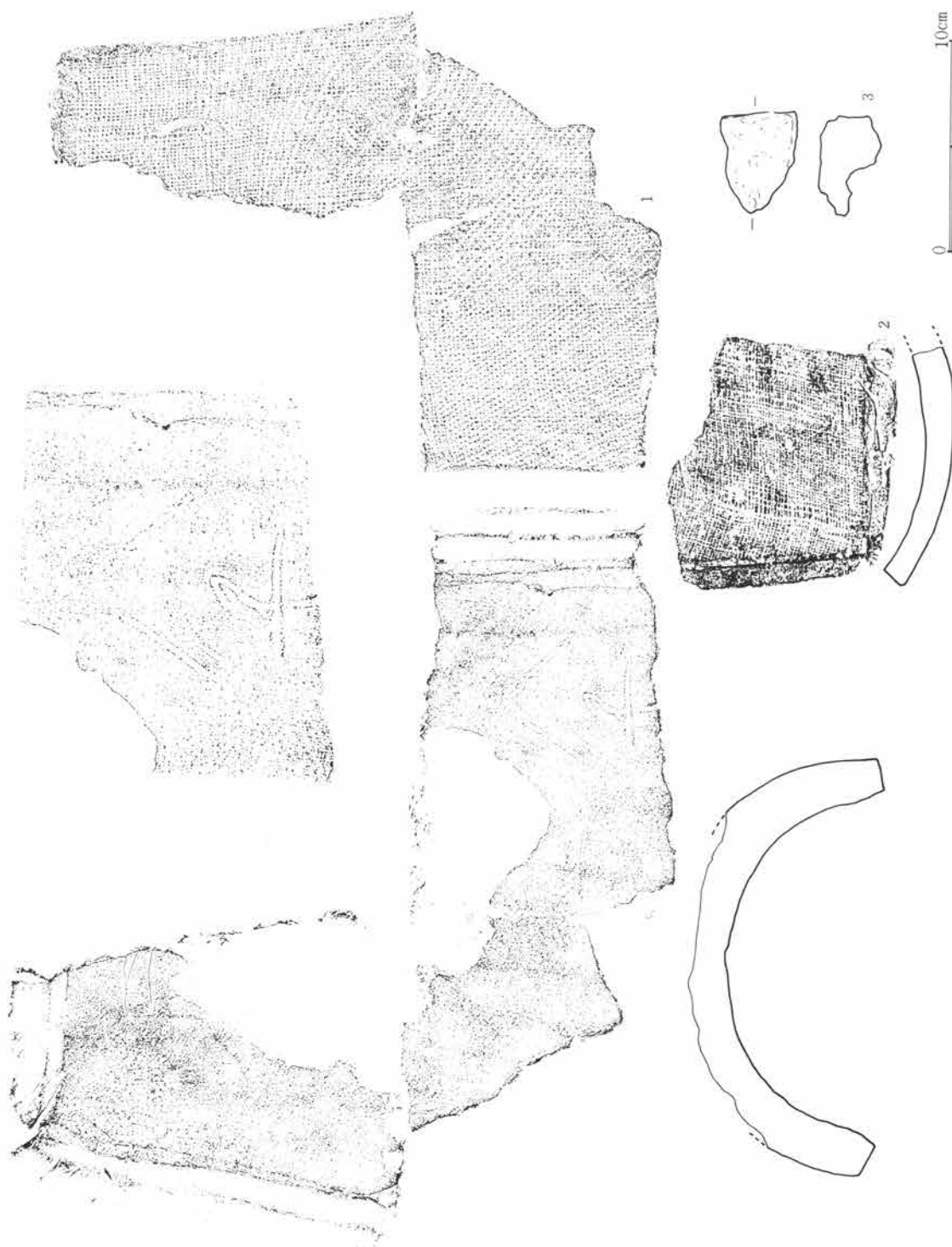


Fig. 196 L 94号住居跡出土遺物

L 94号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×高さ	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
196-1 76-1	瓦 丸瓦		厚2.5	埋土	凹面布目。側面・凸面篋調整。凸面に「八子」の篋文字。	①良好 ②灰 ③やや粗・砂混る
196-2 76-2	瓦 平瓦		厚1.3	埋土	凹面布目。凸面撫で。側面篋調整。	①良好 ②灰 ③粗
196-3 76-3	鉄滓		4.8×3.6 厚2.8	埋土	磁気僅かにあり。重17g	

L 95号住居跡 (Fig. 197~200・PL. 16、76)

L区第4台地の東縁近く中央部に位置し、54~56L22・23の範囲にある。L96号竪穴状遺構と重複しているがこれより新しい時期の所産である。当跡には2基の竈が検出されているが、重複の可能性を認め得ないためここでは同一住居跡のものとして記述する。

平面形は南北に長軸をもつ方形を呈するが、壁線は脹らみ気味で丸みがある。南北長3.5m・東西長2.85mを測り、東西軸方位はN-81°-Eを示す。壁高は約30cm、床面は緩く波うつが北半は凝灰岩質層を基盤にするため安定しており、南半はLoam塊混じりの暗褐色土が堅く踏み締められている。南西隅には貯蔵穴としてはやや小規模で確定できないものの径40cm・深さ70cmの円形土坑が穿たれる。

竈は東壁にA・Bの2基が検出されている。A竈は東壁と南壁の変換部に付設され、長めで水平に延びる煙道部が付く。B竈は東壁のやや南に偏った位置にある。B竈はA竈同様煙道部が認められたが、東に近接するL125号住居跡との切り合いのため全容は不明である。A・B竈の両者について同時存在か作り替えなどによる前後関係の点について遺構の調査では明らかにし得なかった。しかし、当遺跡でみられる竈位置の一般的傾向として、壁線の変換部に設けられる住居跡が比較的新しい時期に属すると考えられる。このことからすればまずB竈が作られ、A竈が新たに設けられたことになる。B竈については大きな破壊を加えずそのまま放置ないしは併用したと思われる。また住居跡の拡張ないしは建替えに際し、竈を作り変えることが多く行われるが、当跡に限っては拡張などの行為を伴わず竈のみを新設したのではなかろうか。A竈燃焼部幅60cm・奥行き50cm、煙道部長さ60cmを測り、B竈燃焼部幅60cm・奥行き60cmを測る。

出土遺物は須恵器小杯・羽釜などがある。

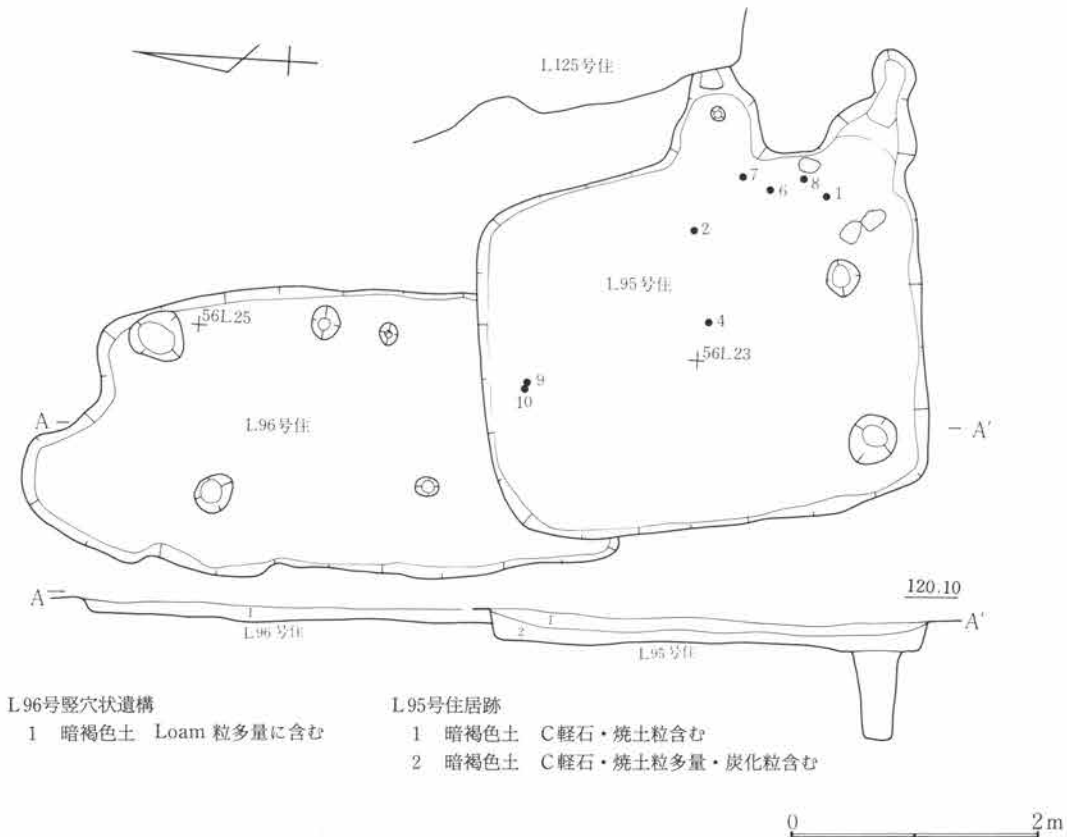


Fig. 197 L 95号住居跡・L 96号竪穴状遺構

L96号竪穴状遺構 (Fig. 197、201・PL. 16、77)

L区第4台地の東縁近く中央部に位置し、55・56L23~25の範囲にある。南でL95号住居跡と重複しており、これより古い時期の所産である。平面形態などから竪穴住居跡として確定できず、ここでは竪穴状遺構として扱う。

平面形は南北に長軸をもつ楕円形を呈するが北側壁線は大きく歪む。東西長2.2m、南北長は最大で4.7mを有する。長軸の南北方位はN-10°-Wを示す。壁高は約10cmを測り、床面は平坦をなすが踏み締まりは弱い。Pitは4個検出されているが相互の位置関係には規則性は認められず、径は15~40cm・深さ4~26cmと規模の点でも差が大きい。竈・炉などの諸施設は検出されていない。

出土遺物は須恵器杯・椀類で、主に南東部で検出されている。

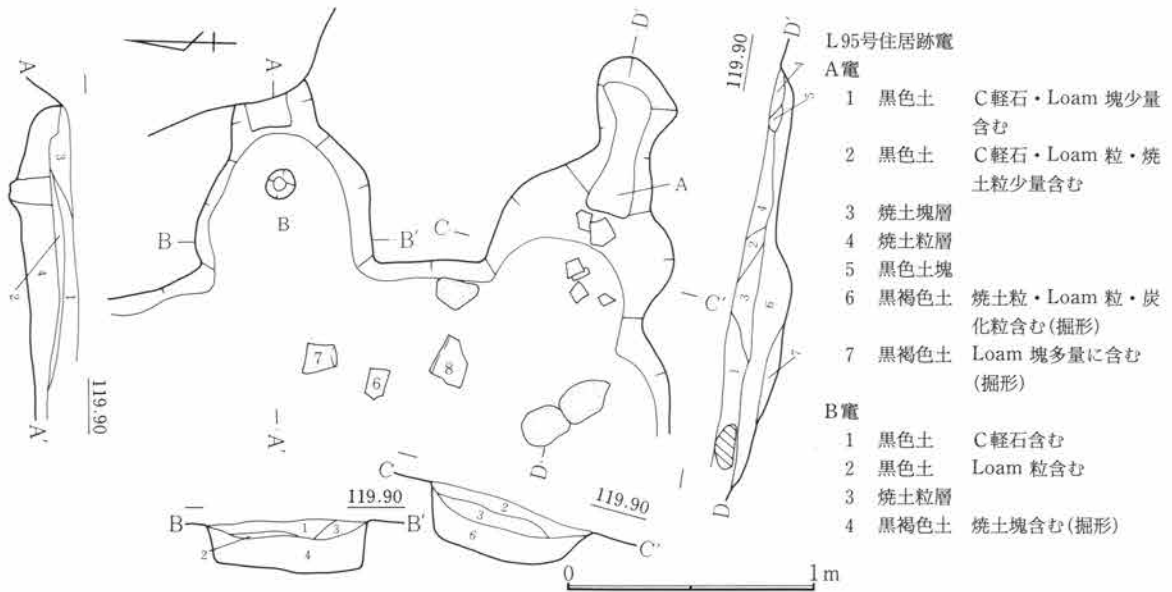


Fig. 198 L95号住居跡竈 (A・B)

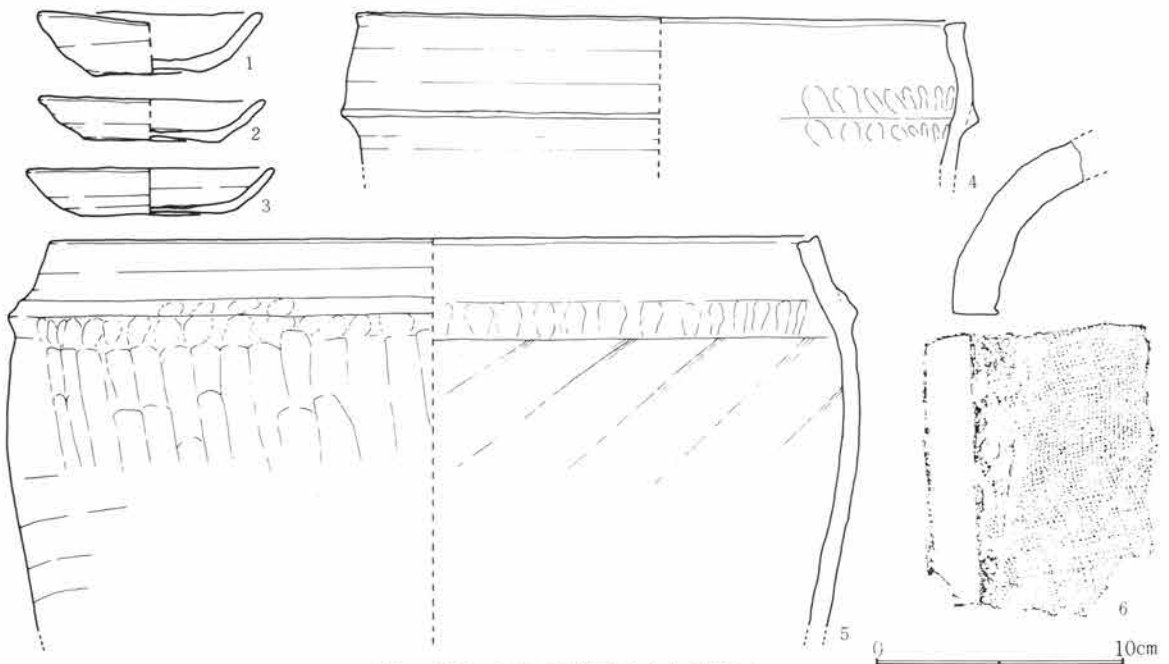


Fig. 199 L95号住居跡出土遺物(1)

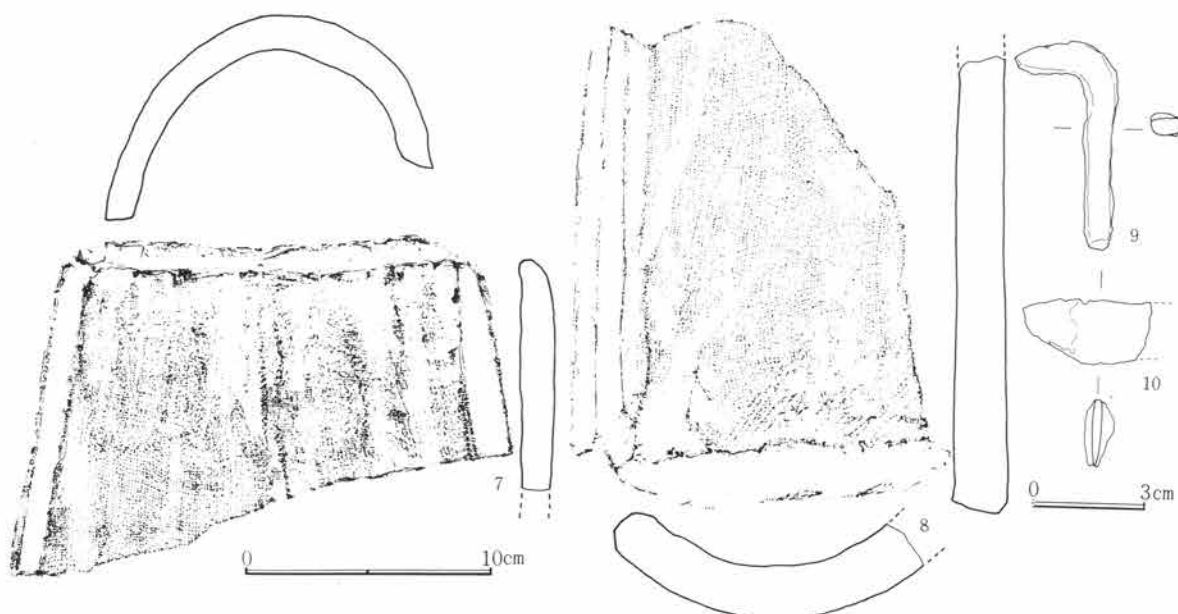


Fig. 200 L95号住居跡出土遺物(2)

L95号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
199-1 76-1	須恵器 杯	体部一 部欠損	9.0×4.3 ×2.5	埋土	腰部丸味をもって開く。見込部指頭痕あり。底部回転糸切り。	①酸化 ②浅黄橙 ③
199-2 76-2	須恵器 杯	1/2	9.0×5.2 ×1.6	甕・埋土	器肉薄い。腰部くびれ体部外面脹らみ外反気味に開く。轆轤成形。底部右回転糸切り。	①酸化 ②橙 ③細砂混る
199-3 76-3	須恵器 杯	1/2	9.9×5.6 ×1.9	貯蔵穴埋土	器肉薄い。腰部やや丸味をもって開く。口唇部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 ②橙 ③やや粗
199-4 76-4	羽釜 小片	口縁部	24.4×- (5.9) 口径25.6	埋土	器肉薄い。口縁部は銚部から内湾気味に立ち上がる。口唇部上端面水平気味。銚極めて低い。内面指頭痕。	①酸化 ②黄橙 ③細砂混る
199-5 76-5	羽釜 上半	上半	30.6×- ×(15.4) 口径34.0	貯蔵穴埋土・甕埋土	胴部張りなく口縁部内傾して立ち上がる。口唇部上端面に沈線様に段あり。銚極めて低く形骸化。胴部上位縦篋撫で下位横篋撫で。銚付近指頭痕。	①酸化 ②鈍い橙 ③赤色粘土・やや粗
199-6 76-6	瓦 丸瓦		厚1.8	甕	凹面布目。凸面篋調整。	①良好 ②灰 ③やや粗
200-7 76-7	瓦 丸瓦		厚1.3	甕	凹面布目。凸面篋調整。	①良好 ②灰 ③粗
200-8 76-8	瓦 平瓦		厚2.0	甕	凹面布目。凸面篋調整。	①良好 ②灰白 ③粗
200-9 76-9	鉄器 角釘?	両端部 欠損	長(5.5) 幅0.4×0.8	埋土	断面矩形を呈し角釘か。L字状に曲がる。	
200-10 76-10	鉄器 刀子	小片	長(3.5) 幅1.8厚0.2	埋土	刀子鋒部か。	

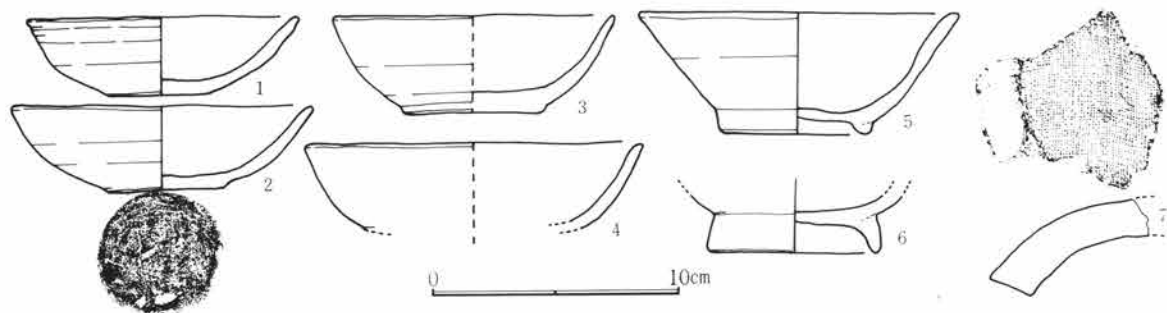


Fig. 201 L96号住居跡出土遺物

第2章 遺構と遺物

L 96号竪穴状遺構出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
201-1 77-1	須恵器 杯	完形	10.8×4.1 ×3.1	埋土	底径小さく体部丸味をもつ。口唇部下に2条の凹線巡る。口唇部小さい。轆轤成形。右回転糸切り。	①還元 ②灰白 ③細砂混る
201-2 77-2	須恵器 杯	½	12.0×4.5 ×3.4	埋土	底径小さく体部丸味をもって開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①還元気味 ②灰白 ③細砂混る
201-3 77-3	須恵器 杯	½	11.3×5.6 ×3.8	埋土	底部肥厚し体部丸味をもつ。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 ②浅黄橙 ③やや粗
201-4 77-4	須恵器 杯	底部欠損	13.4×— ×(3.4)	埋土	腰部丸味をもつ。轆轤成形。右回転。	①還元気味 ②灰白 ③やや粗
201-5 77-5	須恵器 碗	完形	12.8×6.0 ×4.8	埋土	腰部より体部直線的に開き口縁部外反気味。口唇部丸い。付高台、低く断面丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①還元気味 ②灰白 ③やや粗
201-6 77-6	須恵器 碗	体部欠損	—×6.8 ×(2.3)	埋土	腰部丸い。付高台、やや高く内湾気味に立つ。端部丸い。轆轤成形。	①還元気味 ②灰白 ③やや粗・細砂混る
201-7 77-7	瓦 丸瓦		厚1.8	埋土	凹面布目。側面箆調整。	①良好 ②灰白 ③やや粗

L 97号住居跡 (Fig. 202、203・PL. 16、77)

L区第4台地の東縁端中央部に位置し、52・53 L20～23の範囲にある。周辺は凝灰岩質層の採掘坑が著しく、また台地縁辺の土の流出のためか東側の掘形は特に浅く残存状態は悪い。L98号住居跡と重複しているが調査段階で新旧を誤認した。挿図では新旧を逆転して示してあるが、当跡が古い時期の所産である。

平面形は南北に長軸をもつ比較的整った方形を呈するが、南壁線にやや歪みがみられる。南北長4.15m・東西長3.3mを測り、東西軸方位はN-90°-Eを示す。壁高は最も良好な部分で約27cmを測る。床面は凝灰岩質層を基盤として安定している。東壁の北側から北・西・南壁の一部にかけて幅広い壁下溝が巡る。溝幅15～25cm・深さ4～5cmである。南西隅で壁下溝が二重になり、また溝幅の広さを考慮すると拡張・建替えなども

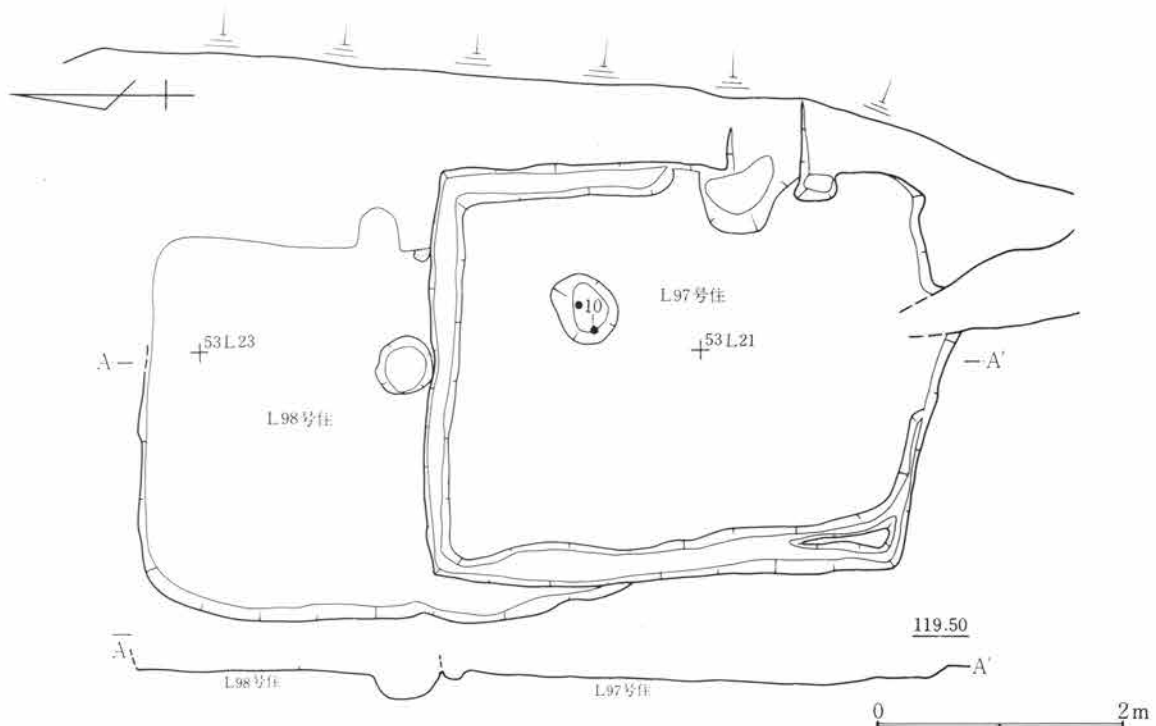


Fig. 202 L97号・L98号住居跡

考えられるが他では窺われない。やや東に偏って楕円形土坑が検出されているが性格は不明である。径45×55cm・深さ25cmを測り、埋土中より須恵器・土師器片が出土している。

竈は東壁のやや南に偏って付設されるが削平が著しく詳細は不明である。

出土遺物は埋土中が多く、須恵器杯・土師器甕・瓦などがある。

L 98号住居跡 (Fig. 204・PL. 16、78)

L区第4台地の東縁端中央部に位置し、52～54L21～23の範囲にある。L97号住居跡と重複しているが調査時の誤認のため南半を消失してしまい、挿図では逆転して示してある。周辺の状況はL97号住居跡と同様で遺存状態は悪い。特に東壁線は痕跡程度が確認されたのみである。

平面形は南北に長軸をもつ方形を呈すると考えられる。東西長2.95mを測り、南北は北壁線より3.95mの範囲を確認した。東西軸方位はおおよそN-90°-Eを示す。壁高は最も良好な部分で32cmを測る。床面はほぼ平坦をなし、凝灰岩質層を基盤にし安定している。住居内中央付近に径45cm・深さ15cmの円形土坑が穿たれるが性格は不明である。

竈は東壁に付設されるが遺存は痕跡程度である。右袖部には凝灰岩質の加工材が認められ壁線上にある。出土遺物は小形皿・羽釜などが埋土中より検出されている。

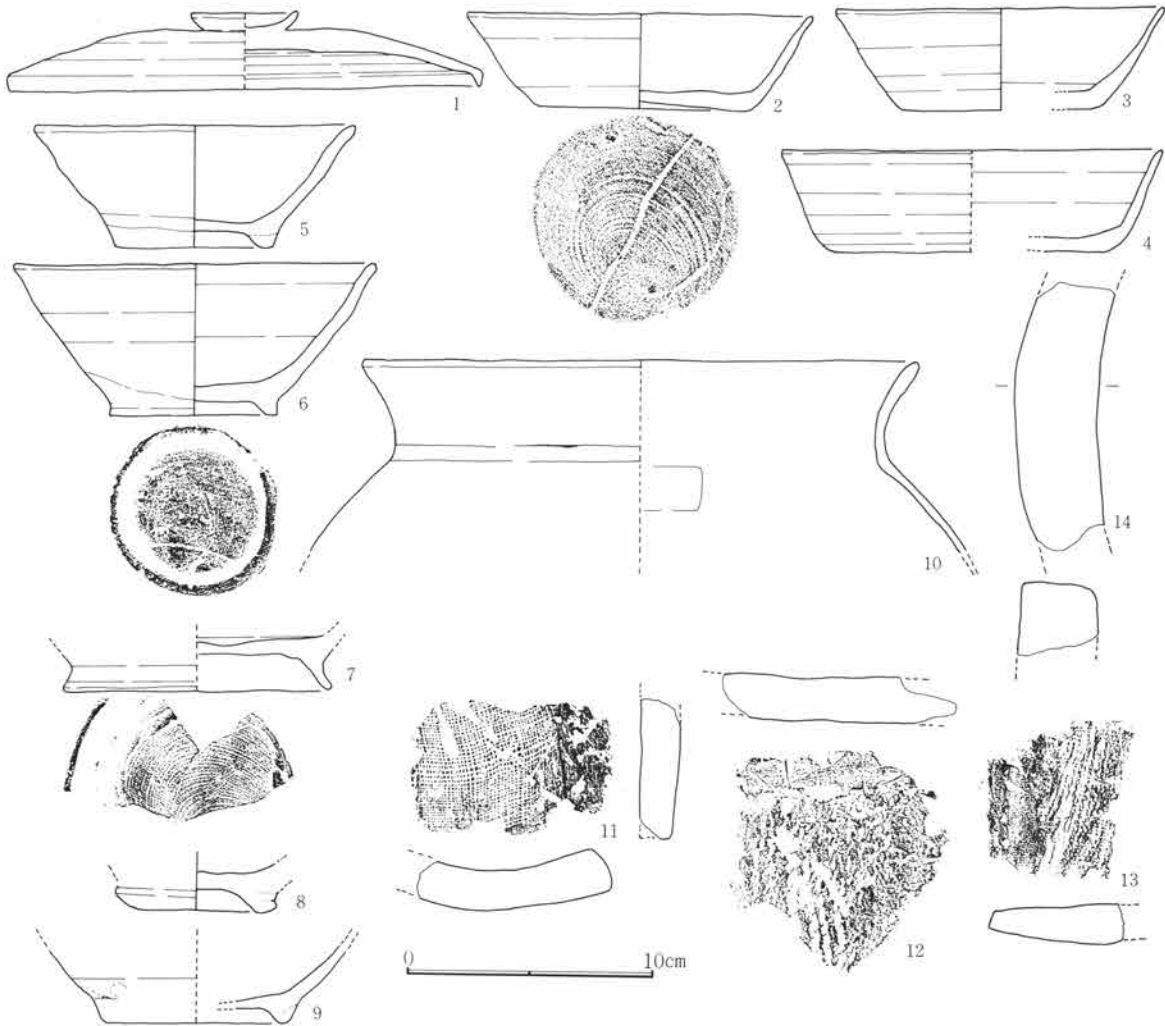


Fig. 203 L97号住居跡出土遺物

第2章 遺構と遺物

L 97号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
203-1 77-1	須恵器 蓋	¼	18.6×-× 3.0口径4.2	埋土	天井部平ら。体部直線的に開き口縁部直に折れる。器肉の薄い環状摺。轆轤成形。天井部回転削り。	①良好 ②灰白 ③やや密・細砂混る
203-2 77-2	須恵器 杯	¾	13.7×8.3 ×3.7	埋土	底径大きく体部は直線的に外傾する。口唇部細く丸まる。轆轤成形。右回転削り。	①良好 ②灰 ③やや密・細砂混る
203-3 77-3	須恵器 杯	¼	13.0×7.8 ×4.0	埋土	体部直線的で緩く外傾し上半の器肉薄い。轆轤成形。右回転削り後再調整か。	①良好 ②灰白 ③やや粗
203-4 77-4	須恵器 杯	¾	15.0×10.6 ×(4.0)	埋土	底径大きく腰部に緩やかな丸味をもち体部直線的。轆轤成形。削り後回転削り。	①良好 ②灰白 ③やや密・細砂混る
203-5 77-5	須恵器 椀	½	12.6×6.2 ×4.8	埋土	底部肥厚し体部下半に緩い張りをもつ。口縁部僅かにくびれて外反。付高台、低く断面矩形。接合痕。轆轤成形。	①やや軟 ②灰白 ③やや密
203-6 77-6	須恵器 椀	¾	14.4×6.6 ×6.0	埋土	体部僅かに丸味をもち大きく開く。口縁部緩く外反。口唇部丸い。付高台、低く断面矩形。轆轤成形。回転削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
203-7 77-7	須恵器 台付椀	底部欠	-×10.4 ×(2.2)	埋土	付高台、やや高くハの字状に開く。轆轤成形。右回転削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
203-8 77-8	須恵器 椀	体部欠損	-×4.4 ×(1.7)	埋土	付高台、低く断面台形。作り雑。2回接合か。高台部内面撫で。轆轤成形。回転削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
203-9 77-9	須恵器 椀	底部欠	-×7.0 ×(2.9)	埋土	腰部丸い。付高台、低く丸味を帯び作り雑。回転削り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
203-10 77-10	土師器 甕	口縁部 ½	22.0×- ×(7.5)	埋土	器肉薄く胴部丸く張り気味。口縁部外反して開く。口縁部内外面横撫で。肩部強い横撫で。内面に篋撫で。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
203-11 77-11	瓦 平瓦	小片	厚1.5	埋土	凹面布目。凸面撫で。	①酸化気味 ②鈍い 黄橙 ③やや粗
203-12 77-12	瓦 平瓦	小片	厚1.75	埋土	凹面撫で。凸面縄目痕か。	①良好 ②灰 ③やや粗・細砂混る
203-13 77-13	瓦 平瓦	小片	厚1.3	埋土	凹面布目。凸面撫で。	①良好 ②灰白 ③粗
203-14 77-14	石製品 石白	小片	縁幅2.7	埋土	茶白受鉢録片。内部側面は摩滅。外面は4mm幅のみ仕上げ痕。	粗粒安山岩

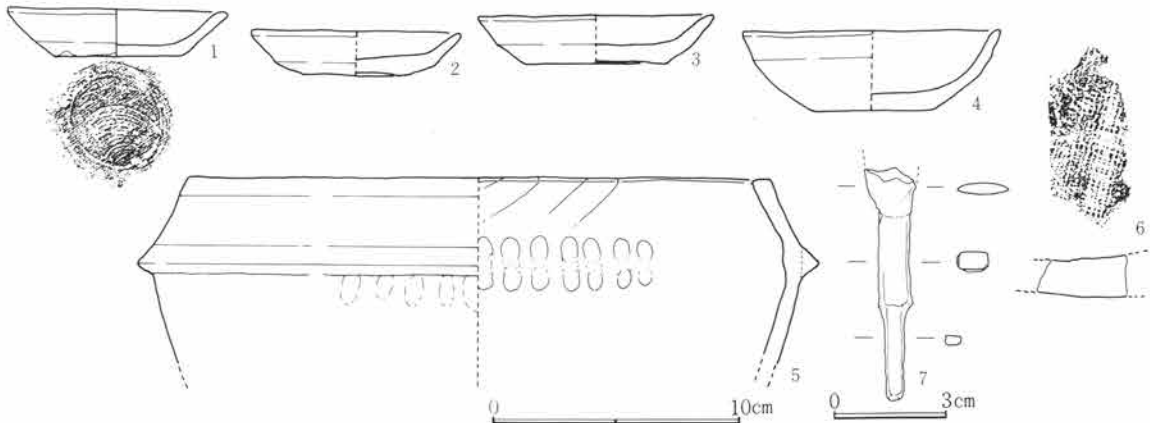


Fig. 204 L 98号住居跡出土遺物

L 98号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
204-1 78-1	須恵器 杯	完形	8.4×5.0 ×1.9	埋土	体部直線的に開き口唇部丸い。轆轤成形。右回転削り。	①酸化・良好 ②浅 黄橙 ③やや粗
204-2 78-2	須恵器 杯	¼	8.2×4.0 ×1.7	埋土	器肉厚い。腰部でくびれ体部大きく開く。轆轤成形。	①酸化・良好 ②淡 黄 ③やや密
204-3 78-3	須恵器 皿	½	9.4×5.6 ×1.9	埋土	器肉厚く体部中位で張るが直線的に開く。轆轤成形。回転削り。	①酸化・良好 ②浅 黄橙 ③やや粗
204-4 78-4	須恵器 杯	¾	10.2×4.8 ×3.1	埋土	底径小さく体部の丸味強い。口唇部丸い。轆轤成形。右回転削り。	①酸化・良好 ②淡 黄 ③細砂混る

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
204-5 78-5	羽釜	口縁部 小片	23.0× ×(7.2)	埋土	胴部直線的。銚部で折れ口縁部は内傾する。口唇部上端面水平。銚低く略三角。外面撫で・指撫で。内面指頭痕。	①酸化 ②黄橙 ③やや密・細砂混る
204-6 78-6	瓦 平瓦		厚1.55	埋土	凹面布目。凸面撫で。	①良好 ②灰白 ③粗砂混る
204-7 78-7	鉄器 鉄鏃?	茎部	長(6.3) 茎幅0.3×0.4	埋土	三角形棘篋被鏃になるか。篋被幅0.5×0.8	

L 99号住居跡 (Fig. 205~208・PL. 16、78)

L区第4台地の東縁端中央部に位置し、54~56L25~27の範囲にある。L124号住居跡と重複しているがこれより新しい時期の所産である。

平面形は南北に長軸をもつ方形を呈する。南北長3.3m・東西長約2.6mを測る。東西軸方位はおおよそN-67°-Eを示す。壁高は約20cmを測り、床面の凝灰岩質層を基盤にし非常に安定している。貯蔵穴などの諸施設は検出されていないが北西隅に径80~90cm・深さ20cmの円形土坑が、また竈前面には40×70cm・深さ30cmの楕円形土坑が穿たれる。両者とも埋土はLoam粒・塊を多く混じえる明褐色土で掘形に属すると考えられる。とくに後者の上面には焼土が覆い踏み締めりもあった。

竈は東壁にありやや南に偏って付設される。燃烧部は楕円形に掘り込まれ、凝灰岩質の円形支脚がやや手前に倒れ気味の状態で検出された。袖部は明瞭な痕跡を残さず、左袖部に袖材埋設痕がみられる。燃烧部幅約60cm・奥行き60cmを測る。

出土遺物は竈内に多く須恵器椀・灰釉陶器などがある。

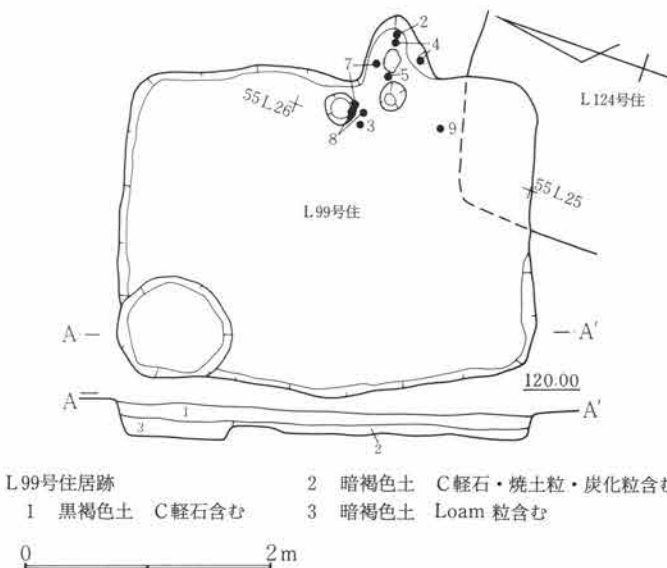


Fig. 205 L99号住居跡

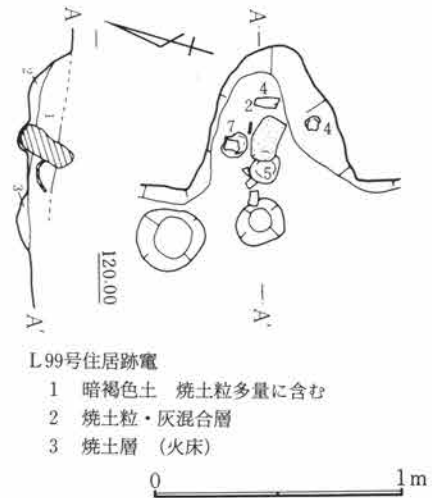


Fig. 206 L99号住居跡竈

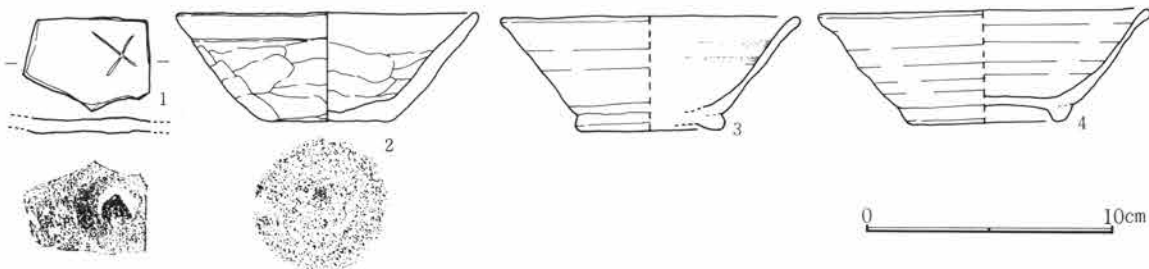


Fig. 207 L99号住居跡出土遺物(1)

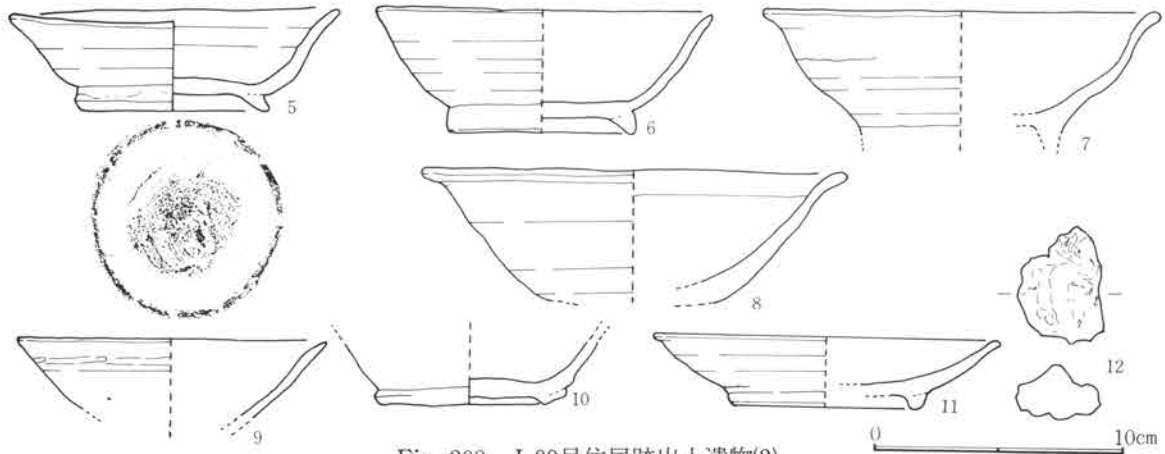


Fig. 208 L99号住居跡出土遺物(2)

L99号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高 厚	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
207-1 78-1	須恵器 杯	底部小片	4.9×3.6 厚0.5	埋土	底部回転篋切り。見込部に「×」篋描き文あり。	①還元 ②灰 ③やや密
207-2 78-2	土師器 杯	1/4	12.1×4.9 ×4.3	埋土	体部直線的に外傾し中位で緩くくびれる。口縁部やや内湾気味。口縁部内面撫で。体部横位篋削り。底部砂附着。	①良好 ②橙 ③やや密・黒色粒混
207-3 78-3	須恵器 碗	1/4	12.0×6.0 ×4.5	埋土	体部直線的に外傾する。口縁部肥厚気味で緩く外反する。口唇部丸い。付高台、低く作り雑。轆轤成形。	①酸化 ②浅黄橙 ③白色粒混る
207-4 78-4	須恵器 碗	1/4	13.2×6.0 ×4.4	埋土	体部直線的に外傾する。口縁部細まり緩く外反する。口唇部丸い。付高台。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③白色粒混る
208-5 78-5	須恵器 碗	完形	13.2×7.4 ×4.1	竈	腰部強く張り体部緩く外反して開く。付高台、ハの字状に開く。	①良好 ②灰白 ③粗・小石混る
208-6 78-6	須恵器 碗	1/4	13.5×7.6 ×4.8	埋土	腰部張りをもち体部丸味あり。口縁部僅かに外反。口唇部尖り気味。付高台、肥厚し略三角。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや粗・白色粒混
208-7 78-7	須恵器 碗	底部欠損	16.0×— ×(4.8)	埋土	体部中位で張りをもち口縁部強く外反。口唇部丸い。轆轤成形。	①酸化気味 ②鈍い 黄橙 ③やや粗
208-8 78-8	須恵器 杯	底部欠損	17.0×— ×(5.2)	埋土	腰部肥厚し丸味をもつ。体部内湾気味に開き口縁部大きく外反。口唇部丸い。轆轤成形。	①酸化 ②浅黄橙 ③
208-9 78-9	須恵器 碗?	小片	12.8×— ×(2.8)	埋土	体部直線的で大きく外傾する。口唇部尖り気味。体部外面煤附着か?口縁部下横篋磨き。轆轤成形。	①酸化気味 ②浅黄橙 ③白色粒多く混
208-10 78-10	須恵器 碗	底部	—×7.6 ×(2.6)	埋土	体部直線的に外傾する。轆轤成形。付高台、低く作り雑。	①酸化気味 ②鈍い 黄橙 ③白色粒混る
208-11 78-11	灰釉陶器 皿	1/4	13.8×7.6 ×2.8	埋土	体部内湾気味に大きく外傾する。口縁部緩く外反。口唇部丸い。高台低く丸い。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③やや密・白色粒混
208-12 78-12	鉄滓		3.6×4.5 ×2.2	埋土	錆び附着するが磁気なし。重29g	

L100号住居跡 (Fig. 209~211・PL. 17、78)

L区第4台地の東縁に近くやや北に位置し、56~58 L30・31の範囲にある。L123号住居跡と重複しており、これより新しい時期の所産である。

平面形は南北に長軸をもつ方形を呈するが、壁線に僅かな脹らみをもつ。南北長2.9m・東西長2.75mを測り、東西軸方位はおよそN-72°-Eを示す。壁高は約18cm、床面はほぼ平坦をなすが南東隅はやや軟弱である。Pitは3箇所を検出されたが相対的位置からは柱穴などに想定できるものはない。南西隅のPitの埋土中上半には焼土・炭化粒を含むが、下半はLoam粒を多く混じえる締まりのある土層が堆積している。東壁の北半から北・西・南壁の一部にかけて幅広の壁下溝が巡る。幅14cm・深さ5~6cmを測る。

竈は東壁にあり南に偏って大きく東壁外へ付設される。燃焼部から煙道にかけてはそれほど変化なく寸胴な形状となり、底面でも区画するような段差は認められない。壁線上に凝灰岩質の加工材が埋設され袖部を作る。袖材間内法45cm、竈全長約1mを測る。

出土遺物は竈内及びその周辺に多く、羽釜・灰釉陶器などがある。

L 123号住居跡 (Fig. 209、212・PL. 17、79)

L区第4台地の東縁近くやや北に位置し、55~57L29~31の範囲にある。L99号・L102号住居跡と重複しているが、両者より古い時期の所産である。調査段階で平面形の確認が困難で、一部分壁線の不鮮明な箇所もある。

平面形は東西に長軸をもつ略方形と考えられるが、東壁線は北壁線に対し鈍角方向に延び不整形となる。東西長は現状最大で約4.7m、南北長は3.55mを測り、東西軸方位はおおよそN-87°-Eを示す。壁高は約18cm、床面はほぼ平坦をなすが踏み締まりは軟弱である。南壁沿いに2個の楕円形 Pit が検出されているが相対的な位置関係からは柱穴とはなしにくい。径50×70cm・深さ7cmあるいは14cmを測る。

竈は東壁にあり北側に偏って付設される。位置関係としては希な例である。遺存状態は悪く、小さく楕円形に掘り込まれた燃焼部に火床と考えられる焼土層が認められた。また黒褐色の埋土中には焼土粒・炭化粒が若干認められたにすぎない。燃焼部幅50cm・奥行き70cmを測る。

出土遺物は少量で、須恵器甕片・長胴型の土師器甕片が検出されている。

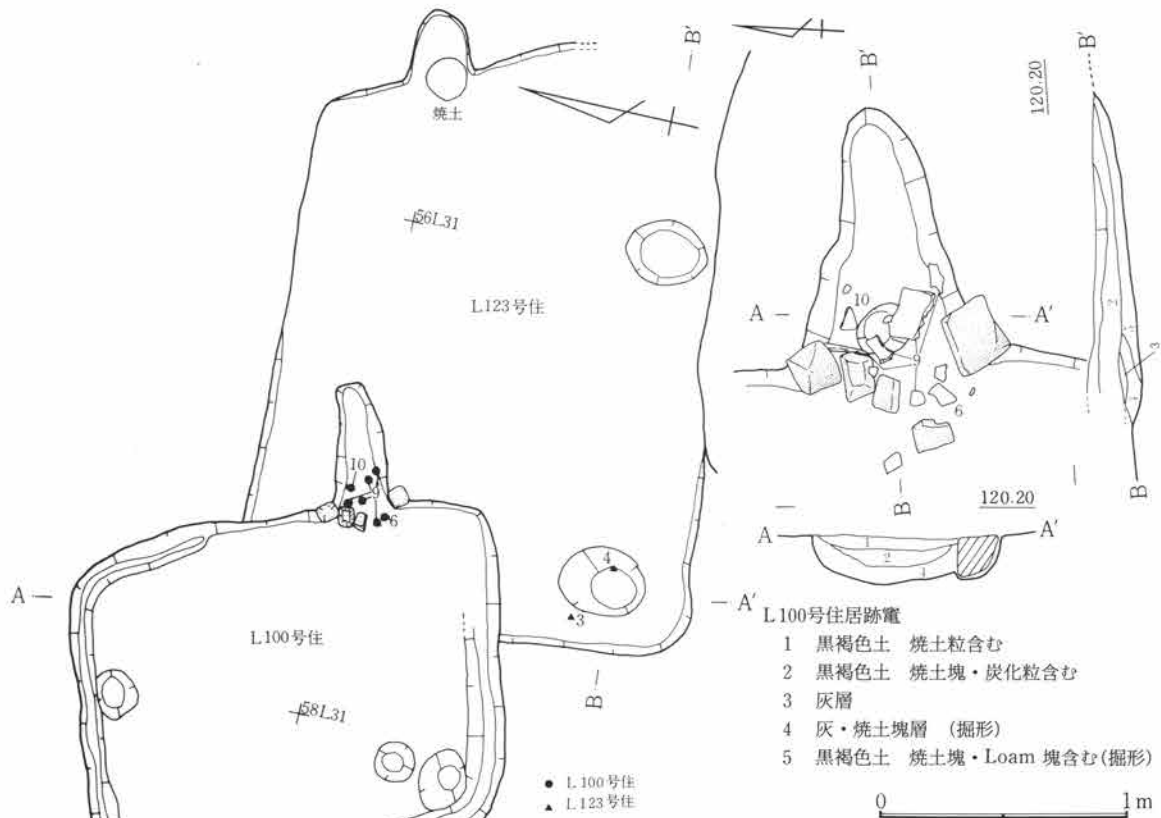


Fig. 210 L 100号住居跡竈

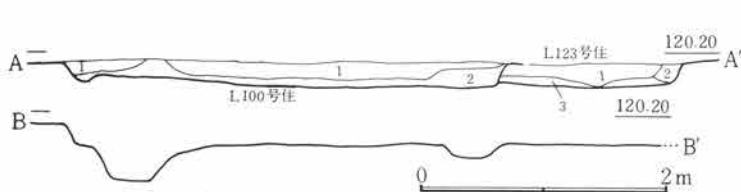


Fig. 209 L 100号・L 123号住居跡

L 100号住居跡

- 1 黒褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒含む
- 2 黒褐色土 Loam 粒含む

L 123号住居跡

- 1 黒褐色土 C軽石・Loam 塊含む
- 2 暗褐色土 C軽石・Loam 粒・炭化粒含む
- 3 暗褐色土 Loam 塊含む

第2章 遺構と遺物

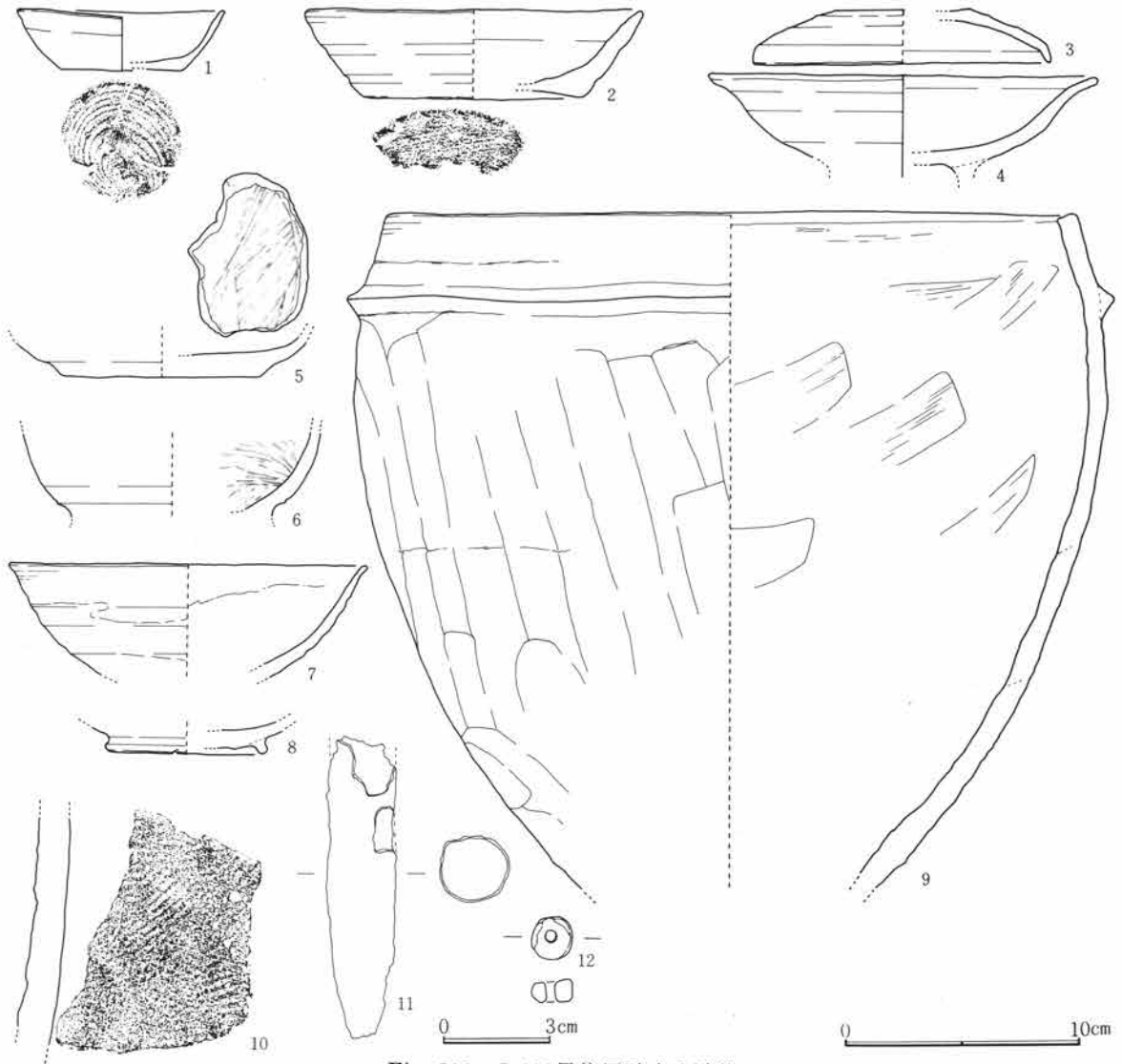


Fig. 211 L100号住居跡出土遺物

L100号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
211-1 78-1	須恵器 杯	1/2	8.7×5.1 ×2.4	埋土	器内極めて薄い。体部内湾気味に開き深め。歪みあり。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②浅黄橙 ③やや粗
211-2 78-2	須恵器 杯	1/4	14.2×9.0 ×3.7	埋土	器内厚く体部直線的に開く。轆轤成形。静止糸切り。	①酸化気味・良好 ②灰白 ③やや粗
211-3 78-3	須恵器 蓋	体部	12.6×— ×(2.3)	埋土	天井部平ら。体部直線的。口縁部鈍く折れて開き気味。天井部回転篋削り。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密
211-4 78-4	須恵器 椀	台部欠損	16.2×— ×3.5	Pit・埋土	腰部やや丸味をもち大きく開く。体部中位～口縁部大きく外反して開く。轆轤成形。付高台剥離。回転糸切り。	①酸化気味 ②橙 ③やや粗・細砂混る
211-5 78-5	内黒土器 杯	底部破片	—×8.2 ×(1.7)	埋土	腰部張り強い。底部肥厚する。内面不定方向篋磨き。轆轤成形。	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③やや密
211-6 78-6	内黒土器 椀	体部中位のみ	—×—× (3.5)	埋土	体部丸く張る。内面黒色処理及び斜位篋磨き。轆轤成形。	①酸化気味・良好 ②鈍い橙 ③やや密
211-7 78-7	灰釉陶器 椀	底部欠損	15.0×— ×(4.6)	埋土	体部丸く内湾して開く。口唇部丸まり小さく外屈する。漬け掛け施釉。轆轤成形。腰部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③密
211-8 78-8	灰釉陶器 椀	台部	—×6.8 ×(1.3)	Pit・埋土	底部肥厚。付高台、中位で段をなし低くハの字状に開く。端部に凹み。	①良好 ②淡黄 ③やや密
211-9 78-9	羽釜	1/4	29.0×—×28.0 口径32.2	埋土	胴部丸く張り腰部窄まり口縁部やや内傾。口唇部上端面凹み内斜。鋳低く断面略三角。外面縦篋削り。内面篋撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③やや密・赤色粒混

第1節 竪穴住居跡と出土遺物

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
211-10 78-10	須恵器 甕	小片	厚1.3	埋土	外面平行叩き目。内面剥離?	①良好 ②灰 ③やや密
211-11 78-11	鉄器 不明		長(8.4) 径2.0厚0.1	埋土	筒状鉄製品。内部に木質残り、木製品を包んでいたと思われる。石突か?	
211-12 78-12	石製品 白玉	完形	径1.2厚0.6 孔径0.3	掘形埋土	側面は粗い縦擦痕。両面調整粗い。	滑石

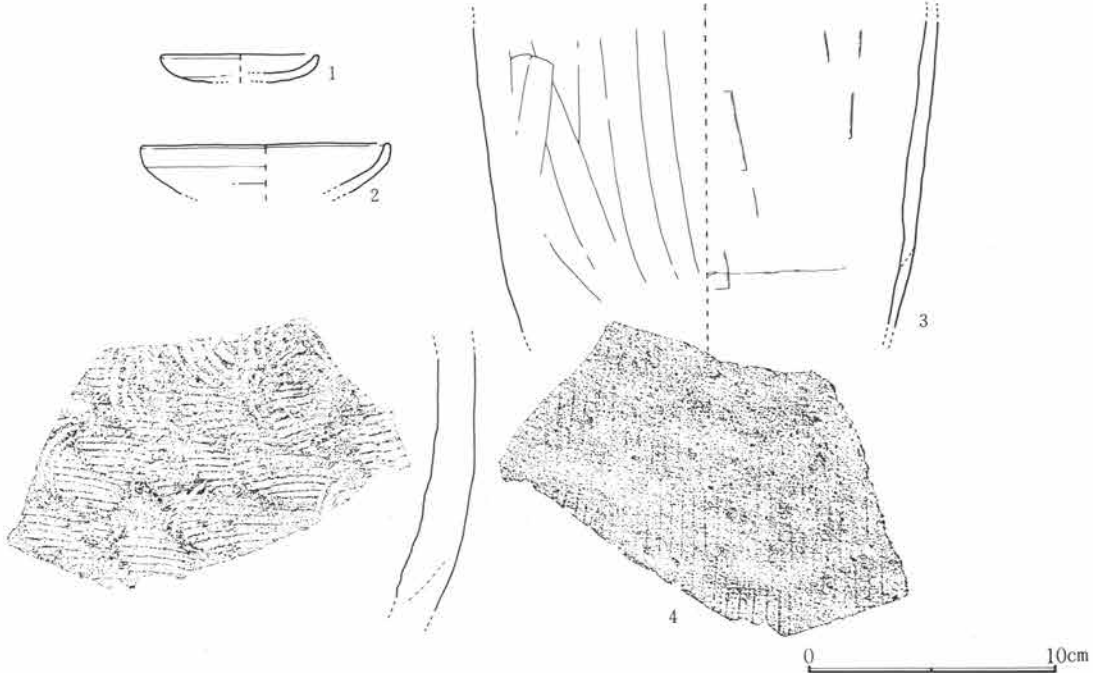


Fig. 212 L123号住居跡出土遺物

L123号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
212-1 79-1	土師器 杯	底部欠損	6.4×— ×(1.1)	埋土	極めて小形。体部浅く口縁部は内湾気味に開く。体部篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③細砂混る
212-2 79-2	土師器 杯	底部欠損	10.0×— ×(2.0)	埋土	口縁部やや直立気味に開く。口縁部横撫で。体部篋削り。内面撫で。	①良好 ②鈍い黄橙 ③細砂混る
212-3 79-3	土師器 甕	胴部	—×— ×(13.1)	埋土	胴部張りなく直線的に外傾する。外面縦方向の篋削り。内面篋撫で。接合痕。	①良好 ②橙 ③砂多量に混る
212-4 79-4	須恵器 甕	破片	厚1.7	Pit内	外面格子または平行叩き。内面平行または青海波状の当て目。	①良好 ②灰 ③密

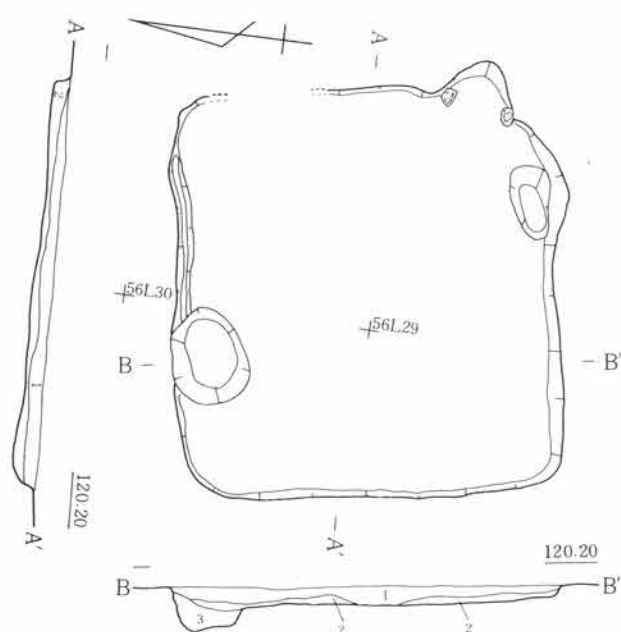
L102号住居跡 (Fig. 213~215・PL. 17、79)

L区第4台地の東縁近く北に位置し、54~56L28・29の範囲にある。L123号住居跡と重複し、これより新しい時期の所産である。東半は台地縁辺により近く検出面での掘形は浅くなる。

平面形は東西方向に僅かに長い方形を呈する。東西長3.25m・南北長3.1mを測り、東西軸方位はN-79°-Eを示す。壁高は残存状況の良好な西側で約15cmを測り、床面は平坦をなし踏み締まりは比較的良好である。北壁沿いと南壁沿いに楕円形土坑が穿たれ、南壁沿いのものは土器や竈構築材が検出されている。北壁の一部には幅8cm・深さ2~3cmの壁下溝がみられる。

第2章 遺構と遺物

竈は東壁あり大きく南に偏って付設される。軸線は東壁線との直角軸からおよそ17°南へ振れる。燃烧部は略三角形をなし、壁線上に凝灰岩質の加工材を埋設する。袖材間内法40cm、燃烧部奥行き45cmを測る。出土遺物は少量である。

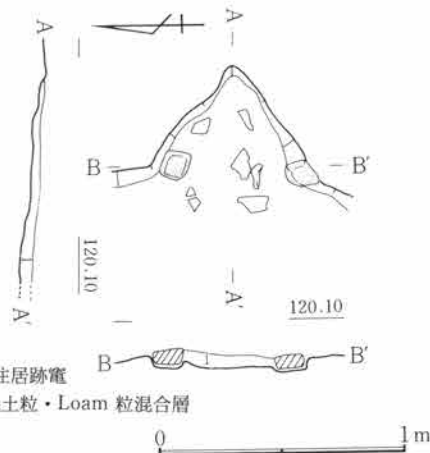


L102号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・Loam 粒多量に含む
- 2 暗褐色土 Loam 粒多量に含む
- 3 暗褐色土 Loam 塊含む

0 2m

Fig. 213 L102号住居跡出土遺物



L102号住居跡竈

- 1 焼土粒・Loam 粒混合層

0 1m

Fig. 214 L102号住居跡竈

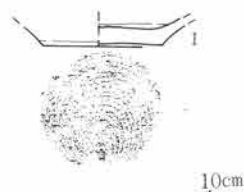


Fig. 215 L102号住居跡出土遺物

L102号住居跡出土遺物観察表

Fig. No.	器種	部位	計測値(cm)	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
PL. No.	器形	残存量	口径×底径×器高	(cm)		
215-1	須恵器	底部	—×4.8	Pit埋土	体部直線的か。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 ②橙 ③赤色粘土粒混る
79-1	杯		×(1.0)			

L103号住居跡 (Fig. 216、217・PL. 17、79)

L区第4台地の東縁端中央部に位置し、52・53L24～26の範囲にある。台地縁辺の開削のためか東半は消失し全容を知ることはできない。L124号住居跡と重複しているが、これより新しい時期の所産である。

平面形は方形を呈すると考えられる。南北長約4mを測り、東西は西壁線より約3mの範囲まで確認した。西壁線を基軸にする東西軸方位はおよそN-91°-Eを示す。壁高は遺存の良好な部分で約39cmを測る。床面は平坦をなし、凝灰岩質層を基盤とするため非常に安定している。竈・貯蔵穴などの施設は検出されていない。床面直上より6～7個の石が集中して見られたが、施設を構成するような規則性は窺われなかった。出土遺物は散在的で、須恵器蓋・杯、土師器甕などがある。

L124号住居跡 (Fig. 216・PL. 17)

L区第4台地の東縁中央部に位置し、53・54L23～25の範囲にある。台地縁辺の開削のためか東壁は消失

している。L95号・L98号・L99号・L103号住居跡と重複しているが、いずれより古い時期の所産である。調査時点では壁下の溝と思われる痕跡が二重に検出され重複が考えられた。現状では柱穴と考えられるP₁～P₃の配列や床面に大きな段差が生じていないことからL124号・L125号住居跡は同一遺構とする。

平面形は方形を呈すると考えられる。南北長5m、東西は西壁線より3.95mの範囲まで確認した。東西軸方位はおよそN-86°-Eを示す。壁高は周囲の削平により遺存状態が悪く、壁下の溝の存在により壁線の範囲を認め得る。床面はほぼ平坦をなし凝灰岩質層のため安定しているが、東縁は削平のため緩い傾斜で低くなる。壁下の溝は北壁と西壁下で部分的に検出され、幅8～15cm・深さ3～4cm程度である。西壁下の溝は北壁下へ接合せずL字に折れP₃に接するように延びるが、拡張あるいは建替えによる結果であろうか。柱穴はP₁～P₃が検出された。P₁は上径30×50cm・下径20×30cm・深さ20cm、P₂は上径30×45cm・下径20×25cm・深さ24cm、P₃は上径30×35cm・下径20×20cm・深さ24cmを測り、いずれも楕円形を呈する。P₁・P₂間は2m、P₂・P₃間は2.1mである。中央部には0.8×1m・深さ5cmの浅い楕円形土坑が、また南西隅には3個のPitが近接して見られるが、当跡に伴う施設か否か不明である。竈・炉などは検出されない。

出土遺物は少なく図示できるものはない。

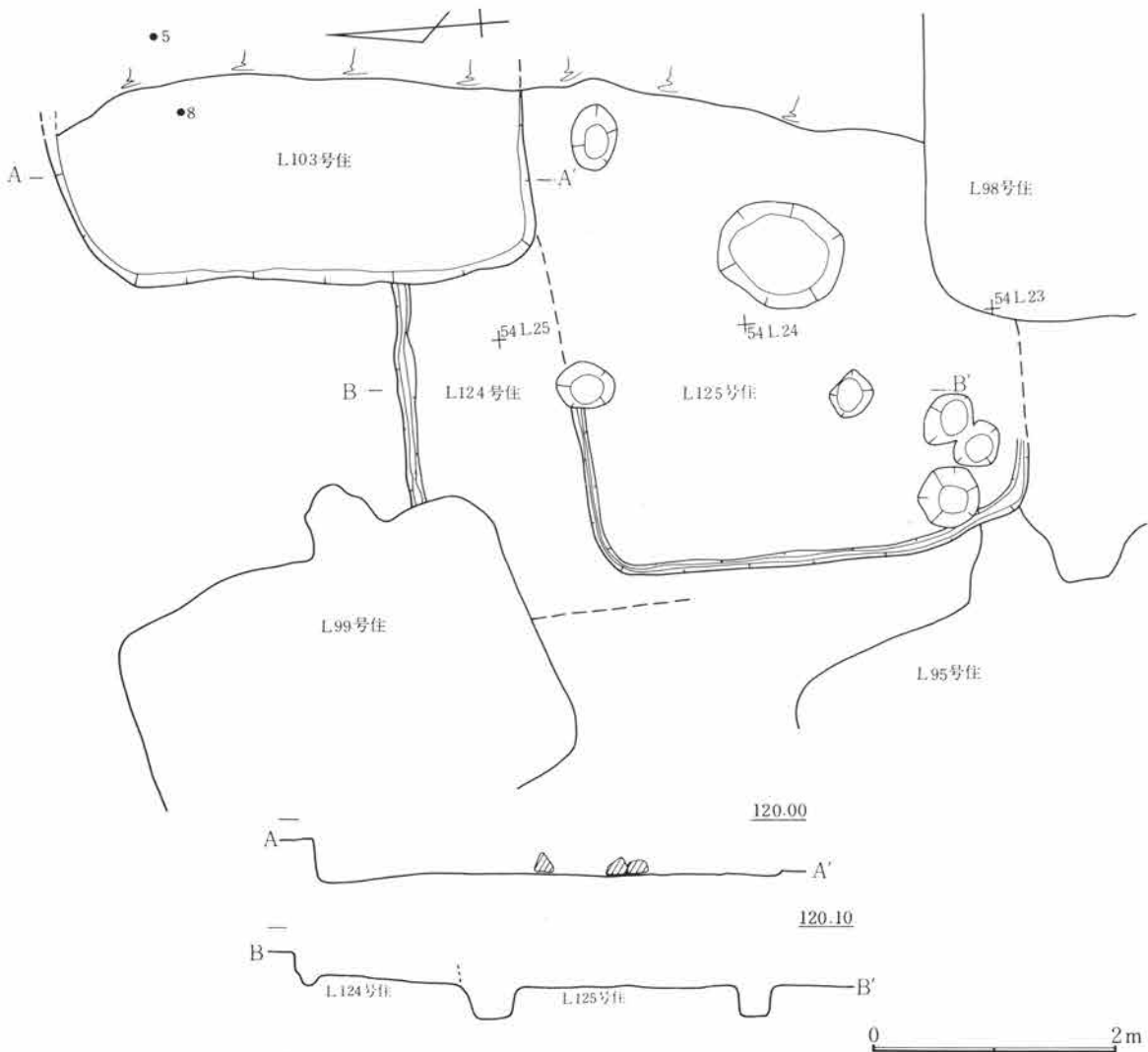


Fig. 216 L103号・L124号住居跡

第2章 遺構と遺物

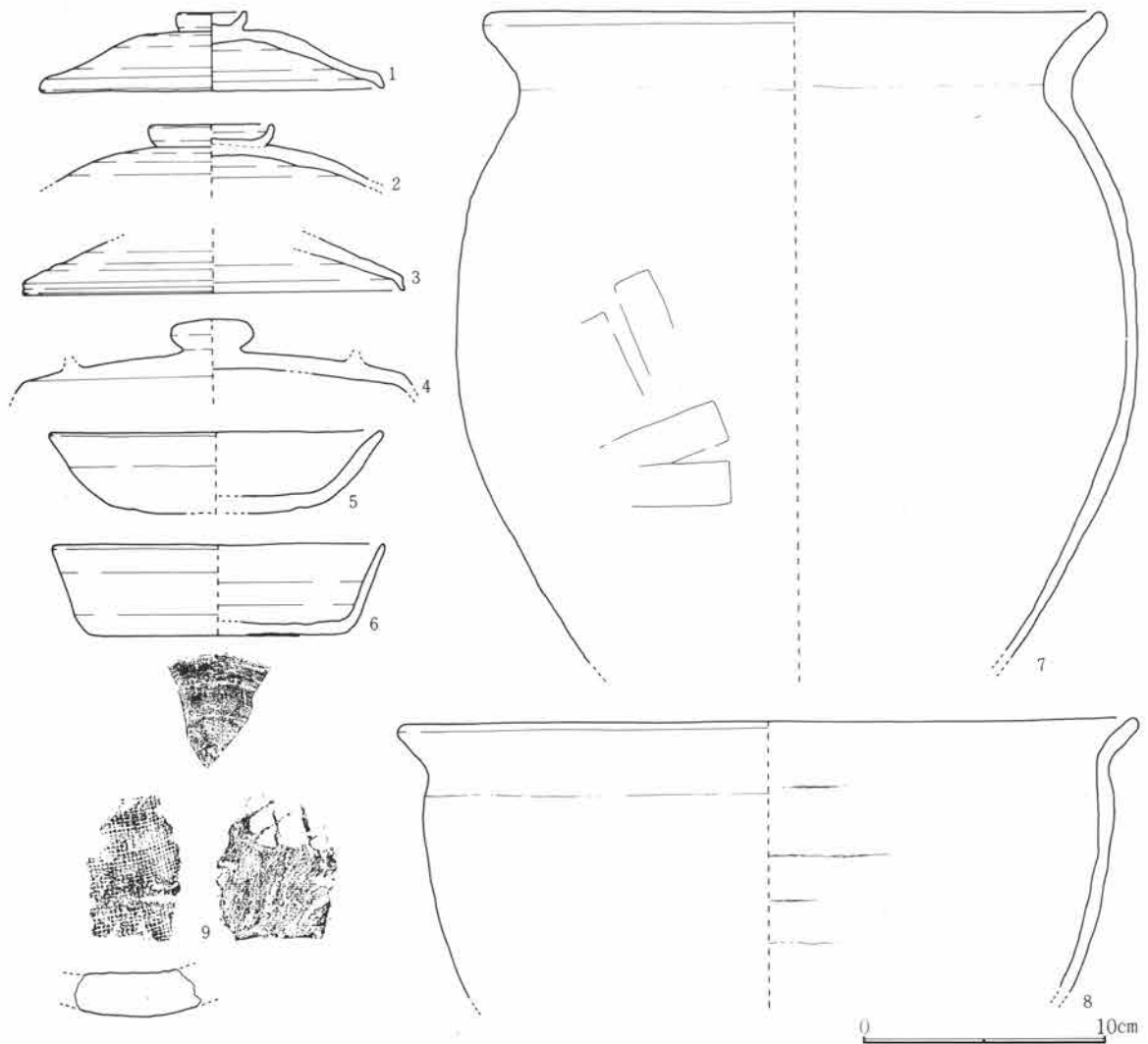


Fig. 217 L103号住居跡出土遺物

L 103号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
217-1 79-1	須恵器 蓋	1/2	13.9×-× 3.1摘径2.9	埋土	小さめの環状摘。天井部平坦で体部外反気味に開く。口縁部小さく折れて外傾。轆轤成形。天井部右回転篋削り。	①還元・良好 ②灰 ③砂混る
217-2 79-2	須恵器 蓋	端部欠損	(12.6)×-× (2.5)摘径5.1	埋土	天井部やや丸く張る。環状摘、端部丸い。轆轤成形。天井部右回転篋削り。	①酸化・良好 ②鈍い橙 ③細砂混る
217-3 79-3	須恵器 蓋	破片 摘欠損	15.4×-× (2.1)	埋土	体部直線的に開き口縁部は直に折れ小さく外反する。轆轤成形。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
217-4 79-4	須恵器 蓋	1/2端部 欠損	(16.4)×-× (3.1)	埋土	ボタン状摘。天井部偏平で凸線巡る。口縁部折れる。内外面に吸炭部分あり。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①酸化気味 ②白灰 ③やや密
217-5 79-5	土師器 杯	1/4	13.5×-× (3.3)	+7	丸味のある平底。口縁部僅かにくびれて外反気味。体部から底部にかけて摩滅顕著。	①良好 ②橙 ③細砂混る
217-6 79-6	須恵器 杯	1/2	13.5×10.5 ×3.7	埋土	底径大。体部直線的に緩く外傾。轆轤成形。底部回転篋削り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
217-7 79-7	土師器 甕	底部欠損	25.4×-× (25.8)	埋土	胴部上半張り気味。口縁部器肉厚く緩く外反して開き端部小さく内屈。体部上半縦位・下半横位篋削り。摩滅顕著。	①良好 ②明褐 ③小石混る
217-8 79-8	土師器 鉢?	破片	29.9×-× (11.0)	+1	体部緩く張り丸味をもつ。口縁部折れて強く外傾。口唇部丸味をもつ。口縁部横撫で。内面接合痕。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
217-9 79-9	瓦 平瓦	小片	厚1.8	埋土	凹面布目。凸面格子目叩き。	①やや軟 ②灰白 ③やや密

L 104号住居跡 (Fig. 218、219・
PL. 17、79)

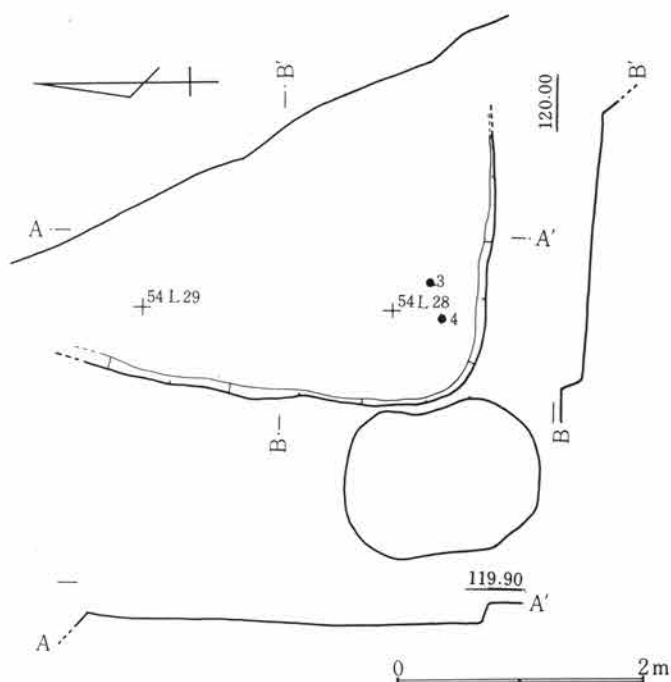


Fig. 218 L 104号住居跡出土遺物

L区第4台地の東縁辺に位置し、53・54 L27～29の範囲にある。遺構の大部分は台地縁辺の流出ないしは開削によって消失しており、検出できた範囲は僅かに南壁から西壁にかけての一部分である。

平面形は方形を呈すると考えられるが詳細は不明である。南壁線約2m、西壁線約3.2mまで確認した。西壁線を基軸とする東西軸方向位はおおよそN-95°-Eを示す。壁高は約15cmを測り、床面はほぼ平坦をなす。壁面・床とも凝灰岩質層を基盤としており非常に安定している。埋土は凝灰岩質層の風化土と浅間山降下C軽石粒を含む暗褐色土の混在する土層で構成される。出土遺物は須恵器小杯・羽釜・角釘がある。

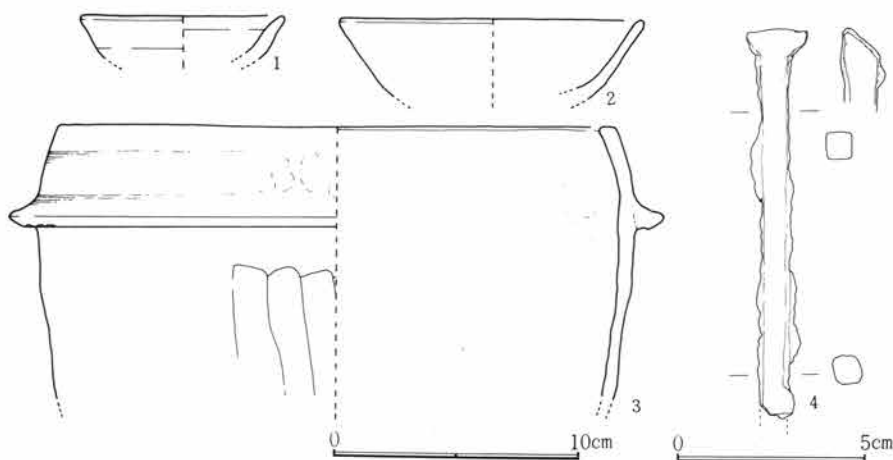


Fig. 219 L 104号住居跡出土遺物

L 104号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
219-1 79-1	須恵器 杯	破片	8.2×— ×(1.7)	埋土	体部丸味をもち口縁部僅かに外反して開く。口唇部丸い。轆轤成形。	①酸化・良好 ②鈍い黄橙 ③細砂混る
219-2 79-2	土師器 杯	破片	13.2×— ×(3.2)	埋土	腰部に丸味をもつ。口唇部丸い。全体的に摩滅顕著。	①良好 ②鈍い橙 ③細砂混る
219-3 79-3	羽釜	上半	22.0×— ×(10.9) 鏝径25.9	埋土	体部やや直線的で張りなく口縁部内湾して内傾。鏝明瞭に突出しやや下向きに付く。口縁部横撫で・指頭痕。体部縦位篋削り。内面指頭痕・撫で。	①良好 ②鈍い褐 ③砂混る
219-4 79-4	鉄器 角釘	端部欠損	長(10.3) 幅0.7	埋土	頭部形状折頭式。	



Fig. 220 L107号住居跡

L107号住居跡 (Fig. 220、221・PL. 17、79)

L区第4台地の北西部に位置し、75～77L37～39の範囲にある。東半は台地北西部を北東～南西走する大溝L12号溝によって消失している。

平面形は方形を呈すると考えられ、東西長3.5m、南北は北壁線より2.8mの範囲まで確認した。東西軸方位はおよそN-55°-Eを示す。壁高は約30cmを測り、床面は多少の凹凸がみられる。竈・貯蔵穴・Pit類などの諸施設は検出されず、出土遺物は少ない。

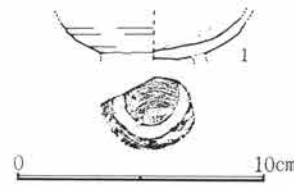
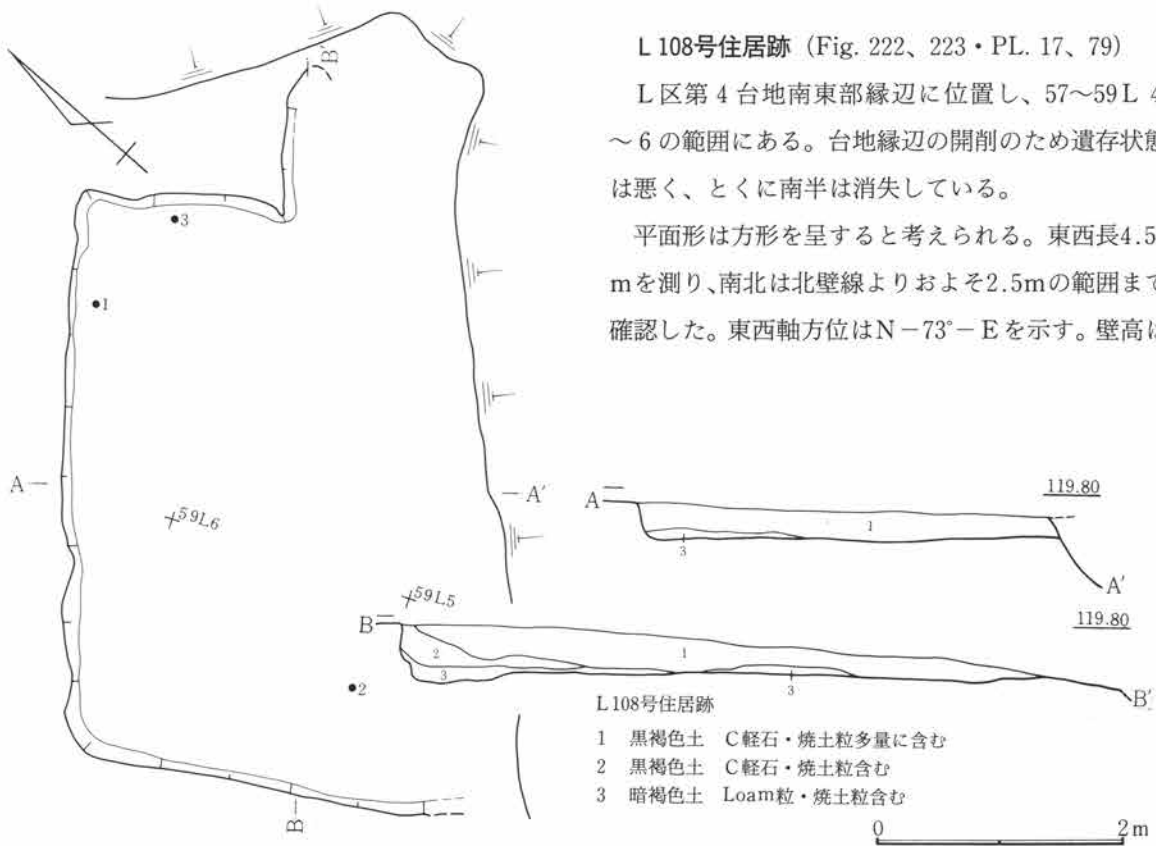


Fig. 221 L107号住居跡出土遺物

L107号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
221-1	内黒土器	底部	-×-	床下埋土	丸味のある底・体部。付高台剝離。内面黒色処理。轆轤成形。回転糸切り。内面篋磨き。	①良好 ②浅黄橙
79-1	碗		×(1.5)			③やや密



L108号住居跡 (Fig. 222、223・PL. 17、79)

L区第4台地南東部縁辺に位置し、57～59L4～6の範囲にある。台地縁辺の開削のため遺存状態は悪く、とくに南半は消失している。

平面形は方形を呈すると考えられる。東西長4.55mを測り、南北は北壁線よりおよそ2.5mの範囲まで確認した。東西軸方位はN-73°-Eを示す。壁高は

良好な西側で約35cmを測る。床面はほぼ平坦をなし、凝灰岩質層で安定している。貯蔵穴・柱穴などの諸施設は検出されない。

竈は東壁に付設されるが、削平が著しく痕跡を確認したにとどまる。大きく東壁から突出するが平面形をとらえることはできず、多少の焼土粒を認めたのみである。

出土遺物は少量で、須恵器高杯片・甕片などである。

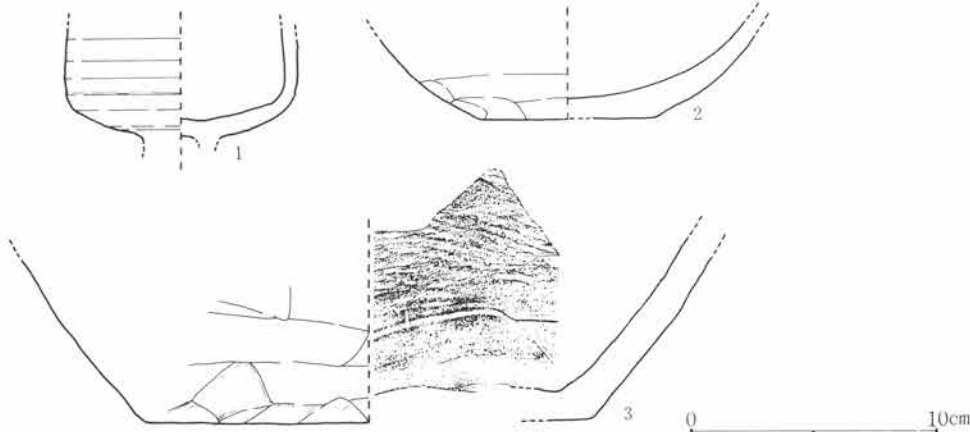


Fig. 223 L108号住居跡出土遺物

L108号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
223-1 79-1	須恵器 無蓋高杯	杯部下 半	—×9.4 ×(4.6)	+11	杯部腰の張り強い。体部は直線的で僅かに内傾して立つ。外面下位回転篋削り。内面撫で。	①良好 ②灰白 ③密
223-2 79-2	土師器 甕	底部	—×7.2 ×(3.8)	+17	平底。腰部丸味強い。体部・底部篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②橙 ③やや密・赤色粒混
223-3 79-3	須恵器 甕	胴部下 位	—×18.0 ×(7.3)	+10	底径大きく胴部直線的。器肉厚い。胴・底部篋削り。胴部最下位叩き調整。内面あて目・篋撫で。	①良好 ②灰 ③やや密・小石混る

L111号住居跡 (Fig. 225、228、229・PL. 17、18、80)

L区第4台地の調査区南西隅に位置し、78・79L5～7の範囲にある。西側は調査区域外に入り全体は不明である。また北壁線はL144号住居跡との重複部分に試掘溝が設定されたため検出できず、両者の新旧関係も確認することは不可能であった。南でL153号住居跡とも重複しているが、これより新しい時期の所産である。

平面形は方形を呈すると考えられ、東西は東壁線より約2m、南北は南壁線より4mの範囲まで確認した。東西軸方位はおよそN-91°-Eを示す。壁高は約25cmを測り床面の踏み締まりは良好である。南東隅には径1m・深さ30cmの円形貯蔵穴が設けられる。埋土には竈側より焼土・灰が底面に至るまで流入している。また須恵器杯・碗の出土が多い。

竈は東壁に付設され、燃焼部は楕円形の掘形で検出した。構築材などは遺存していない。竈前面には径45cm・深さ20cmの円形 Pit が穿たれ、上面及び下位に灰層が堆積する。燃焼部幅1.1m・奥行き90cmを測る。

出土遺物は貯蔵穴内に集中して検出された。

L153号住居跡 (Fig. 224、230・PL. 18、81)

L区第4台地調査区の南西隅に位置し、77～79L3～5の範囲にある。西側は調査区域外に入り、全体は

第2章 遺構と遺物

検出できなかった。L111号・L159号住居跡と重複し両者より古い時期の所産である。L159号住居跡との重複については新旧を誤認して掘形の深い当跡から検出したため、挿図では逆転して示してある。

平面形は東西方向に長軸をもつ方形を呈すると考えられる。南北長2.7mを測り、東西は東壁線より2.9mの範囲まで確認した。東西軸方位はN-80°-Eを示す。壁高は約32cmを測り、床面は平坦をなすが踏み締まりは弱い。貯蔵穴等は検出されない。

竈は東壁のほぼ中央に付設される。任意に設けた試掘溝のため北半は消失してしまった。燃焼部は楕円形に掘り込まれ、壁線上右袖部には風化が進んだ凝灰岩質材が埋設状態で検出された。燃焼部の焼土化は希薄で焼土粒の散布があった。燃焼部奥行き65cmを測る。

出土遺物は散在しており、土師器杯類などがある。

L154号住居跡 (Fig. 224、226、231、232、233・PL. 18、81~83)

L区第4台地の調査区南西に位置し、76・77L5~7の範囲にある。L144号・L159号住居跡と重複しているが、両者より古い時期の所産である。調査時の誤認で掘形の深い当跡を先に検出したため挿図ではL159号住居跡との関係を逆転して示してある。

平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈する。南北長約4.45m・東西長3.3mを測り、東西軸方位はN-94°-Eを示す。壁高は約25cmを測り、北壁線よりやや内側寄りの床面に達する灰層の流入が見られる。床面は比較的良好に踏み締まる。南東部の床土は白色粘土粒を含む暗褐色土で覆われ僅かに低くなる。この部分の床下には1×2mの不正楕円形土坑がある。埋土には焼土粒・炭化粒を混じえ、上層は灰を間層として上下には白色粘土粒を含む粘性の強い暗褐色土が、貼床として施工される。

竈は東壁中央部に付設され、袖部は掘形を住居内に突出させて残す。袖部先端には構築材を埋設したと考えられるPitがあり、燃焼部は窪みをなし灰層が堆積する。燃焼部と煙道部は段差をもたず深い位置から急角度で立ち上がる。袖部長さ40~50cm、袖材埋設痕内法40cm、竈全長1.2mを測る。

出土遺物は多く、住居内に散在して検出された。また南壁沿い中央部には、球胴大形土師器甕が口縁部以下を埋設した状態で出土している。遺物中には当跡に属する一群の他、かなり時間の遡る土師器が混在し、他の遺構の存在も考えられるが確認できなかった。

L159号住居跡 (Fig. 224、227~234・PL. 18、83、84)

L区第4台地の調査区南西に位置し、76~78L3・4の範囲にある。L153号・L154号・L171号住居跡と重複しており、これらより新しい時期の所産である。挿図中にはL153号・L154号住居跡と逆転して示すが、これは調査時の誤認によるものであり、北壁線と西壁線の一部は検出できなかった。

平面形は方形を呈すると考えられ、東西長約4m、南北は3.5mまで確認した。東西軸方位はN-88°-Eを示す。壁高は約15cmを測り、床面はほぼ平坦をなすが踏み締まりは弱い。貯蔵穴等は検出されていない。

竈は東壁にありやや南に偏って付設される。削平が深く遺存状態は不良であるが、燃焼部は半円を呈し、内部には灰層が厚く堆積する。左袖部には壁線より僅か外側の位置に凝灰岩質の加工材が埋設される。燃焼部幅60cm・奥行き55cmを測る。

出土遺物は散在しており、須恵器・灰釉陶器などがある。

L 171号住居跡 (Fig. 224・PL. 18)

L区第4台地の調査区南西に位置し、77L 3の範囲にある。L 159号住居跡と重複しているが、これより古い時期の所産である。検出部分は僅か南東の一部であり詳細は不明である。L 159号住居跡の床面精査の際、南壁に近く焼土痕が観察され、位置的にはL 171号住居跡の竈部分と考えられる。また南東隅には径40cm・深さ10cm程度の円形土坑が穿たれ、貯蔵穴になろうか。

出土遺物は極めて少なく、土師器甕片が数片認められた。

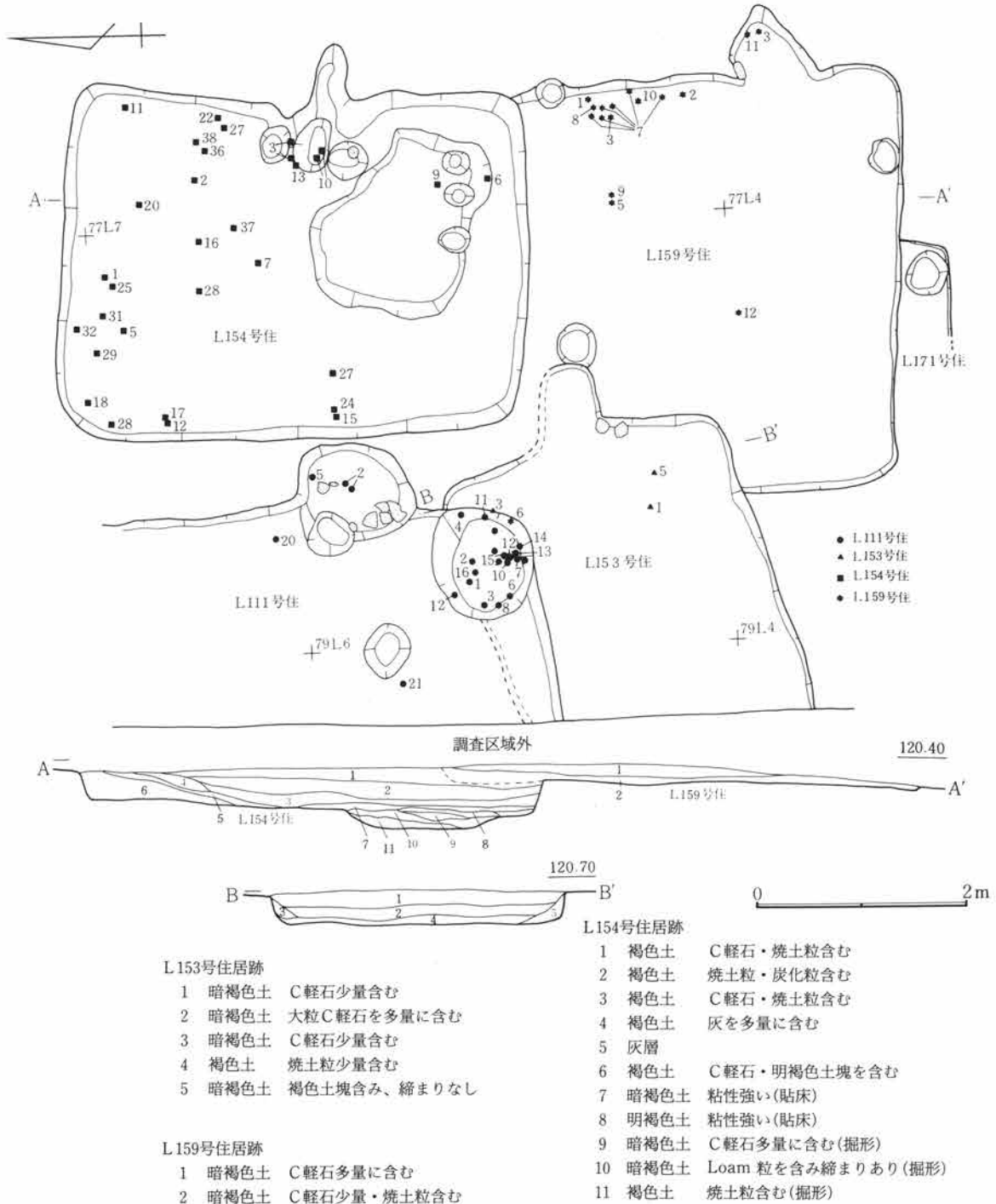
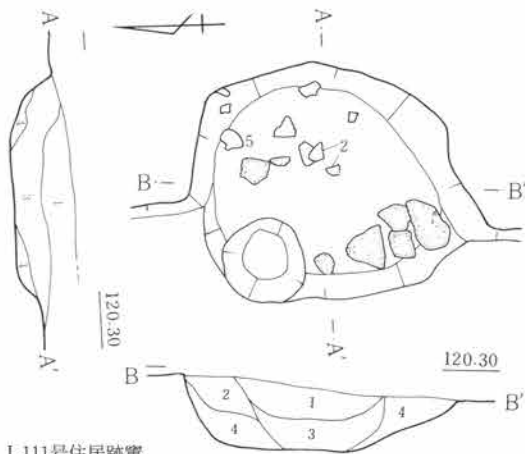
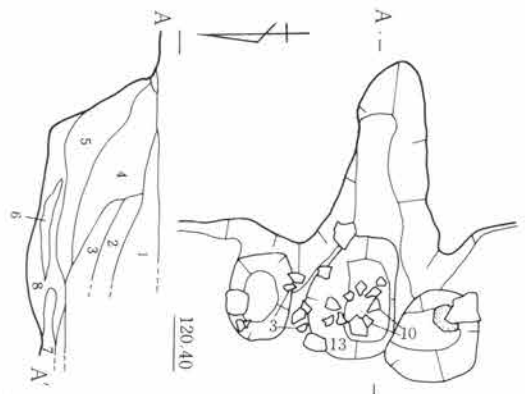


Fig. 224 L 111号・L 153号・L 159号・L 171号住居跡



L111号住居跡竈

- 1 黒褐色土 C軽石・焼土粒少量含む
- 2 黒褐色土 焼土塊含む
- 3 暗褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒含む
- 4 暗褐色土 焼土粒・炭化粒少量含む

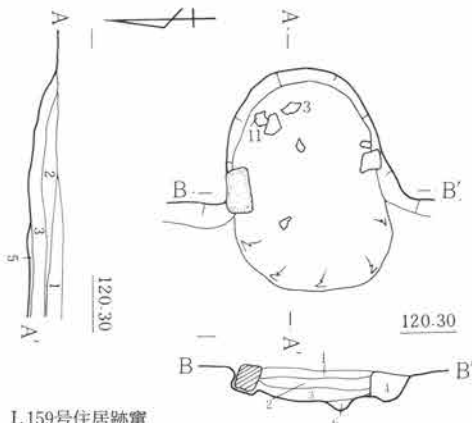


L154号住居跡竈

- 1 褐色土 C軽石・焼土粒含む
- 2 暗褐色土 焼土粒含む
- 3 暗褐色土 焼土粒多量に含む
- 4 焼土塊層
- 5 焼土粒層
- 6 暗褐色土 粘土質・焼土塊含む
- 7 褐色土 粘土質・焼土塊含む
- 8 焼土粒層

Fig. 226 L154号住居跡竈

Fig. 225 L111号住居跡竈



L159号住居跡竈

- 1 褐色土 C軽石・焼土粒含む
- 2 焼土粒・灰混合層
- 3 暗褐色土 灰含む
- 4 焼土塊
- 5 焼土層 (火床)
- 6 灰層

Fig. 227 L159号住居跡竈

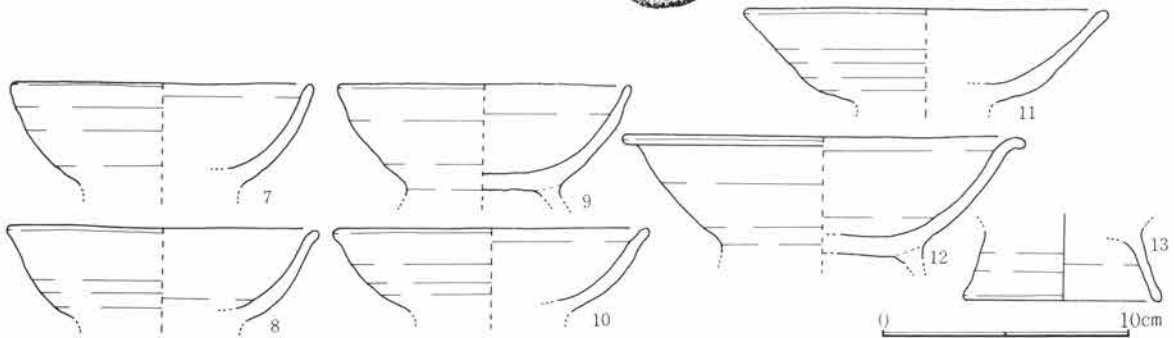
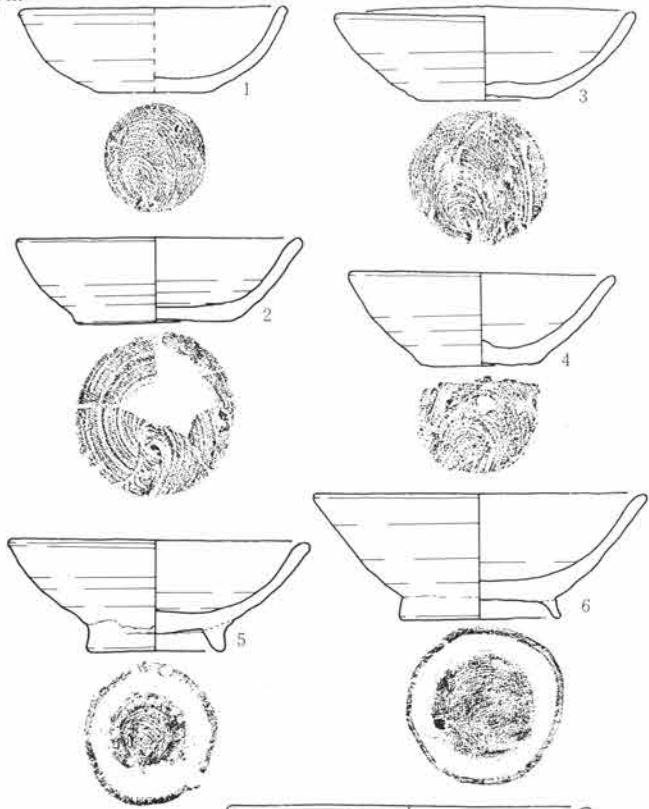


Fig. 228 L111号住居跡出土遺物(1)

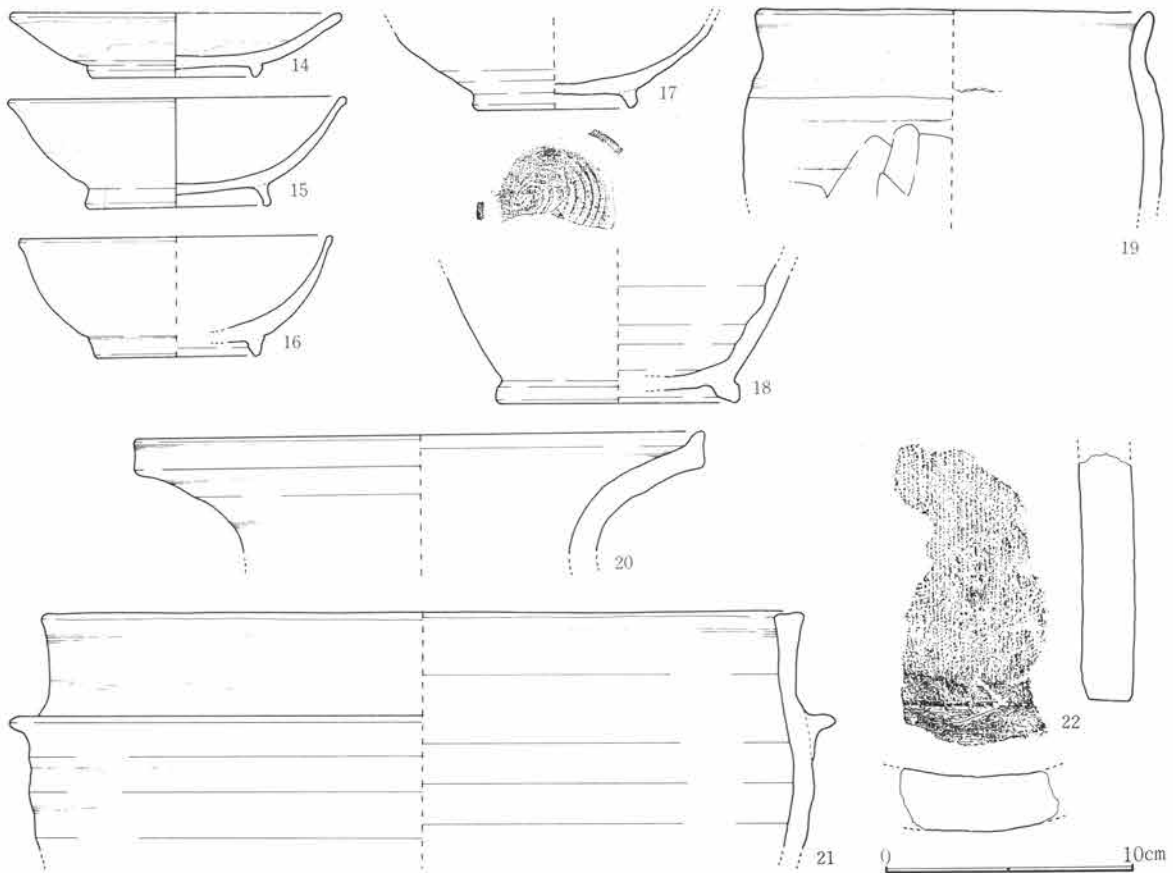


Fig. 229 L111号住居跡出土遺物(2)

L111号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
228-1 80-1	須恵器 杯	1/4	10.8×4.6 ×3.4	貯蔵穴	底径小さく腰部・体部丸味強く内湾して開く。口唇部下に僅か段をなし小さく外屈気味。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③密
228-2 80-2	須恵器 杯	3/4	11.4×6.3 ×3.4	竈・掘形	体部僅かに丸味をもって開く。口唇部丸い。轆轤目やや強い。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②鈍い黄橙 ③密
228-3 80-3	須恵器 杯	完形	12.0×5.2 ×3.7	貯蔵穴	底径小さく腰部・体部丸味をもち内湾して開く。口唇部丸い。外面やや轆轤目強い。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③密・砂混る
228-4 80-4	須恵器 杯	1/2	10.7×4.8 ×3.9	貯蔵穴	体部直線の中で中位で屈し外反気味に開く。口唇部丸い。見込部突出する。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②橙 ③小石混る
228-5 80-5	須恵器 椀	1/2	12.0×5.5 ×4.5	竈	体部丸味強く口縁部外反気味。口唇部丸く肥厚。付高台、肥厚し僅か開く。断面丸く作り雑。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②鈍い黄橙 ③砂混る
228-6 80-6	須恵器 椀	ほぼ完	13.3×6.4 ×5.0	貯蔵穴・埋土	腰部に丸味もち大きく開く。口唇部丸い。付高台、僅か外反し開く。やや楕円気味に接合。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②橙 ③密
228-7 80-7	須恵器 椀	台部欠損	12.0×— ×(4.1)	貯蔵穴	体部丸味をもち内湾して開く。口唇部丸い。轆轤成形。	①酸化・良好 ②浅黄 ③赤色細粒混る
228-8 80-8	須恵器 椀	台部欠損	12.4×— ×(3.7)	貯蔵穴	腰部丸く内湾して開く。口縁部僅かに外反。口唇部丸い。轆轤成形。	①酸化・良好 ②浅黄 ③赤色細粒混る
228-9 80-9	須恵器 椀	1/4台部欠損	11.7×— ×(4.4)	竈掘形	体部丸く内湾して開く。口唇部やや細る。付高台。轆轤成形。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
228-10 80-10	須恵器 椀	台部欠損	12.6×— ×(3.3)	貯蔵穴	体部内湾して大きく開く。口縁部内面僅かに段をなす。外面やや轆轤目強い。	①酸化・良好 ②浅黄 ③密
228-11 80-11	須恵器 椀	1/4台部欠損	14.4×— ×(3.6)	貯蔵穴	腰部丸味をもち体部は大きく開く。口唇部丸い。外面下半轆轤目強い。	①酸化・良好 ②鈍い黄橙 ③細砂混る
228-12 80-12	須恵器 椀	1/4台部欠損	16.0×— ×(5.0)	貯蔵穴	体部丸味をもち大きく開き口縁部強く外反。付高台、端部欠損。轆轤成形。	①酸化・良好 ②橙 ③密
228-13 80-13	須恵器 椀	高台部	—×7.9 ×(2.9)	貯蔵穴	付高台、高く直線的に外傾。轆轤成形。	①酸化・良好 ②浅黄 ③細砂混る

第2章 遺構と遺物

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
229-14 80-14	灰釉陶器 皿	完形	13.2×6.6 ×2.6	貯蔵穴埋 土	体部内湾気味に外傾して開く。口唇部丸い。付高台、低く断面略三角。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③密
229-15 80-15	灰釉陶器 椀	ほぼ完	13.5×7.4 ×4.4	貯蔵穴	体部丸く内湾して開き口縁部僅かに外反し口唇部丸まる。付高台、端部やや潰れる。漬け掛け施釉。重ね焼き痕。	①良好 ②灰白 ③密
229-16 80-16	灰釉陶器 椀	¼	12.5×6.6 ×4.8	貯蔵穴	体部丸く内湾して開き口縁部細り口唇部は丸まる。腰部やや肥厚。付高台、やや内傾気味。断面矩形。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③密
229-17 80-17	灰釉陶器 椀	¼	—×6.6 ×(3.2)	埋土	体部丸く内湾して開く。付高台、外傾して開き断面矩形。右回転糸切り。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③密
229-18 80-18	灰釉陶器 壺?	上半欠 損	—×9.7 ×(5.4)	埋土	腰部やや内湾気味に開く。内面轆轤目強い。付高台、外面に稜をなす。	①良好 ②灰白 ③密
229-19 80-19	土師器 甕	上半欠 損	15.7×— ×(7.8)	貯蔵穴	胴部直立気味に内湾し肩部小さくくびれ口縁緩く外傾。外面口縁横撫で。胴部接合痕・縦位篋削。内面撫で・接合痕。	①良好 ②橙 ③細砂混る
229-20 80-20	須恵器 甕	口縁部	22.8×— ×(4.8)	+4	口縁部強く外反し口唇部直立し上端尖り突出。	①良好 ②灰白 ③密
229-21 80-21	羽 釜	口縁部	30.4×—× (9.4) 銚径33	貯蔵穴	胴部やや張り気味で口縁部直立する。口唇部幅広・断面矩形。銚ほぼ水平につく。	①良好 ②灰白 ③密
229-22 80-22	瓦 平瓦	小片	厚2.2	埋土	凹面布目。凸面撫で。側面篋調整。	①良好 ②灰 ③や や粗・白色細粒多量

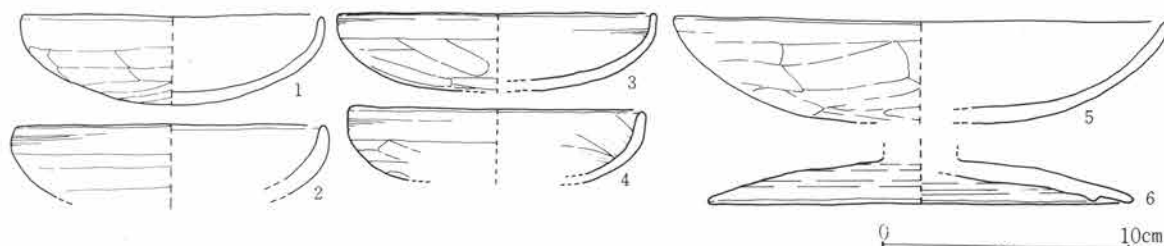


Fig. 230 L153号住居跡出土遺物

L153号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
230-1 81-1	土師器 杯	¼	12.0×— ×(3.6)	+9	底部浅く丸い。口縁部内湾気味に直立。口縁部横撫で。底部横位篋削り。	①良好 ②黄橙 ③やや粗・細砂混る
230-2 81-2	土師器 杯	小片	12.4×— ×(2.8)	埋土	器肉肥厚する。口縁部内湾気味に立つ。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③密
230-3 81-3	土師器 杯	¼	14.6×— ×(3.0)	+14	底部浅く口縁部は内湾して立つ。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
230-4 81-4	土師器 杯	¼	11.6×— ×(2.8)	埋土	底部浅く口縁部内湾気味に立つ。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや密
230-5 81-5	土師器 杯	¼	19.8×— ×4.1	+9	底部丸く変化をもち口縁に至る。口縁部僅かに内湾。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・粗砂混る
230-6 81-6	須恵器 蓋	¼	17.0×—× (1.8)	埋土	天井部偏平。口唇部丸まる。内面に略三角のかえり。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③密

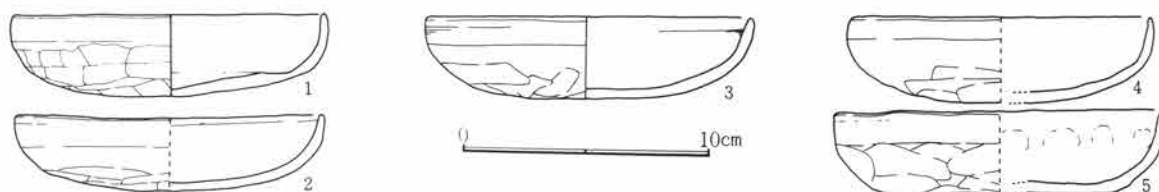


Fig. 231 L154号住居跡出土遺物(1)

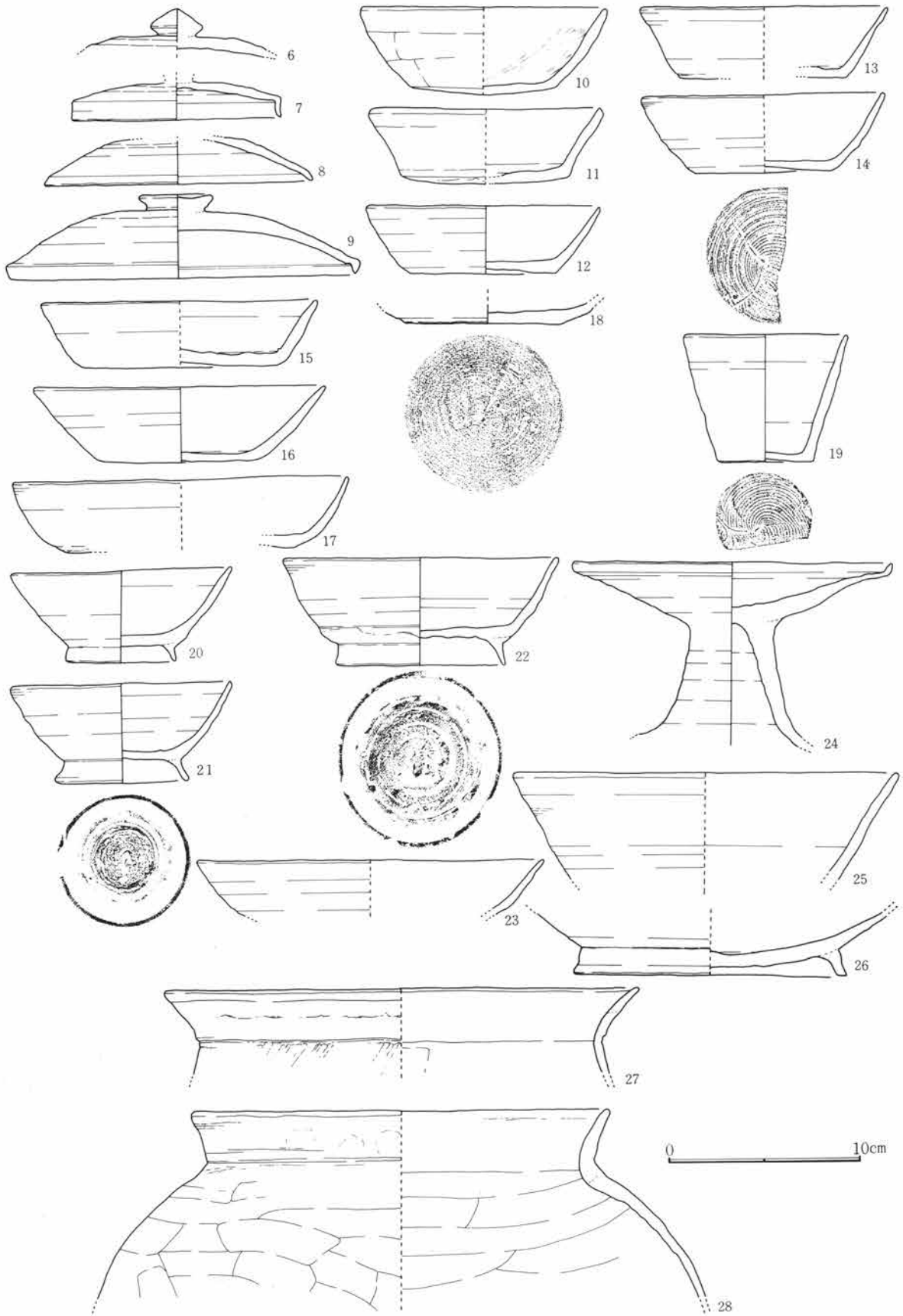


Fig. 232 L154号住居跡出土遺物(2)

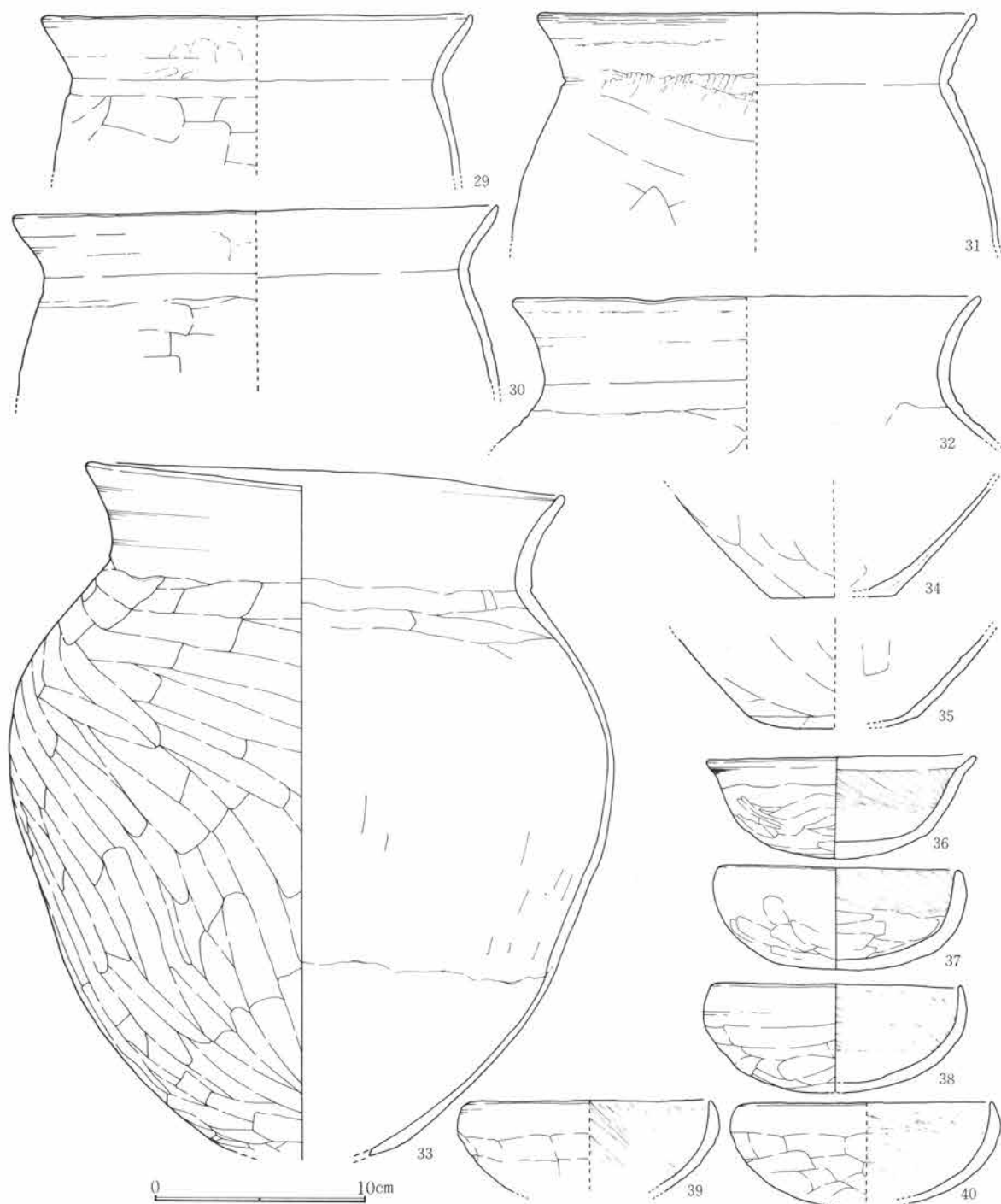


Fig. 233 L154号住居跡出土遺物(3)

L154号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
231-1 81-1	土師器 杯	完形	12.6× ×3.2	埋土 +19	底部偏平。口縁部やや内湾気味に立つ。口縁部横撫で。底部不定方向の篋削り。	①良好 ②褐 ③やや密
231-2 81-2	土師器 杯	片	12.4× ×2.8	埋土	底部やや偏平。口縁部内湾し口唇部丸く内屈。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・粗砂混る
231-3 81-3	土師器 杯	ほぼ完	12.8× ×3.2	埋土	底部やや偏平。口縁部内湾気味に立つ。口縁部横撫で。体・底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③細砂混る

第1節 竪穴住居跡と出土遺物

Fig. Na PL. Na	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
231-4 81-4	土師器 杯	¾	12.2× ×(3.4)	埋土	底部丸く口縁部内湾気味に直立する。口唇部細る。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
231-5 81-5	土師器 杯	¾	13.2× ×3.2	埋土	底部浅く偏平で、平底気味。口縁部直立する。口縁部横撫で。体部・底部篋削り。内面指頭痕。	①良好 ②橙 ③やや密
232-6 81-6	須恵器 蓋	端部欠損	-×-(2.6) 摘径2.8	埋土・ +4	宝珠形摘。天井部偏平で回転篋削り。	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③やや密
232-7 81-7	須恵器 蓋	摘欠損	11.0× ×(1.9)	埋土・ +15	天井部平坦。口縁部直に折れ端部外反気味。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③密
232-8 81-8	須恵器 蓋	¾	14.2× ×(2.4)	埋土掘形・ 竈床下埋土	天井部やや丸味をもち体部直線的に開く。口縁部小さく折れて外傾する。轆轤成形。天井部回転糸切り後回転篋削り	①良好 ②灰白 ③やや密
232-9 81-9	須恵器 蓋	ほぼ完形	18.5× ×4.4摘径3.8	+12	天井部から体部にかけて丸味をもつ。口縁部短く直に折れる。轆轤成形。天井部回転篋削り。ボタン状摘。	①良好 ②灰白 ③やや密
232-10 81-10	土師器 杯	¾	13.0×7.8 ×4.5	竈・埋土	底部僅かに脹らむ。体部直線的に外傾し口縁部やや内傾して立つ。口縁部横撫で。内面放射状磨き。体部横・底部不定方向篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
232-11 81-11	土師器 杯	¾	12.4× ×3.9口径高3.5	埋土・ +13	器肉厚い。平底気味の底部から直接外反気味の口縁部になる。口唇部尖りやや内湾。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
232-12 81-12	須恵器 杯	¾	12.3×7.5 ×3.5	埋土・ +15	体部直線的に外傾。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
232-13 81-13	須恵器 杯	¾	13.0×8.8 ×3.7	竈・埋土	腰部に弱い丸味。体部直線的に外傾する。轆轤成形。底部回転篋削り?	①良好 ②灰白 ③やや密・黒色粒混
232-14 81-14	須恵器 杯	¾	12.8×7.0 ×4.0	埋土	体部やや深く内湾して開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
232-15 81-15	須恵器 杯	¾	14.6×10.2 ×3.4	埋土・ +8	底径大。腰部やや丸味をもつ。体部直線的に外傾。轆轤成形。回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密・粗砂混る
232-16 82-16	須恵器 杯	完形	15.3×8.2 ×3.9	埋土・ +2	体部直線的に大きく外傾。轆轤成形。底部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
232-17 82-17	須恵器 杯	¾	17.6×12.0 ×3.7	+13	腰部丸味をもち体部内湾気味。轆轤成形。回転糸切り。歪み大。	①良好 ②灰白 ③やや密
232-18 82-18	須恵器 甕?	底部	-×8.3 ×(1.0)	埋土・ +24	轆轤成形。底部切り離し後右回転篋調整。	①良好 ②灰白 ③やや密・粗砂混る
232-19 82-19	須恵器 小鉢?	¾	8.6×5.0 ×6.6	埋土	底部深く体部直線的に外傾する。口唇部細る。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③密
232-20 82-20	須恵器 碗	¾	11.6×5.8 ×4.7	埋土・ +22	体部内湾気味に外傾。付高台、端部丸くハの字状に開く。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密
232-21 82-21	須恵器 碗	¾	11.6×7.0 ×5.1	埋土	腰部やや張り内湾して開く。付高台、やや高くハの字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
232-22 82-22	須恵器 碗	完形	14.6×8.9 ×5.5	埋土・掘 形	体部内湾して開く。付高台、直線的にハの字状に開く。轆轤成形。回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
232-23 82-23	須恵器 盤?	底部欠損	18.3× ×(2.9)	埋土	器肉薄い。体部浅く内湾気味に大きく開く。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密
232-24 82-24	須恵器 高杯	脚端部欠損	16.8× ×(8.5)	埋土・ +8	杯体部直線的に大きく開き口縁部直に折れて立つ。脚部ハの字状に開く。端部欠損。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密
232-25 82-25	須恵器 碗	底部欠損	20.2× ×(5.6)	床直・埋 土	体部直線的に外傾する。口唇部丸い。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密
232-26 82-26	須恵器 甕	底・台 部	-×14.2 ×(3.1)	床直	腰部丸味をもち大きく外傾。見込部に凹み、火禿痕あり。付高台、接地面平らでハの字状に開く。	①良好 ②灰白 ③やや密
232-27 82-27	土師器 甕	口縁部	25.0× ×(4.4)	pit・埋土	肩部張りなく長胴を呈すか。口縁部外反して大きく開く。口縁部横撫で。肩部斜位篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
232-28 82-28	土師器 甕	下半欠損	22.0× ×(9.7)	床下埋土	胴部上位丸く張る。口縁部短く直線的に外傾。口縁部指頭痕後横撫で。胴部横篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・小石混る
232-29 82-29	土師器 甕	口縁部	20.3× ×(7.2)	床下埋土	肩部張りなく長胴を呈すか。口縁部外反して開き口唇部内湾。口縁部指頭痕後横撫で。肩部横篋削り。	①良好 ②明赤褐 ③やや密
233-30 82-30	土師器 甕	口縁部	22.8× ×(8.3)	床下埋土	胴部上半張り気味。口縁部緩く外反し開く。口唇部内湾。口縁部指頭痕後横撫で。胴部横篋削り。内面無で。	①良好 ②橙 ③やや密
233-31 82-31	土師器 甕	下半欠損	20.6× ×(10.6)	埋土・ +18	胴部緩く張り口縁部直線的に外傾。口唇部やや内湾。口縁部横撫で。肩部斜位篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
233-32 82-32	土師器 甕	口縁部	22.0× ×(6.7)	+27	胴部丸く張るか。口縁部緩く外反して開く。口縁部横撫で。肩部横篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②橙 ③やや密

第2章 遺構と遺物

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
233-33 83-33	土師器 甕	完形	22.4×— ×34.0	埋土	胴部張り強い。口縁部外反して開き口唇部弱く内屈。最大径は上半にある。肩部内外面横位・胴部斜位篋削り。口縁部横撫で。底部人為的に穿穴か。	①良好 ②明黄褐 ③やや密・細砂混る
233-34 83-34	土師器 甕	底部	—×5.6 ×(5.8)	埋土	体部直線的に大きく開く。平底。体部・底部篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③密
233-35 83-35	土師器 甕	底部	—×8.0 ×(4.1)	埋土	腰部直線的に開く。底部やや張る。体部・底部篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
233-36 83-36	土師器 杯	完形	12.6×— ×4.9	+ 6	底部丸く深い。口縁部強く外屈。口唇部丸まる。口縁部横撫。体・底部斜位篋削り、部分的に篋磨。内面斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密・砂混る
233-37 83-37	土師器 杯	ほぼ完形	11.0×— ×4.8	+ 1	器肉厚い。底部丸くやや深い。口縁部内湾して立つ。口縁部横撫で。底部篋削り。内面斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密・小石混る
233-38 83-38	土師器 杯	1/2	11.6×— ×5.0	埋土	底部丸く深い。口縁部内湾気味に直立する。口唇部細る。内面燻し。口縁部横撫で。底部篋削り。内面斜行篋磨き。	①良好 ②明赤褐 ③密・粗砂混る
233-39 83-39	土師器 杯	1/4	11.4×— ×(4.2)	埋土	底部丸く体部から肥厚する口縁部にかけて強く内湾。口唇部尖る。口縁部横撫で。外面篋削り。内面斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密
233-40 83-40	土師器 杯	1/4	12.0×— ×(4.8)	埋土	底部丸く半円形。口唇部尖り内湾する。底部篋削り。内面不定方向篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・赤色粒混る

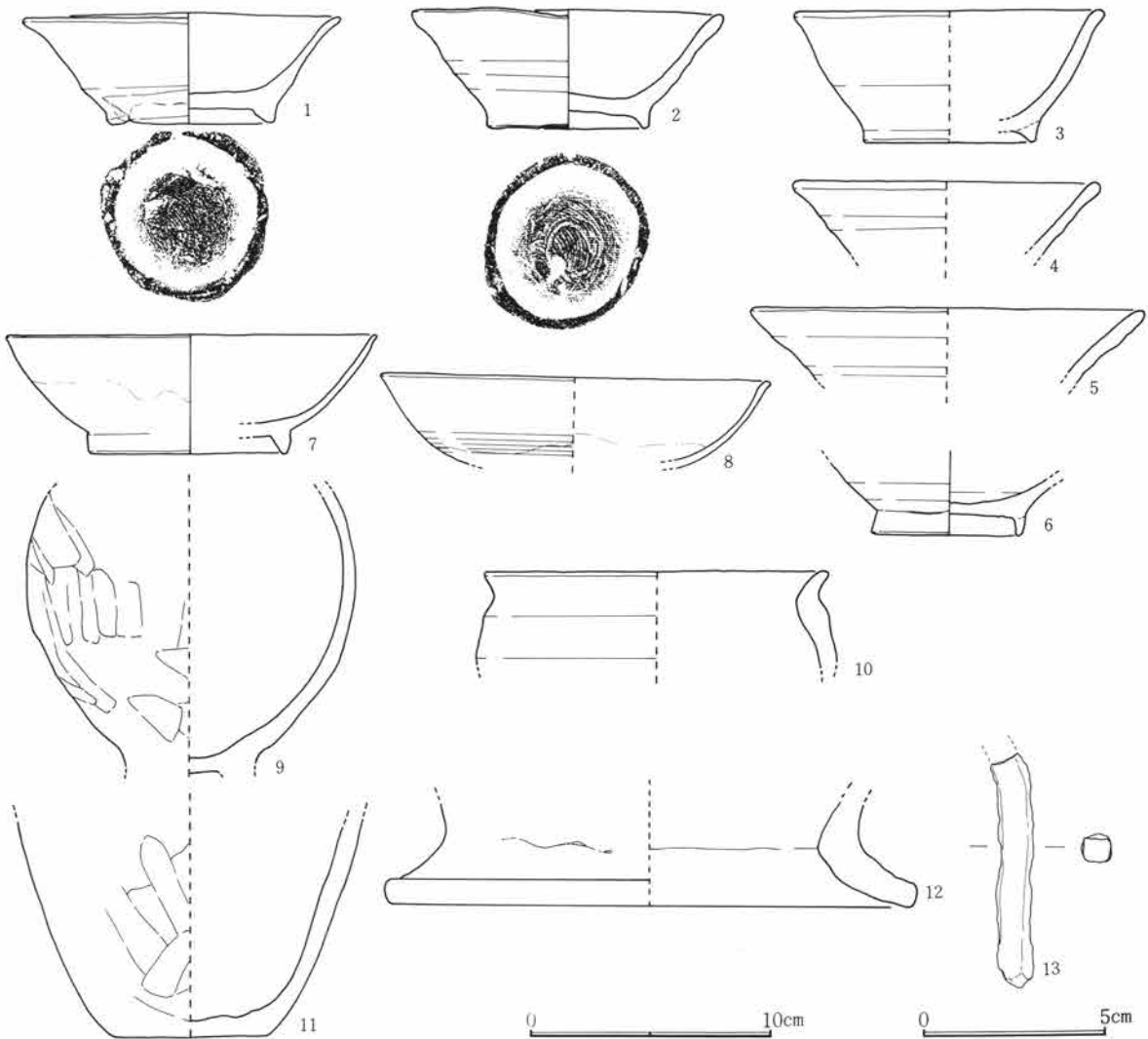
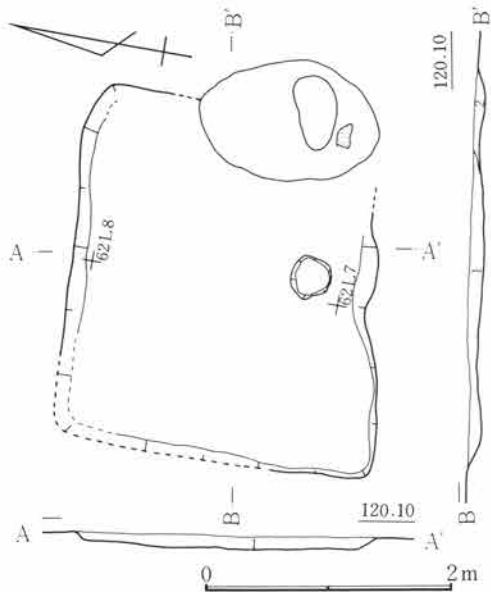


Fig. 234 L159号住居跡出土遺物

L 159号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
234-1 83-1	須恵器 椀	完形	13.0×6.9 ×4.6	床下埋土	腰部僅かに丸味をもち体部直線的に開く。口縁部細く緩く外反。口唇部丸く弱い沈線あり。付高台、低く作り雑。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや密
234-2 83-2	須恵器 椀	完形	12.8×6.7 ×4.9	+7	体部直線的に外傾。口縁部肥厚し僅かに内湾気味。口唇部丸い。付高台、低く断面矩形。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
234-3 83-3	須恵器 椀	1/2	12.7×7.1 ×5.3	床下埋土・ 竈内・竈	体部僅かに脹らみをもち口縁部は緩く外反。口唇部丸い。付高台、低く断面矩形。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや密・細砂混る
234-4 83-4	須恵器 椀	口縁部 1/2	12.6×— ×(3.0)	床下埋土	体部直線的に開く。口縁部僅かに外反し口唇部丸い。轆轤成形。	①酸化 ②鈍い黄橙 ③やや密・砂混る
234-5 83-5	須恵器 椀?	破片	16.1×— ×(3.0)	床下埋土	体部上半直線的に大きく外傾。口唇部丸い。歪み大。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや粗
234-6 83-6	須恵器 椀	上半欠 損	—×6.2 ×(2.9)	埋土	付高台、垂直気味に立つ。やや雑な作り。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②橙 ③やや密
234-7 83-7	灰釉陶器 椀	3/5	15.2×8.4 ×4.8	埋土	体部丸味強く内湾気味。口縁部僅かに外反。口唇部断面矩形。付高台、断面三角。漬け掛け施釉。見込部重ね焼痕。	①良好 ②灰白 ③密
234-8 83-8	灰釉陶器 椀	破片	16.0×— ×(3.6)	床下埋土	体部丸味強く内湾気味に開く。口縁部僅かに外反。口唇部小さく外屈。器肉薄い。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③密
234-9 84-9	土師器 台付甕	胴部1/2	—×5.3×(1.2) 最大径13.6	+9	胴部丸味強く球形を呈す。外面上半縦位篋削り。口縁部・台部欠損。	①良好 ②灰褐 ③やや密
234-10 84-10	須恵器 甕	破片	14.1×— ×(3.8)	+1	口縁部肥厚し小さく外反して開く。口縁部横撫で。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや密
234-11 84-11	土師器 甕	下半破 片	—×7.2 ×(8.8)	竈・竈内 埋土	胴部脹らみなくやや直線的に外傾。胴部下位縦位篋削り。	①良好 ②灰褐 ③やや密・砂混る
234-12 84-12	土師器 甕	底部 1/2	—×21.8 ×(4.3)	埋土・ +2	底部(裾部)大きく外反する。端部断面矩形。	①良好 ②黄灰 ③やや粗
234-13 84-13	鉄器 不明	片端部 欠損	長(6.5) 幅0.6	埋土	角棒状鉄器。	



L112号住居跡

- 1 黒褐色土 C軽石少量、焼土粒含む
- 2 焼土・灰混合層

Fig. 235 L112号住居跡

L 112号住居跡 (Fig. 235・PL. 18)

L区第4台地の南に位置し、61・62L 6～8の範囲にある。削平が深く東壁線及び西壁線は不明瞭である。

平面形は東西に長軸をもつ方形を呈すると考えられる。推定規模は、東西長約2.8m・南北長2.6mを測る。北壁線を基軸にする東西軸方位はおよそN-82°-Eを示す。壁高は浅く約8cmで壁線を確認できない部分もある。床面は緩く波うち、凝灰岩質層を床土にしているため安定している。

竈は東壁に付設されたと考えられるが、火床と思われる焼土痕と袖材の残欠が確認されただけで詳細は不明である。

出土遺物は検出されていない。

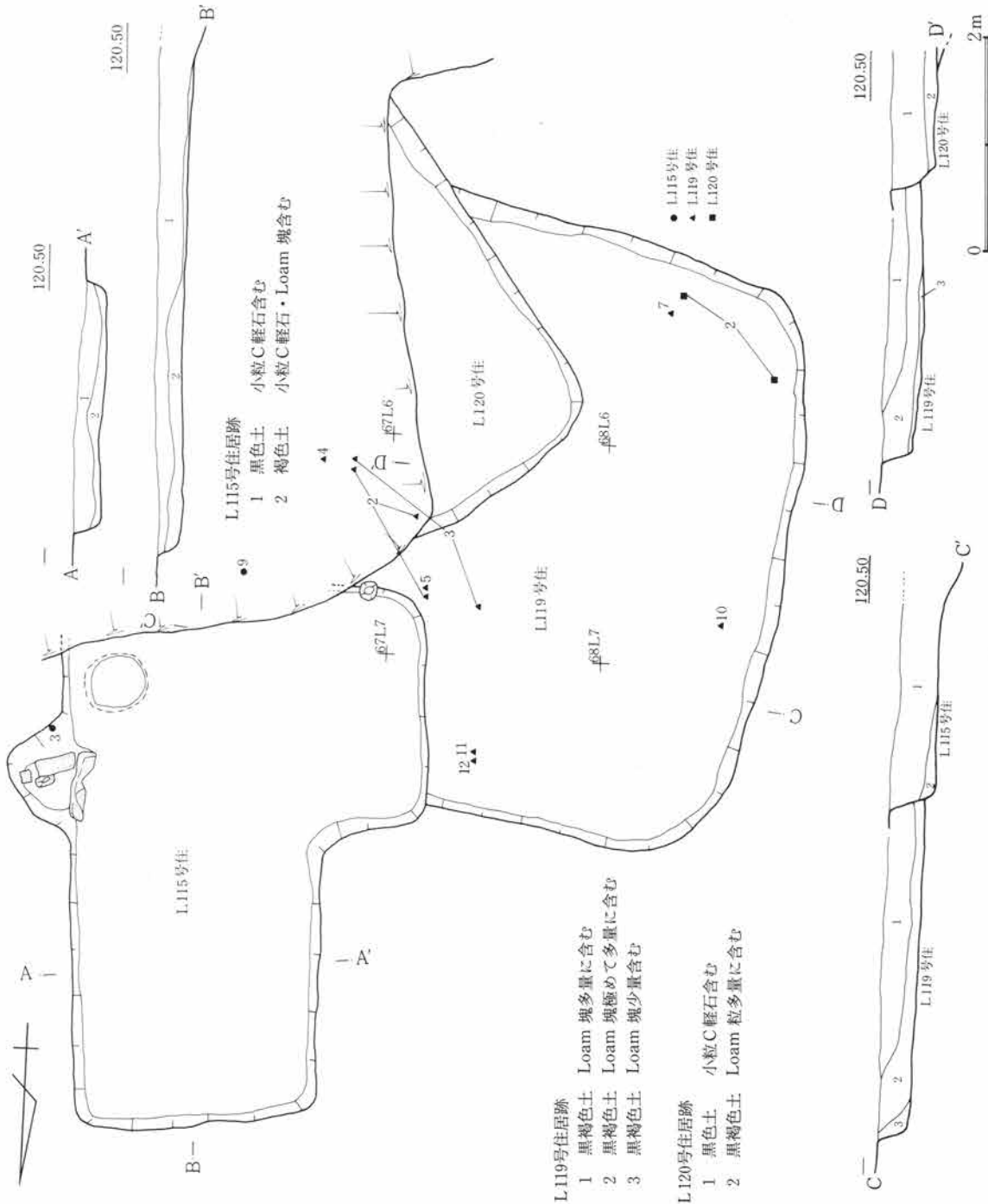
L 115号住居跡 (Fig. 236～238・PL. 18, 84)

L区第4台地の南に位置し、65～67L 6～9の範囲にある。住居跡の南側は攪乱によって消失している。L119号住居跡と重複しており、またL120号住居跡とも重複が考えられる。L119号住居跡より新しい時期の

所産である。

平面形は東西が狭小で南北方向に長軸をもつ方形を呈するが、南壁線が西へ延長され西壁をおよそ二分する範囲で突出した張出し部が形成される。張出し部は西壁線より幅2.2mで約1m突出する。南北長約5m、東西長は狭小部で2.3m、張出し部で3.35mを測り、東西軸方位はN-85°-Eを示す。壁高は約25cmを測り、床面は凝灰岩質層を床土にするため安定している。また張出し部の床面とは変化がない。南東部に径45~50cm・深さ30cmの貯蔵穴と考えられる円形土坑が穿たれ、埋土中には焼土塊を含む。

竈は東壁にあり南に偏って付設される。天井材と思われる風化の著しい凝灰岩質の加工材の他、支脚材が検出されている。燃焼部幅70cm・奥行き80cmを測る。



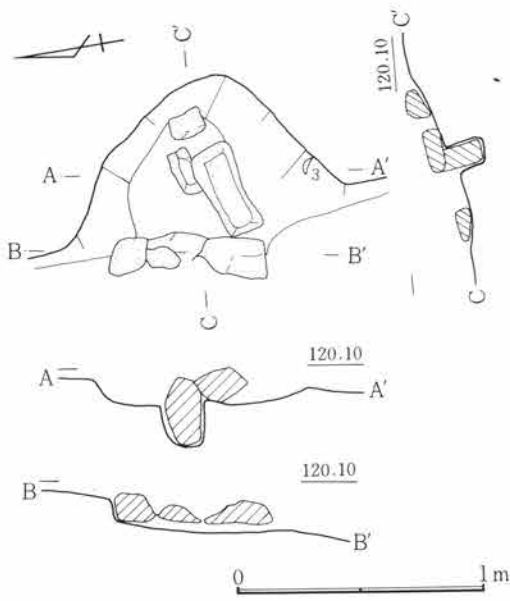


Fig. 237 L115号住居跡竈

出土遺物は土師器・須恵器の杯類の他、流紋岩製砥石がある。

L119号住居跡 (Fig. 236、239、240・PL. 18、19、84、85)

L区第4台地の南に位置し、67・68L 5～7の範囲にある。L115号・L120号住居跡と重複しており、両者より古い時期の所産である。この重複と攪乱によって東半は消失している。

平面形は隅丸の方形を呈すると考えられる。南北長5.45m、東西は西壁よりおよそ3.5mの範囲まで確認した。東西軸方位はN-102°-Eを示す。壁高は約25cmを測り、床面は凝灰岩質層で安定している。炉・柱穴などの諸施設は検出されなかった。

出土遺物は散在していたが、土師器碗・高杯・S字口縁の台付甕などがある。

L120号住居跡 (Fig. 236、241・PL. 19、85)

L区第4台地の南に位置し、67L 4～6の範囲にある。検出部分は北東隅の僅かな部分で大半は攪乱により消失している。L119号住居跡と重複しており、これより新しい時期の所産である。またL115号住居跡とも重複していると考えられる。

平面形は方形を呈すると思われるが詳細は不明である。東西約2m・南北3.5mの範囲まで確認した。東西軸方位はおよそN-55°-Eを示す。掘形は深く壁高約42cmを測る。床面は凝灰岩質層を床土にして安定している。

竈その他諸施設は検出されず、出土遺物も少量である。玉縁口縁の白磁片が検出されている。

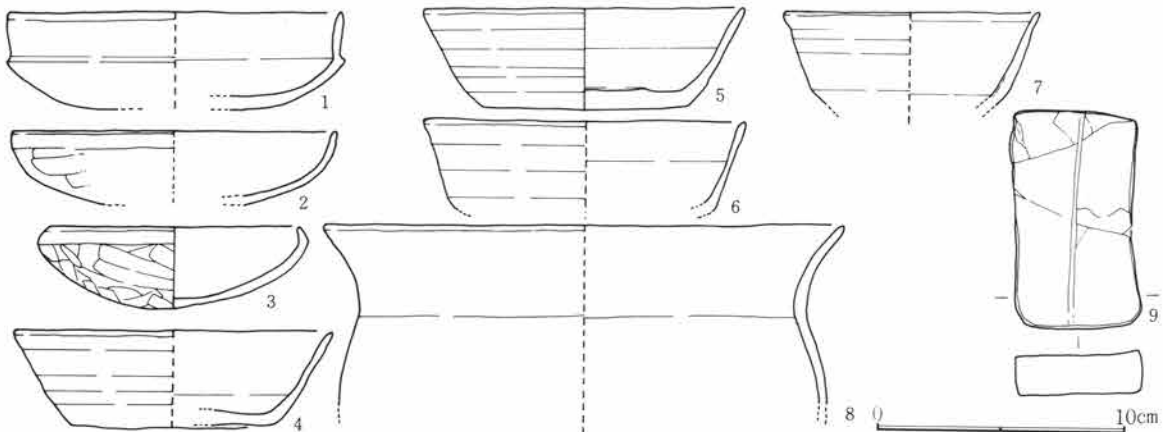


Fig. 238 L115号住居跡出土遺物

L115号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
238-1 84-1	須恵器 杯	小片	13.4× ×(3.3)	埋土	底部偏平。受け部で段をなし口縁部は直立気味に立ち上がり口唇部尖る。口縁部内外面横撫で。体部内外面撫で。	①良好 ②浅黄 ③やや密

第2章 遺構と遺物

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
238-2 84-2	土師器 杯	小片	13.0×— ×(2.9)	埋土	底部偏平で平底気味。口縁部直立し口唇部細る。口縁部内外面横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや密
238-3 84-3	土師器 杯	1/4	9.8×— ×3.2	竈	丸底。口縁部短く強く内屈。口縁部内外面横撫で。底部外面篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや密
238-4 84-4	須恵器 杯	小片	12.8×8.0 ×3.8	埋土	底径大きい。体部器肉薄く外反気味に外傾。口唇部尖る。底部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密・細砂混る
238-5 84-5	須恵器 杯	1/2	12.8×8.2 ×3.9	竈 Pit・埋土	体部薄く直線的に外傾。轆轤成形。底部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密・砂混る
238-6 84-6	須恵器 杯	1/2	12.8×— ×(3.5)	竈・埋土	底径大きく器肉薄い。体部やや直線的に立ち小さく外傾。口唇部丸まる。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密
238-7 84-7	須恵器 杯	口縁部	10.2×— ×(3.6)	埋土	腰部やや丸味をもち体部直線的に外傾。口縁部細まる。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密
238-8 84-8	土師器 甕	口縁部	20.8×— ×(7.1)	竈	胴部緩く張り肩部張り少ない。口縁部緩く外反。口縁部横撫で。胴部篋削り。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密
238-9 84-9	石製品 砥石	完形	長8.6×幅 5.0×厚1.5	埋土	2側面使用。仕上げ砥。1面に深溝状痕と細かい刃痕。重	流紋岩

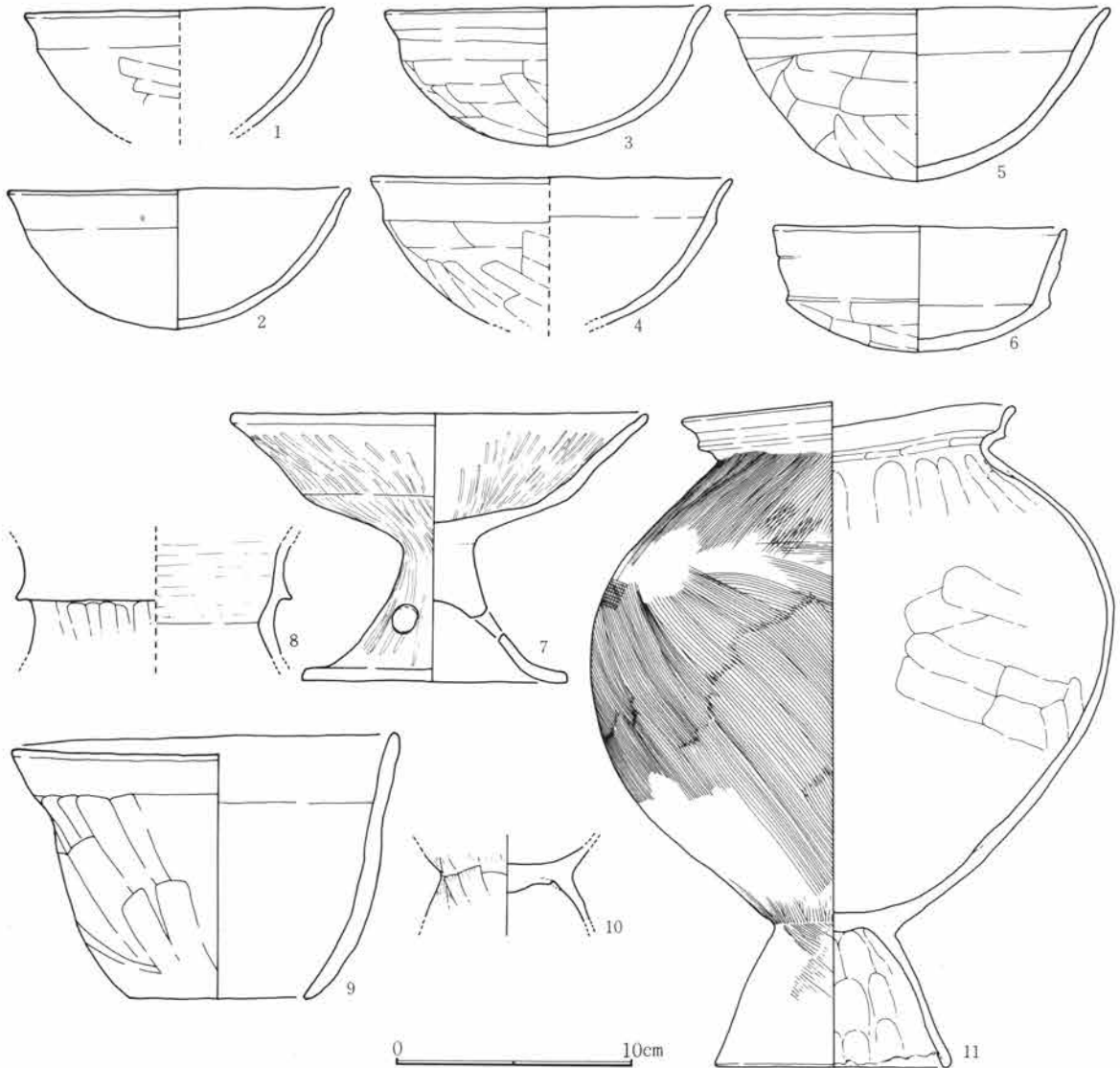


Fig. 239 L119号住居跡出土遺物(1)

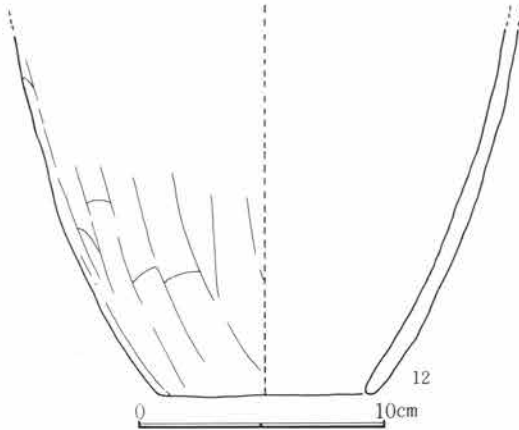


Fig. 240 L 119号住居跡出土遺物(2)

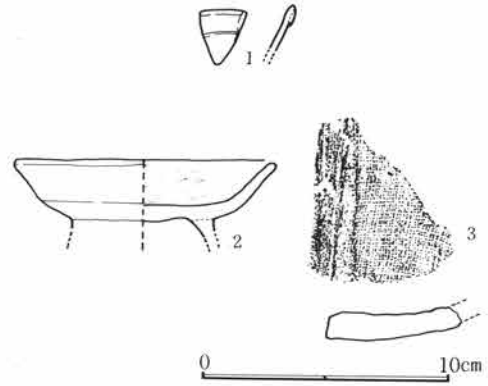


Fig. 241 L 120号住居跡出土遺物

L 119号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
239-1 84-1	土師器 杯	底部欠損	12.8×— ×5.0	埋土	体部丸く深い。口縁部くびれて緩く外反。口唇部丸まる。口縁部横撫で。体部篋削り後撫で。内面撫で。	①酸化気味 ②黄橙 ③やや粗・細砂混る
239-2 84-2	土師器 杯	完形	14.2×— ×5.75	埋土・ +15~18	器肉薄い。底部丸く深く半円形をなし口縁部小さくくびれて緩く外傾。口縁部横撫で。体部内外面篋削り単位不明。	①やや軟 ②橙 ③やや粗・小石混る
239-3 84-3	土師器 杯	¾	13.6×— ×5.7	+15~18	丸く深い体部から口縁部はくびれて緩く外傾。口唇部は丸い。体部篋削り後撫で。	①良好 ②淡黄 ③やや密・細砂混る
239-4 84-4	土師器 杯	¼	15.0×— ×6.0	+10	底部丸く深い。口縁部はくびれて細まり緩く外反。口唇部丸まる。口縁部横撫で。口縁部下横位・底部斜位篋削り。	①良好 ②淡黄 ③やや密・細砂混る
239-5 84-5	土師器 鉢	ほぼ完形	16.0×— ×7.1	+1	底部深く尖り気味。口縁部小さくくびれて外傾。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②浅黄橙 ③やや粗・細砂混る
239-6 84-6	土師器 杯	¾	12.2×— ×5.2	埋土	底部丸く浅い。受け部に僅かな段をなす。口縁部は内湾気味に外傾し中位に段をもつ。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗・細砂混る
239-7 85-7	土師器 高杯	¾	17.2×11.0 ×11.1	埋土・ +1~8	杯底部大きく開き体部外反気味に外傾し上半は僅かに内湾して開く。脚部ハの字状に大きく開き裾部は水平。径1.2cmの孔を3箇所に通す。杯部内外面・脚部外面磨き。	①良好 ②黄橙 ③やや密・細砂混る
239-8 84-8	土師器 壺?	頸部?	—×—× (4.4)	埋土	壺頸部と思われる。外反して立ち下向きの鋭い凸帯が巡りさらに上半は外反する。内面横磨き。外面下位篋削り。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密
239-9 85-9	土師器 甔	¾	16.0×7.6 ×10.8	埋土	単孔。胴部内湾気味に立つ。口縁部小さくくびれ直線的。口唇部丸まる。口縁部横撫で。胴部縦篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗・細砂混る
239-10 84-10	土師器 台付甔	台部	—×—(2.7) 台基径5.5	+3	台部斜位刷毛目。内面撫で。	①酸化気味 ②橙 ③やや粗
239-11 85-11	土師器 台付甔	¾	13.9×9.8 ×27.4 最大径21.9	+2	S字状口縁。胴部上半に最大径。台部端部の内面に折り返し、外面上位に斜位掻き目。肩部・胴部外面斜位刷毛目・内面篋撫で。	①良好 ②明黄褐 ③粗・細砂混る
240-12 85-12	土師器 甔	下半¾	—×8.4 ×14.5	埋土	単孔。胴部やや内湾気味。胴部外面は縦位篋削り。内面撫で。	①良好 ②浅黄橙 ③やや粗・小石混る

L 120号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
241-1 85-1	白磁 碗	口縁部 小片		埋土	器肉薄い。口縁部折り返し玉縁状。	①良好 ②灰白 ③密・黒色微細粒混
241-2 85-2	内黒土器 碗	台部欠損	10.4×— ×(3.0)	埋土	腰部強く張り体部上半は外反気味に開く。口唇部丸まる。内面黒色処理・横方向磨き。轆轤成形。	①酸化 ②明黄褐 ③やや密
241-3 85-3	瓦 平瓦	小片	厚1.05	埋土	凹面布目。凸面撫で。側面篋調整。	①良好 ②灰 ③やや密

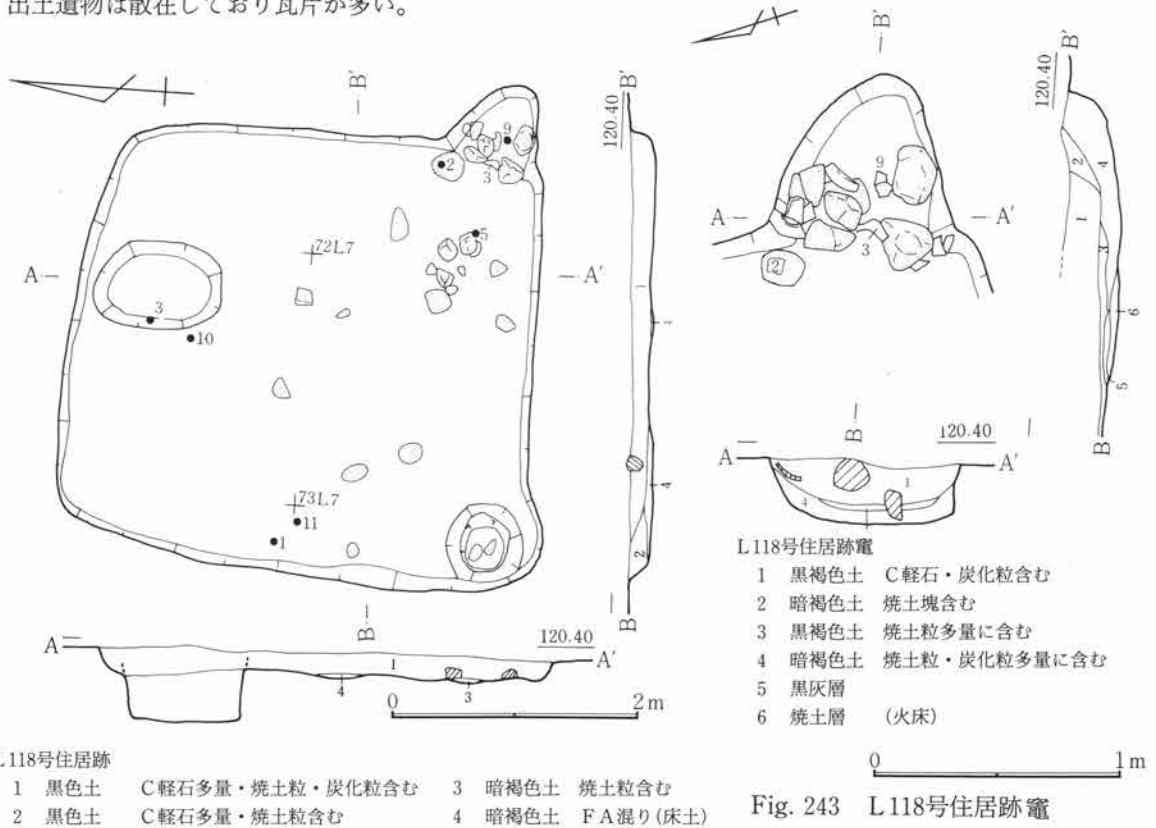
L118号住居跡 (Fig. 242~245・PL. 19、85、86)

L区第4台地の南やや西側に位置し、71~73L6・7の範囲にある。L126号・L127号住居跡と重複しており、両者より新しい時期の所産である。

平面形は南北方向に長軸をもつ略方形を呈するが各壁長が異なり、西側に若干広がる隅丸の台形になる。また南西隅は南壁線が丸く僅かに脹らむ。南北長最大で3.9m・東西長は3.55mを測る。東壁に直交する東西軸方位はおよそN-90°-Eを示す。壁高は約15cmを測り、床面は細砂質のFA混土層を床土にするため僅かな起伏がみられる。貯蔵穴は南西隅に設けられ、径60cm、深さ50cmの円形である。南壁線がこれに伴い僅かに突出する。埋土中には若干の焼土粒・炭化粒を含み、中位より角礫が出土している。また北側には0.7×1m、床面よりの深さ40cmの楕円形土坑が検出されているが、当跡に属さず新しい時期の遺構である。

竈は東壁と南壁の変換部に付設され、軸線は東壁直交軸からおおよそ17°南に振れている。燃焼部は楕円形に掘り込まれ、内部には構築材の石が多く散乱している。また住居内にも多くの石が検出されている。燃焼部幅・奥行きとも約70cmを測る。

出土遺物は散在しており瓦片が多い。



L118号住居跡

- | | |
|-----------------------|-----------------|
| 1 黒色土 C軽石多量・焼土粒・炭化粒含む | 3 暗褐色土 焼土粒含む |
| 2 黒色土 C軽石多量・焼土粒含む | 4 暗褐色土 FA混り(床土) |

Fig. 242 L118号住居跡

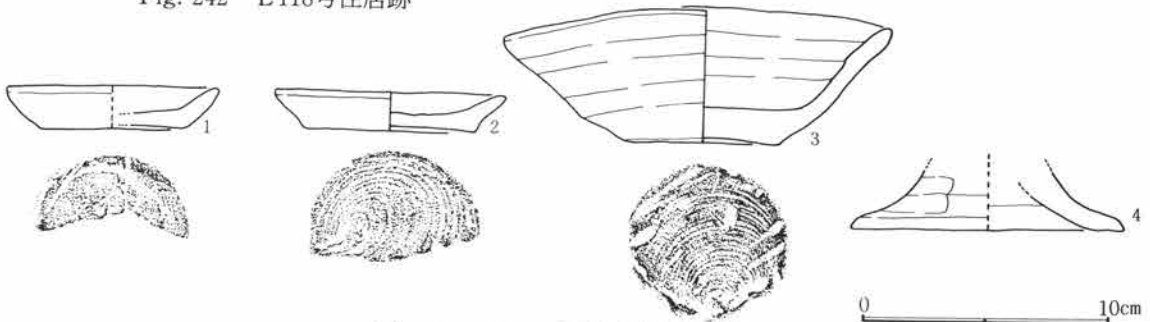


Fig. 244 L118号住居跡出土遺物(1)

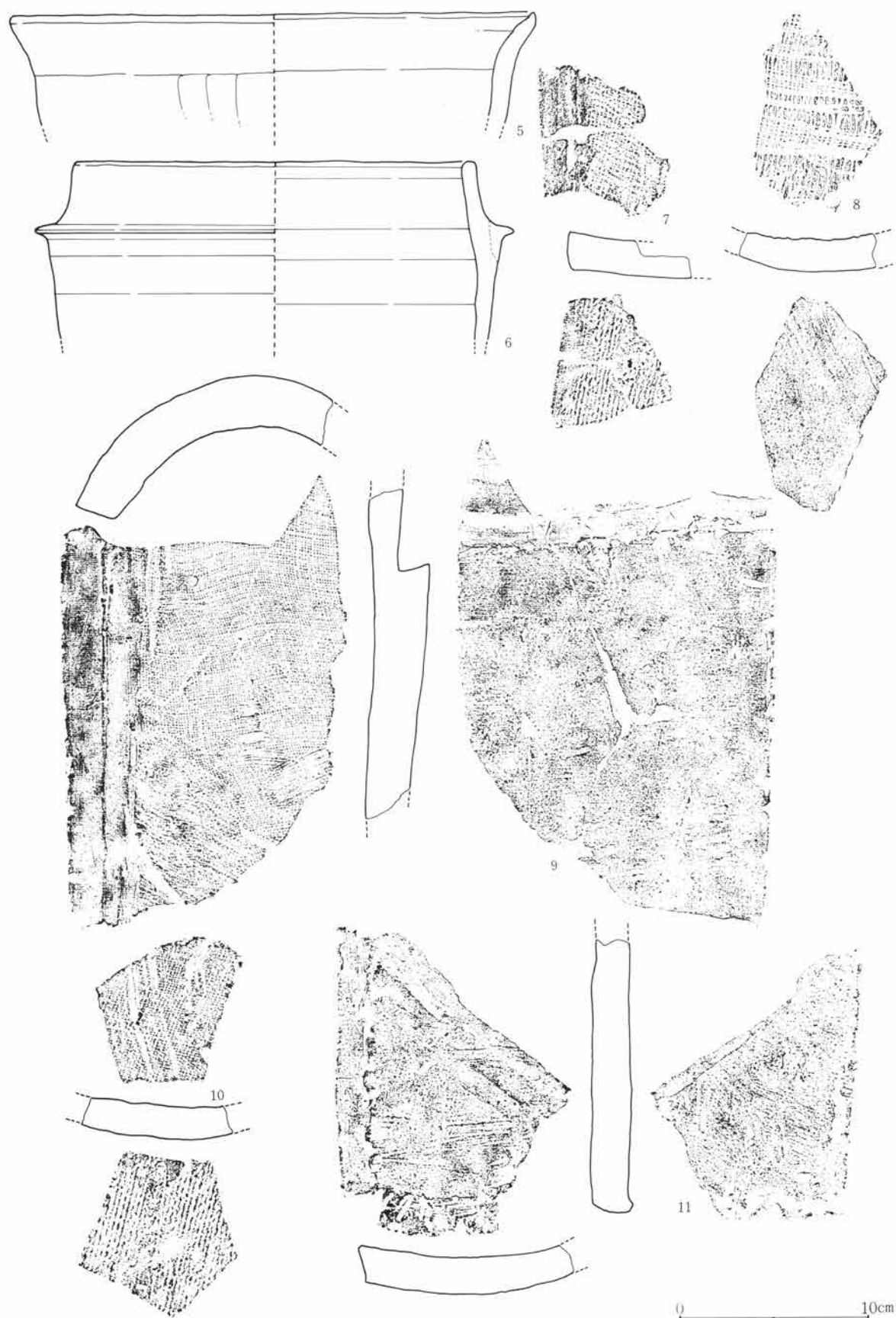


Fig. 245 L118号住居跡出土遺物(2)

第2章 遺構と遺物

L118号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
244-1 85-1	須恵器 杯	1/2	8.4×5.6 ×1.7	床直・埋 土	全体に肥厚。体部浅く内湾気味に開く。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 ②浅黄 橙 ③やや粗
244-2 85-2	須恵器 杯	完形	9.2×6.8 ×1.5	床下埋土	体部浅く直線的に開く。口唇部丸まる。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 ②鈍い 黄橙 ③やや粗
244-3 85-3	須恵器 杯	完形	15.5×6.2 ×5.3	竈掘形・ 床下埋土	歪み大きく作り雑。体部やや内湾気味に開き口縁部小さく外傾し肥厚して端部丸まる。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②鈍い黄橙 ③やや粗
244-4 85-4	土師器 台付甕	台部1/2	—×11.0 ×2.3	床下埋土	ハの字状に開く。端部細る。台部上位撫で。下位横撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗
245-5 85-5	土 釜	口縁部	27.4×— ×5.7	+5	口縁部緩く外反して開く。口唇部細り小さく直立。口縁部横撫で。体部外面篋削り。内面撫で。	①酸化気味 ②灰黄 ③やや粗
245-6 85-6	羽 釜	下半欠 損	21.0×— ×9.2	埋土	胴部張り少なく鏝断面略三角。口縁部内傾し口唇部上端面内斜。口縁部・胴部上半回転撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③やや密
245-7 85-7	瓦 平瓦	小片	厚1.7	埋土	凹面布目。凸面縄目。側面篋調整。	①酸化気味 ②灰白 ③密
245-8 85-8	瓦 平瓦	小片	厚1.7	埋土	凹面布目。極めて粗。横糸欠如部分多い。凸面篋撫で。	①酸化気味・良好 ②灰白 ③密
245-9 86-9	瓦 丸瓦		厚2.5	竈掘形	凹面布目。凸面撫で。側面篋調整。有段式。	①良好 ②灰 ③密
245-10 85-10	瓦 平瓦	小片	厚1.7	埋土	凹面布目。凸面縄目。	①酸化気味 ②灰白 ③密
245-11 86-11	瓦 平瓦	小片	厚1.9	+5	凹面布目・撫で。凸面篋撫で。側面篋調整。	①良好 ②灰 ③密

L121号住居跡 (Fig. 246~252・PL. 19、86~90)

L区第4台地の調査区南西に位置し、74~77L 8~11の範囲にある。L110号・L178号・L189号・L200号住居跡と重複しており、L110号住居跡より旧く、他者より新しい時期の所産である。

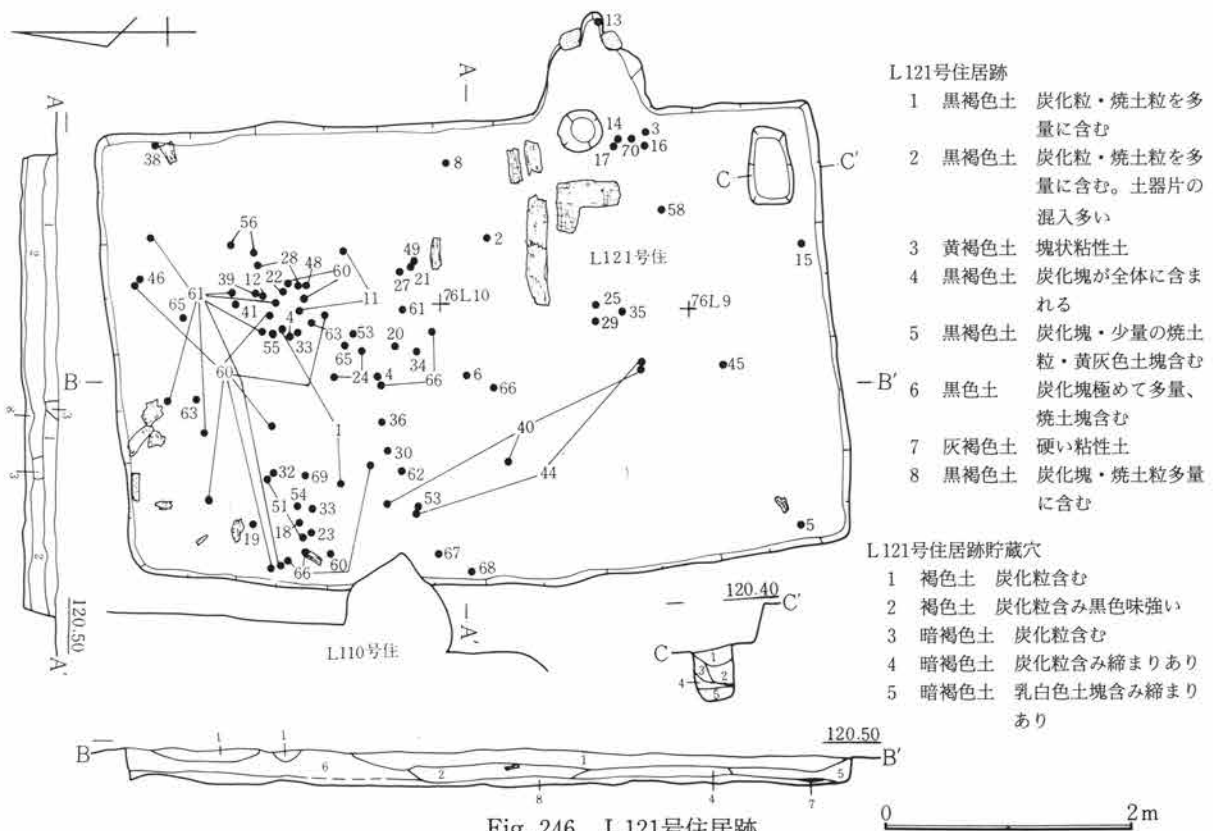


Fig. 246 L121号住居跡

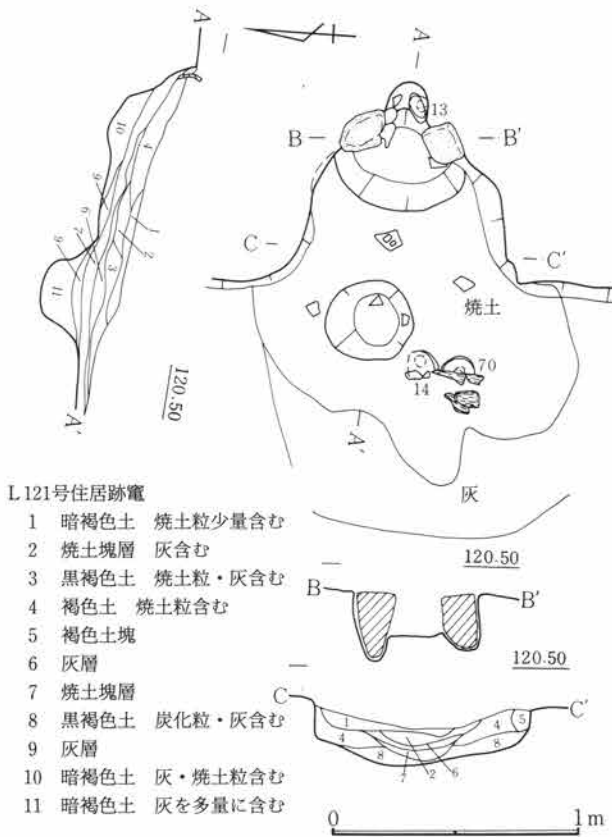


Fig. 247 L121号住居跡竈

平面形は南北に長軸をもち、整った方形を呈する。南北長5.7m・東西長3.7mを測り、東西軸方位はN-88°-Eを示す。壁高は約25cmを測り、床面は小さく波うつが踏み締まりは良好である。平面確認では壁線が焼土化しており、火災住居であることが知られた。埋土中には焼土粒・炭化粒及び炭化材が検出され、床面直上でも同様であった。炭化材は竈前面及び北西隅の床面で多く残り、上屋構造があった段階での被災と考えられる。床面の被熱は顕著でなく、四周壁は立ち上がりの上端が赤化していた。貯蔵穴は南東隅に設けられ、35×60cm・深さ40cmの方形を呈する。埋土中～下層に焼土粒・炭化粒が混じる。

竈は東壁にありやや南に偏って付設される。大きく方形気味に掘り込まれた燃焼部の先端には、小さく25cmほど突出する煙出しが形成される。燃焼部最奥で煙出しと区切るように石材が埋設される。竈内や周辺からその他の構築材は検出されない。燃焼部幅95cm・奥行き60cmを測る。

出土遺物は埋土中や床面より多量に検出され、埋土中のものは北半に多い。須恵器杯・椀類をはじめ灰釉陶器が極めて多く、図示したものをはじめ出土量は数十点にのぼる。その他緑釉陶器、器高30cmあるいは70cmの須恵器大甕、甕片を成・調整した転用硯、鉄製鋏先など量・種類とも豊富であり、遺物には二次的に被熱したものもある。また当跡の西に近接するL87号住居跡出土の緑釉陶器片が同一個体として接合した。

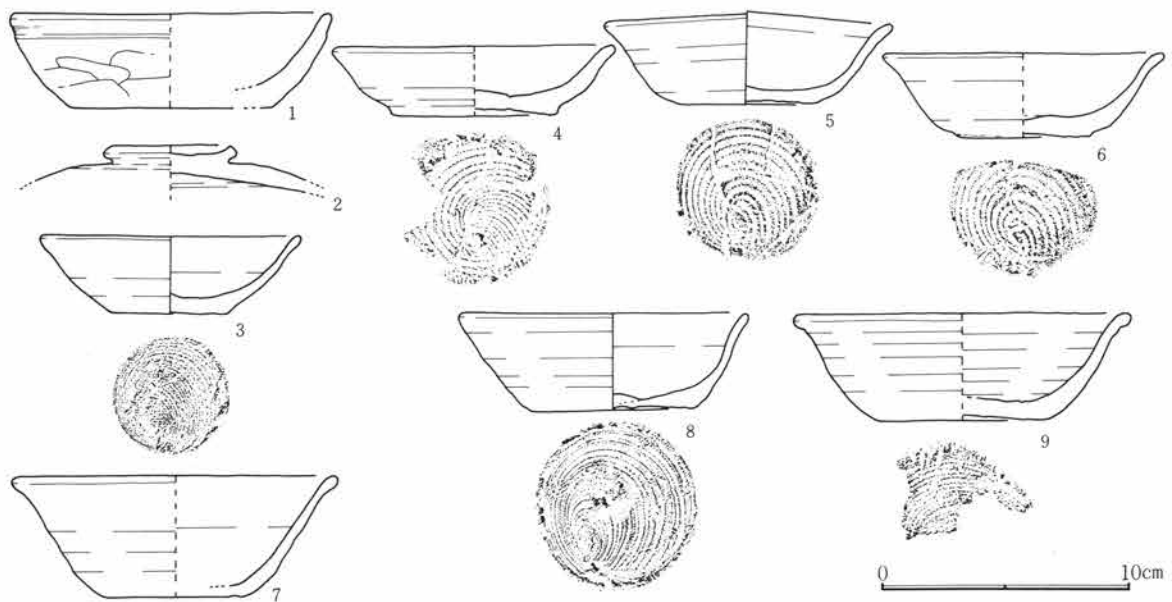


Fig. 248 L121号住居跡出土遺物(1)

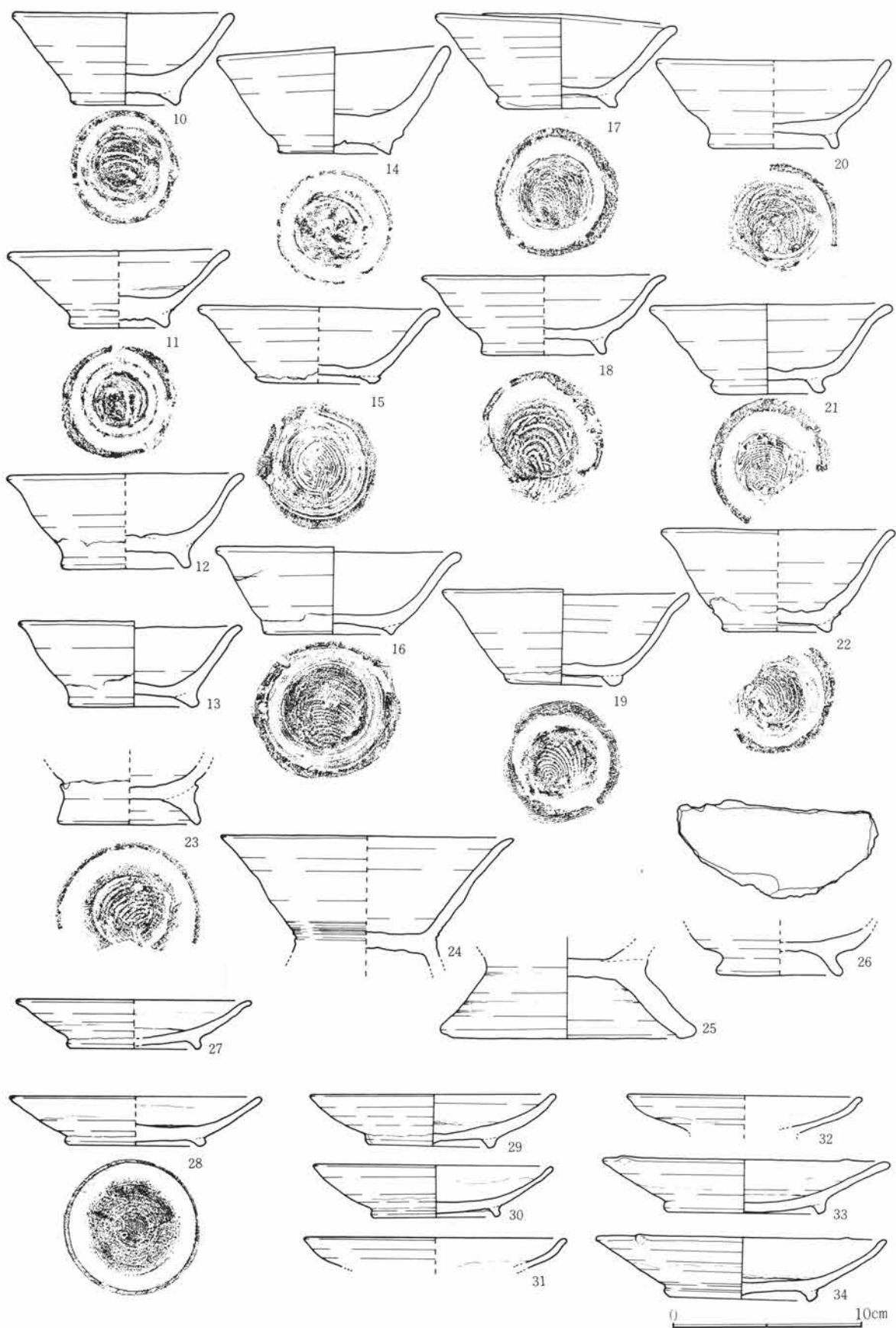


Fig. 249 L121号住居跡出土遺物(2)

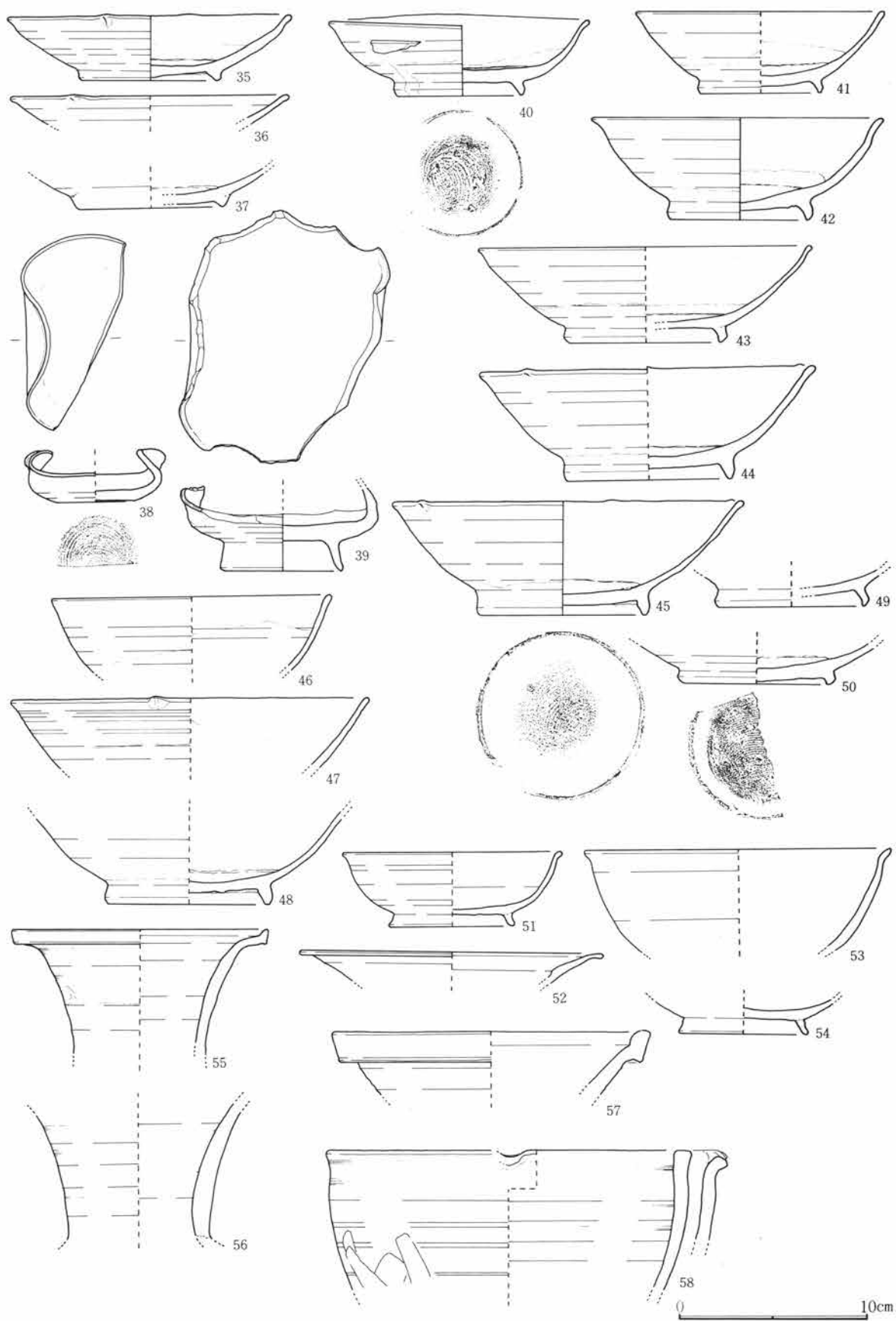


Fig. 250 L121号住居跡出土遺物(3)

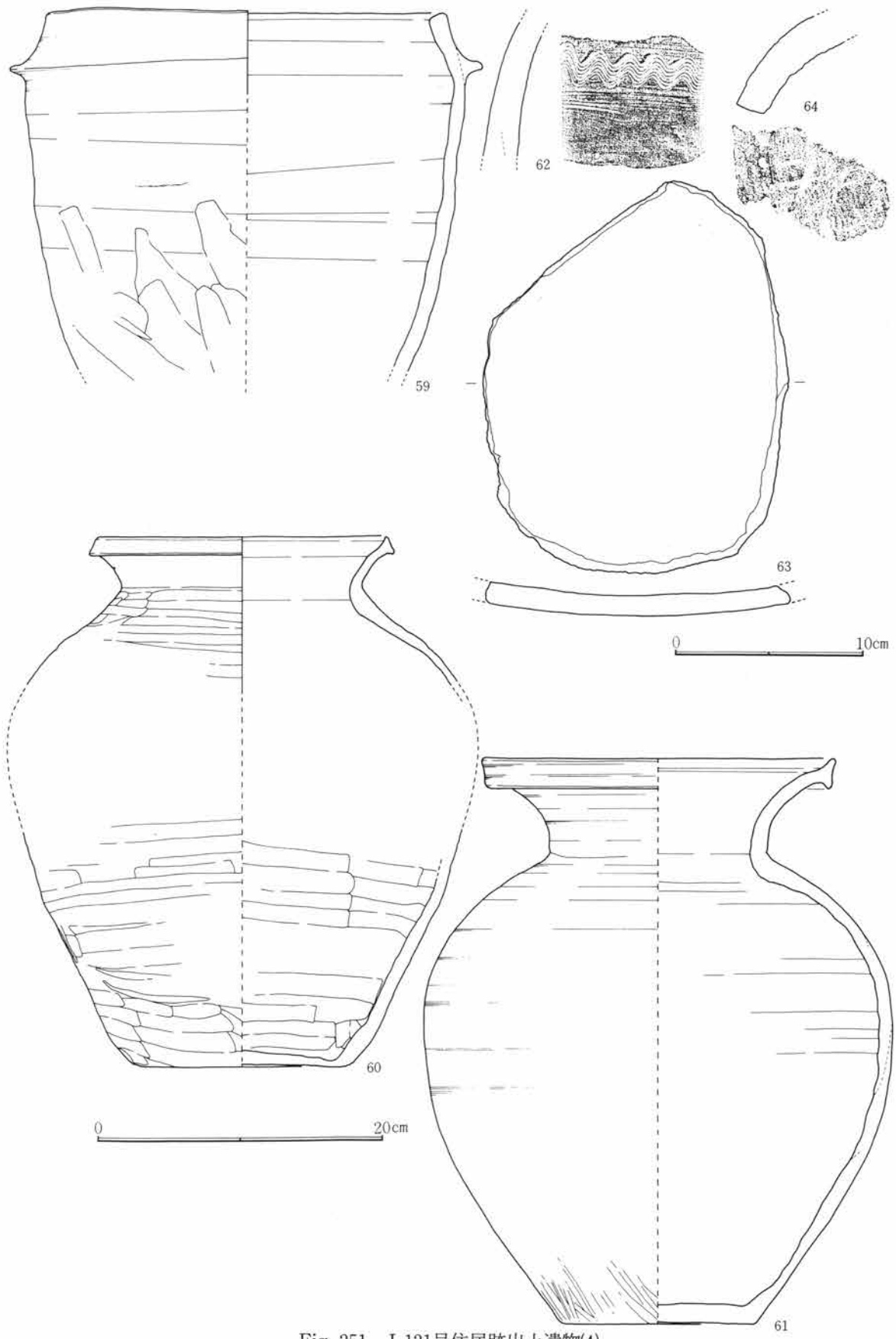


Fig. 251 L121号住居跡出土遺物(4)

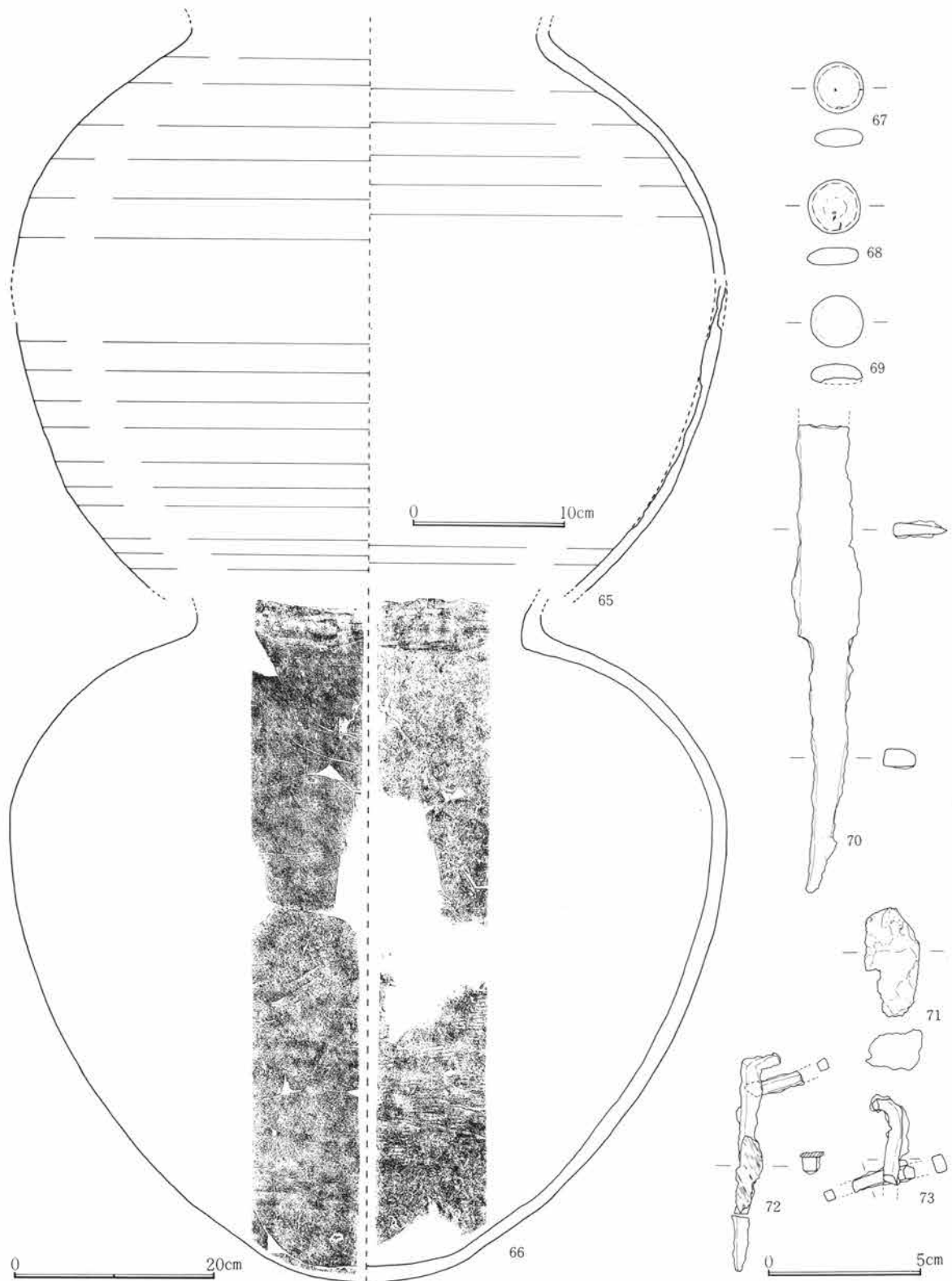


Fig. 252 L121号住居跡出土遺物(5)

L121号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
248-1 86-1	土師器 杯	%	12.8×8.0 ×3.8	+3~10	器肉厚く体部内湾して開く。口縁部下に小さな段。口縁部横撫で。体部篋削り。内面撫で。	①良好 ②黒褐 ③砂混る

第2章 遺構と遺物

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
248-2 86-2	須恵器 蓋	端部欠 損	-×-(1. 9) 口径5.4	+4	上半回転斲削り。環状摘、端部矩形。体部内湾して開く。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③密
248-3 86-3	須恵器 杯	1/4	10.4×4.7 ×3.1	+8	底部やや器肉厚目。腰部僅かにくびれて体部内湾気味に開く。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②鈍 い橙 ③密
248-4 86-4	須恵器 杯	3/4	11.3×6.7 ×2.8	埋土・ +3	器肉厚め。体部内湾し口縁部僅かに外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰褐 ③やや密
248-5 86-5	須恵器 杯	完形	11.5×5.5 ×3.7	+1	腰部丸味強く体部は内湾し口縁部僅かに外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②鈍 い橙 ③密
248-6 86-6	須恵器 杯	1/4	11.2×5.3 ×3.3	+5	底部やや器肉厚め。腰部丸く体部内湾。口縁部外反して開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰褐 ③やや密
248-7 86-7	須恵器 杯	1/4	13.0×5.4 ×4.8	埋土	腰部やや丸味をもち体部直線的に開く。口縁部外反。口唇部丸まる。轆轤目やや強い。右回転。	①良好 ②黒褐 ③砂混る
248-8 86-8	須恵器 杯	3/4	11.5×6.5 ×3.9	+14	体部やや内湾気味で上半でくびれ口縁部直線的。轆轤目強い。見込部に底部切離時の薄さを補う貼付。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③密
248-9 86-9	須恵器 杯	1/4	13.4×6.6 ×4.2	埋土	腰部丸く体部内湾し口縁部外反。口唇部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰黄褐 ③やや密
249-10 86-10	須恵器 碗	3/4	11.6×5.8 ×4.8	竈	底部器肉厚い。体部～口縁部やや直線的に外傾して開く。付高台、断面矩形。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 ②鈍い黄橙 ③小石混る
249-11 86-11	須恵器 碗	3/4	11.6×5.3 ×4.0	+1~6	底部極めて肥厚。体部直線的に外傾し口縁部僅かに外反。口唇部肥厚。重ね焼き痕。付高台。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化・良好 ②鈍 い黄橙 ③砂混る
249-12 86-12	須恵器 碗	1/2	12.4×6.8 ×4.9	床直	体部中位緩く張り口縁部外反。見込部に底部切離時の穴。付高台、端部丸くハの字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③密
249-13 86-13	須恵器 碗	完形	11.7×6.8 ×4.5	竈内	体部やや直線的に外傾し口縁部僅かに外反する。付高台、低く断面矩形。接合部雑。轆轤成形。	①酸化・良好 ②灰 黄 ③やや密
249-14 86-14	須恵器 碗	3/4	12.1×5.9 ×5.6	竈・竈埋 土	底部極めて肥厚する。体部・口縁部やや直線的に外傾して開く。付高台、断面三角。轆轤成形。回転糸切り？	①酸化・良好 ②鈍 い橙 ③砂混る
249-15 86-15	須恵器 碗	1/4	12.6×6.5 ×5.0	+5	体部内湾し口縁部外反。付高台、低く作り雑。接合部は明瞭。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
249-16 87-16	須恵器 碗	完形	12.7×6.8 ×4.6	+3	体部内湾し口縁部強く外反。体部接合痕。付高台、極めて低くやや作り雑。接合部明瞭。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②鈍 い黄橙 ③やや密
249-17 87-17	須恵器 碗	完形	12.6×5.8 ×5.0	+3	体部やや直線的に外傾し口縁部僅かに外反。轆轤目強い。付高台、やや作り雑。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密・砂混る
249-18 87-18	須恵器 碗	1/4	12.7×6.6 ×5.1	埋土・ +4	体部浅めて内湾し口縁部外反。付高台、やや作り雑。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③密
249-19 87-19	須恵器 碗	3/4	12.8×6.1 ×5.0	+8	体部内湾し口縁部外傾。付高台、低くやや雑な作り。接合部明瞭。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②灰 黄 ③やや密
249-20 87-20	須恵器 碗	1/4	12.3×6.8 ×4.6	埋土・ +7	腰部上位で張る。体部内湾し口縁部僅かに外反。口唇部丸く肥厚。付高台。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②黄灰 ③砂混る
249-21 87-21	須恵器 碗	1/2	12.7×6.0 ×4.6	+4	腰部張り強く体部直線的に外傾。口縁部外反し口唇部やや肥厚し丸い。付高台、雑な作り。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密・砂混る
249-22 87-22	須恵器 碗	1/4	12.2×5.8 ×5.4	+3	体部内湾し口縁部外反。付高台、雑な作りで接合部明瞭。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③小石混る
249-23 87-23	須恵器 碗	底部	-×7.6 ×(3.1)	+2	付高台、やや高くハの字状に開く。接合部明瞭。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③細砂混る
249-24 87-24	須恵器 碗	1/4	15.2×- ×6.7	+0~8	体部深く直線的。口縁部緩く外反して開き口唇部細る。腰部寛による強い沈線数本。付高台。轆轤成形。	①酸化・良好 ②黄 灰 ③やや粗
249-25 87-25	須恵器 台付鉢	台部	-×13.3 ×(4.7)	+1	器肉厚い。付高台、高く直線的で大きく開く。轆轤成形。	①酸化・良好 ②鈍 い橙 ③密
249-26 87-26	須恵器 内黒土器	底部	-×6.6 ×(2.4)	埋土	腰部にやや明瞭な稜線あり。付高台、断面丸い。内面黒色処理・寛磨き。轆轤成形。	①酸化・良好 ②鈍 い橙 ③密
249-27 87-27	灰釉陶器 皿	1/4	12.3×6.7 ×2.5	+2	見込部やや凹む。体部僅かに内湾し口縁部緩く外傾。付高台、低く稜やや明瞭。見込部重ね焼き痕。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③緻密
249-28 87-28	灰釉陶器 皿	3/4	13.2×7.8 ×2.6	埋土・ +7~8	底部肥厚。体部やや直線的に開く。付高台、低く稜明瞭。見込部に重ね焼き痕。漬け掛け施釉。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③緻密
249-29 87-29	灰釉陶器 皿	3/4	12.9×6.2 ×2.9	埋土・ +8	体部内湾し口縁部僅かに外反。腰部回転斲削り。付高台、低い。見込部凹み重ね焼き痕。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③緻密
249-30 87-30	灰釉陶器 皿	3/4	12.5×6.4 ×2.9	+6	体部～口縁部内湾して開く。腰部回転斲削り。付高台、低く稜明瞭。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③緻密
249-31 87-31	灰釉陶器 皿	底部欠 損	13.6×- ×1.6	埋土	体部浅く内湾。口縁部くびれて外反。	①良好 ②灰白 ③緻密

第1節 竪穴住居跡と出土遺物

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×口径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
249-32 87-32	灰釉陶器 皿	底部欠損	12.3×— ×(1.9)	+2	体部浅く内湾。口縁部くびれて外反。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③緻密
249-33 87-33	灰釉陶器 輪花皿	1/2	14.9×7.9 ×2.9	埋土・ +0~2	見込部凹む。体部やや直線的に開き口縁部僅かに外反し口唇部丸い。付高台、低くやや内湾する。見込部に重ね焼き痕。4弁輪花。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③緻密
249-34 87-34	灰釉陶器 輪花皿	3/4	15.2×7.4 ×3.3	埋土・ +3	体部内湾気味に開き口縁部僅かに外反。付高台、稜明瞭。見込部に重ね焼き痕。4弁輪花。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③緻密
250-35 87-35	灰釉陶器 輪花皿	ほぼ完形	14.9×7.2 ×3.4	埋土・ +6	体部内湾し口縁部外反し口唇部丸い。腰部回転篋削り。付高台、低い。見込部に重ね焼き痕。4弁輪花。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③緻密
250-36 87-36	灰釉陶器 輪花皿	底部欠損	14.6×— ×(1.6)	+8	体部直線的に開き口縁部僅かに外反する。輪花弁数不明。	①良好 ②灰白 ③緻密
250-37 87-37	灰釉陶器 皿	底部	—×7.4 ×(2.0)	埋土	見込部凹む。付高台、低く断面三角。見込部重ね焼き痕。	①良好 ②灰白 ③緻密
250-38 87-38	灰釉陶器 耳皿	1/2	10.7×4.0 ×2.7	+19	両側大きく内湾して耳部となる。底部回転糸切り。見込部に他器の小片が多く付着。	①良好 ②灰白 ③緻密
250-39 87-39	灰釉陶器 耳皿	片耳部欠損	6.5×4.4 ×(4.3)	+1	両側大きく内湾して耳部となる。付高台、高く外傾して開く。見込部に窯壁材が付着。内面全面施釉。底部無釉。	①良好 ②灰白 ③緻密
250-40 87-40	灰釉陶器 椀	ほぼ完形	13.7×6.5 ×4.2	埋土	底部やや肥厚し腰部丸く張る。体部内湾し口縁部外反。付高台、やや明瞭な稜。見込部重ね焼き痕。口縁下に別個体の破片付着。漬け掛け施釉。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③緻密
250-41 87-41	灰釉陶器 椀	1/2	13.0×6.4 ×4.3	埋土	体部内湾し口縁部僅か外反する。付高台、やや明瞭な稜。見込部に重ね焼き痕。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③緻密
250-42 87-42	灰釉陶器 椀	ほぼ完形	15.2×7.2 ×5.3	埋土	体部内湾し口縁部僅かにくびれて外反。付高台、面取りなく丸く内湾。見込部凹み重ね焼き痕。漬け掛け施釉?	①良好 ②灰白 ③緻密
250-43 88-43	灰釉陶器 椀	3/4	17.6×8.0 ×5.0	埋土	器肉薄い。体部内湾し大きく開く。口縁部緩くくびれて外反。付高台、面取り明瞭、三日月高台。見込部に重ね焼き痕。漬け掛け施釉?	①良好 ②灰白 ③緻密
250-44 88-44	灰釉陶器 輪花椀	1/2	17.6×8.6 ×5.9	埋土・ +0~12	体部緩く内湾し口唇部丸まり僅か外反。腰部回転篋削り。付高台、断面やや丸味をもつ。見込部に重ね焼き痕。割付5弁輪花。漬け掛け施釉?	①良好 ②灰白 ③緻密
250-45 88-45	灰釉陶器 輪花椀	3/4	18.5×8.6 ×6.0	竈埋土・ 埋土・ +3	器肉薄め。体部緩く内湾し大きく開く。口唇部丸まり僅か外反。腰部回転篋削り。付高台、断面丸味。見込部に重焼痕と剝離痕多数。5弁輪花。漬け掛け施釉。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③緻密
250-46 88-46	灰釉陶器 椀	破片	14.8×— ×(3.9)	+1	体部丸味強く内湾し口縁部僅かに外反。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③緻密
250-47 88-47	灰釉陶器 輪花椀?	破片	18.4×— ×(3.6)	埋土	体部~口縁部僅かに内湾して開く。体部上半強い轆轤目。腰部回転篋削り。弁数不明。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③緻密
250-48 88-48	灰釉陶器 椀	口縁部欠損	—×8.6 ×(4.8)	埋土・ +4	体部内湾して開く。付高台、断面丸味をもつ。見込部に重ね焼き痕。漬け掛け施釉?	①良好 ②灰白 ③緻密
250-49 88-49	灰釉陶器 椀	底部	—×7.6 ×(1.9)	+4	器肉薄く見込部やや凹む。付高台、内湾し明確な稜をなす三日月高台。	①良好 ②灰白 ③緻密
250-50 88-50	灰釉陶器 椀?	上半欠損	—×7.6 ×(2.2)	埋土	底部やや肥厚。見込部凹む。付高台、低くやや明確な稜。見込部重ね焼き痕。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③緻密
250-51 88-51	緑釉陶器 椀	1/2	10.5×6.6 ×(3.9)	+9~20	腰部丸く張り体部内湾して口縁部小さく屈する。付高台、外傾する。見込部・底部篋磨き、トチン痕あり。轆轤目。二次被熱で赤銅色を呈す。	①良好 ②暗オリブ ③緻密
250-52 88-52	緑釉陶器 段皿	底部欠損	16.0×— ×(1.1)	埋土	体部内面に明瞭な段をなし口縁部大きく外反。轆轤目。	①良好 ②オリブ灰 ③緻密
250-53 88-53	緑釉陶器 椀	底部欠損	18.0×— ×(5.1)	埋土・ +4~11	腰部丸味強く口縁部外屈する。内面篋磨き。外面一部二次被熱で赤化。	①良好 ②暗オリブ ③密
250-54 88-54	緑釉陶器 皿?	底部	—×6.8 ×(1.8)	埋土・床直	腰部に丸味。付高台、外傾して開く。轆轤目。二次被熱で赤銅色を呈す。	①良好 ②暗オリブ ③緻密
250-55 88-55	灰釉陶器 壺?	胴部欠損	13.4×— ×(6.5)	+2~19	頸部緩く、口縁部強く外反する。口唇部上端突出。	①良好 ②灰白 ③緻密
250-56 88-56	須恵器 壺	頸部	—×—(6.5) 頸部基径7.3	埋土	頸部緩く外反する。轆轤成形。	①良好 ②褐灰 ③密
250-57 88-57	須恵器 甕	口縁部	16.8×— ×(3.3)	竈埋土	口縁部直線的に外傾し口唇部側縁は幅広く上端は丸まり内面に段をなし下端は突出する。	①良好 ②灰 ③砂混る
250-58 88-58	須恵器 鉢(片口)	下半欠損	19.2×— ×(7.3)	+6~19	体部やや丸い。口縁部片口になるか。口唇部断面矩形。体部回転篋磨で。下位篋削り。内面撫で。	①良好 ②灰白 ③密

第2章 遺構と遺物

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
251-59 88-59	羽釜	下位欠損	20.8× ×(18.9)	埋土	胴部張り少なく口縁部内傾し口唇部幅広く断面矩形。上端面内傾。鋳強く突出。口縁部撫で。胴部下半斜位篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・砂混る
251-60 89-60	須恵器 甕	体部中位欠損	20.2×14.0 ×36.9	埋土	肩部丸く張る。頸部直線的に外傾し上半は強く外反。口唇部上下端は尖り突出する。肩～体部篋削り。内面篋撫で。	①酸化気味・良好 ②鈍い橙 ③やや粗
251-61 89-61	須恵器 甕	下	24.8×13.6 ×39.2	埋土	胴部上半に最大径。肩部丸く張る。頸部外反。口唇部上端は尖り突出。胴部回転篋撫で。下半篋磨き。内面篋撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③やや粗
251-62 89-62	須恵器 甕	頸部		+5	頸部に8条の波状文。内面篋撫で。	①良好 ②灰 ③密
251-63 89-63	須恵器 転用硯	一部欠損	20.2×15.9 ×厚1.1	床直	甕片転用。内面摩滅、光沢あり。側縁調整痕なし。	①良好 ②灰 ③やや密
251-64 89-64	瓦 丸瓦	小片	厚1.8	埋土	凹面布目。凸面自然釉。側縁篋調整。焼成堅緻。	①良好 ②黒褐 ③やや粗・小石多量
252-65 89-65	須恵器 甕	体部	-x-x(36.5) 胴部最大径47.2	埋土	胴部丸く張る。外面回転篋撫で。内面撫で。	①良好 ②灰褐 ③やや密・砂混る
252-66 90-66	須恵器 甕	下	-x-x66.0 胴部最大径70.0	埋土	肩部張る。外面平行叩き。内面平行あて目。	①良好 ②灰 ③密
252-67 89-67	石製品 碁石?	完形	径1.7厚0.6 重2.6g	+4	円形成形の可能性。黒味のあるまだら自然石。	玄武岩?
252-68 89-68	石製品 碁石?	完形	径1.7厚0.6 重2.6g	+19	ほぼ円形。黒色自然石。	玄武岩
252-69 89-69	土製品 碁石?	一部欠損	径1.7厚0.7 重(1.8)g	+10	円形焼き物の可能性。成形痕あり。	
252-70 89-70	鉄器 刀子	身先欠損	長15.5 幅2.0厚0.4	埋土	棟区・刃区とも明瞭に画し茎部に至る。茎部僅かに反りをもつ。茎長8.0・幅1.0・厚0.5	
252-71 89-71	鉄器 鉄塊		長3.5幅1.8 厚1.3	埋土	磁気あり。重13g	
252-72 89-72	鉄器 角釘	完形	長7.3 幅0.4	埋土	頭部形状折頭式。他に残欠が付着。木質残る。	
252-73 89-73	鉄器 角釘	先端部欠損	長(3.0) 幅0.4×0.5	埋土	頭部形状折頭式。2本が癒着。	

L126号住居跡 (Fig. 253~258・PL. 19、90~93)

L区第4台地の南西に位置し、71~74L4~7の範囲にある。L118号・L127号・L158号・L163号住居跡と重複しており、L127号住居跡より新しく他者より古い時期の所産である。南壁の一部は重複のため検出できなかった。

平面形は東西軸が僅かに長い方形を呈する。東西長約6.2m・南北長5.75mを測り、東西軸方位はN-70°-Eを示す。壁高約35cmを測り、床面は平坦で踏み締まりは良好である。埋土の上半は白色・黄色・灰色などの細砂質のいわゆるFA層が約10cmの厚さ（FA層自体の検出面はさらに高い）で堆積しており、Unit堆積と考えられる。貯蔵穴は南東隅に設けられ、70×75cm・深さ85cmの略方形を呈する。柱穴はP₁~P₄を検出した。P₁は上径45×55cm・下径15cm・深さ70cm、P₂は上径40cm・下径25cm・深さ73cm、P₃は上径50cm・下径18cm・深さ74cm、P₄は上径40cm・下径25cm・深さ61cmを測る。柱間はP₁・P₂は3.45m、P₂・P₃は3.05m、P₃・P₄は3.35m、P₁・P₄は3mである。住居中央部に径65cm・深さ74cmのP₅が検出されているが柱穴か否か不明である。上層はLoam層を貼り込んだ様相が窺われるが、下層は締まりのない暗褐色土である。北隅の楕円形土坑は後世に属する。またP₆はL118号住居跡の貯蔵穴残欠である。

竈は東壁にあり、やや南に偏って付設される。袖部は掘形を住居内に突出させ、白色粘質土で覆って形成する。右袖部は掘り過ぎのためやや形を損ねてしまった。燃焼部は狭長気味で、高杯を倒置して支脚に用いたようである。左袖部長さ1.25m、袖間内法約50cm、燃焼部奥行き1.3mを測る。

出土遺物は貯蔵穴内とその周辺及び竈右袖部に集中して検出され、土師器椀・高杯・甕などがあり量的には豊富である。

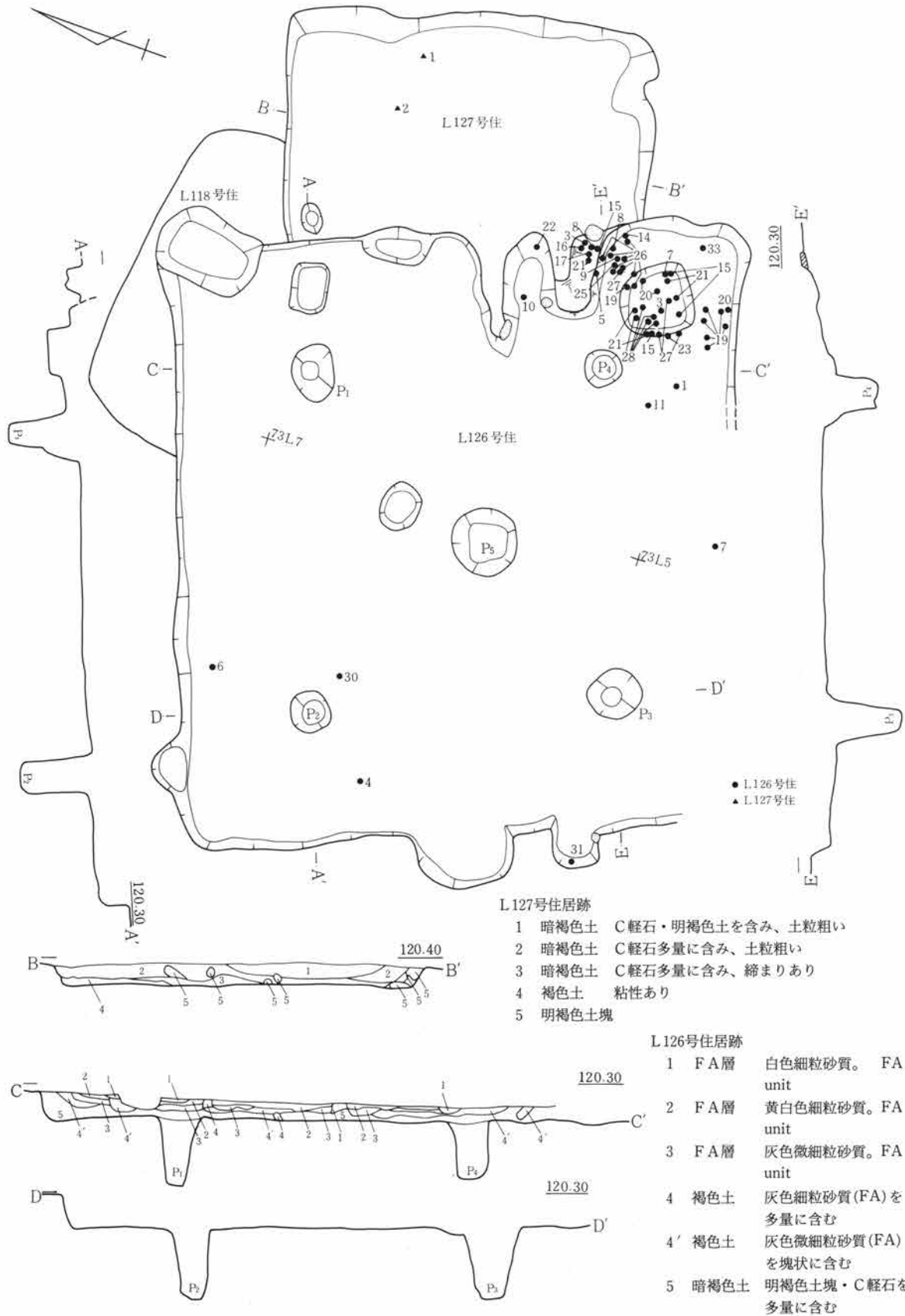


Fig. 253 L126号・L127号住居跡

0 2m

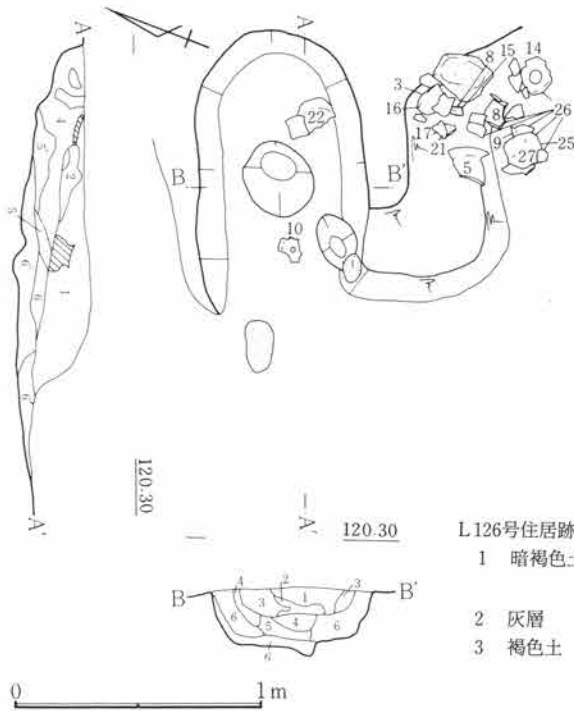


Fig. 254 L126号住居跡竈

L127号住居跡 (Fig. 253、259・PL. 20、93)

L区第4台地の南西に位置し、70・71L 5～7の範囲にある。L118号・L126号住居跡と重複しており、両者より古い時期の所産である。西半は掘形の深いL126号住居跡によって消失している。

南壁線に歪みをもつが平面形は方形を呈すると考えられる。南北長3.8mを測り、東西は東壁より2.5mの範囲まで確認した。壁高は約24cm、床面はほぼ平坦をなすが踏み締まりは弱い。竈・炉など諸施設は検出されていない。

出土遺物は少なく土師器小形埴・砥石である。

L126号住居跡竈

- 1 暗褐色土 白色粘土・焼土粒を多量に含む
- 2 灰層
- 3 褐色土 白色粘土・焼土粒を多量に含む

- 4 焼土層
- 5 灰層
- 5' 灰・焼土塊混合層
- 6 焼土粒層
- 6' 灰・焼土粒層
- 7 焼土塊
- 8 灰塊

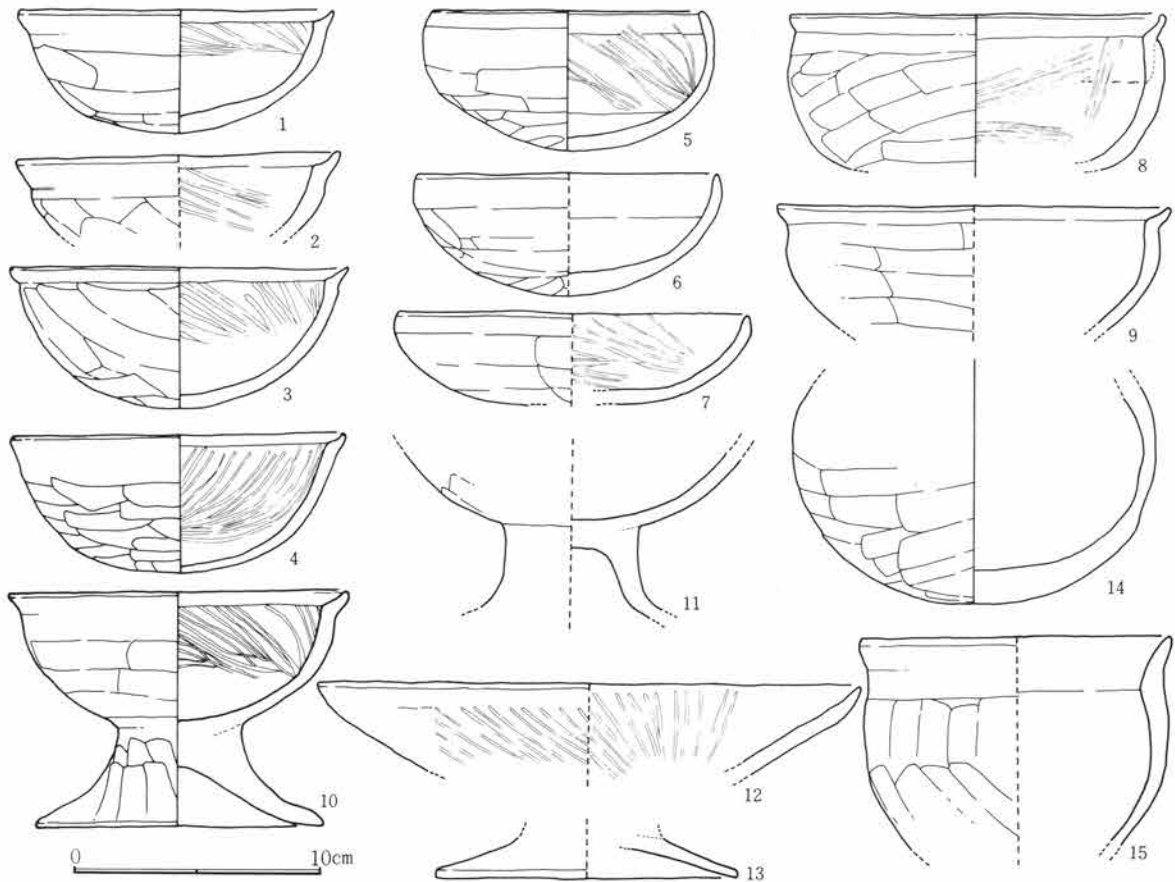


Fig. 255 L126号住居跡出土遺物(1)

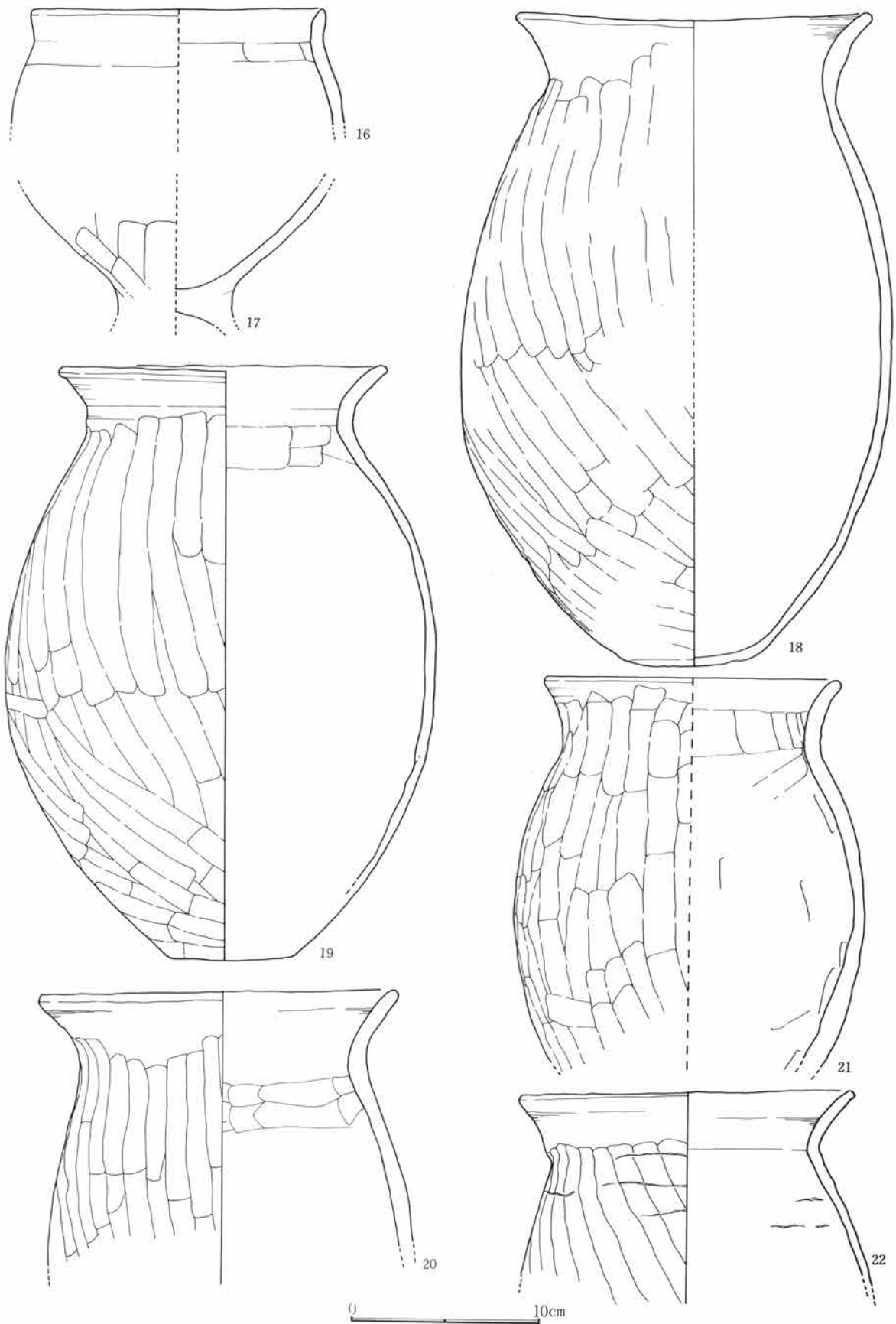


Fig. 256 L126号住居跡出土遺物(2)

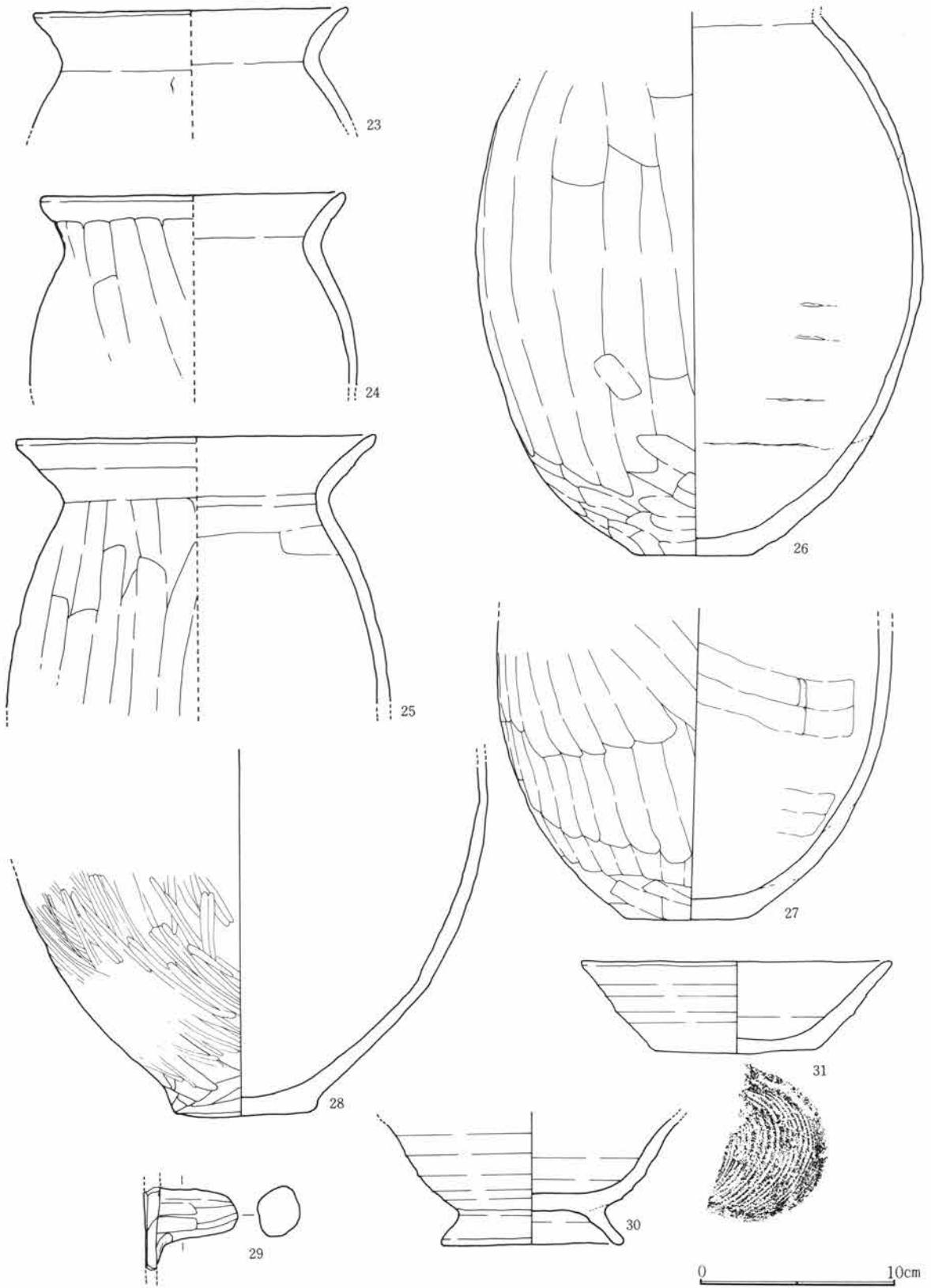


Fig. 257 L126号住居跡出土遺物(3)

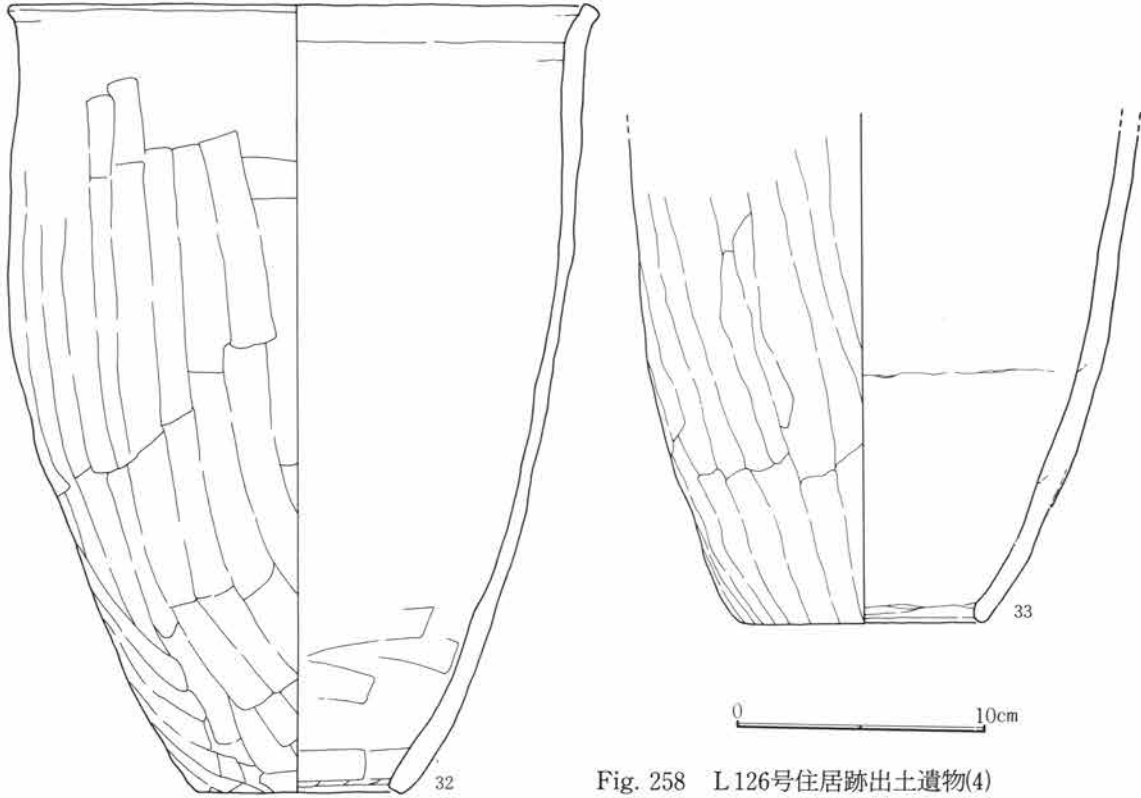


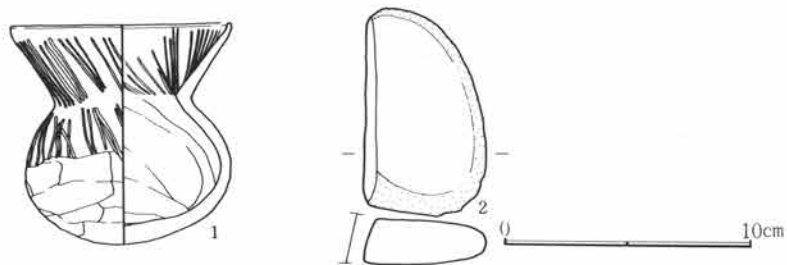
Fig. 258 L126号住居跡出土遺物(4)

L126号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
255-1 90-1	土師器 杯	完形	12.6×— ×4.8	+6	深い丸底。口縁部内斜。体・底部篋削り。口縁部横撫で。内面上位斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③小石多く混る
255-2 90-2	土師器 杯	½	12.8×— ×(3.0)	掘形・埋土	体部丸く深め。口縁部肥厚し強く外屈し内斜。口唇部やや細る。体部外面篋削り。内面斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
255-3 90-3	土師器 杯	ほぼ完形	13.6×— 5.6	貯蔵穴	丸底。口縁部強く外屈し内面内斜口縁。口唇部尖る。口縁部横撫。体部斜・底部不定方向篋削り。内面斜行篋磨き。	①酸化・良好 ②橙 ③小石混る
255-4 90-4	土師器 杯	完形	13.3×— ×5.4	埋土	深い丸底。口縁部下は調整の差で僅かにくびれる。口唇部強く外屈し丸まる。内面は凹みをもつ内斜口縁。口唇部尖る。口縁内外面横撫で。体部横篋削り。内面斜行篋磨き。	①酸化・良好 ②橙 ③やや粗・小石混る
255-5 90-5	土師器 杯	完形	10.7×— ×5.5	貯蔵穴	丸底。上半は内傾し口縁部はさらに内傾。口縁内外面横撫で。体部横・底部不定方向篋削り。内面斜行篋磨き。	①酸化・良好 ②橙 ③やや粗・細砂混る
255-6 90-6	土師器 杯	½	12.2×— ×4.8	床下・埋土	底部深く丸い。短い口縁部が直立し口唇部細る。口縁部横撫で。体部横・底部不定方向篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
255-7 91-7	土師器 杯	¼	14.0×— ×(3.6)	埋土	底部浅く偏平。口縁部やや肥厚し短く直立し口唇部やや尖る。口縁部横撫。体部外面横位篋削り。内面斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
255-8 91-8	土師器 杯	底部欠損	15.0×— ×(6.0)	貯蔵穴	体部張り強く深い。底部平底になる。口縁部やや薄く強く外屈し内斜口縁。口唇部折れ直立。口縁部横撫で。体部斜位篋削り。内面横・斜行篋磨き。	①酸化 ②赤褐 ③やや粗・砂混る
255-9 91-9	土師器 杯	小片	15.6×—× (5.0)	埋土	体部深く丸い。口縁部強く外屈し内湾気味の内斜。口縁部横撫で。体部横方向篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
255-10 91-10	土師器 高杯	脚端部欠損	13.6×11.6 ×9.2	竈	杯部深く丸い。口縁部厚く強く外屈し内湾気味に内斜。脚部は肥厚し大きく開く。口縁部内外面横撫で。体部横位篋削り。体部内面上半斜行篋磨き。脚部縦篋削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
255-11 91-11	土師器 高杯	口縁部欠損	—×—×(6.5) 脚部径5.2	+3	杯部丸く張る。脚部直線的で裾部は強く開く。杯部外面篋削り。内面篋磨き、単位不明。脚部指撫で。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
255-12 91-12	土師器 高杯	杯部上半	21.6×— ×(3.5)	貯蔵穴内	杯体部僅かに外反気味に大きく開く。口縁部は短かく内湾気味。内外面放射状篋磨き。外面口縁部撫で。	①良好 ②橙 ③やや密
255-13 91-13	土師器 高杯	脚部	—×12.0 ×(1.6)	埋土	脚裾部大きくハの字状に開く。端部丸まる。内外面横撫で。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密・細砂混る
255-14 91-14	土師器 小形甕	口縁部欠損	—×—×8.5 最大径14.5	貯蔵穴	胴部強く張り丸底。球形を呈す。胴部外面横位篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る

第2章 遺構と遺物

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
255-15 91-15	土師器 小形甕	底部欠損	12.4×— ×(8.3)	貯蔵穴	肩部張りなく胴部丸く腰部窄まる。口縁部肥厚し直立後上半は外屈しややコの字状。口唇部丸まる。口縁部横撫で胴部縦・斜位篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや密・鉾物粒混
256-16 91-16	土師器 甕	口縁部 1/2	15.4×— ×5.9	埋土・竈内	胴部やや張る。口縁部短く僅かに外反して直立気味。口縁部横撫で。胴部外面篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②橙 ③やや密・粗砂混る
256-17 91-17	土師器 台付甕	台部欠損	—×—×(6.9) 9)頸部径6.0	貯蔵穴	腰部窄まり胴部丸く張る。台部欠損。胴部外面下位篋削り。内面撫で。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密
256-18 91-18	土師器 甕	1/2	18.6×6.8 ×33.8 最大径24.4	貯蔵穴	底部丸味をもつ。やや長胴だが最大径は中位にあり丸く張る。口縁部やや肥厚し大きく外反。口唇部丸い。口縁部横撫で。胴部縦位篋削り。	①やや軟 ②浅黄橙 ③やや粗・小石多く混る
256-19 91-19	土師器 甕	ほぼ完形	17.1×6.4× 30.5最大径22.4	貯蔵穴	胴部に張りをもち最大径は中位にある。口縁部緩く外反して開く。胴部上半縦位・下半斜位篋削り。口縁部横撫で。	①良好 ②黄橙 ③やや粗・小石混る
256-20 92-20	土師器 甕	下半欠損	18.7×— ×(14.2)	貯蔵穴	胴部緩く張る。口縁部外反気味でくの字状に開く。口縁部横撫で。胴部縦方向の篋削り。肩部内面横方向の篋撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③砂混る
256-21 92-21	土師器 甕	1/2	15.3×—×(20.0) 最大径18.2	貯蔵穴	口縁部外反し口唇部丸い。肩部張りなく胴部下張れ気味。口縁部横撫で。胴部縦篋削り。内面横篋撫で。	①良好 ②鈍い黄橙 ③粗・小石混る
256-22 92-22	土師器 甕	下半欠損	17.4×— ×(10.0)	床直	胴部緩く張り口縁部外反気味でくの字状に開く。口縁部横撫で。胴部縦方向篋削り。紐作り痕あり。	①良好 ②鈍い黄橙 ③砂混る
257-23 92-23	土師器 甕	口縁部	15.8×— ×(5.7)	貯蔵穴	口縁部やや肥厚し外反気味に外傾する。口唇部丸い。口縁部横撫で。体部内面篋撫で。外面篋削り。	①良好 ②淡黄 ③やや粗・細砂混る
257-24 92-24	土師器 甕	下半欠損	15.2×— ×(9.6)	埋土	胴部強く張り丸味をもつ。口縁部は肥厚し外反気味に外傾して開く。体部縦位篋削り。内面撫で。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗・細砂混る
257-25 92-25	土師器 甕	小片	18.2×— ×13.5	貯蔵穴	肩部張りなく長胴を呈すが胴部に張りをもち。口縁部くの字状に大きく開き口唇部やや丸い。口縁部横撫で。体部外面縦位篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②黄橙 ③やや密・細砂混る
257-26 92-26	土師器 甕	口縁部欠損	—×5.9 ×(26.9)	埋土	平底。底径小。やや長胴を呈するが最大径は中位で丸く張る。胴部縦位篋削り。底部細かい斜位篋削り。内面撫で。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや密・小石混る
257-27 92-27	土師器 甕	下半1/2	—×6.1 ×(14.7)	貯蔵穴	胴部張りをもち。外面縦位篋削り。腰部斜位篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②浅黄 ③やや粗・小石混る
257-28 92-28	土師器 甕	下半	—×7.1 ×(17.6)	貯蔵穴	腰部強く窄まり底部やや突出。胴部張り強く球胴を呈す。胴部斜位篋磨き。腰部篋削り。全体的に剝離。	①良好 ②鈍い赤褐 ③砂混る
257-29 92-29	土師器 把手		長4.9 径2.5	埋土	面取り篋削り。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密
257-30 92-30	須恵器 椀	口縁部欠損	—×9.0 ×(6.1)	埋土	腰部丸味をもち体部大きく開くか。付高台、高くハの字状に開く。轆轤成形。	①酸化 ②橙 ③やや密
257-31 92-31	須恵器 杯	1/2	15.8×8.0 ×4.6	埋土	器肉厚く体部直線気味に外傾し口縁部僅かに外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②黄橙 ③やや粗・砂混る
258-32 93-32	土師器 甕	1/2	23.6×8.3 ×31.2	埋土	単孔。胴部張り少ない。口縁部緩く外反し口唇部は断面矩形。胴部上位縦位篋削り。胴部下位斜位篋削り。	①良好 ②明黄褐 ③粗
258-33 93-33	土師器 甕	下半1/2	—×9.5 ×(20.0)	貯蔵穴	単孔。胴部張りなく長胴を呈す。胴部外面縦位篋削り。	①良好 ②赤褐 ③やや密



L 127号住居跡出土遺物観察表

Fig. 259 L 127号住居跡出土遺物

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
259-1 93-1	土師器 埴	ほぼ完形	8.8×— ×8.7	+ 6	丸底。胴部強く張り球胴。口縁部は直線的でくの字状に外傾。口唇部細まり端部丸まり僅か折れ直立。口縁内外面及び体部上方篋磨き。体・底部横位篋削り。内面斜行撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
259-2 93-2	石製品 砥石		8.2×4.9 ×1.8	+ 3	表・裏面及び1側面使用。側面の摩滅著しい。重102g	粗粒安山岩

L 128号住居跡 (Fig. 260~263・PL. 20、93)

L区第4台地のほぼ中央部に位置し、64~66L14~16の範囲にある。L149号・L217号住居跡と重複しており、両者より新しい時期の所産である。

平面形は南北に長軸をもつ方形を呈する。南北長4.1m・東西長3.1mを測り、東西軸方位はおよそN-90°-Eを示す。壁高は約20cmを測る。床面は北半部が若干低く、踏み締まりは全体に弱い。貯蔵穴は南西隅に設けられ、径45×60cm・深さ30cmの不整楕円形を呈する。人頭大の川原石が埋まり、埋土最下層には焼土粒を含む黒色灰層が堆積する。南西部及び北東部に Pit が検出されているが、柱穴となるような位置関係にはない。北東部の Pit からそれぞれ須恵器小皿・碗が出土している。

竈は東壁にありやや南に偏って付設される。壁線上左袖部には川原石が埋設され、右袖部には埋設痕がある。燃焼部内には川原石が散乱し、段差をもって長めの煙道部が延びる。また竈前面の火床下には径40cm・深さ70cmの Pit が穿たれるが当跡に属するとは考えられず、L149号住居跡に伴うと思われる。袖部内法約30cm、燃焼部奥行き40cm、煙道部長さ40cmを測る。

出土遺物は散在している。

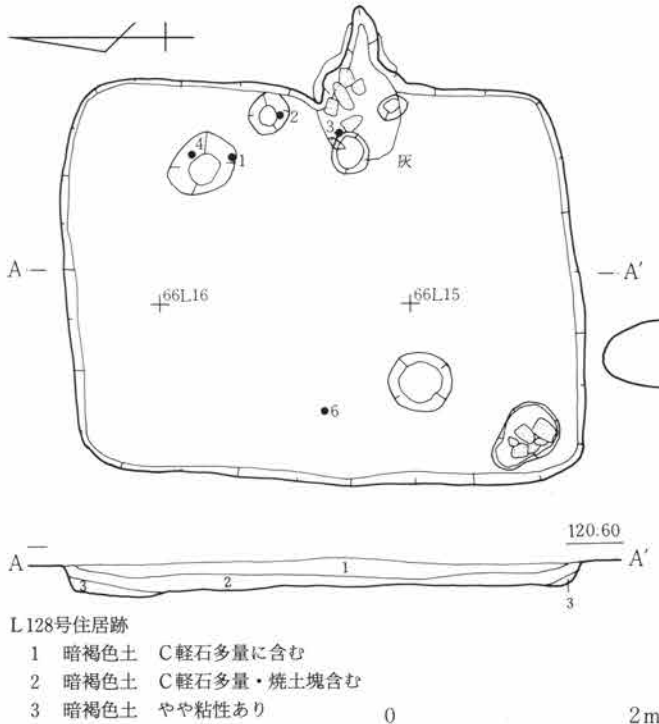


Fig. 260 L 128号住居跡

L 128号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石多量に含む
- 2 茶褐色土 C軽石・焼土塊・黒灰含む
- 3 茶褐色土 焼土塊を含む粘性土
- 4 焼土塊層
- 5 焼土層 (火床・壁)
- 6 暗褐色土 Loam 塊・焼土粒・炭化粒含み粘性あり
- 7 黒褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒含む

Fig. 261 L 128号住居跡竈

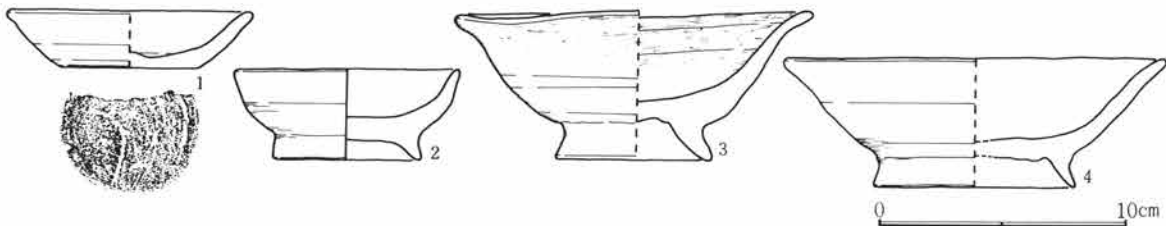


Fig. 262 L 128号住居跡出土遺物(1)

第2章 遺構と遺物

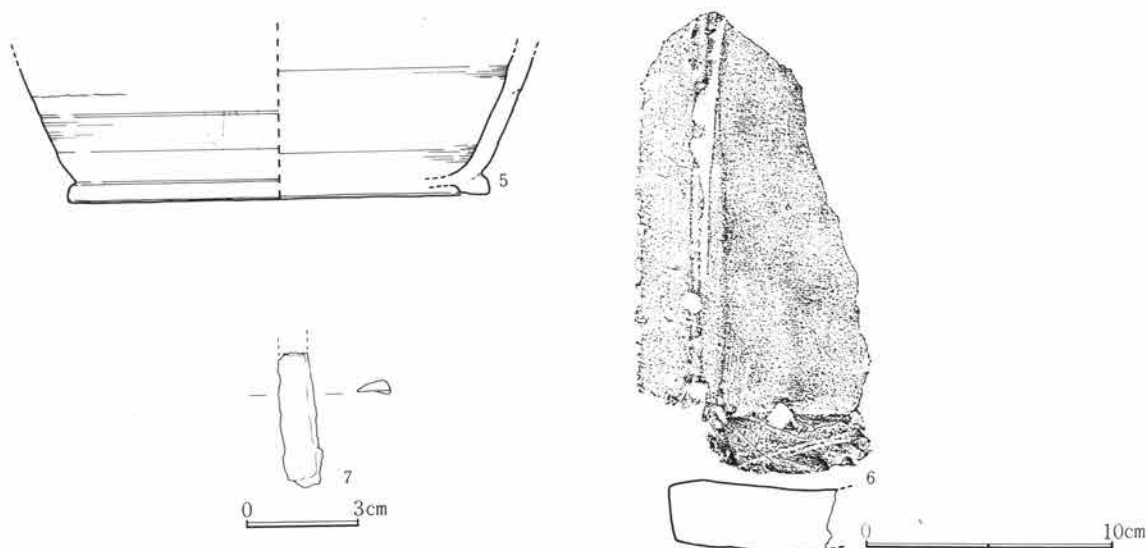


Fig. 263 L128号住居跡出土遺物(2)

L128号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
262-1 93-1	須恵器 杯	1/2	9.8×5.3 ×2.3	掘形	体部中位で僅かに脹りみをもち口縁部僅かに外反し口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 ②灰黄 ③やや密・砂混る
262-2 93-2	須恵器 椀	完形	9.0×5.9 ×3.7	+1	器肉極めて厚く体部中位で張り上半直線的に緩く外傾。口唇部丸い。高台、高くハの字状に開き端部丸い。轆轤成形。	①良好 ②淡黄 ③やや密・砂混る
262-3 93-3	内黒土器 椀	完形	14.2×6.3 ×7.0	竈	腰部張り強く体部上半はやや大きく開く。口縁部大きく外反し口唇部丸い。付高台、やや高くハの字状に開く。内面黒色処理。見込部斜行・体部横・外面上半横篋磨き。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや密
262-4 93-4	須恵器 椀	1/4	15.1×8.0 ×5.1	掘形	腰部やや張る。体部直線的に大きく開き口縁部緩く外反し口唇部丸い。付高台、ハの字状に開き端部細まる。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②橙 ③やや密・小石混る
263-5 93-5	灰釉陶器 壺	腰部破片	—×16.7 ×(5.5)	埋土	胴部直線的に開く。付高台、低い。幅広く断面矩形。	①良好 ②灰白 ③密
263-6 93-6	瓦 平瓦	小片	厚2.6	竈	凹面布目後撫で。凸面篋撫で。側面篋調整。	①良好 ②灰 ③やや密・白色細粒多量
263-7 93-7	鉄器 不明	小片	長(3.7) 幅1.0厚0.3	埋土	利器。刀子刃部か。	

L130号住居跡 (Fig. 264~266、268・PL. 20、94)

L区第4台地調査区の西側やや南に位置し、72~74L16~18の範囲にある。L167号住居跡と重複しており、これより古い時期の所産である。

平面形は東西軸が僅かに長い略方形を呈し、南壁線が短く、西壁線が歪む。東西長約3.5m・南北長3.25mの小形住居である。東西軸方位はN-90°-Eを示す。掘形が浅く壁高8cmを測る。床面は平坦をなすが中央部の踏み締まりがやや弱い。壁下の溝は西壁にみられ、幅10cm・深さ7cmを測る。貯蔵穴は南西隅に設けられ径70cm・深さ35cmの円形を呈し、埋土中には焼土塊も混じる。また中央部には被熱の著しい凝灰岩質材を伴う径60×70cm・深さ18cmの楕円形土坑が検出されたが当跡との関係は不明である。

竈は東壁にA・B2基が存在する。A竈は東壁でやや南に偏った位置に、またB竈は東壁と南壁の変換部にあり、軸線は東壁線との直角軸からおよそ41°南へ傾く。A竈は東壁から狭小な煙道部と思われる部分が約30cm突出し、燃焼部などは形成されない。B竈は壁外に突出する燃焼部が床面より僅かに窪み、緩い傾斜をもつ長い煙道部に続く。煙道部には天井が残り、先端に煙出し孔を形成する。燃焼部幅約60cm・奥行70cm、煙道部長さ70cmを測る。

2基の竈の存在からAからBへ竈の作り替えが行われたと考え、これに伴う建替えなどを確認するため掘形の調査におよんだ。その結果、A竈時の住居は南壁及び西壁線がかなり内側に検出され、B竈の付設に際し住居の拡張が行われたことが判明した。東西長3.1m・南北長3mの略方形を呈する。壁高は25cmを測り、床面は使用時の状況を残さないようである。拡張前の壁線によればB竈は東壁の南端にあると思われる。拡張後の床下埋土は焼土塊や黒灰を多く含む粘性のある暗褐色土である。

出土遺物は竈前面で主に検出されているが、須恵器小杯と杯類でやや時間差のあるものが混在しているようである。

L151号住居跡 (Fig. 264、267、269・PL. 20、94)

L区第4台地の調査区西側やや南に位置し、71~73L18・19の範囲にある。L167号・L199号住居跡と重複しており、前者より旧く、後者より新しい時期の所産である。

平面形は東西に長軸をもち、東壁から北壁にかけて壁線が脹らむ略方形を呈すると思われる。南西部はL167号住居跡との重複で消失しているが、東西長約3.2m・南北長2.8mを測る。東西軸方位はN-95°-Eを示す。検出面からの掘形は浅く約8cmであるが、竈確認面とは差があり本来の壁高ではない。床面は平坦をなすが踏み締まりは弱い。貯蔵穴などは検出されていない。

竈は東壁にあり南に偏って付設され、左袖部の延長が大きく住居内に張り出す。袖部には角柱石材が埋設され、燃焼部には支脚が残る。燃焼部はほとんど窪みをなさず、水平を保ったまま煙道部に至

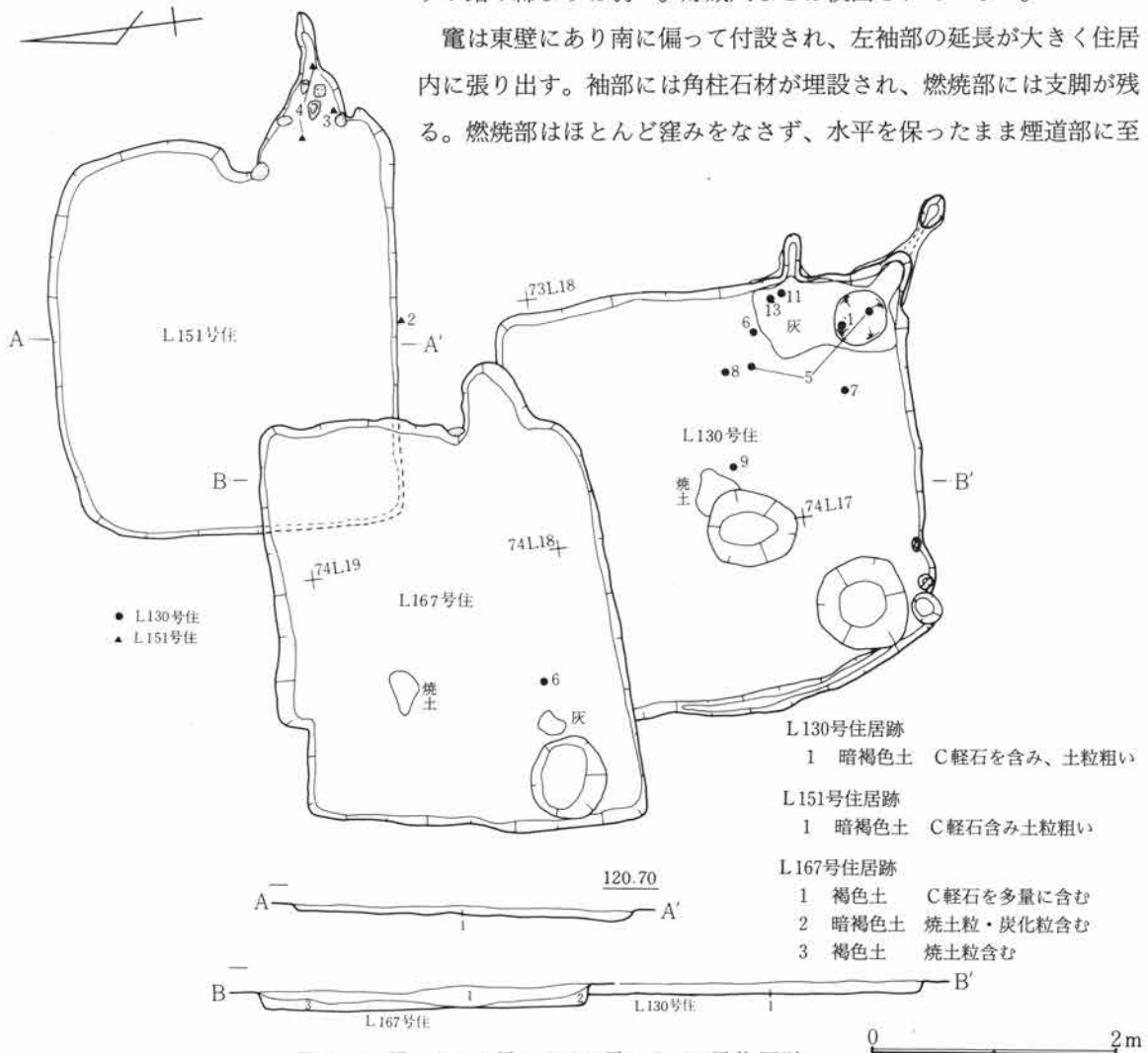
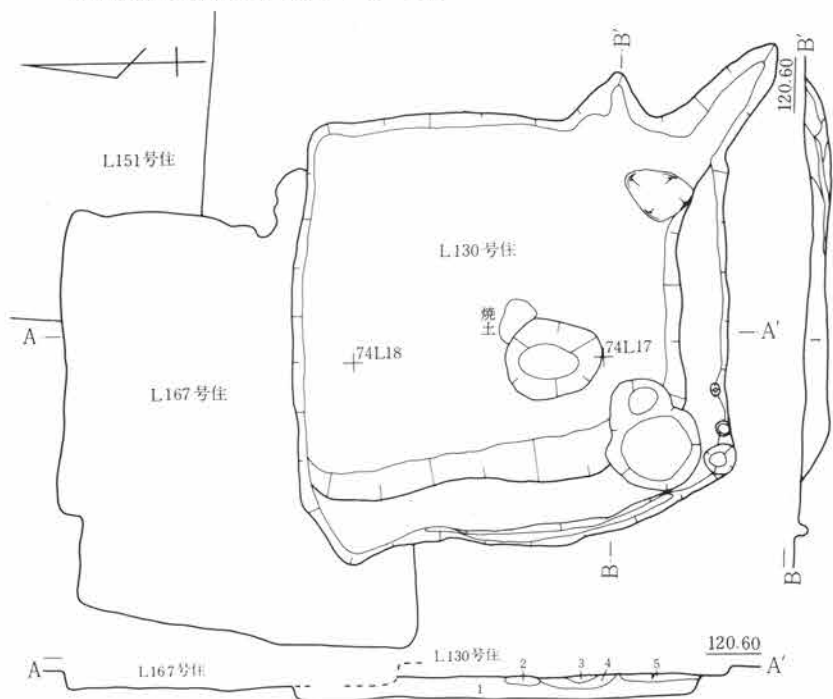


Fig. 264号 L130号・L151号・L167号住居跡

第2章 遺構と遺物

る。袖材間内法35cm、燃焼部奥行き50cm、煙道部長さ45cmを測る。

出土遺物は竈周辺に散在している。



L130号住居跡掘形

- 1 暗褐色土 C軽石少量、焼土塊・黒灰を多く含む粘性あり
- 2 焼土岩
- 3 黒褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒含む
- 4 黒褐色土 C軽石・焼土粒少量含む
- 5 明褐色土 凝灰岩質(貼床?)



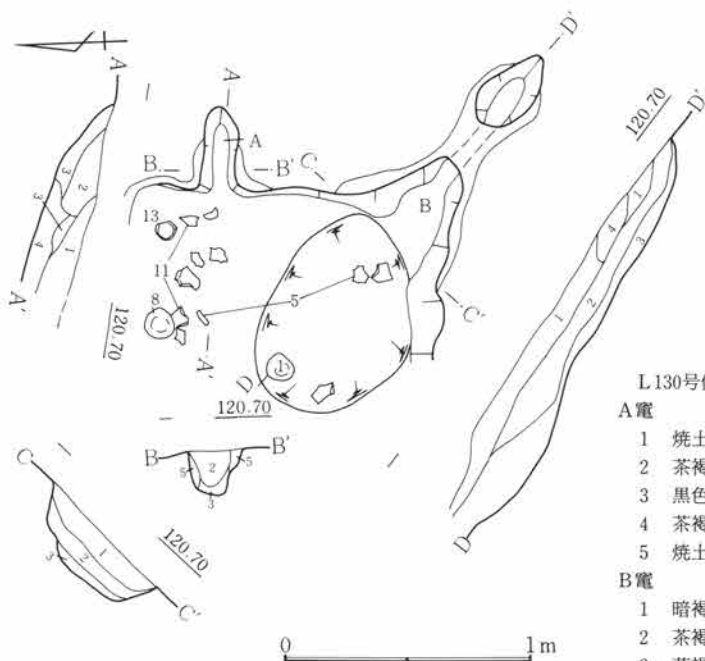
Fig. 265 L130号住居跡掘形

L167号住居跡 (Fig. 264、270・PL. 20、94)

L区第4台地の調査区西側やや南に位置し、73~75L17~19の範囲にある。L130号・L151号住居跡と重複しており、両者より新しい時期の所産である。

平面形は東西に長軸をもつ略方形を呈するが、北壁線は西寄り小さくL字状に折れる。東西・南北長とも3.35mを測る。東西軸方位はおよそN-90°-Eを示す。壁高は約20cmを測り、床面は平坦をなすが踏み締まりは弱い。南西隅には径60cm・深さ20cmの円形貯蔵穴が設けられる。貯蔵穴東に接して小範囲に厚い灰層の堆積があり、この一部は埋土中に薄く流れ込んでいる。また北西寄りに焼土の集中が認められたが埋土中にあり当跡に直接係わるものではない。

竈は東壁にありやや南に偏って付設される。袖部は僅かに住居内へ張り出す様相が



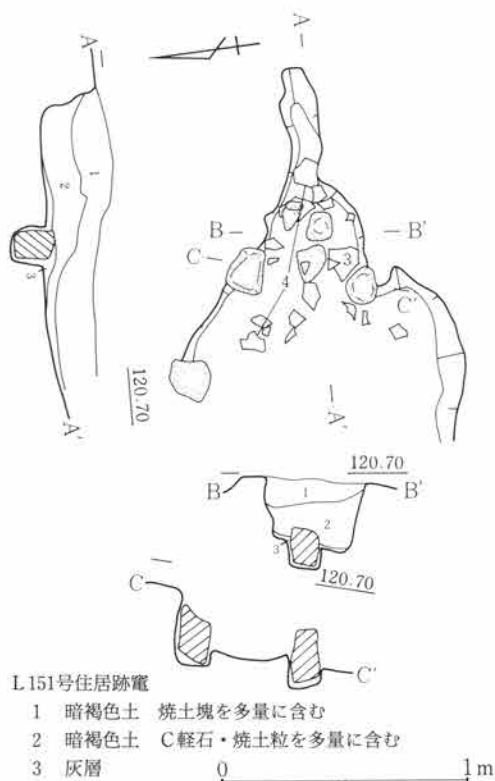
L130号住居跡竈

- A竈
- 1 焼土塊層 炭化粒少量含む
 - 2 茶褐色土 焼土塊含む
 - 3 黒色灰層
 - 4 茶褐色土 焼土塊含む
 - 5 焼土層 (壁)
- B竈
- 1 暗褐色土 C軽石・焼土粒を含む
 - 2 茶褐色土 C軽石・焼土塊を含む
 - 3 茶褐色土 C軽石・Loam塊含む(掘形)
 - 4 焼土 (天井)

Fig. 266 L130号住居跡竈 (A・B)

みられるが、左袖材は壁線上に埋設される。燃焼部幅約40cm・奥行き60cmを測る。

出土遺物は少なく、竈周辺・貯蔵穴内に散在して検出され、灰釉陶器などがある。



L 151号住居跡竈

- 1 暗褐色土 焼土塊を多量に含む
- 2 暗褐色土 C軽石・焼土粒を多量に含む
- 3 灰層

Fig. 267 L 151号住居跡竈

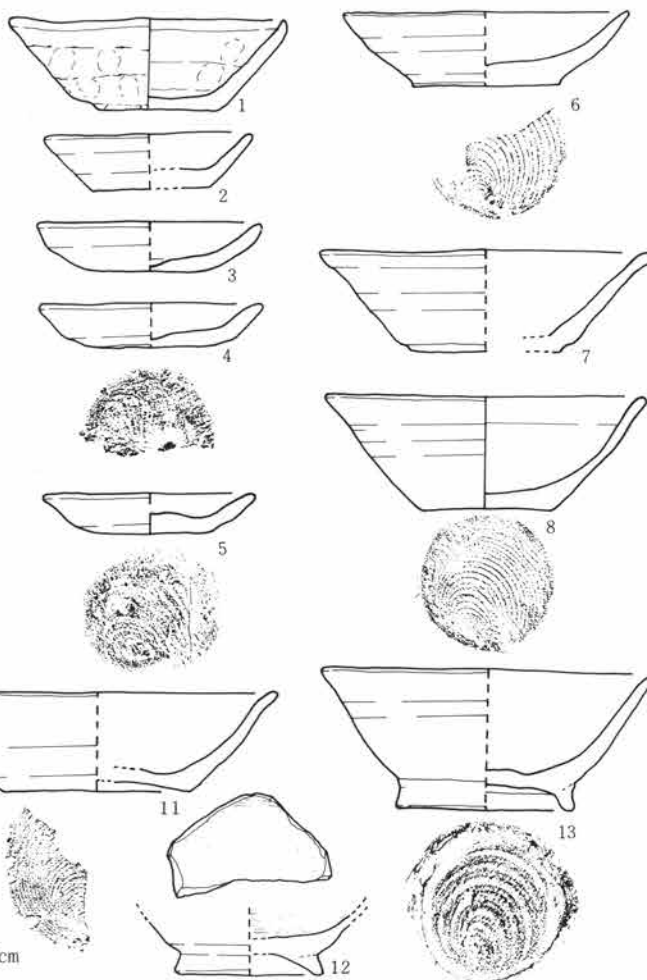


Fig. 268 L 130号住居跡出土遺物

L 130号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
268-1 94-1	土師器 杯	完形	11.2×4.7 ×3.7	竈	平底。体部直線的に外傾。口唇部内傾気味に尖る。体部内外面巻上痕・指頭痕、外面顕著。内面撫で。底部寛削り。	①酸化 ②橙 ③細砂混る
268-2 94-2	須恵器 杯	小片	8.4×4.6 ×2.2	埋土	底部やや肥厚。体部は直線的に外傾。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味 ②浅黄 橙 ③細砂混る
268-3 94-3	須恵器 杯	小片	9.0×4.6 ×1.9	竈・埋土	見込部凹み著しい。体部内湾気味に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味 ②鈍い 橙 ③白色粒混る
268-4 94-4	須恵器 杯	1/2	9.0×4.4 ×1.7	埋土	器肉厚い。見込部凹みあり。体部外反気味に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味 ②浅黄 橙 ③やや密
268-5 94-5	須恵器 杯	1/2	8.5×4.3 ×1.5	竈	底部やや肥厚し見込部凸状。体部大きく外傾し口縁部緩く外反気味。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 ②淡黄 ③白色粒混る
268-6 94-6	須恵器 杯	1/2	10.8×5.8 ×2.9	埋土	底部肥厚し腰部くびれる。体部やや丸味をもち内湾気味に開く。口唇部尖る。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 ②灰白 ③赤色粒混る
268-7 94-7	須恵器 杯	小片	13.2×5.8 ×4.0	竈	体部直線的に外傾。口縁部僅かに外反。口唇部肥厚し丸まる。器肉厚い。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③やや粗

第2章 遺構と遺物

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
268-8 94-8	須恵器 杯	完形	12.8×5.2 ×4.5	竈	腰部直線的。体部上位で僅かに脹らむ。口唇部丸く肥厚しやや外反する。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味 ②灰 ③やや密
268-9 94-9	須恵器 杯	¾	14.0×6.0 ×5.2	掘形	体部丸味をもち外傾。口縁部外反気味に開く。台部欠損。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 ②鈍い橙 ③砂混る
268-10 94-10	須恵器 碗	底部欠損	13.6×— ×(3.2)	竈・埋土	体部丸味をもち内湾して開く。口唇部強く外屈する。轆轤成形。	①酸化気味 ②淡橙 ③細砂混る
268-11 94-11	須恵器 杯	¾	14.4×7.6 ×3.9	竈	体部大きく外傾して開き口縁部は緩く外反。接合破片再被熱。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや粗
268-12 94-12	須恵器 碗	底部	—×6.0 ×(2.4)	埋土	底部肥厚。腰部張る。付高台、直線的でハの字状に大きく開く。内面黒色処理・磨き。	①良好 ②灰黄褐 ③やや密
268-13 94-13	須恵器 碗	¾	13.2×7.0 ×5.4	竈・埋土	腰部やや丸味をもち口縁部外反気味に開く。付高台。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③細砂混る

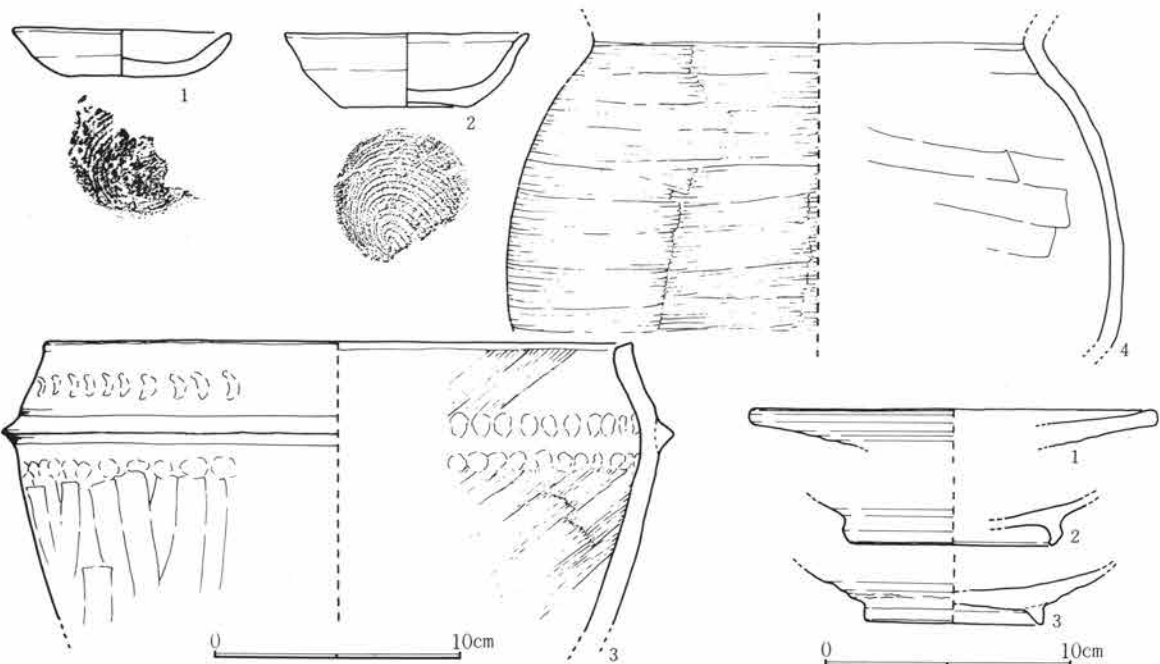


Fig. 269 L151号住居跡出土遺物

Fig. 270 L167号住居跡出土遺物

L151号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
269-1 94-1	須恵器 杯	¾	8.6×4.6 ×2.0	埋土	腰部丸味もち体部直線的に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや粗・白色粒混
269-2 94-2	須恵器 杯	¾	9.8×5.0 ×3.0	埋土	体部下半に丸味をもつ。口縁部僅かにくびれて外傾。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 ②鈍い 黄橙 ③やや粗
269-3 94-3	羽 釜	上半	23.4×— ×(11.0) 銜径26.8	竈	胴部直線的に外傾し銜部から口縁部は折れて内傾。銜は小さく三角に突出。銜上下内外面指頭痕顕著。胴部外面縦位篋削り。内面斜位篋無で。	①酸化 ②赤橙 ③白色粒混る
269-4 94-4	土師器 甕	胴部上 半	—×— (12.2)	竈	胴部やや扁平に張る。頸部外反か。胴部内外面横篋無で。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや粗

L167号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
270-1 94-1	須恵器 皿?	破片	16.0×— ×—	埋土	器内厚く直線的に大きく開く。口唇部肥厚し断面矩形気味。轆轤成形。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗・小石混る

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
270-2 94-2	灰釉陶器 椀	台部破 片	一×8.1 ×(1.9)	埋土	底部やや丸味をもつ。高台稜をなし内湾気味に立つ。三日月高台。端部丸い。底部回転調整。	①良好 ②灰白 ③密
270-3 94-3	須恵器 椀	底部欠	一×7.1 ×(2.2)	埋土	腰部丸く大きく開く。付高台、低くハの字状に開く。端部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密・黒色粒混

L131号住居跡 (Fig. 271~274・PL. 20、94、95)

L区第4台地の調査区西側ほぼ中央部に位置し、76・77L21~23の範囲にある。L139号・L145号・L185号住居跡と重複しており、いずれより古い時期の所産である。西・南壁線の一部と南西部の床面掘形の深いL139号住居跡によって消失している。

平面形は東西方向に長軸をもつ方形を呈すると考えられる。南北長は3.6m・東西長は4.25mを測り、東西軸方位はN-90°-Eを示す。壁高は約30cmを測り、床面は平坦で踏み締まりは良好である。南東隅には貯蔵穴が設けられ、径75cm・深さ22cmの円形を呈する。埋土中には焼土・灰などは観察されていない。

竈は東壁にあり南に偏って付設される。袖材は検出されず、楕円形に掘り込まれた燃焼部の先端には短く煙道部が突出する。燃焼部幅50cm・奥行き40cm、煙道部長さ18cmを測る。

出土遺物は前面に主として検出され、土師器・甕などがある。また当跡とはかなり時期差のある古い時代の遺物が混在する。

L139号住居跡 (Fig. 271、275、276・PL. 21、95)

L区第4台地の調査区西側ほぼ中央部に位置し、76・77L20~22の範囲にあると思われる。L131号・L142号・L185号住居跡と重複し、いずれより新しい時期の所産である。南半は平面精査時の削平が深く及んだため壁線を検出することはできなかった。

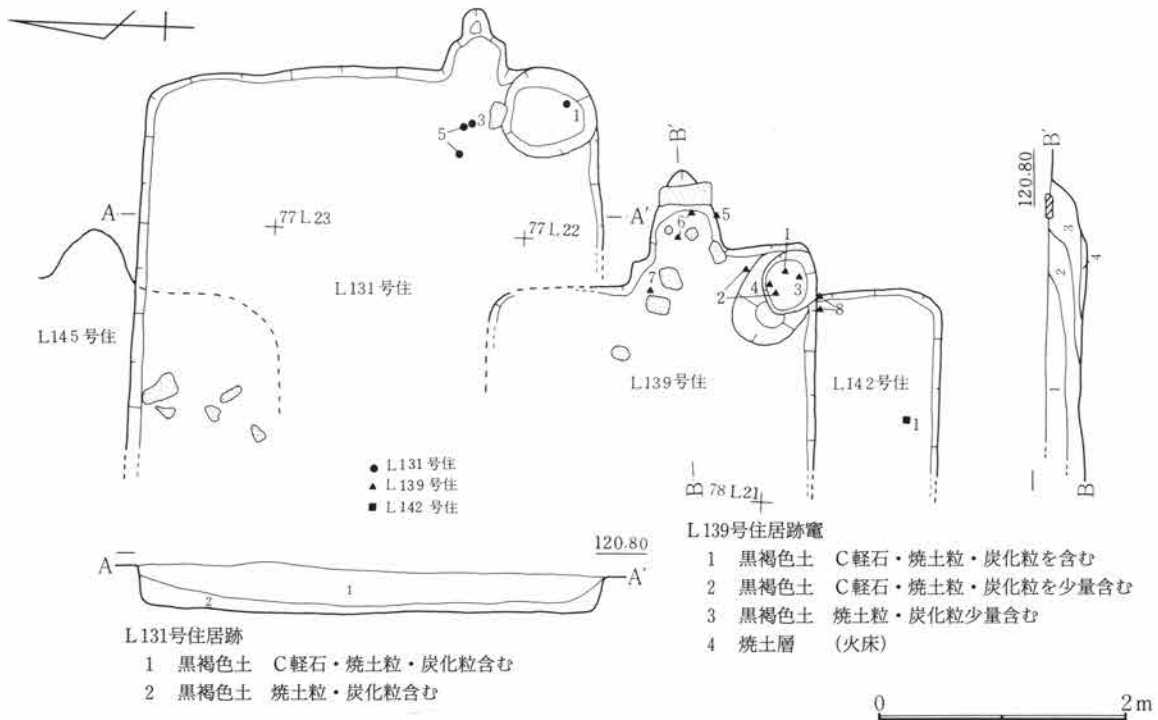


Fig. 271 L131号・L139号・L142号住居跡

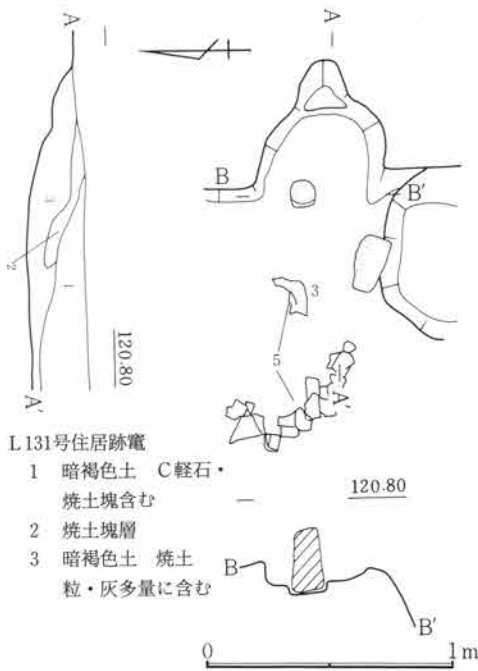


Fig. 272 L131号住居跡竈

平面形は方形を呈すると思われ、東西長2.8m、南北は北壁線より約1.7mの範囲まで確認した。南北軸方位はN-5°-Wを示す。壁高は約30cmを測り、床面の踏み締まりは弱い。貯蔵穴は北東隅に設けられ、径50cm・深さ50cmの円形を呈する。埋土最上面の床面と同じ高さに灰層が薄く散布する。

竈は東壁にありやや北に偏って付設される。袖部壁線上にあると考えられ、右袖部には凝灰岩質の加工材が残る。また燃焼部の先端部には、厚さ20cmで15×40cm大の角柱状凝灰岩質材が天井部を形成するがごとくに設置されている。燃焼部幅50cm・奥行き75cmを測る。

出土遺物は主に竈内で検出されている。

L142号住居跡 (Fig. 271、277・PL. 21、96)

L区第4台地の調査区西側ほぼ中央部に位置し、77L20の範囲にある。L139号住居跡と重複し、これより古い時期の所産である。住居跡南部は平面確認の精査で深く削平したため

壁線を検出できなかった。また西半は掘形の深いL139号住居跡によって消失し、検出は北東隅部と思われる狭小な部分である。竈などの検出もない。壁高は約10cmである。

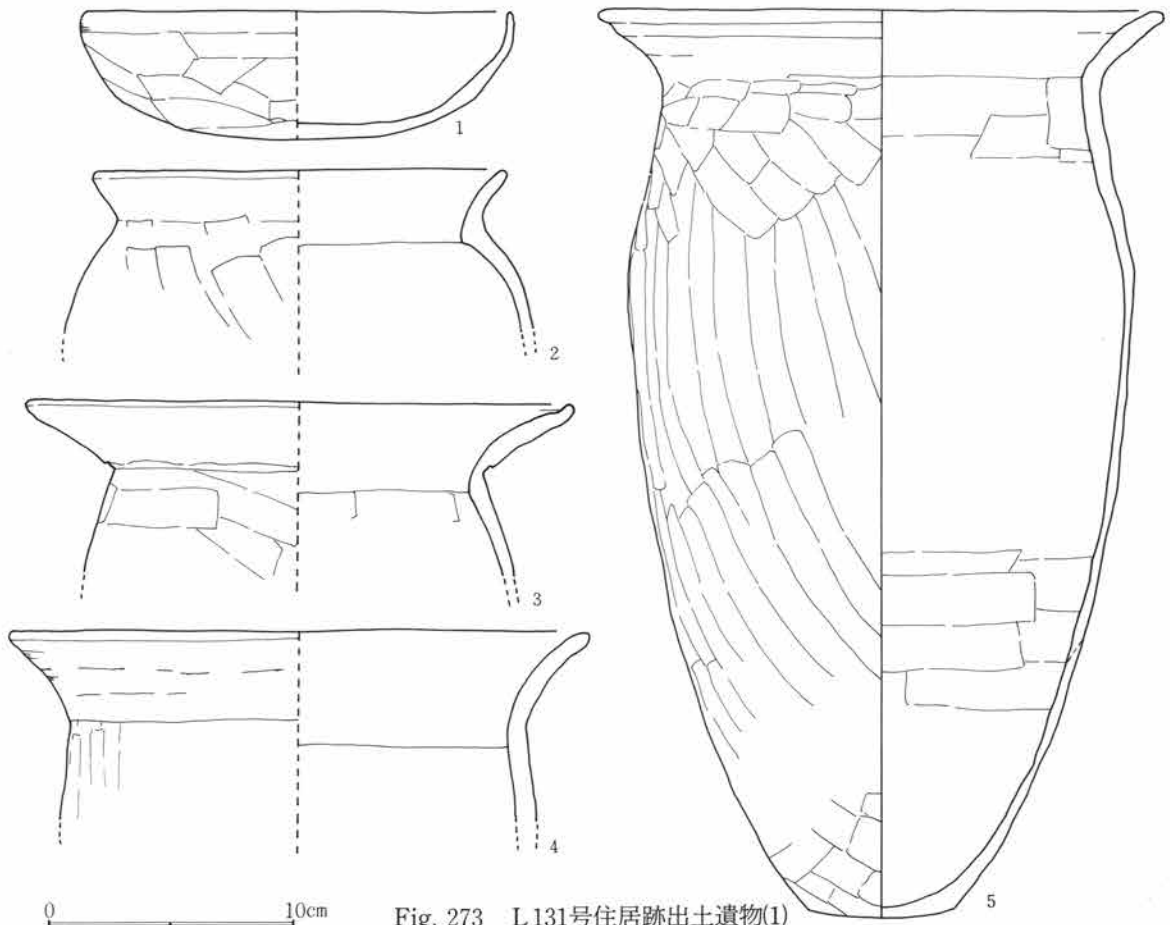


Fig. 273 L131号住居跡出土遺物(1)

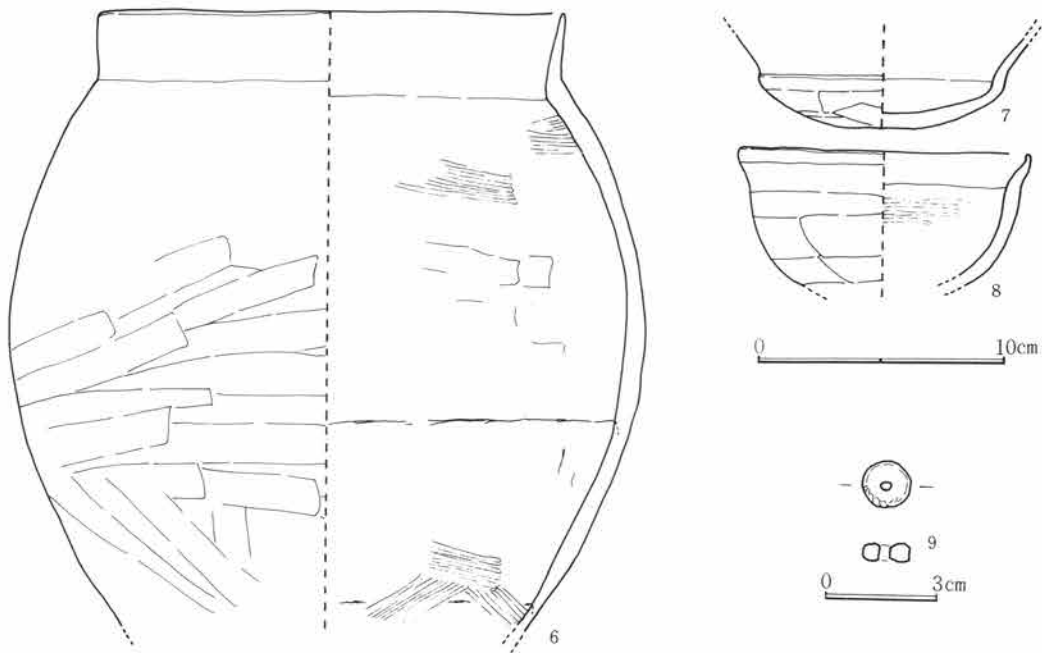


Fig. 274 L131号住居跡出土遺物(2)

L131号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
273-1 94-1	土師器 杯	破片	17.2× ×5.0	貯蔵穴	平底気味の底部。体部深く丸く張る。口縁部短く内湾気味に直立。口縁部横撫で。体・底部不定方向篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③細砂混る
273-2 94-2	土師器 甕	上半	16.4× ×(6.3)	埋土	胴上部丸く張り口縁部外反気味に開く。口唇部丸い。胴部斜位篋削り。口縁部横撫で。	①良好 ②鈍い灰褐 ③やや粗
273-3 94-3	土師器 甕	口縁部	21.8× ×(6.8)	竈埋土	肩張りなく長胴か。口縁部くの字状に強く外屈し口唇部受け口状。口縁部横撫で。肩部横・斜位篋削り。内面篋撫で。	①酸化 ②鈍い橙 ③砂混る
273-4 95-4	土師器 甕	口縁部	23.2× ×(7.5)	埋土	肩張りなく長胴か。口縁部外反して大きく開く。口唇部丸い。口縁部外面横撫で。内面横撫で。胴部縦位篋削り。	①良好 ②灰黄 ③やや粗
273-5 95-5	土師器 甕	完形	22.6×6.0× 35.8最大径20.2	竈埋土	胴部張り少なく長胴。口縁やや肥厚し強く外反し開く。口縁部横撫で。肩部横・斜位、胴部縦位篋削り。底部煤附着。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや粗
274-6 95-6	土師器 甕	底部欠損	18.6× 3)胴径25.2	埋土	胴部丸く張り口縁部直線的で直立。口唇部尖る。口縁部横撫で。胴部横・斜位篋削り。内面横撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗
274-7 95-7	土師器 杯	口唇部欠損	(11.4)× ×(3.5)	埋土	浅く丸い底部から口縁部は丸くくびれて外反して開く。口縁部横撫で。体部不定方向篋削り。	①良好 ②鈍い赤橙 ③やや密・細砂混る
274-8 95-8	土師器 杯	底部欠損	11.6× ×(5.3)	埋土	半球形の深い体部。口縁部僅かに外反。口唇部細り内湾気味に直立。口縁部横撫で。体部外面横位篋削。内面横篋磨。	①良好 ②鈍い赤橙 ③やや密
274-9 95-9	石製品 白玉	完形	径1.3厚0.5 孔径0.2	埋土	断面厚み不均一。両面側縁やや粗い調整。	滑石

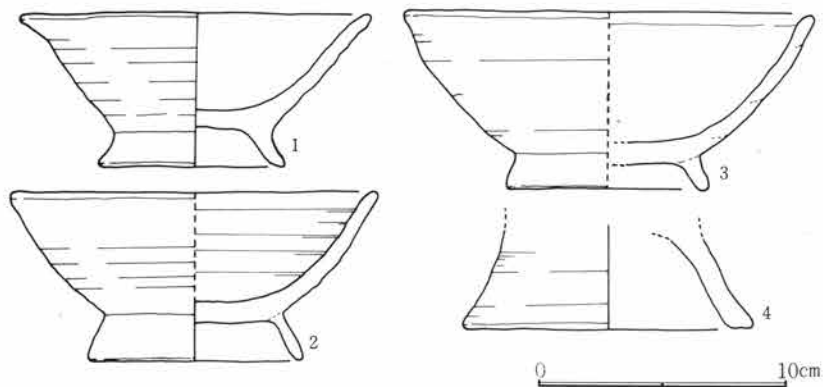


Fig. 275 L139号住居跡出土遺物(1)

第2章 遺構と遺物

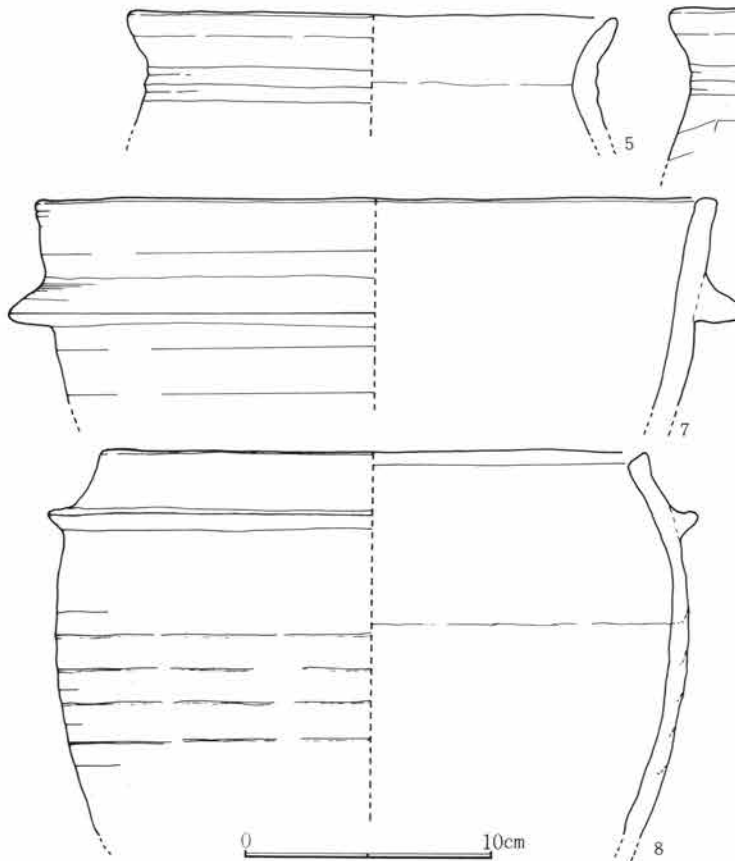


Fig. 276 L139号住居跡出土遺物(2)

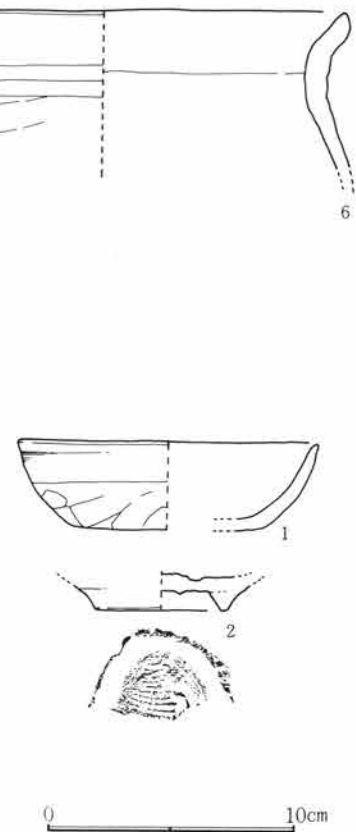


Fig. 277 L142号住居跡出土遺物

L139号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
275-1 95-1	須恵器 椀	完形	14.1×7.4 ×6.1	貯蔵穴	体部直線的に大きく開き口縁部弱く外反。口唇部丸い。付高台、高めで大きく外反して開く。端部丸い。轆轤成形。	①酸化気味 ②灰黄褐 ③やや粗
275-2 95-2	須恵器 椀	1/4	14.6×8.6 ×6.7	貯蔵穴・ 竈埋土	腰部丸味をもち体部上半直線的に開く。口唇部丸い。付高台、やや高く直線的に開き端部丸い。内面凹線状調整痕。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや粗・砂混る
275-3 95-3	須恵器 椀	1/4	16.4×8.0 ×7.0	貯蔵穴	体部丸く内湾気味に大きく開く。口縁部僅かに外反。口唇部丸い。付高台、ハの字状に開き端部丸い。轆轤成形。	①酸化 ②鈍い黄橙 ③やや粗・砂混る
275-4 95-4	須恵器 椀	台部	—×11.6 ×(3.9)	貯蔵穴	高い付高台、内湾気味で下半は直線的に開く。端部下面平坦。轆轤成形。	①酸化 ②鈍い黄橙 ③やや粗・白色粒混
276-5 95-5	須恵器 甕 破片	口縁部	19.6×— ×(4.5)	竈	肩部張り少なく口縁部外傾。頸部に3条の凸線状段。	①酸化 ②橙 ③やや粗・白色粒混
276-6 95-6	須恵器 甕	口縁部	19.7×— ×(6.0)	竈	肩部張り少なく口縁部内湾気味に外傾。頸部数条の凸線巡る。肩部斜位寛削り。口縁部横撫で。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや粗・白色粒混
276-7 95-7	須恵器 羽釜	上半	27.2×— (8.1)口径29.4	竈	胴部から口縁部直線的に外傾。口唇部平坦をなす。鋳大きく突出しやや下方に向く。	①還元 ②黄灰 ③やや粗・白色粒混
276-8 95-8	須恵器 羽釜	下半欠 損	21.8×—×(1 5.3) 口径26	貯蔵穴	胴部丸く脹らむ。口縁部僅かに外反して内傾。口唇部肥厚し上端面は内斜。口縁部横撫で。胴部に回転横撫で凹凸。	①酸化気味 ②灰黄 ③やや粗

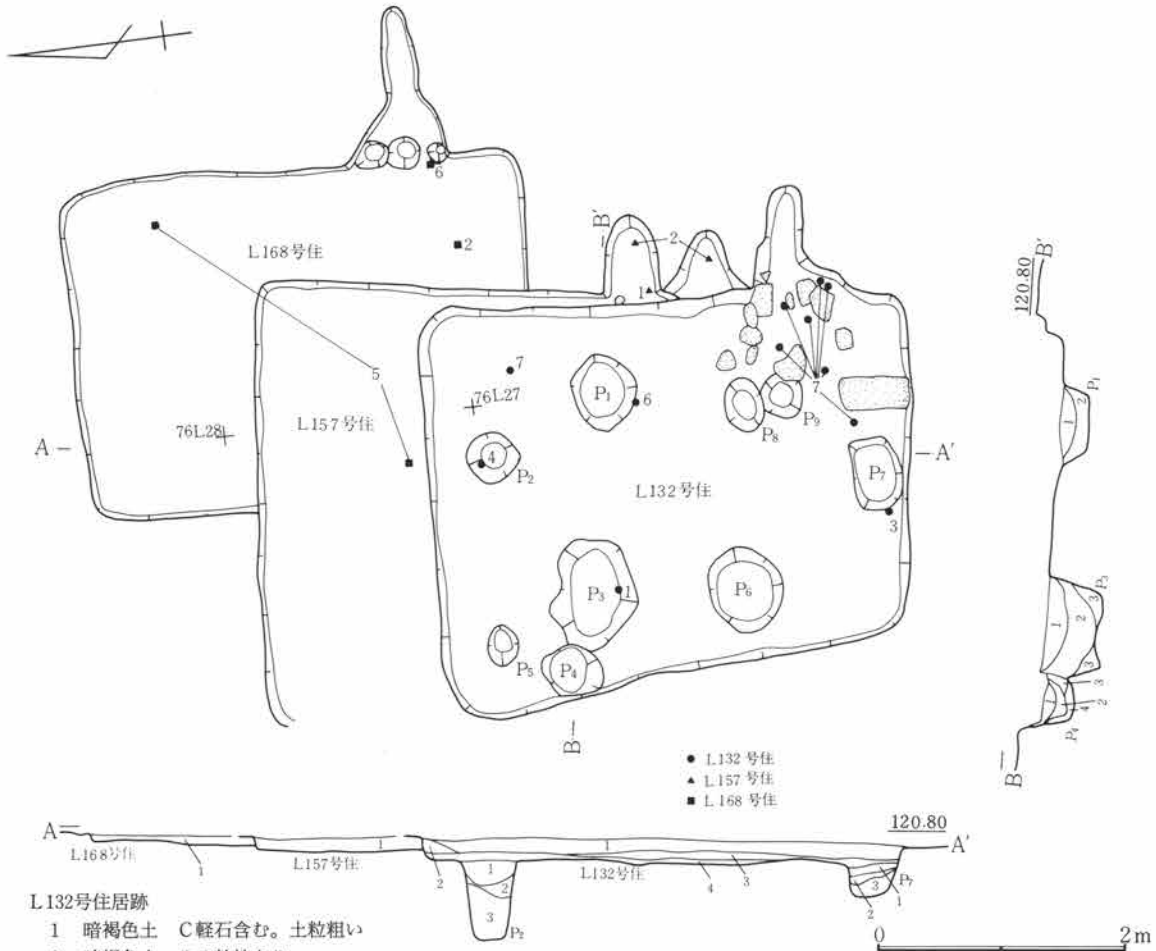
L142号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
277-1 96-1	土師器 杯	1/4	12.0×8.0 ×(3.5)	+8	底部平底。体部内湾し口縁部僅かに外反して開く。口縁部横撫で。体部寛削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
277-2 96-2	須恵器 椀	底部	—×5.4 ×(1.5)	埋土	腰部寛撫で。付高台、雑な作り。回転糸切り。	①良好 ②灰褐 ③やや密

L132号住居跡 (Fig. 278、279、281・PL. 21、96)

L区第4台地の調査区西側の中央部に位置し、75~77L25~27の範囲にある。L146号・L157号・L164号・L168号住居跡と重複しており、いずれより古い時期の所産である。

平面形は南北に長軸をもつ略方形を呈するが、南壁の短い不整形である。南北軸3.85m・東西軸3.2mを測り、東西軸方位はおおよそN-92°-Eを示す。壁高は約15cmを測り、床面は平坦をなす。住居内にはPit状の落ち込みが多く検出されているが、住居中央部を中心に明褐色土細砂質土が貼床として用いられており、前述 Pit 群は床下に伴うものと考えられる。



L132号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石含む。土粒粗い
- 2 暗褐色土 やや粘性あり
- 3 明褐色土 炭化粒含み、粘性あり(貼床)
- 4 暗褐色土 C軽石含む(掘形)

L157号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒含む

L168号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石含む

L132号住居跡P₁

- 1 黒色土 焼土粒・炭化粒含む
- 2 黒色土 暗褐色土塊・焼土粒を含み、やや粘性あり

L132号住居跡P₂

- 1 黒褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒少量含む
- 2 黒褐色土 C軽石少量含む
- 3 黒褐色土 土器細片多く含む

L132号住居跡P₃

- 1 黒褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒を含む
- 2 黒褐色土 Loam 塊含む
- 3 黒褐色土 Loam 塊多く含む

L132号住居跡P₄

- 1 黒褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒少量含む
- 2 黒褐色土 Loam 塊含む
- 3 Loam 塊層 黒褐色土混じり
- 4 黒褐色土 Loam 塊含む

L132号住居跡P₇

- 1 黒褐色土 C軽石含み焼土粒・炭化粒少量
- 2 黒褐色土 C軽石少量含む
- 3 黒褐色土

Fig. 278 L132号・L157号・L168号住居跡

第2章 遺構と遺物

竈は東壁にあり大きく南に偏って付設される。袖部は東壁線上にあり、左右袖部には凝灰岩質の加工材が残る。竈前面には構築材が散乱し、15×30cm大の天井材と思われるものもある。燃焼部から緩い傾斜をなす長めの煙道部が延びる。燃焼部から煙道部にかけての側壁は焼土化が著しく、燃焼部内から前面には灰層が流出している。袖材間内法約15cm、燃焼部奥行き約45cm、煙道部長さ40cmを測る。

出土遺物は散在しており、灰釉陶器・羽釜などがある。

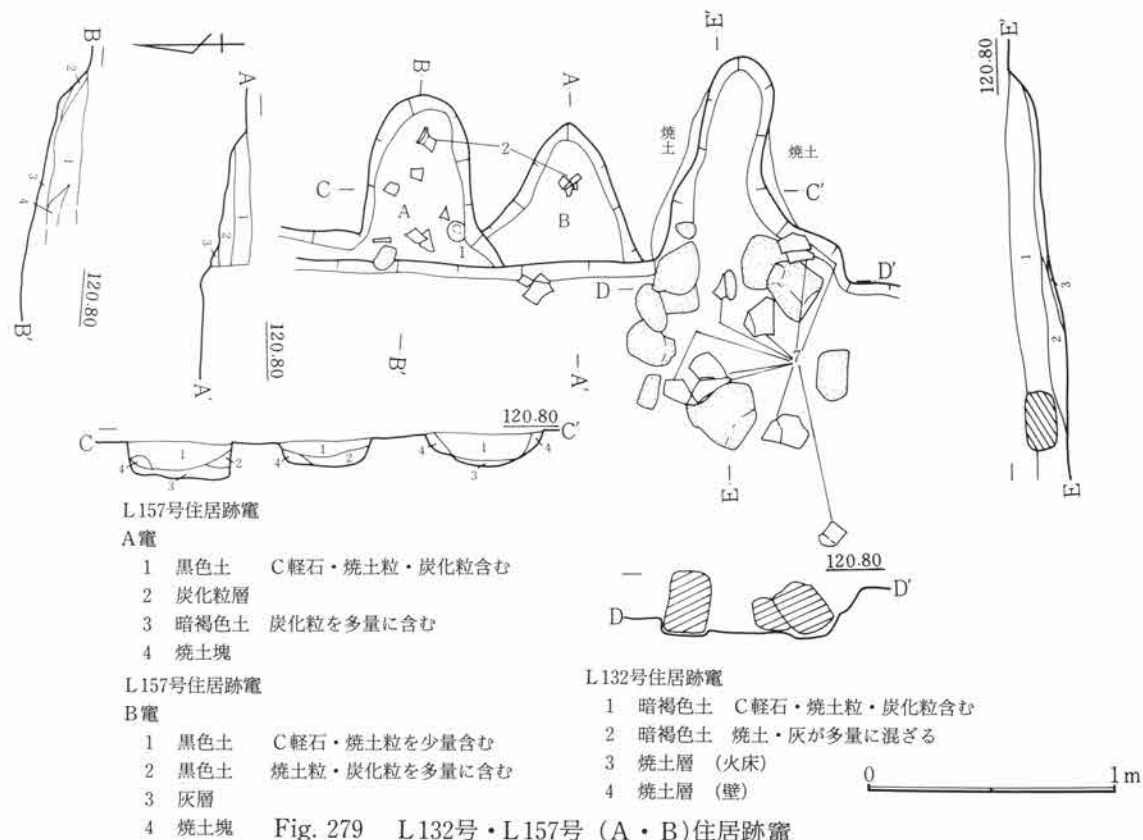
L 157号住居跡 (Fig. 278、279、282・PL. 21、96)

L区第4台地の調査区西側中央部に位置し、74~76L26~28の範囲にある。L132号・L168号住居跡と重複しており、両者より古い時期の所産である。調査段階では、2基の竈の存在から重複が考えられていたが、現状ではL157号住居跡のA・B竈として同一住居跡に属するものとする。

平面形は方形を呈すると考えられるが、南壁線はL132号住居跡との重複で消失している。また西壁線は精査時の削平が深く壁線を検出できなかった。南北4m・東西3.3mの範囲まで確認した。東西軸方位はおおよそN-92°-Eを示す。検出面からの掘形は浅く、壁高は約10cmを測る。床面の踏み締まりは軟弱で、貯蔵穴などの諸施設は検出されなかった。

竈はA・Bとも東壁にあり、両竈とも南に偏って付設されB竈がより南にある。燃焼部は共に楕円形に掘り込まれ、煙道部などは検出されていない。作り替えなどによる変遷が考えられるが2基の竈前面は共にL132号住居跡の壁線で消失している。このため灰層などの堆積状態を観察することができず前後関係は不明である。A・B竈とも袖部をはじめ構築材などは遺存しない。A竈燃焼部幅45cm・奥行き60cm、B竈燃焼部幅60cm・奥行き約65cmを測る。

出土遺物は散在的で少量である。



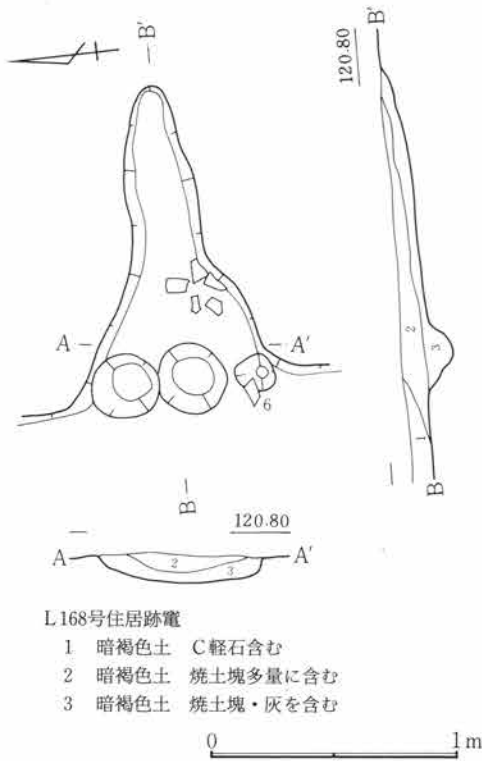
L 168号住居跡 (Fig. 278、280、283・PL. 21、96)

L区第4台地の調査区西側ほぼ中央に位置し、74~76L 26~28の範囲にある。L132号・L157号住居跡と重複し、L132号住居跡より旧く、L157号住居跡より新しい時期の所産である。

平面形は南北に長軸をもつ方形を呈する。南北長3.7m・東西長2.7mを測り、東西軸方位はN-88°-Eを示す。検出面からの掘形は極めて浅く、壁高4~5cm程度で部分的には壁線の痕跡を認めたにすぎない箇所もあった。床面はほぼ平坦をなすが踏み締まりは総じて弱い。貯蔵穴などの諸施設は検出されない。

竈は東壁にあり南に偏って付設される。燃烧部は楕円形に掘り込まれ、長い煙道部が延びる。袖部は東壁線上にあると思われ、左右袖部には構築材の埋設痕小穴が見られる。燃烧部は僅かに窪み、煙道部は段差なく緩い傾斜をなす。袖材埋設痕内法約30cm、燃烧部奥行き70cm、煙道部長さ75cmを測る。

出土遺物は須恵器小杯などがあり、散在している。



L168号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石含む
- 2 暗褐色土 焼土塊多量に含む
- 3 暗褐色土 焼土塊・灰を含む

Fig. 280 L 168号住居跡竈

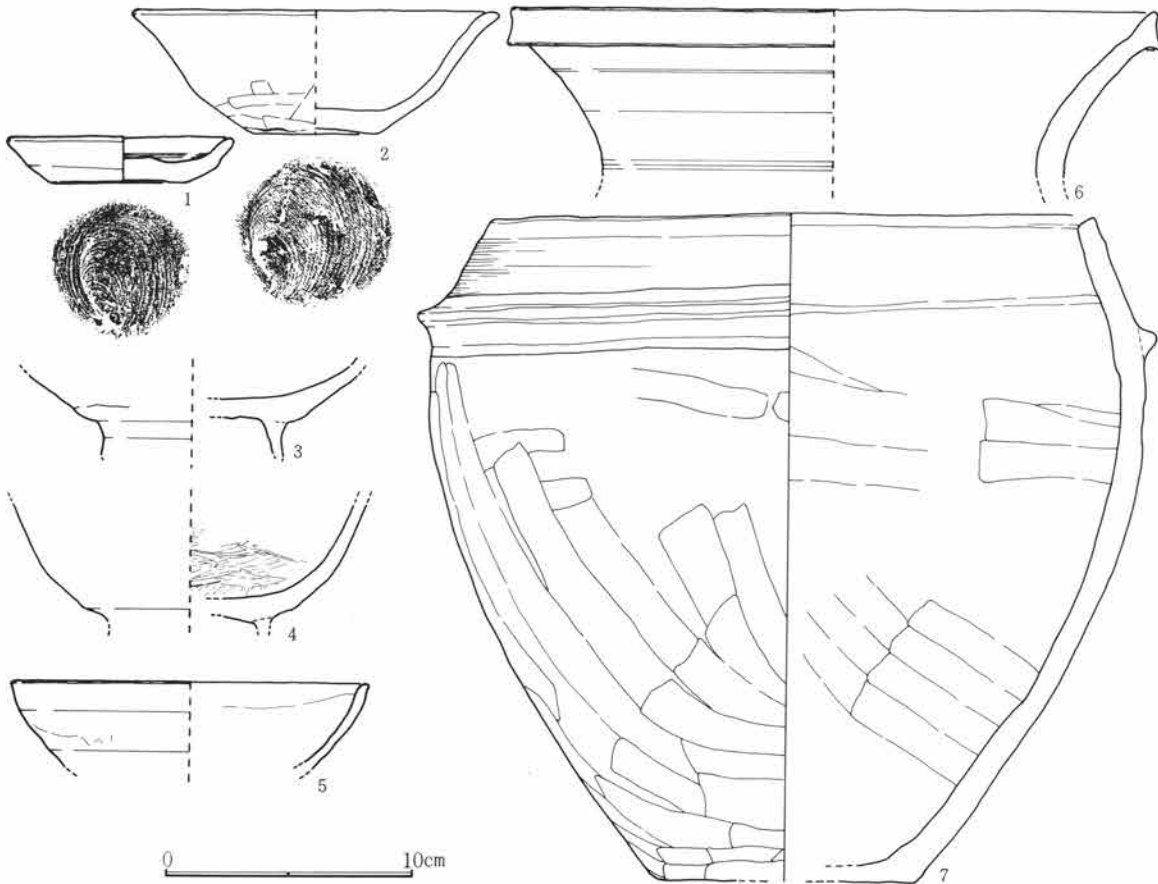


Fig. 281 L 132号住居跡出土遺物

第2章 遺構と遺物

L 132号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
281-1 96-1	須恵器 杯	ほぼ完形	9.0×5.4 ×1.9	Pit内	体部小さくくびれ直線的に外傾。口唇部丸い。見込部は凸状。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
281-2 96-2	須恵器 杯	1/2	14.6×4.7 ×4.9	掘形埋土 ・埋土	体部中位で張り口縁部は緩く外反。口唇部やや肥厚し端部尖る。轆轤成形。右回転糸切り。腰部に寛撫で。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや密・小石混る
281-3 96-3	須恵器 碗	破片	—×(7.3) ×(3.6)	Pit内	腰部に丸味。付高台、高くハの字状に開く。端部欠損。	①良好 ②灰白 ③やや粗・砂混る
281-4 96-4	内黒土器 碗	破片	—×(6.5) ×(4.8)	掘形・埋 土	腰部丸味強く張り体部上半直線的に開く。付高台剝離。内面黒色処理。見込部一定方向、体部横・不定方向筥磨き。	①良好 ②鈍い橙 ③密・白色粒混る
281-5 96-5	灰釉陶器 碗	口縁部 破片	14.2×— ×(3.4)	掘形	体部丸く内湾気味に開く。口縁部僅かに外反し口唇部は丸い。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③密
281-6 96-6	須恵器 甕	口縁部 破片	25.9×— ×(6.6)	掘形	頸部大きく外反。口唇部上下端は尖り突出。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③密
281-7 96-7	土師器 羽釜	1/2	24×10×26. 4 銜径29.4	竈	胴部丸味もち口縁部内傾。銜小さく突出断面丸い。器肉全体に厚い。口縁部横撫。胴部斜筥削り。内面横・斜筥撫。	①酸化・良好 ②橙 ③やや粗

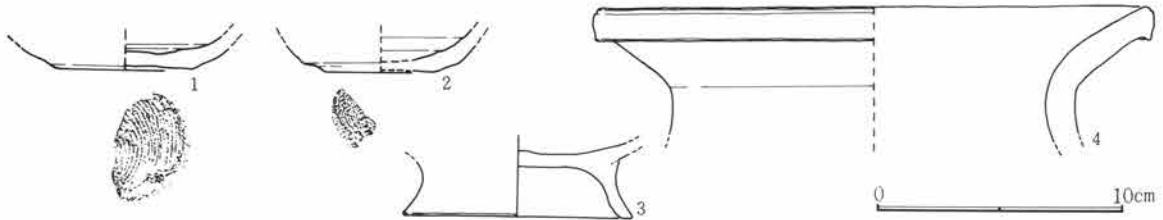


Fig. 282 L 157号住居跡出土遺物

L 157号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
282-1 96-1	須恵器 杯	底部	—×5.3 ×(1.4)	掘形	底径小さく腰部に丸味。轆轤成形。右回転糸切り。	①還元気味 ②浅黄 橙 ③やや粗
282-2 96-2	須恵器 杯	底部	—×4.4 ×(1.7)	掘形	底径小さく腰部に丸味。轆轤成形。右回転糸切り。	①還元気味 ②浅黄 橙 ③やや粗
282-3 96-3	須恵器 碗	高台部	—×9.1 ×(3.1)	竈	付高台、高くハの字状に開く。端部尖る。畳付部に浅い沈線巡る。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや密・砂混る
282-4 96-4	須恵器 甕	口縁部 破片	22.3×— ×(5.4)	竈	頸部は垂直気味に立ち口縁部は直線的に強く外傾。口唇部下端は尖り突出。上端は丸く段をなす。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③密・黒色粒混る

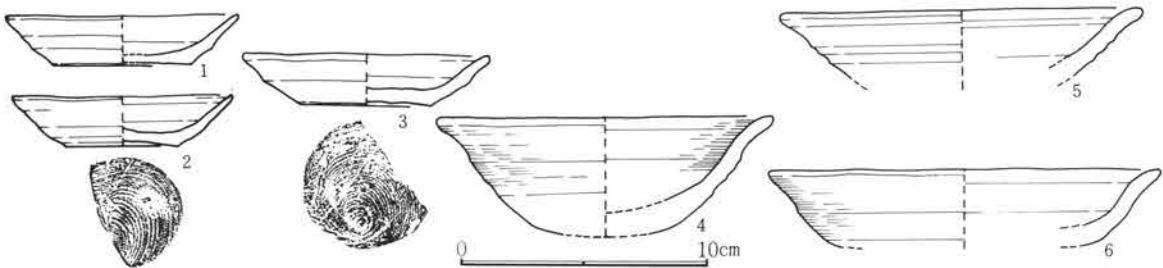


Fig. 283 L 168号住居跡出土遺物

L 168号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
283-1 96-1	須恵器 杯	1/4	9.3×5.6 ×1.9	埋土	腰部で小さく屈し体部直線的。口唇部やや細る。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②橙 ③やや粗
283-2 96-2	須恵器 杯	1/4	8.8×4.4 ×2.0	床直	器肉薄く腰部ややくびれる。体部直線的で口唇部細る。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや密

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
283-3 96-3	須恵器 杯	1/3	9.8×5.2 ×2.0	掘形埋土	腰部直線的に外傾し上半緩く外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 ②灰白 ③やや粗
283-4 96-4	須恵器 杯?	口縁部 破片	13.4× ×4.6	埋土	器肉厚い。底・体部丸味強い。口縁部大きく外反し口唇部丸い。轆轤成形。	①酸化気味 ②淡黄 橙 ③やや密
283-5 96-5	須恵器 杯	口縁部 破片	14.4× ×(2.7)	床直・ +3	体部直線的に大きく外傾し口縁部外反。口唇部丸い。轆轤成形。	①酸化気味 ②淡黄 ③やや密
283-6 96-6	須恵器 杯	口縁部 破片	15.6× ×(3.0)	竈	腰部丸味をもち口縁部大きく外反する。口唇部丸い。轆轤成形。	①酸化気味 ②淡黄 橙 ③やや粗

L 133号住居跡 (Fig. 284、285・PL. 22、97)

L区第4台地の調査区中央部やや北寄りに位置し、70~74L27~30の範囲にある。L194号住居跡と重複し、これより古い時期の所産である。この重複で東壁線は消失している。

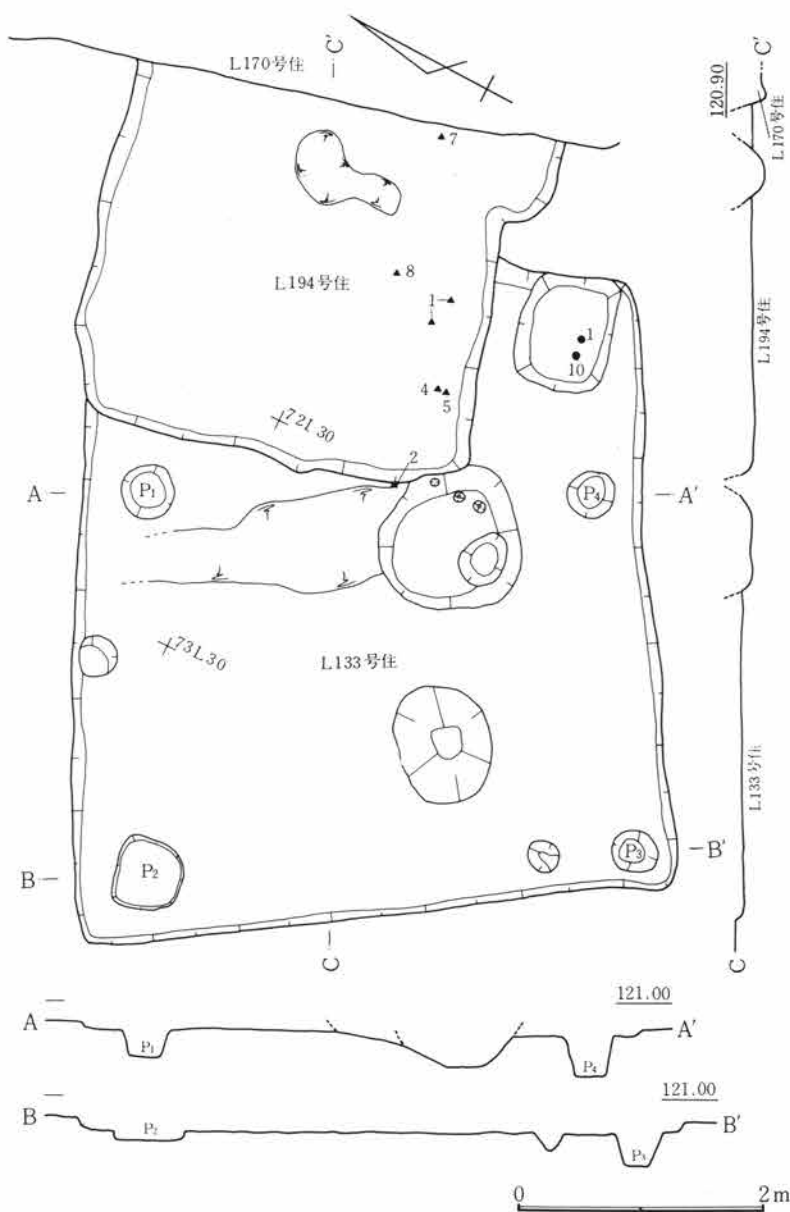


Fig. 284 L133号・L194号住居跡

平面形は東西軸が僅かに長い方形を呈する。東西長3.3m・南北長3.2mを測り、東西軸方位はN-57°-Eを示す。検出面からの掘形は浅く、壁高15cmを測る。床面は踏み締まりが弱く不安定である。貯蔵穴は南東隅に設けられ、75×90cm・深さ40cmの方形を呈す。貯蔵穴内からは土師器杯・甕型土器が出土している。柱穴にはP₁~P₄を想定できるが、配置は西側に偏りがある。またP₂は規模的に他と相違がみられる。P₁は上径42cm・下径30cm・深さ22cm、P₂は径55cm・深さ9cm、P₃は上径30cm・下径18cm・深さ32cm、P₄は上径35cm・下径20cm・深さ22cmを測り、ほぼ円形である。各柱間はP₁・P₂は3.05m、P₂・P₃は3.9m、P₃・P₄は2.8m、P₁・P₄は3.5mである。床面中央部と西側に円形土坑が検出されているが、当跡に伴う施設ではない。竈・炉などの施設は検出されなかった。出土遺物は貯蔵穴内の他は散在し、土師器内斜口縁杯などがある。

L194号住居跡 (Fig. 284、286・PL. 28、97)

L区第4台地の調査区中央やや北寄りに位置し、70~72L29~31の範囲にある。L133号・L170号住居跡と重複しており、前者より新しく後者より古い時期の所産である。L170号住居跡との重複部分の東壁線は消失している。

平面形は略方形と考えられるが南壁線は一部L字に折れる。南北長3.2m、東西は西壁より約2.9mの範囲まで確認した。東西軸方位はおよそN-74°-Eを示す。壁高は15~20cmを測り、床面はほぼ平坦をなすが踏み締まりは弱い。竈・貯蔵穴などの諸施設は検出されなかった。

出土遺物は散在しており須恵器小杯が多い。

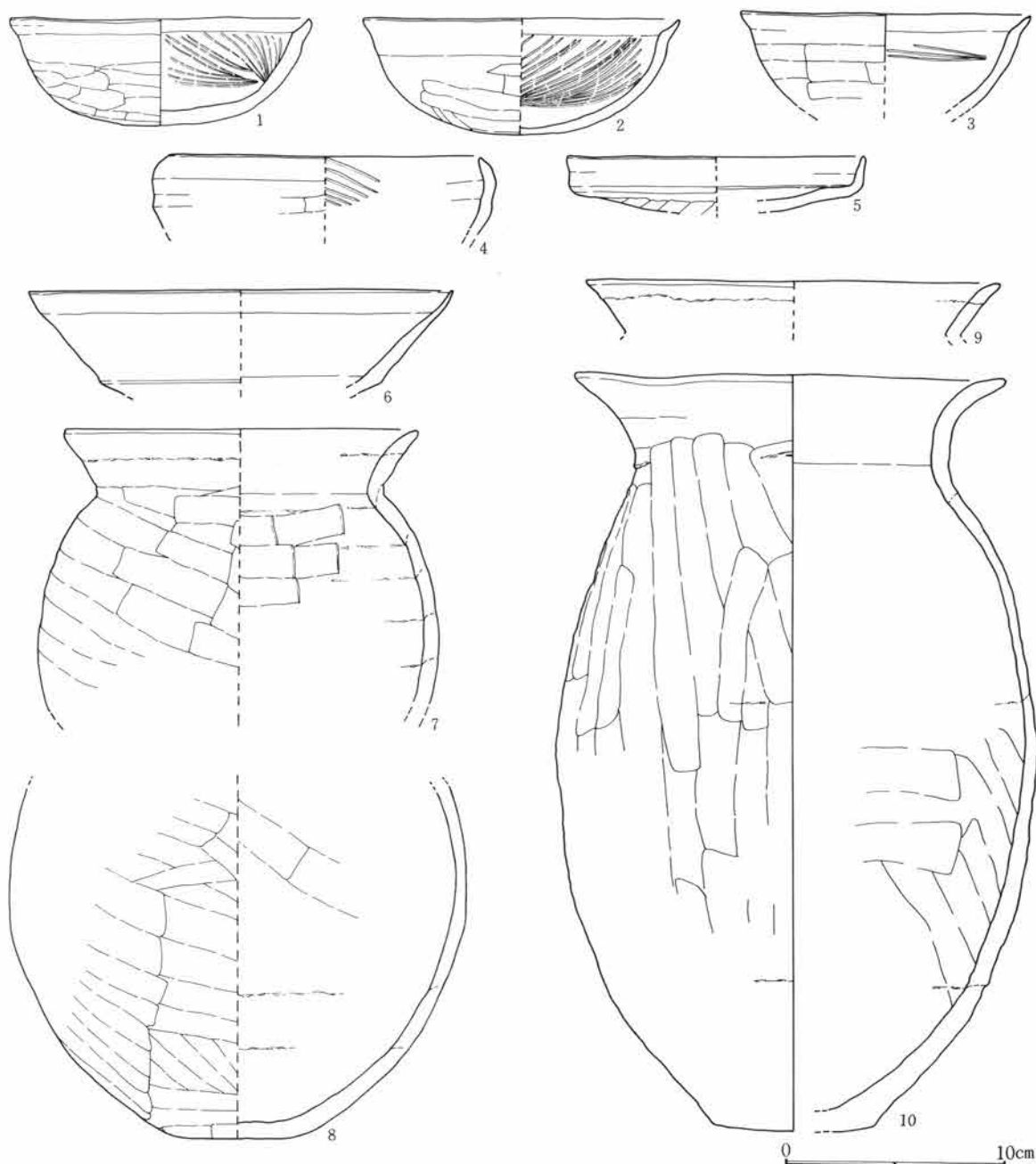


Fig. 285 L133号住居跡出土遺物

L 133号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
285-1 97-1	土師器 杯	完形	13.4× ×4.8	貯蔵穴	丸底。体部深く半球状。口縁部厚く強く外屈し内斜。口唇部尖る。口縁横撫で。体・底部篋削り。内面斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③密・赤色粒混る
285-2 97-2	土師器 杯	1/2	14.2× ×5.2	貯蔵穴埋土	丸底。体部深く半球状。口縁部細り強く外屈し内湾気味に内斜。内面斜行篋磨き。口縁部横撫で。体・底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
285-3 97-3	土師器 杯	口縁部	13.0× ×(4.1)	埋土	体部深く半球状。口縁部強く外屈し内斜。内面横篋磨き。外面横位篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
285-4 97-4	土師器 杯	口縁部	14.0× ×(3.4)	埋土	体部から口縁部にかけて強く内屈。口唇部尖る。口縁部横撫で。体部篋削り。内面斜行篋磨き。	①酸化 ②橙 ③やや粗
285-5 97-5	土師器 高杯	杯口 縁部	13.4× ×(2.5)	埋土	極めて扁平。口縁部直線的で直立気味。口唇部尖る。口縁部横撫で。腰部外面篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
285-6 97-6	土師器 高杯	体部破片	19.0× ×(4.6)	埋土	腰部で屈し体部直線的に大きく外傾。口縁部僅かに内湾。口縁部内外面横撫で。外面摩耗著しい。	①良好 ②橙 ③やや密
285-7 97-7	土師器 甕	下半欠損	15.8× ×(12.3)	埋土	最大径胴部中位で丸く張り口縁部緩く外反しくの字状に開く。口縁部横撫で。胴部斜位篋削り。内面横篋磨き。接合痕。	①酸化 ②橙 ③やや粗
285-8 97-8	土師器 甕	上半欠損	—×5.6 ×(15.5)	埋土	底部丸底気味。胴部丸味強く球形を呈す。胴部から底部斜位篋削り。内面斜篋磨き。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
285-9 97-9	土師器 甕	口縁部	18.5× ×(2.4)	埋土	口縁部大きくくの字状に開く。口唇部細る。口縁部に接合痕。	①良好 ②鈍い褐 ③やや粗
285-10 97-10	土師器 甕	1/2	19.4×7.2 ×33.3	貯蔵穴	長胴だが最大径は中位でやや張る。肩部は緩く、口縁部強く外反して開く。胴部縦位篋削り。内面横・斜位篋磨き。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密

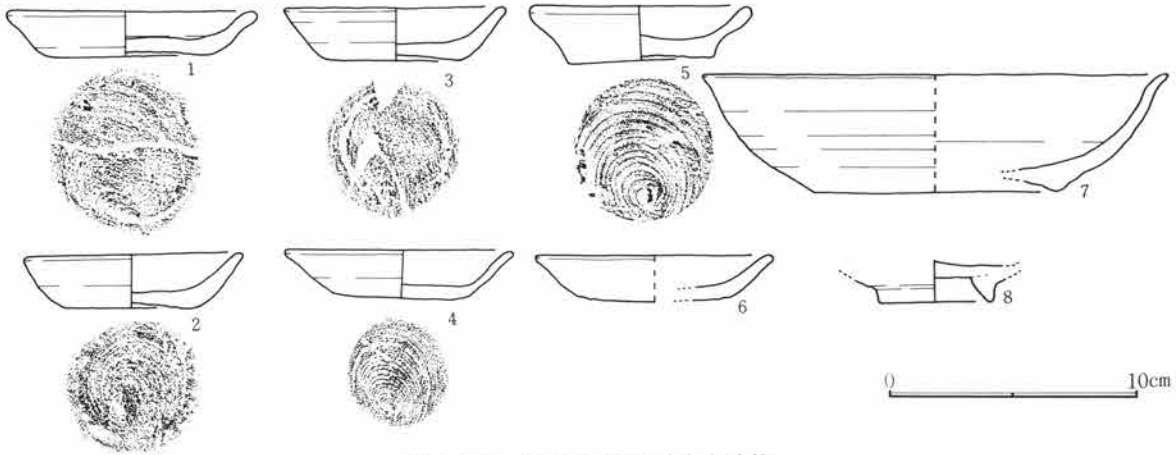


Fig. 286 L194号住居跡出土遺物

L 194号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
286-1 97-1	須恵器 杯	ほぼ完形	10.0×6.0 ×1.9	埋土	腰部やや肥厚して張り浅い。口縁部僅かに外反して開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②灰白 ③やや密
286-2 97-2	須恵器 杯	ほぼ完形	8.7×5.2 ×2.2	埋土	腰部肥厚し体部直線的に外傾して開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②鈍い黄橙 ③やや密
286-3 97-3	須恵器 杯	1/2	8.8×5.2 ×2.1	埋土	腰部やや肥厚し直線的に外傾して開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②鈍い黄橙 ③やや密
286-4 97-4	須恵器 杯	1/2	9.0×4.2 ×2.1	埋土	器内薄い。体部緩く外反して開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
286-5 97-5	須恵器 杯	1/2	8.9×5.8 ×2.4	埋土	底部肥厚。腰部くびれ外傾して開く。口縁部肥厚し口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②鈍い橙 ③やや粗
286-6 97-6	須恵器 杯	1/2	9.6×6.0 ×(1.8)	埋土	腰部丸味をもち体部僅かに外反して開く。轆轤成形。	①酸化・良好 ②鈍い橙 ③砂多量に混
286-7 97-7	須恵器 杯	破片	18.6×9.8 ×4.7	埋土	体部内湾し口縁部強く外反。口唇部尖る。底部切り離し不明。	①良好 ②灰白 ③やや密
286-8 97-8	須恵器 椀	底部	—×4.5 ×(1.6)	埋土	付高台、肥厚し低い。轆轤成形。	①酸化・良好 ②灰 ③密

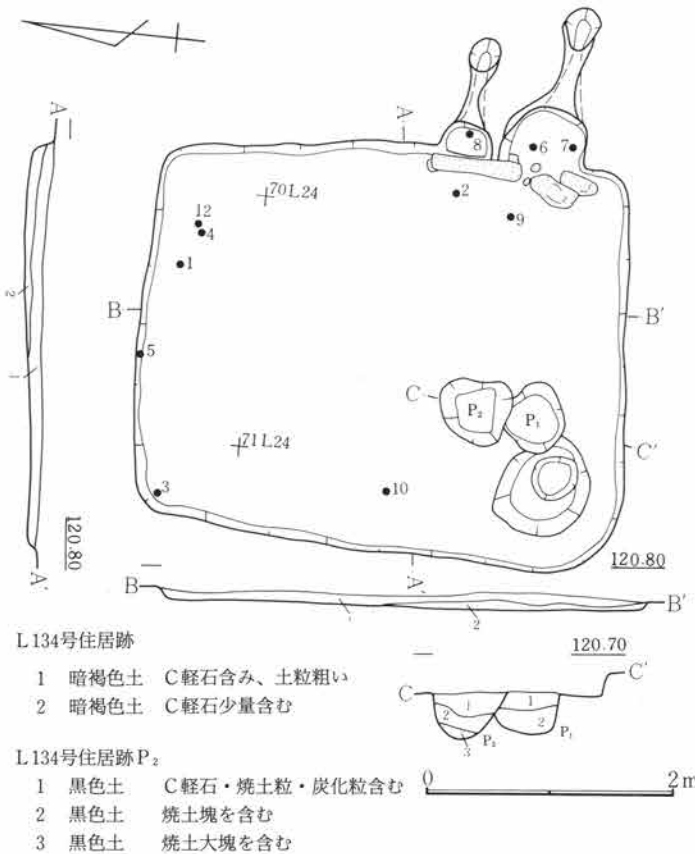


Fig. 287 L134号住居跡

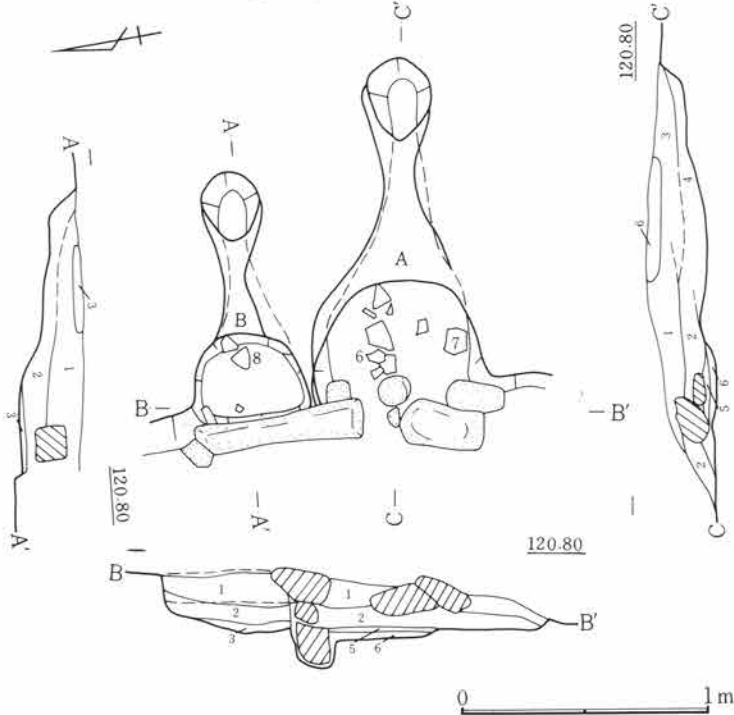


Fig. 288 L134号住居跡竈 (A・B)

L134号住居跡 (Fig. 287~289・PL. 22、98)

L区第4台地の調査区ほぼ中央に位置し、69~71L22~24の範囲にある。L209号・L182号住居跡と重複しているが両者より新しい時期の所産である。

平面形は南北に長軸をもつ方形を呈する。南北長3.85m・東西長3.25mを測り、東西軸方位はN-87°-Eを示す。竈は2基 (A・B) が検出され、調査時には重複として住居名を付したが、ここでは拡張ないしは建替えとし同一住居跡で記述する。壁高は約20cm、床面はほぼ平坦をなし踏み締まりは良好である。貯蔵穴と思われる Pit は南西隅にあり竈に対応するように2基検出されている。Pit 1は径45cm・深さ34cm、Pit 2は径75cm・深さ44cmを測り共に楕円形を呈する。当該跡の拡張・建替えを考えた場合、位置的・深さなどの規模からPit 1は前、2は後に設けられたものであろう。

竈は東壁にあり南に偏って付設されるが、A竈はより南に偏る。B竈は東壁線に対し軸線がほぼ直になる。やや狭小な燃焼部が半円形に掘り込まれ、長めの煙道部が緩い傾斜をもって延びる。煙道部には焼土化した天井が残り、先端は煙出し孔を形成する。燃焼部前面にはA竈に一

L134号住居跡竈

A竈

- 1 暗褐色土 C軽石を含む
- 2 暗褐色土 C軽石・炭化粒含む
- 3 暗褐色土 焼土粒を含む
- 4 黒褐色土 焼土粒・炭化粒含む
- 5 灰層
- 6 焼土層 (天井・火床)

B竈

- 1 黒褐色土 焼土塊・炭化粒を含む
- 2 暗褐色土 焼土塊多量に含む
- 3 焼土層 (天井・火床)

部かかる範囲で長さ70cm・10cm角の凝灰岩質加工材が横たわる。燃烧部幅45cm・奥行き30cm、煙道部長さ約68cm、煙出し孔径20cmを測る。A竈は東壁線直交軸より約10°南へ傾く。東壁線上に袖部として凝灰岩質加工材を埋設し、中間には焚口天井材が崩落する。形態はB竈に類似しており、半円形に大きく掘り込まれた燃烧部から緩い傾斜の長い煙道部が続く。煙道部は焼土化した天井が残り、先端部は煙出し孔を形成している。燃烧部幅70cm・奥行き50cm、煙道部長さ90cm、煙出し孔径25cmを測る。A・B竈の前後関係については、燃烧部前面の天井材・袖部の共用などから併用が考えられたが、B竈の火床が一部断ち切れ床面と僅かに段差をもつことから、住居跡の拡張・建替えなどで、A竈が新設されたと判明した。これによってA竈には貯蔵穴1が、B竈には貯蔵穴2の対応が想定される。なお、南西隅の土坑は不明である。

出土遺物は竈内で集中し、他は散在的であった。須恵器小杯・灰釉陶器片・鉄器などがある。

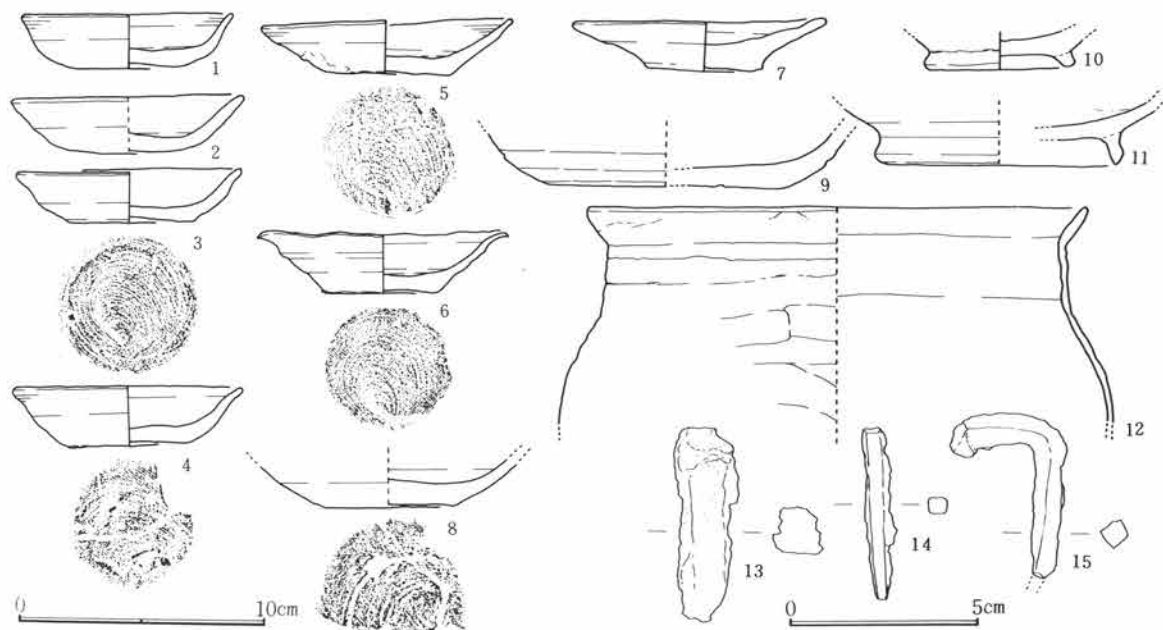


Fig. 289 L134号住居跡出土遺物

L134号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
289-1 98-1	須恵器 杯	完形	8.5×4.4 ×2.1	+5	底部肥厚。腰部丸い。体部薄く緩く外反。見込部巻き上げ痕。轆轤成形。回転筥切り?	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③やや密
289-2 98-2	須恵器 杯	1/2	9.3×5.2 ×2.2	床下・埋土	器肉厚く腰部丸味強い。体部直線的に外傾。轆轤成形。回転系切り。	①酸化気味・良好 ②淡黄 ③やや密
289-3 98-3	須恵器 杯	完形	9.0×5.1 ×2.1	床下	体部内湾気味に開き口縁部緩く外反。轆轤成形。右回転系切り。	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③やや密
289-4 98-4	須恵器 杯	1/2	9.3×4.9 ×2.4	+2	腰部丸く体部～口縁部外反。轆轤成形。右回転系切り。	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③やや密
289-5 98-5	須恵器 杯	ほぼ完形	10.0×5.5 ×2.1	+2	底部肥厚し体部直線的に外傾。歪み大。轆轤成形。右回転系切り。	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③やや密
289-6 98-6	須恵器 杯	3/4	10.0×4.8 ×2.5	竈	腰部肥厚。体部極めて薄く直線的に大きく開く。口縁部はFrill状に外反。轆轤成形。右回転系切り。	①酸化気味・良好 ②鈍い橙 ③やや密
289-7 98-7	須恵器 皿	ほぼ完形	10.2×4.6 ×1.9	竈	底部極めて肥厚し突出気味。体部大きく開き口縁部水平気味。轆轤成形。右回転系切り。	①酸化気味・良好 ②鈍い橙 ③やや密
289-8 98-8	須恵器 杯	底部	-×5.2 ×(1.9)	竈	腰部張る。轆轤成形。回転系切り。	①良好 ②橙 ③砂混る
289-9 98-9	内黒土器 鉢?	底部1/2	-×9.2 ×(2.2)	竈	器肉厚く腰部に丸味。内面黒色処理。轆轤成形。回転筥割り。内面筥磨き。	①良好 ②灰白 ③やや密・白色粒混

第2章 遺構と遺物

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
289-10 98-10	須恵器 椀	底部	—×6.0 ×(1.5)	+7	付高台、低くハの字状に開く。轆轤成形。見込部に巻き上げ痕。	①酸化気味・良好 ②淡橙 ③やや密
289-11 98-11	灰釉陶器 椀	底部	—×10.0 ×(2.5)	埋土	見込部凹む。付高台、高く弱い面取り。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③密
289-12 98-12	土師器 甕	下半欠損	20.0×— ×(8.5)	竈埋土	胴部張る。口縁部直立し上半は外反するコの字口縁。口縁部横撫で。胴部上半横・斜位窺削り。	①良好 ②橙 ③やや密
289-13 98-13	鉄器 不明		長(5.3) 幅1	埋土	角棒状になるか。	
289-14 98-14	鉄器 釘	頭部欠損	長(4.6) 幅0.4	埋土	頭部形状不明。	
289-15 98-15	鉄器 釘	端部欠損	長(4.2) 幅0.6	埋土	頭部形状折頭式か。身部L字状に曲がる。	

L 135号住居跡 (Fig. 290、291・PL. 22、98)

L区第4台地の調査区北西寄りに位置し、72~74L31~33の範囲にある。L219号住居跡と重複しているがこれより新しい時期の所産である。

平面形は南北に長軸をもつ方形である。南北長4.05m・東西長2.95mを測り、東西軸方位はN-70°-Eを示す。壁高は24cm、床面はほぼ平坦をなすが中央部の踏み締まりは弱い。床下には大きく不整楕円形の挿鉢状落ち込みが検出されているが、床土には貼床を思わせる施工は認められない。

竈は東壁にあり大きく南に偏って付設される。袖部は東壁線上に風化の進んだ凝灰岩質加工材の残欠がある。燃焼部幅50cm・奥行き65cmを測る。

出土遺物は須恵器小杯・灰釉陶器など散在して検出された。

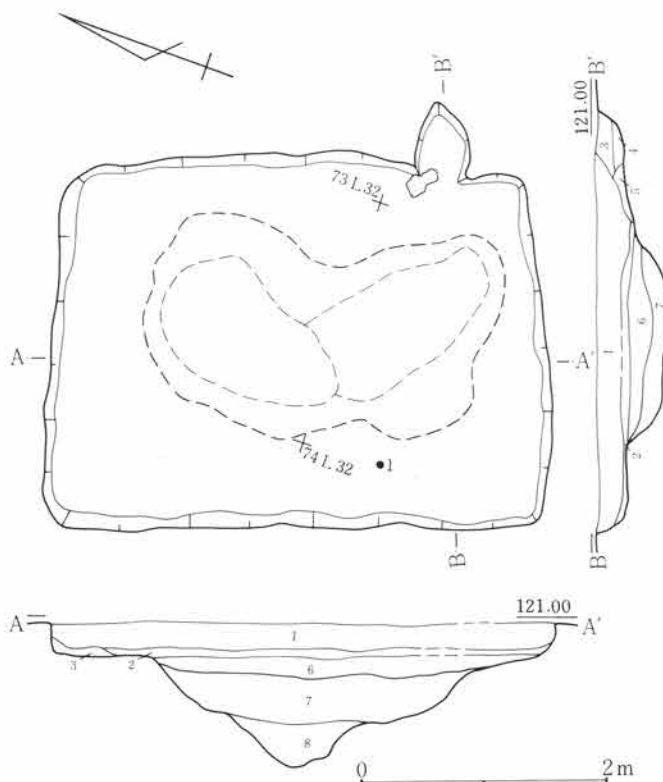


Fig. 290 L 135号住居跡

L 135号住居跡

- 1 黒褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒含む
- 2 黒褐色土 1層よりC軽石粒が細かく含まれ、1層に似る
- 3 黒褐色土 粘土質褐色土が塊状に混入。2層との混土層
- 4 黒褐色土 3層よりC軽石が少なく1層によく似る
- 5 黒色土 3層によく似る硬質砂層
- 6 黒色土 C軽石・焼土粒・炭化粒を含む。C軽石が目立つ硬質砂層
- 7 黒色土 C軽石・焼土粒・炭化粒を僅かに含む。弱粘質土層
- 8 黒色土 暗褐色土砂層の塊を含む。C軽石・焼土粒・炭化粒を僅かに含み、7層に似る弱粘質土層

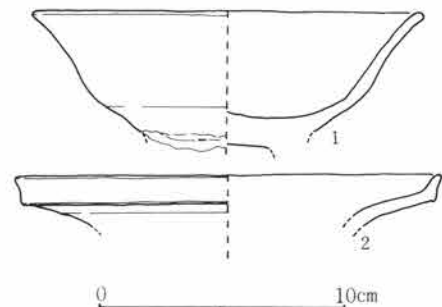


Fig. 291 L 135号住居跡出土遺物

L 135号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
291-1 98-1	須恵器 椀	高台部 欠損	15.6× ×(5.4)	埋土・ +21	底部肥厚。体部中位で丸く張った後外反して開く。口唇部丸い。見込部盛り上がる。回転糸切り後付高台。	①良好 ②浅黄 ③やや密・砂混る
291-2 98-2	灰釉陶器 甕	口縁部 破片	16.9× ×(1.9)	埋土	口縁部大きく外反し口唇部外反気味に立つ。	①良好 ②灰白 ③密

L 136号住居跡 (Fig. 292~294・PL. 22、98、99)

L区第4台地の調査区北西部に位置し、72~74L33~35の範囲にある。L174号・L219号住居跡と重複しており両者より新しい時期の所産である。

平面形は南北軸がやや長い方形である。南北長3.4m・東西長3.05mを測り、東西軸方位はN-70°-Eを示す。壁高は27cm、床面は平坦をなし踏み締まりは良好である。Pitは2箇所を検出されているが、P₁は径45cm・深さ54cmを測り円形である。骨片の痕跡が認められるが当跡に伴わない可能性もある。P₂は径40cm・深さ52cmの円形である。

竈は東壁にあり南に偏って付設される。やや幅広な燃焼部で、東壁線上左右袖部と燃焼部先端部外の左右には凝灰岩質石材が埋設される。竈前面には広く灰層が流出し構築材が散乱する。袖材間内法65cm、燃焼部奥行き60cmを測る。

出土遺物は散在して検出され、須恵器椀・内黒土器・灰釉陶器片・土師器甕・羽釜などがある。

L 174号住居跡 (Fig. 292、295・PL. 23、99)

L区第4台地の調査区北西部に位置し、72~74L34~35の範囲にある。L136号住居跡と重複しておりこれより古い時期の所産である。また当跡の位置からL219号住居跡とも重複していると思われるが、出土遺物の比較によればこれより新しい時期である。

南西部は掘形の深いL136号住居跡で消失しているが、平面形は方形であろう。東西長3.7m、南北は北壁より約3.6mの範囲まで確認した。東西軸方位はおよそN-76°-Eを示す。壁高は約20cmを測り、床面は平坦をなすが踏み締まりは弱い。北側に径95×105cm・深さ45cmの楕円形土坑が検出されているが、埋土は相対的に粘性があり堅く締まっており床下土坑の可能性もある。

竈は東壁に付設され、袖材などの痕跡は確認されていない。燃焼部は楕円形に掘り込まれ、火床面の焼土層は粉碎状態であった。燃焼部幅80cm・奥行き85cmを測る。

出土遺物は少量・散在的で土師器甕などがある。

L 219号住居跡 (Fig. 292、296・PL. 23、99、100)

L区第4台地の調査区北西部に位置し、73~76L31~34の範囲にある。L79号・L135号・L136号・L174号住居跡と重複しているがいずれより古い時期の所産である。西壁の一部と北東部は掘形の深いL79号・L136号住居跡によって消失している。当跡には竈・炉・柱穴など生活諸施設が見られず、竪穴住居跡としての認定はできにくいだが、ここでは住居跡として記述する。

平面形は東西に長軸をもつ方形である。東西長約6m・南北長5.6mを測り、東西軸方位はおよそN-69°-Eを示す。壁高は約23cmを測り、床面は平坦をなすが全体に軟弱である。東・南・北壁には壁下の溝が巡り、幅13cm・深さ5~6cmを測る。

第2章 遺構と遺物

竈は検出されていないが住居跡中央部に凝灰岩質の加工材残欠があり、竈ないしは炉のような施設がいずれかに付設されていた可能性が考えられる。

出土遺物は散在して検出され、土師器杯類・甑などの他須恵器埴輪片がある。

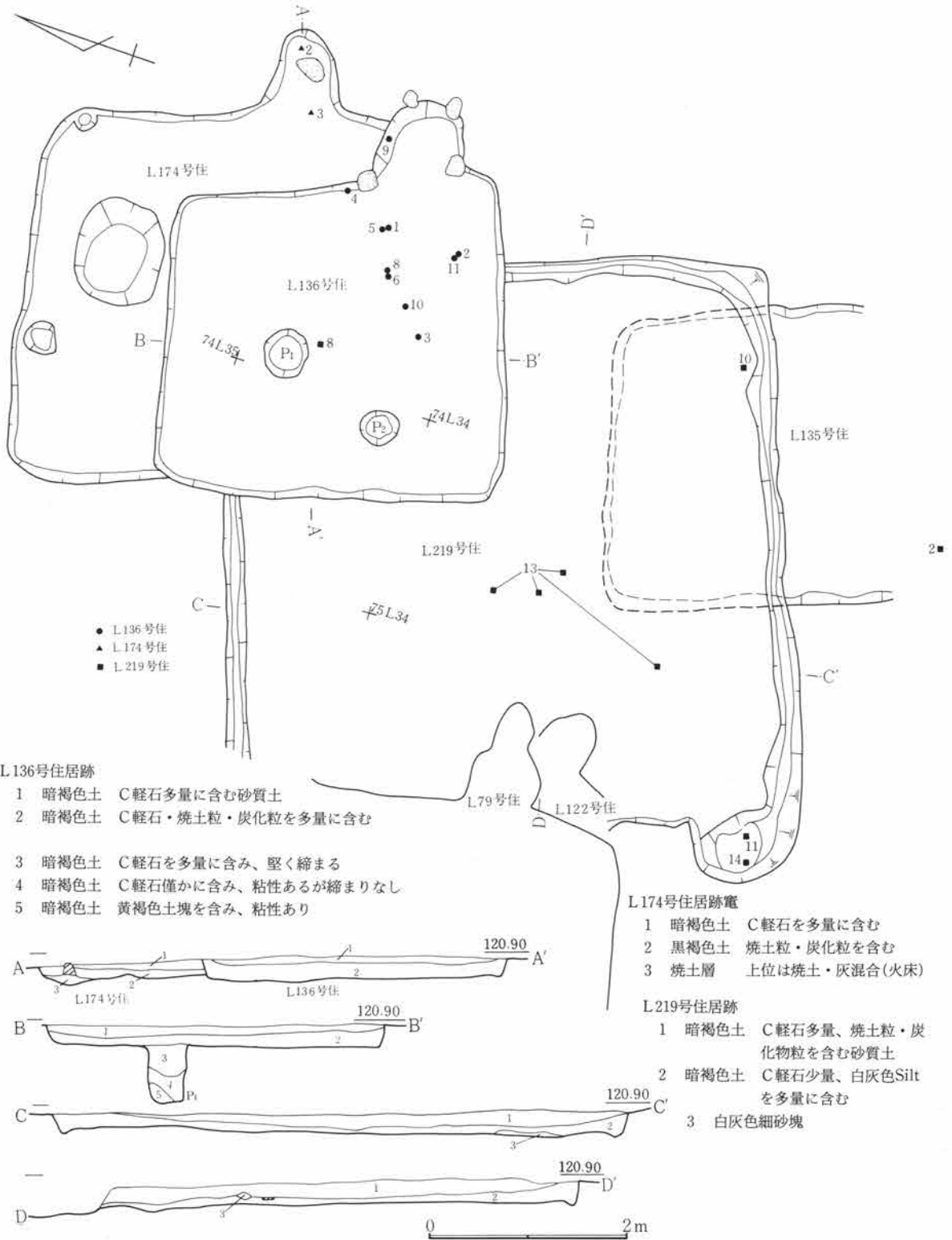
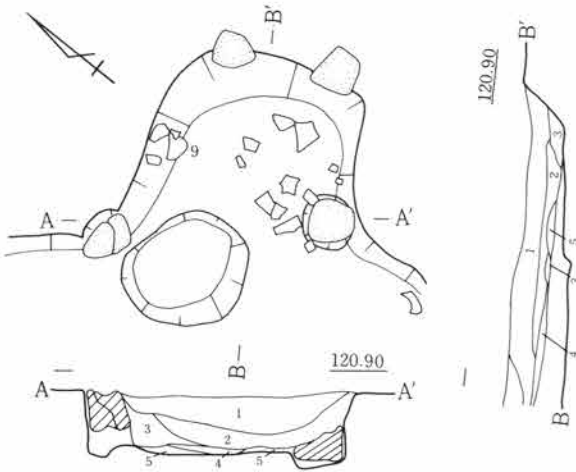


Fig. 292 L136号・L174号・L219号住居跡



L136号住居跡竈

- 1 黒褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒を多量に含む
- 2 黒褐色土 焼土粒を多量に含む
- 3 焼土塊
- 4 灰層
- 5 焼土層 (火床)

Fig. 293 L136号住居跡竈

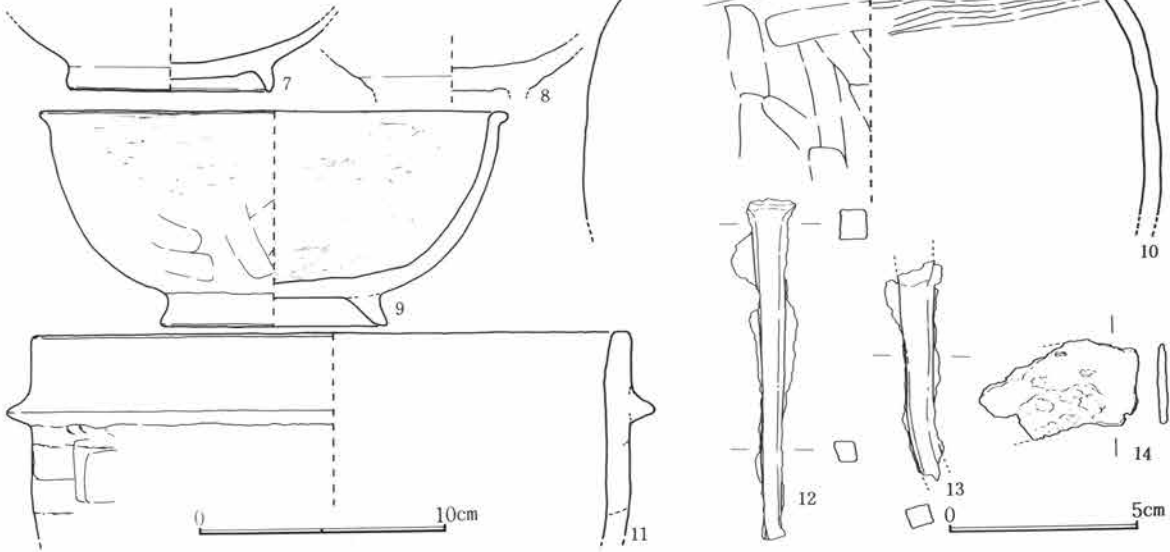
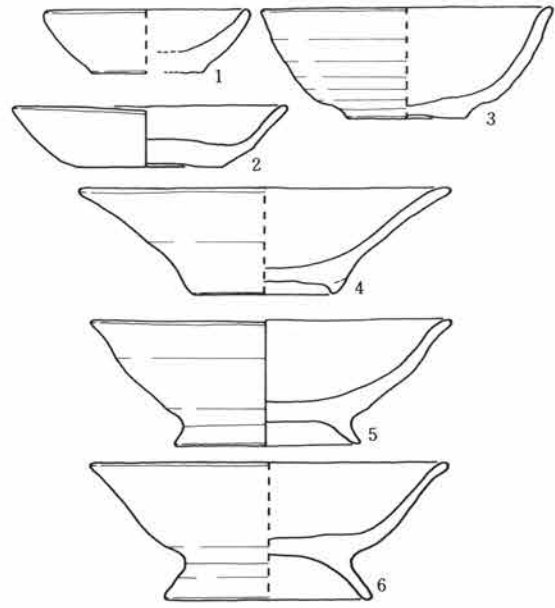


Fig. 294 L136号住居跡出土遺物

L136号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
294-1 98-1	須恵器 杯	破片	8.2×4.4 ×2.5	埋土	底部器肉厚い。体部やや内湾気味で口唇部は丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②浅黄橙 ③やや粗
294-2 98-2	須恵器 杯	3/4	11.0×5.9 ×2.5	+6	底部肥厚。腰部でくびれ体~口縁部外反気味に開く。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②橙 ③やや粗・砂混る
294-3 98-3	須恵器 杯	1/2	11.6×4.8 ×4.4	+5	底径小さい。体部丸味強く内湾気味に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや粗・砂混る
294-4 98-4	須恵器 碗	1/2	14.7×5.6 ×4.2	+6	体部直線的に外反し大きく開く。口唇部丸い。付高台、低く内湾気味。轆轤成形。	①酸化 ②橙 ③やや密
294-5 98-5	須恵器 碗	3/5	14.4×7.4 ×5.0	+6	体部は内湾して大きく開き上位でくびれ口縁部外反。付高台、ハの字状に開き体部尖り気味。轆轤成形。	①酸化気味 ②灰褐 ③やや密・白色粒混
294-6 98-6	須恵器 碗	1/2	14.3×8.2 ×5.4	+1	腰部丸く張り体部から口縁部外反して大きく開く。口唇部丸い。付高台、高く大きく開く。端部丸い。轆轤成形。	①酸化 ②鈍い橙 ③粗・砂混る

第2章 遺構と遺物

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
294-7 98-7	灰釉陶器 椀	底部	—×8.3 ×(2.8)	埋土	器肉厚い。腰部丸く見込部やや凹む。内面全面施釉。付高台、面取り弱く端部丸い。	①良好 ②灰白 ③密・小石混る
294-8 98-8	内黒土器 椀	底部	—×— ×(1.8)	床下	底部器肉厚い。見込部一定方向・体部斜行篋磨き。高台欠損	①還元 ②灰黄褐 ③やや密・白色粒混
294-9 98-9	内黒土器 椀	1/3	18.6×9.0 ×8.5	掘形	腰～体部丸味強く深い。口縁部水平に外屈し口唇部僅かに尖る。見込部一定方向・体部斜行篋磨き。外面上半横位篋磨き、下半篋削り。付高台ハの字状に開き端部やや尖る。	①良好 ②鈍い橙 ③密
294-10 99-10	土師器 甕	口縁部 1/4	20.8×— ×(12.3)	+3	胴部丸く腹らみ肩でやや張る。口縁部強く外屈。口唇部断面矩形。外面不定方向篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②橙 ③やや密
294-11 99-11	羽釜 破片	口縁部	24×—(8.4) 口径25.8	床下埋土	胴部丸味なく口縁短く垂直。口唇部断面矩形。上端面は水平。鏝断面三角で水平に突出。口縁横撫で。胴部篋削り。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや粗
294-12 99-12	鉄器 角釘?	端部欠損	9.0×0.7 (0.4)	埋土	頭部形状折頭式。	
294-13 99-13	鉄器 角釘	身部	(5.7)×0.8 (0.5)	埋土	両端部欠損。	
294-14 99-14	鉄器 利器?	小片	4.0×2.0 ×0.2	埋土	板状。鎌か?	

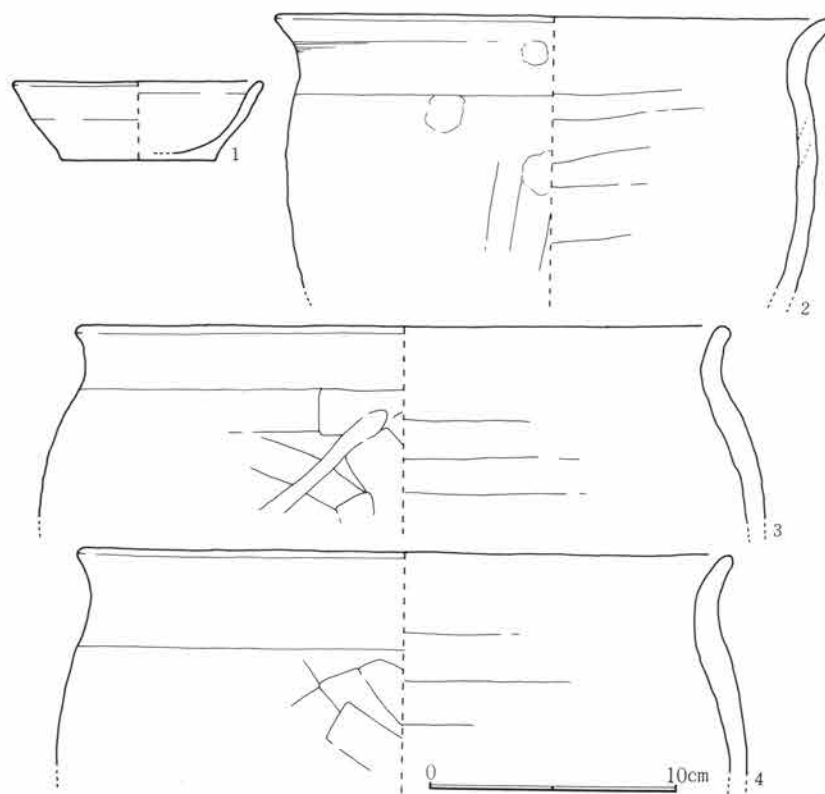


Fig. 295 L174号住居跡出土遺物

L174号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
295-1 99-1	須恵器 杯	1/3	10.0×6.2 ×3.2	埋土	腰部小さくくびれ体部内湾して開き口縁部僅かに外反。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰黄褐 ③やや密
295-2 99-2	土師器 小形甕?	下半欠損	22.2×— ×(10.8)	竈	胴部張り口縁部外反。口縁横撫で・指頭痕。胴部篋撫で・指頭痕。内面撫で。	①良好 ②明褐 ③ やや粗・砂多く混る
295-3 99-3	土師器 甕	口縁部	26.2×— ×(7.6)	竈	体部張り口縁部短かく緩く外反。口縁部横撫で。体部篋削り。内面撫で。	①良好 ②鈍い褐 ③粗・砂、小石混る
295-4 99-4	土師器 甕	口縁部	26.2×— ×(8.7)	埋土	胴部やや張り口縁部短く緩く外反。口縁部横撫で。胴部篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗・砂混る

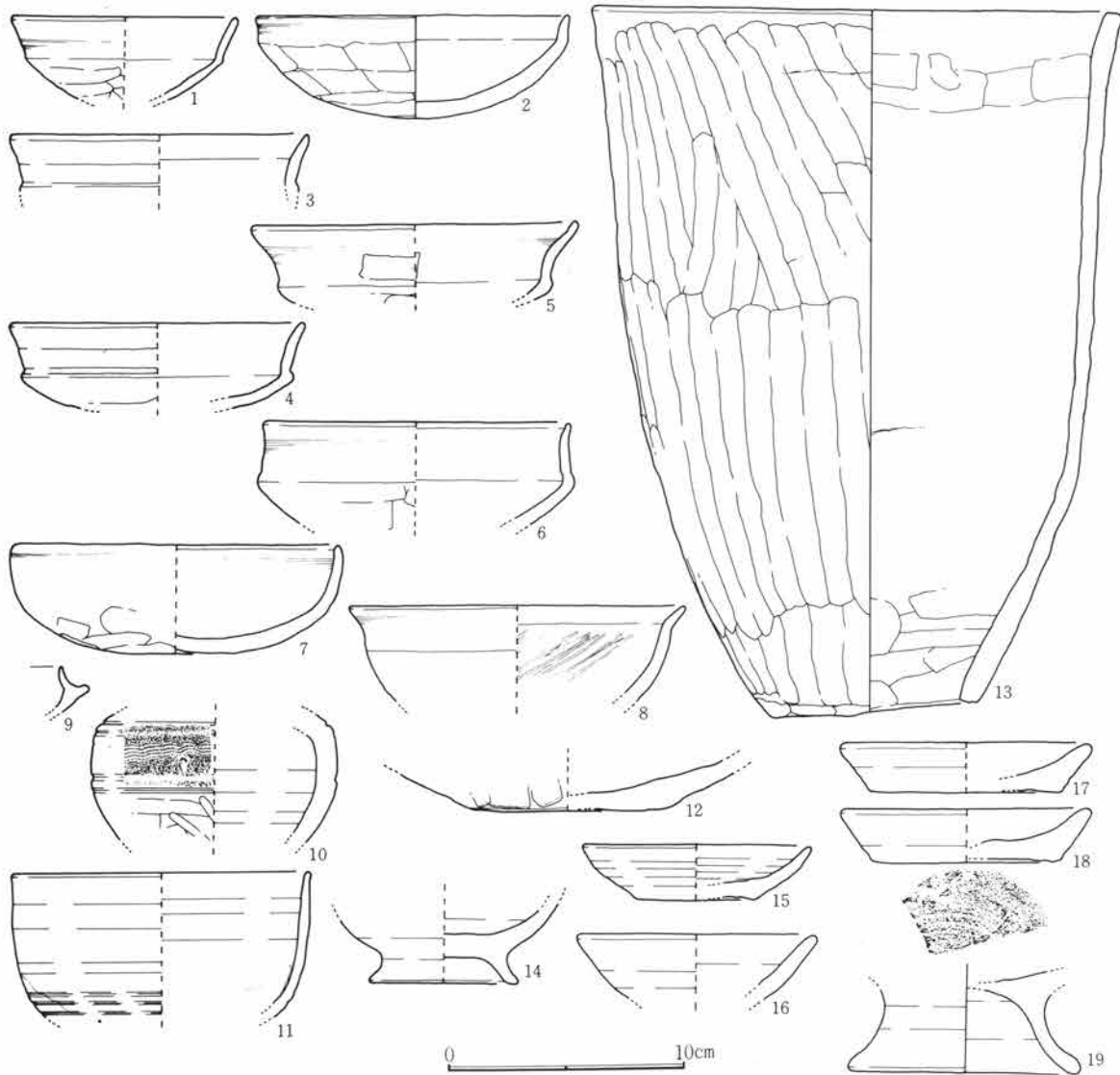


Fig. 296 L219号住居跡出土遺物

L219号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
296-1 99-1	土師器 杯	1/4	9.4× ×(3.4)	埋土	底部やや深い。受け部で屈し弱い稜をなし口縁部直線的に外傾。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①硬・良好 ②橙 ③密
296-2 99-2	土師器 杯	3/4	13.0× ×4.2	135号埋土・ 138号床下	器肉厚い。底部深く丸い。口縁部短く外反気味に直立。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・砂混る
296-3 99-3	土師器 杯	口縁部	12.4× ×(2.4)	埋土	口縁部緩く外反。口縁部横撫で。	①硬・良好 ②橙 ③密
296-4 99-4	土師器 杯	3/8	12.2× ×(3.6)	埋土	底部浅い。受け部で強く屈し稜をなす。口縁部緩く外反して開く。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③密
296-5 99-5	土師器 杯	底部欠 損	13.6× ×(3.2)	埋土	底部浅く受け部で屈し丸い稜をなす。口縁部外反し上半は内湾。口縁部篋による横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①硬・良好 ②橙 ③密
296-6 99-6	土師器 杯	3/8	12.8× ×(4.3)	埋土	底部丸味もち口縁部受け部で屈し緩く外反気味に直立。口唇部丸まり内屈。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③細砂混る
296-7 99-7	土師器 杯	1/2	13.4× ×4.5	埋土	底部丸い。中心は小さく上げ底。口縁部内湾して立ち口唇部横撫で。体・底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②明赤褐 ③砂混る
296-8 99-8	土師器 杯	3/8	14.0× ×(4.1)	136号埋土	底部丸く深い。口縁部強く外屈する内斜口縁。口縁部下位横撫で。底部篋削り。内面斜行篋磨き。	①良好 ②明赤褐 ③やや密・細砂混る

第2章 遺構と遺物

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
296-9 99-9	須恵器 杯	口縁部	高さ1.9	埋土	受け部短く突出。口縁部短く外反して内傾。口唇部細る。	①良好 ②灰 ③密
296-10 99-10	須恵器 罌	胴部	胴部最大径 10.2高(5.3)	135号埋土	体部張る。肩から体部にかけて4本の沈線。胴部上位に6条を単位とする波状文。下位には篋削り。内面撫で。	①良好 ②灰 ③密
296-11 99-11	灰釉陶器 碗	底部欠損	12.4×— ×(5.9)	+4	腰部丸味強い。体部深く直立気味で口唇部小さく丸まる。腰部回転篋削り。漬け掛け施軸?	①良好 ②灰白 ③密
296-12 99-12	土師器 甕	底部	—×8.4 ×(2.1)	埋土	腰部篋削り。底部やや丸底気味で篋削りあり。内面撫で。	①良好 ②赤褐 ③やや粗・砂混る
296-13 100-13	土師器 甕	ほぼ完形	22.0×8.7 ×28.9	埋土	単孔。胴部下半で緩く屈し直線的。口縁短く外傾気味。口唇部断面矩形。体部縦篋削り。内面横篋撫で下位横篋削り。	①良好 ②淡黄 ③やや密
296-14 99-14	須恵器 碗	底部	—×(6.2) ×(3.3)	+4	腰部張る。付高台、やや高く外反気味に開く。轆轤成形。	①酸化・良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
296-15 99-15	須恵器 杯	1/4	9.5×4.8 ×2.3	埋土	体部から口縁部内湾して開く。やや強い轆轤目。回転糸切り。	①酸化・良好 ②鈍い橙 ③密
296-16 96-16	須恵器 杯	1/4	10.0×— ×(2.7)	埋土	器肉やや肥厚。体部から口縁部やや内湾気味に開く。轆轤成形。	①酸化・良好 ②鈍い橙 ③やや粗・砂混
296-17 99-17	須恵器 杯	1/4	10.4×7.8 ×2.0	埋土	器肉肥厚。浅く体部から口縁部直線的に外傾。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化・良好 ②鈍い黄橙 ③粗・砂多混
296-18 99-18	須恵器 杯	1/4	10.4×7.8 ×2.2	埋土	器肉肥厚。体部から口縁部直線的に外傾。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 ②鈍い黄橙 ③やや粗・砂多量混
296-19 99-19	須恵器 碗	高台部	—×9.6 ×(3.2)	埋土	付高台、高く強く外反して開く。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや粗・砂混る

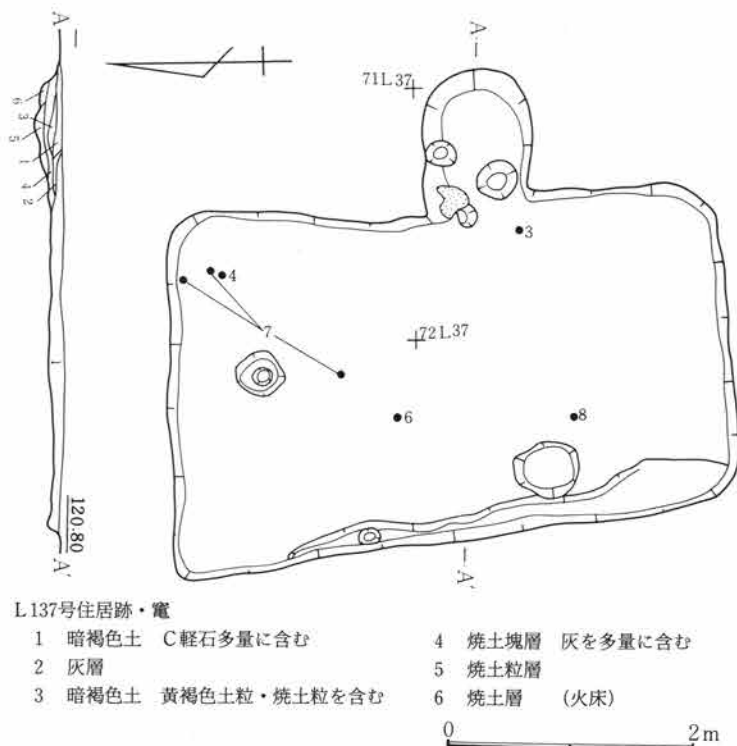
L 137号住居跡 (Fig. 297、298・PL. 23、100)

L区第4台地の調査区北に位置し、70~72L35~37の範囲にある。重複はなく単独遺構である。

平面形は南北に長軸をもつ略方形を呈するが、南壁線が短く西壁線に歪みがある。南北長2.9m・東西長4.

5mを測り、東西軸方位はおよそN-90°-Eを示す。精査時の削平が深く、検出面からの掘形は浅く壁高5cm程度から壁線を僅かに認識できるほどの箇所もある。床面は西壁線沿いが若干高まるが、明瞭な段をなすほどではない。踏み締まりは全体に弱い。西壁線沿いに壁下の溝が巡り、幅・深さとも不規則で南端で大きく広がり開放状になる。Pitは2箇所を検出されているが、柱穴・貯蔵穴に想定できるものはない。

竈は東壁にあり僅かに南に偏って付設される。遺存状況は悪く、検出は掘形の範囲と思われる。大きく楕円形に掘り込まれ燃焼部幅1m・奥行き1.3mを測る。



L137号住居跡・竈

- | | |
|---------------------|----------------|
| 1 暗褐色土 C軽石多量を含む | 4 焼土塊層 灰を多量を含む |
| 2 灰層 | 5 焼土粒層 |
| 3 暗褐色土 黄褐色土粒・焼土粒を含む | 6 焼土層 (火床) |

Fig. 297 L137号住居跡

出土遺物は散在しており、須恵器小杯・灰釉広口瓶片・鉄器などがある。

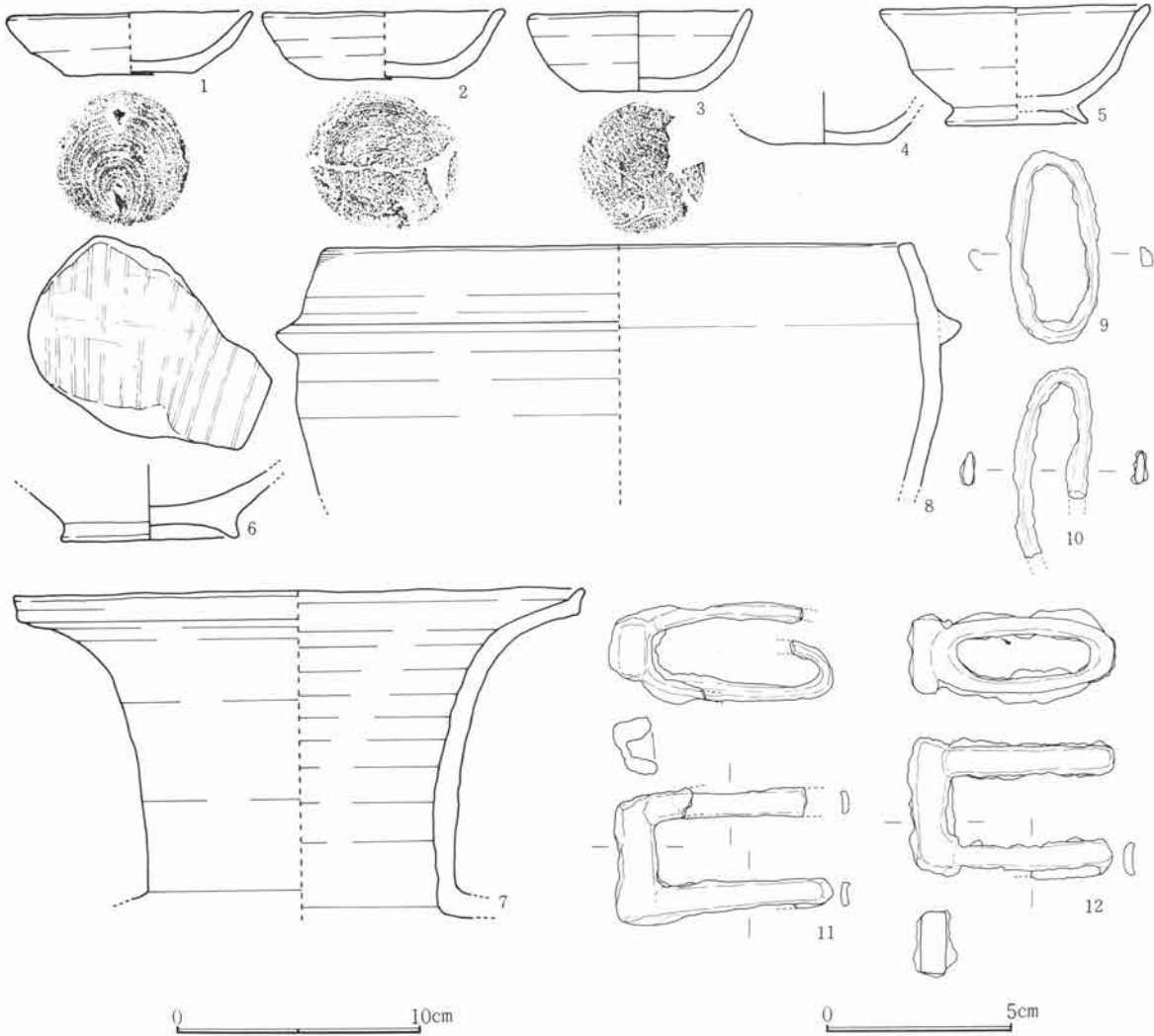


Fig. 298 L137号住居跡出土遺物

L137号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
298-1 100-1	須恵器 杯	完形	10.0×5.2 ×2.5	掘形	体部中位で緩く屈し直線的。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②橙 ③やや粗・細砂混る
298-2 100-2	須恵器 杯	ほぼ完形	9.8×5.6 ×2.7	埋土	腰部で屈し直線的な体部。口唇部丸まる。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②淡黄 ③やや粗・黒色粒混
298-3 100-3	須恵器 杯	口～底	9.1×5.0 ×3.25	竈	体部緩く内湾し深め。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②淡黄 ③やや粗・夾雑物混
298-4 100-4	須恵器 杯	底部	—×4.5 ×1.3	+1	腰部に丸味。轆轤成形。	①酸化気味 ②橙 ③やや粗
298-5 100-5	須恵器 碗	片	11.0×5.8 ×4.7	掘形	腰部僅かに張り体部緩く外反し大きく開く。口唇部丸い。付高台、ハの字状に開き端部尖り気味。轆轤成形。	①酸化気味 ②鈍い黄橙 ③やや粗
298-6 100-6	内黒土器 碗	底部	—×7.2 ×2.6	+2	付高台、低く端部尖る。内面黒色処理。内面縦・横方向筥磨き。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 ②鈍い黄橙 ③やや粗・夾雑物混
298-7 100-7	灰釉陶器 瓶	頸部片	23.0×— ×(13.2)	+1～4	頸部やや直立気味に立ち口縁部大きく外反して開く。口唇部直立し端部丸い。肩部張り気味。	①良好 ②灰 ③やや密
298-8 100-8	羽 釜	口縁部	24.0×— ×9.8	+2	腰部やや張り気味。口縁部内湾気味に内傾。口唇部やや水平。鈎肥厚し断面丸く水平に突出。口縁～胴部回転撫で。	①酸化 ②橙 ③やや粗・夾雑物混

第2章 遺構と遺物

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×口径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
298-9 100-9	鉄器 責具		長5.2×3.4 幅0.6厚0.3	埋土	刀装具。	
298-10 100-10	鉄器 責具	一部欠損	長(5)×2 幅0.9厚0.3	埋土	刀装具。	
298-11 100-11	鉄器 責具		長6×2.6 幅0.7厚0.2	埋土	刀装具。二連帯執足金物。	
298-12 100-12	鉄器 責具		長5.5×2 幅0.9厚0.2	埋土	刀装具。二連帯執足金物。	

L 138号住居跡 (Fig. 299～301・PL. 23、100、101)

L区第4台地の調査区北に位置し、65～68L31～33の範囲にある。重複はなく単独遺構である。

平面形は南北軸が若干長い方形を呈するが、南東隅に丸みをもち南壁線が緩く脹らむ。南北長約5m・東西長4.5mを測り、東西軸方位はN-83°-Eを示す。壁高は約37cmを測り。床面は平坦をなすが踏み締まりはやや弱い。Pitは多数検出されている。柱穴と考えられるものはP₁～P₄とP₅～P₈の2組が想定されるがその配置には西へ偏る傾向がありやや難点がある。P₅～P₈の柱間規模は小さく、P₁～P₄との比較からは当跡が拡張・建替えが行われた可能性があるが、柱穴のあり方以外にこれを示すことはできない。P₁～P₄についての計測値については、P₁は上径35×50cm・下径15cm・深さ54cm、P₂は上径20×35cm・下径18cm・深さ36cm、P₃は上径40cm・下径16cm・深さ30cm、P₄は上径25×30cm・下径13×20cm・深さ26cmである。各柱間はP₁・P₂は2.4m、P₂・P₃は2.55m、P₃・P₄とP₁・P₄は2.8mを測る。P₅～P₈の計測値は、P₅は上径30cm・下

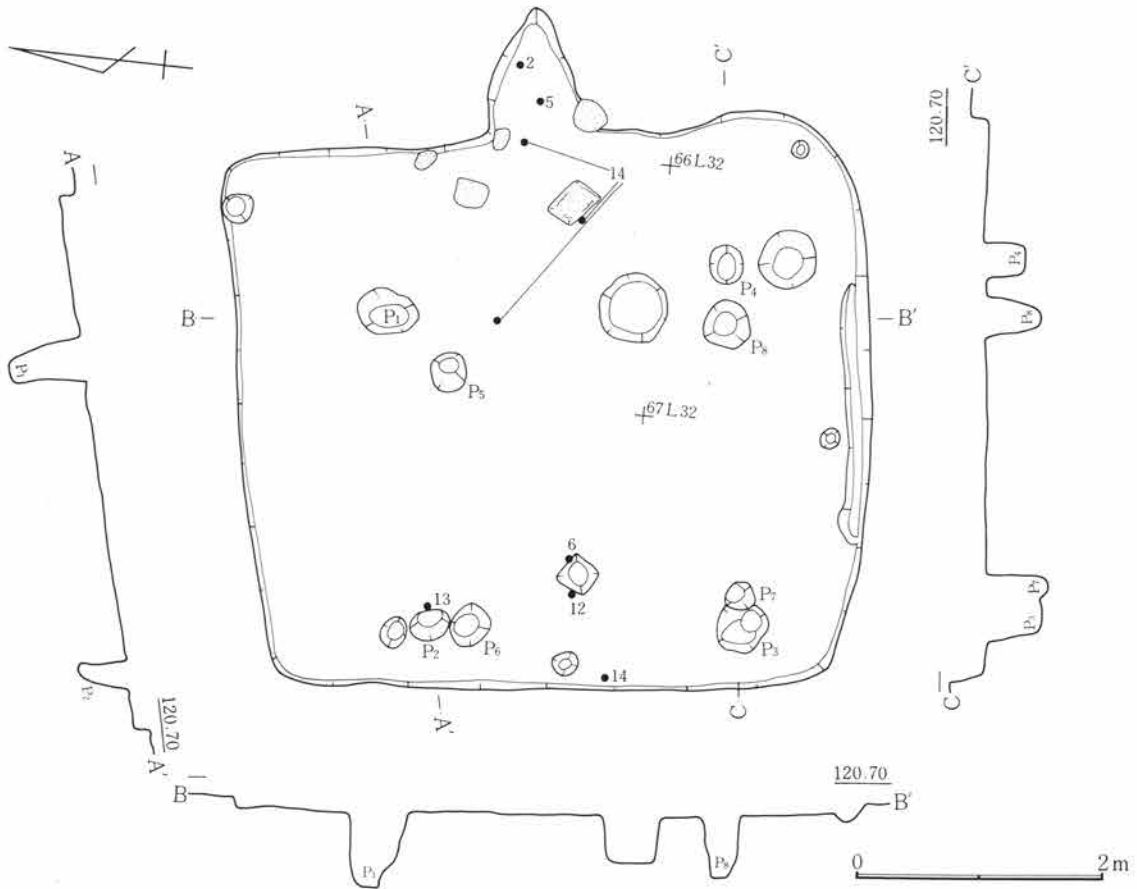


Fig. 299 L 138号住居跡

径10cm・深さ52cm、P₆は上径30cm・下径17cm・深さ32cm、P₇は上径25cm・下径14cm・深さ35cm、P₈は上径37cm・下径18cm・深さ43cmである。各柱間はP₅・P₆とP₆・P₇とP₇・P₈は2.1m、P₅・P₈は2.2mを測る。壁下の溝は南壁の一部に検出されている。幅10cm・深さ5～6cmである。

竈は東壁にあり僅か北に偏って付設される。袖部は東壁線上にあり、凝灰岩質加工材を埋設する。燃烧部は楕円形に掘り込まれ、先端部が小さく窄まる。袖材間内法55cm、燃烧部奥行き65cmを測る。

出土遺物は竈内の他は床面上に散在的である。須恵器小杯・台付大形鉢・鉄器などがある。

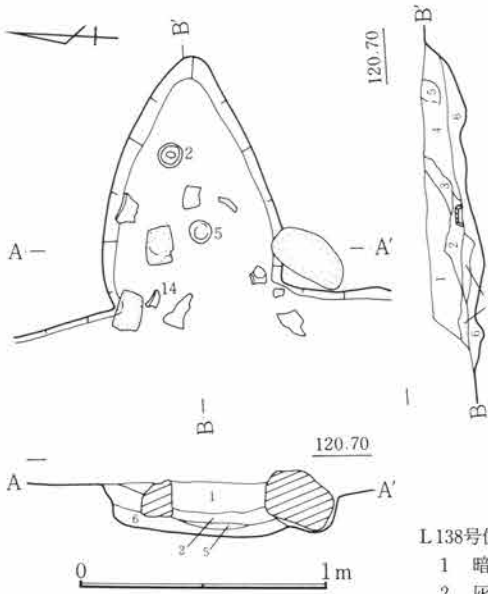


Fig. 300 L138号住居跡竈

L138号住居跡竈

- | | |
|----------------|------------------|
| 1 暗褐色土 C軽石含む | 4 暗褐色土 焼土粒・炭化粒含む |
| 2 灰・焼土粒層 | 5 焼土層 (火床及び天井材) |
| 3 暗褐色土 焼土粒少量含む | 6 焼土塊層 |

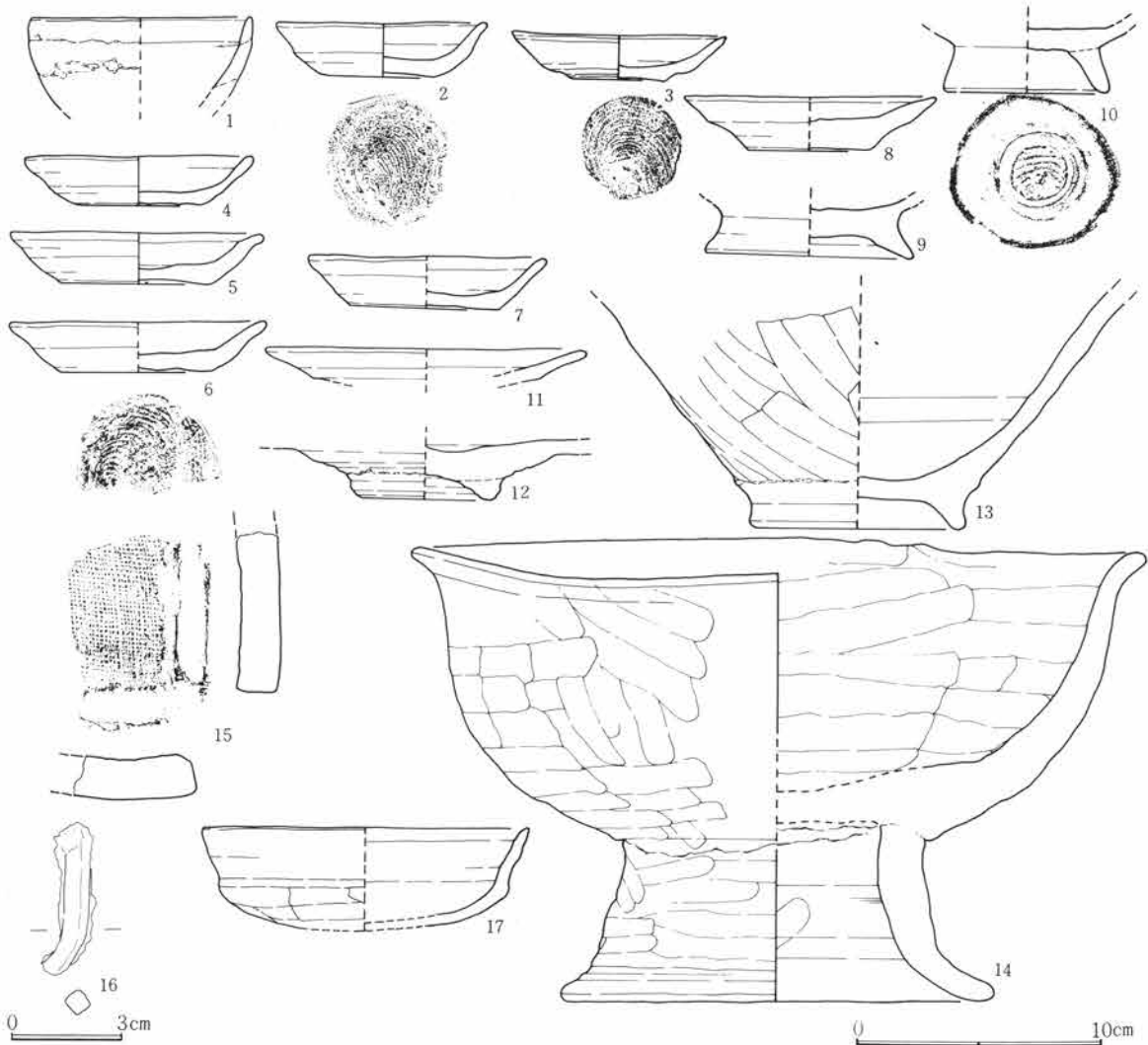


Fig. 301 L138号住居跡出土遺物

第2章 遺構と遺物

L 138号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
301-1 100-1	土師器 杯	口縁部 1/4	8.8×— ×(3.2)	竈	体部丸く内湾し口縁部直立気味に立つ。巻き上げ痕残る。	①良好 ②灰白 ③やや粗
301-2 100-2	須恵器 杯	ほぼ完 形	8.6×4.5 ×2.2	竈	腰部やや丸味。体部中位に弱いくびれ。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや粗
301-3 100-3	須恵器 杯	1/4	8.6×3.8 ×(1.8)	埋土	腰部大きくくびれ底部突出気味。体部は僅かに内湾して開く。口唇部下位に弱い沈線。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②橙 ③やや密
301-4	須恵器 杯	1/4	9.4×5.0 ×(2.0)	埋土	体部直線的に開き口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや粗
301-5 100-5	須恵器 杯	完 形	10.2×6.0 ×2.0	竈	腰部直線的。体部中位でくびれ口縁部外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②灰白 ③やや粗
301-6 100-6	須恵器 杯	1/4	10.6×6.2 ×2.0	+3	腰部に丸味。口縁部外反し口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 ②灰白 ③やや粗
301-7 101-7	須恵器 杯	1/4	9.6×6.0 ×2.1	埋土	体部直線的。口縁部緩く外反し口唇部丸い。右回転糸切り。	①酸化 ②灰白 ③やや粗
301-8 101-8	須恵器 皿	1/4	10.2×5.0 ×2.1	埋土	底部著しく肥厚。腰部でくびれ口縁部外反気味に大きく開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 ②灰白 ③やや粗
301-9 101-9	須恵器 椀	台部1/4	—×8.4 ×(2.2)	埋土	底部肥厚。付高台、肥厚し大きく開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
301-10 101-10	須恵器 椀	台 部	—×6.6 ×(2.7)	床下埋土	付高台、やや高く肥厚し直線的に開く。端部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
301-11 101-11	須恵器 皿	口縁部 1/4	13.0×— ×(1.4)	埋土	体部大きく外傾して開き口縁部は水平に近く屈する。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや粗
301-12 101-12	須恵器 台付皿	上半欠 損	—×5.4 ×2.5	+5	底部肥厚し体部水平に開く。付高台、低い。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 ②橙 ③やや粗
301-13 101-13	須恵器 台付鉢	下半1/4 損	—×9.6 ×(8.6)	掘形	腰部窄まり体部直線的で大きく外傾して開く。付高台、低く端部丸い。胴部斜位篋削り。	①酸化気味 ②浅黄 ③やや粗
301-14 101-14	須恵器 台付鉢	1/4	29.6×17.4 ×18.6	+0~8	器肉極めて厚い。鉢腰部丸く張り口縁部強く外反し開く。台は高く脚は僅かに開き裾は強く外反して開く。巻き上げ成形後内外面とも横位撫で調整。	①酸化気味 ②浅黄 ③やや粗・細砂混る
301-15 101-15	瓦 平瓦	小片	厚1.6	埋土	凹面布目。凸面寛撫で調整。側縁調整。	①やや軟 ②灰 ③密・白色石混る
301-16 101-16	鉄器 角釘	両端部 欠損	(4.0)×0.6	埋土	両端欠損。頭部形状不明。	
301-17 101-17	土師器 杯	1/4	13.2×— ×(3.9)	埋土	底部丸く浅い。受け部でやや肥厚し弱い段をなす。口縁部波打ち弱く外反して開く。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗

L 140号住居跡 (Fig. 302、303・PL. 101)

L区第4台地の南東縁辺に位置し、61・62L12~15の範囲にある。台地縁辺の流出あるいは開削のため住居跡の東大部分は消失している。また南はL141号住居跡との重複もあって南壁線も確認できない。L141号住居跡より古い時期の所産である。

平面形は方形を呈すると思われ、かなり大形になろうか。東西約4m・南北5.3mの範囲を確認した。北・西壁に基づいた東西軸方位はおおよそN-82°-Eを示す。壁高は約10cm、床面は凝灰岩質層を基盤にしており安定している。竈・炉・柱穴などの諸施設は検出されていないが、北東部床面上に焼土化した部分を2箇所認めたと、これに伴う施設のものは無い。

出土遺物は少量である。

L 141号住居跡 (Fig. 302、304・PL. 101)

L区第4台地の南東縁辺に位置し、61・62L11・12の範囲にある。遺構のほとんどは台地縁辺のため、流出・開削によって消失しており、検出は北壁から西壁にかけての僅かな部分である。L140号住居跡と重複しているが、これより新しい時期の所産である。

消失部分が大きく形態・規模など多くは不明である。東西2.5m・南北2.8mの範囲まで確認した。北・西壁を基にした東西軸方位はおおよそN-68°-Eを示す。壁高は20cm、床面は凝灰岩質を基盤にするが凹凸が多い。

出土遺物は羽釜・土師器杯など少量である。

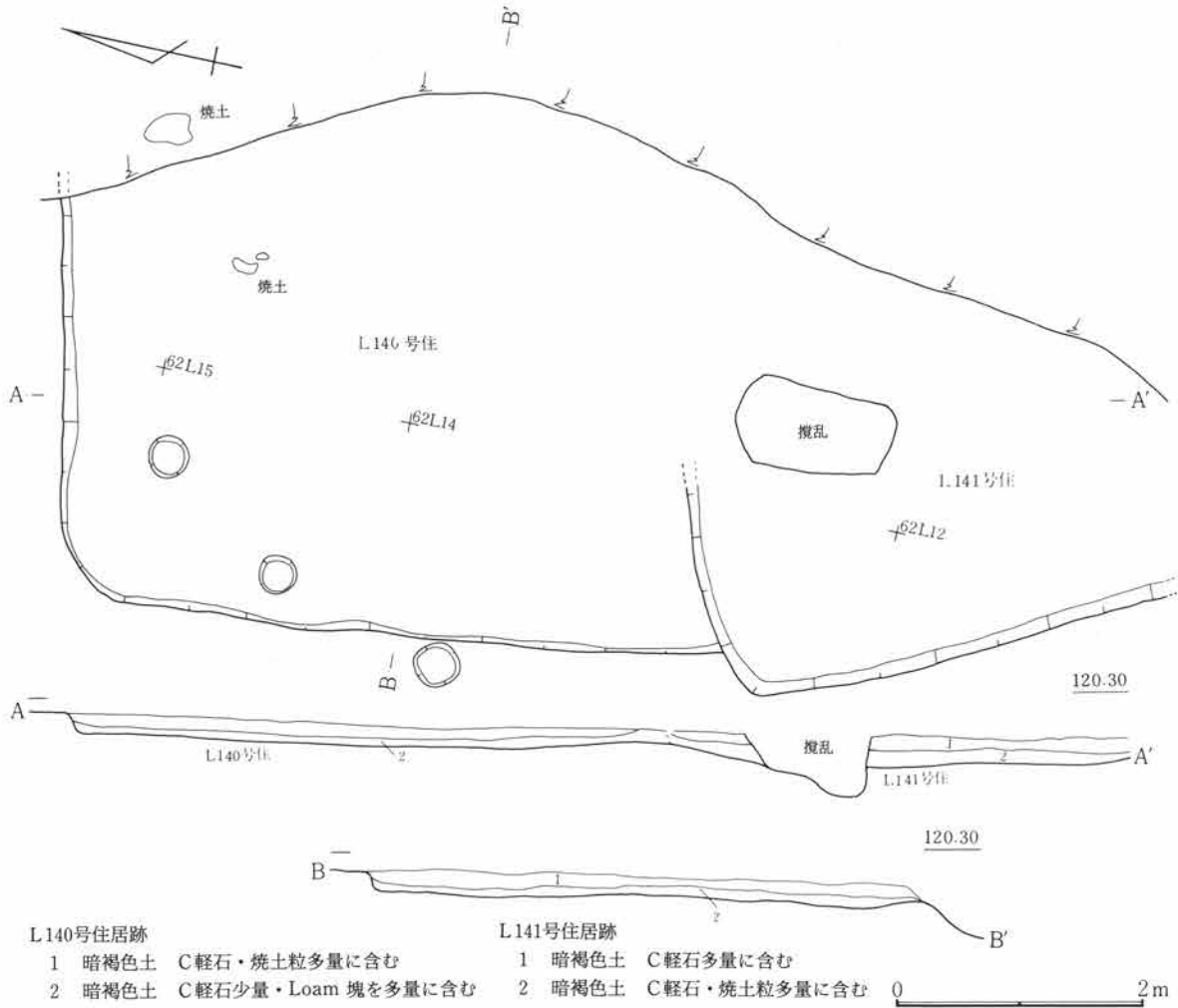


Fig. 302 L140号・L141号住居跡

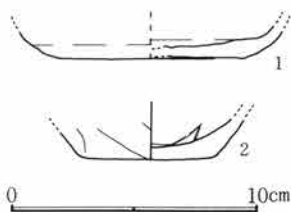


Fig. 303 L140号住居跡出土遺物

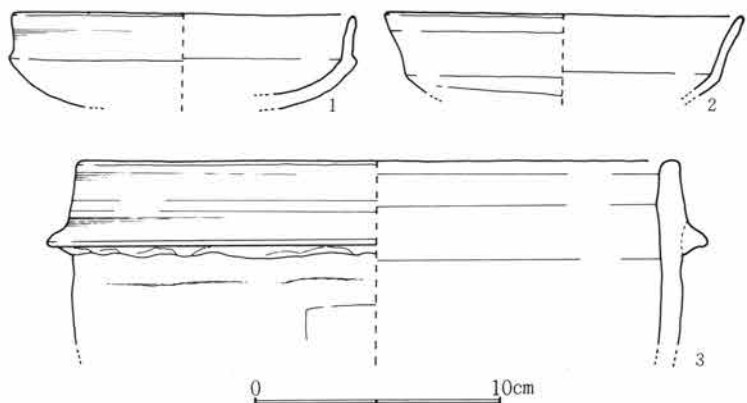


Fig. 304 L141号住居跡出土遺物

第2章 遺構と遺物

L 140号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
303-1 101-1	須恵器 杯	底部破片	—×7.4 ×(1.3)	埋土	腰部丸い。腰部回転篋削り。底部回転篋調整。轆轤成形。右回転?	①酸化気味 ②鈍い黄橙 ③やや密
303-2 101-2	土師器 甕	底部	—×5.4 ×(1.6)	埋土	外面篋削り。内面篋当て痕・撫で。	①良好 ②鈍い赤褐 ③やや密

L 141号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
304-1 101-1	土師器 杯	1/2	13.8×— ×(3.8)	埋土	底部丸く浅い。受け部で屈し口縁部直線的に立ち上がる。全体的にやや摩滅。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・細砂混る
304-2 101-2	土師器 杯	1/2	14.2×— ×(3.2)	埋土	口縁部緩く外反して開く。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
304-3 101-3	須恵器 羽釜	口縁部	24×—×(7.3) 銜径26.4	埋土	口縁部～体部直線的に立ち上がる。銜やや下向きにつく。口縁部横撫で。体部篋削り・接合痕。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗・砂混る

L 144号住居跡 (Fig. 305~307・PL. 21、101)

L区第4台地の調査区南西に位置し、77・78L 7・8の範囲にある。重複は著しく、L87号・L111号・L154号・L200号住居跡と重複している。新旧関係はL111号住居跡を除いていずれよりも新しい時期の所産である。L111号住居跡との新旧は、切り合い部分に試掘溝が設定調査されており消失のため不明である。また出土遺物の比較でもいずれとも決め難い。

平面形は隅丸の方形と思われるが、南壁線は東壁線に対し鈍角に開き歪みがある。南北長約3.85m、東西は東壁より約2mの範囲まで確認した。壁高は約20cm、床面は平坦をなすが踏み締めりは弱い。貯蔵穴は南東隅に設けられ、径50×75cm・深さ20cmの楕円形を呈す。

竈は東壁にあり南に偏って付設される。左右袖部には東壁線の上に凝灰岩質加工材が残る。燃焼部は楕円形に掘り込まれ、中央部に袖材と同質の支脚が埋設される。袖材間内法45cm・奥行き70cmを測る。

出土遺物は少量である。

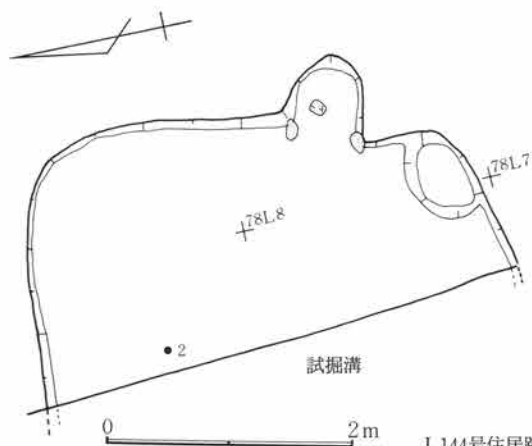


Fig. 305 L144号住居跡

L144号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石多量・焼土粒少量含む
- 2 暗褐色土 焼土塊多量に含む
- 3 茶褐色土 焼土塊多量に含む
- 4 崩落焼土
- 5 焼土壁

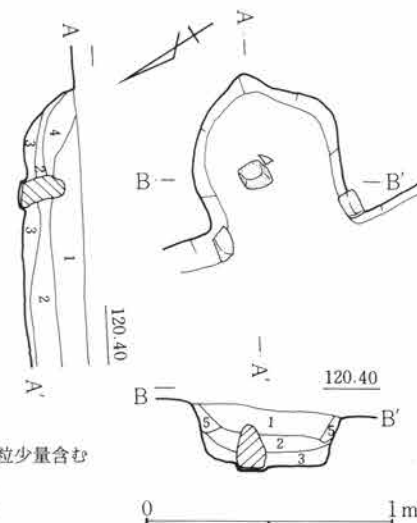


Fig. 306 L144号住居跡竈

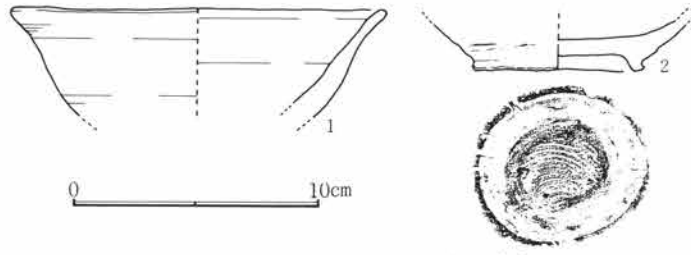


Fig. 307 L144号住居跡出土遺物

L144号住居跡出土遺物観察表

Fig. No	器種	部位	計測値(cm)	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
307-1 101-1	須恵器 椀	残存量 1/4	15.0×— ×(4.3)	埋土	体部肥厚しやや内湾する。口縁部緩く外反して開く。轆轤成形。	①酸化気味・良好 ②淡黄 ③やや密
307-2 101-2	須恵器 椀	体部欠損	—×6.8 ×(1.8)	+4	付高台、断面矩形。轆轤成形。回転糸切り。作り雑。	①良好 ②灰白 ③やや粗・粗砂混る

L145号住居跡 (Fig. 308、309・PL. 24、101、102)

L区第4台地の調査区西に位置し、77・78L23・24の範囲にある。精査段階での壁線確認ができず、西・南・北壁線は部分的に認められた痕跡から想定できる状態である。L131号・L146号・L185号住居跡と重複しており、両者より新しい時期の所産である。

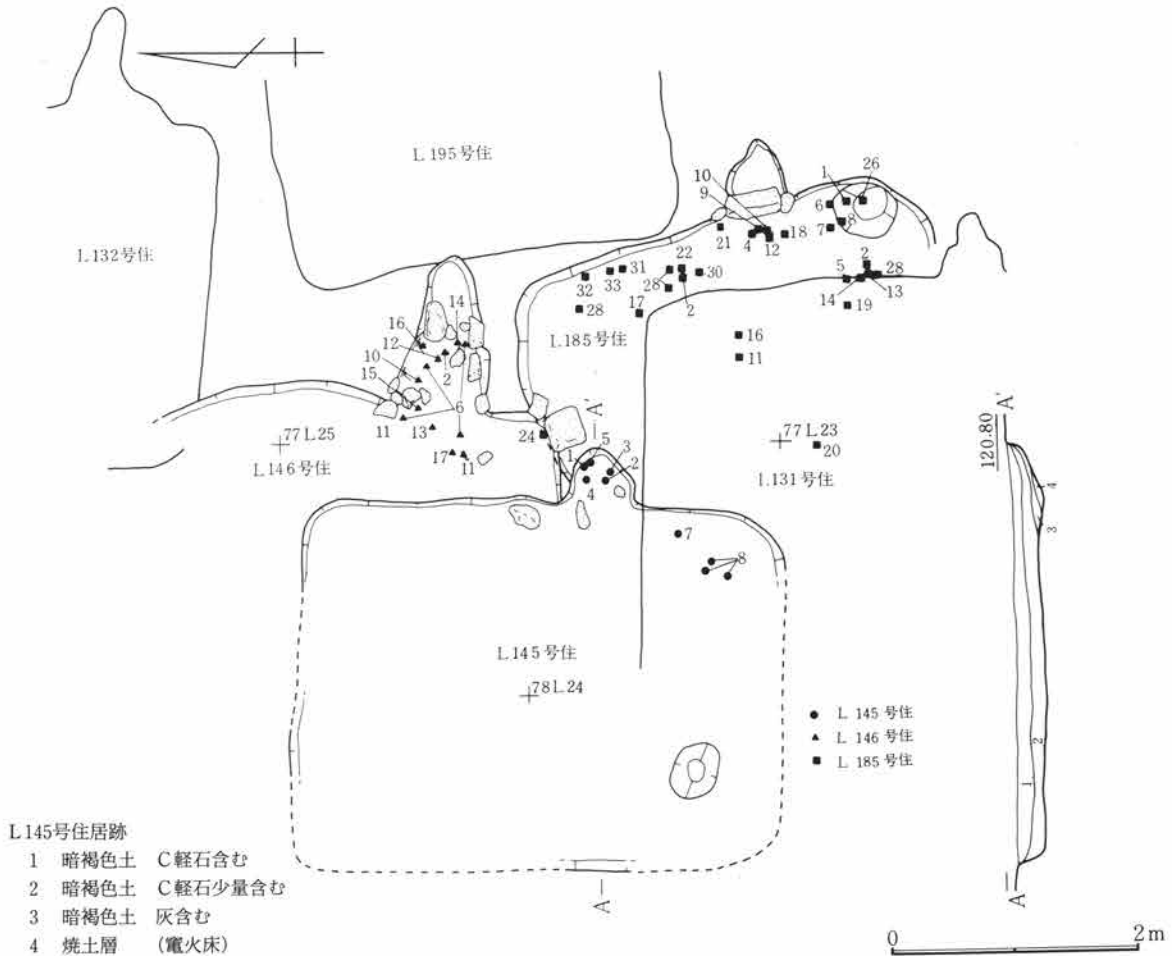


Fig. 308 L145号・L146号・L185号住居跡

第2章 遺構と遺物

平面形は南北に長軸をもつ方形と思われる。南北長3.9m・東西長2.9mを測り、東西軸方位はおよそN-88°-Eを示す。壁高は最も遺存の良好な竈検出面より約34cmを測る。床面は緩く波うち踏み締まりは弱い。南西部に径40cm・深さ38cmの円形土坑が検出されているが、貯蔵穴として認定できる確証はない。

竈は東壁にありやや南に偏って付設される。燃烧部は楕円形に掘り込まれるが、袖部などの遺存状態は悪く、灰層及び火床面が認められたのみである。燃烧部幅55cm・奥行き45cmを測る。

出土遺物は灰釉陶器椀・土釜などがある。当跡からは古墳時代に属する土師器が検出されているが、重複などは確認できなかった。

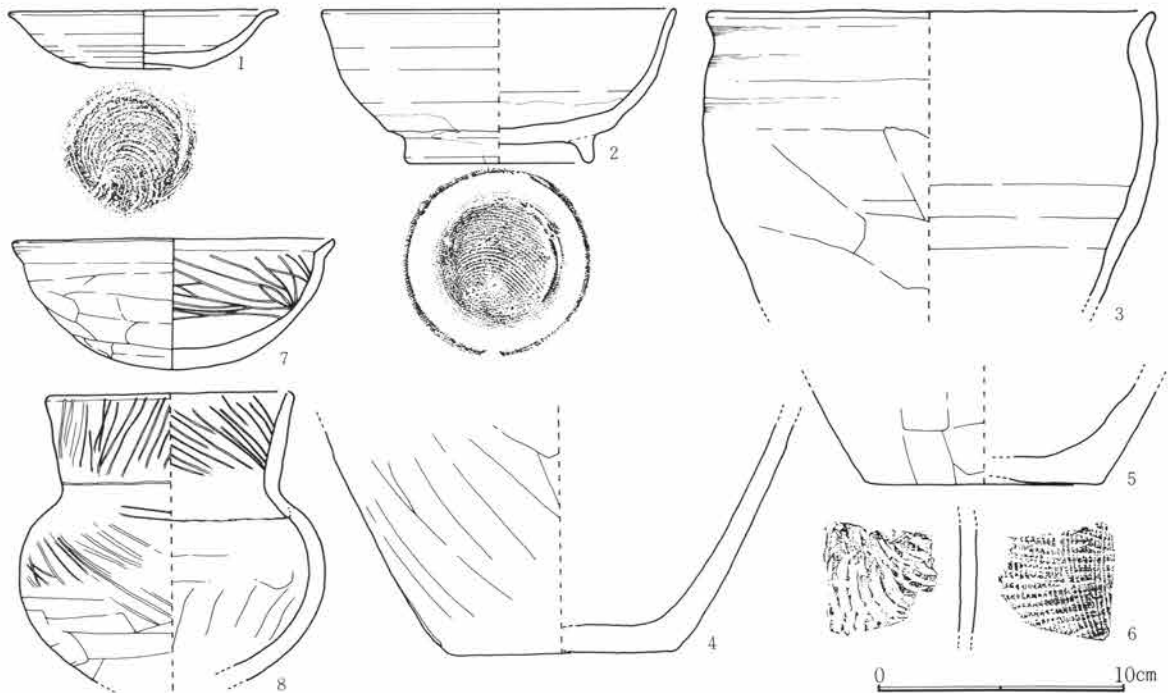


Fig. 309 L145号住居跡出土遺物

L145号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
309-1 101-1	土師器 杯	1/2	10.8×4.1 ×2.3	竈・竈埋 土	体部内湾し丸味をもつ。口縁部外反して水平に開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②橙 ③砂混る
309-2 101-2	灰釉陶器 椀	1/2	14.2×7.6 ×6.1	竈	体部深く内湾し丸味をもつ。口縁部僅かに外反。腰部指撫で。付高台、断面に丸味。漬け掛け施釉?回転糸切り。	①良好 ②灰白・鈍 い黄橙 ③密
309-3 101-3	土師器 小形甕	口縁部 破片	18.0×— ×(11.6)	竈	胴部やや張り下半は窄まる。口縁部外反。口縁部横撫で。体部篋削り。内面撫で。	①良好 ②鈍い黄灰 ③やや粗・砂混る
309-4 101-4	土師器 甕	底部破 片	—×9.0 ×(8.9)	竈	底径大きく腰部やや直線的に外傾して開く。外面斜位篋削り。内面撫で。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗・砂混る
309-5 101-5	土師器 甕	底部破 片	—×9.4 ×(4.0)	竈	底径大きく腰部は直線的。外面篋削り。内面撫で。4と同一か?	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗・細砂混る
309-6 101-6	須恵器 甕?	破片		竈埋土	外面平行叩き後撫で。内面青海波状の当て目。	①酸化気味 ②鈍い 橙 ③密
309-7 102-7	土師器 杯	完形	12.8×— ×5.2	床直	丸底。体部深く半球状を呈す。口縁部強く外屈する内斜口縁。口唇部尖る。体部・底部篋削り。内面斜行篋磨き。	①良好 ②赤橙 ③密
309-8 102-8	土師器 罎	1/2	10.0×— ×(11.4)	+2~3	体部丸く張り球形。口縁部直線的に外傾して開く。口縁部と体部上半に篋磨き。下半に篋削り。内面に指撫で。	①良好 ②橙 ③密・砂混る

L146号住居跡 (Fig. 308、310、312、313・PL. 24、102、103)

L区第4台地の調査区西に位置し、76・77L23～25の範囲にある。L132号・L145号・L185号・L195号住居跡と重複しており、L132号・L145号より旧く、L185号・L195号住居跡より新しい時期の所産である。北・西壁線は重複と試掘抗によって消失あるいは削平で検出できず全容は不明である。

平面形は略方形を呈すると思われ・南北3m・東西2.1mの範囲を確認した。東西軸方位はおよそN-91°-Eを示す。検出面からの掘形は浅く約5cmである。床面の踏み締まりは弱い。

竈は東壁にありやや南に偏って付設される。平面的には燃焼部と煙道部の区別はなく狭長に掘り込まれるが、煙道部は燃焼部から僅かな段差をもち緩い傾斜で延びる。東壁線上には袖材が、また燃焼部奥と煙道部との境も左右に凝灰岩質の加工材が埋設される。袖材間内法約50cm、燃焼部奥行き70cm、煙道部長さ50cmを測る。

出土遺物は羽釜・瓦片などがある。当跡からは古墳時代に属する遺物の出土があり重複などの可能性もあるが、遺構としては確認されていない。

L185号住居跡 (Fig. 308、311、314、315・PL. 24、103、104、105)

L区第4台地の調査区西に位置し、75～77L22～24の範囲にある。L131号・L139号・L145号・L146号住居跡と重複し、L131号住居跡より新しく他よりは古い時期の所産である。西・南・北壁線は掘形の深いL145号住居跡のため消失し、また精査時の削平のため検出できなかった。

平面形は略方形を呈すると思われるが詳細は不明である。南北長は約3.45mを測り、東西は東壁より約1.5mの範囲まで確認した。東西軸方位はおよそN-77°-Eを示す。壁高は東壁で約20cmを測り、床面の踏み締まりは弱い。貯蔵穴は南東部隅にあり径40×50cm・深さ17cmの浅い略円形を呈する。

竈は東壁にあり南に偏って付設される。燃焼部は楕円形に掘り込まれ、袖部は東壁線上に凝灰岩質加工材が埋設される。左右袖材の間には同質の長さ40cm余りの焚口天井材が落ち込む状態で検出されている。袖材間内法40cm、燃焼部奥行き60cmを測る。

出土遺物は多く、竈前面を中心に東壁沿いに集中して検出されている。土師器・須恵器杯類を中心に灰釉陶器・須恵器・転用紡錘車・瓦片などがある。

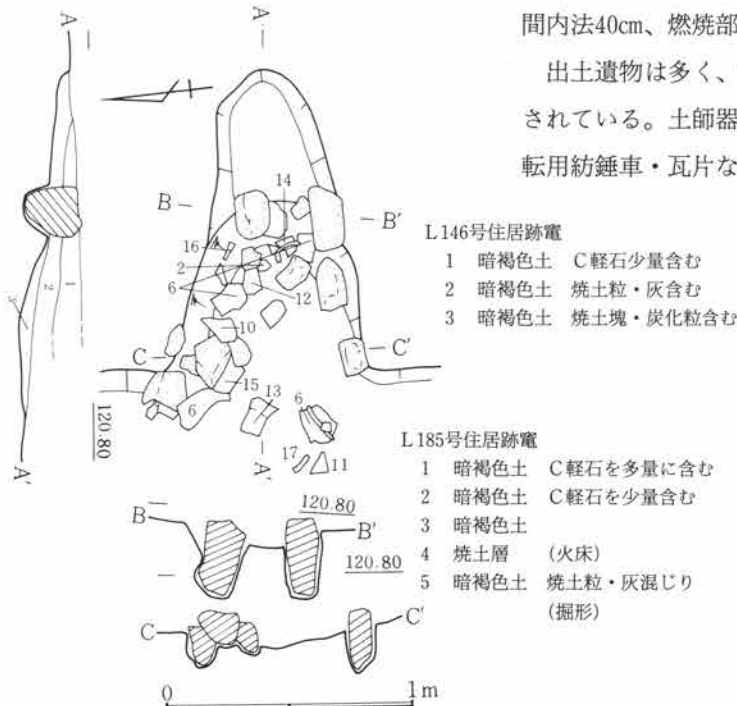


Fig. 310 L146号住居跡竈

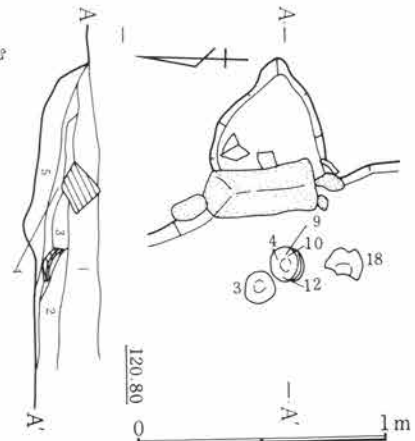


Fig. 311 L185号住居跡竈

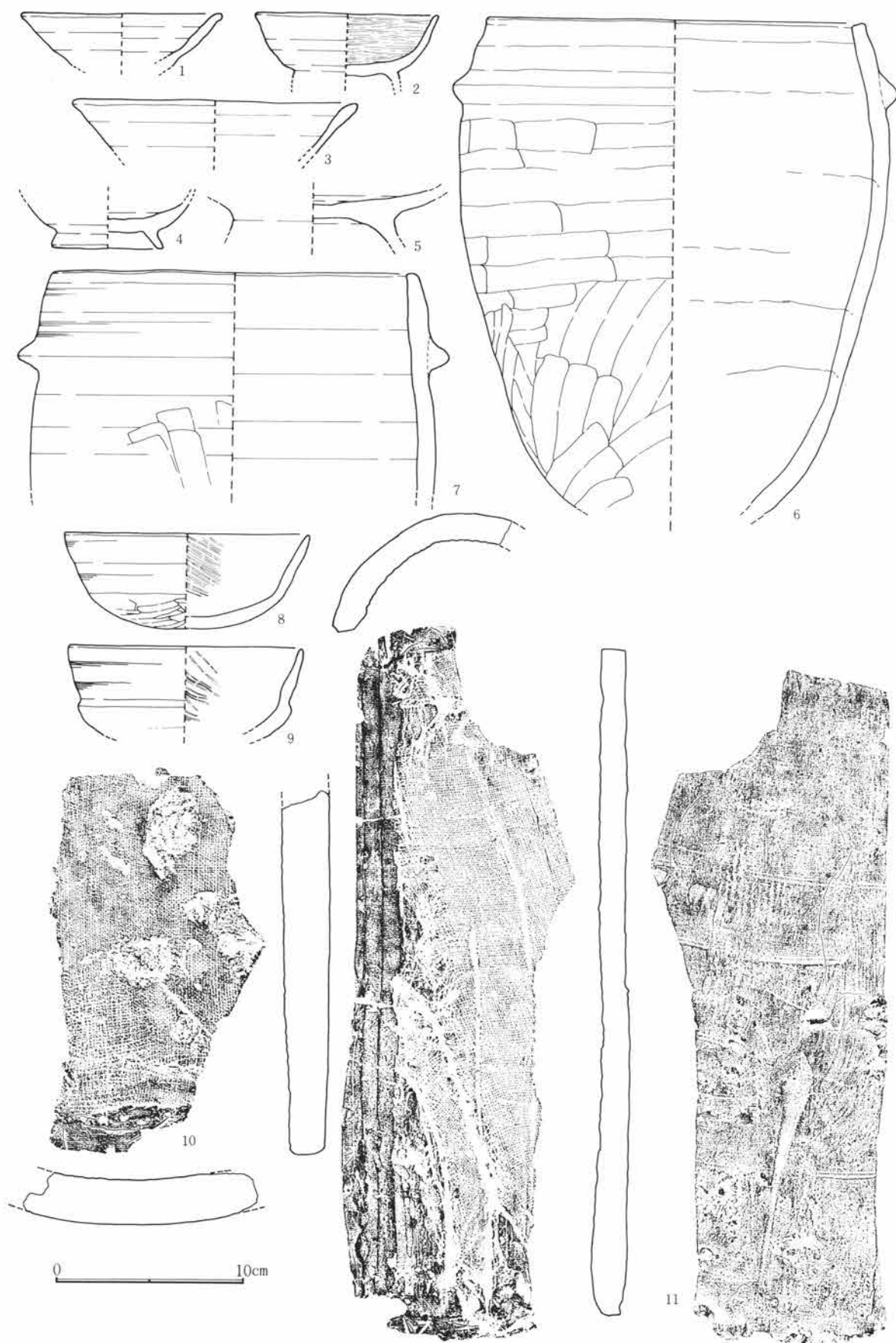


Fig. 312 L146号住居跡出土遺物(1)

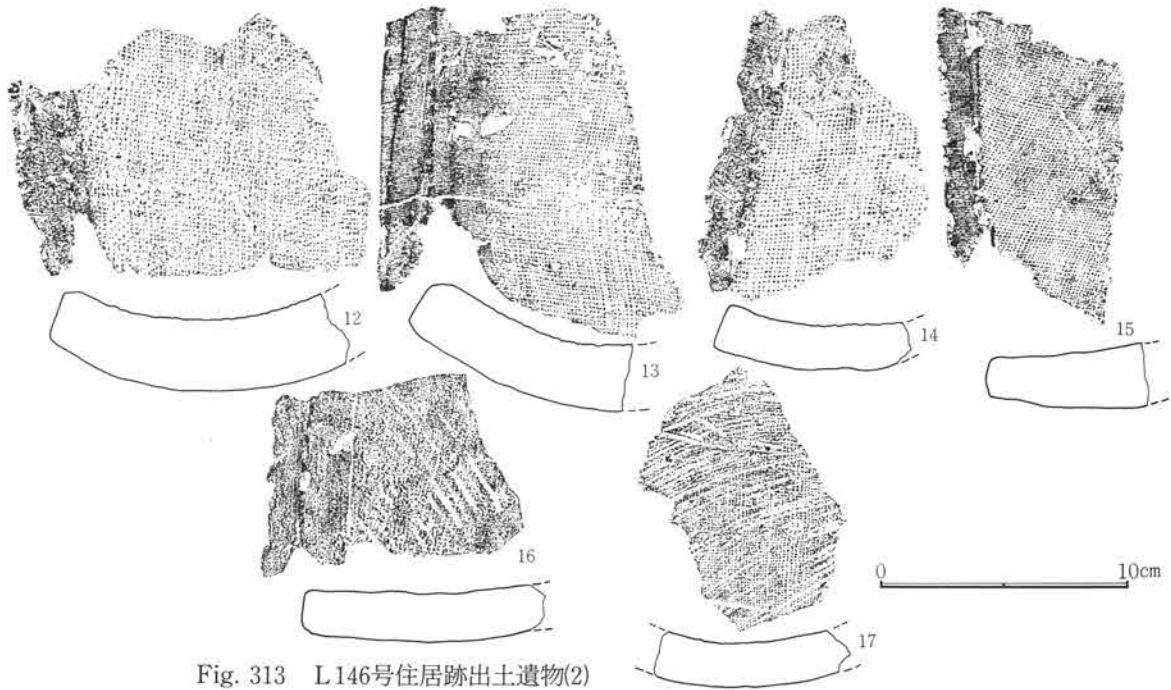


Fig. 313 L146号住居跡出土遺物(2)

L 146号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
312-1 102-1	須恵器 杯	1/2	10.6×— ×(2.8)	埋土	体部直線的に開き口唇部丸く外屈。轆轤成形。	①酸化・良好 ②鈍い橙 ③細砂混る
312-2 102-2	内黒土器 碗	3/4	9.6×— ×(3.4)	埋土	腰部強く張り体部内湾し口縁部緩く外反する。付高台、端部欠損。内面黒色処理・横篔磨き。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密
312-3 102-3	須恵器 杯	口縁部	15.0×— ×(2.7)	埋土	口縁部肥厚し丸い。体部〜口縁部僅かに外反して開く。	①良好 ②灰白 ③細砂混る
312-4 102-4	須恵器 碗	底部	—×5.8 ×(2.3)	竈埋土	腰部丸味をもつ。付高台、直線的にハの字状に開く。轆轤成形。	①酸化 ②鈍い黄橙 ③やや粗・細砂多混
312-5 102-5	須恵器 碗	底部	—×— ×(2.8)	竈埋土	腰部水平気味に開く。付高台、高く端部欠損。轆轤成形。	①酸化 ②鈍い黄橙 ③やや粗・砂混る
312-6 102-6	羽釜	1/2	21.8×— (25.4)口径23.4	竈	胴部やや張り気味。口縁部僅かに内傾。上端面緩く内斜。鈔厚く弱い突出。体部上半横篔削り。下半不定方向篔削り。	①酸化 ②鈍い黄橙 ③やや密
312-7 102-7	須恵器 羽釜	破片	19.0×—(11.5) 口径22.6	埋土	体部〜口縁部やや直線的に内傾。鈔厚く断面三角。体部回転篔削り後縦位篔削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
312-8 102-8	土師器 杯	1/2	12.8×— ×5.0	埋土	底部浅く丸味。受け部で僅か屈し口縁部弱くくびれ直線的に外傾。口縁外面横撫で。内面斜行篔磨き。底部篔削り。	①良好 ②明赤褐 ③細砂混る
312-9 102-9	土師器 杯	破片	12.4×— ×(4.7)	埋土	器肉厚く底部に丸味。受け部で強く屈し口縁部やや内湾気味に開く。口縁部横撫で。底部篔削り。内面斜行篔磨き。	①良好 ②明赤褐 ③密
312-10 102-10	瓦 平瓦		厚2.3	竈	凹面布目。凸面撫で。側縁篔調整。	①酸化気味・軟 ②鈍い黄橙 ③密
312-11 103-11	瓦 丸瓦		厚1.3	竈	凹面布目。凸面縄目叩き後篔撫で。側面篔調整。凹面に布合わせ目2条。	①良好 ②灰 ③やや密
313-12 102-12	瓦 平瓦	小片	厚2.8	竈	凹面布目。凸面撫で。側縁篔調整。	①酸化・良好 ②鈍い黄褐 ③やや密小石混
313-13 102-13	瓦 平瓦	小片	厚2.5	竈	凹面布目。凸面撫で。側縁篔調整。	①酸化・軟 ②橙 ③やや密
313-14 103-14	瓦 平瓦	小片	厚1.8	埋土	凹面布目。凸面撫で。側縁篔調整。	①良好 ②灰 ③やや粗
313-15 103-15	瓦 平瓦	小片	厚2.3	竈	凹面布目。凸面縄目。側縁篔調整。	①酸化気味・軟 ②鈍い橙 ③やや密
313-16 103-16	瓦 平瓦	小片	厚2.0	埋土	凹面布目。凸面撫で。側縁篔調整。	①良好 ②灰 ③やや密・白色細粒
313-17 103-17	瓦 平瓦	小片	厚1.8	竈	凹面布目。凸面篔撫で。	①酸化・良好 ②明褐 ③やや密

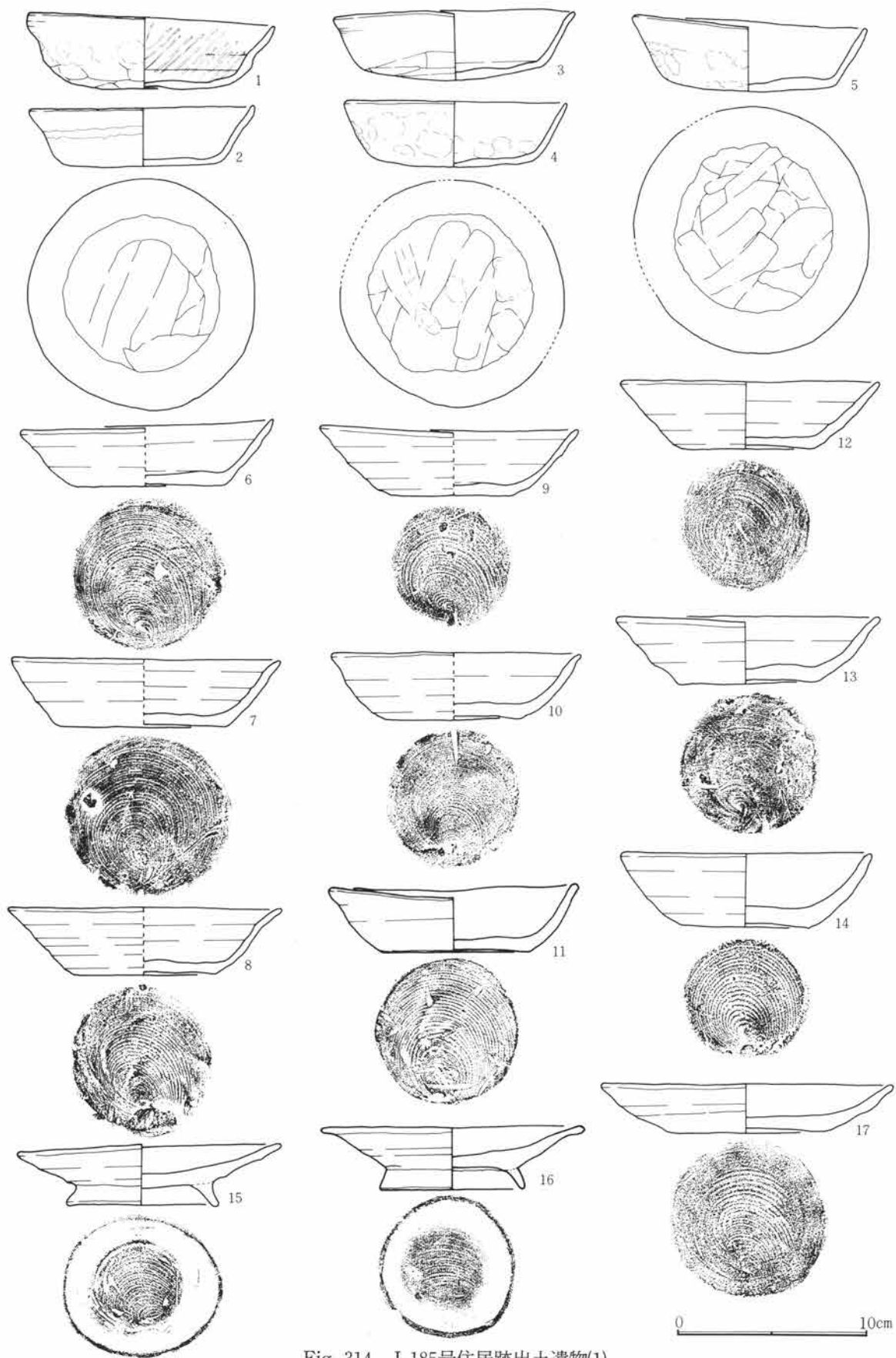


Fig. 314 L185号住居跡出土遺物(1)

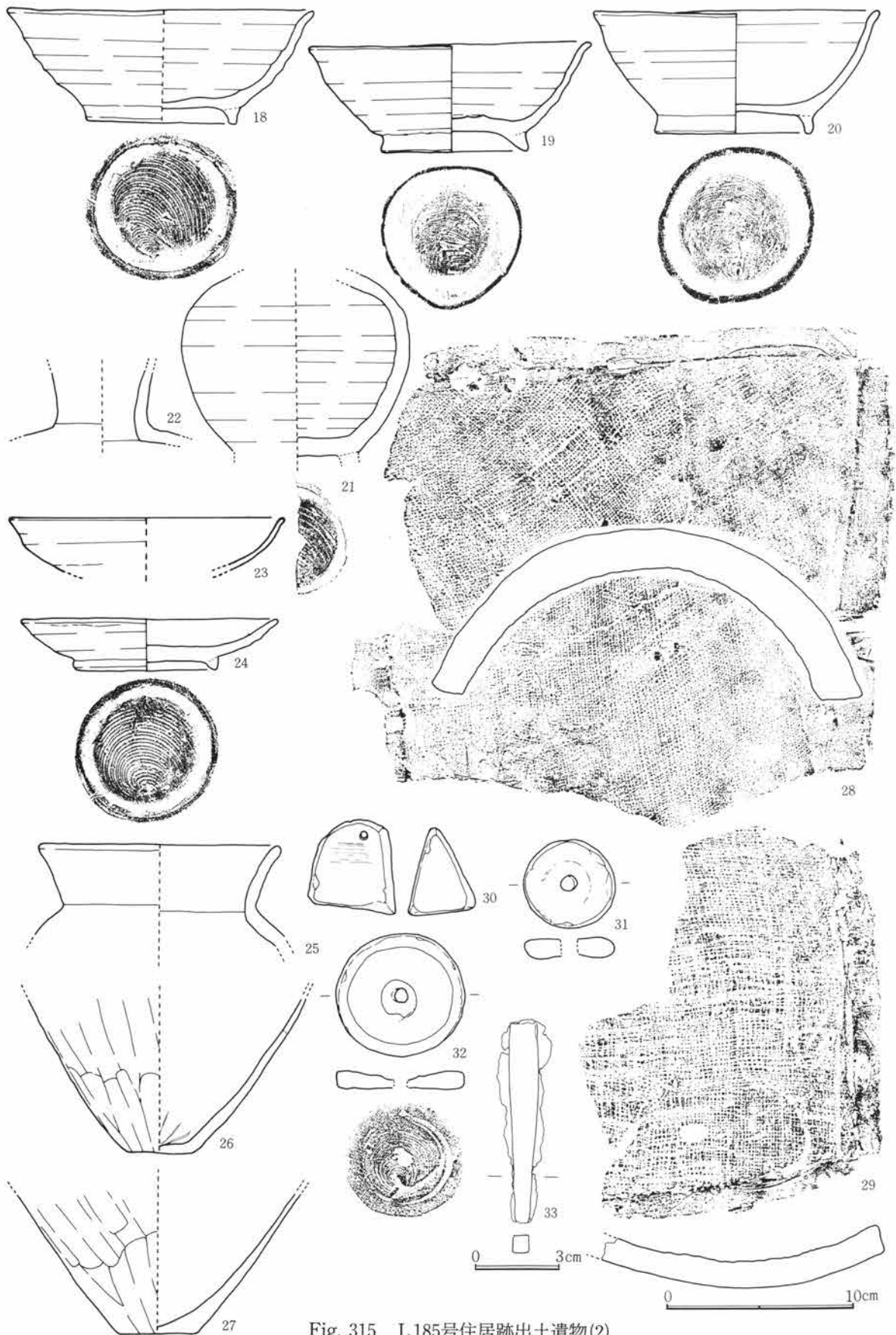


Fig. 315 L185号住居跡出土遺物(2)

第2章 遺構と遺物

L 185号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
314-1 103-1	土師器 杯	完形	12.7×— ×3.7	貯蔵穴	器肉薄い。腰部張り体部中位でくびれ口縁部内湾。口縁部横撫で。体部指頭痕。底部篋削り。内面斜行篋磨き。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
314-2 103-2	土師器 杯	完形	11.7×8.1 ×3.2	床直	器肉薄い。平底。体部下半は直線的。口縁部くびれて内湾気味に開き口唇部丸い。口縁・体部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・細砂混る
314-3 103-3	土師器 杯	完形	12.4×— ×3.5	埋土	平底気味の底部。体部直線的で口縁部僅かに外傾。器肉薄い。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
314-4 103-4	土師器 杯	完形	11.6×8.5 ×3.4	埋土	平底。体部外傾して開き口縁部やや内湾。口縁部横撫で。体部指頭痕。底部篋削り・指頭痕。内面撫で・指頭痕。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・細砂混る
314-5 103-5	土師器 杯	ほぼ完形	12.2×8.5 ×4.1	埋土	器肉薄く平底。体部直線的に外傾。口縁部やや内湾気味で口唇部丸い。口縁内面横撫で。体部指頭痕。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
314-6 103-6	須恵器 杯	完形	13.2×8.0 ×3.1	貯蔵穴	器肉薄い。腰部やや張る。体部上半直線的。口唇部丸く外反気味。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密・細砂混る
314-7 103-7	須恵器 杯	完形	14.0×8.6 ×3.5	+1	体部直線的。口縁部緩く外傾。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
314-8 103-8	須恵器 杯	完形	14.2×7.2 ×3.5	貯蔵穴	器肉薄い。腰部丸く張り口縁部外反気味に大きく開く。口唇部丸まる。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密・黒色粒混
314-9 103-9	須恵器 杯	完形	13.4×6.4 ×3.3	竈	器肉薄い。腰部から体部やや丸い。口縁部緩く外反して開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密・黒色粒混
314-10 103-10	須恵器 杯	完形	13.0×7.0 ×3.5	竈	底部肥厚し体部下半に丸味をもつ。口縁部僅かにくびれて外傾。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密・黒色粒混
314-11 103-11	須恵器 杯	完形	12.8×7.4×3.5 最大口径13.4	埋土	腰部から体部丸味強い。口縁部僅かに外反して開く。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①還元 ②灰白 ③細砂混る
314-12 103-12	須恵器 杯	完形	13.4×6.6 ×3.5	竈	体部やや直線的に大きく開く。口唇部丸まる。轆轤成形。右回転糸切り後周辺撫で調整。	①良好 ②灰白 ③やや密・黒色粒混
314-13 104-13	須恵器 杯	完形	13.6×7.2 ×3.4	+14	腰部直線的。体部中位でくびれ口縁部外反して開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②黄灰 ③やや密・細砂混る
314-14 104-14	須恵器 杯	完形	13.0×6.6 ×3.8	+10	器肉厚い。体部緩く内湾して開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密・砂混る
314-15 104-15	須恵器 皿	完形	13.6×8.0 ×3.2	竈	全体に肥厚。体部直線的に大きく開き上半腹れ口縁水平。付高台、やや高くハの字状。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
314-16 104-16	須恵器 皿	ほぼ完形	13.6×7.6 ×3.2	床直	体部大きく外傾し開き口縁部水平に屈する。口唇部丸い。付高台、高めで直線的なハの字状。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③細砂混る
314-17 104-17	須恵器 皿	完形	15.1×8.0 ×2.5	床直	底径大きく体部浅く直線的に大きく開く。轆轤成形。腰部回転篋削り。底部右回転糸切り後回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密・砂混る
315-18 104-18	須恵器 椀	完形	16.0×8.0 ×5.8	竈・ 131号埋土	体部丸味をもち大きく開き口縁部外傾。付高台、低く直立し断面矩形。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密・小石混る
315-19 104-19	須恵器 椀	7/8	14.9×7.8 ×5.7	+3	腰部張り気味で体部僅かな丸味。口縁部やや強く外屈。付高台、強くハの字状に張る。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
315-20 104-20	須恵器 椀	5/8	15.0×8.2 ×6.5	+3	体部深く内湾気味。口縁部緩く外反し口唇部丸まる。付高台、端部丸く直立気味。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③粗
315-21 104-21	須恵器 瓶	胴部	-×-(9.4) 胴最大径12.0	床直	丸味強く球胴を呈す。付高台、台部欠損。胴部内外面轆轤目。外面自然釉。	①良好 ②灰白 ③やや密・細砂混る
315-22 104-22	須恵器 瓶	頸部	-×-(3.9) 頸基径5.0	+9	頸部下半直立し上半は緩く外反。肩部張り気味。	①良好 ②灰 ③やや密
315-23 104-23	灰釉陶器 椀	小片	14.4×— ×(2.8)	埋土	器肉薄い。体部上半で屈し口縁部緩く外反。口唇部丸い。内外面施釉。	①良好 ②灰白 ③緻密
315-24 104-24	須恵器 皿	完形	13.6×7.4 ×2.7	埋土	体部やや内湾気味に開く。口縁部緩く外反。付高台、低く断面丸い。轆轤成形。右回転糸切り。内外面自然釉。	①良好 ②灰白 ③やや密
315-25 104-25	土師器 甕	小片	12.6×— ×(5.3)	埋土	胴部上半張り気味。口縁部直線的に外傾し口唇部丸い。口縁部横撫で。体部篋削り。内面撫で。	①良好 ②黄橙 ③やや密・細砂混る
315-26 104-26	土師器 甕	底部	—×3.2 ×(8.1)	貯蔵穴	底部小さく平底。胴部篋削り。内面篋撫で。見込部に指頭痕。	①良好 ②黄橙 ③やや密・細砂混る
315-27 104-27	土師器 甕	底部小片	—×4.0 ×(7.3)	竈・埋土	底部小さく平底。胴部篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗・黒色粒混
315-28 104-28	瓦 丸瓦		厚2.0	+0~10	凹面布目。凸面篋撫で。側縁篋調整。	①酸化気味 ②鈍い橙 ③やや粗
315-29 104-29	瓦 平瓦		厚1.55	竈・ +9	凹面布目。凸面篋撫で。側縁篋調整。	①良好 ②褐灰 ③やや粗・砂多量

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
315-30 105-30	石製品 砥石	完形	厚2.5	+1	多側面使用。片端に径0.4cmの穿孔。	流紋岩
315-31 105-31	石製品 紡錘車	完形	径4.8厚1.1 孔径0.8	埋土	扁平な円形。表裏面中央部窪む。	滑石
315-32 105-32	須恵片転 用紡錘車	完形	径6.4厚0.9 孔径0.9	+18	杯底部片転用。側縁丁寧に調整。中央部に穿孔。底面右回 転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
315-33 105-33	鉄器 角釘?		7.0×1.0 (0.5)	埋土	角釘か?両端部欠損。片端は細まる。	

L147号住居跡 (Fig. 316、317・PL. 25、105)

L区第4台地の調査区中央部やや東に位置し、60~62L19~21の範囲にある。重複はなく単独遺構である。平面形は南北に長軸をもつ略方形を呈するが、南・西壁線にやや歪みがある。南北長3.9m・東西長3.2mを測り、東西軸方位はN-90°-Eを示す。検出面までの削平が進んでおり、とくに東半の壁線は痕跡程度で

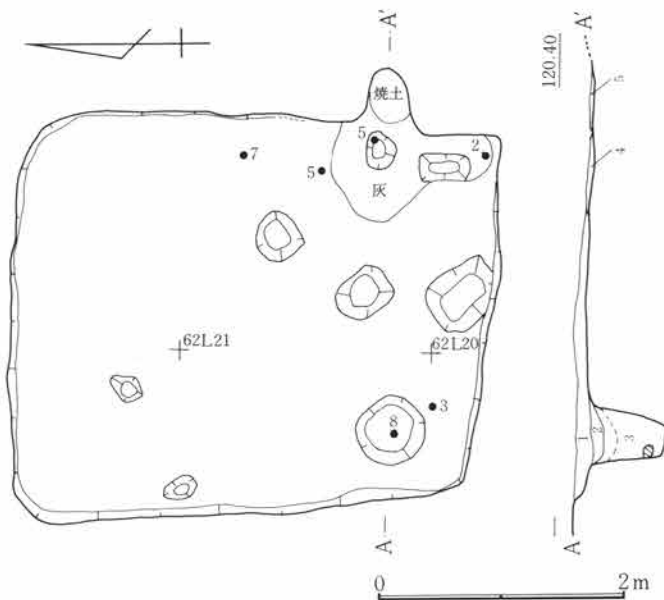


Fig. 316 L147号住居跡

ある。西壁での壁高は約10cmを測る。床面は凝灰岩質層を基盤にするため安定している。貯蔵穴は南西隅に設けられ、径55cm・深さ60cmの整った円形である。

竈は東壁にあり南に偏って付設されるが遺存状態は悪く、火床面と竈内から流出した灰層の分布のみが確認された。

出土遺物は灰釉陶器片などの他貯蔵穴内より長石製三輪玉がある。

L147号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石含む
- 2 暗褐色土 細粒C軽石少量含む
- 3 暗褐色土 炭化粒を少量含む
- 4 灰層
- 5 焼土層 (火床)

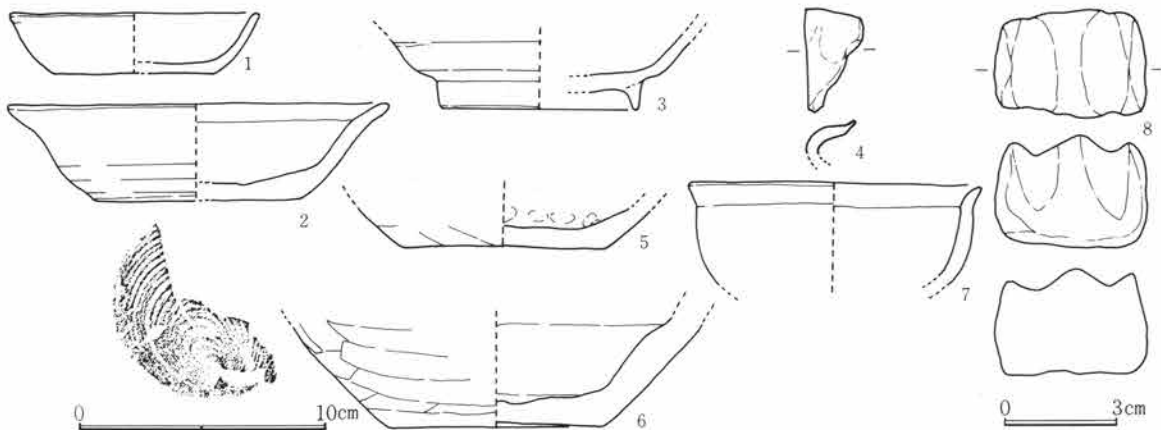


Fig. 317 L147号住居跡出土遺物

第2章 遺構と遺物

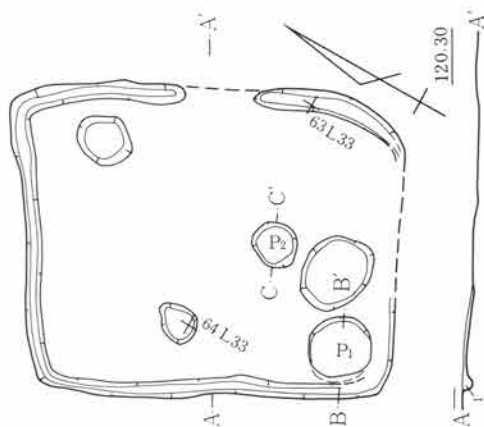
L 147号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
317-1 105-1	須恵器 杯	1/4	10.0×6.6 ×2.4	埋土	底径大きく体部中位で屈し直線的に開く。轆轤成形。	①酸化気味 ②灰白 ③やや粗・細砂混る
317-2 105-2	須恵器 杯	1/4	15.3×8.0 ×3.9	+1	腰部に丸味をもち口縁部大きく外傾。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②鈍い橙 ③やや粗
317-3 105-3	灰釉陶器 椀	底部	—×7.8 ×(2.7)	埋土	腰部張る。付高台、直に立つ。内面施釉。	①良好 ②灰白 ③緻密
317-4 105-4	灰釉陶器 耳皿	口縁部		埋土	耳部。	①良好 ②黄灰 ③やや密
317-5 105-5	土師器 甕	底部	1.5×— ×(8.2)	+2~6	外面斜位篋削り。底部篋調整。内面指頭痕。	①良好 ②赤褐 ③やや粗・小石混る
317-6 105-6	土師器 甕	底部	—×8.6 ×(4.0)	掘形埋土	紐造り。体部下半斜位篋削り。器肉厚い。	①良好 ②明赤褐 ③やや粗
317-7 105-7	土師器 椀	破片	11.7×— ×(4.1)	+5	体部丸く張り口縁部短く外反して開く。口唇部尖る。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや密
317-8 105-8	石製品 三輪玉	完形	4.1×2.8 重53.8g	Pit内	中央・両端の玉状作りは弱い。片端の脹らみは僅かに小さくして中心線は弱い湾曲状をみせる。	石英

L 148号住居跡 (Fig. 318・PL. 25)

L区第4台地の調査区北に位置し、62~64L32・33の範囲にある。重複はなく単独遺構である。台地縁辺に近いめか削平が進んでおり、検出面での掘形は浅く南壁線は不明瞭である。

平面形は南北に若干長い方形を呈する。南北長約3m・東西長2.5mを測り、東西軸方位はN-62°-Eを示す。



L148号住居跡

I 暗褐色土 炭化粒・Loam 粒含む 0 2m

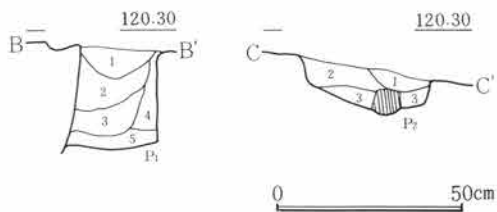


Fig. 318 L148号住居跡

壁高は検出面より4~5cmで、床面は凝灰岩質層を基盤にして安定している。東壁中央部を除き壁下の溝が巡るが、南壁沿いは床面に達する削平のためか遺存していない。貯蔵穴と考えられる土坑は南西隅に穿たれ、径50cm・深さ50cmの円形を呈す。床面には数箇所 Pit が認められるが柱穴に想定できるものはない。

竈は検出されていないが東壁中央部で壁下の溝が跡切れており、この部位に付設されていたと思われる。焼土面や灰層などの痕跡は認められなかった。

出土遺物は極めて少なく形状を知り得るものはない。

L148号住居跡P₁

- 1 黒褐色土 炭化粒含む
- 2 黒褐色土 炭化粒・Loam 粒含む
- 3 黒褐色土 炭化粒含む
- 4 黒褐色土 炭化粒含む砂質層
- 5 黒褐色土 炭化粒多量に含む

L148号住居跡P₂

- 1 黒褐色土 炭化粒含む粘性層
- 2 暗褐色土 焼土粒・炭化粒含む粘性層
- 3 暗褐色土 焼土塊多量に含む

L 149号住居跡 (Fig. 319、320・PL. 25、105)

L区第4台地の調査区ほぼ中央に位置し、63~66L14~18の範囲にある。L128号住居跡と重複し、これより古い時期の所産である。削平が著しく検出面からの掘形は浅い。

平面形は南北にやや長い方形を呈する大形住居である。南北長6.3m・東西長5.7mを測り、東西軸方位はN-76°-Eを示す。東壁を除き各壁には幅約18cm・深さ2~3cmの壁下の溝が巡る。貯蔵穴は南東隅にあり径60×70cmの浅い楕円形である。PitはP₁~P₆が掘形で検出されているが、柱穴としては配置・規模からP₃~P₅が妥当と思われる。P₃は径45cm・深さ75cm、P₄は径30×40cm・深さ75cm、P₅は径30cm・深さ36cmを測る。P₃・P₄の柱間は約4.15m、P₄・P₅は1.5mであり、P₅は補助柱的な位置にある。なおP₆は窪み程度の深さであり柱穴とは考えられない。

竈は東壁にあり僅かに南に偏って付設される。削平が著しく燃焼部の痕跡を認めたにすぎない。

出土遺物は土師器杯類があり少量である。

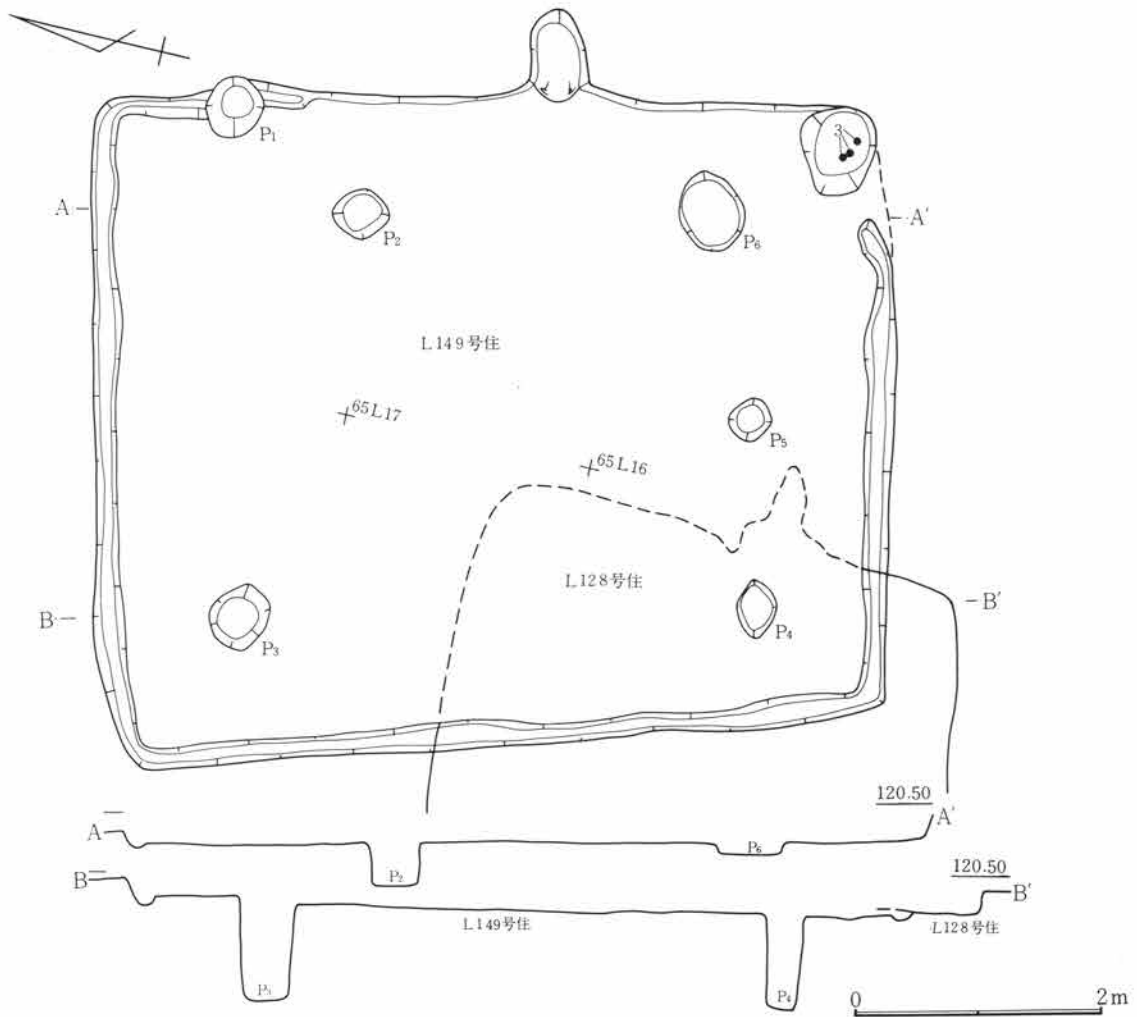


Fig. 319 L149号住居跡

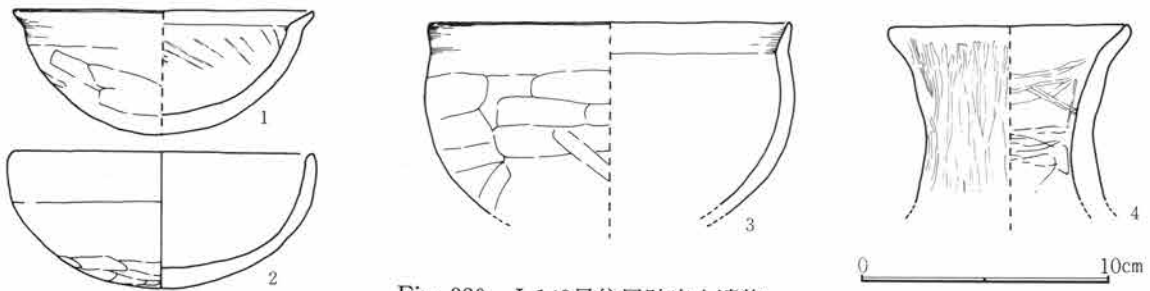


Fig. 320 L149号住居跡出土遺物

L 149号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
320-1 105-1	土師器 杯	1/2	12.0×— ×4.9	埋土	底部丸く球形を呈す。口縁部細まり内湾気味に外屈する内斜口縁。口縁部撫で。内面斜行篋磨き。外面篋削り。	①良好 ②明赤褐 ③やや密・砂混る
320-2 105-2	土師器 杯	ほぼ完 形	11.9×— ×5.4	貯蔵穴	底部丸く張り半球形。口縁部内湾気味に立つ。口縁部横撫で。底部篋削り。全体的に摩滅。	①良好・硬 ②橙 ③砂混る
320-3 105-3	土師器 杯	1/4	14.5×— ×(7.6)	貯蔵穴	体部深く丸く張り球形を呈す。口縁部細まり緩く外屈する内斜口縁。口縁部撫で。体部篋削り。	①良好 ②明赤褐 ③やや密・砂混る
320-4 105-4	土師器 壺	頸部1/4	9.5×— ×(6.9)	埋土	口縁部中位で細まり上半は外反して開く。口唇部内湾気味で丸い。外面縦・内面横篋磨き。口縁部撫で。	①良好 ②明赤褐 ③やや密・砂混る

L 152号住居跡 (Fig. 321、323、324・PL. 25、105、106)

L区第4台地の調査区西中央部に位置し、73~75L20~22の範囲にある。L180号・L199号住居跡と重複しているが両者より新しい時期の所産である。

平面形は南北に長軸をもつ方形である。南北長4m・東西長2.9mを測り、東西軸方位はN-106°-Eを示す。精査段階での削平が深く検出面からの掘形は浅い。壁高約8cm、床面は平坦をなすが踏み締まりは弱い。貯蔵穴と思われる土坑は南西部にあり径55×80cm・深さ15cm程度の浅い掘り込みである。

竈は東壁にあり南に偏って付設されるが、平面形をたどり得るほどの遺存状態である。燃焼部と煙道部と

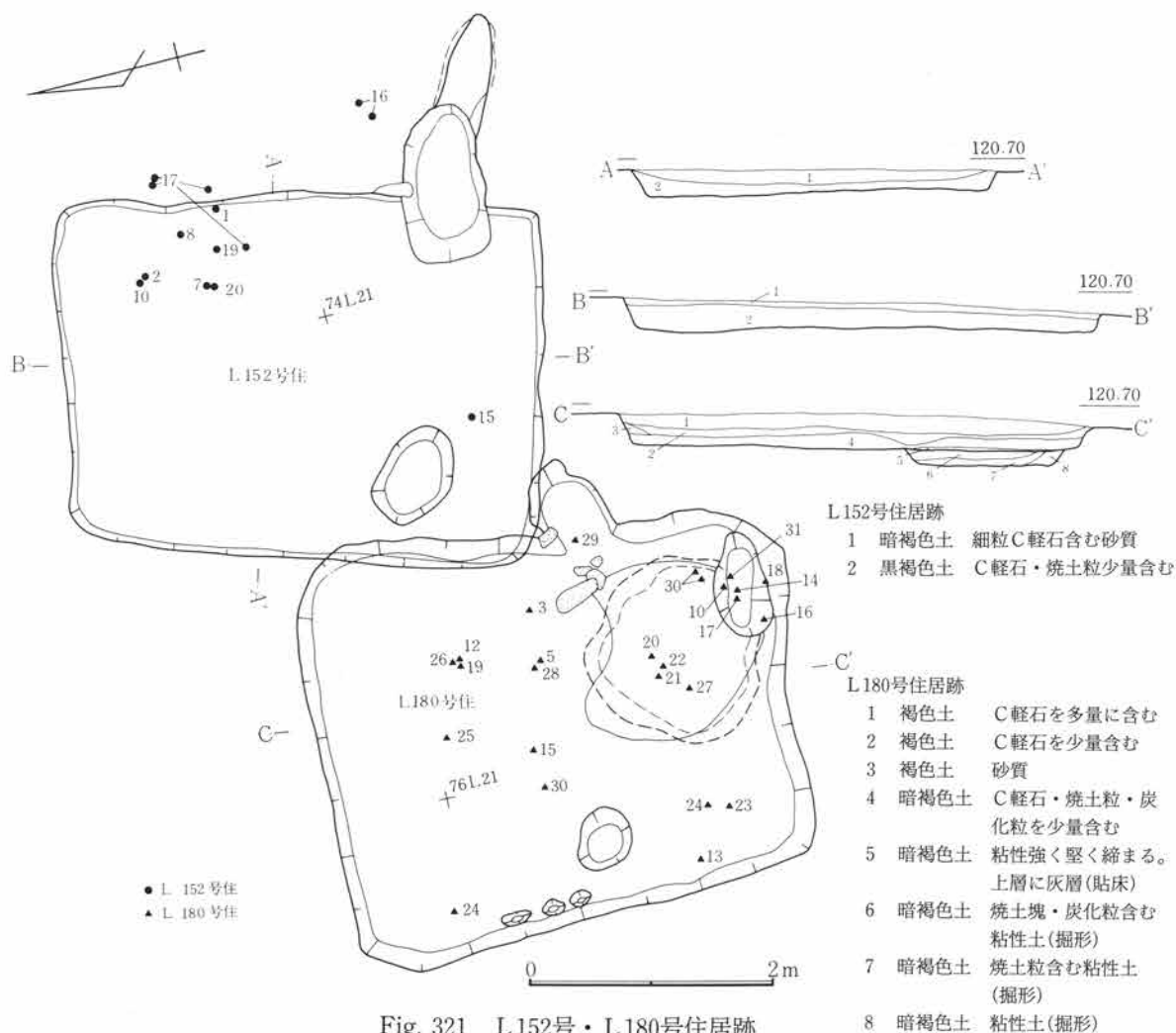


Fig. 321 L 152号・L 180号住居跡

の区別はできず狭長な掘形である。燃烧部幅50cm、竈全長1.16mを測る。竈軸は東壁線と直交せずおよそ15°南へ振れている。

出土遺物は北東部に集中して検出され、一部住居外出土のものも含めた。羽釜・灰釉陶器・舶載青磁片などがある。

L 180号住居跡 (Fig. 321、322、325、326・PL. 25、106、107)

L区第4台地の調査区西ほぼ中央に位置し、74～76 L19～21の範囲にある。L152号住居跡と重複しており、これより古い時期の所産である。また範囲的にはL139号・L142号住居跡と重複していると思われるが平面的重複はとらえられない。出土遺物の比較では両者よりも古い時期と考えられる。

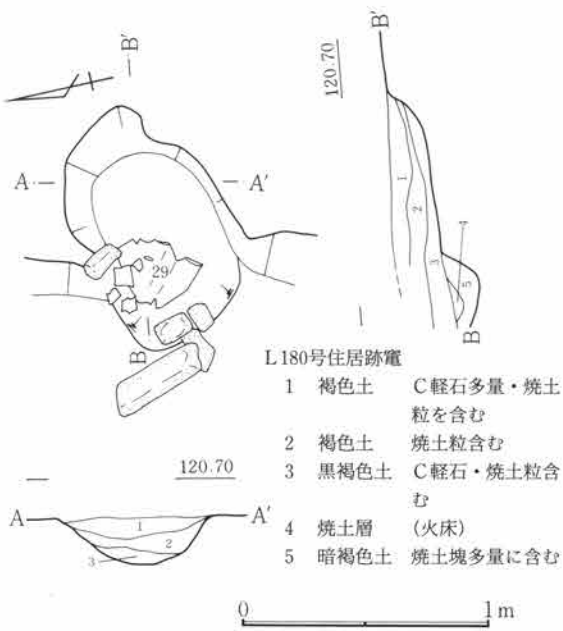


Fig. 322 L180号住居跡竈

平面形は南北に長軸をもつ方形を呈するが、南壁が短くやや歪みがある。南北長約3.9m・東西長3.4mを測り、東西軸方位はおよそN-98°-Eを示す。壁高は約27cm、床面はほぼ平坦をなし踏み締まりは良好である。貯蔵穴は南東隅にあり、径45×85cm・深さ14cmの浅い楕円形である。竈内より流出したと思われる灰層が広く分布し、貯蔵穴上面も覆われていた。床下土坑は灰層の分布範囲にあり径1.5mの楕円形である。壁下の溝は検出されないが、西壁下に3個小穴が穿たれる。

竈は東壁にあり僅かに南に偏って付設される。燃烧部は楕円形に掘り込まれ、構築材の一部と思われる凝灰岩質の加工材が前面に散乱する。燃烧部幅55cm・奥行き80cmを測る。

出土遺物は多く貯蔵穴内に集中し、他は床面上に散在していた。土師器・須恵器杯類が多い。

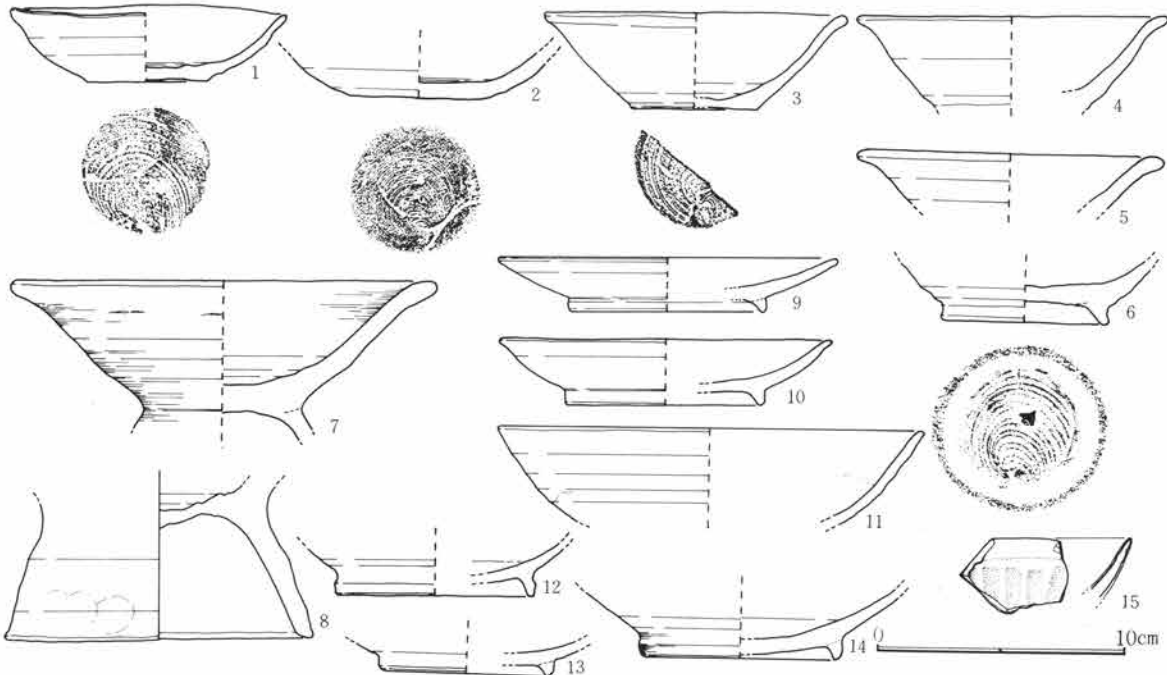


Fig. 323 L152号住居跡出土遺物(1)

第2章 遺構と遺物

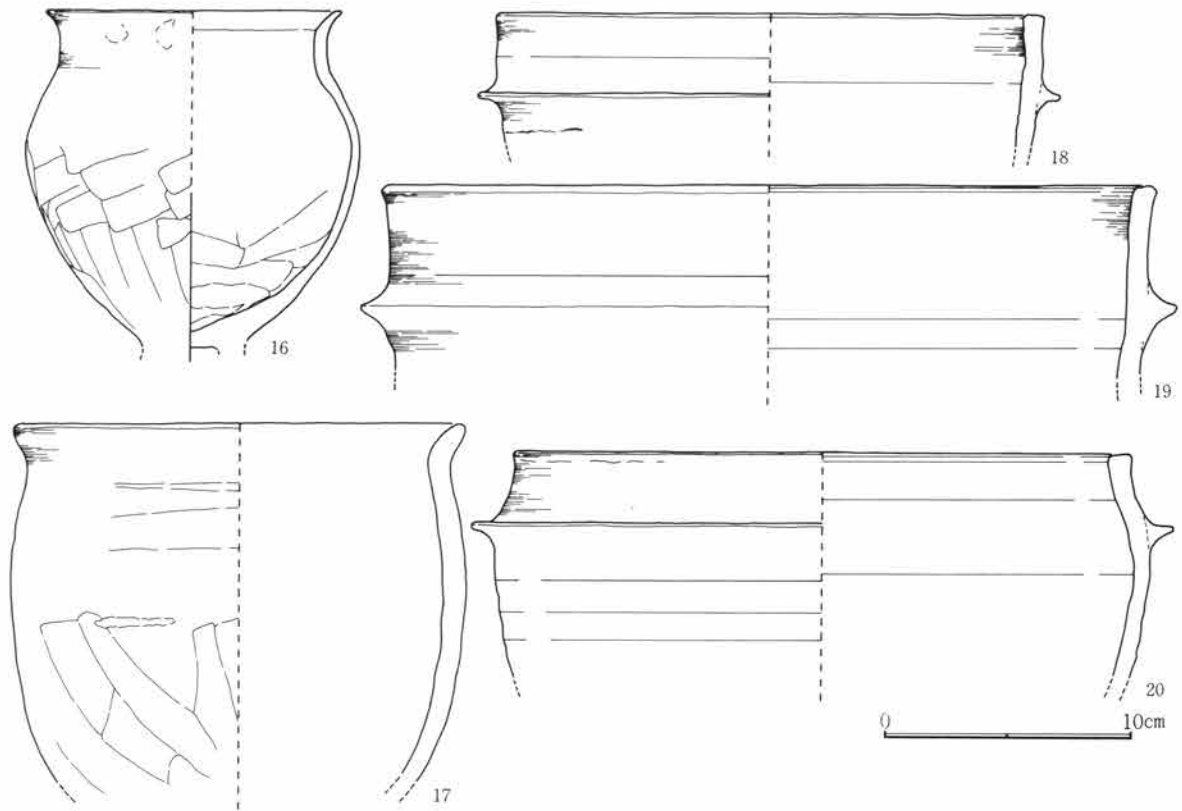


Fig. 324 L152号住居跡出土遺物(2)

L152号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
323-1 105-1	須恵器 杯	1/2	11.1×4.9 ×3.1	埋土・ +12	体部丸味をもち内湾気味。口縁部くびれた後緩く外反。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密・砂混る
323-2 105-2	須恵器 杯	底部	—×4.9 ×(1.9)	埋土	底径小さく腰部でやや丸味をもつ。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密・砂混る
323-3 105-3	須恵器 杯	1/4	12.1×5.2 ×3.8	埋土	体部直線的に大きく開く。口縁部外反し口唇部は肥厚し丸い。口縁部撫で。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②淡黄 ③やや密・小石混る
323-4 105-4	須恵器 椀	1/4	12.4×6.1 ×(3.6)	埋土	体部僅かに脹らみ直線的に外傾。口縁部大きく外反し口唇部丸い。口縁部撫で。轆轤成形。回転糸切り。付高台欠損。	①良好 ②灰黄 ③やや密・砂混る
323-5 105-5	須恵器 杯	口縁部 1/2	12.1×— ×(2.1)	埋土	体部丸味少なく直線的に開く。口縁部肥厚しやや大きく外反する。口唇部丸い。轆轤成形。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや密・砂混る
323-6 105-6	須恵器 椀	底部	—×6.7 ×(2.2)	埋土	体部やや丸味もつ。付高台、低く造りやや雑。端部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・砂混る
323-7 105-7	須恵器 椀	1/2	16.9×— ×(6.3)	埋土・ +3	体部直線的に大きく開き口縁部大きく外反。口唇部丸い。付高台、高くハの字状に開く。端部欠損。轆轤成形。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや密・細砂混る
323-8 106-8	須恵器 鉢?	台部	—×8.9 ×(6.2)	床下・ +11	器肉厚い。高台高く内湾気味に立つ。端部断面矩形。轆轤成形。下半に内外面对応する指頭痕。底部極めて薄い。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・砂混る
323-9 106-9	灰釉陶器 皿	1/4	13.6×7.7 ×2.2	埋土	体部直線的に開く。口唇部丸い。高台低く内湾気味。面取りあり。	①良好 ②灰白 ③密
323-10 106-10	灰釉陶器 皿	1/2	13.3×7.9 ×2.6	埋土	体部やや丸味をもち大きく開く。口縁部緩くくびれた後外反。口唇部丸い。高台断面矩形。見込部全面施釉。	①良好 ②灰白 ③密
323-11 106-11	灰釉陶器 椀	1/2	16.9×— ×(3.8)	埋土	体部丸く大きく開く。口縁部僅かに外反し口唇部丸い。体部上半施釉。底部欠損	①良好 ②灰白 ③密
323-12 106-12	灰釉陶器 椀	底部1/2	—×7.9 ×(2.1)	埋土	腰部丸味をもち見込部凹むか。高台緩く稜をなし内湾気味に立つ。断面矩形。見込部に重ね焼き痕。	①良好 ②灰白 ③密
323-13 106-13	灰釉陶器 椀	底部破片	—×6.9 ×(1.4)	埋土	高台低く端部丸い。	①良好 ②灰白 ③密・白色粒混る
323-14 106-14	灰釉陶器 椀	底部1/4	—×7.9 ×(2.9)	埋土	底部凹み体部直線的に外傾。高台部稜をなし内湾し立つ。	①良好 ②灰白 ③密

第1節 竪穴住居跡と出土遺物

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
323-15 106-15	青磁 碗	口縁部 破片		+2	口唇部細まり緩く外反気味。口縁部内外面に沈線。内面連弁凸刻文。釉調澄灰緑色で厚い。	①堅緻 ②灰白 ③密
324-16 106-16	土師器 台付甕	胴部 欠損	11.8×-× 13.3 台基底径13.3	竈・埋土	器肉薄い。胴部丸味強く最大径は上半。口縁部直立し上半外反して開くコの字口縁。口唇部細る。口縁部横撫で。胴部上半斜位・下半縦位篋削り。	①良好 ②鈍い赤褐 ③やや密
324-17 106-17	土師器 土釜	1/2	17.9×-× (14.2)	埋土・ +14	胴部緩い脹らみをもつ。口縁部短く外屈。口唇部丸い。胴部下半斜位篋削り。上半回転篋削り。口縁部・内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや密・小石混る
324-18 106-18	羽釜 破片	口縁部 破片	21.8×-× (5.3)口径23.2	埋土	口縁部直に立ち口唇部断面矩形。上端面水平。鏝強く強く突出。口縁部撫で。	①良好 ②灰白 ③やや密
324-19 106-19	羽釜 or 甕 破片	口縁部 破片	30.8×-× (7.4)口径32.5	+4	胴部丸味なく直線的に外傾。口縁部高く直立し口唇部断面矩形。上端面やや内傾。鏝強く水平に突出。口縁部撫で。	①良好 ②灰黄 ③やや密・小石混る
324-20 106-20	羽釜 破片	口縁部 破片	24.5×-× (9.0)口径27.9	+8	体部やや丸味をもつ。口縁部内傾。口唇部断面矩形でやや内傾。鏝強く突出しやや上向き。口縁部・胴部回転撫で。	①良好 ②灰黄 ③やや密・砂混る

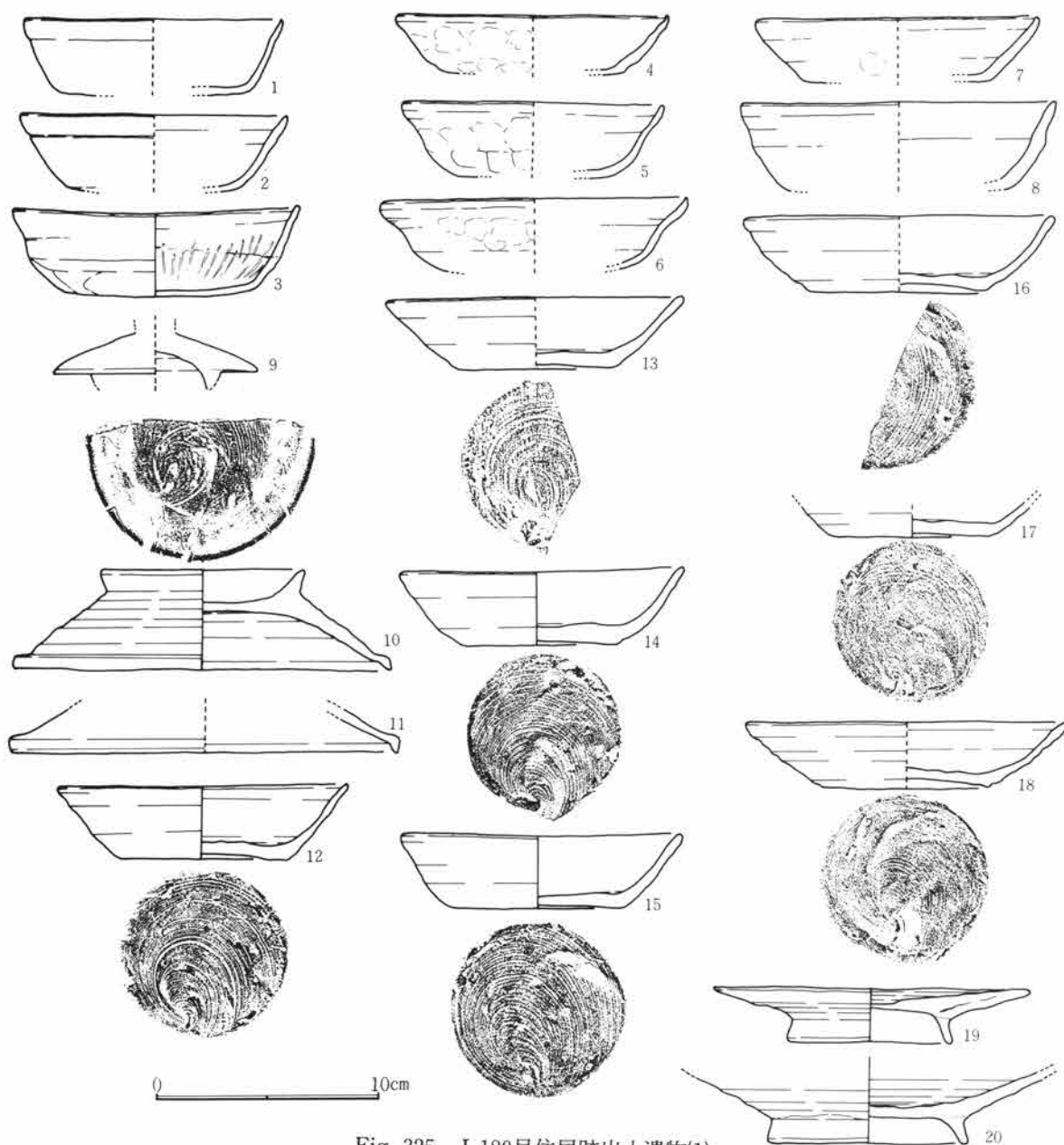


Fig. 325 L180号住居跡出土遺物(1)

第2章 遺構と遺物

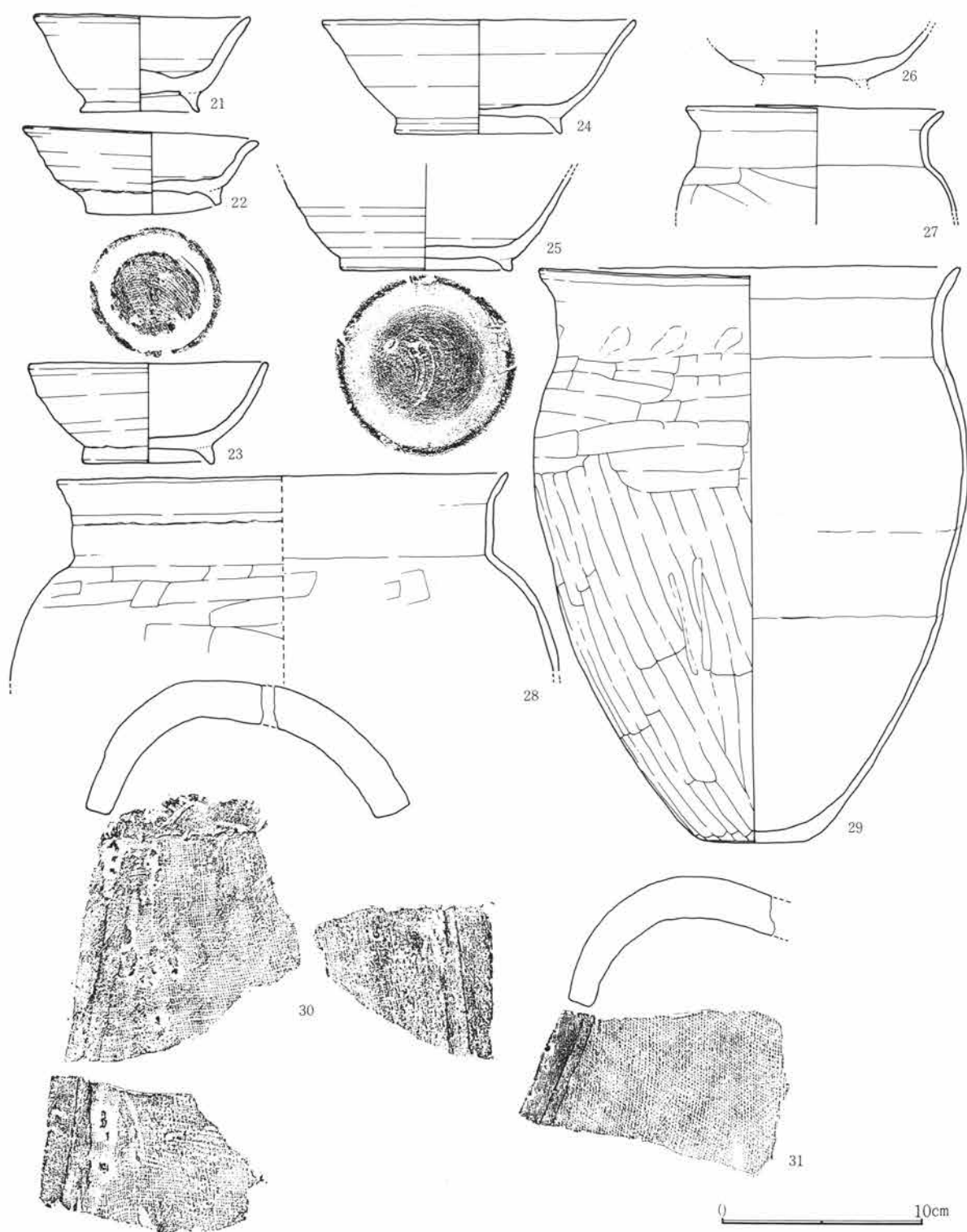


Fig. 326 L180号住居跡出土遺物(2)

L180号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
325-1 106-1	土師器 杯	¼	11.4×8.2 ×3.4	埋土	器肉薄い。体部直線的。口縁部内湾気味に開き口唇部小さく内屈。口縁部横撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
325-2 106-2	土師器 杯	¼	11.8×— ×(3.4)	埋土	底部やや丸味。体部直線的に外傾し口縁部内湾気味に小さく外傾。口縁部下に弱い沈線。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密

第1節 竪穴住居跡と出土遺物

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
325-3 106-3	土師器 杯	⅔	12.6×8.5 ×3.7	埋土・ +24	器肉薄い。丸味ある平底。体部外反気味に開き上半で緩くくびれ口唇部僅かに内屈。体部篋削り。内面放射状篋磨き。	①良好 ②橙 ③密
325-4 106-4	土師器 杯	⅔	12.0×8.0 ×2.6	埋土	器肉薄い。平底気味。体部直線的に開き口唇部内屈。体部指頭痕。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
325-5 106-5	土師器 杯	⅔	11.6×6.8 ×3.2	埋土	器肉薄い。腰部丸味をもち体部上半で緩くくびれ口縁部やや内湾して立つ。体部指頭痕。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
325-6 106-6	土師器 杯	⅔	13.6×8.6 ×3.1	埋土	腰部に丸味。体部でくびれ口縁部外反後口唇部尖り直立。体部指頭痕。口縁部・内面横撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・小石混る
325-7 106-7	土師器 杯	⅔	12.4×8.1 ×2.8	埋土	平底気味。体部緩く内湾して外傾。口唇部内屈。体部指頭痕。内面横撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
325-8 106-8	土師器 杯	⅔	13.9×— ×(3.8)	埋土	平底か?体部やや丸味をもち口縁部くびれて直線的。口縁部内外面横撫で。	①良好 ②淡橙 ③やや密
325-9 106-9	須恵器 蓋	⅔ 摘欠損	9.2×— ×(3.0)	埋土	器肉肥厚。体部やや直線的に開き内面厚く大きなかえり。	①良好 ②灰白 ③やや密
325-10 106-10	須恵器 蓋 or 皿	⅔	16.4×—× 4.2摘径9.0	貯蔵穴	体部外反気味に開き口縁部小さく折れやや外傾。摘大きく高台に似る。轆轤成形。天井部右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③密
325-11 106-11	須恵器 蓋	⅔ 摘欠損	17.0×— ×(1.9)	埋土	体部直線的に開き口縁部直に折れる。口縁部丸まる。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密
325-12 106-12	須恵器 杯	ほぼ完形	12.8×7.2 ×3.2	+4~6	体部直線的。口縁部は僅かに外傾。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密・粗砂混る
325-13 106-13	須恵器 杯	⅔	13.1×6.8 ×3.1	+1	体部直線的に外傾。口縁部やや肥厚。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
325-14 106-14	須恵器 杯	ほぼ完形	12.6×6.9 ×3.2	貯蔵穴	底部肥厚。体部内湾して開き口縁部は僅かに外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗
325-15 106-15	須恵器 杯	完形	12.5×7.6 ×3.1	+22	腰部に丸味をもち体部内湾気味に開き口縁部外傾。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密・粗砂混る
325-16 107-16	須恵器 杯	⅔	13.6×7.6 ×3.3	貯蔵穴	体部内湾し口縁部緩く外反。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗・小石混る
325-17 107-17	須恵器 杯	底部	—×7.0 ×(1.4)	貯蔵穴	底部やや肥厚。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②暗灰 ③やや粗
325-18 107-18	須恵器 杯	⅔	14.2×7.4 ×2.8	埋土・ 貯蔵穴	体部内湾気味で大きく開く。口縁部肥厚し口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③粗砂混る
325-19 107-19	須恵器 皿	完形	13.8×7.0 ×2.4	+16	見込部段状で薄い。体部肥厚し大きく開き中位でくびれ口縁部水平気味で口唇部細る。付高台、やや高く外反して立つ。端部丸まる。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③細砂混る
325-20 107-20	須恵器 皿	口縁部 欠損	—×8.0 ×(3.7)	竈埋土	体部直線的で大きく開く。付高台、やや高くハの字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
326-21 107-21	須恵器 椀	完形	10.6×5.8 ×4.6	+24	器肉厚い。体部直線的で口縁部僅かに外傾。口唇部細る。付高台、薄くハの字状に開く。轆轤成形。	①酸化・良好 ②橙 ③粗・粗砂混る
326-22 107-22	須恵器 椀	ほぼ完形	11.5×6.6 ×4.0	+23	歪み大。腰部張り口縁部強く外反。付高台、断面矩形。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②灰 白 ③粗・小石混る
326-23 107-23	須恵器 椀	⅔	11.6×6.4 ×4.3	+24	体部丸く内湾して開く。付高台やや、高くハの字状に開く。断面丸い。轆轤成形。	①酸化気味 ②黄橙 ③やや粗
326-24 107-24	須恵器 椀	⅔	15.0×8.0 ×5.5	埋土	器肉薄く体部中位で張り大きく開く。口縁緩く外反。口唇部丸い。付高台、端部丸くハの字状。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
326-25 107-25	須恵器 椀	⅔ 口縁欠	—×8.2 ×(4.5)	+11	腰部小さく張り体部直線的。付高台、低く断面丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③密
326-26 107-26	内黒土器 椀	底部	—×— ×(2.3)	+14	腰部丸く張る。内面黒色処理・篋磨き。付高台欠損。轆轤成形。	①酸化・良好 ②橙 ③やや粗
326-27 107-27	土師器 甕	口縁部	12.5×— ×(5.2)	埋土	肩部張る。口縁部直立し上半は外屈するコの字口縁。口縁内外面横撫で。体部外面横・斜位篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
326-28 107-28	土師器 甕	口縁部	22.0×— ×9.7	埋土・ +16	器肉薄く胸部丸く張る。口縁部直立し上半外屈のコの字口縁。口縁内外面横撫で。胸部外面横篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
326-29 107-29	土師器 甕	⅔	20.8×5.0 ×28.0 最大径21.6	竈	胸部上位に張りをもつ。口縁部直立気味に立ち上半外反しだれたコの字口縁。口縁部横撫で。指頭痕顕著。胸部上半は横位・下位は縦位篋削り。	①酸化 ②鈍い橙 ③細砂混る
326-30 107-30	瓦 丸瓦		厚1.9	+0~10	凹面布目。凸面撫で。側縁篋調整。	①良好 ②黒褐 ③やや粗
326-31 107-31	瓦 丸瓦	小片	厚1.85	貯蔵穴	凹面布目。凸面撫で。側縁篋調整。	①良好 ②灰白 ③密

第2章 遺構と遺物

L 158号住居跡 (Fig. 327、328・PL. 25、108)

L区第4台地の南端に位置し、71~73L 3~5の範囲にある。L126号・L163号住居跡と重複しているが両者より新しい時期の所産である。

平面形は南北に長軸をもつ略方形を呈する。南北長4.2m・東西長2.7m測り、東西軸方位はN-93°-Eを示す。壁高は約15cmを測り、床面はL126号住居跡の埋土FA混じり層を床土にするためやや軟弱である。貯蔵穴などは検出されない。

竈は東壁にありやや南に偏って付設され、袖部は明らかでない。燃焼部幅約50cm・奥行き40cmを測る。出土遺物は散在しており、須恵器小杯・灰釉陶器・土釜などがある。

L 163号住居跡 (Fig. 327、329・PL. 25、108)

L区第4台地の南端に位置し、71~73L 2~4の範囲にある。L126号・L158号住居跡と重複しており、前者より新しく後者より古い時期の所産である。南東部は事前調査時の試掘溝によって消失している。

平面形は西壁線が長く南北に長軸をもつ略台形状を呈す。南北最大長4.35m・東西長約3.5mを測り、東西軸方位はN-89°-Eを示す。壁高は22cmを測り、床面は平坦をなすが踏み締まりは弱い。また北壁沿いはL126号住居跡の埋土であるFA混じり層を床土にするため軟弱である。

竈は検出されていないが、試掘溝内に若干の焼土粒の分布が見られ、東壁の南に偏った位置に付設されたと考えられる。

出土遺物は少なく散在していたが、転用埴塼と思われる小片がある。

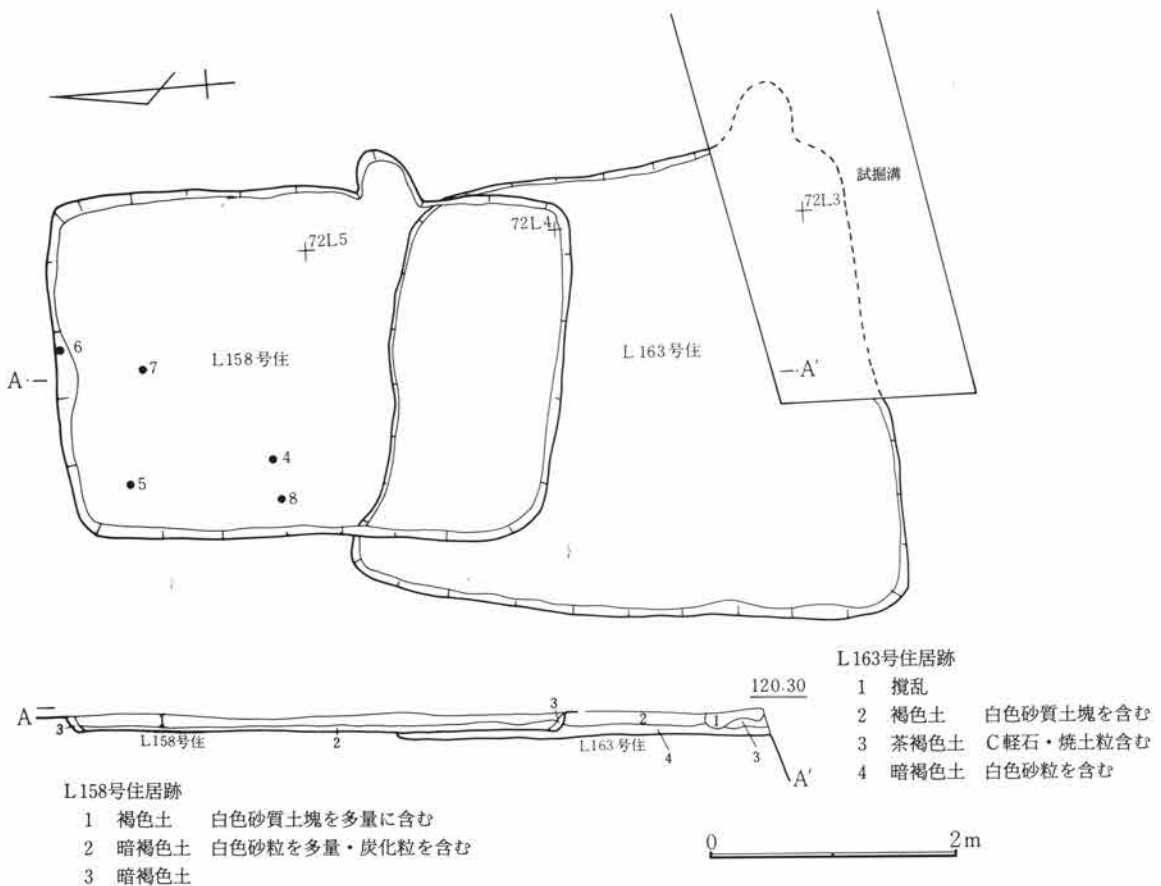


Fig. 327 L 158号・L 163号住居跡

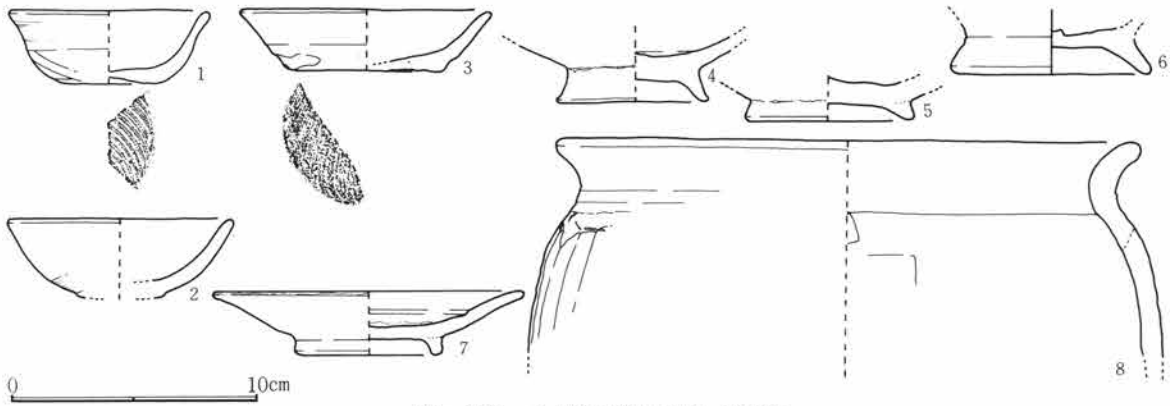


Fig. 328 L158号住居跡出土遺物

L 158号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
328-1 108-1	須恵器 杯	¼	8.0×4.0 ×2.9	埋土	腰部丸味をもち体部深い。口縁部やや外反し口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや密
328-2 108-2	須恵器 杯	¼	9.0×3.5 ×(3.1)	埋土	小形。底径小さく腰部やや丸味をもつ。体部内湾気味に外傾。口唇部丸い。	①酸化 ②明赤褐 ③細砂混る
328-3 108-3	須恵器 杯	¼	10.0×6.0 ×2.4	埋土	体部直線的に大きく外傾。轆轤成形。回転糸切り。底部周辺に撫で。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや粗
328-4 108-4	須恵器 碗	高台部	—×6.1 ×(2.6)	埋土	底部肥厚。付高台、やや高くハの字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや粗
328-5 108-5	須恵器 碗	高台部	—×6.7 ×(1.7)	+ 8	器肉厚い。付高台、やや低い。底部切り離し後周辺撫で。	①酸化 ②橙 ③密
328-6 108-6	須恵器 碗	高台部	—×7.9 ×(2.0)	埋土	付高台、ハの字状に強く開き断面丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 ②橙 ③やや粗
328-7 108-7	灰釉陶器 段皿	¼	12.4×5.9 ×2.5	+ 6	器肉厚く体部内面中位で段をなし緩く外反して開く。口唇部丸い。付高台、断面矩形。刷毛塗り施釉。	①良好 ②灰白 ③密
328-8 108-8	土師器 甕	口縁部 破片	23.6×— ×(8.4)	+ 1	器肉厚い。胴部丸く張る。口縁部短く外反して開く。口唇部丸い。口縁部横撫で。体部縦位笕削り。内面撫で。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗

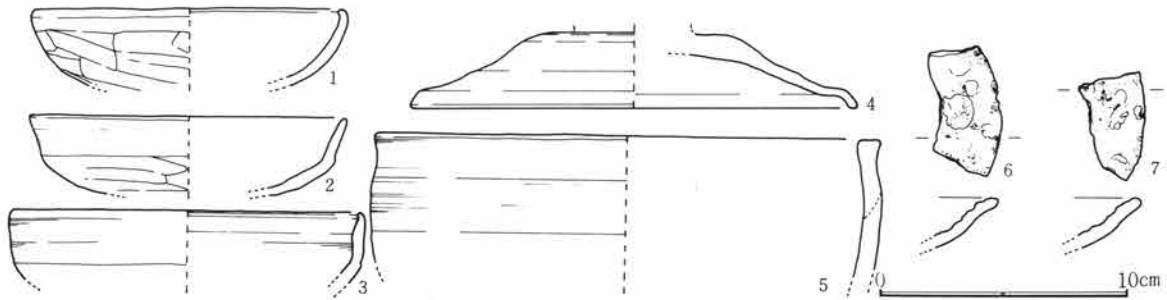


Fig. 329 L163号住居跡出土遺物

L 163号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
329-1 108-1	土師器 杯	¼	12.2×— ×(3.1)	埋土	底部丸い。口唇部丸く内屈。口縁部横撫で。底部笕削り。	①良好 ②橙 ③やや密
329-2 108-2	土師器 杯	¼	12.6×— ×(3.1)	埋土	底部扁平で平底気味。口縁部やや外傾して開く。口縁部横撫で。体部笕削り。	①良好 ②橙 ③やや粗
329-3 108-3	土師器 杯	口縁部 破片	13.8×— ×(2.8)	床下埋土	口縁部波打ち内湾気味に直立。全体に燻し。口縁部内外面横撫で。	①良好 ②黒褐 ③やや密・細砂混る
329-4 108-4	須恵器 蓋	¼ 摘欠損	17.7×— ×(3.0)	埋土	天井部平坦。体部外反気味に開く。口縁部小さく折れて外傾。轆轤成形。天井部回転笕削り。	①良好 ②灰白 ③密

第2章 遺構と遺物

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
329-5 108-5	須恵器 鉢	破片	20.2×— ×(5.4)	埋土	体部弱く張る。口縁部やや肥厚しくびれて直立。断面矩形を呈す。轆轤成形。	①良好 ②灰黄 ③やや粗
329-6・7 108-6・7	須恵器片 転用埴塼	口縁部 小片		埋土	内面に銅滓附着。二次被熱顕著。2点同一個体。	①良好 ②灰 ③やや粗
108-8	緑釉陶器	小片		埋土	内外面篋磨き。釉調暗オリーブ。	①良好 ②灰 ③密

L160号住居跡 (Fig. 330~333・PL. 25、108)

L区第4台地の北端に位置し、70~73L42~44の範囲にある。台地縁辺の開削・流出のためか住居跡の北半は消失しており、形状その他不明瞭な部分が多い。

平面形は略方形を呈すると思われ、南壁より3.8m、西壁より3mの範囲まで確認した。西壁線に基づく東西軸方位はおおよそN-150°-Eを示す。壁高は良好な部分で23cmを測り、床面は凝灰岩質層を基盤にするため安定している。

竈は南東隅に付設されたと考えられるが形状は不明である。燃焼部と思われる窪みには焼土粒が認められ、支脚材が検出されている。西壁線に径0.8×1.1m・深さ10cmの土坑が検出されたが、性格は不明である。

出土遺物は少なく竈内に灰釉陶器・羽釜などがある。

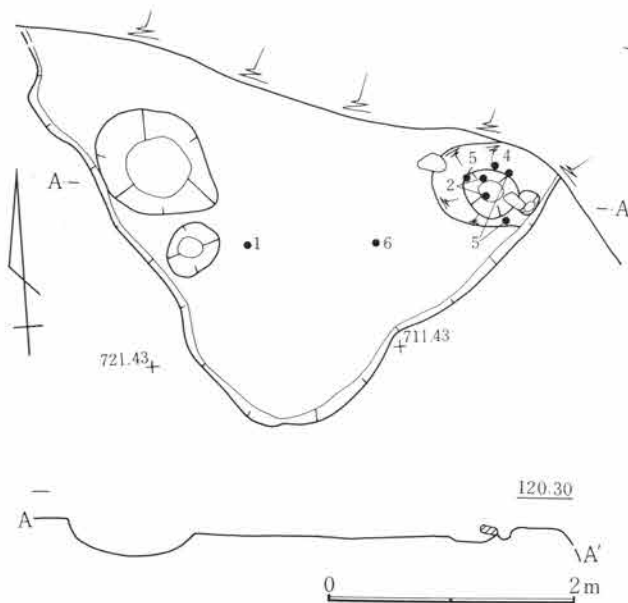
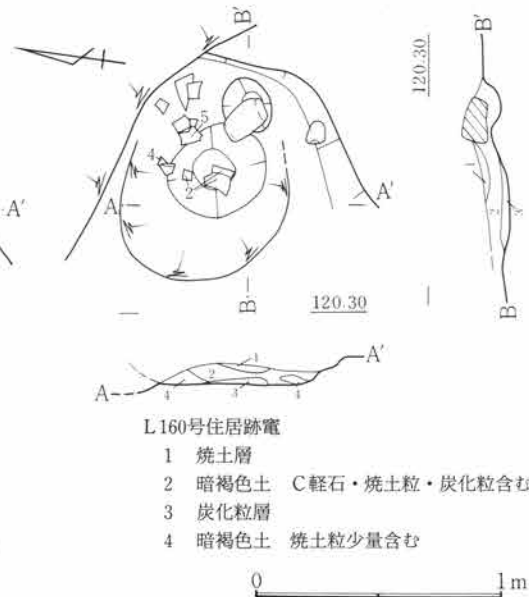


Fig. 330 L160号住居跡



L160号住居跡竈

- 1 焼土層
- 2 暗褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒含む
- 3 炭化粒層
- 4 暗褐色土 焼土粒少量含む

Fig. 331 L160号住居跡竈

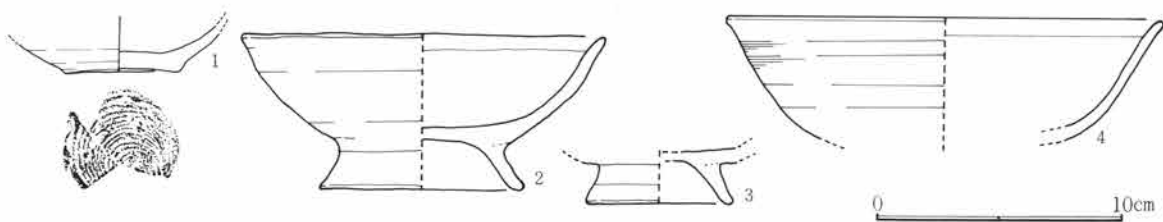


Fig. 332 L160号住居跡出土遺物(1)

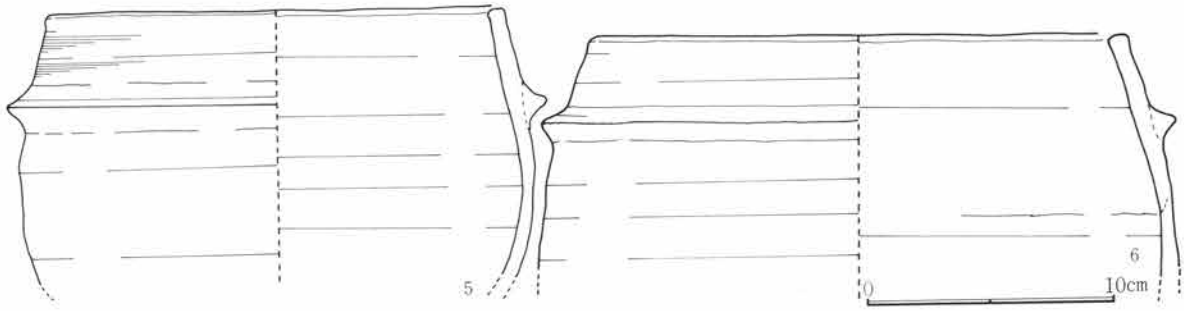


Fig. 333 L160号住居跡出土遺物(2)

L160号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
332-1 108-1	須恵器 杯	底部	—×6.6 ×(1.7)	+17	腰部丸味強い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②橙 ③やや密・白色粒混
332-2 108-2	須恵器 椀	1/2	14.6×6.2 ×6.1	竈	体部丸く内湾して開く。口縁部緩く外反。付高台、高く大きくハの字状に開く。轆轤成形。見込部に煤附着。	①酸化気味 ②浅黄橙 ③赤色粘土混る
332-3 108-3	須恵器 椀	高台部 小片	—×5.8 ×(2.3)	埋土	付高台、高くハの字状に開く。端部丸い。轆轤成形。	①酸化 ②浅黄橙 ③白色粒混る
332-4 108-4	灰釉陶器 椀	破片	17.4×— ×(4.8)	竈・埋土	腰部で丸く張る。口縁部僅かに外反。口唇部丸い。内面施釉。	①良好 ②灰 ③密
333-5 108-5	羽 釜	破片	18.4×—×(—) 10.7)口径21.6	竈・埋土	胴部丸く張る。口縁部直線的に内傾。上端面僅かに内斜。銚断面略三角で水平に突出。内外面回転撫で。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや粗・白色粒混
333-6 108-6	羽 釜	小片	21.6×—×(—) (9.3)口径25.4	+3	胴部から口縁部僅かに丸味をもって内傾。口唇部幅広く上端面平ら。銚やや低く略三角。内外面回転撫で。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや粗・白色粒混

L161号住居跡 (Fig. 334、335・PL. 26、108)

L区第4台地の北に位置し、68・69L37・38の範囲にある。重複はなく単独遺構である。台地の削平が深いため検出面からの掘形は浅く、とくに南半が著しく南壁線は検出できなかった。

平面形は略方形を呈すると考えられる。東西長は約3m、南北は北壁より約2.7mの範囲まで確認した。東西軸方位はおよそN-78°-Eを示す。壁高は検出面より約5cmを測り、床面は緩く波うつが、凝灰岩質層を

床土にするため安定している。貯蔵穴と考えられる土坑は西壁線に穿たれ、およそ竈軸の延長線上にある。65×80cm・深さ54cmの方形を呈する。

竈は東壁に付設されるが遺存が悪く、火床の焼土と灰層が認められたにすぎない。

出土遺物は少量である。

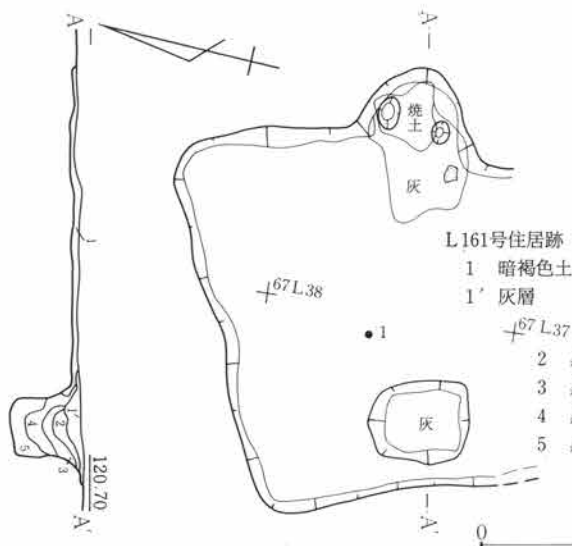


Fig. 334 L161号住居跡

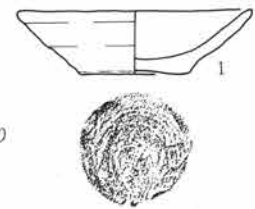


Fig. 335 L161号住居跡出土遺物

L 161号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
335-1 108-1	須恵器 杯	完形	9.4×4.4 ×2.55	埋土	腰部でくびれて体部直線的に開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②黄 橙 ③やや密

L 162号住居跡 (Fig. 336~339・PL. 26、108、109)

L区第4台地の調査区南西部に位置し、72~74L 9~11の範囲にある。L176号・L183号・L193号住居跡と重複しているが、いずれより新しい時期の所産である。

平面形は東西にやや長い方形を呈する。南北長3.5m・東西長3.8mを測り、東西軸方位はおよそN-94°-Eを示す。壁高は22cmを測り、床面はほぼ平坦をなすが竈前面を除きやや踏み締まりは弱い。貯蔵穴と考えられる土坑は南東隅にあり径40cm・深さ10cm程度の浅い窪みである。竈前面には広く灰層が流出分布する。

竈は東壁にあり僅か南に偏って付設する。袖部などの検出はなく、遺存状況は悪い。燃焼部幅約60cm・奥行き55cmを測る。

出土遺物は散在して検出されたが灰釉陶器が目立つ。

L 176号住居跡 (Fig. 336、340、341・PL. 26、109、110)

L区第4台地の調査区南西部に位置し、72~74L 8~10の範囲にある。L162号・L183号・L193号住居跡と重複しており、L162号住居跡より旧く、他よりは新しい時期の所産である。北壁から東壁の一部は掘形の深いL162号住居跡によって消失している。

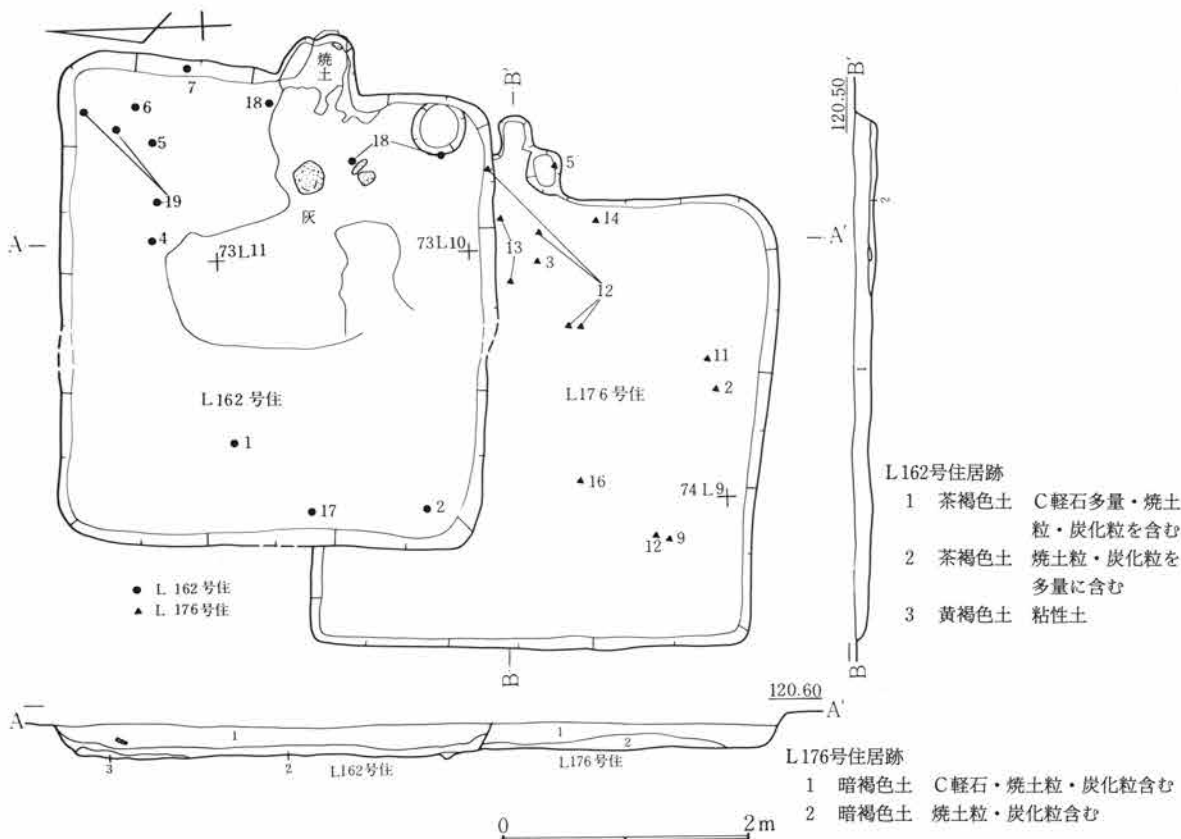
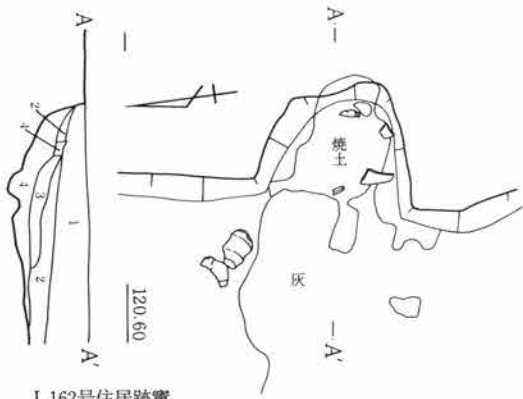


Fig. 336 L162号・L176号住居跡



L162号住居跡竈

- 1 茶褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒含む
- 2 茶褐色土 焼土粒・炭化粒多量に含む
- 3 焼土粒・黒色灰混合層
- 4 焼土塊層



Fig. 337 L162号住居跡竈

平面形は東西・南北長とも同規模の3.5mで略方形を呈する。東西軸方位はN-92°-Eを示す。壁高は約15cmを測り、床面は平坦をなすが踏み締まりは弱い。貯蔵穴などは検出されない。

竈は東壁ほぼ中央に付設されたと考えられる。左袖部はL162号住居跡によって消失しているが、燃烧部は方形気味に掘り込まれ、先端に短い煙道部が付く。右袖部には壁線より外側に袖材の埋設痕がある。燃烧部奥行き約40cm、煙道部長さ25cmを測る。

出土遺物は散在して検出され、灰釉陶器・羽釜・鉄器・重弧文軒平瓦片などがある。

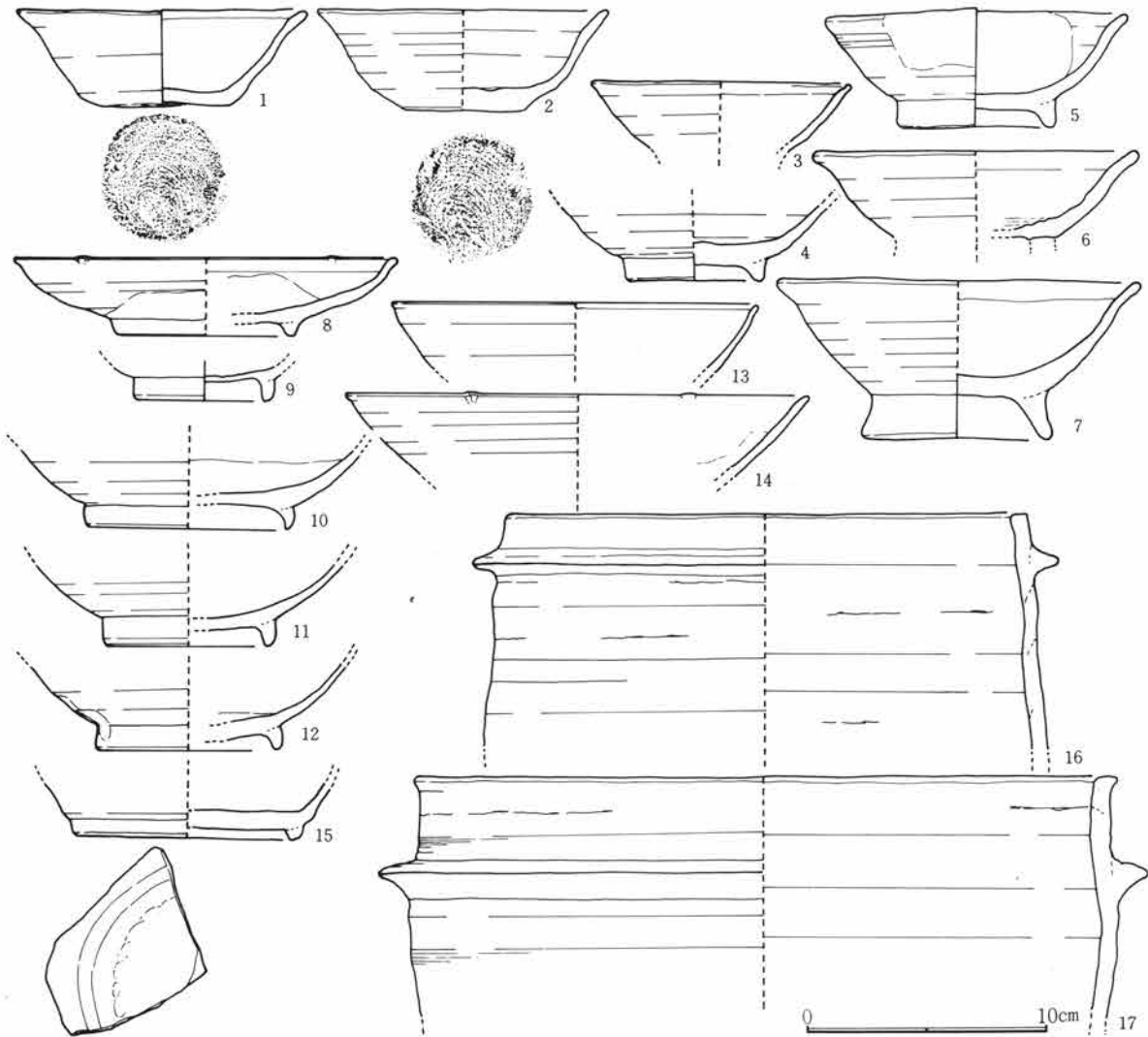


Fig. 338 L162号住居跡出土遺物(1)

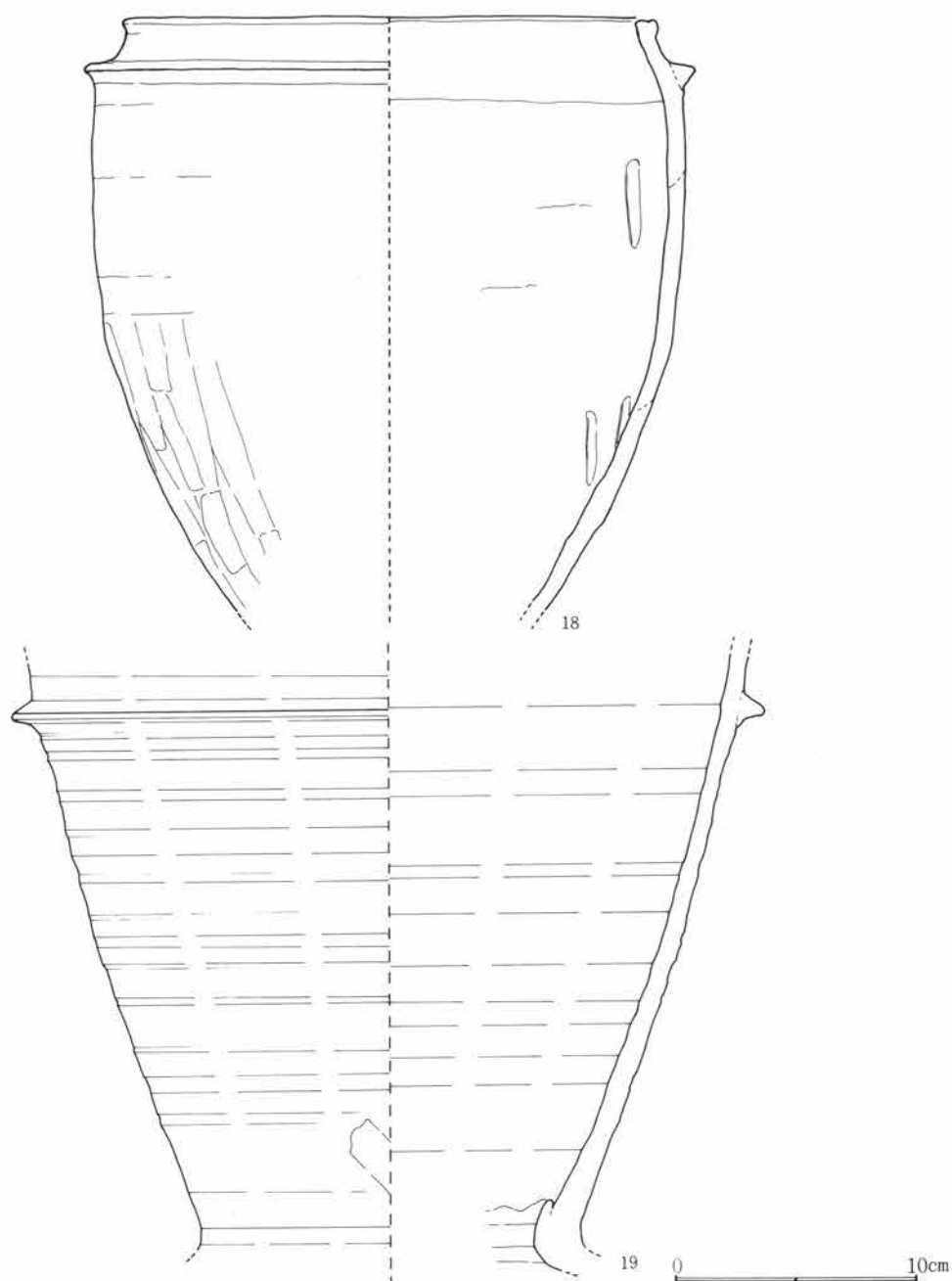


Fig. 339 L 162号住居跡出土遺物(2)

L 162号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
338-1 108-1	須恵器 杯	完形	12.0×5.2 ×4.0	+9	体部直線的に開き口縁部緩く外反。口唇部やや肥厚して丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③細砂混る
338-2 108-2	須恵器 杯	½	12.0×7.0 ×4.1	床下埋土 ・+9	底部肥厚。腰部でくびれ体部内湾気味に開き口縁部緩く外反。口唇部丸い。轆轤成形。回転糸切り。底部内外面吸炭。	①良好 ②灰 ③やや粗
338-3 108-3	須恵器 杯?	破片	10.8×— ×(2.8)	床下埋土	体部直線的に大きく開く。口縁部緩く外反。口唇部小さく内屈。轆轤成形。	①酸化気味 ②浅黄 橙 ③やや粗
338-4 108-4	須恵器 碗	上半欠 損	—×5.8 ×(3.2)	床下埋土 ・+2	腰部に丸味。付高台、低く端部丸い。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密・細砂混る
338-5 108-5	須恵器 碗	完形	12.4×6.4 ×4.9	+1	腰部丸く張り体部上半外反して開く。口唇部丸い。付高台肥厚し直に立つ。轆轤成形。回転糸切り。内外面吸炭。	①良好 ②灰白 ③やや密

第1節 竪穴住居跡と出土遺物

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
338-6 109-6	須恵器 椀	破片	13.4× ×(3.5)	竈埋土・ 床下埋土	体部直線的。口縁部は大きく外反。口唇部丸い。付高台欠損。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③やや粗・白色粒混
338-7 109-7	須恵器 椀	1/2	15.0×7.8 ×6.5	埋土・ +16	器肉厚い。体部丸く内湾して開き口縁部大きく外反。口唇部丸い。付高台、やや高くハの字状。端部丸い。轆轤成形。	①酸化気味 ②灰黄 ③やや粗
338-8 109-8	灰釉陶器 輪花椀	1/4	15.8×7.4 ×3.4	床下埋土	体部内湾気味に大きく開く。口縁部強く外屈する。口唇部丸い。内外面澱け掛け施釉。高台低く断面三角。	①良好 ②灰 ③緻密
338-9 109-9	灰釉陶器 椀	高台部	—×5.6 ×(1.3)	床下埋土	器肉薄い。高台肥厚し端部丸く直に立つ。内面施釉。	①還元 ②灰白 ③密
338-10 109-10	灰釉陶器 椀	1/4	—×8.4 ×(3.1)	埋土	腰部丸い。高台、丸く内湾して立つ三日月高台。	①良好 ②灰白 ③緻密
338-11 109-11	灰釉陶器 椀	破片	—×6.6 ×(3.3)	床下埋土	腰部丸い。高台、肥厚し内湾気味に立つ。	①還元 ②灰白 ③密
338-12 109-12	灰釉陶器 椀	破片	—×7.6 ×(3.3)	床下埋土	腰部丸く見込部凹む。高台内湾して立つ。端部丸い。内外面施釉。	①良好 ②灰白 ③密
338-13 109-13	灰釉陶器 椀	破片	15.2× ×(2.8)	埋土	器肉薄く体部丸い。口縁部僅かに外反。	①良好 ②灰白 ③緻密
338-14 109-14	灰釉陶器 輪花椀	破片	19.2× ×(3.3)	床下埋土	体部僅かに丸味をもって開く。口唇部丸い。	①良好 ②灰白 ③やや密
338-15 109-15	須恵器椀 転用硯	底部1/4	—×9.4 ×(2.3)	埋土	体部直線的か。付高台、低く断面矩形。底部摩滅し光沢あり転用硯か。	①良好 ②灰 ③やや密
338-16 109-16	羽 釜	上半	21.6× ×(9.7)口径24.2	埋土	胴部から口縁部直線的に小さく内傾して立つ。口縁部短く上端面水平。銚部水平で強く突出。内外面回転撫で。	①酸化 ②橙 ③やや粗
338-17 109-17	羽 釜	口縁部	29.0× ×(9.8)口径31.8	床直	口縁部直立気味に立ち上がり口唇部外へ突出し上端面水平。銚部水平で強く突出。内外面回転撫で。	①酸化 ②橙 ③やや粗
339-18 109-18	羽 釜	1/4	19.8× ×(24.0)口径25.0	貯蔵穴	胴部やや張り口縁部外反気味に内傾。口唇部幅広で上端面沈線様の整形痕。口縁・胴上半回転撫で。下半縦篋削り。	①酸化気味 ②鈍い 黄橙 ③やや粗
339-19 109-19	須恵器 甕	体部1/4	口径31.5×最小 径27.5×(24.7)	+0~13	胴部直線的に外傾して立つ。銚端部丸く断面略三角。内外面回転撫で。底部裾貼合せ接合で肥厚。単孔。孔径11.6。	①良好 ②褐灰 ③粗・小石混る

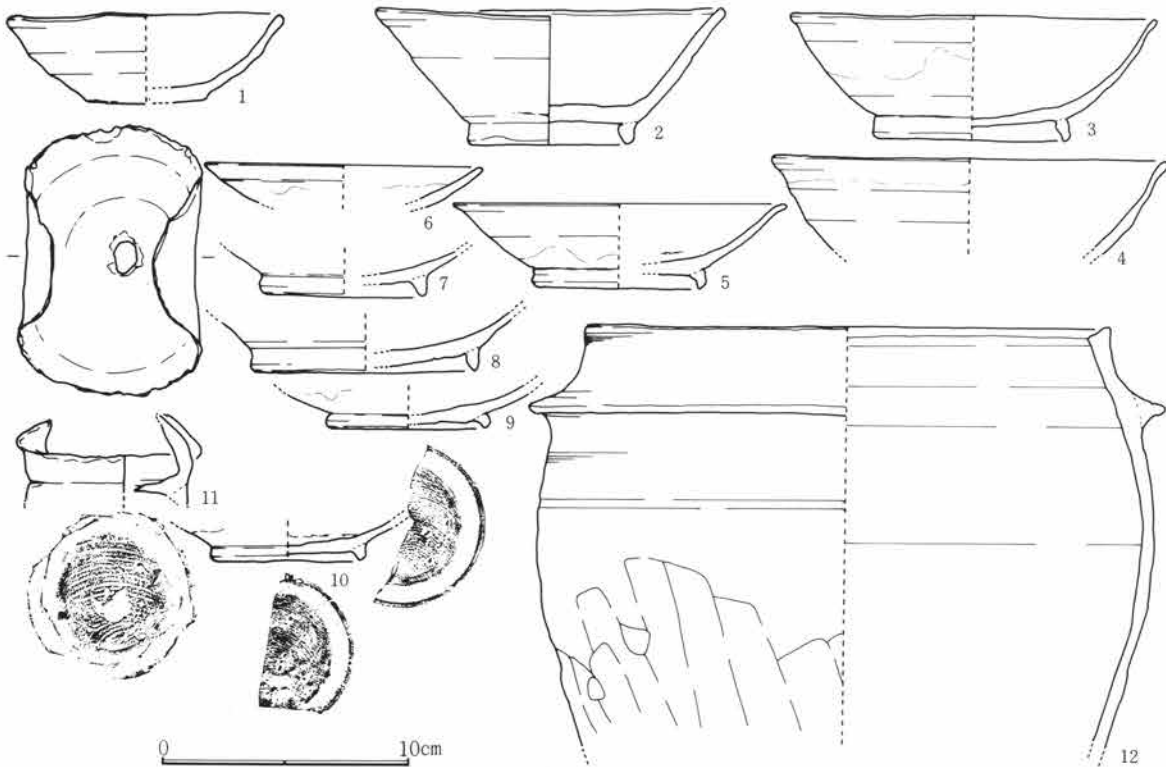


Fig. 340 L176号住居跡出土遺物(1)

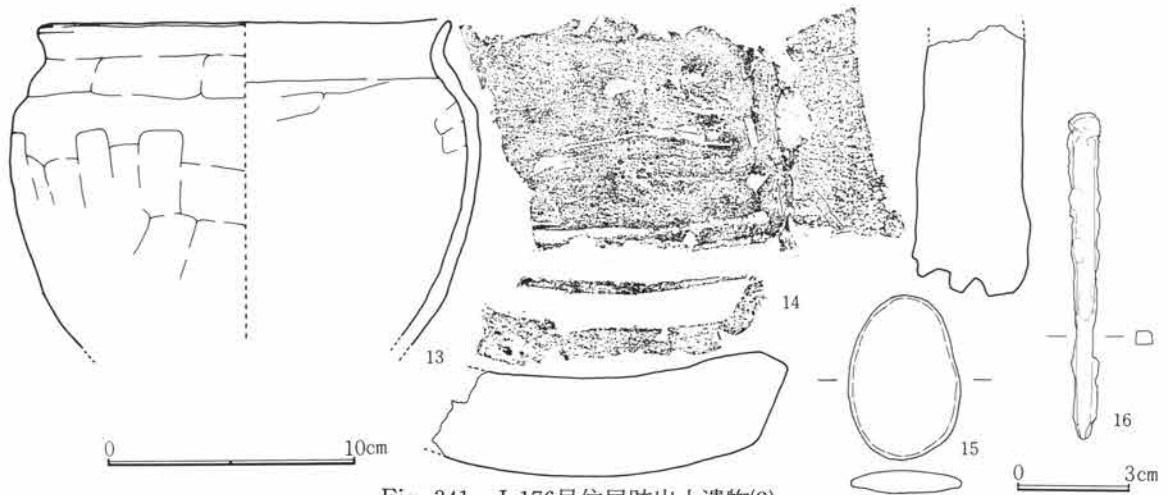


Fig. 341 L176号住居跡出土遺物(2)

L176号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
340-1 109-1	須恵器 杯	破片	11.0×4.8 ×3.5	埋土	底部やや肥厚。体部内湾気味で口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③やや密
340-2 109-2	須恵器 椀	1/2	14.0×7.8 ×5.3	埋土	体部直線的に大きく開く。口縁部僅かに外傾。付高台、断面矩形で直に立つ。作り雑。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②黄灰 ③やや密
340-3 109-3	灰釉陶器 椀	1/4	14.6×8.0 ×4.9	埋土	器肉薄い。体部丸く内湾して開き口縁緩く外反。口唇部丸い。付高台、面取明瞭な三日月高台。内外面漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③密
340-4 109-4	灰釉陶器 椀	破片	15.8×- ×(3.7)	埋土	体部丸味をもち口縁部緩く外反。口唇部丸い。内外面刷毛塗り施釉。	①良好 ②灰白 ③密
340-5 109-5	灰釉陶器 椀	1/4	13.4×7.0 ×3.3	竈・貯蔵 穴	体部緩く内湾して開き口唇部外屈。付高台、面取り明瞭な三日月高台。内外面漬け掛け施釉。見込部重ね焼き痕。	①良好 ②灰白 ③密
340-6 109-6	灰釉陶器 皿	破片	11.2×- ×1.6	埋土	体部直線的に開く。内外面漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③密
340-7 109-7	灰釉陶器 椀	底部破 片	-×6.6 ×(1.8)	埋土	腰部大きく外傾。付高台、直に立つ。内外面施釉。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③密
340-8 110-8	灰釉陶器 椀	底部破 片	-×9.2 ×(2.3)	埋土	見込部凹む。付高台、やや内湾して直立し端部尖る。	①良好 ②灰白 ③密・小石混る
340-9 110-9	灰釉陶器 椀	底部破 片	-×6.6 ×(1.7)	+6	腰部丸く大きく外傾。付高台、低く内湾して開く。断面丸い。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③密
340-10 110-10	灰釉陶器 椀	体部欠 損	-×6.2 ×(1.6)	埋土	腰部直線的で大きく外傾。付高台、低く内湾気味に立つ。回転糸切り。見込部に重ね焼き痕。	①良好 ②灰白 ③密
340-11 110-11	須恵器 耳皿	完形	10.7×- ×(3.5)	+1	両側大きく内湾して耳部となる。見込部中央に焼成後の穿孔。付高台、端部欠損。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
340-12 110-12	羽 釜	破片	21×-(16. 7)鑄径25.4	埋土・ +2	胴部丸く張る。口縁部外反気味に内傾。口唇上端面内斜。鑄強く突出。口縁~胴部上半回転撫で。下半縦位篋削り。	①良好 ②淡黄 ③やや密
341-13 110-13	土師器 甕	破片	16.6×-(12. .8)最大径18.8	埋土	胴部張り強く球形を呈す。口縁部短く緩く外反。口縁部横撫で。肩部横位・胴部縦位篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗・小石混る
341-14 110-14	瓦 軒平瓦	小片	厚3.9	床直	凹面・凸面篋調整。重弧文。	①良好 ②灰 ③やや粗
341-15 110-15	石製品 不明		4.5×3.0 厚0.6	埋土	楕円形黒色まだら縞自然石。	かんらん石
341-16 110-16	鉄器 角釘		長8.7 幅0.6	埋土	頭部形状角頭式か。	

L165号住居跡 (Fig. 342~344・PL. 26、110)

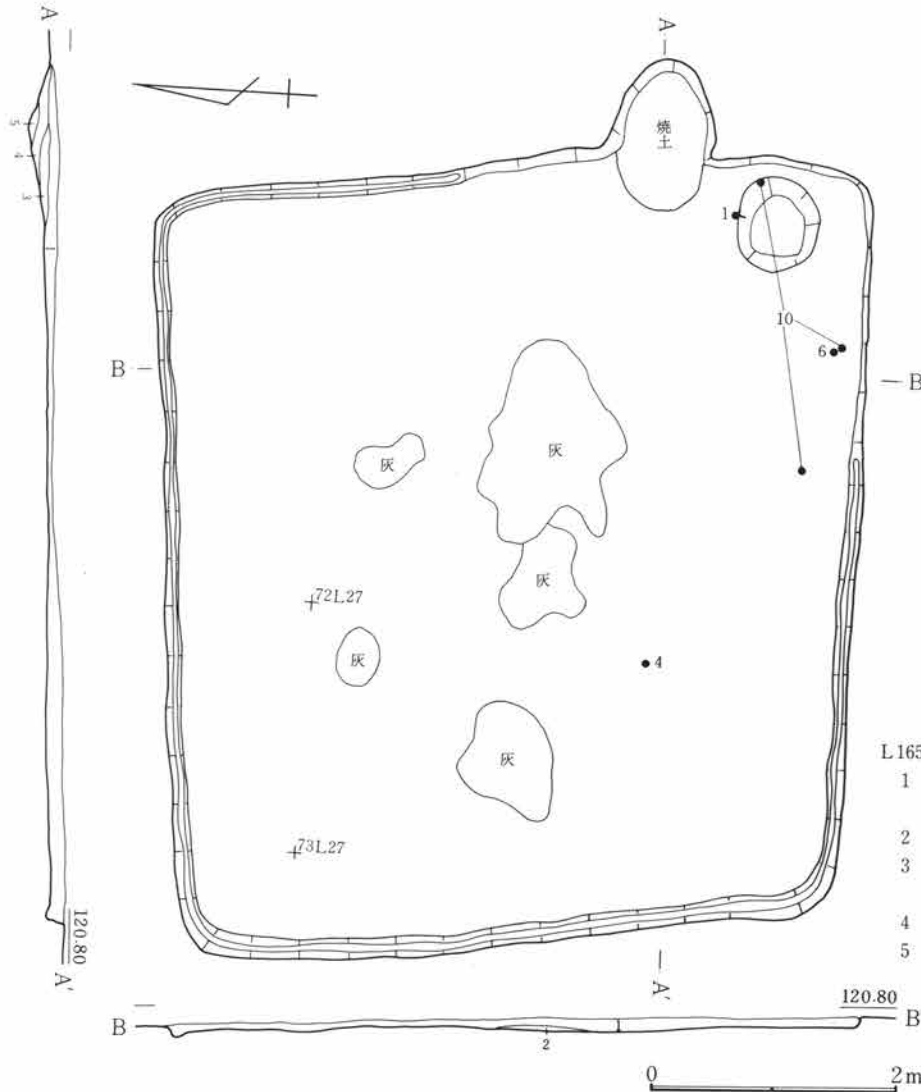
L区第4台地の調査区ほぼ中央部に位置し、69~73 L24~27の範囲にある。L182号・L208号住居跡と重複しているが両者より新しい時期の所産である。

平面形は東西に長軸をもつ方形を呈する比較的大形住居である。東西長6.2m・南北長5.5mを測り、東西軸方位はN-87°-Eを示す。検出面からの掘形は浅く、壁高約12cmを測る。床面はほぼ平坦をなすが踏み締

まりは弱い。また床面の中央部付近には数箇所に焼土粒や灰層の分布があり、上記以外の重複も考えられたが確認はできなかった。貯蔵穴は南東隅に設けられ、径65×75cm・深さ22cmの略円形を呈す。壁下の溝は南・東壁の一部を除き各壁下を巡り、幅10~12cm・深さ3~5cmである。柱穴は検出されなかった。

竈は東壁にあり南に偏って付設される。燃焼部は楕円形に掘り込まれ、袖部などの痕跡は検出できなかった。燃焼部側縁には凝灰岩質材が埋設してある。燃焼部幅約85cm・奥行き85cmを測る。

出土遺物は散在的で須恵器小杯・内黒土器・大形鉢などがある。



L165号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を多量・焼土粒少量含む
- 2 焼土粒層
- 3 暗褐色土 C軽石焼土粒多量を含む
- 4 灰層
- 5 焼土層 (火床)

Fig. 342 L165号住居跡

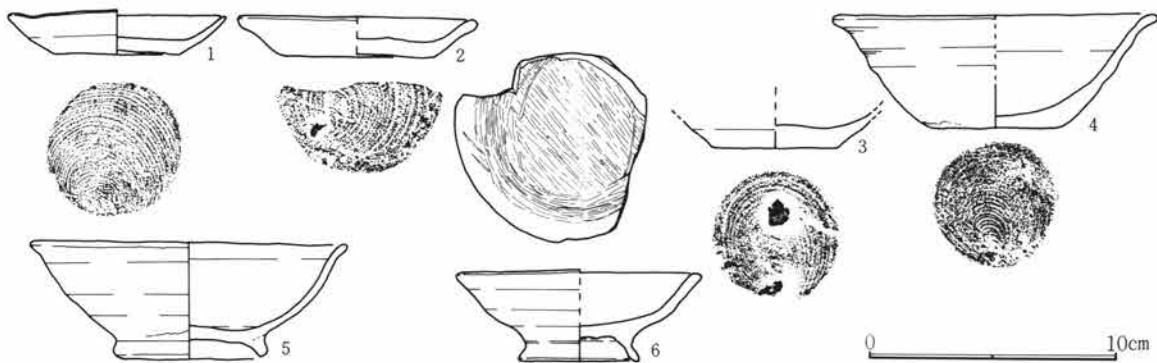


Fig. 343 L165号住居跡出土遺物(1)

第2章 遺構と遺物

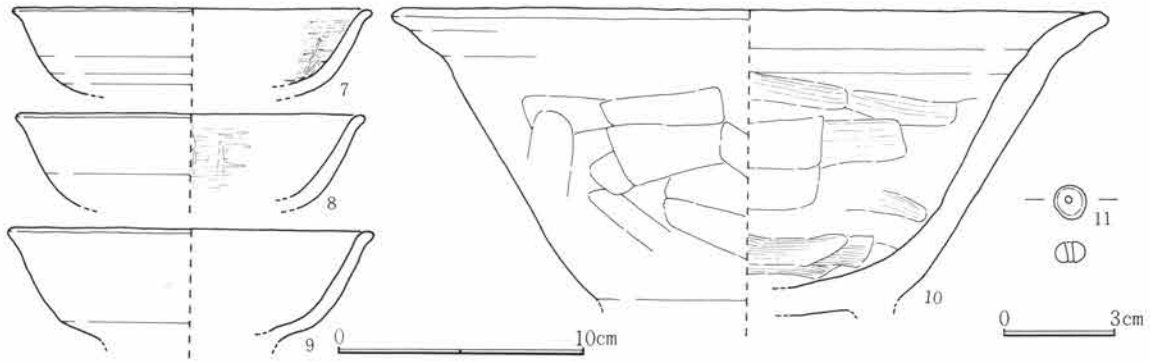


Fig. 344 L165号住居跡出土遺物(2)

L165号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
343-1 110-1	須恵器 杯	1/2	8.2×5.0 ×1.7	貯蔵穴	体部器肉薄く直線的に開く。口唇部尖る。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
343-2 110-2	須恵器 杯	1/2	9.5×5.7 ×1.6	埋土	体部やや直線的に外傾した後口縁部大きく外反。口唇部肥厚し丸い。見込部凸状。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②淡橙 ③やや粗
343-3 110-3	須恵器 杯	底部	—×4.9 ×(1.5)	埋土	底部やや肥厚。轆轤成形。右回転糸切り。	①やや軟 ②鈍い橙 ③やや粗・白色粒混
343-4 110-4	須恵器 杯	1/2	13.0×5.0 ×4.5	+6	体部深く内湾気味に外傾。口縁部外反し口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 ②鈍い橙 ③密
343-5 110-5	須恵器 椀	3/4	12.7×6.2 ×4.6	埋土	腰部から体部丸味をもち器肉薄い。口縁部外反。付高台、断面矩形。轆轤成形。	①酸化気味・良好 ②鈍い橙 ③やや密
343-6 110-6	内黒土器 椀	1/2	9.9×4.8 ×3.7	+2	体部中位で強く張り上半は直線的に外傾。口縁部緩く外反し口唇部丸い。付高台、ハの字状に開く。畳付部に浅い沈線。内面黒色処理。見込部一定方向・体部横方向筥磨き。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・黒色粒混
344-7 110-7	内黒土器 椀	口縁部 破片	14.3×— ×(3.4)	埋土	腰部丸味強く張る。体部上位直線的に外傾し口縁部大きく外反。内面黒色処理。体部上位横・見込部放射状筥磨き。	①良好 ②鈍い褐 ③やや密
344-8 110-8	内黒土器 椀	口縁部 破片	13.9×— ×(3.7)	埋土	腰部丸味強い。体部上半直線的に外傾。口縁部外反し口唇部丸い。内面黒色処理。横・縦方向筥磨き。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや密
344-9 110-9	内黒土器 椀	1/4	14.6×— ×(4.4)	埋土	腰部強く張り上半は直線的に外傾。口縁部緩く外反し口唇部丸い。内面黒色処理。体部横方向筥磨き。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
344-10 110-10	土師器 鉢?	体部1/4	28.4×— ×(12.0)	貯蔵穴埋 土・+2	体部下半僅かに脹らみ上半は直線的に開く。口縁部大きく外反し口唇部丸い。内面筥磨で。外面筥磨。台部か?	①良好 ②浅黄橙 ③やや密・小石混る
344-11 110-11	土製品 丸玉	完形	径0.9厚0.7 孔径0.2	埋土	焼成品丸玉。中央に焼成前の貫通する小孔。	①良好 ②橙 ③やや密

L166号住居跡 (Fig. 345、346、348、349・PL. 26、110、111)

L区第4台地の調査区中央部に位置し、69~71L16・17の範囲にある。L184号・L192号・L206号・L207号住居跡と重複しているが、いずれより新しい時期の所産である。2基の竈が近接して検出され、重複の可能性もあるが作り替えによると考えられる。

平面形は東西に長軸をもつ方形を呈する。東西長3.55m・南北長3.1mを測り、東西軸方位はN-94°-Eを示す。壁高は約30cmを測り、床面は緩く波うち踏み締まりは弱い。北東隅に径70×80cm・深さ15cmの楕円形土坑が検出されている。これが貯蔵穴とすれば、当遺跡の通常例とは位置的な違いから確定はできない。しかし埋土には灰層の堆積もあり、貯蔵穴の可能性は高い。

竈は東壁にA・B2基が検出されている。A竈は東壁ほぼ中央にあり、竈軸線は東壁線にほぼ直交する。楕円形に掘り込まれた燃焼部に短い煙道部あるいは煙出し孔が付く。燃焼部幅約55cm・奥行き60cm、煙道部25cmを測る。燃焼部前には長さ45cm程度の川原石が横たわる。竈Bは竈Aの南に近接して設けられる。東壁・南壁の変換部近くに設けられる。竈軸線は東壁線に直交せず、約20°ほど南へ振れる。左袖部には川原石が埋

設され、楕円形に大きく掘り込まれた燃焼部から長めの煙道部が延びる。燃焼部幅70cm・奥行き55cm、煙道部長さ75cmを測る。燃焼部内には構築材と考えられる川原石が散乱して検出された。A・B竈の新旧は、A竈燃焼部前面が断ち切れ、壁線状の低い段差を生じているところから、A竈→B竈の順に作られたと考えられる。また竈作り替えに伴う住居跡そのものの拡張などはなかったと思われる。

出土遺物は散在しており、須恵器小杯・灰釉陶器・瓦片・砥石などがある。

L 184号住居跡 (Fig. 345, 347, 350, 351・PL. 27, 111)

L区第4台地の調査区ほぼ中央に位置し、68~70L14~16の範囲にある。L166号・L190号・L192号・L206号・L207号住居跡と重複しており、L166号住居跡より旧く、他よりは新しい時期の所産である。

平面形は南北に長軸をもつ方形を呈するが、西壁線の長い台形状である。南北長4.3m・東西長3.5mを測り、東西軸方位はN-90°-Eを示す。壁高は約28cm、床面はほぼ平坦をなし踏み締めりは弱い。貯蔵穴などの諸施設は検出されていない。

竈は東壁にあり、南壁との変換部近くに付設され、竈軸線は東壁線とは直交せず約18.5°南へ振れる。燃焼部は狭長に掘り込まれ、先端は煙出し孔が形成される。火床は僅かに窪み、緩い傾斜で煙出し孔に至る。燃

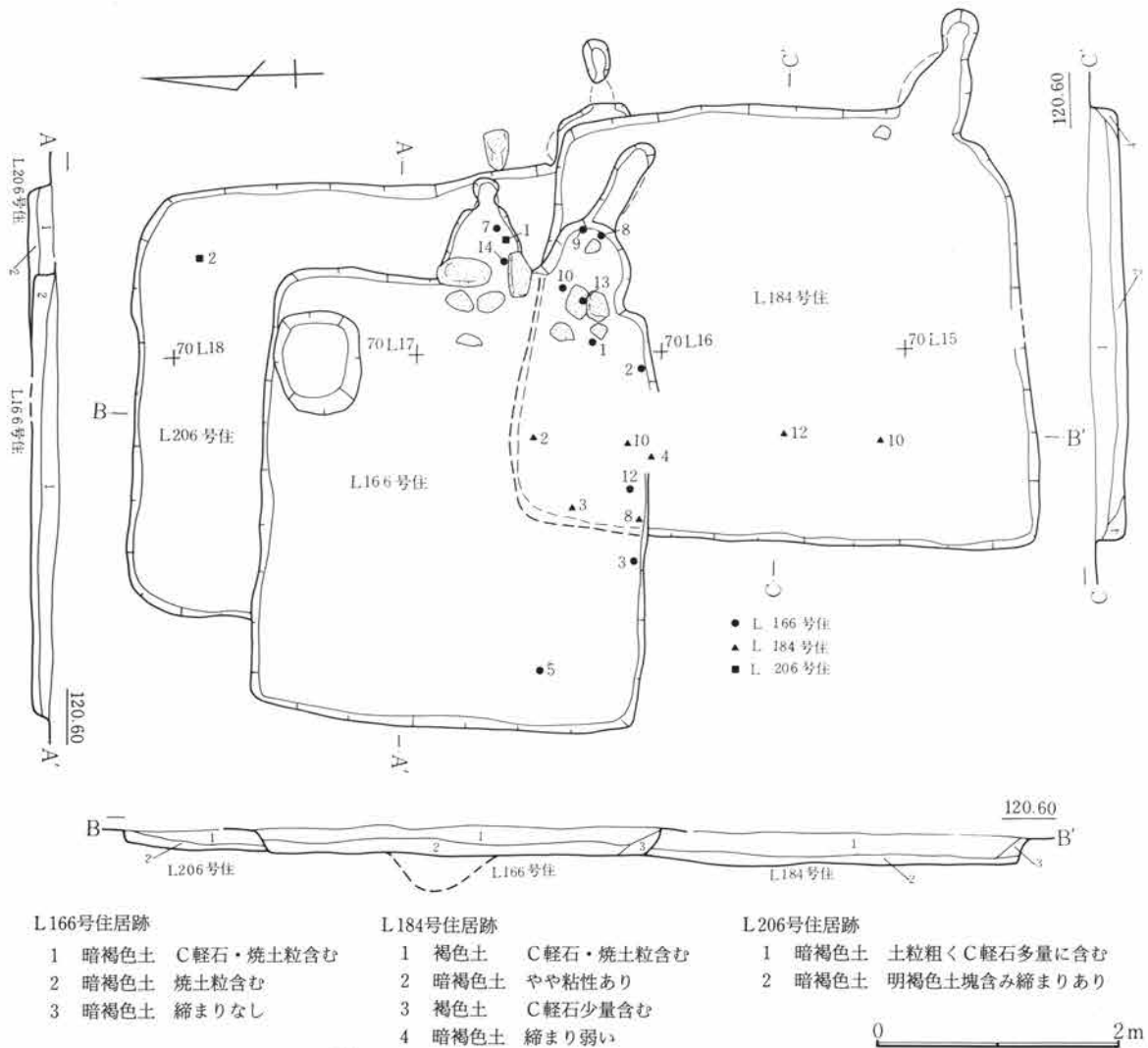


Fig. 345 L 166号・L 184号・L 206号住居跡

第2章 遺構と遺物

焼部幅55cm・奥行き65cm、煙出し孔径30cmを測る。

出土遺物は散在しており、須恵器小杯・灰釉陶器・砥石・鉄器などがある。

L 206号住居跡 (Fig. 342、345・PL. 27、112)

L区第4台地の調査区ほぼ中央に位置し、68~70 L16~18の範囲にある。L166号・L184号・L192号・L207号住居跡と重複しており、L166号・L184号住居跡より古い時期の所産である。L207号住居跡との関係は不明である。この重複によって南西部の大半は消失して、形状・規模など詳細は不明である。

平面形は南北に長い方形と思われる。東西長3.5m、南北は北壁より約4mの範囲まで確認した。東西軸方位はN-88°30'-Eを示す。壁高は約20cmを測り、壁際周辺の床面は踏み締まりが弱い。

竈は東壁にあり南に偏って付設されると思われる。燃焼部は左側縁がかるうじて遺存するが方形気味の形態になろうか。先端は短い煙道部と煙出し孔を形成する。燃焼部推定幅20cm・奥行き50cm、煙道部長さ50cm、煙出し孔径20cmを測る。

出土遺物は少なく鉄器2点がある。

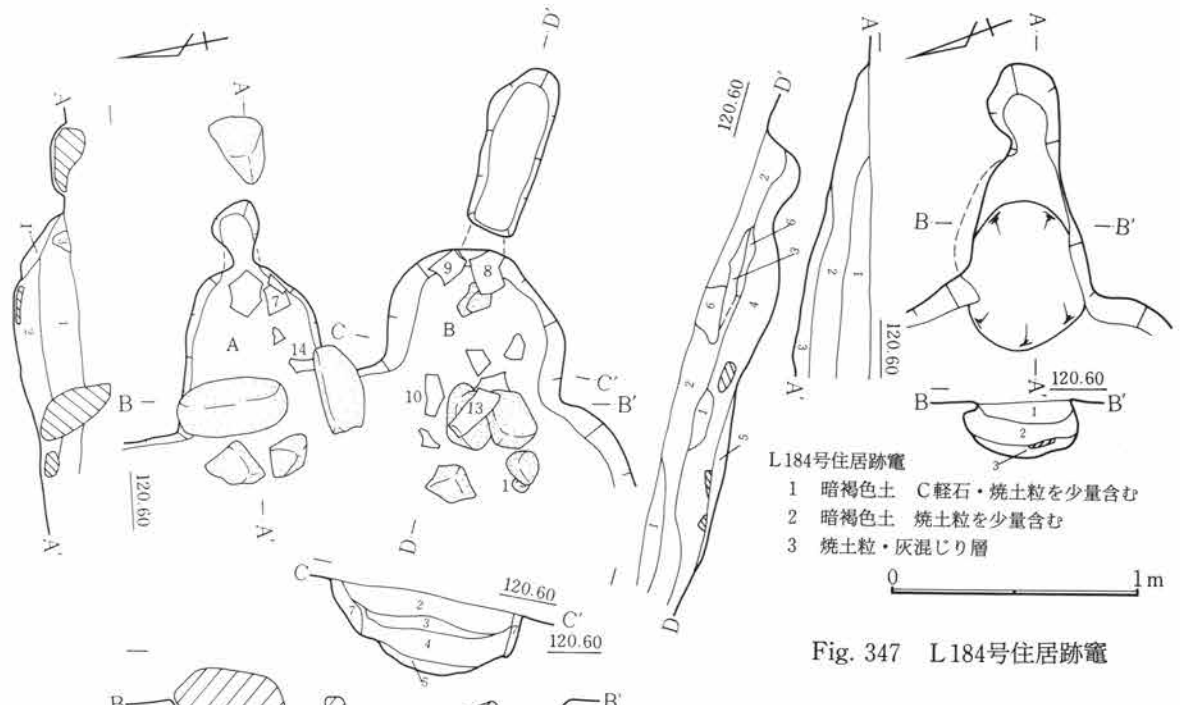


Fig. 347 L184号住居跡竈

L166号住居跡竈

A竈

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土塊を多量に含む
- 1' 暗褐色土 C軽石多量、焼土粒を少量含む
- 2 暗褐色土 焼土粒を多量に含む
- 3 焼土塊

B竈

- 1 暗褐色土 砂質
- 2 暗褐色土 C軽石含む
- 3 暗褐色土 焼土粒多量に含む
- 4 暗褐色土 焼土粒多量に含む
- 5 焼土層 (火床)
- 6 焼土層 (天井)
- 7 焼土層 (壁)

0 1m

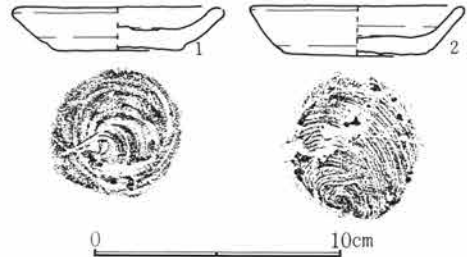


Fig. 348 L166号住居跡出土遺物(1)

Fig. 346 L166号住居跡竈 (A・B)

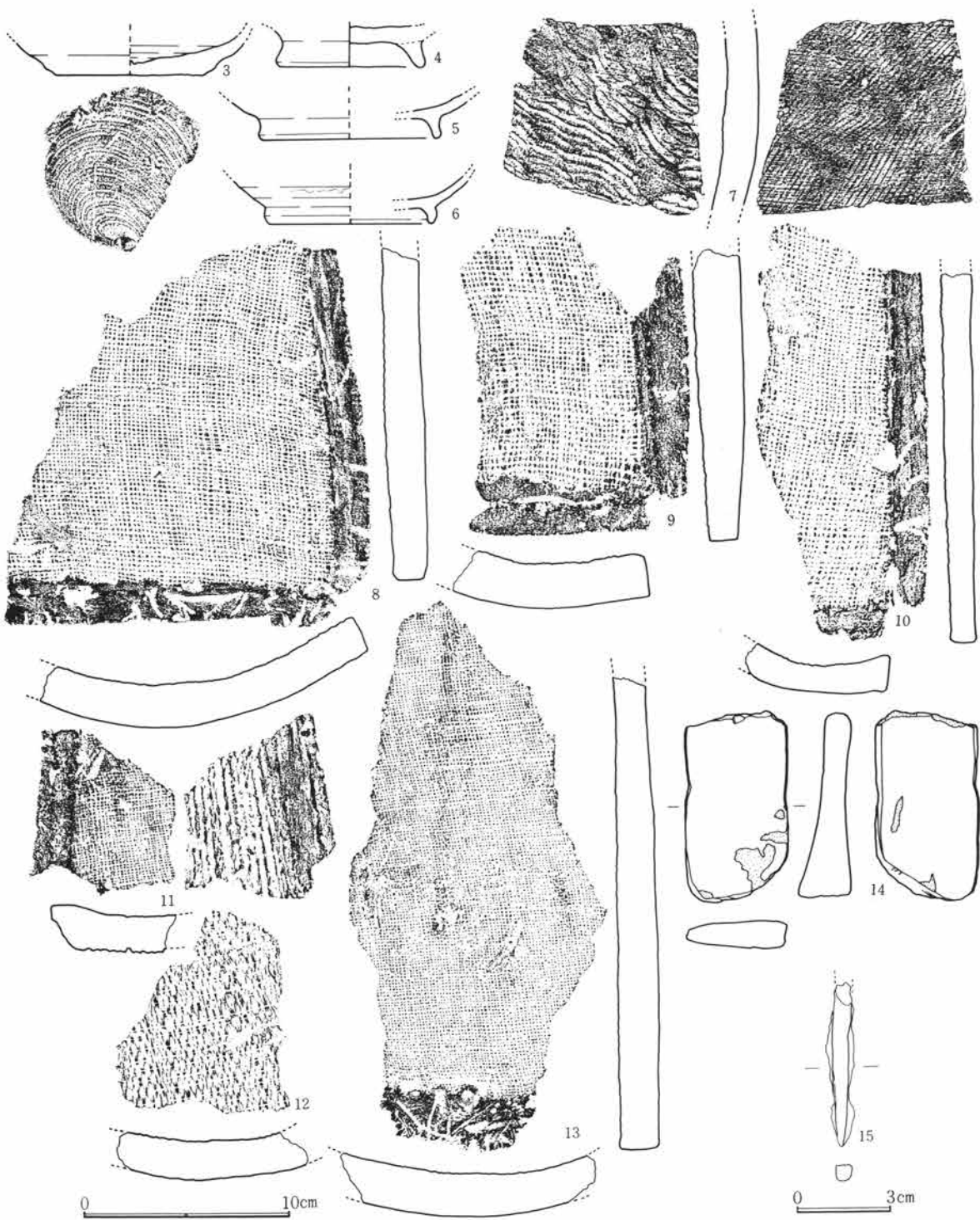


Fig. 349 L166号住居跡出土遺物(2)

L166号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
348-1 110-1	須恵器 杯	1/2	8.4×5.0 ×1.7	埋土	器肉厚い。体部浅く内湾気味。口唇部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 ②鈍い褐 ③密
348-2 110-2	須恵器 杯	3/4	8.6×5.9 ×2.0	+13	底部やや肥厚し体部は直線的に外傾。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②浅黄橙 ③密
349-3 110-3	須恵器 杯	底部	-×7.0 ×(1.9)	+8	轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②褐灰 ③細砂混る

第2章 遺構と遺物

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
349-4 110-4	須恵器 椀	高台部	—×7.1 ×(2.0)	埋土	付高台、ハの字状に開き端部丸まる。轆轤成形。	①良好 ②灰黄褐 ③やや粗
349-5 110-5	灰釉陶器 椀	底部	—×8.7 ×(2.1)	床直	付高台、端部丸まる。	①良好 ②灰白 ③密
349-6 110-6	灰釉陶器 椀	底部	—×7.6 ×(2.3)	埋土	腰部丸い。付高台、稜をなし内湾して立つ三日月高台。	①良好 ②灰白 ③密
349-7 110-7	須恵器 甕片	破片		埋土	外面平行叩き目。内面青海波状当て目。	①良好 ②黒褐 ③密
349-8 111-8	瓦 平瓦		厚1.8	埋土	凹面布目。凸面撫で。側縁筥調整。	①良好 ②明褐灰 ③やや密
349-9 111-9	瓦 平瓦		厚2.1	埋土	凹面粗い布目。凸面撫で。側縁筥調整。	①良好 ②灰白 ③やや粗
349-10 111-10	瓦 平瓦		厚1.4	埋土	凹面布目。凸面撫で。側縁筥調整。二次被熱。	①酸化気味 ②鈍い 橙 ③やや粗
349-11 111-11	瓦 平瓦	小片	厚1.8	埋土	凹面布目。凸面縄目。側縁筥調整。	①やや軟 ②明褐灰 ③密
349-12 111-12	瓦 平瓦	小片	厚1.8	+1	凹面あじろ目?凸面筥撫で。	①良好 ②明褐灰 ③粗・砂多量に混る
349-13 111-13	瓦 平瓦		厚2.0	埋土	凹面布目。凸面撫で。側縁筥調整。	①やや軟 ②明褐灰 ③やや密
349-14 111-14	石製品 砥石		8.7×4.8 ×1.2	埋土	多面使用。中央部砥減り顕著。刃痕あり。	流紋岩
349-15 111-15	鉄器 角釘?		5.2×0.5	埋土	上端欠損。下端尖る。頭部形状不明。	

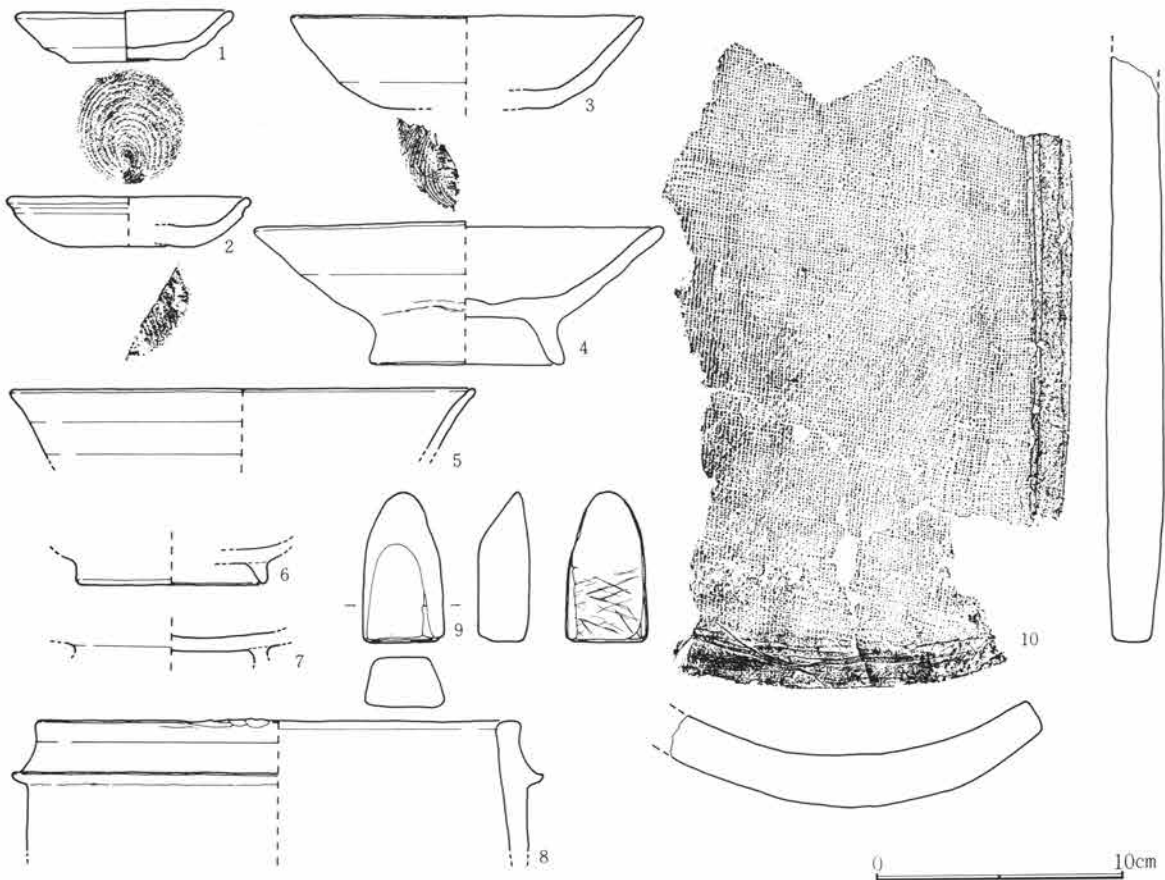


Fig. 350 L184号住居跡出土遺物(1)

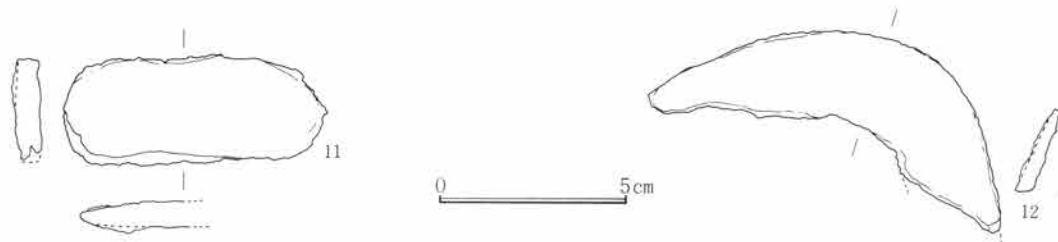


Fig. 351 L184号住居跡出土遺物(2)

L184号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
350-1 111-1	須恵器 杯	ほぼ完 形	8.7×4.6 ×2.6	埋土掘形	体部中位でくびれ口縁部直線的に外傾。口唇部丸い。轆轤成形。右回転系切り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗
350-2 111-2	須恵器 杯	破片	9.8×5.2 ×2.0	+2	体部やや丸味をもちながら外傾。口縁部下に2条の凹線。口唇部丸い。轆轤成形。回転系切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
350-3 111-3	須恵器 杯	1/2	14.0×6.8 ×3.7	床直	体部中位で張り直線的に外傾。口唇部丸い。轆轤成形。回転系切り。	①酸化・良好 ②鈍 い橙 ③やや密
350-4 111-4	須恵器 椀	1/2	16.3×7.8 ×5.7	+15	体部浅く腰部丸味僅かで直線的に外傾。口唇部丸い。付高台、高くハの字状。端部丸い。轆轤成形。回転系切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
350-5 111-5	灰釉陶器 椀	破片	18.6×— ×(2.5)	埋土掘形	口縁部直線的に外傾。口唇部丸い。	①良好 ②灰白 ③密
350-6 111-6	灰釉陶器 椀	高台部 破片	—×7.7 ×(1.7)	埋土掘形	高台、端部丸い。	①良好 ②灰白 ③密
350-7 111-7	灰釉陶器 椀	底部破 片	—×— ×(1.2)	埋土	高台部欠損。見込部摩滅著しく多少光沢あり、転用碗の可能性あり。	①良好 ②鈍い黄橙 ③密
350-8 111-8	羽釜	口縁部 破片	19.2×— (5.3)鏝径21.2	埋土	胴部直立。口縁部短く僅かに内傾。口唇部は幅広く断面矩形。上端面ほぼ水平。鏝上方へ外反。口縁部撫で。	①良好 ②褐灰 ③密
350-9 111-9	石製品 砥石		長4.0幅2.2 厚1.3	埋土	全面使用。刃痕顕著。楔形を呈す。15.2g	流紋岩
350-10 111-10	瓦 平瓦		厚2.3	埋土・ +3~4	凹面布目。凸面撫で。側縁調整。	①良好 ②褐灰 ③やや粗白色粒混る
351-11 111-11	鉄器 楔?		7.1×2.8 ×0.6	埋土	両端部弧状。片端部薄く刃部をなすか。	
351-12 111-12	鉄器 鎌		8.5×2.5 ×0.4	+9	弧状湾曲。基部欠損。刃部厚みあり未完成品か。	

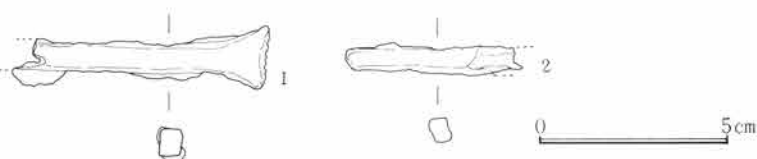


Fig. 352 L206号住居跡出土遺物

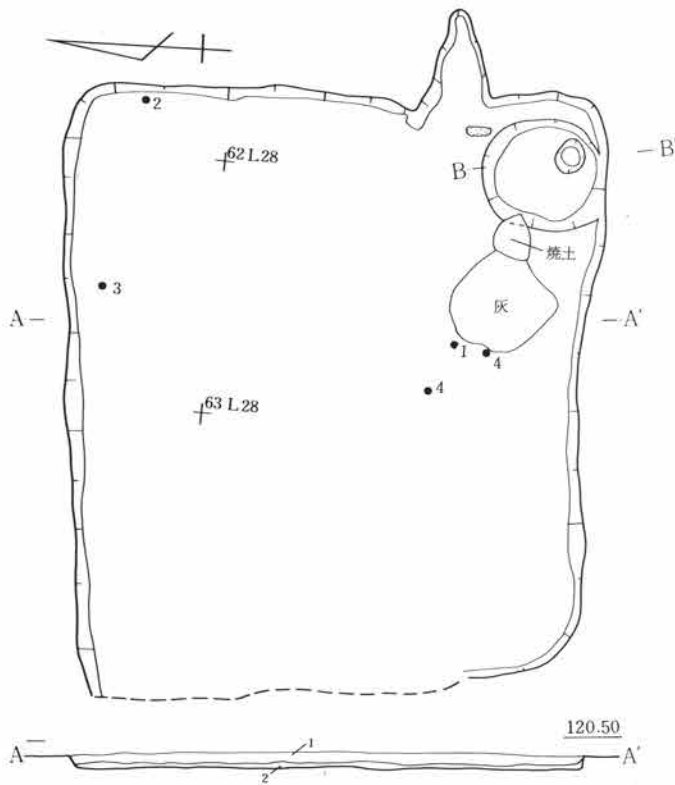
L206号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
352-1 112-1	鉄器 角釘	端部欠 損	長(6.6) 幅0.6×0.8	埋土	頭部形状折頭式か?	
352-2 112-2	鉄器 角釘	両端部 欠損	長(5.0) 幅0.5×0.6	埋土	両端欠損。頭部形状不明。	

L169号住居跡 (Fig. 353、354・PL. 27、112)

L区第4台地の北東部に位置し、61~64L26~28の範囲にある。L181号・L221号住居跡と重複しており、両者より新しい時期の所産である。西壁は現代掘削坑によって消失している。

平面形は東西に長軸をもつ方形を呈する。東西長約4.8m・南北長4.1mを測り、東西軸方位はN-87°-Eを示す。壁高は約14cm、床面は平坦をなすが踏み締まりは弱い。貯蔵穴は南東隅にあり、径0.85×1m・深



L169号住居跡

- 1 黒褐色土 C軽石含み土粒粗い
- 2 黒褐色土 炭化粒層が薄く上面にある

L169号住居跡内土坑

- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土 細白色粒含む
- 3 黒褐色土 白色土塊含む

Fig. 353 L169号住居跡

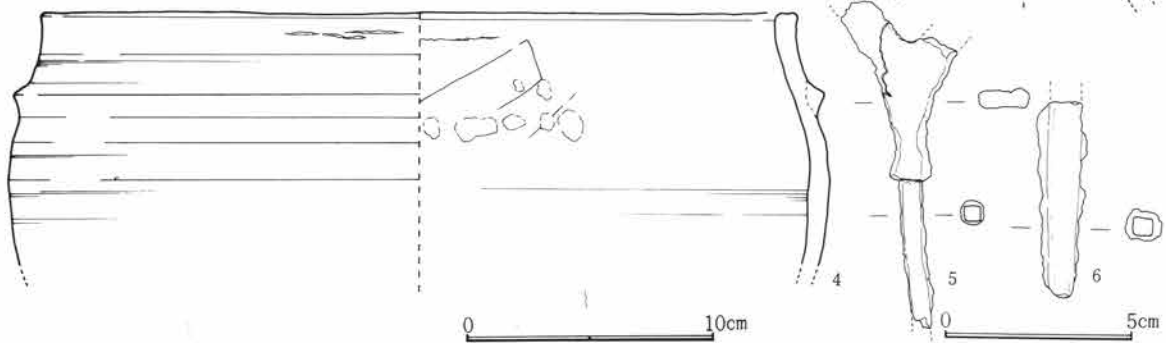


Fig. 354 L169号住居跡出土遺物

き12cmの浅い円形を呈する。貯蔵穴の西縁に接して、床面上に径35cm程度の焼土面と、それに続いて径80cmの範囲で灰層の広がりが検出され、当跡より古い他遺構の存在が想定されたが確認することはできなかった。

竈は東壁にあり南に偏って付設される。狭長な燃焼部が掘り込まれ、先端は煙出し孔を形成するかのように、僅かにくびれて先細る。袖材などは検出されない。燃焼部幅60cm・全長75cmを測る。

出土遺物は少なく、須恵器小杯・羽釜・鉄器などがある。

L169号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
354-1 112-1	須恵器 杯	完形	8.8×5.6 ×2.1	床直	器肉厚い。体部内湾気味。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②橙 ③やや粗・砂混る
354-2 112-2	土師器 杯	口縁部	10.3× ×(2.9)	+4	器肉厚い。受け部段をなし口縁部弱く外反して直立。口縁部横撫で。全体に摩滅。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
354-3 112-3	須恵器 フラスコ形	頸部破 片	-×-(5.8) 頸口径5.0	+4	胴部丸味をもち頸部直立後緩く外反。体部掻き目。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る

第1節 竪穴住居跡と出土遺物

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
354-4 112-4	羽釜	口縁部 破片	30.2×-× (10.0)口径32.2	埋土・ +2~5	胴部張り口縁外反気味に内傾し口唇部幅広く断面矩形。上 端面水平。鏝低い。外面回転撫。内面斜位篋撫・指頭痕。	①酸化・良好 ②明 赤褐 ③やや粗
354-5 112-5	鉄器 鉄鍍		長(8.7) 茎幅0.5	埋土	棘篋被雁股式。	
354-6 112-6	鉄器 不明		長(5.2) 幅0.9	埋土	角釘か。	

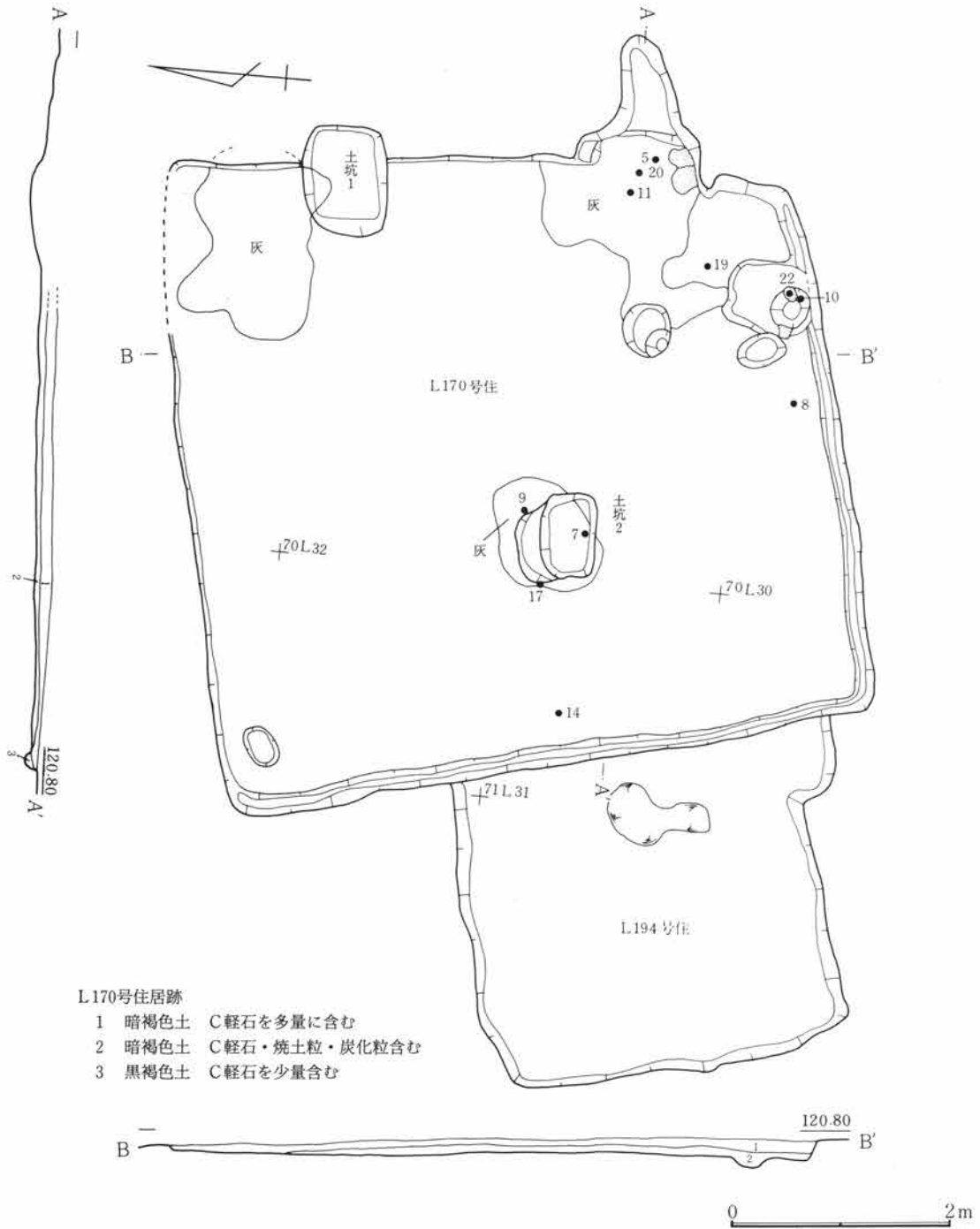
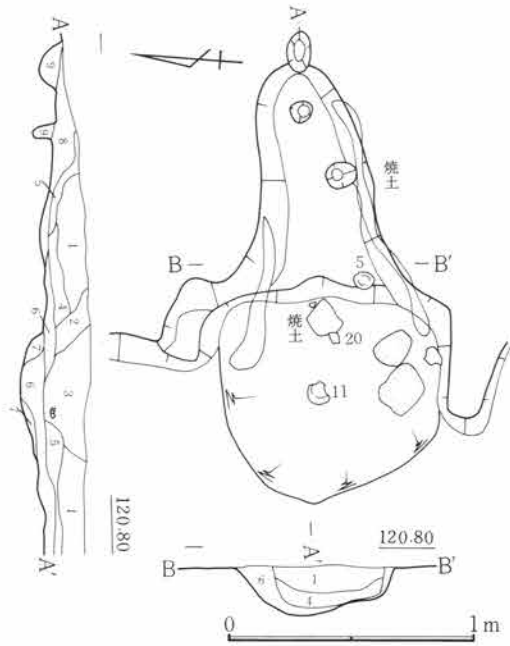


Fig. 355 L170号・L194号住居跡



L170号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石を多量に含む
- 2 灰褐色土 砂質層
- 3 暗褐色土 焼土粒・炭化粒・灰色砂質塊を含む
- 4 暗褐色土 焼土塊含む
- 5 暗褐色土 粘性土
- 6 炭化粒層
- 7 焼土層 (火床)
- 8 暗褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒含む
- 9 焼土塊

Fig. 356 L170号住居跡竈

L170号住居跡 (Fig. 355~358・PL. 27、112)

L区第4台地の調査区中央部やや北寄りに位置し、67~71L29~32の範囲にある。L188号・L194号住居跡と重複しており、両者より新しい時期の所産である。

平面形は南北軸がやや長い方形を呈する大形住居である。南北長約6m・東西長5.6mを測り、東西軸方位はN-83°-Eを示す。壁高は約20cm、床面は緩く波うち踏み締まりは比較的良好である。貯蔵穴は南東隅にあり径65cm・深さ18cm程度の不整楕円形を呈す。埋土中には焼土粒・炭化粒が若干含まれる。壁下の溝は西壁から南壁にかけて巡り、幅10cm・深さ4~5cmを測る。Pitは2~3箇所に通れるが柱穴として想定できる配置にはない。北東部及び中央部に方形土坑が検出されているが、当跡を含め重複ないしは近接する住居跡のいずれに所属するかは不明である。あるいは2基の土坑は他の遺構を形成する可能性も考えられる。土坑1は50×65cm・深さ55cm、土坑2は45×50cm・深さ59cmを測る。また両者とも周縁には灰層の分布が見られ、当跡の床面上にあるが、土坑1にかかわる灰層の広がりには壁外へ延びる様相がある。

竈は東壁にありやや南に偏って付設される。袖部は小さく住居内に突出するが左は遺存が悪い。方形気味に掘り込まれた燃焼部から僅かに段をなして長めの煙道部が延び、竈前面には灰層が広く流出する。右袖部内面には

凝灰岩質で風化の進んだ加工材が埋設される。右袖部長さ45cm、袖部内法85cm、燃焼部奥行き50cm、煙道部長さ85cmを測る。

出土遺物は貯蔵穴内に多く検出され須恵器小杯などがある。

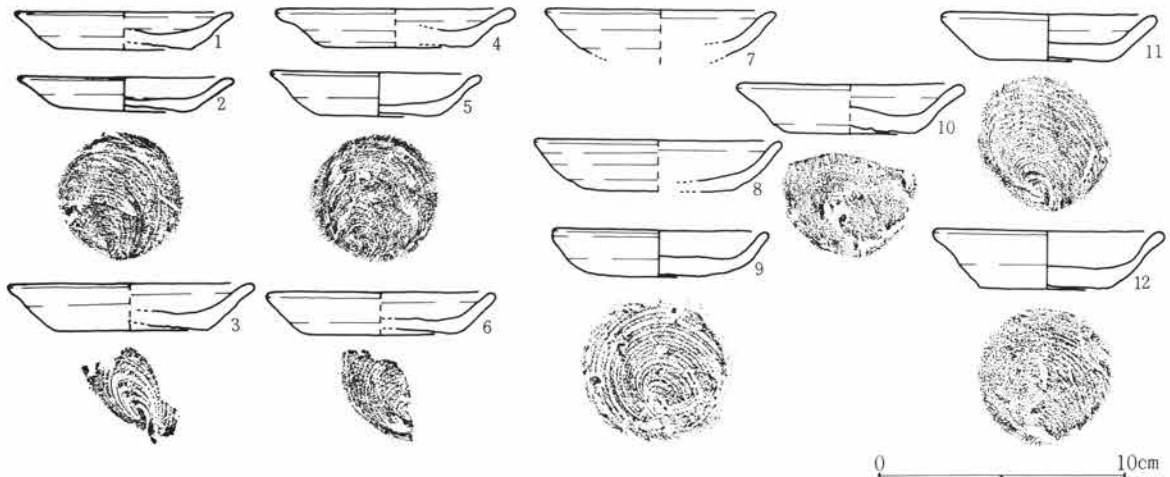


Fig. 357 L170号住居跡出土遺物(1)

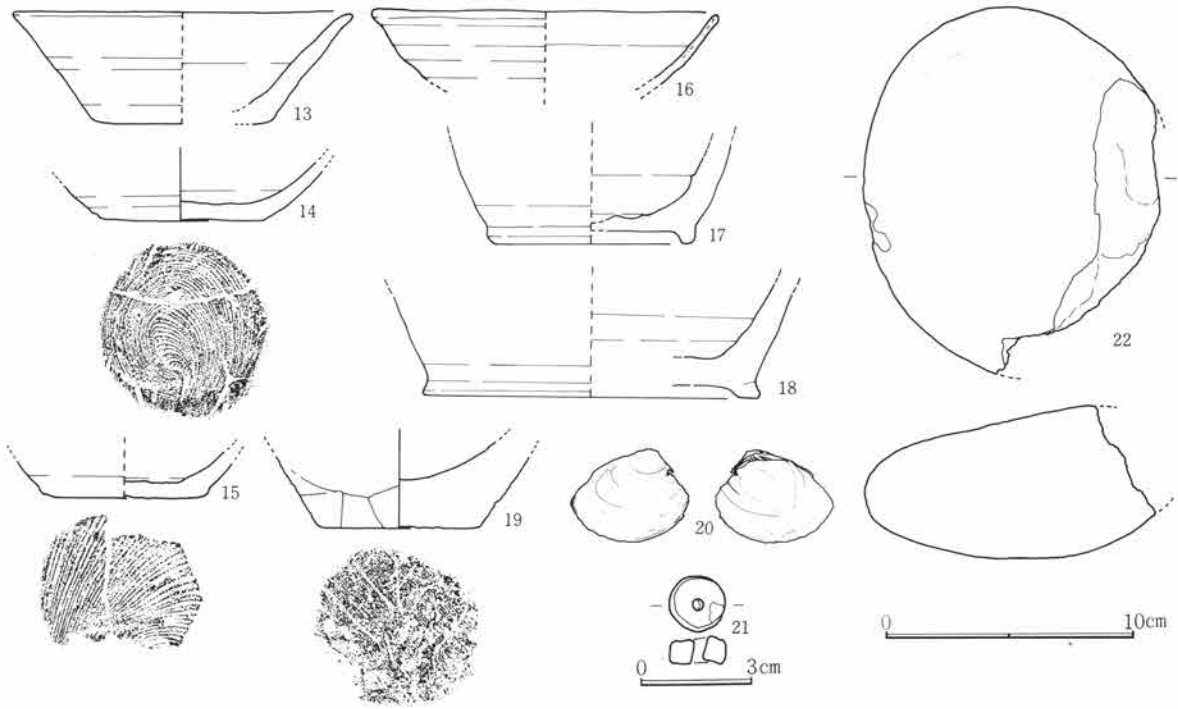


Fig. 358 L170号住居跡出土遺物

L170号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
357-1 112-1	須恵器 杯	¼	8.8×5.4 ×1.4	埋土	腰部肥厚し口縁部僅かに外反して開く。口唇部細る。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 ②灰白 ③やや密・細砂混る
357-2 112-2	須恵器 杯	¼	8.6×4.8 ×1.9	埋土	器肉薄い。体部浅く口縁部緩く外反して開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②鈍い橙 ③密
357-3 112-3	須恵器 杯	¼	9.7×6.0 ×1.9	埋土	体部から口縁部僅かに外反して開く。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②淡黄 ③やや密
357-4 112-4	須恵器 杯	⅕	9.6×5.8 ×1.5	埋土	見込部凸状。体部へ口縁部外反して開く。口唇部丸まる。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 ②鈍い黄橙 ③やや密・細砂混る
357-5 112-5	須恵器 杯	完形	8.4×4.8 ×1.8	竈	器肉薄い。腰部丸く口縁部緩く外反。口唇部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 ②橙 ③やや粗・砂多量に混る
357-6 112-6	須恵器 杯	¼	9.1×5.8 ×1.7	埋土	体部から口縁部直線的に外傾して開く。口唇部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 ②鈍い黄橙 ③やや密・細砂混る
357-7 112-7	須恵器 杯	⅕	5.2×— ×(1.8)	貯蔵穴	体部内湾気味で口縁部僅かに外反。轆轤成形。	①酸化・良好 ②鈍い黄褐 ③やや密
357-8 112-8	須恵器 杯	¼	9.8×3.8 ×(2.0)	埋土	腰部丸く内湾し口縁部僅かに外反して開く。口唇部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化・良好 ②鈍い橙 ③密
357-9 112-9	須恵器 杯	⅕	8.6×3.7 ×1.9	貯蔵穴	底部やや肥厚し腰部丸い。体部内湾気味に開く。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや粗・細砂混る
357-10 112-10	須恵器 杯	⅕	9.1×5.2 ×2.0	貯蔵穴	底部やや肥厚し体部緩く外反して開く。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや粗・細砂混る
357-11 112-11	須恵器 杯	⅕	8.6×4.9 ×1.9	竈	器肉厚め。体部から口縁部直線的に外傾して開く。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②鈍い黄橙 ③密
357-12 112-12	須恵器 杯	⅕	9.2×5.2 ×2.4	貯蔵穴・埋土	底部肥厚し体部細る。口縁部やや器肉厚くなり緩く外反して開く。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②鈍い黄橙 ③やや粗・砂混る
358-13 112-13	須恵器 杯	¼	13.6×7.0 ×(4.4)	貯蔵穴・竈・埋土	体部深く直線的に開く。口唇部細る。轆轤成形。	①酸化 ②鈍い黄橙 ③やや粗・細砂混る
358-14 112-14	須恵器 杯	底部	—×6.5 ×(2.3)	埋土	腰部やや丸味をもつ。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗・砂混る
358-15 112-15	須恵器 杯	底部	—×(6.6) ×(1.8)	Pit	腰部くびれる。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 ②明赤褐 ③やや密
358-16 112-16	須恵器 杯	小片	13.8×— ×(2.8)	埋土	体部丸味をもち口縁部外反気味に開く。轆轤成形。	①酸化気味 ②灰白 ③やや密

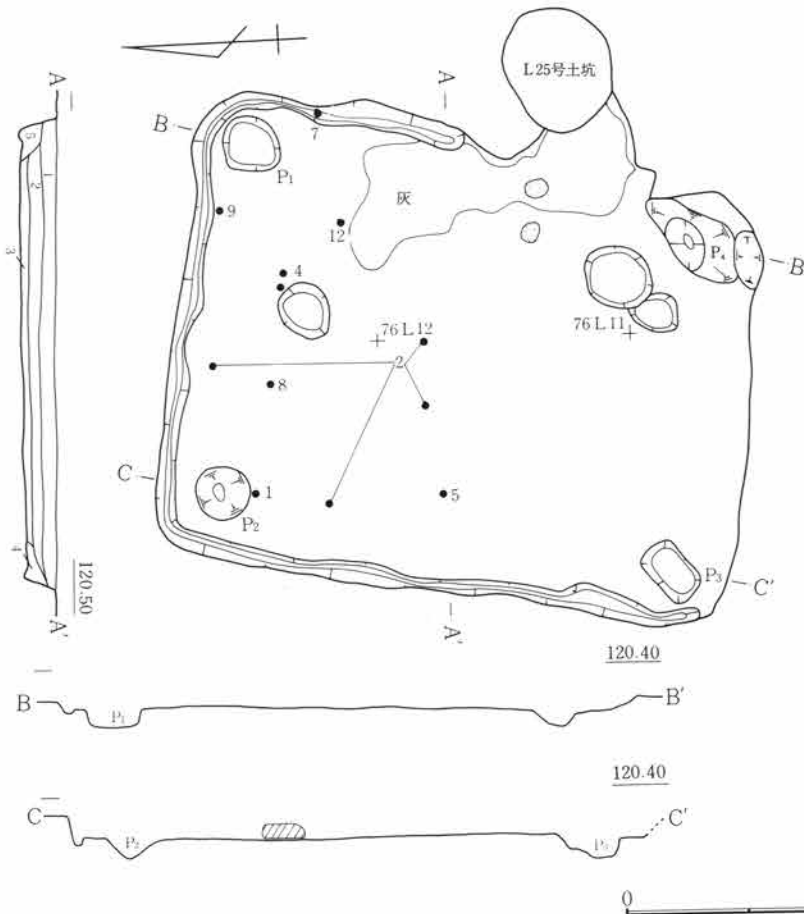
Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
358-17 112-17	須恵器 壺	底部破片	—×8.2 ×(4.0)	貯蔵穴	胴部僅かに脹らむ。付高台、低く端部丸まる。底部薄い。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密・細砂混る
358-18 112-18	須恵器 甕	台部破片	—×13.6 ×(4.5)	埋土	胴部直線的に外傾。付高台、低く幅広い。断面矩形。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密・細砂混る
358-19 112-19	土師器 甕	底部	—×6.4 ×3.4	埋土	底部肥厚し腰部直線的に外傾。腰部寛削り。内面撫で。底部木葉痕。	①良好 ②橙 ③粗・砂多量に混る
358-20 112-20	貝		長3.6 幅4.6	埋土	2枚貝。	
358-21 112-21	石製品 白玉	完形	径1.4厚0.8 孔径0.3	埋土	表裏面成形粗雑。	滑石
358-22 112-22	石	縁一部 欠損	長14.5 幅11.6厚5.5	貯蔵穴	片面摩滅著しい。	粗粒安山岩

L 178号住居跡 (Fig. 359、360・PL. 28、113)

L区第4台地の調査区南西部に位置し、75~77L10~12の範囲にある。L121号・L183号・L189号・L200号住居跡と重複しているが、L121号・L183号住居跡より旧く、他よりは新しい時期の所産である。

平面形は南北に長軸をもつ方形を呈する。南北長約4.6m・東西長3.7mを測り、東西軸方位はN-97°-Eを示す。壁高は約26cm、床面は平坦をなし踏み締まりは良好である。壁下の溝は東壁から北・西壁にかけて

巡り、幅10~15cm・深さ3~4cmを測る。PitはP₁~P₆が検出されているが、各隅部に位置するP₁~P₄は特徴的である。その配置状態から柱穴に相当する可能性がある。P₁は径45cm・深さ13cm、P₂は径40cm・深さ17cmで播鉢状に落ち込む。P₃は30×50cm・深さ19cmで方形を呈する。P₄は不整楕円形で径45×90cm・深さ16cmを測る。P₁~P₄の間隔はP₁・P₂が2.8m、P₂・P₃が3.7m、P₃・P₄が2.6m、P₁・P₄が3.6mである。



L178号住居跡

- 1 褐色土 C軽石多量に含む
- 2 褐色土 C軽石少量含む
- 3 暗褐色土 C軽石含む
- 4 暗褐色土 白色砂質土塊含む
- 5 暗褐色土

Fig. 359 L178号住居跡

竈は東壁のやや南に付設されるが、先端部は後世の土坑により消失し詳細は不明である。左袖部には石材が埋設される。竈内からは東壁沿い北側に広く灰層が流出分布する。燃焼部幅70cmを測る。

出土遺物は散在して検出され、須恵器杯・椀類がある。また住居内中央部床面近く、馬骨が集中して検出されたが、土坑状の遺構は確認されておらず住居廃絶後投棄されたと考えられる。

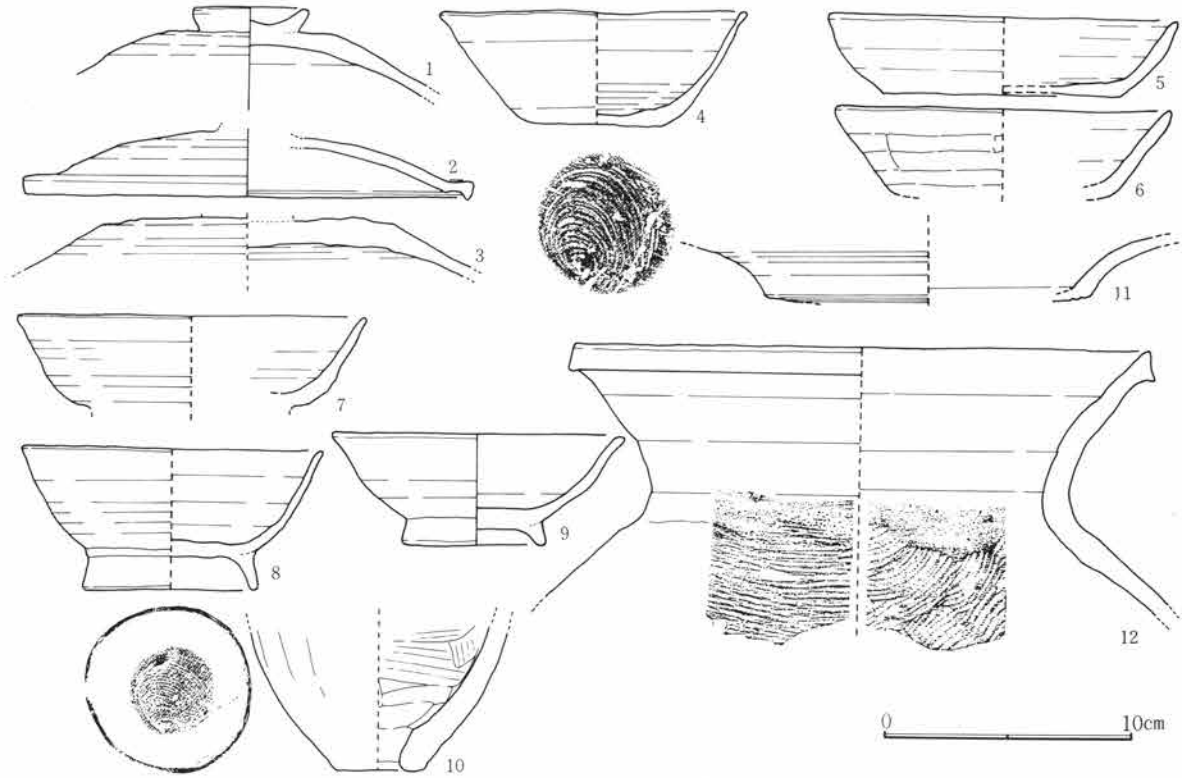


Fig. 360 L178号住居跡出土遺物

L178号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
360-1 113-1	須恵器 蓋	体部欠損	-x-x (3.5)口径4.7	+13	天井部平坦。体部内湾気味に開く。環状摘。轆轤成形。天井部回転糸切り。周辺回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
360-2 113-2	須恵器 蓋	摘部欠損	18.0×- ×(2.6)	+3~4	天井部丸味をもち体部内湾気味に開く。口縁部直に折れ端部丸い。口縁部・内面横撫で。体部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密・黒色粒混
360-3 113-3	須恵器 蓋	摘部欠損	-x-x(2.3) 摘基径3.7	埋土	天井部平坦でやや凹む。肩部手持ち篋削り。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③密
360-4 113-4	須恵器 杯	片	12.3×5.5 ×4.5	埋土 +13~15	腰部でやや丸味をもち体部深く内湾気味に開く。口縁部小さく外傾。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②鈍い黄橙 ③やや密・砂混る
360-5 113-5	須恵器 杯	破片	14.0×9.4 ×(3.1)	床直	体部浅く内湾して開く。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密
360-6 113-6	土師器 杯	底部欠損	13.3×- ×(3.4)	埋土	平底か?体部直線的に開く。口縁部横撫で。体部横篋削り。	①酸化 ②鈍い褐 ③やや粗
360-7 113-7	須恵器 椀	破片	14.0×- ×(3.7)	埋土 +20	腰部強く張り体部直線的に外傾。口縁部僅かに外反。口唇部細る。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや粗
360-8 113-8	須恵器 椀	口~台	12.0×7.0 ×5.6	埋土	器肉薄く腰部丸く張り体部内湾気味に開く。付高台、やや高く強いハの字状に開き端部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味 ②鈍い橙 ③やや密
360-9 113-9	須恵器 椀	完形	11.6×5.8 ×4.5	+2	底部肥厚。体部内湾し口縁部緩く外反して開く。付高台、端部丸味をもつ。轆轤成形。	①良好 ②橙 ③小石混る
360-10 113-10	土師器 甌	底部	-×3.4×(5.7)孔径2.0	埋土	器肉厚い。胴部やや張る。内外面篋削り。単孔。	①良好 ②黒褐 ③やや粗・砂混る

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×口径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
360-11 113-11	須恵器 高杯?	破片	—×12.9 ×(2.6)	埋土	体部大きく外反して開く。底部外面に2本の沈線。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③密・砂混る
360-12 113-12	須恵器 甕	口縁部	23.0×— ×10.0	+10	肩部やや張り口縁部外反して開く。端部略三角。体部外面横位掻き目。内面青海波?当て目	①良好 ②鈍い褐 ③やや密

L 179号住居跡 (Fig. 361、362、364・PL. 113)

L区第4台地の調査区中央部やや西に位置し、73~75 L 25~27の範囲にある。L 168号・L 186号住居跡と重複しているが、L 168号住居跡より旧くL 186号住居跡より新しい時期の所産である。L 186号住居跡との関係については東・西壁線を同じくしており、重複とするよりは建替え・拡張の可能性が強いと思われる。

平面形は南北に長軸をもつ方形を呈する。南北長4.75m・東西長2.45mを測り、東西軸方位はおよそN-90°-Eを示す。壁高は約8cmで極めて浅い。床面は中央部が緩く窪み踏み締まりは弱い。南西部に70×80cm・深さ26cmの方形土坑が検出されたが、L 186号住居跡と当跡のいずれに伴うか不明である。

竈は南東隅に付設され、東壁線との直角軸からおよそ16°南へ振れている。燃焼部は狭長に掘り込まれ、煙道部との区別は不明瞭であるが、僅かに窪む火床面から煙道部は水平に延びる。燃焼部幅80cm、火床面からの奥行き90cm、煙道部長さ60cmを測る。

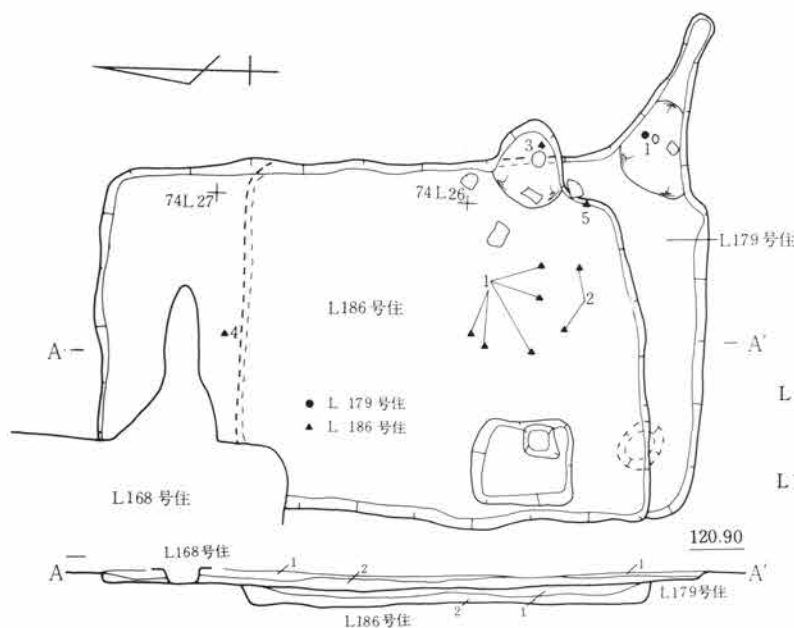
出土遺物は須恵器小杯など少量である。

L 186号住居跡 (Fig. 361、363、365・PL. 28、113)

L区第4台地の調査区中央部やや西に位置し、73~75 L 25~27の範囲にある。L 168号・L 179号住居跡と重複しており、両者より古い時期の所産である。L 179号住居跡との関係については東・西壁線を同じくしており、重複とするよりは建替え・拡張の可能性が考えられる。

平面形は南北に長軸をもつ方形を呈するが、西壁線が長く台形状である。南北長3.5m・東西長2.9mを測り、東西軸方位はN-88°-Eを示す。壁高は約30cmを測り、床面は平坦をなし踏み締まりは良好である。埋土はやや塊状になり、人為的な埋めもどしが想定される。

竈は東壁にあり南に大きく偏って付設される。右袖部には



- L 179号住居跡
- 1 暗褐色土 炭化粒少量含みややや粘性あり
- L 186号住居跡
- 1 暗褐色土 焼土粒・炭化粒含みやや締まりあり
- 2 暗褐色土 C軽石含み締まりあり

Fig. 361 L 179号・L 186号住居跡

凝灰岩質の加工材が埋設される。燃焼部は楕円形に掘り込まれるが、煙道部は検出されない。燃焼部幅約60cm・奥行き60cmを測る。

出土遺物は散在しており、須恵器小杯・灰釉陶器片・鉄塊などがある。

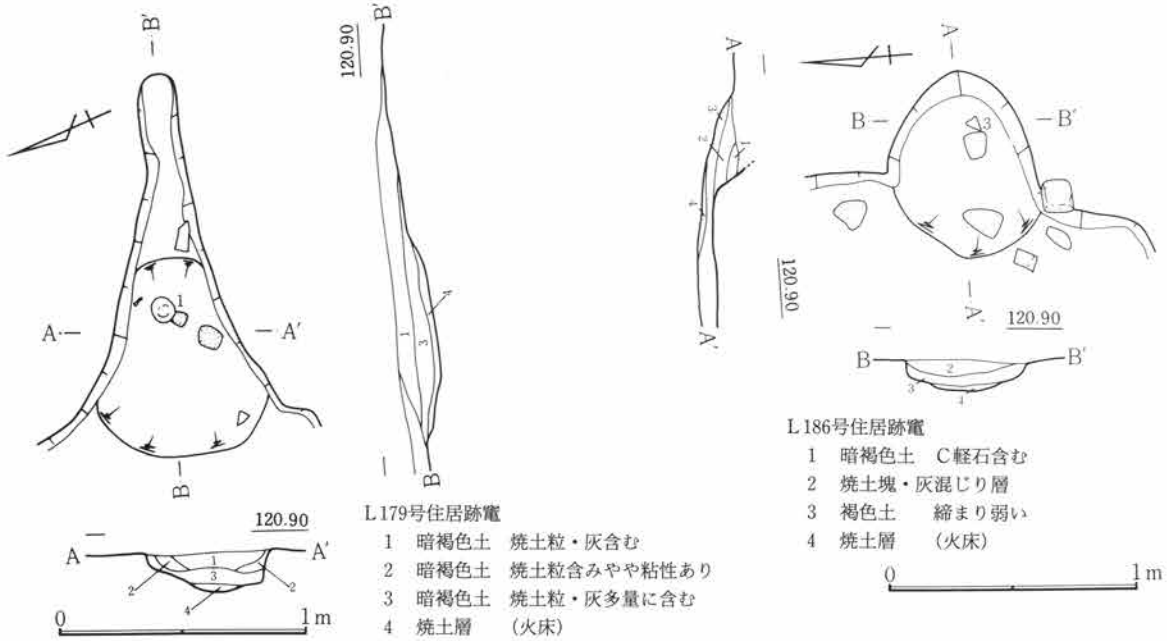


Fig. 362 L179号住居跡竈

Fig. 363 L186号住居跡竈

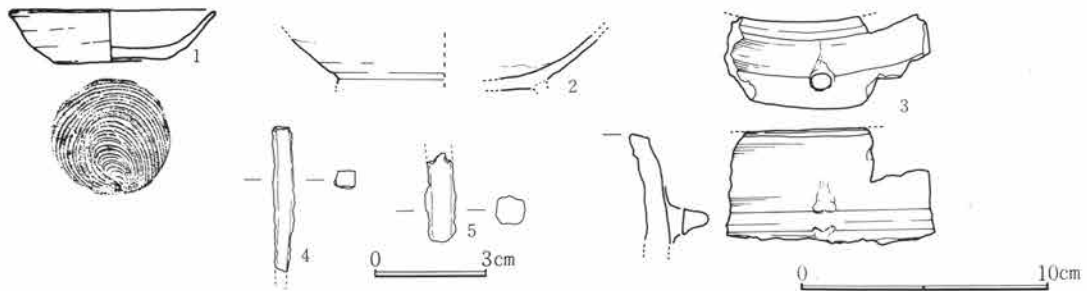


Fig. 364 L179号住居跡出土遺物

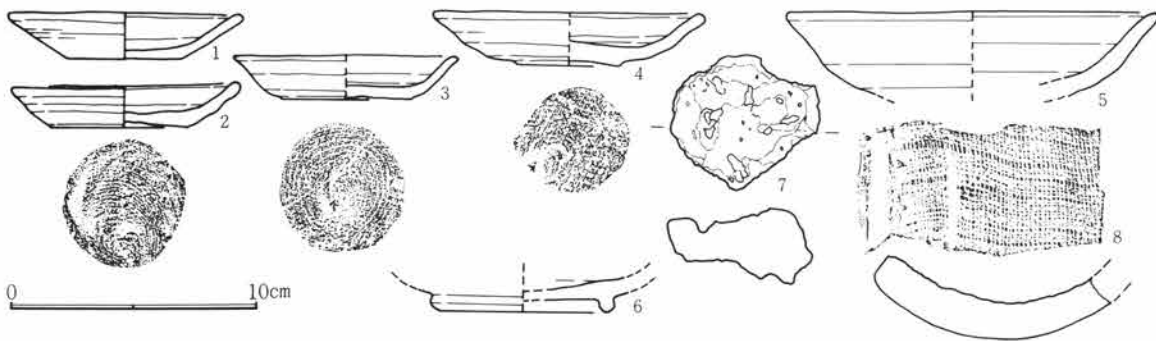


Fig. 365 L186号住居跡出土遺物

L179号住居跡出土遺物観察表

Fig. No.	器種	部位	計測値(cm)	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
PL. No.	器形	残存量	口径×底径×器高	(cm)		
364-1	須恵器	完形	8.2×4.6	竈	器肉薄い。体部内湾気味に開き口縁部僅かに外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③密
113-1	杯		×2.0			

第2章 遺構と遺物

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
364-2 113-2	灰釉陶器 椀?	小片	—×— ×(1.3)	埋土	器肉薄い。腰部丸く張る。付高台欠損。内外面施釉。轆轤成形。	①酸化気味・良好 ②明褐色 ③密
364-3 113-3	羽釜	口縁部 小片		埋土	口縁部内湾して立つ。鏝強く突出し1孔穿つ。	①良好 ②淡橙 ③やや密
364-4 113-4	鉄器 角釘?	両端部 欠損	長(3.8) 幅0.5	埋土	頭部形状不明。	
364-5 113-5	鉄器 角釘?	小片	長(2.3) 幅0.7	埋土	錆び・腐食著しく詳細不明。	

L 186号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
365-1 113-1	須恵器 杯	破片	9.4×4.4 ×1.8	+2	器肉薄め。体部直線的に大きく外傾。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②橙 ③やや密
365-2 113-2	須恵器 杯	完形	9.1×5.4 ×1.6	+3	体部外反気味に開く。口縁部外反。口唇部肥厚し丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②橙 ③やや密
365-3 113-3	須恵器 杯	破片	8.9×5.1 ×1.7	埋土	器肉薄い。腰部ややくびれて丸味をもつ。胴部から口縁部緩く外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや粗
365-4 113-4	須恵器 杯	破片	10.8×4.2 ×2.1	+14	体部内湾気味に開く。口縁部外反。口唇部上端面丸味をもって外斜。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや密
365-5 113-5	須恵器 杯	体部破片	14.7×— ×(3.3)	埋土	器肉厚い。体部中位で僅かに内湾し上半から口縁部まで外反。口唇部丸い。轆轤成形。	①酸化気味 ②浅黄橙 ③やや粗
365-6 113-6	灰釉陶器 椀	底部	—×7.3 ×(1.4)	掘形埋土	高台低く稜不明瞭。底部回転糸切り後寛調整か?	①良好 ②灰白 ③やや密
365-7 113-7	鉄滓		5.2×5.7 ×2.9	埋土	磁気弱い。重140g	
365-8 113-8	瓦 丸瓦		厚1.4	埋土	凹面布目。凸面篋撫で。側縁篋調整。	①良好 ②灰 ③やや粗・黒色粒多量

L 181号住居跡 (Fig. 366~370・PL. 28、29、114~116)

L区第4台地の北に位置し、62~66 L27~31の範囲にある。L169号住居跡と重複し、これより古い時期の所産である。

平面形は比較的整った正方形を呈し、東西長6.25m・南北長6.2mを測る。東西軸方位はおおよそN-71°-Eを示す。壁高は約38cmを測り、床面はLoamを主体に暗褐色土を混じえる床土である。壁際を除き踏み締まりは良好である。貯蔵穴は南東隅にあり、2段構造に作られる。外枠は西側がL字状に折れる方形の落ち込みで、規模は1.2×1.55m・深さ20cmを測る。この方形のほぼ中央に径60×65cm・深さ60cmで楕円形の土坑を設ける。壁下の溝は南壁下で部分的に検出されなかったが、東壁の一部を除き各壁下を巡る。幅10~12cm・深さ5~7cmを測る。柱穴はP₁~P₄で、P₁は上径35cm・下径10cm・深さ70cm、P₂は上径50cm・下径10cm・深さ68cm、P₃は上径20×30cm・下径10cm・深さ67cm、P₄は上径30cm・下径10cm・深さ50cmである。各柱間はP₁・P₂が3.3m、P₂・P₃が3.25m、P₃・P₄が3.6m、P₁・P₄が3.1mを測る。

竈は東壁やや南に偏って付設される。袖部は長く楕円状に弧を描いて形成され、煙道部分は壁面に傾斜をつけ僅かに削り出している。袖材はLoam・灰白色粘質土などの混合土を用いる。竈内には甕片土器が埋設した状態で検出された。底部には支脚として用いたと考えられる高杯脚部が貫通していた。袖部長さ約1.15mを測り、ほぼ竈の全長を示す。竈幅は最大で90cm、焚口部幅30cmを測る。住居内北側に2基の浅い土坑状

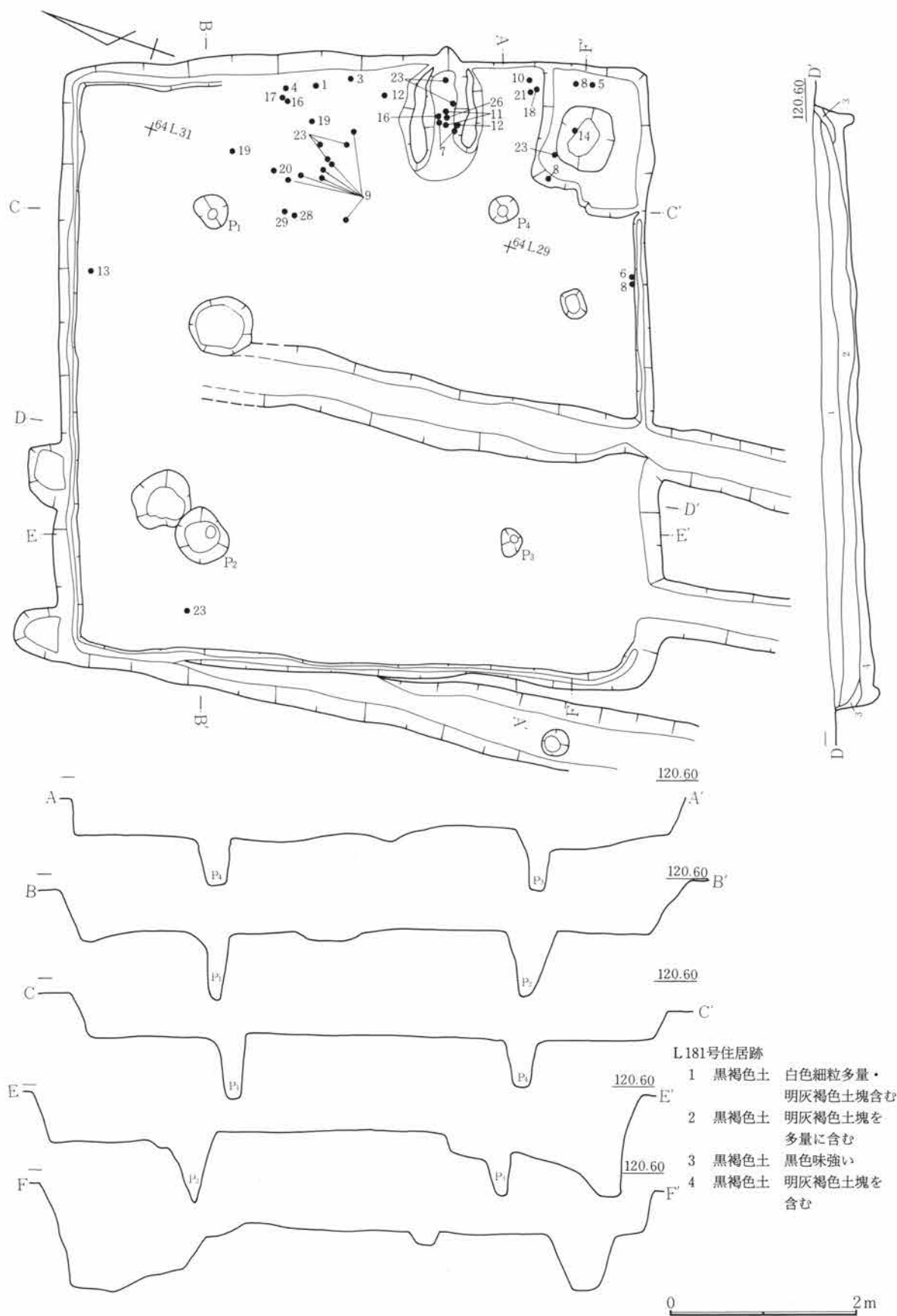


Fig. 366 L181号住居跡

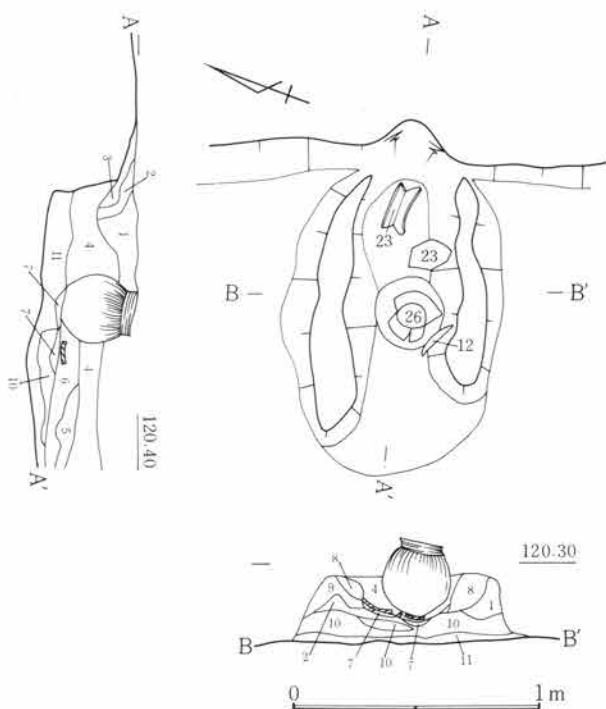


Fig. 367 L181号住居跡竈

落ち込みを検出したが、埋土中に焼土塊・炭化塊が認められた。またP₂に近接して床土が焼土化した部分がある。いずれも火所としての機能が考えられる。その遺存状態から竈と同時使用したものではなく、当跡における竈の採用直前まで使用された炉である可能性が考えられる。

出土遺物は多く、竈内・貯蔵穴周辺・竈左前方の床面などに集中して見られた。土師器碗・杯・高杯・甕類が多い。

L181号住居跡竈

- 1 暗褐色土 明灰色土塊・焼土粒含む
- 2 明灰色土塊
- 3 暗褐色土 明褐色土粒含む
- 4 白色土 粘質土
- 5 黒褐色土 明褐色土粒含む
- 6 焼土粒層 炭化粒含む
- 7 焼土粒層
- 8 Loam 層
- 9 暗褐色土 明灰色土含み、粘性あり
- 10 茶褐色土 焼土粒少量含む
- 11 暗褐色土 焼土粒少量含む

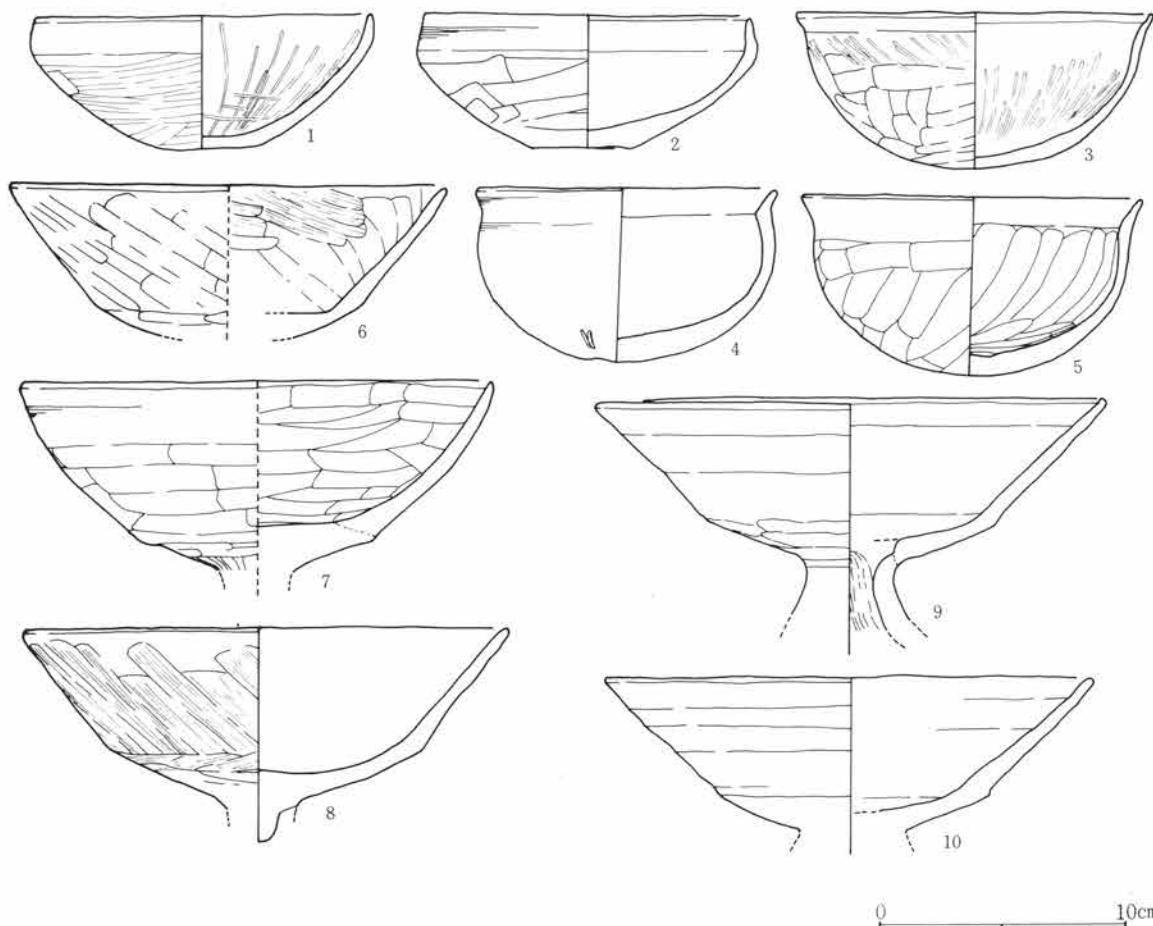


Fig. 368 L181号住居跡出土遺物(1)

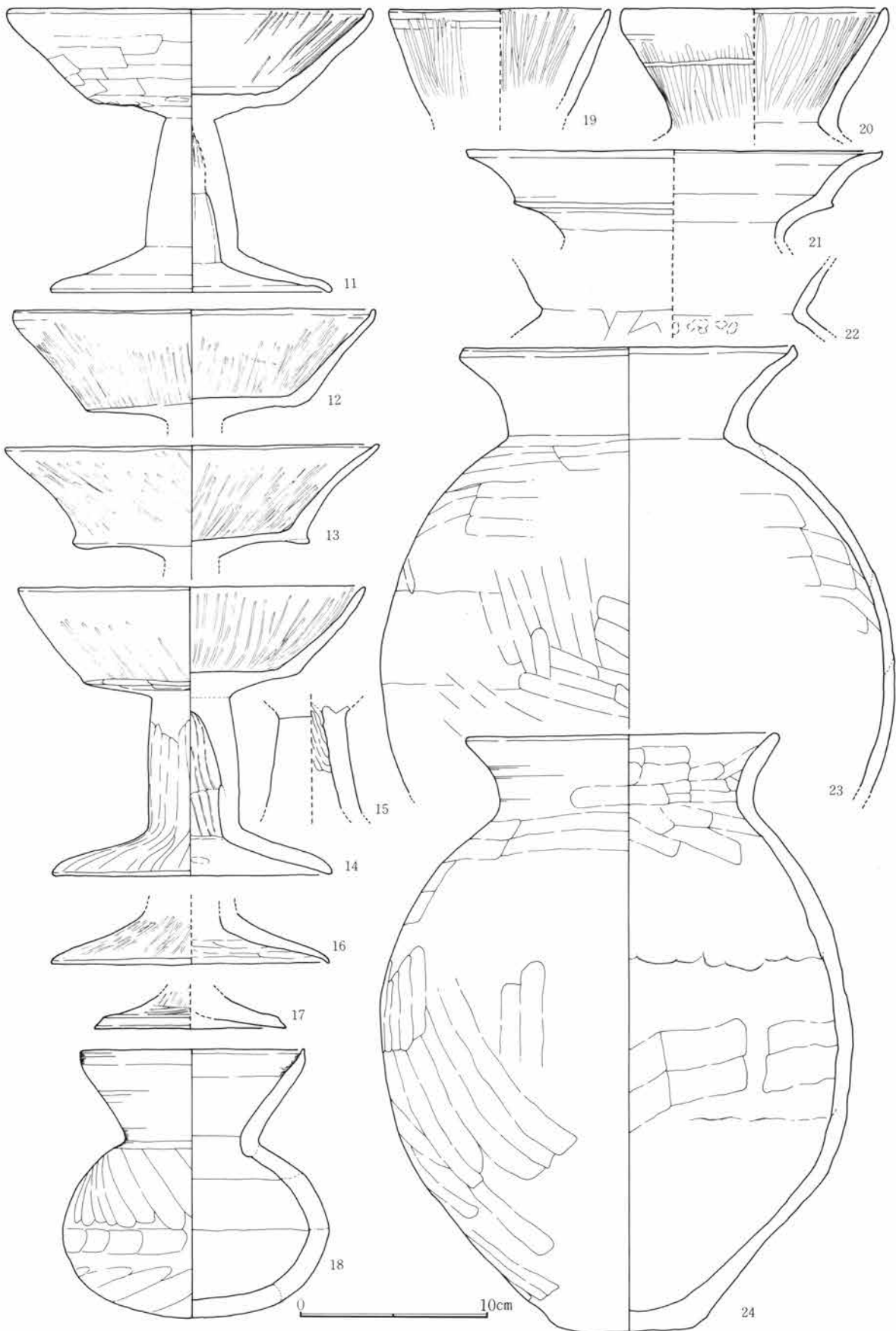


Fig. 369 L181号住居跡出土遺物(2)

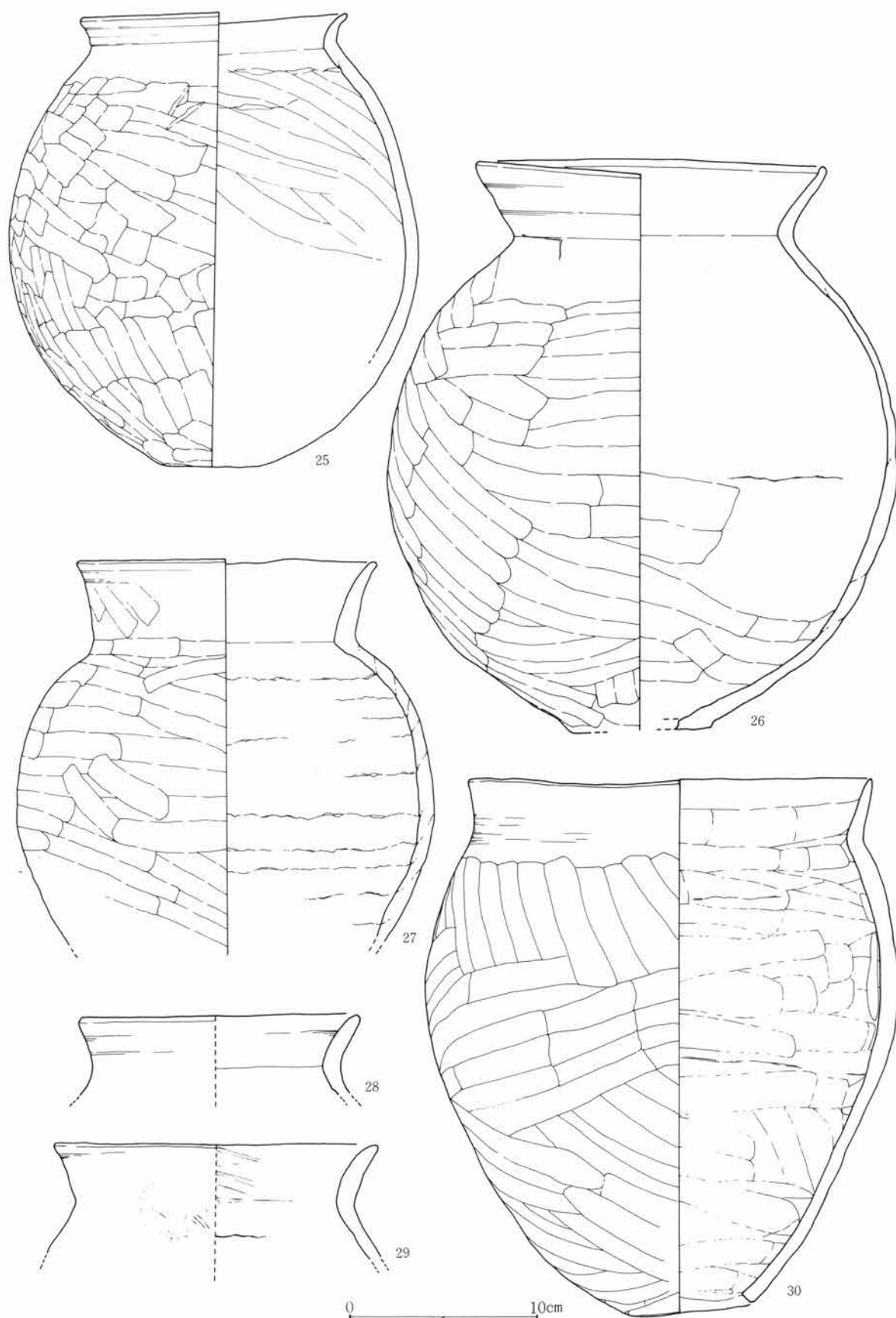


Fig. 370 L181号住居跡出土遺物(3)

L 181号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
368-1 114-1	土師器 杯	完形	13.3×3.6 ×5.2	埋土	底部小さな平底。体部内湾し口縁部直立。口唇部細る。口縁横撫で。体部横位篋削り後篋磨き。内面放射状篋磨き。	①良好 ②明赤褐 ③やや密・細砂混る
368-2 114-2	土師器 杯	ほぼ完形	12.9×3.8 ×(5.3)	埋土	底部小さく平底。体部丸く内湾し口縁部内傾して立つ。口縁部横撫で。体部・底部篋削り。	①良好 ②明赤褐 ③細砂混る
368-3 114-3	土師器 杯	1/2	14.2×— ×6.1	床直	丸底。体部丸く球形。口縁部は内湾気味に外屈。口唇部丸い。体部上方斜位篋磨き・下半篋削り。内面放射状篋磨き。内面黒色処理。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
368-4 114-4	土師器 碗	完形	12.0×— ×7.0	埋土	丸底。体部丸く張り球形。口縁部強く外屈し口唇部丸い。体部篋当て痕・撫で。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗・砂混る
368-5 114-5	土師器 碗	ほぼ完形	13.6×— ×8.1	貯蔵穴	丸底。体部丸く張り球形。口縁部外屈し口唇部丸い。体部上半横位・下半斜位篋削り。内面放射状篋磨き。	①良好 ②橙 ③細砂混る
368-6 114-6	土師器 高杯	杯部1/2	17.4×杯底 径10.3×(6.0)	+1	杯底部平坦。体部やや直線的に開く。端部丸まる。杯部外面篋削り・内面刷毛目状工具による撫で。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
368-7 114-7	土師器 高杯	杯部	18.8×杯底径 9.3×(7.4)	竈	杯底部水平で強く屈して体部内湾して開く。口唇部丸まる。口縁部横撫で。体・底部内面横方向篋撫で。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
368-8 114-8	土師器 高杯	杯部1/2	19.4×杯底径 12.3×(8.4)	貯蔵穴	杯底部丸味をもち体部直線的に大きく開く。体部・腰部刷毛目状撫で。脚部との接合部は凸状のほぞ。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密
368-9 114-9	土師器 高杯	脚部欠損	20.4×杯底 径11.5×(9.0)	+2	杯底径小さく体部直線的に大きく開く。口唇部内屈して丸まる。脚部大きく開くか。体部横位篋撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
368-10 114-10	土師器 高杯	脚部欠損	19.4×杯底 径10.7×6.0	+5	杯底部平坦気味。体部直線的に大きく開く。口縁部内湾気味に開く。	①酸化 ②橙 ③やや密
369-11 114-11	土師器 高杯	1/2	19.2×14.7 ×14.7	竈	杯底部平坦。腰部丸味をもち体部直線的に開く。口唇部折れて直立。脚部下方やや脹らみ裾部強くハの字状に開き端部弱い内屈。杯部内面放射状篋磨き・外面横位篋撫で。	①良好 ②明赤褐 ③やや密・細砂混る
369-12 114-12	土師器 高杯	杯部1/2	19.1×杯底 径11.7×(6.0)	竈	杯底部平坦。腰部張り体部直線的に大きく開いた後口唇部内屈。内外面放射状篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密
369-13 115-13	土師器 高杯	脚部欠損	19.6×杯底径 12.3×(5.8)	+4	腰部明瞭な段をなし張る。体部外反して大きく開く。口唇部丸まり内屈。内外面放射状篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
369-14 115-14	土師器 高杯	完形	18.2×14.5 ×15.0	貯蔵穴	杯底部平坦。腰部僅か度で体部直線的。脚部脹らみなく裾は大きいハの字状。杯部外面篋磨き。底部篋削り。内面放射状篋磨き。脚部外面篋磨き・内面篋による掻き取り痕。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
369-15 115-15	土師器 高杯	脚部	—×— ×(5.2)	埋土	脚部脹らみなく直線的で弱い開き。内面しぼり痕。	①良好 ②橙 ③やや粗
369-16 115-16	土師器 高杯	脚部小片	—×14.6 ×(2.8)	竈・ 床直	脚部下位やや脹らみ裾大きくハの字状に開く。端部細り内湾気味。外面放射状篋磨き。内面横方向篋撫で。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
369-17 115-17	土師器 高杯	脚部	—×10.0 ×(1.7)	床直	裾部ハの字状に強く開き端部尖る。外面篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密
369-18 115-18	土師器 埴	11.7×—× 14最大径14	+6	丸底。胴部やや扁平な球形。口縁直線的に外傾し口唇部尖り直立。口縁横撫で。胴上位斜・中位横・下位斜位篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・白色粒混	
369-19 115-19	土師器 埴	口縁部	11.6×— ×(5.6)	埋土 +2	口縁部直線的に外傾し口唇部丸まり僅かに内傾。外面横・縦・内面縦方向篋磨き。	①良好 ②鈍い橙 ③細砂混る
369-20 115-20	土師器 埴	口縁部 1/2	13.5×— ×(6.5)	+1・ 床直	器内厚くやや大形。口縁部外反気味に開き口唇部丸く内傾。外面横・縦方向、内面縦方向篋磨き。	①良好 ②鈍い橙 ③密
369-21 115-21	土師器 壺	口縁部	21.8×— ×(4.7)	+6	口縁部下位で水平に近く外反し段をなし上半は強く外反して大きく開く有段口縁。口唇部垂直気味に立ち上がる。	①良好 ②橙 ③やや密
369-22 115-22	土師器 甕	頸部	頸部径 13.8	埋土	肩部丸く強く張る。口縁部くの字状に開き下位に脹らみ。体部縦位篋削り。内面指頭痕。	①良好 ②淡黄 ③夾雑物多い
369-23 115-23	土師器 甕	下位欠損	17.4×— ×(23.3) 最大径27.1	竈	胴部丸く張り球形。口縁部強く外反し口唇部内屈し断面矩形。口縁部横撫で。胴部上位横位・中位縦位・下位斜位篋削り。内面横位篋撫で。	①良好 ②橙 ③やや密・夾雑物混
369-24 115-24	土師器 甕	ほぼ完形	16.4×13.1×31.1 最大径24.8	埋土	胴部丸く強く張る。口縁部くの字状に外反。最大径胴部中位やや上。口縁部横撫で。胴部内外面篋撫で。	①やや軟 ②鈍い黄 橙 ③やや粗
370-25 115-25	土師器 甕	完形	13.9×4.5× 23.5最大径21.5	埋土	胴部張り強く球形。口縁短く外傾し口唇部さらに外傾。口縁横撫で。内面斜位篋撫で。肩部横位・胴部下位縦位篋削り。	①良好 ②明褐 ③やや密
370-26 116-26	土師器 転用甕か	完形	18.3×7.2 ×29.5 最大径26.8	竈	底部小さく平底。最大径胴部上位で丸く張り球形を呈す。口縁部くの字状に外反して開く。口唇部丸まり内屈。底部に外から穿孔。口縁部横撫で。外面篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗・小石混る

第2章 遺構と遺物

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
370-27 116-27	土師器 甕	下位欠損	15.6×-(20) 最大径21.8	埋土	最大径胴部上位で丸く張り球形。口縁部直線的に外傾して開く。口縁部撫で。胴部斜位篋削り。内面接合痕顕著。	①やや軟 ②鈍い橙 ③やや密
370-28 116-28	土師器 甕	口縁部	14.6×- ×(4.1)	床直	口縁部肥厚し緩く外反。口唇部丸い。口縁内外面横撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③小石混る
370-29 116-29	土師器 甕	口縁部	16.9×- ×(5.9)	床直	口縁部肥厚し緩く外反。口唇部丸い。外面及び口縁部内面に刷毛目。	①良好 ②灰黄褐 ③細砂混る
370-30 116-30	土師器 甕	1/2	21.0×6.5× 27.8最大径24.7	埋土	歪み大きな単孔。胴部中位で丸く張り口縁部やや外傾し立つ。口縁部撫で。外面斜位削り。内面横篋撫で。孔径6.4	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・砂混る

L 182号住居跡 (Fig. 371~376・PL. 29、116~118)

L区第4台地の調査区ほぼ中央部に位置し、68~72 L24~27の範囲にある。L165号・L208号住居跡と重複しており、これらより古い時期の所産である。

平面形は西壁線が北側に僅かに張り出すが南北に長軸をもつ略方形を呈する。南北長6m・東西長5.4m、東西長張り出し部で約5.6mを測る。東西軸方位はN-67°-Eを示す。壁高は約30cm、床面は平坦で壁線を除き踏み締まりは良好である。貯蔵穴は南東部にあり径70×75cm・深さ22cmの略円形である。壁下の溝は各壁下に断続的に巡る。幅10cm・深さ3~8cmを測る。柱穴はP₁~P₄である。P₁は上径50cm・下径20cm・深さ60cm、P₂は上径50cm・下径10cm・深さ60cm、P₃は上径40cm・下径15cm・深さ78cm、P₄は上径28×38cm・下径10×20cm・深さ75cmを測る。各柱間はP₁・P₂は2.75m、P₂・P₃は3.05m、P₃・P₄は2.8m、P₁・P₄は3.2mである。西壁沿い張り出し部に60×80cm・深さ35cmの方形土坑が検出されたが当跡に伴うかは不明である。

竈は東壁の南に偏って付設され、壁外に長い煙道部が延びる。袖部は左右とも壁線に接して凝灰岩質加工材が設置され、若干の間隔をおいてさらに同質材が置かれる。本来これらの加工材を芯として粘土材などで被覆してあったものと考えられる。現状での袖部長さ60~70cm、袖材間内法65cmを測り、燃烧部より若干立ち上がり水平に延びる煙道部は長さ約1.1mを測る。

出土遺物は散在しているが竈前面にとくに集中する。土師器杯類・甕のほか須恵器小片・石製剣型模造品などがある。

L 208号住居跡 (Fig. 371、377・PL. 29、119)

L区第4台地の調査区ほぼ中央部に位置し、69~71 L27・28の範囲にある。L165号・L182号住居跡と重複しているが新旧関係は不明である。

平面形は北東部の壁線は丸く脹らみ、東壁線は歪む略方形を呈すると考えられる。北東部の脹らみは新しい時期の土坑状遺構と重複している可能性がある。東西長3.35m、南北は北壁より3mの範囲まで確認した。東西軸方位はおおよそN-75°-Eを示す。壁高は約15cmを測り、床面の踏み締まりは弱い。竈・炉などの諸施設は検出されていない。

出土遺物は土師器杯・壺・甕などがあり、北東部の土坑状落ち込みからは羽釜が出土している。

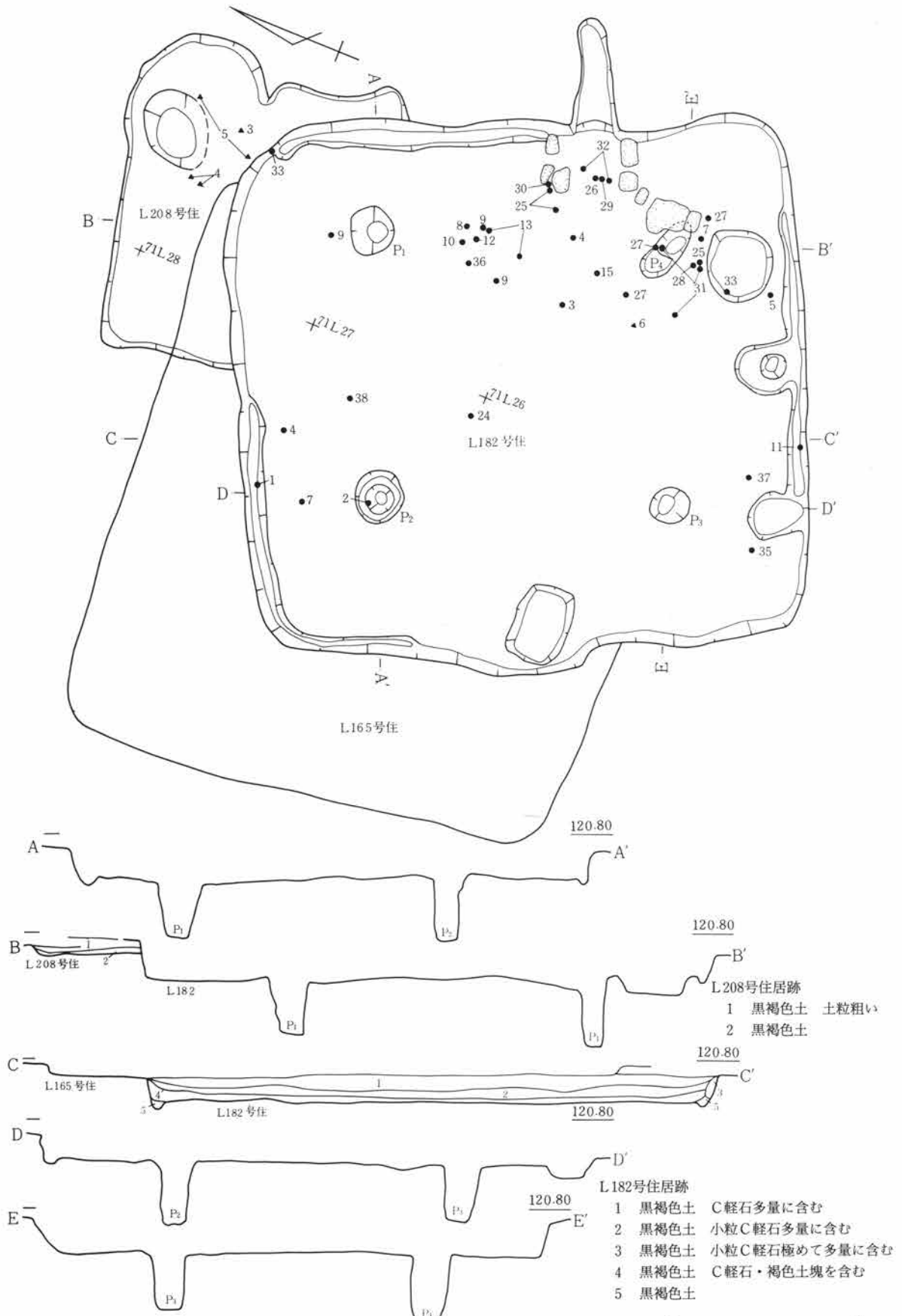
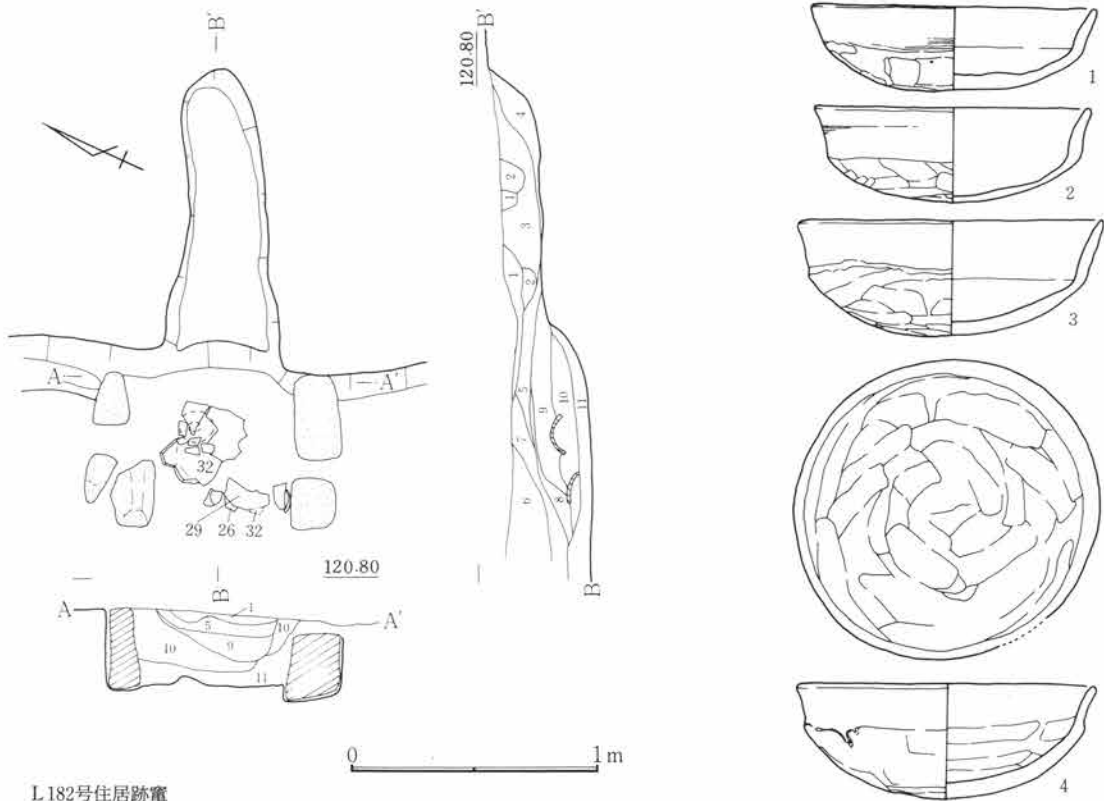


Fig. 371 L182号・L208号住居跡

0 2m



L182号住居跡竈

- 1 暗灰褐色土 焼土粒少量含む
- 2 白色粘土粒・焼土粒混合層
- 3 暗褐色土 焼土粒・灰含む
- 4 褐色土 焼土粒・灰含む
- 5 白色粘土
- 6 暗褐色土 C軽石を多量に含む
- 7 暗褐色土 C軽石を含む
- 8 灰層
- 9 暗褐色土 C軽石・焼土塊・炭化粒含む
- 10 黄褐色粘土塊層 焼土塊を少量含む
- 11 暗褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒少量含む

Fig. 372 L182号住居跡竈

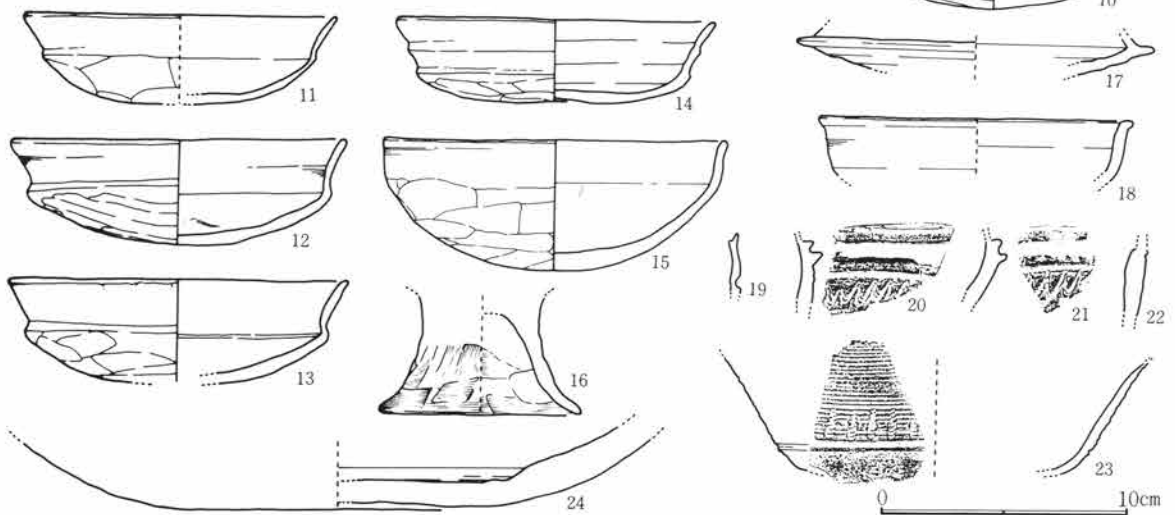


Fig. 373 L182号住居跡出土遺物(1)

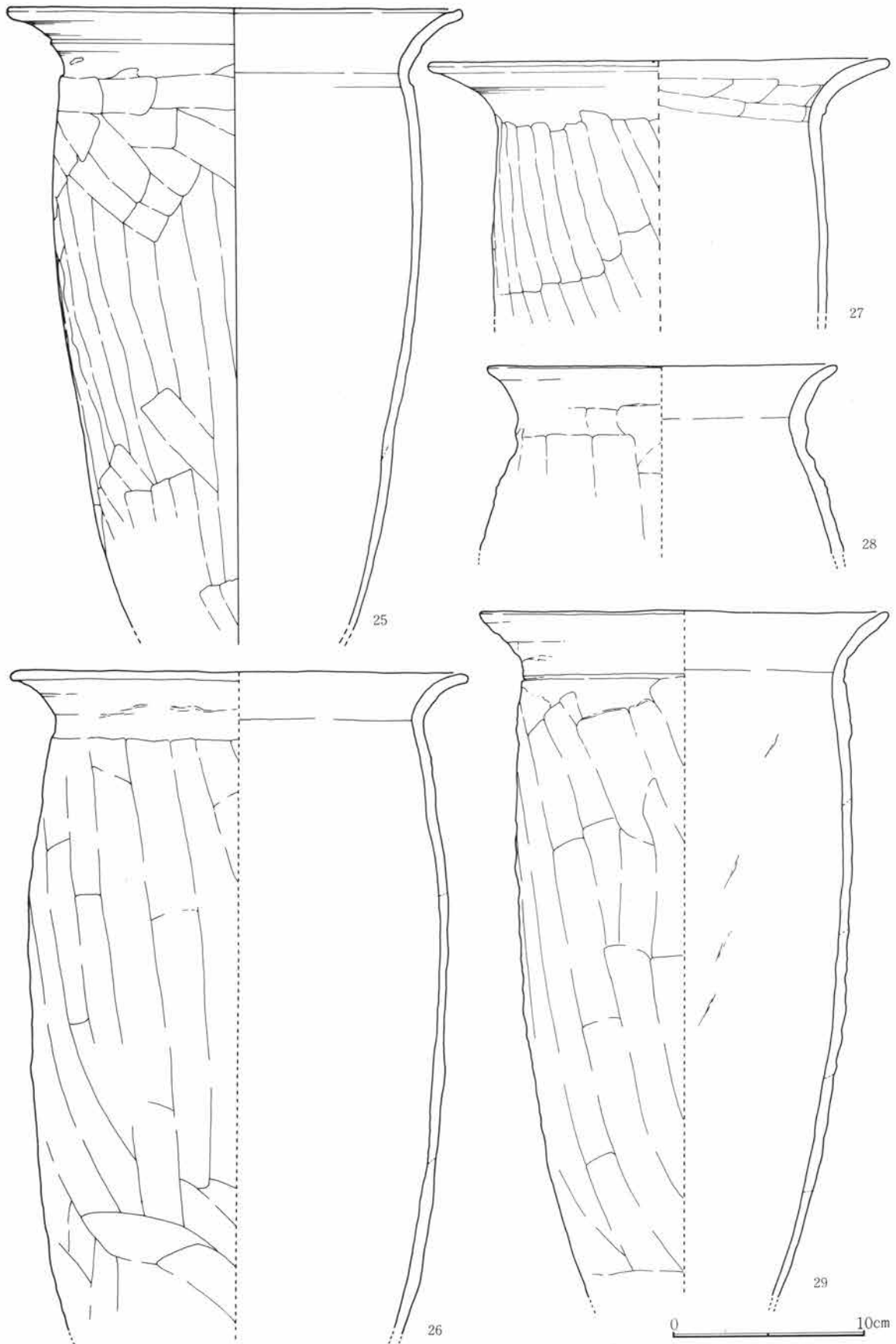


Fig. 374 L182号住居跡出土遺物(2)

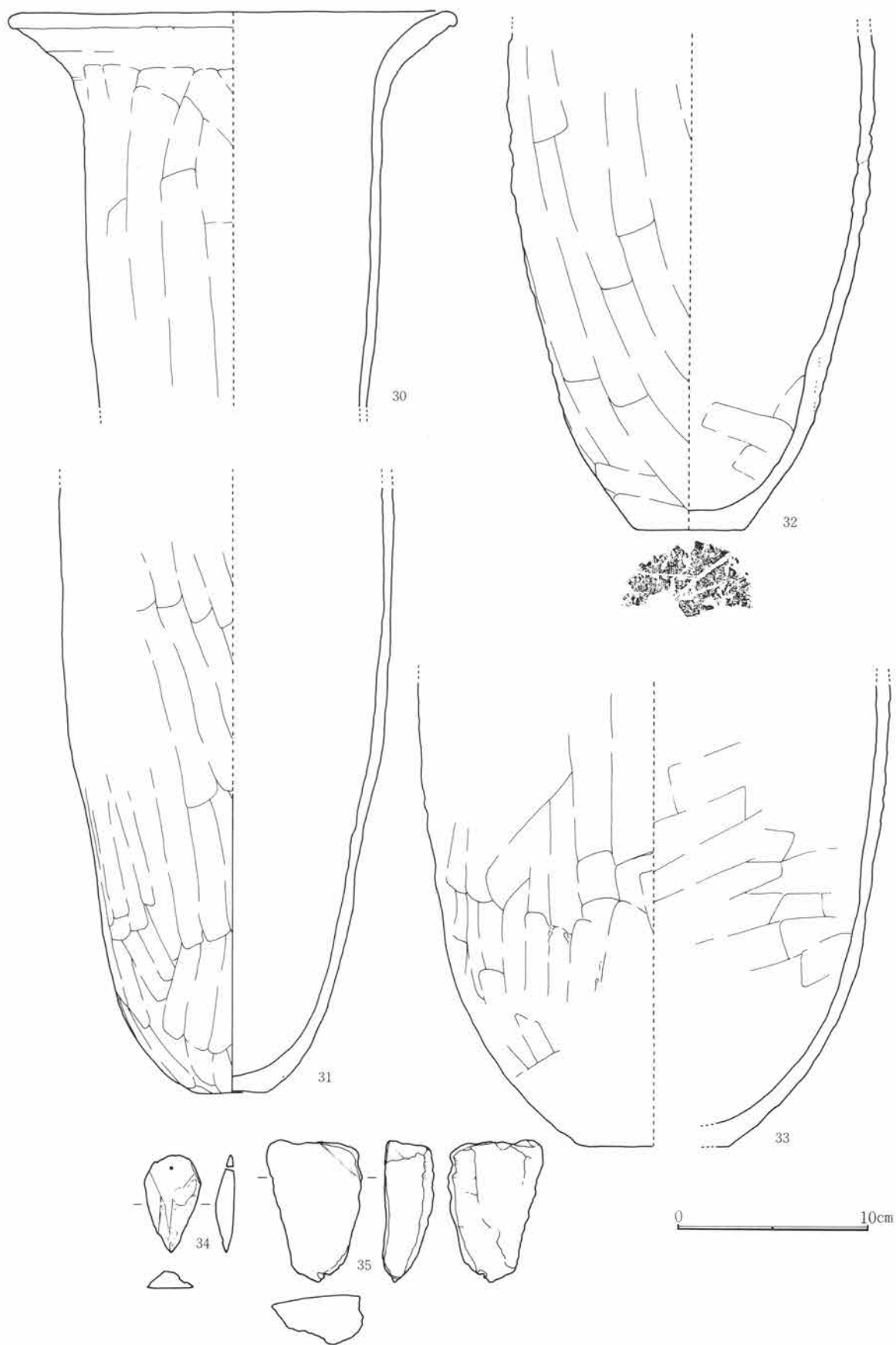


Fig. 375 L182号住居跡出土遺物(3)

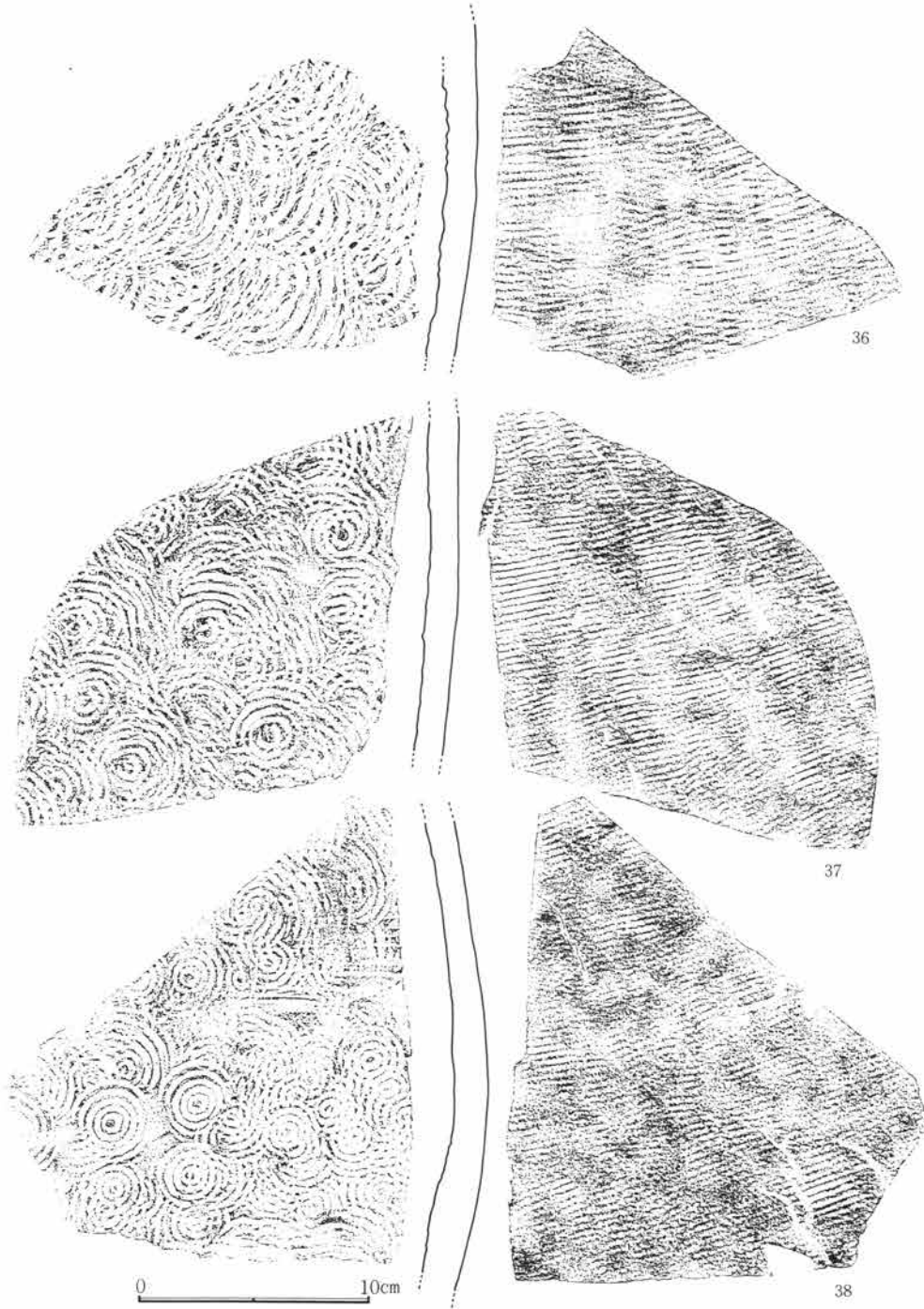


Fig. 376 L 182号住居跡出土遺物(4)

L 182号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
373-1 116-1	土師器 杯	ほぼ完 形	11.4×— ×3.4	+14	底部丸く浅い。中央部やや平ら。受け部で屈し口縁部緩く外傾。口唇部丸い。口縁部撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・小石混る
373-2 116-2	土師器 杯	完形	11.1×— ×3.8	Pit	底部丸味をもつ。受け部で屈し口縁部肥厚し緩く外反。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③密
373-3 116-3	土師器 杯	ほぼ完 形	12.1×— ×4.6	+3	底部丸くやや深め。受け部で弱い段をなし口縁部は緩く外反。口唇部丸い。口縁部撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密

第2章 遺構と遺物

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
373-4 116-4	土師器 杯	ほぼ完 形	11.9× ×4.5	+6~16	底部丸く張る。受け部で弱い稜をなし口縁部やや外反。口縁部横撫で。受け部に接合痕。底部篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②橙 ③細砂混る
373-5 116-5	土師器 杯	ㄨ	11.0××3.1 口縁高1.9	+1	底部丸く浅い。受け部で弱い稜をなし口縁部外反気味に開く。口縁部・内面横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密
373-6 116-6	土師器 杯	小片	10.6××(3.0) 口縁高2.2	埋土	受け部に稜をなし口縁部内湾気味に開き中位に段をもつ。口縁部・内面横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密
373-7 117-7	土師器 杯	完形	11.9× ×5.1	+2	底部尖り気味。受け部で僅かに稜をなし口縁部直線的。口縁部横撫で。中位に弱い沈線。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③密
373-8 117-8	土師器 杯	ほぼ完 形	11.2× ×3.8	埋土・ +2	底部丸くやや深め。受け部で緩く屈し弱い稜をなす。口縁部外反。口唇部丸い。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
373-9 117-9	土師器 杯	ㄨ	12.2× ×4.5	埋土・ +20	底部丸味をもつ。受け部で強い稜をなし口縁部外反。口縁部横撫で。底部篋削り。内面横方向の撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③細砂混る
373-10 117-10	土師器 杯	ほぼ完 形	13.4× ×4.7	+6	器肉厚い。底部丸味をもつ。受け部で強い稜をなし口縁部強く外反。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好・硬 ②鈍い橙 ③密
373-11 117-11	土師器 杯	ㄨ	12.6×× 3.5口縁高1.7	+6	器肉薄い。底部浅く丸味をもち受け部で稜をなす。口縁部外反気味で大きく外傾。口縁・内面横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密・赤色粒混る
373-12 117-12	土師器 杯	ほぼ完 形	13.3× ×4.3	+6	底部浅く丸味をもつ。受け部で強い稜をなし口縁部緩く外反。口縁部横撫で。底部篋削り。内面篋当て痕。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
373-13 117-13	土師器 杯	ㄨ	13.6×× (4.1)口縁高2.1	+4	底部丸い。受け部で強い稜をなす。口縁部は強く外反。口縁部・内面横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや密
373-14 117-14	土師器 杯	ㄨ	12.8×× 3.3口縁高2.2	埋土	底部浅く偏平。口縁部は高く中位で段をなし外反気味に開く。口縁部・内面横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
373-15 117-15	土師器 杯	完形	13.7× ×5.1	+4	底部深く丸く不安定。口縁部緩く外反して立つ。口唇部丸い。口縁部横撫で。底部不定方向篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
373-16 117-16	土師器 高杯	台部ㄨ	××8.0 ×(4.7)	埋土	脚部ハの字状に開く。内外面刷毛目。煤付着。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密
373-17 117-17	須恵器 杯	小片	14.4× ×(1.6)	埋土	底部浅く偏平に開き受け部は水平に強く突出。口縁部内傾度強い。端部欠損。	①良好 ②灰白 ③やや密
373-18 117-18	須恵器 杯	小片	12.6× ×(2.4)	埋土	底部浅く腰部張る。体部やや内湾気味に外傾。口唇部外屈し上端面弱い内斜。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密
373-19 117-19	須恵器 罍	小片	×× ×(2.4)	埋土	器肉薄い。強い段をなし口唇部尖り内面に段をなす。	①良好 ②灰 ③密
373-20 117-20	須恵器 短頸壺	小片		埋土	上位に強い2条の凸帯。下位は波状文。	①良好 ②灰 ③密
373-21 117-21	須恵器 短頸壺	小片		埋土	上位に強い2条の凸帯。下位は波状文。	①良好 ②灰 ③密
373-22 117-22	須恵器 短頸壺	小片		埋土	上位に強い2条の凸帯。下位は波状文。	①良好 ②灰 ③密
373-23 117-23	須恵器 高杯	小片	×× ×(4.5)	埋土	器肉薄い。杯部腰張り1条の凹線巡る。体部直線的に開き上半外反。体部外面掻き目7単位の列点文。腰部列点文。	①良好 ②灰 ③密・白色粒混る
373-24 117-24	須恵器 甕	底部	×× ×(2.7)	+2	底部から内湾して大きく開く。見込部篋撫で。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや密
374-25 117-25	土師器 甕	ㄨ	23.4× ×(32.0)	埋土・ +2	胴部張りなく長胴。口縁部中位で段をなし外反して大きく開く。口唇部受け口状に屈す。口縁部横撫で。肩部横位篋削り。胴部縦位篋削り。	①良好 ②橙 ③やや軟・砂混る
374-26 117-26	土師器 甕	ㄨ	23.8× ×(33.6)	電	肩部張りなく長胴。口縁部強く外反し大きく開く。口唇部丸い。口縁部横撫で。胴部縦位篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・小石混る
374-27 117-27	土師器 甕	上半ㄨ	23.7× ×(13.6)	埋土	胴部張りなく長胴。口縁部大きく外反して開く。胴部縦位篋削り。口縁内面篋撫で後横撫で。外面横撫で。	①良好 ②鈍い黄橙 ③粗・小石混る
374-28 117-28	土師器 甕	小片	18.0× ×(9.5)	貯蔵穴	肩部僅かに張り長胴か？口縁部やや肥厚して外反し上半はさらに大きく開く。口唇部丸い。口縁部横撫で。肩部縦位篋削り。頸部篋撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・小石混る
374-29 118-29	土師器 甕	ㄨ	21.2× ×(33.0)	電	胴部張りなく細身の長胴。口縁部くの字状に開く。口縁部横撫で。胴部縦位篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②橙 ③やや密
375-30 118-30	土師器 甕	ㄨ	23.2× ×(20.3)	埋土	胴部張りなく長胴。口縁部肥厚し強く外反。口唇部さらに外屈。口縁部横撫で。胴部縦位篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
375-31 118-31	土師器 甕	口縁部 欠損	××3.8 ×(31.0)	埋土 +11	胴部張り少なく長胴。腰部丸く小さな平底。胴部縦位篋削り。内面撫で。	①良好 ②鈍い黄橙 ③砂混る
375-32 118-32	土師器 甕	ㄨ	××5.8 ×(25.4)	電	胴部張りなく長胴。底部肥厚。胴部斜位篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗・小石混る

第1節 竪穴住居跡と出土遺物

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
375-33 118-33	土師器 甕	1/4	一×8.0 ×(25.4)	貯蔵穴・ 埋土	小さな平底。底部やや脹らみ胴部直立。外面縦位篋削り。 内面撫で。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密・小石混る
375-34 118-34	石製品 模造品	完形	5.0×2.8 ×0.8	埋土	剣型模造品。裏面平坦。表面4面面取り稜をなす。頂部に 径1mmの穿孔。端部尖る。重11.4g	蛇紋岩
375-35 118-35	石製品 砥石		7.3×5.0 ×2.5	埋土	1面使用。刃痕あり。重110g	流紋岩
376-36 118-36	須恵器 甕	胴部片	厚1.3	埋土	外面平行叩き目。内面同心円状当て目。	①良好 ②灰白 ③密
376-37 118-37	須恵器 甕	胴部片	厚1.3	+16	外面平行叩き目。内面同心円状当て目。	①良好 ②灰白 ③密
376-38 118-38	須恵器 甕	胴部片	厚1.2~1.8	埋土	外面平行叩き目。内面同心円状当て目。	①良好 ②灰白 ③密

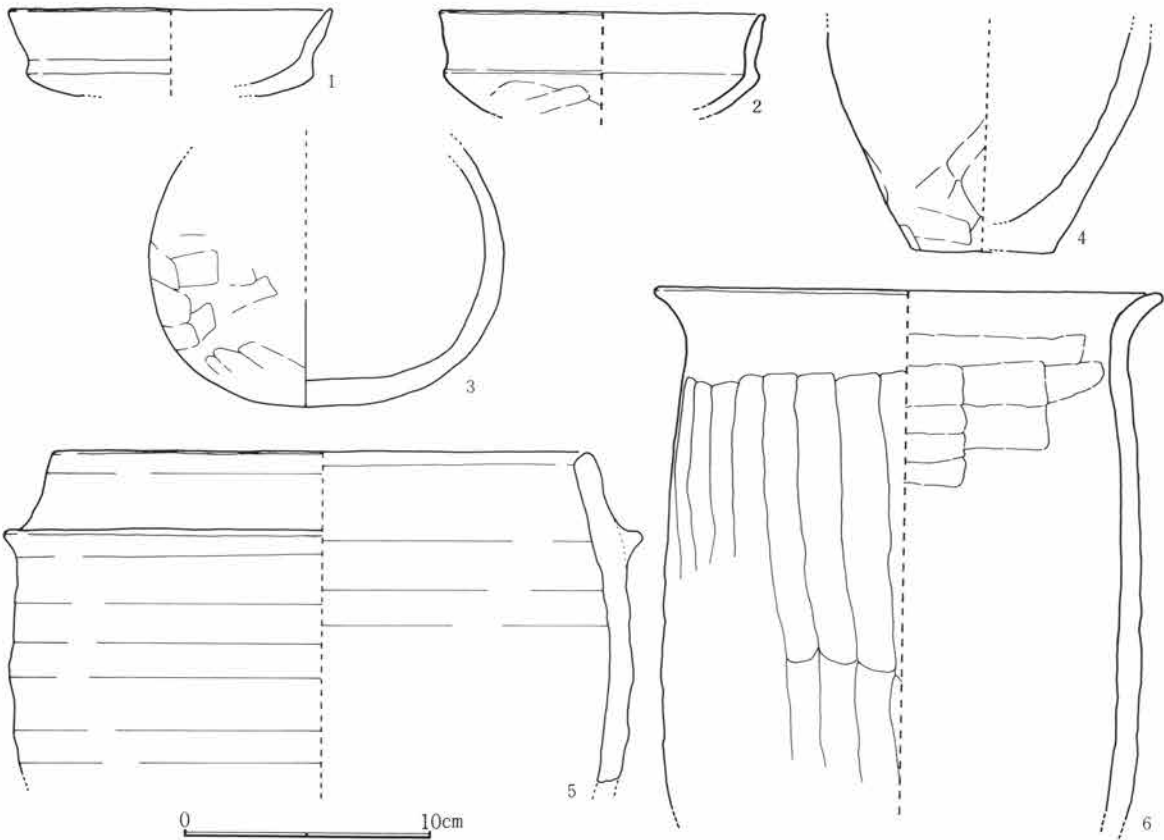


Fig. 377 L208号住居跡出土遺物

L208号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
377-1 119-1	土師器 杯	1/4	12.9×一 ×(3.5)	埋土	底部浅く丸い受け部をなす。口縁部高く直線的に外傾。口 唇部やや尖り気味。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
377-2 119-2	土師器 杯	破片	13.0×一 ×(4.0)	埋土	底部丸い。受け部で屈し口縁部直線的に外傾。口縁部横撫 で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
377-3 119-3	土師器 壺	1/4	一×一×(10. 3)最大径14	床直	器肉厚い。底部やや平ら。体部球形。外面篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・砂混る
377-4 119-4	土師器 甕	底部1/2	一×5.5 ×(9.0)	埋土・ +5	底部厚く胴部中位でやや脹らむ。外面篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・黒色粒混

第2章 遺構と遺物

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
377-5 119-5	羽釜	口縁部	21.3×— ×(13.1)	+10~11	胴部やや脹らみ上方へ外反。口縁部は内傾し口唇部やや丸い。上端面内傾。口縁・胴部撫で。欠口を削った痕あり。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや密
377-6 119-6	土師器 甕	下半欠損	20.1×— ×(20.7)	+2	胴部張りなく長胴。口縁部短く強く外反して開く。口唇部丸い。口縁部横撫で。内面横位篋撫で。胴部縦位篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗・黒色粒混

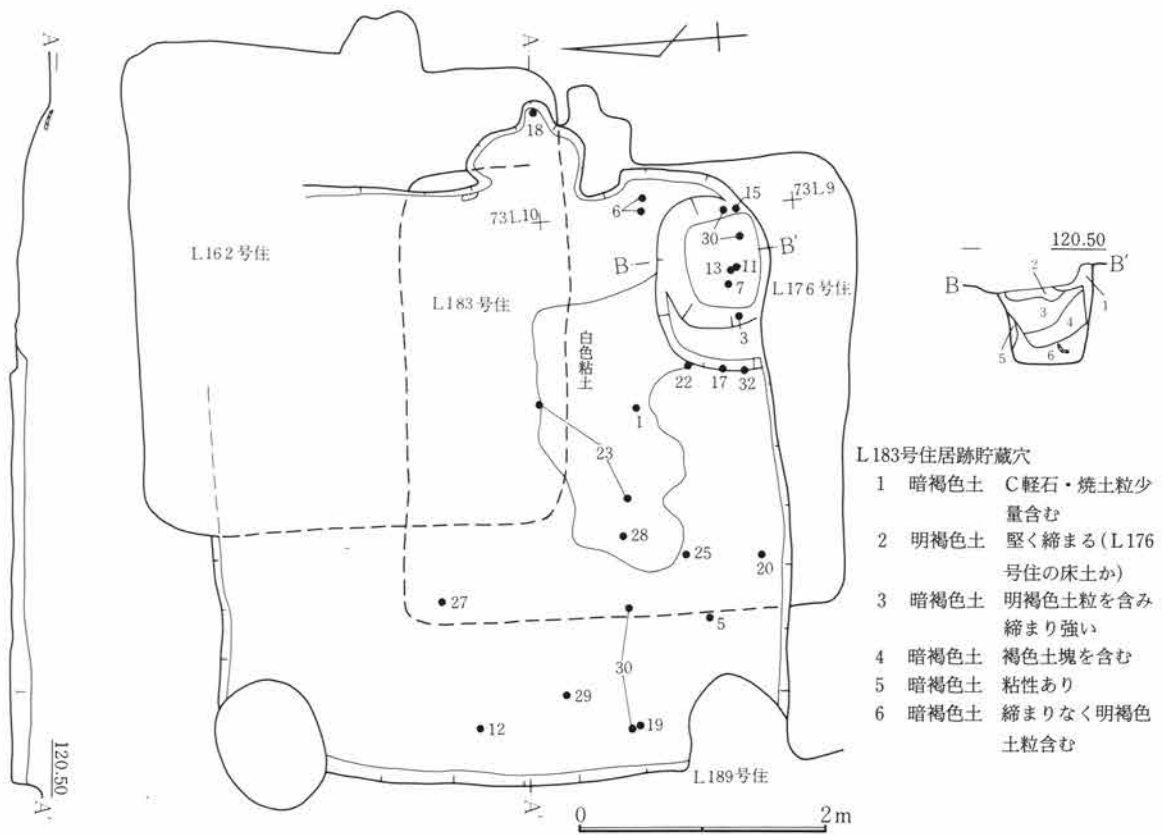
L183号住居跡 (Fig. 378~381・PL. 29、119、120)

L区第4台地の調査区南に位置し、72~75L9~11の範囲にある。L121号・L162号・L176号・L193号住居跡と重複しており、L121号・L162号・L176号住居跡より旧く、L193号住居跡より新しい時期の所産である。重複の北東壁線を検出することができなかった。

平面形は方形を呈し、南北長約4.5m・東西長4.7mを測る。東西軸方位はN-94°-Eを示す。壁高は約30cmで、床面は平坦をなし踏み締まりは良好である。南東部には貯蔵穴が設けられ、径0.9×1m・深さ62cmの楕円形である。西縁は床面より約10cmの段差をもつ平坦部を作り2段構造となる。これを含めれば長径1.35mの大きさである。貯蔵穴北西から床面上に薄い白色粘土が広がる。

竈は東壁の南に偏って付設され、幅広に掘り込まれた燃焼部の先端には約20cmの短い煙道部が突出する。左袖部には埋設された石材残穴があり、右袖は短く掘形を住居内に張り出してある。袖部内法約80cm、燃焼部奥行き55cmを測る。

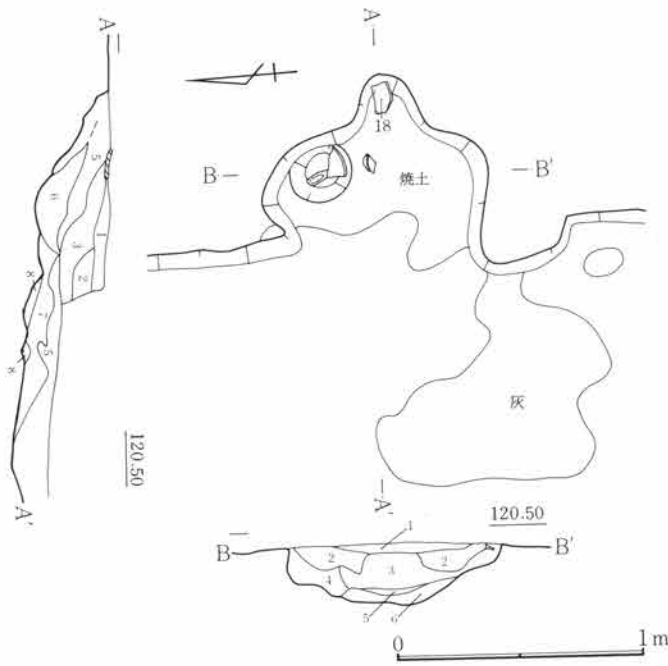
出土遺物は貯蔵穴内のほか住居跡南側に散在して検出された。須恵器杯・椀・灰釉陶器など多量である。



L183号住居跡

- 1 褐色土 C軽石多量に含む

Fig. 378 L183号住居跡



L183号住居跡竈

- | | |
|------------------|------------|
| 1 暗褐色土 焼土粒含む | 5 焼土・灰混合層 |
| 2 暗褐色土 C軽石を多量に含む | 6 焼土・灰混合層 |
| 3 暗褐色土 焼土粒を多量に含む | 7 灰層 |
| 4 暗褐色土 焼土粒を含む | 8 焼土層 (火床) |

Fig. 379 L183号住居跡竈

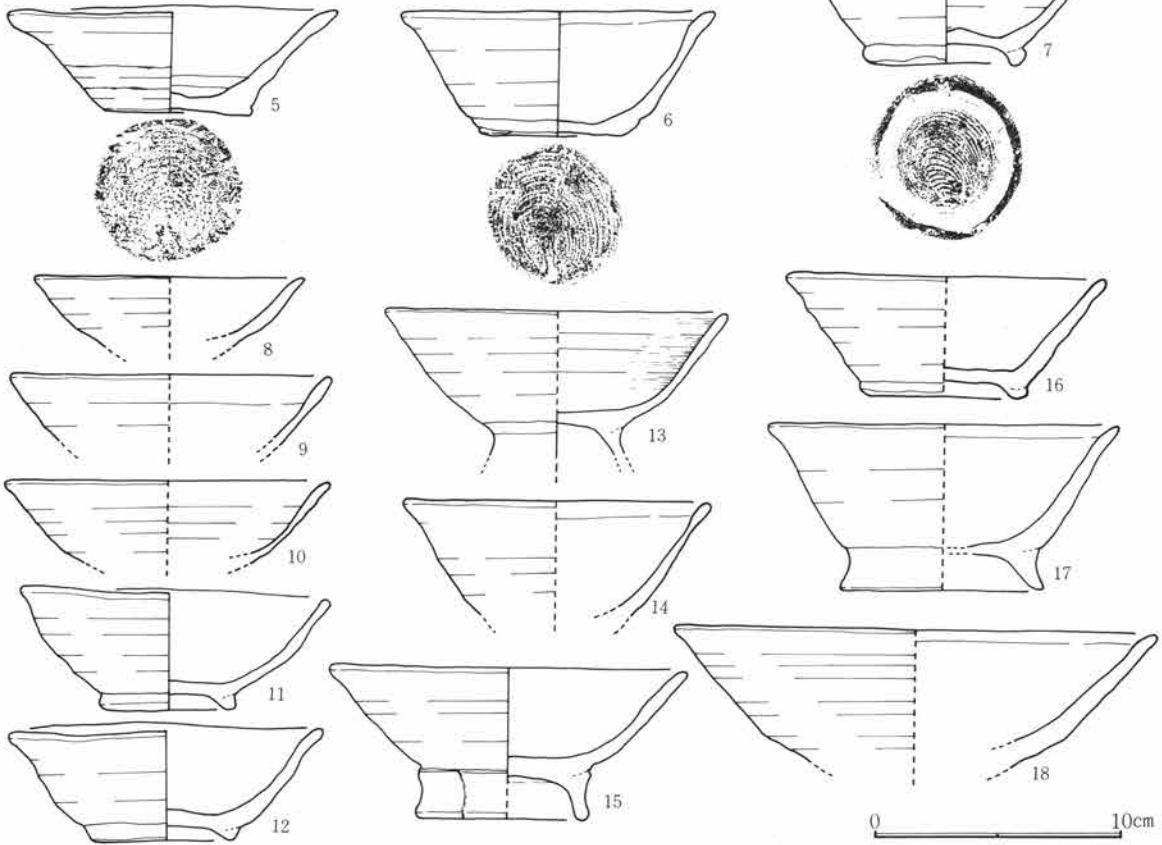
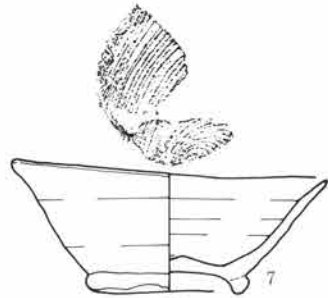
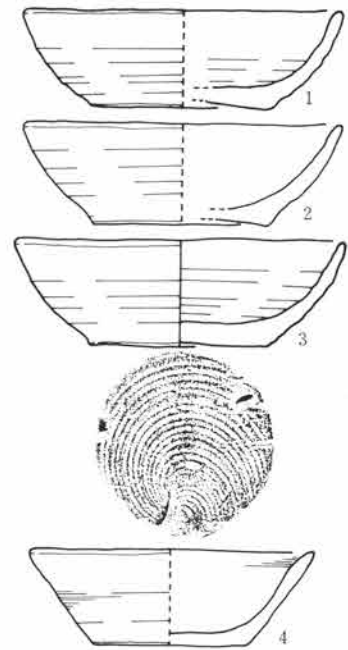


Fig. 380 L183号住居跡出土遺物(1)

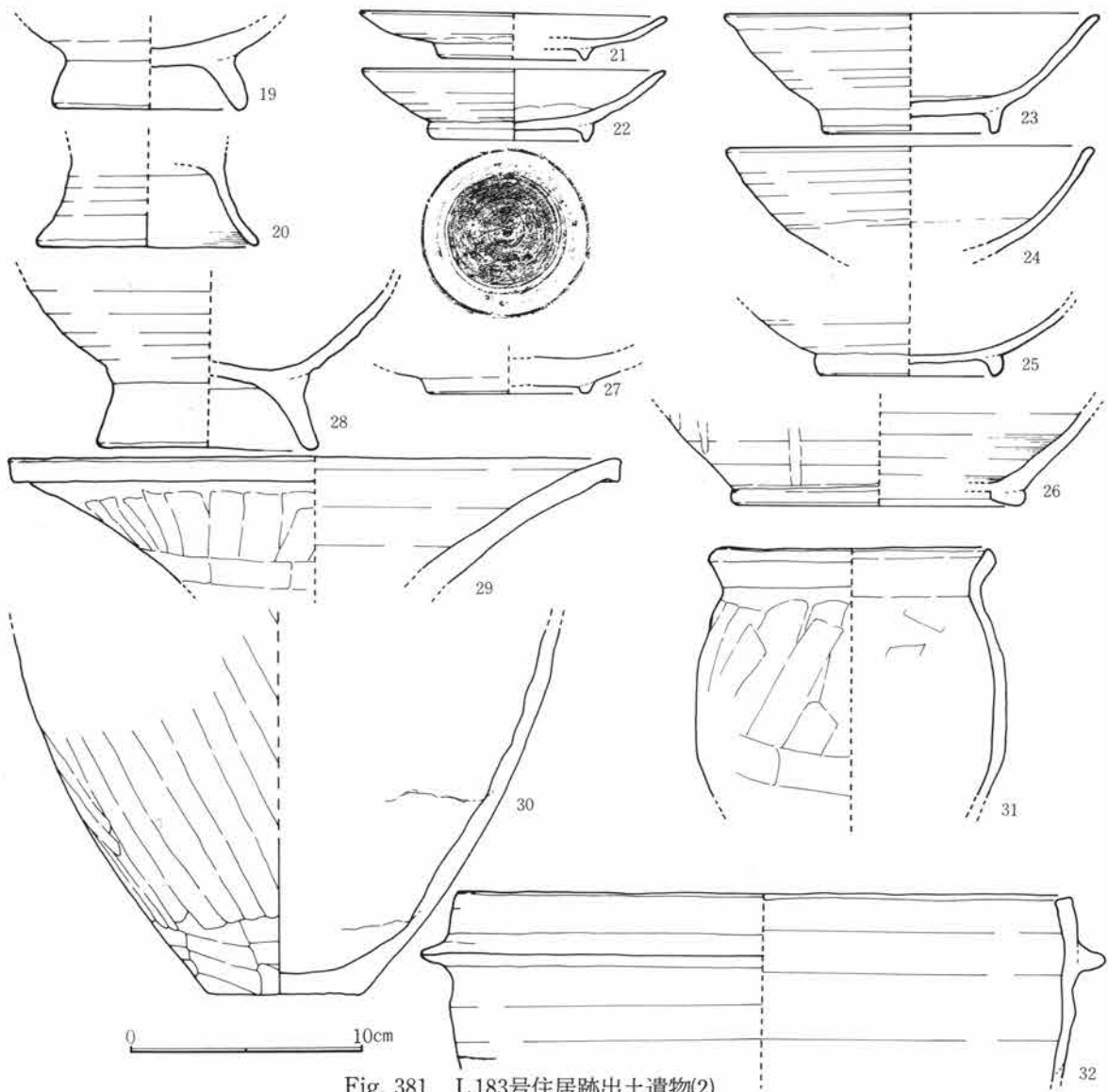


Fig. 381 L183号住居跡出土遺物(2)

L183号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
380-1 119-1	須恵器 杯	1/2	12.6×7.0 ×3.8	床直	体部丸く脹らみ内湾して開く。口唇部丸い。轆轤目顯著。回転糸切り。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや粗・砂混る
380-2 119-2	須恵器 杯	1/4	12.7×7.0 ×4.0	貯蔵穴・ 埋土	腰部くびれ体部内湾して立ち上がる。口唇部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①還元 ②灰 ③やや粗・小石混る
380-3 119-3	須恵器 杯	完形	13.2×7.2 ×4.2	貯蔵穴	体部丸味をもって内湾して開き口唇部丸い。轆轤目顯著。右回転糸切り。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや密・金雲母混
380-4 119-4	須恵器 杯	1/2	11.4×6.2 ×3.8	貯蔵穴	体部直線的に外傾。口縁部僅かに肥厚し口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②明赤褐 ③やや粗・白色粒混
380-5 119-5	須恵器 杯	完形	13.2×5.7 ×4.3	埋土	体部直線的に外傾し口縁部緩く外反。腰部に接合痕顯著。作り雑。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 ②灰白 ③粗
380-6 119-6	須恵器 杯	1/4	12.6×5.6 ×5.0	埋土・ +2	腰部僅かに張り体部直線的に開き深い。口縁部肥厚し緩く外反。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①還元 ②灰 ③やや粗・白色粒混
380-7 119-7	須恵器 碗	完形	12.5×5.7 ×4.7	貯蔵穴	腰部張り体部丸味をもって開く。口縁部緩く外反。口唇部丸い。付高台、低く作り雑。轆轤成形。	①還元 ②灰白 ③やや粗
380-8 119-8	須恵器 碗	小片	10.8×— ×(2.8)	貯蔵穴埋 土	腰部でくびれ体部直線的に開く。口縁部外反気味。轆轤成形。	①還元 ②黒 ③やや密
380-9 119-9	須恵器 碗	破片	13.0×— ×(2.7)	埋土	体部内湾気味に大きく外傾。口縁部やや肥厚し口唇部は丸い。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密・白色粒混

第1節 竪穴住居跡と出土遺物

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
380-10 119-10	須恵器 碗	破片	13.0× ×(3.2)	貯蔵穴・ 埋土	体部内湾気味に開き口縁部僅かに外反。口唇部肥厚して丸い。轆轤目顕著。	①良好 ②灰白 ③やや粗・白色粒混
380-11 119-11	須恵器 碗	完形	12.4×5.4 ×4.9	貯蔵穴	体部内湾気味に開き口縁部緩く外反。付高台、低く断面丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 ②橙 ③やや粗・白色粒混
380-12 119-12	須恵器 碗	完形	12.7×6.4 ×5.2	埋土	体部直線的に開き口縁部僅かに外反。口唇部尖る。付高台肥厚し断面丸い。作り雑。轆轤成形。回転糸切り。	①還元気味 ②灰黄 褐 ③粗
380-13 119-13	須恵器 碗	¾	13.8× ×(5.6)	貯蔵穴	腰部張りをもち体部外反気味に開く。口縁部やや肥厚し口唇部丸い。付高台、端部欠損。轆轤成形。	①還元 ②灰白 ③やや粗・小石混る
380-14 119-14	須恵器 碗?	¾	12.4× ×(4.5)	竈	体部丸味をもち内湾気味。口縁部肥厚し緩く外反。口唇部丸い。轆轤成形。	①還元 ②灰白 ③石英混る
380-15 119-15	須恵器 碗	¾	14.4×7.0 ×6.0	貯蔵穴・ 床下埋土	体部僅かに丸味をもって開く。口縁部緩く外反。付高台、やや高い。作り雑。	①酸化気味 ②浅黄 橙 ③粗
380-16 120-16	須恵器 碗	¾	12.8×6.8 ×4.8	竈・掘形	体部直線的に開く。口唇部丸い。付高台、低く断面矩形。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 ②淡赤橙 ③粗・白色粒混る
380-17 120-17	須恵器 碗	½	14.0×8.0 ×6.6	貯蔵穴・ 埋土	腰部やや張り体部丸味をもって開く。口縁部緩く外傾。口唇部丸い。付高台、やや高くハの字状に開く。轆轤成形。	①還元気味 ②灰白 ③粗・小石混る
380-18 120-18	須恵器 碗	破片	19.2× ×(5.3)	竈	腰部でくびれ体部直線的に開く。口縁部緩く外反。口唇部丸い。轆轤目顕著。	①酸化 ②橙 ③やや粗・白色粒混
381-19 120-19	須恵器 碗	台部破 片	—×8.2 ×(3.4)	+12	高台、やや高く内湾気味に開く。器肉厚い。	①酸化気味 ②鈍い 黄橙 ③やや粗
381-20 120-20	須恵器 碗	台部¾	—×9.4 ×(4.0)	+1	高台、高くハの字状に開く。端部丸い。轆轤目顕著。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや密
381-21 120-21	灰釉陶器 皿	破片	13.0×6.4 ×1.9	埋土	体部中位で僅かに屈し全体的に大きく外傾。口唇部丸く外屈。内外面施釉。付高台、低く断面丸い。	①良好 ②灰白 ③やや密
381-22 120-22	灰釉陶器 皿	¾	13.0×6.7 ×3.0	貯蔵穴・ 埋土	体部内湾して大きく開く。口唇部丸く緩く外屈。付高台、低く丸い三日月高台。底部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③密
381-23 120-23	灰釉陶器 碗	½	16.0×7.4 ×5.0	埋土・ +2	体部内湾気味に大きく開き口縁部僅かに外反する。口唇部丸い。高台直に立ち端部丸い。体部内面・口縁下施釉。	①良好 ②灰白 ③緻密
381-24 120-24	灰釉陶器 碗	破片	15.6× ×(4.5)	竈	体部内湾気味に大きく開き口縁部僅かに外反する。口唇部丸い。内外面施釉。	①良好 ②灰白 ③緻密
381-25 120-25	灰釉陶器 碗	破片	—×7.6 ×(2.7)	+10	器肉薄く見込部僅かに凹む。腰部丸味強い。付高台、低く断面丸い。底部回転篋調整。	①良好 ②灰黄 ③密
381-26 120-26	灰釉陶器 壺	破片	—×12.2 ×(3.7)	竈・貯蔵 穴埋土	付高台、幅広く下端面平坦で僅かに内斜。体部直線的に大きく外傾。	①良好 ②灰白 ③密
381-27 120-27	緑釉陶器 皿	小片	底径7.2	+6	器肉厚く極めて低い高台。釉調暗オリーブ。	①良好 ②灰 ③密
381-28 120-28	須恵器 碗	破片	—×9.4 ×(6.6)	竈埋土・ +10	腰部丸味をもつ。付高台、高くハの字状に開き端部丸い。轆轤目顕著。	①酸化気味 ②褐灰 ③やや粗・白色粒混
381-29 120-29	須恵器 甕	口縁部	26.0× ×(5.2)	+8	口縁部大きく外傾。口唇部直立し断面矩形。外面縦・横位篋無で。	①良好 ②灰 ③白色粒混る
381-30 120-30	土師器 甕	下半半	—×6.4 ×(16.0)	貯蔵穴・ 埋土	底部平底。胴部やや脹らみをもって立ち上がる。外面縦位篋削り。腰部横位篋削り。内面回転篋無で。	①良好 ②鈍い黄 ③やや粗・小石混る
381-31 120-31	須恵器 甕	破片	12.2××(1 0.5)胴径13.0	埋土	胴部張り気味。口縁部短かくハの字状に外屈。胴部縦・横位篋削り。口唇部僅かに内屈。作り雑。	①酸化気味 ②灰褐 ③やや粗・白色粒混
381-32 120-32	羽 釜	口縁部 小片	26.0× (7.5) 口径29.0	貯蔵穴	器肉薄く。胴部張りなく口縁部緩く内湾して内傾。口唇部矩形。鈔厚く大きく突出。胴部・口縁部無で調整。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや粗

L 187号住居跡 (Fig. 382、383、385、386・PL. 29、121)

L区第4台地の調査区中央部に位置し、68~71L20~22の範囲にある。L196号・L203号・L212号住居跡と重複しているが、いずれより新しい時期の所産である。

平面形は南北に長軸をもつ方形を呈する。南北長4.35m・東西長3.55mを測り、東西軸方位はN-94°30'-Eを示す。壁高は約15cm、床面は中央部が僅かに低くなり踏み締めりは弱い。住居内には数個の土坑が検出されているが、埋土の状況から当跡に伴う床下土坑とは考えられず、新しい時期に属する可能性がある。

竈は東壁にあり大きく南に偏って付設される。東壁線上には凝灰岩質の加工材や川原石を埋設し袖部を作

第2章 遺構と遺物

る。燃焼部は狭長に掘り込まれ、長い傾斜をもって立ち上がり短い煙道部に至る。煙道部は燃焼部の軸線に対し若干北側へ折れる。天井が残り、先端に煙出し孔が開く。袖材間内法約40cm、燃焼部奥行き1.1m、煙道部長さ45cm、煙出し孔径18cmを測る。

出土遺物は竈内及び、床面に散在して検出され、須恵器杯・羽釜・土釜・鉄器などがある。

L 203号住居跡 (Fig. 382、387・PL. 30、121)

L区第4台地の調査区中央部に位置し、68・69 L18～20の範囲にある。L187号・L196号・L212号・L222号住居跡と重複しており、L187号住居跡より旧く、他よりは新しい時期の所産である。北西部はL187号住居跡との重複で消失している。

平面形は南北軸が若干長い方形を呈する。南北長3.55m・東西長3.15mを測り、東西軸方位はN-97°-Eを示す。貯蔵穴は南東部に検出された方形土坑が考えられる。40×45cm・深さ35cmを測り、埋土上面には灰層が堆積する。南西部の土坑は埋土上層が強く締まり床下土坑と思われる。また北壁線上の方形土坑はL212号住居跡に属する遺構である。

竈は東壁にあり大きく南に偏って付設される。燃焼部は楕円形に小さく掘り込まれ、左袖部は掘形を残し住居内に突出させる。右袖部には袖材を埋設したと思われる小穴が検出された。袖部内法35cm、燃焼部奥行き約50cmを測る。

出土遺物は散在して検出され、灰釉陶器など少量である。

L 212号住居跡 (Fig. 382、384、388、389・PL. 122)

L区第4台地の調査区中央部に位置し、68・69 L20～22の範囲にある。L187号・L203号・L211号・L222号住居跡と重複しており、L187号・L203号住居跡より旧く、L211号・L222号住居跡より新しい時期の所産である。西半はL187号住居跡と、また南壁線はL203号住居跡との重複によって消失している。

平面形は略方形を呈すると思われる。南北は約4m・東西は1.8mの範囲まで確認した。東西軸方位はおおよそN-90°-Eを示す。壁高は約10cm、床面は平坦をなすが踏み締まりは弱い。南東部には方形の貯蔵穴が設けられ径1×0.7m・深さ43cmの楕円形を呈し、埋土下に黒灰が集中する。

竈は東壁に付設され、燃焼部は略三角に掘り込まれる。袖材などは検出されない。火床面は確認されず、灰層の厚い堆積がみられた。燃焼部幅55cm・奥行き65cmを測る。

出土遺物は竈前面に散在して検出され、灰釉陶器などがある。

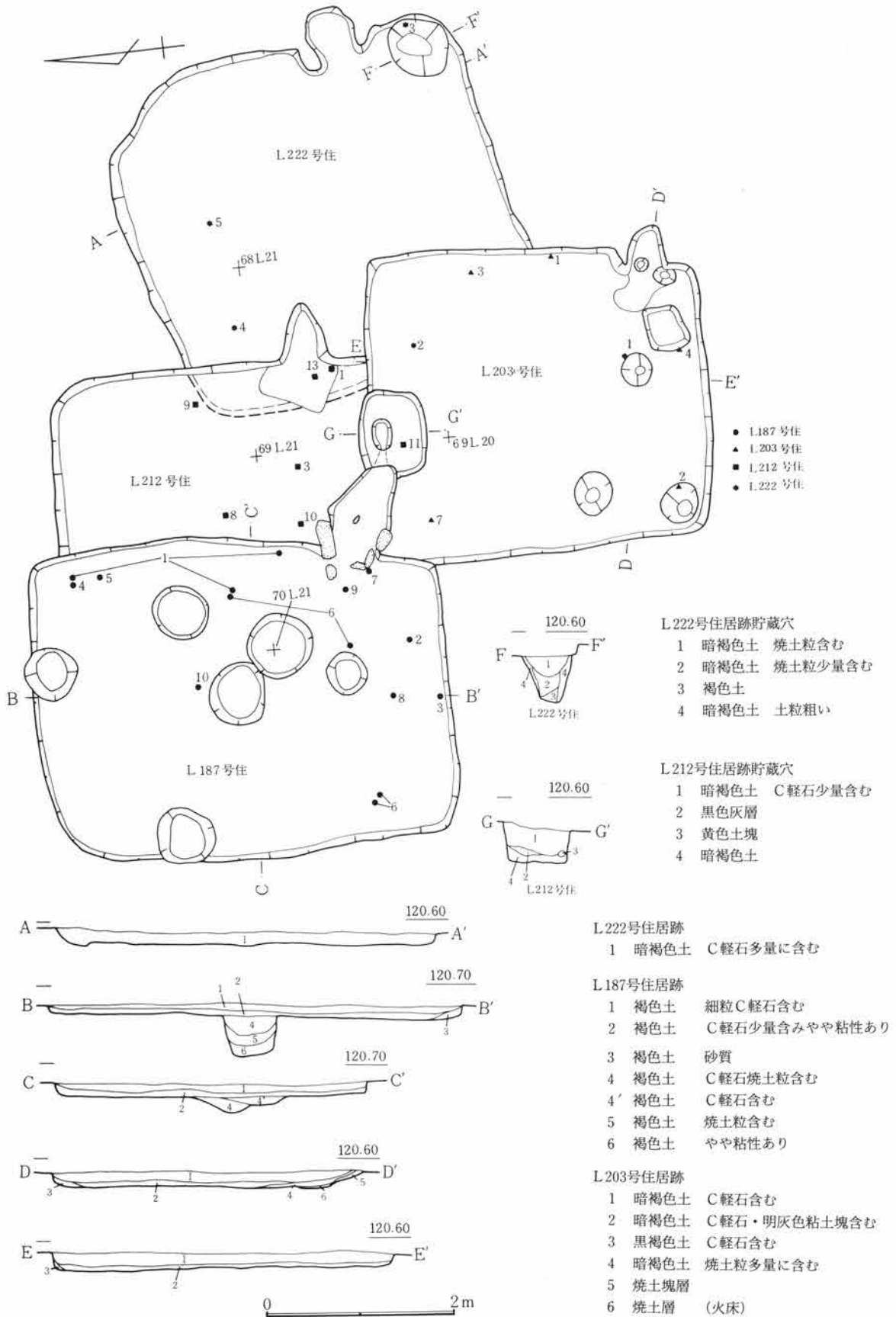
L 222号住居跡 (Fig. 382、390・PL. 30、122)

L区第4台地の調査区中央部に位置し、66～68 L19～21の範囲にある。L203号・L212号住居跡と重複しているが両者より古い時期の所産である。

平面形は各隅部に丸みをもつ隅丸方形と思われる。南北長約3.9m、東西は東壁より約3.7mの範囲まで確認した。東西軸方位はおおよそN-77°-Eを示す。壁高は約20cm、床面は平坦をなすが踏み締まりは弱い。貯蔵穴は南東隅にあり、径60×70cm・深さ46cmの楕円形を呈し、上層には焼土粒混じりの埋土が堆積する。

竈は東壁のやや南に偏って付設される。袖部は掘形を残し住居内に突出する。燃焼部は小さく弧状に掘り込み楕円形に形作る。袖部長さ35cm、袖間内法40cm、燃焼部奥行きは袖先端部より65cmを測る。

出土遺物は散在して検出され、土師器杯類の他滑石製白玉がある。



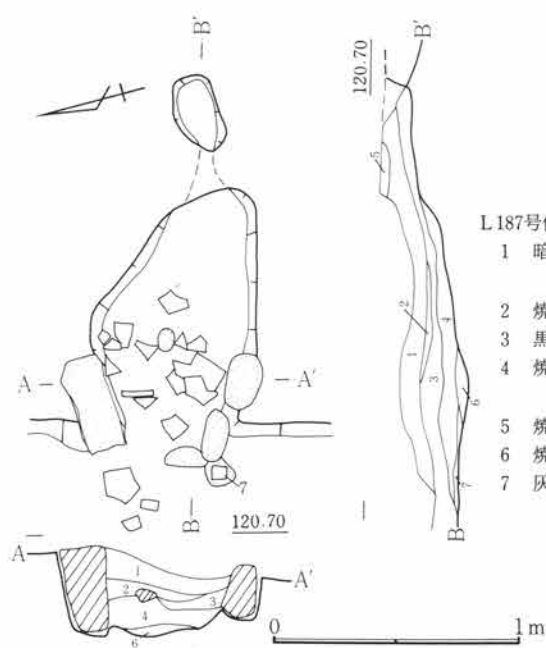


Fig. 383 L187号住居竈

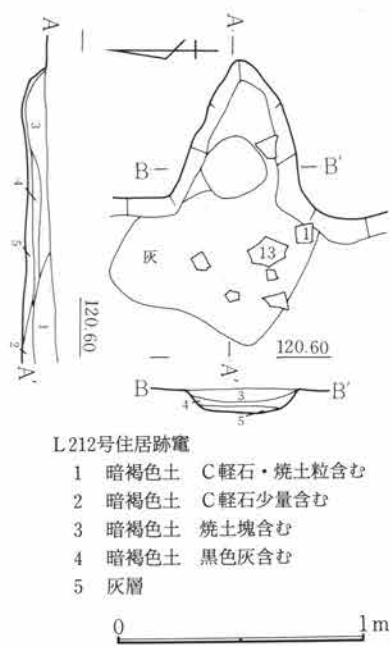


Fig. 384 L212号住居跡竈

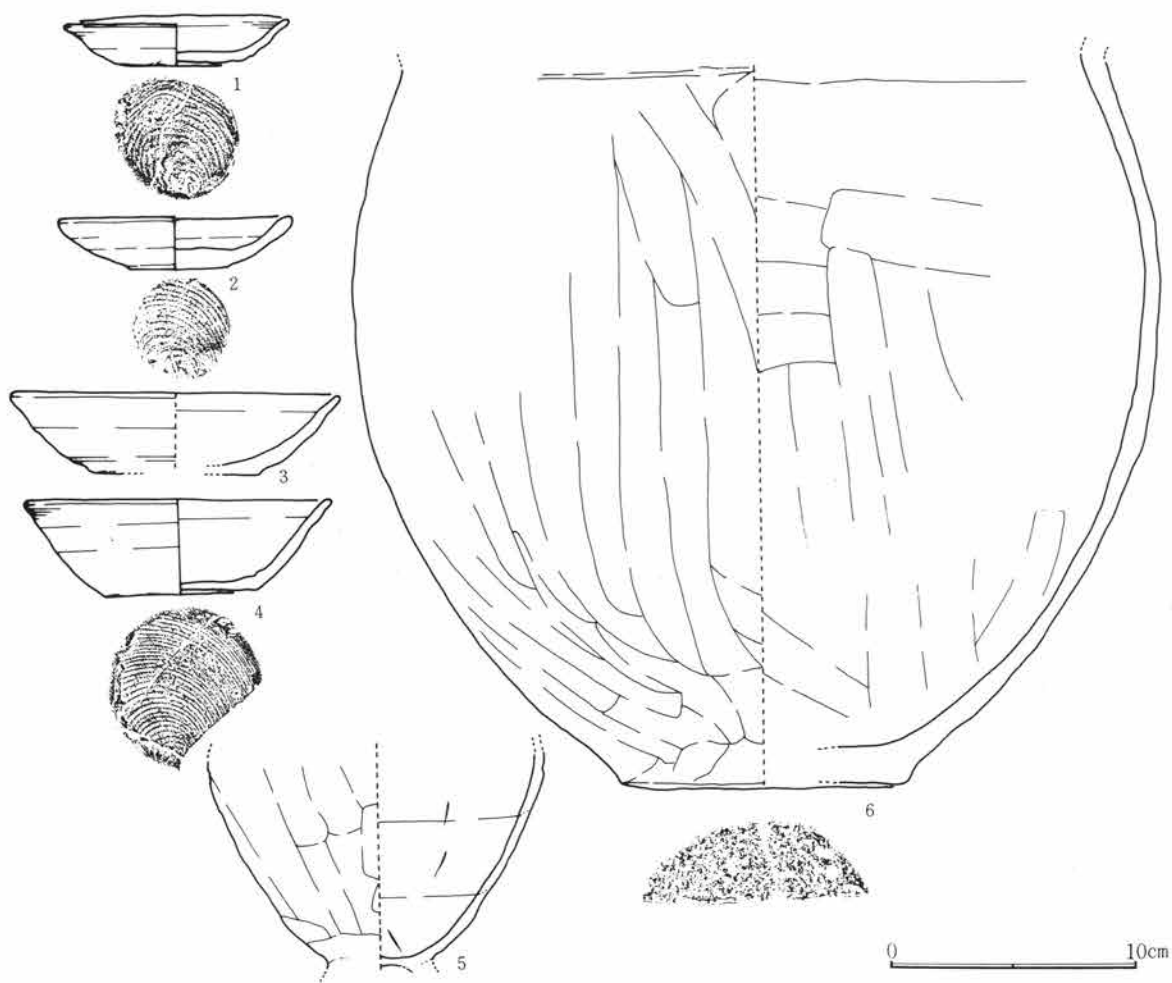


Fig. 385 L187号住居跡出土遺物(1)

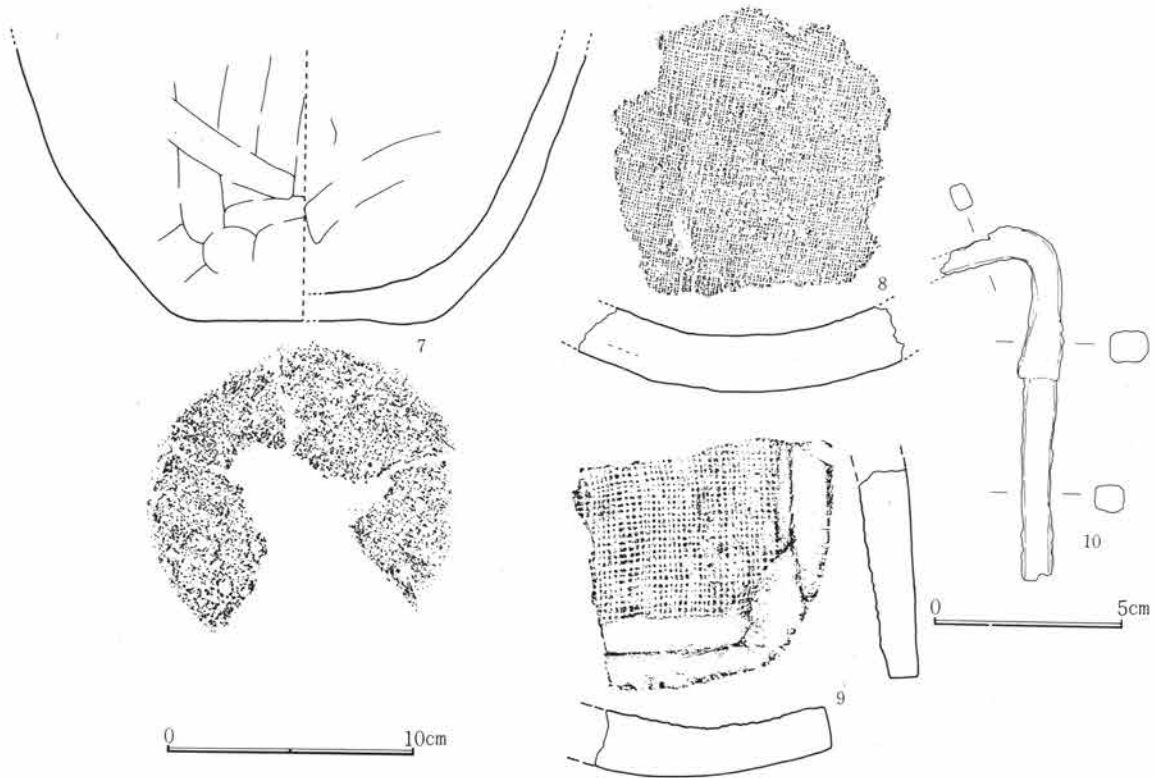


Fig. 386 L187号住居跡出土遺物(2)

L187号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
385-1 121-1	須恵器 杯	完形	9.0×4.7 ×2.0	+1~6	器肉薄い。体部丸味をもち口縁部直線的に外傾する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
385-2 121-2	須恵器 杯	完形	9.3×3.9 ×2.1	+27	器肉厚い。体部内湾気味。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②橙 ③やや密
385-3 121-3	須恵器 杯	1/4	13.2×6.8 ×(3.2)	埋土	体部内湾気味に大きく開き口縁部直線的に外傾する。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②鈍い橙 ③やや密
385-4 121-4	須恵器 杯	1/4	12.4×6.2 ×3.8	+8	体部丸味をもち口縁部緩く外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや密・小石混る
385-5 121-5	土師器 台付甕	破片	-×- ×(8.4)	+3	胴部下位窄まる。台部欠損。胴部縦位篋削り。腰部周辺横撫で。内面篋撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③密
385-6 121-6	土師器 甕	1/4口縁部欠損	-×11.6 ×(29.0)	埋土	平底。胴部丸く張る。胴部縦・斜位篋削り。内面篋撫で。砂底。	①良好 ②橙 ③やや密・赤色粒混
386-7 121-7	土師器 甕	破片	-×10.3 ×(10.6)	竈・ 0~+2	器肉厚く体部やや張りをもつ。底部砂底。外面不定方向篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗・小石混る
386-8 121-8	瓦 平瓦	小片	厚2.1	+7	凹面布目。凸面撫で調整。	①酸化 ②橙 ③粗
386-9 121-9	瓦 平瓦	小片	厚1.8	+12	凹面布目。凸面篋撫で。側縁篋調整。	①酸化気味 ②橙 ③やや密
386-10 121-10	鉄器 不明		長(9.5) 幅0.7~0.6	埋土	棘篋被有茎鉄か。	

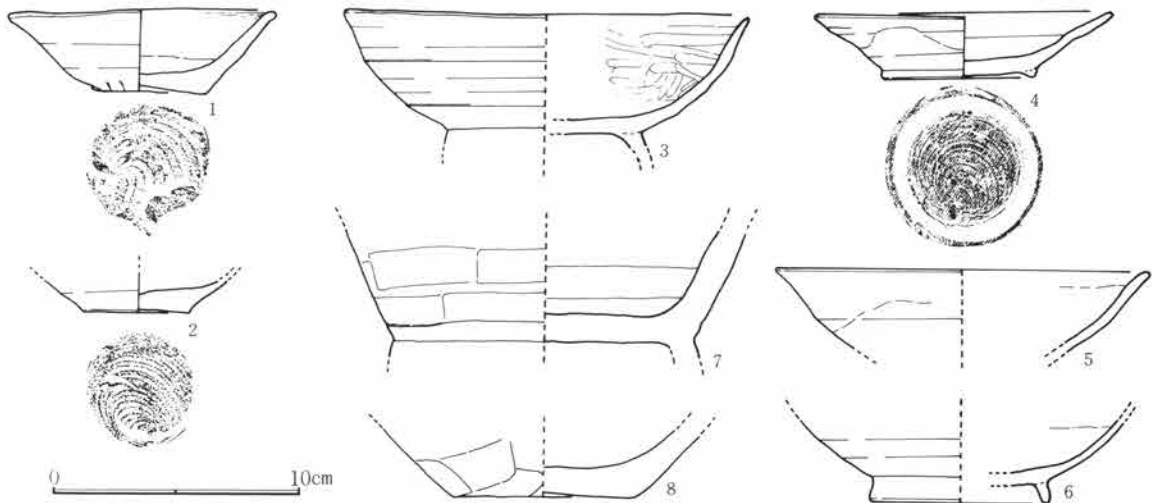


Fig. 387 L203号住居跡出土遺物

L203号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
387-1 121-1	須恵器 杯	完形	10.7×4.0 ×3.4	埋土	体部直線的に開く。口縁部僅かに外反。口唇部丸い。轆轤成形。右回転系切り。	①酸化気味 ②灰白 ③やや粗・細砂混る
387-2 121-2	須恵器 杯	底部	—×4.3 ×(1.3)	Pit	底部肥厚。轆轤成形。右回転系切り。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや粗
387-3 121-3	内黒土器 椀	破片	16.2×— ×(5.2)	+6	体部丸く内湾し大きく開き口縁部緩く外反。口唇部尖り気味。付高台欠損。内面黒色処理・横篋磨き。轆轤成形。	①酸化気味 ②灰褐 ③やや密
387-4 121-4	灰釉陶器 段皿		12.0×6.1 ×(2.6)	+3	体部内面中位僅かに段をなし底部大きく開く。低い高台。底部系切り痕。見込部摩滅著しい。転用碗か？	①良好 ②灰白 ③密
387-5 121-5	灰釉陶器 椀	¼底部 欠損	15.0×— ×(3.2)	埋土	体部中位で椀をなし大きく開く。口縁部緩く外反。口唇部丸い。内外面施釉。	①良好 ②灰白 ③密
387-6 121-6	灰釉陶器 椀	底部 ¼	—×7.2 ×(3.2)	埋土	器肉薄い。体部丸味をもって大きく開く。付高台、端部丸い。	①良好 ②灰白 ③密
387-7 121-7	須恵器 甕	底部	—×— ×(5.0)	+15	台部欠損。胴部直線的に開く。胴部外面横位篋削り後篋無で。見込部煤付着。	①良好 ②灰黄 ③やや粗
387-8 121-8	土師器 甕	底部	—×7.0 ×(2.7)	埋土	底部篋削り。腰部不定方向篋削り。器肉厚い。	①良好 ②鈍い褐 ③やや粗

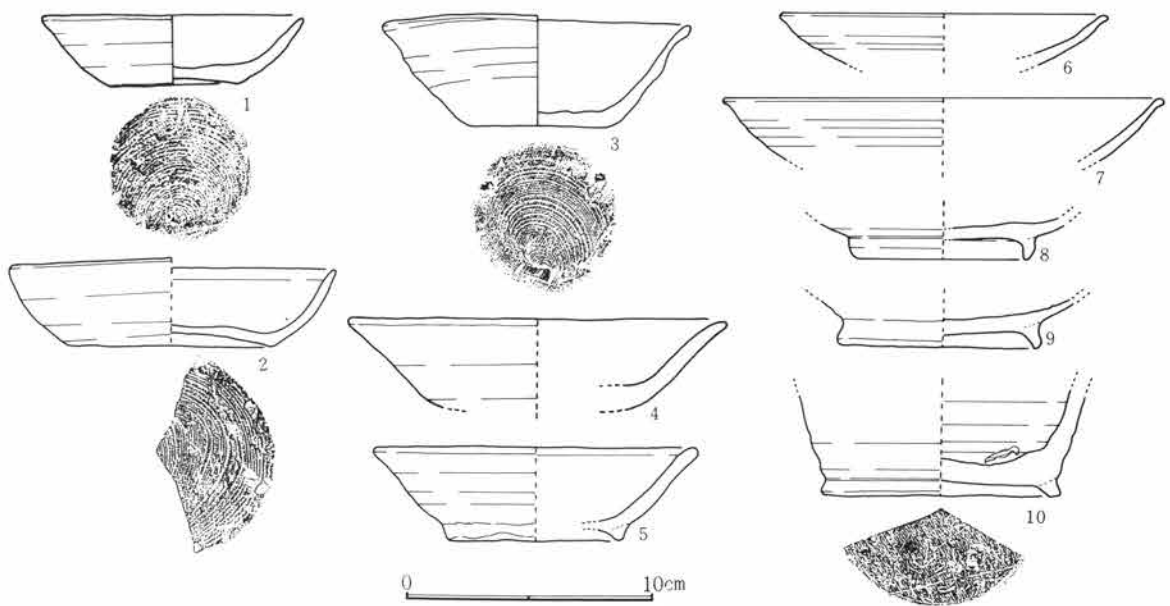


Fig. 388 L212号住居跡出土遺物(1)

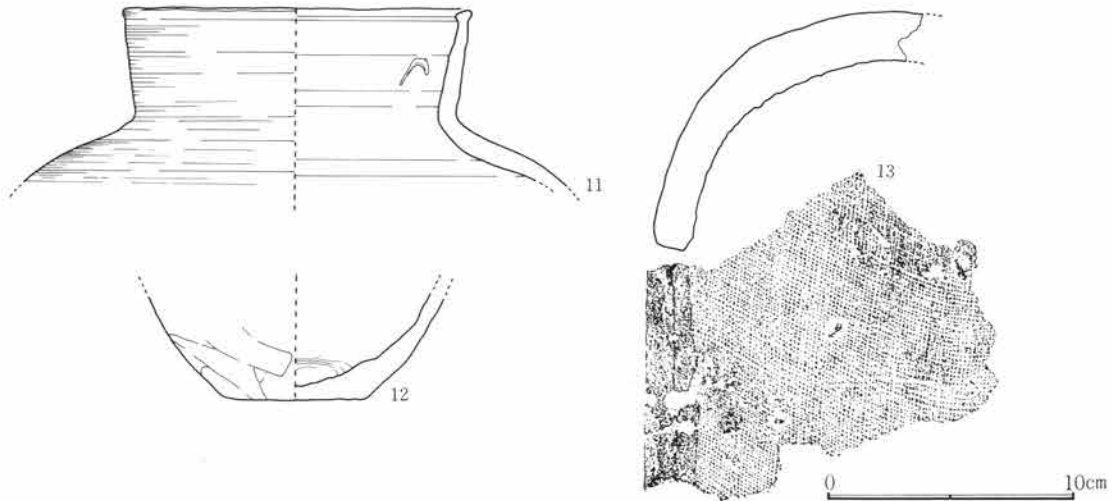


Fig. 389 L212号住居跡出土遺物(2)

L212号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
388-1 122-1	須恵器 杯	ほぼ完形	10.4×5.3 ×2.8	埋土	体部内湾して開く。口唇部細る。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味 ②灰白 ③やや粗・白色粒混
388-2 122-2	須恵器 杯	欠	13.0×7.8 ×3.5	埋土	体部緩く丸味をもち口唇部丸い。轆轤成形。回転糸切り。黑色鉱物粒が発泡し内面に付着。	①良好 ②灰 ③密
388-3 122-3	須恵器 杯	ほぼ完形	12.3×5.2 ×4.5	+3	腰部丸く体部中位でやや張り口縁部外反して開く。口唇部肥厚し丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②淡黄 ③やや密・砂混る
388-4 122-4	須恵器 杯	小片	15.2×— ×(3.5)	埋土	底部やや肥厚。腰部丸味をもち体部から口縁部外反して開く。内面煤状黒色膜付着。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密
388-5 122-5	須恵器 碗	欠	12.9×6.9 ×3.7	埋土	体部浅く下半やや丸味をもち上半外反して開く。口縁部器肉厚く口唇部丸い。付高台、低く作り雑。轆轤成形。	①良好 ②灰黄褐 ③やや密
388-6 122-6	灰釉陶器 碗	口縁部破片	13.1×— ×(2.0)	埋土	体部緩く丸味をもち大きく開く。口縁部僅かに外反し口唇部やや尖る。体部下位回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③密
388-7 122-7	灰釉陶器 碗	口縁部破片	17.6×— ×(2.5)	埋土	体部緩く丸味をもち大きく開く。口縁部緩く外反し口唇部円く外屈。器肉薄い。体部下位回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③密
388-8 122-8	灰釉陶器 碗	底部欠	—×6.9 ×(1.7)	埋土	高台、内湾して立つ。端部丸い。高台部撫で。	①良好 ②灰白 ③密
388-9 122-9	灰釉陶器 碗	底部	—×8.1 ×(2.0)	+2	体部緩く丸味をもつ。高台、ハの字状に開き断面矩形。底部に糸切り痕。見込部に重ね焼き痕。	①良好 ②灰白 ③密
388-10 122-10	須恵器 甕	底部欠	—×9.5 ×(4.3)	+12	胴部直線的に外傾。付高台、低くハの字状に開く。断面矩形。内面に削り落とされた胎土付着。底部に篋描き。	①良好 ②灰 ③密・白色粒混る
389-11 122-11	須恵器 甕	口縁部欠	13.8×— ×(7.0)	貯蔵穴	肩部強く張る。口縁部直線的に緩く外傾。口唇部内傾し幅広い。口縁部・肩部掻き目。	①良好 ②灰 ③密・白色粒混る
389-12 122-12	土師器 甕	底部	—×5.9 ×(4.3)	埋土	胴部やや丸味をもつ。胴部下位斜位篋削り。内面撫で。	①良好 ②灰黄褐 ③やや密・砂混る
389-13 122-13	瓦 丸瓦		厚2.1	電	凹面布目。凸面撫で。側縁篋調整。	①良好 ②褐灰 ③やや粗

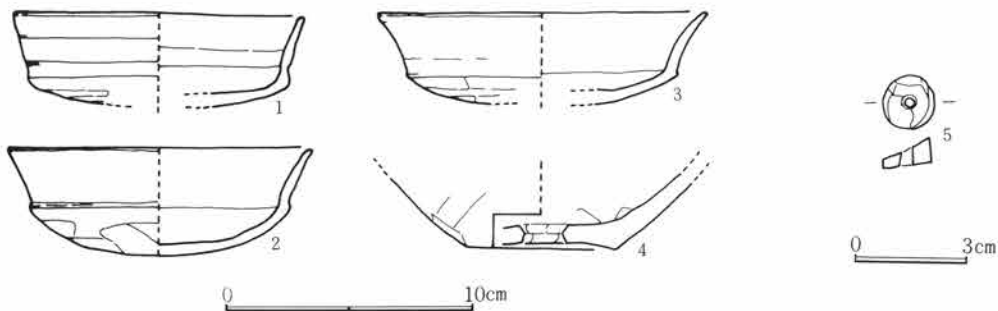


Fig. 390 L222号住居跡出土遺物

L 222号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
390-1 122-1	土師器 杯	小片	11.6×— ×(3.6)	埋土	底部扁平。受け部で丸味ある稜をなし口縁部緩く外傾。沈線様の2条の線。口唇部丸い。口縁部横撫で。底部篋削。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
390-2 122-2	土師器 杯	片	12.1×— ×4.2	埋土・ +10	底部やや扁平。受け部で屈し稜をなす。口縁部外反して開く。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
390-3 122-3	土師器 杯	小片	13.2×— ×(3.5)	貯蔵穴	器肉薄い。底部浅く受け部にやや強い稜をなし口縁部強い外反。底部篋削り後撫で。内面黒色処理。見込部磨痕か。	①良好 ②鈍い橙 ③密・細砂混る
390-4 122-4	土師器 甔	底部	—×6.0 ×(3.0)	埋土	単孔。底部篋調整。体部下位斜位篋削り。外面一部吸炭。内面不定方向篋撫で。作り雑。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗
390-5 122-5	石製品 白玉	完形	径1.3厚0.8 孔径0.4	床直	片面成形粗雑。	滑石

L 188号住居跡 (Fig. 391~393・PL. 30、122、123)

L区第4台地の調査区中央部やや北寄りに位置し、68・69L29~31の範囲にある。L170号住居跡と重複しているがこれより古い時期の所産である。ほとんどL170号住居跡の範囲内にあるが掘形が深いため遺存したものである。北壁から東壁の一部は検出できなかった。

平面形は東西・南北長とも同規模の方形を呈する。東西長3.9m・南北長3.85mを測り、東西軸方位はN-84°-Eを示す。壁高はL170号住居跡と重複しない東壁部分で約30cmを測る。壁下の溝は北壁の一部から西壁にかけてと東壁の一部で検出した。幅10cm・深さ3~4cmを測る。Pitは多く見られるが、主柱穴はP₁~P₄である。P₁は上径40cm・下径16cm・深さ55cm、P₂は上径35cm・下径15cm・深さ60cm、P₃は上径28cm・下径

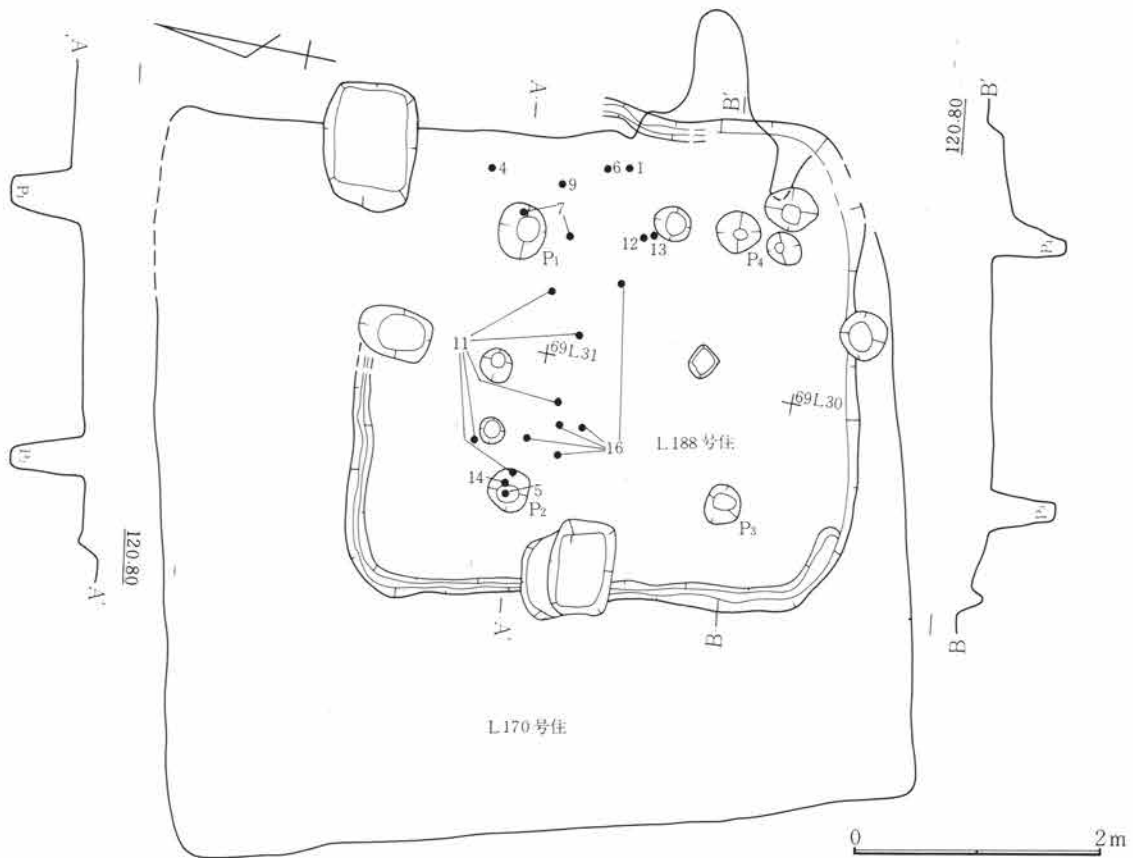


Fig. 391 L 188号住居跡

第1節 竪穴住居跡と出土遺物

12cm・深さ54cm、 P_4 は上径35cm・下径13cm・深さ46cmを測る。各柱間は $P_1 \cdot P_2$ と $P_3 \cdot P_4$ は2.1m、 $P_2 \cdot P_3$ と $P_1 \cdot P_4$ は1.7mである。貯蔵穴・竈などは検出されなかった。

出土遺物は比較的多く散在して検出された。土師器杯・甕、須恵器杯・甕などがある。

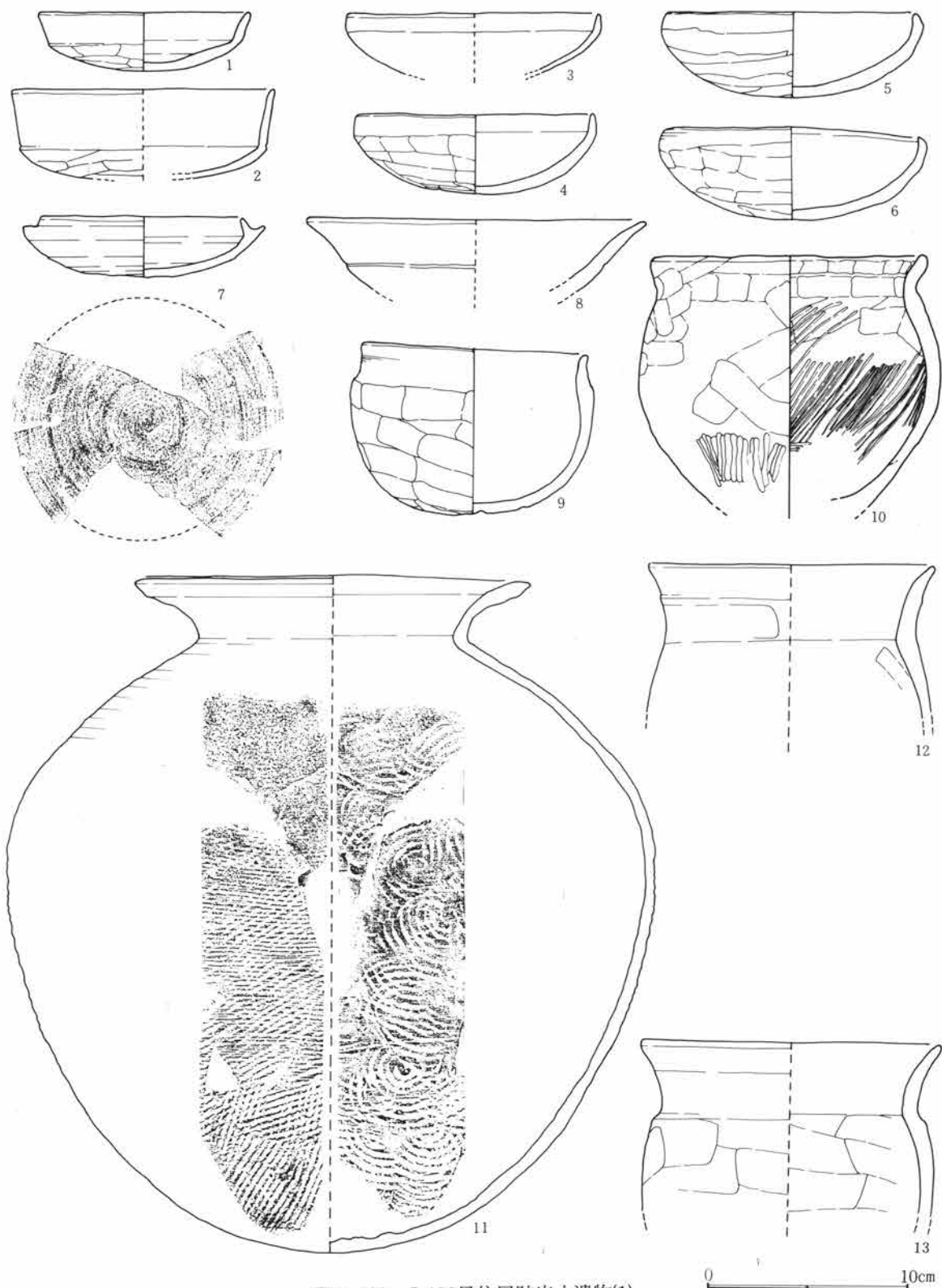


Fig. 392 L188号住居跡出土遺物(1)

第2章 遺構と遺物

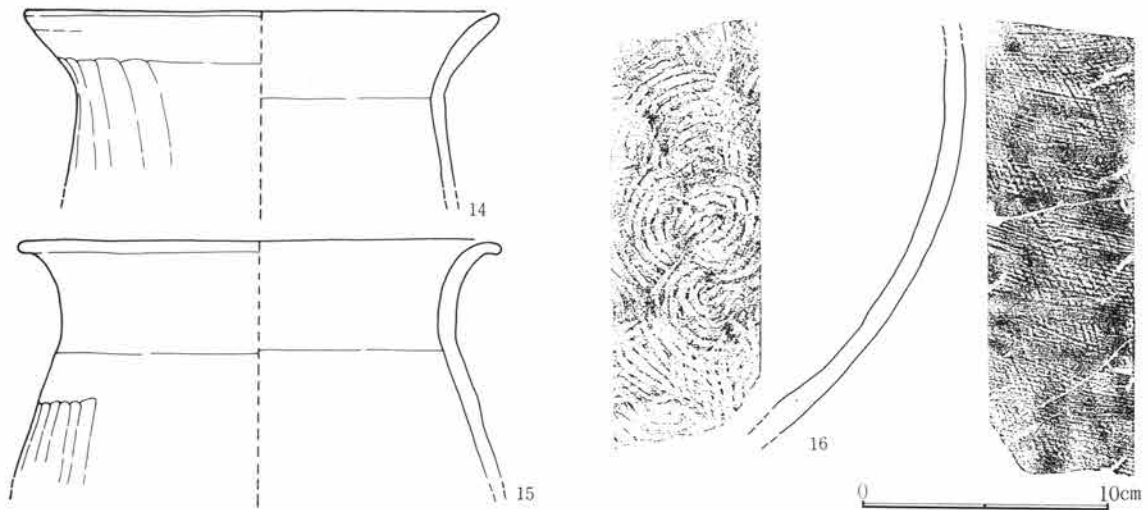


Fig. 393 L188号住居跡出土遺物(2)

L188号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
392-1 122-1	土師器 杯	完形	10.4×— ×3.0	+3	浅い丸底から口縁部は受け部で屈して直線的に外傾して開く。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・砂混る
392-2 122-2	土師器 杯	破片	12.8×— ×(4.3)	床下	器肉薄く底部浅く偏平。受け部小さいが稜鋭い。口縁部極めて高く外反気味に直立。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
392-3 122-3	土師器 杯	小片	12.4×— ×(2.9)	埋土	器肉薄い。底部丸底か?口縁部内湾気味に直立。口唇部尖る。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
392-4 122-4	土師器 杯	¾	11.9×— ×3.8	床直	器肉厚い。底部やや深く丸く不安定。口縁部短く内湾気味に直立。口縁部横撫で。底部不定方向篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・砂混る
392-5 122-5	土師器 杯	完形	12.3×— ×4.2	Pit	底部丸く深い。口縁部短く強めに内屈。口唇部細り丸い。口縁部撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
392-6 122-6	土師器 杯	完形	12.4×— ×4.5	埋土	底部丸く深め。口縁部短く強く内屈し口唇部尖る。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密・粗砂混る
392-7 123-7	須恵器 杯	¾	10.0×— ×3.0	床下・埋 土	底部偏平な丸底。口縁部短く内傾。受け部短く外傾。端部丸い。轆轤成形。底部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
392-8 123-8	土師器 高杯	破片	16.6×— ×(3.5)	床下・埋 土	腰部丸く張り小さな段をなし口縁部外反。口縁部横撫で。杯部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
392-9 123-9	土師器 小形甕	完形	11.1×— ×8.4	埋土	胴部丸く張り球形。肩部に段をなし口縁部緩く外反して直立気味。口縁部横撫で。胴部横位篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③細砂混る
392-10 123-10	土師器 甕	底部欠 損	13.5×—×(12.7))最大径14.8	床下	最大径胴部上位で丸く張る。口縁部短く外傾し口唇部丸く直立。胴部内外面篋撫で後磨き。	①良好 ②明赤褐 ③やや粗・砂混る
392-11 123-11	須恵器 甕	¾	19.4×— ×(33.1) 胴部径31.7	貯蔵穴・ 埋土・ 0~+6	底部丸く不安定。胴部丸く張り球形。口縁部強く外反し上半肥厚。口唇部矩形。端部尖る。肩部外面掻き目。胴部平行叩き目。内面青海波状当て目。	①良好 ②灰 ③やや密
392-12 123-12	土師器 甕	口縁部	14.1×— ×(7.5)	埋土	肩部張りなし。口縁部直線的に緩く外傾し低い稜をなし上半はさらに外傾。口縁部横撫で。胴部篋削り。内面撫で。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗
392-13 123-13	土師器 甕	口縁部 小片	14.6×—×(8.5)頸部径13.4	埋土	肩部に明瞭な段。口縁部短く内傾し上半は僅かに外反。口縁部横撫で。胴部横位篋削り。内面撫で。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや密
393-14 123-14	土師器 甕	口縁部	18.8×— ×(7.0)	Pit	胴部張りなく長胴を呈すか。口縁部やや肥厚し外反して開き口唇部丸い。口縁部横撫で。胴部縦位篋削り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗
393-15 123-15	土師器 甕	口縁部	19.2×— ×(9.5)	埋土	胴部張り少ない。口縁部外反し上半さらに強く外反。口縁部横撫で。胴部縦位篋削り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗
393-16 123-16	須恵器 甕	胴部破 片	厚0.9	埋土・ 0~+2	体部外面平行叩き目。内面青海波状当て目。	①良好 ②灰白 ③やや密

L189号住居跡 (Fig. 394、395、397、398・PL. 30、123、124)

L区第4台地の調査区南西に位置し、75~78L7~10の範囲にある。L110号・L121号・L178号・L200号住居跡と重複しており、前三者より旧く、L200号住居跡より新しい時期の所産である。重複が著しく、ま

たL200号住居跡と部分的に壁線が重なるためか明確な範囲を検出できなかった。確認できた範囲は竈を含めた東壁沿いの僅かな部分である。

平面形はほぼ方形を呈すると思われるが詳細は不明である。南北長は約5.4m、東西は東壁より3mの範囲まで確認した。東西軸方位はおおよそN-90°-Eを示す。壁高は約45cm、床面はほぼ平坦をなすが踏み締まりは軟弱である。貯蔵穴は南東隅にあり、径55cm・深さ20cmの円形を呈する。北東部に2基の土坑が検出されたが性格は不明である。

竈は東壁にあり大きく南に偏って付設される。燃烧部は小さく略三角形に掘り込まれ、床面より僅かに窪む。東壁線上に袖材埋設痕と思われる小穴がある。竈軸線は東壁線直交軸よりおよそ17°南へ傾く。袖材埋設痕内法60cm、燃烧部奥行きは燃烧部窪みより約1.1mを測る。燃烧部規模からすれば住居内に突出した形態をもっていた可能性がある。

出土遺物は竈前面に散在して検出され土師器杯類・甕などの他、竈内より鉄製鋤先が出土している。

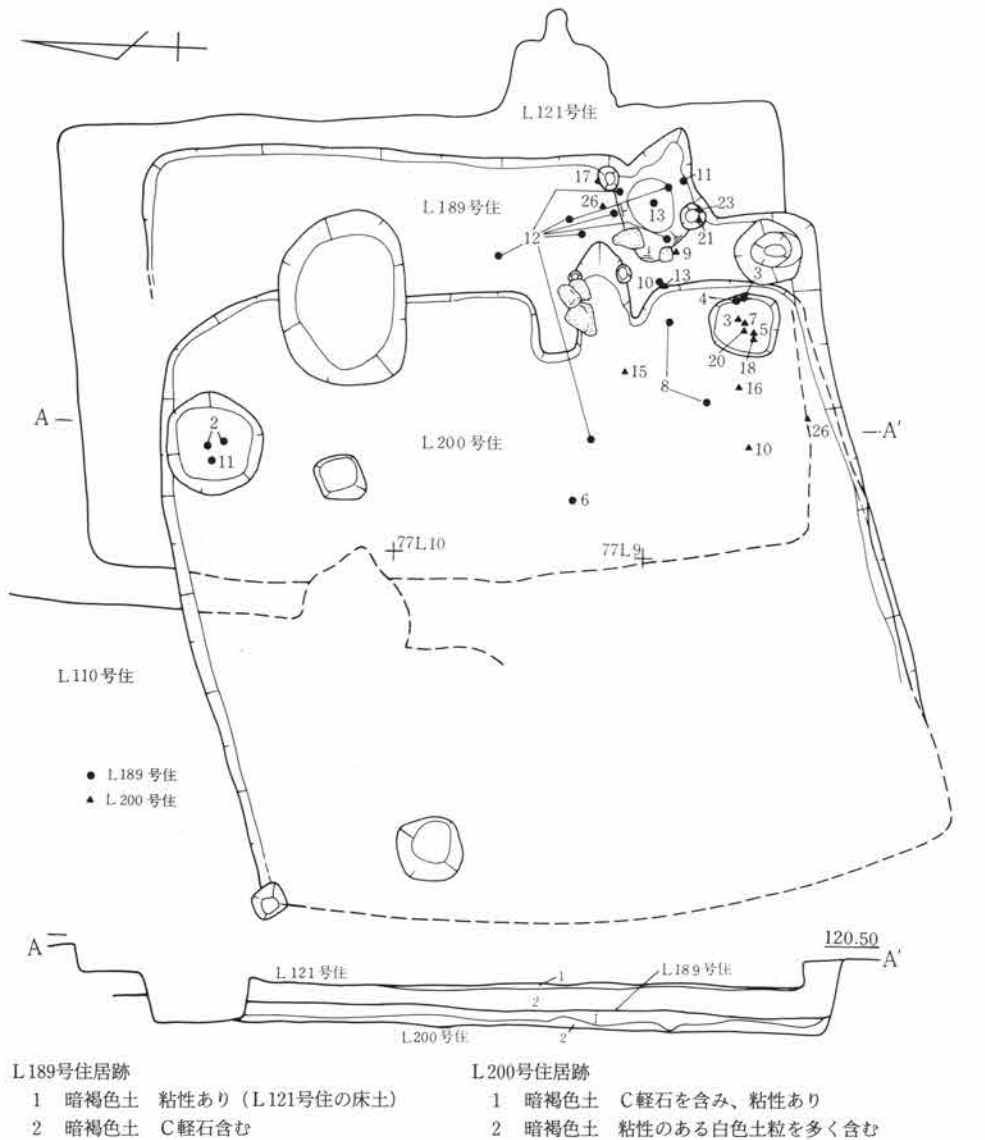


Fig. 394 L189号・L200号住居跡

第2章 遺構と遺物

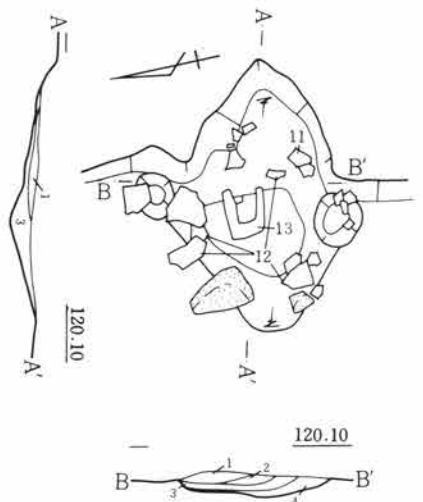
L 200号住居跡 (Fig. 394、396、399、400・PL. 30、124、125)

L区第4台地の調査区南西に位置し、75~78L 7~10の範囲にある。L110号・L121号・L144号・L178号・L189号住居跡と重複しており、いずれより古い時期の所産である。西壁線はやや不明確である。

平面形は南北軸がやや長い方形を呈すると考えられる。南北長5.5m、東西は東壁より約5mの範囲まで確認した。東西軸方位はN-77°-Eを示す。壁高は良好な部分で約55cmを測る。床面は平坦をなすが、踏み締まりはやや弱い。住居跡南側の埋土には一部白色粘土層が認められたが、L189号住居跡の床土と思われる。貯蔵穴は南東隅にあり、径50cm・深さ70cmの略方形を呈する。柱穴と考えられる Pit はP₁・P₂の2箇所のみである。P₁は径35cm・深さ40cm、P₂は径50cm・深さ45cmを測る。P₁・P₂間は3mである。

竈は東壁にあり南に偏って付設される。L189号住居跡の床面下にかろうじて検出され遺存状態は不良である。袖部は幅広に掘形を残し、住居内に突出する形態であるが、右袖部の遺存は悪い。左袖部長さ45cmを測る。燃烧部の掘り込みは小さく、先端部の近く左右には小穴が穿たれる。袖部内法45cm、袖先端部からの燃烧部奥行き90cmを測る。

出土遺物は土師器碗類が多く、貯蔵穴内から集中して出土している。

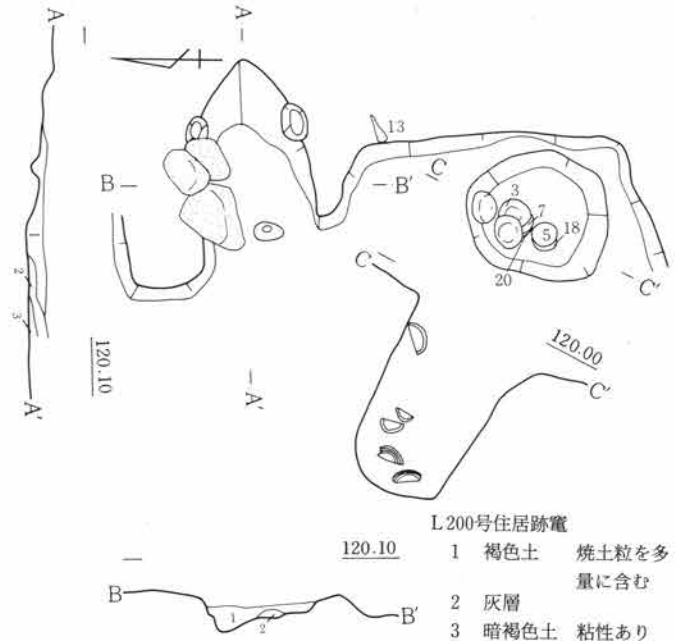


L189号住居跡竈

- 1 焼土・灰混合層
- 2 白色土 砂質
- 3 灰層
- 4 暗褐色土 焼土粒含む

0 1m

Fig. 395 L189号住居跡竈



L200号住居跡竈

- 1 褐色土 焼土粒を多量に含む
- 2 灰層
- 3 暗褐色土 粘性あり

0 1m

Fig. 396 L200号住居跡竈

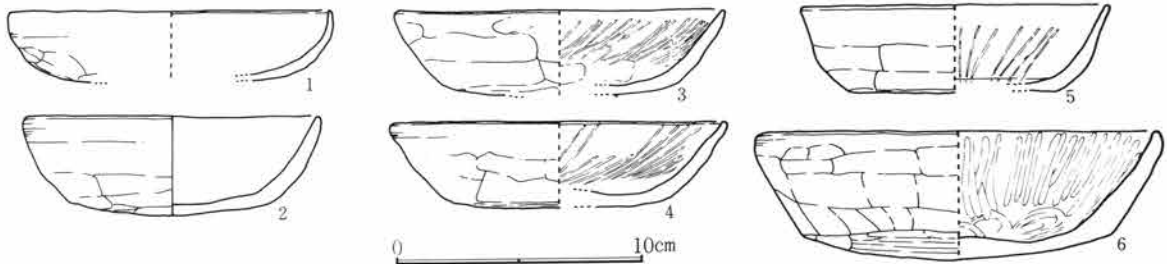


Fig. 397 L189号住居跡出土遺物(1)

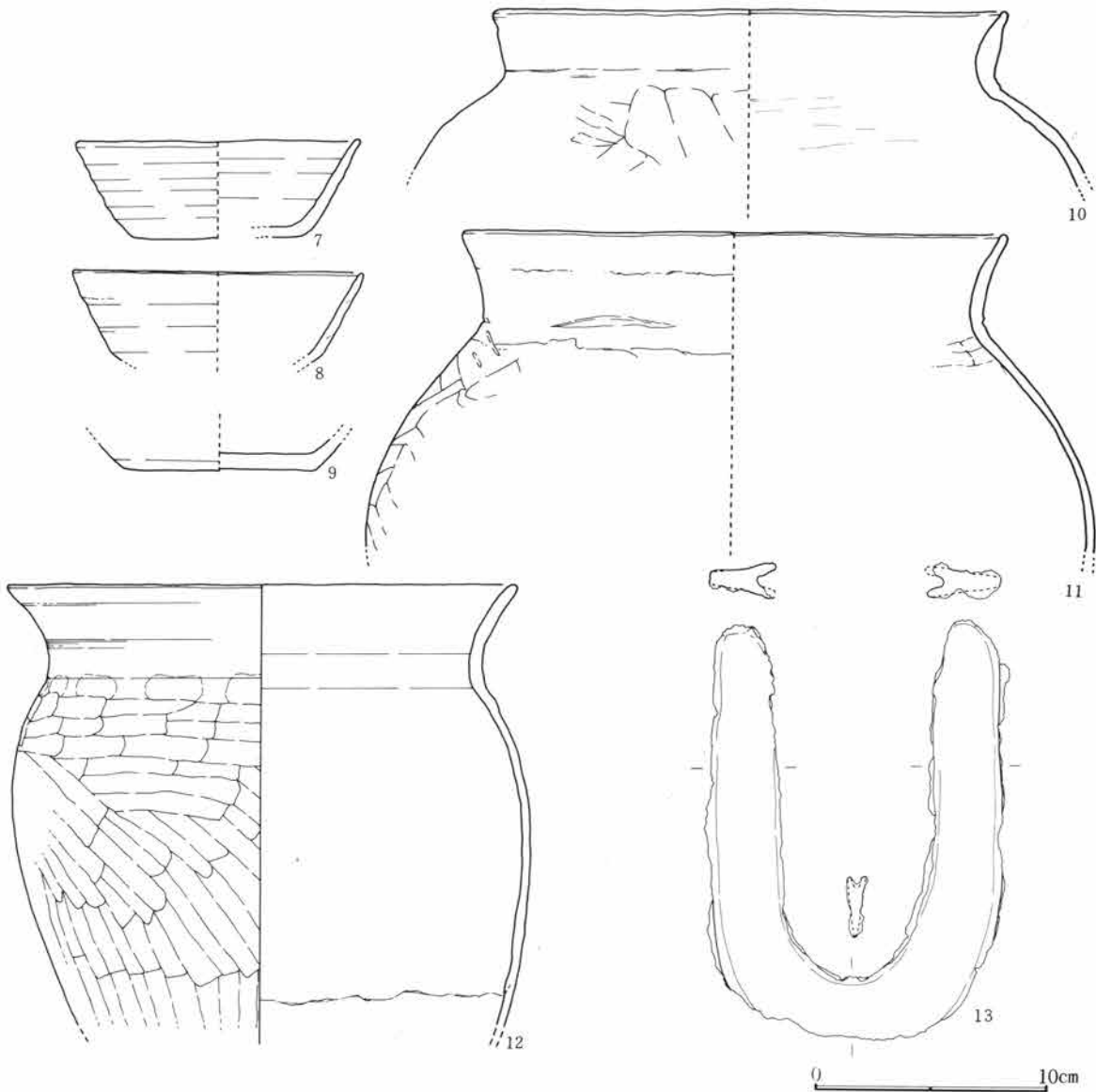


Fig. 398 L189号住居跡出土遺物(2)

L189号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
397-1 123-1	土師器 杯	1/4	12.8×— ×(2.8)	埋土	底部浅く丸い。口縁部内湾し口唇部丸い。体部篋削り。口縁部横撫で。	①良好 ②鈍い褐 ③やや密・砂混る
397-2 123-2	土師器 杯	1/2	12.0×8.0 ×4.0	Pit	底部やや張るが平底気味。腰部丸く体部直線的に外傾。口縁部横撫で。体部下位・底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密・小石混る
397-3 123-3	土師器 杯	1/4	13.2×— ×(3.4)	+1	平底。体部直線的に開き口縁部は内湾気味。体部内面上位斜行篋磨き・下位篋撫で。口縁部横撫で。外面横位・底部不定方向篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
397-4 123-4	土師器 杯	1/4	13.4×— ×(3.4)	+1	平底。体部直線的に開き口縁部くびれて内湾気味。口唇部丸い。体部内面斜行篋磨き。見込部螺旋状篋磨き。体部外面横位篋削り。口縁部横撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
397-5	土師器 杯	破片	12.4×8.3 ×(3.4)	埋土	平底から腰部丸く口縁部緩く外反。内面斜行篋磨き。口縁部横撫で。体部外面横位篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗
397-6 123-6	土師器 杯	1/4	15.9×12.4 ×5.1	床直	器肉厚い。底部偏平でやや丸味。体部直線的に開き口縁部内湾気味に直立。体部外面横・底部不定方向篋削り。体部内面放射状・見込部螺旋状篋磨き。	①良好 ②鈍い橙 ③密

第2章 遺構と遺物

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
398-7 124-7	須恵器 杯	小片	12.2×7.2 ×4.0	200号埋土	腰部やや丸味をもつ。体部深く直線的に外傾。口唇部丸まる。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
398-8 124-8	須恵器 杯	小片	12.4×— ×(3.8)	+4~6	体部直線的に開く。轆轤成形。接合痕。	①酸化気味 ②灰黄 ③細砂混る
398-9 124-9	須恵器 杯	底部1/2	—×7.8 ×(1.3)	埋土	体部直線的に開く。轆轤成形。底部回転笠切り後回転撫で調整。	①良好 ②灰褐黄 ③密・小石混る
398-10 124-10	土師器 甕	口縁部 1/4	21.9×— ×(7.3)	+9	肩部丸く張る。口縁部短く肥厚しやや外傾する。口唇部内湾気味で丸い。胴部上位斜位篋削り。内面口縁下撫で。	①良好 ②鈍い褐 ③やや密・小石混る
398-11 124-11	土師器 甕	口縁部 1/4	23.1×— ×(13.4)	竈	胴部上位で丸く張り口縁部緩く外反。口唇部内湾気味で丸い。口縁部横撫で。胴部上位横位・中位斜位篋削り。	①良好 ②明赤褐 ③やや密・砂混る
398-12 124-12	土師器 甕	底部欠 損1/2	21.6×— (18.5)最大径22	0~+5	器肉薄い。胴部丸味もち口縁部外反して開く。口縁部横撫で。胴部上位横・中位斜位・下位縦位篋削り。	①良好 ②明赤褐 ③密・細砂混る
398-13 124-13	鉄製品 鋤先金具	完形	長17.4 最大幅12	竈	U字形鋤先。刃先は円形を呈し耳部僅かに開く。内側面の木質着装部はV字に切り込む。	

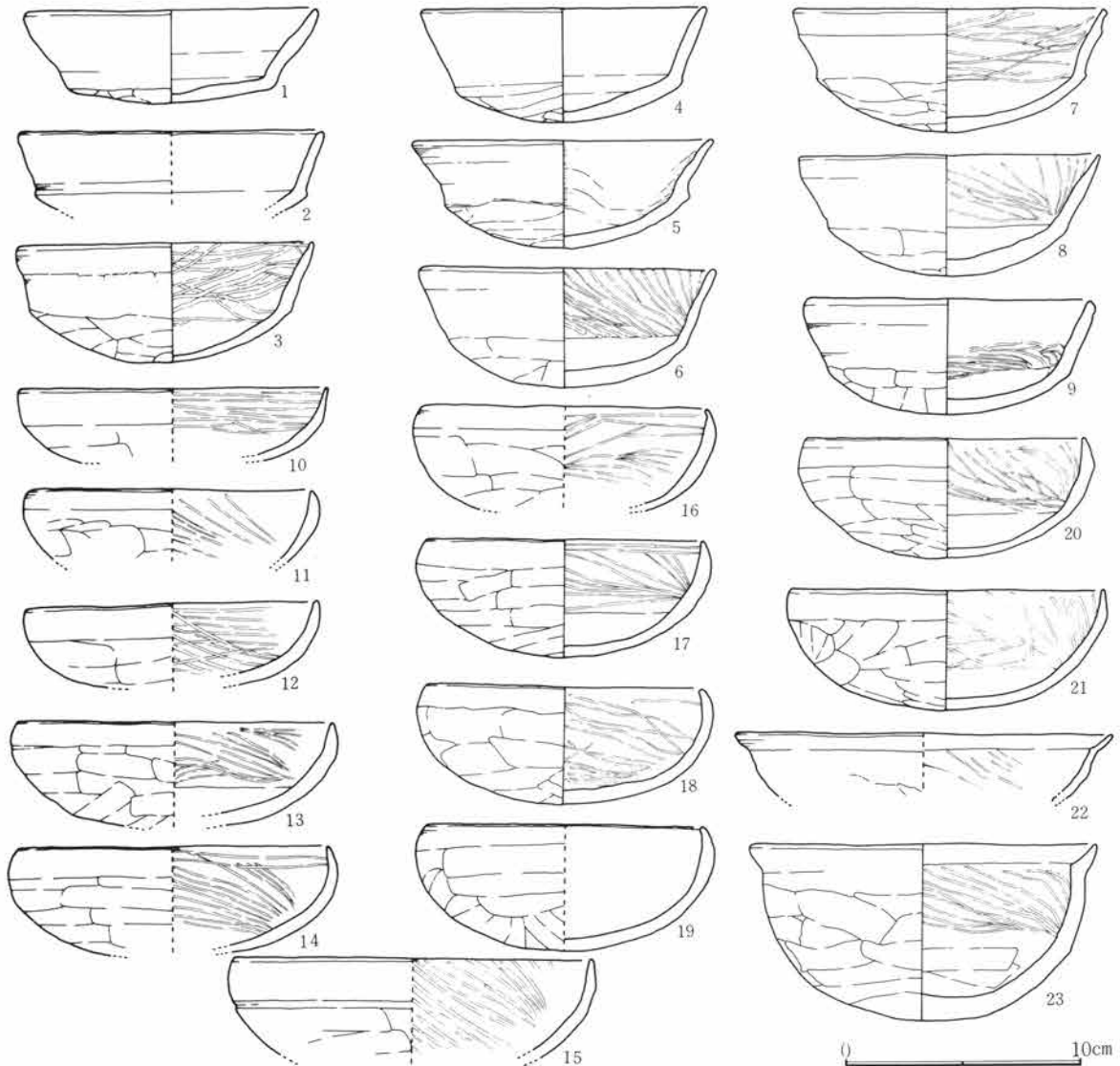


Fig. 399 L200号住居跡出土遺物(1)

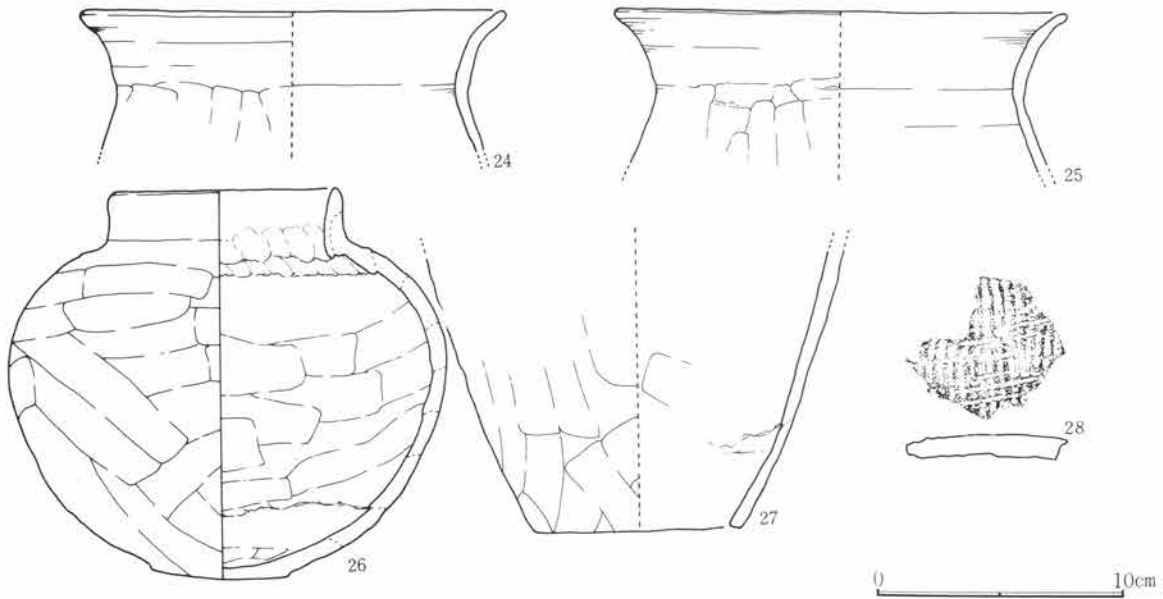


Fig. 400 L 200号住居跡出土遺物(2)

L 200号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
399-1 124-1	土師器 杯	口~底	12.4×-× 3.9口径高3.2	埋土	底部偏平。口縁部やや肥厚し内湾気味に開く。口縁部・内面撫で。底部篋削り。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密
399-2 124-2	土師器 杯	破片	12.8×-× (3.2)口径高2.6	埋土	底部浅く受け部で稜をなし口縁直線的に外傾。上端面段をなし内斜。口縁部横撫。底部篋削り。内面篋磨き不鮮明。	①良好 ②橙 ③やや密
399-3 124-3	土師器 杯	完形	12.4×-× 4.9	貯蔵穴	丸底から弱い稜をなし口縁部高く外傾し上半は内湾気味。口縁部中位指頭痕・接合痕。口縁部横撫で。底部篋削り。内面上半斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密
399-4 124-4	土師器 杯	¾	11.9×-× 4.7	埋土	底部丸い。口縁部高く受け部で僅かに段をなし直線的に外傾。口唇部丸い。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
399-5 124-5	土師器 杯	完形	12.7×-× 4.5	貯蔵穴	浅い丸底から屈して稜をなし口縁部外反気味に開く。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。黒色付着物。	①良好 ②橙 ③細砂混る
399-6 124-6	土師器 杯	完形	12.5×-× 5.0	貯蔵穴	丸底から僅かに段をなし口縁部高く中位に僅かなくびれをもち外傾。口縁部横撫で。内面上半斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密
399-7 124-7	土師器 杯	完形	13.2×-× 5.2	貯蔵穴	丸底。口縁部高く屈して稜をなし中位でくびれ内湾気味に開く。口縁部横撫で。底部篋削り。内面横・斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密
399-8 124-8	土師器 杯	完形	12.6×-× 5.0	貯蔵穴	丸底から弱い稜をなし口縁部高く外反して開き上半は内湾気味。口縁部横撫で。底部篋削り。内面上半斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密
399-9 124-9	土師器 杯	¾	11.6×-× 4.8	埋土・ +14	浅めの丸底。受け部で僅かに屈す。口縁部緩く外反し上半内湾気味。口縁部横撫で。底部篋削り。内面中位篋磨き。	①良好・硬 ②橙 ③やや密
399-10 124-10	土師器 杯	破片	13.0×-× (3.0)	+4	底部丸く浅い。器内薄い。口縁部やや外傾し立つ。口唇部尖る。口縁部横撫で。底部篋削り。内面上半横篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや粗・細砂混る
399-11 124-11	土師器 杯	破片	12.0×-× (3.0)	埋土	底部丸いか。口縁部肥厚しやや内湾気味に立つ。口縁部横撫で。底部篋削り。内面斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密・赤色粒混
399-12 124-12	土師器 杯	破片	12.2×-× 3.4	貯蔵穴・ 埋土	底部丸く浅い。口縁部内湾気味に立つ。口唇部丸まる。口縁部横撫で。底部篋削り。内面斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや粗・粗砂混る
399-13 124-13	土師器 杯	破片	13.2×-× (3.3)	埋土	丸味ある底部。口縁部内湾し口唇部尖る。口縁部横撫で。内面上半斜行篋磨き。底部篋削り。	①酸化 ②橙 ③やや密
399-14 125-14	土師器 杯	¾	12.8×-× (4.4)	埋土	丸味ある底部。口縁部強く内湾し口唇部尖る。口縁部横撫で。内面上半斜・横篋磨き。底部篋削り。	①酸化 ②橙 ③やや密
399-15 125-15	土師器 杯	¾	15.0×-× 4.1	+2	底部深く丸底。口縁部内湾気味に直立。端部細り丸まる。口縁部横撫で。底部篋削り。内面全体に斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや粗・粗砂混る
399-16 125-16	土師器 杯	破片	12.2×-× (4.3)	埋土	底部深く丸底。口唇部内屈し端部尖る。口縁部横撫で。底部篋削り。内面不定方向篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密・赤色粒混
399-17 125-17	土師器 杯	¾	11.5×-× (4.9)	床直	底部丸く深い。口縁部内湾して立つ。口唇部尖る。口縁部横撫で。内面口縁部横・上半は斜行篋磨き。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密

第2章 遺構と遺物

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
399-18 125-18	土師器 杯	完形	11.5×— ×4.9	貯蔵穴	底部丸く深い。口縁部強く内湾。内面斜行篋磨き。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
399-19 125-19	土師器 杯	1/2	11.4×— ×5.3	埋土	底部丸く深い。口縁部強く内湾。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
399-20 125-20	土師器 杯	完形	11.5×— ×5.0	貯蔵穴	底部丸く深い。口縁部肥厚して内湾し口唇部尖る。内面上半斜行篋磨き。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
399-21 125-21	土師器 杯	1/2	13.2×— ×5.0	+3	底部丸く深い。口縁部やや長く直立し口唇部尖る。口縁部横撫で。底部篋削り。内面斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや粗・細砂混る
399-22 125-22	土師器 杯	破片	15.8×— ×(2.7)	埋土	器肉薄い。体部丸く浅いか。口縁部内湾気味に強く外屈する内斜口縁。体部篋削り。内面上半斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密・赤色粒混
399-23 125-23	土師器 杯	完形	14.6×— ×7.2	+7	丸底。半球形の体部。口縁部短く内湾気味に強く外屈する内斜口縁。口唇部尖る。底～胴部篋削り。見込部篋撫で。内面上半斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密
400-24 125-24	土師器 甕	口縁部 1/4	17.0×— ×(5.5)	埋土	肩部張りなく長胴か。口縁部外傾し上半は外反。口縁部横撫で。肩部縦位篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗
400-25 125-25	土師器 甕	口縁部 1/4	18.2×— ×(6.0)	埋土	肩部張りなく口縁部緩く外傾して上半は強く外反。口縁部横撫で。肩部縦位篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗
400-26 125-26	土師器 短頸壺	ほぼ完形	9.1×5.4× 15.4最大径17.4	埋土	底部平底気味でやや張る。胴～肩部丸く球形。口縁部短く直立。内面指頭痕・篋撫で調整。胴部横・斜位篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
400-27 125-27	土師器 甕	下半1/2	—×8.2 ×(11.0)	埋土	単孔。胴部張りなく長く直立する。胴部縦位篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②浅黄橙 ③やや粗・小石混る
400-28 125-28	須恵器 甕	小片		埋土	外面格子状叩き。	①良好 ②灰 ③やや粗

L190号住居跡(Fig. 401、402・PL. 30、125)

L区第4台地の調査区ほぼ中央に位置し、69・70 L13・14の範囲にある。L184号・L214号住居跡と重複しており、前者より旧く後者より新しい時期の所産である。北壁線はこの重複のため消失している。

平面形は南北に長軸をもつ方形を呈すると考えられ、比較的小形の住居跡である。東西長2.1m、南北は南壁より約2.9mの範囲まで確認した。東西軸方位はおよそN-90°-Eを示す。検出面からの掘形は浅く、壁

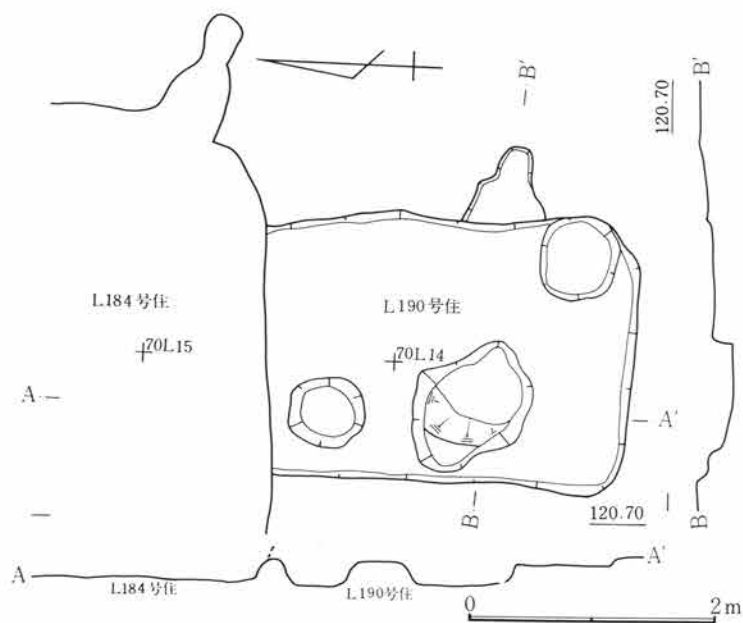


Fig. 401 L190号住居跡

高は約10cmを測る。床面はほぼ平坦をなすが踏み締まりは弱い。貯蔵穴は南東隅にあり、径60cm・深さ14cm

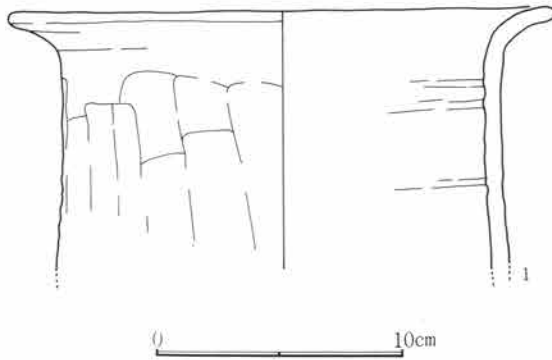


Fig. 402 L190号住居跡出土遺物

程度の浅い掘形である。埋土には焼土粒・灰などが含まれる。西側には2基の土坑が検出されたが、埋土上層は比較的粘性のある土質で床下土坑とも考えられる。

竈は東壁でやや南に偏って付設される。遺存状態は悪く、少量の焼土粒が残るにすぎない。燃焼部はやや方形気味に掘り込まれ、先端はくびれて短い煙道部を形成する。燃焼部幅65cm・奥行き40cm、煙道部長さ20cmを測る。

出土遺物は少なく、土師器甕片などである。

L190号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
402-1 125-1	土師器 甕	上半分	21.8× ×(10.3)	竈	胴部張りなく長胴を呈す。口縁部水平に近く強く外反。口縁部横撫で。胴部縦位篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密

L191号住居跡 (Fig. 403、404、406・PL. 30、125)

L区第4台地の調査区西側ほぼ中央に位置し、73~75L23・24の範囲にある。L195号住居跡と重複しているがこれより新しい時期の所産である。

平面形は東西・南北軸長とも約3mの方形を呈する。東西軸方位はN-99°-Eを示す。検出面からの掘形は浅く壁高約12cmを測り、床面は平坦をなすが四壁際の踏み締まりは軟弱である。貯蔵穴など諸施設は検出されていない。

竈は東壁にありやや南に偏って付設される。袖部は東壁線上にあると思われるが袖材などの遺存は悪い。燃焼部は楕円形に掘り込まれ、燃焼部側縁には凝灰岩質の加工材が埋設される。中央部には円柱状支脚がある。燃焼部幅55cm・奥行き55cmを測る。

出土遺物は少量で羽釜がある。

L195号住居跡 (Fig. 403、405、407・PL. 31、126)

L区第4台地の調査区ほぼ中央部西に位置し、74~76L23~25の範囲にある。L146号・L191号住居跡と重複しており、これらより古い時期の所産である。

平面形は南北に長軸をもつ方形を呈するが小規模な住居跡である。南北長3.1m・東西長2.35mを測り、東西軸方位はN-85°-Eを示す。壁高は約30cmを測り、床面は平坦をなして踏み締まりは良好である。貯蔵穴は南東隅にあり径35×45cm・深さ20cmの楕円形を呈する。

竈は東壁にあり南に偏って付設される。L191号住居跡の範囲にあり、遺存状態は当跡の掘形がやや深いため残存したものである。燃焼部は方形気味に掘り込まれ、火床面は床面より僅かに窪み先端部は細る。東壁線上左右袖部には袖材埋設痕があり、左袖のものと思われる凝灰岩質材が検出されている。袖材埋設痕内法30cm、火床窪みよりの燃焼部奥行き1.1mを測る。

出土遺物は少量で竈・貯蔵穴周辺部にある。

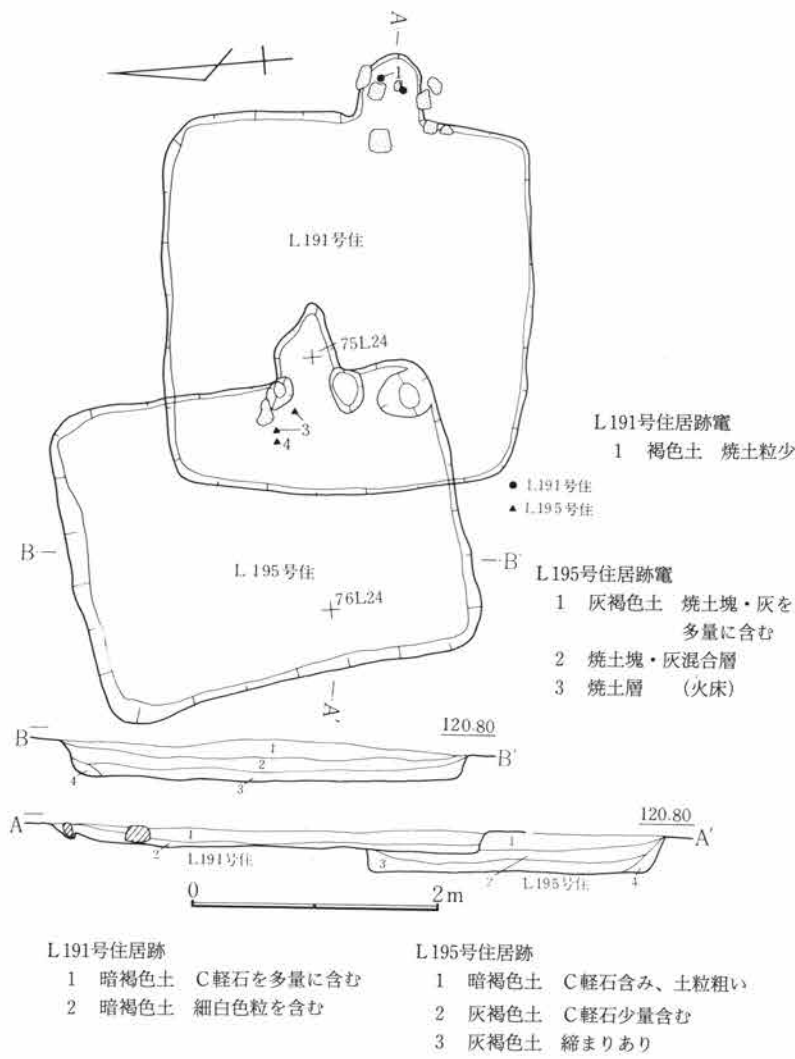


Fig. 403 L191号・L195号住居跡

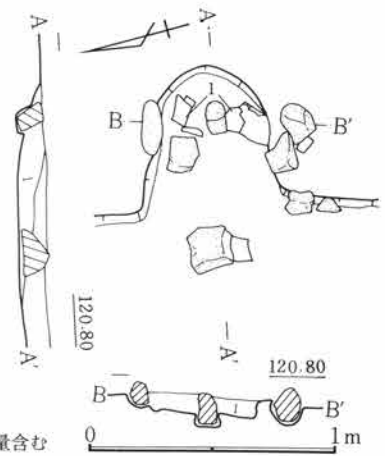


Fig. 404 L191号住居跡

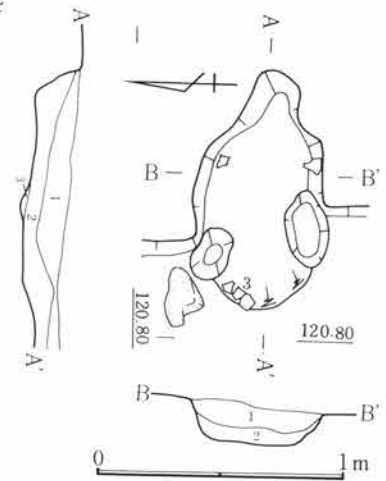


Fig. 405 L195号住居跡

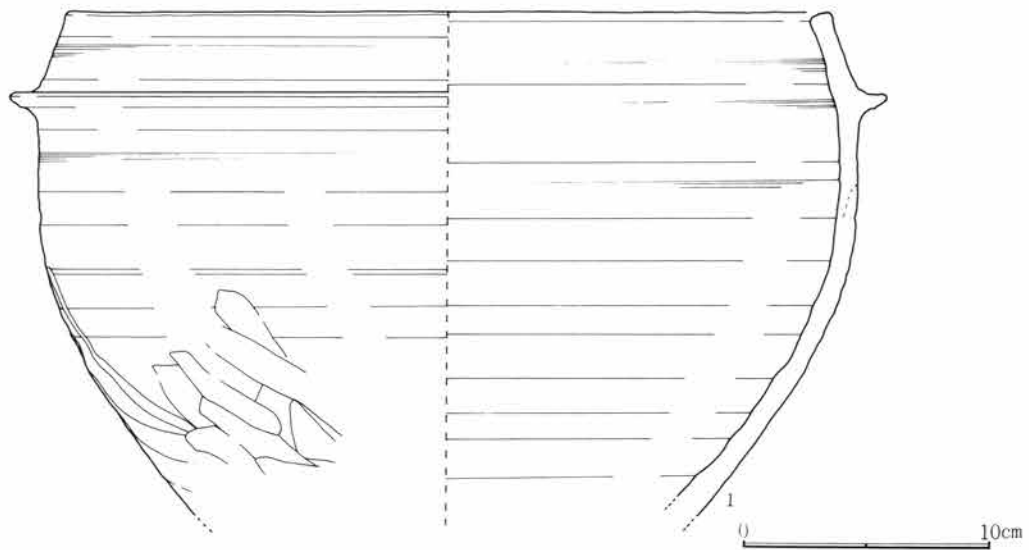


Fig. 406 L191号住居跡出土遺物

L 191号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
406-1 125-1	羽釜	下半欠損	30.6×-×(1 9.9)口径35	Pit・竈	体～口縁部内湾して開く。口唇部上端面内斜。鋳強く突出しほぼ水平につく。体部中位回転篋無で。下位篋削り。	①良好 ②灰黄 ③やや粗

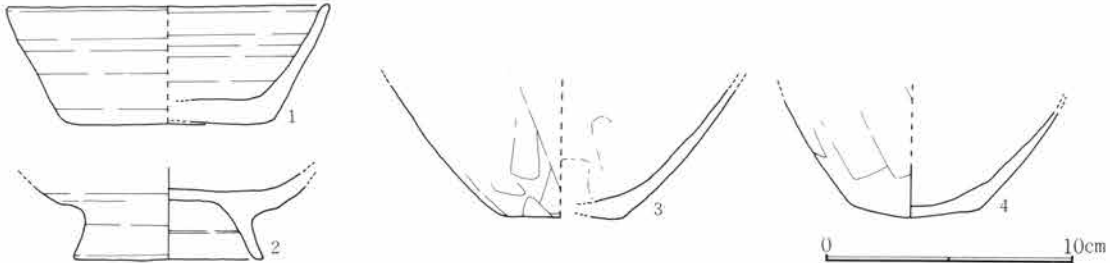
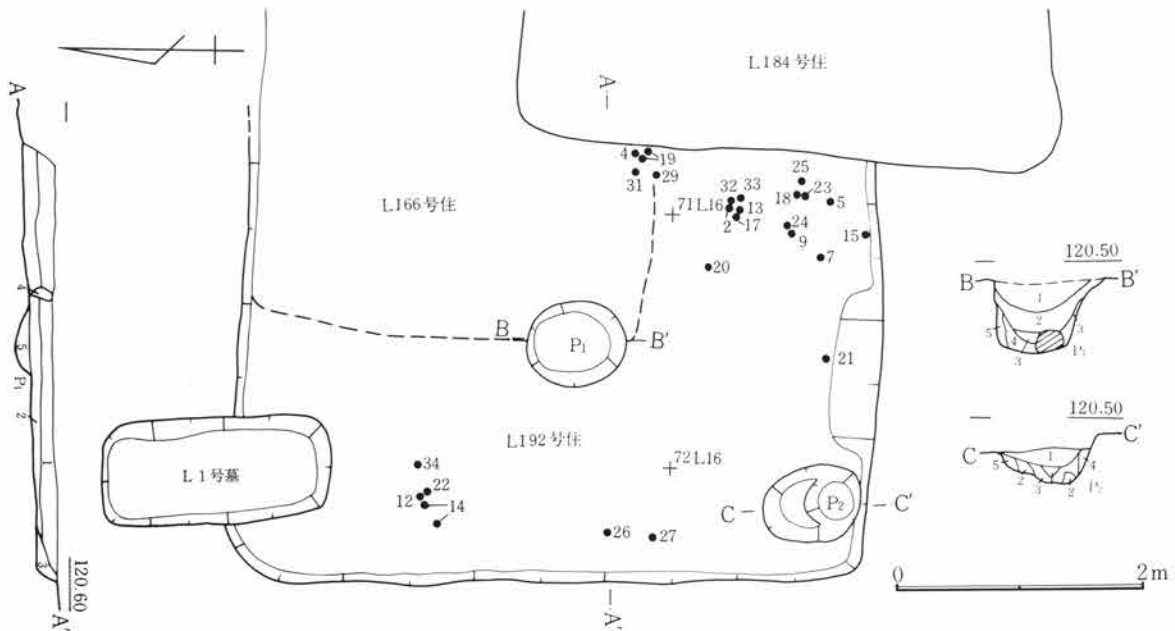


Fig. 407 L 195号住居跡出土遺物

L 195号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
407-1 126-1	須恵器 杯	1/2	12.9×7.7 ×4.7	Pit・埋土	体部直線的で深い。口縁部僅かに内傾気味。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
407-2 126-2	須恵器 椀	底部	-×7.6 ×(3.4)	埋土	腰部強く張る。付高台、高くハの字状に開く。端部丸い。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密・砂混る
407-3 126-3	土師器 甕	底部	-×5.0 ×(5.2)	竈	体部緩く丸味をもって外傾。器内薄。体部下位斜位篋削り。内面撫で。	①良好 ②明赤褐 ③やや密・砂混る
407-4 126-4	土師器 甕	底部	-×4.9 ×(4.2)	竈・埋土	底部丸味をもつ。胴部器内薄。胴部下位斜位篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密



L 192号住居跡

- 1 暗褐色土 細白色粒・C軽石含む
- 2 暗褐色土 C軽石・炭化粒含む
- 3 暗褐色土 砂質褐色土塊含む
- 4 褐色土塊
- 5 暗褐色土 C軽石含む

L 192号住居跡P₁

- 1 暗褐色土 C軽石含む
- 2 黒褐色土
- 3 黒褐色土 粘性あり
- 4 黒褐色土 炭化粒含み粘性あり
- 5 黒褐色土 堅く締めり粘性あり

L 192号住居跡P₂

- 1 暗褐色土 炭化粒含む
- 2 砂質褐色土塊
- 3 暗褐色土 炭化粒含み粘性あり
- 4 暗褐色土 粘性あり
- 5 褐色土

Fig. 408 L 192号住居跡

第2章 遺構と遺物

L 192号住居跡 (Fig. 408~410・PL. 31、126、127)

L区第4台地の調査区ほぼ中央に位置し、70~72L15~17の範囲にある。L166号・L184号住居跡と重複し、これらより古い時期の所産であり東半は消失している。また北西隅で当跡より新しい時期のL1号墓が検出されている。

平面形は方形を呈すると考えられ、南北長5.05m、東西は西壁よりおよそ3.5mの範囲まで確認した。東西軸方位はおよそN-90°-Eを示す。壁高は約25cm、床面はほぼ平坦をなし踏み締まりは良好である。住居跡中央部及び南西隅に円形土坑が検出されたが性格は不明である。中央部土坑の底面には人頭大川原石がある。竈は検出されていない。

出土遺物は散在して検出されたが南東部に多い。須恵器杯・椀、灰釉陶器、羽釜、鉄製品などがある。

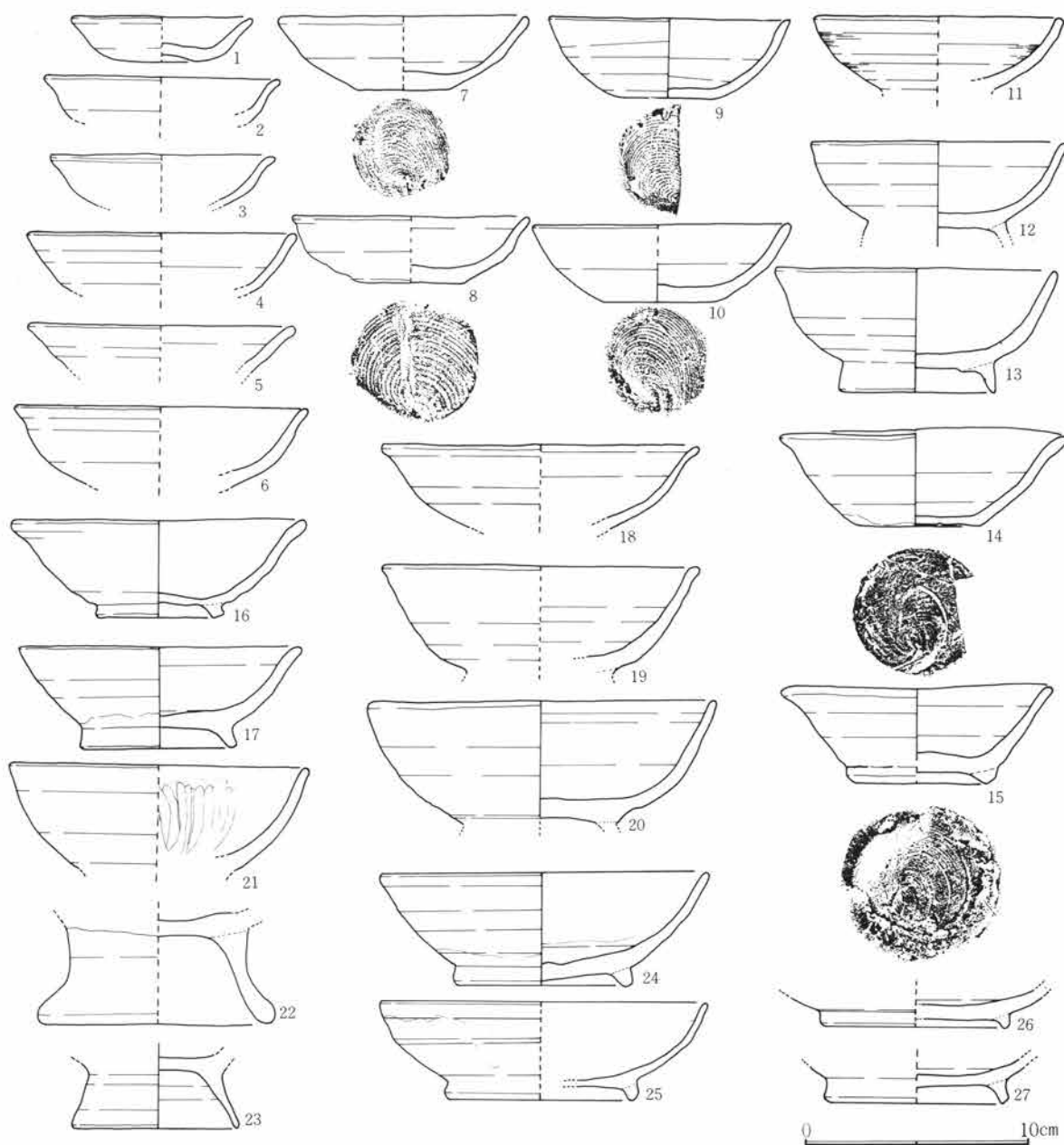


Fig. 409 L 192号住居跡出土遺物(1)

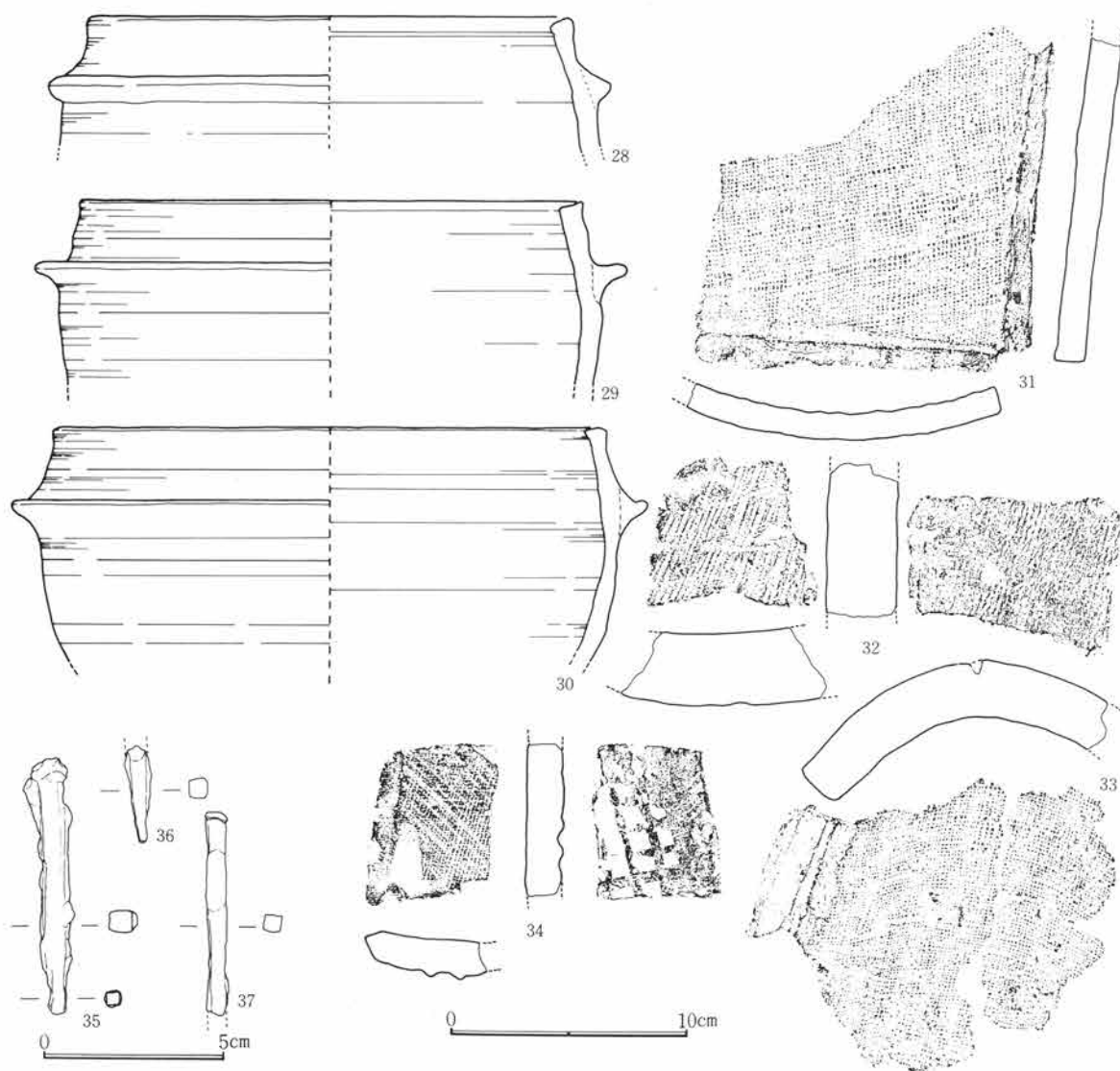


Fig. 410 L192号住居跡出土遺物(2)

L192号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
409-1 126-1	須恵器 杯	3/4	8.0×3.6 ×2.0	埋土	見込部凸状。腰部丸く口縁部外反気味。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②淡赤橙 ③やや密
409-2 126-2	須恵器 杯	3/4	10.4×— ×(2.2)	埋土	腰部丸く張り口縁部外反。轆轤成形。内外面口縁部処理。	①良好 ②オリーブ黒 ③密
409-3 126-3	須恵器 杯	1/4 底欠損	10.0×— ×(2.3)	埋土	体部丸味強く口縁部強く外反して開く。内外面黒色処理。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密
409-4 126-4	須恵器 杯	3/4 底欠損	11.9×— ×(2.9)	埋土	体部内湾気味に開く。口唇部丸い。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密・粗砂混る
409-5 126-5	須恵器 杯	3/4 底欠損	11.8×— ×(2.0)	埋土	体部直線的に大きく開き口唇部丸い。轆轤成形。	①酸化気味・良好 ②灰白 ③やや密
409-6 126-6	須恵器 杯	3/4 底欠損	13.0×— ×(3.7)	埋土	体部丸味をもち口縁部ややくびれた後外傾。口唇部丸い。轆轤成形。	①酸化・良好②鈍い橙 ③やや粗・砂混
409-7 126-7	須恵器 杯	3/4	11.1×4.0 ×3.2	埋土	底径小さい。体部丸味をもち口縁部緩く外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②明褐灰 ③やや密
409-8 126-8	須恵器 杯	3/4	10.4×4.8 ×3.0	埋土	底部肥厚。体部中位でくびれ口縁部外反して開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰褐 ③やや密
409-9 126-9	須恵器 杯	3/4	10.4×3.5 ×4.2	埋土	底径小さい。体部丸く内湾して開く。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密

第2章 遺構と遺物

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
409-10 126-10	須恵器 杯	¾	11.3×4.8 ×3.4	埋土	体部内湾し丸味をもつ。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗・細砂混る
409-11 126-11	須恵器 椀	¾ 底欠損	11.5×— ×(3.2)	埋土	体部丸く内湾して開き口縁部僅かにくびれる。轆轤成形。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや密
409-12 126-12	須恵器 椀	高台欠損	11.2×(6. 4)×(4.2)	埋土	体部丸く内湾して開く。付高台剥離。轆轤成形。	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③やや密
409-13 126-13	須恵器 椀	¾	12.5×6.9 ×5.4	埋土	腰部張る。体部内湾気味に立つ。付高台、やや高くハの字状に開く。轆轤成形。	①酸化気味 ②淡黄 ③やや密
409-14 126-14	須恵器 杯	¾	12.6×5.3 ×4.3	埋土	体部やや丸味をもち深め。口縁部緩く外反して開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗・石混る
409-15 126-15	須恵器 椀	ほぼ完形	11.9×6.6 ×4.3	埋土	体部直線的に外傾し口唇部丸い。付高台、低く断面矩形。轆轤成形。右回転糸切り。内面回転調整。	①良好 ②灰黄 ③やや密・細砂混る
409-16 126-16	須恵器 椀	¾	13.0×5.6 ×4.3	埋土	体部丸味をもち大きく開く。口縁部緩く外反。付高台、低く断面矩形。轆轤成形。	①やや軟 ②灰白 ③やや粗
409-17 126-17	須恵器 椀	ほぼ完形	12.5×6.9 ×4.5	埋土	腰部丸く張り体部上半は外反気味。口唇部丸まる。付高台ハの字状に開く。接合痕あり。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②浅黄 ③やや粗
409-18 126-18	須恵器 杯	¾	13.9×— ×(3.7)	埋土	体部中位張り口縁部緩く外反。口唇部丸い。轆轤成形。	①酸化気味・良好 ②淡橙 ③やや密
409-19 126-19	須恵器 椀	¾ 底欠損	14.0×— ×(4.7)	埋土	腰部丸く張り体部上半は外反気味に開く。口唇部外屈し丸まる。付高台剥離。轆轤成形。	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③やや密
409-20 126-20	須恵器 椀	高台欠損	15.4×— ×(5.4)	+ 2	体部丸く内湾して開く。口唇部丸い。付高台剥離。轆轤成形。	①酸化気味 ②浅黄橙 ③やや密
409-21 126-21	内黒土器 椀	¾高台欠損	13.2×— ×(5.2)	埋土・+ 1	体部内湾し口縁部やや外反して開く。内面黒色処理・放射状筥磨き。轆轤成形。	①酸化・良好 ②灰白 ③細砂混る
409-22 127-22	須恵器 椀	台部¾	—×10.4 ×(4.6)	埋土	高台高く上半は直に立ち裾部は強く開く。端部丸く肥厚。轆轤成形。	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③やや密
409-23 127-23	須恵器 椀?	台部	—×7.4 ×(3.2)	埋土	付高台、高く直線的に開く。轆轤成形。	①良好 ②鈍い黄橙 ③密
409-24 127-24	灰釉陶器 椀	¾	14.4×7.9 ×5.0	埋土	底部～腰部肥厚。体部丸く内湾気味に開く。口唇部丸い。高台端部丸い。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③緻密
409-25 127-25	灰釉陶器 椀	¾	14.4×8.5 ×4.3	埋土	器肉薄い。体部丸味をもち内湾して開く。付高台、低く内湾気味に立つ。口縁部内外面施釉。	①良好 ②灰白 ③密
409-26 127-26	灰釉陶器 椀	底部¾	—×8.4 ×(1.3)	+ 10	付高台、低く端部丸い。内面施釉。	①良好 ②灰白 ③緻密
409-27 127-27	灰釉陶器 椀	¾	—×8.0 ×(1.9)	+ 13	付高台、ハの字状に開き断面矩形。内面施釉。	①良好 ②灰白 ③緻密
410-28 127-28	羽釜	口縁部¾	20.2×— (5.4)口径23.2	埋土	口縁部内傾し口唇部幅広く断面矩形。鏝肥厚しやや弱く突出。上端面内斜。上半回転調整。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
410-29 127-29	羽釜	口縁部¾	20.8×— (7.6)口径24.4	埋土	口縁部直線的に内傾し口唇部は幅広く断面矩形。鏝強く突出。口縁・胴部上半回転調整。	①良好 ②灰白 ③やや粗
410-30 127-30	羽釜 破片	口縁部破片	22.9×— (9.7)口径26.3	埋土	胴部丸く張り口縁部内傾。口唇部断面矩形。端部尖る。鏝上方へ外反。上半回転調整・一部筥削り。	①良好 ②浅黄橙 ③やや粗・砂混る
410-31 127-31	瓦 平瓦		厚1.2	+ 7	凹面布目。凸面撫で調整。側縁筥調整。	①良好 ②褐灰 ③やや密
410-32 127-32	瓦 平瓦	小片	厚3.0	埋土	凹面布目?凸面細かい縄目。	①良好 ②鈍い黄褐 ③やや密
410-33 127-33	瓦 丸瓦	小片	厚2.2	埋土	凹面布目。凸面撫で調整。側縁筥調整。	①良好 ②黒褐 ③やや粗
410-34 127-34	瓦 平瓦	小片	厚1.3	+ 12	凹面布目。凸面格子文。側縁筥調整。	①良好 ②灰白 ③やや密
410-35 127-35	鉄器 角釘	端部欠損	長(7) 幅0.6	埋土	頭部形状折頭式。	
410-36 127-36	鉄器 角釘	頭部欠損	長(2.7) 幅0.5	埋土	頭部形状不明。	
410-37 127-37	鉄器 角釘	端部欠損	長(5.7) 幅0.4	埋土	頭部形状折頭式。	

L 193号住居跡 (Fig. 411、412・PL. 31、127、128)

L区第4台地の調査区南西に位置し、71~73L 8~11の範囲にある。L 162号・L 176号・L 183号住居跡と重複し、いずれより古い時期の所産である。

平面形は南北にも長軸をもつ方形を呈する。南北長5.5m・東西長3.95mを測り、東西軸方位はN-104°-Eを示す。壁高は約30cm、床面は平坦をなし踏み締まりは良好である。貯蔵穴は南東隅にあり、東壁線から張り出して設けられ、壁側は播鉢状に落ち込む径1m・深さ20cmの楕円形である。また南西隅の土坑はL183号住居跡貯蔵穴の掘形である。壁下の溝は西壁下で一部跡切れるが各壁を明瞭に巡り、幅20cm・深さ10cmを測る。

竈は東壁にあり南に偏って付設される。燃烧部の掘形は深く大きく窪み楕円形に掘り込まれ、火床は厚い焼土層になる。燃烧部から急傾斜で立ち上がり、先尖りの短い煙道部に至る。袖部など竈構築材などは検出されていない。燃烧部前面に径50cm・深さ30cmの円形土坑が穿たれ、黒灰が充填していた。燃烧部幅約95cm・奥行き1.3m、煙道部長さ30cmを測る。

出土遺物は竈内に集中していた他は散在して検出された。須恵器杯・甕・灰釉陶器などがある。

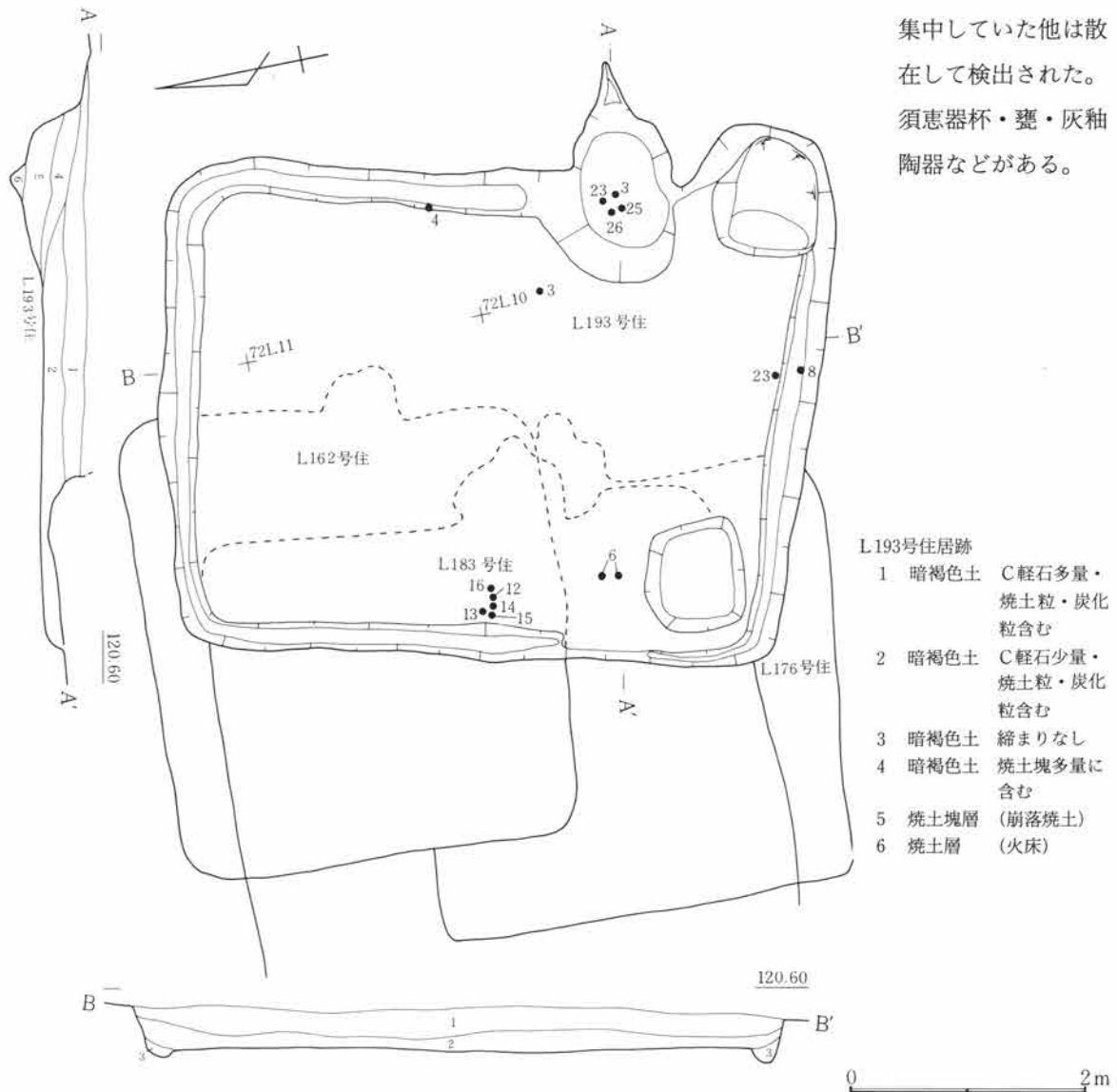


Fig. 411 L 193号住居跡

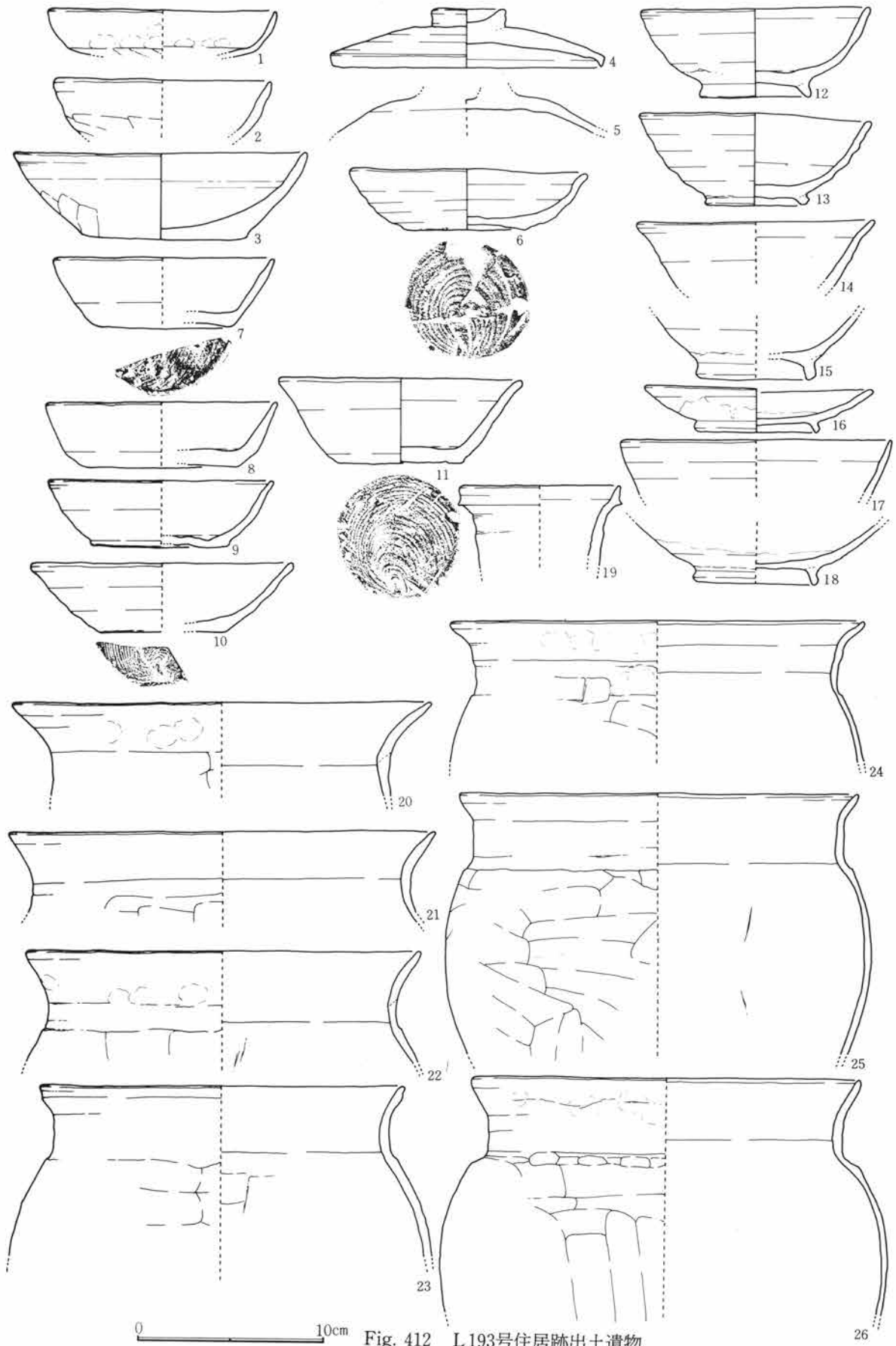


Fig. 412 L193号住居跡出土遺物

L 193号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
412-1 127-1	土師器 杯	小片	12.2×10.0 ×(2.4)	埋土	器肉薄い。体部内湾気味に開く。体部内外面指頭痕。底部 篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
412-2 127-2	土師器 杯	3/4	11.6×— ×(3.0)	竈・床下 埋土	体部内湾気味。口縁部内湾気味に外傾。口唇部尖る。口縁 部横撫で。体部中位篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
412-3 127-3	土師器 杯	3/4	15.5×8.8 ×4.5	竈・床下 埋土	器肉厚く底径大きい。体部内湾して開く。口縁部横撫で。 体部・底部篋削り。	①良好 ②明赤褐 ③やや粗・砂混る
412-4 127-4	須恵器 蓋	3/4	14.6×—× 3.1摘径4.0	+19	天井部丸く体部直線的に開く。口縁部直に折れる。端部略 三角。環状摘。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密・小石混る
412-5 127-5	須恵器 蓋	体部3/4	—×—× (2.3)	竈埋土	天井部丸く張り口縁部に向かい直線的に開く。轆轤成形。 体部手持ち篋削り。摘欠損。接合部うず巻き状。	①良好 ②灰 ③やや密
412-6 127-6	須恵器 杯	3/4	12.6×6.4 ×3.2	埋土・ +6~7	腰部から体部丸く張り口縁部外傾。轆轤成形。右回転糸切 り。	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③やや密
412-7 127-7	須恵器 杯	3/6	11.8×7.0 ×4.7	床下埋土	体部直線的に外傾。外面自然釉付着。轆轤成形。右回転糸 切り。	①良好 ②灰白 ③やや密・小石混る
412-8 127-8	土師器 杯	3/6	12.4×8.2 ×3.4	埋土	底部から体部肥厚し腰部張る。体部直線的に外傾。口唇部 細る。口縁部内面横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
412-9 127-9	須恵器 杯	3/4	12.0×7.2 ×3.5	床下埋土	腰部やや丸味をもち体部内湾気味に開く。轆轤成形。底部 撫で調整。口縁部横撫で。	①良好 ②灰 ③やや密・白色粒混
412-10 127-10	須恵器 杯	3/4	14.0×7.0 ×(3.6)	埋土	体部僅かに内湾し大きく開く。口唇部丸まる。轆轤成形。 右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
412-11 128-11	須恵器 杯	3/4	13.0×6.6 ×4.5	掘形	体部やや深く腰部に弱い丸味。体部直線的で口縁部外反気 味。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密・小石混る
412-12 128-12	須恵器 碗	3/6	12.2×6.0 ×4.7	床下土坑 ・掘形	腰部丸く張り体部内湾して開く。口縁部僅かに外反し口唇 部丸い。付高台、ハの字状に開く。轆轤成形。	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③やや密
413-13 128-13	須恵器 碗	3/4	12.4×5.5 ×4.8	掘形	体部丸く内湾して開く。付高台低く断面矩形。轆轤成形。	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③やや密
412-14 128-14	須恵器 碗	小片	12.6×— ×(3.5)	掘形	体部やや丸味ももち口縁部外傾。口唇部丸まる。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密・小石混る
412-15 128-15	須恵器 碗	小片	—×6.4 ×(3.3)	掘形	体部内湾気味。付高台、僅かに開き断面矩形。轆轤成形。	①酸化気味・良好 ②明褐灰 ③やや密
412-16 128-16	灰釉陶器 皿	完形	12.1×6.7 ×2.3	掘形	体部内湾気味に大きく開く。口唇部丸い。付高台、断面矩 形。ハの字状に開く。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③密・小石混る
412-17 128-17	灰釉陶器 碗	破片	14.4×— ×(3.0)	床下埋土	体部直線的で外傾度小。	①良好 ②灰白 ③密・黒色粒混る
412-18 128-18	灰釉陶器 碗	底部3/4	—×6.4 ×(3.3)	埋土	腰部丸味をもつ。付高台、断面矩形。ハの字状に開く。漬 け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③密
412-19 128-19	須恵器 壺	頸部	8.6×— ×(4.3)	埋土	頸部上半外反して立ち上がり口縁部直立し下位に鋭い凸帯 巡る。口唇部尖る。	①良好 ②灰 ③やや密
412-20 128-20	土師器 甕	口縁部	11.1×— ×(4.9)	埋土	肩部張りなく長胴を呈すか。口縁部外反して大きく開く。 口唇部尖り内湾気味。口縁部指頭痕後横撫で。	①良好 ②橙 ③やや密
412-21 128-21	土師器 甕	口縁部	11.3×— ×(4.3)	床上埋土	口縁部外反して大きく開く。口縁部横撫で。胴上部横位篋 削り。	①良好 ②橙 ③やや密
412-22 128-22	土師器 甕	口縁部 破片	10.5×— ×(5.8)	竈	肩部張らむ。口縁部外反して開き上半直線的に外傾するコ の字口縁。口縁部指頭痕後撫で。肩部横篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
412-23 128-23	土師器 甕	口縁部	19.4×— (9.0)	竈Pit・床 下埋土・竈	肩部張り強い。口縁部直立し上半は緩く外反するコの字口 縁。口唇部下に弱いくびれ。胴上部横篋削り。内面撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
412-24 128-24	土師器 甕	口縁部 小片	22.0×— ×(7.4)	埋土	胴部張り弱い。口縁部直線的に弱く外傾し上半内湾気味に 外傾のコの字口縁。口縁部指頭痕後撫で。肩部斜篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
412-25 128-25	土師器 甕	3/4下半 欠損	21.2×— ×(13.8)	竈埋土・ 竈	胴部丸く張る。口縁部直立し上半は外傾するコの字口縁。 口唇部内屈。胴上部横位篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
412-26 128-26	土師器 甕	3/4下半 欠損	20.6×— ×(12.4)	竈・埋土	胴部丸く張る。口縁部直立し上半は内湾気味に外傾するコ の字口縁。口縁部指頭痕後撫で。肩部指頭痕・横篋削り。 胴部縦位篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密

L 196号住居跡 (Fig. 413~415・PL. 31、128、129)

L区第4台地の調査区中央部に位置し、69~71L19~21の範囲にある。L187号住居跡と重複し、これより古い時期の所産である。

第2章 遺構と遺物

平面形は略方形を呈するが各壁線は小さな凹凸が目立つ。南北長約3.6m・東西長約3.4mを測り、東西軸方位はおよそN-95°-Eを示す。壁高は遺存良好な部分で約40cmを測る。床面は平坦をなすが踏み締めりは弱い。貯蔵穴などは検出されない。掘形は床面下15~20cmにあり不整形な窪みが多い。床下の埋土は焼土粒・炭化粒を多く含み、Loam 塊を混じえる粘性土である。

竈は東壁のほぼ中央に付設される。L187号住居跡の竈の掘形が深く、これと一部重なる当跡の竈は上部が著しく削平され、住居跡の掘形の深さの割には遺存状態は悪い。燃焼部は小さく掘り込まれ、袖材などは検出されない。焼土塊・灰層の堆積は著しいが火床にあたる焼土層はみられなかった。燃焼部幅55cm・奥行き50cmを測る。

出土遺物は多量に検出されたが散在的である。土師器杯・須恵器杯類が多く鉄器などもある。

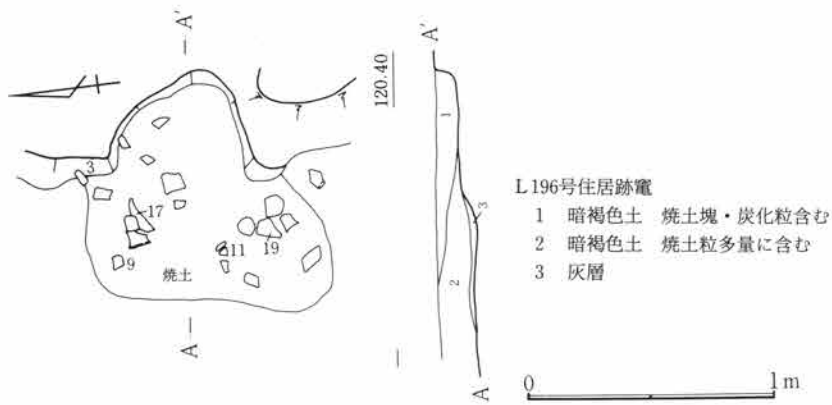
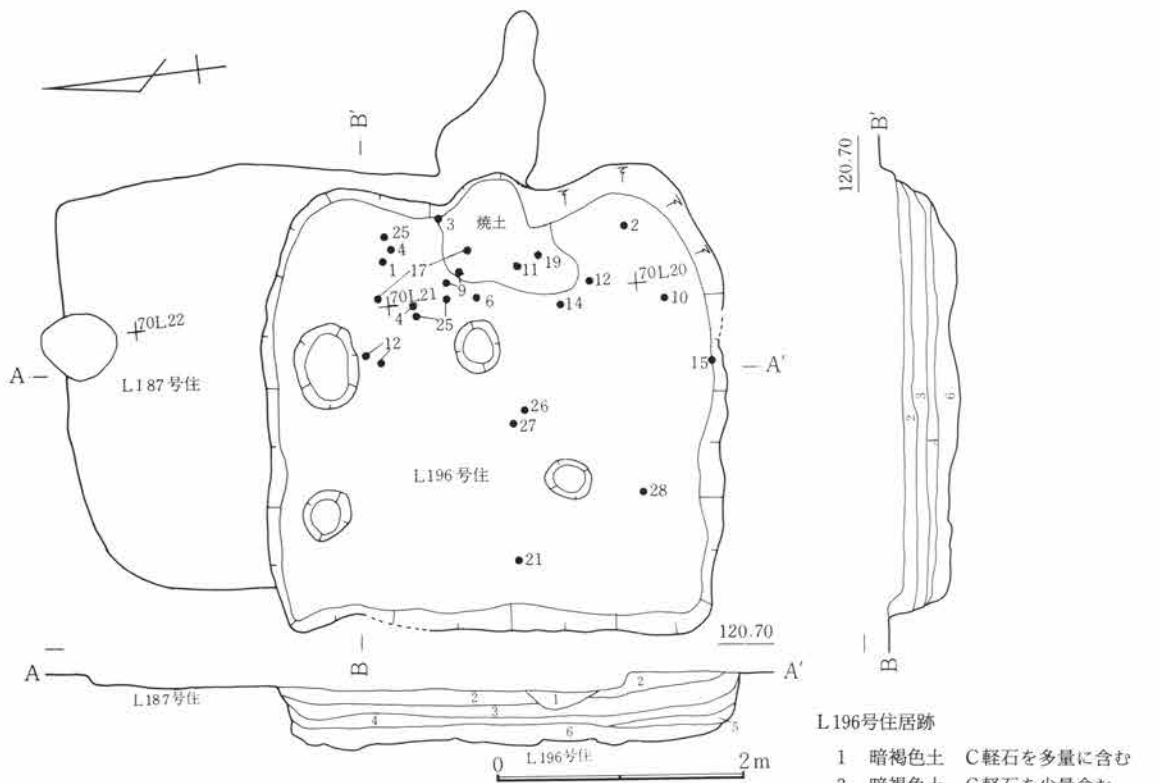




Fig. 415 L196号住居跡出土遺物

第2章 遺構と遺物

L 196号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
415-1 128-1	土師器 杯	1/2	12.7×— ×(3.7)	埋土・ +6	底部丸い。口縁部直立気味に立つ。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
415-2 128-2	土師器 杯	1/2	12.8×— ×(4.0)	+8	底部やや深く丸い。器内薄い。口縁部僅かに外傾し立つ。口縁部横撫で。体部横・底部不定方向篋削り。	①良好 ②浅黄 ③やや密
415-3 128-3	土師器 杯	口縁部	13.4×— ×(2.5)	+4	腰部丸く口縁部小さくくびれて立つ。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
415-4 128-4	土師器 杯	1/2	14.0×— ×3.5	埋土・ +1~11	底部やや丸い。口縁部内湾気味に弱く外傾する。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
415-5 128-5	土師器 杯	口縁部	12.8×— ×(2.6)	埋土	底部浅い。口縁部内湾気味に緩く外傾。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
415-6 128-6	土師器 杯	口縁部	13.8×— ×(3.3)	+14	底部浅い。口縁部短く内湾して立つ。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
415-7 128-7	土師器 杯	口縁部	13.2×— ×(2.5)	掘形埋土	口縁部短く強く折れて立つ。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
415-8 128-8	土師器 杯	1/2	14.0×— ×2.8	埋土	底部浅く口縁部緩く外傾。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
415-9 128-9	土師器 杯	1/2	13.8×— ×2.8	埋土・ +13~17	底部偏平。口縁部短く内湾気味に立つ。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
415-10 129-10	土師器 杯	1/2	13.8×— ×(3.2)	床下埋土	底部平底。口縁部直立気味に立つ。口縁部横撫で。体・底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
415-11 129-11	土師器 杯	口縁部	16.6×— ×(2.5)	埋土・ +9	口縁部短く内湾気味に外傾。口唇部尖る。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗
415-12 129-12	土師器 杯	1/2	14.8×9.0 ×5.0	+2~3	器内厚く底部やや丸味をもつ。体部直線的に外傾し口唇部尖る。口縁部横撫で。底・体部篋削り。内面篋撫で。見込部一定方向・体部斜・横篋磨き。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
415-13 129-13	土師器 杯	腰部小片		埋土	内面に刻書「上」あり。	①良好 ②橙 ③やや密
415-14 129-14	須恵器 蓋	摘部欠損	17.2×— ×(2.4)	+2	天井部平坦。体部やや肥厚し内湾気味に開く。内面かえり直に下り断面矩形。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密
415-15 129-15	須恵器 蓋	端部欠損	—×—×(1.6) 摘径5.2	埋土	天井部広く平坦。環状摘。内面摩擦著しく光沢あり。転用硯か?	①良好 ②灰 ③やや密
415-16 129-16	須恵器 蓋	破片	—×— ×(1.0)	埋土	体部肥厚。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③やや粗
415-17 129-17	須恵器 蓋	体部	20.0×— ×(1.7)	0~+1	体部下水平に広がる。口縁部直下に折れ端部尖る。自然袖付着。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③やや密
415-18 129-18	須恵器 蓋	体部	19.6×— ×(3.0)	埋土	器内厚い。体部深く直線的に開き口縁部直に折れる。轆轤成形。自然袖付着。	①良好 ②灰 ③やや粗
415-19 129-19	須恵器 杯	1/2	12.9×8.4 ×(3.6)	+11	器内厚い。体部直線的に外傾し口縁部小さく内傾。轆轤成形。回転篋削り。自然袖付着。	①良好 ②灰白 ③やや粗
415-20 129-20	須恵器 杯	1/2	14.2×9.6 ×3.5	埋土・掘形埋土	底径大きく体部直線的に外傾。口唇部丸まる。轆轤成形。回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密
415-21 129-21	須恵器 杯	底部	—×8.0 ×(2.2)	+8	回転篋削り。自然袖付着。	①良好 ②灰 ③やや密
415-22 129-22	須恵器 杯	1/2	15.2×11.0 ×3.1	埋土	器内厚い。体部浅く直線的に外傾。口唇部細まる。轆轤成形。回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
415-23 129-23	須恵器 高杯?	破片	15.6×— ×(3.4)	竈・床下埋土	腰部丸い。体部から口縁部外傾気味に立ち口縁部くびれて細まる。口唇部丸い。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③やや密
415-24 129-24	土師器 甕	口縁部	11.8×— ×(6.8)	埋土	口縁部外反気味に外傾。口縁部内外面強い横撫で。外面篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
415-25 129-25	須恵器 鉢?	底部欠損	12.2×8.6 ×8.3	電埋土・掘形埋土+1~14	体部から口縁部直線的で外傾度小さい。轆轤成形	①良好 ②灰 ③やや密
415-26 129-26	須恵器 器台?	口縁部	42.4×— ×(8.1)	+5	口唇部沈線様に凹む。体部直線的で大きく開き口縁部直立気味に立つ。体部に波状・縄目文あり。	①良好 ②灰 ③やや密
415-27 129-27	須恵器 壺	胴部	—×20.4×(8.1) 最大径27.6	+18	胴部直線的。肩部強く張り底部摩擦著しく光沢あり転用硯か? 体部上位に沈線間に列点櫛描文あり。	①良好 ②灰 ③やや密
415-28 129-28	須恵器 甕	胴部	厚1.3	+2	肩の部分か? 釉の流れの跡あり。内面青海波状当て目。外面平行叩き目。	①良好 ②灰 ③やや密

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
415-29	鉄器	頭部欠損	長(6.9)	埋土	頭部形状不明。	
129-29	角釘	損	幅0.5			

L 197号住居跡 (Fig. 416~419・PL. 31、130、131)

L区第4台地の調査区南に位置し、68~70L 8~11の範囲にある。重複はなく単独遺構であるが、東側に攪乱と思われる不規則な落ち込みがかけ、東壁の一部が消失している。当遺跡では類例の少ない西側に竈を設置する竪穴住居跡である。

平面形は東西軸が若干長い整った方形を呈する。東西長4.4m・南北長4.1mを測り、東西軸方位はN-70°-Eを示す。壁高は約25cm、床面は小さな凹凸が見られるが粗粒凝灰岩質層を床土にするため安定している。貯蔵穴は北西隅にあり、60×80cm・深さ75cmの方形である。貯蔵穴内には甗・甕などが埋土中位から出土している。壁下の溝は各壁に巡り、幅12~15cm・深さ4~5cmである。柱穴はP₁~P₄が検出され、P₁は上径15×30cm・下径10×20cm・深さ48cm、P₂は上径24×27cm・下径15cm・深さ55cm、P₃は上径26cm・下径15cm・深さ40cm、P₄は上径30cm・下径15cm・深さ48cmを測る。各柱間はP₁・P₂が2m、P₂・P₃が1.9m、P₃・P₄が2.1m、P₁・P₄が2.05mである。

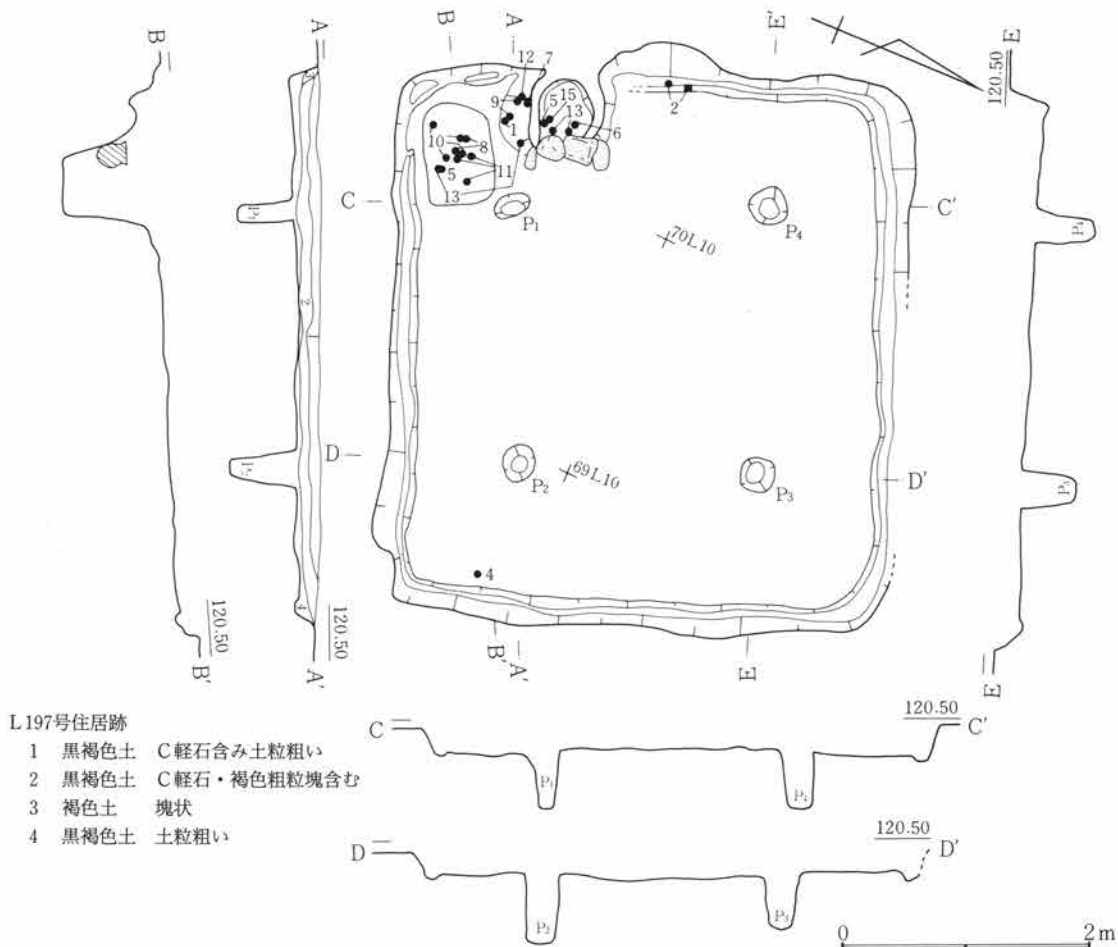


Fig. 416 L 197号住居跡

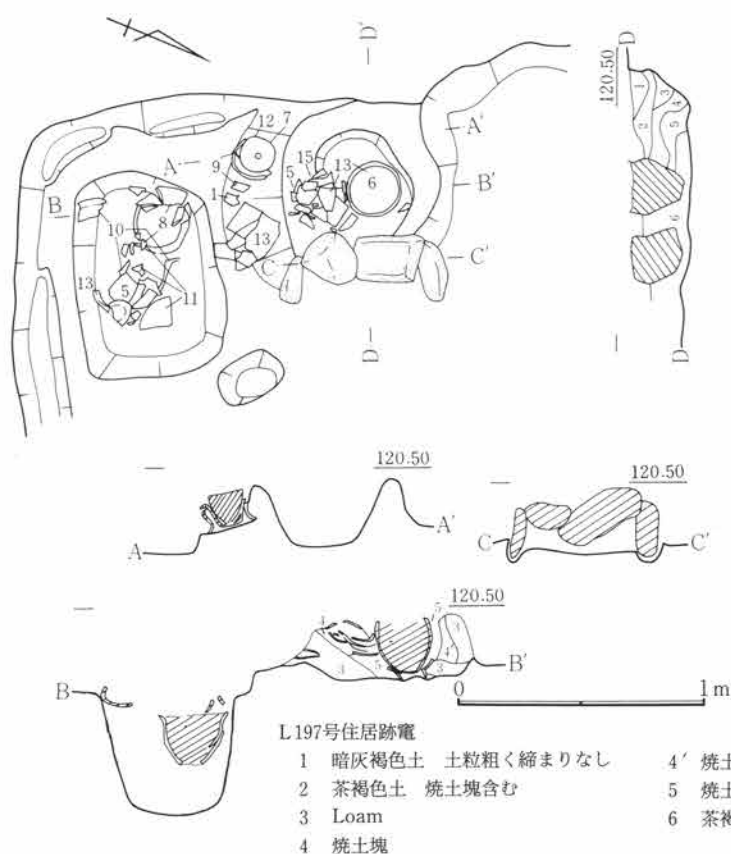


Fig. 417 L197号住居跡竈

竈は西壁にあり南に偏って付設される。袖部は掘形を残し住居内に張り出す形態である。袖部の平面形は弧状で楕円形に丸まり、燃烧部を形成しており壁線外への掘り込みはみられない。両袖先端部には川原石を埋設し、この間に焚口天井材が崩落している。燃烧部内には土師器甕が2个体、また左袖上からは甑・甕が出土している。袖石間内法45cm、燃烧部奥行き70cmを測る。

出土遺物は貯蔵穴・竈内より主に検出され、土師器杯・甕・甑などがある。

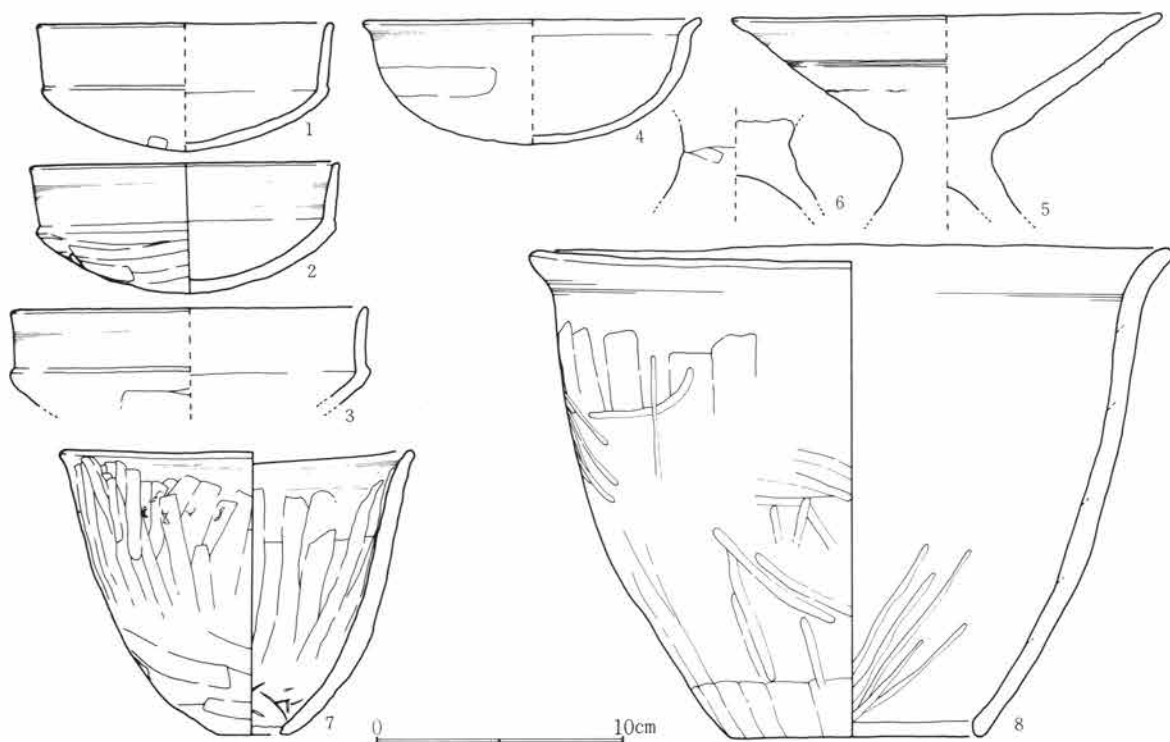


Fig. 418 L197号住居跡出土遺物(1)

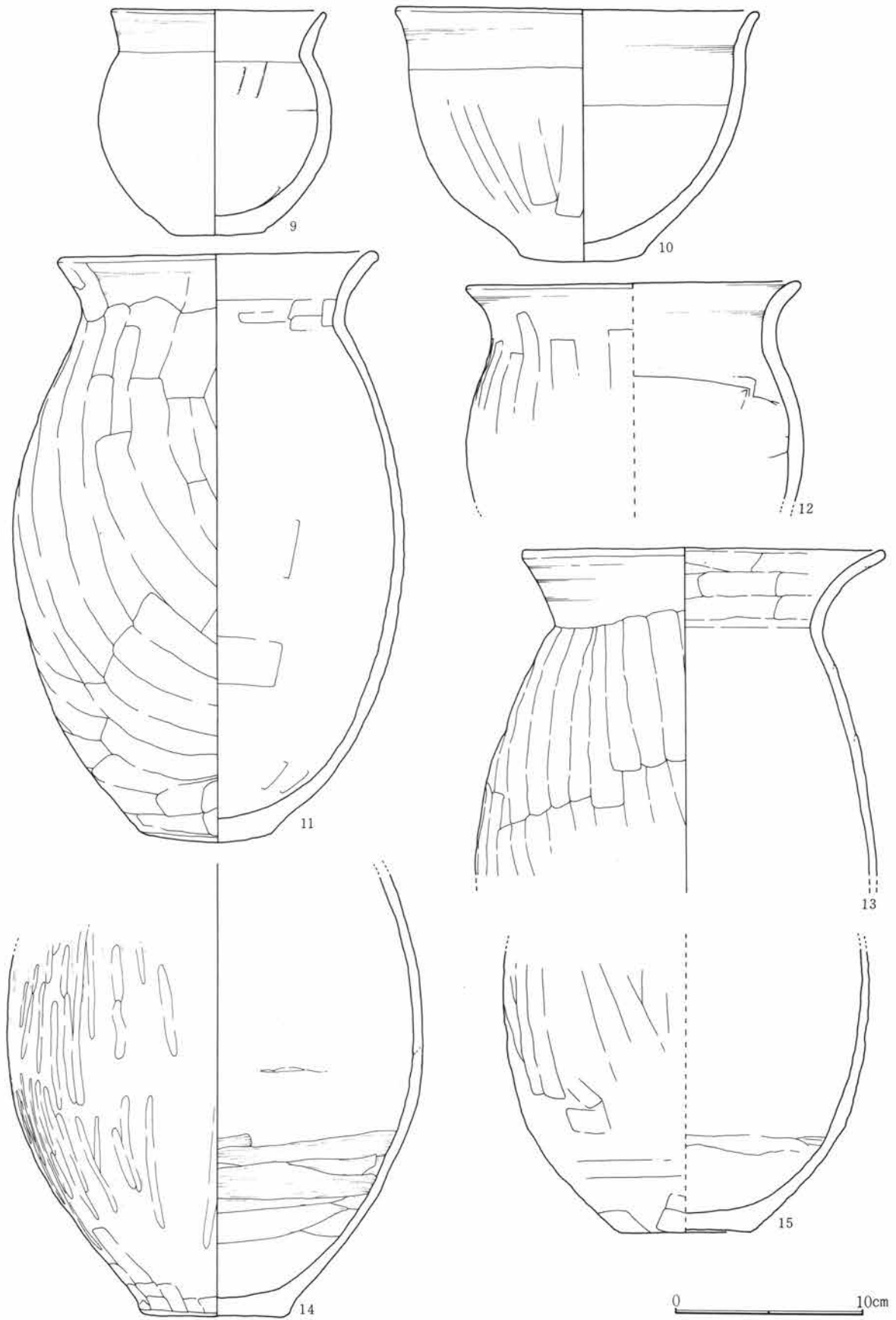


Fig. 419 L197号住居跡出土遺物(2)

第2章 遺構と遺物

L 197号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
418-1 130-1	土師器 杯	3/4	11.8× ×(5.1)	埋土	底部尖り気味で深い。受け部で稜をなし口縁部直立。全体に摩滅。口唇部丸まる。口縁部内外面撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③粗
418-2 130-2	土師器 杯	ほぼ完 形	12.4× ×5.2	埋土	底部丸く深い。受け部で稜をなし口縁部直線的に直立。口唇部内面僅かに段をなす。口縁内外面・内面底部撫で。底部外面一定方向の篋削り。	①良好 ②橙 ③密
418-3 130-3	土師器 杯	口縁部	14.2× ×(3.9)	貯蔵穴埋 土	受け部で稜をなし口縁部直立。口縁部内外面撫で。底部外面一定方向篋削り。	①良好 ②橙 ③細砂混る
418-4 130-4	土師器 杯	3/4	13.5× ×(5.0)	埋土	底部丸く深い。口縁部短く強く外屈する内斜口縁。口唇部丸まる。体部外面横位篋削り。全体に摩滅顕著。	①良好 ②明赤褐 ③粗・砂混る
418-5 130-5	土師器 高杯	3/4	17.2× ×(7.8)	貯蔵穴	杯腰部小さく張り体部大きく開き口縁部緩く外反。脚部外反気味に開く。口縁部横撫で。体部上方に沈線1~2条。	①良好 ②明赤褐 ③砂混る
418-6 130-6	土師器 高杯	脚部	脚径4.2	竈	脚部緩く外反気味に開く。外面横方向の撫で。内面撫で。	①良好 ②明赤褐 ③砂混る
418-7 130-7	土師器 甗	完形	14.1×口径 2.0×11.2	竈	単孔。胴部僅かに張る。口縁部小さく外傾。口縁部内外面横撫で。胴部上半縦位篋撫で・下半斜位篋削り。内面篋磨きのような撫で。底部篋当て痕。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗・砂混る
418-8 130-8	土師器 甗	完形	25.6×9.8 ×19.5	貯蔵穴	単孔。胴部直線気味に立ち上がり口縁部外反。口縁部横撫で。胴部外面縦位篋削り後篋磨き。内面撫で後篋磨き。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや密・細砂混る
419-9 130-9	土師器 小形甗	ほぼ完 形	11.3×5.0 ×11.9	竈	底部平底。胴部丸く張り口縁部くの字状に開く。口縁内外面横撫で。体部外面撫で。内面篋あて痕・接合痕。	①良好 ②鈍い赤褐 ③やや粗・細砂混る
419-10 130-10	土師器 鉢	ほぼ完 形	19.1×6.5 ×13.4	貯蔵穴	底部肥厚しやや張る。体部丸く張る。口縁部緩く外反し口唇部丸い。口縁内外面撫で。体部縦位篋削り。底部撫で。	①良好 ②鈍い黄橙 ③細砂混る
419-11 130-11	土師器 甗	3/4	16.9×7.0× 30.6最大径20.6	貯蔵穴	肩部張りなく中位で張る長胴。口縁部外反して開く。底部肥厚しやや張る。口縁部横撫で。胴部縦・斜位篋削り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗・砂混る
419-12 131-12	土師器 甗	下半欠 損	17.6× ×(11.4)	竈	胴部丸く張り口縁部強く外反。口縁部内外面横撫で。胴部外面縦位篋削り。内面横位篋撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗・細砂混る
419-13 131-13	土師器 甗	下半欠 損	19.1× ×(17.9)	竈・貯蔵 穴	胴部中位やや張らむ。口縁部外反して大きく開く。口縁部内外面横撫で。内面篋撫で。胴部外面縦位篋削り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗・小石混る
419-14 131-14	土師器 甗	上位欠 損	-×7.8×(2 3.1)最大径21.9	竈	平底。最大径は中位でやや丸く張る。胴部小口状工具による調整後縦篋磨き。内面横・斜方向の小口状工具調整。	①良好 ②橙 ③密・白色粒混る
419-15 131-15	土師器 甗	胴部	-×6.8 ×(14.7)	竈埋土	胴部丸く張る。胴部中位縦位篋削り・下位横位篋削り。内面接合部に篋撫で。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗・砂混る

L 198号住居跡 (Fig. 420~423・PL. 32、131、132)

L区第4台地の調査区中央部やや西に位置し、72~74L20~22の範囲にある。L152号・L180号住居跡と重複し、両者より古い時期の所産である。

平面形は整った方形を呈し、南北長4.15m・東西長4.1mを測る。東西軸方位はN-105°-Eを示す。壁高は約28cm、床面は平坦をなし踏み締まりは良好である。貯蔵穴は南東部にあり長い楕円形を呈するが、一部L152号住居跡の竈燃焼部掘形と重なり原形を知ることができない。深さ約20cmを測る。壁下の溝は四壁に巡り、幅10cm程度、深さ4~5cmである。床下の掘形は不規則な落ち込みが多く、埋土は焼土塊などを含む粘性土である。

竈は東壁のほぼ中央に付設され、大きく楕円形に掘り込まれる。袖材は検出されないが左袖部には構築材埋設痕がみられる。燃焼部中央には円柱状の支脚が残る。竈埋土の先端部には厚く焼土塊層があり天井部の崩落と考えられる。火床の焼土層が残り、掘形は深く挿鉢状の落ち込みである。燃焼部幅約60cm・奥行き約1mを測る。先端部の Pit は後世のものである。

出土遺物は散在しており、土師器・須恵器杯の他滑石製白玉・鉄器がある。

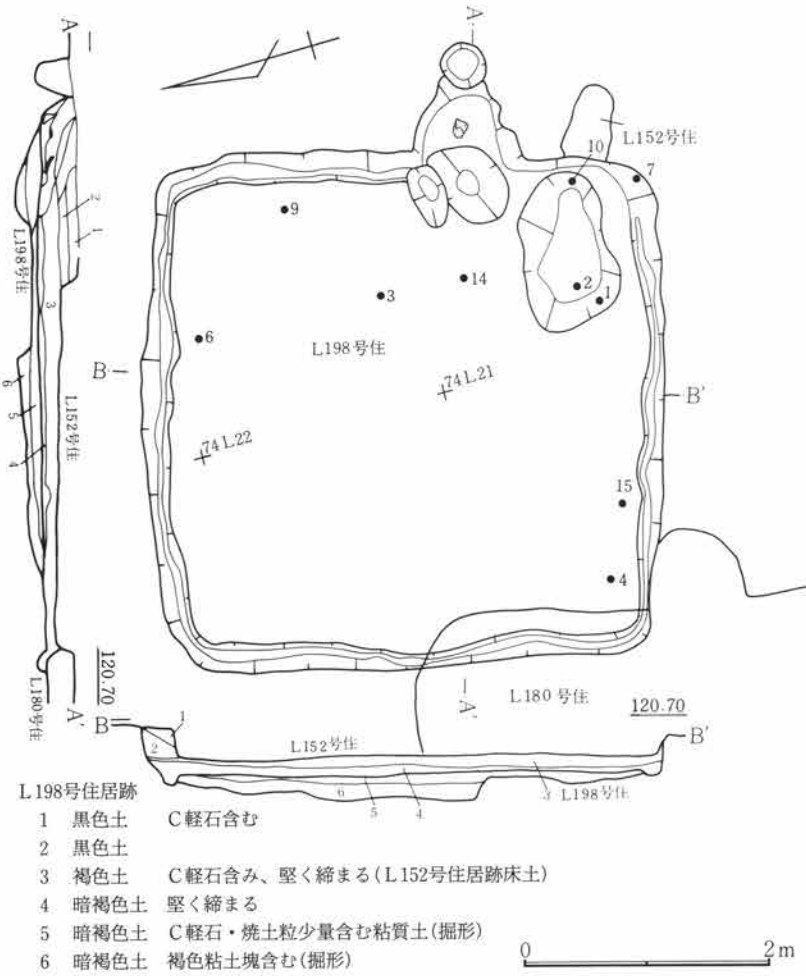


Fig. 420 L198号住居跡

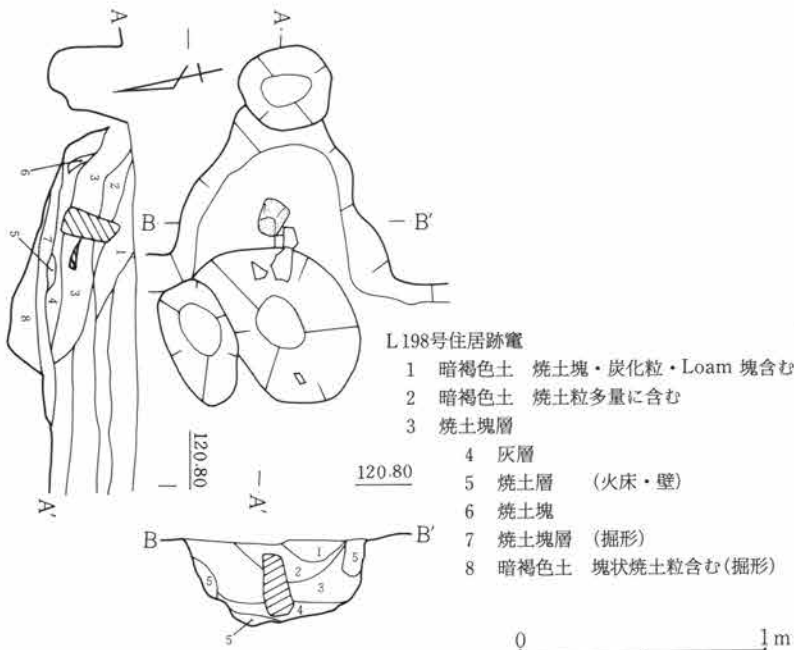


Fig. 421 L198号住居跡竈

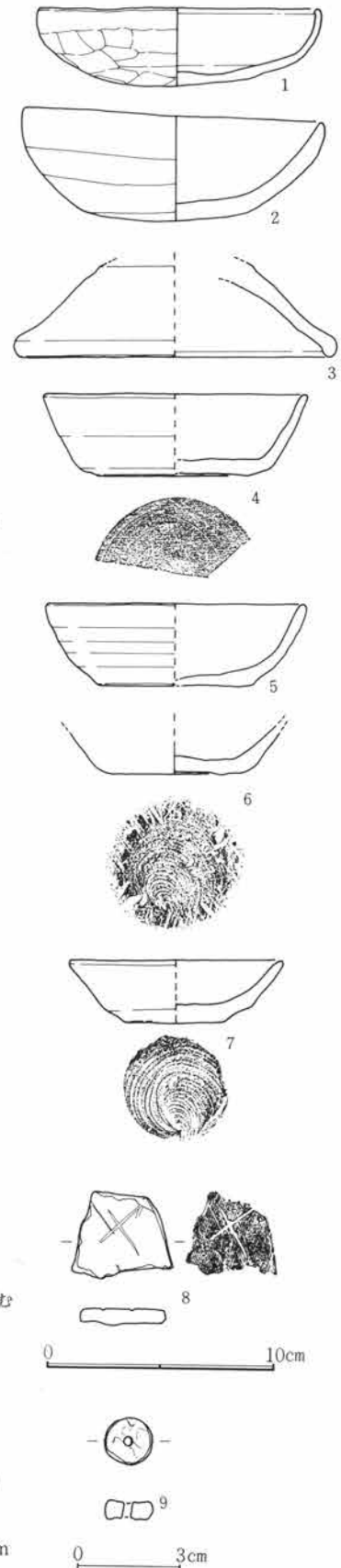


Fig. 422 L198号住居跡出土遺物(1)

第2章 遺構と遺物

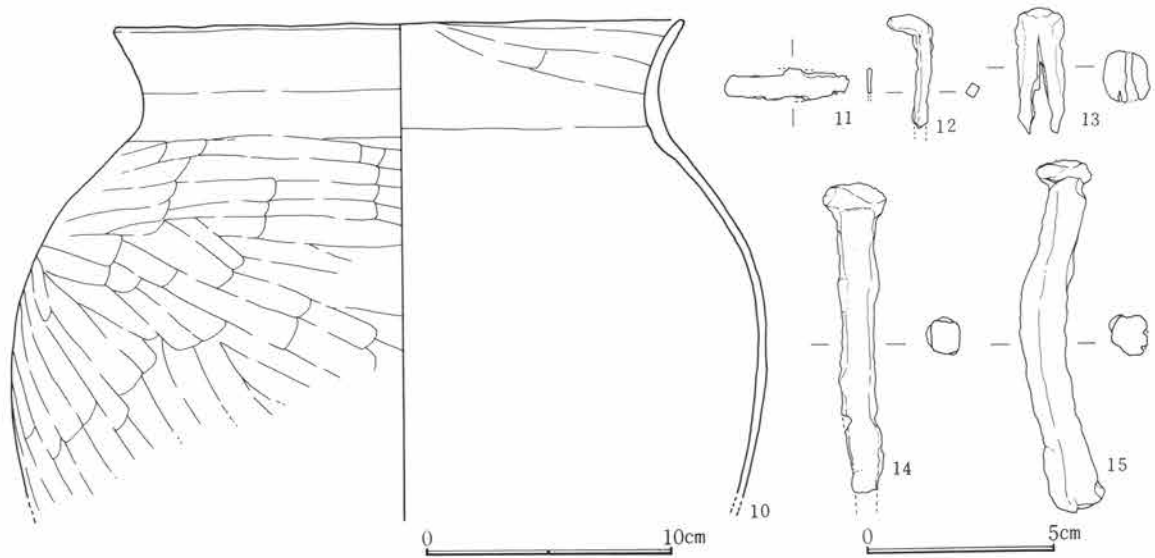


Fig. 423 L198号住居跡出土遺物(2)

L198号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
422-1 131-1	土師器 杯	完形	12.2×— ×3.3	貯蔵穴	底部丸味をもち不安定。口縁部緩く内湾して口唇部丸く内屈。口縁部横撫で。底部不定方向篋削り。	①良好 ②鈍い褐 ③やや密・砂混る
422-2 131-2	土師器 杯	半	12.8×7.2 ×4.9	貯穴・埋土 床下掘形	器肉やや厚め。底部丸味をもち体部から口縁部内湾。体部篋撫で。全体的に摩滅顕著。	①良好・硬 ②鈍い 黄橙 ③やや密
422-3 131-3	須恵器 蓋	破片	13.6×— ×(4.1)	+ 8	体部深い。天井部丸く体部緩く外反気味に開く。口縁部折れる。口唇部丸い。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③やや密・白色粒混
422-4 131-4	須恵器 杯	半	11.4×6.4 ×3.6	床直	体部直線的に外傾。口唇部丸い。轆轤成形。底部切り放し後回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
422-5 131-5	須恵器 杯	半	11.2×6.8 ×3.6	埋土	体部やや丸味をもち内湾気味に開く。口唇部丸い。見込部器肉薄い。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密・細砂混る
422-6 131-6	須恵器 杯	底部	—×5.6 ×(2.1)	+ 3	腰部に丸味。体部直線的に外傾か。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密・砂混る
422-7 131-7	須恵器 杯	完形	9.2×4.2 ×2.6	埋土	腰部でくびれ上半は直線的に外傾する。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②鈍い黄褐 ③やや密
422-8 131-8	須恵器 杯	底部破片	厚0.7	埋土	轆轤成形。底部に「×」刻書あり。	①良好 ②灰白 ③やや密
422-9 131-9	石製品 白玉	完形	径1.4厚0.5 孔径0.3	埋土	両面粗い成形。側面粗い調整。	滑石
423-10 131-10	土師器 甕	下半欠損	22.6×— (18.9)最大径30	貯蔵穴・埋土	胴部強く張り球胸を呈す。口縁部外反して開く。口縁部横撫で。胴部横・斜位篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗・細砂混る
423-11 132-11	銅製品 小片	小片	厚0.1	埋土	薄い板状。銅碗の口縁部か。	
423-12 132-12	鉄器 角釘	端部欠損	長(3) 幅(0.4)	埋土	頭部形状折頭式か。	
423-13 132-13	鉄器 不明		長(3.4)	+ 6	芯部腐蝕。	
423-14 132-14	鉄器 角釘	端部欠損	長(8.5) 幅0.8	埋土	頭部形状折頭式。	
423-15 132-15	鉄器 角釘	端部欠損	長(9.3) 幅1	+ 1	頭部形状折頭式。身部錆び著しく断面形状は不明瞭。	

L199号住居跡 (Fig. 424~427・PL. 32、132、133)

L区第4台地の調査区ほぼ中央に位置し、70~73L17~20の範囲にある。L151号・L152号・L196号住居跡と重複している。また南西ではL2号墓があり、いずれより古い時期の所産である。北東部は掘形の深いL196号住居跡によって消失している。

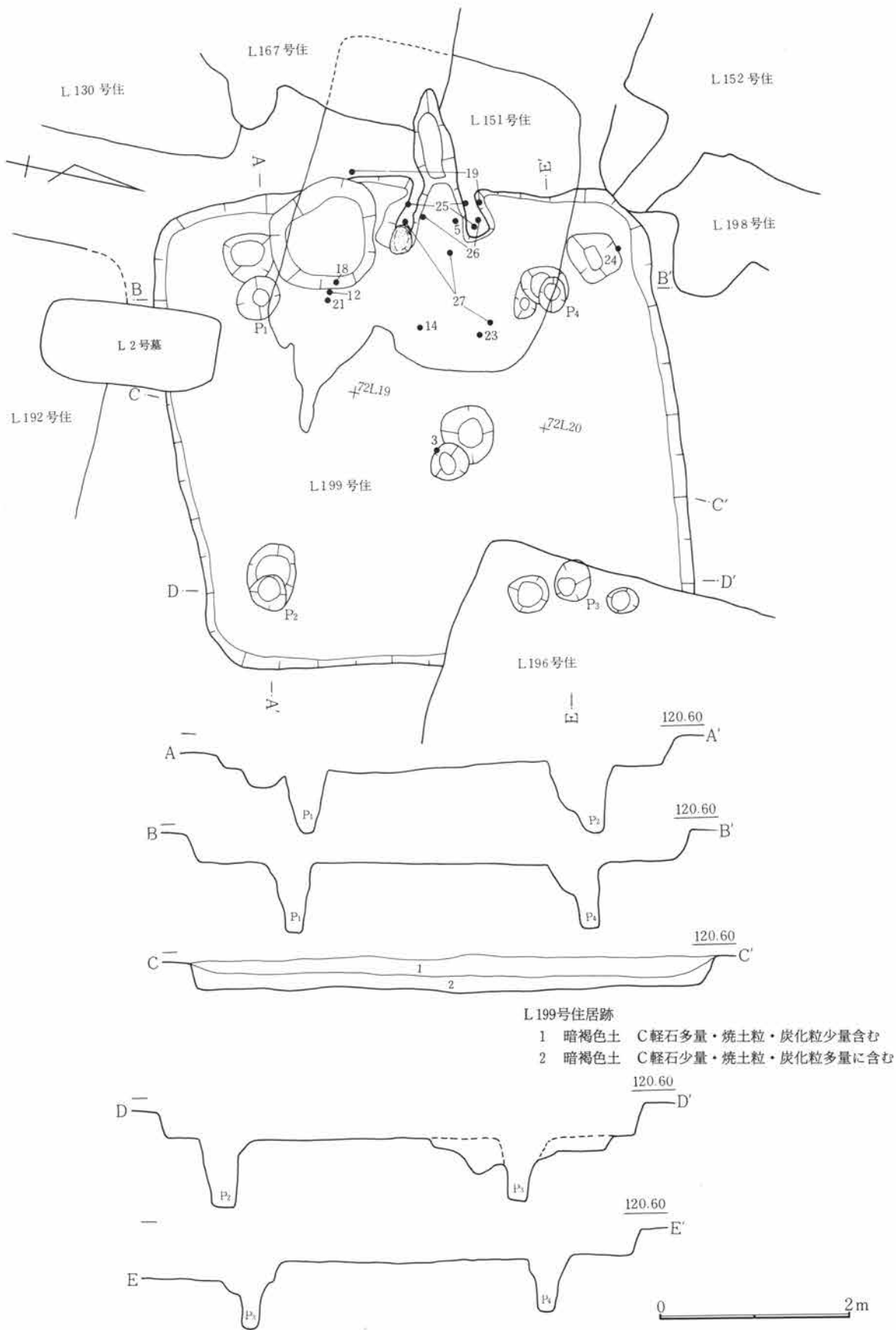


Fig. 424 L199号住居跡

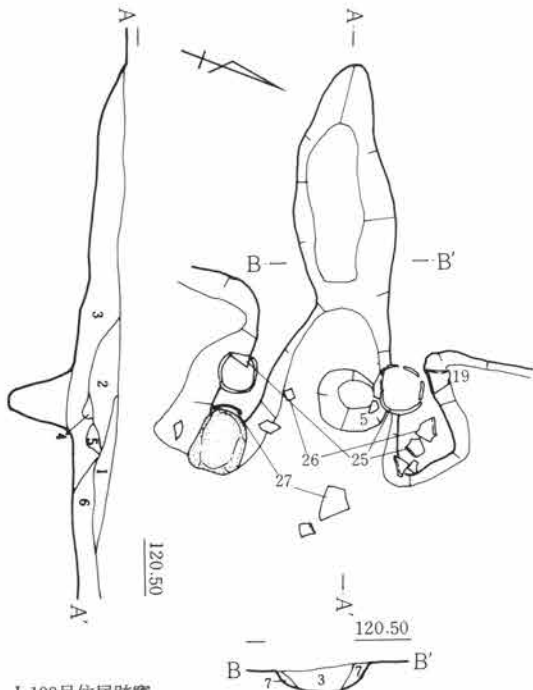
第2章 遺構と遺物

平面形は南北軸がやや長い方形を呈する。南北長約5.4m・東西長4.9mを測り、東西軸方位はおよそN-71°-Eを示す。壁高は約30cmを測り、床面は中央部が僅かに低く踏み締まりは比較的良好だが周辺部は弱い。

貯蔵穴と考えられる土坑は北西に設けられるが平面規模は小さい。径45×60cm・深さ73cmである。柱穴はP₁～P₄と考えられる。P₁は上径45cm・下径15cm・深さ62cm、P₂は上径35cm・下径25cm・深さ70cm、P₃は上径35×45cm・下径15cm・深さ65cm、P₄は上径30×35cm・下径17cm・深さ45cmを測る。柱間はP₁・P₂が3m、P₂・P₃が3.1m、P₃・P₄が3m、P₁・P₄が3mである。P₁・P₂・P₄の各柱穴には重なる状態で深い落ち込みが付随しているが、柱材の抜き取りの痕跡と思われる。床面中央部には長径15cm前後の川原石が集中して出土しているが、出土面下は径40cm・深さ20cm程度のPit状窪みとなっている。

竈は西壁ほぼ中央に付設され、袖部は掘形を残し住居内に突出する形態である。燃烧部は住居内にあり、僅かな段差をもって長い煙道部が壁外に延びる。左右袖部には土師器甕が埋設され、左袖先端には凝灰岩質材が据えられる。袖部長さ約70cm・内法55cm、燃烧部奥行き55cm、煙道部長さ1.1mを測る。竈左の大形土坑はL151号住居跡に伴うものである。

出土遺物は比較的多く、土師器・須恵器杯類、土師器甕などがある。



L199号住居跡竈

- 1 褐色土 焼土粒・黄褐色土塊含む
- 2 焼土塊層
- 3 褐色土 焼土塊多量・Loam 塊を含む
- 4 Loam 塊
- 5 暗褐色土塊
- 6 暗褐色土 焼土塊・Loam 塊含む
- 7 焼土層 (壁)



Fig. 425 L199号住居跡竈

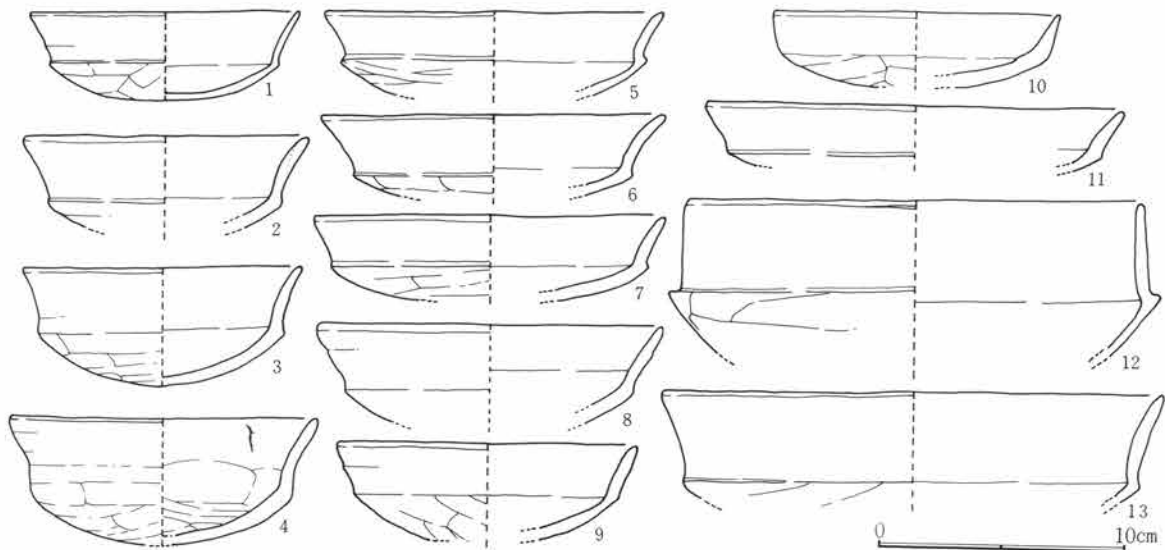


Fig. 426 L199号住居跡出土遺物(1)

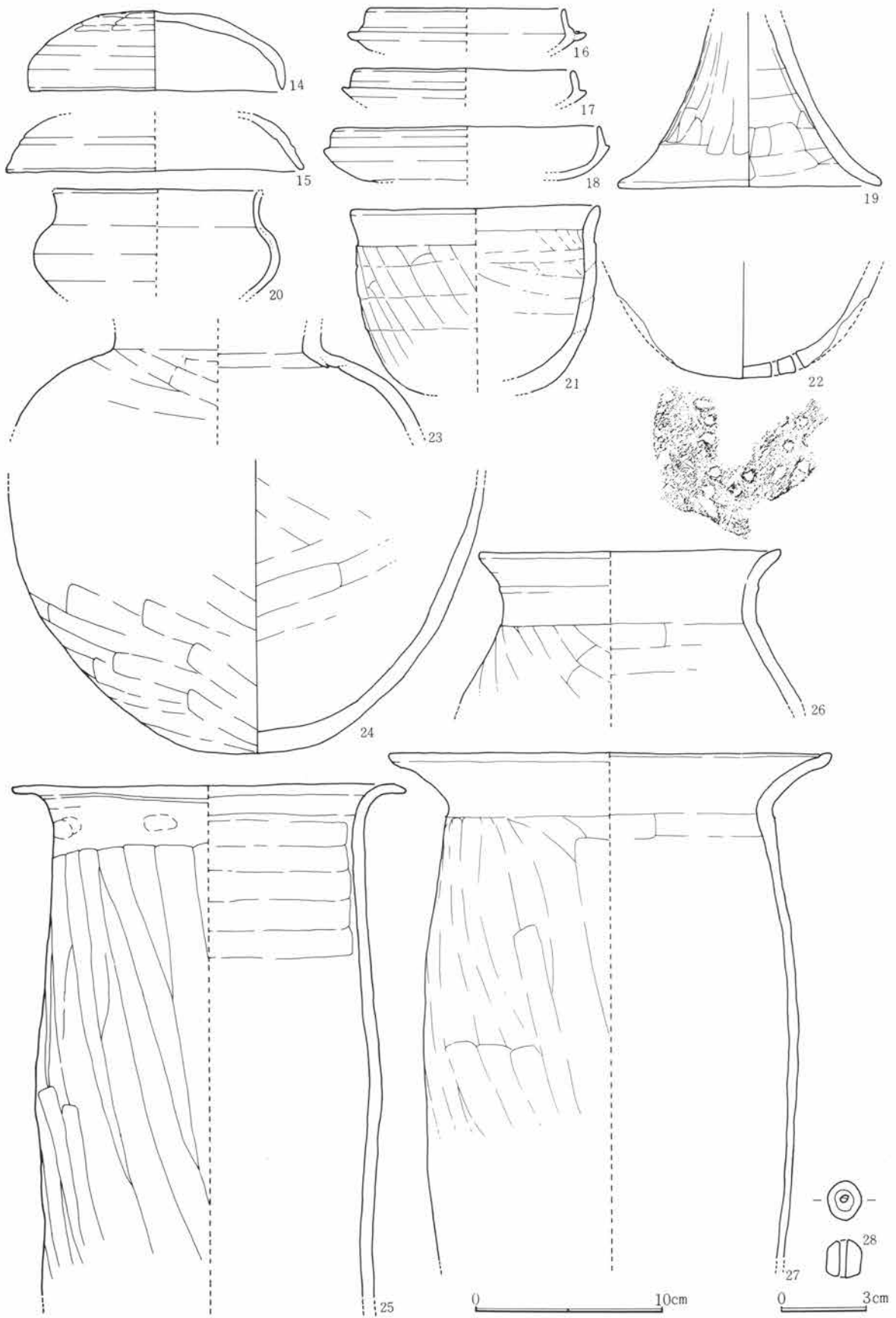


Fig. 427 L199号住居跡出土遺物(2)

第2章 遺構と遺物

L 199号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
426-1 132-1	土師器 杯	1/4	10.8× ×3.5	埋土	器肉薄い。底部浅い丸底。受け部で強く屈し稜をなし口縁部外反して開く。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密・細砂混る
426-2 132-2	土師器 杯	1/6	11.4× ×(3.6)	床下・埋土	底部浅い丸底。受け部で緩く段をなす。口縁部外反して開く。口縁部横撫で。底部篋調整。内面撫で。	①良好 ②浅黄橙 ③やや粗
426-3 132-3	土師器 杯	1/6	11.0× ×4.7	埋土・床下埋土	底部深く丸い。受け部で強く屈し口縁部外反して開く。口唇部丸まる。口縁部内外面横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
426-4 132-4	土師器 杯	1/4	12.2××5.1 口縁高1.9	埋土	器肉厚い。底部丸く深い。口縁部くびれ強く内湾気味に開く。口縁部内外面横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密・小石混る
426-5 132-5	土師器 杯	1/4	13.6× ×(3.3)	竈	底部浅く丸味をもつか。受け部で強く屈し稜をなす。口縁部外反して開く。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗・細砂混る
426-6 132-6	土師器 杯	1/6	13.6× ×(3.2)	床下・埋土	底部浅い丸底。受け部で強く屈し口縁部大きく外反して開く。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや密
426-7 132-7	土師器 杯	口縁部	14.0× ×(3.3)	埋土	底部浅く丸底気味。受け部で小さく稜をなし口縁部やや低く外反して開く。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗・細砂混る
426-8 132-8	土師器 杯	小片	13.8× ×(3.9)	埋土	浅い丸底。受け部で緩く段をなす。口縁部やや外反して開く。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②淡黄 ③やや粗
426-9 132-9	土師器 杯	1/6	12.0× ×(3.8)	埋土	器肉厚く底部浅い丸底。受け部で緩く段をなし口縁部やや外反。口唇部丸い。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや密
426-10 132-10	須恵器 杯	1/6	11.4× ×(2.9)	埋土	底部浅い丸底。口縁部直線的に外傾し口唇部細る。口縁部横撫で。底部手持ち篋削り。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密・夾雑物混
426-11 132-11	土師器 杯	小片	16.6× ×(2.4)	埋土・竈	底部浅い。受け部で緩く段をなす。口縁部やや肥厚し外反気味に開く。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗・細砂混る
426-12 132-12	土師器 杯	1/6	18.2× ×(6.1)	埋土・+15	大形。受け部断面略三角の強い段をなす。口縁部高く直線的に内傾気味に立つ。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
426-13 132-13	土師器 杯	口縁部	20.0× ×(4.3)	埋土	大形。底部浅く丸底気味。受け部で段をなす。口縁部高く外反気味に開く。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
427-14 132-14	須恵器 杯	1/6	13.2× ×4.1	埋土	底部丸い。口縁部やや内湾気味に直立。轆轤成形。底部手持ち篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密・細砂混る
427-15 132-15	須恵器 杯	小片	15.8× ×(2.9)	竈	腰部丸く体部浅い。腰部僅かに外反。口唇部丸い。体部に2条の弱い凹線。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③やや密・黒色粒混
427-16 132-16	須恵器 杯	小片	10.4××(2.2)受部径12.6	埋土	受け部やや尖り強く突出。口縁部外反気味に内傾。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③密・黒色粒混る
427-17 132-17	須恵器 杯	小片	11.6××(1.7)受部径12.8	埋土	底部浅く偏平か。受け部断面略三角の段をなす。口縁部内湾気味に立つ。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③密・細砂混る
427-18 132-18	須恵器 杯	小片	14.0××(2.8)受部径15.0	貯蔵穴	底部偏平。腰部丸く受け部丸まる。口縁部内湾気味に立ち上がる。口唇部細る。轆轤成形。回転篋削り。	①良好 ②灰 ③密
427-19 132-19	土師器 高杯	脚部1/2	—×13.8 ×(8.4)	竈・床下・埋土	脚部ややハの字状に開く。端部丸まる。外面篋削り・下位横撫で。内面横位篋撫で。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
427-20 132-20	須恵器 壺	破片	(11.0)× ×(5.4)	埋土	肩部強く張る。口縁部外反気味に直立。口唇部欠損。轆轤成形。最大径12.9	①良好 ②灰 ③やや密・砂混る
427-21 133-21	土師器 壺?	1/2	13.2× ×(9.7)	埋土・+14	胴部丸く肩部に僅かな段。口縁部短く直立気味に開き口唇部丸い。口縁部横撫で。胴部縦位篋削り。接合痕顕著。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
427-22 133-22	土師器 甗	底部	—×— ×(5.3)	埋土・床面	底部丸底気味。多孔を穿つ。内外面撫で。	①良好 ②黄橙 ③やや粗・夾雑物混
427-23 133-23	土師器 壺?	肩部	—×—×(5) 頸部径11.0	+3	肩部強く丸く張る。頸部横撫で。肩から体部篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗・夾雑物混
427-24 133-24	土師器 甗	下半	—×—×(13.7) 最大径24.8	+5	胴部強く張り球胴を呈す。底部やや丸底気味。胴部斜位篋削り。内面斜位篋撫で。	①良好 ②灰白 ③やや粗・夾雑物混
427-25 133-25	土師器 甗	下位欠損	20.7× ×(26.5)	竈	肩部張りなく長胴を呈す。口縁部大きく水平に外反し口唇部丸い。口縁部横撫で。内面横位篋撫で。胴部縦位篋削り。	①酸化 ②橙 ③やや粗
427-26 133-26	土師器 甗	口縁部	15.8× ×(7.9)	竈・埋土	胴部やや張り気味。口縁部直立後上半は外反。口縁部横撫で。胴部縦・斜位篋削り。内面横位篋撫で。	①良好 ②灰白 ③やや粗・夾雑物混
427-27 133-27	土師器 甗	下位欠損	23.2× ×(26.4)	竈・床下・+3	胴部張りなく長胴を呈すか。口縁部外反して大きく開く。口縁部横撫で。胴部縦位篋削り。内面撫で。	①良好 ②浅黄橙 ③粗・夾雑物混る
427-28 133-28	土製品 玉	完形	径1.2厚1.3 孔径0.2	床直	焼成小玉・穿孔両面摩滅。	①良好 ②赤黒 ③密

L 201号住居跡 (Fig. 428、429、434・PL. 32)

L区第4台地の調査区ほぼ中央に位置し、67・68L14・15の範囲にある小規模な住居跡である。L184号・L204号・L213号・L214号・L215号・L218号の各住居跡と重複している。新旧関係はL184号住居跡より旧く、他より新しい時期の所産である。

平面形は東壁線の南側が折れて南東隅に短い壁線をつくる不整五角形をなす。東西・南北長とも約3mを測り、東西軸方位はおよそN-97°-Eを示す。壁高は約25cmを測り、床面は南側が低く踏み締まりが弱い。貯蔵穴などは検出されない。

竈は東壁が折れて短い壁線をなす南東部に付設され、燃焼部は楕円形に掘り込まれる。袖部には壁線上に凝灰岩質材を埋設する。袖材間内法約32cm、燃焼部奥行き約70cmを測る。

出土遺物は極めて少なく、土器類は検出されていない。

L 204号住居跡 (Fig. 428、430、434・PL. 32、133)

L区第4台地の調査区ほぼ中央に位置し、66～68L13・14の範囲にある。L201号住居跡と重複しこれより古い時期の所産である。北壁線及び床面北側はこの重複によって消失している。

平面形は隅丸の方形と考えられ、東西長3.5m、南北は南壁より約3.4mの範囲まで確認した。東西軸方位はN-90°-Eを示す。検出面からの壁高は浅く約10cmを測る。床面は平坦をなすが踏み締まりは弱い。貯蔵穴等は検出されていないが住居跡中央部に、径50cm・深さ40cmの土坑が検出され土師器甕片が出土している。

竈は東壁線南端に付設されるが、竈軸線は東壁直交軸よりおよそ25°南へ傾く。燃焼部は小さく方形気味に掘り込まれ、平坦のまま長い煙道部が延びる。火床面は焼土化が著しく、火床面前方には円柱状の支脚材が埋設される。袖材は検出されなかった。燃焼部幅40cm・奥行き55cm・煙道部長さ70cmを測る。

出土遺物は少なく内黒椀・土釜などがある。

L 213号住居跡 (Fig. 428、431、435・PL. 32、134)

L区第4台地の調査区ほぼ中央に位置し、66～68L15～17の範囲にある。L166号・L184号・L201号・L206号・L215号・L217号・L218号の各住居跡と重複している。新旧関係はL166号・L184号・L201号・L206号住居跡より旧く、他よりは新しい時期の所産である。住居跡の西及び南壁線は重複のため消失している。

平面形は隅丸方形を呈すると思われるが詳細は不明である。南北は北壁より約3.75m、東西は東壁より約3.4mの範囲まで確認した。東西軸方位はおよそN-90°-Eを示す。壁高は約20cm、床面は平坦をなし踏み締まりは比較的良好である。埋土中位には焼土層・炭化層の堆積が認められた。焼土層は主に住居跡中央部に集中しおよそ1.6×1.2mの範囲に広がる。炭化層は壁際に分布し、とくに北西部に顕著である。炭化木材は僅かであるが、北壁から西壁沿いでは草類の炭化が著しい。貯蔵穴などの諸施設は検出されていないが、北東部に3基の土坑が見られる。北東隅の土坑埋土には住居跡埋土最下層と同質材が堆積し、住居跡廃棄時には開口していたと考えられるが、他は床下土坑にならうか。

竈は東壁の南端に付設され、燃焼部は楕円形に掘り込まれる。袖材などは遺存していないが、左袖部は壁線より内側に小穴が穿たれ構築材の埋設痕と思われる。火床焼土は残されていない。燃焼部幅約70cm、袖部小穴よりの奥行き1.2mを測る。

出土遺物は散在して検出され、須恵器小杯・灰釉陶器段皿などがある。

第2章 遺構と遺物

L 215・218号住居跡 (Fig. 428、432、433、436、437・PL. 134、135)

L区第4台地のほぼ中央部に位置し、L 215号住居跡は66・67 L14・15に、L 218号住居跡は67 L15・16の範囲にある。L 201号・L 213号住居跡などと重複し消失部分が著しく、両者とも竈部分だけの検出である。またL 218号住居跡はL 128号住居跡によって竈先端部も消失している。

L 215号住居跡竈は現状で燃焼部幅約70cm・奥行き80cmである。L 218号住居跡竈は円柱状の支脚が埋設され、燃焼部幅約60cm・奥行き90cmを測る。

出土遺物は土釜・羽釜片など少量である。

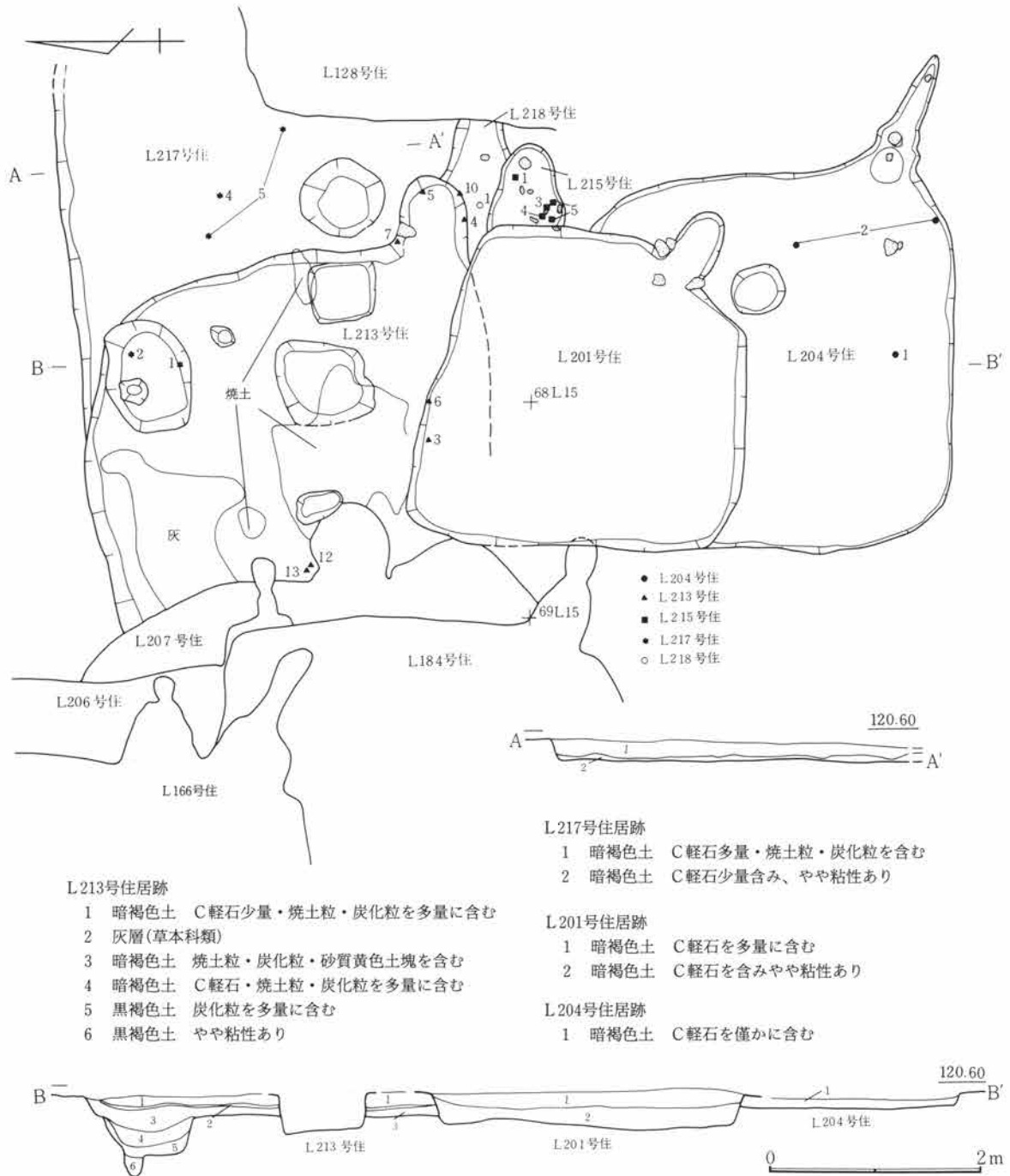
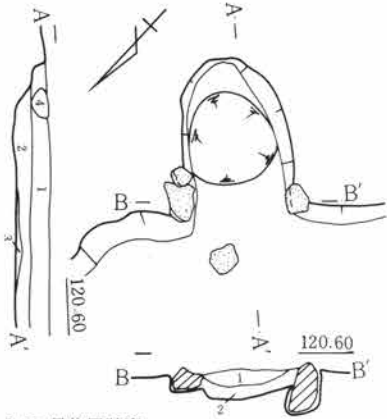


Fig. 428 L 201号・L 204号・L 213号・L 215号・L 217号・L 218号住居跡

L 217号住居跡 (Fig. 428、437・PL. 134)

L区第4台地の調査区ほぼ中央部に位置し、66・67L15～17の範囲にある。L128号・L148号・L213号・L218号住居跡などと重複しているが、L148号住居跡より新しく他よりは古い時期の所産である。ただしL148号住居跡との重複は誤認により東壁線の一部を消失してしまった。確認部分が少なく平面形など詳細は不明である。東西は約3m、南北は北壁より3.2mの範囲まで確認した。北壁線による東西軸方位はおよそN-85°-Eを示す。壁高は約20cm、床面は平坦をなす。南西隅に貯蔵穴と考えられる土坑が検出されている。径70cm・深さ24cmの円形である。竈は認められなかった。

出土遺物は少量である。

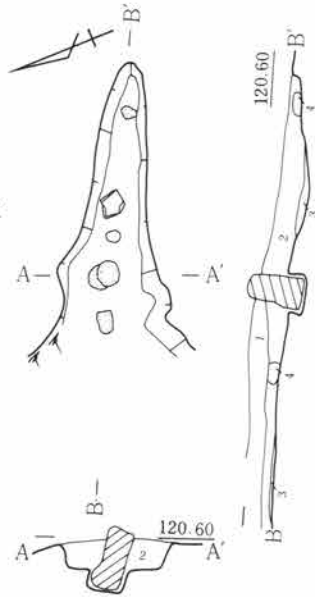


L201号住居跡竈

- 1 灰褐色土 焼土粒・灰を含む
- 2 焼土粒・灰混合層
- 3 焼土層 (火床)
- 4 焼土塊



Fig. 429 L 201号住居跡竈

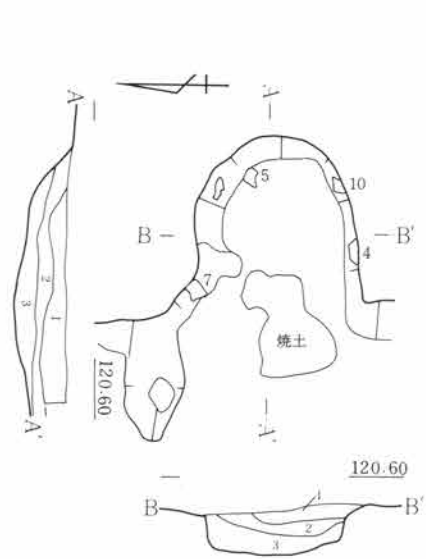


L204号住居跡竈

- 1 褐色土 C軽石・焼土塊含む
- 2 褐色土 焼土粒・灰含む
- 3 灰層
- 4 褐色土塊



Fig. 430 L 204号住居跡竈

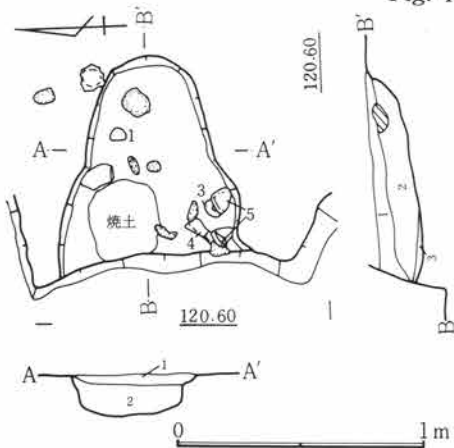


L213号住居跡竈

- 1 暗褐色土 焼土粒少量含む
- 2 暗褐色土 砂質黄褐色土粒を多量に含む
- 3 焼土粒・灰混り層



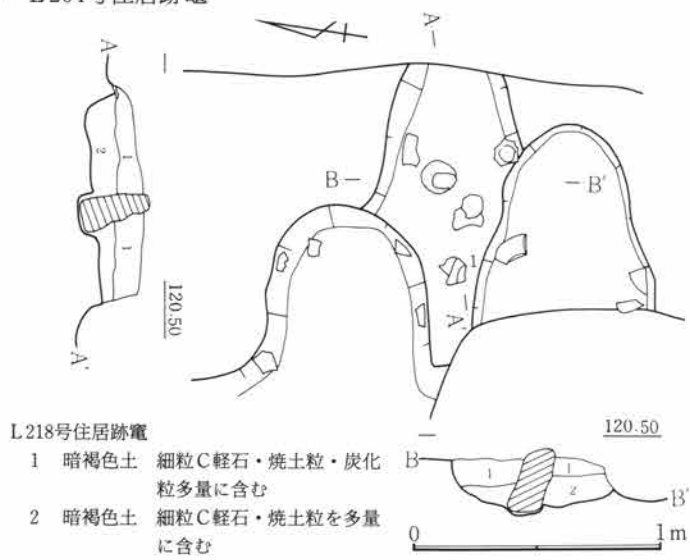
Fig. 431 L 213号住居跡竈



L215号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土塊含む
- 2 暗褐色土 細粒C軽石・焼土粒を多量に含む
- 3 焼土層 (火床)

Fig. 432 L 215号住居跡竈



L218号住居跡竈

- 1 暗褐色土 細粒C軽石・焼土粒・炭化粒多量に含む
- 2 暗褐色土 細粒C軽石・焼土粒を多量に含む

Fig. 433 L 218号住居跡竈

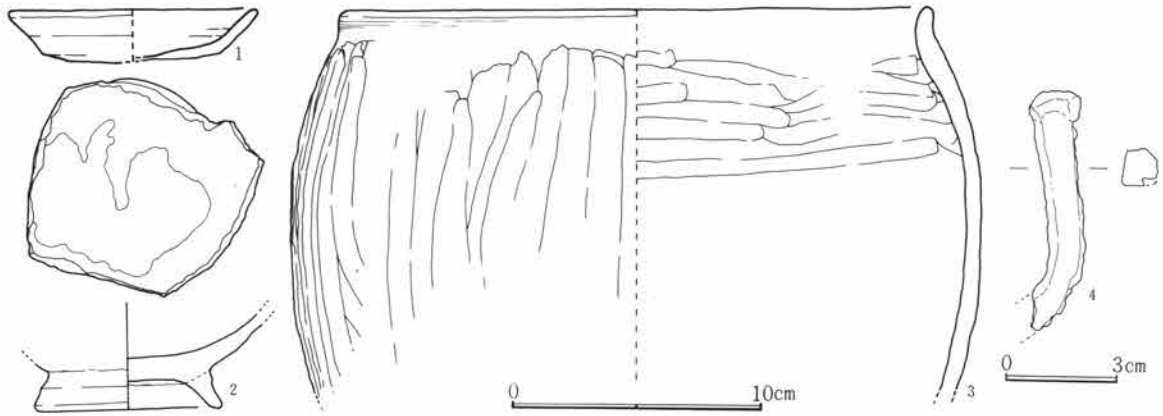


Fig. 434 L201号¹・L204号^{2~4}住居跡出土遺物

L201号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
434-1 133-1	須恵器 杯	完形	10.0×5.2 ×2.0	埋土	見込部極めて薄い。口縁部僅かに外反。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 ②灰白 ③やや粗

L204号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
434-2 133-1	須恵器 椀	底部	—×7.4 ×(3.7)	+1	器肉厚い。腰部やや張る。付高台僅かに稜をなしハの字状に開く。見込部と欠口に煤付着。内面篋磨き。轆轤成形。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや密・細砂混る
434-3 133-2	土師器 鉢	胴部	23.2×— ×(15.5)	埋土・ 0~+4	体部丸く張る。口縁部短く直立。口唇部丸い。外面縦位篋削り。内面横位篋撫で。	①良好 ②明赤褐 ③砂混る
434-4 133-3	鉄器 角釘	端部欠損	長(6.5) 幅1	埋土	頭部形状折頭式。身部曲がる。	

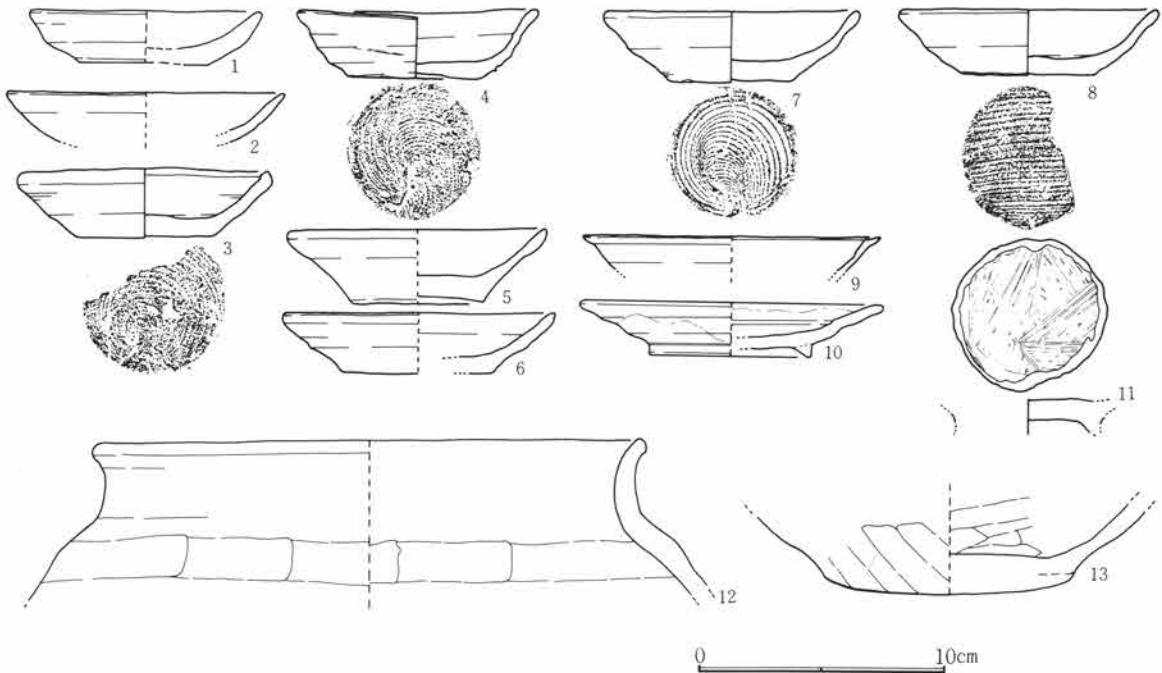


Fig. 435 L213号住居跡出土遺物

L 213号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
435-1 134-1	須恵器 杯	1/4	9.2×5.2 ×2.1	埋土	腰部くびれ体部中で屈し上半再び外傾。轆轤成形。器内厚い。	①酸化気味 ②浅黄橙 ③やや密
435-2 134-2	須恵器 杯	1/4	11.2×— ×(2.0)	埋土	体部内湾気味に開く。口縁部直線的に外傾。轆轤成形。	①酸化気味・良好 ②鈍い橙 ③やや密
435-3 134-3	須恵器 杯	1/4	10.2×5.6 ×2.8	埋土・ +7	体部直線的に開き口縁部内湾し口唇部内側へ丸まる。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②鈍い橙 ③やや粗
435-4 134-4	須恵器 杯	ほぼ完形	9.6×5.3 ×2.6	竈	底部やや肥厚し体部下半に丸味をもつ。口縁部外反し口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③やや粗
435-5 134-5	須恵器 杯	1/4	10.4×5.4 ×2.9	竈	底部肥厚。体部直線的に大きく外傾。体部上位でくびれ口縁部丸く肥厚しやや内湾。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②鈍い橙 ③やや密
435-6 134-6	須恵器 杯	1/4	10.8×6.0 ×2.4	竈	体部直線的に大きく開く。口唇部尖る。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②橙 ③やや密
435-7 134-7	須恵器 杯	1/4	10.2×5.0 ×2.8	竈	底部肥厚。体部内湾気味に大きく開く。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②橙 ③やや密
435-8 134-8	須恵器 杯	1/2	10.4×4.4 ×2.6	埋土	底部肥厚し見込部突出。腰部丸味をもち口縁部僅かに外反し口唇部丸い。轆轤成形。静止糸切り。	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③やや密
435-9 134-9	須恵器 碗?	小片	11.8×— ×(1.4)	埋土	口縁部強く外屈し口唇部細く尖り内湾気味。内面自然釉。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③密
435-10 134-10	灰釉陶器 段皿	1/4	12.2×6.4 ×2.2	竈	体部直線的に開き内面に段。口唇部丸い。付高台低い。内外面施釉。	①良好 ②灰白 ③密
435-11 134-11	内黒土器 碗	底部		埋土	内面黒色処理、不定方向筥磨き。割れ口摩滅著しく調整痕か。	①良好 ②暗灰 ③やや密
435-12 134-12	土師器 甕	口縁部 破片	22.0×— ×(6.1)	竈・埋土	器肉厚い。肩部僅かに張り口縁部は内傾後外反。口唇部丸い。口縁部内外面横撫で。内面筥撫で。肩部横位筥削り。	①良好 ②橙 ③やや粗
435-13 134-13	須恵器 甕	底部破 片	—×9.6 ×(3.6)	竈	底部肥厚し丸味ある。粘土を貼り合わせた痕跡。内面見込部筥削り。外面筥削り。	①良好 ②灰 ③やや粗

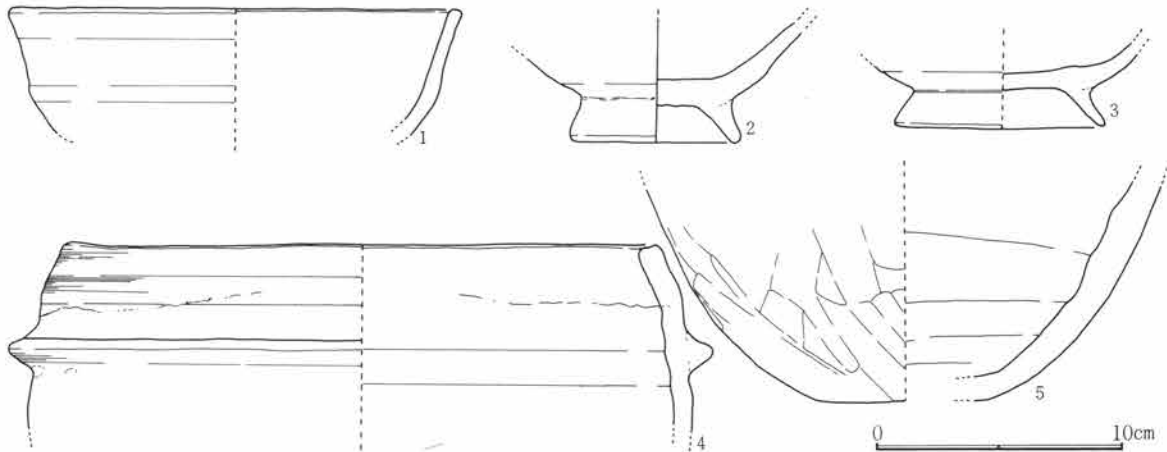


Fig. 436 L 215号住居跡出土遺物

L 215号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
436-1 134-1	須恵器 碗	1/4	18.1×— ×(4.9)	竈	体部中で丸く張り上位は直線的に外傾。口唇部断面矩形気味。轆轤成形。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・砂混る
436-2 134-2	須恵器 碗	上半欠 損	—×6.8 ×(4.8)	竈	腰部でやや張り体部上半直線的に外傾。付高台、やや高く厚く端部丸い。轆轤成形。	①良好 ②鈍い褐 ③やや密・砂混る
436-3 134-3	須恵器 碗	底部	—×8.4 ×(3.5)	竈・床下	腰部張る。付高台、やや高くハの字状に大きく開く。轆轤成形。高台部撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・砂混る

第2章 遺構と遺物

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
436-4 134-4	羽釜	口縁部 破片	23.8×× (7.3)口径28.1	竈・床下	体部やや脹らみをもつ。口縁部丸味をもち内傾。口唇部断形。上端面内斜。鋸やや上方へ向く。接合痕あり。	①良好 ②橙 ③やや密
436-5 134-5	羽釜	下半半	—×6.3 ×(8.7)	竈	胴部丸味をもち底部小さい。内面撫で。腰部斜位篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・砂混る

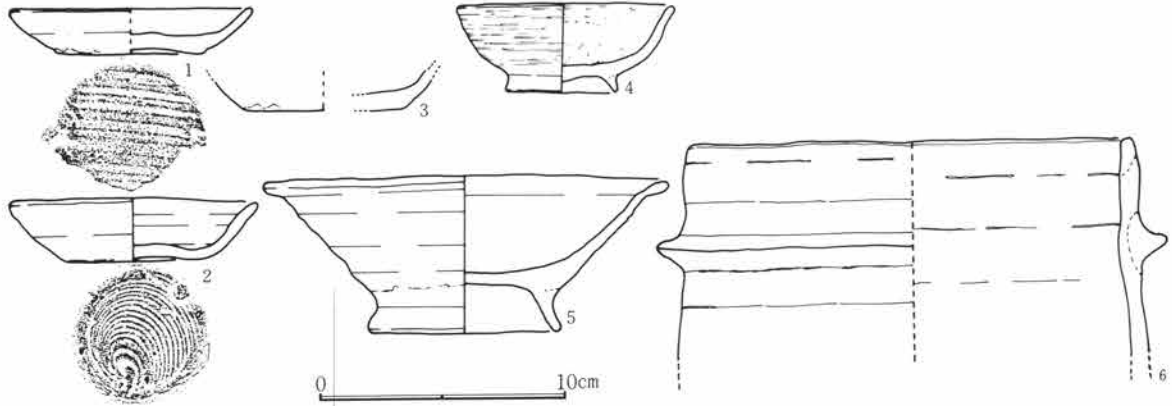


Fig. 437 L217号^{1~5}・L218号⁶住居跡出土遺物

L217号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
437-1 134-1	須恵器 杯	片	9.7×5.8 ×1.8	埋土	体部浅く内湾気味に開く。轆轤成形。静止糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密・粗砂混る
437-2 134-2	須恵器 杯	完形	10.0×5.6 ×2.5	貯蔵穴	器肉薄め。腰部丸く口縁部外反して開く。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②黄橙 ③やや密
437-3 134-3	内黒土器 杯	小片	—×6.0 ×(1.6)	埋土	内面黒色処理。静止糸切り。	①良好 ②浅黄 ③やや密
437-4 134-4	内黒土器 椀	完形	8.8×4.6 ×3.5	+2	体部丸味をもち黒色緩く外反し口唇部丸い。付高台、ハの字状に開く。内外面黒色処理。外面横・内面上半横・下半斜篋磨き。轆轤成形。	①良好 ②暗灰 ③やや密
437-5 134-5	須恵器 椀	片	16.2×7.8 ×6.2	+4~5	体部ほぼ直線的に外傾し口縁部強く外反。口唇部丸い。付高台、高くハの字状に開く。轆轤成形。	①酸化気味・良好 ②浅黄橙 ③やや密

L218号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
437-6 135-1	羽釜	小片	17.8×× (8.5)口径20.3	竈	体部から口縁部直立気味。鋸肥厚し突出。作り雑。	①酸化 ②橙 ③やや粗

L202号住居跡 (Fig. 438)

L区第4台地の東縁に位置し、56・57L17・18の範囲にある。台地縁辺の開削のためか形態・規模など不明部分が多い。北西部でかろうじて壁下の溝部分が検出されたが床面まで削平が及んでいると思われ、凝灰岩質層が露呈している。溝幅10~13cm・深さ2~3cmを測る。柱穴はP₁~P₄があり、いずれも方形の掘形をもつ。現状での規模はP₁が上辺15cm・下辺10cm・深さ5cm、P₂は上辺20cm・下辺8×10cm・深さ14cm、P₃は痕跡程度で辺18cm、P₄は上辺16×22cm・深さは痕跡程度である。柱間はP₁・P₂が1.5m、P₂・P₃が1.75m、P₃・P₄が1.3m、P₁・P₄が1.55mである。

竈・炉などは検出されていない。また出土遺物もみられなかった。

L 205号住居跡 (Fig. 439、440・PL. 33、135)

L区第4台地のやや南に位置し、64~68L10~13の範囲にある。L204号住居跡の竈先端と僅かに重複しているがこれより古い時期の所産である。

平面形は東西に長軸をもち隅丸の方形を呈する大形住居跡である。東西長約7m・南北長5.4mを測り、東西軸方位はN-65°-Eを示す。壁高は約20cm、床面は小さな凹凸がみられ凝灰岩質層を基盤にし安定している。柱穴と考えられる Pit は7箇所を検出されている。支柱穴はP₁・P₃・P₅・P₇を想定できるがP₅はP₇と結ぶ東西線に乗るものの、P₃との南北線からはやや

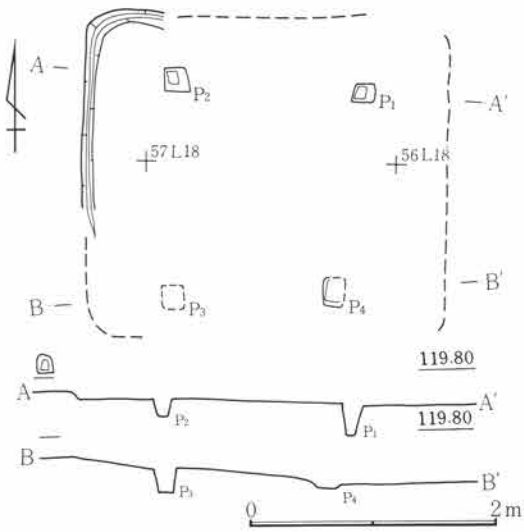


Fig. 438 L202号住居跡

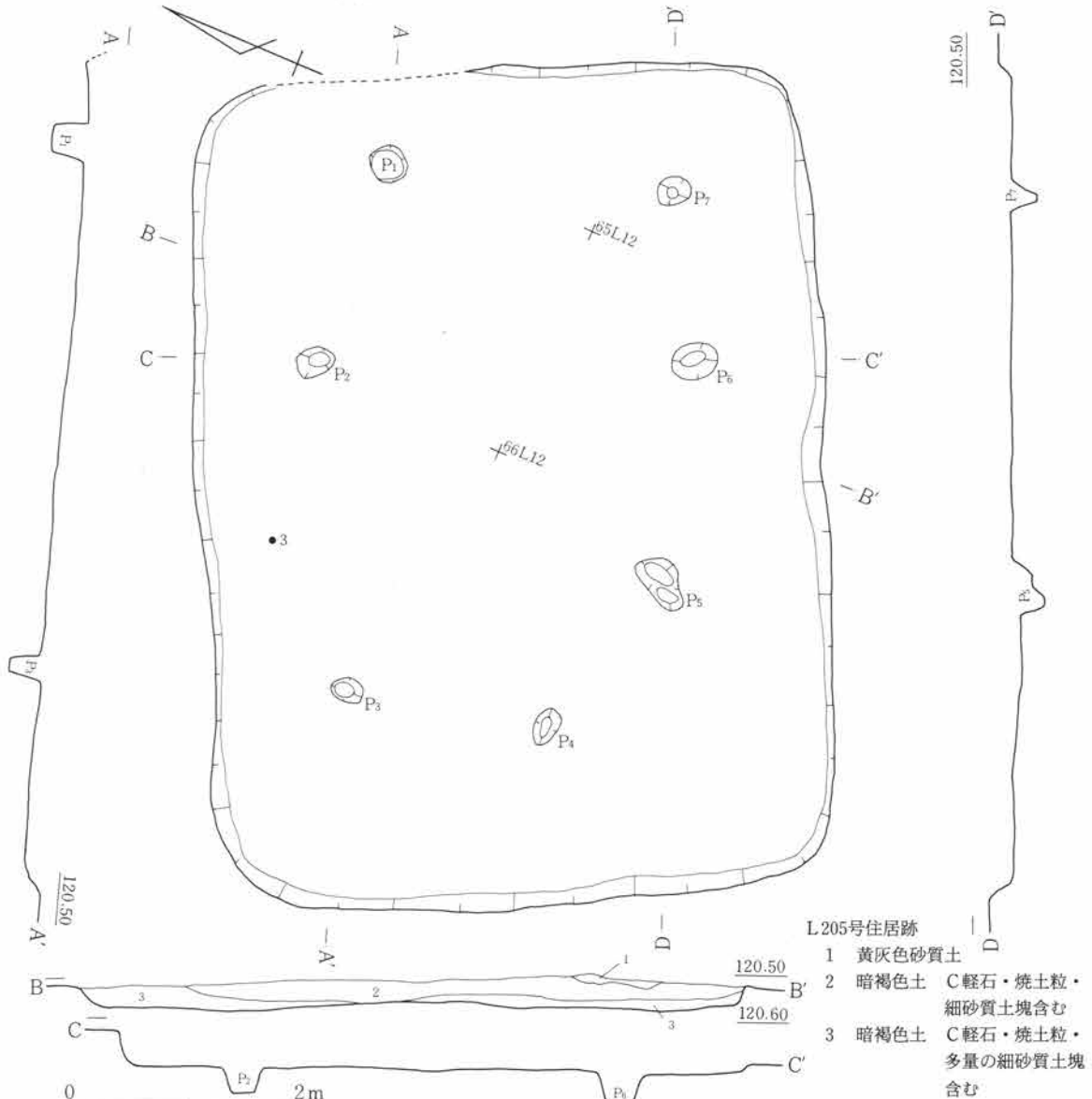


Fig. 439 L205号住居跡

第2章 遺構と遺物

ずれている。また西側中央に位置する補助穴P₄に相対する東側の柱穴は検出されていない。また補助穴P₂・P₆は支柱穴を結ぶ東西線より若干外側に設けられ、東西の中心より僅かに東に偏っている。P₁は上径35cm・深さ27cm、P₃は上径20×30cm・下径15×18cm・深さ28cm、P₅は上径30×50cm・下径20×30cm・深さ30cm、P₇は上径25×30cm・下径10cm・深さ20cmを測る。各柱間はP₁・P₃が4.5m、P₃・P₅は2.9m、P₅・P₇は3.45m、P₁・P₇は2.5mである。補助穴P₂・P₄・P₆は各々上径が25×30cm・20×35cm・30×40cm、下径が15×17cm・14×18cm・10×20cm、深さ20cm・23cm・26cmを測る。

炉跡等は検出されない。出土遺物は少量でS字口縁甕片がある。

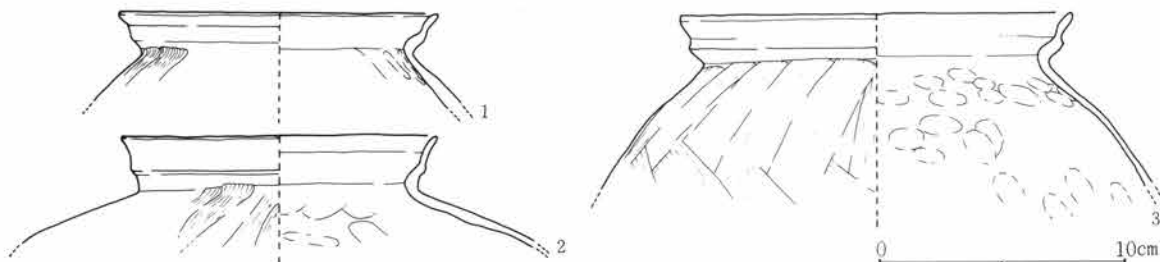


Fig. 440 L205号住居跡出土遺物

L205号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
440-1 135-1	土師器 甕	小片	12.7× ×(3.7)	埋土	胴部丸く張り球胴を呈す。S字口縁。胴部上位右斜行刷毛目。内面指頭痕。口縁部撫で。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや密・砂混る
440-2 135-2	土師器 甕	小片	12.6× ×(4.3)	埋土	胴部大きく張り球胴を呈す。S字口縁。胴部上位右斜行刷毛目。内面指頭痕。口縁部撫で。	①良好 ②鈍い褐 ③やや密・砂混る
440-3 135-3	土師器 甕	小片	15.6× ×(7.0)	床直	胴部大きく張り球胴を呈す。S字口縁。胴部上位右斜行・中位左斜行刷毛目。内面指頭痕あり。	①良好 ②淡黄 ③やや密・細砂混る

L207号住居跡 (Fig. 441、442・PL. 33、135)

L区第4台地の調査区ほぼ中央に位置し、L166号・L184号・L190号・L192号・L206号・L213号・L214号住居跡など多数と重複関係にあり、L214号住居跡より新しいが、他のいずれより古い時期の所産である。

平面形は南壁線がくの字状に屈曲し隅丸の五角形を思わせる。南北長約5.05m・東西長約4.8mを測り、東西軸方位はおよそN-89°-Eを示す。壁高は約32cm、床面は南から西側が僅かに高くなるが明瞭な段差をもたない。踏み締まりは比較的良好である。住居内には数個の土坑状落ち込みが検出されているが性格は不明である。南東隅の土坑は当跡に伴うものではないと思われる。また西壁近くの土坑は埋土に焼土粒及び灰が混在しており、位置的にはL192号住居跡の竈の痕跡とも考えられる。P₁は重複するL214号住居跡の柱穴である。

竈は東壁の南寄りに付設され、燃焼部は楕円形に掘り込まれる。L213号住居跡のため上半は削平を受けており遺存状態は悪い。燃焼部には焼土化した火床面が残る。燃焼部幅70cm・奥行き80cmを測る。

出土遺物は少なく散在している。

L214号住居跡 (Fig. 441、443、444・PL. 33、133、135~137)

L区第4台地の調査区ほぼ中央に位置し、67~70L13~15の範囲にある。L184号・L190号・L201号・L204号・L207号・L213号住居跡など多数と重複しているが、いずれより古い時期の所産である。重複が著し

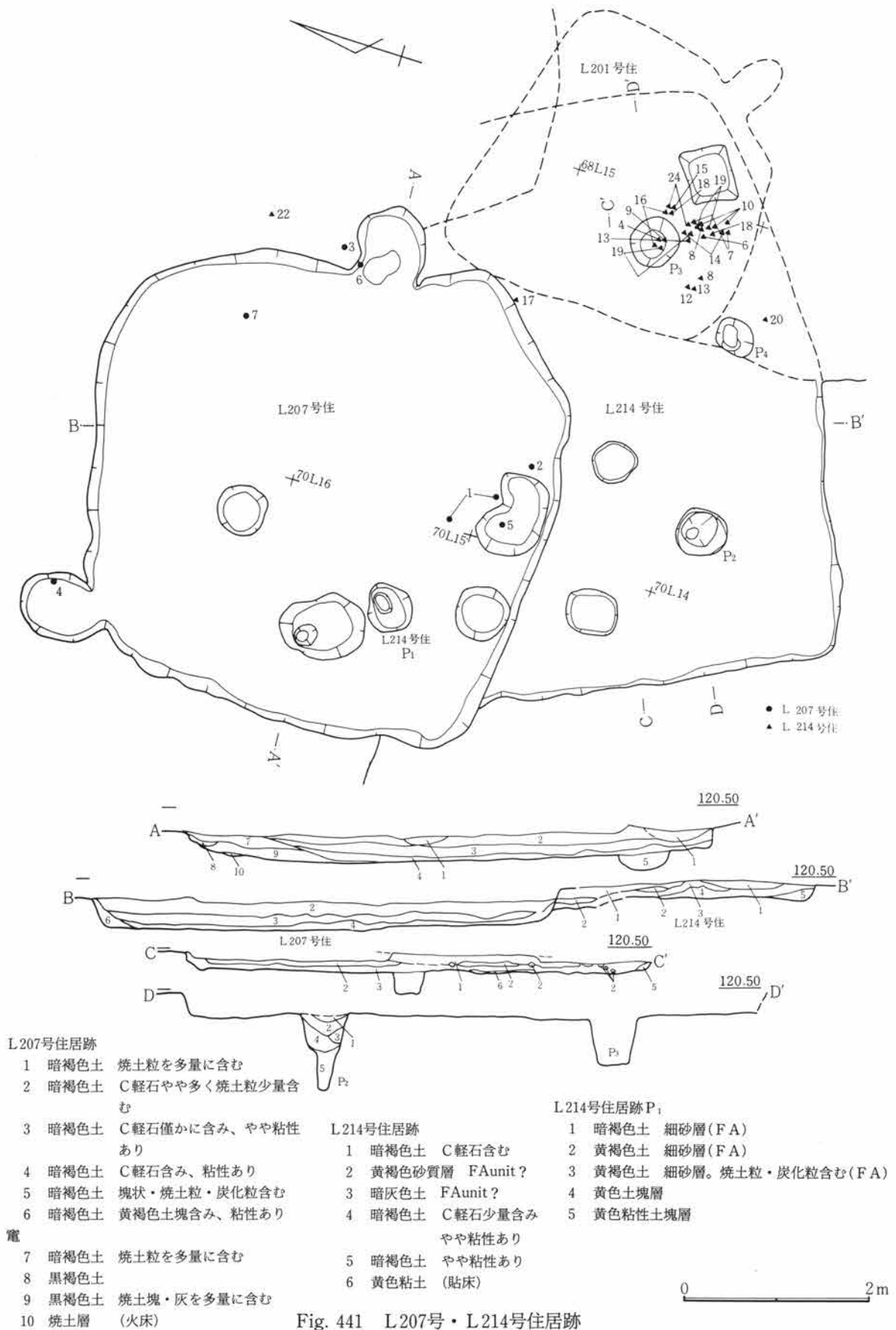


Fig. 441 L 207号・L 214号住居跡

第2章 遺構と遺物

く壁線は南壁から西壁にかけて確認されたのみであり、住居跡の形状・規模など詳細は不明である。

平面形は方形を呈すると思われ、柱穴・貯蔵穴などの位置から推定すれば南北長6.4m・東西長6mの規模である。東西軸方位はおよそN-64°-Eを示す。検出面からの壁高は約20cm、床面はほぼ平坦をなし、踏み締まりは比較的良好である。埋土は黄褐色・暗灰色砂質のFA層の堆積があり、一部壁際を除いてほとんど床面に達する堆積状況である。南東部隅に相当する箇所貯蔵穴と考えられる土坑がある。上辺50×55cm・深さ85cmの方形である。柱穴はP₁～P₃で北東部では確認されていない。またP₁はL207号住居跡床下の調査で確認された。P₁は2段掘り込みで上段径50×55cm・下段径18×25cm・下径10×20cm、推定床面からの深さ約55cmを測る。P₂もP₁と同様で上段径55cm・下段径35cm・下径10cm・深さ80cmを測る。P₃は掘形での検出で上径50cm・下径25cm・深さ45cmを測る。柱間はP₁・P₂が3.5m、P₂・P₃が3.1mである。またP₄は補助穴になるのか。上径40cm・下径15×25cm・深さ42cmである。

竈・炉などは認められず、南東部に凝灰岩質材の集中が見られたが、周辺には火所を想定できるような焼土などの痕跡はなかった。

出土遺物は多く、貯蔵穴周辺に集中して検出されている。土師器碗類・高杯、須恵器杯蓋・身などがある。

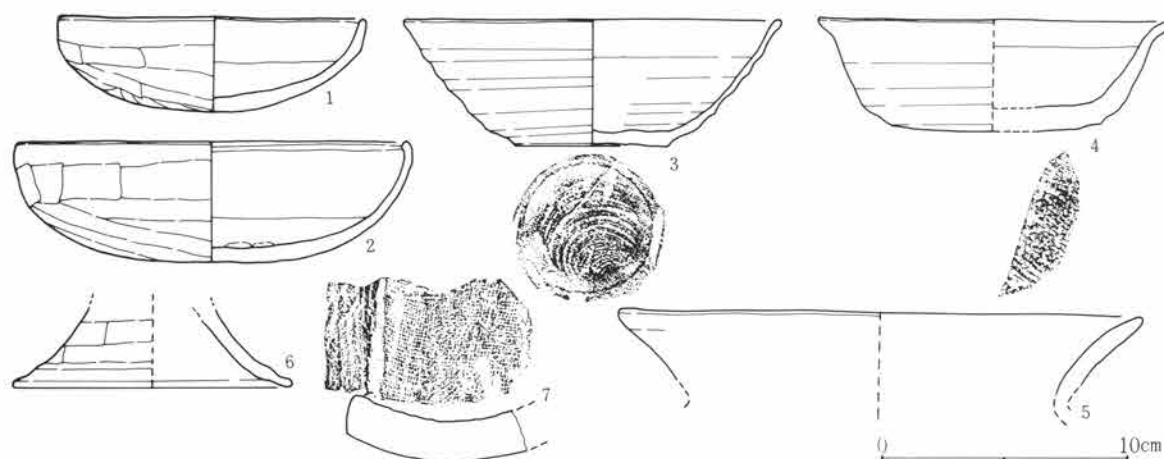


Fig. 442 L207号住居跡出土遺物

L207号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
442-1 135-1	土師器 杯	完形	12.2×— ×3.7	+7~11	底部丸く口縁部内湾気味に外傾。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
442-2 135-2	土師器 杯	完形	15.4×— ×4.7	床直	底部丸い。口縁部短く内湾し口唇部丸く内屈。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗
442-3 135-3	須恵器 碗	高台欠損	15.0×— ×(5.0)	竈・埋土	器内薄い。体部丸味をもつ。轆轤成形。轆轤目強い。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
442-4 135-4	須恵器 杯	1/4	14.0×7.2 ×4.4	+17	器内厚い。腰部丸く口縁部強く外傾。轆轤成形。静止糸切り。	①酸化気味 ②鈍い 橙 ③やや粗
442-5 135-5	土師器 甕	口縁部破片	20.8×— ×(3.5)	埋土	口縁部外反。口唇部丸い。口縁部横撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗
442-6 135-6	土師器 台付甕	台部1/2	—×11.0 ×(3.1)	竈	台部外面篋撫で。内面撫で調整。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
442-7 135-7	瓦 平瓦	小片	厚1.5	埋土	凹面布目。凸面篋削り。側縁篋削り。	①良好 ②褐灰 ③やや粗

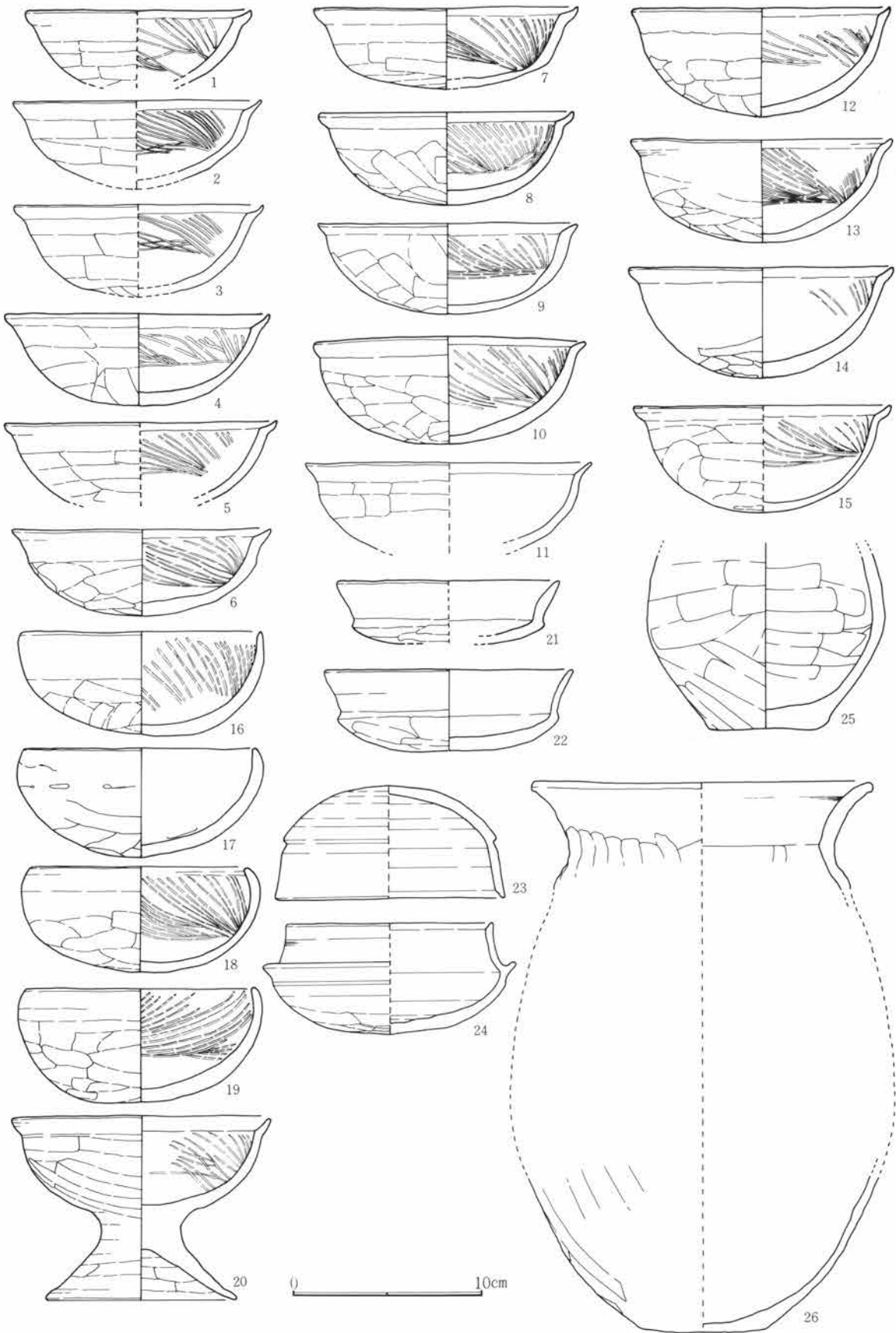


Fig. 443 L214号住居跡出土遺物(1)

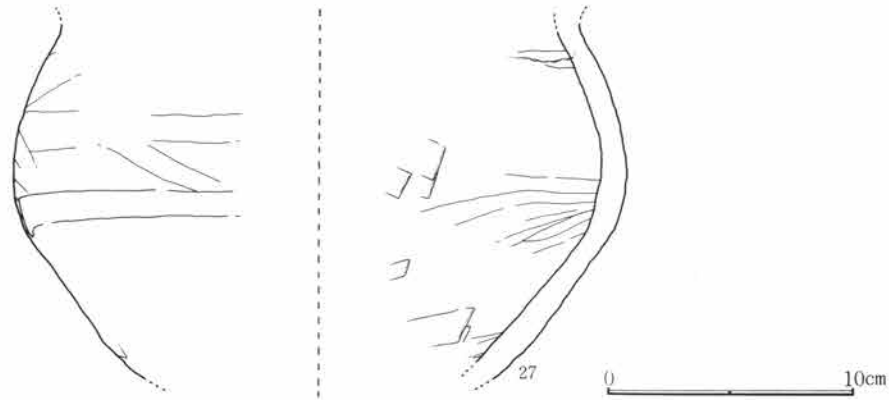


Fig. 444 L214号住居跡出土遺物(2)

L214号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
443-1 135-1	土師器 杯	口縁部	11.8× ×(3.7)	+1	底部丸く深い。口縁部内湾気味に強く外屈する内斜口縁。口唇部尖る。口縁部横撫で。底部篋削り。内面斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密
443-2 135-2	土師器 杯	破片	12.8× ×(4.1)	埋土	底部丸く深い。口縁部細まり内湾気味に強く外屈する内斜口縁。口縁部横撫で。底部篋削り。内面斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密
443-3 135-3	土師器 杯	破片	13.0× ×(4.5)	埋土	深い丸底。口縁部細く内湾気味に強く外屈する内斜口縁。口縁部横撫で。内面上半横・斜行篋磨き。外面篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
443-4 135-4	土師器 杯	完形	13.8× ×4.8	埋土	丸底。口縁部内湾気味に強く外屈する内斜口縁。口縁部横撫で。底部篋削り。内面上位斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密
443-5 135-5	土師器 杯	口縁部	14.1× ×(3.8)	埋土	底部丸く深い。口縁部内湾気味に強く外屈する内斜口縁。口唇部尖る。底部篋削り。口縁部内外面横撫で。内面上半斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密
443-6 135-6	土師器 杯	ほぼ完形	13.4× ×4.5	床直・ +1	丸底。内湾気味に強く外屈する内斜口縁。口唇部尖る。口縁部横撫で。底部不定方向篋削り。内面上位斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密
443-7 135-7	土師器 杯		13.8× ×4.2	+1	底部浅い丸底。体部やや肥厚し僅かに丸味をもち外傾。口縁部内湾気味に強く外屈する内斜口縁。口唇部尖る。口縁部横撫で。体部・底部篋削り。内面上半斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや粗
443-8 136-8	土師器 杯	ほぼ完形	13.2× ×4.8	+1	体部丸く深い。口縁部内湾気味に強く外屈する内斜口縁。底部篋削り。内面上半斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密・小石混る
443-9 136-9	土師器 杯	完形	13.5× ×5.2	埋土	体部丸く深い。口縁部やや肥厚し直線的に強く外屈する内斜口縁。底部篋削り。内面上半斜行・横方向篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
443-10 136-10	土師器 杯	¾	14.2× ×5.5	床直・ +1	底部丸く深い。口縁部直線的に強く外屈する内斜口縁。口縁部横撫で。底部篋削り。内面上半斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密・小石混る
443-11 136-11	土師器 杯	¾	15.0× ×(4.7)	竈・埋土	底部深く丸い。口縁部細く強く外屈する内斜口縁。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
443-12 136-12	土師器 杯	ほぼ完形	13.4× ×5.6	床直・ +1	底部丸く深い。口縁部やや内湾気味に強く外屈する内斜口縁。口縁部横撫で。底部篋削り。内面上位斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密・小石混る
443-13 136-13	土師器 杯	¾	13.5× ×5.4	+1~2	底部丸く深い。口縁部内湾気味に強く外屈する内斜口縁。口縁部横撫で。底部篋削り・内面上半斜行篋磨き。	①良好 ②明赤褐 ③やや密・細砂混る
443-14 136-14	土師器 杯	¾	13.7× ×5.7	床直	底部丸く深い。口縁部内湾気味に強く外屈。口唇部丸い。口縁部横撫で。底部篋削り。内面斜行篋磨き。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・砂混る
443-15 136-15	土師器 杯	¾	13.2× ×5.5	床直	器肉薄い。底部丸く深い。口縁部内湾気味に強く外屈する内斜口縁。口唇部尖る。口縁部横撫で。底部篋削り。内面上半斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③密・赤色粒混る
443-16 136-16	土師器 杯	¾	12.4× ×5.3	埋土	器肉厚い。底部丸く深い。口縁部内湾気味に直立し口唇部尖る。口縁部横撫で。底部篋削り。内面斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密・砂混る
443-17 136-17	土師器 杯	完形	11.9× ×5.6	埋土	器肉厚い。底部丸く深い。口縁部強く内湾し口唇部細り丸い。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや密・小石混る
443-18 136-18	土師器 杯	¾	11.1× ×5.5	+1	底部丸く深い。口縁部強く内湾。口縁部横撫で。底部篋削り。内面上半斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密
443-19 136-19	土師器 杯	完形	11.8× ×5.9	床直・埋 土	底部丸く半球形を呈す。口縁部強く内湾。底部篋削り。内面上位斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③密・小石混る

第1節 竪穴住居跡と出土遺物

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
443-20 136-20	土師器 高杯	¾	13.4×9.8 ×9.4	+3	杯体部丸く張り口縁部内湾気味に強く外屈する内斜口縁。脚部短く裾部ハの字状に開く。口縁部横撫で。外面横位篋削り。杯部内面斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③密
443-21 136-21	土師器 杯	破片	11.6× ×(3.2)	埋土	底部偏平。受け部で屈し稜をなす。口縁部外反して開く。口縁部内外面横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗
443-22 136-22	土師器 杯	½	13×-×4.2 口縁高2.5	埋土	体部丸く浅い。受け部稜をなし口縁高く外反気味に開く。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
443-23 136-23	須恵器 蓋	¾	12.0×- ×5.9	+2	天井部丸く脹らみ深い。口縁部との変換部に篋による凹縁を施し明瞭な段をなす。口縁部直線的でやや外傾。口唇部内面に段をなす。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①酸化気味 ②灰黄 ③密
443-24 136-24	須恵器 杯	¾	11.7×-× 5.7受け部 径13.1	埋土	底部丸く深い。受け部下方に弱い稜をなす。受け部短く外傾。口縁部高く外反して内傾。口唇部上端面強く内斜して凹む。口縁部横撫で。底部手持ち篋削り。轆轤成形。	①酸化気味 ②鈍い 橙 ③密
443-25 136-25	土師器 壺か甕	上半欠 損	-×6×(9.1) 最大径12.2	埋土	底部平底。胴部丸く張る。口縁部欠損。胴部外面横位篋削り。内面横位篋撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗・細砂混る
443-26 137-26	土師器 甕	胴部欠 損	17.6×6.6 ×(28.0)	埋土	やや下脹れの胴部。口縁部外反。頸部から底部にかけて縦位篋削り。内面頸部横位篋削り。	①良好 ②鈍い黄褐 ③やや粗
444-27 137-27	土師器 甕	胴部	最大径24.4 高14.0	埋土	体部中位で強い張りをもつ。胴部外面篋削り。内面篋撫で。後部分的に指撫で。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗

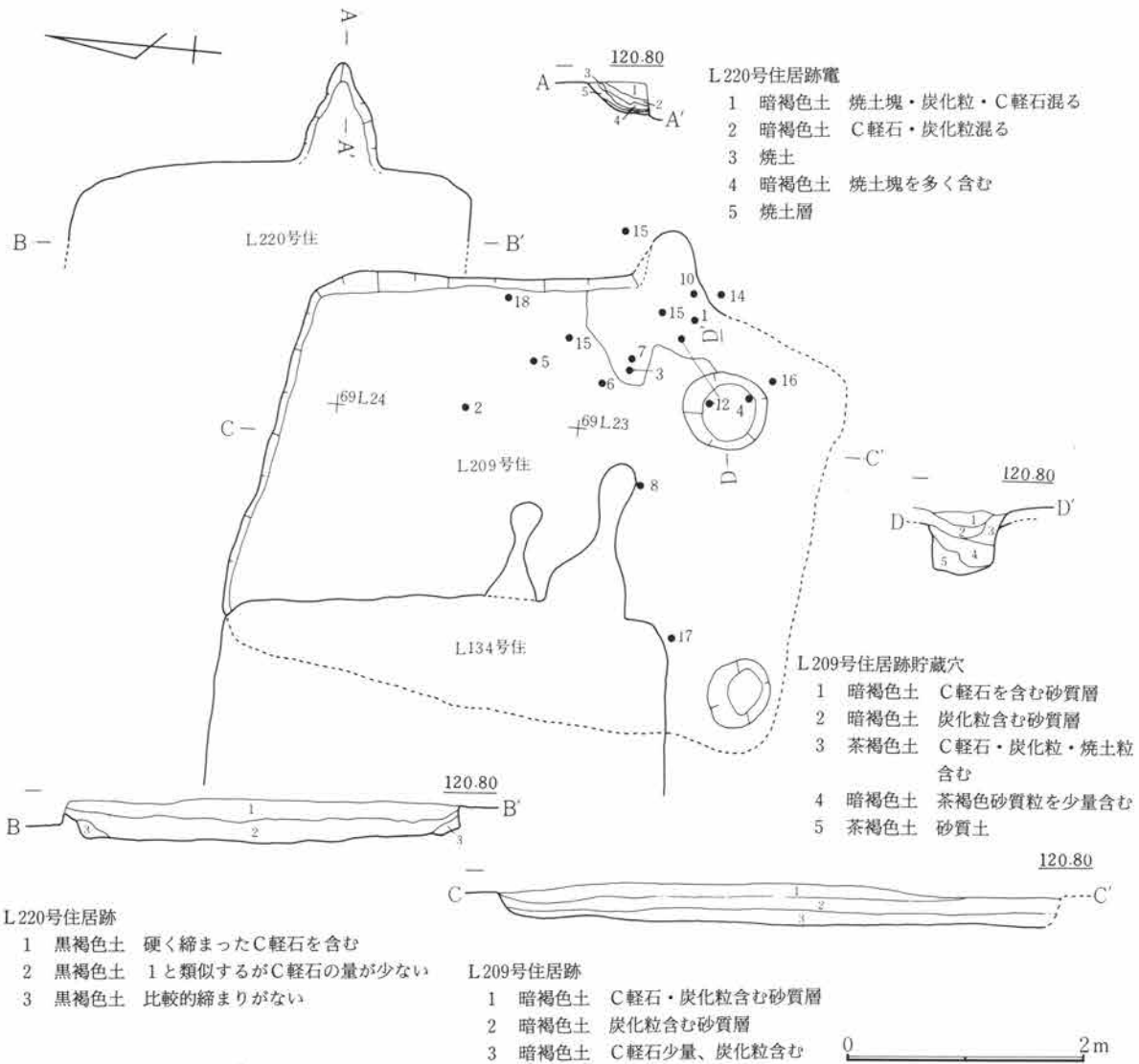


Fig. 445 L209・L220号住居跡

第2章 遺構と遺物

L 209号住居跡 (Fig. 445~447・PL. 33、137、138)

L区第4台地の調査区ほぼ中央に位置し、68~70L22~24の範囲にある。L134号・L189号・L211号・L220号住居跡と重複し、L134号住居跡より旧く、他よりは新しい時期の所産である。検出時の範囲確認を誤り東壁の一部と南壁線は削平してしまった。また西壁線はL134号住居跡によって消失している。

平面形は方形を呈すると思われる。南北は約4.6m・東西は3.5mの規模と考えられる。東西軸方位はおよそN-112°-Eを示す。壁高は約20cm、床面は平坦をなすが、踏み締まりは弱い。貯蔵穴と考えられる土坑は南東部と南西部に検出されているが、いずれかは確定できない。南東部は径70cm・深さ50cm、南西部は径50cm・深さ40cmとともに円形である。

竈は東壁の南に偏って付設され、楕円形に掘り込まれるが袖材などは遺存しない。燃烧部より灰層の流出がある。燃烧部幅60cm・奥行き55cmを測る。

出土遺物は散在的な検出であった。須恵器碗類が多く、灰釉陶器などもある。

L 220号住居跡 (Fig. 445・PL. 33)

L区第4台地の調査区ほぼ中央に位置し、67・68L23~25の範囲にある。L209号・L210号・L211号住居跡と重複し、L209号より旧くL210号・L211号住居跡より新しい時期の所産である。著しい重複のための消失や南北走る耕作溝のため、検出できた部分は竈を含む東側の小範囲である。

平面形は方形を呈すると思われる。南北長3.3m、東西は東壁より70cmの範囲まで確認した。東西軸方位はN-85°-Eを示す。壁高は約35cmを測る。床面の踏み締まりは弱い。

竈は東壁の南に偏って付設される。燃烧部幅65cm・奥行き85cmを測る。

出土遺物は極めて少ない。

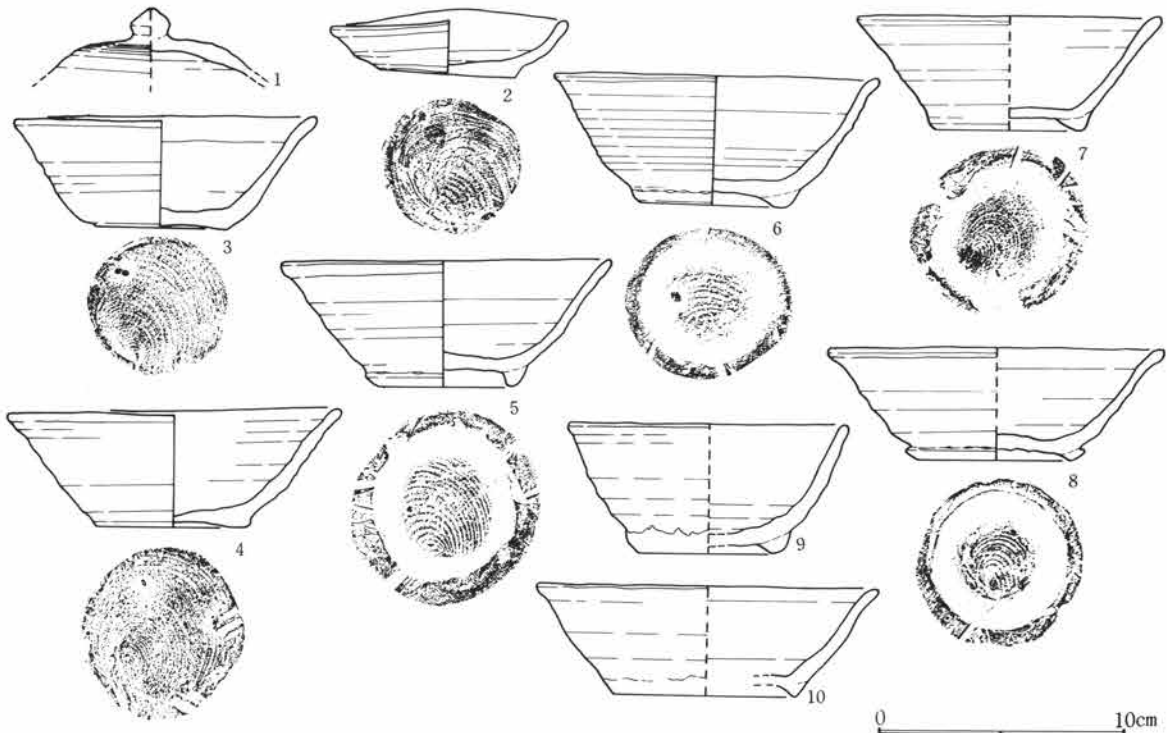


Fig. 446 L 209号住居跡出土遺物(1)

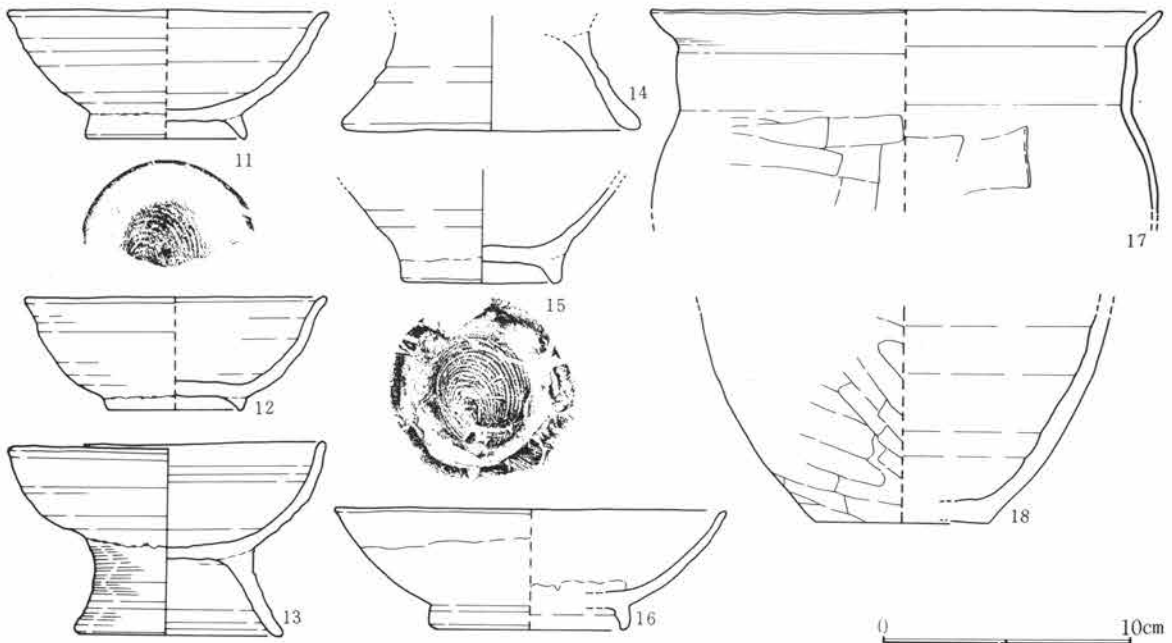


Fig. 447 L209号住居跡出土遺物(2)

L209号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
446-1 137-1	須恵器 蓋	端部欠損	-×-(2.7) 摘径1.5	竈	宝珠形摘。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
446-2 137-2	須恵器 杯	完形	9.5×5.4 ×2.6	床直	腰部くびれ体部内湾気味で口縁部外反。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②橙 ③やや密
446-3 137-3	須恵器 杯	完形	12.2×5.2 ×4.4	床直・床下埋土	底部器肉厚い。腰部丸味をもち体部深く直線的。口縁部外反。口唇部丸まる。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 ②浅黄橙 ③やや粗
446-4 137-4	須恵器 杯	完形	13.4×6.2 ×4.6	貯蔵穴	底径大。体部深く直線的。口縁部僅かに外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
446-5 137-5	須恵器 椀	完形	13.2×6.3 ×4.9	床直	体部直線的。口縁部やや外傾。付高台、断面丸く内湾。口縁部横撫で。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
446-6 137-6	須恵器 椀	完形	13.0×5.8 ×5.0	床直	腰部丸味をもち体部直線的。口唇部丸く強く外反。付高台幅広く低い。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや粗
446-7 137-7	須恵器 椀	体部欠損	12.2×6.2 ×4.5	埋土・+1	体部直線的に外傾し口縁部は肥厚し外反気味。口唇部丸まる。付高台、低く幅広。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
446-8 137-8	須恵器 椀	体部欠損	13.4×7.1 ×4.4	+4	腰部丸味をもち口縁部くびれて外反。口唇部やや肥厚し丸まる。付高台、低く外端反る。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
446-9 137-9	須恵器 椀	1/2	11.3×5.5 ×5.1	埋土	腰部丸味をもつ。体部上半緩く外反。口唇部丸い。付高台低く幅広い。轆轤成形。作り雑。	①やや軟 ②灰オリーブ ③やや粗
446-10 137-10	須恵器 椀	1/2	13.6×7.1 ×4.3	竈	体部やや丸味をもって開き口縁部外反。付高台、低く幅広な三角。轆轤成形。	①酸化気味 ②鈍い黄橙 ③やや粗
447-11 137-11	須恵器 椀	1/2	12.8×6.4 ×5.0	埋土・床下埋土	体部丸味をもち大きく開き口縁部外反。付高台、ハの字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味 ②橙 ③やや密
447-12 137-12	須恵器 椀	1/2	12.0×5.2 ×4.2	貯蔵穴	体部丸味をもち口縁部丸く外屈。口唇部丸い。付高台、低く内傾して立つ。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
447-13 138-13	須恵器 椀	完形	12.6×8.3 ×7.6	埋土	体部丸味強く半球形。付高台、高くハの字状に開く。端部丸い。轆轤成形。	①酸化気味 ②鈍い橙 ③やや密
447-14 138-14	須恵器 椀	台部	-×11.6 ×(3.9)	埋土	高台高くハの字状に開き端部肥厚し丸まる。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや粗
447-15 138-15	須恵器 椀	上半欠損	-×6.2 ×(3.8)	埋土	付高台低く断面矩形。作り雑。轆轤成形。右回転糸切り。内外面黒色処理。	①酸化気味 ②鈍い橙 ③やや粗
447-16 138-16	灰釉陶器 椀	1/2	15.6×7.9 ×4.7	+5	腰部に丸味をもち大きく開く。口唇部僅かに外屈。付高台端部内屈。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③緻密

第2章 遺構と遺物

Fig. No. PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
447-17 138-17	土師器 甕	口縁部 1/4	20.3× ×(8.0)	+1	肩部張り少なく口縁部直立し上半は内湾気味に強く外屈するコの字口縁。肩部横位篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
447-18 138-18	須恵器 甕?	胴部1/4	—×6.8 ×(8.2)	床直	平底。胴部やや張る。胴部下半斜位篋削り。	①酸化気味 ②灰黄 ③やや粗・砂混る

L 210号住居跡 (Fig. 448~450・PL. 33、138)

L区第4台地の調査区ほぼ中央に位置し、66~69L24・25の範囲にある。L216号・L220号住居跡と重複して、両者より古い時期の所産である。また東半部は南北走る耕作溝のため消失部分がある。

平面形は東西軸の著しく長い方形を呈する。南北長約3m・東西長5mを測り、東西軸方位はN-82°-E

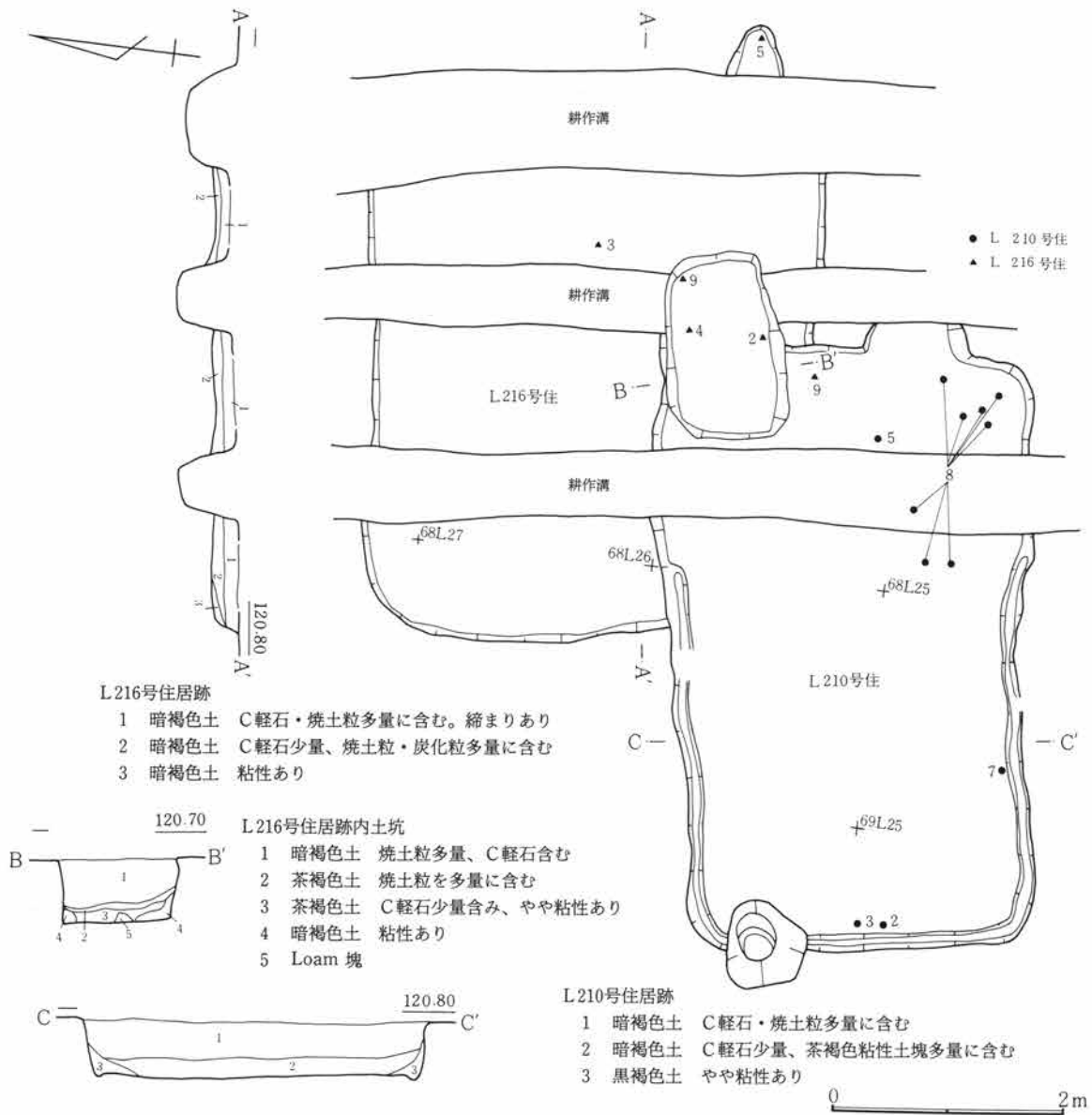


Fig. 448 L 210号・L 216号住居跡

を示す。壁高約50cmを測り、床面は平坦をなし踏み締まりは比較的良好である。壁下の溝は北壁の一部から西壁を巡り南壁の一部にかけて検出され、幅10cm前後・深さ5cm程度である。北東部の方形土坑・北西部のPitは当跡に属するものではない。住居中央部床面上に薄い灰層の分布が認められたが性格は不明である。

竈は東壁のやや南に付設されるが、先端部は耕作溝のため消失し詳細は不明である。燃焼部幅約85cmを測る。

出土遺物は散在して検出され、土師器杯類・甕などがある。また北壁線及び南西隅に長楕円形の川原石が総数30個余り集中して出土した。

L 216号住居跡 (Fig. 448、451、452・PL. 34、139)

L区第4台地の調査区はほぼ中央に位置し、65～68L25～27の範囲にある。L210号住居跡と重複して、これより新しい時期の所産である。3条の東西走る耕作溝によって分断されとくに東壁線は消失している。

平面形は東西に長軸をもつと思われる方形を呈す。推定東西長4.5m・南北長3.9mを測り、東西軸方位はN-87°-Eを示す。壁高は約20cm、床面は検出部分では平坦である。貯蔵穴などは検出されない。南壁沿いに方形土坑が検出されたが当跡に伴う施設かは不明である。1×1.6m・深さ55cmの長方形を呈する。

竈は東壁の南に偏って付設されるが、基部は消失し先端部のみが遺存する。竈全長は東壁よりおよそ80cm突出すると思われる。

出土遺物は少なく、方形土坑内より須恵器小杯などがある。

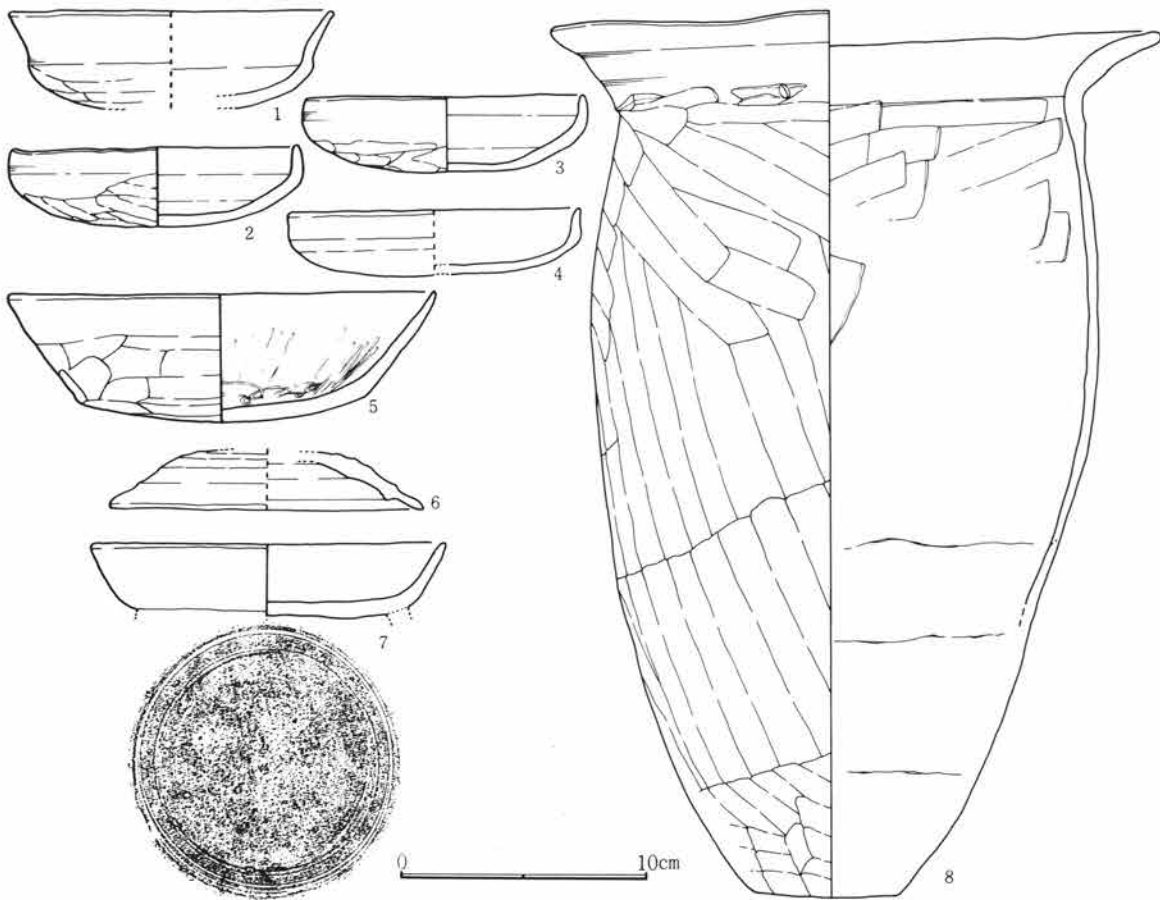


Fig. 449 L 210号住居跡出土遺物(1)

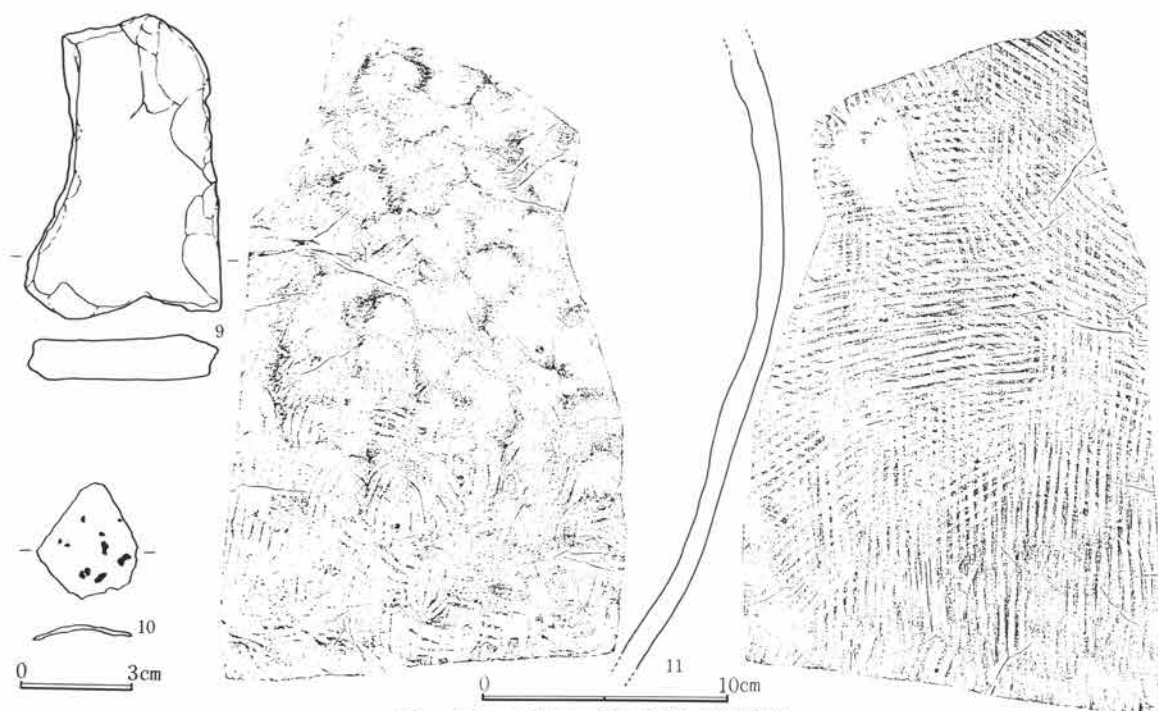


Fig. 450 L210号住居跡出土遺物(2)

L210号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
449-1 138-1	土師器 杯	1/4	13.0×— ×(3.8)	埋土	底部丸く浅い。受け部で緩く屈し口縁部外反して開く。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②浅黄橙 ③やや粗・粗砂混る
449-2 138-2	土師器 杯	完形	11.7×— ×3.1	+9	底部偏平。口縁部短く直立気味。口縁部横撫で。底部不定方向篋削り。	①良好 ②明褐 ③やや密・砂混る
449-3 138-3	土師器 杯	完形	11.3×— ×2.9	+7	偏平な底部。口縁部直立。口縁部横撫で。底部不定方向篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・砂混る
449-4 138-4	土師器 杯	1/4	11.6×— ×(2.6)	埋土	底部偏平で平底気味。口縁部やや直立し口唇部丸まる。口縁部横撫で。体部篋削り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや密
449-5 138-5	土師器 杯	ほぼ完形	17.0×— ×5.0	+5	底部膨らみ気味。体部直線的に外傾。口唇部内湾気味に細る。口縁部横撫で。体・底部篋削り。内面放射状・見込部螺旋状篋磨き。	①良好 ②明黄褐 ③やや密・細砂混る
449-6 138-6	須恵器 蓋	1/4	12.6×— ×2.3	埋土	天井部やや丸味をもつ。体部直線的に開く。内面に丸く低いかえり。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密・細砂混る
449-7 138-7	須恵器 椀	台部欠損	14.2×— ×2.8	+9	付高台欠損。体部浅く外傾。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密・小石混る
449-8 138-8	土師器 甕	ほぼ完形	24.4×5.5 ×34.8 最大径20.3	+5	胴部張り少なく長胴形を呈す。口縁部やや肥厚し強く外反して開く。口縁部横撫で。胴部上半斜位・中位縦位・腰部斜位篋削り。内面横位篋撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗・白色小石混る
450-9 138-9	須恵片 転用硯?		12×7.8 厚1.6	埋土	甕片転用。内面摩擦著しい。外面一部擦り痕あり。	①良好 ②灰 ③やや密
450-10 138-10	銅製品 不明	小片	(3×2.7) 厚0.1	埋土	薄い板状曲面をなす。銅椀片か。	
450-11 138-11	須恵器 大甕	破片	厚1	埋土	外面平行叩き目。内面青海波及び当て目。	①良好 ②灰 ③やや密

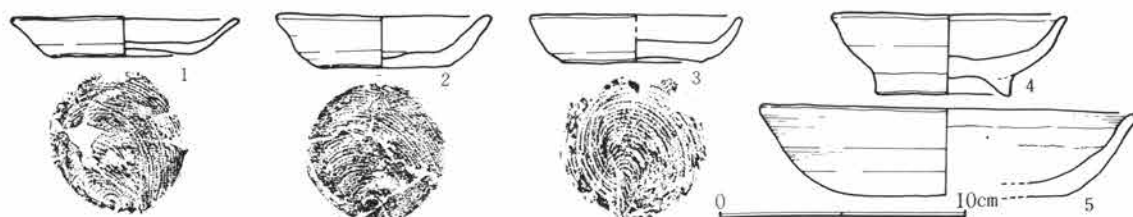


Fig. 451 L216号住居跡出土遺物(1)

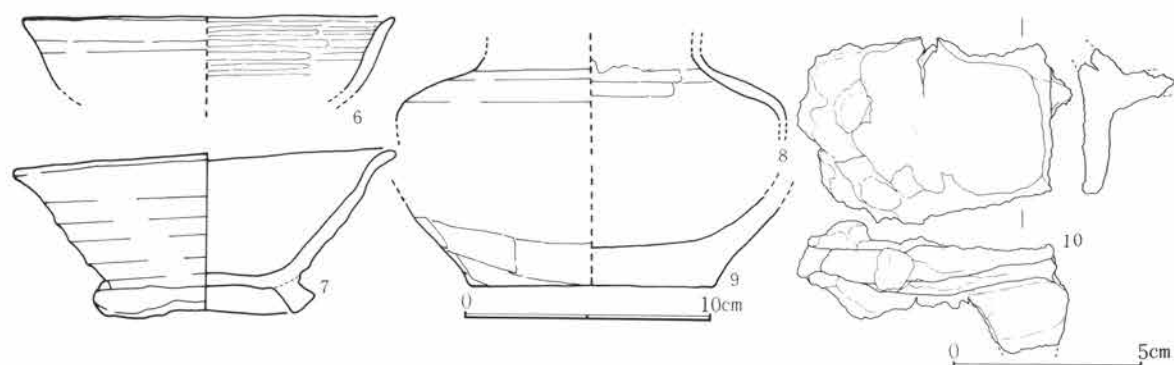


Fig. 452 L216号住居跡出土遺物(2)

L216号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ⑤胎土 その他
451-1 139-1	須恵器 杯	完形	9.1×5.5 ×1.6	埋土・床 下土坑	器肉薄い。体部外反気味。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②橙 ③やや密
451-2 139-2	須恵器 杯	完形	8.6×5.2 ×2.2	貯蔵穴・ 埋土	体部に丸味をもち口縁部外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 ②浅黄 橙 ③やや粗
451-3 139-3	須恵器 杯	体部% 欠損	8.4×5.7 ×1.8	埋土・ +6	底部肥厚。腰部丸く体部内湾して開く。口唇部丸い。轆轤成形。	①酸化気味 ②浅黄 ③やや密・白色粒混
451-4 139-4	須恵器 碗	完形	9.3×5.4 ×3.2	貯蔵穴	体部浅く丸味をもち口縁部僅かに外反。底部器肉厚く口唇部細る。	①酸化気味 ②淡黄 ③やや密・白色粒混
451-5 139-5	須恵器 杯	1/2	15.0×8.0 ×3.4	竈	器肉厚い。腰部から体部丸味をもつ。口縁部外屈し口唇部丸い。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや密・砂混る
452-6 139-6	内黒土器 碗	体部% 欠損	15.0× ×(2.9)	埋土	体部丸味をもつ。口縁部緩く外反。内面黒色処理・横篋磨き。	①酸化気味 ②浅黄 橙 ③やや密
452-7 139-7	須恵器 碗	完形	15.4×8.9 ×6.2	埋土	体部直線的に立ち上がり口縁部強く外反。口唇部丸い。付高台、幅広く断面矩形。轆轤成形。	①良好 ②淡黄 ③やや粗・粗砂混る
452-8 139-8	須恵器 壺	肩部小 片	肩部径15.6 高(2.7)	埋土	肩部強く張る。肩部内面横篋撫で。頸部に黒い付着物。	①良好 ②灰 ③やや密・白色粒混
452-9 139-9	土師器 甕	底部	—×9.8 ×(3.6)	埋土	平底。腰部丸味をもつ。腰部斜位篋削り。器肉厚い。	①良好 ②鈍い褐 ③やや粗・白色粒多
452-10 139-10	鉄器 不明		(7×4.5) 厚0.8	埋土	脚付の盤状鉄鍋? 錆びによって薄い板状に剝離し鑄鉄の可能性あり。	

L211号住居跡 (Fig. 453~456・PL. 34、139、140)

L区第4台地の調査区中央部に位置し、67~70 L21~23の範囲にある。L134号・L209号・L220号住居跡などと重複しているが、これらより古い時期の所産である。重複のため西側及び西壁は消失している。

平面形は方形と考えられる。南北長4.6m、東西は東壁より約4.5mの範囲まで確認した。東西軸方位はおよそN-86°-Eを示す。壁高は約30cm、床面は平坦をなし踏み締まりは良好である。貯蔵穴は南東部にあり、径80cm・深さ25cmの円形で浅い掘鉢状である。柱穴はP₁~P₄が検出され、P₁は上径35cm・下径13cm・深さ68cm、P₂は上径50cm・下径23cm・深さ60cm、P₃は上径35cm・下径16cm・深さ60cm、P₄は上径35cm・下径10cm・深さ75cmを測る。各柱間はP₁・P₂とP₁・P₄が各々3m、P₂・P₃が2.9m、P₃・P₄が2.85mである。

竈は東壁ほぼ中央に付設され、袖部は掘形を残し住居内に突出する形態である。燃焼部は住居内にあり、東壁を僅か掘り込む程度である。火床の焼土層は遺存していない。袖部長さ35cm・内法55cm、燃焼部奥行き約60cmを測る。

出土遺物は竈周辺に集中して検出され、土師器杯・甕などのほか滑石製白玉がある。

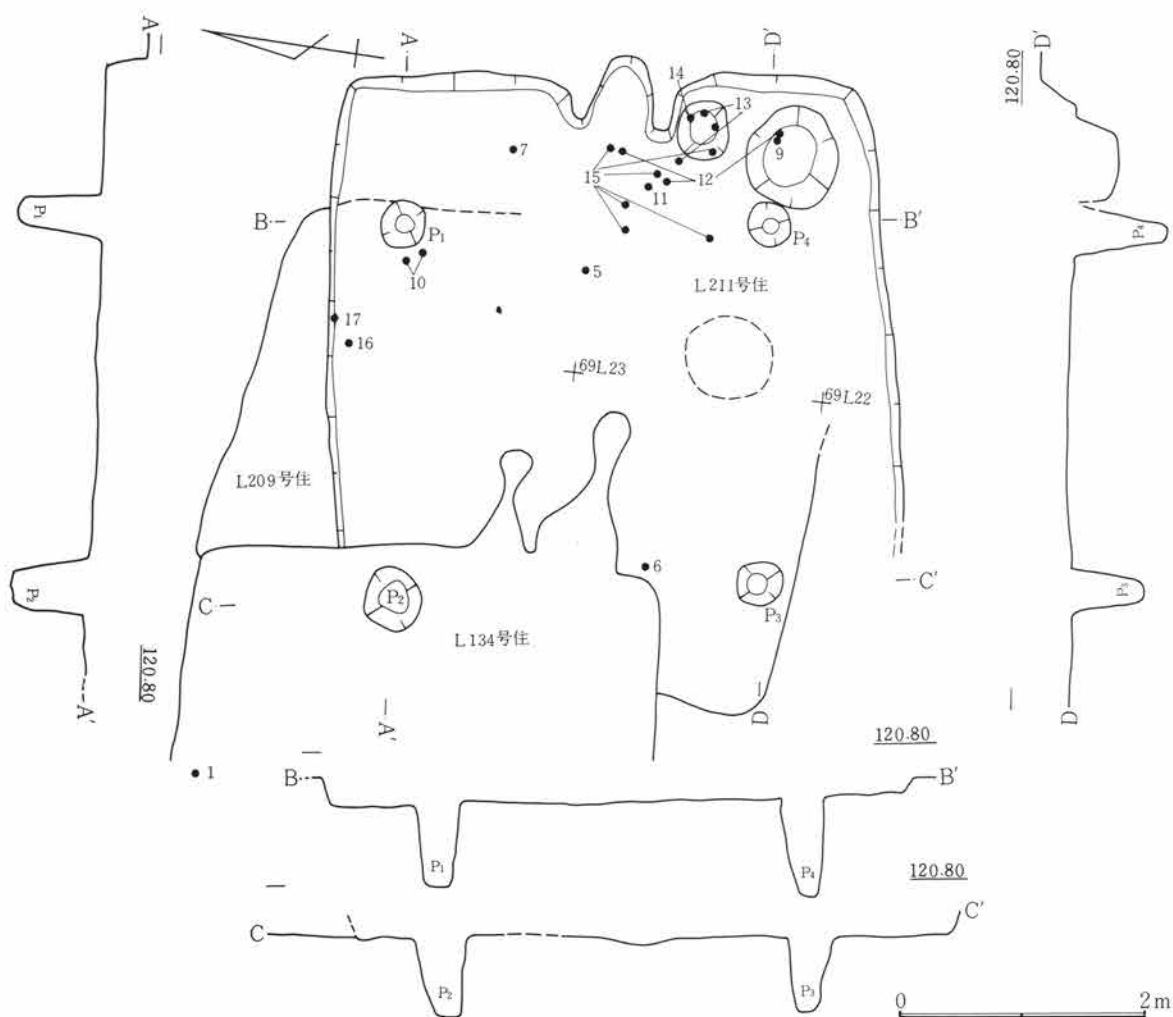


Fig. 453 L211号住居跡

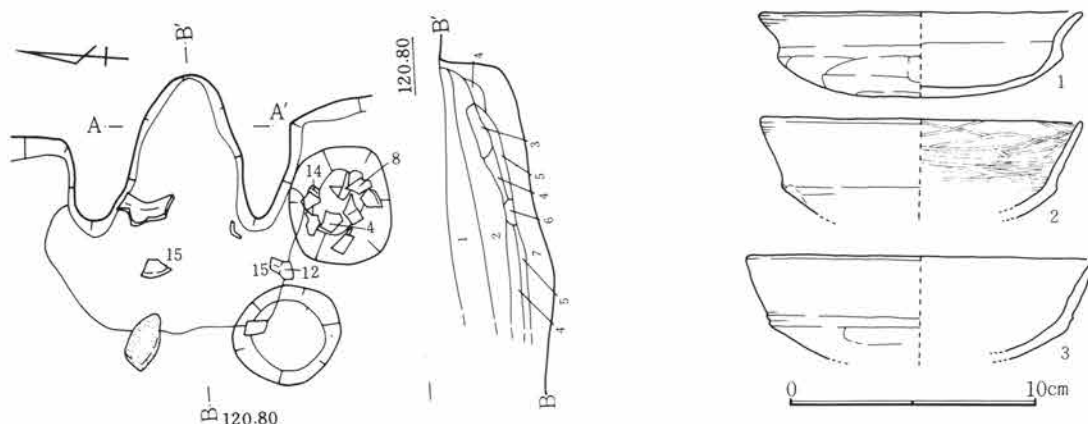


Fig. 455 L211号住居跡出土遺物(1)

L211号住居跡竈

- | | |
|-----------------------|----------------------|
| 1 黒褐色土 C軽石少量含む | 5 黒褐色土 粘性強い |
| 2 黒褐色土 焼土塊多量に含む | 6 焼土層 (火床) |
| 3 暗褐色土 C軽石少量含む | 7 黒褐色土 焼土塊・炭化粒含む(掘形) |
| 4 暗褐色土 焼土粒少量含む、やや粘性あり | |

Fig. 454 L211号住居跡竈

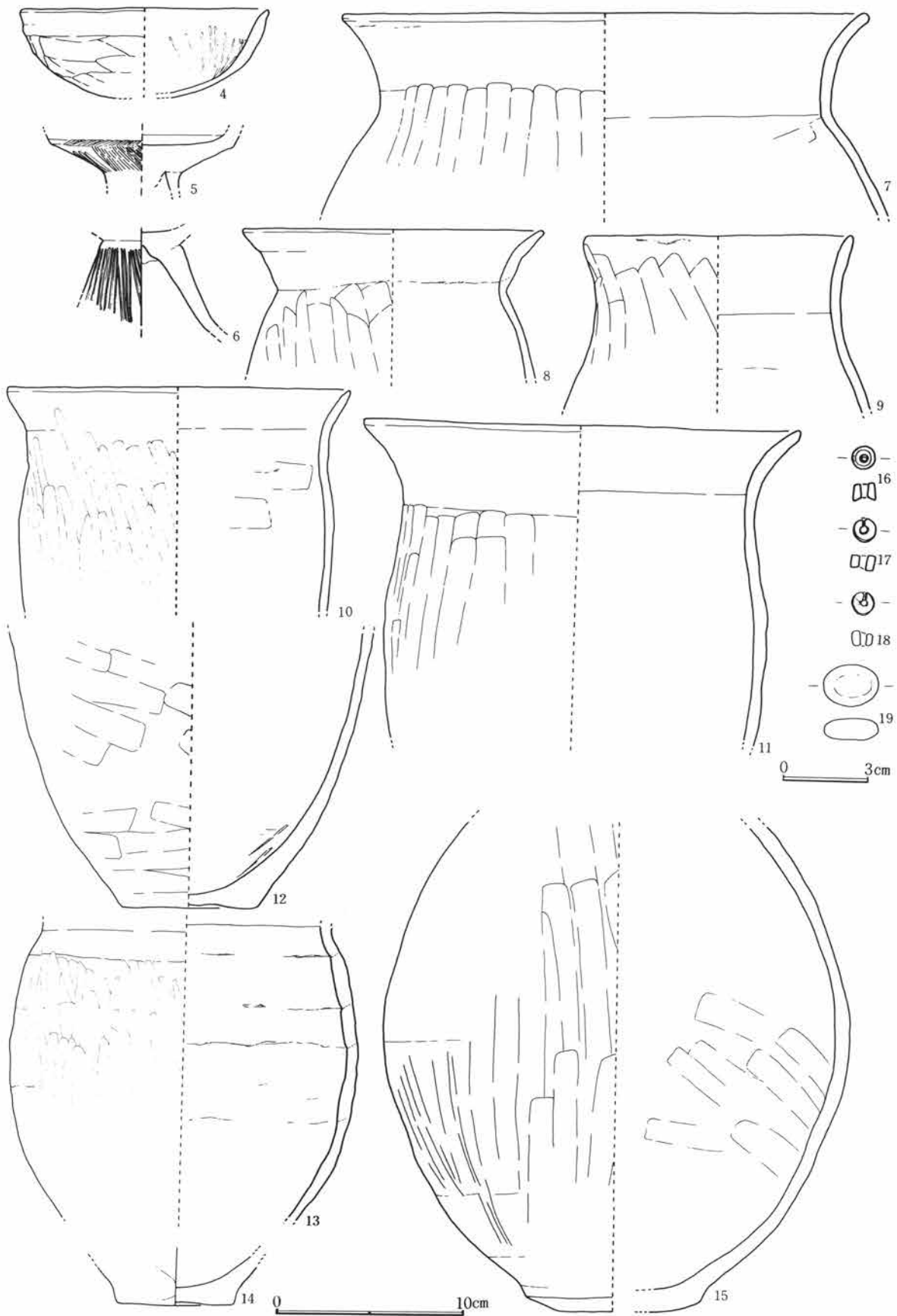


Fig. 456 L211号住居跡出土遺物(2)

第2章 遺構と遺物

L 211号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×高さ 口径高1.6	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
455-1 139-1	土師器 杯	1/4	13×-×3.4 口径高1.6	掘形	底部丸く浅い。受け部で屈し口縁部強く外反して開く。口縁内外面横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密・赤色粒混る
455-2 139-2	土師器 杯	1/4	12.8×- ×(3.8)	埋土	受け部で稜をなし口縁部僅かに外反。端部やや丸い。口縁部横撫で。底部篋削り。内面上半横・斜篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密
455-3 139-3	土師器 杯	1/4	13.8×- ×(4.2)	貯蔵穴・埋土	受け部に小さく鋭い凸線をなし口縁部は直線的で僅かに外傾。端部細く尖る。口縁部内外面横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗
456-4 139-4	土師器 杯	1/4	13.0×- ×(4.7)	竈	底部丸く深い。口縁部肥厚し口唇部やや細る。口縁部外面横撫で。底部篋削り。内面放射状篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや粗
456-5 139-5	土師器 高杯	杯底部	杯底径9.5× 高2.6	+11	杯底部水平。体部強く折れる。腰部櫛状工具による調整後篋磨き。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
456-6 139-6	土師器 高杯	脚部1/4	-×-(5.4) 脚基径4.0	床直	脚部・杯部接合。外面縦篋磨き。	①良好 ②明赤褐 ③やや密
456-7 139-7	土師器 甕	1/4	27.2×- ×(10.5)	+5	胴部丸く張る。口縁部外反して開く。口唇部やや丸い。口縁部横撫で。胴部縦位篋削り。内面横位篋削り。	①良好 ②浅黄橙 ③やや粗
456-8 139-8	土師器 甕	小片	15.6×- ×(8.3) 頸部径12.0	竈	胴部やや脹らむが長胴を呈すか。口縁部やや肥厚し外傾し上半さらに外傾。口唇部丸味。口縁部内外面横撫で。胴部外面縦位篋削り・内面篋撫で。	①良好 ②淡黄 ③やや粗
456-9 139-9	土師器 甕	小片	13.8×- ×(9.1)	貯蔵穴・埋土	肩部窄まり胴部下張れか。口縁部緩く外傾。口唇部丸い。口縁部内外面横撫で。胴部外面縦位篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②明黄褐 ③やや粗
456-10 139-10	土師器 甕	小片	17.8×- ×(11.6)	+3~4	胴部張りなく長胴を呈すか。口縁部直線的に立ち上半は外傾。胴部幅狭い篋削り・内面篋撫で。	①良好 ②明黄褐 ③やや粗
456-11 139-11	土師器 甕	1/4	23.8×-× (16.5)	埋土	肩部張りなく長胴を呈すか。口縁部外反して開き口唇部丸い。口縁部横撫で。胴部縦位篋削り・内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗・細砂混る
456-12 140-12	土師器 甕	胴部小片	-×7.0 ×(14.3)	貯蔵穴	胴部僅かに張る。胴部外面横位篋削り。内面撫で・篋による痕跡。	①良好 ②橙 ③やや粗・白色粒混
456-13 140-13	土師器 甕	胴部1/4	-×-(15 .4)最大径18.2	+1~7	胴部やや脹らむ。胴部外面棒状工具による篋削り。内面接合痕。	①良好 ②橙 ③やや粗
456-14 140-14	土師器 甕	底部1/4	-×6.0 ×(2.7)	竈	底部平底気味でやや厚い。内外面撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗・細砂混る
456-15 140-15	土師器 甕	胴部1/4	-×9.2×(2 5.2)最大径24.4	竈・貯蔵穴・埋土	体部中位に脹らみをもつ。底部肥厚し丸味のある平底。胴部外面縦位篋削り・紐造り痕。内面斜位篋撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗・白黒色粒
456-16 140-16	石製品 白玉	完形	径0.8厚0.6 孔径0.3	埋土	中央部穿孔。両面の成調整粗い。	滑石
456-17 140-17	石製品 白玉	完形	径0.7厚0.5 孔径0.3	+2	中央部穿孔。両面の成調整粗い。	滑石
456-18 140-18	石製品 白玉	ほぼ完形	径0.8厚0.5 孔径0.2	埋土	中央部穿孔。両面の成調整粗い。	滑石
456-19 140-19	石製品 碁石?		1.5×2.0 ×0.7	埋土	整った楕円形。白色自然石。重3.1g	玉髓

L 221号住居跡 (Fig. 457~459・PL. 34、140)

L区第4台地東側に位置し、59~62L25~27の範囲にある。L169号住居跡と重複してこれより古い時期の所産である。L区では数少ない西側付設の竈をもつ住居跡である。

平面形は東西に長軸をもつ方形である。東西長4.1m・南北長3.8mを測り、東西軸方位はN-63°-Eを示す。検出面からの掘形は浅く、壁高は僅か7~8cmである。床面は小さな凹凸がみられるが踏み締めりは良好である。貯蔵穴は南西隅にあり上辺60cm・深さ75cmの略方形である。壁下の溝は幅10cm・深さ3~4cmで南壁で僅かに跡切れるが各壁下に巡る。柱穴はP₁~P₄が検出されている。P₁は上径35cm・下径10cm・深さ60cm、P₂は上径30×40cm・下径15cm・深さ45cm、P₃は上径45cm・下径12cm・深さ52cm、P₄は上径45cm・下径15cm・深さ45cmを測る。各柱間はP₁・P₂及びP₂・P₃が2.1m、P₃・P₄は2m、P₁・P₄は1.9mである。竈左脇及び北東隅に土坑状落ち込みが検出されているが性格は不明である。

竈は西壁やや南に偏って付設されるが、遺存状態は悪く袖部などは認められなかった。竈前床面には焼土粒層が流出し、燃焼部内には火床焼土面が残る。燃焼部幅約60cm・奥行き60cmを測る。

出土遺物は土師器杯・甕などがある。

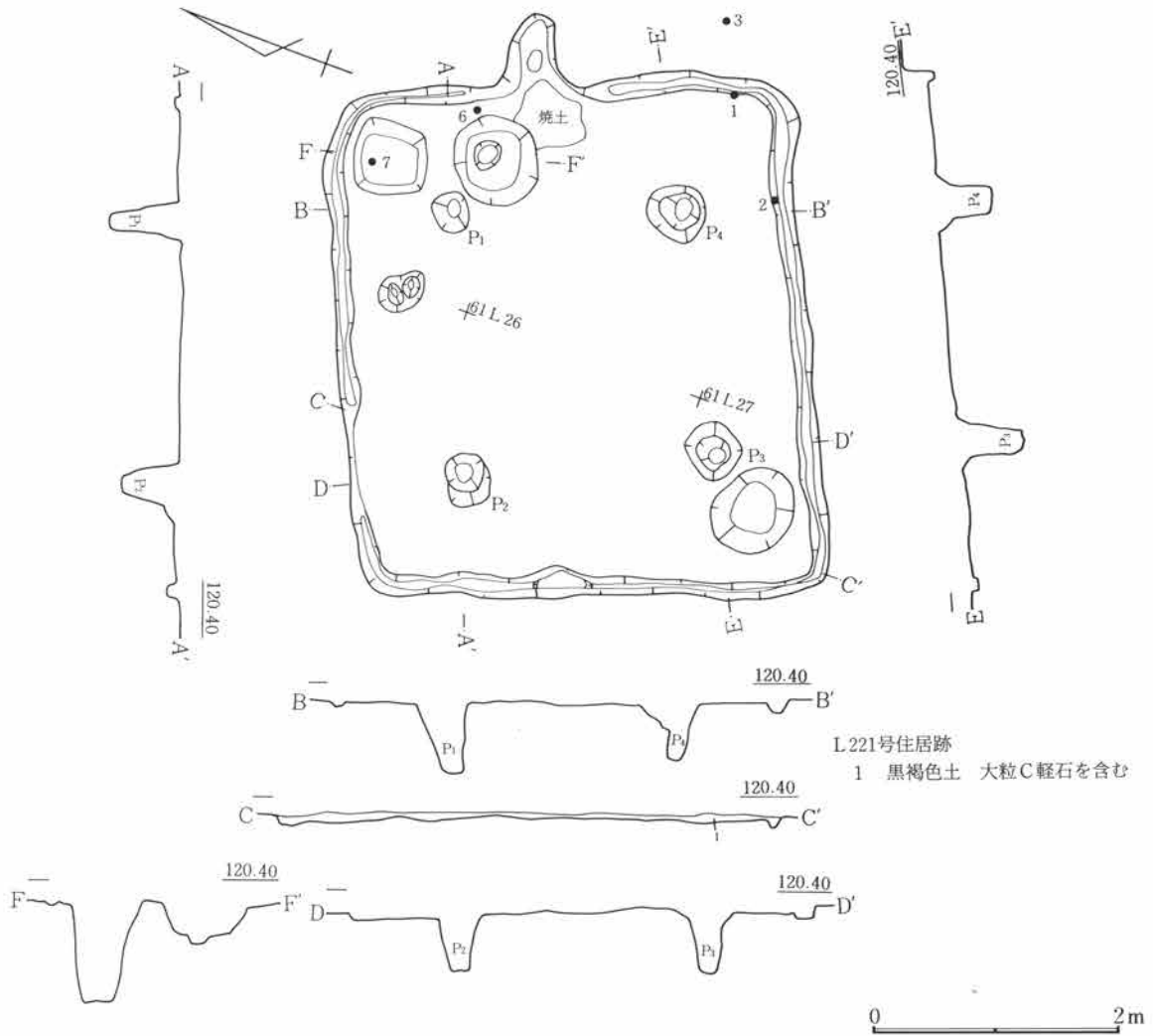


Fig. 457 L 221号住居跡

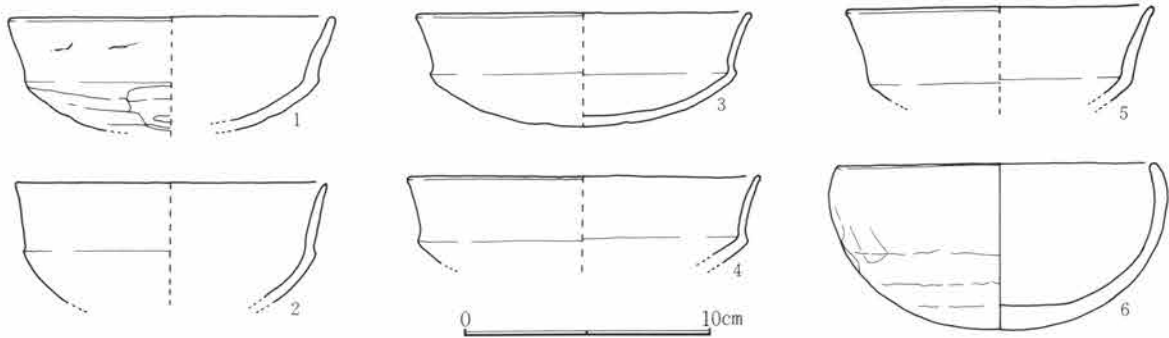


Fig. 458 L 221号住居跡出土遺物(1)

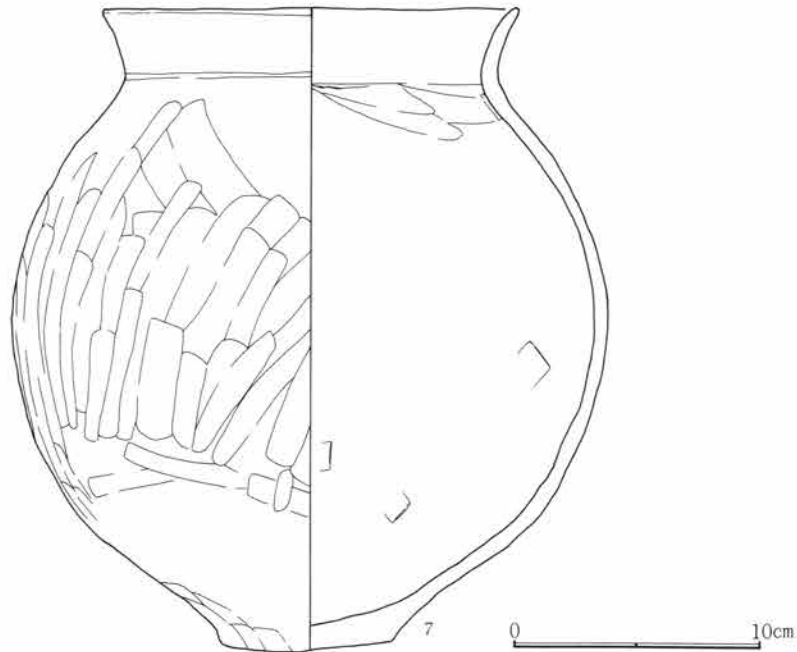


Fig. 459 L 221号住居跡出土遺物(2)

L 221号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
458-1 140-1	土師器 杯	1/4	13.0×— ×4.5	埋土	底部やや深く丸い。受け部で屈し弱い稜をなす。口縁部外反気味に開き口唇部丸く内屈。口縁内面撫。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
458-2 140-2	土師器 杯	破片	12.4×— ×(4.8)	竈	底部やや深く丸味をもつ。受け部で屈し口縁部直線的に外傾。口唇部尖る。全体に摩滅。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
458-3 140-3	土師器 杯	1/2	13.3×— ×4.5	埋土	器肉薄い。底部丸味をもつ。受け部で強く屈し稜をなす。口縁部外反して開く。口縁部横撫で。全体に摩滅。	①良好 ②橙 ③やや密・砂混る
458-4 140-4	土師器 杯	破片	14.1×— ×(3.4)	埋土	器肉薄い。受け部で強く屈し稜をなし口縁部外反気味に開く。全体に摩滅。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
458-5 140-5	土師器 杯	破片	12.2×— ×(3.8)	埋土	受け部緩く屈し口縁部高く外反して開く。口縁部横撫で。全体に摩滅。	①良好 ②橙 ③密・細砂混る
458-6 140-6	土師器 杯	完形	12.5×— ×6.6	貯蔵穴	底部丸く半球状。口縁部強く内湾。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②灰褐黄 ③やや密・黒色粒混
459-7 140-7	土師器 甕	ほぼ完形	16.6×6.6 ×25.2 最大径23.8	貯蔵穴	底部平底で肥厚し突出気味。体部丸く張り球胴形を呈す。口縁部緩く外反して開く。口縁部横撫で。胴部上・中位縦位・下位横位篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗・細砂混る

縄文時代

N 5号住居跡 (Fig. 460、461・PL. 34、141)

縄文時代の住居跡は、北第2台地の縁辺からやや奥まったところで1軒のみ検出された。周辺を平安時代の住居跡群に切られており、柱穴と考えられるピット群と炉跡が発見されたのみであった。直接炉跡と遺物が発見された状態であり、壁は勿論であるが、柱穴と考えられるピットも周囲の住居跡による掘込みで消滅させられている。炉跡は礫により囲まれているが、東側の半周部分が欠損している。現存する部分で9個の礫が確認できる。70cm×60cmのやや長方形となる堀方を持ち、深さ35cmを測る。内部には一部に良好な焼土が観察されるが、主体は少量の焼土と炭化物を含む黒褐色土であった。柱穴と考えられるピットは、現状で5本が認められる。各々径20cm程で、深さも10cmから20cmと少規模である。床面の状況は、炉跡の周辺で一部良好な状態が認められるものの、周囲は軟弱であった。

遺物は、土器と石器及び礫が出土した。いずれも床面に密着して出土したものである。

5号住居跡は、出土した土器から縄文後期後半の時期が想定される。住居跡の形態は、柱穴の並び方が不規則であり、周辺の住居跡に切られていることから、円形か方形かの判断ができない。ただ、南及び北の住居跡のない空き地の部分に柱穴が存在しないことから、南北に対する住居跡の広がりについては柱穴周辺で納まるものと考えられる。しかし、東西の柱穴については、更に延びることが予想される。特に西側については、柱穴が炉跡に近づきすぎていることからいえる。

鳥羽遺跡周辺の縄文時代の遺跡を概観すると、染谷川の縁辺に沿って展開しており、本遺跡の北側にある国分寺中間遺跡では、縄文中期加曾利E式を中心とする大集落が形成されている。また、周辺の遺跡においても縄文中期の遺物が少量ではあるが出土している。しかし、縄文中期の時期をのぞくと皆無の状況である。本遺跡においても台地の縁辺部のみの調査であり、台地奥部でどのように展開しているのか不明の状況にあるといえる。染谷川の上流部である榛名山南麓の榛東村では、中小河川の河岸段丘面上に縄文後・晩期の大規模な遺跡がいくつか形成されている。染谷川は本遺跡の下流になると河岸段丘を形成せず、沖積地の中を流れる川となる。その意味で、本遺跡は榛名山麓に展開する縄文時代の遺跡立地の末端部に展開しているものといえよう。しかし、集落規模等に大きく差があり、染谷川上流部に展開する大規模な遺跡群とは根本的に成立過程が異なっているといえる。ともあれ、周辺の縄文時代の様相を知る上で貴重な資料を提供したもののといえる。

(巾)

- (1) 群馬県埋蔵文化財調査事業団「上野国分僧寺・尼寺中間地域 前橋市元総社町小見地区、群馬郡群馬町大字東国分村前・葉師堂南・中道南・上野道南（植野道南）・高井道東地区に所在する遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書8分冊中の第1分冊 関越自動車道（新湯線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第12集 1986年
- (2) 隣接する高崎市正観寺遺跡群の報告書の中に、縄文中期の土器片が出土したことが報告されている。高崎市教育委員会「正観寺遺跡群(1)」高崎市文化財調査報告書第11集 1979年
- (3) 榛東村教育委員会「新井第II地区遺跡群発掘調査概報」榛東村埋蔵文化財調査報告書第4集 1985年

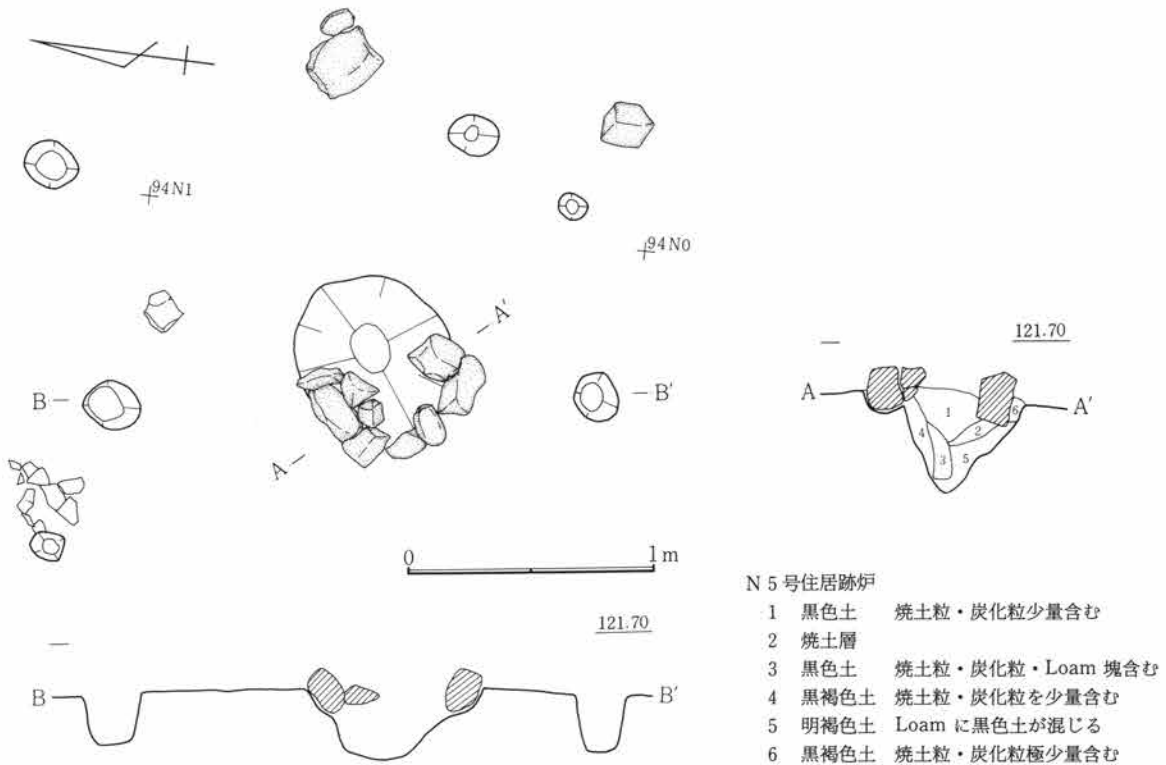


Fig. 460 N 5号住居跡

N 5号住居跡出土土器 (Fig. 460、461・PL. 34、141)

本住居跡から出土した土器は、遺構の遺存状況が悪かったのと同様に比較的量は少ない。これらの土器のほとんどが、住居跡内にあつては床面直上のものである。また、表面の風化が進んでいるものが多く主をなしているため、Fig. 461に掲載した資料は一部の良好なものにとどめた。

1は口縁部が欠損しているため器形は不明であるが、胴部が屈曲する鉢形を呈するものと考えられる。整形は丁寧であるが、胎土には砂粒が多く含まれている。屈曲部に2個一對の貼瘤を5単位もち、平行沈線を巡らせ、この上下に弧状の沈線を施し文様を区画する。さらに下部に平行沈線を巡らせ胴部文様を区画する。地文にはLRの縄文が用いられ、磨り消しが施される。2は1と同様の器形を呈し、器面の整形はかなり丁寧な仕上げとなっている。平行沈線と弧状の沈線で文様を区画し、地文にLRの縄文を用いて、さらに磨り消しを施す。3～6は胎土に砂粒を多く含む無文の粗製土器で、3は平口縁の内湾するもので、有段口縁となるもの。4は平口縁の頸部がくびれるもの。5・6は胴部破片。7は無文土器の底部である。これらの土器は、後期後半の曾谷式段階のものと考えられる。

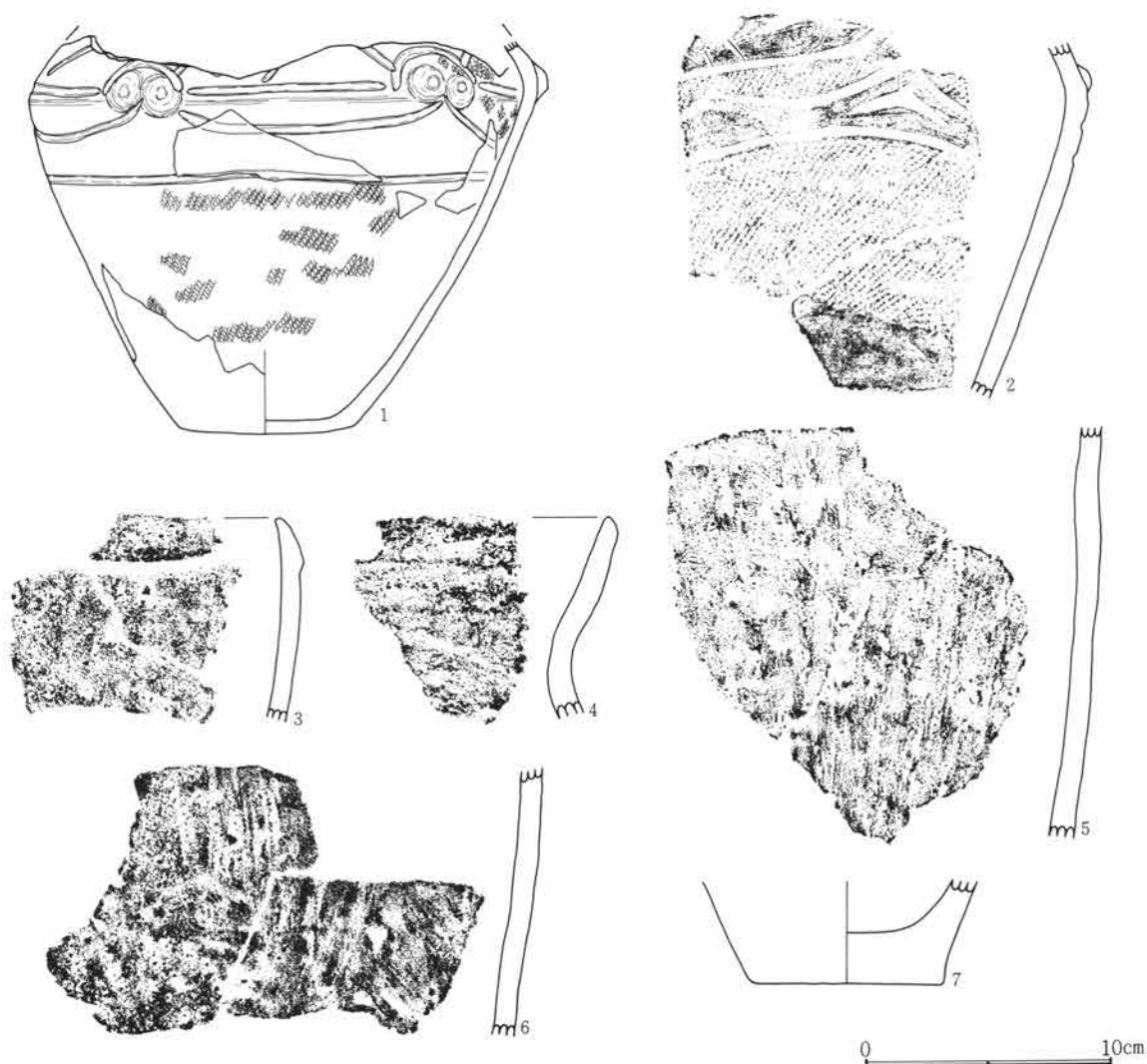
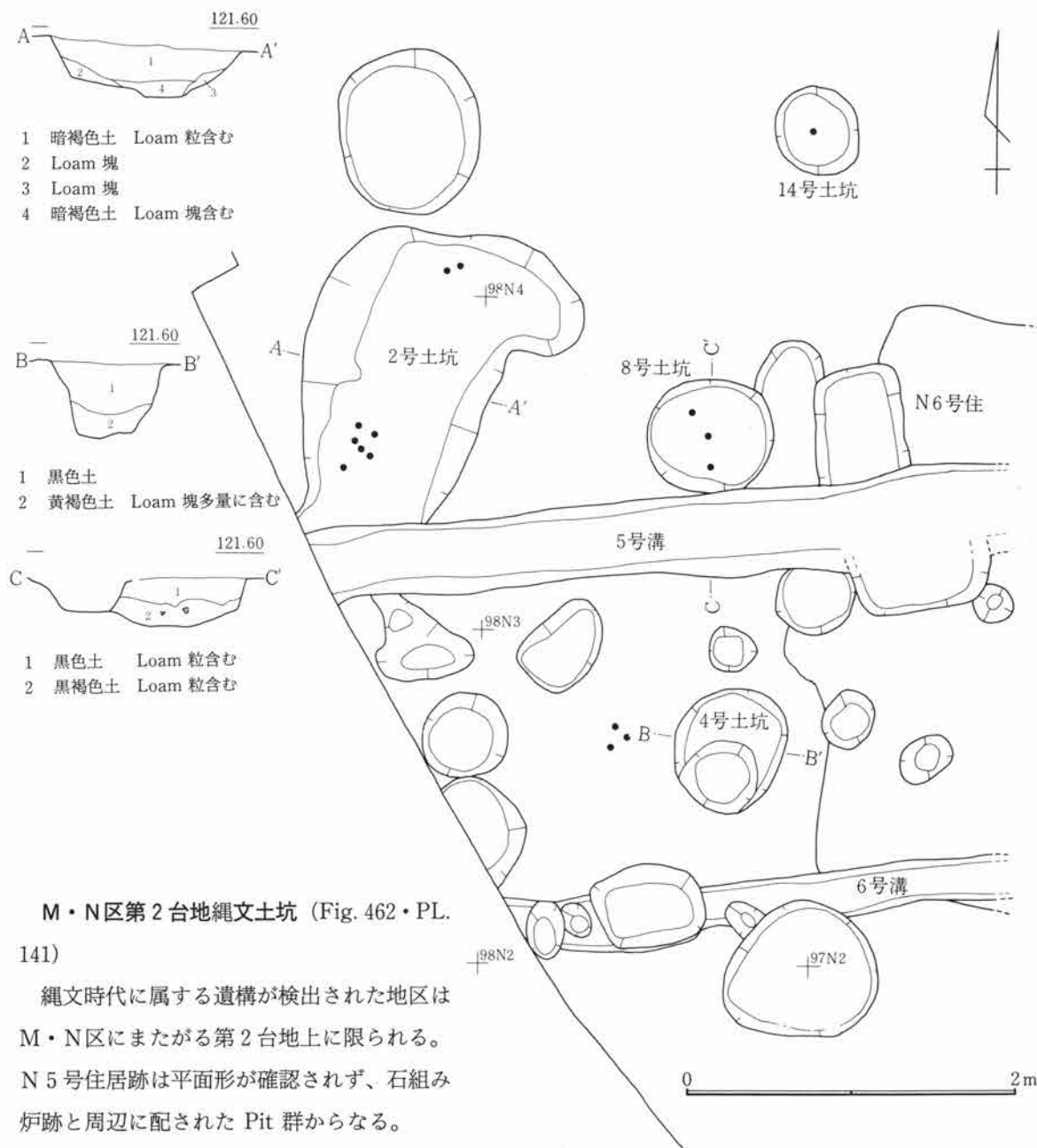


Fig. 461 N 5号住居跡出土遺物



M・N区第2台地縄文土坑 (Fig. 462・PL. 141)

縄文時代に属する遺構が検出された地区はM・N区にまたがる第2台地上に限られる。N5号住居跡は平面形が確認されず、石組み炉跡と周辺に配された Pit 群からなる。

土坑群はN5号住居跡の北側に点在する。ここで扱った縄文時代の土坑はN2号・N4号・N8号・N14号の4基である。いずれも少量であるが縄文時代後期に属する土器片が検出されている。

Fig. 462 M・N区第2台地縄文時代土坑

M・N区第2台地縄文土坑

遺構名	位置	形状	長軸方位	長×短×深	備考
N2号土坑	97・98N3・4	不整形	N-20°-E	(190)×116×30	N5号溝で南端消失。北縁は東に小さく突出する。壺口縁など5点出土。
N4号土坑	97N2	楕円形	N-15°-E	80×68×44	底面南側に僅かな落ち込みあり。小片1点出土。
N8号土坑	97N3	円形	—	80×(70)×30	南端はN5号溝に切られる。小片2点出土。
N14号土坑	96・97N4	円形	—	50×50×25	小片1点出土。

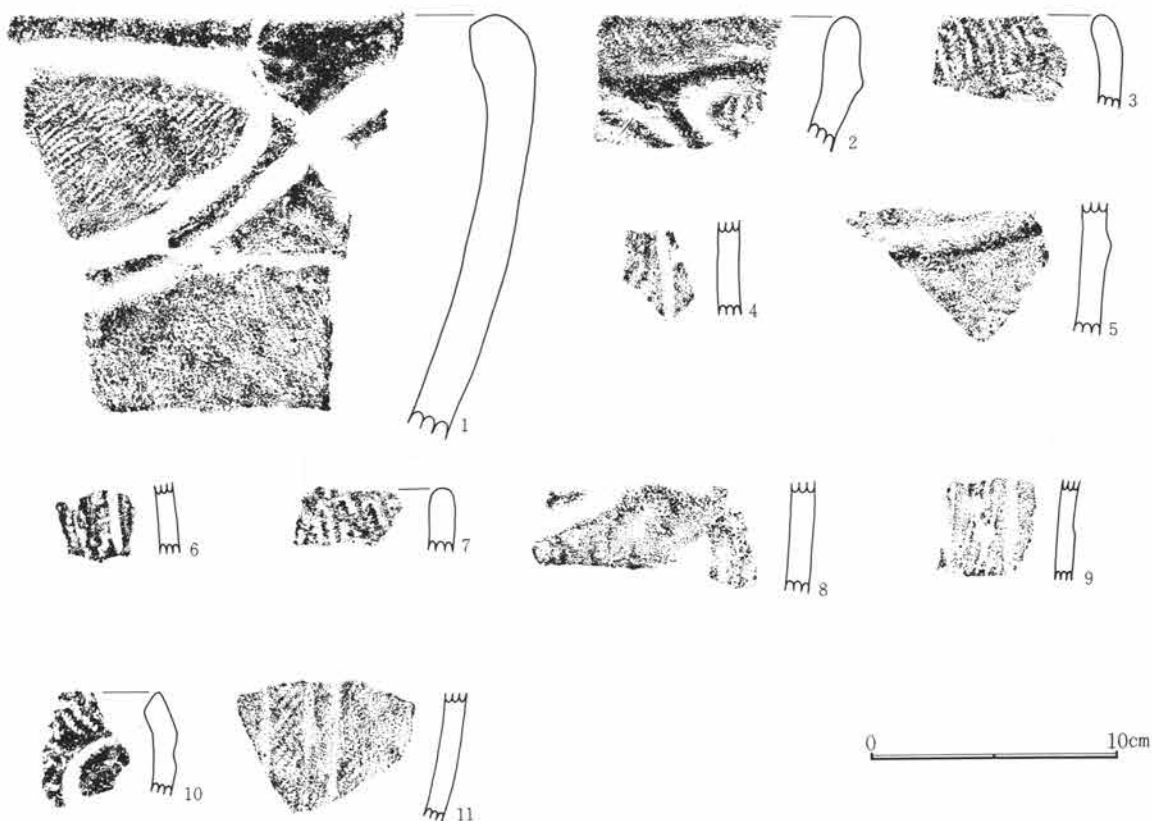


Fig. 463 M・N区第2台地縄文時代土坑出土遺物

土壌・遺構外出土土器 (Fig. 462、463・PL. 141)

土壌及び遺構外出土の土器は、量的にもさほど多くはないが、全体に器面の風化が激しく文様の不明なものもある。ここに掲載した資料は、一部の比較的良好なものである。

2号土壌 (1～5) 1は平口縁の内湾する大型の深鉢形を呈する土器で、口縁部に隆帯と太い沈線で楕円状に文様を区画する。地文には比較的燃の細いLRの縄文を施している。2は平口縁のやや内湾する大型の深鉢形を呈する土器で、口縁部に隆帯と太い沈線で楕円状に文様を区画する。地文にはLRの縄文を施している。3は平口縁の内湾する深鉢形を呈する土器で、地文にRLの縄文を施している。4は胴部片で、沈線による懸垂文をもち、地文にはLRの縄文が施されている。5は大型の深鉢形土器の口縁部文様に、隆帯を用いて区画するもの。表面の風化が激しく、地文の縄文は不明である。

4号土壌 (6) 6は沈線による懸垂文をもつ深鉢形土器の胴部片。地文の縄文は不明である。

8号土壌 (7・8) 7は平口縁のやや内湾する深鉢形を呈する土器の口縁部片で、地文にLRの縄文を施している。8は大型の深鉢形土器の頸部片で、口縁部文様に太い沈線で文様を区画し、胴部にも同様な太い沈線を垂下させるものと思われる。

14号土壌 (9) 9は胴部のくびれるキャリパー形の深鉢形土器の胴部片で、平行に垂下する懸垂文により無文帯とLRの縄文を施した縄文帯とを区画する。

遺構外出土土器 (10・11) 10は内湾する深鉢形土器の口縁部に、沈線で楕円状に文様を区画し、地文にRLの縄文を施している。11は深鉢形土器の胴部片で、平行に垂下する懸垂文により無文帯とLRの縄文を施

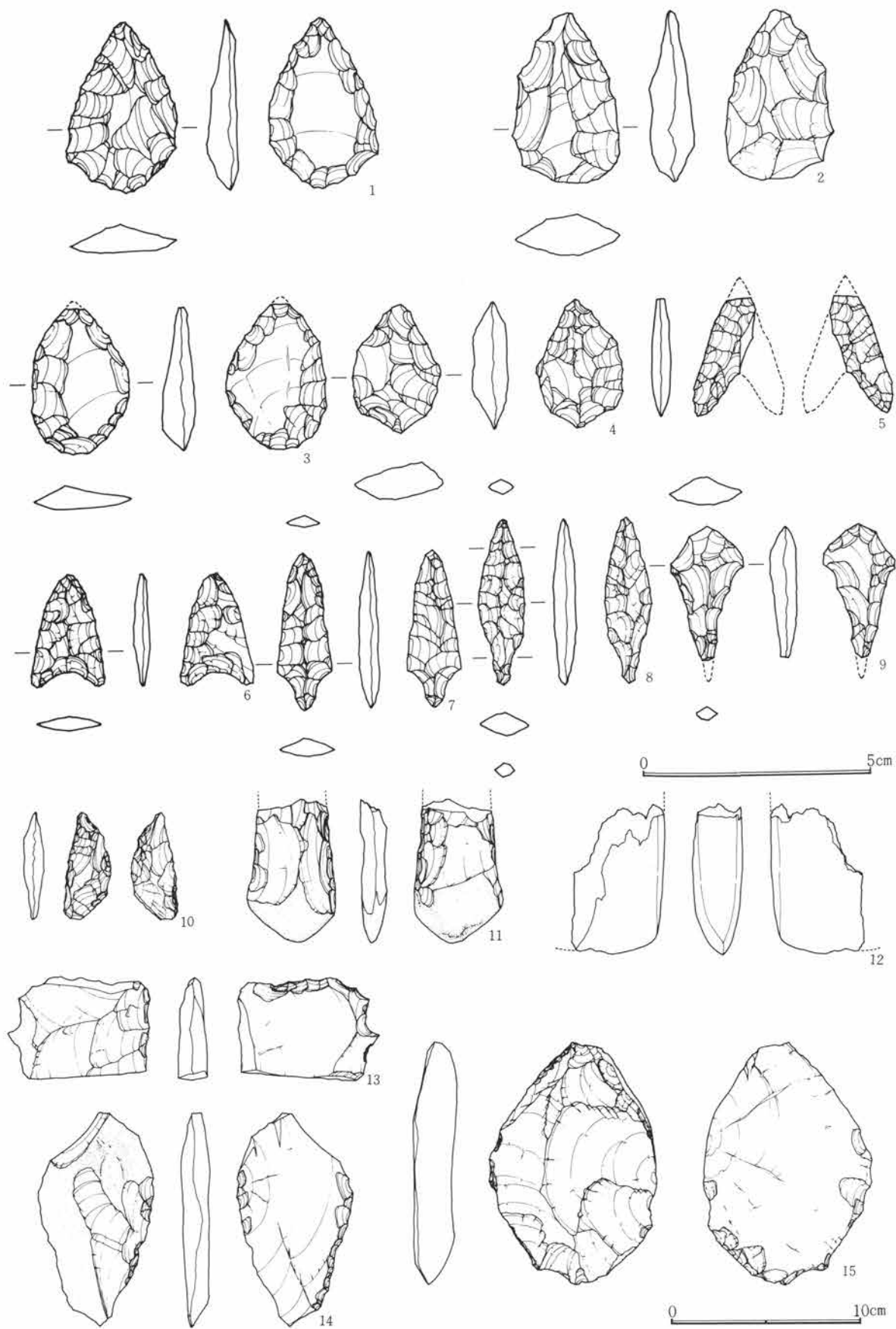


Fig. 464 M・N区出土石器

第2章 遺構と遺物

した縄文帯とを区画したものを。

遺構・遺構外出土石器 (Fig. 464・PL. 142)

縄文時代の遺構が極めて少ないこともあり、石器の出土量もかなり少ない。石鏃8点、石錘（ドリル）1点、石匙1点、打製石斧1点、磨製石斧1点、スクレイパー3点、他には剥片が数点出土している。このうち特に遺構に伴うものは1点のみで、それ以外のものは歴史時代の住居跡等から出土したもので、いわゆる遺構に伴わない石器である。

石鏃（1～8）1は黒色頁岩製の剥片を素材としたもので、周縁に調整加工がおもに行われ、裏面には素材の剝離面が残され、基部が丸味をもつ。2は黒色頁岩製の剥片を素材としたもので、周縁から大ざっぱな調整加工が施される。形状は1と同様である。3についても1と同様で、周縁にのみ調整加工が施され、表裏面に素材の剝離面を残している。4は珪質頁岩製のもので、形状は1と同様であるが、調整加工は丁寧に施されている。5はチャート製のもので、基部が大きくえぐられるもので、先端部と脚部が欠損している。6は黒色安山岩製の基部がえぐれるものであるが、摩耗が激しく調整加工の不明瞭なもの。7は黒色安山岩製の有茎石鏃で、茎部のえぐりがしっかりとし肩の張るもの。8も黒色頁岩製の有茎石鏃であるが、茎部のえぐりがはっきりとせず、葉状形に近いもの。

これらの石鏃は、その形態から大きく3分類することができる。基部が丸くなるもの。基部がえぐれるもの。有茎のものである。

石錘（9）9は黒色頁岩製のもので、摘み部のえぐりが余り深くは入らないもの。先端部が一部欠損している。

石匙（10）10は黒色頁岩製の剥片素材のもので、摘み部にえぐりをもつが、余り丁寧な調整は施されていない。

打製石斧（11）11は黒色頁岩製によるもので、表裏面の端部に表皮面を残すもの。

磨製石斧（12）12は蛇紋岩製によるもので、かなりよく丁寧に磨かれているが、大部分が欠損している。

スクレイパー（13～15）13・14は黒色頁岩の剥片素材のもので、15は黒色安山岩による横長剥片を素材としたもの。いずれも周縁に調整加工が施されている。なお、15についてはN-5号（縄文時代後期）住居跡から出土したものである。（谷藤）

石器計測表

Fig. No.	PL. No.	出土位置	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重さ	備考
464-1	142-1	M・N区第2台地下下部砂層	石鏃	黒色頁岩	3.7	2.5	0.7	6.1	
464-2	142-2	M11号住居跡	石鏃	黒色頁岩	3.7	2.4	11.00	8.0	
464-3	142-3	M14号住居跡	石鏃	黒色頁岩	3.2	2.2	0.7	4.1	先端欠損
464-4	142-4	N1号墓	石鏃	珪質頁岩	2.8	2.0	0.8	3.9	
464-5	142-5	M22号住居跡	石鏃	チャート	2.5	1.4	0.4	1.0	一部欠損
464-6	142-6	M・N区第2台地下下部砂層	石鏃	黒色安山岩	2.4	1.6	0.35	1.1	
464-7	142-7	M21号住居跡	石鏃	黒色頁岩	3.4	1.2	0.4	1.5	
464-8	142-8	N1号住居跡	石鏃	黒色安山岩	3.65	1.05	0.5	1.3	
464-9	142-9	M18号住居跡	石錘	黒色頁岩	2.9	1.6	0.6	2.1	一部欠損
464-10	142-10	M21号住居跡	石匙	黒色頁岩	5.6	2.5	1.1	10.4	
464-11	142-11	M34号住居跡	打製石斧	黒色頁岩	7.4	4.7	1.4	59.2	欠損
464-12	142-12	M35号住居跡	磨製石斧	蛇紋岩	7.7	4.8	2.6	144.8	欠損
464-13	142-13	M36号住居跡	スクレイパー	黒色頁岩	5.3	7.5	1.6	80.6	
464-14	142-14	M45号住居跡	スクレイパー	黒色頁岩	11.0	6.1	1.5	102.8	
464-15	142-15	N5号住居跡	スクレイパー	黒色安山岩	12.6	8.8	2.3	282.9	

K74号住居跡 (Fig. 465、466・PL. 143)

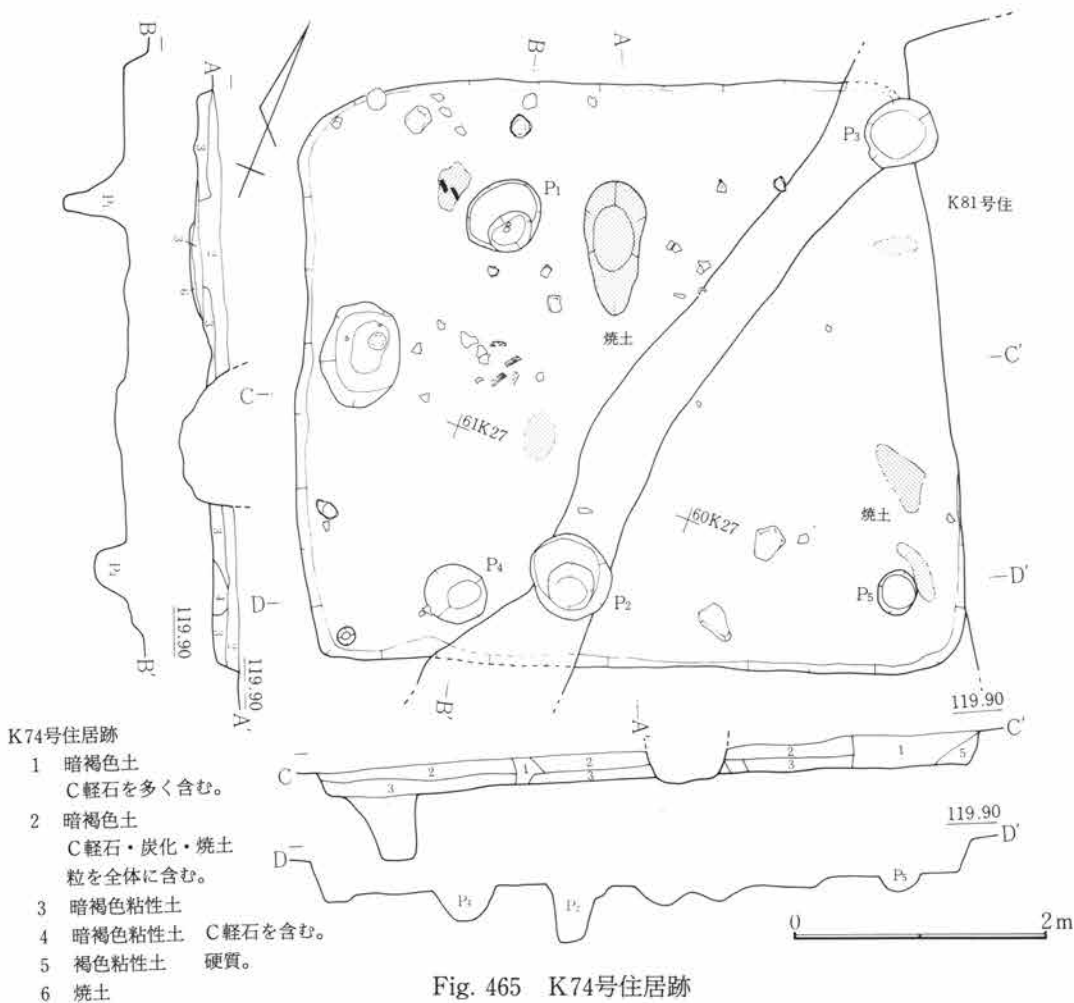
K区やや北寄りに位置し、58～61K26～28の範囲にある。K81号住居跡・K11号溝と重複しているが、両者よりも古い時期の所産である。

平面形は東西方向に長軸をもつ方形を呈する。東西長5.4m・南北長4.5mを測り、東西の長軸方位はN-81°-Eを示す。壁高は約26cmを測る。床面はほぼ平坦をなすが、踏み締まりは総じて弱い。P₁～P₅の5箇所に穴が検出されているが、その位置と規模からして主柱穴と考えられるものは、P₁及びP₂の2つと考えられる。P₁は上径64×56cm・下径16×30cm・深さ46cm、P₂は上径68×60cm・下径21×22cm・深さ44cm。P₁・P₂の柱間は2.9mを測り2つとも上半は漏斗状に開く。

炉跡は北側僅かに西寄りの位置に設置され、浅く不整楕円形を呈す。径は1×0.5mを測る。床面東側及び西側に小範囲の焼土分布と炭化材が検出されているが被災したほどの量ではない。西壁際中央部に貯蔵穴と考えられる楕円形の土坑が穿たれる。径82×62cm・深さ52cmを測る。

出土遺物は土師器甕類のほか蛇紋岩製勾玉・管玉が検出されている。

なお、当住居跡は『鳥羽遺跡』I・J・K区 1988 で報告したが出土遺物の掲載が不十分なため、今回改めて再掲載したものである。



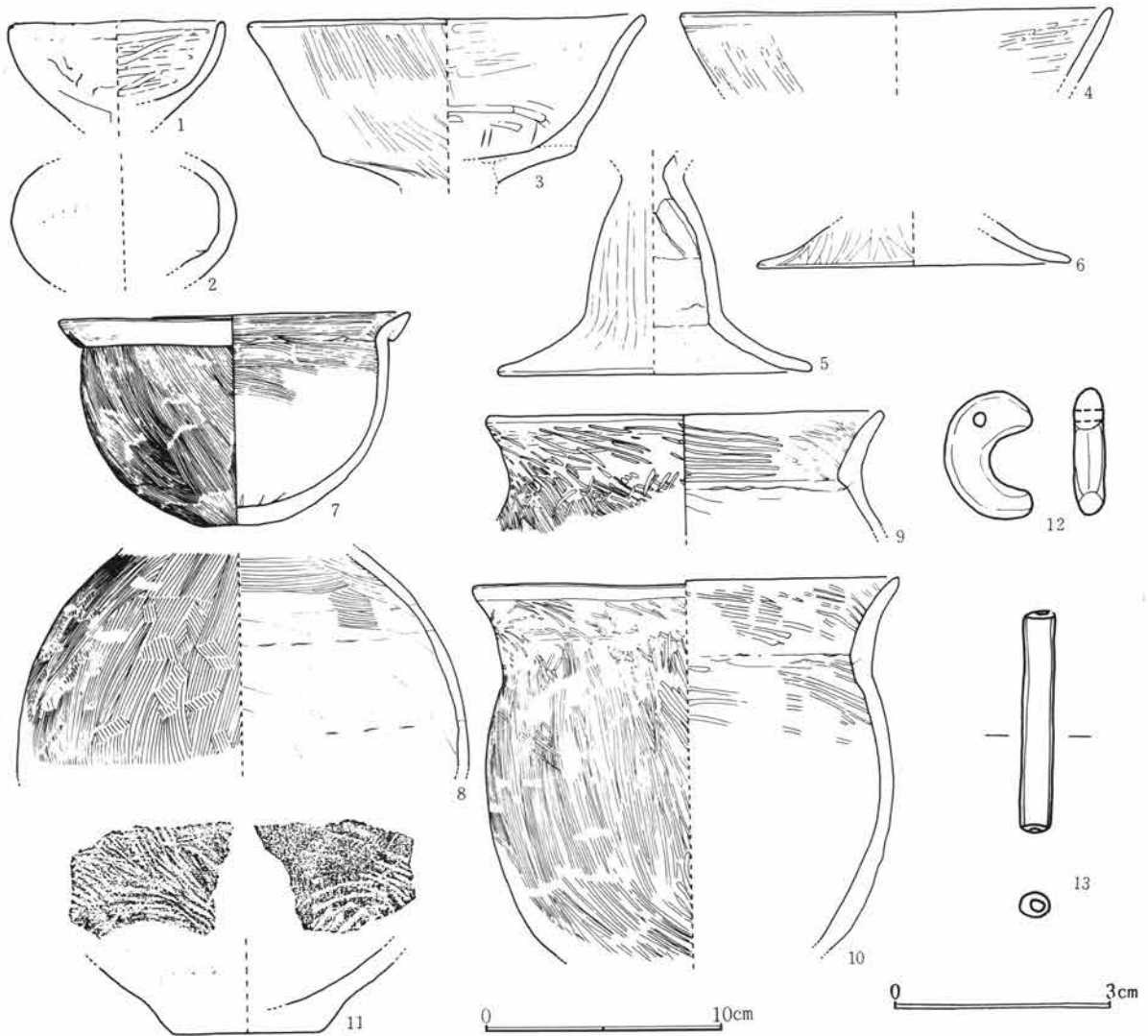


Fig. 466 K74号住居跡出土遺物

K74号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
466-1 143-1	土師器 高杯?	杯部 $\frac{1}{4}$	9.0×-× (0.4)	埋土	体部内湾して開く。外面に弱い篋削り。内面篋磨き。外面な手捏ねによる接合痕残る。	①良好 ②鈍い黄橙 ③密
466-2 143-2	土師器 壺	胴部 $\frac{1}{2}$	-×-× (6.0) 胴部径9.4	床直	胴部強く張をもち球形を呈す。内外面撫で	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや密
466-3 143-3	土師器 高杯	杯部 $\frac{1}{2}$	16.5×-× (6.8)	床直	腰部水平気味に開き体部強く折れて深い。僅かに外反して開く。外面斜行篋磨き。内面横位篋磨き及び篋撫で。	①良好 ②鈍い黄橙 ③密
466-4 143-4	土師器 壺	口縁部 $\frac{1}{4}$	18.0×-× (3.0)	埋土	口縁部直線的に外傾。内外面篋磨き。	①良好 ②鈍い黄橙 ③密
466-5 143-5	土師器 高杯	脚部 $\frac{1}{2}$	-×13.0× (9.0)	床直	脚部下方に向い、脹らみ顕著。裾部は大きく開く。外面篋磨き。内面接合痕顕著。	①良好 ②鈍い褐 ③密
466-6 143-6	土師器 高杯	脚部 $\frac{1}{2}$	-×13.0× (1.7)	床直	裾部緩く外反気味で大きく開く。外面篋磨き。	①良好 ②鈍い橙 ③密
466-7 143-7	土師器 鉢	完	14.4×3× 8.5	貯蔵穴内	折り返し口縁、強く外屈する。胴部球形を呈す。底部小さく平石。胴部外面斜刷毛目。内面口縁～胴上位横刷毛目。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密
466-8 143-8	土師器 壺	胴上半 $\frac{1}{2}$	-×-×(8.5) 胴径18.4	西央部床面	丸く強く張り球形を呈す。胴外面斜刷毛目、内面上半横刷毛目。中～下半斜篋撫で。	①良好 ②鈍い褐 ③やや密

第1節 竪穴住居跡と出土遺物

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
466-9 143-9	土師器 甕	口縁部	16.1×—× (4.8)	北壁際床 面	口縁部外面は緩やかに外反し、内面下位で強く外屈する外面口縁部～肩部斜、内面口縁部横・斜篋磨き状調整。	①やや軟 ②褐灰 ③密
466-10 143-10	土師器 甕	½・底部欠損	17.5×—× (15)	西壁際床 面	胴部やや丸く張る。口縁部は直線的に外傾した後外反して立ち上がる。外面口縁部～胴部斜、縦刷毛目、内面口縁部・胴上半は斜刷毛目調整。	①やや軟 ②にぶい 黄橙 ③密
466-11 143-11	土師器 甕	底部¼	—×6.2× (3.4)	床直	器肉厚い。内外面に粗いかき目。	①良好 ②鈍い赤褐 ③密
466-12 143-12	石製品 勾玉	完	長1.8 幅1.2 厚0.4 孔径0.15	貯蔵穴内		蛇紋岩
466-13 143-13	石製品 管玉	完	長3 径0.4 孔径0.2	貯蔵穴内		蛇紋岩

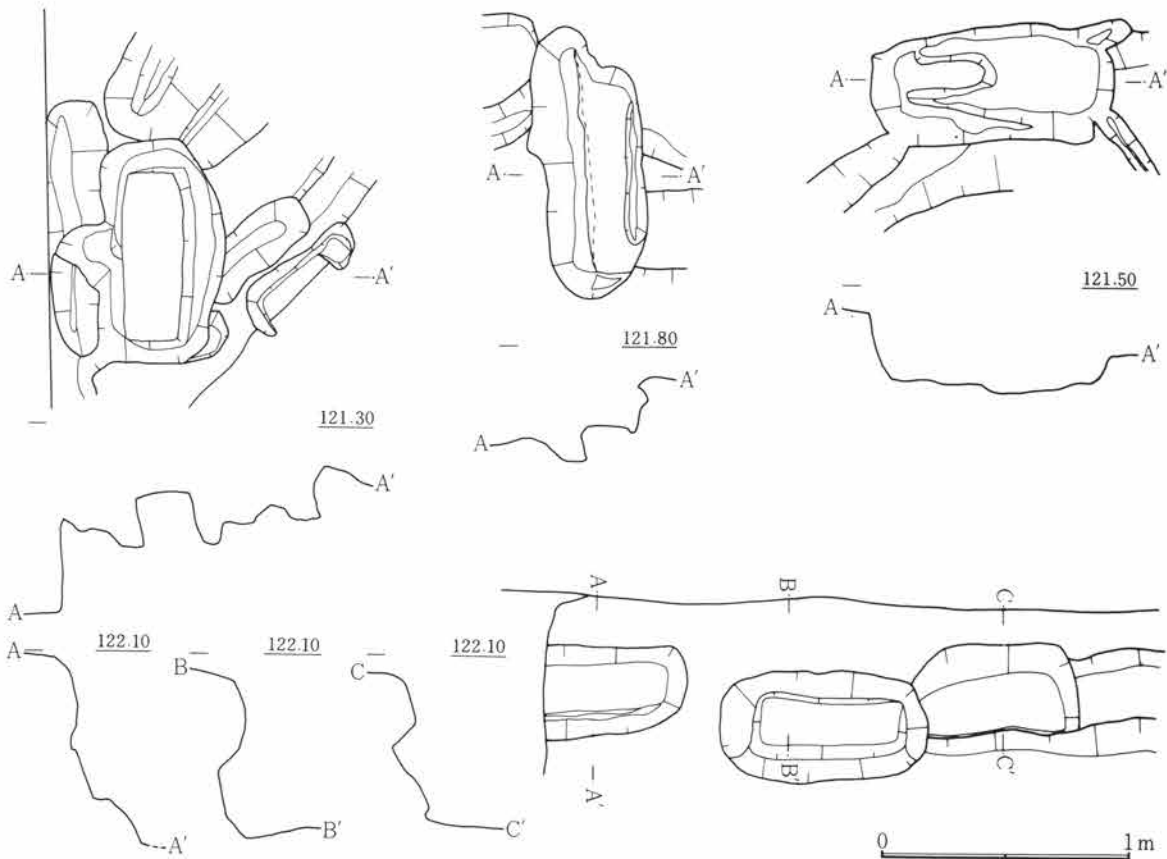


Fig. 468 O区第1台地竈構築材採掘坑

以上のことからこれら土坑群は一定の規格材を、連続的あるいは一定期間内で恒常的に採取した採掘坑群の可能性が強まった。

採掘坑群の検出範囲が広がるにつれて、土坑内に取り残しと考えられる用材が検出され、用材の具体的な形状や大きさの一端を知ることができた。残存していた用材は平面形が長方形をなし、70×25cm・厚さ約20cmの角柱状である。土坑の大きさ・形状からは大・小およそ5種類を認めるが、用材が残されることは希であり用材毎の詳細な数値は不明である。土坑の大きさは長辺が1m以上・0.9~1m・0.7~0.8m・0.5~0.6mの平面形が長方形のものとは一辺70cm前後の方形状を呈する各種がある。

採掘坑より切り出された材の用途については直接の証明は得られていないが、鳥羽遺跡内に検出される奈良~平安期にかけての竈穴住居跡に付設される竈に用いられる構築材がこれにあたりと考えられる。竈の構築に必要な部材は多くの場合、焚口部を形成する左右の袖材とこれに架かる天井材が主である。また支脚やまれに燃焼部と煙道部の境に焚口部と同じ構成で部材を用いる場合もある。

O区第1台地で検出された竈構築材採掘坑群は台地南半の縁辺部から台地奥部西方へ向かい幅10mで帯状に延び、さらに範囲を広げる様相が見られるが確認部分では採掘面積は約100m²におよぶ。採掘方法は基本的には平面的露天掘りで行っているが、帯状採掘坑群の北縁には壁面に対して垂直に切り出す方法が見られる。この立面利用の採掘坑は採掘の基層となる凝灰岩質層の露天面より15~30cm下がった位置にあり、横一段に限られる。これから看取される全体的採掘工程は、まず台地東縁辺より用材として耐えられる凝灰岩質層の高さを設定し、壁面を利用して垂直に切り込み、これによって平坦化された面を利用して平面採掘を行ったと考えられる。垂直切り出しと平面切り出しは連続して行うことも可能である。

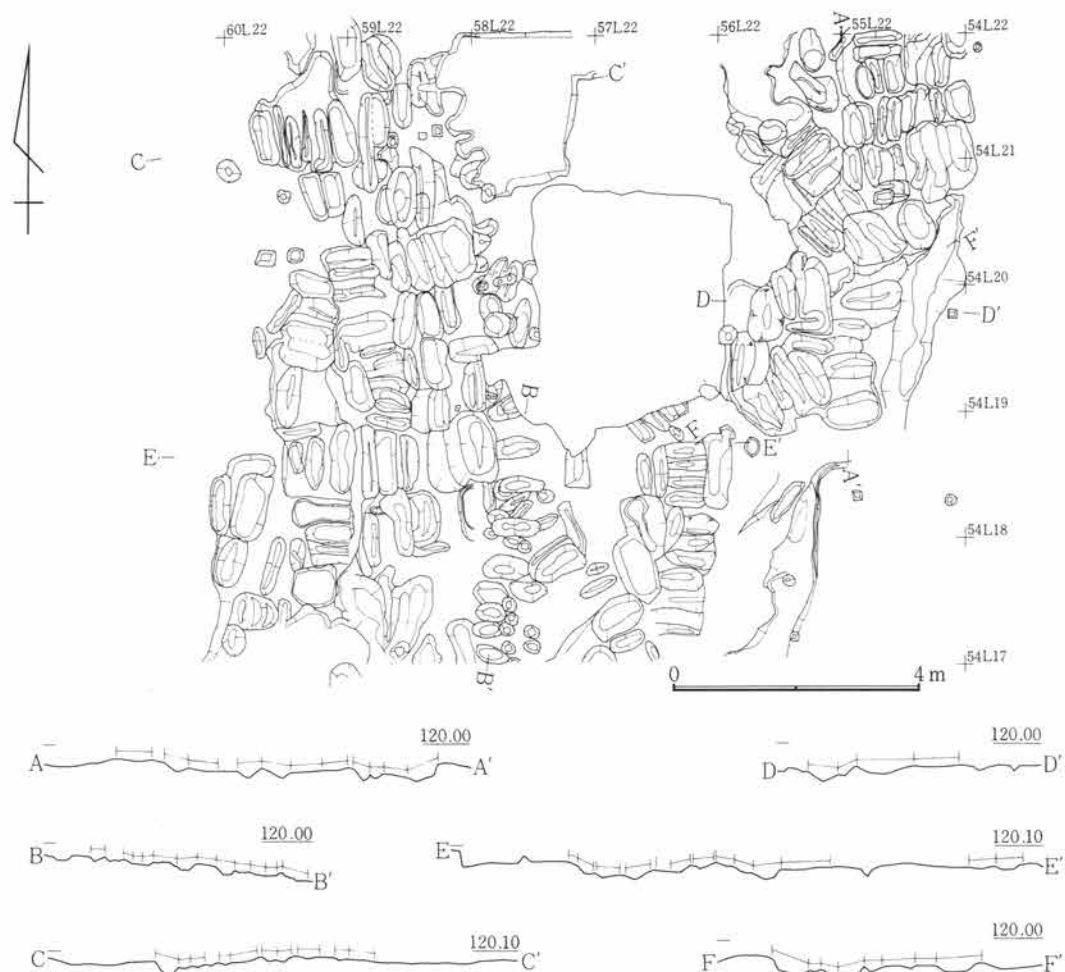


Fig. 469 L区第4台地採掘坑群

L区第4台地の採掘坑群は台地の東縁辺部に広がり、採掘面積は約60㎡である。採掘方法及び用材の企画性はO区第1台地と同様と考えられるが、当区では凝灰岩質層の検出面が直ちに採掘面となっており、本来的には露天採掘りである。またO区第1台地では採掘坑のつながりがかなり乱れているが、ここでは同種同規格が規則正しく連続して見られ、効率的で手なれた状況が窺われる。

竈構築材および採掘坑検出材の可視分析について

群馬大学 新井房夫教授に可視分析をお願いしてコメントをいただいたので、ここに掲載する。

岩質 半固結灰白色凝灰岩

鉱物組成：無色鉱物 斜長石に富み石英は含まない。

：有色鉱物 紫蘇輝石>普通輝石>磁鉄鉱

以上の斑晶には自形を呈するものが多く含まれている。(大部分、本質物質とみられ川砂などの混入はほとんどないとみなせる。)

所見

複輝石安山岩質の上記岩質と、野外の原石産状から、前橋台地を構成する洪積層のうち前橋泥流堆積物 (Ca 2万 YBP) と前橋泥炭層 (Ca 1.3万 YBP) の中間に介在する凝灰岩～凝灰岩質シルト層に対比

できる。

おそらく浅間火山起源で、浅間火山の軽石流（第1軽石流 Ca1.4万 YBP）に対応するものとみられる。

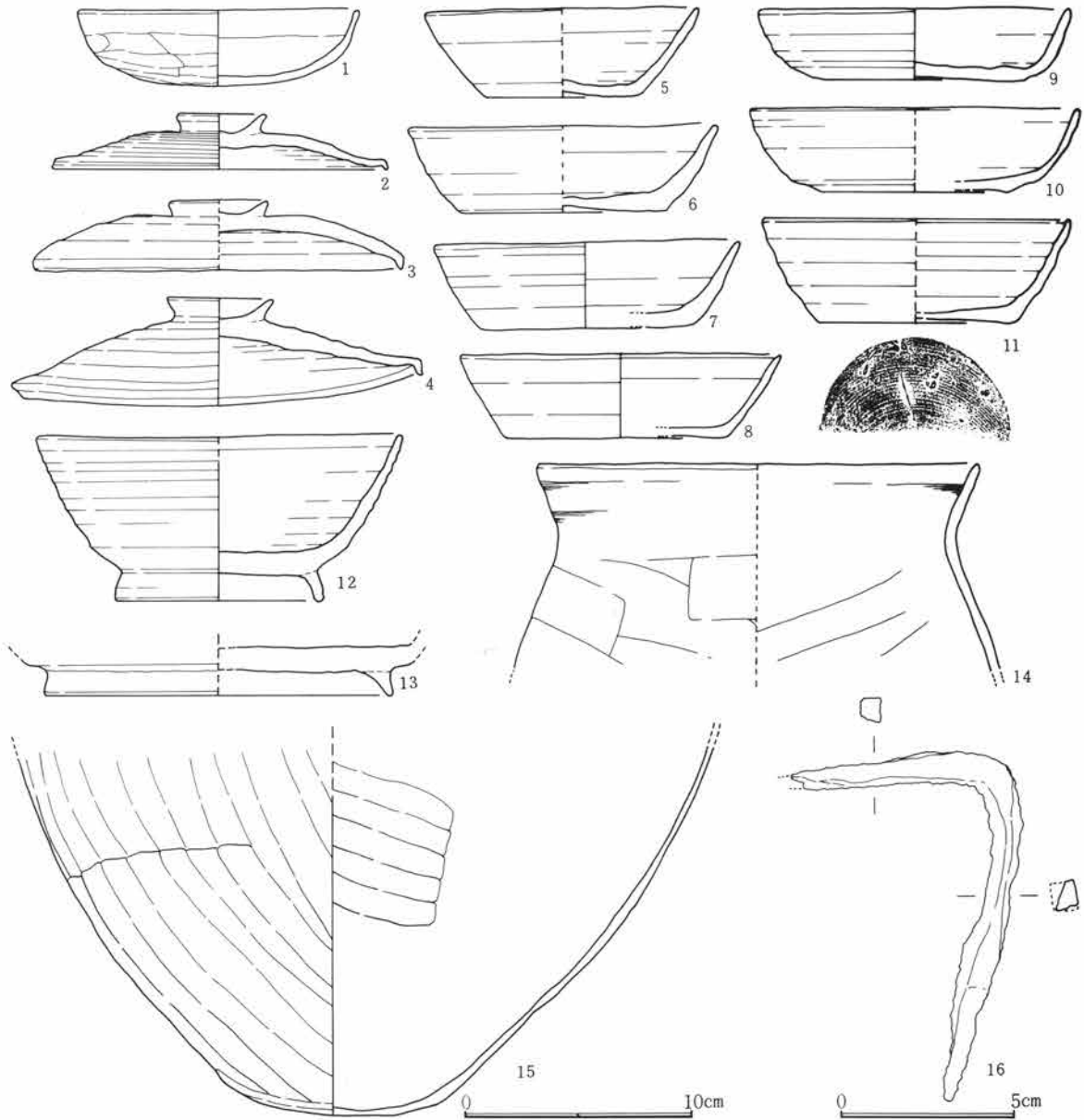


Fig. 470 O区第1台地竈構築材採掘坑出土遺物

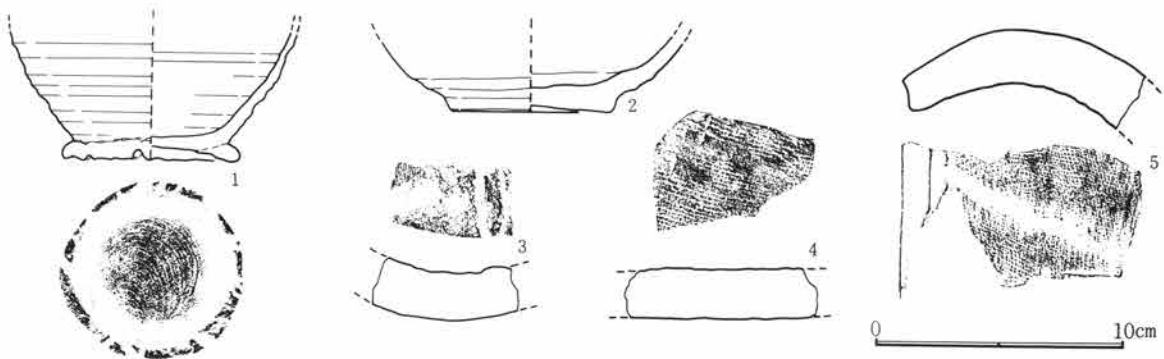


Fig. 471 L区第4台地竈構築材採掘坑出土遺物

第2章 遺構と遺物

O区第1台地電構築材採掘坑出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	残存量	計 測 値	器 形 及 び 成 ・ 調 整 の 特 徴、 そ の 他	①焼 成 ②色 調 ③胎 土
470-1 155-1	土 師 器 杯	⅔	12.2×-×3.2	底部丸味をもつ。口縁部直線的に外傾。底部篋削り。口縁部横撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗
470-2 155-2	須 惠 器 蓋	⅔	14.5×3.8×3.4	天井部やや丸く体部外反して開く。口縁部折れてやや外傾して立つ。環状摘。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや粗
470-3 155-3	須 惠 器 蓋	⅔	16.0×-×3.0 摘径4.3	天井部平坦。体部直線的に開き口縁部直に折れる。端部略三角。環状摘。天井部回転篋削り。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密・黒色粒混
470-4 155-4	須 惠 器 蓋	⅔	17.2×-×4.6 摘径4.6	天井部緩い丸味をもち体部に至る。口縁部直立気味に立ち外傾。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
470-5 155-5	須 惠 器 杯	⅔	11.8×6.6×3.8	体部内湾気味に外傾。轆轤成形・底部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
470-6 155-6	須 惠 器 杯	⅔	13.2×9.0×3.7	全体的にやや肥厚。腰部丸味をもち体部外反気味に開く。轆轤成形。回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
470-7 155-7	須 惠 器 杯	⅔	13.4×9.8×3.6	底径大きく腰部やや張る。体部上半は直線的。口唇部は丸い。轆轤成形。回転篋削り後回転篋削り。	①還元 ②灰白 ③やや粗
470-8 155-8	須 惠 器 杯	⅔	13.8×9.4×3.6	体部やや浅く直線的に外傾。口唇部尖る。轆轤成形。底部手持ち篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
470-9 155-9	須 惠 器 杯	⅔	13.4×8.6×3.0	腰部やや丸味をもち体部浅く外反気味に開く。轆轤成形。回転篋削り。	①還元 ②灰白 ③やや粗
470-10 155-10	須 惠 器 杯	⅔	14.4×8.0×3.6	底径大。体部やや浅めで内湾気味に立つ。器肉薄い。轆轤成形。	①やや軟 ②灰白 ③やや粗
470-11 155-11	須 惠 器 杯	⅔	13.4×8.6×4.5	体部深く直線的に外傾。轆轤成形。右回転糸切り。	①還元・良好 ②灰 ③やや密
470-12 155-12	須 惠 器 碗	ほぼ完形	15.9×9.0×7.0	底部肥厚。付高台内湾気味に開く。腰部丸く張りをもち体部直線的に外傾。轆轤成形。回転糸切り。	①還元・良好 ②灰白 ③やや粗
470-13 155-13	須 惠 器 盤	底部⅔	-×15.0×(2.1)	腰部張る。付高台、ハの字状に開き断面丸い。轆轤成形。回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
470-14 155-14	土 師 器 甕	上半	19.2×-×(8.9)	胴部やや張らみ気味。口縁部直線的に外傾する。口縁部横撫で。体部横位篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②鈍い褐 ③細砂混る
470-15 155-15	土 師 器 甕	下半	-×9.0×(15.8)	底部やや丸味をもつ。胴部縦位篋削り。底部一定方向篋削り。内面篋撫で。底部から胴部まで吸炭あり。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗
470-16 155-16	鉄 器 不 明		長(10)全長16 幅0.8	断面方形。片端部欠損。身部L字状に折れる。大形の角釘か。	

L区第4台地電構築材採掘坑出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	残存量	計 測 値	器 形 及 び 成 ・ 調 整 の 特 徴、 そ の 他	①焼 成 ②色 調 ③胎 土
471-1 155-1	須 惠 器 碗	下半	-×7.0×(4.7)	体部深く丸味をもち内湾。付高台、ハの字状に開き歪みあり。轆轤目強い。右回転糸切り。	①良好 ②浅黄橙 ③赤色粒混る
471-2 155-2	須 惠 器	底部	-×6.4×(2.9)	底部内厚。腰部から体部丸味をもつ。轆轤成形。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗
471-3 155-3	瓦 丸 瓦	小 片	厚1.9	凹面布目。凸面篋撫で。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや密
471-4 155-4	瓦 平 瓦	小 片	厚1.9	凹面布目。凸面篋調整。	①良好 ②灰 ③やや粗
471-5 155-5	瓦 丸 瓦	小 片	厚2.1	凹面布目。凸面篋撫で。側面篋調整。	①良好 ②灰 ③やや粗

3. 炉 跡

O1号炉跡 (Fig. 472、473・PL. 144)

O区第1台地の南側東縁部に位置し、103O6の範囲にある。竪穴住居跡などに付属する内部施設ではなく単独遺構であり、これに伴う Pit も検出されていないことから露天で使用されたと考えられる。平面形状は不整略三角形を呈し、南北長約95cm・東西長90cmを測る。深さは約20cmで Loam 粒 5cm大を多く含む黒褐色

第2節 その他の遺構と出土遺物

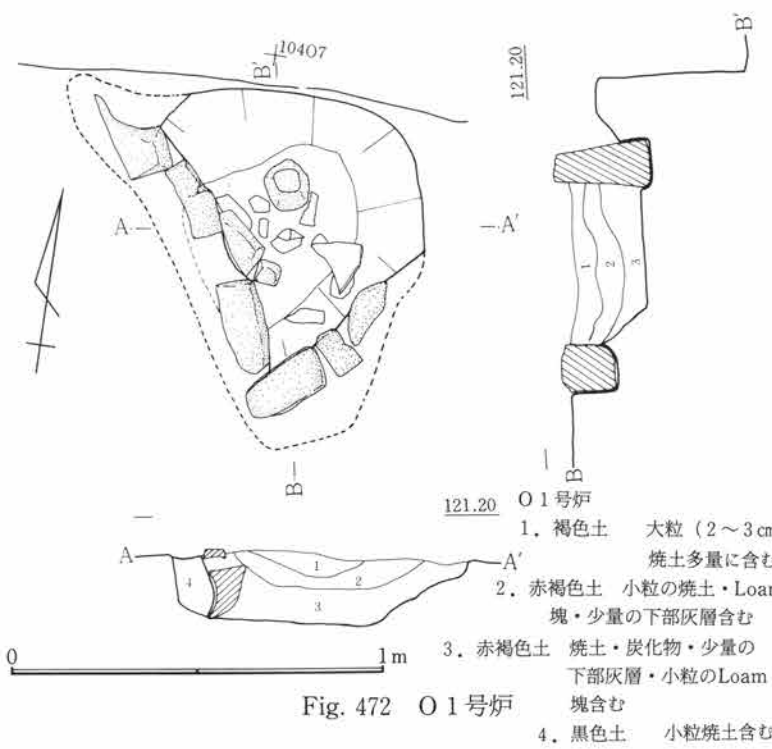


Fig. 472 O1号炉

Fig. 473 O1号炉出土遺物

土を掘り込んでいる。炉内には中央やや北寄りに角柱状の凝灰岩質加工材を支脚に据え、西縁から南縁にかけて同質材で囲むように配されている。縁辺の材には基盤土に掘形をもつものと浮いた状態にあるものもある。埋土は大粒な焼土粒や炭化粒を含み、2層下位には薄い灰層も認められた。壁面は部分的に赤化している箇所もある。出土遺物は土師器甕片が少量検出されており、奈良～平安時代前半に属すると思われる。当跡の性格・機能については炉跡自体がもつ属性から明確にしごたいが消極的・積極的諸条件から次のような状況が想定される。露天の施設の可能性があること。当台地上には日常生活跡が検出されていないこと。竈構築材採掘坑に近接すること。また炉内から出土した遺物が奈良～平安期にかけてのものである可能性があ

り、採掘材と同質の材を用いる竈は当該期に多いこと。以上のことから、炉跡は竈構築材採掘に従事した人々の仮設的炉跡として用いられていたと考えられる。

O1号炉出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
473-1 156-1	須恵器 杯		11.8×7.0×3.6	腰部に丸味をもち体部やや深く口縁部にかけて緩く外反。底部肥厚。轆轤成形。	①還元 ②灰白 ③やや密
473-2 156-2	須恵器 椀	底部	—×8.4×(1.3)	付高台、やや高くハの字状に開く。断面丸い。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密

3. 掘立柱建物跡

N1号掘立柱建物跡 (Fig. 474・PL. 144)

N区第2台地の東縁部に位置し、94～96N 4・5の範囲にある。平面形は2×1間で東西方向に棟行をもつ。棟行の南辺・北辺の柱筋はいずれも中間柱穴が外側に若干はずれ、さらに北辺のそれは柱間距離が大きく東へ偏っている。棟行は3.2m・桁行は1.8mを測り、棟行方位はおよそN-96°-Eを示す。棟行北辺の柱間距離は東から1.1×2.1m・南北は1.5×1.7mである。柱穴掘形は径20～30cmの円形を呈し、深さは棟行の中間柱穴が30～40cmであるのに対し四隅柱穴は12～22cmと浅くなっている。柱穴の基盤は堅い凝灰岩質層となっている。当跡に伴う遺物は検出されていない。

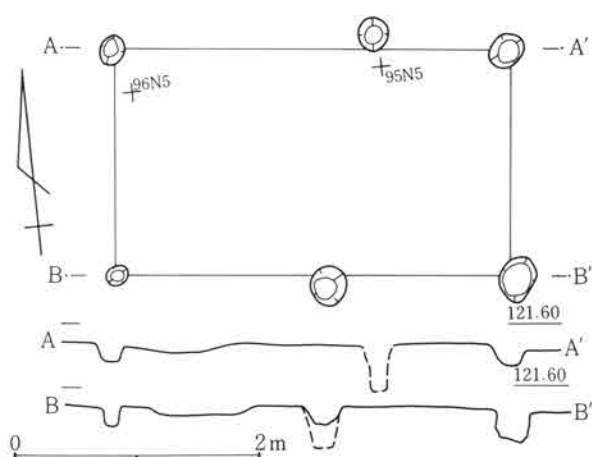
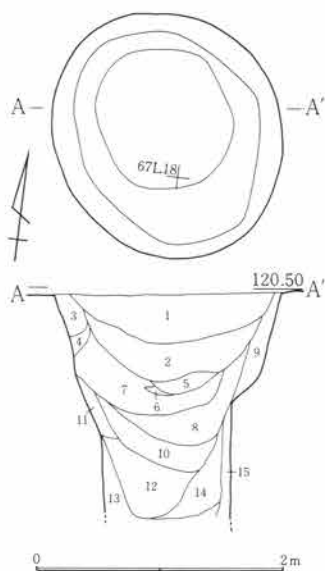


Fig. 474 N1号掘立柱建物跡



- L1号井戸
- | | |
|-----------|-----------|
| 1. 暗灰褐色土 | B軽石含む。砂質 |
| 2. 暗灰褐色土 | C軽石を多く含む |
| 3. 粘性砂質塊 | |
| 4. 明乳白色土 | 粘質 |
| 5. 暗灰褐色土 | 黒褐色土塊含む |
| 6. B軽石砂質 | |
| 7. 暗褐色土 | 焼土粒・C軽石含む |
| 8. 暗灰褐色土 | B軽石含む。砂質 |
| 9. 褐色土 | 粘性 |
| 10. 暗褐色土 | 焼土粒含む |
| 11. 乳白色土 | 粘質 |
| 12. 暗灰褐色土 | 焼土塊含む。砂質 |
| 13. 黄色土 | 砂質土塊 |
| 14. 暗褐色土 | C軽石含む |
| 15. 暗褐色土 | 白色粘質土塊含む |

Fig. 475 L1号井戸

5. 墓跡

M1号墓 (Fig. 477, 479・PL. 145)

M区第2台地の南部縁辺に位置し、92M47・48の範囲にある。M7号・M9号住居跡と重複するが両者より新しい時期の所産である。平面形は整った長楕円形を呈し、長軸を南北方向にもつ。南北の長軸は約2.35m・東西短軸1.05m・深さ40cmを測り、長軸方位はN-10°-Eを示す。埋土は浅間山降下のC軽石を含む暗褐色土で埋まり中位層には少量の焼土粒が含まれる。底面に近く枝状・棒状の炭化材が検出され底面上には厚さ5cmに炭化層が認められた。この炭化層の直上には僅かながら焼骨と思われる極細片が検出されており、墓制にかかわる遺構と考えられる。出土遺物は酸化焰焼成の須恵器小杯・小碗・足高高台碗の3点の他角釘1点が検出されている。

当跡は焼骨・炭化材・炭化層の存在から見て火葬墓の施設であることは確定と思われる。しかし焼骨の量が極めて少なく屍体の火葬後直ちに墓としたかどうか疑問が残る。焼骨が少ないことは収骨が行われた結果であり、むしろ火葬場跡の可能性が強い。出土遺物には二次被熱の痕跡がなく、火葬後に埋納されたものであろう。また1点ながら角釘の存在と枝状炭化材は屍体収納に木棺を使用していた可能性がある。

4. 井戸跡

L1号井戸 (Fig. 475, 476)

L区第4台地のほぼ中央に位置し、66・67L17・18の範囲にある。平面形状はやや楕円気味で径2×1.8mを測る。検出面下約80cmまで緩く漏斗状に開き、以下は筒円筒形になる。底面までの検出にいたらず深さ2mまで掘り下げたにとどまる。埋土は最上層及び中位に浅間山降下のB軽石主体層が、また中位から下位にかけては浅間山降下C軽石を含む暗褐色土が堆積する。出土遺物は須恵器小杯1点が検出されている。

須恵器杯 (Fig. 476・PL. 156)

口径9.6cm・底径5cm・器高2.6cm、酸化焰焼成で色調は淡橙色を呈し、良好な焼き上がりである。全体に器肉が厚く丸味のある腰部から体部上半は外反して開く。轆轤成形で底部切り離しは右回転糸切りである。

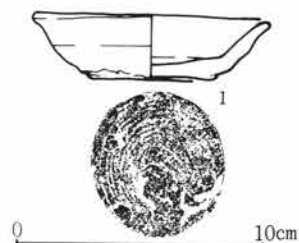
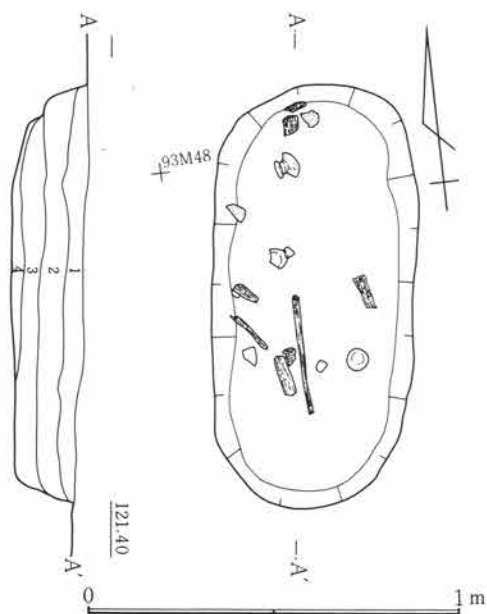


Fig. 476 L1号井戸出土遺物

L 2号墓 (Fig. 478、480・PL. 145)

L区第4台地の中央やや西側に位置し、71・72L17・18の範囲にある。L192号・L199号住居跡と重複し、両者より新しい時期の所産である。平面形は南北方向に長軸をもつ長方形を呈する。南北長約2.4m・東西長1.1m・深さ60cmを測り、長軸方位はおよそN-5°-Wを示す。埋土は土粒が粗く締まりの弱い暗褐色土である。遺体は頭部を北に置く伸屈葬であろう。出土遺物は酸化焙焼成の須恵器小杯2点・灰釉陶器碗・段皿の他角釘鉄など鉄器3点がある。角釘は小片であるが木質の付着が認められ、遺体収納には木棺が用いられたと考えられる。また墓墳内には角礫が検出されているが墓標として置かれたものが陥没したか、当初から埋納されたものか不明である。また須恵器甕の転用硯が出土しているが当跡に埋納されたものか不明である。



M1号墓

1. 暗褐色土 C軽石多量に含む
2. 暗褐色土 C軽石多量、焼土粒少量含む
3. 暗褐色土 やや黒味強い
4. 炭化物層

Fig. 477 M1号墓

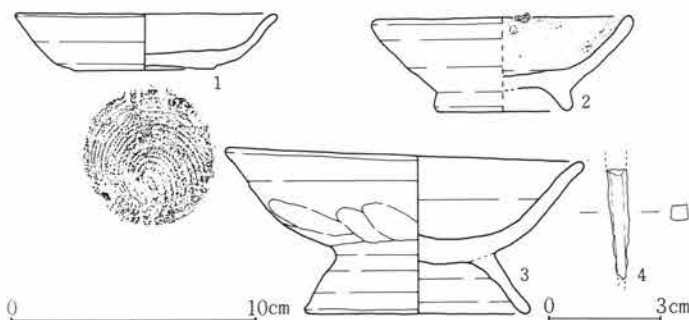
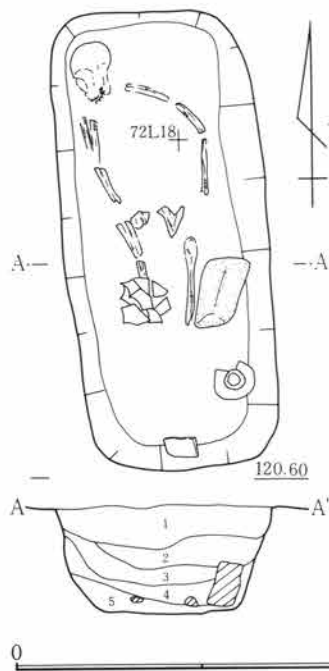


Fig. 479 M1号墓出土遺物



L 2号墓

1. 暗褐色土 細粒赤褐色土粒含む
2. 暗褐色土 土粒粗い
3. 暗褐色土 砂質
4. 暗褐色土 土粒粗い
5. 暗褐色土 土粒粗い

Fig. 478 L 2号墓

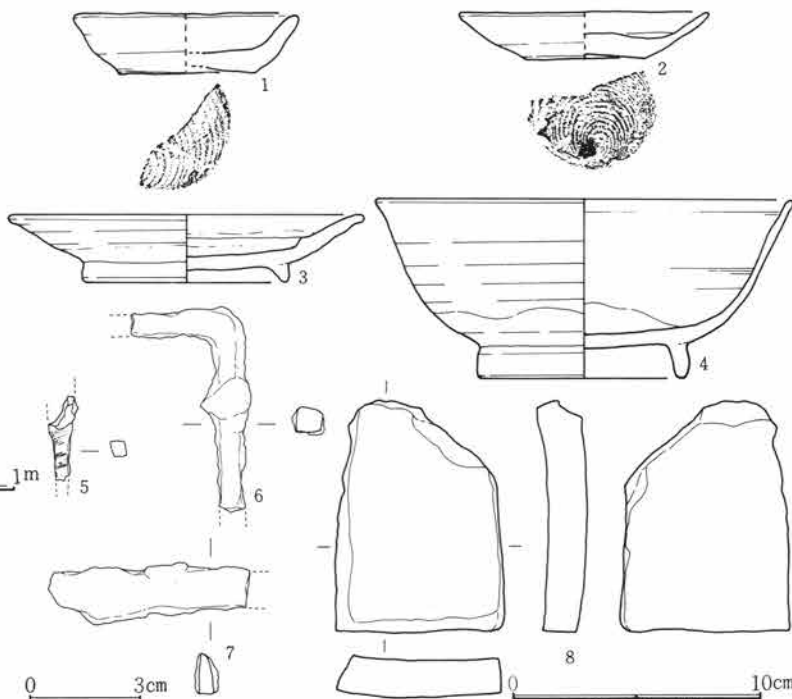


Fig. 480 L 2号墓出土遺物

第2章 遺構と遺物

M1号墓出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
479-1 156-1	須恵器 杯	完形	10.5×5.5×2.3	体部内湾し口縁部外反して開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②橙 ③やや粗
479-2 156-2	須恵器 椀	1/4	10.4×5.5×3.7	体部浅く内湾気味に開く。付高台、低い。内面二次被熱と溶解物付着。転用坩堝か。	①良好 ②灰白 ③やや密
479-3 156-3	須恵器 椀	完形	14.2×8.9×6.7	腰部丸く口縁部僅かに外反して開く。付高台、高くハの字状に開く。腰部篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや粗・砂多く混
479-4 156-4	鉄器 角釘	頭部欠損	長(3)幅0.5	頭部形状不明。	

L2号墓出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
480-1 156-1	須恵器 杯	1/4	9.0×5.4×2.3	器肉厚い。腰部に丸味をもち口縁部やや外反。轆轤成形。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・細砂混る
480-2 156-2	須恵器 杯	1/4	10.0×4.8×1.8	底部肥厚。体部薄く僅かに丸味をもち大きく開く。口唇部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味 ②淡黄 ③やや密・細砂混る
480-3 156-3	灰釉陶器 段皿	完形	14.2×8.0×2.7	体部直線的に大きく開き口唇部外屈。内側に明瞭な段。漬け掛け施釉。高台断面丸い。回転糸切り後回転篋調整。	①還元 ②灰黄 ③密・白色粒混る
480-4 156-4	灰釉陶器 椀	完形	16.6×8.3×7.1	腰部丸く張りをもつ。口縁部僅かに外反。口縁部内外面に沈線様の調整痕。高台やや高く肥厚。内外面漬け掛け施釉。	①還元 ②灰黄褐 ③やや密
480-5 156-5	鉄器 角釘	小片	長(2.2)幅0.5	身部残欠。木質付着。	
480-6 156-6	鉄器 不明		長(5)幅0.7	L字に折れる。鋸か？	
480-7 156-7	鉄器 不明		長(5.5)幅1 厚0.5	片側縁薄く刃になるか。刃子身部？	
480-8 156-8	須恵器 転用硯			壘片転用。内面摩滅著しく光沢あり、外面擦り痕あり。	①良好 ②灰 ③やや密・白色粒混る

6 土 坑

遺構名	位置	形状	長軸方位	長×短×深	備 考
M1号土坑	80M29、30	隅丸方形	N-57°-W	110×78×35	須恵器片・瓦。M12号住内にありこれに伴うか。埋土に浅間山降下C軽石
M2・3号土坑	80M21・22	円形	—	110×100×18	3号は径80・深さ28cm中央部に径30cmの落ち込み
M4号土坑	77・78M20	不整長方形	N-80°-E	136×90×30	無遺物。M23・M60号住と重複し新しい。埋土に浅間山降下C軽石含む。
M5号土坑	76・77M24	不整長方形	N-78°-E	210×110×34	須恵器杯・壘。M10号溝と重複し新しい。埋土に浅間山降下C軽石含む。
M6号土坑	79・80M18・19	長方形	N-20°-W	160×90×25	須恵器・瓦。M59号住と重複し遺物混在。形態から墓墳の可能性あり。
M7号土坑	86M26・27	隅丸長方形	N-3°-W	250×50×10	土師器杯、M26号住と重複し新しい。遺物のM26号所属の可能性あり。
M8号土坑	78・79M18~20	隅丸長方形	南北	330×118×16	無遺物。M60・65号住と重複し新しい。埋土は浅間山降下C軽石含む。
M9号土坑	79M24・25	不整長方形	N-7°-E	324×170×20	須恵器杯片。底面中央に深さ30cm不整形落ち込み。
L10号土坑	59L35・36	不整長方形	N-67°-E	125×105×20	無遺物。凝灰岩質加工材。2連の竈構築材採掘坑の可能性あり。
L11号土坑	87・88M28・29	隅丸長方形	N-3°-W	380×90×10	無遺物。底面に僅かな凹凸あり。M22・26・39号住と重複し新しい。
L12号土坑	70L6・7	円形	—	140×140×40	無遺物。壁・底とも整った面をなす。埋土は焼土塊を多く含む黒褐色土。

第2節 その他の遺構と出土遺物

遺構名	位置	形状	長軸方位	長×短×深	備考
L13号土坑	64・65 L20・21	円形	—	135×135×25	瓦片。自然礫1点。凝灰岩質土の風化土塊を多く含む。
L14号土坑	56 L26	不整円形	—	200×190×25	無遺物。埋土に浅間山降下C軽石含む。
L15号土坑	79 L44	円形	—	130×—×25	須恵器小片。L13号溝に切られる。埋土に浅間山降下C軽石、焼土粒含む。
L16号土坑	54 L27・28	不整楕円形	N-15°-W	160×120×20	須恵器杯・角釘・小礫。埋土は浅間山降下C軽石含む暗褐色土。
L17号土坑	79 L35・36	長方形	N-9°-E	300×75×10	無遺物。埋土上面に浅間山降下B軽石粒含む。
L18号土坑	70 L38・39	不整長方形	N-7°-W	230×90×17	無遺物。埋土に浅間山降下C軽石含む。床面北端に径30cmで円形に窪む。
L19号土坑	71 L28	方形	南北	220×205×15	須恵器・鉄釘・槍鉋出土。埋土に浅間山降下C軽石・焼土・炭化粒含む。
L20号土坑	59 L24	円形	—	245×225×120	無遺物。中位に炭化物・焼土層堆積。底面壁下は幅30cmの溝が巡る。
L21号土坑	67~69 L40~41	不整形	N-12°-E	310×200×40	無遺物。粘性のある暗褐色土主体。東に接して楕円土坑があり別遺構か。
L22号土坑	63・64 L13・14	不整形	—	270×235×50	凝灰岩質加工材。中位に薄い灰層が堆積。炉・竈の残痕の可能性あり。

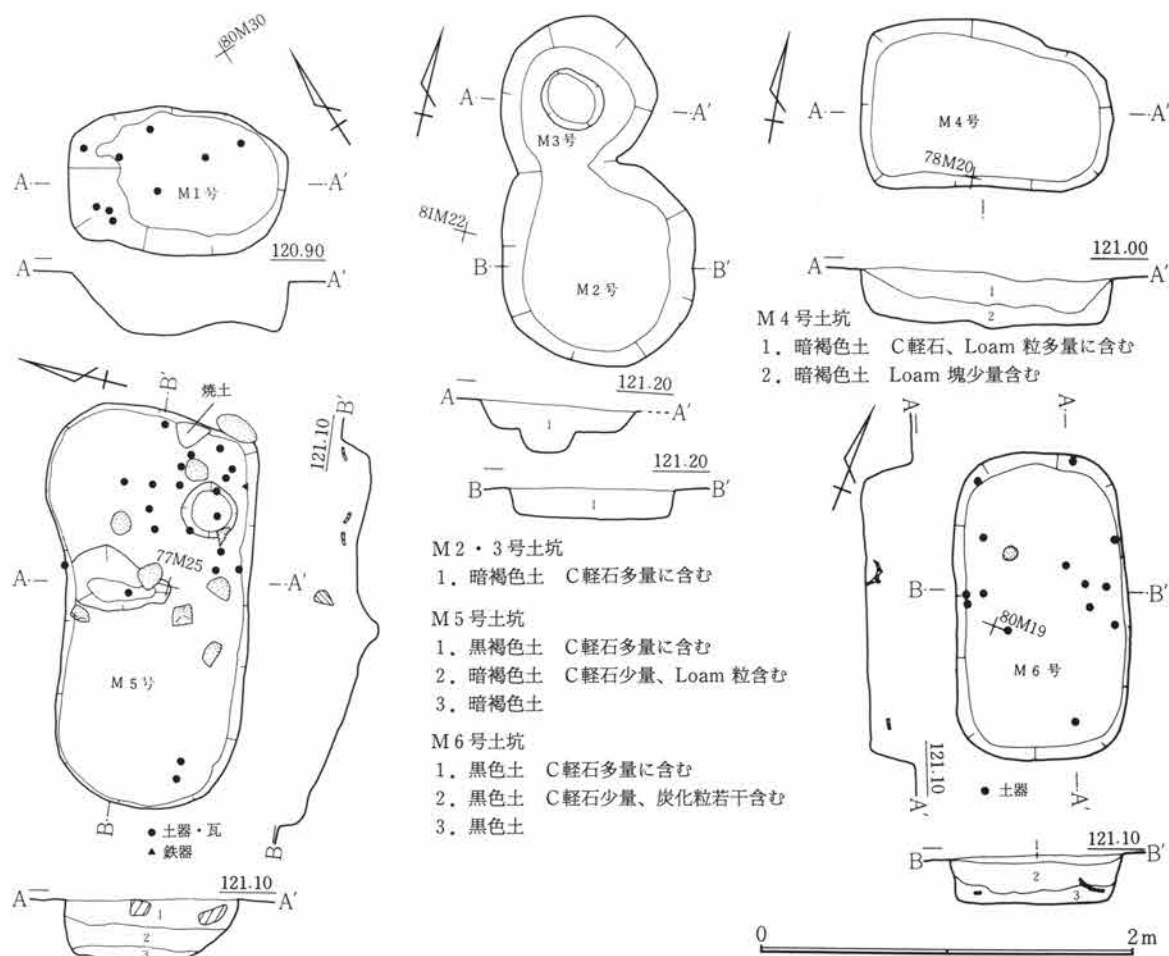


Fig. 481 M区土坑

第2章 遺構と遺物

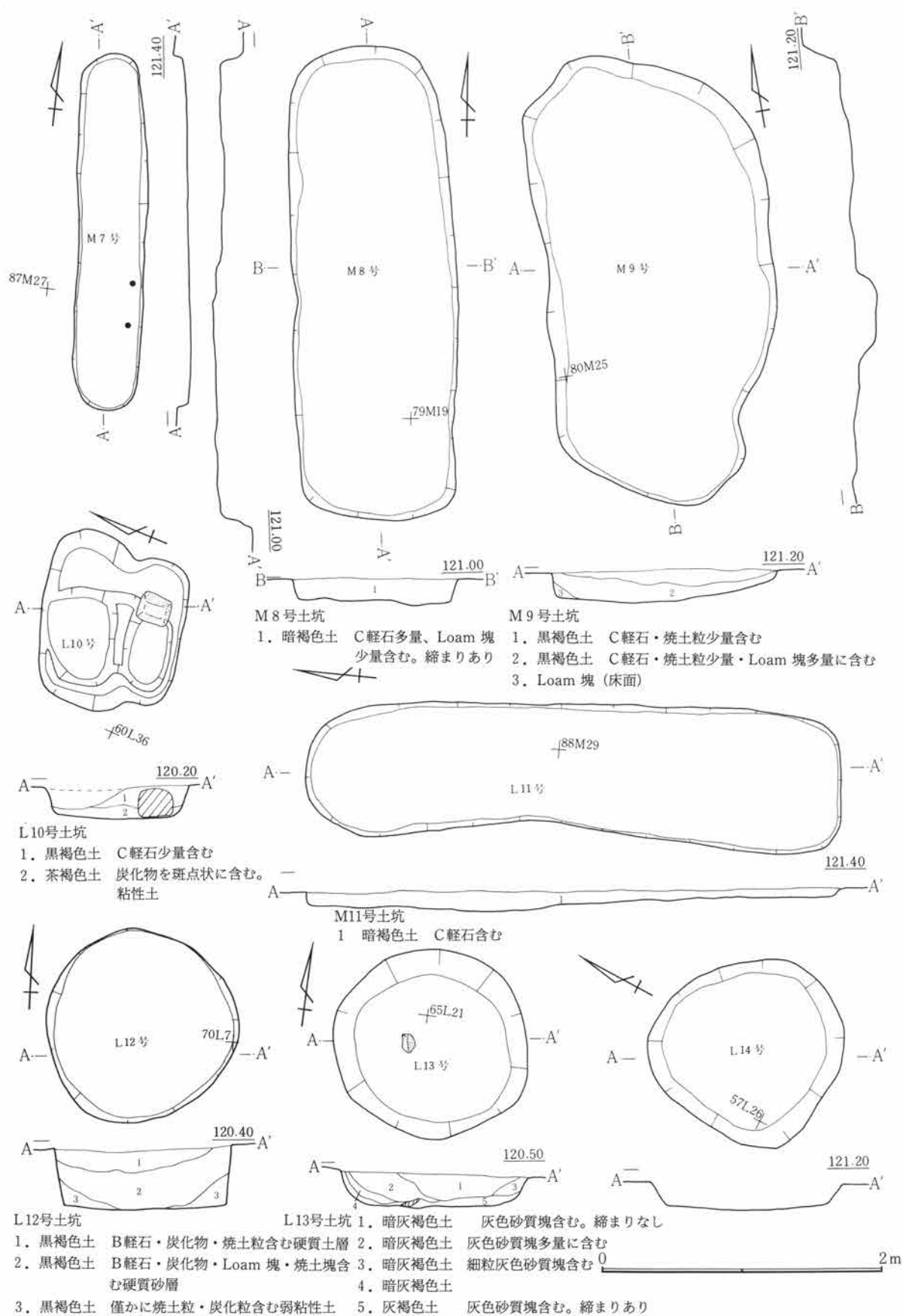


Fig. 482 M・L区土坑

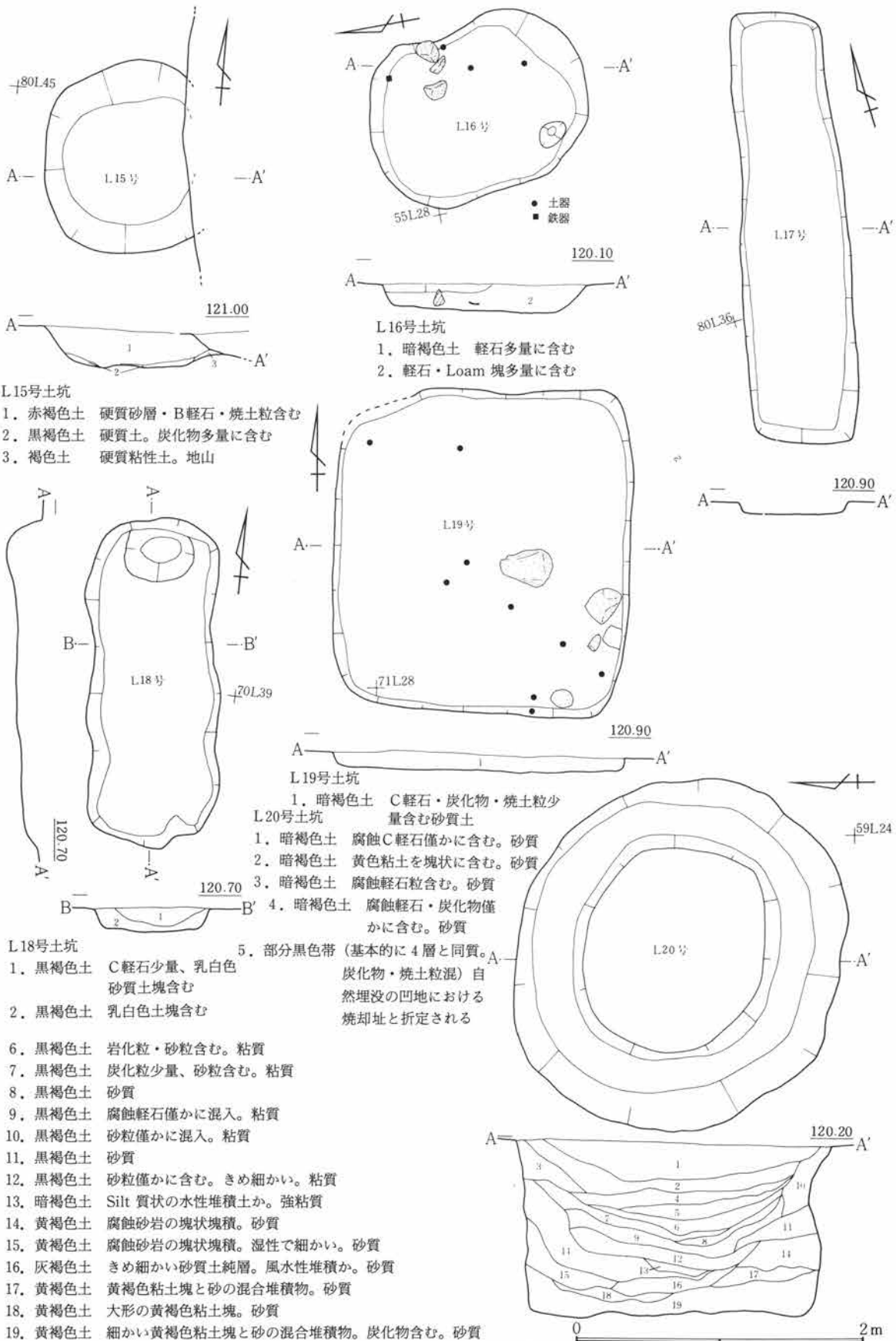


Fig. 483 L区土坑

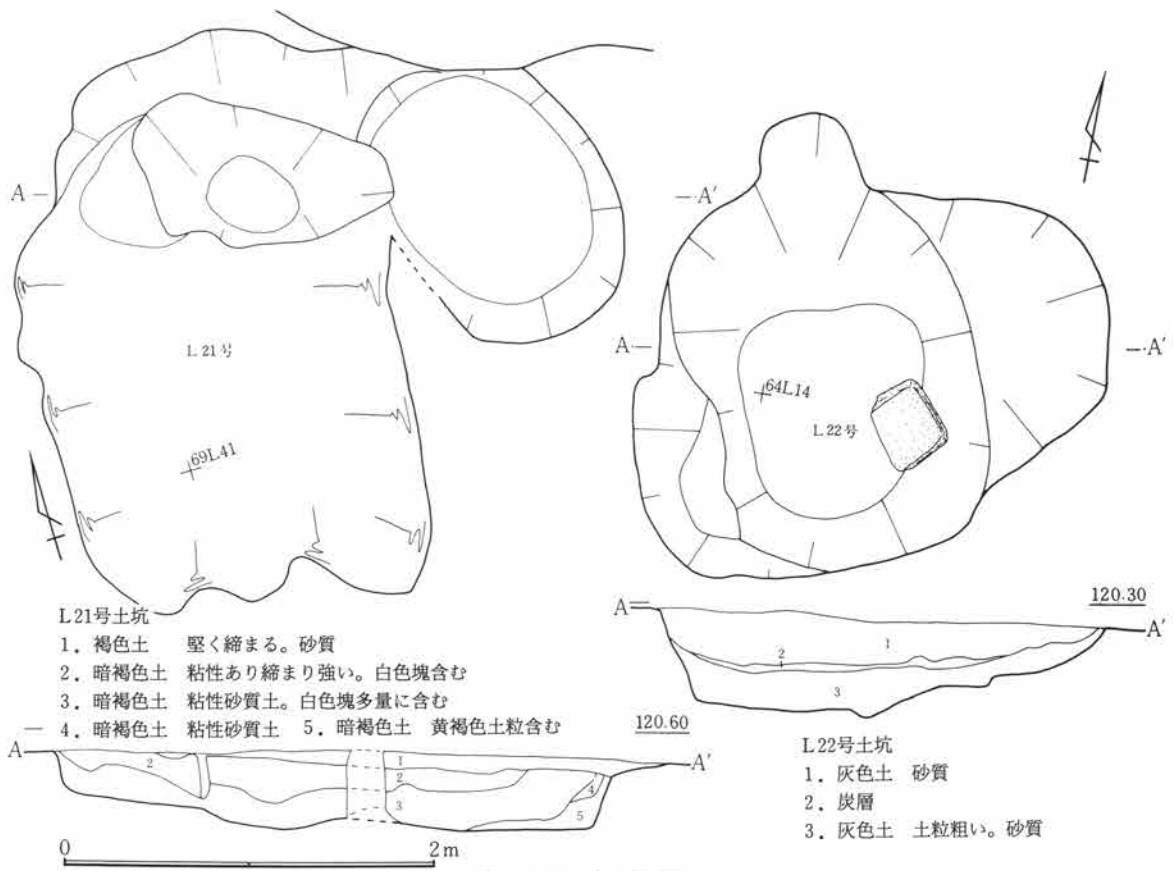
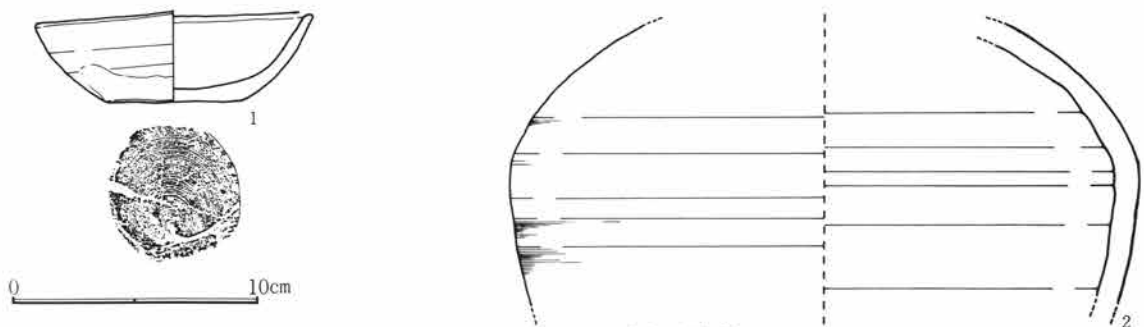
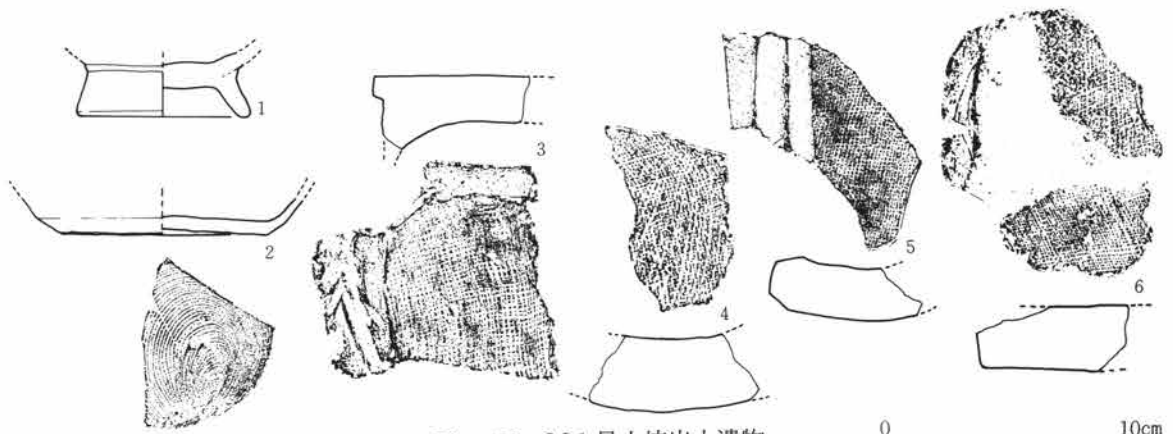


Fig. 484 L区土坑



第2節 その他の遺構と出土遺物

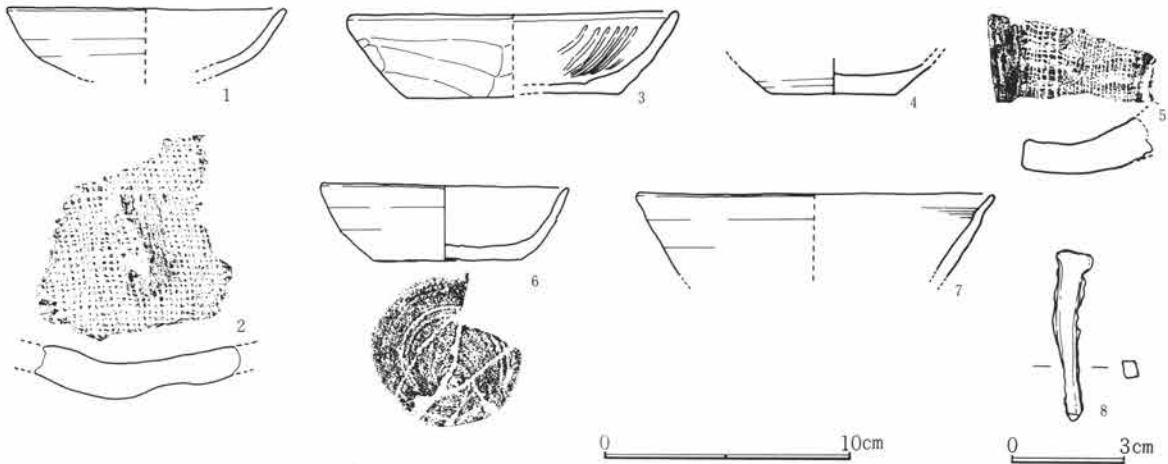


Fig. 487 M6号1、2・M7号3・M9号4・L20号5・L16号6~8土坑出土遺物

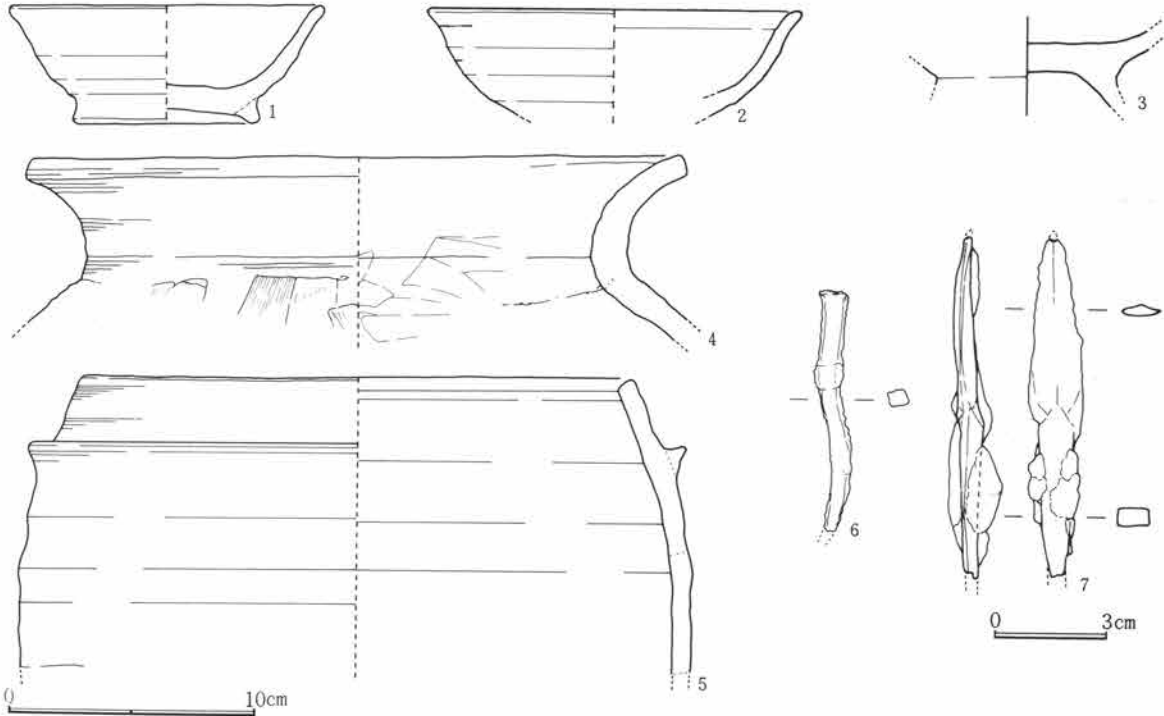


Fig. 488 L19号土坑出土遺物

M1号土坑出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
485-1 156-1	須恵器 碗	台部	—×7.0×(2.5)	付高台、やや高くハの字状に開く。見込部にうず巻痕。轆轤成形。	①酸化 ②橙 ③白色粒混る
485-2 156-2	須恵器 杯	底部	—×8.2×(1.5)	腰部に丸味をもつ。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
485-3 156-3	瓦 字瓦			凹面布目。凸面篋調整。	①良好 ②灰 ③やや粗
485-4 156-4	瓦 平瓦		厚2.9	凹面布目。凸面篋調整。	①良好 ②灰白 ③粗
485-5 156-5	瓦 平瓦		厚2.0	凹面布目。凸面篋調整。側面篋調整。	①良好 ②灰白 ③やや粗
485-6 156-6	瓦 平瓦		厚2.5	凹面布目。凸面篋調整、側面篋調整。	①良好 ②灰 ③粗

第2章 遺構と遺物

M5号土坑出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
486-1 157-1	須恵器 杯	ほぼ完形	13.2×5.1×3.6	体部丸く内湾して開く。口縁部やや外反。口唇部丸い。底部から腰部吸炭・二次被熱。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 ②浅黄橙 ③やや粗
486-2 157-2	須恵器 甕	胴部 $\frac{1}{4}$	胴部径25	胴部丸く張る。器面に細かい回転撫で痕顕著。	①良好 ②灰 ③やや密

M6号土坑出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
487-1 157-1	須恵器 杯	小片	11.2×-×(2.6)	体部中位で屈し口縁部は僅かに外反。口唇部丸い。轆轤成形。	①酸化気味 ②浅黄橙 ③やや密
487-2 157-2	瓦 平瓦		厚1.4	凹面布目。凸面筥調整。	①良好 ②灰白 ③やや粗

M7号土坑出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
487-3 157-3	土師器 杯		13.2×8.4×(3.3)	平底。体部僅かに丸味をもって開く。内面斜行筥磨き。口縁部横撫で。体部から底部筥削り。	①酸化 ②橙 ③やや密・砂混る

M9号土坑出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
487-4 157-4	須恵器 杯	底部	-×5.0×(1.1)	底部肥厚。体部薄い。轆轤成形。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや密・細砂混る

L20号土坑出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
487-5 157-5	瓦 平瓦		厚1.5	凹面布目。凸面無で。側縁筥調整。	①良好 ②灰 ③粗

L16号土坑出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
487-6 157-6	須恵器 杯	$\frac{1}{4}$	9.9×5.8×3.0	腰部やや丸味をもち体部内湾気味に外傾。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 ②鈍い黄橙 ③やや粗
487-7 157-7	須恵器 杯	体部 $\frac{1}{4}$	14.3×-×(3.3)	体部直線的に開く。口縁部僅かにくびれる。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③密
487-8 157-8	鉄器 角釘	端部欠損	(4.5)×0.6	頭部形状角頭式か。	

L19号土坑出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
488-1 157-1	須恵器 椀	1/2	12.6×7.5×4.8	体部下半でやや丸味をもち口縁部緩く外反。口唇部丸い。付高台、低く断面矩形。轆轤成形。	①良好 ②褐灰 ③やや密・白色粒混
488-2 157-2	須恵器 椀	1/2	14.9×-×(4.2)	体部丸味をもち口縁部緩く外反。口唇部丸い。轆轤成形。	①良好 ②灰黄褐 ③やや密・白色粒混
488-3 157-3	須恵器 椀	底部	-×-×(3.2)	底部やや肥厚し高台高く端部欠損。	①良 ②灰白 ③やや粗・砂多量に混る
488-4 157-4	土師器 甕	口縁部	26.4×-×(7.3)	肩部張り口縁部強く外反。口唇部矩形。口縁部横撫で。肩部寛削り。内面寛撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
488-5 157-5	羽釜		26.0×-×(11.6) 鏝径26.4	胴部やや張り気味・鏝上方へ外反。口縁部内傾し口唇部断面矩形。上端面内斜。口縁部横撫で。胴部回転寛撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・小石混る
488-6 157-6	鉄器 角釘	端部欠損	長(6.4)幅0.4	頭部形状角頭式か。身部弱いS字状に曲がる。	
488-7 157-7	鉄器 鈍	茎部端欠損	長(9)刃幅1.4茎幅(0.9×0.9)	茎部矩形。刃部両刃式で緩く湾曲する。	

7. 溝跡

O1号溝 (Fig. 489)

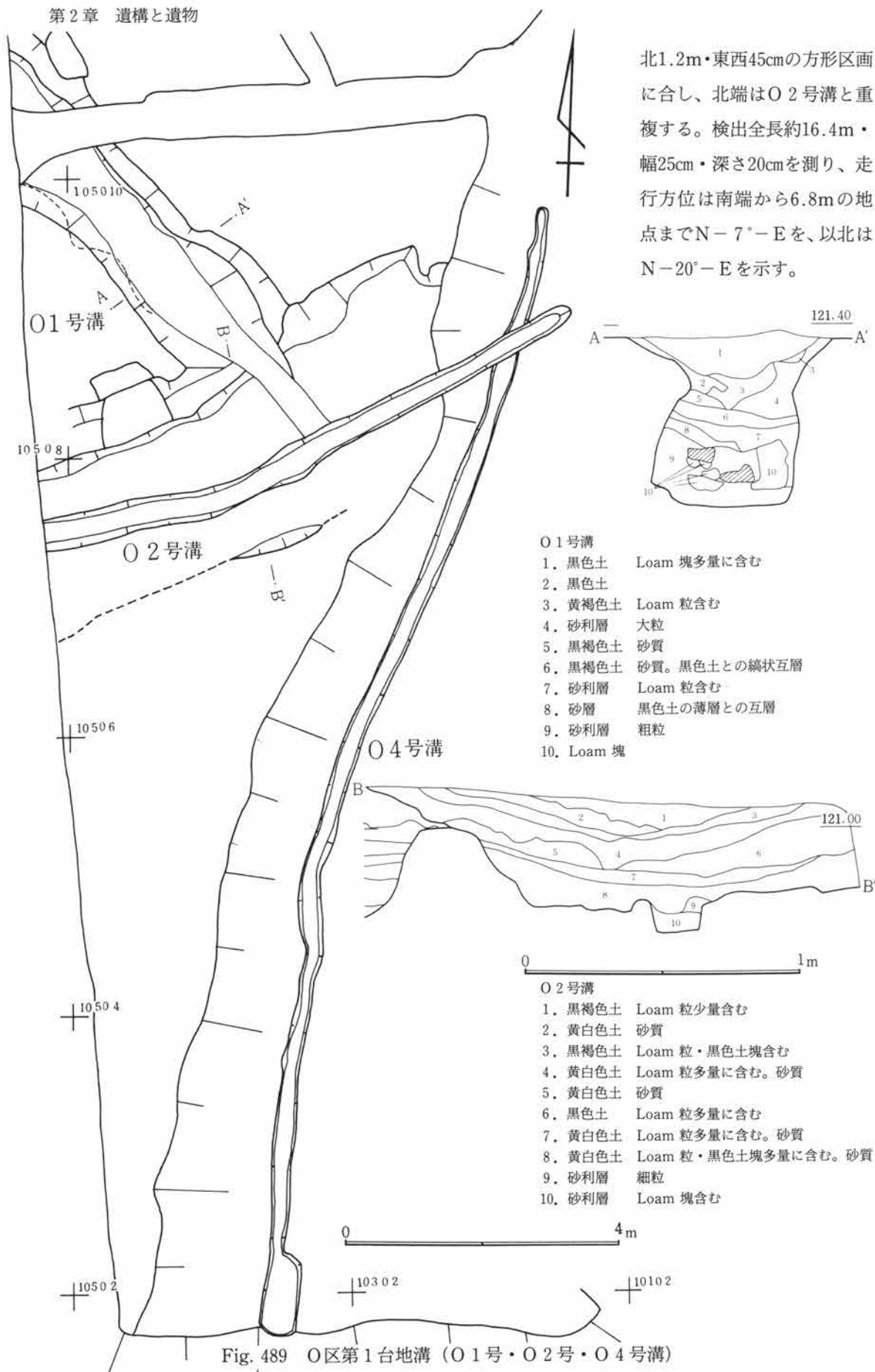
O区第1台地のやや南に位置し、103~106O7~10の範囲にある。北西から南東方向に走行し、西は調査区域外に入り、南東端はO2号溝に合して消滅する。埋土は上位から中位にかけて凝灰岩質の崩落土塊を含む黒褐色土が、下位は砂利と砂層の互層となる。検出全長は約7m・溝幅約1.8m・深さ1.5mを測り、走行方位はおおよそN-40°-Wを示す。断面形状は上半が開く漏斗状を呈し、底面は平坦をなすが西壁面はえぐれが著しい。西壁面の乱れは、埋土下位に基盤層である凝灰岩質塊が見られることから崩落によるものと考えられる。また砂質層の堆積は流水のも考えられ、底面にほとんど凹凸が認められず、平坦であることに疑問が残る。埋土中に凝灰岩質土粒を混じえる層が多く竈構築材採掘跡との関連が窺われる。

O2号溝 (Fig. 489)

O区第1台地の南に位置し、101~105O7・8の範囲に及ぶ。ほぼ東西方向に走行するが緩く北に向かって弧を描く。西側は調査区域に入り、東端は台地東縁に至りO4号溝と重複する。またO1号溝との新旧関係はこれより新しい時期の所産である。調査時にはO2号溝と重複・併走するO3号溝が想定されていたが、土層観察では切り合い、新旧の状況は認められずここでは同一のものとして扱う。埋土の堆積状況はO1号溝に類似し、上位層は凝灰岩質土粒を多く含む黒色土が、下位は砂利層あるいは砂層の堆積がみられる。検出全長は約8.2m・幅2.4m・深さ90cmを測り、走行方位はおおよそN-65°-Eを示す。断面形状は大きく開くU字状を呈するが、底面中央で幅40cm・深さ20cmの箱掘状の溝が掘られる。調査時には上半のU字形の溝をO3号溝・底面の箱掘状溝をO2号溝として扱っていた。当跡は採掘跡の南限にあり、これより南側では顕著な採掘痕は見られない。O1号溝と同様、採掘跡と関連すると考えられる。当台地を微地形的にみれば南は緩やかな傾斜面となっており、位置的には採掘跡の南限を画くし、合わせて排水の機能を有していた可能性が高い。

O4号溝 (Fig. 489)

O区第1台地の東縁に沿う。101~103O1~9の範囲に及び、南北走する溝である。当台地北半は平坦をなし南半が緩い傾斜で段階的に低くなる。当跡は東縁南半の下位に位置する。溝の南端は台地南縁にあり南



N 5号・N 6号溝 (Fig. 462)

N 5号・N 6号溝はM・N区第2台地の中央部にある。掘込み面は耕作土直下であり、近・現代に属する溝である。両者は約4mの間隔をおき平行して東西走り、西側は調査区域外に入る。N 5号溝の検出全長は12.2m・幅45cm・深さ65cm。N 6号溝は全長7.8m・幅20cm・深さ40cmを測る。埋土は軟弱な砂質土で埋まる。

M 7号溝 (Fig. 490、495・PL. 145、157、158)

M区第3台地の中央部を南北に縦断する溝である。北部は比較的明瞭に溝筋をたどることができるが中央から南側は住居跡との重複が著しく壁線は不明瞭となる。台地南を横断するM12号溝に合し、以南は不整形の落ち込みが跡絶がちに残るのみである。検出面からの掘形は浅く埋土の状態は良好ではないが、浅間山降下C軽石及び炭化粒を含む暗褐色土で埋まる。検出全長約70mに及び第3台地の南端から北端に至る。溝幅約1.5m・深さ20cm前後で全体として浅い。壁線は小さく蛇行するが走行方位はおおよそN-15°-Wを示す。重複する住居跡との新旧関係については調査時での認定が不備なため定かではない。出土遺物からする当時の所属時期は平安時代の後半にならうか。

M 8号溝

M区第3台地の北西縁辺部から南東方向に延びる。M19号住居跡と重複するがこれより新しい時期の所産である。遺存状態は悪く壁線が比較的明瞭にとらえられた範囲は北西縁辺から約15mである。この範囲には底面に不規則な小穴状の落ち込みが連なって検出されている。この落ち込みは延長線上の数地点で確認されており、当跡の痕跡とすればほぼ第3台地を縦断する全長40mを測る。溝幅は南東に向かい細まり、特定できないが、最大幅約2.5m・深さは20cmである。走行方位はおおよそN-20°-Wを示す。

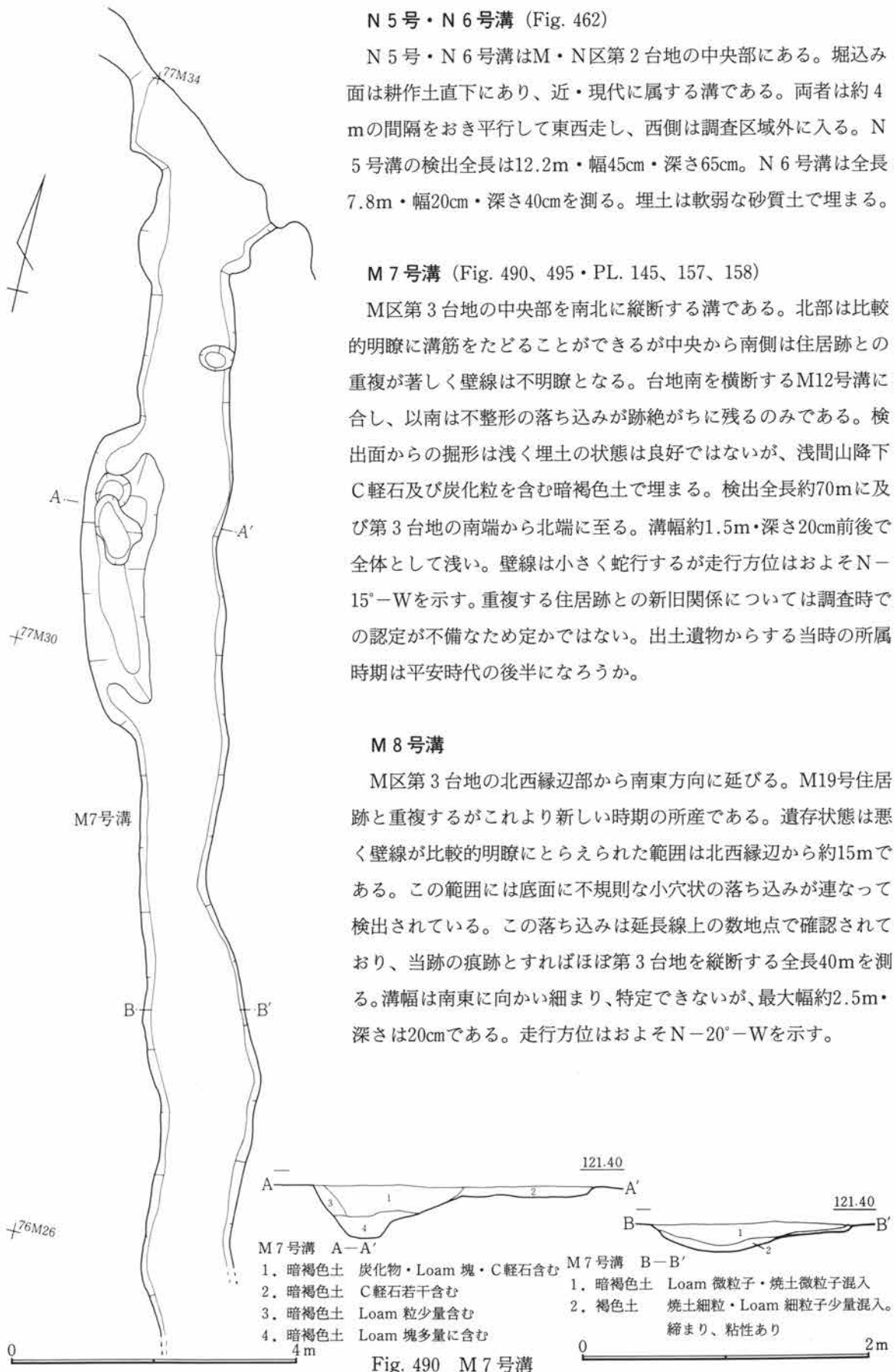


Fig. 490 M 7号溝

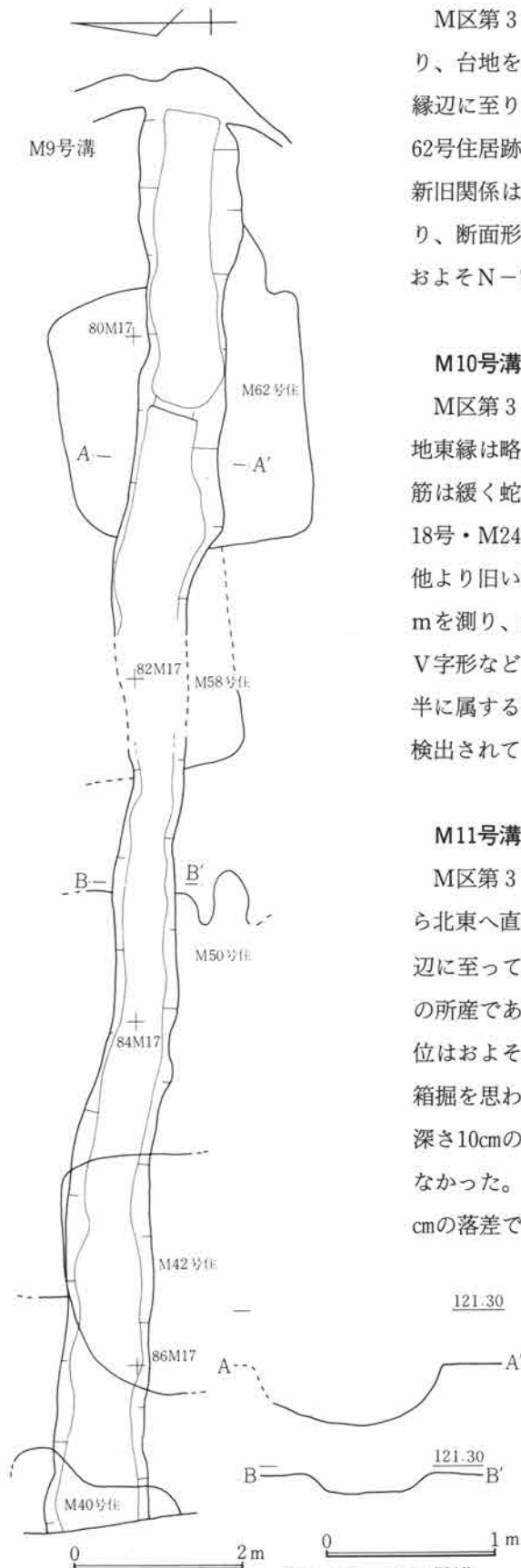


Fig. 491 M9号溝

M9号溝 (Fig. 491、496・PL. 145、158)

M区第3台地の中央やや南に位置する。79～84M16・17の範囲にあり、台地を横断する溝である。西側は調査区域外に入り、東は台地東縁辺に至り消滅する。M40号・M42号・M50号・M58号・M61号・M62号住居跡と、また南北走るM7号溝など多くの遺構を重複するが新旧関係は特定できない。検出全長約17m・幅約1m・深さ40cmを測り、断面形状は緩いU字形ないしは箱掘形の部分もある。走行方位はおよそN-74°-Eを示す。

M10号溝 (Fig. 492、497、498・PL. 145、158、159)

M区第3台地の東端部に位置し、75～79M19～29の範囲にある。台地東縁は略三角状に突出し、M10号溝は突出部を南北に縦断する。溝筋は緩く蛇行し南・北端は台地縁辺で跡切れる。M14号・M16号・M18号・M24号・M30号住居跡と重複するが、M18号住居跡より新しく他より古い時期の所産である。検出全長約22m・幅3m・深さ0.9～1mを測り、走行方位はおよそN-14°-Wを示す。断面形状はU字形・V字形など一定しない。出土遺物は須恵器杯・椀類が多く平安時代後半に属する時期を中心としている。また鋳造品と思われる不明鉄器が検出されている。

M11号溝 (Fig. 492、497、498)

M区第3台地の南に位置し、78～86M6～15の範囲にある。南西から北東へ直線的に走行し、南西端は調査区域外へ入り、北東は台地縁辺に至って跡切れる。M63号住居跡と重複するがこれより新しい時期の所産である。検出全長約26m・幅3.3m・深さ約45cmを測り、走行方位はおよそN-44°-Eを示す。断面形状は掘形が浅く不明瞭であるが箱掘を思わせる。溝の北西寄りには段状に落ち込み、南西では幅40cm・深さ10cmの落ち込みが走る。複数溝の重複も考えられるが確認はできなかった。当跡を境に北側には住居跡が密集し、南側は北に比べ約30cmの落差で低く僅か1軒の住居跡が検出されたのみで、東縁は竈構築材採掘坑群が2地点に存在する。台地の土地利用に対し区画的役割をもっていた溝であろうか。

L12号溝 (Fig. 493、499・PL. 145、146、159)

L区第4台地上の北西部から台地下に至り、さらに第3台地下の東辺を台地に沿って北へ延びる。第3台地沿いにその軌跡を確認しているが北限は不明である。第4台地上の南端は西側調査区域外に入る。L75

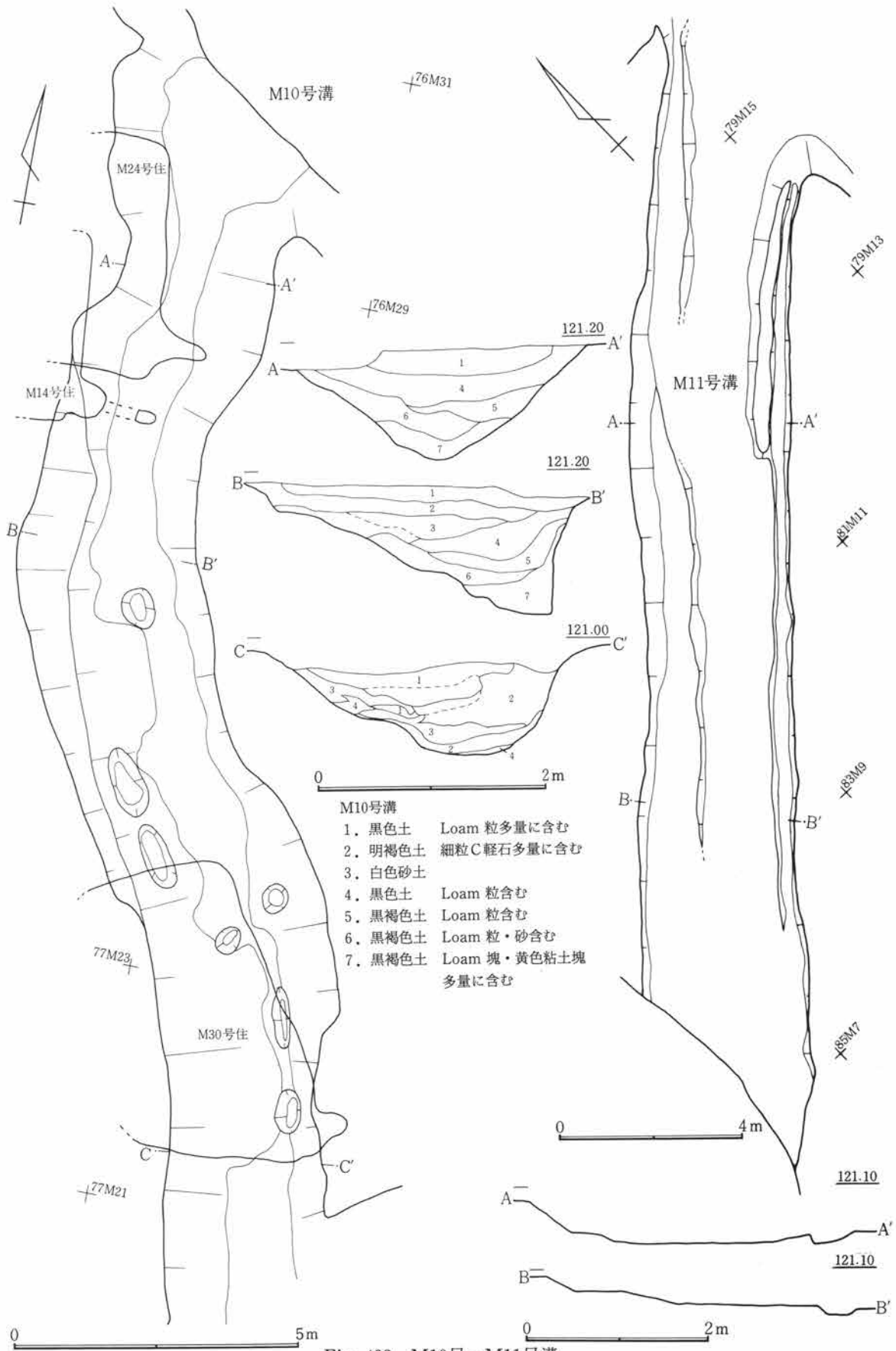
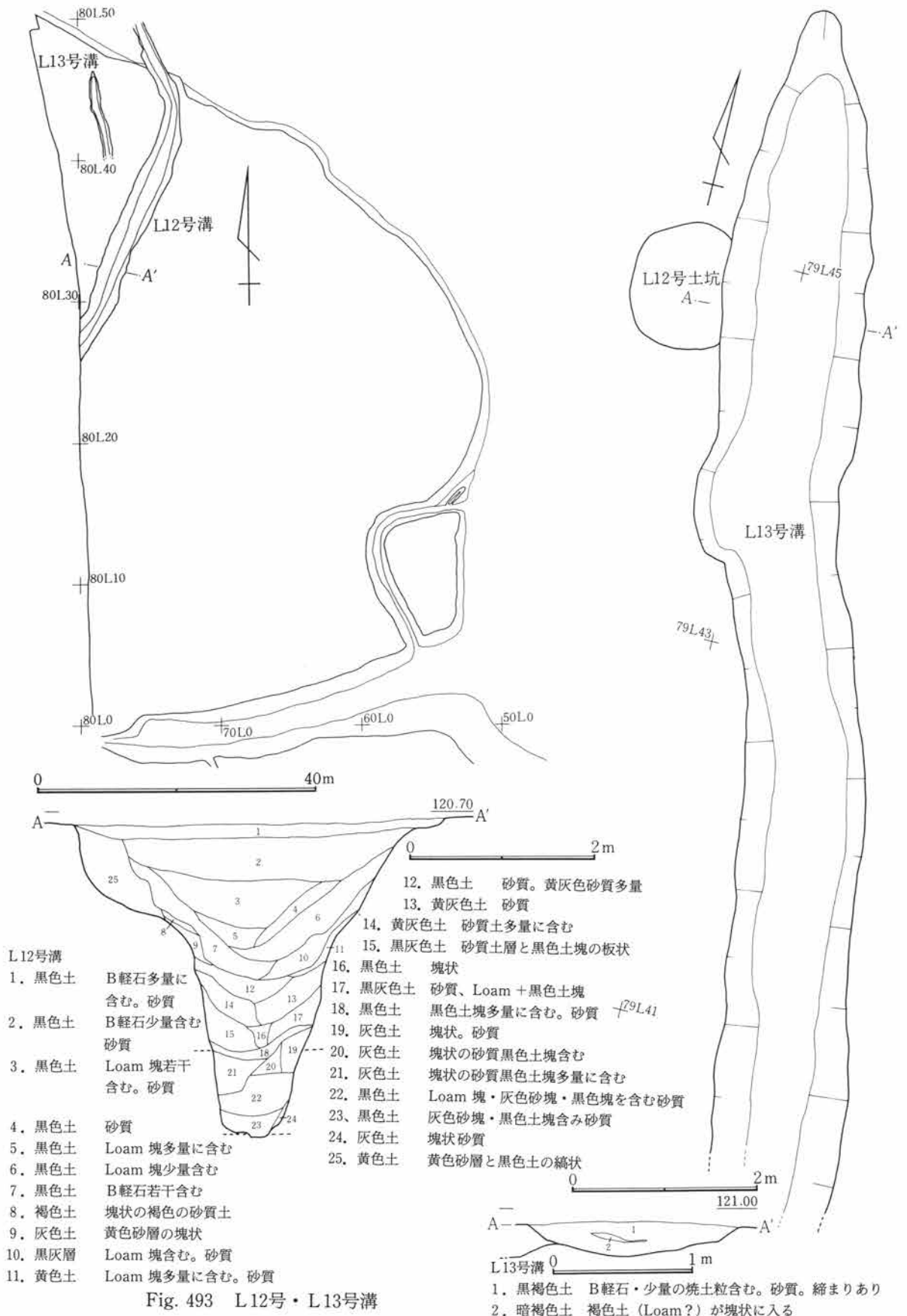


Fig. 492 M10号・M11号溝



第2章 遺構と遺物

号・L79号・L80号・L81号・L107号住居跡と重複するがいずれより新しい時期の所産である。第4台地上では南西から北東に走行をもち、台地縁辺部で北に走行を変える。台地を深く切り込み鳥羽遺跡内で検出された溝のうち最も深くけわしい掘形をもつ。埋土は上層に浅間山降下のB軽石を含む砂質が、中位から下位にかけては壁面の基盤層である凝灰岩質層や砂・砂利層が厚く堆積する。第3台地下を含めた検出全長は約150mにも及び台地上では20mを測る。幅約4m・深さ3.3mで、走行方位(台地上)はおよそ $N-25^{\circ}-E$ を示す。断面形状は上半は広く開き下半は鋭いV字形を呈する。

当跡の性格については明言できる事象は得られていない。位置的には染谷川を隔てた対岸には推定上野国府やそれに重なる中世蒼海城などが存在し、国府や蒼海城にかかわる防備的、あるいは区画的意味合いを想定しうる位置にある。しかし溝跡が台地上に存在するのはL区内のみで、以北は台地下を巡る。さらに溝底面は台地上・台地下における比高差はほとんどなく、底面を重視した場合、L区第4台地部分はそのために深く掘削したと解したほうが理解しやすい。台地下では底面の等高を保つ関係上必然的に溝そのものは浅い掘形となっている。また北への走行を延長すれば、現在の染谷川が大きく蛇行する部分に行き当たる。以上の点を総合すれば当跡の性格・機能には染谷川から台地内部に水を導く導水路的施設が考えられる。

L12号溝を染谷川から台地への導水路とした場合でも問題は多い。水路を台地内に導いたとしてもその使用目的が不可解である。生活水、あるいは灌漑施設の可能性も考えられるが地表面からの深さが著しく利用にはかなり不都合が生じると思われる。防備施設・灌漑施設いずれにしても妥当な性格付けはできない。ここでは防備・導水機能を合わせもつ施設としておく。

L13号溝 (Fig. 493、499)

L区第4台地の北西部に位置し、77~79L40~46の範囲にある。南北走する浅い溝で、南はL73号住居跡と重複すると思われるが新旧関係は不明である。また、L73号住居跡の南側は溝筋を検出できなかった。埋土は浅間山降下C軽石を含む暗褐色土である。検出全長約12m・幅1.3~1.5m・深さ40cmを測り、断面形状は緩いU字を呈す。走行方位はわずかに蛇行するが、およそ $N-11^{\circ}-W$ を示す。

L14号溝 (Fig. 494・PL. 146)

L区第4台地の南東部に位置し、52~59L5~15の範囲にある。台地上面より一段低い部分を南北走し東へ直に折れてL字状に開削し切り離した状況にある。溝の南端は台地南辺に入る谷地地形に合し、東は染谷川の氾濫低地に解放される。溝に囲まれた部分は台地より低く約1mの落差があり、平坦面を南北に分断する不規則な落ち込みがみられる。溝の掘形はL12号溝に類似し、堆積土も凝灰岩質土の再堆積・砂層などで埋まる。検出全長は約35m・幅3m・深さは西側台地より約2.2m、台地下からは約1.3mを測る。南北走部分は約20mで、走行方位は $N-20^{\circ}-W$ を、東西走部分は15mで、走行方位は $N-80^{\circ}-E$ を示す。

L14号溝の性格・機能は不明であるが、蒼海城に関係する遺構の可能性が強い。

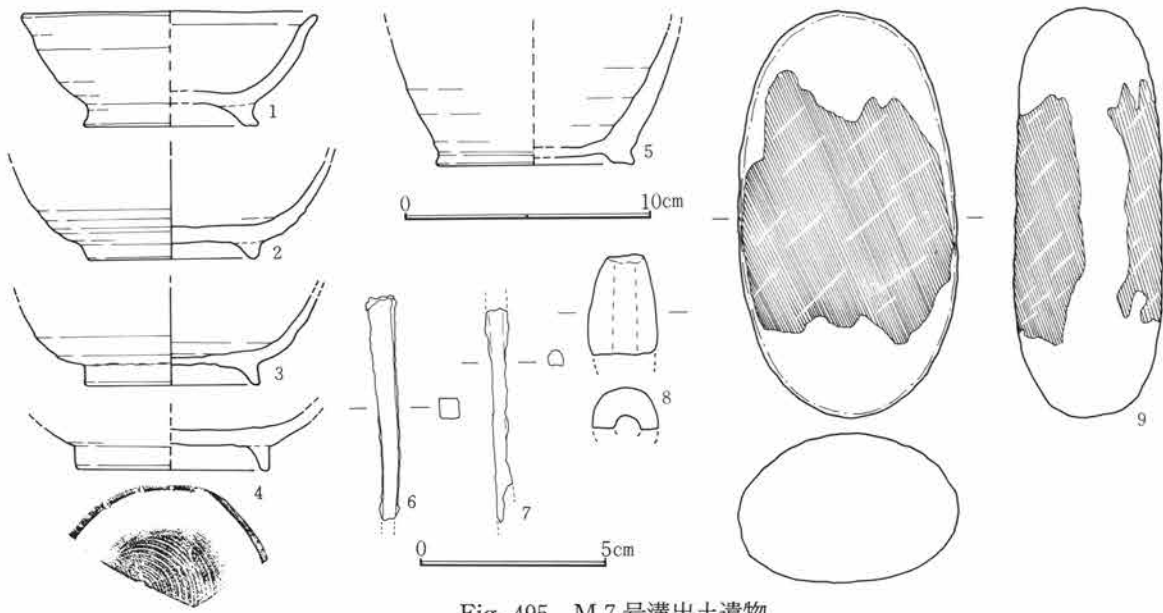


Fig. 495 M7号溝出土遺物

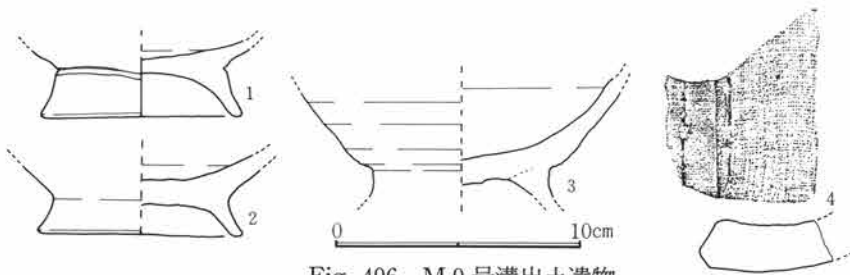


Fig. 496 M9号溝出土遺物

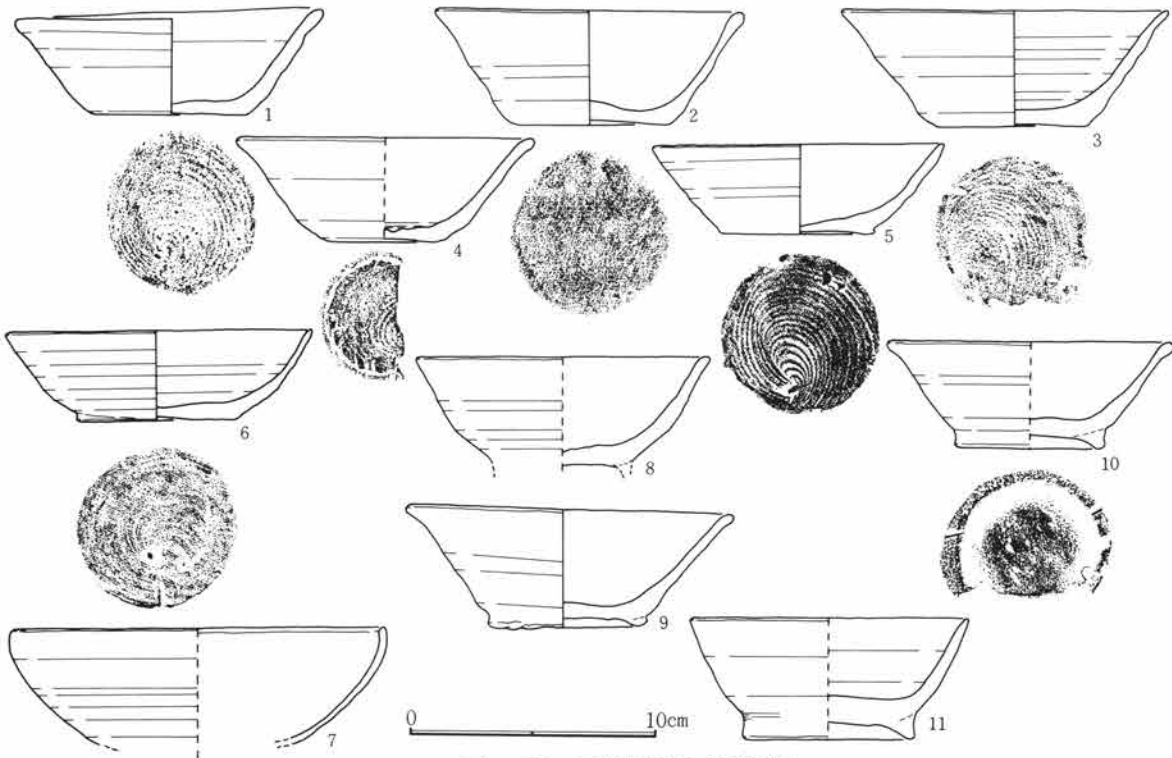


Fig. 497 M10号溝出土遺物(1)

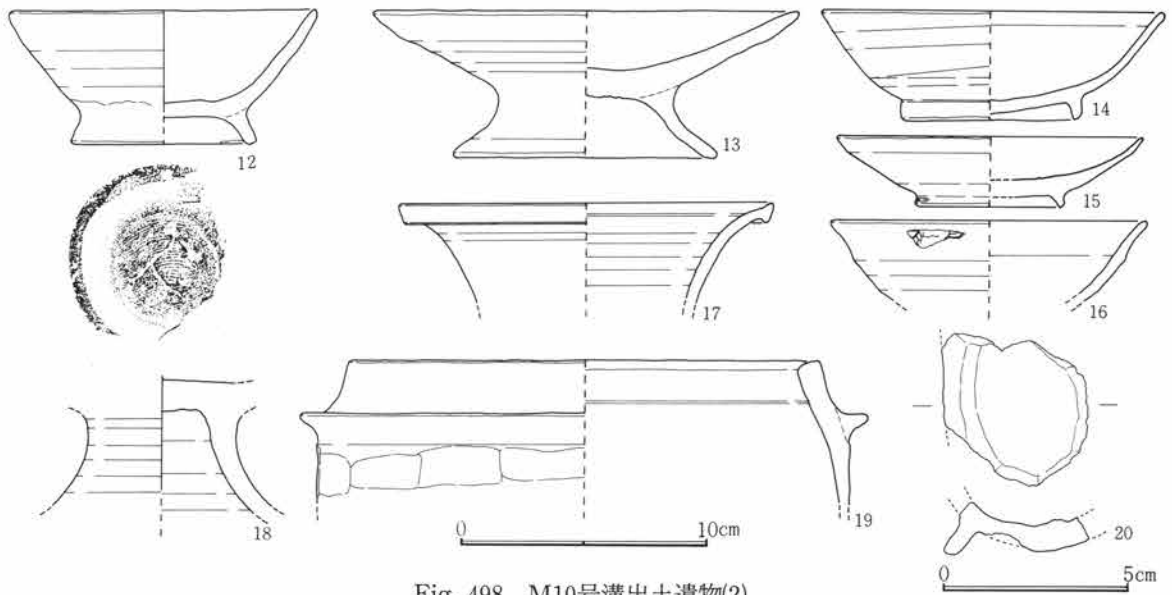


Fig. 498 M10号溝出土遺物(2)

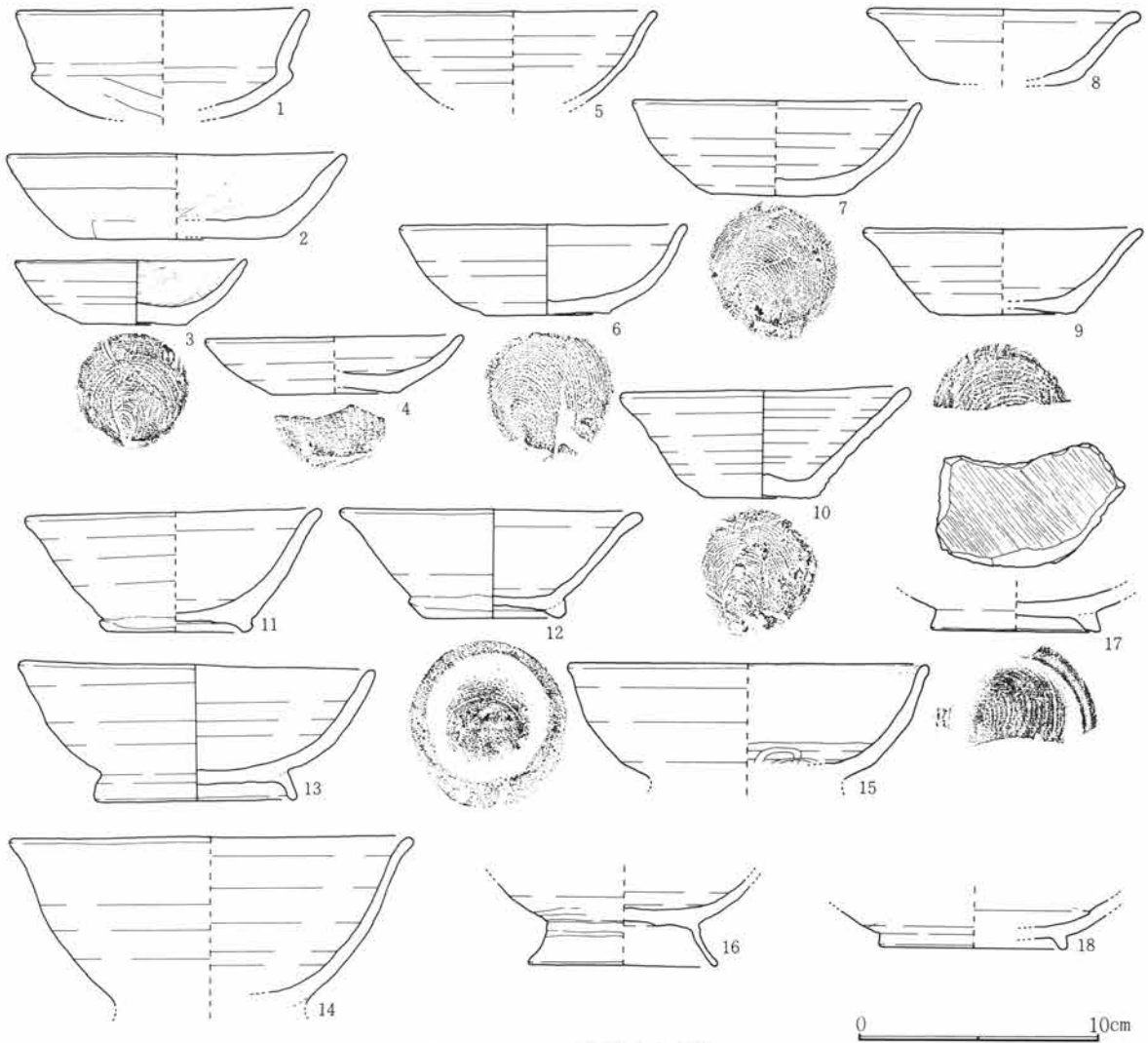


Fig. 499 L12号溝出土遺物

第2節 その他の遺構と出土遺物

M7号溝出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
495-1 157-1	須恵器 椀	1/4	11.8×7.0×4.4	体部丸味をもち内湾気味に開く。口縁部緩くくびれて外反する。口唇部丸い。付高台、ハの字状に開く。轆轤成形。	①酸化 ②橙 ③やや粗
495-2 157-2	須恵器 椀	上半欠損	—×6.8×3.6	腰部丸く張る。付高台、低く断面丸い。轆轤成形。	①酸化 ②橙 ③やや粗
495-3 157-3	内黒土器 椀	底部	—×6.9×3.3	腰部丸味をもち。付高台、やや外反気味に開く。内面黒色処理。轆轤成形。	①酸化 ②橙 ③やや密
495-4 157-4	灰釉陶器 椀	底部	—×7.6×(2.3)	付高台やや高く内湾気味に立つ。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
495-5 157-5	灰釉陶器 瓶	下半	—×8.0×(5.0)	付高台、幅広く断面矩形。腰部回転笠削り。外面腰部と内面見込部に釉附着。	①良好 ②灰白 ③やや密
495-9 158-9	石		長16.1幅8.6 厚5.8	両面及び側面摩滅著しい。重1136g	角閃石安山岩
495-6 158-6	鉄器 角釘	端部欠損	長(5.8)幅4.5	頭部形状角頭式。	
495-7 158-7	鉄器 不明	頭・端部欠損	長(5)径0.4	断面丸い。	
495-8 158-8	土製品 土錘	1/4	径1.8×(2.6) 孔径0.7	棒状工具により穿孔。	①酸化 ②鈍い橙 ③密

M9号溝出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
496-1 158-1	須恵器 椀	底部	—×8.0×(3.0)	付高台、接合部に筥か指による撫で。高台高くやや外反気味に開く。轆轤成形。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや粗・小石混る
496-2 158-2	須恵器 椀	底部1/4	—×8.2×(3.2)	底部肥厚。付高台、やや高く器肉薄め。ハの字状に開く。轆轤成形。	①酸化 ②灰白 ③やや密・砂混る
496-3 158-3	須恵器 椀	底部1/4	—×—×(4.6)	腰部に丸味。付高台、端部欠損。轆轤成形。	①酸化・良 ②橙 ③やや粗・細砂混る
496-4 158-4	瓦 平瓦	小片	厚1.8	凹面布目。凸面撫で。側縁調整。	①良好 ②黄褐 ③やや密

M10号溝出土遺物観察表(1)

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
497-1 158-1	須恵器 杯	完形	12.2×6.0×4.1	腰部丸味をもち体部直線的。口縁部緩く外反。口唇部丸まる。轆轤成形。右回転糸切り。	①還元 ②灰白 ③やや粗
497-4 158-4	須恵器 杯	1/4	12.0×4.2×4.1	腰部やや丸味をもち体部直線的に開く。口縁部外反し口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰黄 ③やや密・砂混る
497-2 158-2	須恵器 杯	ほぼ完形	12.3×5.9×4.7	腰部丸味をもち体部は直線的に開く。口唇部肥厚し丸い。	①良好 ②灰白 ③やや密・砂多く混
497-5 158-5	須恵器 杯	完形	11.7×6.3×3.6	腰部僅かに丸味をもち体部直線的に開く。見込部薄い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②浅黄橙 ③やや粗
497-3 158-3	須恵器 杯	完形	13.0×5.8×4.7	体部直線的に開き口縁部薄く外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②褐灰 ③やや密・小石混る
497-6 158-6	須恵器 杯	完形	12.2×6.3×3.6	体部器肉薄く下位で丸味をもちやや内湾気味に開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密・砂混る
497-7 158-7	須恵器 杯	1/4	15.0×—×(4.6)	器肉極めて薄い。体部丸味をもち口縁部内湾する。口唇部丸い。轆轤成形。	①酸化気味 ②黄灰 ③やや密・白色粒混
497-8 158-8	須恵器 椀	1/4	11.7×—×(4.4)	体部下位で丸味をもち口縁部は緩く外反して開く。口唇部丸い。付高台、轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密
497-9 158-9	須恵器 椀	完形	13.1×6.3×4.9	体部直線的に開く。口縁部外反し口唇部やや肥厚し丸い。付高台、低く作り雑。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗・小石混る
497-10 158-10	須恵器 椀	1/4	11.4×5.9×4.2	体部下位で緩い丸味をもち口縁部外反。口唇部肥厚して丸い。付高台、低く断面矩形。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密・砂混る
497-11 158-11	須恵器 椀	1/4	11.2×6.8×4.8	腰部でやや丸味をもち体部は直線的。口縁部僅かに外反し口唇部細る。付高台、低く端部丸い。轆轤成形。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・砂混る

第2章 遺構と遺物

M10号溝出土遺物観察表(2)

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	残存量	計 測 値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
498-12 158-12	須恵器 椀	⅔	12.3×7.4×5.3	体部直線的に開き口縁部やや内湾気味で口唇部丸い。付高台、やや高くハの字状。断面矩形。轆轤成形。回転糸切り	①良好 ②灰白 ③やや密・砂混る
498-13 158-13	須恵器 椀	⅔	17.0×10.5×5.8	体部直線的に大きく開き浅い。口唇部やや細り丸い。付高台高く強くハの字状に開く。端部丸い。轆轤成形。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密・砂混る
498-14 158-14	灰釉陶器 椀	完形	13.7×7.2×4.4	腰部丸味をもち体部上半やや外反して開く。口唇部丸い。付高台、ほぼ直に立つ。腰部回転篋削り。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③密
498-15 159-15	灰釉陶器 椀	⅔	12.2×6.0×2.8	体部緩い丸味もち大きく開く。口縁部で屈し外傾。高台低い。見込部に重ね焼痕。腰部回転篋削り。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③密
498-16 159-16	灰釉陶器 椀	破片	12.6×-×(3.2)	腰部緩く丸味をもち口縁部外反気味に開く。口唇部丸い。体部外面に別個体の破片が付着。	①良好 ②灰白 ③密
498-17 159-17	灰釉陶器 壺	口縁部破片	14.9×-×(4.0)	頸部外反して開き口唇部上下端が尖り突出。内面施釉。	①良好 ②灰白 ③密
498-18 159-18	須恵器 台付盤	台部	-×-×(5.4)	台部高くハの字状に開く。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密
498-19 159-19	羽釜	口縁部⅔	18.8×-×(5.7) 銜径22.6	胴部脹らみ少ない。口縁部内傾し銜上方へ向く。口唇部断面矩形で上端面は内傾。口縁部撫で。胴部横位篋削り。	①良好 ②灰褐 ③やや密・砂混る
498-20 159-20	鉄器			鉄製の器と思われる。重量あり破損面の状態から鋳物の可能性あり。	

L12号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	残存量	計 測 値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
499-1 159-1	土師器 杯	⅔	12.0×-×(4.4)	器肉厚い。底部丸く浅め。受け部で強く屈し丸味ある稜をなす。口縁部外反気味に開く。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・細砂混る
499-2 159-2	土師器 杯	⅔	14.0×8.6×3.5	平底。体部内湾気味で口縁部僅かに外反。体部篋撫で。口縁部横撫で。体部・底部篋削り。内面斜行篋磨き。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・砂混る
499-4 159-4	須恵器 杯	⅔	10.6×5.2×2.3	体部から口縁部内湾して開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②灰白 ③細砂混る
499-3 159-3	須恵器 杯	ほぼ完形	9.5×4.3×2.7	体部内湾し口縁部僅かに外反。内面4単位の斜行篋磨き。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②浅黄橙 ③密
499-5 159-5	須恵器 杯	⅔	11.8×-×(3.7)	体部内湾し口縁部緩く外反。轆轤目強い。	①良好 ②灰白 ③密
499-6 159-6	須恵器 杯	⅔	11.8×5.2×3.7	体部内湾し口縁部僅かに外反して開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②鈍い黄橙 ③密
499-7 159-7	須恵器 杯	⅔	12.0×5.0×3.8	体部内湾し口縁部僅かに外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②浅黄橙 ③密
499-8 159-8	須恵器 杯	⅔	11.3×6.2×(3.0)	腰部丸く体部から口縁部外反して開く。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密・砂混る
499-9 159-9	須恵器 杯	⅔	11.5×5.2×3.5	体部内湾し口縁部緩く外反。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③密
499-10 159-10	須恵器 杯	ほぼ完形	11.9×4.8×4.5	底径小さく体部直線的に開く。轆轤目強い。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③密
499-11 159-11	須恵器 椀	ほぼ完形	12.2×6.3×5.0	体部内湾し口縁部緩く外反。付高台、低くやや雑な作り。断面矩形。轆轤成形。	①軟 ②黒褐 ③やや粗・小石混る
499-12 159-12	須恵器 椀	⅔	12.4×6.4×4.4	体部直線的に開き口縁部肥厚して外反し口唇部丸い。付高台、雑な作り。断面矩形。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰黄 ③やや粗・小石砂混
499-13 159-13	須恵器 椀	⅔	14.6×8.3×5.8	体部内湾して開く。付高台、内湾気味に立つ。	①酸化・良好 ②浅黄橙 ③密
499-14 159-14	須恵器 椀	⅔高台欠損	16.6×-×(6.7)	腰部丸く体部内湾する。口縁部外反。付高台欠損。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密・砂混る
499-15 159-15	須恵器 椀	⅔	14.8×-×(4.7)	体部内湾。口縁部緩く外反し口唇部丸い。見込部螺旋状・口縁部単位不明瞭の篋磨き。付高台。轆轤成形。	①酸化 ②鈍い黄橙 ③密
499-16 159-16	須恵器 椀	底部	-×7.8×(3.3)	腰部丸い。付高台、やや高く器肉極めて薄い。外反して大きく開く。接合部篋撫で。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや密・砂混る
499-17 159-17	内黒土器 椀	底部	-×7.0×(1.8)	付高台、低く断面矩形。内面黒色処理、篋磨き。回転糸切り。	①酸化・良好 ②橙 ③密
499-18 159-18	灰釉陶器 段皿	底部	-×7.6×(2.0)	内面段をなす。付高台、低く断面矩形。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③密

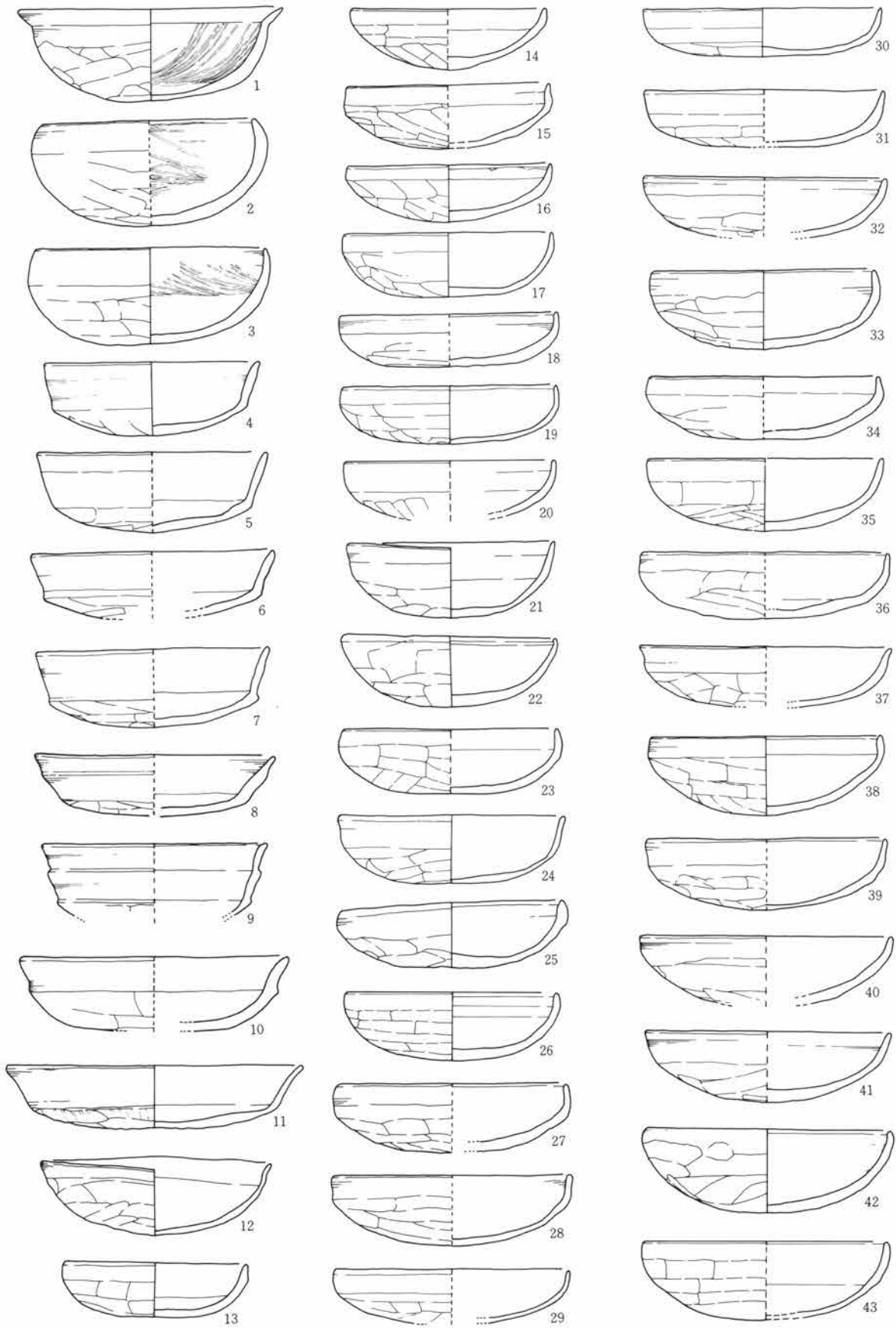


Fig. 500 M・N区第2台地下出土遺物(1)

0 10cm

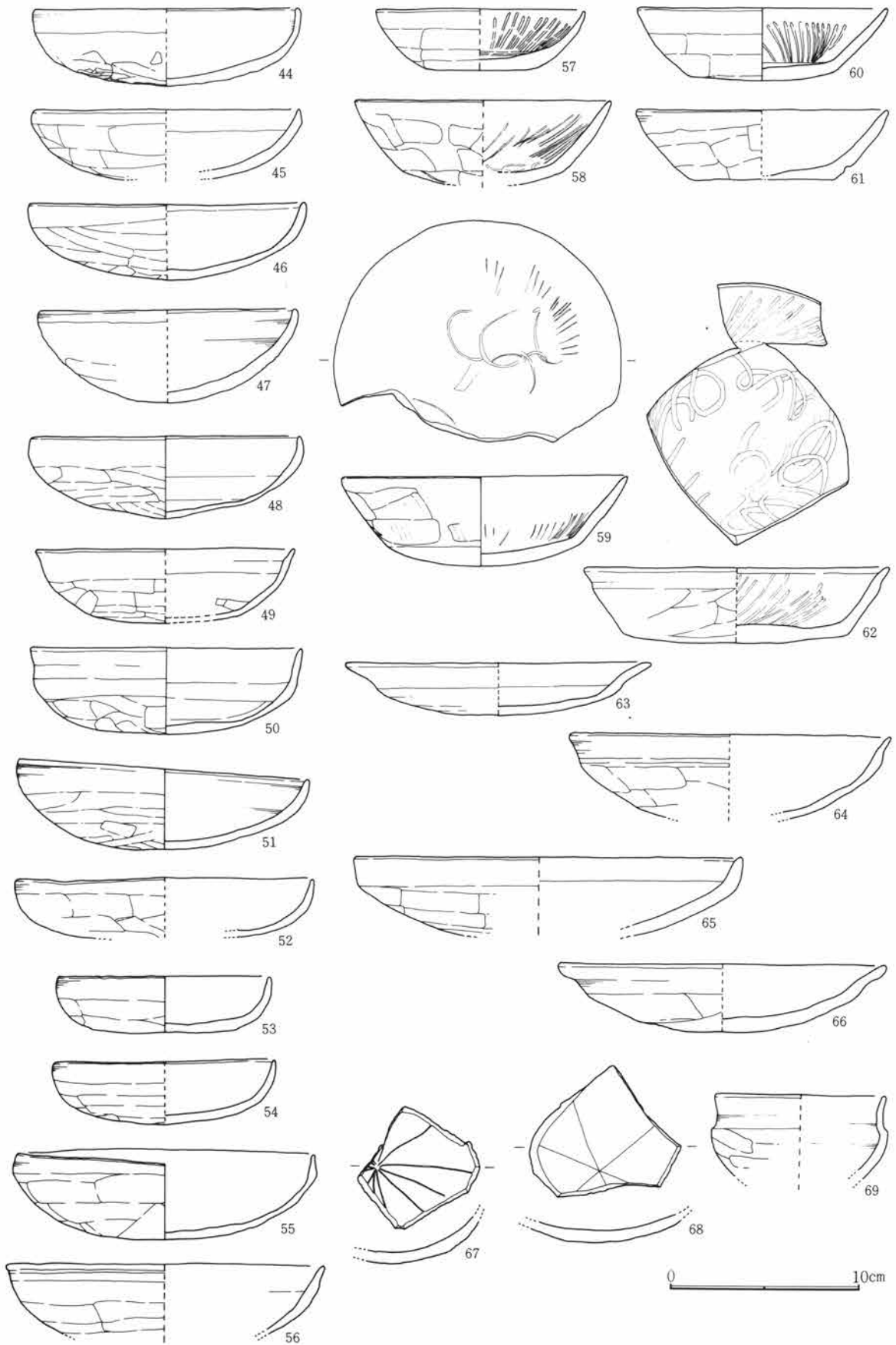


Fig. 501 M・N区第2台地下出土遺物(2)

第2節 その他の遺構と出土遺物

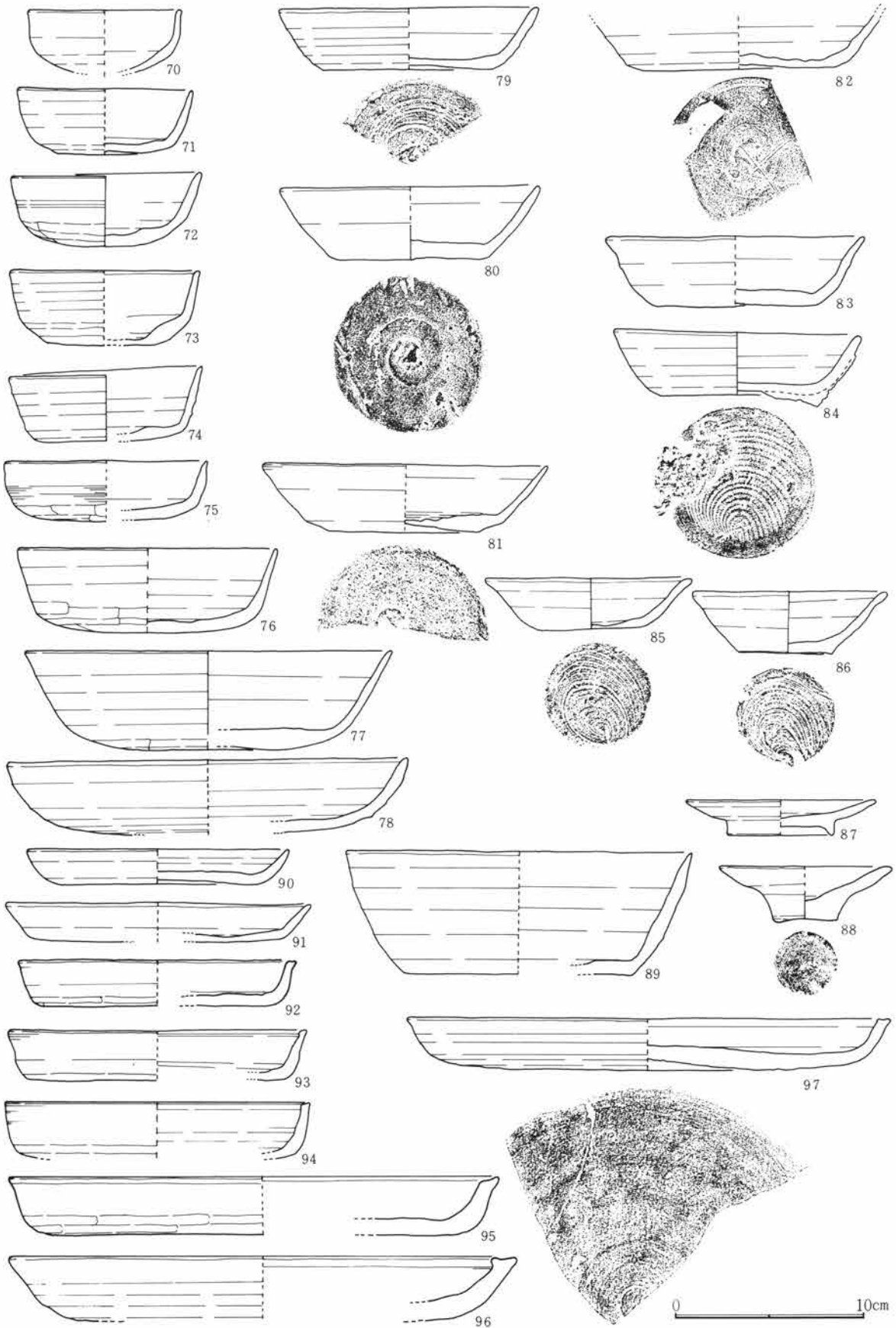


Fig. 502 M・N区第2台地下出土遺物(3)

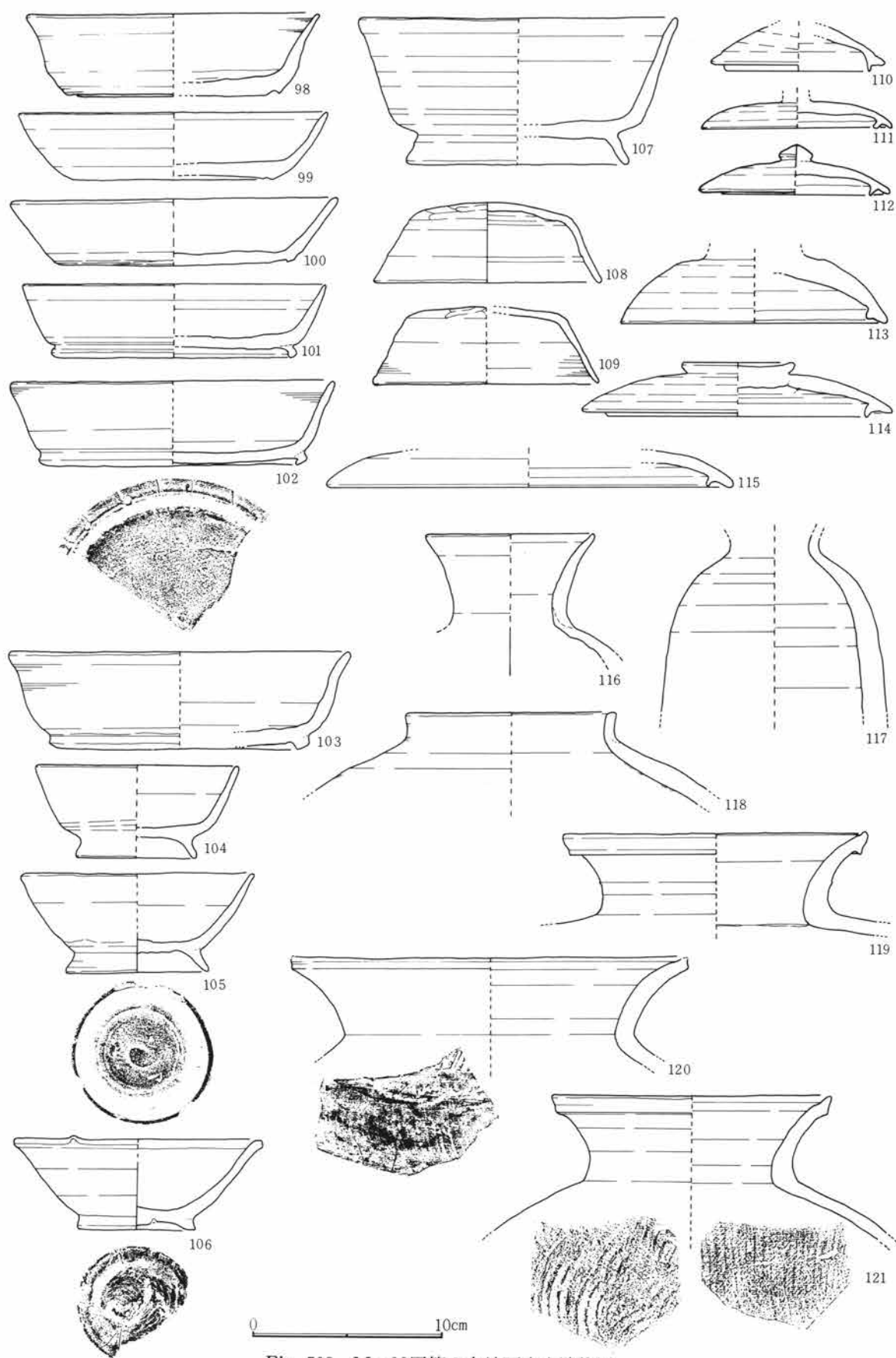


Fig. 503 M・N区第2台地下出土遺物(4)

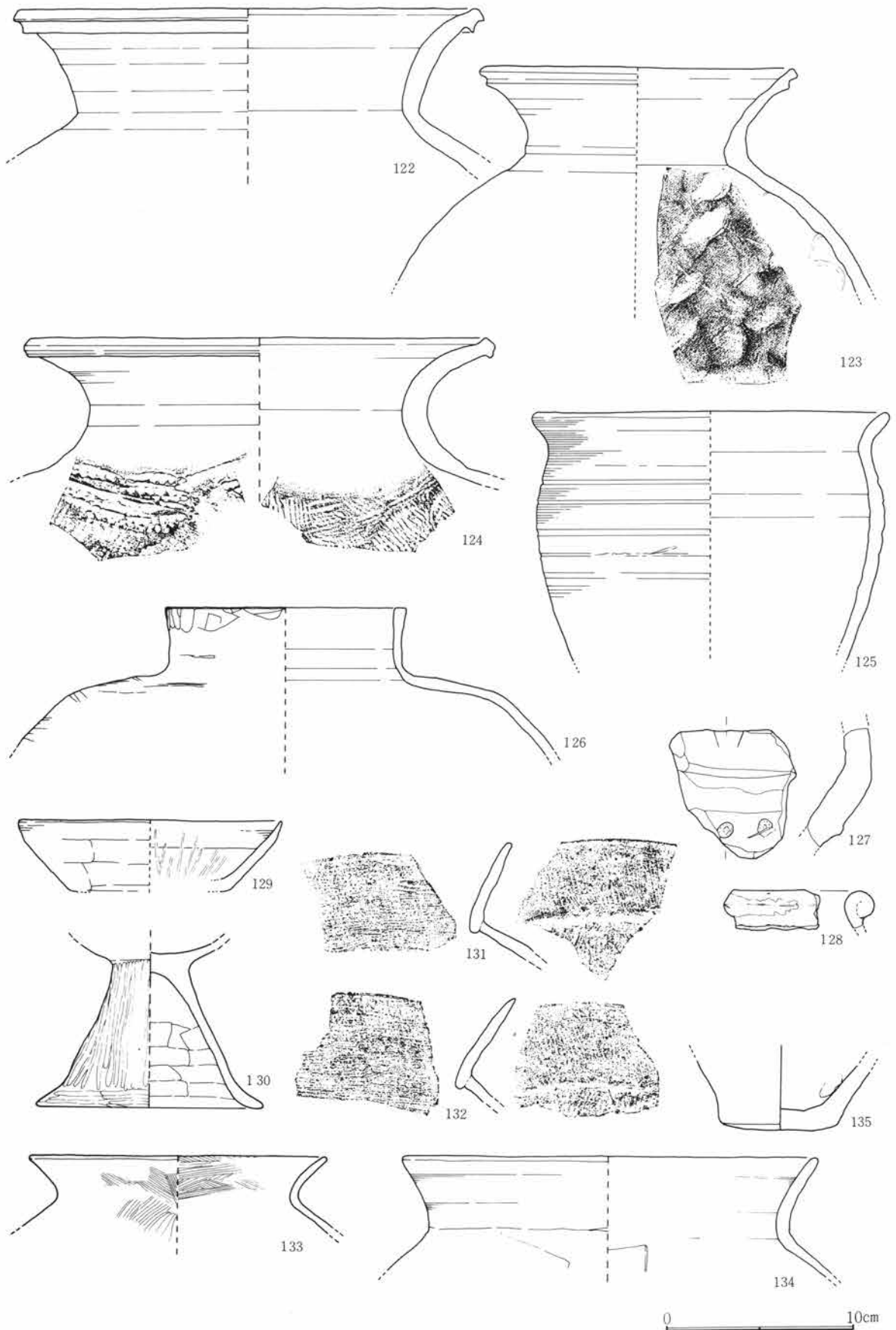


Fig. 504 M・N区第2台地下出土遺物(5)

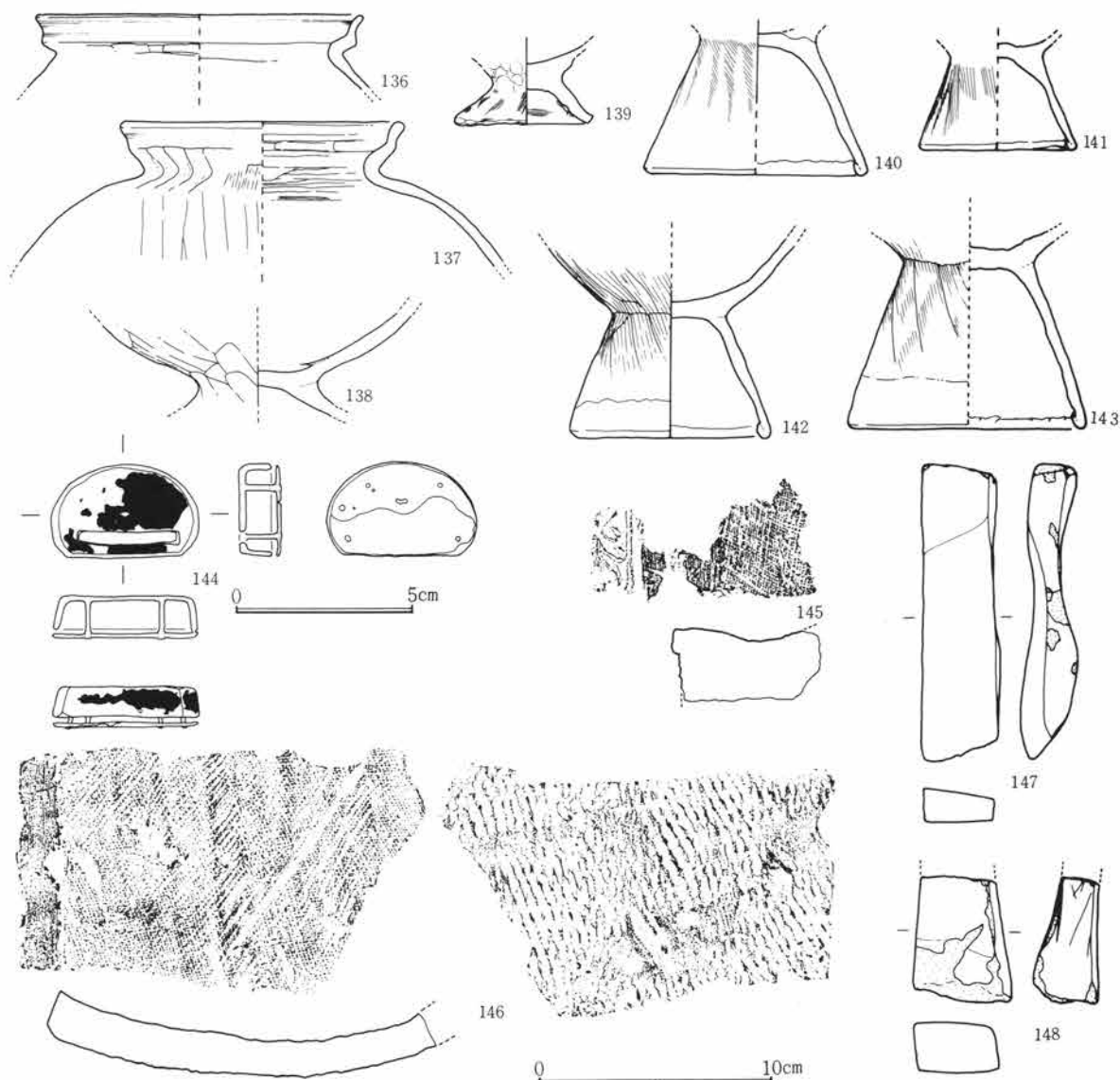


Fig. 505 M・N区第2台地下出土遺物(6)

M・N区第2台地下出土遺物(土器) 観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
500-1 160-1	土師器 杯	ほぼ完形	13.8×-×4.8	丸底。体部深く器肉厚い。口縁部強く外屈する内斜口縁。口唇部尖る。内面斜行篋磨き。口縁部・口縁下横篋撫で。体部・底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・赤色粒混る
500-2 160-2	土師器 杯	1/2	11.2×-×5.4	体部丸く半円形を呈す。口縁部強く内湾。口縁部横撫で。外面篋削り・篋削り後の篋撫で。研磨的様相で単位不明。内面斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密
500-3 160-3	土師器 杯	1/2	12.1×-×5.0	体部丸く深い。口唇部細まり内湾気味。口縁部内外面横撫で。底部横篋削り。内面斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密・赤色粒混る
500-4 160-4	土師器 杯	1/2	11.3×-×3.9	底部浅い。受け部に弱い稜をなし口縁部直線的に外傾。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③砂混る
500-5 160-5	土師器 杯	1/2	12.2×-×4.2	底部扁平で丸味あり。口縁部高く直線的に外傾。口唇部丸い。口縁部横撫で。底部篋削り。	①酸化 ②橙 ③やや密
500-6 160-6	土師器 杯	1/2	12.8×-×(3.3)	底部浅く受け部僅かに稜をなし口縁部僅かに外反。口縁部横撫で。底部篋削り。	①酸化 ②橙 ③やや密
500-7 160-7	土師器 杯	1/2	12.2×-×4.1	底部丸く浅い。受け部に稜をなし口縁部は緩く外反して開く。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②浅黄橙 ③やや粗
500-8 160-8	土師器 杯	1/2	12.6×-×3.2	底部浅く受け部で屈し口縁部外傾し中位でくびれる。口縁部横撫で。底部篋削り。内面摩擦顕著。内外面に光沢。	①酸化 ②淡赤橙 ③やや密

第2節 その他の遺構と出土遺物

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	残存量	計 測 値	器 形 及 び 成 ・ 調 整 の 特 徴、そ の 他	①焼 成 ②色 調 ③胎 土
500-9 160-9	土 師 器 杯	口縁部 1/4	11.8×-×(3.8)	受け部で強く屈し口縁部中位で段をなす。口唇部内側に沈線の段が巡る。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②黒褐 ③密
500-10 160-10	土 師 器 杯	1/4	14.0×-×(3.8)	器肉厚い。底部丸底。受け部で屈し口縁部外反して開く。口縁部横撫で。底部篋削り・内面撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
500-11 160-11	土 師 器 杯	3/4	14.6×-×3.2	底部丸味をもち扁平。口縁部は緩くくびれ外反して大きく開く。口唇部丸い。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
500-12 160-12	土 師 器 杯	完 形	12.1×-×4.1	器肉薄い。底部丸く深め。口縁部短く外反する。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密・細砂混る
500-13 160-13	土 師 器 杯	1/4	9.6×-×2.8	底部扁平で平底気味。口縁部直立し口唇部細る。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
500-14 160-14	土 師 器 杯	1/4	10.2×-×(3.1)	底部厚みを持ち口縁部直立気味に立つ。口縁部横撫で。底部不定方向の篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗
500-15 160-15	土 師 器 杯	1/2	10.6×-×(3.3)	底部扁平気味。口縁部強く折れ短く直立。口縁部横撫で。底部不定方向の篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
500-16 160-16	土 師 器 杯	ほぼ完 形	10.6×-×2.9	底部浅い丸底。口縁部内傾して立つ。口唇部細り小さく内屈。口縁部横撫で。底部篋削り・内面撫で。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗
500-17 160-17	土 師 器 杯	ほぼ完 形	11.0×-×3.3	やや深く扁平な底部、口縁部直立。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗
500-18 160-18	土 師 器 杯	1/4	11.4×-×(2.7)	底部扁平。口縁部内湾して直立気味。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好・硬 ②鈍い褐 ③砂混る
500-19 160-19	土 師 器 杯	1/4	11.4×-×3.0	浅く扁平な底部。口縁部内傾して立つ。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・細砂混る
500-20 160-20	土 師 器 杯	1/4	11.2×-×(3.1)	底部扁平。口縁部内湾気味に直立。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
500-21 160-21	土 師 器 杯	1/4	11.0×-×3.9	底部深く丸い。口縁部直立し口唇部は丸まる。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
500-22 160-22	土 師 器 杯	3/4	11.4×-×3.7	底部丸く不安定。口縁部内湾し口唇部丸く内屈。口縁部横撫で。底部不定方向篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
500-23 160-23	土 師 器 杯	1/4	11.2×-×3.4	底部浅く扁平。口縁部折れて内傾。口縁部横撫で。底部不定方向篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
500-24 160-24	土 師 器 杯	ほぼ完 形	12.0×-×3.5	丸底。口縁部やや外反気味に直立。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや密
500-25 160-25	土 師 器 杯	3/4	12.2×-×3.6	底部やや扁平。口縁部肥厚し内湾。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
500-26 160-26	土 師 器 杯	完 形	11.2×-×3.5	底部丸く短い口縁部が直立。口唇部細る。口縁部横撫で。底部篋削り。内面見込部に黒色付着物。	①良好 ②橙 ③やや密
500-27 160-27	土 師 器 杯	1/4	12.4×-×(3.5)	底部浅く扁平気味。口縁部強く折れ内湾気味に直立。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・黒色粒混る
500-28 161-28	土 師 器 杯	1/4	12.6×-×3.6	底部丸い。口縁部短く直立。口唇部丸い。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・粗砂混る
500-29 161-29	土 師 器 杯	1/4	12.4×-×(2.8)	浅い丸底。口縁部直立気味。口唇部丸い。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや密・小石混る
500-30 161-30	土 師 器 杯	ほぼ完 形	12.4×-×2.5	底部扁平で浅い。口縁部直立気味に外傾。口唇部細る。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや密
500-31 161-31	土 師 器 杯	1/4	12.6×-×2.9	底部扁平。口縁部内湾気味に緩く外傾。口縁部横撫で。底部篋削り。	①酸化 ②橙 ③やや密
500-32 161-32	土 師 器 杯	1/4	12.6×-×(3.1)	底部丸い。口縁部内湾して直立気味。口縁部横撫で。体部上半撫で。下半篋削り。内面撫で。	①硬・良好 ②鈍い橙 ③砂混る
500-33 161-33	土 師 器 杯	3/4	11.6×-×4.2	底部丸くやや深い。口縁部内湾し内傾。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
500-34 161-34	土 師 器 杯	1/4	12.0×-×3.3	底部小さく平坦をなす。口縁部強く折れて内傾。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③細砂混る
500-35 161-35	土 師 器 杯	完 形	12.4×-×3.8	底部丸味をおび口縁部僅かに外傾。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③細砂混る
500-36 161-36	土 師 器 杯	1/4	13.0×-×3.5	底部扁平で平底気味。口縁部直立し口唇部細る。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
500-37 161-37	土 師 器 杯	1/4	13.2×-×(3.1)	底部浅く丸底。受け部僅かに残り丸味をもつ。口縁部は外反。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗

第2章 遺構と遺物

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	残存量	計 測 値	器 形 及 び 成・調 整 の 特 徴、そ の 他	①焼 成 ②色 調 ③胎 土
500-38 161-38	土 師 器 杯	⅔	12.2×-×4.1	底部丸く深め。口縁部強く内傾し口唇部丸い。口縁部横撫で。底部篋削り。	①酸化 ②橙 ③やや密・細砂混る
500-39 161-39	土 師 器 杯	⅔	12.6×-×3.7	底部やや丸い。口縁部内湾気味に直立。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
500-40 161-40	土 師 器 杯	⅔	13.2×-×(3.5)	底部丸く口縁部内湾気味に開く。口縁部横撫で。体部篋削り。内面撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・砂混る
500-41 161-41	土 師 器 杯	⅔	12.9×-×3.7	底部丸い。口縁部外傾して立つ。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや密・砂混る
500-42 161-42	土 師 器 杯	ほぼ完 形	12.6×-×4.4	底部丸く深い。口唇部丸く内屈。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②鈍い赤褐 ③細砂混る
500-43 161-43	土 師 器 杯	⅔	12.8×-×(4.0)	底部やや深く口縁部肥厚し直立気味。口縁部横撫で。底部篋削り。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや粗
501-44 161-44	土 師 器 杯	⅔	13.5×-×4.0	底部丸くやや深い。口縁部内湾気味に直立し口唇部小さく内屈。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②鈍い赤褐 ③やや密
501-45 161-45	土 師 器 杯	⅔	13.6×-×(3.7)	口縁部やや短く直立。端部細る。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗
501-46 161-46	土 師 器 杯	⅔	14.6×-×4.0	底部やや丸味をもつ。口縁部肥厚気味で短く直立。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②淡橙 ③やや密・細砂混る
501-47 161-47	土 師 器 杯	⅔	13.2×-×(4.8)	底部丸く深い。口縁部短く内湾して直立。口縁部横撫で。体部篋削り。内面撫で。	①硬・良好 ②鈍い橙 ③やや密
501-48 161-48	土 師 器 杯	ほぼ完 形	14.0×-×4.2	底部丸く不安定。口縁部内傾して立つ。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
501-49 161-49	土 師 器 杯	⅔	13.6×-×3.2	底部内湾して丸みをもち口縁部緩く外反して開く。口縁部横撫で。底部篋削り。内面見込部篋撫で。	①良好 ②橙 ③やや密
501-50 161-50	土 師 器 杯	⅔	14.2×-×4.4	底部丸く深め。口縁部直線的に立つ。口縁部横撫で。底部外面篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
501-51 161-51	土 師 器 杯	⅔	15.0×-×4.7	底部丸く口縁部は内湾して開く。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③砂混る
501-52 161-52	土 師 器 杯	⅔	15.6×-×(3.0)	浅く扁平な底部。口縁部緩く外傾。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・白色粒混
501-53 161-53	土 師 器 杯	⅔	11.2×-×2.9	扁平な底部。口縁部直立。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
501-54 162-54	土 師 器 杯	⅔	11.6×-×3.3	底部丸く短い口縁部が内湾気味に直立する。口唇部丸い。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
501-55 162-55	土 師 器 杯	ほぼ完 形	15.5×-×4.7	底部扁平気味。口縁部折れて直立。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
501-56 162-56	土 師 器 杯	⅔	16.6×-×(3.6)	体部内湾気味。口縁部に凹線状の強い撫で調整。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
501-57 162-57	土 師 器 杯	ほぼ完 形	10.8×-×(3.1)	平底。体部浅く内湾気味に立つ。内面放射状篋磨き。口縁部横撫で。体部・底部篋削り。	①酸化 ②橙 ③密
501-58 162-58	土 師 器 杯	⅔	13.3×8.4×(4.4)	底部丸みをもつ。体部やや内湾気味に開く。口唇部丸い。底部・体部外面篋削り。見込部螺旋状・体部斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密
501-59 162-59	土 師 器 杯	⅔	14.8×9.8×4.7	底部丸い。体部直線的に開く。口唇部細り丸い。底部・体部篋削り。内面見込部螺旋状・体部放射状篋磨き。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・砂混る
501-60 162-60	土 師 器 杯	⅔	13.0×7.7×3.7	底部僅かに丸味をもつ。体部直線的で大きく開く。口唇部尖がり気味。体部横篋削り。内面放射状篋磨き。	①酸化 ②橙 ③細砂混る
501-61 162-61	土 師 器 杯	⅔	13.2×7.4×3.6	見込部器肉厚く平底。体部直線的に外傾。口縁部横撫で。体部篋削り。底部篋調整。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・粗砂混る
501-62 162-62	土 師 器 杯	⅔	15.9×11.5×3.9	平底。体部直線的で口縁部僅かにくびれ外反。口縁部横撫で。体・底部外面篋削り。内面斜行・見込部螺旋状篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密
501-63 162-63	土 師 器 杯	⅔	16.0×-×2.7	底部丸味もち扁平。口縁部ややくびれ強く外反して水平気味。口縁部横撫で。底部篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
501-64 162-64	土 師 器 杯	⅔	16.8×-×(4.3)	底部丸く不安定。口縁部短かく折れて外反気味に開く。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・黒色粒混る
501-65 162-65	土 師 器 杯	⅔	19.2×-×(4.0)	器肉厚い。底部丸く不安定。口縁部僅かに外傾。口縁部横撫で。底部篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
501-66 162-66	土 師 器 杯	⅔	17.2×-×(3.6)	器肉厚い。底部浅く口縁部くびれて内湾気味に外反。口縁部横撫で。体部篋削り。内面撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
501-67 162-67	土 師 器 杯	底部破 片		見込部に放射状に広がる線刻文様あり。外面篋削り。	①良好 ②橙 ③密

第2節 その他の遺構と出土遺物

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	残存量	計 測 値	器 形 及 び 成 ・ 調 整 の 特 徴、そ の 他	①焼 成 ②色 調 ③胎 土
501-68 162-68	土 師 器 杯	底部破片		見込部に放射状に広がる線刻文様あり。外面篋削り。	①良好 ②橙 ③密
501-69 162-69	土 師 器 杯	1/4	9.0×-×(4.3)	底部小さく強く張り段をなす。口縁部は直立気味で外反する。口縁部横撫で。胴部篋削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③密
502-70 162-70	須 恵 器 杯	1/4	8.0×-×(3.3)	やや小形。底部丸く深め。体部直線的に立ち上がり、口縁部外反気味。底部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③細砂混る
502-71 162-72	須 恵 器 杯	1/4	9.2×4.8×3.4	体部僅かに丸味をもって立つ。口唇部尖がり気味。轆轤成形。回転篋削り後回転篋削り。	①還元 ②灰 ③やや密・細砂混る
502-72 162-72	須 恵 器 杯	ほぼ完形	10.0×-×3.7	底部から腰部丸味をもち体部は直線的に緩く外傾。轆轤成形。底部手持ち篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
502-73 162-73	須 恵 器 杯	1/4	10.0×4.4×3.9	腰部肥厚し体部直線的に外傾。口唇部丸い。轆轤成形。回転篋削り後回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密
502-74 162-74	須 恵 器 杯	1/4	10.1×-×3.7	腰部弱い丸味。体部直立気味。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密
502-75 162-75	須 恵 器 杯	1/4	10.7×-×3.1	平底気味。腰部丸く体部は直線的にやや外傾して立つ。轆轤成形。腰・底部手持ち篋削り。	①良好 ②灰 ③密
502-76 162-76	須 恵 器 杯	1/4	13.6×11.6×4.4	底部から腰部に丸味をもち体部直線的に外傾。轆轤成形。腰・底部手持ち篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
502-77 163-77	須 恵 器 杯	1/4	19.2×10.0×5.1	底部肥厚。腰部丸味をもち体部直線的に外傾。轆轤成形。底部手持ち篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密・白色粒混る
502-78 163-78	須 恵 器 盤	1/4	21.0×-×(3.5)	体部浅く変化をもち口縁に至る。轆轤成形。底部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
502-79 163-79	須 恵 器 杯	1/4	13.6×9.0×3.2	体部浅く直線的に外傾。轆轤成形。腰部篋削り。底部回転篋削り後回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
502-80 163-80	須 恵 器 杯	1/4	13.6×9.4×(3.8)	体部から口縁部直線的に外傾して開く。底部回転篋削り。轆轤成形。右回転。	①硬・良好 ②灰 ③密
502-81 163-81	須 恵 器 杯	1/4	15.0×8.0×3.5	腰部でくびれ体部直線的に外傾。自然釉付着。轆轤成形。回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密・白色粒混る
502-82 163-82	須 恵 器 杯	上半欠損	-×9.8×(2.7)	腰部直線的。轆轤成形。腰部下位回転篋削り。底部回転篋削り。刻書土器。	①良好 ②灰白 ③やや密
502-83 163-83	須 恵 器 杯	1/4	13.5×8.5×3.6	底部肥厚。腰部張り口縁部外反気味に開く。轆轤成形。表面、特に底部の剝離著しい。	①良好 ②灰白 ③やや密
502-84 163-84	須 恵 器 杯	ほぼ完形	12.9×8.0×3.5	体部から口縁部やや内湾気味に開く。腰部回転篋削り。右回転糸切り。焼成時の溶解物付着。外面全面自然釉。	①硬・良好 ②灰 ③密
502-85 163-85	須 恵 器 杯	ほぼ完形	10.8×5.4×2.6	体部緩く内湾し口縁部緩く外反。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
502-86 163-86	須 恵 器 杯	1/4	10.2×5.0×3.0	体部内湾気味で口縁部外傾。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②浅黄橙 ③やや粗
502-87 163-87	内 黒 土 器 皿	1/4	9.9×5.6×1.8	体部緩く丸味をもち大きく開く。口縁部水平気味に外反。内面黒色処理。見込部に篋磨き。付高台。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密・砂混る
502-88 163-88	須 恵 器 皿	1/4	9.0×3.4×2.9	底部肥厚し著しく突出。体部浅く直線的に開く。	①酸化気味 ②灰白 ③細砂混る
502-89 163-89	須 恵 器 鉢	1/4	18.2×12.0×6.4	底径大。体部深く内湾気味に立つ。轆轤成形。底部切り離し後回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密・細砂混る
502-90 163-90	須 恵 器 盤	1/4	13.6×10.4×1.9	体部極めて浅くやや内湾気味。轆轤成形。回転糸切り後撫で。	①良好 ②褐灰 ③密・細砂混る
502-91 163-91	須 恵 器 盤 ?	小 片	16.0×13.0×2.0	底径大。体部極めて浅く大きく開く。轆轤成形。底部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密・細砂混る
502-92 163-92	須 恵 器 盤	1/4	14.6×12.4×2.4	体部浅く直線的に立つ。口唇部上端面凹む。見込部2条の沈線巡る。轆轤成形。腰部・底部手持ち篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密・細砂混る
502-93 163-93	須 恵 器 盤	1/4	15.2×13.4×2.6	腰部に丸味をもち体部浅く直立気味。口唇部断面矩形で上端面やや内斜。轆轤成形。腰部・底部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③密
502-94 163-94	須 恵 器 杯 ?	1/4	15.9×14.4×(2.8)	体部浅く直立する。口唇部は四角張り上端面内斜。轆轤成形。底部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密
502-95 163-95	須 恵 器 盤	1/4	26.8×22.6×3.0	器肉厚く底部浅い。口唇部外屈し上端面凹む。底部平底で手持ち篋削り。腰部手持ち篋削り。	①還元 ②灰 ③白色粒混る
502-96 163-96	須 恵 器 盤 ?	小 片	26.6×20.0×3.3	器肉厚い。腰部丸味をもち大きく開く。口唇部内側へ突出し上面は凹む。轆轤成形。腰部回転篋削り。	①還元 ②灰 ③細砂混る
502-97 163-97	須 恵 器 盤	1/4	25.2×21.8×2.7	見込部盛り上る。体部浅く内湾気味。口唇部水平気味で内外端尖がり上端面凹む。底部回転篋削り。	①良好 ②黄灰 ③やや密・白色粒多混

第2章 遺構と遺物

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
503-98 163-98	須恵器 杯	1/4	15.2×9.6×4.2	底部肥厚し体部薄い。腰部張りをもち体部外反する。轆轤成形。底部回転篋削り。底部外周削り出し高台様の凹線巡り、底部突出。	①還元 ②灰 ③やや密
503-99 163-99	須恵器 椀	1/4	16.1×10.3×3.5	体部やや丸味を持ち開く。口縁部僅かに内湾気味で口唇部丸い。底部回転篋削り。底部外周に削り出し高台様の太い沈線。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③密・砂混る
503-100 164-100	須恵器 杯	1/2	17.0×12.5×3.5	底部突出し体部直線的に開く。口唇部丸い。回転篋削りによる削り出し高台。断面矩形。轆轤成形。底部回転篋削り。	①良好 ②明赤灰 ③密・黒色粒混る
503-101 164-101	須恵器 盤	1/4	15.8×12.8×3.8	体部浅く直線的に開き口唇部丸い。付高台、低く端部は矩形。底部中央回転篋削りと篋無で。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③やや密・白色粒混
503-102 164-102	須恵器 盤	1/4	16.8×14.0×4.3	底径大きく体部浅く外傾度少なく直線的に立ち上がる。付高台、低く断面矩形。底部回転篋削り後削り。	①良好 ②灰 ③密
503-103 164-103	須恵器 盤	1/4	17.8×13.6×5.0	腰部張り体部直線的に外傾し口縁部外反。口唇部丸い。付高台、巾広く断面矩形。底部突出気味。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密・黒色粒混
503-104 164-104	須恵器 椀	1/4	10.6×6.3×4.8	腰部やや強く張り体部直線的に開く。口唇部丸い。付高台ハの字状に開き端部丸い。轆轤成形。腰・底部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密・小石混る
503-105 164-105	須恵器 椀	1/4	12.2×7.4×5.1	体部深く直線的に外傾。付高台やや高くハの字状に開く。轆轤成形。回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密・黒色粒混
503-106 164-106	須恵器 椀	2/3	13.0×6.2×4.7	体部丸味を持ち開く。口縁部丸く外屈する。付高台。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密
503-107 164-107	須恵器 椀	1/4	16.7×11.6×7.6	腰部強く張る。体部深く外反気味で僅かに開く。付高台、高くハの字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③密
503-108 164-108	須恵器 蓋	2/3	11.8×8.4×4.1	天井部丸味をもつ。体部直線的に大きく外傾。轆轤成形。天井部手持ち篋削り。	①還元 ②灰白 ③やや密
503-109 164-109	須恵器 蓋	1/4	11.8×8.3×4.1	器肉薄い。天井部僅かに丸味をもち体部直線的に外傾。轆轤成形。内外面横撫で。天井部手持ち篋削り。内面炭化物。	①良好 ②灰白 ③やや密・小石混る
503-110 164-110	須恵器 蓋	摘欠損 1/4	9.2×-×(2.3)	やや小形。天井部張る。口縁部水平気味でかえりは尖り直立し口縁より大きく突出する。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③砂混る
503-111 164-111	須恵器 蓋	摘欠損	10.0×-×(1.5)	天井部扁平。回転篋削り。宝珠型摘?欠損。かえり断面丸く口縁に水平。	①良好 ②灰 ③白色粒混る
503-112 164-112	須恵器 蓋	1/4	14.0×-×3.5	疑宝珠摘。天井部僅かに丸味をもつ。口縁部丸い。かえり垂直に立ち口縁部より僅かに突出。	①良好 ②紫灰 ③やや粗
503-113 164-113	須恵器 蓋	1/4	14.0×-×(3.5)	器肉厚い。天井部丸く張る。かえり部丸味をもつ。摘部欠損。	①良好 ②灰 ③白色粒混る
503-114 164-114	須恵器 蓋	1/4	16.2×-×2.8 摘径5.8	天井部丸味もち体部内湾して開く。内面に口縁より高い大きなかえり。口縁部付近回転篋削り。還状摘。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③密
503-115 164-115	須恵器 蓋	1/4	21.2×-×(1.9)	天井部張る。口唇部丸い。内面のかえり尖り気味。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③砂多量に混る
503-116 164-116	須恵器 横瓶?	口縁部 破片	8.8×-×(6.4)	腰部に対して頸部直角気味。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③やや密
503-117 164-117	須恵器 瓶	肩部	-×-×(9.2)	胴部張りなく長胴を呈す。肩部丸く張り頸部は緩く外反気味。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③密・砂混る
503-118 164-118	須恵器 短頸壺	肩部	11.0×-×(4.8)	肩部丸く張る。口縁部短かく僅かに外反気味に直立。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③密
503-119 164-119	須恵器 甕	口縁部	15.8×-×(5.4)	口縁部強く外反して開く。肩部直線的に張る。口唇部下端突出し上端は内屈。内面叩き目。全体に自然釉。	①良好 ②灰 ③やや密
503-120 164-120	須恵器 甕	口縁部	20.6×-×(5.5) 頸部径15.0	口縁部大きく開き外反。口唇部下端小さく突出。端部は欠損。口縁部外面平行叩き目。内面轆轤目あり。	①良好 ②灰白 ③やや粗
503-121 164-121	須恵器 甕	口縁部	14.4×-×(7.2)	肩部緩く丸味をもつ。口縁部外反して開き口唇部は外屈する。肩部平行叩き目。内面青海波あて目。	①良好 ②灰 ③やや密
504-122 164-122	須恵器 甕	口縁部 破片	24.8×-×(7.7)	口縁部外反して開き口唇部上下端尖る。	①良好 ②灰白 ③密・細砂混る
504-123 165-123	須恵器 壺	上半部	16.8×-×(11.3)	肩部丸く張り口縁部直線的でコの字状に外傾して開く。口唇部矩形を呈し下位は凸帯状に尖る。内面あて目。	①良好 ②灰白 ③密
504-124 165-124	須恵器 甕	口縁部 破片	24.7×-×(7.3)	口縁部強く外反して開く。口唇部断面矩形で脹らむ。頸部外面叩き目。内面あて目。	①良好 ②灰 ③密・白色粒混る
504-125 165-125	須恵器 甕	口縁部	20.6×-×(5.5) 頸部径15.0	口縁部大きく開き外反。口唇部下端小さく突出。端部は欠損。口縁部外面平行叩き目。内面轆轤目あり。	①良好 ②灰白 ③やや粗
504-126 165-126	須恵器 短頸壺	口縁部	12.7×-×(7.7)	肩部強く張る。口縁部直立し口唇部上端水平で断面矩形。肩部に横方向の細い篋調整。	①良好 ②灰 ③密・細砂混る

第2節 その他の遺構と出土遺物

Fig. No PL. No	器 器 種 形	残存量	計 測 値	器 形 及 び 成 ・ 調 整 の 特 徴、 そ の 他	①焼 成 ②色 調 ③胎 土
504-127 165-127	須 惠 器 手 焙 り	小 片	厚1.6	長方形透し、凸帯を巡らし、径7mm大の円型貼付文。	①良好 ②灰 ③やや密
504-128 165-128	陶 器 甕	口縁部 破 片	厚0.3	口縁部丸く脹らむ。全体に褐色の釉。	①良好 ②灰白 ③密
504-129 165-129	土 師 器 高 坏	杯 部	14.0×-×(3.7)	体部直線的に大きく開き口縁部内湾気味に立つ。口縁部横撫で。体部横篋削り。内面横撫で後放射状磨き。	①良好 ②橙 ③密
504-130 165-130	土 師 器 器 台 ?	台 部	-×11.9×(8.6)	腰部丸い。脚部直線的に開き裾部更に開く。外面底部横篋磨き。台部縦篋磨き。内面篋撫で。	①良好 ②灰白 ③赤色粘土粒混る
504-131 165-131	土 師 器 甕	口縁部 破 片		口縁部大きく外反し口唇部丸まる。	①良好 ②灰白 ③やや粗
504-132 165-132	土 師 器 甕	口縁部 破 片		口縁部外反し口唇部細る。	①良好 ②灰白 ③やや粗
504-133 165-133	土 師 器 甕	口縁部 破 片	15.6×-×(4.0)	口縁部大きく外反して開く。口唇部断面矩形。肩部縦方向口縁部外面斜方向、内面不定方向刷毛目。	①良好 ②灰白 ③やや密・黒色粒混
504-134 165-134	土 師 器 甕	口縁部	21.8×-×(6.1)	口縁部外反。口縁部横撫で。体部上半篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②明赤褐 ③密
504-135 165-135	土 師 器 甕	底 部	-×6.0×(3.6)	腰部ややくびれる。内面指頭痕。全体的に摩滅顕著。	①良好 ②淡黄 ③砂混る
505-136 165-136	土 師 器 台 付 甕	口縁部	13.8×-×(3.1)	胴部丸く張るか。口縁部S字口縁。口縁部横撫で。頸部縦位篋削り後体部上位横方向の撫で。内面撫で。	①良好 ②黄灰 ③密
505-137 165-137	土 師 器 台 付 甕	口縁部	12.0×-×(6.1)	胴部丸く張る。形骸化したS字口縁。口縁部横撫で。頸部横撫で。頸部刷毛による撫で。体部撫で。内面篋磨き。	①良好 ②褐灰 ③密
505-138 165-138	土 師 器 台 付 甕	底 部	-×-×(3.8) 脚基径5.0	胴部内湾気味に開く。体部外面篋削り。内面に付着物。台部内面撫で。腰部から底部一部残存する。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗
505-139 165-139	土 師 器 小形台付甕	台 部	-×6.8×(3.4)	手捏ね。細かい指頭痕多い。台部外面斜方向、内面横方向刷毛目。	①良好 ②褐灰 ③やや密
505-140 165-140	土 師 器 台 付 甕	台部½	-×9.4×(5.9)	台部直線的に開き端部折り返し。斜行刷毛目。	①良好 ②灰黄 ③やや密・砂混る
505-141 165-141	土 師 器 台 付 甕	台 部	-×6.7×(4.6)	台部直線的に開き端部は内面に小さな折り返し。外面斜行刷毛目。	①良好 ②灰黄 ③やや密・砂混る
505-142 165-142	土 師 器 台 付 甕	下 半	-×8.4(8.2) 台基径4.8	腰部丸い。端部内側に折り返し丸まる。体部から台部外面刷毛目。端部撫で。	①良好 ②灰白 ③やや粗
505-143 165-143	土 師 器 台 付 甕	台 部	-×10.0×(8.4) 台基径5.4	台部直線的に開く。端部内側に折り返し丸まる。外面刷毛目。	①良好 ②灰白 ③やや粗
505-144 166-144	銅 製 品 丸 軋	完 形	4.2×2.6×1.2 重34.6g	黒漆塗り。表面下端に3.8×0.4の方形透し。裏面は帯留板が残り4隅で鋳でとまる。本体と帯留板の間隔は約0.15cm	
505-145 166-145	瓦 軒 平 瓦		厚 3	凹面布目。唐草文	①良好 ②灰 ③やや粗
505-146 166-146	瓦 平 瓦		厚1.55	凹面布目。凸面縄目。側面篋調整。	①酸化気味 ②鈍い灰 褐 ③やや密
505-147 166-147	石 製 品 砥 石		12.4×3.2×2.2	多面使用。使い減り著しい。重115g	流紋岩
505-148 166-148	石 製 品 砥 石		(5.3)×(4.1)× (2.7)	多面使用。刃痕あり。重72g	流紋岩

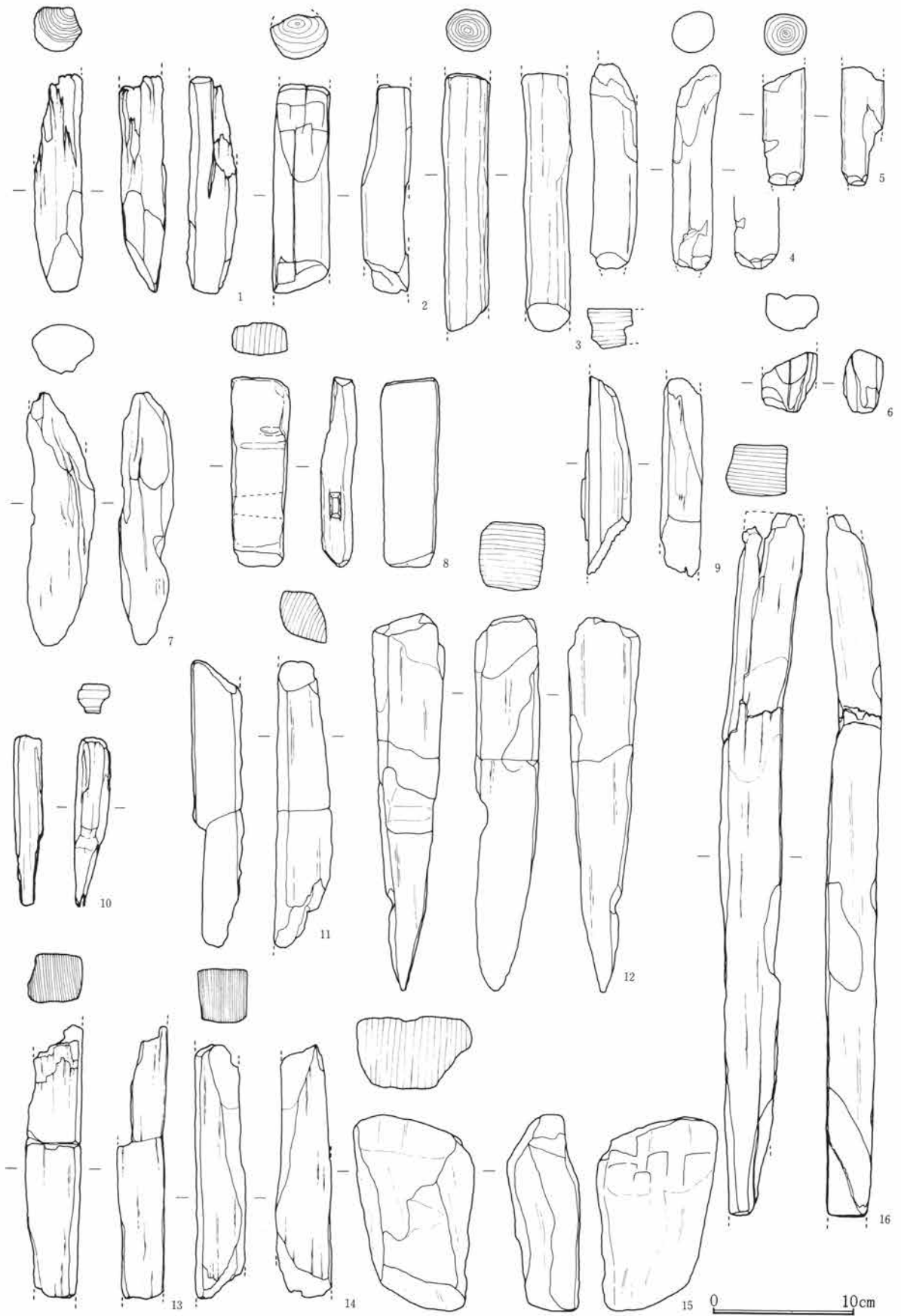


Fig. 506 M・N区第2台地下出土遺物（木器1）

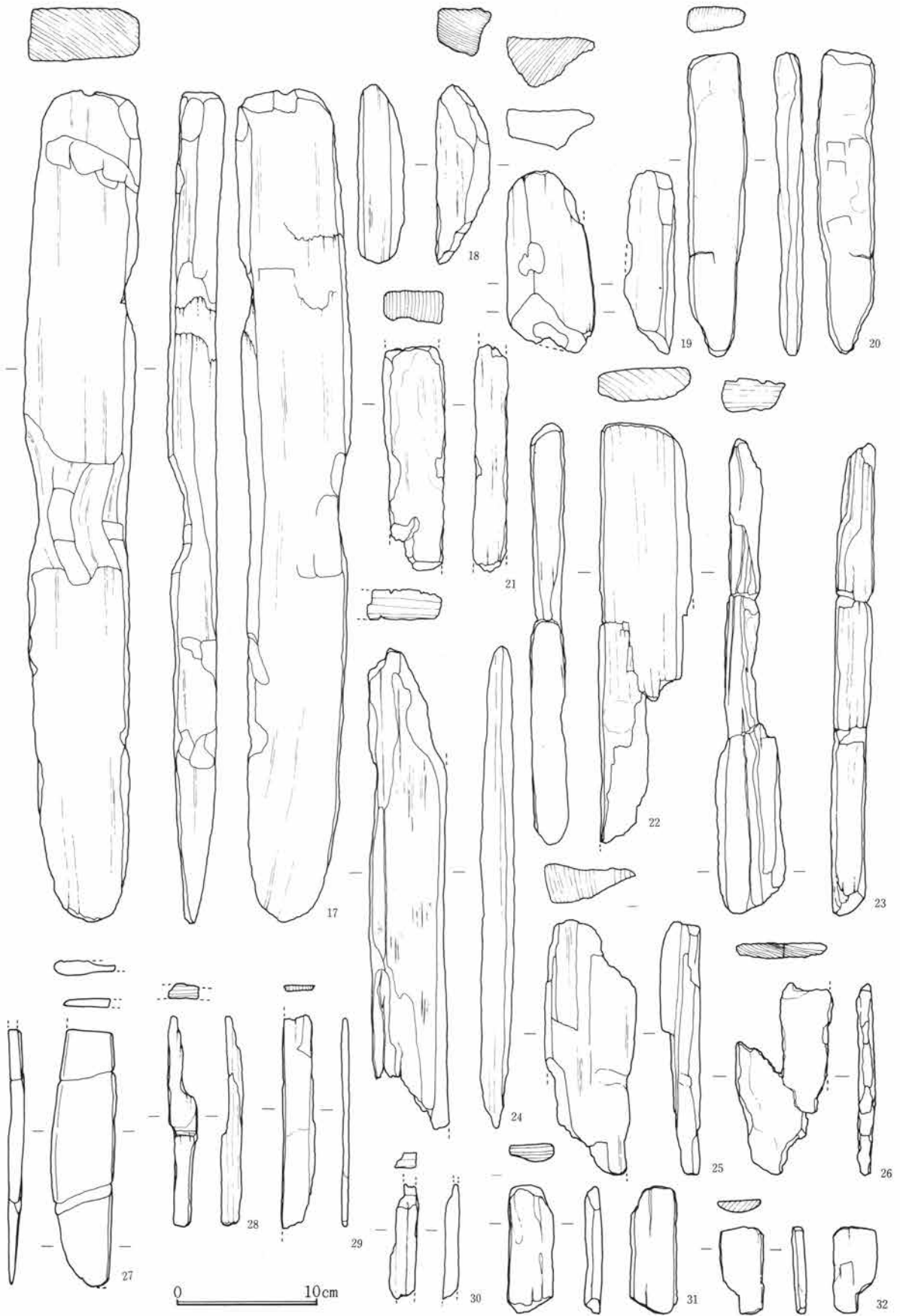


Fig. 507 M・N区第2台地下出土遺物（木器2）



Fig. 508 M・N区第2台地下出土遺物（木器3）

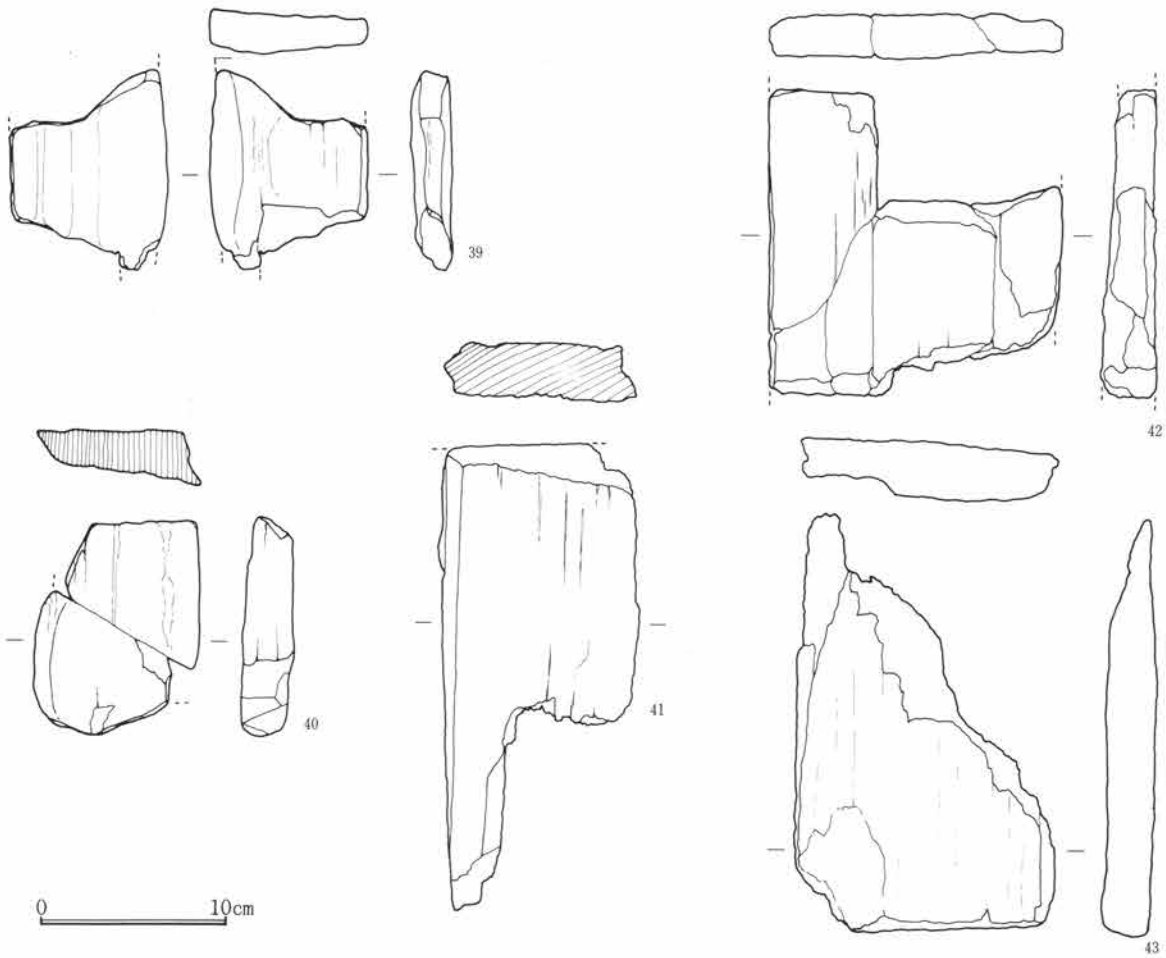


Fig. 509 M・N区第2台地下出土遺物（木器4）

M・N区第2台地下出土遺物（木器）観察表

Fig. No	PL. No	器種	長さ×幅×厚さ×径(cm)	特徴（木取・遺存状態・加工形状）
506-1	166-1	枝杭	15.4×3.4×33.2	芯持の丸木。上部乾燥による割れ欠損。先端は削り。先端のめくれ無。
506-2	166-2	枝杭	14.7×-×-×4	芯持の丸木。先端と上部を欠損。先端部一方、上部欠損部に削り痕。
506-3	166-3	枝杭	18.0×-×-×3	芯持の丸木。木口の一方は欠損。枝杭の上部か？ 表面に虫喰い痕。
506-4	166-4	枝杭	14.3×3.1×2.8	先端は四面削る。先端欠損。上部は焼失。芯持材。
506-5	166-5	枝杭	8.3×3.0×2.9	芯持の丸杭。両端は欠損。先端部に削痕。虫喰い痕。
506-6	166-6	枝杭	4.2×-×-	芯持丸杭の先端？ 先端は短く周囲を削る。
506-7	166-7	枝杭？	17.7×4.5×3.4	芯持材。一方は焼失。他方は欠損。
506-8	166-8	部材	13.2×4.0×2.3	端部は両面より削り切断。ほぼ穴ヶ所。一方の木口は欠損。
506-9	166-9	棒状木製品	14.0×3.1×2.8	両木口は焼失。
506-10	166-10	不明木製品	11.8×2.4×2.0	先端は杭状に削る。先端は欠損。
506-11	166-11	棒状木製品	20.0×3.5×3.5	両木口は欠損。断面形は方形になると思われる。
506-12	166-12	角杭	26.4×4.8×4.6	先端は変形なし。木口は欠損？
506-13	166-13	角材	19.0×3.9×3.4	両木口は欠損。
506-14	166-14	角材	17.6×3.4×3.8	両木口は欠損。
506-15	166-15	不明	13.7×8.4×4.7	材料木の端部の切り落としか？
507-16	167-16	角杭	49.3×4.4×3.6	先端は欠損。
507-17	167-17	板状木製品	58.5×7.8×3.5	板目材。板状を呈するが、一方を薄く仕上げる。中央部に挟りが入る。
507-18	167-18	不明木製品	12.7×3.8×3.3	分割材。分割部はていねいな調整。
507-19	167-19	分割材	12.9×6.3×3.1	芯持のみかん割り分割材。分割部調整無。先端斜め削り。上部は欠損か？
507-20	167-20	不明木製品	21.5×4.1×1.9	板目に近い分割材。先端は尖る。

第2章 遺構と遺物

Fig. No	PL. No	器種	長さ×幅×厚さ×径(cm)	特徴(木取・遺存状態・加工形状)
507-21	167-21	棒状木製品	15.9×4.3×2.3	みかん割り分割材。両端は欠損。分割部の加工痕なし。
507-22	167-22	板材	29.5×6.5×2.2	幅の狭い板目材。一方の木口は欠損。
507-23	167-23	棒状木製品	33.2×4.4×2.3	一方の側縁の大半は欠損。両木口は欠損。
507-24	167-24	板材	33.7×5.3×2.4	板目材。両木口は欠損。目やせは著しい。
507-25	167-25	割り材	18.0×6.4×2.8	みかん割り分割材。分割面の調整無。一方の木口は欠損。
507-26	167-26	板材	13.5×6.5×1.2	板目材。右側縁は残存、他は欠損。
507-27	167-27	二又鋏?	18.0×4.4×1.1	板目材。右側と上部欠損。左側縁断面丸く、全体の曲線から二又鋏か?
507-28	167-28	木片?	14.5×2.0×1.0	加工痕はあるが、木片の可能性あり。
507-29	167-29	薄板	14.5×2.1×0.4	柁目材。木口、両側縁欠損。
507-30	167-30	木片?	8.0×1.5×1.0	加工痕はあるが、木片の可能性あり。
507-31	167-31	不明	9.0×3.2×1.1	木製品の破片?
508-32	168-32	木片	6.0×3.1×0.8	浅く小さい為、木片と考えられる。
508-33	168-33	板材	57.3×9.1×2.6	板目材。内側木目に沿って剝離。表面と側縁は焼ける。下側木口欠損。上側木口は焼失。
508-34	168-34	板材	54.2×8.1×2.5	板目材。両木口は欠損。側縁の遺存は不明瞭。目やせは著しい。
508-35	168-35	板材	33.5×7.4×2.0	板目材。内側は木目に沿って剝離。表面は焼け、下部は消失。上部は欠損。
508-36	168-36	板材		板目材。両木口は焼失。右側縁は欠損。
508-37	168-37	部材	14.0×8.8×2.6	柁目材。右側縁を厚くする。
508-38	168-38	板材	44.1×22.9×4.2	みかん割りによる板目材。芯に近くなる程薄い。
509-39	168-39	板材	10.5×8.5×2.2	板目材。下部木口の一部に切断痕。上部木口は欠損。
509-40	169-40	厚板材	11.3×8.8×2.8	分割による柁目厚板。木口・側縁は一方のみ残存。
509-41	169-41	厚板材	24.4×10.4×3.0	板目材。木目粗く目やせあり。一方の木口は残存。
509-42	169-42	厚板材	16.3×15.6×3.0	板目材。側縁は残るが両端は欠損。
509-43	169-43	板材	17.0×13.9×3.0	厚板。板目。両側縁は欠損。一方の木口は欠損。

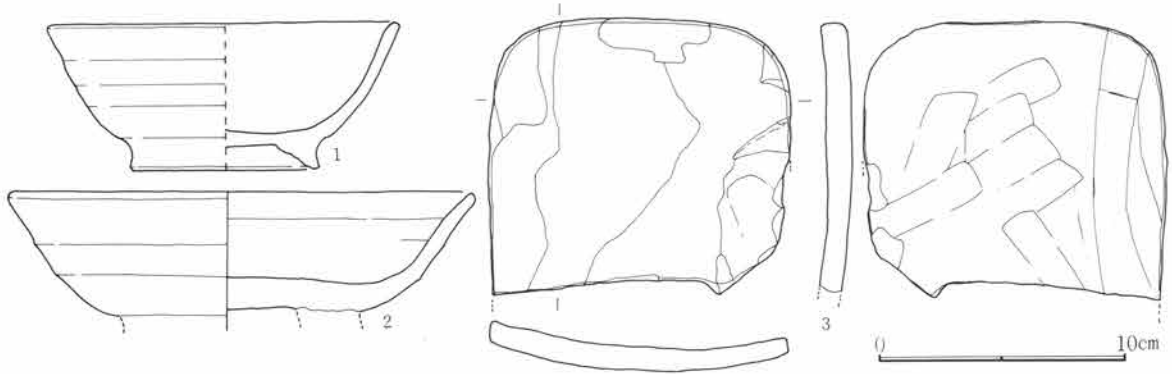


Fig. 510 M・N区第2台地出土遺物

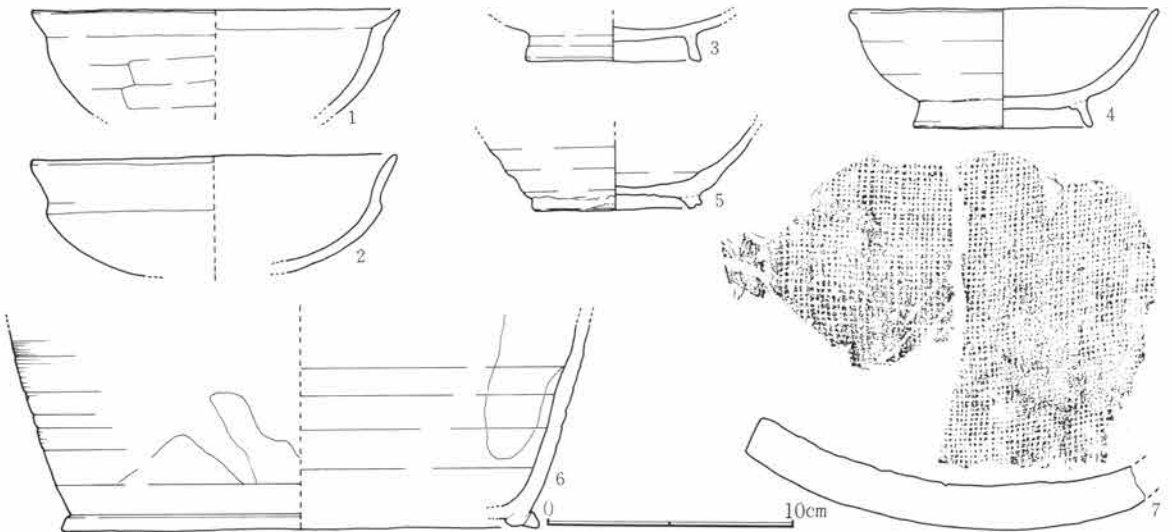


Fig. 511 M区第3台地出土遺物

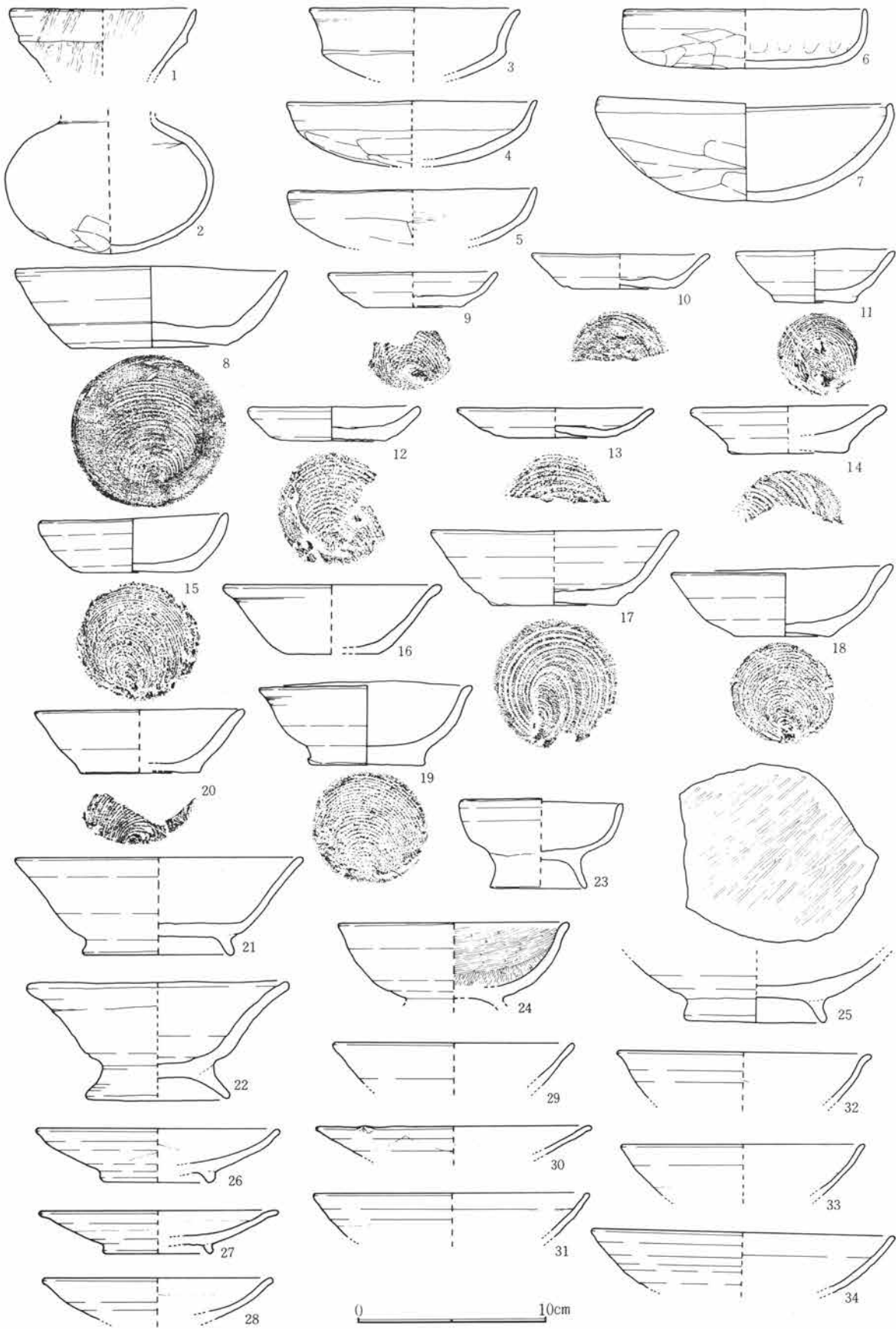


Fig. 512 L区第4台地出土遺物(1)

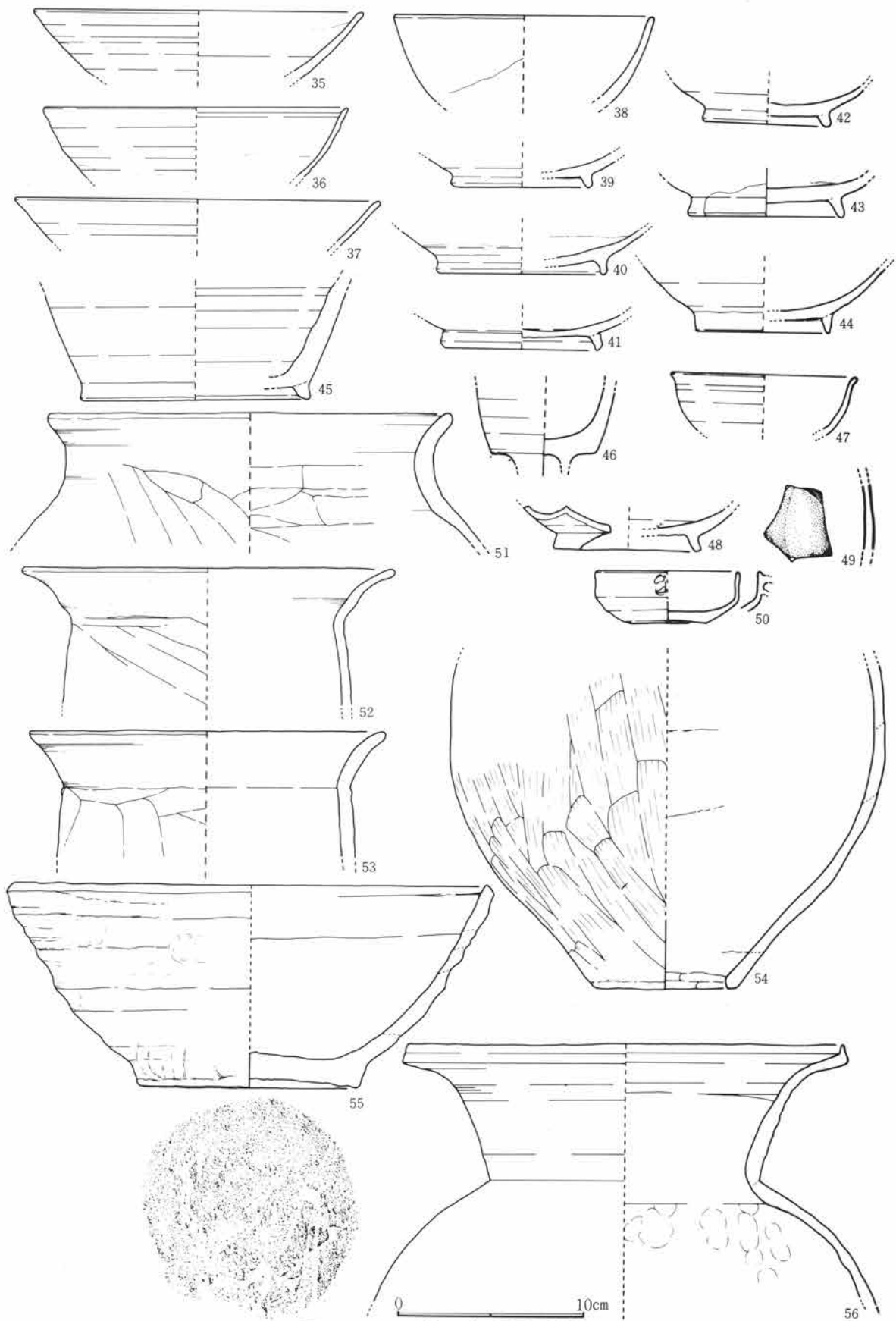


Fig. 513 L区第4台地出土遺物(2)

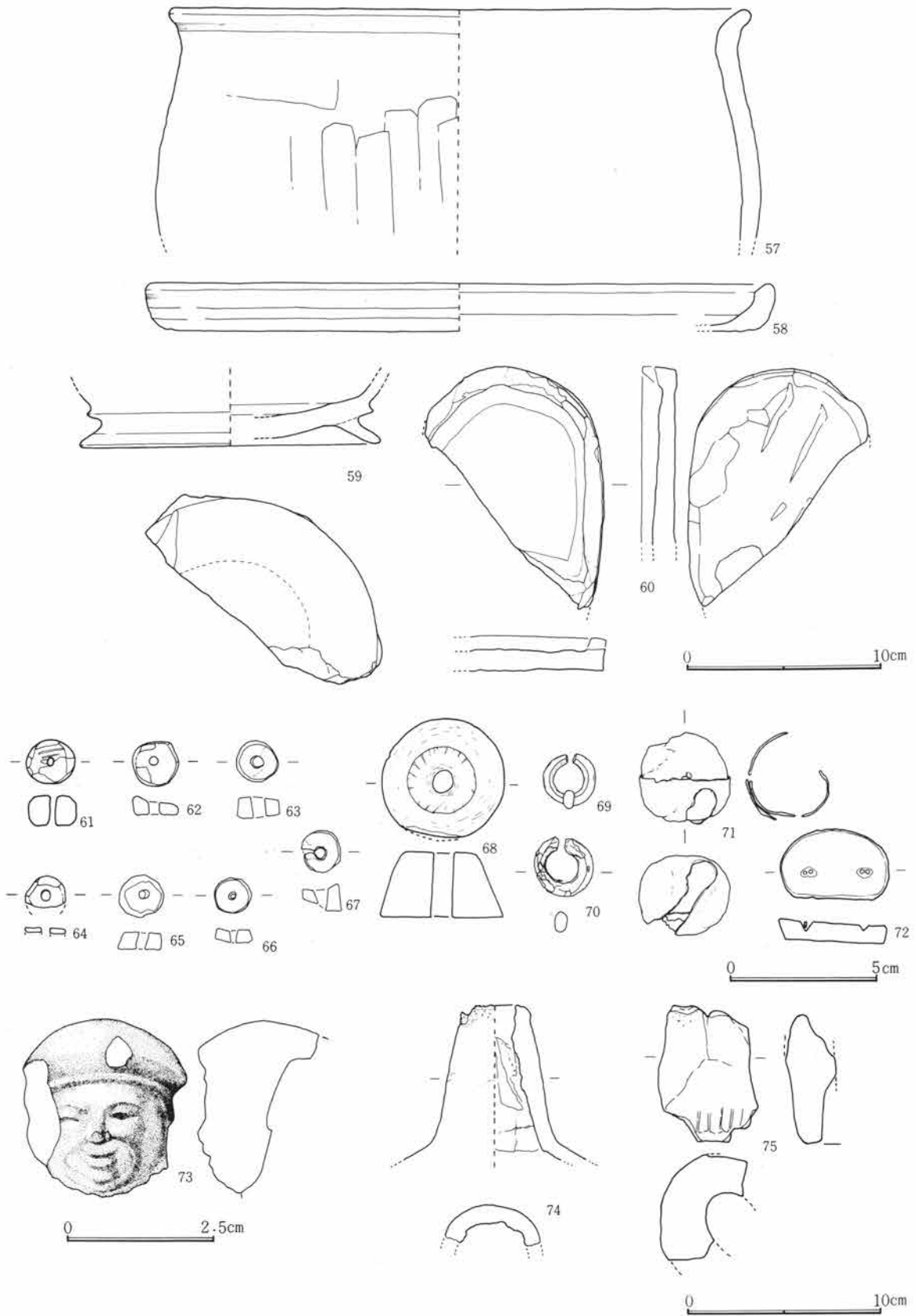


Fig. 514 L区第4台地出土遺物(3)

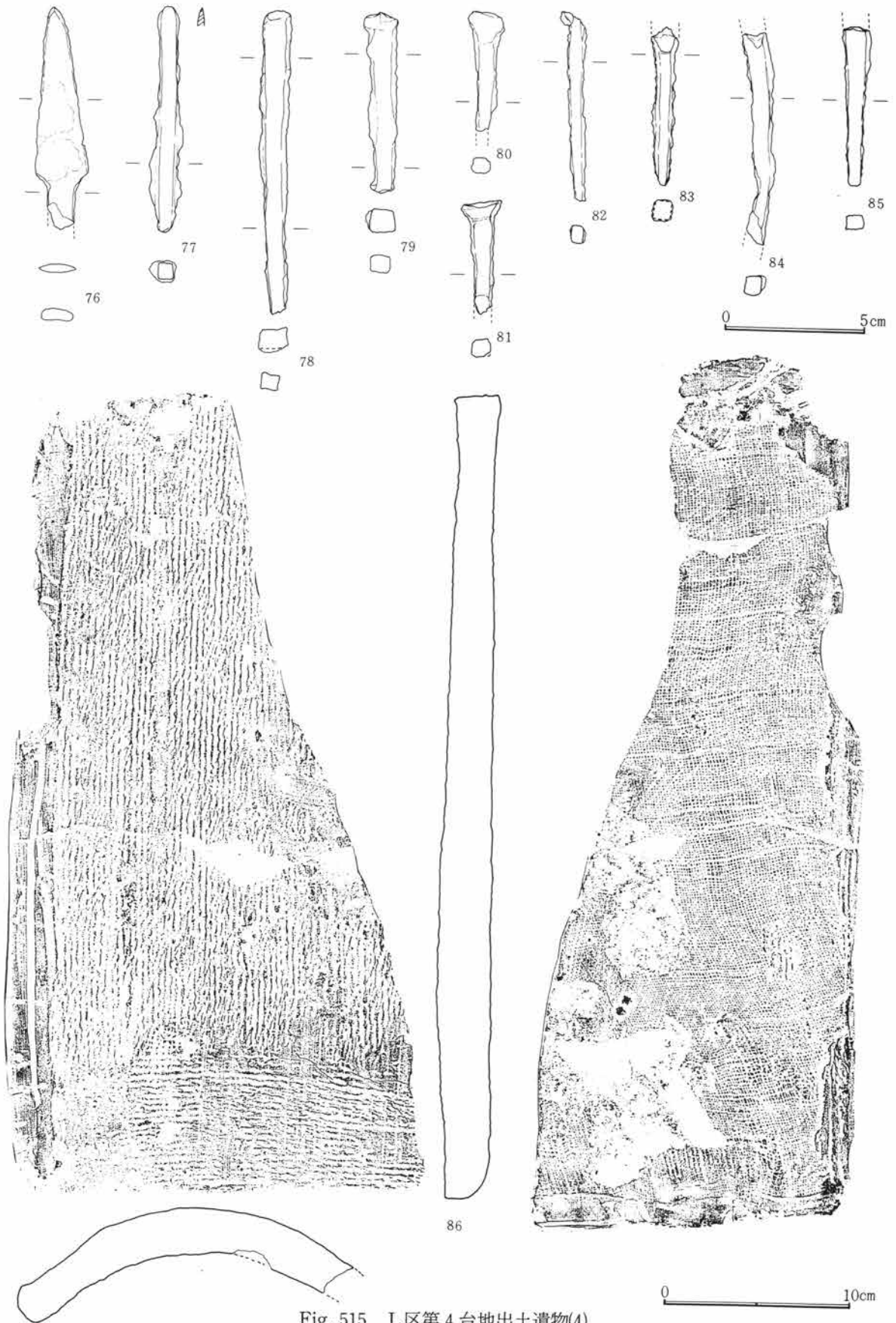


Fig. 515 L区第4台地出土遺物(4)

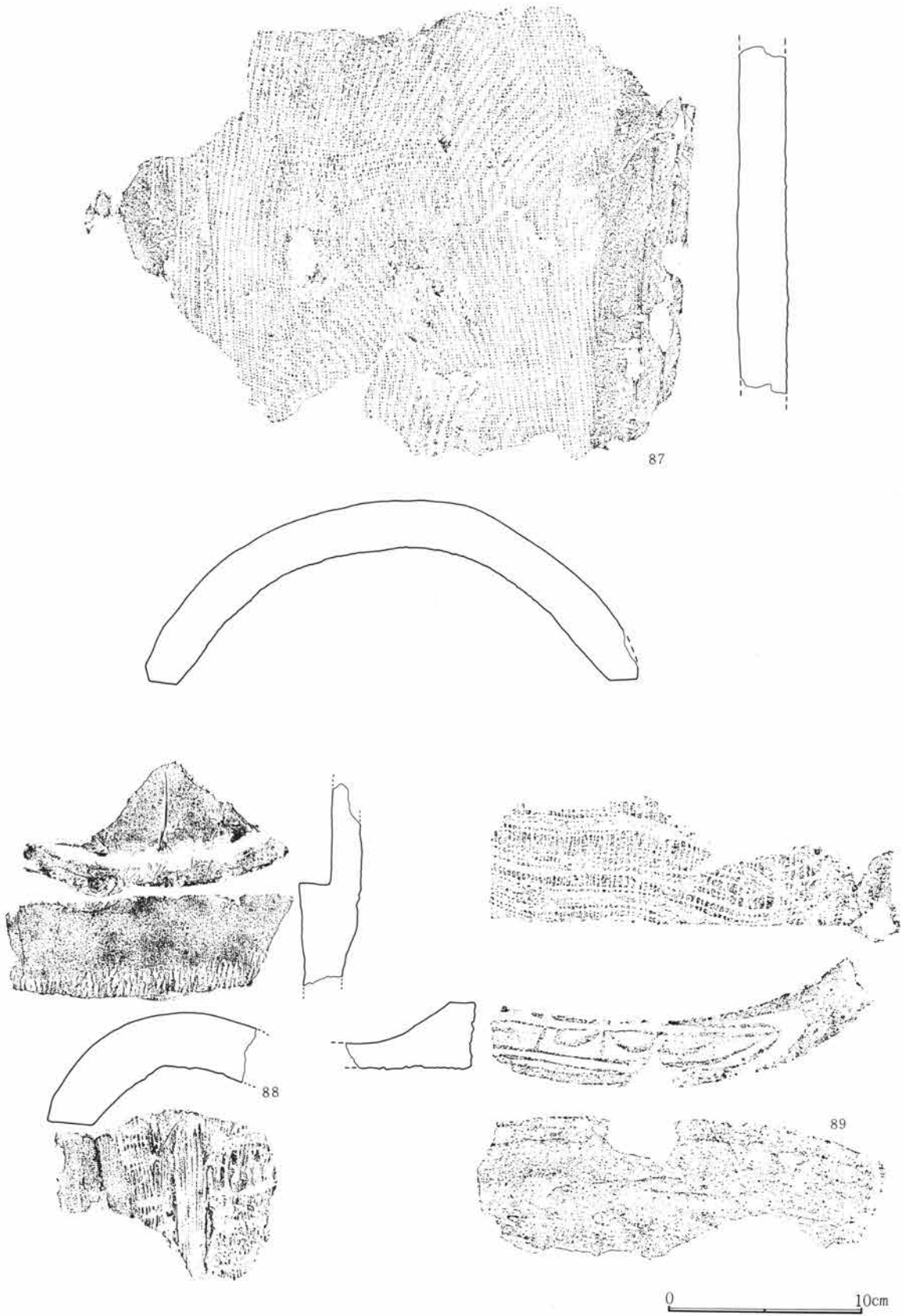


Fig. 516 L区第4台地出土遺物(5)

第2章 遺構と遺物

M・N区第2台地出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
510-1 169-1	須恵器 椀	ほぼ完形	14.1×17.6×5.8	腰部張り気味。体部直線的に開く。口唇部丸い。付高台、断面矩形で畳付に弱い沈線。轆轤成形。	①良好 ②暗灰黄 ③やや密・砂混る
510-2 169-2	須恵器 椀	台部欠損	18.6×-×(5.3)	腰部やや丸味をもち体部浅く外反して開く。口唇部は丸まる。轆轤成形。回転糸切り。高台欠損。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや粗
510-3 169-3	須恵片 転用硯	片	幅11.9厚1.1 長(10.5)	甕片転用。側面を研磨成形。内外面ともに使用か。外面寛削り及び内面に摩耗した青海波痕。	①良好 ②灰 ③やや粗・夾雑物混る

M区第3台地出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
511-1 169-1	土師器 杯		14.8×-×(4.1)	体部半球状を呈すか？強く外屈する内斜口縁。口唇部は尖る。口縁部横撫で。体部寛削り。	①良好 ②橙 ③やや密・小石混る
511-2 169-2	土師器 杯	1/2	14.6×-×(4.6)	底部深めの丸底。受け部で屈し口縁部外反して開く。口縁部横撫で。底部内外面磨滅しており調整不明。	①良好 ②浅黄橙 ③やや粗・細砂混る
511-3 169-3	緑釉陶器 椀	底部	-×7.0×(1.8)	付高台、やや高く断面矩形。底部糸切り後撫で調整。	①良好 ②浅黄 ③やや密
511-4 169-4	須恵器 椀		12.4×7.2×4.7	腰部張り気味で体部丸い。口縁部細り緩く外反。付高台、ハの字状に開く。轆轤成形。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや密・赤色粒混
511-5 169-5	須恵器 椀	3/4	-×6.8×(3.2)	体部内湾気味。付高台、作り雑。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②鈍い黄橙 ③やや密
511-6 169-6	灰釉陶器 瓶	底部	-×19.2×(8.0)	胴部直線的に外傾。付高台、低く幅広。胴部回転寛削り。	①良好 ②灰白 ③密
511-7 169-7	瓦 平瓦		厚1.7	凹面布目。凸面撫で調整。	①良好 ②灰 ③やや密

L区第4台地出土遺物観察表(1)

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
512-1 170-1	土師器 壺	口縁部	9.7×-×(3.4)	口縁部直線的に開き中位で段をなす。上位はやや内湾して立つ。内外面磨き。	①良好 ②橙 ③やや密
512-2 170-2	土師器 壺	1/2	-×-×(6.9) 最大径10.8	胴部丸く張りやや扁平な球胴を呈す。底部寛削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密・砂混る
512-3 170-3	土師器 杯		11.0×-×(3.6)	底部やや浅い。受け部で強く屈し口縁部外反して開く。口縁部横撫で。全体に磨滅。	①良好 ②橙 ③細砂混る
512-4 170-4	土師器 杯		13.0×-×(3.4)	底部丸底気味。口縁部やや外反し口唇部丸まる。口縁部横撫で。底部寛削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗
512-5 170-5	土師器 杯		13.0×-×(2.9)	底部やや扁平。口縁部外傾。口縁部横撫で。底部寛削り。内面磨き。	①良好 ②橙 ③やや密・赤色粒混る
512-6 170-6	土師器 杯	口縁部 1/2	12.7×10.4× (3.0)	底部扁平。口縁部薄く直立。口縁部撫で。腰部から底部寛削り。	①良好 ②橙 ③やや密
512-7 170-7	土師器 杯	完形	15.1×-×(5.5)	深い丸底。口縁部内傾。口縁部・下横撫で。底部寛削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗・砂・小石混る
512-8 170-8	須恵器 杯	完形	14.2×8.2×(4.2)	体部内湾気味に外傾。器肉厚い。轆轤成形。右回転糸切り後体部下位から底部周辺回転寛削り。	①良好 ②灰白 ③やや密・粗砂混る
512-9 170-9	須恵器 杯	1/4	8.8×5.0×1.8	器肉薄い。体部から口縁部内湾して開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②褐灰 ③やや密
512-10 170-10	須恵器 杯	1/4	9.4×5.0×1.9	器肉薄い。体部から口縁部は僅かに外反して開く。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化・良好 ②鈍い橙 ③砂混る
512-11 170-11	須恵器 杯	3/4	8.3×4.2×2.7	腰部丸味をもち、口縁部僅かに外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや粗
512-12 170-12	須恵器 杯	3/4	9.0×5.5×1.8	体部から口縁部内湾気味に開く。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや密
512-13 170-13	須恵器 杯	1/4	10.3×5.4×(1.6)	やや器肉薄い。体部浅く口縁部僅かに外反。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 ②橙 ③細砂混る

L 12号溝出土遺物観察表(2)

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
512-14 170-14	須恵器 杯	1/4	10.2×6.3×3.4	底部肥厚。体部直線的に開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②鈍い黄橙 ③密
512-15 170-15	須恵器 杯	1/4	9.9×5.8×2.7	腰部に丸味。体部内湾して開く。器肉厚い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②淡黄 ③やや粗・細砂混る
512-16 170-16	須恵器 杯	口縁部 1/4	11.3×4.8×(3.5)	腰部丸味をもち口縁部丸く肥厚し外反。轆轤成形。内面吸炭処理か。	①良好 ②灰黄褐 ③やや粗・小石混る
512-17 170-17	須恵器 杯	1/4	13.0×6.8×3.9	体部内湾気味に開き口縁部僅かに外反する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
512-18 170-18	須恵器 杯	完形	11.5×5.0×3.5	体部丸味をもち口縁部やや肥厚し緩く外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②橙 ③やや密
512-19 170-19	須恵器 杯	完形	11.1×5.8×4.3	底部厚く突出気味。体部丸く口縁部緩く外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 ②鈍い黄橙 ③やや粗
512-20 170-20	須恵器 杯	1/4	11.0×6.2×3.3	体部僅かに丸味をもつ。口縁部緩く外反し口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
512-21 170-21	須恵器 椀	口縁部 1/4	15.0×7.8×5.0	腰部張り体部直線的に開く。付高台、端部丸くハの字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
512-22 170-22	須恵器 椀		13.8×7.6×6.1	腰部に張りをもち体部直線的に外傾。口唇部丸い。付高台高くハの字に開く。轆轤成形。	①酸化気味 ②橙 ③やや密
512-23 170-23	須恵器 椀	完形	8.5×5.1×4.6	腰部強く張り体部やや内湾気味に立ち上る。口唇部丸い。付高台、高めでハの字状に開く。端部丸い。轆轤成形。	①酸化 ②鈍い褐 ③やや密・小石混る
512-24 170-24	内黒土器 椀	口縁部 1/4	12.0×-×(4.5)	腰部丸く張り口縁部小さく外反。口唇部丸い。内面黒色処理後磨き。轆轤成形。付高台欠損。	①良好 ②黒褐 ③やや粗・砂混る
512-25 170-25	内黒土器 椀	底部	-×7.0×(3.1)	付高台、短くハの字状に開く。轆轤成形。内面黒色処理、磨き。	①良好 ②橙 ③やや密
512-26 170-26	灰釉陶器 皿	1/4	12.6×6.0×2.8	体部内湾し口縁部僅かに外反して開き口唇部丸い。体部中位回転斲削り。付高台、低く断面矩形。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③密
512-27 171-27	灰釉陶器 皿	1/4	12.4×5.8×2.3	体部内湾気味に大きく開き口縁部緩く外反。付高台。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③密
512-28 171-28	灰釉陶器 皿	1/4	12.0×-×(3.1)	体部内湾し口唇部小さく外屈。	①良好 ②灰白 ③密
512-29 171-29	灰釉陶器 椀	1/4	12.6×-×(2.2)	体部直線的。口縁部僅かに外反。	①良好 ②灰白 ③密
512-30 171-30	灰釉陶器 輪花皿	1/4	14.4×-×(1.5)	体部内湾気味で口唇部小さく外屈・輪花数不明。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③密
512-31 171-31	灰釉陶器 椀	1/4	14.4×-×(2.2)	体部直線的。	①良好 ②灰白 ③密
512-32 171-32	灰釉陶器 椀	底部	13.2×-×(2.5)	体部内湾し口縁部外反する。口唇部やや矩形。	①良好 ②灰白 ③密
512-33 171-33	灰釉陶器 椀		12.6×-×(3.7)	体部内湾し口縁部僅かに外反する。	①良好 ②灰白 ③密
512-34 171-34	灰釉陶器 椀	1/4	15.8×-×(3.0)	体部内湾して開く。体部下半回転斲削り。	①良好 ②灰白 ③密
513-35 171-35	灰釉陶器 椀	口縁部	17.4×-×3.5	体部内湾し口縁部僅かに外反して開く。体部下半回転斲削り。	①良好 ②灰白 ③密
513-36 171-36	灰釉陶器 椀	口縁部	16.0×-×(3.7)	器肉薄い。体部内湾気味に開く。内面口縁部に弱い凹線巡る。内外面施釉。	①良好 ②灰白 ③密
513-37 171-37	灰釉陶器 椀	口縁部	19.4×-×(2.4)	体部直線的。口縁部僅かに外反。	①良好 ②灰白 ③密
513-38 171-38	灰釉陶器 椀	口縁部 1/4	13.7×-×(5.0)	体部丸味をもち内湾気味に立ち上がる。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰黄 ③緻密
513-39 171-39	灰釉陶器 皿	底部	-×7.4×(1.8)	見込部やや凹む。付高台、低く断面矩形。	①良好 ②灰白 ③密
513-40 171-40	灰釉陶器 皿	底部	-×9.0×(2.4)	見込部凹む。体部中位まで回転斲削り。腰部撫で。付高台内湾気味。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③密
513-41 171-41	灰釉陶器 椀	底部	-×8.6×(1.9)	付高台、内湾気味に開く。	①良好 ②灰白 ③密
513-42 171-42	灰釉陶器 椀	底部	-×(6.8)×(2.2)	腰部に丸味。付高台、低く断面丸い。	①良好 ②灰白 ③密

第2章 遺構と遺物

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
513-43 171-43	灰釉陶器 椀	台部 $\frac{2}{3}$	- \times 8.2 \times (2.5)	台部ハの字状に開く。付高台。	①良好 ②鈍い黄橙 ③緻密
513-44 171-44	灰釉陶器 椀	底部	- \times 7.0 \times (3.5)	腰部丸い。付高台、直立し先端部細る。	①良好 ②灰白 ③密
513-45 171-45	灰釉陶器 壺	腰部破片	- \times 12.1 \times (5.6)	腰部直線的に開く。付高台、低く断面矩形。腰部回転斲削り。	①良好 ②灰白 ③密
513-46 171-46	灰釉陶器 花瓶	底部	- \times - \times (4.2) 底部径5.5	胴部直線的。腰部水平になり台部へ続く。器肉厚い。外面施釉。	①良好 ②灰白 ③密
513-47 171-47	緑釉陶器 椀	口縁部	12.0 \times - \times (3.1)	腰部丸く口唇部強く外反して開く。内面磨き。釉調暗緑色。	①良好 ②灰 ③密
513-48 171-48	緑釉陶器 椀	底・台 部破片	- \times 7.8 \times (2.2)	腰部に丸味。付高台、やや高く強く張る。内外面磨き。釉調暗緑灰色。	①良好 ②灰褐 ③密
513-49 171-49	青磁 椀?	小片		内面陰刻文(連弁か)。釉調灰緑色	①良好 ②灰 ③密
513-50 171-50	陶器 小杯		7.6 \times 4 \times 2.8	腰部外傾し体部は直立。外面に環状把手剥離痕。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②橙 ③やや密
513-51 171-51	土師器 甕	口縁部 $\frac{1}{2}$	21.2 \times - \times (7.2)	口縁部肥厚しやや内傾して立ち上半は外傾。外面肩部斜位斲削り。内面肩部斜位・口縁部横位磨で。	①良好 ②橙 ③やや密
513-52 171-52	土師器 甕	上半部 破片	19.8 \times - \times (7.1)	胴部上半張りなく口縁部外反して大きく開く。口縁部横撫で、胴部斜位斲削り。内面撫で。	①良好 ②橙 ③細砂混る
513-53 171-53	土師器 甕	口縁部 $\frac{1}{2}$	19.6 \times - \times (7.3)	口縁部肥厚し外傾して開く胴部張りなし。口縁部横撫で。胴部横斲削り。	①やや軟 ②橙 ③粗・黒・白色粒混
513-54 171-54	土師器 甕	上半欠 損	- \times 7.4 \times (17.0)	胴部丸く球形を呈す。胴部外面刷毛目状工具による撫で。内面撫で。下方に斲削り。単孔。	①良好 ②浅黄橙 ③やや粗
513-55 171-55	土師器 鉢		25.8 \times 11.8 \times 10.6	底部突出。体部内湾気味に大きく外傾。口唇部断面矩形で端部外斜。体部紐造り痕。指頭痕。内面撫で。底部砂底。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密・粗砂混る
513-56 171-56	須恵器 甕	上半	23.6 \times - \times (13.5)	肩部丸く強く張る。頸部直線的に外傾し口縁部強く外反。口唇部尖りやや内傾して立つ。内面指頭痕。	①良好 ②灰 ③やや密
514-57 172-57	土師器 甕	上半	29.6 \times - \times (11.7)	胴部やや張り口縁部短く外屈。口縁部横撫で。胴部上位撫で。中に縦位斲削り。内面撫で。	①良 ②橙 ③やや粗・砂混る
514-58 172-58	土鍋	口縁部	32.2 \times 30.0 \times 2.4	器高低い。底部薄く体部から口縁部肥厚する。	①良好 ②外は黒褐内 は明赤褐 ③密
514-59 172-59	須恵器 瓶転用硯	底部 $\frac{1}{2}$	- \times 15.2 \times (2.9)	腰部鋭く突出する。付高台、大きく開く。轆轤成形。底部摩滅著しく光沢あり。	①良好 ②灰 ③やや密
514-60 172-60	須恵器 風字硯	$\frac{2}{3}$		硯面著しく摩滅し光沢あり。硯尻部は横に堤を設け区画する。裏面硯尻部に脚剥離痕。2足と思われる。	①良好 ②灰 ③やや密

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	備考	Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	備考
514-61 172-61	石製品 白玉	完形	径1.6厚1.0 孔径0.2	滑石	514-71 172-71	銅製品 鈴	ほぼ完 形	径3金厚さ0.1	中央接合部より剥 離し半円球に重な る。
514-62 172-62	石製品 白玉	完形	径1.6厚0.3 孔径0.3	滑石	514-72 172-72	石製品 丸柄	完形	3.6 \times 2.3 \times 0.6	表面光沢。裏2ヶ 所に留孔。石英質 結晶片岩
514-63 172-63	石製品 白玉	完形	径1.4厚0.7 孔径0.4	滑石	514-73 172-73	土製品 人形		3 \times 3	大黒
514-64 172-64	石製品 白玉	$\frac{1}{2}$	径1.4厚(0.2) 孔径0.3	滑石	514-74 172-74	土師器 脚部 転用羽口	- \times - \times (7.8)		高杯脚部を羽口に 転用。先端部溶解。
514-65 172-65	石製品 白玉	完形	径1.5厚0.5 孔径0.3	滑石	514-75 172-75	土製品 羽口 欠損	先端部	長6.9孔径2.4	基部斲削り。胎土 やや粗い。
514-66 172-66	石製品 白玉	完形	径1.3厚0.4 孔径0.2	滑石	515-76 172-76	鉄器 不明			鉄鏃? 槍鉋?
514-67 172-67	石製品 白玉	完形	径1.8 孔径0.4	滑石	515-77 172-77	鉄器 欠損	茎端部	長(8)幅0.5	端刃鑿箭式か刃部 茎部の区別不明
514-68 172-68	石製品 紡錘車	完形	上径2.4下径4.2 厚さ2.2孔径0.7	やや丈高な台形を 呈す。細い擦痕調 整。滑石	515-78 172-78	鉄器 角釘 欠損	端部欠 損	(10.5) \times (0.8 \cdot 0.5)	頭部形状角頭式 か?
514-69 172-69	耳環	完形	径1.8	銅製。M・N区第 2台地下より出土	515-79 172-79	鉄器 角釘 欠損	端部欠 損	(6.5) \times 0.8	頭部形状折頭式
514-70 172-70	金環	完形	径2.1	銅地鍍金製	515-80 172-80	鉄器 角釘 欠損	端部欠 損	(4.5) \times 0.6	頭部形状折頭式

Fig. No. PL. No.	器 種 形	残存量	計測値	備考	Fig. No. PL. No.	器 種 形	残存量	計測値	備考
515-81 172-81	鉄器 角釘	端部欠損	(3.8)×0.7	頭部形状折頭式	515-86 173-86	瓦 平瓦		厚2.8長42.4	凹面布目。凸面縄目叩酸化焙。軟質
515-82 172-82	鉄器 角釘	端部欠損	(6.7)×0.4	頭部形状折頭式	516-87 173-87	瓦 丸瓦		厚2.4幅25	凹面布目。側面篋。灰白。胎土粗縞状
515-83 172-83	鉄器 角釘	頭部欠損	(5.5)×0.7	頭部形状不明	516-88 172-88	瓦 軒丸瓦		厚2.8	有段式。凹面布目。凸面縄目叩き。胎土密
515-84 172-84	鉄器 角釘?	身部	(7.5)×0.6	頭部形状不明	516-89 173-89	瓦 軒平瓦		顎部厚3.2	有頸綾杉文。凹面布目胎土粗い。
515-85 172-85	鉄器 釘	頭部欠損	(5.5)×(0.7+0.4)	頭部形状不明					

10. 掘立柱建物跡

M1号掘立柱建物跡 (Fig. 52・PL. 144)

M区第3台地の東端に位置し、74~76M25~27の範囲にある。南西部でM18号住居跡と重複しており、さらに南半は凝灰岩質材の採掘坑群が及んでおり、両者との新旧は不明である。

平面形は東西に棟方向をもち、規模は2間×2間の総柱である。棟方向はN-80°-Eを示し、棟列は北側3.9m・中央4.1m・南側4.05m、梁列は東側3.6m・中央3.5m・西側3.5mを測る。柱間寸法は桁行P₁・P₂は1.8m、P₂・P₃は2.1m、P₄・P₅は2.0m、P₅・P₆は2.1m、P₇・P₈は1.95m、P₈・P₉は2.1mを測る。梁行P₁・P₄、P₄・P₇は1.8mで等間。P₂・P₅は1.95m、P₅・P₈は1.55m、P₅・P₆は1.8m、P₆・P₉は1.7mを測る。柱穴は硬い凝灰岩質層を穿ち、全て小径であり掘形即ち柱痕と考えられる。柱穴上径はおよそ20cm、下径は10cmを測り略円形であるが、P₁のみ方形を呈する。なお、P₂・P₄は掘形柱底が外方へ傾斜をもち柱材が僅かに内傾する様相がある。各柱穴の深さは重複や検出面の違いによって一定ではなく、深さ約70cmから痕跡程度の遺存のものもある。統一的指標での計測値が得られないため断面図に示した標高値121.10mを0と設定、各柱穴の深さを示す。P₁は40cm、P₂は60cm、P₃は57cm、P₄は50cm、P₅は70cm、P₆は80cm、P₇は40cm、P₈・P₉は55cmとなった。このような掘形底面の標高差が生じる理由は地形を考慮したことが考えられる。柱には規格材を使用されたと想定すれば容易に理解される。P₅・P₆の中央部西寄りが高く、P₁・P₄・P₇の東側(台地縁辺部)は最も低い地勢であったことが窺われる。

P₄・P₁・P₂・P₃を結ぶ東から北辺にかけて、落ち込みないしは小規模な溝が巡る。この溝は梁行方向のP₂とP₅間にも見られP₈方向へ延びるがM18号住居跡・採掘跡との重複で検出されていない。梁行方向のPit間を結ぶ溝に約50cmの間隔をおいて平行走る溝が検出されているが、これもまた同様な状態である。当掘立柱建物跡の規模は現状で2間×2間の大きさであるが、P₁からP₃を結ぶ溝はP₃の西方へ続く様相が見られ、棟方向の規模に関しては確定できない。

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

ここに報告する遺構と遺物はG～K区に検出されたもので、掘立柱建物跡・井戸跡・墓跡・土坑・溝などが主である。当該区で検出された竪穴住居跡やI・K区で検出された鍛冶工房跡・H区発見の堀・塀囲いの特殊掘立柱建物跡などは既刊の『鳥羽遺跡』G・H・I区1986、『鳥羽遺跡』I・J・K区1988に掲載してある。

第1節 G区の遺構と遺物

G区は鳥羽遺跡のほぼ中央に位置し、前橋市元総社町に所属する。当区のほぼ中央部を横断して東西走る県道前橋一安中線が通る。県道を挟んで南側にもG区域が広がっているが、調査年次にかなりの隔りがあるためその部分については別途報告する予定である。

ここに報告する県道北側域の調査は昭和56年度と58年度の2期に渡って実施されたものであり、調査面積は約3,050㎡である。

検出された遺構は奈良時代後半から平安時代にかけての竪穴住居跡96軒をはじめ、掘立柱建物跡6棟・井戸跡7基・溝2条・さく状遺構・土坑などである。竪穴住居跡については既刊の『鳥羽遺跡』G・H・I区1986を参照されたいが、鏡片・金銅製品・風字硯などがある。とくに鏡片は朝鮮半島産原料（馬淵久夫「鳥羽遺跡出土青銅器の鉛同位体比」・『鳥羽遺跡』I・J・K区1988）であることが注目される。

掘立柱建物跡は奈良時代に属すると考える4棟と中世以降が2棟、前者は桁行を東・西面、南・北面の2種があり後者は東・西面し柱穴は貧弱である。井戸跡はG5号井戸跡が大形で、多量の川原石や石臼・板碑片などが出土し人為的に閉塞されたと考えられる。墓跡は土葬・火葬の2形態の埋葬が見られるが火葬墓については、火葬墓か火葬場であるのか、さらには両者同一機能をもつものであるのか明らかではない。さく状遺構はさく方向の異なる2群があり、いずれも浅間山降下B軽石を埋土としている。

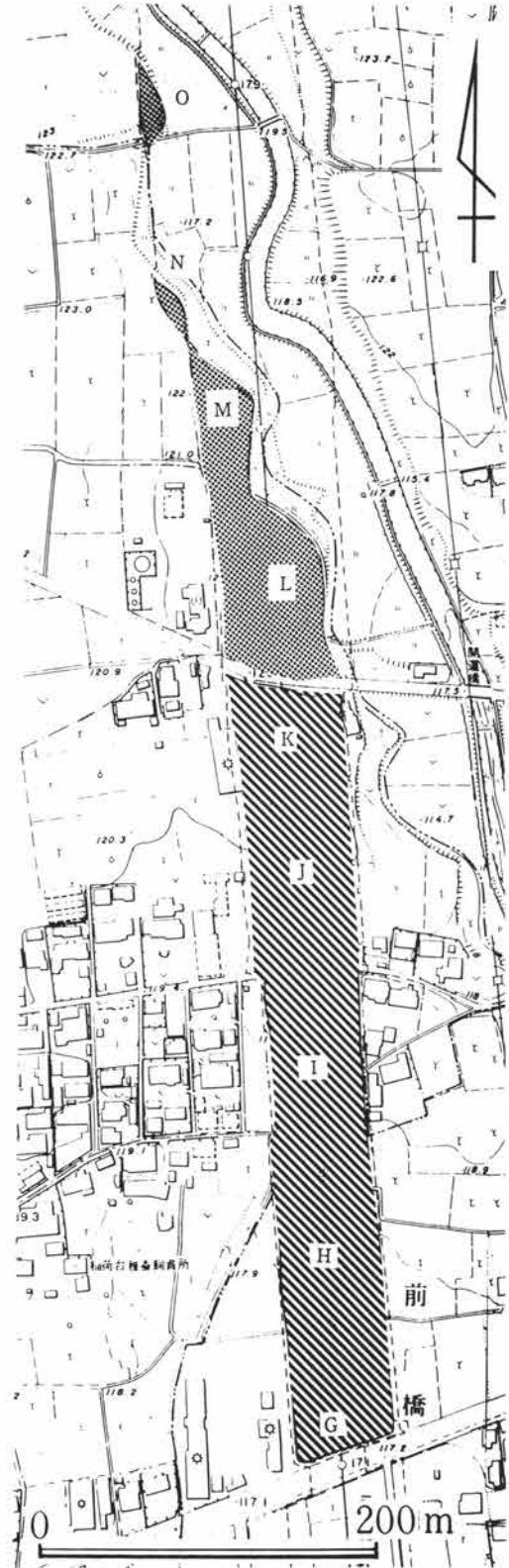


Fig. 517 G・H・I・J・K区全体図



Fig. 518 G区全体図

1. 掘立柱建物跡

G 1号掘立柱建物跡 (Fig. 519・PL. 146)

G区調査域南部に位置し、44~46G20~23の範囲にある。G 6号・G38号住居跡及びG 2号溝と重複しているが、いずれより古い時期の所産である。平面形は2間×3間で南北方向に棟行をもち、南辺桁行が短くやや歪んだ形状を呈す。また東辺棟行の柱穴2個が未検出であるが総柱建物跡と考えられる。規模は東辺5.7m・西辺5.7m・南辺3.9m・北辺4.5mを測る。南北棟方位はおよそN-11°-Wを示し、柱穴掘形は不整円形を呈する。出土遺物は検出されなかったが、埋土の状況から浅間山降下C軽石粒の混入が少なく締まりのある暗褐色土が主体で奈良時代後半から平安時代前半期に属すると考えられる。当跡の周辺には柱穴様のPitが多く認められたが当跡関連あるいは別棟を構成するような規則性は認められなかった。

G 2号掘立柱建物跡 (Fig. 520)

G区調査域南部中央に位置し、39~44G24~27の範囲にある。検出できなかった柱穴が多く掘立柱建物跡

としての性格づけは危ぶまれるが、ここでは当該遺構として扱う。G13号・G14号・G15号住居跡と重複し、これらより古い時期の所産である。東西方向に棟行をもつ建物跡と考えられるが、北辺・南辺とも中間柱穴は検出できなかった。これは住居跡との重複で消失した可能性がある。平面形は東辺桁行の柱間から想定すれば2間×4間で西側に庇をもつ。規模は棟行約6m、桁行東辺は2.7m・西辺は3mを測り、庇柱列は桁行西辺に対し若干歪むが3.5mである。棟行方位は約N-120°-Eを示す。棟行東辺の中間柱穴は2箇所検出され接近した位置にあり、西辺は中間柱穴が検出されない。庇柱穴は左右側柱穴は浅く、中間柱は支柱穴と同じく深い掘形をもつ。出土遺物は検出されず時期は明らかにできないが、柱穴埋土から奈良～平安期前半と考えられる。

G 3号掘立柱建物跡 (Fig. 521)

G区西寄りに位置し、49～51G26～29の範囲にある。G61号住居跡と重複するがこれより新しい時期の所産である。平面形は2間×2間の総柱建物跡で南北方向に棟行をもつが、東西桁行中間柱穴列はやや歪んでいる。また東西辺の桁行中間柱穴はいずれも柱穴線より外側に突出した位置に穿たれる。規模は棟行5.3m・桁行4mを測り、棟行中間柱穴間は6mである。棟行方位はN-1°-Wを示す。柱穴掘形は小径の円形を呈し、深さは40～50cmと安定しているが、突出する桁行中間柱穴はやや浅い掘形である。出土遺物は検出されず所属時期は想定できない。柱穴埋土上層は浅間山降下B軽石が混じる。

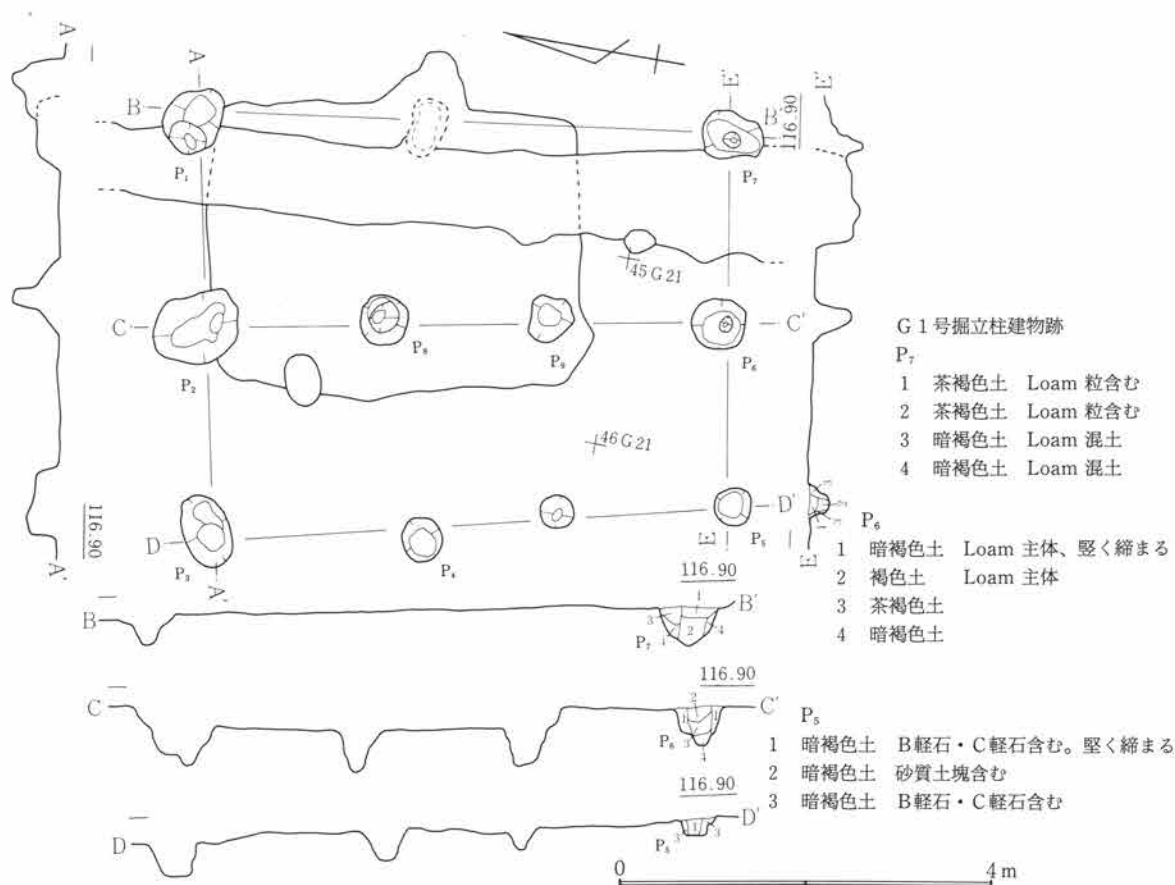


Fig. 519 G 1号掘立柱建物跡

G 5号掘立柱建物跡 (Fig. 522・PL. 146)

G区調査域の中央部やや南に位置し、42~44G28~30の範囲にある。G67号・G68号・G76号住居跡と重複し、いずれより古い時期の所産である。平面形は2間×2間で東西軸が僅かに長く、西辺中央穴は大きく内側に入り、南辺中央穴は僅かに外側へ出る。規模は南北辺3.8m、東辺3.7m、西辺3.6mを測り、柱間は1.7~2mである。東西軸方位N-84°-Eを示す。柱穴掘形は概略方形である。なお掘立中央部に位置するPitはG76号住居跡の貯蔵穴である。出土遺物は検出されないが、柱穴埋土より奈良時代に属すると考えられる。

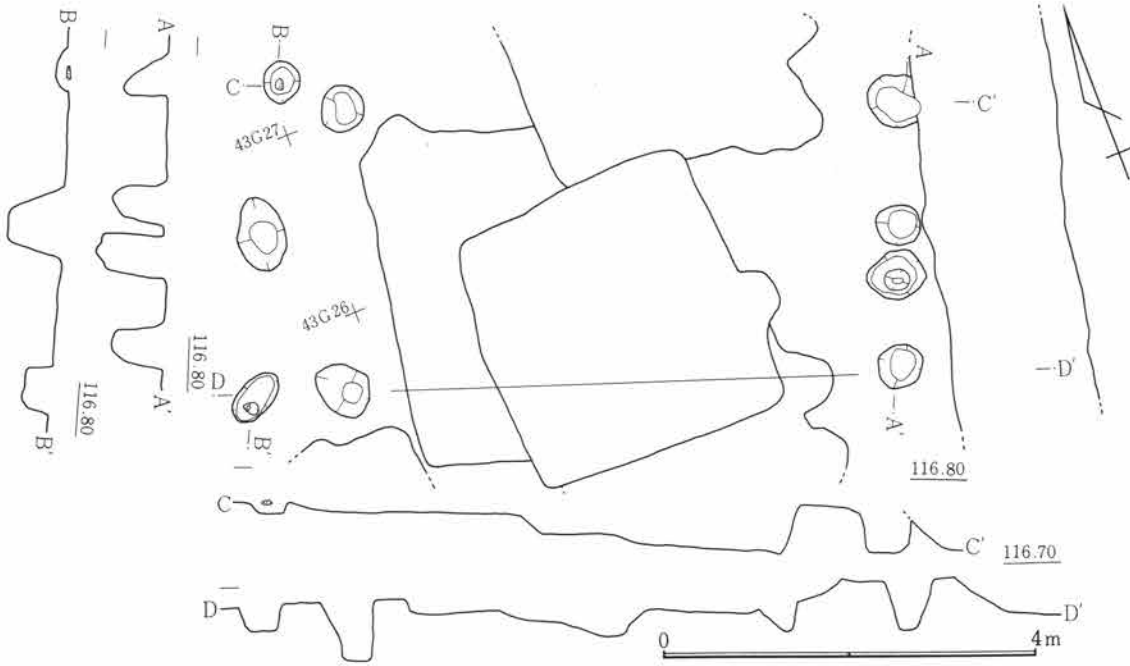


Fig. 520 G 2号掘立柱建物跡

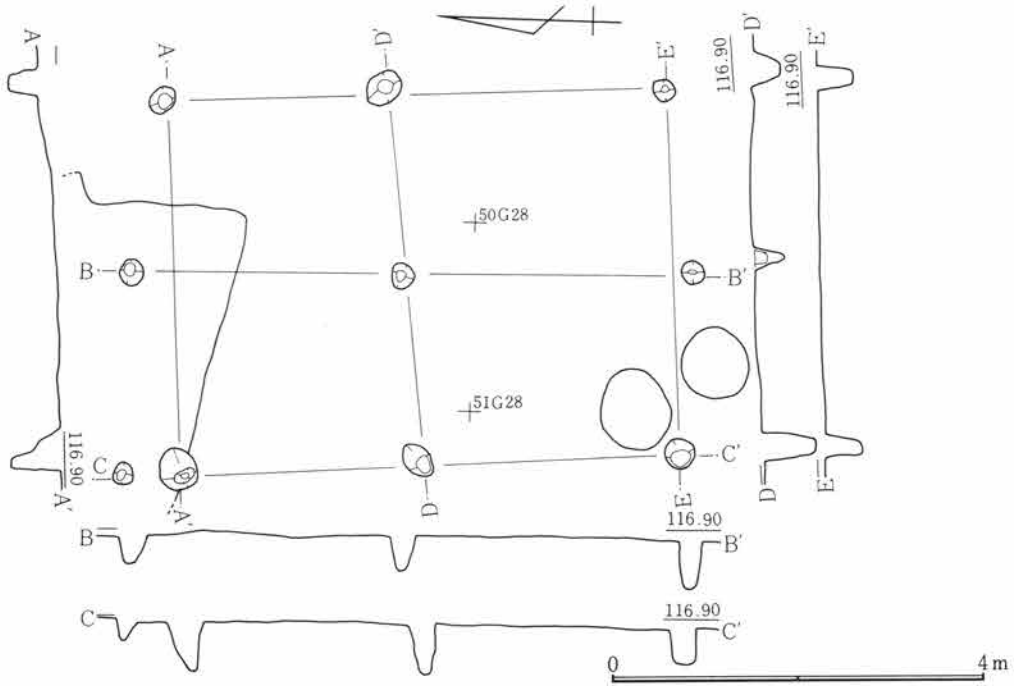
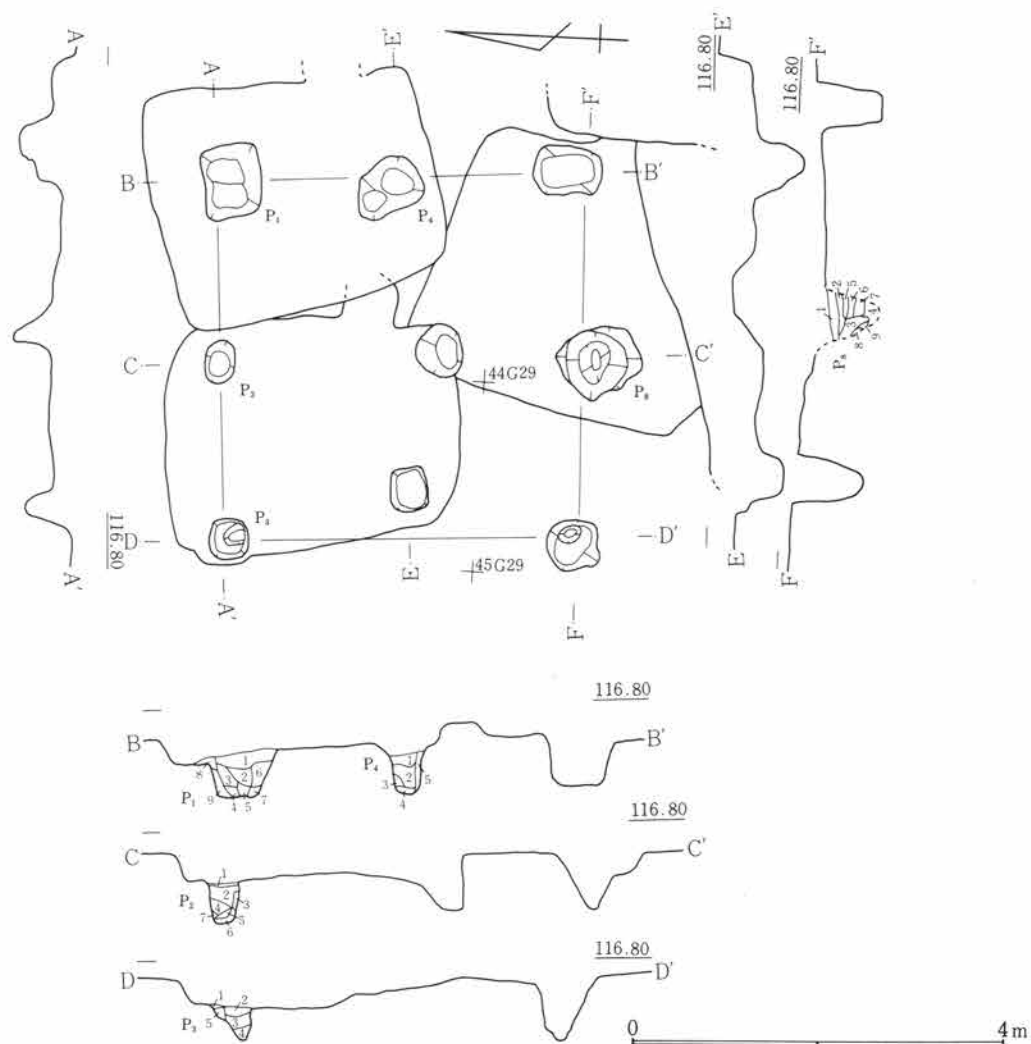


Fig. 521 G 3号掘立柱建物跡



Pit 1

1. 褐色土 C軽石含む。粗粒
2. 暗褐色土 C軽石・Loam粒含む。粗粒
3. 暗褐色土 Loam粒含む
4. 暗褐色土 粗粒
5. 暗褐色土 粗粒
6. 暗褐色土 Loam粒含む。粘性
7. 暗褐色土 大粒Loam粒含む
8. 暗褐色土 粘性
9. Silt塊層

Pit 3

1. Loam塊層
2. 暗褐色土 粘性
3. 暗褐色土 粘性弱い
4. 灰色土 粘性
5. 暗褐色土 粗粒

Pit 4

1. 暗褐色土 C軽石多く含む
2. 暗褐色土 Loam粒多く含む。粘性
3. Silt塊
4. 暗褐色土 粘性
5. 暗褐色土 粘性

Pit 2

1. Loam塊層
2. 暗褐色土 C軽石含む
3. 暗褐色土 粘性
4. 暗褐色土 粘性
5. 暗褐色土 Loam粒多い
6. 暗褐色土 粘性
7. 暗褐色土 Loam粒多い

Pit 8

1. 暗褐色土 C軽石多い。Loam塊含む
2. 暗褐色土 C軽石少量含む
3. 暗褐色土 粘性
4. 暗褐色土 Loam粒・塊含む 粘性
5. Loam塊層
6. 暗褐色土 Loam塊多い
7. Loam塊層
8. 暗褐色土 粘性
9. Loam塊層

Fig. 522 G 5号掘立柱建物跡

G 1 柱列 (Fig. 523・PL. 146)

G区調査域東に位置し、29～31G35～39の範囲にある。南北方向に配される2列は4つの柱穴からなり各々同一線上にあるが相互の柱穴位置からは建物跡を構成する様相は見られず、むしろ2条の柵列的な状況にある。東辺の柱列は5m、柱穴間は1.4～1.9m。西辺は5.2mで柱穴間は1.5～1.8mである。

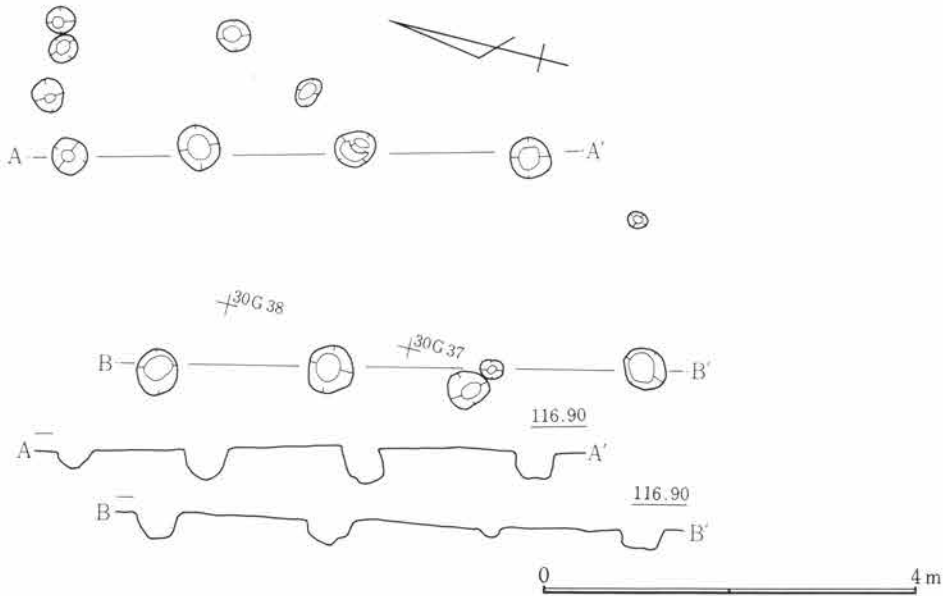


Fig. 523 G 1 号柱列跡

2. 井戸跡

G 1 号井戸 (Fig. 524・PL. 147)

G区調査域南西寄りに位置し、49・50G21・22の範囲にある。埋土は上層から下位に至るまでは浅間山降下B軽石を主体とした層が堆積するがB軽石降下による一次的埋没とは考えられない。平面形状は円形を呈し、上径1.25m・底径80cm・深さ2.2mを測る。断面は整った筒円筒型で底面も平坦である。壁面には崩落がなく帯水透水層は見られず、調査時においても湧水はなかった。井戸枠などは認められず素掘井戸と考えられる。また出土遺物は検出されない。

G 2 号井戸 (Fig. 524・PL. 147)

G区調査域南西寄りに位置し、46・47G21・22の範囲にある。北西方約4mにG1号井戸がまた東に接してG1号掘立柱建物跡がある。埋土は浅間山降下B軽石の混入が見られるものの1号井戸埋土ほど顕著ではない。平面形状は円形を呈し、上径1.53m・底径は70×90cmの楕円形・深さ3.08mを測る。断面は検出面より下方約1mの深さまで漏斗状に開口し、以下、径70cmの筒円筒型である。底面は平坦で、壁面には崩落が生じず帯水透水層は見られない。調査時も湧水が観察されていない。井戸枠などは認められず素掘井戸と考えられる。出土遺物は検出されない。

G 3 号井戸 (Fig. 525・PL. 147)

G区北西寄りに位置し、46・47G36の範囲にある。G2号溝と一部重複しておりこれより古い時期の所産

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

である。また周辺は大きな攪乱坑があり上面は削平されている。埋土は深さ約3.8mまで Loam 塊混じりの浅間山降下B軽石層が堆積する。平面形状は円形を呈し、上径1.1m・底径40cm・深さ4.1mを測る。断面は上部約60cmの深さまで僅かな漏斗状を呈し、以下、径70cmの筒円筒型である。帯水透水層は検出面より2.7m以下に2箇所認められ、底面に近い壁面の崩落が著しい。調査時の湧水水位は3.7m位までである。出土遺物は僅かな木片が検出された。

G 5号井戸 (Fig. 525、527～530・PL. 147、175～177)

G区調査域南東部に位置し、32・33G26・27の範囲にある。G36号・G64号・G83号住居跡と重複し、いずれより新しい時期の所産である。G区検出の井戸では上面径が最も大型である。井戸内には上面より底面に至るまで大は径70～80cm・小は砂利大の川原石で充填され、人為的な埋め戻しが行われたと考えられる。この大小の石に混り多量の土器類・石臼・板碑片なども検出されている。平面形状は円形を呈し、上面径3.3×3.6m・底径1m・深さ3.9mを測る。断面は上端部が大きく開く漏斗状を呈し以下径75cmの筒円筒型である。帯水透水層は検出面より2.4m以下に見られ壁面の崩落が著しい。調査時の湧水水位は2.75m位までであった。出土遺物には須恵器・内耳鍋・播鉢・石臼・板碑などがある。

G 6号井戸 (Fig. 525、531、532・PL. 147、177、178)

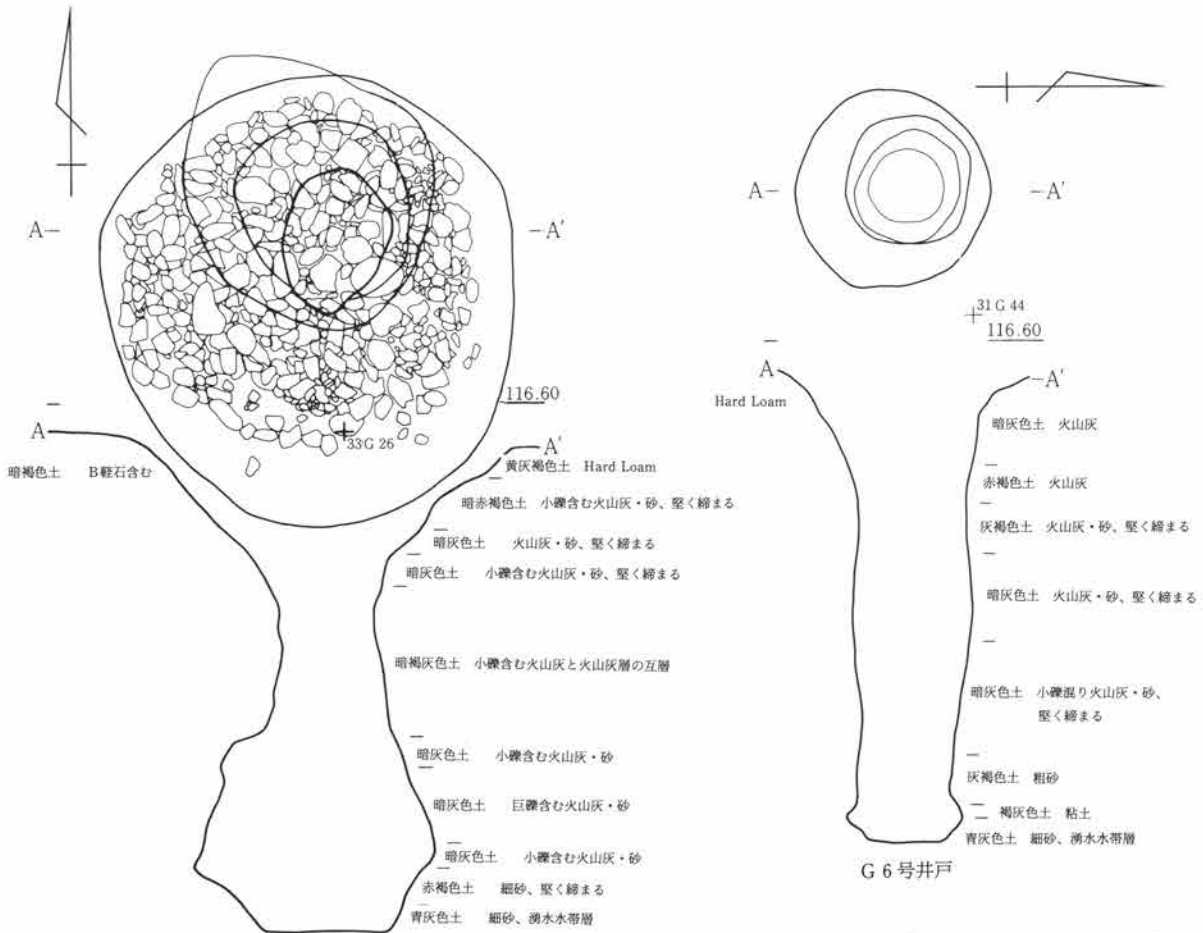
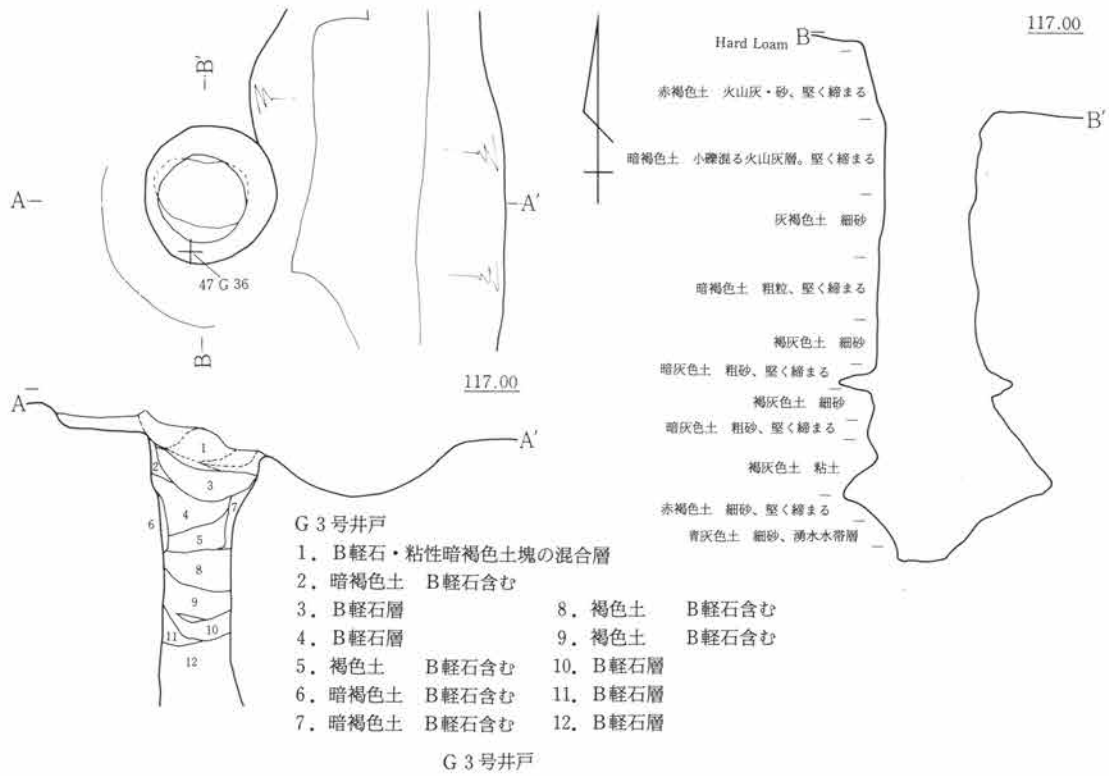
G区北東部に位置し、30・31G44の範囲にある。G1号溝と重複するが、これより古い時期の所産である。埋土は約2mまで10～20cm大の礫で埋まり、以下浅間山降下B軽石を含む砂質暗灰色の泥土である。平面形状は円形を呈し、上面径1.07m・底径60cm・深さ3.7mを測る。断面は上端部が僅かに開くが径90cmの筒円筒型を呈し底面は平坦である。壁面の崩落は認められず底面近くで小さく湧水による崩落がある。調査時の湧水は-2.55m位である。出土遺物は茶臼の他、内耳鍋が多く検出された。

G 7号井戸 (Fig. 526、533・PL. 147、178)

G区北東部に位置し、33・34G43・44の範囲にある。G1号溝と重複するが、これより古い時期の所産である。同じくG1号溝と重複するG6号井戸は東側2mの位置にある。埋土は-1.2m程度までG6号井戸と同じく10～20cm大の礫で埋まり、以下浅間山降下B軽石混じりの砂質暗灰色泥土である。平面形状は1.95×2.3mの楕円形を呈し、底径約60cm・深さ3.8mを測る。断面は上位が広く漏斗状に開き、下位は径80cmの筒円筒型を呈す。壁面は良好に残り、湧水による崩落は底面近く-3.3m位に認められた。調査時の湧水は-2.25m位である。出土遺物は軟質香炉などがある。



第1節 G区の遺構と遺物



G 5号井戸 Fig. 525 G区井戸 (G 3号・G 5号・G 6号) 0 2m

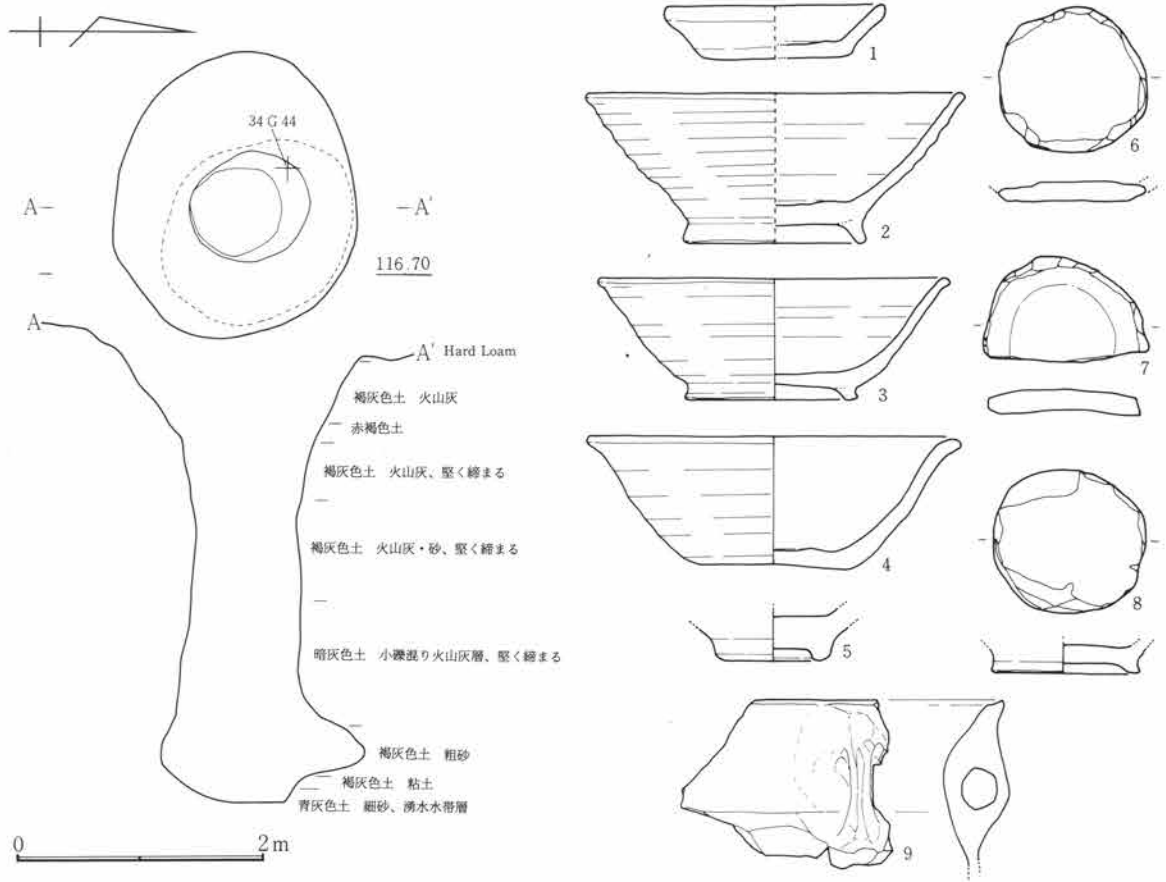


Fig. 526 G 7号井戸

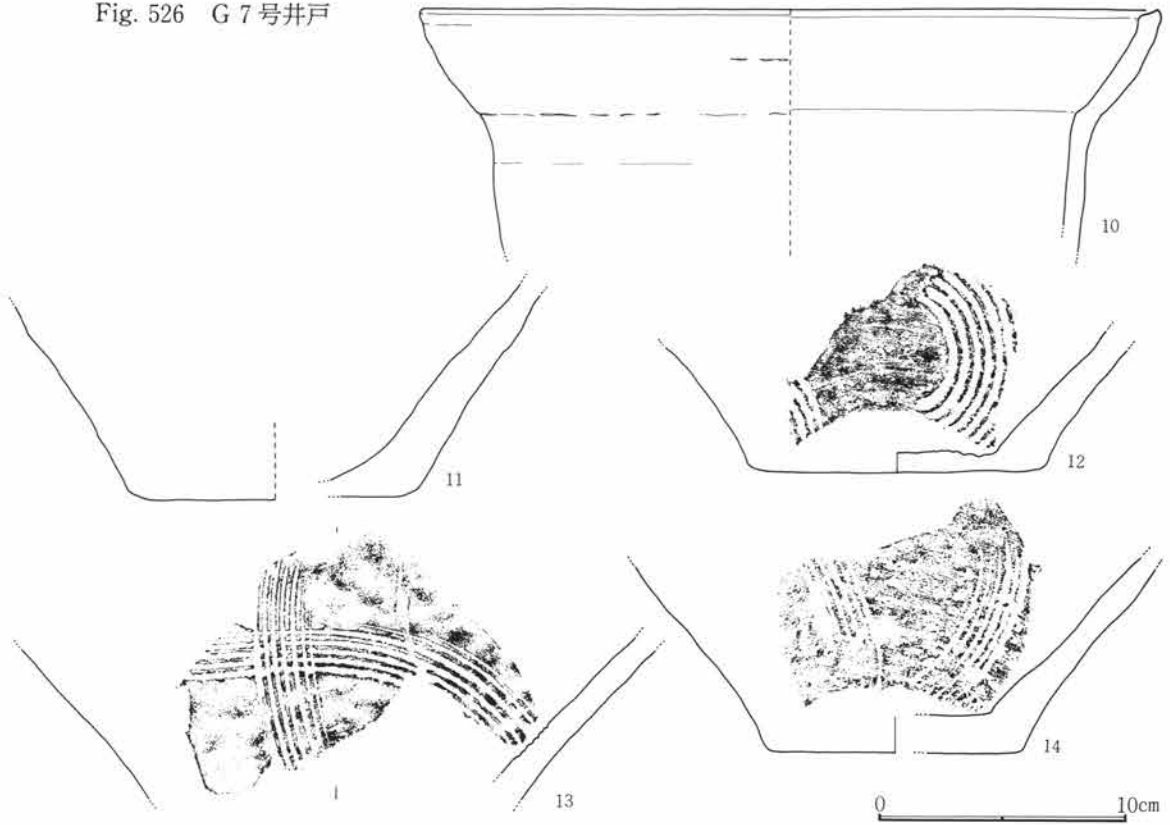


Fig. 527 G 5号井戸出土遺物(1)

第1節 G区の遺構と遺物

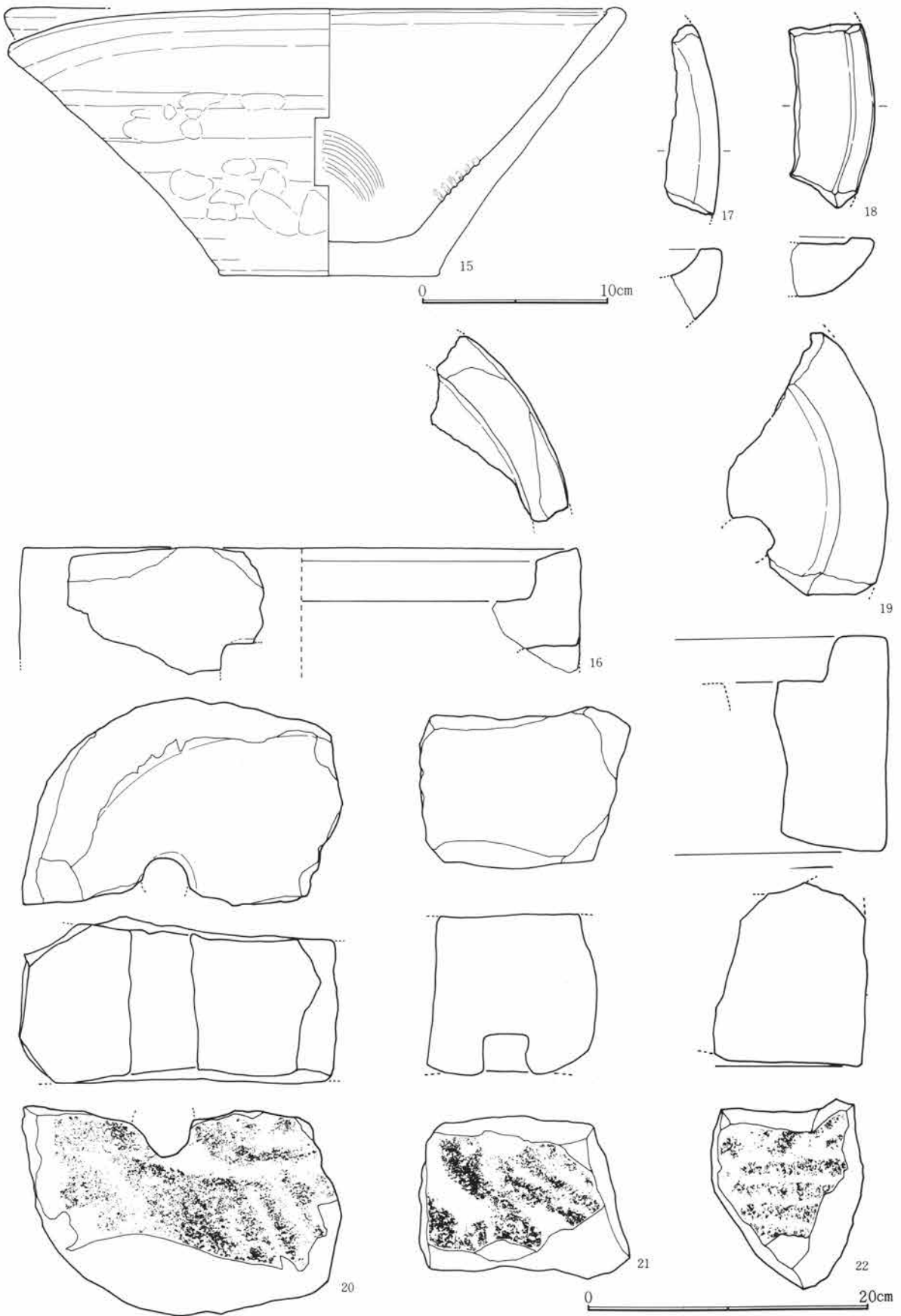


Fig. 528 G 5号井戸出土遺物(2)

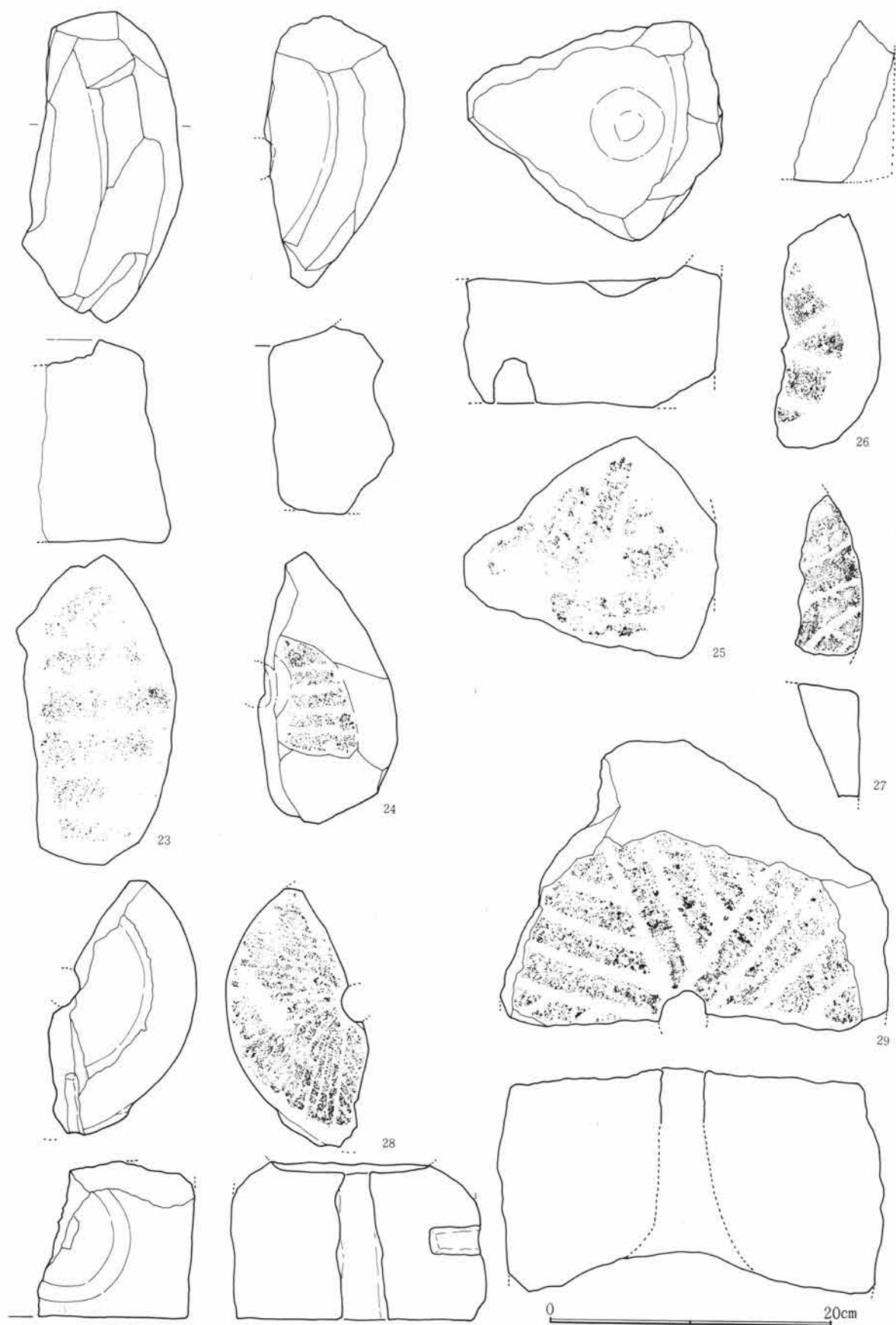


Fig. 529 G 5号井戸出土遺物(3)

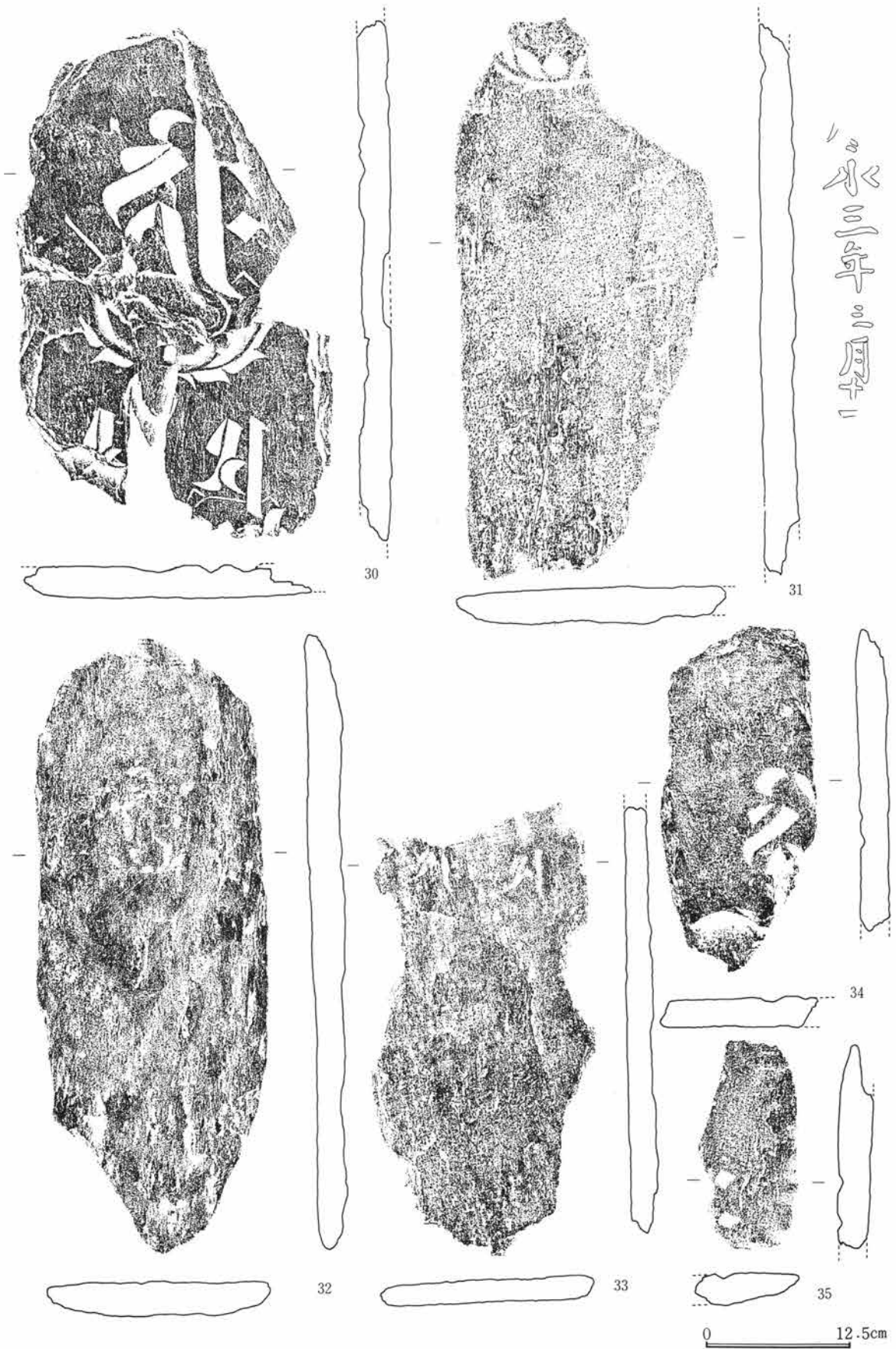


Fig. 530 G 5号井戸出土遺物(4)

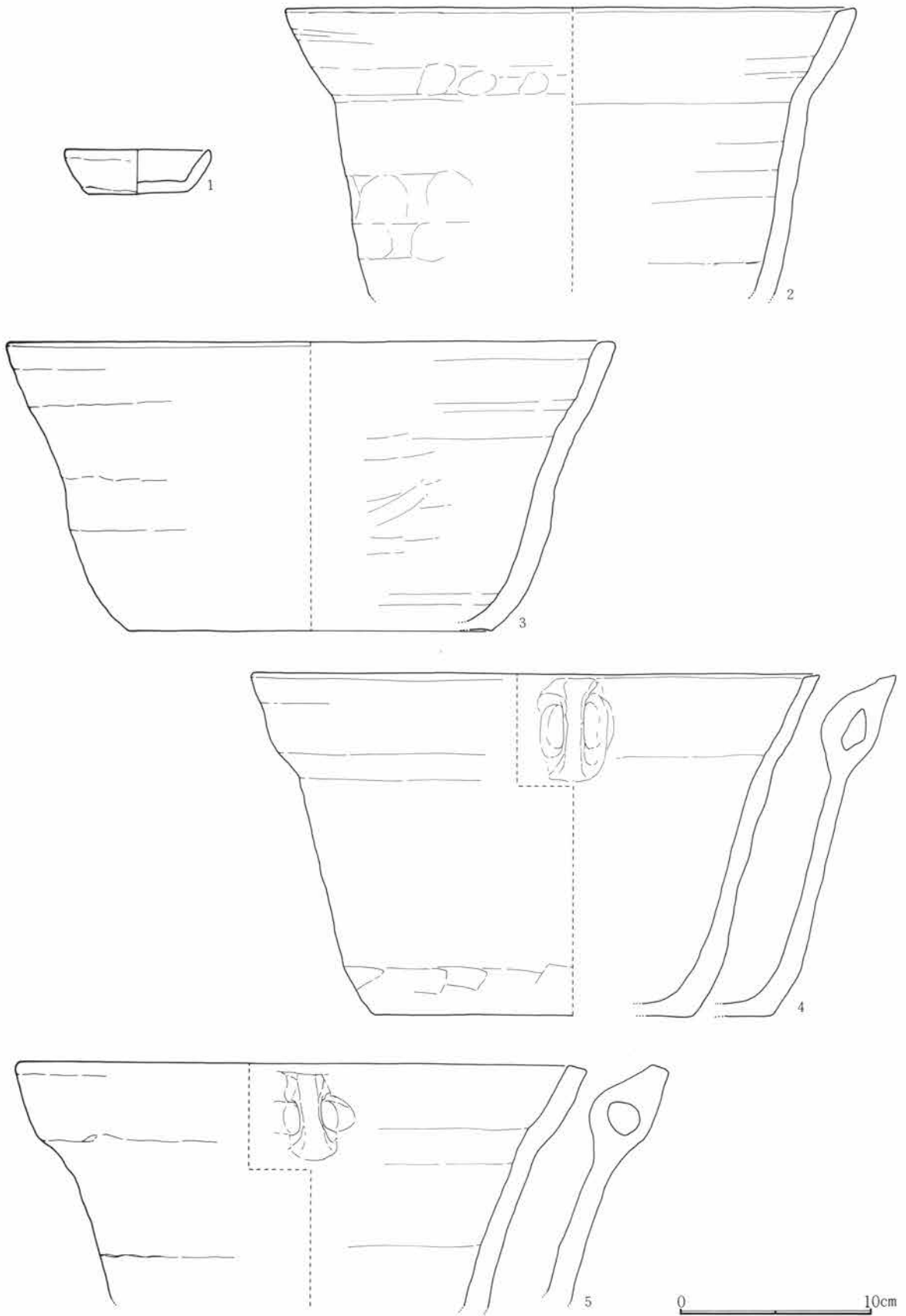


Fig. 531 G 6号井戸出土遺物(1)

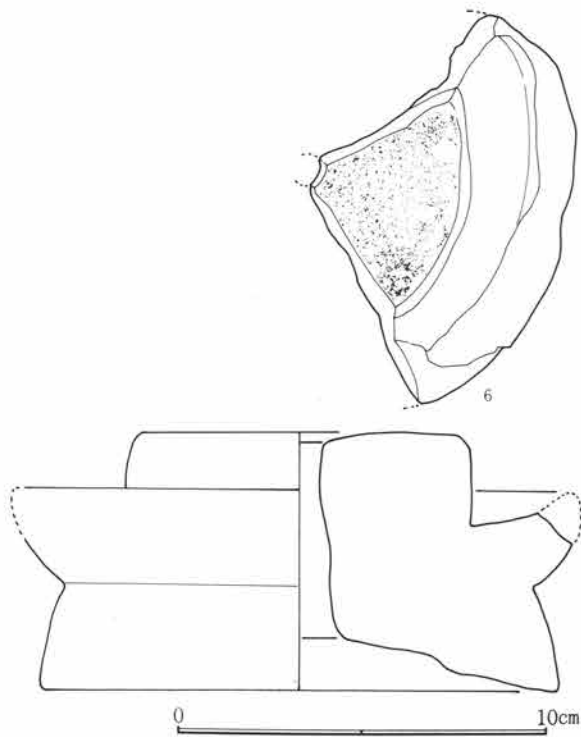


Fig. 532 G 6号井戸出土遺物(2)

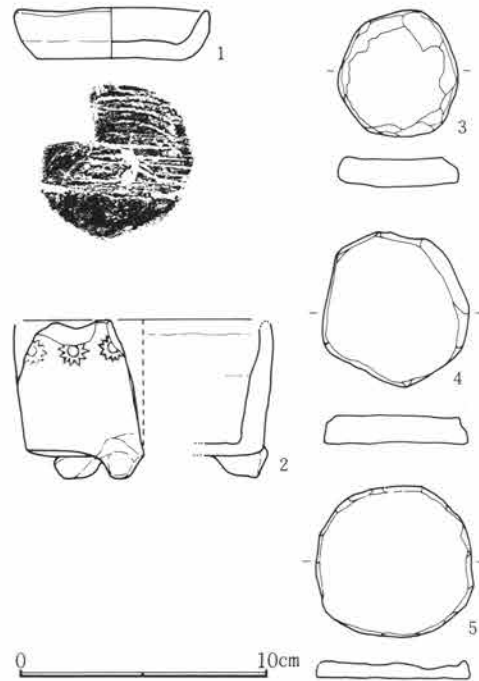


Fig. 533 G 7号井戸出土遺物

G 5号井戸出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
527-1 175-1	土器 杯	¼	9.0×6.1×2.1	底径大、口縁部内湾気味。轆轤成形、回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
527-2 175-2	須恵器 碗	⅓	15.4×7.4×6.0	体部直線的に開く。付高台、体部と胎土異なる。轆轤成形 右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
527-3 175-3	須恵器 碗	⅓	14.2×7.0×4.9	腰部に弱い丸味。口縁部僅かに外反。付高台、低く断面矩 形。轆轤成形、右回転糸切り。	①やや軟 ②青灰 ③やや密
527-4 175-4	須恵器 碗	½高台 欠損	15.0×-×(5.4) 底径6.5	体部深目。口縁部緩く外反して開く。轆轤成形。回転糸切 り。	①酸化気味 ②灰黄 ③やや密
527-5 175-5	青磁 碗	下半	-×4.4×(2.0)	釉緑灰色。	①良好 ②灰白 ③密
527-6 175-6	須恵器 杯	底部	-×-×- 厚0.8	轆轤成形。右回転糸切り。底部をメンコ状に残す。周辺打 割のあと磨き。成形後いぶし。	①酸化 ②黒 ③やや密
527-7 175-7	須恵器 杯	底部⅓	-×-×- 厚0.8	轆轤成形。右回転糸切り後底部周縁を打ち欠いて調整。メン コ状。	①良好 ②灰白 ③密
527-8 175-8	須恵器 杯	底部	-×-×- 厚1.1	轆轤成形、右回転。周縁を打ち欠いて調整するが不安定。 メンコ状。	①良好 ②黒 ③やや密
527-9 175-9	軟質陶器 内耳鍋	口縁部		内耳部分小片	①良好 ②灰 ③やや粗・砂粒混る
527-10 175-10	軟質陶器 内耳鍋	口縁部	29.8×-×(9.7)	口縁部内湾気味に外傾、口唇部矩形。内面・口縁部横撫で 体部粗い撫で	①良好 ②黒 ③やや粗・砂粒混る
527-11 175-11	陶質土器 摺り鉢	⅓	-×12.0×(8.4)	轆轤成形。静止糸切り。体部指撫で調整。5単位の波状摺 り目あり。	①酸化 ②鈍い橙 ③細砂混る
527-12 175-12	陶質土器 摺り鉢	底部	-×12.0×(5.7)	轆轤成形、体部横撫で、内面横撫で後7条単位の弧状摺り 目。	①酸化 ②灰白 ③砂質
527-13 175-13	陶質土器 摺り鉢	体部		回転撫で。内面磨き。7条単位の交差するくし目状の摺り 目。	①還元 ②灰白 ③細砂質
527-14 175-14	陶質土器 摺り鉢	底部	-×10.4×(7.8)	全面筥撫で調整。内面横撫でと縦撫で。6条単位の弧状の 摺り目。	①酸化 ②鈍い橙 ③砂質

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

Fig. No PL. No	器 器 種 形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
528-15 175-15	陶器 摺り鉢	1/2	33.2×11.7×14.1	轆轤成形、左回転。体部下位撫で調整、5条単位の弧状摺目。	①酸化・良好 ②鈍い赤褐色 ③砂混る
528-16 175-16	石製品 石臼	小片	径39.2 高(8.8)	上臼。上縁の高さ3.5cm、幅3cmで上端面は内斜、側面は横打込み式の挽き木孔。ノミ仕上げ痕明瞭。	粗粒安山岩
528-17 175-17	石製品 石臼	小片	高(4)	上臼の縁部。弧をもって上面に至る。高さ1.8cm、幅1.6cm	粗粒安山岩
528-18 175-18	石製品 石臼	小片	高(1.2)	上臼の縁部。上面から浅く、高さ0.5cm、幅1.8cm。	粗粒安山岩
528-19 175-19	石製品 石臼		高19	上臼。ふくみ大。縁部高さ3cm、幅3.2cm、原料供給孔径2cm。ノミ仕上げ痕粗い。	粗粒安山岩
528-20 175-20	石製品 石臼		高(10)	上臼。縁部欠落。摺り目不明瞭。原料供給孔径4cm。ものくばりの凹みあり。	粗粒安山岩
528-21 176-21	石製品 石臼		高(11)	上臼。芯棒受け孔径3cm、深2.5cm。	粗粒安山岩
528-22 175-22	石製品 石臼		高(13)	ふくみ小さい。	粗粒安山岩
529-23 175-23	石製品 石臼		高(14)	上臼。ふくみ小さい。摺り目8分画?	粗粒安山岩
529-24 175-24	石製品 石臼		高(13)	上臼。摺り目8分画?	粗粒安山岩
529-25 175-25	石製品 石臼		高(10)	上臼。芯棒受け孔径3cm、高さ3cm。上面の窪みは二次加工痕か。	粗粒安山岩
529-26 175-26	石製品 石臼			下臼?	粗粒安山岩
529-27 175-27	石製品 石臼			下臼?ふくみあり。	粗粒安山岩
529-28 175-28	石製品 茶臼			茶臼上臼。8分画7溝、横打込式の方形挽き木孔幅2cm、深さ3.5cm。挽き木模様は円形か?	粗粒安山岩
529-29 175-29	石製品 石臼	1/2	径27高15.8	下臼、8分画4溝、芯棒孔部えぐり大きい。孔径3cm。底面粗いノミ痕。	粗粒安山岩
530-30 175-30	板碑 上半部		46.6×28.3×3.2	阿弥陀三尊種子。キリークはイーガク点間を抜けない書体。主尊・脇侍に蓮実の蓮座。種子・座は葉研彫り。粹線あり。裏面ノミ痕。	緑泥片岩
530-31 177-31	板碑 左中部		50.5×23.4×3.0	阿弥陀三尊種子。主尊欠損し脇侍の一部残。種子・蓮座葉研彫り。紀年銘応永三年(1396)か応安三年(1370)三月十一日か。裏面ノミ痕。幅1.3cm	緑泥片岩(点紋長石緑泥片岩) 緑泥片岩
530-32 175-32	板碑 完形		53.3×19.5×3.3	阿弥陀一尊種子。キリークはイーガク点間を抜ける書体。種子、蓮座は竹彫り、二条線なし。紀年銘不明。裏面にノミ痕。幅1.3cm。	緑泥片岩。小粒長石微量含む。
530-33 175-33	板碑 下半部		39.0×19.5×2.5	阿弥陀三尊種子。主尊欠損。脇侍サーサク残る。脇侍に蓮座なし。竹彫り。紀年銘は摩滅。裏面にノミ痕。	緑泥片岩。長石を微量含む。
530-34 177-34	板碑 左半部		29.8×14.0×3.0	阿弥陀種子。キリークはイーガク点間を抜けない書体。葉研彫り。二条線・粹線なし。	緑泥片岩。雲母含む。
530-35 177-35	板碑 右半部		18.0×9.5×3.0	阿弥陀種子。キリークはイーガク点間を抜けない書体。葉研彫り。二条線なし。34と同一個体の可能性あり。	緑泥片岩。雲母含む。

G 6号井戸出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
531-1 177-1	土器 杯	1/2	8.0×5.0×2.5	手握ねか?底径大きく体部内湾気味。燻し焼成。	①酸化 ②黒 ③砂混る
531-2 177-2	軟質陶器 内耳鍋	1/2底部欠損	29.8×-×(14.8)	体部深い。口縁部外傾し内湾気味。口唇部矩形。内面・口縁部横撫で。体部粗い指頭痕及び撫で。	①良好 ②灰 ③やや粗・砂粒混る
531-3 177-3	軟質陶器 内耳鍋	1/2底部欠損	31.6×18.8×(14.8)	体部深い。口縁部外傾し内湾気味。口唇部矩形。内面・口縁部横撫で。体部粗い指頭痕及び撫で。	①良好 ②灰 ③やや粗・砂粒混る
531-4 178-4	軟質陶器 内耳鍋	1/2底部欠損	33.4×18.05×17.65	平底、体部深く口縁部外傾し内湾気味。口唇部矩形。内面・口縁部横撫で。体部粗い撫で。腰部寛削り。口縁部に内耳	①良好 ②灰 ③やや粗・砂粒混る
531-5 178-5	軟質陶器 内耳鍋	1/2底部欠損	31.0×-×(12.2)	体部深い。口縁部外傾し内湾気味。口唇部矩形。内面・口縁部横撫で。体部粗い撫で。	①良好 ②鈍い白橙 ③やや粗・砂粒混る
532-6 178-6	石 茶臼		8.6×13.9×6.8	茶臼の下臼、受け皿端部欠損。臼目摩滅著しく不明。皿部下位は縦ノミ仕上げ。底面は粗いノミ痕。	粗粒安山岩

G区7号井戸出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	残存量	計 測 値	器 形 及 び 成 ・ 調 整 の 特 徴、そ の 他	①焼 成 ②色 調 ③胎 土
533-1 178-1	土 器 杯	ほぼ完 形	8.0×5.9×2.05	底径大。体部浅く内湾気味に立つ。轆轤成形。底部に条線状圧痕	①酸化気味 ②灰白 ③やや密・白色粒混る
533-2 178-2	土 器 香 炉	1/2	—×9.6×(6.4)	三脚付香炉型土器。指撫で、体部上位に陰花文あり。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや粗・砂粒混る
533-3 178-3	須 恵 器	底 部	厚1.0	体部片。周縁を打ち欠いてメンコ形に成形。打割後磨き。円板状。	①良好 ②灰白 ③やや密
533-4 178-4	須 恵 器	底 部	厚1.0	右回転糸切り。底部周縁を研磨・面取り成形、内面もやや摩滅気味。円板状。	①良好 ②暗青灰 ③やや密
533-5 178-5	須 恵 器	底 部	厚0.7	須恵器底部。轆轤成形。周縁を打ち欠き、研磨成形。円板状。	①酸化 ②淡黄 ③やや粗・砂粒多量

3. 墓 跡

G 1号墓 (Fig. 534・PL. 147)

G区調査区のほぼ中央に位置し、43・44G27・28の範囲にある。墓墳平面形は南北に長軸をもつ細長方形を呈す。長軸95cm・短軸55cm・検出面からの深さ12cmを測り、長軸方位はおよそN-30°-Eを示す。遺体は頭蓋骨及び大腿骨から脛骨にかけて検出され、頭蓋骨を北に置く西向き横臥屈葬である。埋葬施設を想定できるような痕跡は認められない。また土壌底面は凹凸があり、南側が若干高くなっている。これは木棺などを埋納ではなく土壌を屍体に合わせた直葬形態と考えられる。副葬品などの出土遺物は検出されない。

G 2号墓 (Fig. 534・PL. 147)

G区調査区のほぼ中央に位置し、42G30の範囲にある。G18号・G68号住居跡と重複するが両者より新しい時期の所産である。検出遺体は獣骨であり墓跡とするには問題があるが、ここではその範疇で記述する。墓墳平面形は南北に長軸をもつ狭長な略長方形を呈する。長軸85cm・短軸30cm、深さは南北軸の中央で段差があり、北側15cm・南側25cmを測る。南北軸方位はN-7°-Wを示す。遺体は頭部を北に置く東向き横臥である。埋納容器は認められず直葬と考えられる。出土遺物はなく時代決定はできないが、遺体の残存状態から比較的新しい時代の埋葬であり、獣種は犬類と考えられる。

G 3号墓 (Fig. 534、536・PL. 148、178)

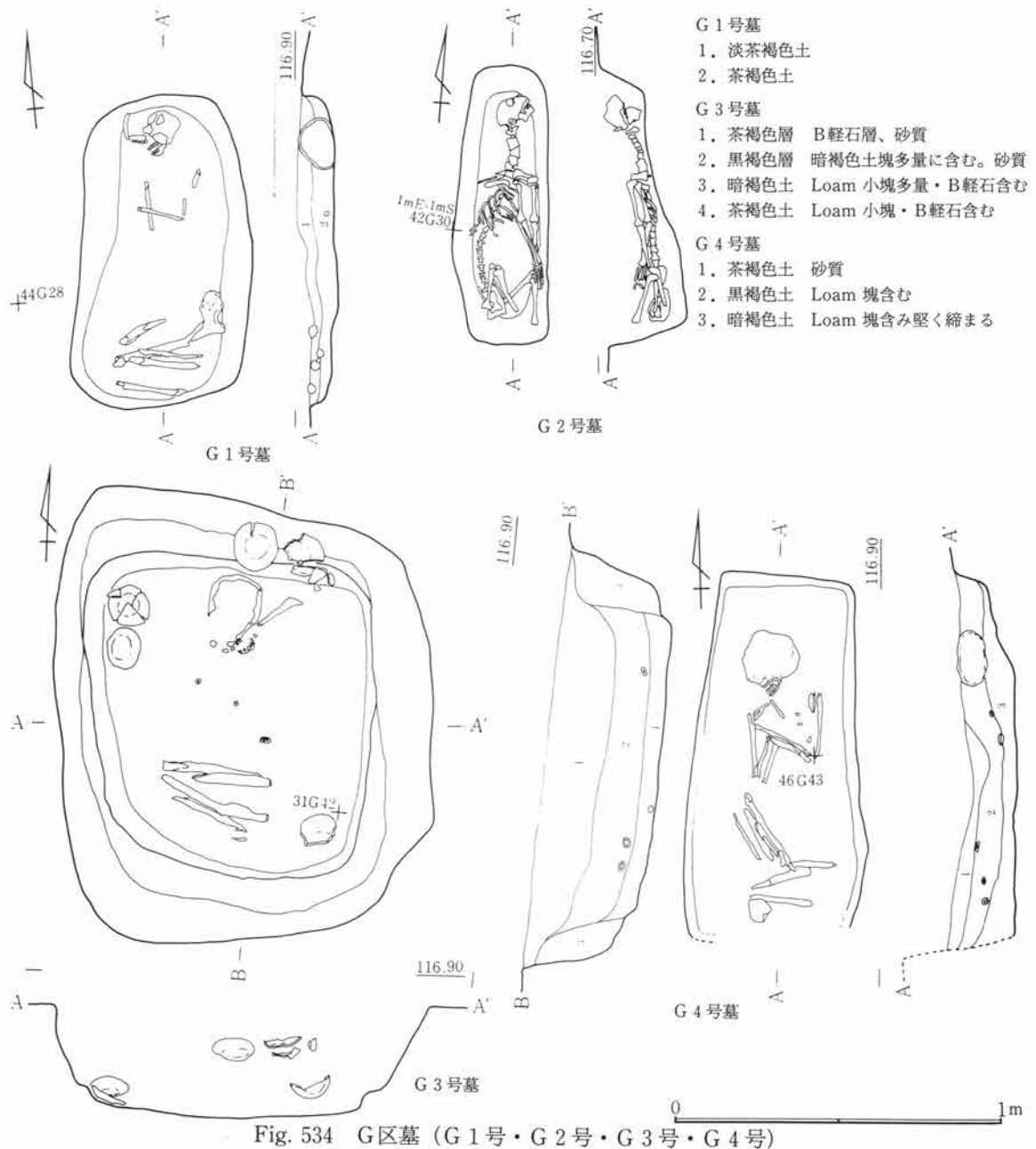
G区北東部に位置し、30・31G41・42の範囲にある。墓墳平面形は南北軸の若干長い略長方形を呈する。断面形状はほぼ平坦な底面から約5cmの高さで段をなし、上半は墓墳規模が大きくなる。上段南北長1.35m・東西長1.15m、下段は南北長0.95m・東西長0.9mを測り、全体の深さは35cmである。南北軸方位はN-4°-Eを示す。遺体は北側に頭蓋骨を置く東向き横臥屈葬である。出土遺物はやや大ぶりなかわらけ5個体と小形かわらけ1個体が検出されている。遺体埋納施設の痕跡は認められなかったが、土壌掘形から木棺が用いられたと考えられる。また出土遺物には底面から浮いた状態で検出されたものがあり、棺上に置かれた状況を示している。

G 4号墓 (Fig. 534、537・PL. 148、178)

G区北部に位置し、45・46G42・43の範囲にある。一部攪乱坑にかかり土壌の南壁立ち上がり不明瞭である。土壌平面形は南北に長軸をもつ長方形を呈し、南北長約1.1m・東西長0.55m・深さ25cmを測り、底面は頭部北側が若干高くなる。南北軸方位はN-2°-Eを示す。遺体は頭蓋骨を北に置く西向き横臥屈葬である。遺体埋納施設は認められず、底面の状況から木棺などの埋設はなく直葬の形態をとると考えられる。出土遺物には北宋銭祥符元宝（大中祥符元年 西暦1008年初銭）1点が出土している。

G 5号墓 (Fig. 535・PL. 148)

G区北部に位置し、43・44G42の範囲にある。G62号住居跡と重複するが、これより新しい時期の所産である。墓壇平面形は南北方向に長い楕円形を呈する。南北径1.25m・東西径0.75m・深さ30cmを測り、壁面は緩い播鉢状で底面も丸く窪みをなす。東壁中央には約20cmの短い突出部が設けられる。突出部断面は弱い弧を描く底面から僅かな段をなし平坦面を作り、垂直に近く立ち上がる。土壌内は多量の炭化物で埋まり、下位には人骨と考えられる多量の骨片が検出されている。また底面に接して藁茎状の編物が認められたが、土壌底面に敷くか屍体を包み込んだものであろう。土壌検出面及び東壁突出部は比熱による焼土化が著しく、壁面下位及び底面は焼土化していない。当土壌の性格については、多量の炭化物・骨片と焼土化した壁面の存在から火葬施設としての機能を考えることができる。しかしかなり細片化した骨片の状態や量から1体分の完全遺存は考えられず、ある程度収骨がなされている形跡がある。以上のことからG 5号墓は火葬墓としてより火葬場あるいは火葬施設の可能性が強い。



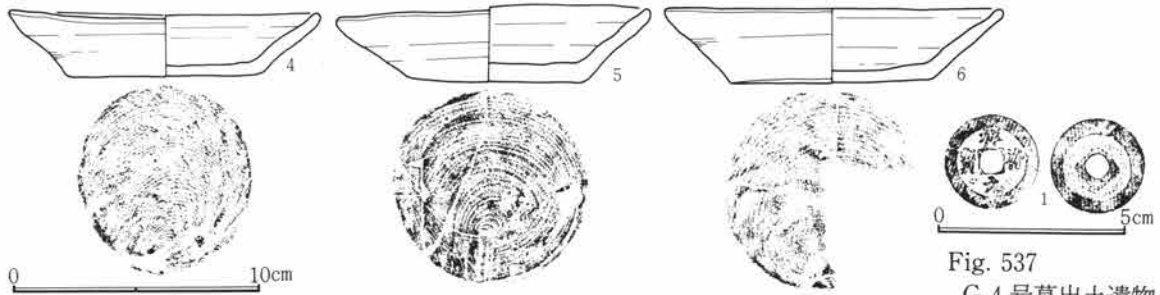
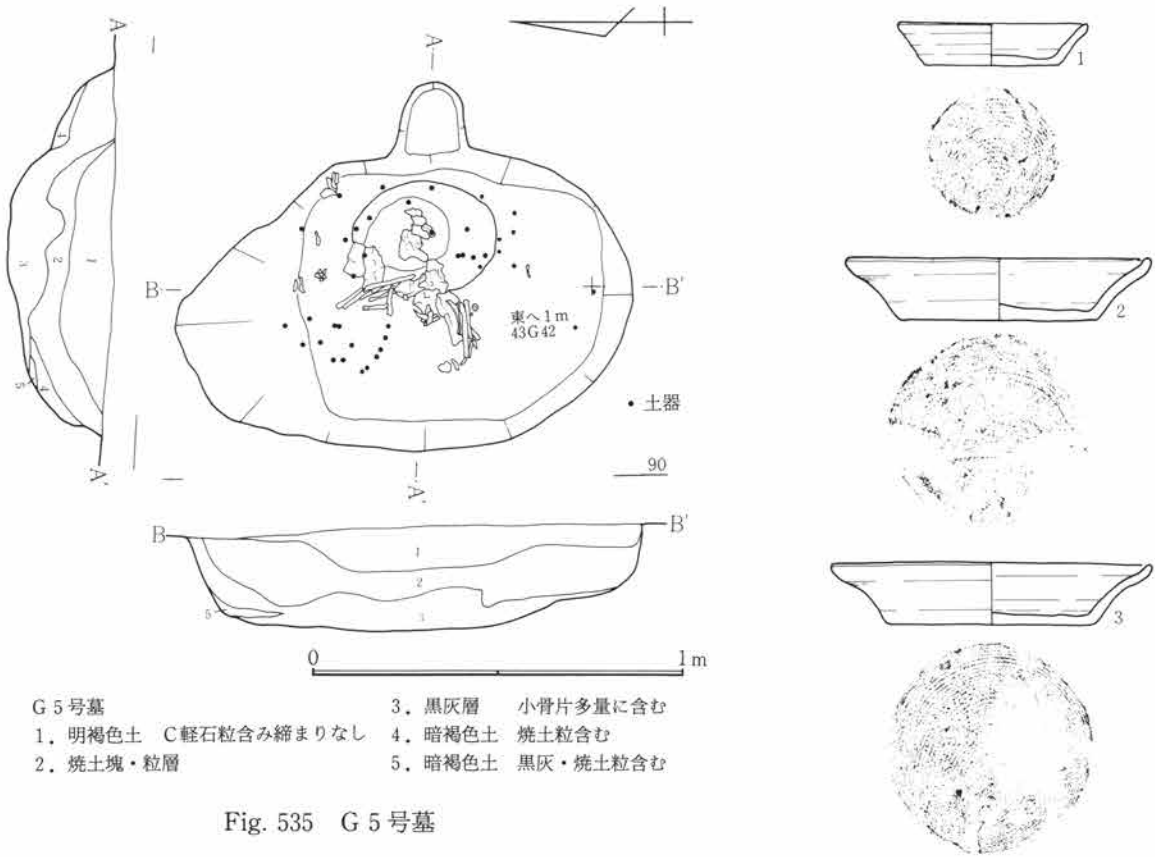


Fig. 536 G 3号墓出土遺物

G 3号墓出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
536-1 178-1	土器 杯	完形	7.7×5.4×1.7	底径大きく体部直線的、轆轤成形。左回転糸切り。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや密
536-2 178-2	土器 杯	¾	12.3×8.0×2.5	腰部でくびれて体部上半は内湾気味に開く。口唇部丸まり内屈。轆轤成形。左回転糸切り。	①酸化良好 ②鈍い橙 ③やや粗
536-3 178-3	土器 杯	¾	13.0×8.4×2.5	腰部でくびれ、体部上半は内湾して開く、轆轤成形。左回転糸切り。器肉薄い。	①酸化良好 ②鈍い橙 ③細砂混
536-4 178-4	土器 杯	完形	12.6×8.0×2.65	腰部でくびれ、体部内湾気味に開く、轆轤成形。左回転糸切り。	①酸化良好 ②浅黄橙 ③やや密
536-5 178-5	土器 杯	完形	12.7×7.1×3.0	腰部で弱くくびれ。体部上半は内湾気味に開く。轆轤成形左回転糸切り。	①酸化良好 ②鈍い橙 ③密
536-6 178-6	土器 杯	¾	13.7×8.1×3.0	腰部で弱いくびれをもち体部は内湾気味に開く。轆轤成形左回転糸切り。	①酸化良好 ②橙 ③密

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

4 土 坑 (Fig. 538~543)

遺構名	位 置	形 状	長軸方位	長×短×深	備 考
G1号土坑	43~45G32~34	不整円形	—	256×224×130	西側方形に突出。底面周縁に溝巡る。中央部深く落ち込む。埋土粘性強い。
G2号土坑	44・45G37	楕円形	N-22°-E	76×60×16	底面東側が窪む。
G3号土坑	27・28G27・28	円形	—	128×124×98	無遺物。埋土は締まりのない砂質土。底面西側に2ヶ所の窪み。
G4号土坑	38・39G37	楕円形	N-14°-W	165×132×27	無遺物。埋土に浅間山降下C軽石・焼土・炭化粒含む。古代に属するか。
G5号土坑	29・30G32・33	円形	—	106×92×25	土師質椀・高台付椀・灰釉陶器椀。底面波うつ。平安時代後半。
G6号土坑	33G36	円形	—	95×93×26	無遺物。埋土は砂質土。底面平坦。
G7号土坑	34G33・34	不整楕円形	N-3°-E	187×69×87	底面近くに角礫。埋土上半は浅間山降下B軽石層主体。土坑の重複か。
G8号土坑	46G28・29	円形	—	77×75×8	無遺物。9号土坑と重複し新旧不明。埋土は浅間山降下B軽石主体。
G9号土坑	46G28	円形	—	69×67×24	無遺物。8号土坑と重複し新旧不明。埋土は浅間山降下B軽石主体。
G10号土坑	46・47G28	円形	—	103×92×48	無遺物。埋土は浅間C軽石含む。古代に属するか? 底面平坦。
G11号土坑	51・52G21・22	楕円形	N-6°-E	102×88×15	無遺物。埋土は浅間山B軽石主体。底面は浅いすり鉢状。
G12号土坑	52G22・23	楕円形	—	82×67×20	無遺物。底面は浅いすり鉢状。
G13号土坑	50G22・23	楕円形	—	76×72×12	無遺物。底面は浅いすり鉢状。
G14号土坑	47G27	円形	—	78×74×10	無遺物。埋土に浅間山降下C軽石含む。15号土坑と重複しこれより新しい。
G15号土坑	47G27	円形	—	79×64×30	無遺物。埋土に浅間山降下C軽石含む。15号土坑と重複しこれより古い。
G16号土坑	51G22・23	円形	—	60×59×10	無遺物。埋土に浅間山降下C軽石含む。底面は浅いすり鉢状。
G17号土坑	55G27	円形	—	67×63×10	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。上面に小穴状斑点。底面浅いすり鉢
G18号土坑	56G25	楕円形	N-25°-W	55×39×16	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石・C軽石が上下層に含む。底面平坦。
G19号土坑	50G26	円形	—	75×72×14	無遺物。埋土に浅間山降下C軽石含む。底面に小さい凹凸あり。
G20号土坑	50・51G26・27	楕円形	—	85×73×12	無遺物。底面に不規則な小穴4個。古代に属するか? 底面緩く波うつ。
G21号土坑	47G26・27	隅丸方形	—	87×79×56	無遺物。底面平坦。北西隅に小穴。埋土に浅間山降下C軽石含む。
G22号土坑	44・45G31	楕円形	N-0°-N	58×48×8	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石主体。底面に窪み。
G23号土坑	45G30	楕円形	N-9°-W	50×(38)×10	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。
G24号土坑	47・48G27・28	不整円形	—	100×82×50	無遺物。小土坑と重複しこれより古い。
G25号土坑	31・32G25・26	隅丸長方形	N-15.5°-E	134×(112)×16	無遺物。底面浅いすり鉢状。埋土は浅間山降下B軽石。
G26号土坑	56G27	円形	—	60×56×7	無遺物。埋土に浅間山降下C軽石含む古代に属するか?
G27号土坑	49G36	円形	N-6°-W	72×64×8	無遺物。埋土に浅間山降下B軽石含む。
G28号土坑	50G36	円形	—	70×(68)×24	無遺物。西端は消失。埋土に砂質層。底面すり鉢状。
G29号土坑	44・45G33・34	隅丸長方形	N-18°-E	81×47×10	無遺物。埋土に浅間山降下C軽石含む古代に属するか? 底面緩く波うつ。

第1節 G区の遺構と遺物

遺構名	位置	形状	長軸方位	長×短×深	備考
G30号土坑	44・45G35	楕円形	N-45°-W	93×60×30	無遺物。埋土に浅間山降下C軽石含み古代に属するか?底面凹凸あり。
G31号土坑	51G25・26	楕円形	N-2°-E	80×61×18	無遺物。埋土に浅間山降下C軽石含み古代に属するか?底面緩く波うつ。
G32号土坑	36G27	隅丸長方形	N-67°-E	62×48×55	無遺物。底面平坦。柱穴形態をもつ。33号土坑に近接。
G33号土坑	35・36G27・28	不整形	N-81°-W	128×56×62	無遺物。底面平坦。柱穴形態をもつ。32号土坑に近接。上面掘形乱れる。
G34号土坑	44・45G28	不整円形	—	52×52×38	無遺物。柱穴か。埋土に浅間山降下C軽石を含む。35号土坑と重複し古い
G35号土坑	44G28	隅丸方形	—	57×53×59	無遺物。柱穴か。埋土に浅間山降下C軽石を含む。34号土坑と重複し新しい。
G36号土坑	35G37・38	楕円形	N-72°-W	116×56×46	無遺物。重複か。埋土は浅間山降下B軽石主体。
G37号土坑	34・35G28	楕円形	N-5°-W	77×(70)×26	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石主体。底面平坦。
G38号土坑	36・37G27	楕円形	N-10°-W	59×44×22	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石主体。底面平坦。
G39号土坑	37G25	楕円形	N-69°-E	93×82×54	無遺物。埋土に浅間山降下C軽石・焼土・炭化粒含む。古代に属するか。
G40号土坑	38G25	不整形	N-16°-E	100×80×59	無遺物。埋土に浅間山降下C軽石含む。底面に窪み。柱穴か。
G41号土坑	35G38	不整形	N-32°-W	85×69×40	無遺物。底面に柱痕らしき窪み。
G42号土坑	44・45G29	隅丸長方形	—	150×80×8	無遺物。埋土は砂質層(B軽石?)。底面平坦。
G43号土坑	31・32G25	隅丸長方形	N-1°-W	149×79×32	無遺物。埋土は砂質層(B軽石?)。底面すり鉢状。
G44号土坑	37G38・39	隅丸長方形	N-3.5°-W	177×66×12	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面平坦をなし不規則に小穴多い。
G45号土坑	35・36G33~35	隅丸長方形	N-5°-W	333×105×23	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面緩く窪む。
G46号土坑	34・35G34・35	隅丸長方形	N-15°-W	305×108×8	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面平坦。

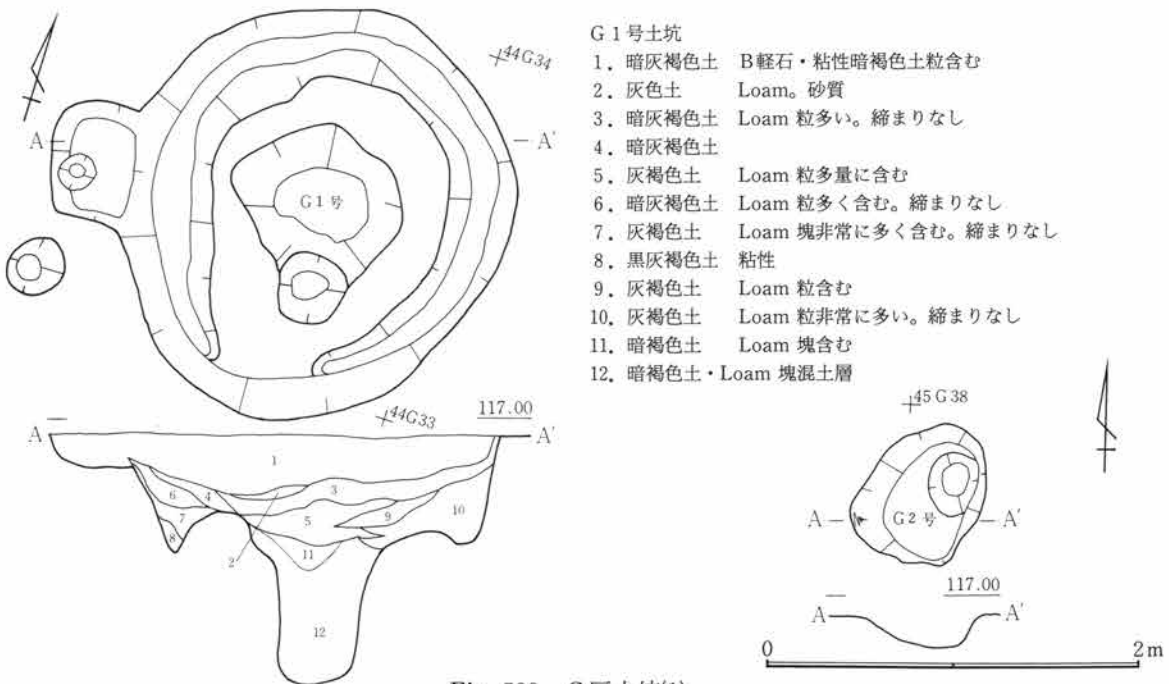


Fig. 538 G区土坑(1)

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

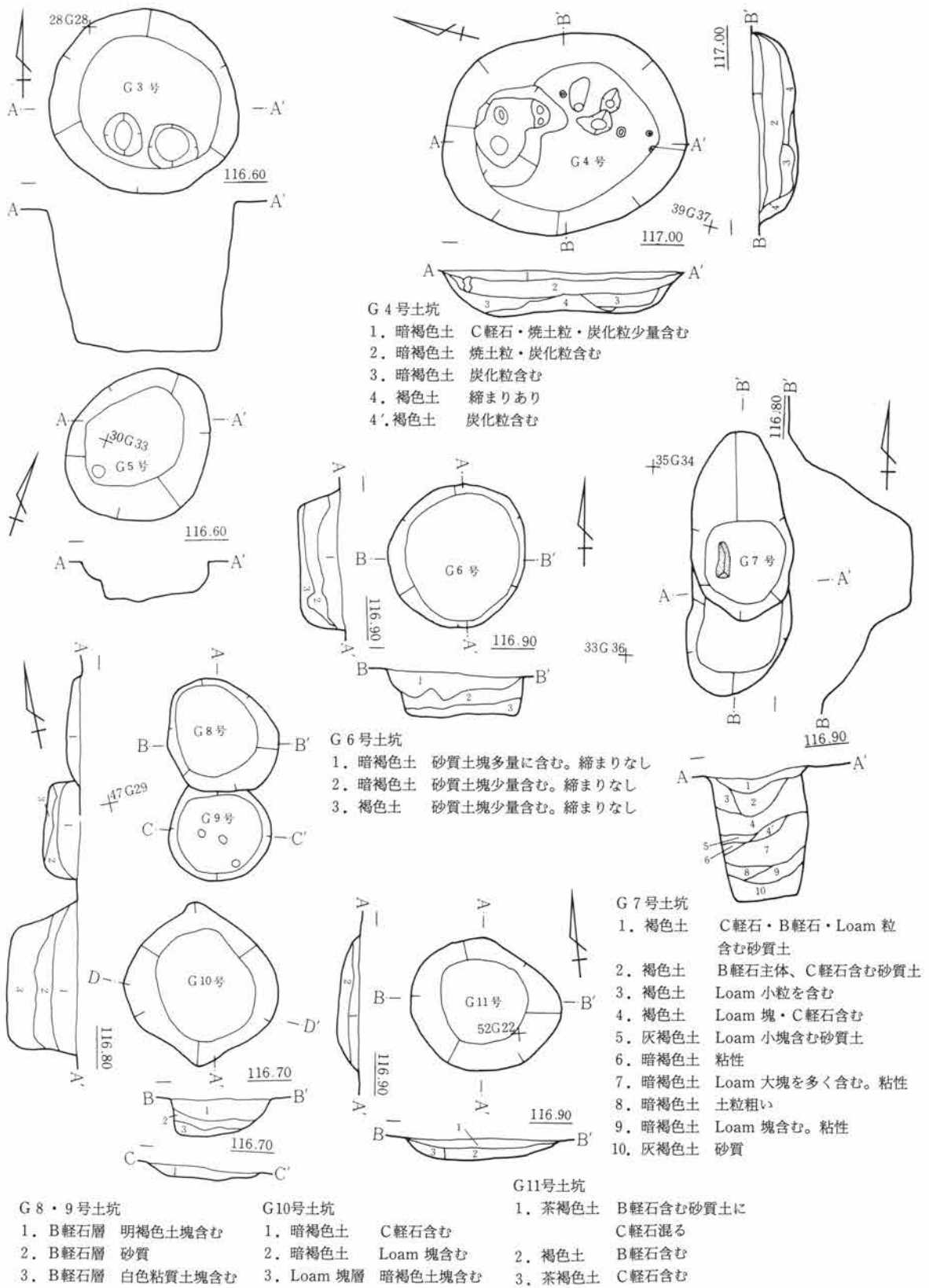


Fig. 539 G区土坑(2)

第1節 G区の遺構と遺物

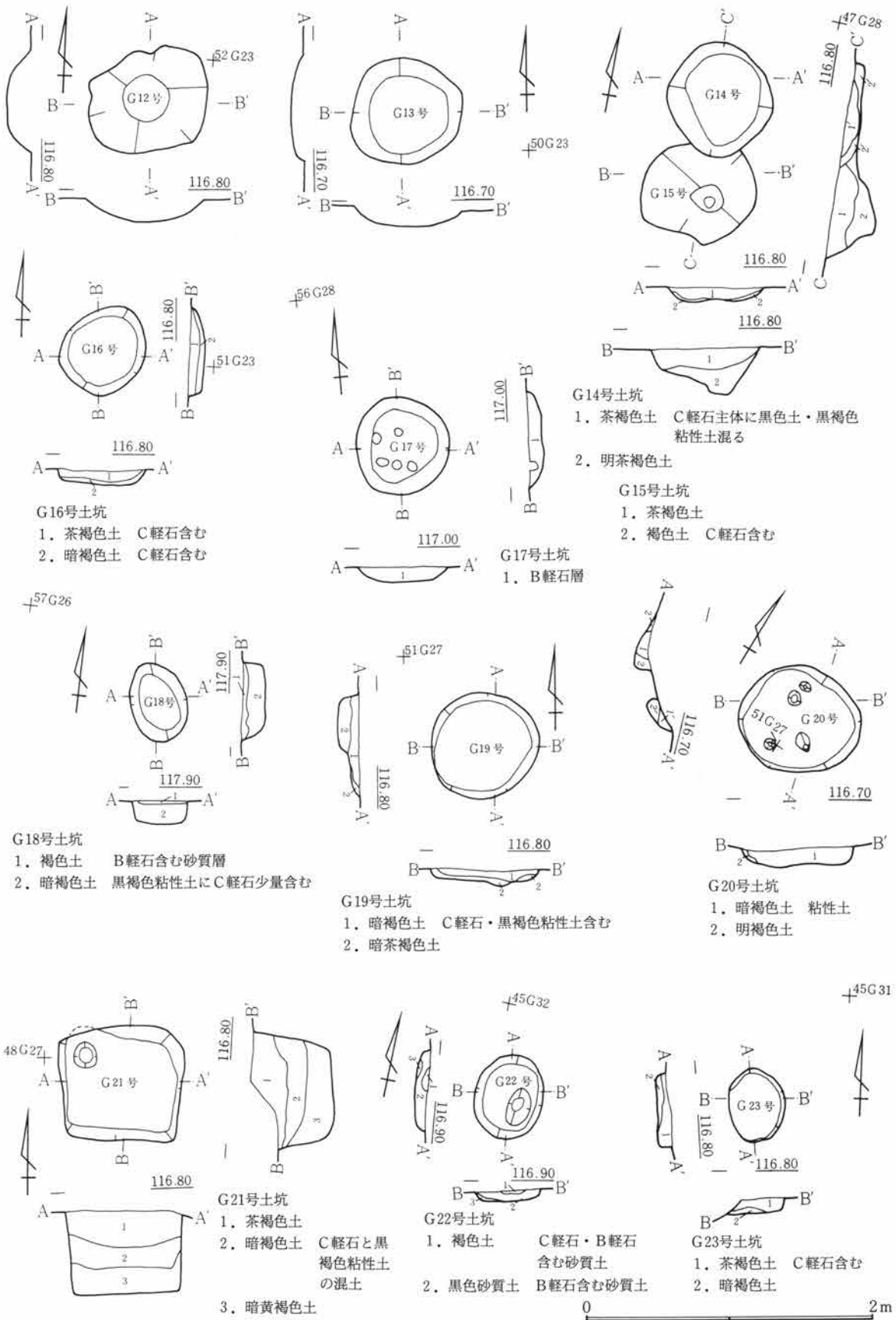


Fig. 540 G区土坑(3)

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

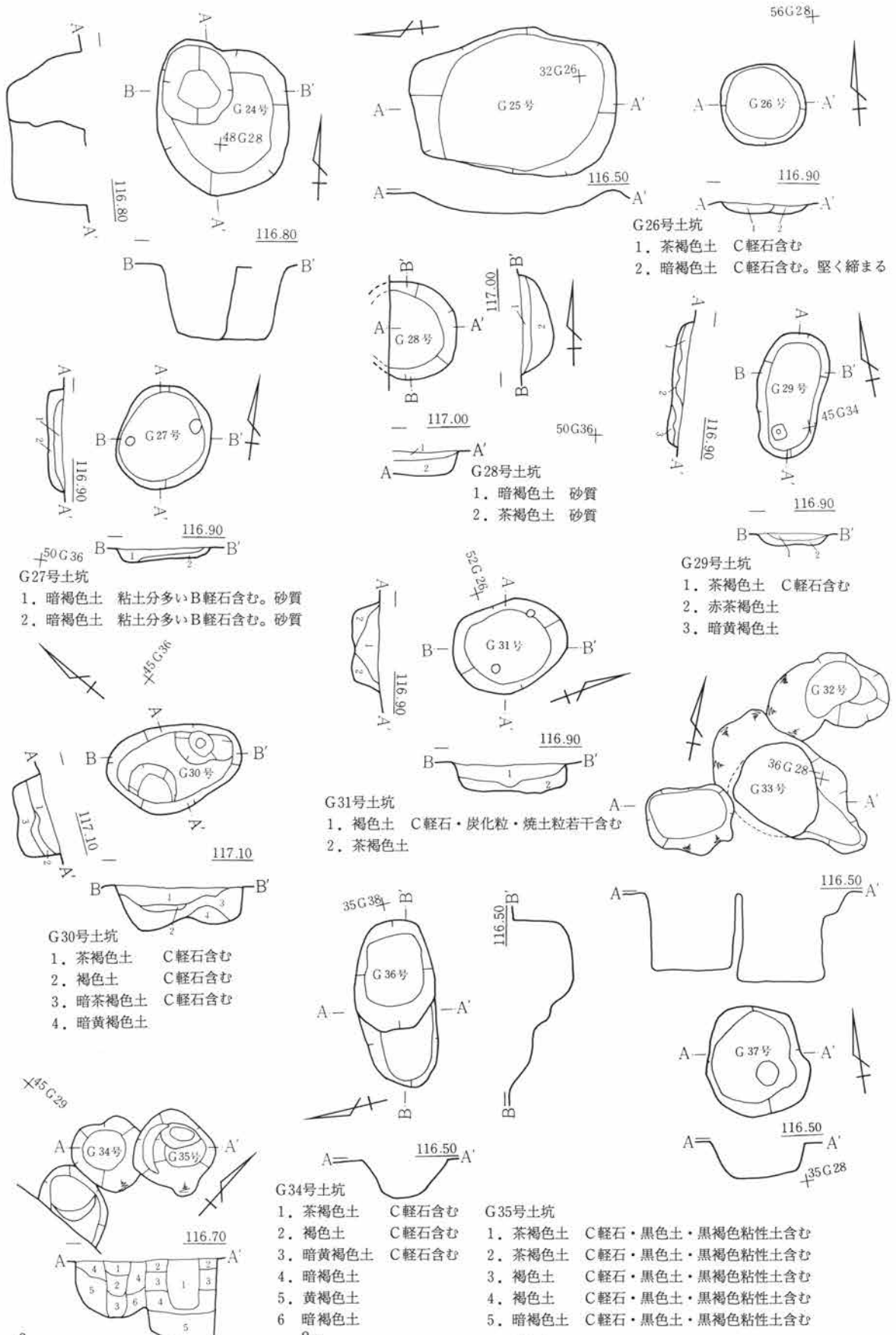


Fig. 541 G区土坑(4)

第1節 G区の遺構と遺物

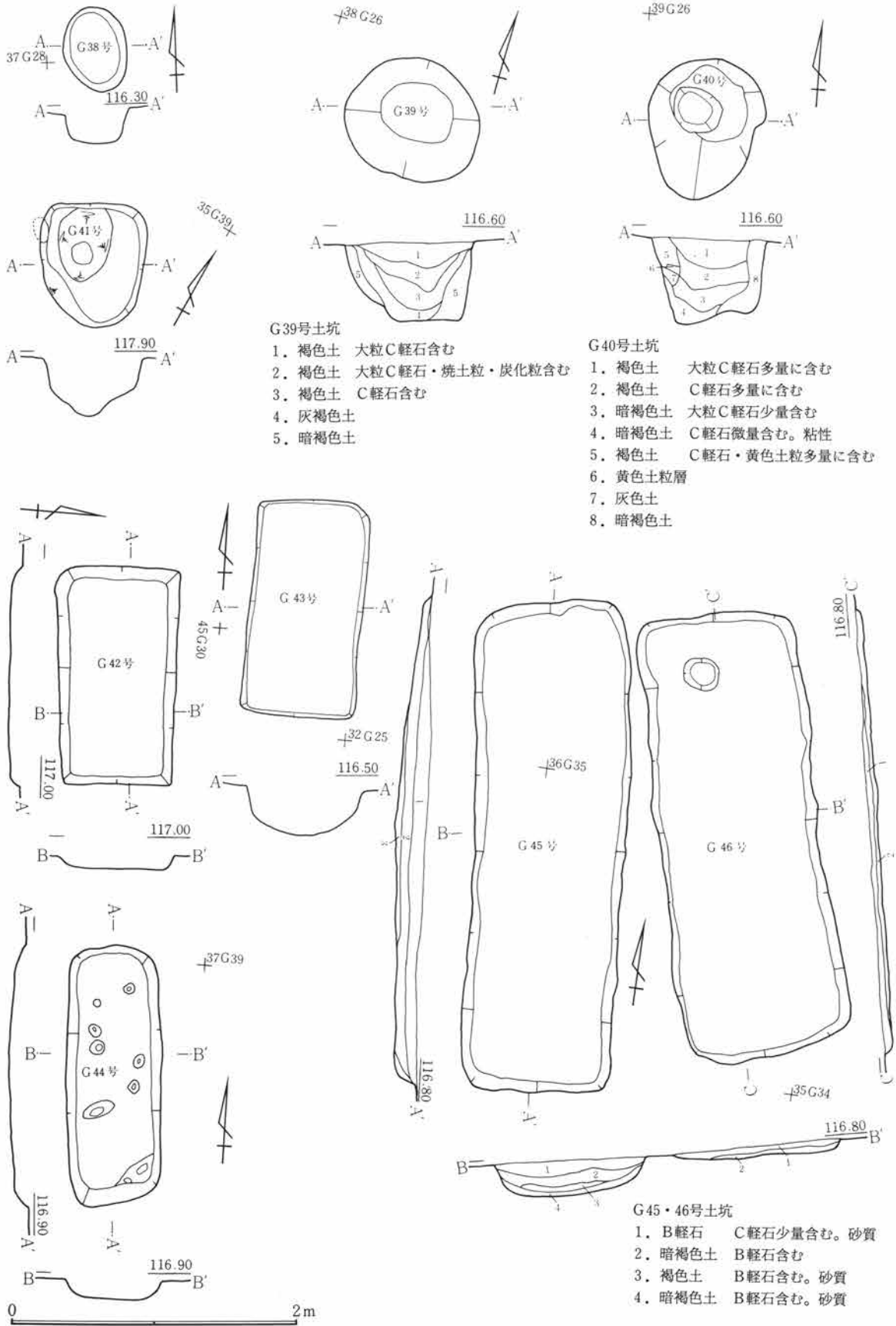


Fig. 542 G区土坑(5)

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

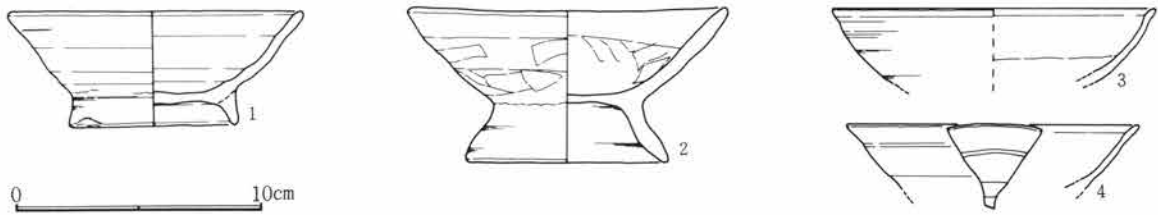


Fig. 543 G 5号土坑出土遺物

G 5号土坑出土遺物表

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	残存量	計 測 値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色 調 ③胎 土
543-1 179-1	須 恵 器 碗	%	12.0×6.8×4.7	体部直線的でやや深い。付高台、やや高く直立気味に立つ。轆轤成形、回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②浅黄 ③やや密
543-2 179-2	須 恵 器 ? 碗	%	13.0×8.2×6.2	体部直線的に開く。付高台、高く大きく外側に張る。轆轤成形体部粗い。手持筥削り。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや密・砂粒混る
543-3 179-3	灰 釉 陶 器 碗	口縁部 小片	13.0×-×(2.9)	体部やや丸味をもつ。口縁部緩くくびれて小さく外反。口唇部丸い。刷毛塗り?施釉	①良好 ②灰白 ③密
543-4 179-4	灰 釉 陶 器 皿	口縁部 小片	12.0×-×(2.6)	器肉薄い、口縁部下位で僅かにくびれる。口唇部尖がり気味	①良好 ②灰白 ③密

5. 溝

G 1号溝 (Fig. 544・PL. 179)

G区調査域のほぼ中央に位置し、44~47G20~H5の範囲にわたる。南北方向へ直線的に延び、南は当区を横断する県道前橋-安中線下に入る。北はH区に至り、H区南で東西走する大溝H6号溝に合して消滅する。G6号・G8号・G38号住居跡、G1号掘立柱建物跡、G3号井戸跡など多数の遺構と重複するが、いずれよりも新しい時期の所産である。検出全長は約72.5m、確認面での溝幅・深さは各々1.25m・60cmを測る。断面形状は箱掘と部分的に緩いU字形を呈する箇所もある。走行方位はおよそN-4°-Wを示す。埋土は浅間山降下B軽石を主体にする土層であるが降下物の単位層が認められず、B軽石降下以後の開削・埋没と考えられる。出土遺物は極めて少なく、須恵器片などが検出されたが図示できるものはない。

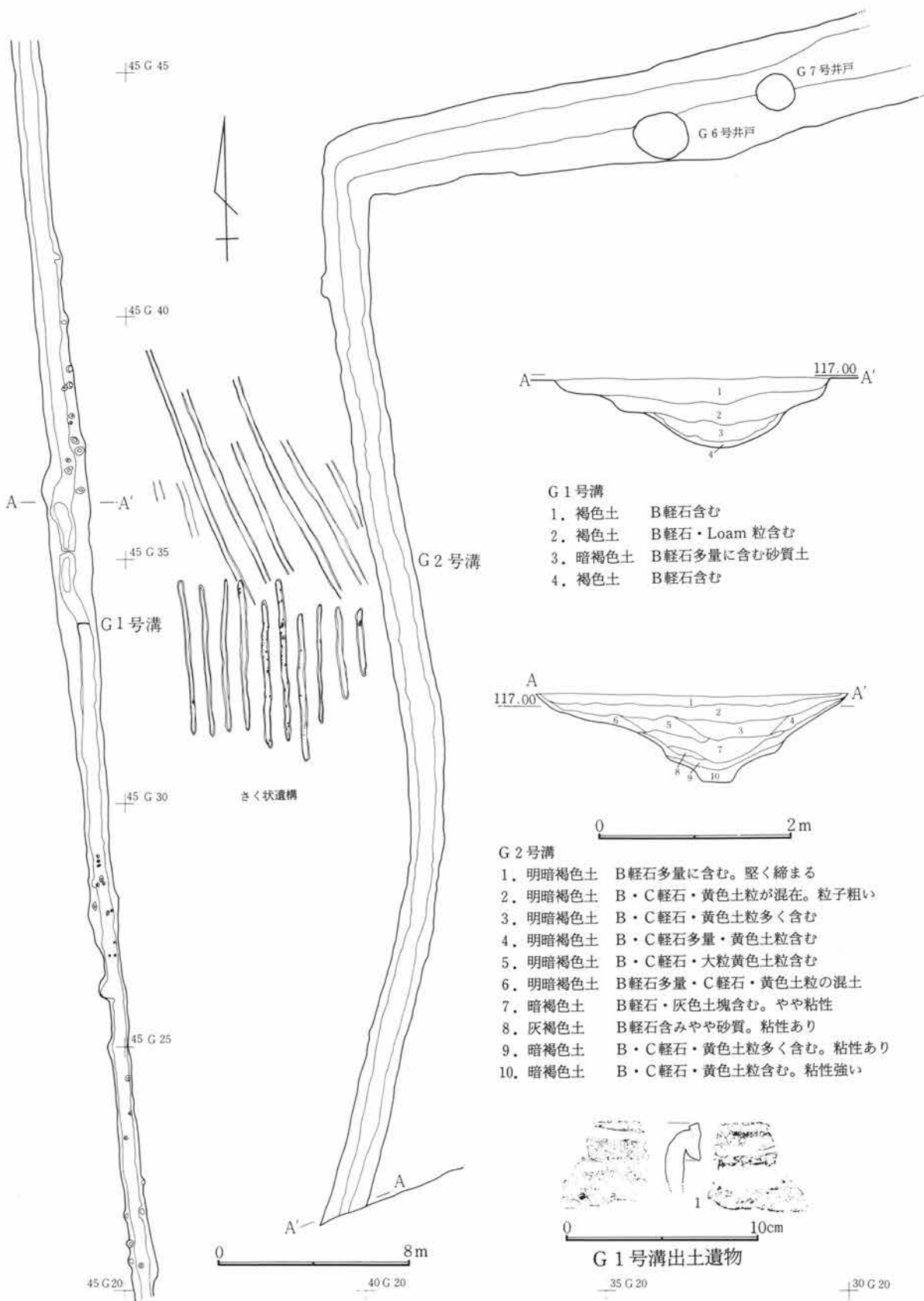
G 2号溝 (Fig. 544、545・PL. 148、179)

G区調査域のほぼ中央に位置し、29~39G21~45の範囲にわたる。調査域南側は南北走し、北側で直角に折れて東へ向かう。南側は緩く西へ湾曲し県道下に入り延長線上でG1号溝に合する。多数の住居跡・井戸跡などと重複するがいずれより新しい時期の所産である。検出全長は南北走部分約44m・東西走部分24mを測る。南限土層観察より溝幅3.2m・深さ85cmである。断面形状は上半は緩い傾斜で広がり底面近く箱掘形になる。走行方位は南でN-15°-Eから湾曲してN-10°-Wに変わり、北側でN-80°-Eへ折れる。埋土は浅間山降下B軽石を主体にするがB軽石の単位堆積は見られない。南側溝中には人頭大の川原石が多量に検出されているが、東約12mに位置するG5号井戸跡の人為的埋め戻しとの関連が考えられる。

6. さく状遺構 (Fig. 544・545)

G区中央部、40~44G31~34の範囲に検出されている。走向方向から南北の2群に分かれるがいずれも掘形が浅く不鮮明な検出状況である。南群は10条・最長6.5m・さく間80~90cm、走行方位はほぼま北へ向く。北群は8条・最長11m・さく間1m、走行方位はN-25°-Eを示す。埋土は南群は浅間山降下B軽石主体で北群は浅間山降下C軽石を多く含む暗褐色土で埋まり、両者に時間差のあることが認められる。

第1節 G区の遺構と遺物



- G1号溝
- 1. 褐色土 B軽石含む
 - 2. 褐色土 B軽石・Loam 粒含む
 - 3. 暗褐色土 B軽石多量に含む砂質土
 - 4. 褐色土 B軽石含む

- G2号溝
- 1. 明暗褐色土 B軽石多量に含む。堅く縮まる
 - 2. 明暗褐色土 B・C軽石・黄色土粒が混在。粒子粗い
 - 3. 明暗褐色土 B・C軽石・黄色土粒多く含む
 - 4. 明暗褐色土 B・C軽石多量・黄色土粒含む
 - 5. 明暗褐色土 B・C軽石・大粒黄色土粒含む
 - 6. 明暗褐色土 B軽石多量・C軽石・黄色土粒の混土
 - 7. 暗褐色土 B軽石・灰色土塊含む。やや粘性
 - 8. 灰褐色土 B軽石含みや砂質。粘性あり
 - 9. 暗褐色土 B・C軽石・黄色土粒多く含む。粘性あり
 - 10. 暗褐色土 B・C軽石・黄色土粒含む。粘性強い

Fig. 544 G1号・G2号溝・さく状遺構

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

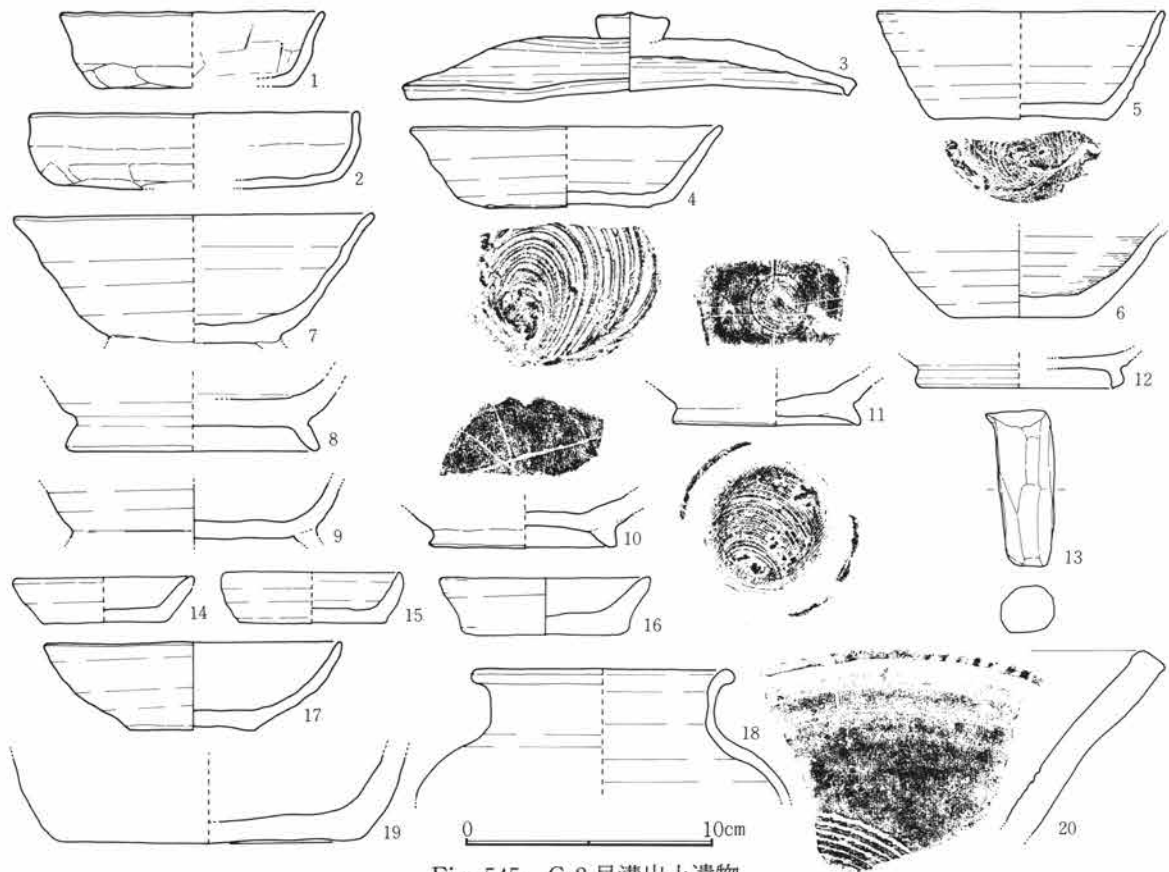


Fig. 545 G 2号溝出土遺物

G 1号溝出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
544-1 179-1	陶器 甕	口縁部 小片	-×-×- 厚1.4	常滑。口縁部大きな折り返し顯著上・下顎をなす。外面に淡黄色自然釉。内外面色調は鈍い赤褐色を呈す。	①良好 ②灰 ③粗

G 2号溝出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
545-1 179-1	土師器 杯	¼	10.7×7.8×3.0	腰部直線的。口縁部緩く外反して開く。底・腰篋削り。口縁部横撫で。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや密
545-2 179-2	土師器 杯	¼	13.4×11.4×3.0	底部平ら。扁平な体部から口縁部外反気味に直立。口縁部横撫で。底部不定方向・腰部横位篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
545-3 179-3	須恵器 蓋	¼	18.3×-×3.5 摘径3.0	やや扁平な天井部。口縁部内屈気味に折れる。摘は中心部が小さく尖がり扁平。轆轤成形。天井部回転糸切り後篋削	①良好 ②灰 ③やや粗
545-4 179-4	須恵器 杯	¼	12.6×8.1×3.2	底径大きく、腰部に弱い丸味をもつ。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③密
545-5 179-5	須恵器 杯	¼	11.6×7.0×4.3	体部深く、直線的に外傾、轆轤成形、右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗
545-6 179-6	須恵器 杯	¼	-×5.6×(3.4)	底径小さく、体部丸味をもち深目。口縁部外反して開くか。轆轤成形、右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗
545-7 179-7	須恵器 椀	¼	14.6×7.0×5.1	体部深く轆轤目強い。口縁部小さく外傾。付高台剥離。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③密
545-8 179-8	須恵器 椀	底部	-×10.3×(2.9)	付高台、やや高く外に張る。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③密
545-9 179-9	須恵器 椀	¼	-×-×2.2	轆轤成形。右回転篋削り、付高台欠損。	①良好 ②灰白 ③密
545-10 179-10	須恵器 椀	底部¼	-×7.6×(2.1)	轆轤成形、右回転糸切り。付高台、見込部に3条の篋描きあり。	①良好 ②灰白 ③やや粗

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
545-11 179-11	須恵器 碗	1/2	—×7.7×(2.0)	轆轤成形、右回転糸切り。付高台。見込部に2条平行の寛描き	①良好 ②灰白 ③密
545-12 179-12	灰釉陶器 碗?	台部小片	—×8.5×(1.5)	高台は丸味をもつ矩形を呈し内湾気味に立つ。	①良好 ②灰白 ③密
545-13 179-13	須恵器 脚部?		径2.2 高(6.3)	縦位寛削り。	①良好 ②灰白 ③やや密・黒色粒混る
545-14 179-14	須恵器 杯	1/4	7.4×5.0×1.8	体部浅く直線的に外傾。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化軟 ②鈍い黄橙 ③やや密
545-15 179-15	須恵器 杯	1/4	7.2×6.0×2.0	体部浅く、口縁部細まり僅かに内傾。轆轤成形、回転糸切り。	①酸化 ②鈍い黄橙 ③密
545-16 179-16	須恵器 杯	1/4	8.6×6.8×2.4	腰部くびれて体部内湾気味。口唇部尖がる。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや粗・細砂多量
545-17 179-17	須恵器 杯	1/4	12.1×5.0×3.5	底径小さく、体部内湾して開く、轆轤成形。右回転糸切り	①酸化 ②橙 ③やや粗・砂粒多量
545-18 179-18	陶器 小形甕	口縁部	10.6×—×(5.0)	肩部丸く張り、口縁部短かく直立。口唇部丸く肥厚し強く外屈する。内外面に黒褐釉。	①良好 ②灰 ③密
545-19 179-19	須恵器 甕	底部1/2	—×12.5×(3.5)	底部回転糸切。	①軟 ②灰 ③やや粗
545-20 179-20	陶器 播り鉢	口縁部	厚1.3	体部直線的に開き、上半はやや外傾度増す。口唇部内外に小さな下顎をなす断面矩形。内面弧状に楕目。	①酸化気味・やや軟 ②鈍い褐 ③やや粗

7. その他 (Fig. 546~548・PL. 180~182)

ここに掲載した遺物は表土削平時あるいは遺構確認の過程で出土したもので、伴う遺構はもちろんのこと出土区画も不明な遺物が多く表採品として扱う。遺物種には土師器・須恵器・灰釉陶器などの他、小片ではあるが、舶載磁器などがある。遺物の所属時期は奈良時代後半から平安時代・中世に及ぶと考えられる。

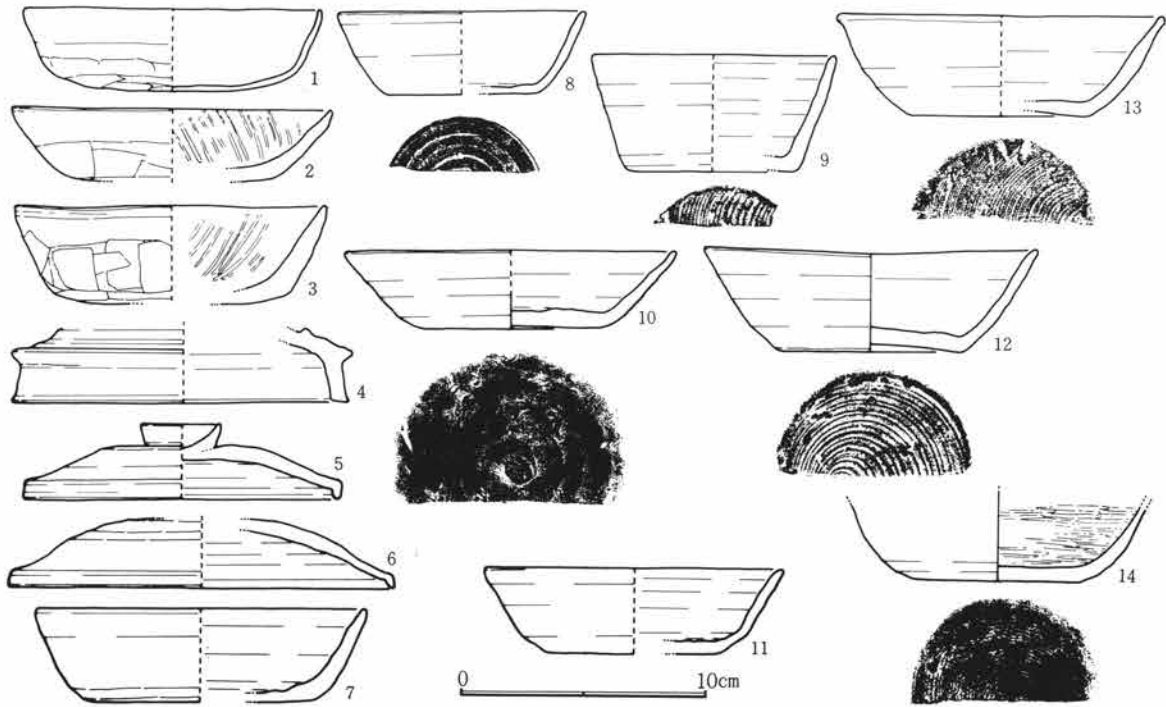


Fig. 546 G区出土遺物(1)

第1節 G区の遺構と遺物

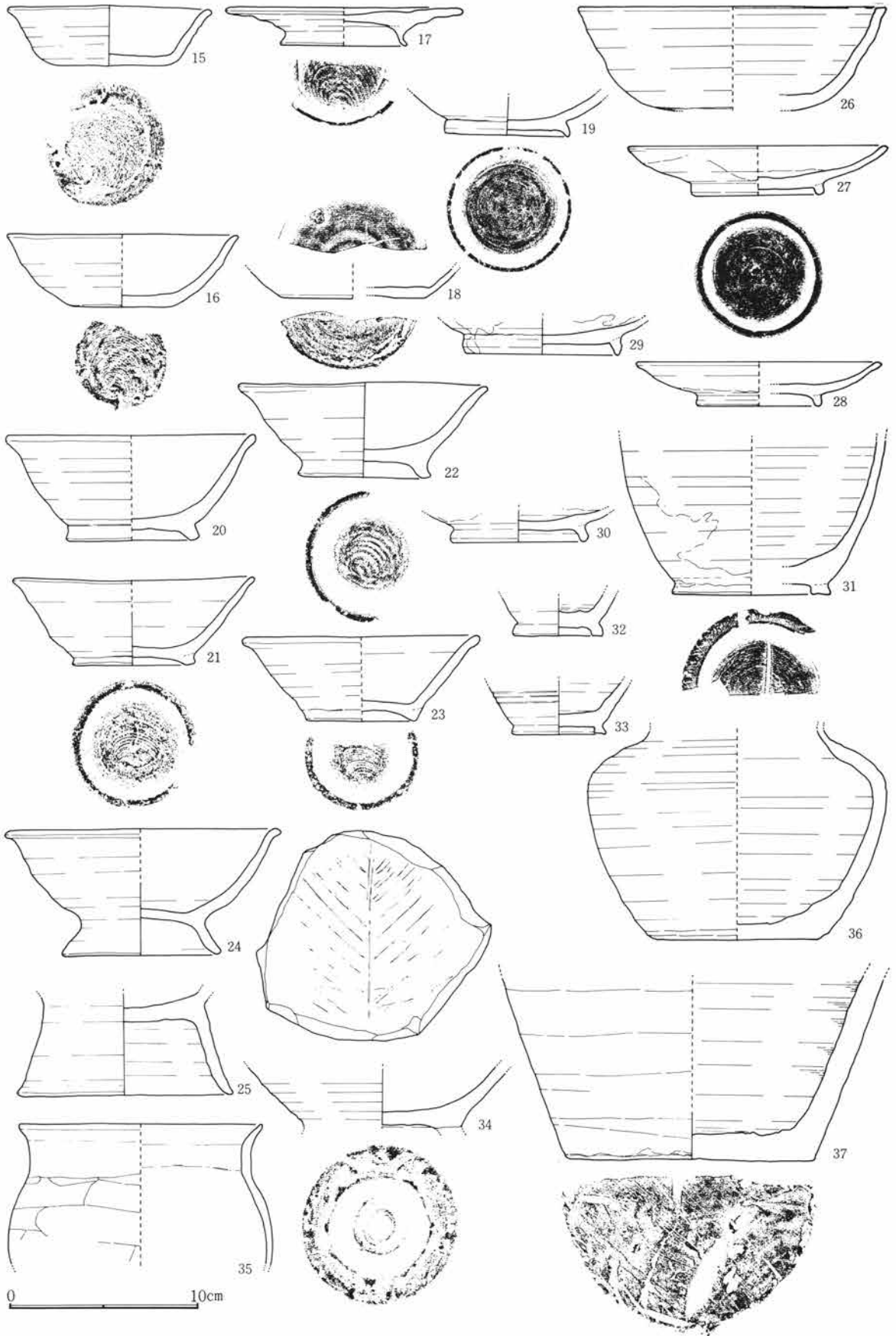


Fig. 547 G区出土遺物(2)

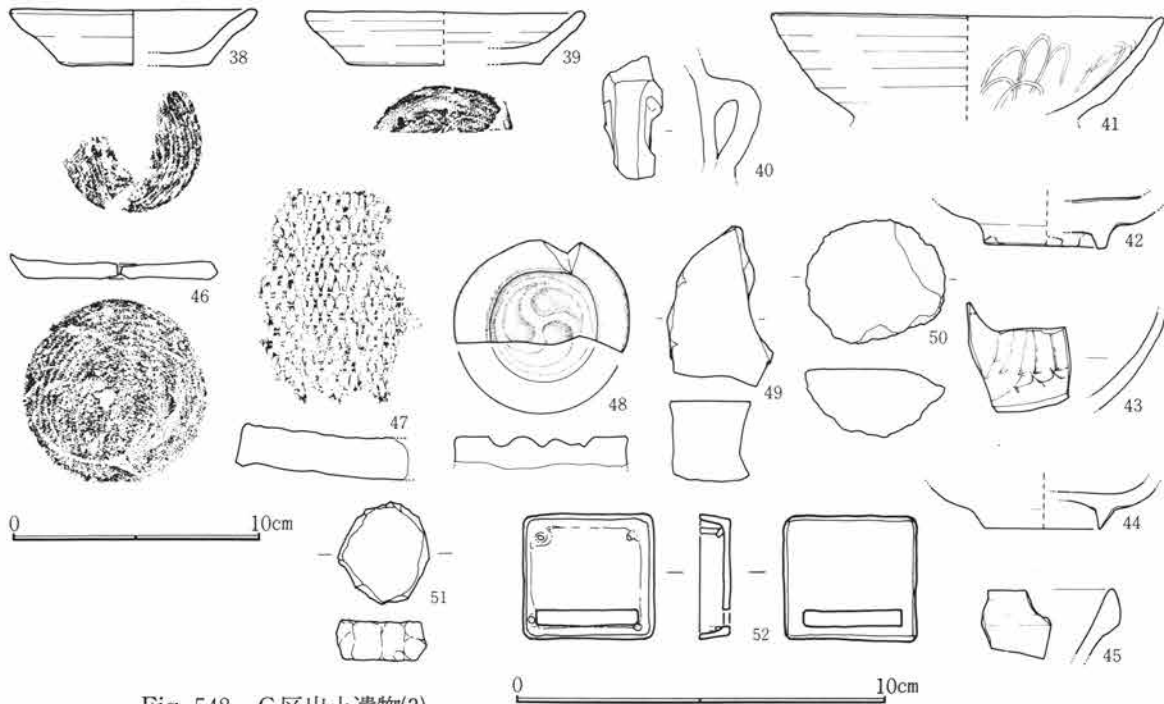


Fig. 548 G区出土遺物(3)

G区出土遺物観察表

Fig. No. PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
546-1 180-1	土師器 杯	1/2	12.0×-×3.3	底部丸味をもち扁平。体部中位で小さくくびれ。口縁部は内湾気味に立つ。口縁部横撫で、体底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗・砂粒多量
546-2 180-2	土師器 杯	1/4	12.9×8.0×(3.0)	底部張り気味の平底。体部直線的。口唇部細る。内面斜行篋磨き。体部横篋削り、底部篋削り。	①良好 ②黄橙 ③密
546-3 180-3	土師器 杯	1/2	12.6×9.4×3.9	器肉厚い。体部直線的、口唇部細い内傾気味。内面斜行篋磨き、口縁部横撫で、体部横・底部不定方向篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③密
546-4 180-4	須恵器 蓋		13.5×-×(2.8)	天井部外縁に凸帯、縁辺は強く突出する。口縁部直線的に小さく開き、口唇部外側に張る。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③やや密
546-5 180-5	須恵器 蓋	1/4	13.0×-×3.1 摘径3.2	天井部平ら。口縁部直に折れ、端部丸い。環状摘。轆轤成形、天井部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密
546-6 180-6	須恵器 蓋		15.6×-×(2.7)	天井部平ら、体部外反気味に開く。口縁部内湾気味に折れ口唇部丸い。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③密
546-7 180-7	須恵器 杯	1/4	13.4×9.6×3.7	底径大。腰部にやや丸味をもち、体部直線的。轆轤成形、回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密
546-8 180-8	須恵器 杯	1/2	10.0×6.2×3.3	体部やや内湾気味で深い。轆轤成形、回転篋削り。	①良好 ②灰 ③密
546-9 180-9	須恵器 杯	1/4	9.8×7.0×4.7	底径大、体部やや深く直立気味に立つ。轆轤成形、回転糸切り。	①良好 ②灰 ③密
546-10 180-10	須恵器 杯	1/2	13.4×7.2×3.1	腰部に丸味をもち、体部直線的に開く、轆轤成形。回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密
546-11 180-11	須恵器 杯	1/4	12.2×7.0×3.4	腰部に丸味をもち、体部やや浅い、轆轤成形、回転篋削り。	①良好 ②明オリーブ 灰 ③やや密
546-12 180-12	須恵器 杯	1/2	13.4×7.2×(4.1)	底径大きく目。体部直線的に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
546-13 180-13	須恵器 杯	1/2	13.2×7.4×4.0	体部丸味をもち、口縁部器肉薄く直線的。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③密
546-14 180-14	内黒土器 杯	1/2	-×6.8×(3.0)	腰部丸味強い。轆轤成形、回転糸切り、内面黒色処理、体部及び見込部篋磨き。	①酸化 ②灰 ③密
547-15 180-15	須恵器 杯	ほぼ完 形	11×6.5×3.2	腰部丸味強く、口縁部緩く外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗・砂粒多量
547-16 180-16	須恵器 杯	1/4	12.2×5.0×3.8	底径小さく体部丸味をもつ、口縁部外反気味。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや密・砂粒混る

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
547-17 180-17	須恵器 皿	1/4	12.6×6.8×2.0	体部直線的で水平気味に開く、付高台、細まり端部は強く外側へ張る。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
547-18 180-18	須恵器 杯	底部	-×7.6×(1.6)	轆轤成形。回転寛削り、見込部に「×」か？篋線刻あり。	①良好 ②灰白 ③やや密
547-19 180-19	内黒土器 碗	底部	-×6.6×(2.3)	付高台・端部尖る。内面黒色処理。轆轤成形。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや粗・砂粒混る
547-20 180-20	須恵器 碗	1/4	13.2×7.2×5.5	腰部にやや丸味をもち、口縁部僅かに外傾。口唇部丸い。付高台、轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
547-21 180-21	須恵器 碗	1/4	12.8×6.6×4.6	体部直線的に開き、口唇部小さく外傾。付高台、低い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
547-22 180-22	須恵器 碗	1/4	13.0×7.0×4.9	体部直線的、口縁部緩く外反気味。付高台、やや幅広く強く外に張る。襷し焼成。	①酸化 ②黒 ③やや粗砂粒混る
547-23 180-23	須恵器 碗	1/4	12.6×5.8×4.4	体部直線的に開く。口縁部緩く外反。口唇部丸まる。付高台、低く断面丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 ②鈍い黄橙 ③やや粗
547-24 181-24	須恵器 碗	1/4	14.5×8.5×6.6	体部中位で僅かに張る。口縁外反して開く。付高台、高く外側に強く張る。轆轤成形。	①酸化やや軟 ②灰黄 ③やや密
547-25 181-25	須恵器 碗	1/4台部のみ	-×11.4×(5.4)	足高台碗の脚部か、高く直線的に立ち、端部やや外へ張る。轆轤成形。	①酸化軟 ②鈍い橙 ③やや密
547-26 181-26	須恵器 碗	体部1/4	16.2×-×(5.4)	腰部に強い丸味をもつ。体部中位で小さくくびれる。口唇部断面矩形を呈す。轆轤成形。	①酸化 ②橙 ③やや密
547-27 181-27	灰釉陶器 皿		13.7×7.1×2.6	体部内湾気味で大きく開く。高台低く丸い。底部回転篋切りか？作り雑。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③やや密
547-28 181-28	灰釉陶器 皿	1/4	13.0×6.6×2.3	体部内湾気味で大きく開く。口縁部緩く外反。高台断面丸い。漬け掛け施釉。底部回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
547-29 181-29	灰釉陶器 碗	底部	-×8.4×1.8	高台は端部尖がり内湾して立つ。	①良好 ②灰白 ③やや粗
547-30 181-30	灰釉陶器 皿	底部	-×7.3×1.7	高台は断面丸く内湾して立つ。作り雑。	①良好 ②灰白 ③やや密
547-31 181-31	灰釉陶器 瓶	下半	-×8.4×(8.0)	胸部僅かに張りをもつ。高台低く幅広。腰部回転篋削り。底部に篋描き線あり。	①良好 ②灰白 ③やや粗
547-32 181-32	須恵器 小瓶？	下半	-×4.8×(2.2)	器肉厚い、付高台、低く幅広で断面矩形。	①良好 ②灰 ③やや粗
547-33 181-33	須恵器 小瓶	下半	-×5.0×(2.6)	付高台、低く幅広で断面矩形。	①良好 ②褐灰 ③やや密
547-34 181-34	須恵器 碗？	底部	-×-×(3.2) 台基径8.3	轆轤成形。右回転糸切り。付高台剝離。底部回転篋調整。見込部に木葉文。	①酸化 ②鈍い橙 ③細砂混る
547-35 181-35	土師器 甕	上半	12.8×-×(7.4)	小形台付甕か、口縁部直立後上半は外傾するコの字口縁。口縁部横撫で、胸部横位篋削り。	①良好 ②明赤褐 ③やや密
547-36 181-36	須恵器 短頸壺	1/4	9.2×8.6×(1.0)	胸部丸味をもち扁平。肩部丸く張る。底部不定方向篋削り腰部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密
547-37 181-37	須恵器 甕		-×13.0×(9.6)	胸部直線的に外傾。内面強い横撫で、底部不定方向篋削り胸部回転篋削り。	①良好 ②明緑灰 ③やや密
548-38 181-38	土器 杯	1/4	10.0×6.0×2.2	底径大きく目。口縁部内湾気味。轆轤成形。左回転？糸切り。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや密
548-39 181-39	土器 杯		11.2×7.8×2.1	底径大。腰部で緩くくびれ体部内湾気味。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや密
548-40 181-40	須恵器 把手			断面矩形。手握ね。	①良好 ②灰 ③やや密
548-41 181-41	須恵器 碗	1/4	15.8×-×(4.1)	轆轤成形。内外面に吸炭。内面螺旋状篋磨き。	①酸化軟 ②鈍い橙 ③やや密
548-42 181-42	青磁 碗	底部	-×5.0×(2.1)	底部器肉厚い。高台幅広で直立。釉調は明緑灰。	①良好 ②明緑灰 ③密
548-43 181-43	青磁 碗	破片		内面に印刻花文か。釉調は灰オリーブ。	①良好 ②鈍い灰黄 ③密
548-44 181-44	青白磁 碗	底部	-×4.6×(1.9)	高台端部は鋭く尖がり内傾して立つ。釉調はあざやかな明緑灰。	①良好 ②白灰 ③密
548-45 181-45	白磁 碗	口縁部破片	13.2×-×(2.8)	口唇部下位が大きく脹らむ玉縁口縁。	①良好 ②灰白 ③白色粒混る

Fig. No PL. No	器 種 形	残存量	計 測 値	器 形 及 び 成 ・ 調 整 の 特 徴、そ の 他	①焼 成 ②色 調 ③胎 土
548-46 182-46	須 惠 器	底部の み	一×7.5	底部中央に外面から穿孔、孔径0.15cm、轆轤成形、左回転糸切り。	①酸化 ②鈍い黄橙 ③密
548-47 182-47	瓦 平 瓦		厚1.5	凹面網代目？凸面強い寛撫で。	①良好 ②灰 ③やや粗・縞状
548-48 182-48	瓦 丸 瓦		径7.1	巴文。釘穴が見られず棧瓦と思われる。燻し焼成、表面黒灰を呈す。	①良好 ②灰 ③密
548-49 182-49	石 製 品 砥 石		6.3×4.3×3.2	多面体。多面使用。重39.4g。	角閃石安山岩
548-50 182-50	石 製 品 砥 石		5.5×4.7×2.8	1面使用。重46.6g。	角閃石安山岩
548-51 182-51	土 製 品 メ ン コ		2.7×2.5×1.0	須惠器甕等の体部破片利用。小型メンコ。周縁打割。	①良好 ②灰白 ③やや密
548-52 182-52	銅 製 品 帯 金 具		縦3.2 横3.5 厚さ0.7	巡方。断面台形を呈し下端に長方形透し。裏面留鋸痕4個	

第2節 H区の遺構と遺物

H区は鳥羽遺跡調査域のほぼ中央部を占め、前橋市元総社町に所属するが調査区の西縁及び北縁は群馬町と境界を接するあたりにある。

発掘調査は調査域の東側道部の一部を昭和57年度に、また本線部分は翌58年度に実施された。調査面積は約4,800㎡である。

当区で検出された遺構・遺物のうち、竪穴住居跡とH1号掘立柱建物跡は既刊の『鳥羽遺跡』G・H・I区 1986 に報告したが再度概略を記す。なお既刊報告の第4章 第1節H区の概要で竪穴住居跡の軒数に誤りがあり、また所属時期別数に変更を生じた。本報告で改めて記し訂正したい。ここに記載した住居跡の中には竈など住居付属施設が検出されない遺構も含まれるが、その形状や規模から通常知られる住居跡に想定されるものを加えてある。

竪穴住居跡は総数52軒（前回50軒）検出され、調査域内の分布状態にはそれほど偏在傾向は見られない。古墳時代から奈良・平安時代に属し、おおよその所属時代の内訳は古墳時代後半1、奈良時代34、平安時代12（前回8）、不明5である。

H1号掘立柱建物跡は鳥羽遺跡で検出された数多い遺構の中でも隣接するI区の鍛冶工房跡群と並んで注目される遺構である。所属時期は奈良時代に比定され、2間×2間・3間×3間の二重配列された掘立柱建物跡を中心に三重の溝ないしは濠と一重の柵列からなり50m方形の規模をもつ。遺構の性格については神社建築説が現在のところ有力であるが今後に残された問題も多い。

当報告は上述以外の遺構井戸跡・土坑・溝などが中心である。井戸跡は11基確認・検出されており、鳥羽遺跡の調査区内でも多数を抱える区である。出土遺物の希少さや、埋土の状況から古代に属するものは知られていない。土坑は多数検出されているが分布状態は中央部やや南寄りの他遺構がまばらな地点にある程度の集中傾向が見られる。溝は大・小規模8条が検出されている。調査城南側を東西走るH6号溝やこれに合するH2号溝は主幹的存在である。また未報告地区にはH6号溝と同規模で類似走向するものが2～3確認されており、これらの溝は鳥羽遺跡とその周辺域に対し地割的性格をもつ可能性が考えられる。

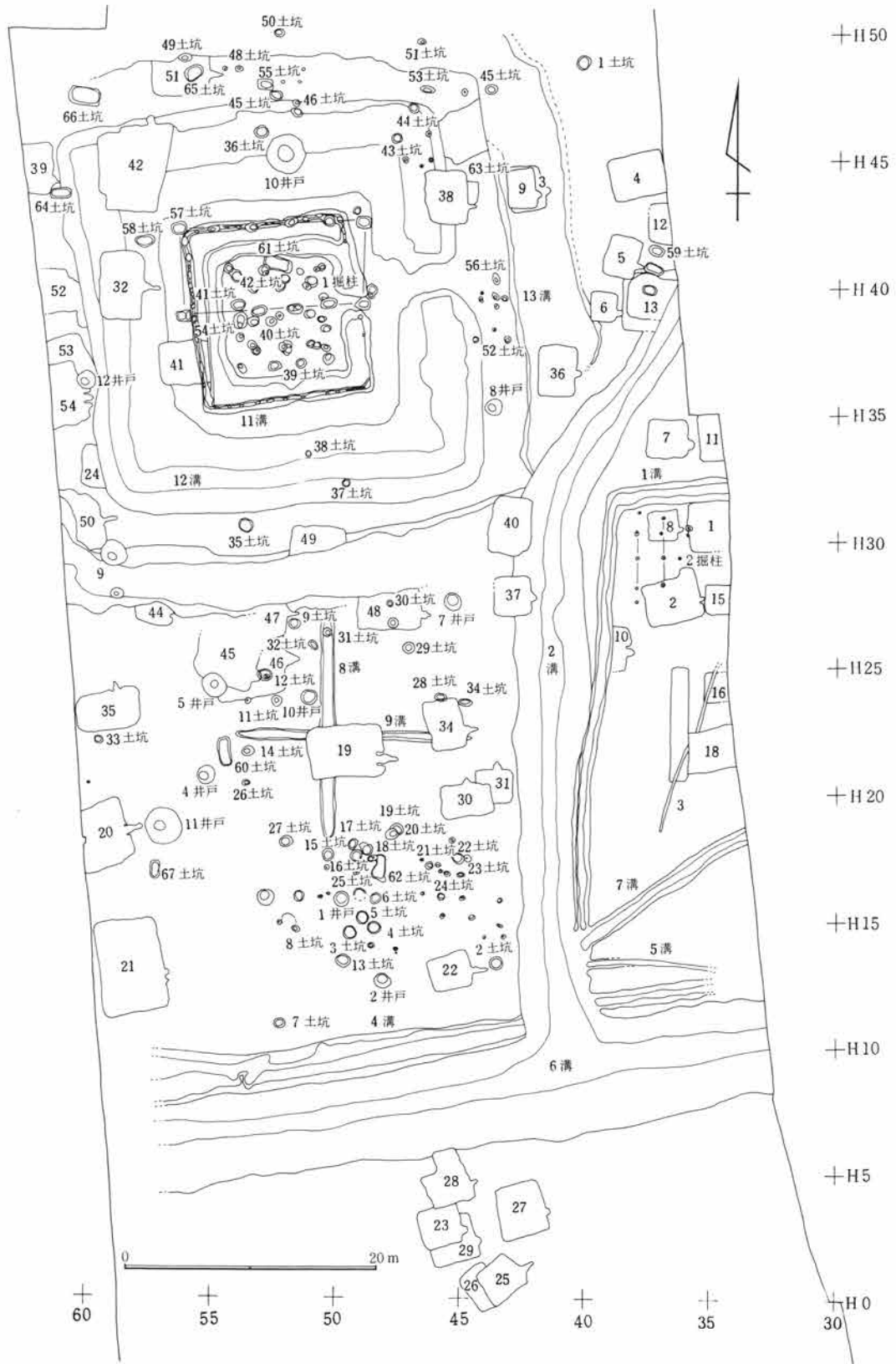


Fig. 549 H区全体図

1. 掘立柱建物跡

H 2号掘立柱建物跡 (Fig. 550)

H区東側中央部に位置し、36・37H28～30の範囲にある。H 8号・H21号住居跡に一部かかるが両者との新旧関係をとらえることができず不明である。平面形は2間×1間で南北方向に棟行をもつ。東西方向南側桁筋は西柱穴がやや外側にありそろわない。棟行東辺は4.15m・西辺は4.35m、桁行は2.1mを測り、棟行方位はN-3°-Wを示す。棟行東辺の北・西辺の南と中央桁行東に1.1～1.3mの間隔で柱穴が検出されているが主屋との関係は不明である。主穴は円形掘形で径30cmの近似した大きさをもつ。出土遺物はなく時期決定はできないが埋土の状況より奈良～平安時代に属すると考えられる。

H 3号掘立柱建物跡 (Fig. 551)

H区の北側に位置し、48～56H38～42の範囲にある。H 1号掘立柱建物跡と重複しているが両者の新旧関係は不明である。桁行方向の柱間にかなりの間隔があり建築物とすれば構造上かなり無理な面もあると思われる。しかしPit間を結ぶ線はすべてに合致し、乱れのない方形区画をなすためここでは掘立柱建物跡として扱う。平面形は1間×5間で東西方向に棟行をもち、長大である。棟行南辺・北辺とも14.4m。桁行東辺・西辺とも6.4mを測る。棟行柱間は東西外側の1間が2.4mと同距離に対し内側の3間は3.2mで統一されている。棟行方位はN-85°-Eを示す。ちなみにH 1号掘立柱建物跡関連の方位はN-80°～88°-Eの範囲に納まる。柱穴掘形は1.2×0.8～1mの楕円形を呈する大形の掘形で柱痕と思われる小穴が検出されるものもある。

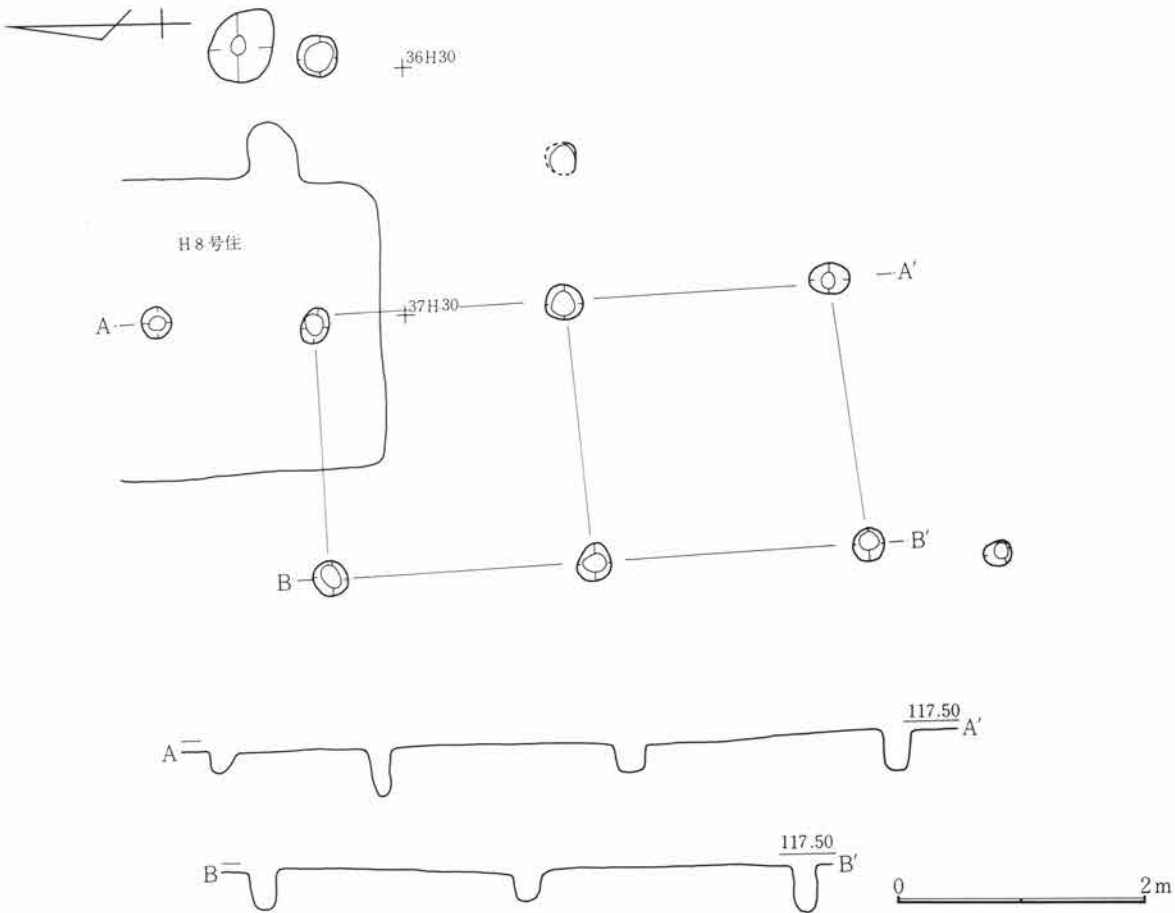


Fig. 550 H 2号掘立柱建物跡

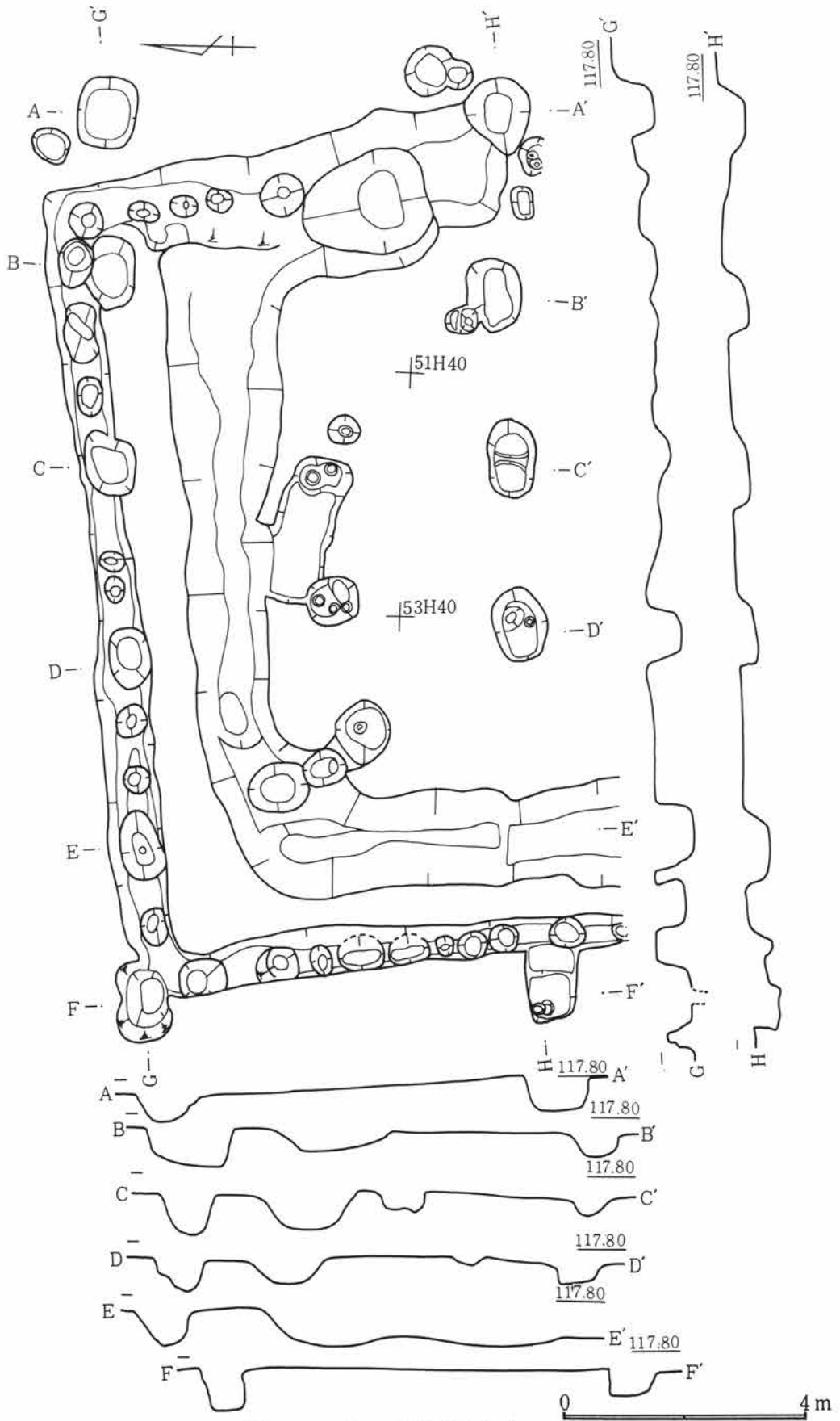


Fig. 551 H 3号掘立柱建物跡

2. 井戸跡

H 1号井戸 (Fig. 552)

H区南側中央部に位置し、ほぼ49H15の範囲にある。埋土上層は浅間山降下B軽石層が、また下位は砂質土の互層で埋まる。平面形は整った円形を呈するが、平面規模に比べ深い掘り込みをもつ。検出面での上径は1.2mを測り、50cmの深さまで偏平なU字形断面で以下は径70cmの筒円筒型である。底面の検出作業は内部が小径のため困難を極め確認できず、深さ2.9mまでで作業を中止した。調査範囲内での壁面は崩落もなく良好な遺存状態で、湧水帯水層に至らないと考えられる。井戸枠等の痕跡はなく素掘井戸であろう。

H 2号井戸 (Fig. 552)

H区南側中央部に位置し、47・48H12の範囲にある。埋土上層は浅間山降下B軽石層が堆積し、下位は砂質層で埋まる。平面形は整った円形を呈す。上面径1.2mを測り検出面より約60cmの深さまでH 1号井戸と同様な形状を呈し偏平なU字断面となる。これより下部は径を80cmに縮めて筒円筒型となる。検出面からの深さ2.7mで底面は平坦である。壁面の崩落はなく良好な遺存状態で湧水帯水層に達していない。調査時も湧水は見られなかった。井戸枠などの施設は検出されず素掘井戸である。

H 4号井戸 (Fig. 552、557・PL. 182)

H区中央やや西寄りに位置し、54・55H20の範囲にある。埋土は浅間山降下B軽石を主体にした砂質土で埋まる。平面は1.5×1.3mの楕円形を呈するが、底面の形状から上面は隅丸方形を意味したと考えられる。検出面より約40cmの深さまでやや大きめに開口し以下65~70cmの方形に掘り込む。底面は南東部が方形に20cmほど深く落ち込んでおり、掘削を途中で中止したと考えられる。検出面よりの深さ1.9mを測る。壁面の崩落は見られず、調査時の湧水もなかった。

H 5号井戸 (Fig. 552、557・PL. 182)

H区中央やや西寄りに位置し、54H24の範囲を中心にある。H45号・H46号住居跡と重複するが両者より新しい時期の所産である。埋土は深さ3m付近までLoam塊を多量に含む土層で人為的埋戻しが考えられ、以下浅間山降下B軽石を主体にした自然堆積土である。平面形は円形を呈し上面径約2mで検出面より約80cmまでやや大きく開口し、下位は径70cmの筒円筒型となって断面漏斗状である。深さ4.5mを測り、底面は径50cmで平坦である。壁面は深さ3.6mと3.9mの地点に小さな崩落が見られ湧水帯水層を認める。調査時の自然水深は約1.5mである。井戸枠などは認められず素掘井戸であろう。出土遺物は木片・竹片・須恵器片などがある。

H 6号井戸 (Fig. 553、556・PL. 148)

H区中央部に位置し、47・48H26・27の範囲にある。H48号住居跡と重複するがこれより新しい時期の所産である。埋土は上半部に浅間山降下B軽石を主体にし、中位から下位にかけて多量のLoam塊を含む堆積層で埋まる。平面は径1.45m×1.1mの楕円形を呈し、検出面より50cmまで北東部がやや大きく開口する。下位は径95cmの筒円筒型になる。検出面よりの深さ約5m、底径1.3mで平坦をなす。壁面は深さ42mの地点で大きく崩落し湧水帯水層が認められる。調査時の自然水深は1.6mに達した。井戸枠などは認められず素掘井戸であろう。出土遺物には曲げ物底板と考えられる木製品がある。

H7号井戸 (Fig. 553・PL. 149)

H区中央部僅かに東に寄って位置し、45H27の範囲にある。埋土は中位まで浅間山降下B軽石主体、中位から下位にかけてB軽石主体層に10~25cm大の川原石が多量に混じり人為的埋戻しかと思われる状況がある。平面は径1.3~1.4mの円形を呈し、検出面より90cm程度の範囲で緩く開口する。以下は径約75cmの筒円筒型で底面近くで細まり底径は25cm程度になる。検出面よりの深さ4.5mを測り、壁面の崩落も少なく比較的安定した状態である。井戸枠などは検出されず素掘井戸であろう。出土遺物は獣骨・須恵器・土師器・木片などが検出されている。獣骨は馬骨と思われるが詳細は不明である。

H8号井戸 (Fig. 553・PL. 149)

H区北東寄りに位置し、43H35を中心とした範囲にある。埋土は浅間山降下B軽石を主体にした砂質層である。平面は径1.3mの円形を呈し、検出面より70~80cmの深さから緩く開口する。以下は径70cmの筒円筒型で底面径50cm・深さ4.6mを測る。壁面は深さ2.1~3mの間で多少の崩落が見られ湧水帯水層の範囲と思われる。調査時の湧水は水深約1.4mである。井戸枠などは検出されず素掘井戸であろう。出土遺物は土師片など多少検出された。開口部下位西側壁面に長さ1m程度の線上凹部が残り、開削時あるいは水を吸い出す際の痕跡かと思われる。

H9号井戸 (Fig. 553・PL. 149)

H区の西側に位置し、58・59H29の範囲にある。H1号掘立柱建物跡に伴うH13号溝と重複するがこれより新しい時期の所産である。埋土は浅間山降下B軽石を主体とする土層で埋まる。平面は径2.35mの円形を呈し、検出面より約90cmの深さまで大きく開口し、以下は径1m前後の筒円筒型で、深さ3.45mを測る。深さ2.8mで南西壁面に大形の地山石が存在する。この礫を避けるためか底面近くは壁面の径を70~80cmに減じている。壁面には湧水帯水層を示す崩落はなく調査時には湧水は見られなかった。出土遺物はなく、井戸枠などの痕跡も認められなかった。

H10号井戸 (Fig. 553、558・PL. 149、182)

H区の北側に位置し、51・52H45を中心とした範囲にある。H1号掘立柱建物跡に伴うH12号溝中にあるが、これより新しい時期の所産である。埋土は浅間山降下B軽石を主体とする土層で埋まる。平面は径3~3.1mのほぼ円形を呈する。検出面より1.5mの深さまで大きく開口し、以下径80cmの筒円筒型をなすが深さ3.2m地点より著しい崩落があり径2~2.5mに広がる。全体断面形状は大きく口の開く徳利状を呈す。出土遺物は木片・須恵器片などがある。調査時の水深は約1.7mに及んだ。井戸枠などは認められず素掘井戸と思われる。

H11号井戸 (Fig. 554、559・PL. 149、182)

H区の南西部に位置し、56・57H18の範囲を中心にある。埋土は上位が浅間山降下B軽石を主体とし、中位はB軽石層にLoam塊を混じえる人為的埋土と考えられる。下位は井戸崩落崩土が多量に含まれる。平面は径2.8mの円形を呈し、深さ1.5mまでは大きく開口し以下径90cmの筒円筒型で漏斗状になる。底面近くは崩落が見られ湧水帯水層に達し、深さ5.5mを測る。調査時の湧水による水深は約2mに達した。出土遺物は須恵器片などがある。井戸枠などは認められず素掘井戸と思われる。

H12号井戸 (Fig. 555・PL. 149)

H区の北西部に位置し、60H36を中心とした範囲にある。H53号・H54号住居跡と重複し両者より新しい時期の所産である。埋土は浅間山降下B軽石を主体とする層で埋まる。平面は径90cmの円形を呈し、当区検出の井戸跡では最も小形である。検出面より約90cmの深さまでやや大きめに開口して壁面に明瞭な段をなし、以下径50cmの筒円筒型をなす。底面は平坦をなし深さ約2mを測る。壁面には崩落が見られず湧水帯水に至っていないと考えられる。出土遺物は検出されなかった。

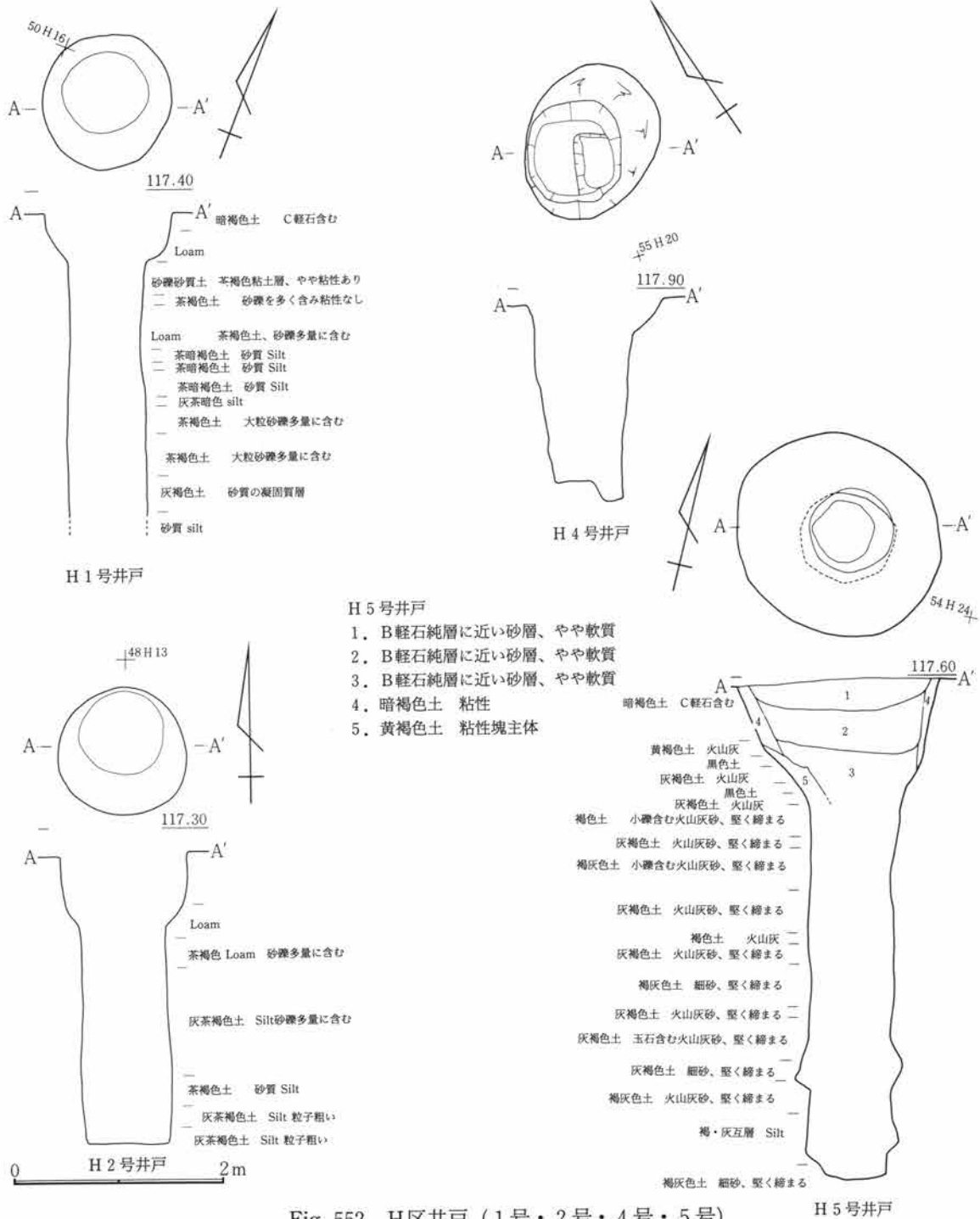


Fig. 552 H区井戸 (1号・2号・4号・5号)

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

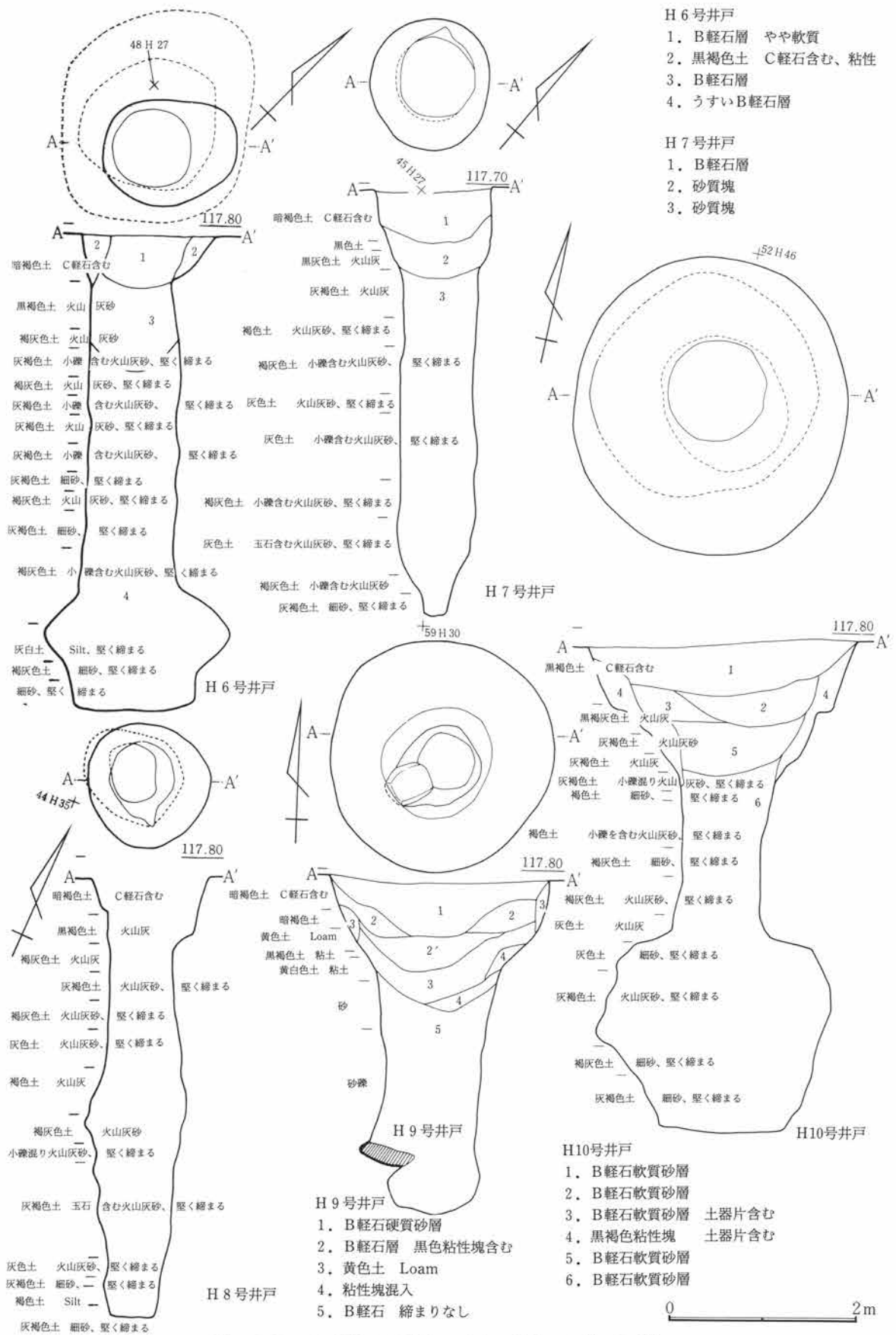
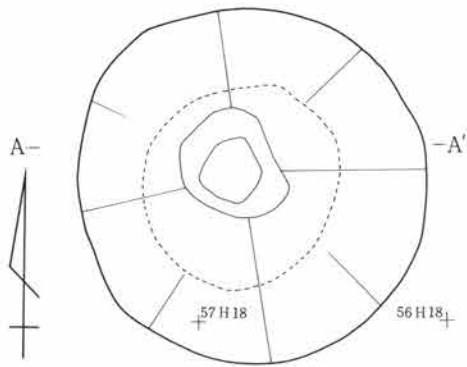


Fig. 553 H区井戸 (6号・7号・8号・9号・10号)

第2節 H区の遺構と遺物



H11号井戸

1. B軽石少量含む硬質砂層
2. B軽石含む硬質砂層
3. やや多くB軽石含む硬質砂層
4. B軽石層 黄褐色粘性塊含む
5. 硬質砂層 黄褐色粘性塊少量含む
6. 黄褐色硬質粘性塊多量に含む
7. Loam 土層
8. 灰色砂層



Fig. 554 H11号井戸

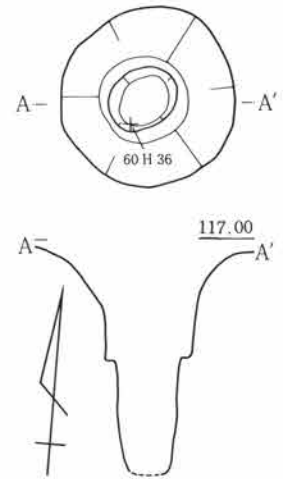


Fig. 555 H12号井戸

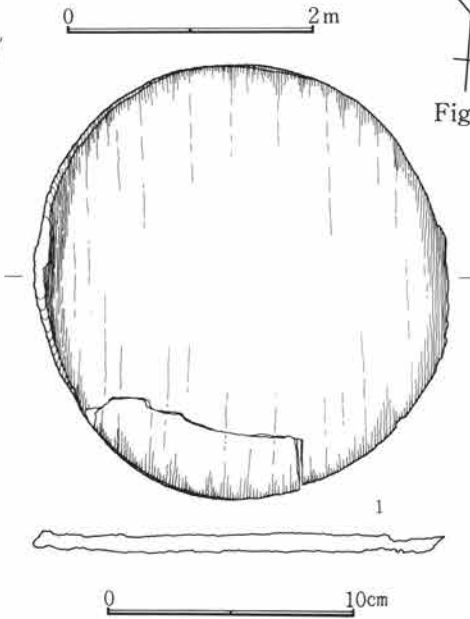


Fig. 556 H 6号井戸出土遺物

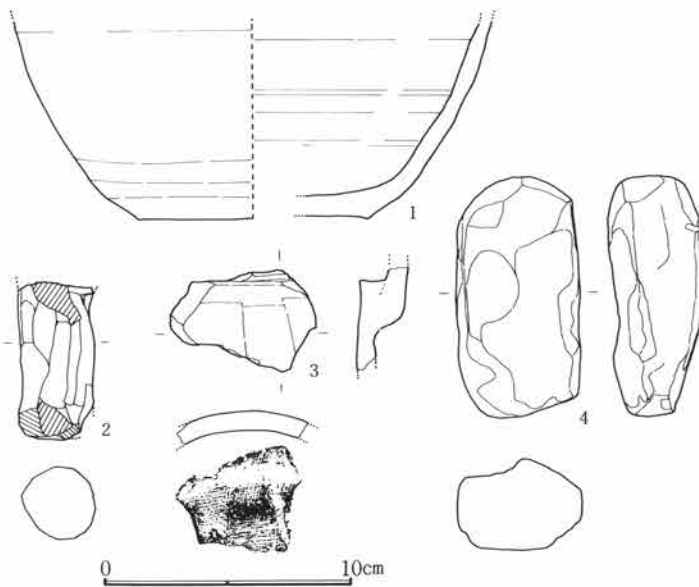


Fig. 557 H 4号1・3・4・H 5号2井戸出土遺物

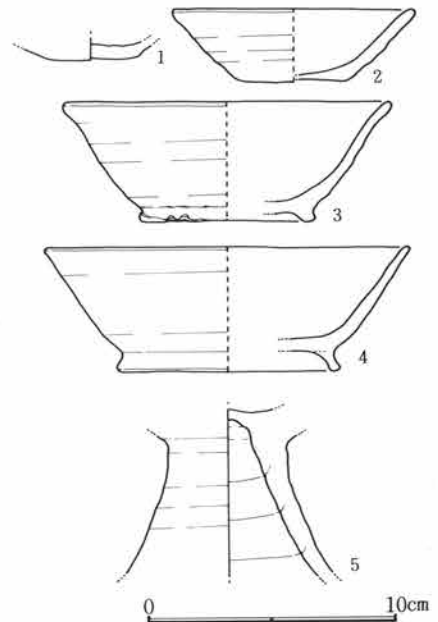


Fig. 558 H10号井戸出土遺物(1)

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

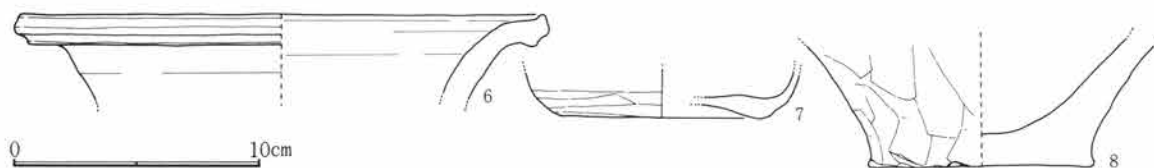


Fig. 559 H10号⁶・H11号^{7・8}井戸出土遺物(2)

H 4号井戸出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
557-1 182-1	須恵器 壺	底部 $\frac{1}{4}$	- $\times 9.4 \times (7.9)$	腰部に丸味をもつ。轆轤成形。底部・腰部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや粗・小石混る
557-2 182-2	須恵器 獸足	脚部	径2.8 長(12.2)	棒状手練成形。面取り状に縦篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密
557-3 182-3	瓦 丸瓦	小片	厚0.8	凹面布目。凸面篋撫で、有頸軒平瓦、小型になるか	①良好 ②灰 ③やや粗・砂粒混る
557-4 182-4	石製品 砥石		幅6.1厚3.6 長9.5	多面使用 重233.5g	流紋岩

H 6号井戸出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
556-1 182-1	木製品		径16.4厚0.7	一枚板。曲物の底板と思われる。柁目板使用。	

H10号井戸出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
558-1 182-1	須恵器 杯	底部	- $\times 3.8 \times 0.8$	轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや粗・砂粒多量
558-2 182-2	須恵器 杯	$\frac{1}{2}$	9.8 \times 4.2 \times 3.0	底部の器肉薄い、体部直線的に外傾。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや密
558-3 182-3	須恵器 杯	$\frac{1}{4}$	13.0 \times 7.0 \times 4.8	体部丸味をもち、口縁部外反して開く。付高台、低く作り雑。燻し焼成。轆轤成形。	①酸化軟 ②黒褐 ③やや粗
558-4 182-4	須恵器 碗	小片	14.6 \times 8.6 \times 5.0	腰部に張りをもつ。体部直線的に外傾。付高台。轆轤成形	①良好 ②灰 ③やや密
558-5 182-5	須恵器 高杯	脚部	長(6.7)	内面に巻き上げ痕明瞭。	①良好 ②灰 ③やや密
559-6 182-6	須恵器 甕	口縁部 $\frac{1}{2}$	21.6 \times - \times (3.5)	口縁部水平に近く外反する。口唇部矩形を呈し、外面下位に凸帯状の下顎をなす。	①良好 ②灰白 ③やや密・黒色粒混る

H11号井戸出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
559-7 182-7	須恵器 杯	底部 $\frac{1}{2}$	- $\times 8.0 \times 1.9$	轆轤成形。右回転。底部回転篋削り、腰部手持ち篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密
559-8 182-8	須恵器 鉢	下半 $\frac{1}{2}$	- $\times 9.1 \times (4.8)$	輪篋撫で成形。体部下位縦方向後底部不定方向篋削り調整。内面自然釉付着。器肉厚い。	①良好 ②灰 ③やや密

3 土 坑 (Fig. 560~565)

遺構名	位置	形状	長軸方位	長 \times 短 \times 深	備考
H 1号土坑	39・40H48・49	円形	—	1.24 \times 1.18 \times 0.28	土器片出土。埋土は炭化粒を含む。浅間山降下B軽石層主体。底面すり鉢状。
H 2号土坑	43H13	円形	—	0.86 \times 0.90 \times 0.12	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面平坦。
H 3号土坑	49H14	円形	—	0.98 \times 0.94 \times 0.44	底面に小児頭大の川原石。底面平坦。
H 4号土坑	48H14	円形	—	0.96 \times 0.94 \times 0.30	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面平坦。

第2節 H区の遺構と遺物

遺構名	位置	形状	長軸方位	長×短×深	備考
H5号土坑		円形	—	0.94×0.90×0.14	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面平坦。
H6号土坑		円形	—	0.90×1.82×0.16	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面平坦。
H7号土坑	51・52H10・11	円形	—	0.94×0.84×0.56	土器片・小石出土。埋土は浅間山降下B軽石層。底面ややすり鉢状に窪む。
H8号土坑	51H14	円形	—	0.82×0.74×0.24	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面平坦。
H9号土坑	51H26	円形	—	0.76×0.76×0.40	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層、純度高い。底面僅かに窪む。
H10号土坑	50・51H23・24	楕円形		1.23×1.12×0.24	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面平坦。
H11号土坑	52H41	楕円形	N-3°-W	1.00×0.87×0.23	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。府面僅かに窪む。
H12号土坑	52・53H24	楕円形	N-83°-W	1.20×0.94×0.40	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面に窪み。
H13号土坑	49H13	円形		0.88×0.82×0.46	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面に不規則な窪み。
H14号土坑	53H21	楕円形	N-87°-W	1.01×0.90×0.20	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面は緩く窪む。
H15号土坑	50H17	円形	—	0.98×0.84×0.33	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面北側はやや高い。
H16号土坑	48・49H17	円形	—	0.87×0.82×0.20	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面平坦。
H17号土坑	49H18・19	円形	—	0.77×0.78×0.23	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面平坦。
H18号土坑	48H18	不整形円形	N-66°-W	1.10×0.82×0.46	無遺物。底面平坦。
H19号土坑	47H18	円形	—	0.88×0.84×0.40	無遺物。20号と重複するが新旧不明。底面平坦。
H20号土坑	47H18	円形	—	0.79×0.75×0.44	無遺物。19号と重複するが新旧不明。底面平坦。
H21号土坑	46H17	円形	—	0.62×0.54×0.38	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面やや凹凸あり。
H22号土坑	44・45H17	楕円形	N-47°-W	0.91×0.76×0.33	無遺物。底面に径25cmのPit状落ち込み。
H23号土坑	44H17	円形	—	0.61×0.60×0.22	無遺物。底面はすり鉢状。
H24号土坑	45H16	楕円形	N-16°-E	0.58×0.50×0.12	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面平坦。
H25号土坑	48・49H15・16	円形	—	1.03×(0.58) ×0.22	無遺物。南半は削平。埋土は浅間山降下B軽石。底面すり鉢状。
H26号土坑	53H20	円形	—	0.59×0.52×0.40	無遺物。埋土は砂質層に浅間山降下C軽石粒含む。底面緩く湾曲。
H27号土坑	51・52H17・18	円形	—	0.80×0.77×0.31	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層
H28号土坑	45・46H23	楕円形	—	0.96×0.60×0.36	無遺物。東側は突出し底面高く段状になる。重複か。
H29号土坑	46・47H25	円形	—	1.00×0.90×0.26	無遺物。底面は緩いすり鉢状。
H30号土坑	47H27	円形	—	0.54×0.52×0.43	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面平坦。
H31号土坑	50H26	円形	—	0.44×0.38×0.08	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面平坦。H8号溝と重複し新しい。
H32号土坑	50・51H25・26	楕円形	N-24°-W	0.85×0.57×0.12	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面平坦。
H33号土坑	59H21・22	円形	—	0.77×0.72×0.43	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面南半は深く落ち込む。
H34号土坑	44・45H23	楕円形	N-88°-W	0.95×0.51×0.34	無遺物。埋土は上位に浅間山降下B軽石層。西半は深く落ち込む。

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

遺構名	位置	形状	長軸方位	長×短×深	備考
H35号土坑	53H30	楕円形	N-54°-W	1.18×1.06×0.30	無遺物。埋土は純堆積に近い浅間山降下B軽石層。底面は緩く湾曲。
H36号土坑	53H46	円形	—	100×0.84×0.15	無遺物。H12号溝と重複し新しい。埋土は浅間山降下B軽石主体。底面平坦。
H37号土坑	49H32	円形	—	0.64×0.58×0.50	無遺物。上位に灰層が堆積。底面西側が窪む。
H38号土坑	51H33	円形	—	0.50×0.48×0.26	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面平坦。
H39号土坑	51・52H37	円形	—	0.96×0.94×0.15	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面緩く窪む。
H40号土坑	52H38	円形	—	0.69×0.63×0.11	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面平坦。
H41号土坑	53・54H39	楕円形	N-15°-W	0.74×0.54×0.39	無遺物。埋土は褐色土で古代に属するか。
H42号土坑	52H39・40	円形	N-78°-W	0.84×0.78×0.24	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面は緩くすり鉢状。
H43号土坑	47H45・46	円形	—	0.70×0.67×0.41	土器片出土、埋土は浅間山降下B軽石層。底面平坦。
H44号土坑	47・48H46・47	楕円形	N-68°-W	0.88×0.70×0.58	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石主体。底面平坦。
H45号土坑	43・44H47	円形	—	0.92×0.87×0.32	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石主体。底面緩くすり鉢状。
H46号土坑	51H47	円形	—	0.51×0.49×0.59	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石主体。断面は柱穴状を呈す。
H47号土坑	52H47	隅丸長方形	N-68°-W	0.88×0.65×0.39	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石主体。底面平坦。
H48号土坑	53・54H48	楕円形	N-35°-W	0.62×0.55×0.08	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石主体。底面緩いすり鉢状。
H49号土坑	55・56H48・49	円形	—	0.94×0.81×0.21	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石主体。底面緩いすり鉢状。
H50号土坑	52H49・50	楕円形	—	0.76×0.54×0.28	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石主体。底面平坦。
H51号土坑	46H49	円形	—	0.69×0.53×0.43	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石主体。底面平坦。
H52号土坑	43H37・38	円形	—	0.52×0.51×0.24	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面緩いすり鉢状。
H53号土坑	46H46・47	楕円形	N-73°-W	1.10×0.36×0.22	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石主体。底面すり鉢状。
H54号土坑	53・54H37	楕円形	N-26°-W	1.10×0.83×0.20	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石主体。底面緩いすり鉢状。
H55号土坑	52・53H47・48	不整形円形	N-86°-W	1.14×0.83×0.30	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石主体。底面すり鉢状。
H56号土坑	43H40	隅丸長方形	N-10°-W	0.89×0.51×0.38	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石主体。
H57号土坑	55・56H41・42	隅丸長方形	—	1.30×0.81×0.16	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面平坦。
H58号土坑	57・58H41	楕円形	N-84°-W	1.84×1.00×0.20	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石主体。底面弱く波うつ。
H59号土坑	36・37H41	隅丸長方形	N-63°-W	1.56×0.92×0.28	こぶし大川原石。埋土にC軽石、焼土・炭化粒含む。古代か底面緩く窪む。
H60号土坑	54H20~22	隅丸長方形	N-4°-W	2.26×0.92×0.13	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石主体。底面平坦。
H61号土坑	51・52H40・41	隅丸長方形	N-74°-W	2.05×0.94×0.18	土師器小片。埋土は浅間山降下B軽石主体。底面平坦。
H62号土坑	47・48H16・17	不整形円形	N-8°-W	2.02×1.27×0.25	無遺物。西側壁線突出。重複か。埋土は浅間山降下B軽石主体。
H63号土坑	44・45H43・44	隅丸長方形	N-0°-W	1.65×1.20×0.19	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石主体。底面平坦。
H64号土坑	60・61H43	隅丸長方形	N-78°-W	1.56×0.90×0.10	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石主体。底面平坦。

第2節 H区の遺構と遺物

遺構名	位置	形状	長軸方位	長×短×深	備考
H65号土坑	50・51H28	楕円形	N-56°-E	2.10×1.49×0.38	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石主体。底面平坦。
H66号土坑	59・60H47	隅丸長方形	N-78°-W	2.51×1.45×0.30	土師器小片。埋土に浅間山降下C軽石含む古代に属するか？底面平坦。

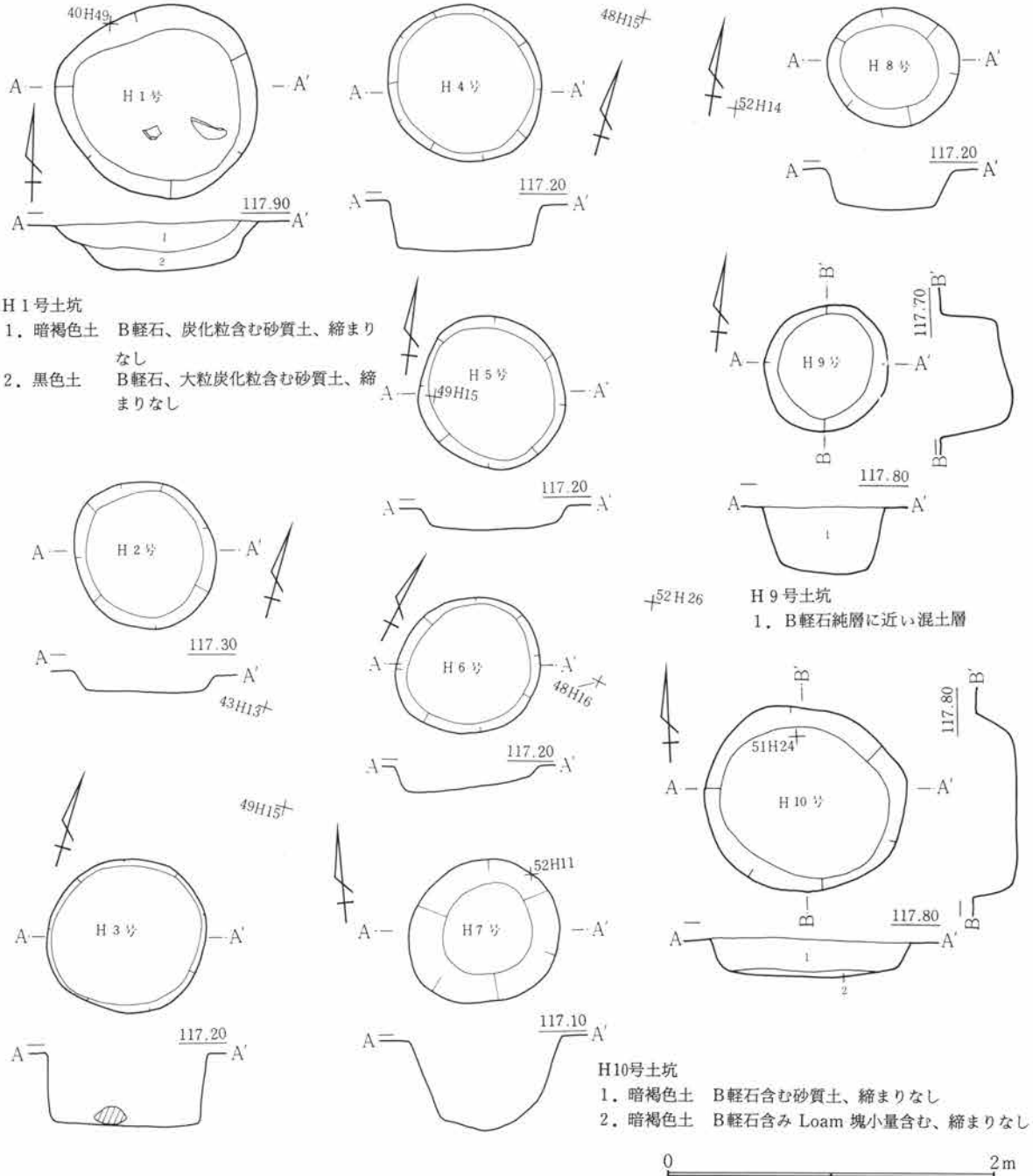


Fig. 560 H区土坑(1)

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

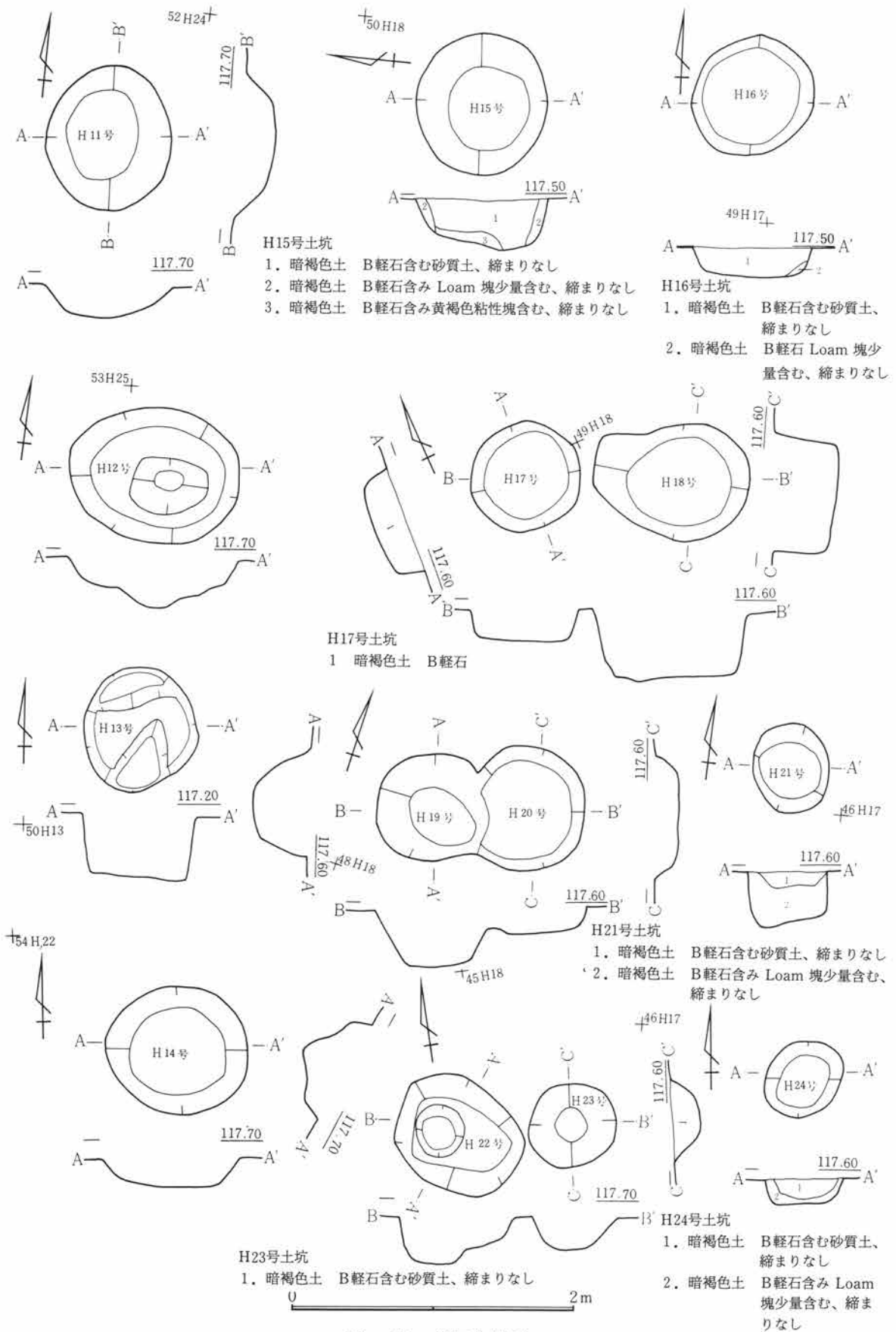
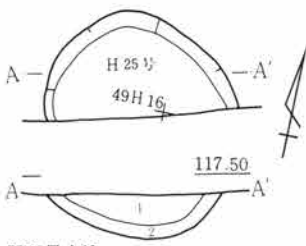


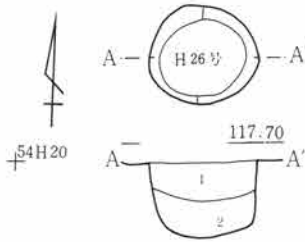
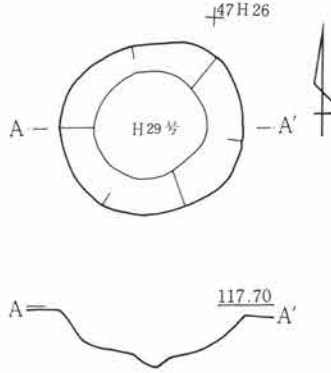
Fig. 561 H区土坑(2)

第2節 H区の遺構と遺物



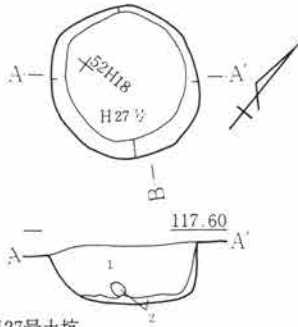
H25号土坑

1. 暗褐色土 B軽石含む、縮まりなし
2. 暗褐色土 B軽石 Loam 塊少量含む、縮まりなし



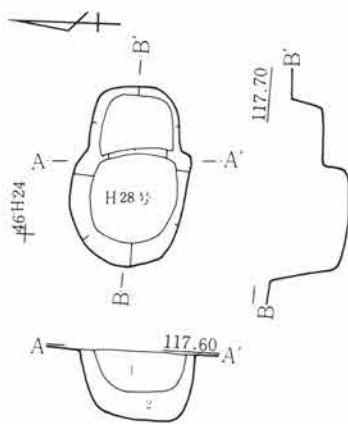
H26号土坑

1. C軽石含む硬質砂層
2. 炭化粒塊む砂層



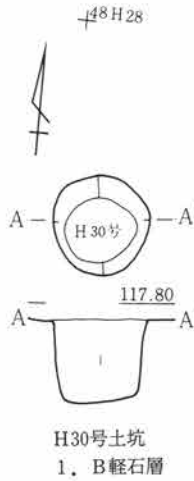
H27号土坑

1. 暗褐色土 B軽石含む砂質土、縮まりなし
2. 暗褐色土 B軽石含む Loam 塊少量含む、縮まりなし

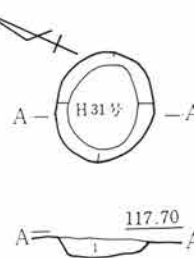


H28号土坑

1. 暗褐色土 B軽石含む砂質土、縮まりなし
2. 暗褐色土 B軽石、Loam 塊少量含む、縮まりなし



H30号土坑
1. B軽石層



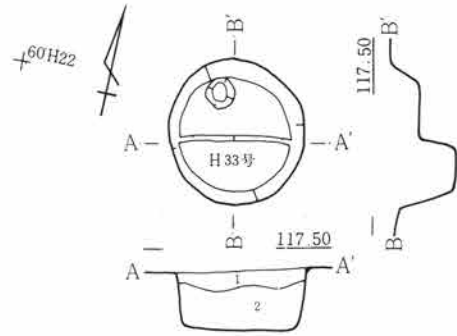
H31号土坑

1. 暗褐色土 B軽石含む砂質土、縮まりなし



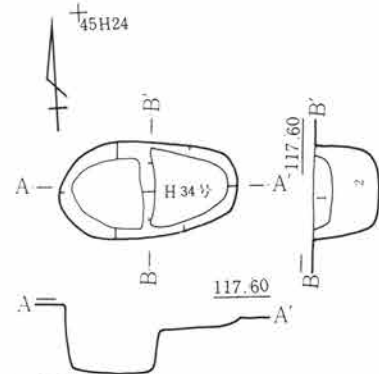
H32号土坑

1. 暗褐色土 B軽石含む砂質土、縮まりなし



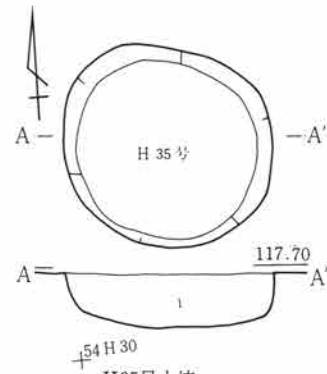
H33号土坑

1. 暗褐色土 B軽石少量含む砂質土、縮まりなし
2. 暗褐色土 B軽石含む Loam 塊少量含む、縮まりなし



H34号土坑

1. 暗褐色土 B軽石含む砂質土、縮まりなし
2. 強粘硬質土



H35号土坑

1. B軽石純層に近い硬質砂層

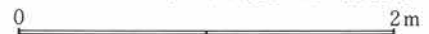


Fig. 562 H区土坑(3)

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

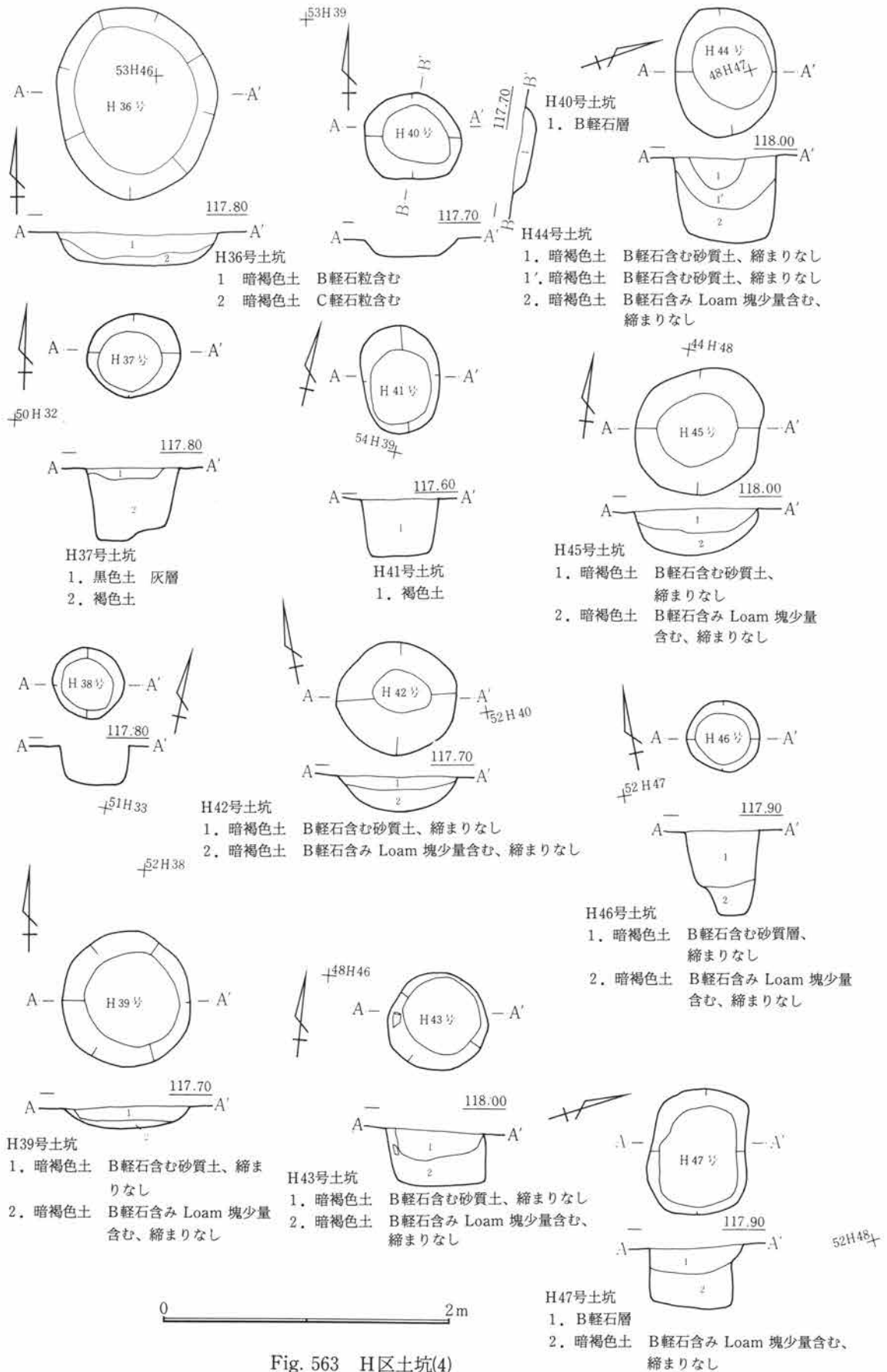


Fig. 563 H区土坑(4)

第2節 H区の遺構と遺物

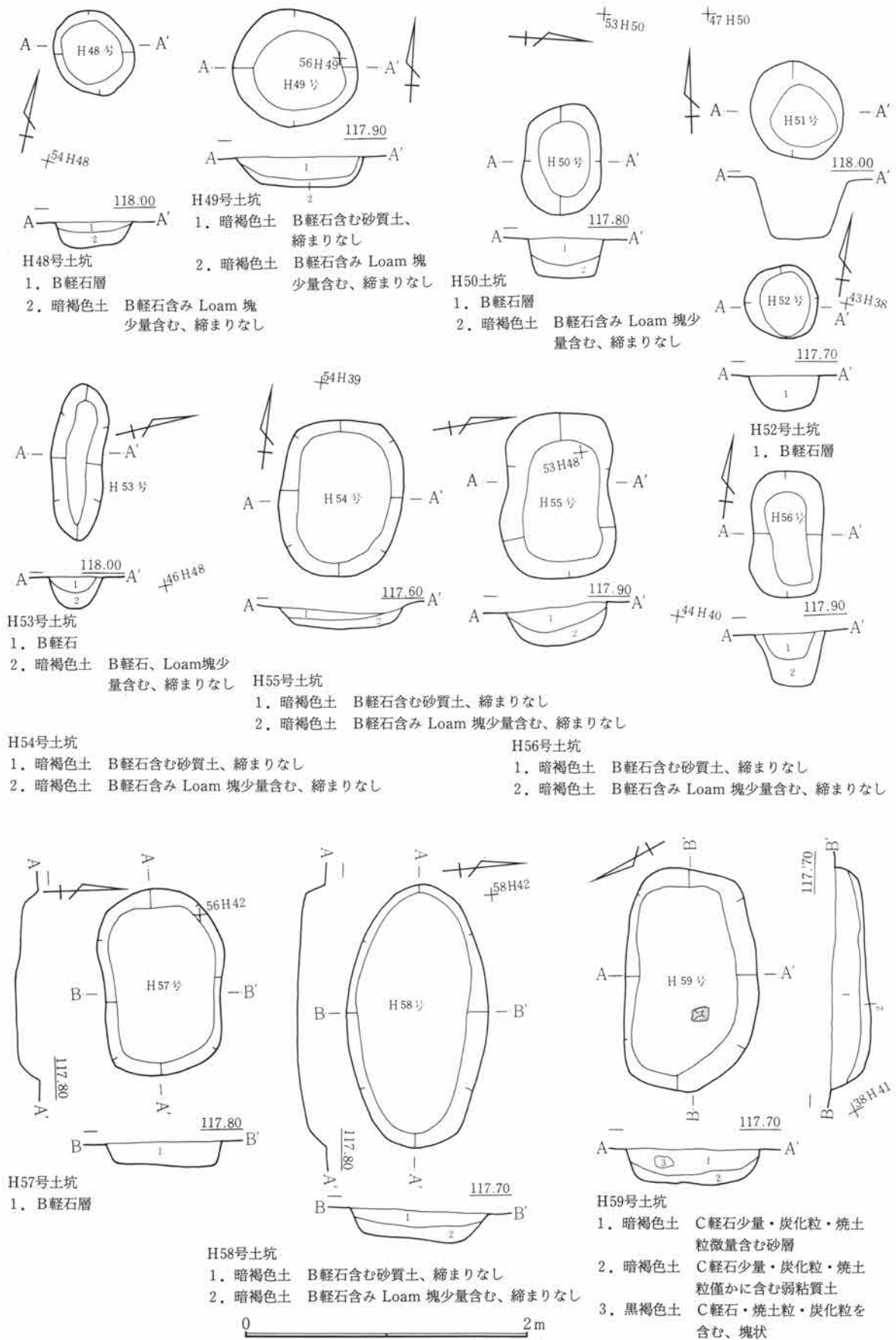
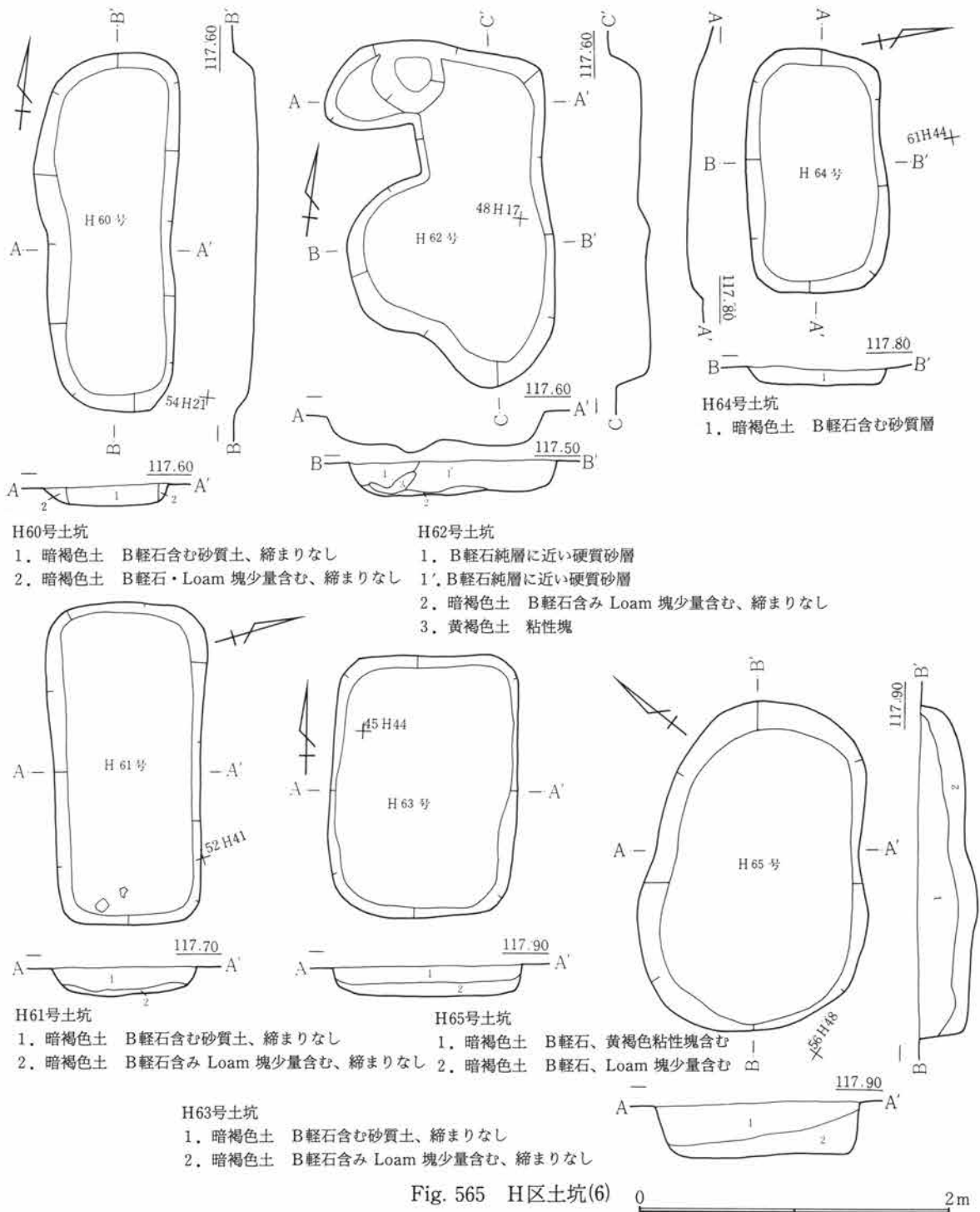


Fig. 564 H区土坑(5)

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物



H67号土坑 (Fig 566・PL. 149)

H区の南西部に位置し、56・57H16・17の範囲にある。平面形は隅丸の長方形を呈し、長軸方位をほぼ南北にもつ。南北長1.8m・東西幅1.02m・深さ38cmを測る。底面は中央部に向って僅かな窪みを見せる。当土坑は検出面で長方形に細い焼土帯が巡り、人頭大の角礫が露呈する状態で確認された。埋土は上位より薄く焼土層・炭化粒層・焼土層の互層となり角礫は最上位の焼土層上にほぼ均一な高さにある。土坑を火所として使用し、その直後角礫を充填しているが遺構そのものの性格は不明である。可能性としては火葬墓あるいは火葬施設を考え得るが、埋土中に骨片等は検出されず、その他遺物類は皆無である。

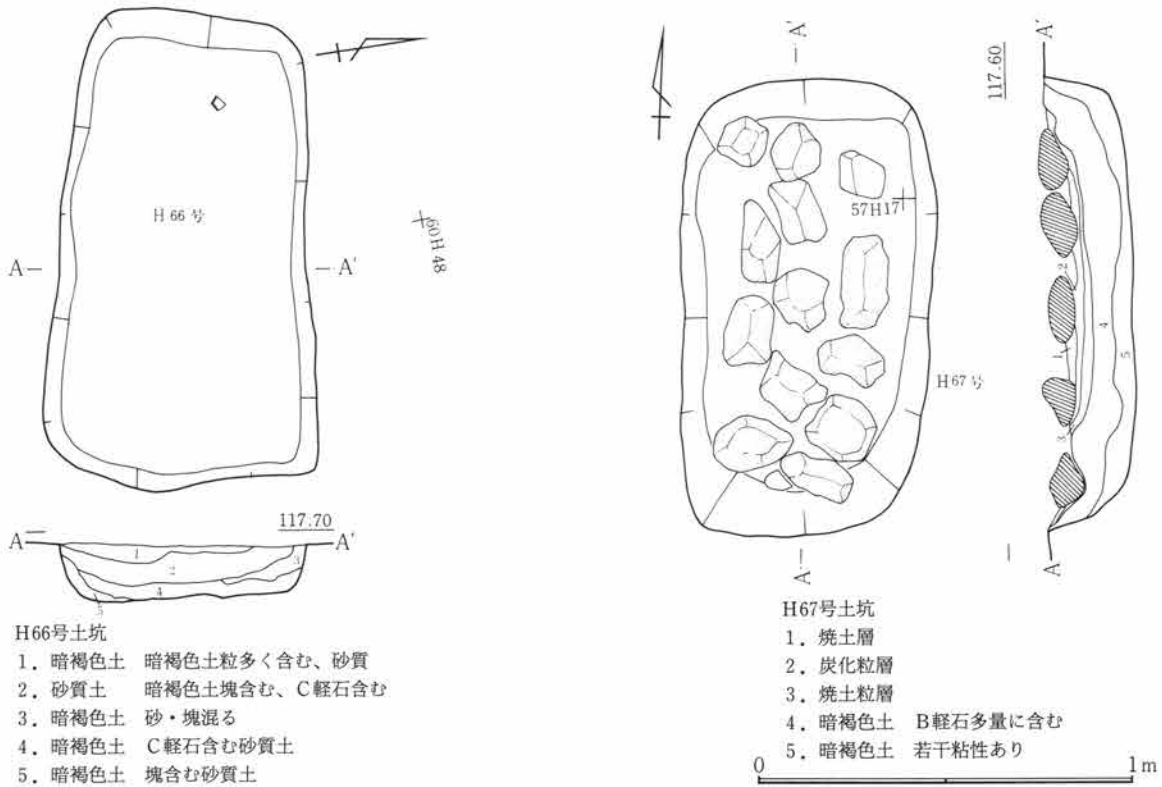


Fig. 566 H区土坑(7)

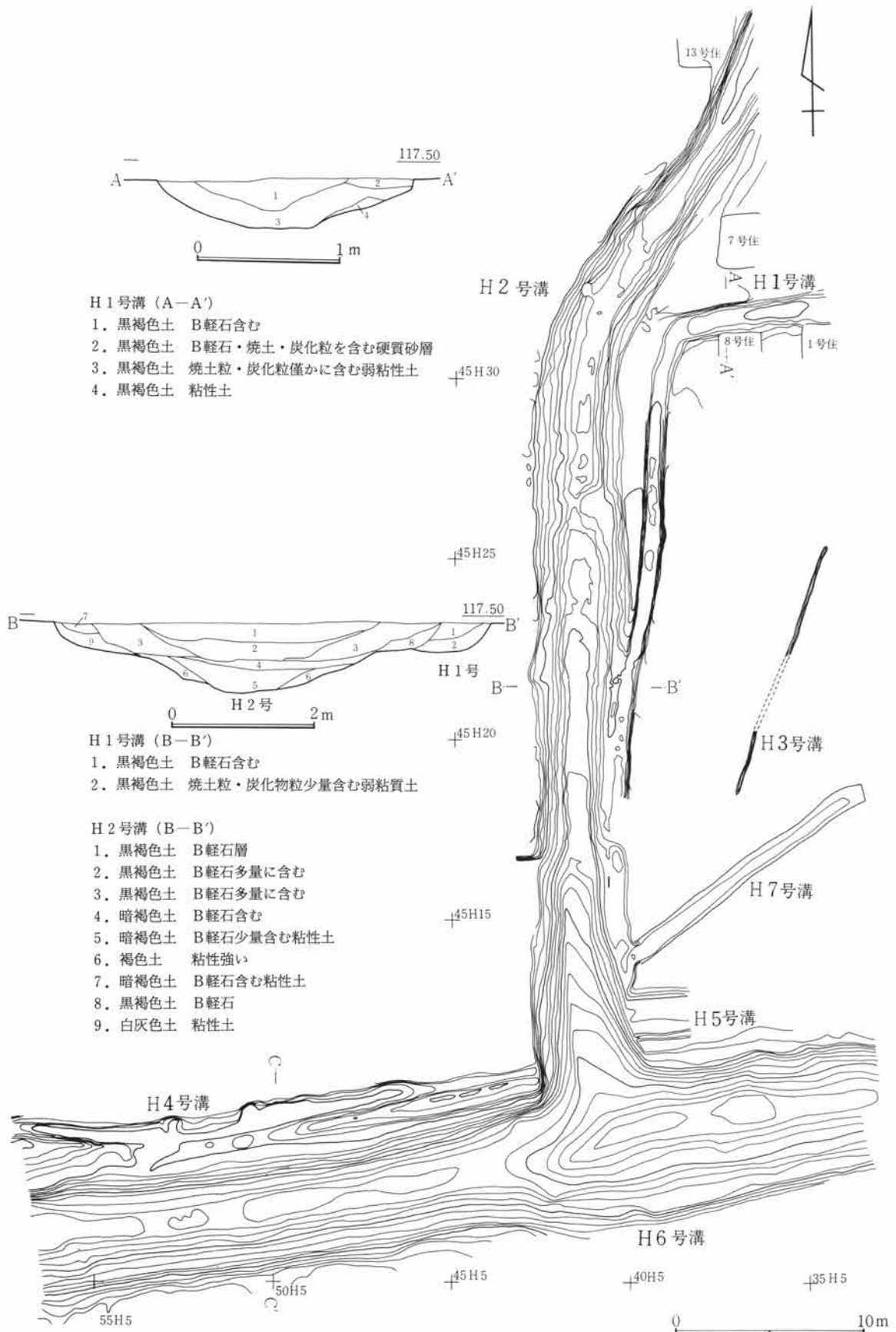
4. 溝 跡

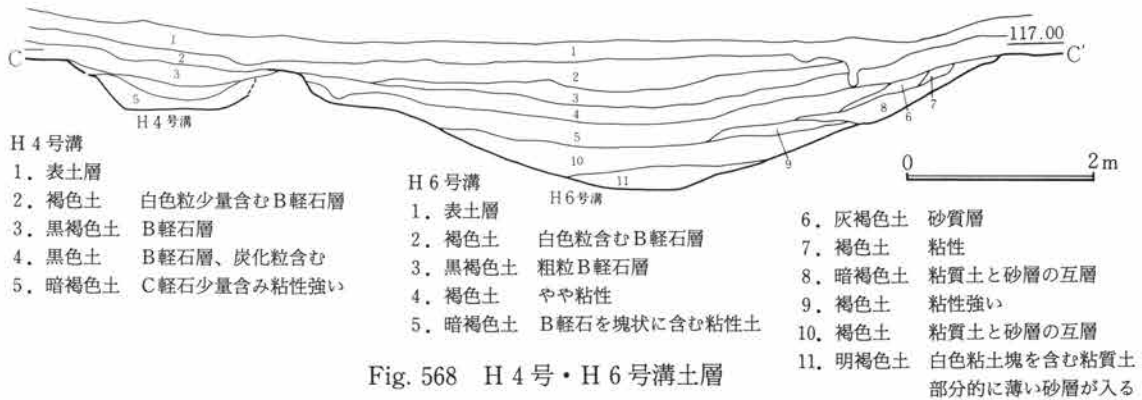
H 1号溝 (Fig. 567、569・PL. 150、182)

H区の東側に位置し、34~40H 3~32の範囲にわたる。ほぼ南北走した北側でL字に屈し東走する溝である。当溝の西側をH 2号溝が併走しているが、当溝がH 2号溝に対しやや東に傾く傾向をもつため、南でこれを合し南限は不明である。H20号・H25住居跡と重複するが両者より新しい時期の所産である。検出全長はH 2号溝との合流箇所東西区画線14から北へ約36mを測り、東折して約9mである。溝幅45cm・深さ35cmで南北の底面落差はほとんど感じられない。南北走部分の走行方位は約N-10°-Eで東西区画線26でやや角度を変えN-5°-Eとなる。東走方向はN-80°-Eを示す。埋土は浅間山降下B軽石を主体とし、断面形状は緩いU字形を呈す。H 2号溝との重複では当跡が古い段階を示すが、埋土観察では時間的差は小さいと思われる。

H 2号溝 (Fig. 567、570・PL. 150、183)

H区の東側に位置し、36~42H10~40の範囲にわたる。ほぼ南北走する溝である。南で当区最大規模を持ち東西走するH 6号溝に直角合流する。H 6号溝との底面標高では40~50cm高くなるが、合流部は緩い傾斜となり自然合流の様相を呈する。底面の状況から両者は軸線と支線の関係にあると考えられる。H19号・H 32号・H33号・H36号住居跡及びH 1号掘立柱建物跡に伴うH13号溝と重複するがいずれよりも新しい時期の所産である。検出全長は約60cmを測り、溝上幅約5.4m・深さ90cmを測る。走向方向はほぼ真北へ延び、H 6号溝との合流部より北へ約40cmの東西区画線30で緩く折れてN-35°-Eへ走向を変える。埋土は溝最下層に浅間山降下B軽石を混じえる粘性土が堆積するがほぼB軽石主体の土層で埋まる。溝断面形状は緩いU字形を呈す。





H 3号溝 (Fig. 567)

H区の東側に位置し、34～37H18～25の範囲にある。南西～北東走する小規模な溝である。H23・H24号住居跡と重複するが新旧関係は不明である。埋土は浅間山降下のC軽石を多量に含む暗褐色土で埋まり古代に属すると考えられる。中間部は試掘溝によって跡切れるが検出全長約15m・幅30cm・深さ10cm前後である。走行方位はおよそN-20°-Eを示す。

H 4号溝 (Fig. 567、568・PL. 150、183)

H区南側に位置し、38～57H 9～10の範囲にわたって検出した。調査時はH 2号溝を境に西側を4号、東側を5号としたがここでは4号溝に統一する。東西走し、近接するH 6号溝にほぼ併走する小規模な溝である。東・西側とも調査区域内全体を通しての検出はできなかったがいずれも調査区域外に延びると考えられる。南北走するH 2号溝と直交し、越えて東側へ続くがH 2号溝との新旧関係は明らかでない。埋土上層は浅間山降下B軽石が主体となっておりH 2号溝の間にはそれほどの時間差はないと考えられる。検出全長約38m、溝幅はやや均一を欠くが約2m・深さ40cmを測る。底面の傾斜は少ないが凹凸が著しく、断面形状はやや箱堀形状を呈す。走行方位はN-80°-Eを示す。

H 6号溝 (Fig. 567、568、571・PL. 150)

H区南側に位置し、33～56H 4～11の範囲にわたって検出した。東西走し当区で最も大規模な溝で、東・西側とも調査区域外に延びる。H区で検出された溝の多くは当溝に接続あるいは派生する位置にあり幹線・支線の関係にあると思われる。調査前の地表観察ではH 6号溝の範囲は緩い窪地になっており少し以前は水田として耕作していたといわれる。この窪地を挟んで南・北側は桑畑であった。遺跡地内にはH 6号溝と同規模・類似走向をもつ溝が未報告区域のD・G区に検出されており、これらとの関連から遺跡地を含めた周辺域の地割の機能を有する可能性が考えられる。またJ・I区にわたって検出され、ほぼ南北走するJ 1号溝の南延長線上に当溝は合流すると思われる。埋土の状況から開削時期は確定し得ないが、溝としての様相を消すのは浅間山噴出のB軽石降下以降である。検出全長48m・上面幅約9.5m・深さ1.5mを測り底面の東西傾斜はほとんど感じられず、断面形状は緩いU字形を呈する。走行方位はN-80°-Eを示す。

H 7号溝 (Fig. 567・PL. 150)

H区南東部に位置し、33～39H13～18の範囲にわたって検出した。南西～北東走し、東側は調査区域外へ延び西側はH 2号溝に合するがこの地点はH 1号溝がH 2号溝に吸収される部分でもある。埋土はB軽石を

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

主体にする土層で埋まる。検出全長約12m・溝幅約80cm・深さ30~40cmを測る。底面の傾斜はほとんど認められず断面形状は箱堀形である。走行方位はおよそN-55°-Eを示す。

H 8号溝 (Fig. 549、572・PL. 183)

H区のほぼ中央に位置し、49・50H18~26の範囲にわたって検出された南北走する溝である。これに直交してH 9号溝が、また直交部分にはH19号住居跡が重複する。新旧関係はH19号住居跡より新しい時期の所産であるがH 9号溝との前後関係は不明である。埋土は浅間山降下C軽石を含む暗褐色土である。全長約12.6m・溝幅約1.5m・深さ10cmを測り、断面形状は箱堀形を呈する。走行方位はほぼ真北を示す。

H 9号溝 (Fig. 549)

H区の中央部に位置し、44~54H22の範囲にわたって検出された東西走する溝である。H 8号溝と直交して重なりH19号住居跡に重複する。新旧関係はH19号住居跡より新しいがH 8号溝とは不明である。埋土は浅間山降下C軽石を含む暗褐色土で埋まる。埋土からはH 8号溝との時間差はほとんど看取できない。全長約18.7m・溝幅約80cm・深さ45cmを測り、断面形状は箱堀形を呈する。走行方位はN-90°-Eを示す。

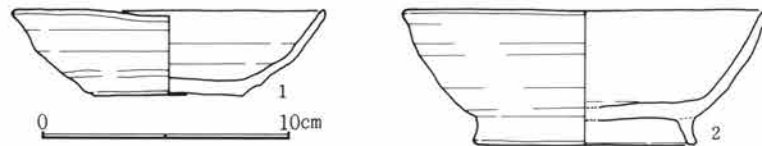


Fig. 569 H 1号溝出土遺物



Fig. 570 H 2号溝出土遺物

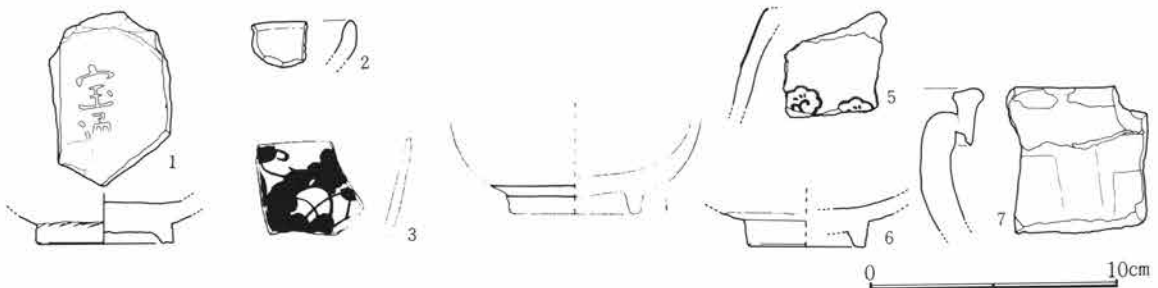


Fig. 571 H 6号溝出土遺物

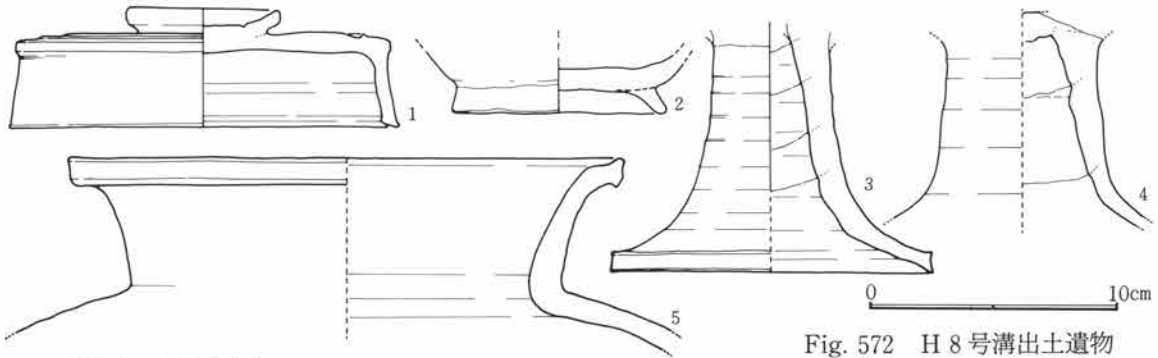


Fig. 572 H 8号溝出土遺物

H 1号溝出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
569-1 182-1	須恵器 杯	½	12.4×6.0×3.5	轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③密
569-2 182-2	灰釉陶器 碗	½	14.8×8.6×5.4	轆轤成形。右回転糸切り。付高台。	①良 ②灰白 ③密

H 5号溝出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
570-1 183-1	青磁 碗	体部小片	-×-×- 厚0.4~0.6	内面に陰刻花文。釉調はオリーブ黄。	①良好 ②灰白 ③密
570-2 183-2	陶器 鉢	口縁部小片	-×-×- 厚1.3	片口の摺鉢。体部直線的に開き、口唇部矩形を呈す。内面下位は摩滅顕著。内外面粗い筥撫で。口縁部横撫で。	①良好 ②鈍い褐 ③やや密・白色粒多
570-3 183-3	石製品 砥石	片面欠損	8.4×4×3.8	長方形。多面使用、一部欠損。刃痕あり。重155.5g	流紋岩

H 3号溝出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
571-1 183-1	青磁 碗	底部	-×5.6×(1.7)	見込部に「宝」の陰刻文字あり。釉調は灰褐色。	①良好 ②灰白 ③密
571-2 183-2	白磁 皿?	口縁部破片	-×-×- 厚0.5	口縁部内湾気味、浅い小皿型になるか。	①良好 ②白 ③緻密
571-3 183-3	磁器 碗	口縁部破片	-×-×- 厚0.4	染付碗。口縁部直線的に開く、内面に草花の染付文。染付色調は濃紺。	①良好 ②灰白 ③密
571-4 183-4	磁器 碗	底部小片	-×5.4×(4)	染付碗。腰部丸く張る。外面腰・高台に各一条の染付線が巡る。胎土のガラス化弱い。	①良好 ②灰白 ③密
571-5 183-5	陶器 鉢?	小片	-×-×- 厚0.6	外面に陰刻花文、外面及び内面上半に透明度の高い緑釉がかかる。	①良好 ②淡黄 ③密
571-6 183-6	陶器 碗	底部小片	-×5×(2.4)	高台幅広く矩形を呈す。腰～底部を除き褐釉がかかる。	①良好 ②淡黄 ③密
571-7 183-7	陶器 甕	口縁部破片	-×-×- 厚1.4	常滑。口縁部折り返し。内外表面色調は鈍い褐色を呈す。	①良好 ②灰白 ③やや密

H 8号溝出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
572-1 183-1	須恵器 蓋	½	15.8×15.2×4.8	大型の環状蓋。天井部平らで縁辺に鋭い凸線が巡る。端部は小さく突出し矩形の頸状をなす。口縁部直線的。	①良好 ②灰 ③やや粗
572-2 183-2	須恵器 碗	上半欠損	-×8.7×(2.4)	付高台断面丸く、強く外に張る。轆轤成形、回転糸切り高台の胎土は体部と異なる。	①良好 ②灰白 ③やや密
572-3 183-3	須恵器 脚	脚部¾	-×13.0×(10.0)	高杯・脚付盤か。裾部大きく開き端部鋭く折れる。内面巻き上げ痕あり。	①良好 ②灰白 ③やや粗
572-4 183-4	須恵器 脚	脚部¾	-×-×(8.5) 脚径6.1	脚付盤か。脚径大きくやや短い。内面に巻き上げ痕あり。	①良好 ②灰 ③やや粗
572-5 183-5	須恵器 甕	口縁部¾	22.5×-×(7.7)	頸部弱く外傾し上端は外屈する。口縁部は三角形の小さな下顎をなす。内面青海波状のあて目。	①良好 ②灰 ③やや粗

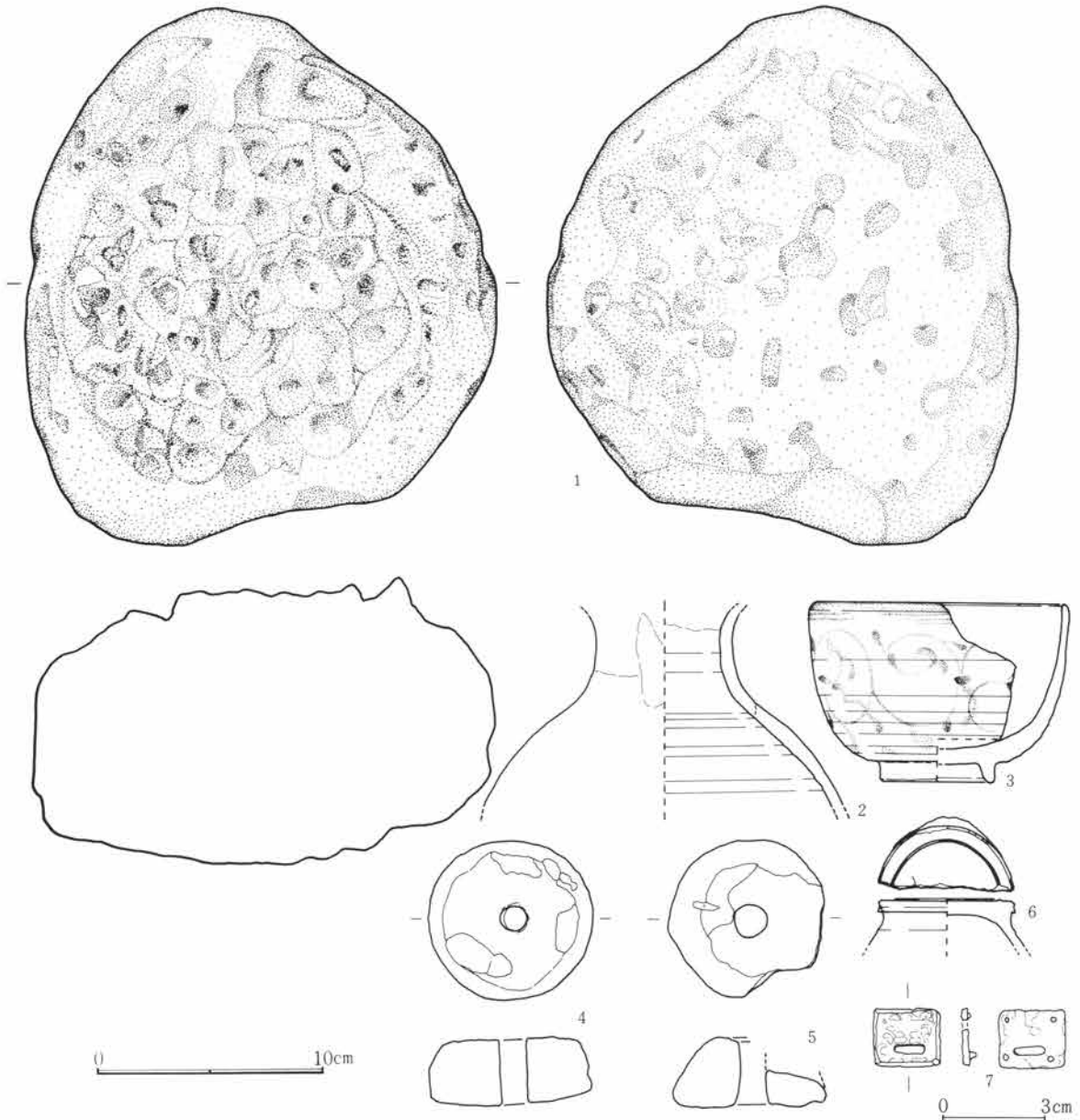


Fig. 573 H区出土遺物

H区出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
573-1 183-1	石 多孔石	完形	23.1×20.4×12.3	両面、側面に多孔、片面は多孔後摩滅痕が面をなす。二次使用か。	粗粒安山岩
573-2 183-2	灰釉陶器 瓶	肩部	-×-×(8.5)	撫で肩。脹らみのある胴部、外面施釉	①良好 ②灰 ③やや粗・黒色粒混る
573-3 183-3	陶器 碗	1/2	11.0×5.0×7.7	腰部丸く体部直立する。高台径小さく直立。内外面施釉、釉調は白泥化、体部外面に葡萄唐草か。唐津系?	①良好 ②赤褐 ③密
573-4 183-4	石製品 紡錘車	完形	径6.9厚2.8 孔径1.2	表・裏面及び側面丁寧な調整 重111g	角閃石安山岩
573-5 183-5	石製品 紡錘車	上面欠損	径6.6厚3.0 孔径1.4	丁寧な調整 重48.7g	角閃石安山岩
573-6 183-6	須恵器 硯	1/2	6.0×-×(2.0)	小型の円面硯。轆轤成形。内堤低く痕跡程度。	①良好 ②暗青灰 ③やや密
573-7 183-7	銅製品 巡方	完形	縦1.7横1.9 厚2.0	銅地鍍金。表面打出し文あり下端に長方形透し。裏面4隅に留紙あり。	

第3節 I区の遺構と遺物

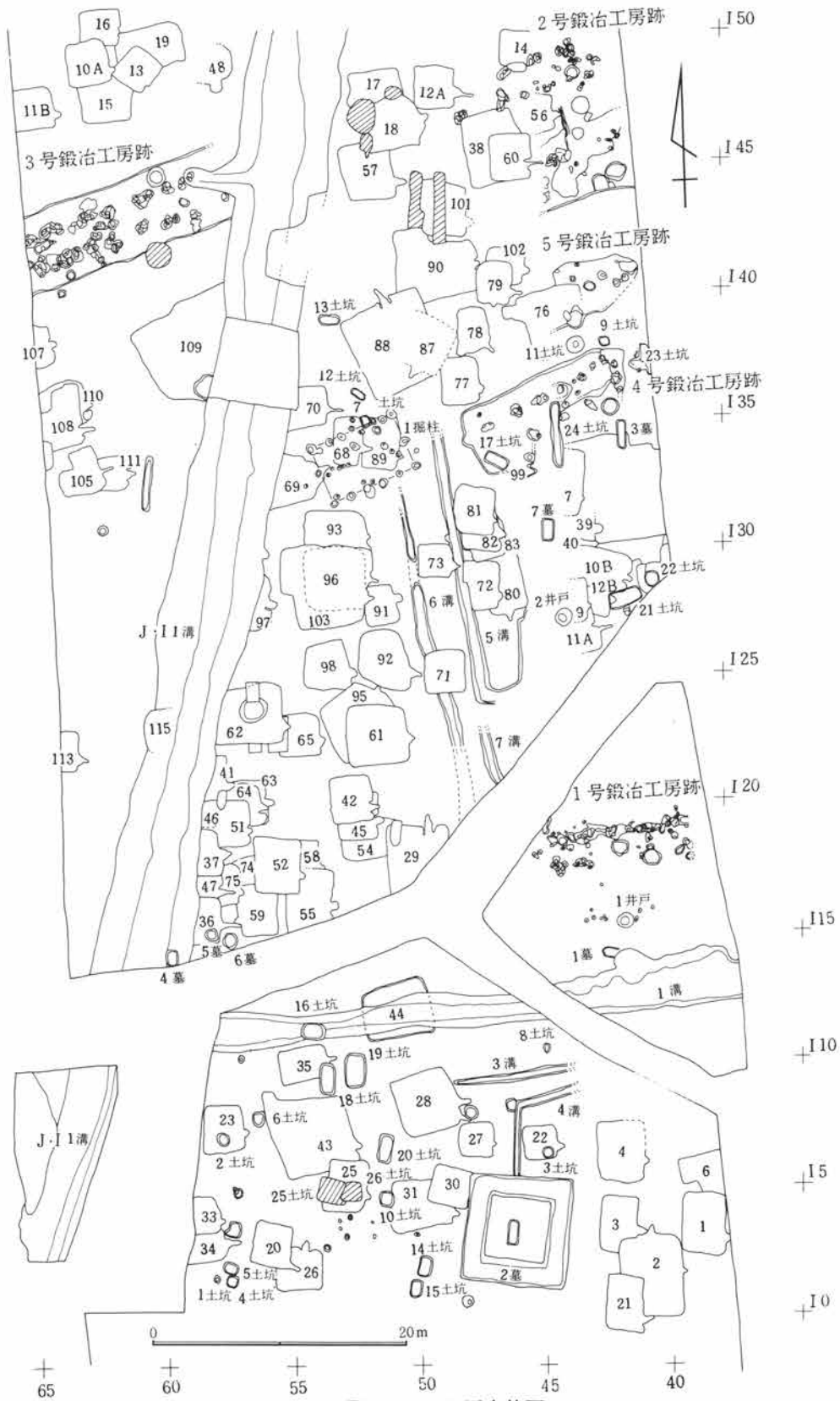


Fig. 574 I区全体図

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

I区は行政区分上、前橋市元総社町と群馬郡群馬町の両地区にまたがる。調査区南で東西走る農道がほぼその境界線になる。

調査は3期に渡って実施された。昭和57年度は東側に建設される側道部を、翌58年度には本線部分の南約 $\frac{1}{2}$ の範囲を、さらに59年度は本線部分北側 $\frac{1}{2}$ の範囲を調査した。調査面積は約4,650 m^2 である。

当区で検出調査された遺構は古墳時代から奈良・平安時代にかけての竪穴住居跡100軒、奈良から平安時代前半期と考えられる5基の大形鍛冶工房跡が注目される。竪穴住居跡については既刊の『鳥羽遺跡』G・H・I区 1986 に、また鍛冶工房跡は『鳥羽遺跡』I・J・K区 1988 に各々報告してあり多量の鍛冶関連遺物の他銅腕・鉄など希少な遺物が検出されている。

本書で報告する遺構は上記以外の掘立柱建物跡・井戸跡・墓跡・土坑・溝跡などである。

掘立柱建物跡はI1号掘立柱建物跡が当区で検出された唯一の遺構である。棟方向を東西にもち棟行5間、桁行2間の規模をもつ。棟行方向は鍛冶工房跡の長軸方位に近似しこれとの関連が窺われる。

井戸跡は調査区域内より移転した家屋に伴う近・現代の井戸の他、古代・中世に係わる2基が検出されている。近・現代の井戸跡は保水が著しく危険が予想されたため調査は実施していない。調査した2基のうちI1号井戸跡はI1号鍛冶工房跡の南に近接している。検出面は現地表より約1mの削平によっているため上層の堆積状態は不明であるが、確認した段階での埋土は古代に類するもので遺跡内でも希である。

墓跡は古代から中・近世の所産が総数7基で埋葬形態は伸展葬・横臥屈葬・座葬など多様である。I2号墓は一辺約8mの溝によって方形区画され、中央に墓壇が設けられており被葬者は特異な階層に属すると思われる。

溝跡は大小6条が検出された。I1号溝は当区南寄りに東西走る溝で所産時期は奈良から平安期と考えられる。またI区中央部に検出されたI6号溝からは金切り鉄の出土があり、鍛冶工房に限らず金属品を一連の製造過程として行っていた可能性が考えられる。鉄器調整に用いたと思われる多量の砥石類の存在はこのことを裏付ける資料となろうか。

1. 掘立柱建物跡

I1号掘立柱建物跡 (Fig. 575・PL. 151)

I区のほぼ中央に位置し、51～54 I 31～35の範囲にある。I68号・I69号・I89号住居跡と重複しているがいずれより古い時期の所産である。平面形は5間×2間で東西方向に棟行をもつ。東・西辺の桁行中間柱の棟筋はやや歪む。外枠の棟行は南・北辺7m、桁行は東・西辺4.6mを測り整った形状を呈し、棟行方位はN-67°-Eを示す。棟行南・北辺の柱間は東・西端部がやや長い間尺である。南辺の東から1.6×1.4×1.4×1.2×1.6m、北辺の東から1.6×1.4×1.4×1.2×1.4×1.6mである。柱穴掘形は径80cm前後の円形で深さ80cmを測り、径15cm程度の柱痕が検出されている。

2. 井戸跡

I1号井戸 (Fig. 576)

I区南東部に位置し、41・42 I 15の範囲にある。掘形が小規模なため完掘することができなかった。北側にはI1号鍛冶工房跡が、また南にはI1号溝が近接する。平面形は径1.1mの円形を呈し、検出面下約50cmまで緩く漏斗状に広がり以下は径65cmの筒円筒型になる。深さ1.3m程度まで確認した。埋土は上位が浅間山降下C軽石混じりの暗褐色土で埋まり、以下は砂層になる。中世以降の井戸跡に通例埋土として見られるB

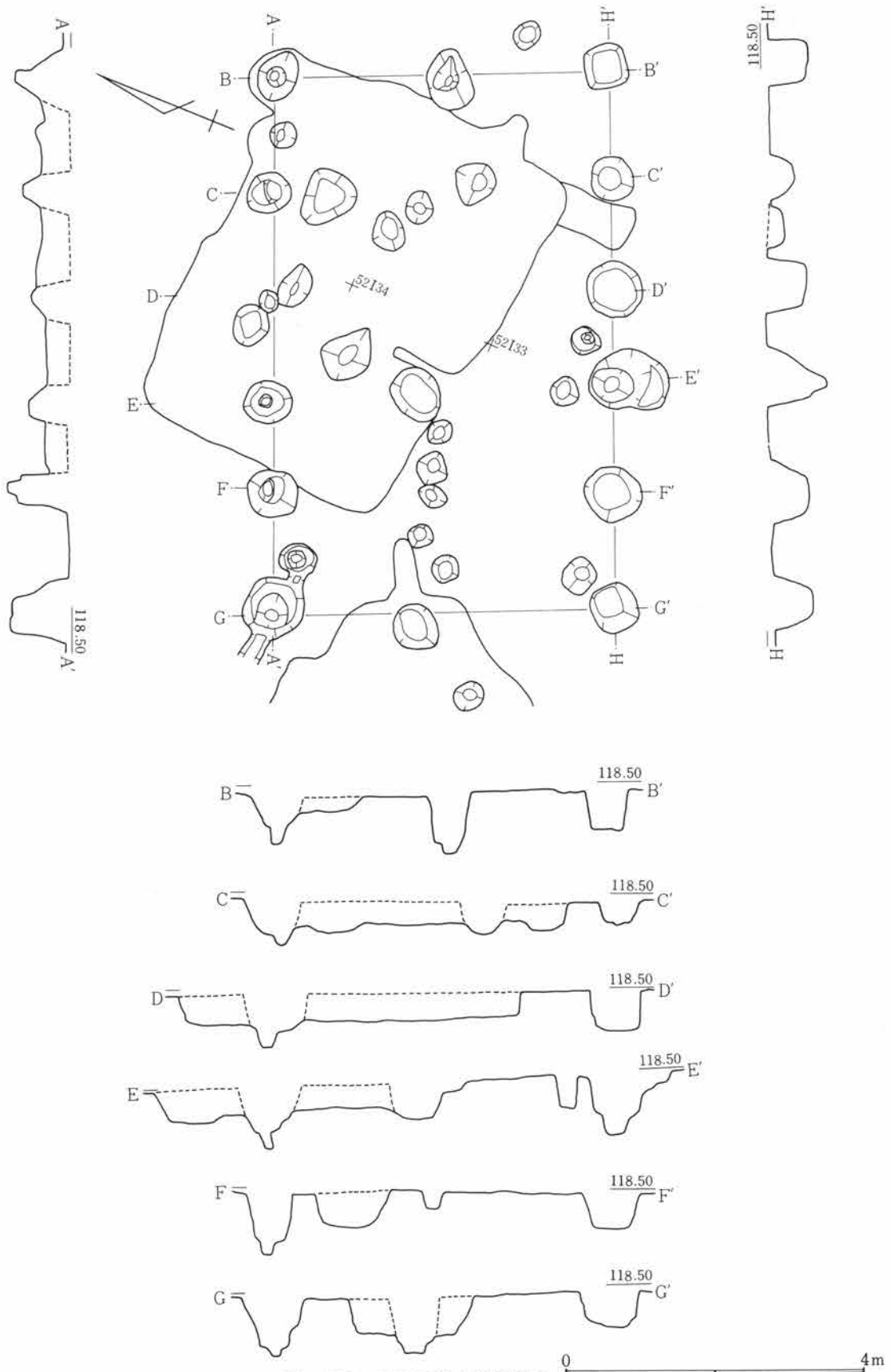


Fig. 575 I 1号掘立柱建物跡

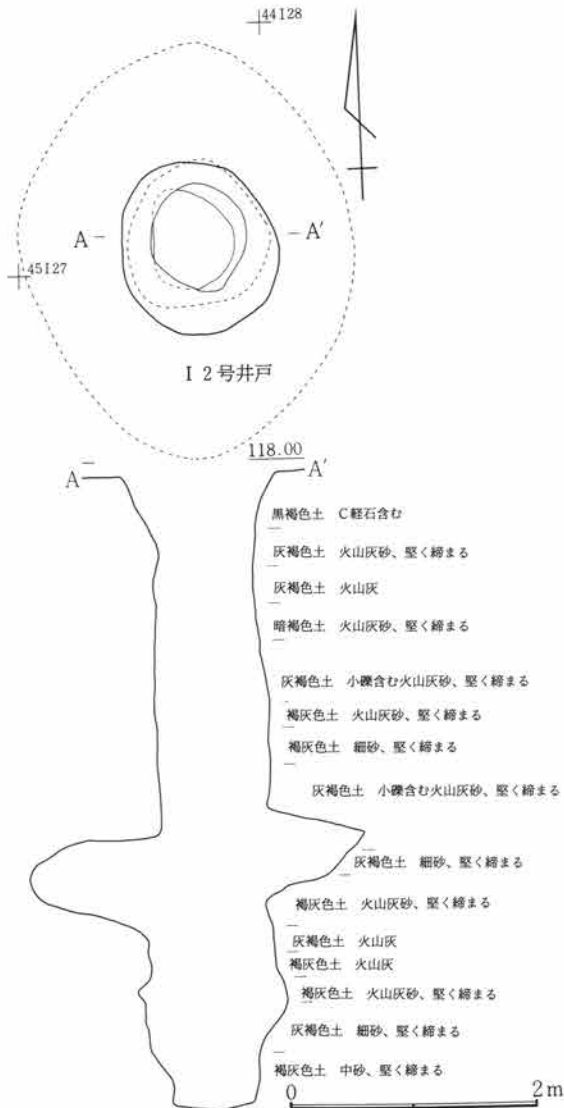
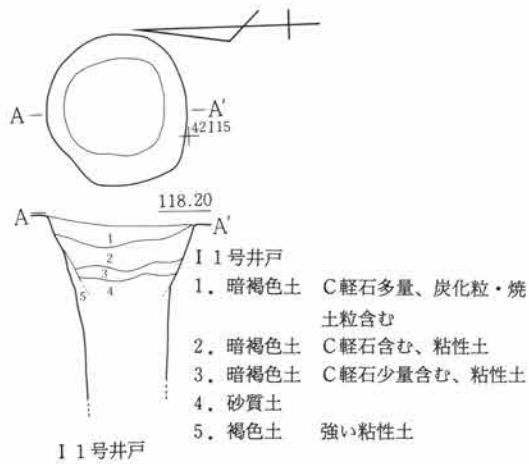


Fig. 576 I区井戸 (1号・2号)

軽石層がなく、古代に属する井戸跡と考えられる。出土遺物は検出されていない。

I 2号井戸 (Fig. 576)

I区東側中央に位置し、43・44 I 26・27の範囲にある。I 9号住居跡と重複するがこれより新しい時期の所産である。埋土は約3.5mの深さまで浅間山降下B軽石を多量に含む黒褐色土で、以下は10~25cm大の川原石で埋まる。平面は径1.3~1.4mの円形を呈し深さ5mで底面は径70cmの平坦をなす。検出面より50cmの深さまで小さく漏斗状に開き以下径90cmの筒円筒型である。湧水帯は深さ3~5.6mの範囲にあり、壁面が大きく崩れ、径2.7mに広がる。調査時の湧水量は水深1.4mに達した。井戸枠などの痕跡はなく素堀井戸と考えられる。出土遺物は樹木小枝が多く検出された。

3. 墓跡

I 1号墓 (Fig. 577・PL. 151)

I区南東部に位置し、42 I 13・14の範囲にある。I 1号鍛冶工房跡・I 1号井戸・I 1号溝に近接し、これらの検出のため深く削平が及び土壌は東側が消失し遺体の遺存状態も良好ではない。土壌は東西方向に長軸をもつ方形ないしは楕円形を呈すると考えられる。長軸は1.7mまで検出した。短軸は約1mを測る。埋葬形態は西側に頭部を置く横臥屈葬であろう。遺体埋納施設は認められなかった。

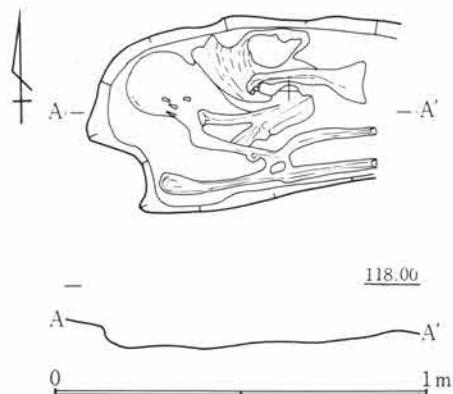


Fig. 577 I 1号墓

第3節 I 区の遺構と遺物

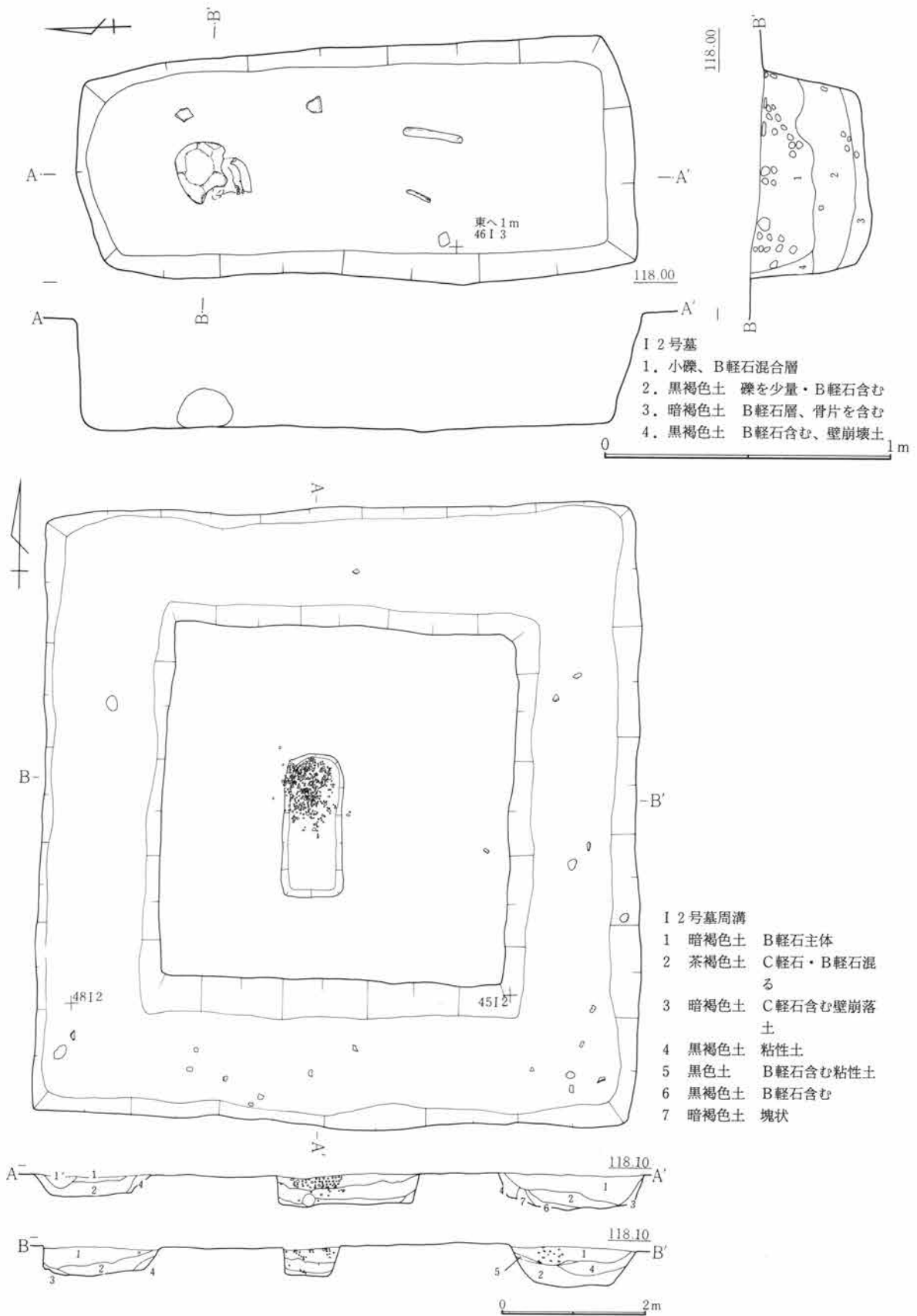


Fig. 578 I 2号墓

I 2号墓 (Fig. 578・PL. 152)

I 区南部に位置し、44～48 I 1～5 の範囲にある。I 30号住居跡と重複するが、これより新しい時期の所産である。当跡は四周完結の方形周溝に囲まれた土墳墓である。周溝は東西南北辺をほぼ四至方向にそろえた一辺8mの規模をもつ。溝幅は約1.7mで断面形状は箱堀形状を呈す。深さは各辺に若干の差があり、最も浅い北辺で約25cm、深い東辺で55cmを測る。埋土は浅間山降下B軽石主体の土層で埋まる。溝内側の台部は一辺4.8mで盛土の痕跡は認められなかった。内側台部の中央からややはずれ南西寄りに土墳が設けられる。

土墳は長軸をほぼ南北方位に合わせ、2×0.8mの長方形を呈し、深さ約40cmを測る。遺体頭蓋骨及び下肢骨小片が残り、頭蓋骨は北側にある。土墳の規模から成人でも伸展葬は十分可能であるが、頭蓋骨の位置から遺体は横臥屈葬に処されたと考えられる。木棺などの埋納施設は認められなかった。土墳埋土は全体に浅間山降下B軽石が混入する土層で占められ、とくに上位層はB軽石が主体となる土層である。土墳検出面より多量の玉石が検出されている。玉石は2～9cm大で遺体の頭部から胸部あたりの土墳北半に極めて集中的に存在する。玉石の垂直位置は最上層のB軽石主体層にとどまり厚さ25cmの範囲であり、人為的行為と考えられる。出土遺物については、土墳内及び溝中より須恵器など小片少数が検出されているものの当跡に直接伴うとは考えられない。副葬品あるいは外部施設を示すような遺物は皆無である。

当跡は方形周溝に囲まれた土墳墓で鳥羽遺跡内の墓跡形態では唯一の例である。類似する墓跡としては平安時代後期から中世にかけて比定されている京都大学構内遺跡S X 1・長岡京跡西陣遺跡S X 13002・三重県東庄内B遺跡などがある。しかしいずれも火葬場・火葬塚とされる。時代を示す遺物の出土はないが、溝内及び土墳埋土での浅間山降下B軽石の存在よりその降下以後の所産であり、通常言われるところの弘安元年(1108)をさかのぼるものではない。周溝内側の台部には盛土などの痕跡は確認できなかったが土墳の検出状況より墳墓形態が想定される。遺体埋納施設は土墳埋土中の玉石の水平・垂直範囲より木棺などの使用によっておこる陥没現象が見られず直葬に類する葬法をとったと考えられる。I 2号墓に類する時期の一般的墓跡形態は土墳単位が主であり、それが一般人的埋葬施設とすれば当跡にはかなりの階層差が考えられる。中世墓跡形態に新たな事例を示す資料と言えよう。

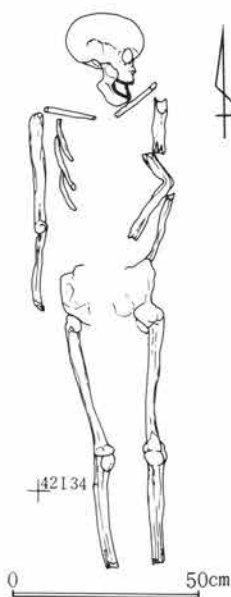


Fig. 579 I 3号墓

I 3号墓 (Fig. 579・PL. 151)

I 区東部やや南に位置し、41 I 34を中心にある。I 4号鍛冶工房跡に近接しており、鍛冶遺構の確認で深く削平が及び、当跡の検出が遅れてしまった。このため遺体だけが露呈する結果となり土墳を消失してしまった。遺体は胸部と腰部を除き比較的良好に遺存していた。頭部を北に置く伸展葬であろう。木棺など遺体埋納施設の痕跡は認められなかった。副葬品などは検出されないが伸展葬の形態をとることや、上面精査段階で浅間山降下B軽石が存在しないことなどの理由により当跡は古代に属すると考えられる。

I 4号墓 (Fig. 580、582・PL. 151、184)

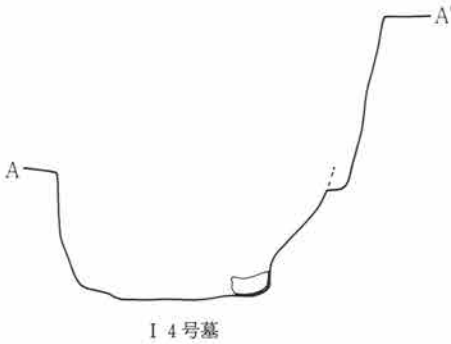
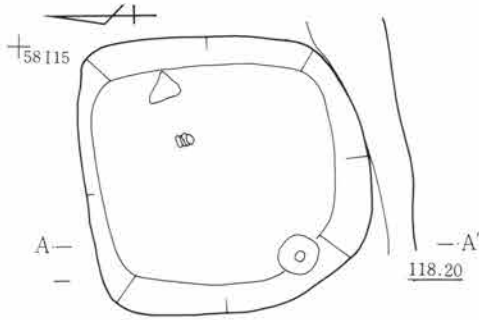
I 区南西部に位置し、58 I 14の範囲にある。東にI 6号墓が、西にI 5号墓が近接する。I 36号住居跡と重複し、これより新しい時期の所産である。平面形は南辺にやや丸みをもつが略方形を呈し、一辺約75cm・深さ70cmを測る。遺骨や埋納施設は検出されていないが、土墳の形状から座葬ないしは座棺による埋葬と考

えられる。出土遺物には底面南西隅に磁器碗一個体、中央やや北寄りに寛永通寶12枚がひとまとまりで検出された。

I 5号墓 (Fig. 580、583・PL. 151、184)

I区南西部に位置し、59 I 13の範囲にあり、東方にI 4号墓・I 6号墓が近接する。また北隣区で検出されたJ 1号溝は当区に延び、I 5号墓はこれと重複するがJ 1号溝より新しい時期の所産である。平面形状は南北に長軸をもつ方形を呈し、90×65cmの土壌である。深さは現状で約45cmを測る。これはJ 1号溝の検出作業に遅れたため溝底面及び壁面を掘り抜いた部分でしか確認できなかったためである。遺骨は検出され

ていない。土壌底面には遺体埋納棺の底板と考えられる板状木片が検出され箱形座棺による埋葬と思われる。出土遺物には南東隅に陶器菊皿2枚、棺材上に寛永通寶12枚が検出された。土壌の深さについてはJ 1号溝の検出面を目安にすれば近接するI 4号墓・I 6号墓の60~70cmに対し約倍する深さをもつが、I 4号墓・I 5号墓・I 6号墓が営まれた時点でJ 1号溝がまだ完全に埋没せず溝筋が低地の状態にあり、ここにI 5号墓を掘り込んだためと考えられる。



I 6号墓 (Fig. 580、584、585・PL. 151、185)

I区南西部に位置し、57 I 14の範囲にある。西にI 4号墓・I 5号墓が近接する。平面形は径85cmの円形を呈し、深さ55

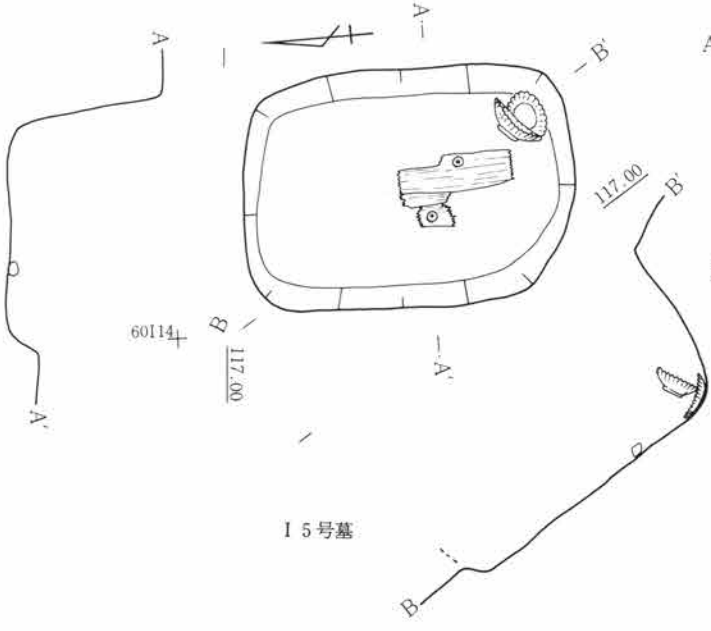
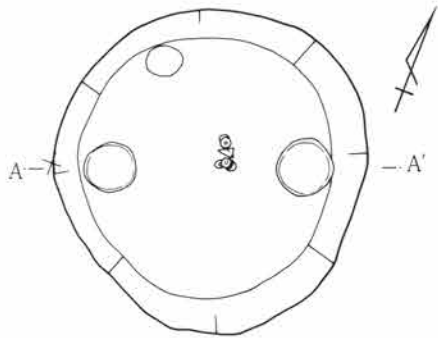


Fig. 580 I区墓 (4号・5号・6号)

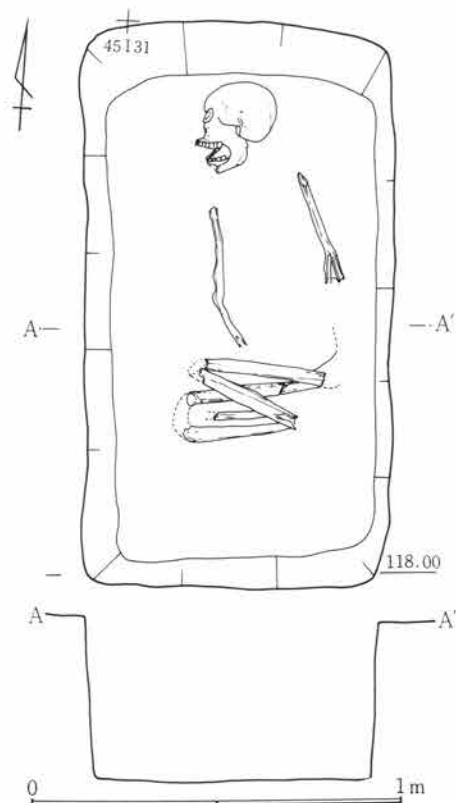


Fig. 581 I 7号墓

cmを測る。遺骨は底面中央に痕跡が認められた。埋納施設などは検出されていないが、土壌の形状から樽型座棺を想定できる。出土遺物は底面の東・西端は青緑色釉調の磁器模倣陶器皿各1枚の計2枚が、中央部には寛永通寶17枚・永楽通寶1枚が検出されている。また北端には赤漆塗り木椀が出土したが遺存状態が悪く取り上げることができなかった。

I 7号墓 (Fig. 581・PL. 151)

I区東中央部に位置し、44 I 30の範囲にある。I 39号・I 40号住居跡と重複するが両者より新しい時期の所産である。埋土は浅間山降下B軽石を主体にした砂質土で埋まる。平面形は長軸方向をほぼ真北にもつ整った長方形を呈す。南北1.5m・東西85cm・深さ約40cmを測る。遺体は頭部を北に置き西向き横臥屈葬である。木棺など埋納施設の痕跡は認められなかったが、土壌の形状や掘形から木棺が想定される。出土遺物は検出されていない。

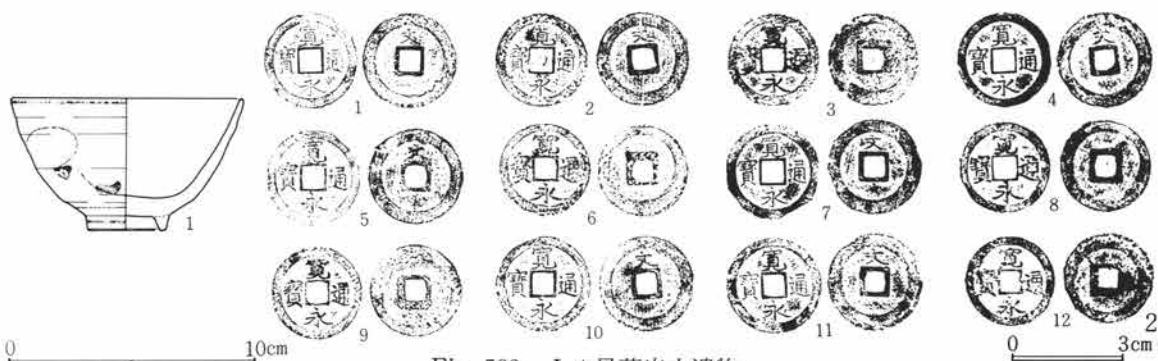


Fig. 582 I 4号墓出土遺物

I 4号墓出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
582-1 184-1	陶器 椀	完形	9.3×3.2×5.3	17C後～18C前 唐津系。高台小径。体部内湾気味に開く。体部唐草文の絵付。	①良好 ②鈍い橙 ③密

I 4号墓から寛永通寶12点が出土している。1・2・4・5・7・10・11は背面に「文」、3・6・8・9・12は無文である。前者は寛文8年(1668)、後者は元禄13年(1700) 鑄造の新寛永銭に相当しようか。

なお、3・6・8・9・12はやや小径である。

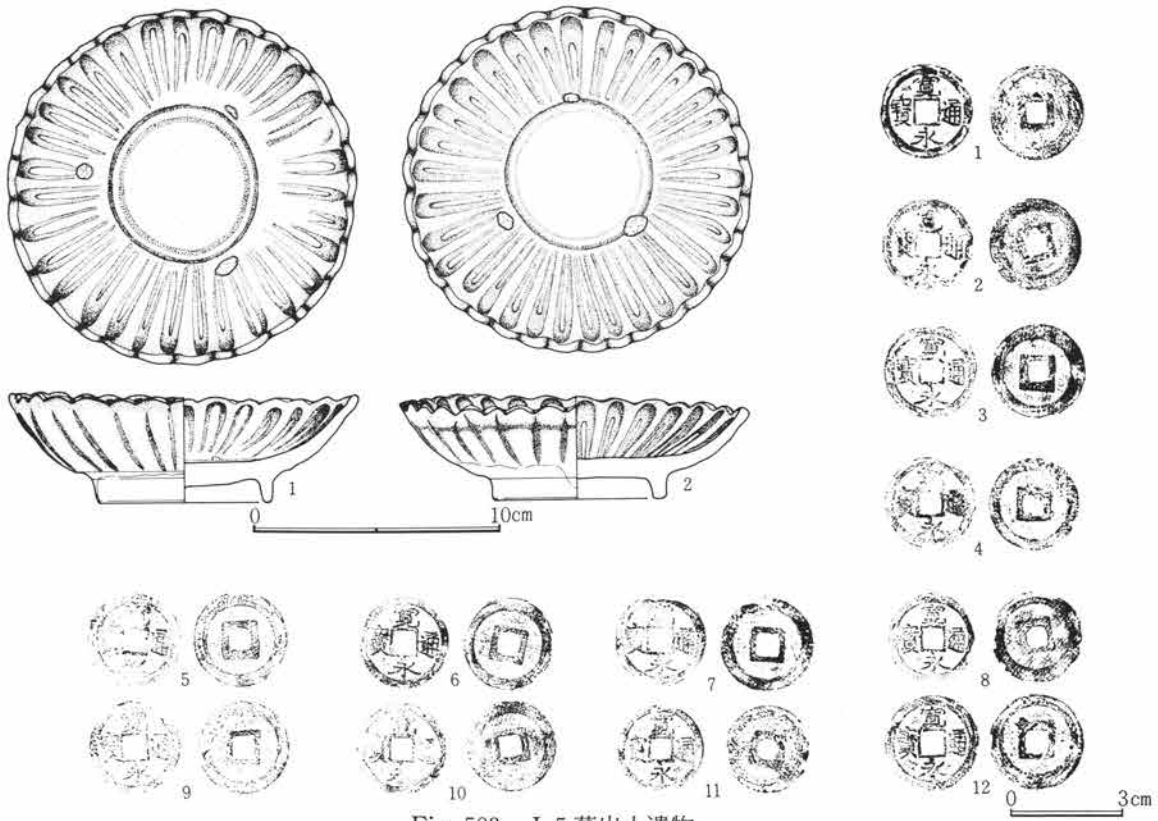


Fig. 583 I 5 墓出土遺物

I 5号墓出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
583-1 184-1	陶器 菊皿	完形	14.0×6.8×4.5	美濃・17C後～18C初。口唇部は寛で刻み体部は凹線で花弁30を示す。見込部円形凹線、トチン痕。付高台。	①良好 ②淡黄 ③密
583-2 184-2	陶器 菊皿	完形	14.1×7.0×4.2	美濃・17C後～18C初。口唇部は寛で刻み体部は凹線で花弁32を示す。見込部円形凹線。トチン痕。付高台。	①良好 ②淡黄 ③密

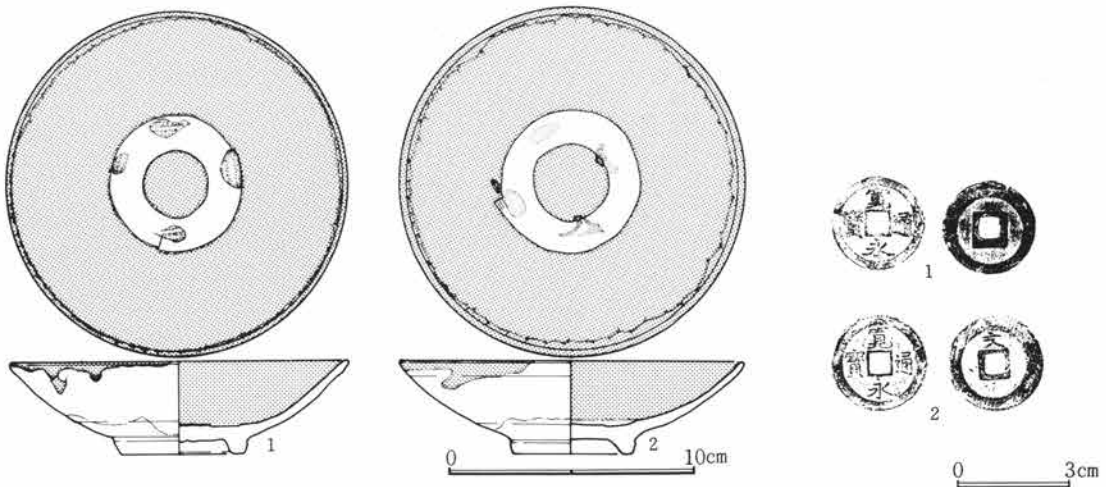


Fig. 584 I 6号墓出土遺物(1)

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

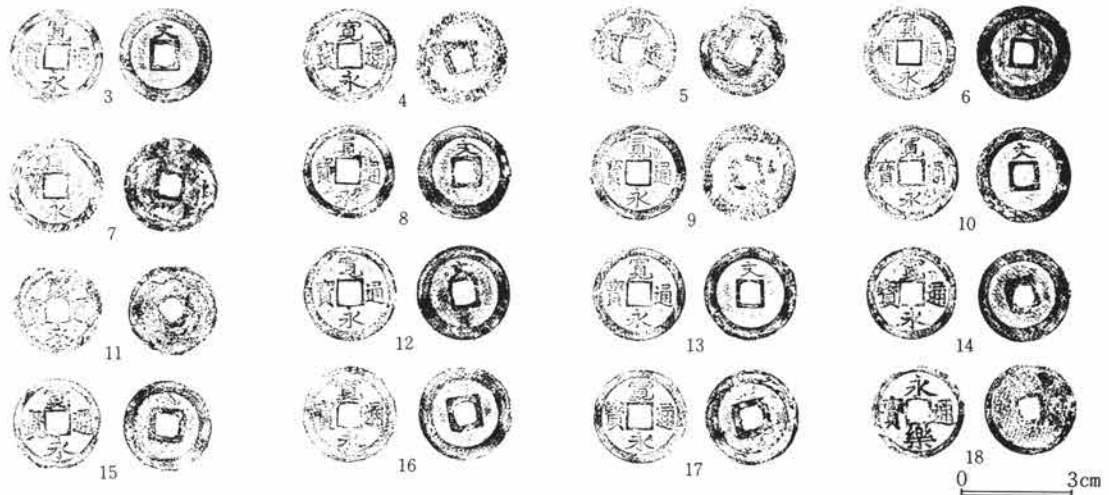


Fig. 585 I 6号墓出土遺物(2)

I 6号墓出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
584-1 185-1	陶器 皿	完形	13.6×4.9×3.7	唐津系。17C後～18C前 見込部青緑色釉。トチン痕あり。外面青緑色釉と灰釉。腰部篋削り。	①良好 ②灰白 ③密
584-2 185-2	陶器 皿	完形	13.9×4.9×3.8	唐津系。17C後～18C前。見込部青緑色釉。トチン痕あり。外面青緑色釉と灰釉。腰部篋削り。削り出し高台。	①良好 ②灰白 ③密

I 5号墓からは寛永通宝12点が出土している。背面はすべて無文である。

I 6号墓から寛永通宝17点・明銭の永楽通宝（永楽6年西暦1408年初鑄）1点が出土している。寛永通宝のうち、2・3・6・8・10・12・13の7点は背面に「文」、他は無文である。なお、4・9は背面に布目痕あり。

4 土 坑 (Fig. 586～591)

遺構名	位 置	形 状	長軸方位	長×短×深	備 考
I 1号土坑	57・58 I 1	円形	—	95×92×29	無遺物。断面すり鉢状。埋土は浅間山降下B軽石層。
I 2号土坑	57・58 I 6・7	不整円形	N-46°-W	116×98×12	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面平坦。
I 3号土坑	44・45 I 6	円形	—	96×86×10	無遺物。底面平坦。
I 4号土坑	57 I 1	隅丸方形	—	95×87×34	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面僅かに窪む。
I 5号土坑	57 I 1	隅丸長方形	N-72°-W	112×85×11	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面平坦。
I 6号土坑	56 I 7	隅丸長方形	N-0°-N	98×85×16	土器片出土。埋土は浅間山降下B軽石層。底面緩く波うつ。
I 7号土坑	51・52 I 34	隅丸方形	N-25°-W	176×154×38	土器片出土。一部はI 89号住居跡と混じる。底面平坦。
I 8号土坑	45 I 9・10	隅丸長方形	N-0°-N	80×64×30	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面平坦。
I 9号土坑	42 I 37・38	不整楕円形	N-63°-W	106×76×40	小塊の鉄滓多数出土。I 5号鍛冶工房跡に伴うか。底面平坦。
I 10号土坑	50・51 I 3・4	隅丸方形	N-77°-W	118×114×100	無遺物。浅間山降下B軽石、FP?混土層。底面平坦。

第3節 I 区の遺構と遺物

遺構名	位置	形状	長軸方位	長×短×深	備考
I 11号土坑	43 I 37	不整形	N-88°-W	150×126×52	小塊の鉄滓多数出土。I 5号鍛冶工房跡に伴うか。底面すり鉢状。
I 12号土坑	52・53 I 35・36	隅丸長方形	N-66°-W	128×56×20	羽口小片出土。土坑重複か。西・北壁線沿いは段をなす。
I 13号土坑	52・53 I 38	楕円形	N-86°-W	162×68×23	小礫。底面平坦。
I 14号土坑	49・50 I 1・2	隅丸長方形	N-15°-E	160×94×16	小礫・土師器小片。浅間山降下B軽石、FP塊状に含む。底面弱い凹凸あり。
I 15号土坑	49・50 I 0・1	隅丸長方形	N-10°-E	130×85×20	無遺物。浅間山降下B軽石層。FPを塊状に含む。底面緩く波うつ。
I 16号土坑	53・54 I 11	隅丸長方形	N-83°-W	180×129×9	土器片、川原石出土。埋土は浅間山降下B軽石層。底面緩く波うつ。
I 17号土坑	47 I 34・35	隅丸長方形	N-12°-E	190×87×12	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。底面平坦。
I 18号土坑	53・54 I 8・9	隅丸長方形	N-0°-N	236×142×46	無遺物、北東・南東部僅かに窪む。
I 19号土坑	53 I 8~10	隅丸長方形	N-0°-N	260×166×48	瓦片出土。南壁沿は段をなす。
I 20号土坑	51 I 5・6	隅丸長方形	N-7°-E	222×110×45	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層。
I 21号土坑	41~43 I 27・28	隅丸長方形	N-75°-E	262×(98)×10	土師器杯・羽口・こも編状の石器多数出土。
I 22号土坑	40・41 I 28~30	不整形	—	—	土器片・こも編状石器・鉄滓少量出土、鍛冶工房関連遺構か。
I 23号土坑	40・41 I 37・38	不整形	—	—	鉄滓小塊多量に出土、I 5号鍛冶工房跡の関連遺構か。
I 24号土坑	44 I 32~35	隅丸長方形	N-0°-N	534×72×26	無遺物。
I 25号土坑	52~54 I 4・5	不整形長方形	—	(233)×188×38	無遺物。26号と重複、これより新しい。浅間山降下B軽石、C軽石混土層。
I 26号土坑	52・53 I 4・5	隅丸長方形	N-78°-W	189×155×53	無遺物。25号と重複、これより古い。粘質土で埋まる。

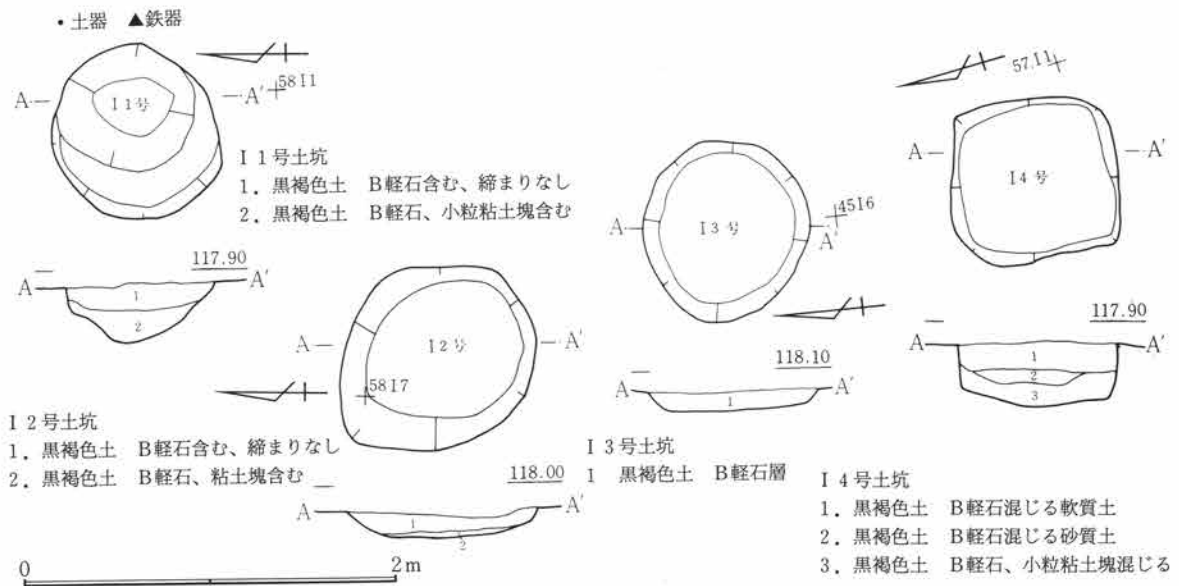
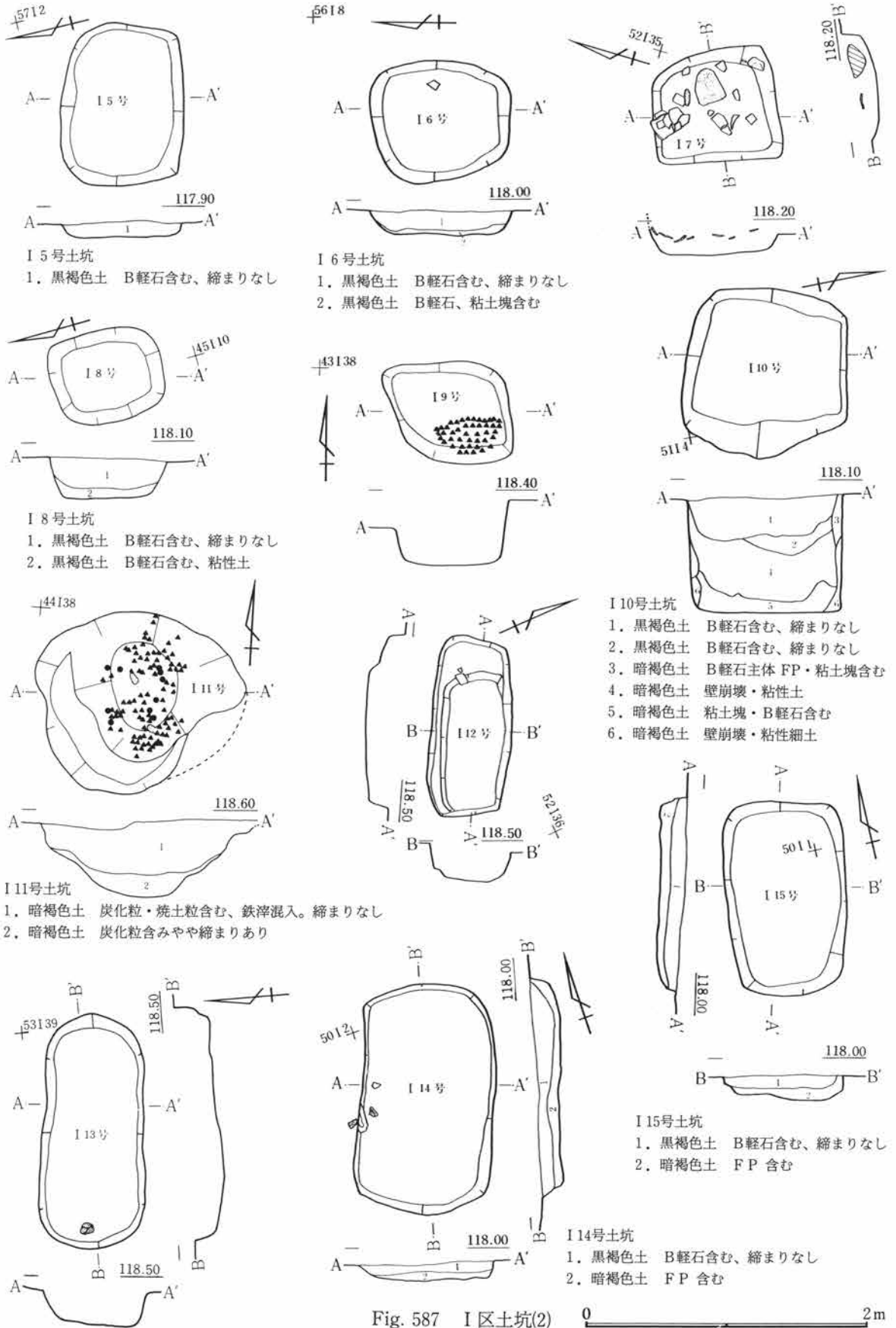


Fig. 586 I 区土坑(1)

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物



第3節 I区の遺構と遺物

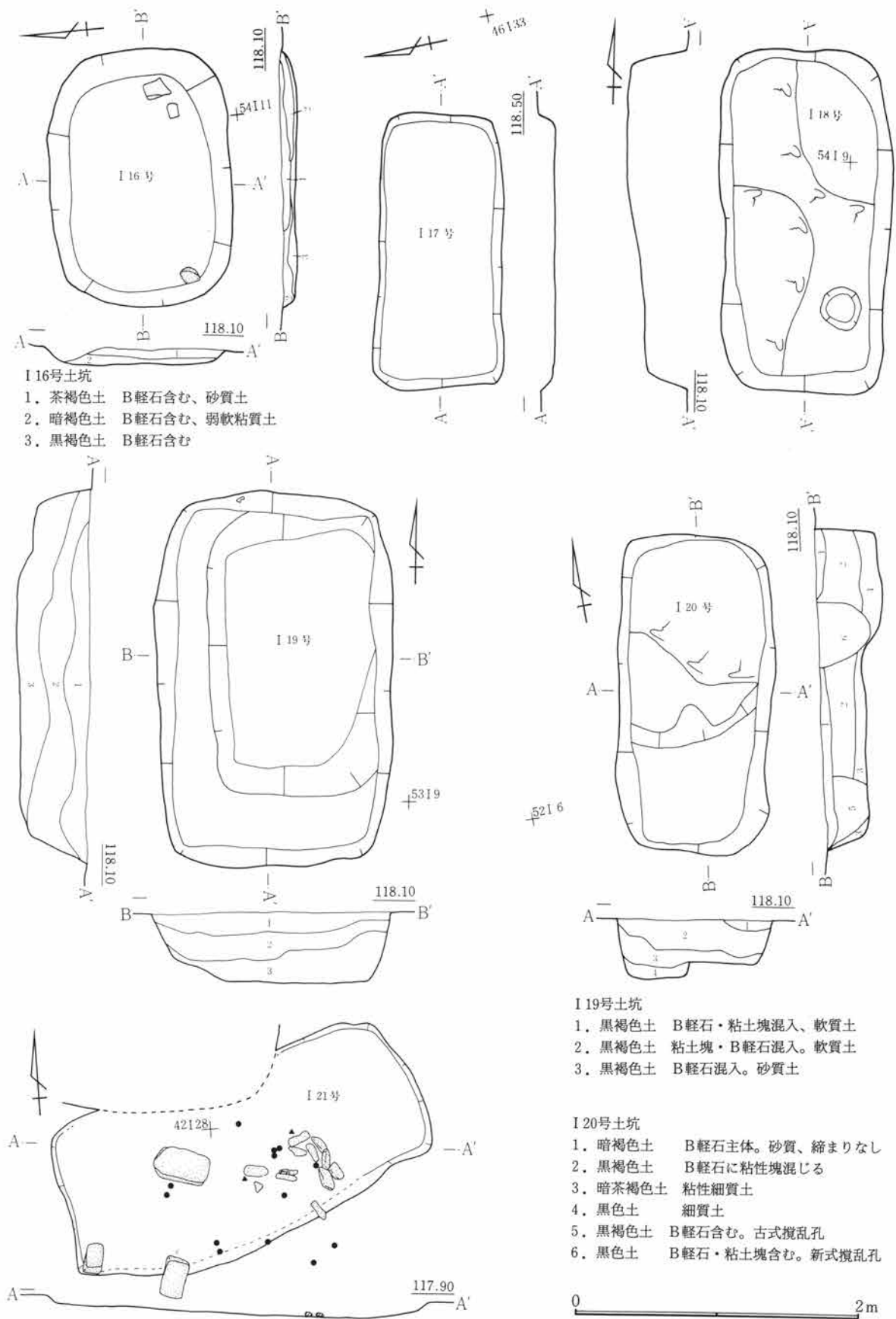


Fig. 588 I区土坑(3)

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

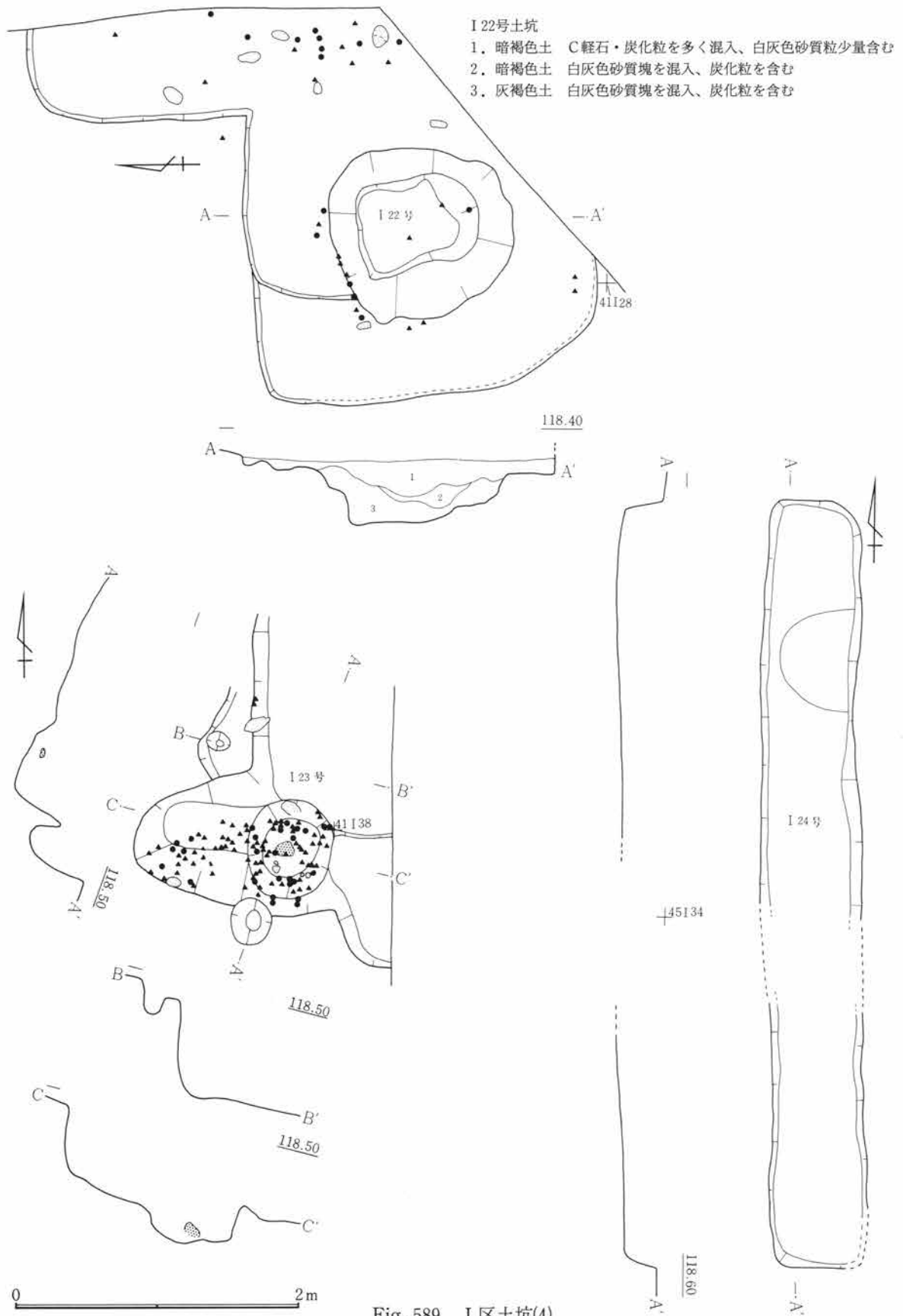
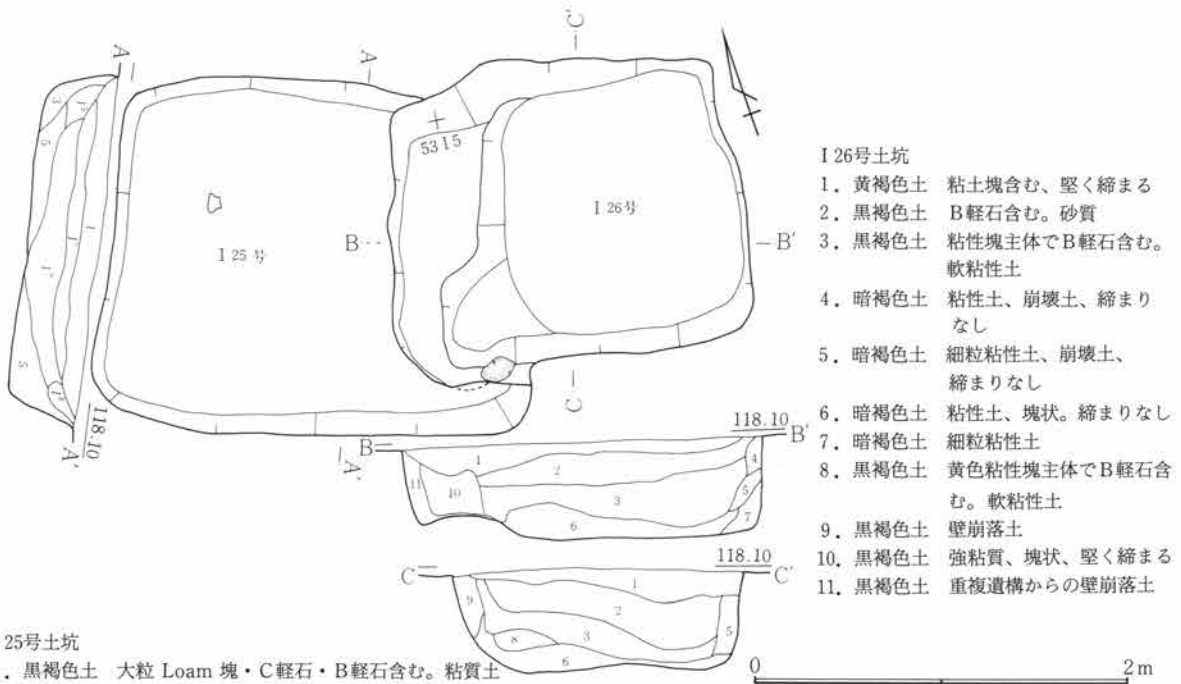


Fig. 589 I区土坑(4)

第3節 I区の遺構と遺物



- I 25号土坑
- 1. 黒褐色土 大粒 Loam 塊・C軽石・B軽石含む。粘質土
 - 1'. 黒褐色土 大粒 Loam 塊・C軽石・B軽石含む。粘質土
 - 1''. 黒褐色土 大粒 Loam 塊・C軽石・B軽石含む。粘質土
 - 1'''. 黒褐色土 大粒 Loam 塊・C軽石・B軽石含む。粘質土
 - 2. 暗褐色土 粘性土

- I 26号土坑
- 1. 黄褐色土 粘土塊含む、強く締まる
 - 2. 黒褐色土 B軽石含む。砂質
 - 3. 黒褐色土 粘性塊主体でB軽石含む。軟粘性土
 - 4. 暗褐色土 粘性土、崩壊土、締まりなし
 - 5. 暗褐色土 細粒粘性土、崩壊土、締まりなし
 - 6. 暗褐色土 粘性土、塊状。締まりなし
 - 7. 暗褐色土 細粒粘性土
 - 8. 黒褐色土 黄色粘性塊主体でB軽石含む。軟粘性土
 - 9. 黒褐色土 壁崩落土
 - 10. 黒褐色土 強粘質、塊状、強く締まる
 - 11. 黒褐色土 重複遺構からの壁崩落土

Fig. 590 I区土坑(5)

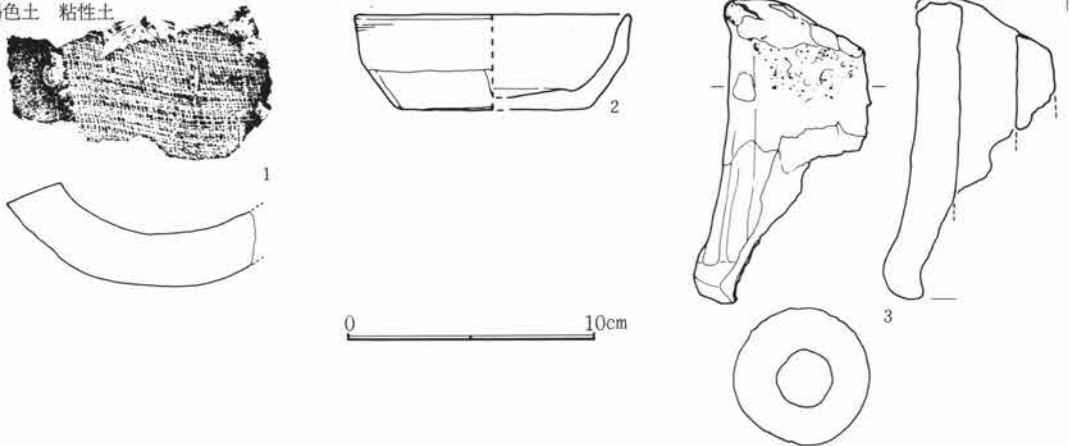


Fig. 591 I区土坑出土遺物

I区土坑出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
591-2 185-2	土師器 杯	片	11.2×7.8×3.8	体部直線的。口縁部下半でやや脹らみ直立気味に立つ。底部平底。口縁部横撫で。体部1段の篋削り。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
591-1 185-1	瓦 平瓦	小片	厚2.1	凹面布目。	①良好 ②灰白 ③粗・小石混る
591-3 185-3	土製品 羽口	片	12.4×5.4孔径2.2	先端部溶解。外面縦位の強い撫で成形痕。	①酸化 ②橙 ③粗

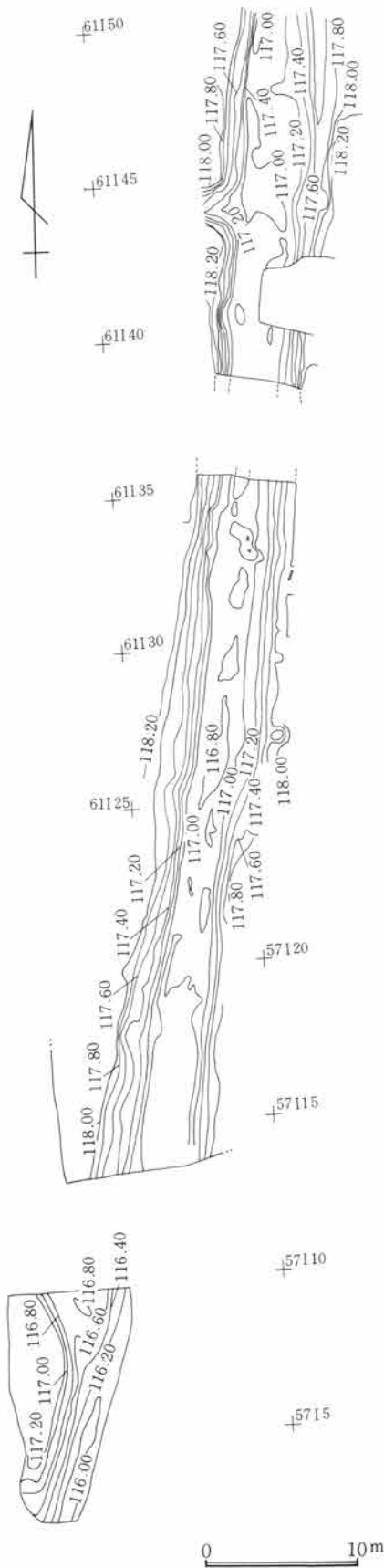


Fig. 592 J・I 1号溝

4. 溝跡

J・I 1号溝 (Fig. 592、596、597・PL. 153、185、186)

北隣区のJ区南東部で検出されたJ 1号溝から連続する溝でI区西側を縦断する。J区南東部では走向を北東に向け、その南端で折れて南南西から北北東方向に走りI区全域に及ぶ。

I区内ではI 3号鍛冶工房跡や多数の住居跡群と重複するが、I 5号墓を除き諸遺構より新しい時期の所産である。東側にはJ区南端よりI 2号溝が南方向へ接して伴走するが、当区ほぼ中央の東西区画線30付近で合流する。また南延長線は南隣H区の調査域西外に入り、現況では南流する用水路が踏襲している。H区の南を東西走する大溝H 6号溝は当跡に接続すると考えられる。当該区では東部で東西走する古代期のI 1号溝が合する。

検出全長は現生活道の未調査部分を含め約124mに及ぶ。I区での検出は90mである。溝幅6～6.4mを測る。深さは南北で検出面の標高に50cmの差があるものの、溝底面の標高で北が高く南へ低くなり約1.1mの差がある。J区南東部では深さ約1m、I区北部で1.2m、中央部で1.7m、南端部では約2.1mを測る。断面形状は緩いU字形を呈する。当区内での走行方位はおよそN-10°-Eを示す。

埋土は溝底面近くまで砂質灰褐色土で埋まり、下位は細粒砂質層の他粗粒の砂層も見られる。また底面近くには酸化層も形成されている。これらの土層堆積状況やI 5号墓との重複などを考慮すれば江戸時代中頃までは溝あるいは窪地としてその形状が存続していたと思われる。さらにJ・I 1号溝の性格を考えると、溝底面は北から南へ向かってかなりの下り勾配をもつこと、堆積土に酸化層や細・粗粒の砂層構成から、少なくとも開削当初は水路として機能していたと思われる。

なお土層断面図はJ区内検出部で示してある。

I 1号溝 (Fig. 593、598・PL. 153、187)

I区南部に位置し、37～58 I 9～14の範囲にわたって検出された東西走する溝である。西延長上ではJ・I 1号溝と交わるが現状では村内道路下になる。重複関係はI 44号住居跡と切り合うがこれより新しい時期の所産である。溝東半部の北側にI 1号鍛冶工房跡がある。

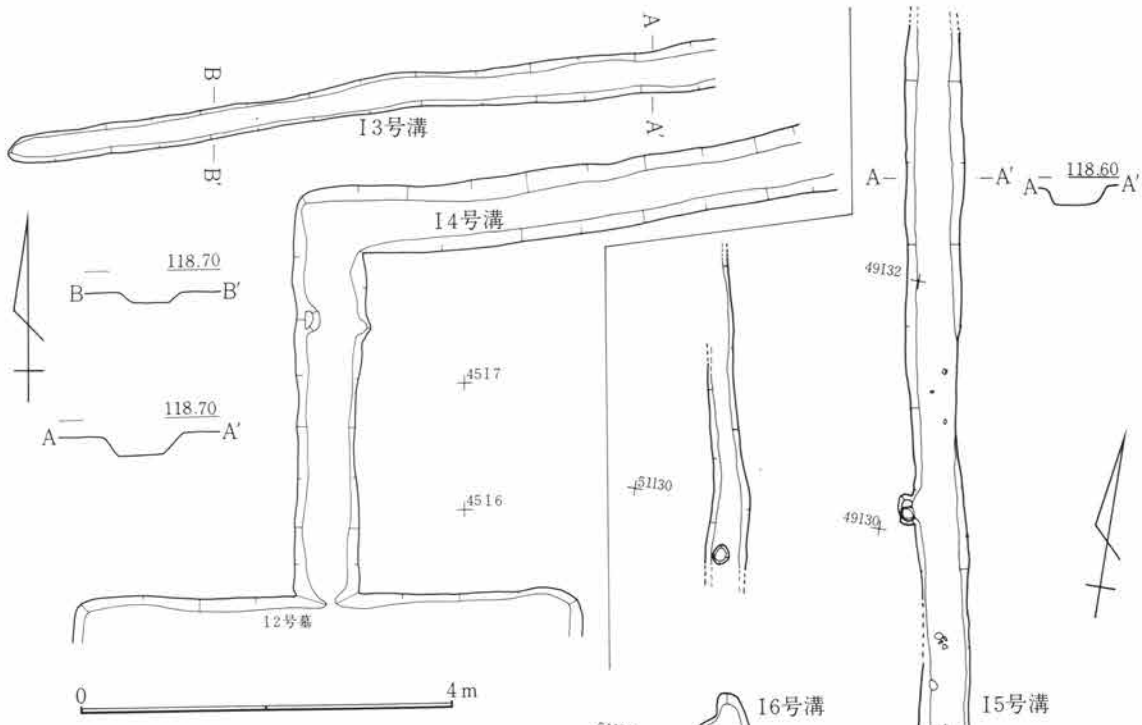


Fig. 594 I区溝 (3号・4号)

I 3号溝 (Fig. 594, 599・PL. 187)

I区南部に位置し、44～48 I 8・9の範囲にわたって検出された。直線的に東西走り、西端は完結するが東側は調査が2期にわたって行われた際に削平してしまったと思われる。

検出全長は約11.5m・幅60cm・深さ8cmを測る。断面形状は箱堀形を呈す。走行方位はN-83°-Eを示す。

埋土は浅間山降下C軽石を含む暗褐色土である。

I 4号溝 (Fig. 594)

I区南部に位置し、44～46 I 5～8の範囲にわたって検出されたL字に折れる溝である。44 I 8から約4.4mの長さで西へ延び直角に南へ折れ、約6mでI 2号墓の溝に合して跡切れる。

溝幅約70cm・深さ10cmを測り断面形状は箱堀り形を呈する。走行方位は東西走部分はN-83°-E、南北走部分はN-3°-Eを示す。

埋土は浅間山降下のC軽石粒を含む暗褐色土である。

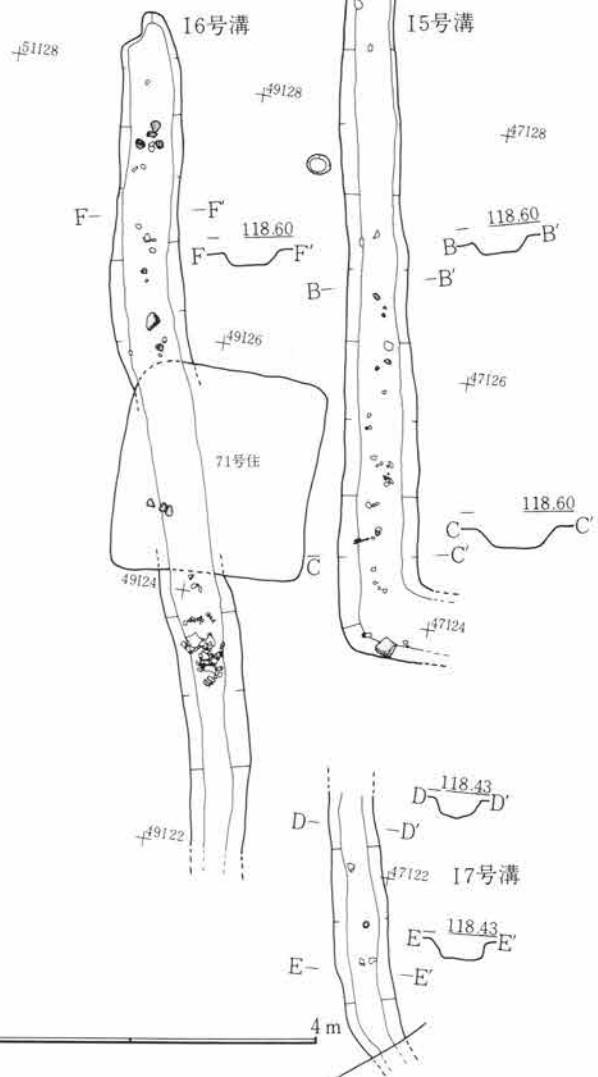


Fig. 595 I区溝 (5号・6号・7号)

I 5号溝 (Fig. 595、600・PL. 153、187)

I区ほぼ中央部に位置し、47~49 I 23~34の範囲にわたり西側にはI 6号溝が併走する。直線的に南北走り、南端で当方へ折れる様相を呈するが以東は溝筋を明確にできなかった。また北端は土坑状の落ち込みと重複し以北は未検出である。

検出全長は約22mで溝幅1.2m・深さ約30cmを測り、断面形状は箱堀形を呈す。南北走部分の走行方位はおよそN-12°-Wを示す。

埋土は浅間山降下C軽石を含んだ暗褐色土である。出土遺物には鍛冶関係遺物である羽口・砥石類のほか金切り鋏が検出されている。

I 6号溝 (Fig. 595、601、602・PL. 153、188、189)

I区のほぼ中央部に位置し、48~50 I 22~31の範囲にわたって検出された。東側にはI 5号溝が併走する南北走の溝である。I 72号住居跡と重複するがこれより古い時期の所産である。北側49 I 28付近で一旦跡切れるが以北はかろうじて検出できた。北端は自然消滅的に掘形が浅くなる。また南端も溝筋は不明瞭となる。

検出全長は約20mで溝幅約1m・深さ16cmを測り、断面形状は箱堀り形を呈する。走行方位はおよそN-16°-Eを示す。

埋土は浅間山降下C軽石粒を含む暗褐色土である。また出土遺物は鍛冶関係遺物の羽口・砥石などの他瓦片が検出されている。

I 7号溝 (Fig. 595)

I区のほぼ中央部に位置し、46・47 I 20~22の範囲に検出され南北走する溝である。溝筋の方向はI 5号溝に結続する様相がみられるが北端は跡切れて不明瞭になり、南端は調査区域外に入るが緩く東方へ曲がる。

検出全長は約3.5mで溝幅40cm・深さ18cmを測り、断面形状は箱堀形を呈す。走行方位はおよそN-17°-Wを示す。

埋土は浅間山降下のC軽石粒を含む暗褐色土である。

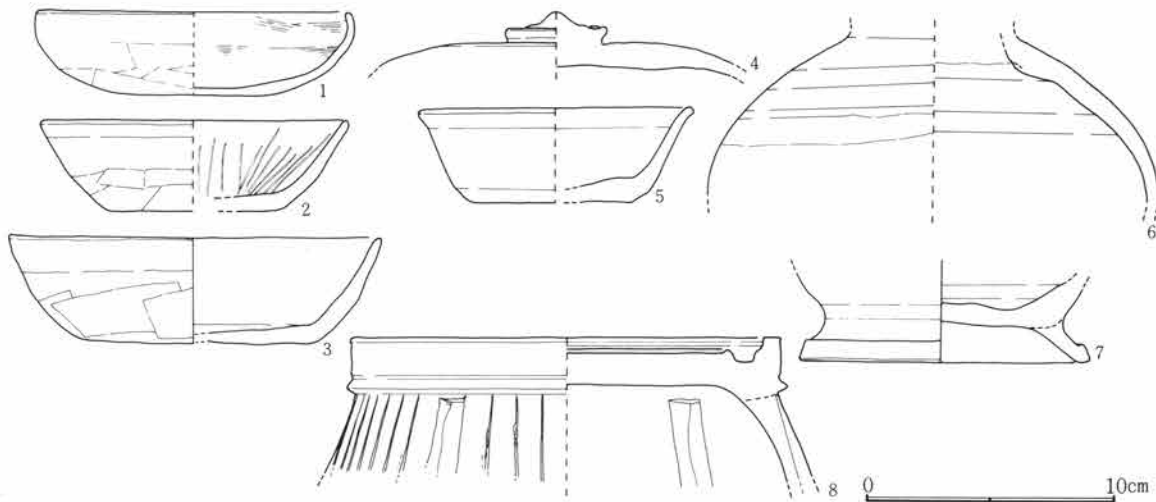


Fig. 596 J・I 1号溝出土遺物(1)



Fig. 597 J・I 1号溝出土遺物(2)

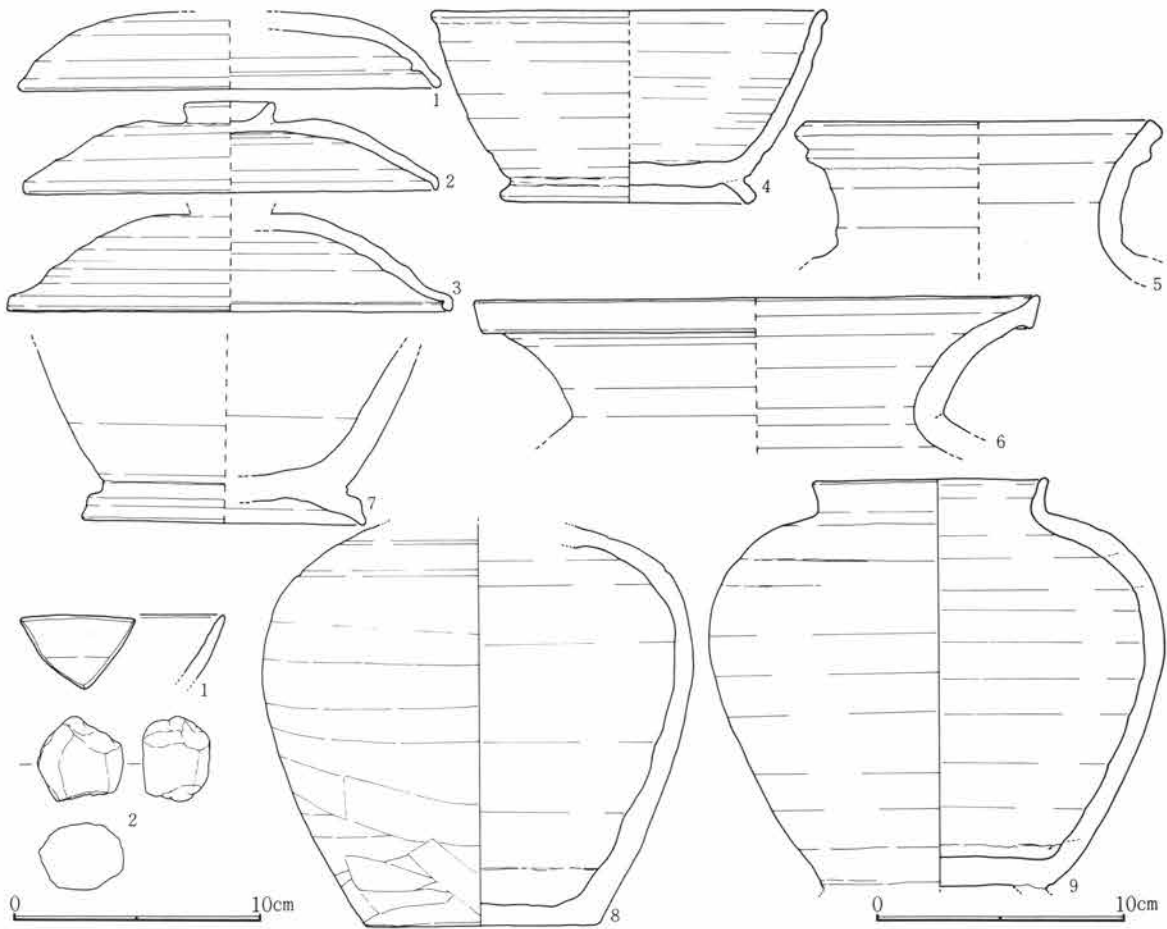


Fig. 599

Fig. 598 I 1号溝出土遺物

I 2号1・I 3号2溝出土遺物

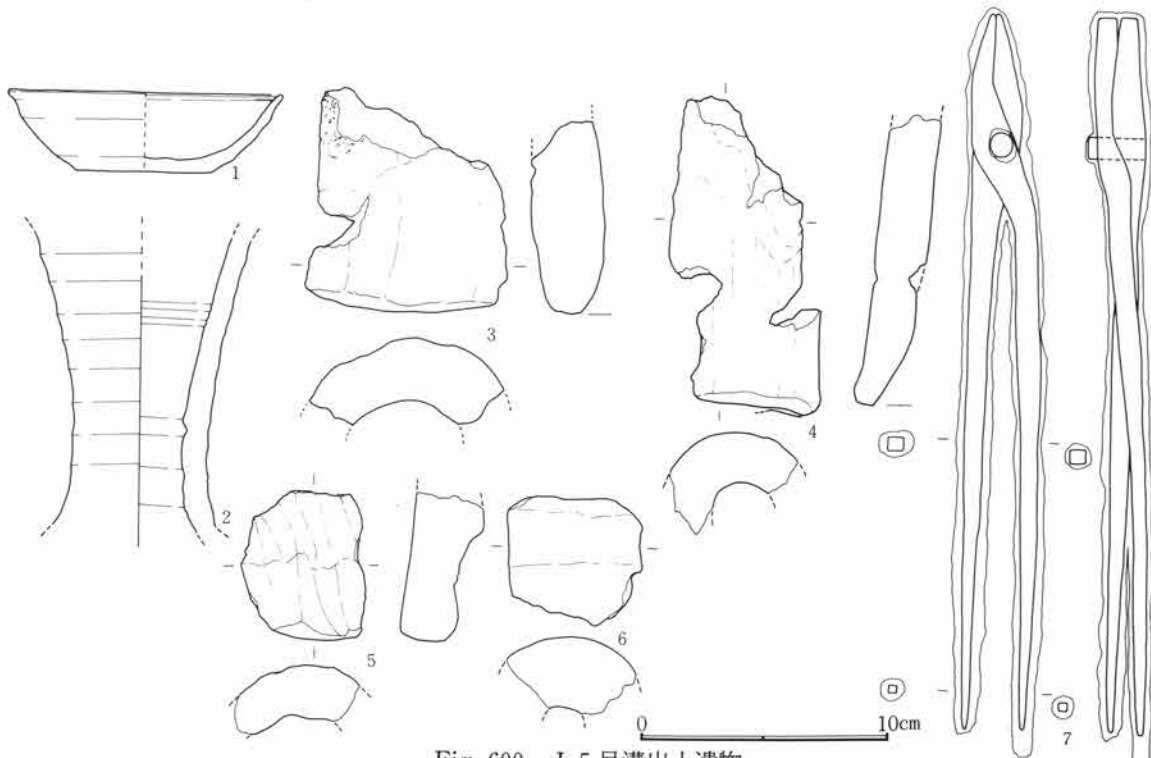


Fig. 600 I 5号溝出土遺物

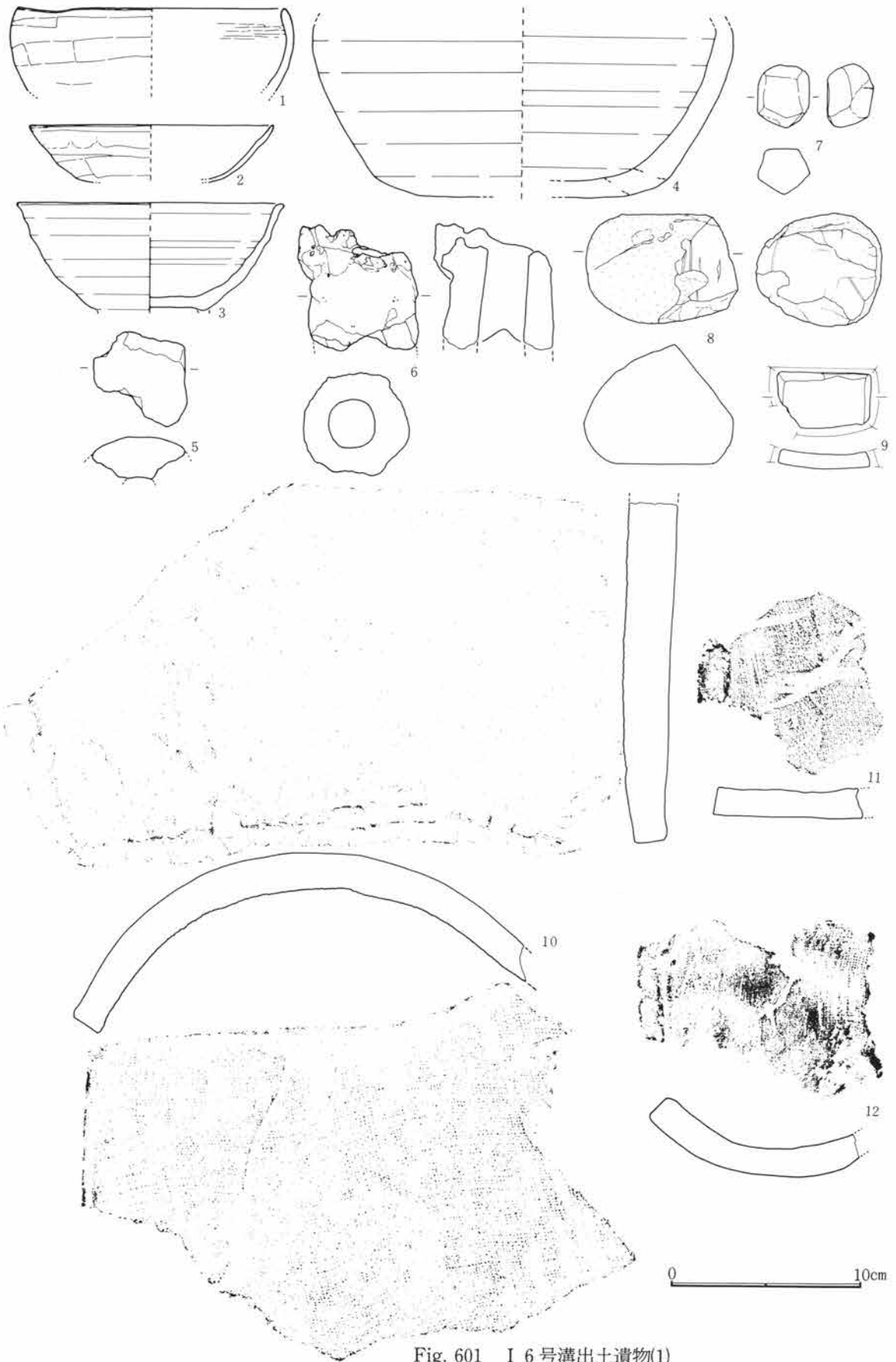


Fig. 601 I 6号溝出土遺物(1)

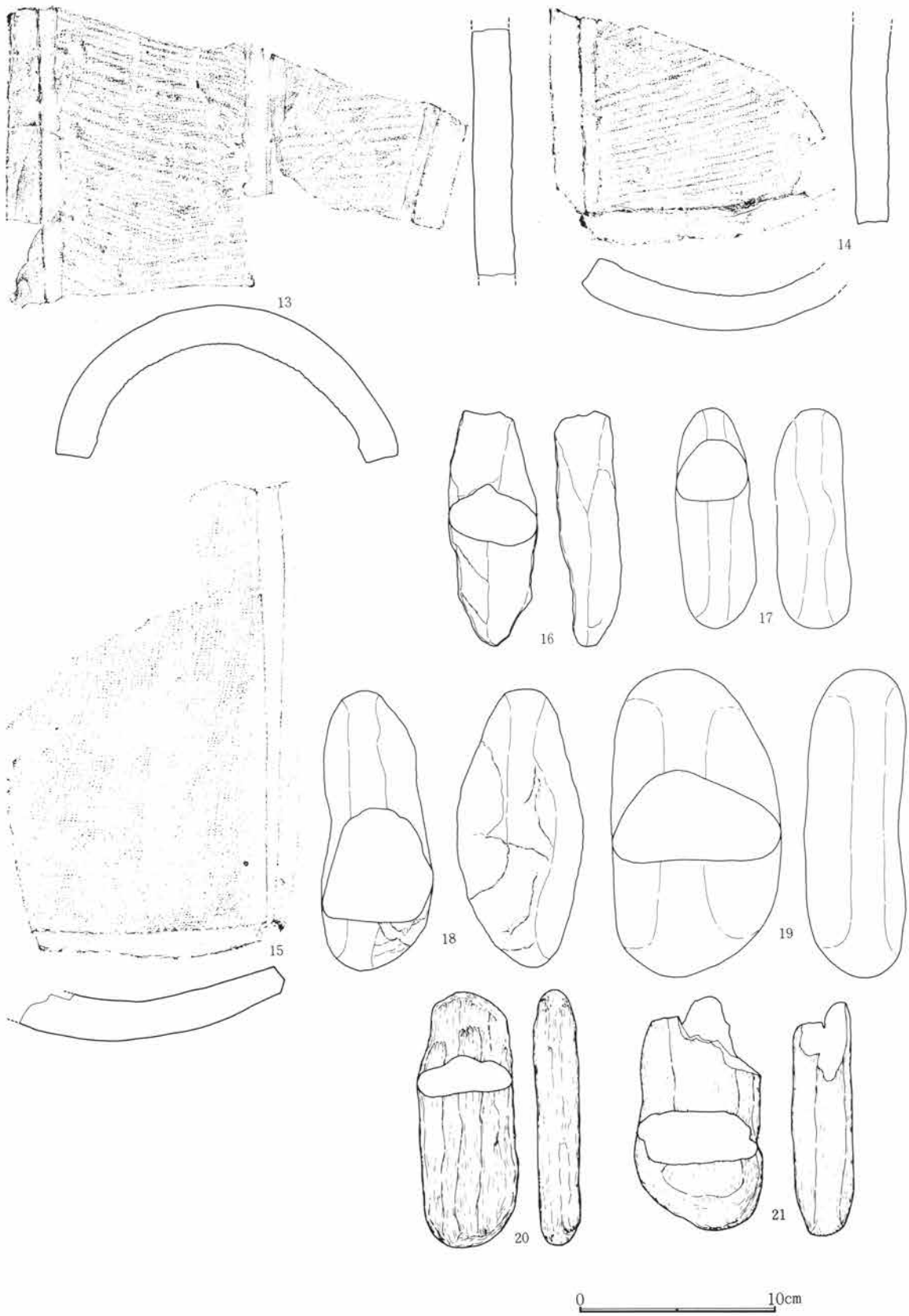


Fig. 602 I 6号溝出土遺物(2)

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

J・I 1号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
596-1 185-1	土師器 杯	1/4	12.7×-×3.3	口縁部内湾して立ち底部平坦をなす。内面横撫で。外面底部篋削り。	①良好 ②赤褐 ③やや粗、砂混る
596-2 185-2	土師器 杯	1/4	12.4×7.0×(3.7)	平底・体部直線的で中位で緩く折れる。口縁部横撫で。体部横位。底部不定方向篋削り。内面斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密
596-3 185-3	土師器 杯	1/4	15.0×9.5×4.2	体部直線的に開き底径大きく平底。体部内面放射状暗文痕。口縁部横撫で。体・底部篋削り。底部紐作り。円板状。	①良好 ②橙 ③密
596-4 185-4	須恵器 蓋		-×-×(2.6) 摘径5.1	転用砥石。割れ口を使用。扁平な擬宝珠摘。天井部平らで回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
596-5 185-5	須恵器 杯	1/4	11.1×6.4×3.8	体部直線的で外傾度弱く、口縁部外反する。轆轤成形。底部手持ち篋削り。腰部回転篋削り。	①良好 ②黄灰 ③やや密
596-6 185-6	須恵器 壺	肩部1/4	-×-×(6.7) 最大径18.0	球形を呈す。肩部に弱い回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③密
596-7 186-7	須恵器 長頸壺	底部	-×11.6×(3.3)	腰部回転篋削り。高台外へ強く張り端部は頸を作る。	①やや軟 ②青灰 ③やや粗
596-8 186-8	須恵器 硯	小片	17.4×-×(5.7)	円面硯。硯部摩擦著しく光沢あり。内提低く、外提は高い。脚部縦位刻線6条以上と長方形透しで構成。	①良好 ②灰 ③密
597-9 186-9	須恵器 甕		23.8×-×(11.7)	胴部やや丸く張り口縁部短かく外反する。口唇部上面は幅広く平坦をなす。	①酸化軟 ②鈍い黄橙 ③密
597-10 186-10	須恵器 甕	底部	-×21.0×(7.4)	底部縁辺に焼成前の小孔みられる。	①良好 ②灰白 ③やや粗
597-11 186-11	陶器 甕	底部	-×10.4×(5.2)	高台径小さく幅広く直立する。胴部球形を呈す。内外面褐色釉。	①良好 ②暗赤褐 ③密
597-12 186-12	軟質陶器 内耳			体部浅く深さ5.5cm、底部から直立する。内耳は幅広く。	①良好 ②灰 ③密
597-13 186-13	須恵器 足		幅4.5 長6.7	獣足か。表面に点貼文。	①酸化 ②灰黄 ③密
597-14 186-14	瓦 平瓦	小片	厚1.55	凹面布目後強い篋撫で。凸面縄目叩き後撫で。縁面篋調整	①良好 ②灰 ③やや密
597-15 186-15	瓦 平瓦	小片	厚1.5	凹面布目。凸面縄目叩き。	①良好 ②明オリーブ 灰 ③やや粗
597-16 186-16	瓦 平瓦	小片	厚1.75	凹面布目後篋撫で。凸面縄目後篋撫で。側・縁面篋調整。	①酸化気味 ②鈍い黄 橙 ③やや粗
597-17 186-17	瓦 平瓦	小片	厚2.2	凹面細かい布目。凸面縄目叩き。側面篋調整。	①良好 ②青灰 ③密・黒色微粒混る
597-18 186-18	瓦 平瓦	小片	厚2.0	凹面布目。凸面撫で。側・縁面篋調整。	①良好 ②暗オリーブ 灰 ③やや密
597-19 186-19	瓦 平瓦	小片	厚2.3	凹面布目。凸面縄目叩き後撫で。	①酸化軟 ②褐 ③やや密
597-20 186-20	瓦 平瓦	小片	厚1.1	凹面布目。凸面篋撫で。	①酸化 ②明赤褐 ③やや粗
597-21 186-21	瓦 平瓦	小片	厚2.0	凹面布目。凸面撫で。	①酸化軟 ②鈍い橙 ③やや密
597-22 186-22	土製品 埴塼	小片	-×-×(4.9)	内面上半に赤褐色溶解物付着。	①粗 ②黒褐 ③小石混る
597-23 186-23	須恵器 転用埴塼			内面、欠口に溶解物。洞鏽。緑青・灰付着。	①良好 ②灰 ③やや粗
597-24 186-24	須恵器 転用埴塼	底部	-×11.0×(3.1)	瓶底部を転用か。内面に溶解物付着し器面の発泡著しい。	①良好 ②明オリーブ 灰 ③やや粗
597-25 186-25	須恵器 転用砥石		5.7×4.4×1.4	2側面使用。甕片。	①良好 ②灰白 ③やや密
597-26 186-26	須恵器 転用砥石		4.5×5.0×1.5	3側面使用。甕片。	①良好 ②灰白 ③やや粗
597-27 186-27	須恵器 転用砥石		3.6×4.4×0.8	4側面使用。甕片。	①良好 ②灰白 ③密
597-28 186-28	須恵器 転用砥石		5.0×3.0×1.5	1側面使用。甕片。	①良好 ②灰白 ③やや密
597-29 186-29	須恵器 転用砥石		3.3×3.3×1.3	2側面使用。刃痕あり。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや密

第3節 I 区の遺構と遺物

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	残存量	計 測 値	器 形 及 び 成 ・ 調 整 の 特 徴、そ の 他	①焼 成 ②色 調 ③胎 土
597-30 186-30	土 製 品 羽 口	基部小片	長(6.3)	外面の指頭による成形痕著しい。先端部の溶解僅かに見られる。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや密
597-31 186-31	土 製 品 羽 口	基部小片	長(7.7)	外面に縦篋削り成形。先端部の溶解部分僅かに見られる。	①酸化気味 ②灰白 ③やや密
597-32 186-32	土 製 品 羽 口	先端部小片	長(6.8)	先端部の溶解・発泡著しく暗緑灰を呈す。胎土に植物質混る。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや粗
597-33 186-33	土 製 品 羽 口	先端部小片	長(5.5)	先端部の溶解・発泡著しく暗緑灰を呈す。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや密

I 1号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	残存量	計 測 値	器 形 及 び 成 ・ 調 整 の 特 徴、そ の 他	①焼 成 ②色 調 ③胎 土
598-1 187-1	須 惠 器 蓋	1/2 摘欠損	17.2×-×(3.1)	天井部内湾気味に開き丸味をもつ。口縁端部丸く、内面に明瞭なかえり。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
598-2 187-2	須 惠 器 蓋	1/2	16.8×-×3.6摘 径3.7	環状摘。天井部やや直線的に開く。口縁部は小さく直下に折れ、端部丸い。轆轤成形。天井部回転糸切り後回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密・黒色粒多量
598-3 187-3	須 惠 器 蓋	摘欠損	18.0×-×(3.9) 摘基径3.2	天井部丸味強い。口縁端部は直下に折れ、端部丸い。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密・黒色粒多量
598-4 187-4	須 惠 器 椀	1/2	16.0×10.3×7.6	器肉厚い。腰部張りなく、体部深く内湾気味に立つ。付高台、幅広で丸味をもち外側へ張る。轆轤成形。回転篋削り。	①良好 ②灰 ③密
598-5 187-5	須 惠 器 甕	口縁部	14.7×-×(6.4)	頸部外反気味に開く。口縁部下に鈍い幅広な凸帯を付し口唇部矩形を呈す。	①良好 ②灰 ③密
598-6 187-6	須 惠 器 甕	口縁部	22.7×-×(6.3)	頸部外反気味に開き、口縁部鋭い下顎をもち断面三角。	①良好 ②褐灰 ③密
598-7 187-7	須 惠 器 壺	底部1/2	-×11.5×6.8	高台上端面明瞭な段をなし僅かに外側へ張る。腰部回転篋削り。	①良好 ②暗青灰 ③密
598-8 187-8	須 惠 器 長 頸 壺	1/2口頸 欠 損	-×9.5×(16.0) 最大径17.3	胴部やや丸味をもち肩部は丸く張る。底部平底。肩部に鈍い一条の凹線巡る。底部・胴下半手持篋削り。肩に自然釉。	①良好 ②灰 ③やや密
598-9 187-9	須 惠 器 短 頸 壺	台部欠損	9.5×8.9×(16.2) 最大径18.3	胴部丸味をもち肩部は丸く張る。頸部短かく僅かに外傾して立つ。腰部手持篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密

I 2号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	残存量	計 測 値	器 形 及 び 成 ・ 調 整 の 特 徴、そ の 他	①焼 成 ②色 調 ③胎 土
599-1 187-1	青 磁 椀	口縁部 破 片	16.6×-×(2.6)	口縁内側に2条の沈線。緑灰色の釉。	①良好 ②灰 ③密

I 3号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	残存量	計 測 値	器 形 及 び 成 ・ 調 整 の 特 徴、そ の 他	①焼 成 ②色 調 ③胎 土
599-2 187-2	石 製 品 砥 石		3.4×3.4×2.6	多面使用。重17g	角閃石安山岩

I 5号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	残存量	計 測 値	器 形 及 び 成 ・ 調 整 の 特 徴、そ の 他	①焼 成 ②色 調 ③胎 土
600-1 187-1	須 惠 器 杯	1/2	17.0×5.4×3.15	体部丸味をもち口縁部僅かに外反。内面口唇部2条の浅い凹線巡る。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
600-2 187-2	須 惠 器 長 頸 壺	頸 部	長11.7	基部細く上半部は外反気味に開く。内面3段の巻上げ痕顕著。胴部との接合部で剝離。	①良好 ②灰白 ③やや密
600-3 187-3	土 製 品 羽 口	基 部	長8.7 基孔径7.6	大形品。基部は面取り状の成形。	①やや軟 ②灰褐 ③粗・白色小石多混る
600-4 187-4	土 製 品 羽 口	先端部 欠 損	長12.0	縦位の強い撫で成形。	①良好 ②鈍い褐 ③やや粗

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
600-5 187-5	土製品 羽口	基部小片	長5.7	縦位の強い撫で成形。	①やや軟 ②浅黄橙 ③やや密
600-6 187-6	土製品 羽口	小片	長4.5	摩耗著しい。	①軟 ②鈍い黄橙 ③やや密
600-7 187-7	鉄製品 鉄	完形	鉄部8.3 柄部21.2	刃部矩形をなし金切り鉄みと思われる。	

I 6号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
601-1 188-1	土師器 杯		14.0×-×(4.3)	体部深く丸く内湾する。外面横位篋削り。内面黒色処理及び横篋磨き。	①良好 ②浅黄 ③やや密
601-2 188-2	土師器 杯	均	12.8×-×2.9	腰部やや丸味をもち中位で僅かに外反し口縁部内湾気味。器内薄い。口縁部横撫で。体・底部篋削り。	①良好 ②明赤褐 ③やや粗・砂混る
601-3 188-3	須恵器 椀	高台欠損	14.0×-×(5.6)	体部丸味をもち深い。口唇部丸く外屈する。付高台剝落。轆轤成形。回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③密
601-4 188-4	須恵器 壺	底部	-×11.4×(8.9)	底部大きく、胴部扁平で丸く張る。底部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密
601-5 188-5	土製品 羽口	小片	長4.2	摩滅著しい。	①酸化 ②灰褐 ③やや粗
601-6 188-6	土製品 羽口	先端部	長6.3 孔径2.4	先端部溶解顕著	①酸化 ②灰褐 ③やや粗・白色粒混る
601-7 188-7	石製品 砥石		長3.25巾2.7 厚2.35	多面使用。重20g	流紋岩
601-8 188-8	石製品 砥石		長8.0 幅5.6 厚6.2	スタンプ型。2面使用。重247g	角閃石安山岩
601-9 188-9	須恵器 転用砥石		縦2.8横4.8 厚0.7	4側面使用。瓶片。	①良好 ②灰 ③やや密
601-10 188-10	瓦 丸瓦?	大きい	厚2.0	凹面布目。凸面縄目叩き後撫で。側面篋調整。	①良好 ②褐灰 ③やや粗
601-11 188-11	瓦 平瓦	小片	厚1.4	凹面布目。凸面撫で。	①良好 ②灰白 ③密・縞状
601-12 188-12	瓦 平瓦		厚1.5	凹面布目。凸面篋撫で。側面篋調整	①酸化軟 ②鈍い橙 ③やや粗・小石混る
602-13 188-13	瓦 丸瓦		厚1.9	凹面布目後強い篋撫で。凸面篋撫で。側・縁面篋調整。	①良好 ②灰 ③密・縞状
602-14 189-14	瓦 平瓦		厚2.7	凹面布目後強い篋撫で。凸面篋撫で。側・縁面篋調整。	①良好 ②灰 ③密・縞状
602-15 189-15	瓦 平瓦		厚1.8	凹面布目。凸面篋撫で。側・縁面篋調整。	①良好 ②灰 ③やや粗・白色粒混る
602-16 189-16	石		長11.6幅4.5 厚2.9		緑色片岩。
602-17 189-17	石		長11.2幅3.7 厚3.8		溶結凝灰岩
602-18 189-18	石		長14.1幅5.7 厚6.5		輝石安山岩(粗粒)
602-19 189-19	石		長15.5幅8.6 厚5.0		ひん岩
602-20 189-20	石		長12.9幅4.8 厚2.3		黒色片岩
602-21 189-21	石		長11.8幅6.1 厚3.1		雲母石英片岩

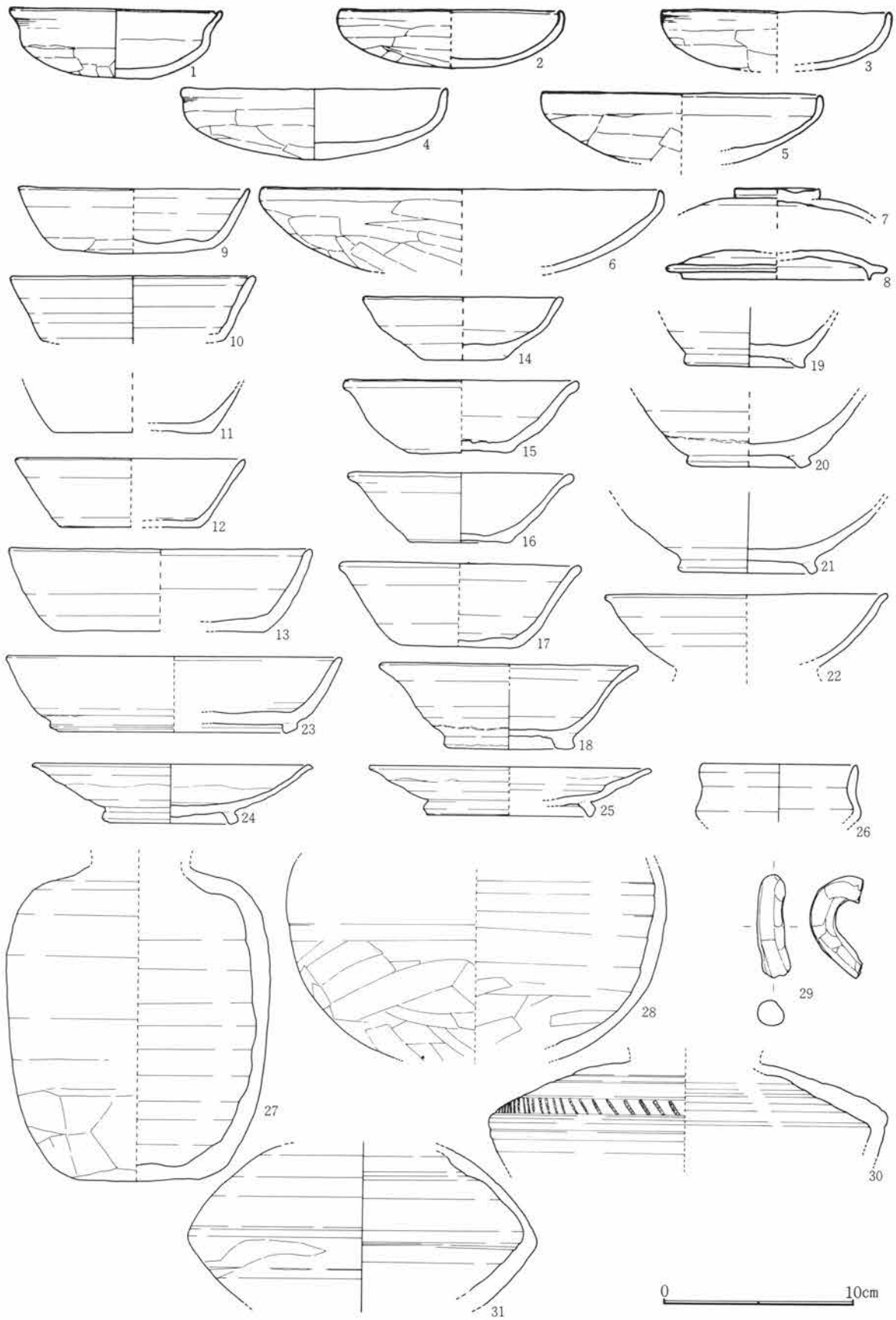


Fig. 603 I区出土遺物(1)

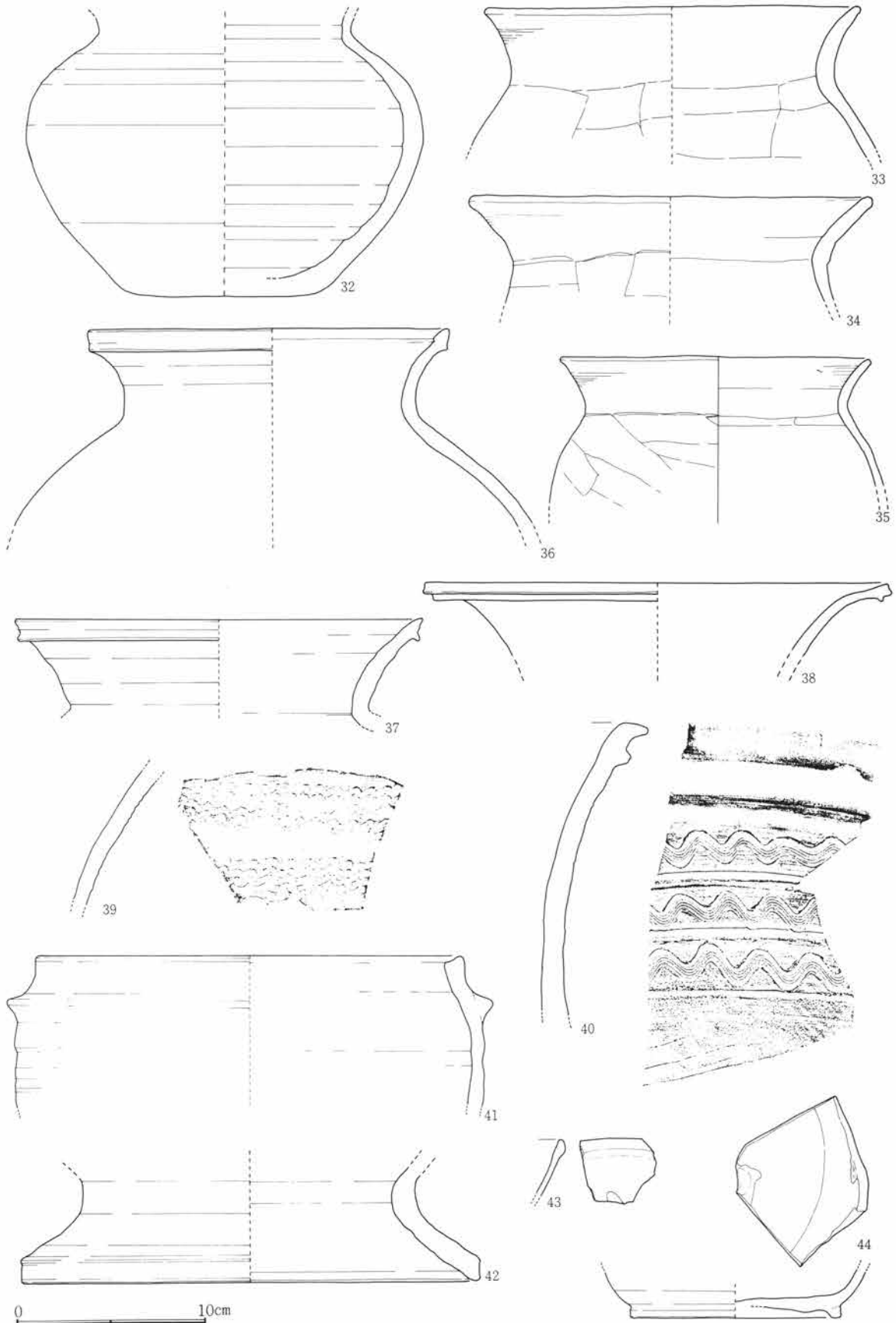


Fig. 604 I区出土遺物(2)

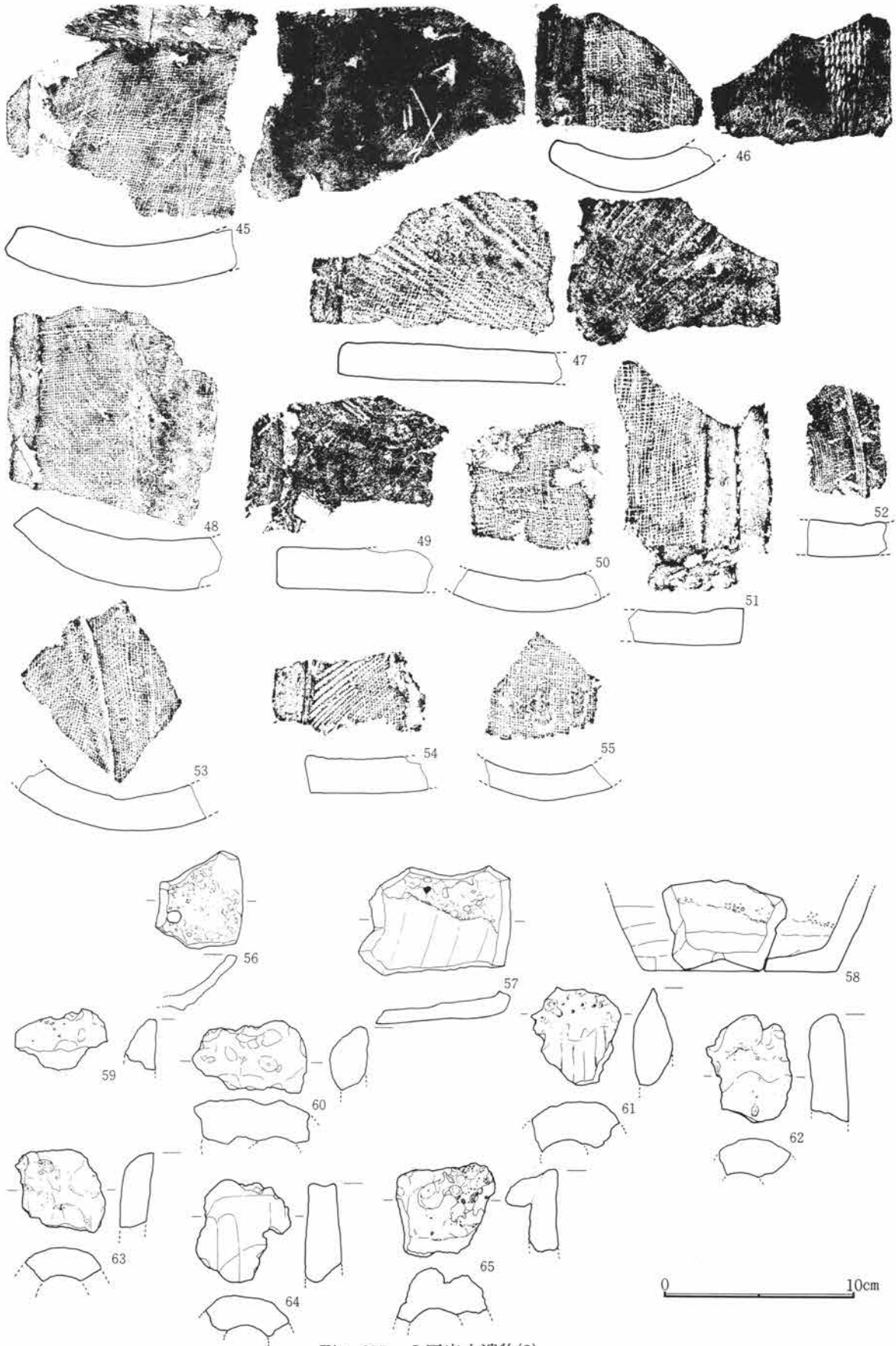


Fig. 605 I区出土遺物(3)



Fig. 606 I区出土遺物(4)



Fig. 607 I区出土遺物(5)



Fig. 608 I区出土遺物(6)

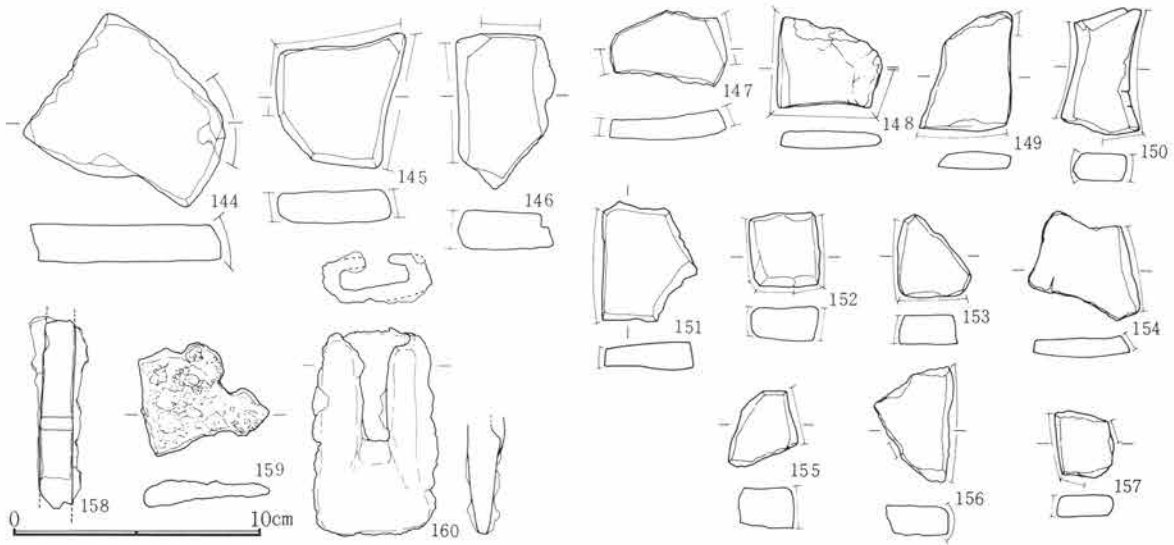


Fig. 609 I区出土遺物(7)

I区出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
603-1 189-1	土師器 杯	完形	11.3×-×3.5	体部やや丸味をもち口縁部くびれて外反して立ち上がった後口唇部内湾して立つ。底部小さく平底。体・底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密・細砂混る
603-2 189-2	土師器 杯	¼	12.0×-×3.0	体部やや扁平。口縁部丸く内湾。口唇部やや細り内屈。口縁部横撫で。体部・底部篋削り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや密
603-3 189-3	土師器 杯	¼	11.0×-×3.1	底部扁平。口縁部内湾して立つ。口縁部横撫で。体部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
603-4 189-4	土師器 杯	¼	14.0×-×3.7	口縁部僅かに外反して立つ。底部肥厚。口縁部横撫で。体部・底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
603-5 189-5	土師器 杯	¼	14.7×-×(3.5)	底部扁平。口縁部折れて短く内傾気味に立つ。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗・砂混る
603-6 189-6	土師器 鉢	¼	21.0×-×(4.5)	底部丸く不安定。口縁部強く折れて短かく内傾して立つ。口縁部横撫で。口縁下横・底部不定方向篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
603-7 189-7	須恵器 蓋	端部欠損	-×-×(1.6) 摘径4.5	摘は扁平な環状。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②黄灰 ③密
603-8 189-8	須恵器 蓋	¼ 摘欠損	11.5×-×(1.5)	天井部平坦。口縁部水平、端部丸い。かえり鋭く直に下り口縁より突出する。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③密・黒色粒混る
603-9 189-9	須恵器 杯	¼	12.2×8.3×3.3	腰部張りなく体部直線的に立ち上がる。腰部篋削り。底部回転篋削り後回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③密
603-10 189-10	須恵器 杯	底部欠損	12.8×9.5×3.4	体部直線的に立ち外傾度弱い。やや深め。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密
603-11 189-11	須恵器 杯	底部¼	-×8.2×(2.5)	腰部やや丸味。轆轤成形。底部回転篋削り。体部外面はオリブ灰色を呈す。	①良好 ②灰白 ③やや密
603-12 189-12	須恵器 杯	¼	12.0×7.2×3.6	体部直線的に開く。轆轤成形。底部回転篋削り後回転篋調整。	①良好 ②灰白 ③密・黒色粒混る
603-13 190-13	須恵器 杯	¼	16.0×11.0×4.3	体部やや深く内湾気味に開く。轆轤成形。底部・腰部右回転篋削り調整。	①良好 ②灰 ③やや密・小石混る
603-14 190-14	須恵器 杯	¼	10.6×4.2×3.3	底径小さく、体部中位に張りをもつ。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
603-15 190-15	須恵器 杯	¼	12.4×5.5×3.8	体部丸く張り口縁部外反気味。口唇部丸い。見込部強いうず巻き痕。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 ②灰褐 ③やや粗
603-16 190-16	須恵器 杯	¼	11.9×5.4×3.65	底径小さく体部中位で僅かに丸味。口唇部丸く肥厚し強く外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 ②灰褐黄 ③やや粗
603-17 190-17	須恵器 杯	¼	12.8×6.4×4.3	腰部丸く体部直線的に外傾。口唇部丸く僅かに外反。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③粗
603-18 190-18	須恵器 椀		13.6×7.0×4.4	体部から口縁部外反して開く。口唇部やや肥厚。付高台、幅広。轆轤成形。回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③やや粗

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
603-19 190-19	須恵器 椀	底部%	一×6.4×(2.3)	付高台、低くハの字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。高台接合は篋状工具で回転調整。	①やや軟 ②灰 ③やや粗
603-20 190-20	須恵器 椀	¼	一×6.6×(3.7)	付高台、幅広く作り離。轆轤成形。	①軟 ②灰白 ③やや粗
603-21 190-21	須恵器 椀	底部%	一×7.5×(3.4)	付高台。轆轤成形。	①やや軟 ②灰白 ③やや密
603-22 190-22	須恵器 椀		14.7×一×(3.7)	体部丸味をもち口唇部丸く外反。轆轤成形。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや粗・砂混る
603-23 190-23	須恵器 盤	小片	17.6×13.0×4.0	体部僅かに内湾気味。付高台、下端面外傾する。腰部回転篋削り。轆轤成形。底部回転篋調整。	①良好 ②灰 ③やや密
603-24 190-24	灰釉陶器 皿	¾	14.5×7.2×3.0	口唇部尖り外屈。高台丸味あり。体部内外面上半刷毛塗り見込部一刷毛施釉。腰部から底部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
603-25 190-25	灰釉陶器 段皿	¼	14.8×8.6×2.6	体部直線的で大きく外傾。内面段をなし見込部僅かに凹む。内外面・口縁部施釉。高台外傾し底部屈して内傾。底部・腰部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③密
603-26 190-26	青磁 椀?	小片	6.1×一×(2.9)	腰部内屈し口縁部外反して直立する。釉調明青灰	①良好 ②白 ③緻密
603-27 190-27	須恵器 瓶	¾口頸部欠損	一×6.5×16.2 最大径13.8	長胴形を呈し肩部張る。胴部下半篋削り。上半回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
603-28 190-28	須恵器 甕		一×一×(9.8) 最大径20.0	胴部丸く張り球形を呈す。丸底。胴下半から底部篋削り。内面強い横撫で、見込部篋撫で。	①良好 ②灰 ③やや粗・砂混る
603-29 190-29	須恵器 把手	把手	長5.3幅1.4 厚2.7	手捏り。	①良好 ②灰白 ③やや密
603-30 190-30	須恵器 長頸瓶	肩部片	一×一×(5.5) 肩径20.4	肩部くの字状に強く屈する。肩先端に列点施文。	①良好 ②灰 ③やや粗・白色小石混る
603-31 190-31	須恵器 壺	胴部	最大径18.2 器高8.2	胴部そろばん玉状に強く張る。下半部横位篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密
604-32 190-32	須恵器 短頸壺	¾口縁部欠損	一×10.0×(14.6) 最大径21.0	腰部に丸味をもち胴部強く張る。腰部・底部篋削り。器面荒れ不明瞭。	①良好 ②灰白 ③粗
604-33 190-33	土師器 甕	口縁部	¼ 19.6×一×(8.0)	口縁部外反。口唇部丸い。胴部やや張る。口縁部横撫で。胴部横篋削り。内面胴部横篋撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗・小石混る
604-34 190-34	土師器 甕	口縁部	21.3×一×(5.8)	口縁部やや肥厚しくの字状に外反。口唇部丸い。口縁部横撫で。胴部横篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗・砂混る
604-35 191-35	土師器 甕	下半欠損	16.3×一×(7.5)	胴部張り丸味。口縁部緩いくの字状に外反する。口縁部横撫で。胴部横位・斜位篋削り。	①良好 ②暗赤褐 ③やや密・細砂混る
604-36 191-36	須恵器 甕	上半¾	19.0×一×(10.2)	胴部丸く張る。口縁部弧を描いて外反し口唇部は直立。内面に段をなす。外面胴部平行叩き目。	①良好 ②灰白 ③やや粗・白色粒混る
604-37 191-37	須恵器 甕	口縁部	¼ 21.3×一×(4.8)	口縁部外反して開き口唇部下に断面三角形の凸帯を巡らし口唇部は直立気味に外傾。端部尖る。	①良好 ②灰白 ③やや密・黒色粒混る
604-38 191-38	須恵器 甕	口縁部	24.2×一×(3.8)	内面に溶解物付着。口縁部外反し口唇部下に凸帯。口唇部は内傾する。	①良好 ②灰 ③やや密
604-39 191-39	須恵器 甕	破片		口縁部外反気味に開く。口唇部尖がり下位に鋭い下顎をなす。	①良好 ②灰 ③やや密
604-40 191-40	須恵器 甕	口縁部破片		口唇部強く外屈し突出する。口縁部下凸帯巡る。2条+1条+2条の凹線に区画され6本1条の波状文を施す。	①良好 ②灰 ③やや密・黒色粒混る
604-41 191-41	須恵器 羽釜	口縁部	¼ 22.2×一×(7.9) 口径25.4	鐔断面丸味のある三角形。口縁部低く外反気味に内傾。上端面は幅広く内斜。口縁から胴部回転篋撫で。	①やや軟 ②黒褐 ③粗・砂多く混る
604-42 191-42	甕	底部	一×24.0×(6.0) 孔径14.8	腰部強く外反した後直線的に開く。端部外縁は直に下る。	①酸化気味 ②灰白 ③やや粗
604-43 191-43	白磁 椀	口縁部小片	一×一×一 厚0.3~0.5	体部器肉薄く、口縁部脹らみ玉縁をなす。	①良好 ②白 ③緻密
604-44 191-44	須恵器 転用硯	底部¾	一×11.0×2.4	腰部張る。付高台低く断面矩形。見込部転用硯として使用。轆轤成形。腰部から底部回転篋削り。	①良好 ②黄灰 ③密・茶色粒混る

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	特徴・焼成・色調・胎土	Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	特徴・焼成・色調・胎土
605-45 191-45	瓦 平瓦		厚2.2	凹面布目、凸面篋撫で、凸面に篋文字か	605-47 191-47	瓦 平瓦	小片	厚1.7	凹面布目、凸面篋撫で、良好、灰、粗、小石多量
605-46 191-46	瓦 平瓦	小片	厚1.8	凹面布目、凸面縄目、良好、灰白、やや密	605-48 191-48	瓦 平瓦	小片	厚2.5	凹面布目、凸面篋撫で、良好、黄灰、やや密

第3節 I区の遺構と遺物

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	特徴・焼成・ 色調・胎土	Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	特徴・焼成・ 色調・胎土
605-49 192-49	瓦 平瓦	小片	厚2.0	凹面・凸面撫で、良好、暗緑灰、やや密	606-78 192-78	土製品 羽口	基部欠損	長(6.8)径(4.5) 孔径(2.0)	先端部溶解なし。
605-50 192-50	瓦 平瓦	小片	厚2.0	凹面布目、凸面撫で、良好、灰、密、白色粒	606-79 192-79	土製品 羽口		長(6.9)径(5.3) 孔径(2.3)	
605-51 192-51	瓦 平瓦	小片	厚1.7	凹面布目、凸面撫で、良好、暗黄灰、密	606-80 192-80	土製品 羽口		長(8.2)	
605-52 192-52	瓦 平瓦	小片	厚1.6	凹面布目、凸面撫で、良好、灰、密	606-81 192-81	土製品 羽口		長(7.1)径(6.6) 孔径(2.7)	
605-53 192-53	瓦 平瓦	小片	厚2.0	凹面布合せ目、凸面撫で、酸、灰、密	606-82 192-82	土製品 羽口		長(3.5) 孔径(2.2)	
605-54 192-54	瓦 平瓦	小片	厚1.8	凹面布目、凸面撫で、良好、灰、粗	606-83 192-83	土製品 羽口		長(4.0)	気孔多い。
605-55 192-55	瓦 平瓦	小片	厚1.4	凹面布目、凸面撫で、良好、暗灰黄、密	606-84 192-84	土製品 羽口		長(6.4)径(6.8) 孔径(2.2)	
605-56 192-56	須恵器 転用埴埴	破片	12.5×-×3.3	杯転用、赤銅色の溶解物。	606-85 192-85	土製品 羽口		長(6.0)径(7.0) 孔径(2.4)	
605-57 192-57	須恵器 壺	破片		内面に緑青・溶解物付着。	606-86 192-86	土製品 羽口		長(3.5)径(6.7) 孔径(2.0)	
605-58 192-58	須恵器 瓶	底部小片	-×10.1×(3.9)	内外面に赤銅色溶解物付着。	606-87 192-87	土製品 羽口	先端欠損	長(5.6) 孔径(2.8)	
605-59 192-59	土製品 羽口		長(2.6)		606-88 192-88	土製品 羽口		長(5.0)径(3.0) 孔径(6.0)	
605-60 192-60	土製品 羽口		長(3.2)		606-89 192-89	土製品 羽口		長(7.0)	
605-61 192-61	土製品 羽口	先端部	長(5.0)	先端部溶解。	606-90 192-90	土製品 羽口	中位	長(8.5)径(8.4) 孔径(3.1)	面取り状篋削り成形。
605-62 192-62	土製品 羽口	先端部	長(5.6) 孔径(2.5)	溶解物付着。胎土に植物質混入。	606-91 192-91	土製品 羽口		長(5.5)	指頭の強い撫で顕著。
605-63 192-63	土製品 羽口		長(4.1)		606-92 192-92	土製品 羽口	基部	長(7.5)径(7.0) 孔径(2.8)	縦位の強い指調整、刳痕あり。
605-64 192-64	土製品 羽口	先端部小片	長(5.3)径(5.5) 孔径(2.5)	先端部僅かに溶解。	606-93 192-93	土製品 羽口	基部	長(7.9)径(7.5) 孔径(3.0)	
605-65 192-65	土製品 羽口	先端部小片	長(4.9) 孔径(3.3)	先端部溶解。	606-94 192-94	土製品 羽口	先端欠損	長(9.6)	
606-66 192-66	土製品 羽口	小片	長(4.0)径(5.1) 孔径(2.2)		606-95 192-95	土製品 羽口		長(6.0)	
606-67 192-67	土製品 羽口	先端部小片	長(4.5) 孔径(2.5)	先端部溶解。	607-96 192-96	土製品 羽口		長(7.9) 径(7.0)	
606-68 192-68	土製品 羽口	先端部小片	長(6.6) 孔径(2.4)		607-97 192-97	土製品 羽口		長(5.9) 孔径(3.7)	
606-69 192-69	土製品 羽口		長(7.7)	器長短かい小型、先端部溶解少ない。	607-98 192-98	土製品 羽口		長(6.6) 径(6.2)	
606-70 192-70	土製品 羽口	先端部小片	長(4.3) 径(7.0)	溶解物付着。	607-99 192-99	土製品 羽口	基部	長(6.9) 孔径(3.0)	
606-71 192-71	土製品 羽口		長(3.7)		607-100 192-100	土製品 羽口		長(7.9) 孔径(2.4)	
606-72 192-72	土製品 羽口	先端部小片	長(5.4) 孔径(2.5)	先端部溶解。	607-101 192-101	土製品 羽口		長(10.2)径6.7 孔径2.8	
606-73 192-73	土製品 羽口	先端部	長(5.7)径(6.5) 孔径(3.2)	先端部黒色アメ状に溶解。	607-102 192-102	土製品 羽口		長13.8径6.5~ 7.5孔径2.5	
606-74 192-74	土製品 羽口		長(4.9)径(6.0) 孔径(2.4)		607-103 192-103	土製品 羽口		長13.5径6.2 孔径2.4	
606-75 192-75	土製品 羽口	先端部	長(4.6)径(5.5) 孔径(1.6)		607-104 192-104	土製品 羽口		長13.9径6.4 ~8.0孔径3.0	
606-76 192-76	土製品 羽口		長(4.7) 孔径(3.0)		607-105 192-105	土製品 羽口	先端部	長(9.5)径7.1~(8.9) 孔径2.3~2.7	面取り状篋削り成形。
606-77 192-77	土製品 羽口		長(7.7) 径(6.7)		607-106 192-106	土製品 羽口		長(9.4)径5.9~ 9.5孔径1.9	

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	特徴・焼成・ 色調・胎土	Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	特徴・焼成・ 色調・胎土
607-107 192-107	土製品 羽口		長10.6径5.1~6. 9孔径1.8~3.3		608-134 193-134	石製品 砥石		4.7×2.8×1.2 7.4g	多面使用・刃痕あり。 角閃石安山岩
608-108 193-108	石製品 砥石		5.1×3.6×2.3 75.5g	4面使用・流紋岩	608-135 193-135	石製品 砥石		4.2×2.9×2.1 10.2g	多面使用・角閃石安山 岩
608-109 193-109	石製品 砥石		4.6×2.9×2.8 33.6g	多面使用・角閃石安山 岩	608-136 193-136	石製品 砥石		3.8×2.6×2.0 15.9g	多面使用・刃痕著しい 角閃石安山岩
608-110 193-110	石製品 砥石		5.3×3.2×1.7 43.2g	4面使用・流紋岩	608-137 193-137	石製品 砥石		4.4×5.6×2.9 39.3g	多面使用・角閃石安山 岩
608-111 193-111	石製品 砥石		3.7×2.4×1.6 21.0g	2面使用・流紋岩	608-138 193-138	石製品 砥石		4.3×3.8×2.6 24.0g	多面使用・角閃石安山 岩
608-112 193-112	石製品 砥石		3.1×2.7×1.4 12.3g	残欠、使用部分少ない。 流紋岩	608-139 193-139	石製品 砥石		4.4×1.8×1.4 5g	多面使用・角閃石安山 岩
608-113 193-113	石製品 砥石		2.6×3.0×1.9 15.0g	多面使用・流紋岩	608-140 193-140	石製品 砥石		3.9×4.1×3.4 62.0g	多面使用・流紋岩
608-114 193-114	石製品 砥石		4.3×3.7×1.6 24.5g	1面使用・流紋岩	608-141 193-141	石製品 砥石		4.6×3.4×2.9 42.0g	多面使用・刃痕あり。 角閃石安山岩
608-115 193-115	石製品 砥石		6.2×2.0×4.1 28.8g	1面使用・発泡性気孔 多い。安山岩	608-142 193-142	石製品 砥石		3.7×2.4×2.1 32g	多面使用・刃痕あり。 角閃石安山岩
608-116 193-116	石製品 砥石		1.5×1.6×0.9 3.3g	多面使用・流紋岩	608-143 193-143	石製品 砥石		3.8×3.0×1.9 15.8g	1面使用・角閃石安山 岩
608-117 193-117	石製品 砥石		3.6×2.3×1.1 14.7g	多面使用・刃痕あり。 流紋岩	609-144 193-144	須恵器 転用硯		7.7×8.2×1.6	甕片内面を使用。光沢 あり。良好、灰、やや粗
608-118 193-118	石製品 砥石		5.3×6.6×7.1 245.3g	スタンプ型多面使用自 然面多い角閃石安山岩	609-145 193-145	須恵器 転用砥石		5.4×5.2×1.2 43.0g	3側面使用、甕片、良 好、灰白、やや密
608-119 193-119	石製品 砥石		7.0×5.2×5.3 161.1g	スタンプ型多面使用角 閃石安山岩	609-146 193-146	須恵器 転用砥石		6.2×4.0×1.5 50.3g	2側面使用、甕片、良 好、灰、やや密
608-120 193-120	石製品 砥石		9.0×6.2×5.2 247.6g	多面使用・自然面多い 角閃石安山岩	609-147 193-147	須恵器 転用砥石		3.0×4.7×1.2 18.0g	3側面使用、甕片、良 好、灰白、密
608-121 193-121	石製品 砥石		8.2×4.2×7.0 205.4g	スタンプ型・自然面多 い。角閃石安山岩	609-148 193-148	須恵器 転用砥石		3.7×4.2×0.7 14.5g	3側面使用、甕片、良 好、灰白、密
608-122 193-122	石製品 砥石		5.8×4.2×2.8 35.3g	球面体、自然面多い。 角閃石安山岩	609-149 193-149	須恵器 転用砥石		4.8×3.7×0.7 17.0g	3側面使用、甕片、良 好、灰、やや密・縞状
608-123 193-123	石製品 砥石		5.3×5.4×3.2 89.6g	多面使用・刃痕2条角 閃石安山岩	609-150 193-150	須恵器 転用砥石		5.0×3.2×1.1 24.0g	3側面使用、刃痕、甕 片、良好、灰、やや密
608-124 193-124	石製品 砥石		5.1×4.1×2.5 61.0g	多面使用・角閃石安山 岩	609-151 193-151	須恵器 転用砥石		3.8×4.8×1.1 22.6g	1側面使用、甕片、良 好、灰、密
608-125 193-125	石製品 砥石		5.9×5.0×2.2 43.1g	多面使用・角閃石安山 岩	609-152 193-152	須恵器 転用砥石		3.0×2.9×1.4 14.4g	3側面使用、甕片、良 好、灰、やや粗
608-126 193-126	石製品 砥石		3.7×5.1×4.4 98.8g	多面使用・角閃石安山 岩	609-153 193-153	須恵器 転用砥石		3.3×2.9×1.2 12.8g	3側面使用、甕片、良 好、灰、やや密
608-127 193-127	石製品 砥石		6.2×4.4×3.8 110.4g	多面使用・角閃石安山 岩	609-154 193-154	須恵器 転用砥石		4.2×4.5×0.8 15.8g	1側面使用、甕片、良 好、緑灰、やや粗
608-128 193-128	石製品 砥石		5.7×5.0×2.6 61.0g	多面使用・角閃石安山 岩	609-155 193-155	須恵器 転用砥石		3.0×2.7×1.6 12.0g	1側面使用、甕片、良 好、灰、密
608-129 193-129	石製品 砥石		4.6×4.7×3.0 33.5g	多面使用・角閃石安山 岩	609-156 193-156	須恵器 転用砥石		4.6×3.1×1.1 18.5g	2側面使用、甕片、良 好、灰、密
608-130 193-130	石製品 砥石		4.4×3.7×3.7 50.6g	多面使用・刃痕著しい 角閃石安山岩	609-157 193-157	須恵器 転用砥石		2.7×2.4×0.9 7.5g	3側面使用、甕片、良 好、灰白、密
608-131 193-131	石製品 砥石		5.0×3.3×3.4 47.6g	多面使用・角閃石安山 岩	609-158 193-158	鉄製品 不明		長(7.4)幅1.4 厚0.5	頂部やや脹らみ、下位 は幅狭く、鑿か。
608-132 193-132	石製品 砥石		3.4×1.7×1.5 6.0g	多面使用・角閃石安山 岩	609-159 193-159	鉄器 不明		4.5×5.8 厚0.8	板状鉄器、片端はやや 薄くなる。
608-133 193-133	石製品 砥石		5.7×4.3×5.1 95.1g	スタンプ型・1面使用・ 角閃石安山岩	609-160 193-160	鉄製品 鉄斧	ほぼ完 形	長8.0刃幅5.0厚 1.2	刃形は両刃型か。袋部 間隔1cm

第4節 J区の遺構と遺物

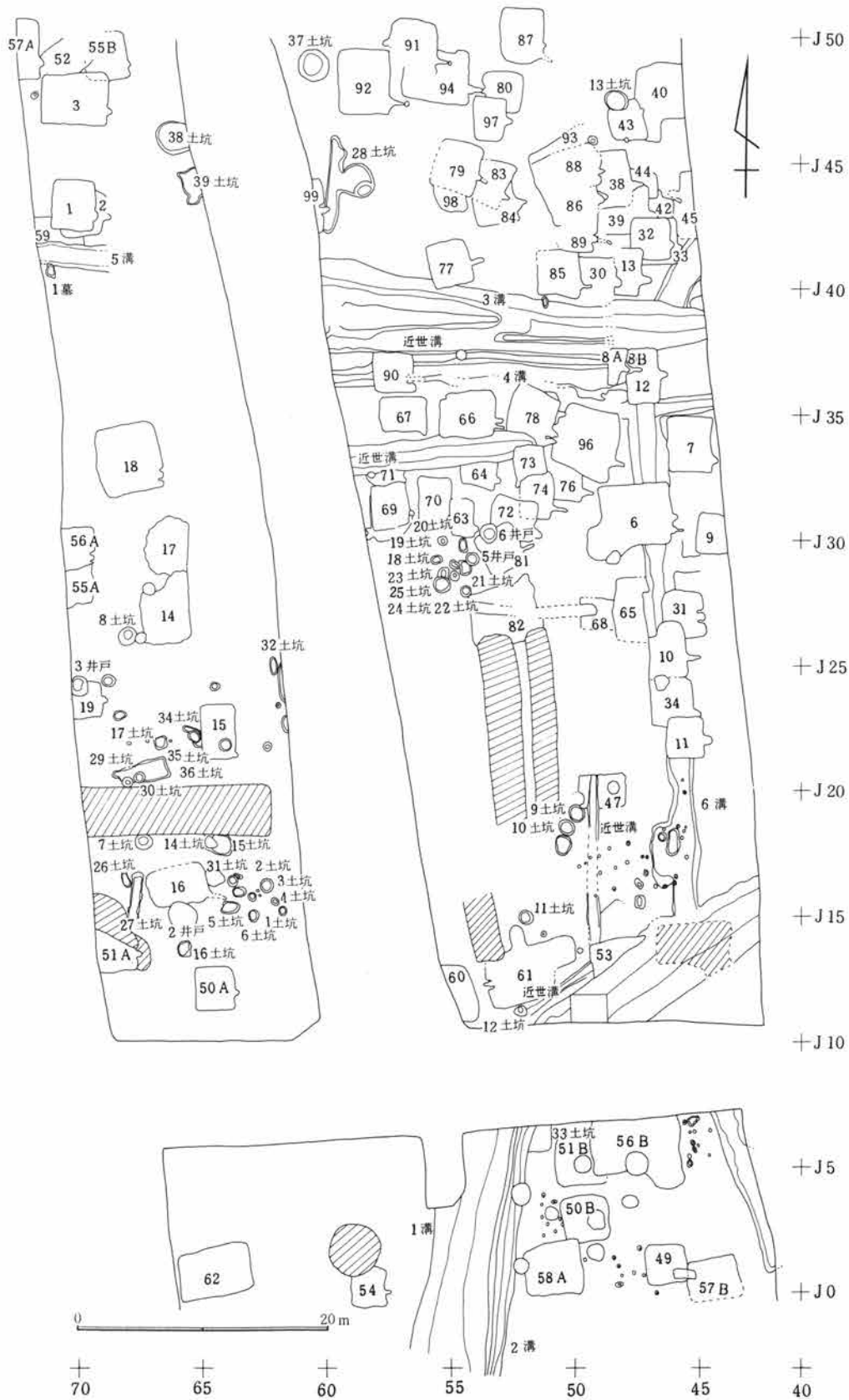


Fig. 610 J区全体図

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

J区は鳥羽遺跡の中央部北寄りに位置し、群馬郡群馬町稲荷台に所属する。調査は昭和57年度と58年度の2期にわたって実施した。東西の両側道部と本線部分西側一部を昭和57年度に、翌58年度には本線部分を調査し、調査面積は約5,500㎡である。調査区内には調査に先行して行われた家屋移転に伴う削平や、廃棄物処理のための大形土坑など攪乱が中央部で広範囲に見られる。また微地形では、調査区の西側が水性 Loamや湿気の強い黒褐色土の堆積からなり調査時も常に湧水などに見舞われ、遺構検出面では低地的様相となっている。

検出された遺構は古墳時代から奈良～平安時代にかけての竪穴住居跡88軒・井戸跡11基・火葬墓1基のほか土坑・溝跡などがある。竪穴住居跡はほとんどが奈良～平安時代に属し、古墳時代前半期は1軒、後半期では僅か2軒を数えるのみである。奈良時代の竪穴住居跡のうち2軒は鍛冶炉を備えている。

井戸跡は11基確認したが近・現代に属するものが9基である。最初に手がけたJ6号井戸の調査経緯から著しい湧水による危険性を考えた結果、近・現代と思われる井戸跡の掘り下げは中止した。ここに掲載した井戸は近世以前に属すると考えられるJ3号・J5号井戸と近世のJ6号井戸に限った。なおJ3号井戸は埋土中に6世紀代の降下とされる榛名山二ツ岳降下のFA層と思われる土層が認められ古墳時代に属する可能性がある。

墓跡は不定形の土壌内に僅かな焼骨片が検出され10個余りの川原石を伴っていたが、土壌そのものは被熱などの痕跡は認められていない。

土坑は特殊な遺構として、1点の壺を中心に33点もの小杯を埋納したJ1号土坑がある。これについては既刊の『鳥羽遺跡』I・J・K区 1988 を参照していただきたい。

溝跡は大小8条が検出されている。J1号とJ2号溝はI区に検出されたJ・I1号とI2号溝の延長であるが当区内で南北走から東へ大きく方向転換する。溝幅6m前後を有するJ1号ないしはJ・I1号溝と同等規模の溝は、鳥羽遺跡内でも数箇所を検出されており相互の関連やその性格には興味深いものがある。

1. 井戸跡

J3号井戸 (Fig. 611)

J区の西側ほぼ中央に位置し、69・70J24の範囲にある。J19号住居跡と重複するが新旧関係は不明である。西側の約半分は調査区域外にかかり全容は不明である。また内部の掘削も調査範囲が狭く完掘できなかった。平面形は不整形を呈し径約1.5mの素掘井戸である。深さは約1.3mまでの掘り下げで中断した。埋土は上層が砂質層で埋まり、下位は榛名山二ツ岳降下FA層と考えられる土層が見られる。出土遺物は検出されなかった。

J5号井戸 (Fig. 611)

J区の中央部に位置し、54J29を中心とする範囲にある。周辺には近世井戸跡のJ6号井戸の他大小土坑群がある。埋土は検出面より中位まで浅間山降下B軽石を主体とする黒褐色土で自然堆積と考えられる。以下はB軽石を主体にするが角礫・Loam塊を多く含む人為的埋土を思わせる層が続く。平面形状は円形を呈し、上面径約1.1mで、西縁は深さ70cmまで続く片開き状になる。以下は径80cm程度の筒円筒型で深さ5.8mを測り底面は平坦である。壁面の崩落は見られず安定した断面形である。調査時も湧水がほとんど認められず湧水層に至らなかったものと考えられる。出土遺物は大型須恵器甕の破片など少量である。また底面より約1m上位で馬頭骨と思われる獣骨が検出されたが粘土化した軟質で原形をとどめなかった。井戸枠などは認められず素掘井戸であろう。

第4節 J区の遺構と遺物

J 6号井戸 (Fig. 611)

J区の中央部に位置し、53J30を中心とする範囲にある。J5号井戸に近接し、J72号・J81号住居跡と重複する近・現代井戸である。埋土中にはLoam塊・竹根・角礫・川原石など人為的投入物が多い。平面形状は円形を呈し、径1.3mを測る。上半は小さく漏斗状に開き以下径95cm程度で深さ約6.5mの筒円筒型をなす。検出面より約3.5~5mの深さで湧水帯水層をもち壁面が大きく崩落する。井戸枠などは認められず素掘井戸と考えられる。

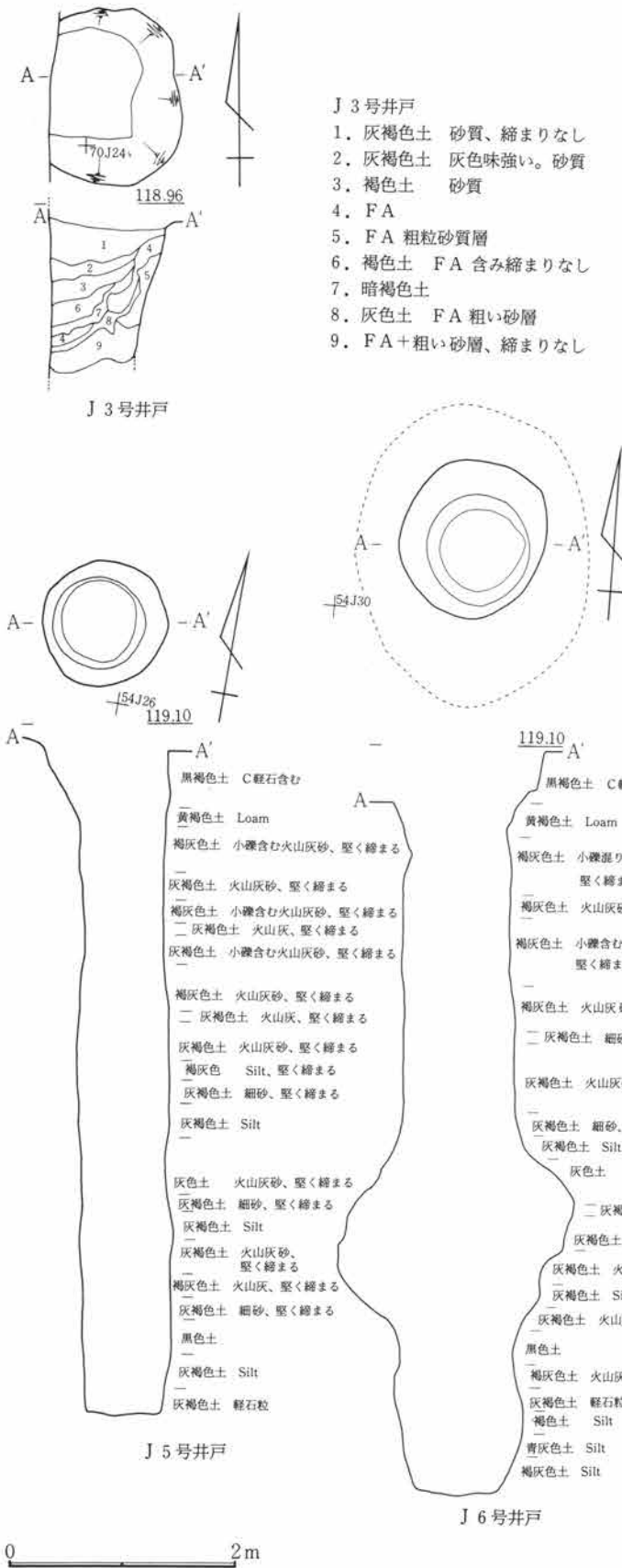


Fig. 611 J区井戸 (3号・5号・6号)

未調査井戸跡

J区内に検出された近・現代にかかる井戸跡は前述したように湧水量など調査に伴う危険を考慮して掘削を行っていない。ここではその位置と平面形及び規模を示す。なおJ11号井戸跡はその上面より数点の陶磁器類を検出しており図示する。(Fig. 612・PL. 194)

J 1号井戸 67J26、円形、1.1×1.2m。J 2号井戸、65・66J14・15、円形、2.5×2.1m。J 4号井戸 66・67J28、円形、1.1×1m。J 7号井戸 48J19・20、円形、1.1×1m。J 8号井戸、50・51J2・3、円形、1.3×1.1m、周囲小穴。J 9号井戸 47J4・5、楕円形、1.7×1.3m。J 10号井戸 51・52J3・4、円形、1.9×1.7m。J 11号井戸 49・50J4・5、円形、1.3m、陶磁器出土。

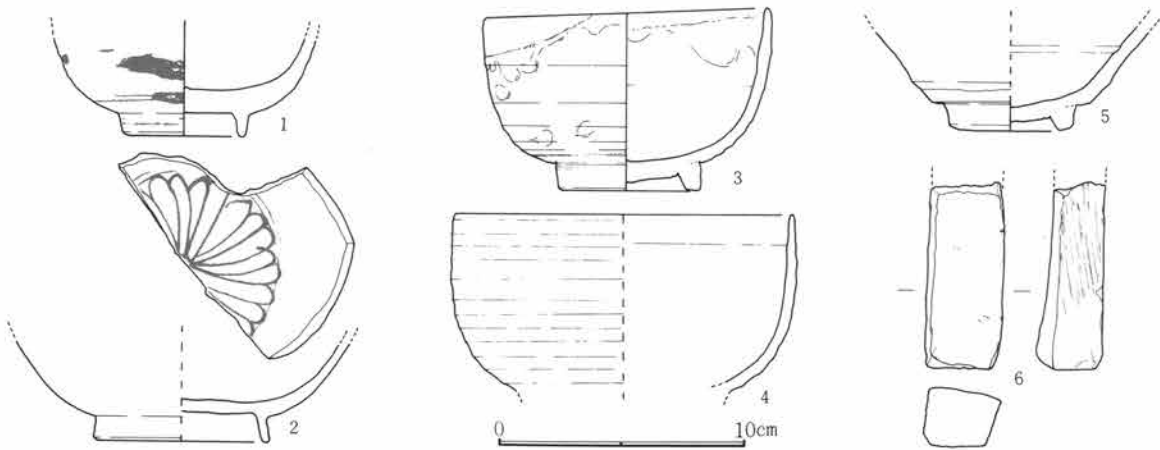


Fig. 612 J 11号井戸出土遺物

J 11号井戸出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
612-1 194-1	磁器 碗	底部欠	-×5.0×(3.8)	染付。体部染付文様。腰部・高台部各一条の線文。	①良好 ②灰 ③密
612-2 194-2	磁器 皿	底部欠	-×7.0×(3.9)	染付。深皿。見込部菊花文。腰部一条、高台部二条の線文	①良好 ②灰白 ③良好
612-3 194-3	陶器 碗	欠	13.6×5.7×7.2	腰部丸い。体部深く直立する。鈍い黄褐釉。口唇部白濁。腰・底部無釉。削り出し高台。底部から体部中位回転篋削	①良好 ②淡黄 ③密
612-4 194-4	陶器 碗	体部欠	13.3×-×(7.0)	腰部丸い。体部深く直立する。灰釉。	①良好 ②灰白 ③密
612-5 194-5	陶器 碗	底部欠	-×5.0×(3.8)	暗褐釉天目。削り出し高台。腰部回転篋削。底部から腰部は無釉。	①良好 ②灰白 ③やや密
612-6 194-6	石製品 砥石		長(7.2)幅3.0 厚2.3	1面使用。他面は成形時の条線顕著。重89.5g。	流紋岩

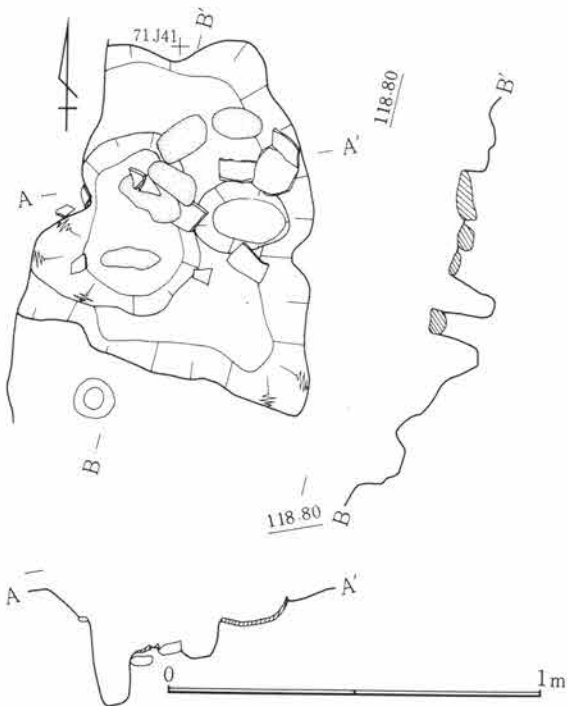


Fig. 613 J 1号墓

2. 墓跡

J 1号墓 (Fig. 613、614・PL. 194)

J 区の北西部に位置し、70・71 J 13の範囲にある。西側は若干調査区域外にかかり全容は不明である。平面形は土壌壁線が乱れ不整形であるが略方形と考えられる。南北長約90cm・東西は75cmまで確認した。深さは土壌内にかかなりの凹凸があり一定しないが安定的深さは約25cmである。土壌内には焼骨の細片がほぼ中央部に散乱するが骨格の部位を知ることのできる大きさの骨片はない。その他土師器甕片・長径10～13cm大の川原石などが検出された。甕片は川原石の下に位置するものが多く、川原石は北から西側にかけて弧状を思わせる配列をなす。このことから甕の消失部分が多いものの、土師器甕は骨蔵器として用

いられ、川原石は骨蔵器を囲む外郭部を構成していた可能性が考えられる。土壌は被熱などの痕跡は認められなかった。また土壌外南縁に須恵器杯が1個体検出されており、骨蔵器の蓋として用いられたものであろうか。なお調査から整理作業までの時間経過の長さから、不手際で紛失してしまい図示することができない。調査時の記憶によれば、土師器甕・須恵器杯とも平安時代中頃に属すると考えられる。

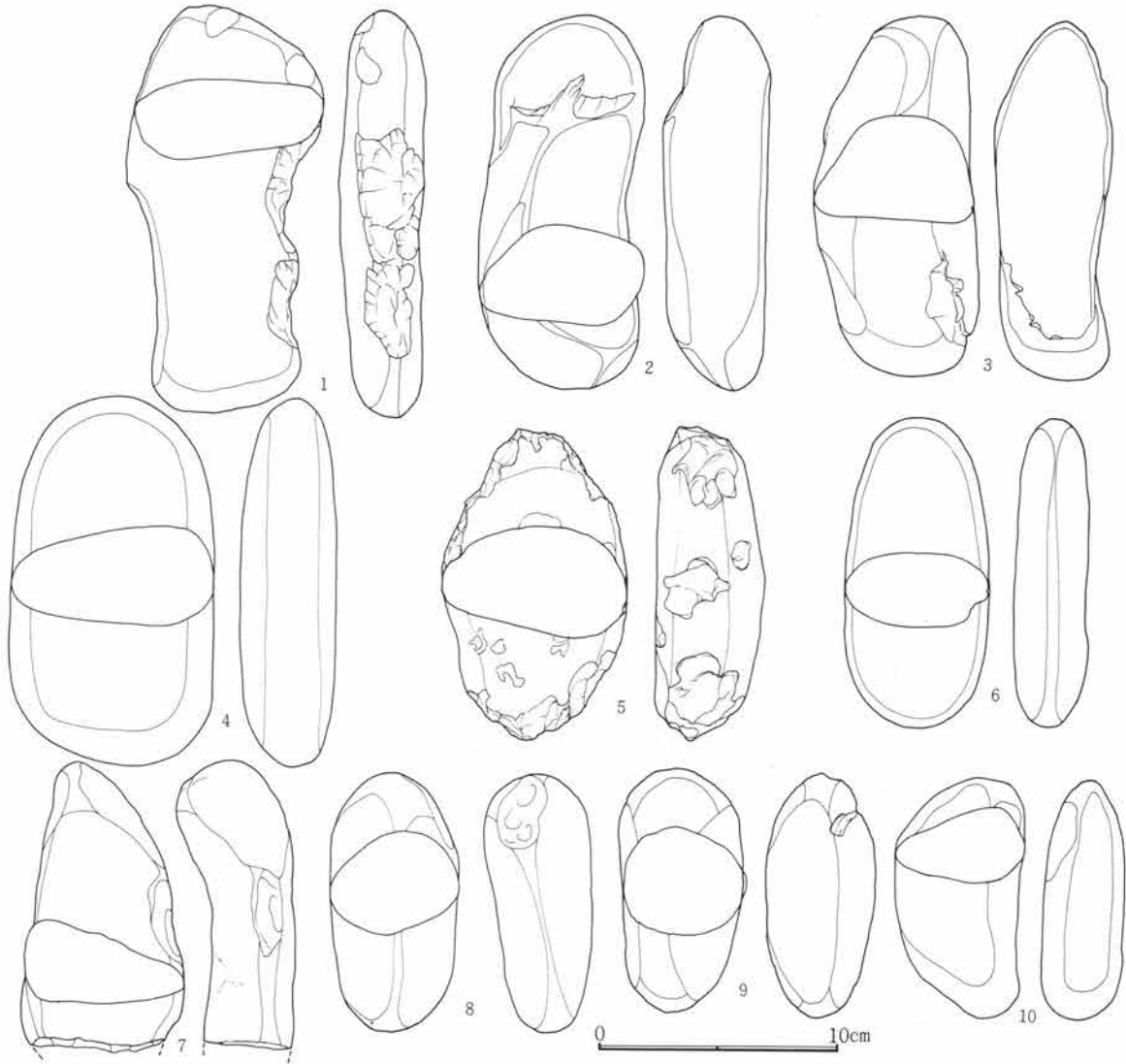


Fig. 614 J 1号墓出土遺物

J 1号墓出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	石材	Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	石材
614-1 194-1	石	完形	16.7×8.2×3.3	ひん岩	614-6 194-6	石	完形	12.7×6.0×3.1	変質安山岩?
614-2 194-2	石	完形	15.3×6.6×4.0	輝石安山岩(細粒)	614-7 194-7	石		(11.9)×6.8×3.6	輝石安山岩(粗粒)
614-3 194-3	石	完形	14.8×7.0×4.4	輝石安山岩(粗粒)	614-8 194-8	石	完形	10.6×5.2×4.4	輝石安山岩(粗粒)
614-4 194-4	石	完形	15.2×8.5×4.2	石英閃緑岩	614-9 194-9	石	完形	10.5×5.0×4.5	角閃石安山岩
614-5 194-5	石	完形	12.7×7.7×4.4	不明、表面風化顯著	614-10 194-10	石	完形	9.8×5.3×3.2	輝石安山岩

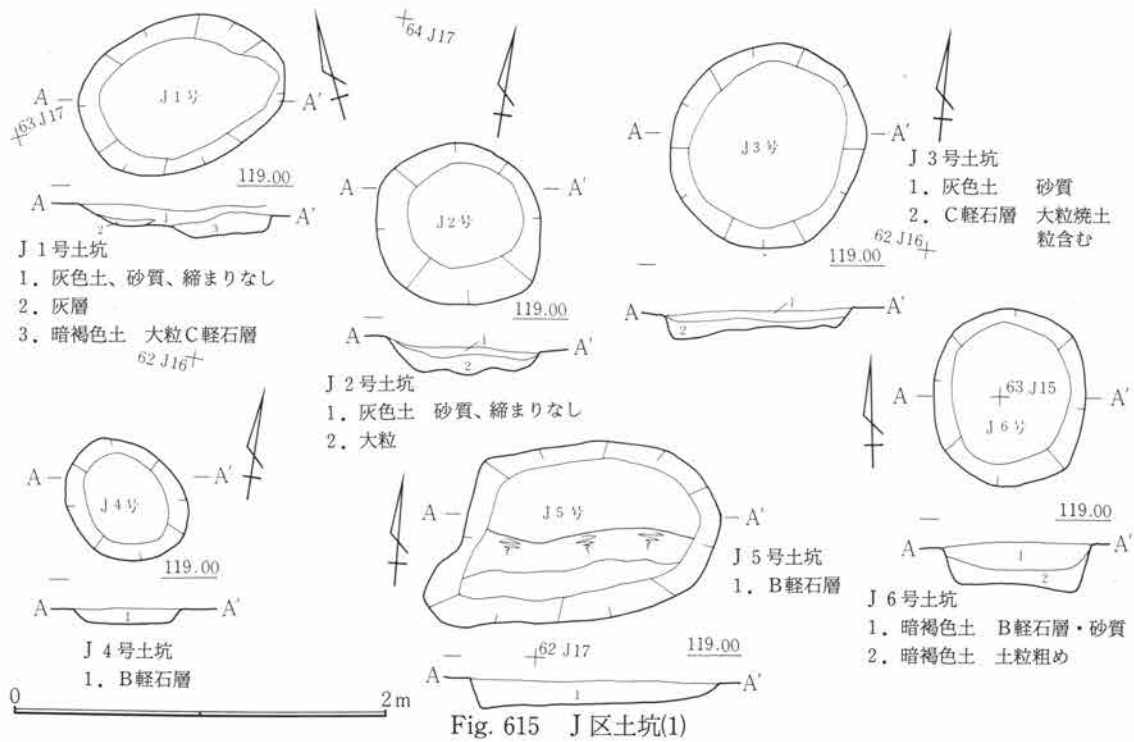
第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

3 土 坑 (Fig. 615~621)

遺構名	位 置	形 状	長軸方位	長×短×深	備 考
J 1号土坑	62 J 16・17	楕円形	N-89°-E	112×80×16	上位は浅間山降下B軽石主体となり、西側底面に灰層が堆積。底面東側窪む。
J 2号土坑	63 J 16・17	円形	N-65°-W	96×88×20	須恵器碗。埋土は砂質土（B軽石?）。底面波うつ。
J 3号土坑	62 J 16	円形	—	112×100×14	埋土は締まりのない砂質層、下位に大粒焼土粒を含む。底面凹凸あり。
J 4号土坑	62 J 15	楕円形	N-51°-W	70×60×8	無遺物。浅間山降下B軽石層主体。底面平坦。
J 5号土坑	61・62 J 17	不整楕円形	N-90°-E	160×96×16	南側半分は僅かに低くなる。埋土は浅間山降下B軽石層。無遺物。
J 6号土坑	62・63 J 14・15	楕円形	N-0°-N	96×80×26	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石層主体。底面平坦。
J 7号土坑	67 J 7・8	円形	—	132×124×48	底面中央部に扁平な川原石。埋土に浅間山降下C軽石を含む。底面すり鉢状。
J 8号土坑	67 J 25・26	不整円形	N-21°-E	148×140×76	無遺物。やや深く断面すり鉢状。埋土はC軽石を含む暗褐色土。底面窪む。
J 9号土坑	49・50 J 18・19	不整円形	—	132×120×22	陶質土器香炉・焙烙。西側小さく突出し歪む。埋土はB軽石主体。
J 10号土坑	50 J 18・19	楕円形	N-0°-N	152×124×20	無遺物。砂質の軟かい土層にC軽石を含む。底面中央やや高い。
J 11号土坑	51・52 J 14・15	円形	—	116×112×32	無遺物。下位に白灰色粘性土が塊状にあり人為的な埋土の可能性はある。
J 12号土坑	51・52 J 11	楕円形	N-64°-W	132×104×44	無遺物。底面は2段に落ち込む。埋土は締まりの弱い砂質土。
J 13号土坑	47・48 J 47	不整円形	—	180×160×12	土師器・須恵器の少片。時期的には古代に属する。C軽石を含む暗褐色土。
J 14号土坑	64 J 17・18	不整形	—	—	無遺物、15号と重複するがこれより古い。底面すり鉢状。
J 15号土坑	63・64 J 17・18	隅丸方形	N-0°-N	160×136×68	拳大の石多数。14号と重複するがこれより新しい。埋土は浅間山降下B軽石主体。
J 16号土坑	65 J 13	不整楕円形	N-27°-E	144×112×8	無遺物。底面南・北隅が小穴状に窪む。埋土はB軽石。
J 17号土坑	66 J 21・22	隅丸方形	N-16°-W	100×96×28	無遺物。埋土は粘性をもつ。底面平坦。
J 18号土坑	55 J 28	楕円形	N-4°-W	92×64×—	無遺物。埋土に浅間山降下C軽石を含む。底面すり鉢状。
J 19号土坑	55 J 29・30	円形	—	84×72×72	無遺物。埋土は浅間山降下C軽石を含み粘性がある。
J 20号土坑	54 J 29・30	楕円形	—	148×72×48	土師器小片が出土。埋土は浅間山降下C軽石を含み粘性がある。
J 21号土坑	54 J 28・29	不整形	—	108×100×20	土師器・須恵器の小片が出土。古代に属する。埋土はC軽石含み粘性あり
J 22号土坑	54 J 28	不整楕円形	N-36°-W	84×68×—	無遺物、埋土に浅間山降下C軽石を含む。底面すり鉢状。
J 23号土坑	54 J 28・29	不整形	—	88×52×12	無遺物。埋土に浅間山降下C軽石を含む。底面は凹凸あり。
J 24号土坑	55 J 28	不整円形	N-88°-E	148×120×—	土師器片、鉄滓を出土。25号土坑と重複しこれより新しい。
J 25号土坑	55 J 28	不整形	—	84×80×—	無遺物。24号土坑と重複しこれより古い。
J 26号土坑	67・68 J 16	隅丸長方形	N-19°-W	130×68×6	土師器小片出土、古代末に属する。埋土は砂質層にC軽石混る。
J 27号土坑	67・68 J 14~17	不整形	—	—	無遺物。埋土は砂質層にC軽石混る。
J 28号土坑	58~60 J 42~46	不整形	—	—	土器片出土。溝状遺構と円形土坑の重複。埋土は砂質層。
J 29号土坑	66~68 J 20・21	不整形	—	428×172×12	無遺物。埋土はB軽石層主体。底面南側僅かに低くなる。

第4節 J区の遺構と遺物

遺構名	位置	形状	長軸方位	長×短×深	備考
J 30号土坑	66 J 20	円形	N-53°-E	84×72×24	無遺物。29号土坑に重複。
J 31号土坑	64 J 16	隅丸方形	—	148×128×32	土器片出土。川原石が底面近く出土。上層は浅間山降下B軽石層。底面に細かい凹凸あり。
J 32号土坑	61・62 J 24・25	隅丸長方形	N-5°-W	140×56×40	無遺物。掘形は整う。
J 33号土坑	51 J 5・6	不整形	—	—	無遺物。竪穴状遺構の残欠か。埋土は砂質層。
J 34号土坑	65 J 22	隅丸長方形	N-73°-W	160×40×26	無遺物。底面平坦。
J 35号土坑	65 J 21・22	楕円形	N-69°-W	106×76×—	無遺物。埋土は浅間山降下C軽石を混え炭化粒・焼土粒を含む粘性土。
J 36号土坑	64・65 J 21・22	隅丸方形	—	136×116×48	無遺物。埋土は浅間山降下B軽石主体にC軽石混る。底面平坦。
J 37号土坑	59~61 J 48・49	円形	—	256×250×92	無遺物。大形土坑。埋土は砂質層。底面凹凸のあるすり鉢状。
J 38号土坑	65・66 J 46・47	不整形円形	—	270×(256)×100	無遺物。埋土は黒味が強い。
J 39号土坑	65 J 43・44	不整形	—	274×(164)×56	須恵器蓋・転用砥石、埋土はC軽石を含む粘性土。底面緩く窪む。



第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

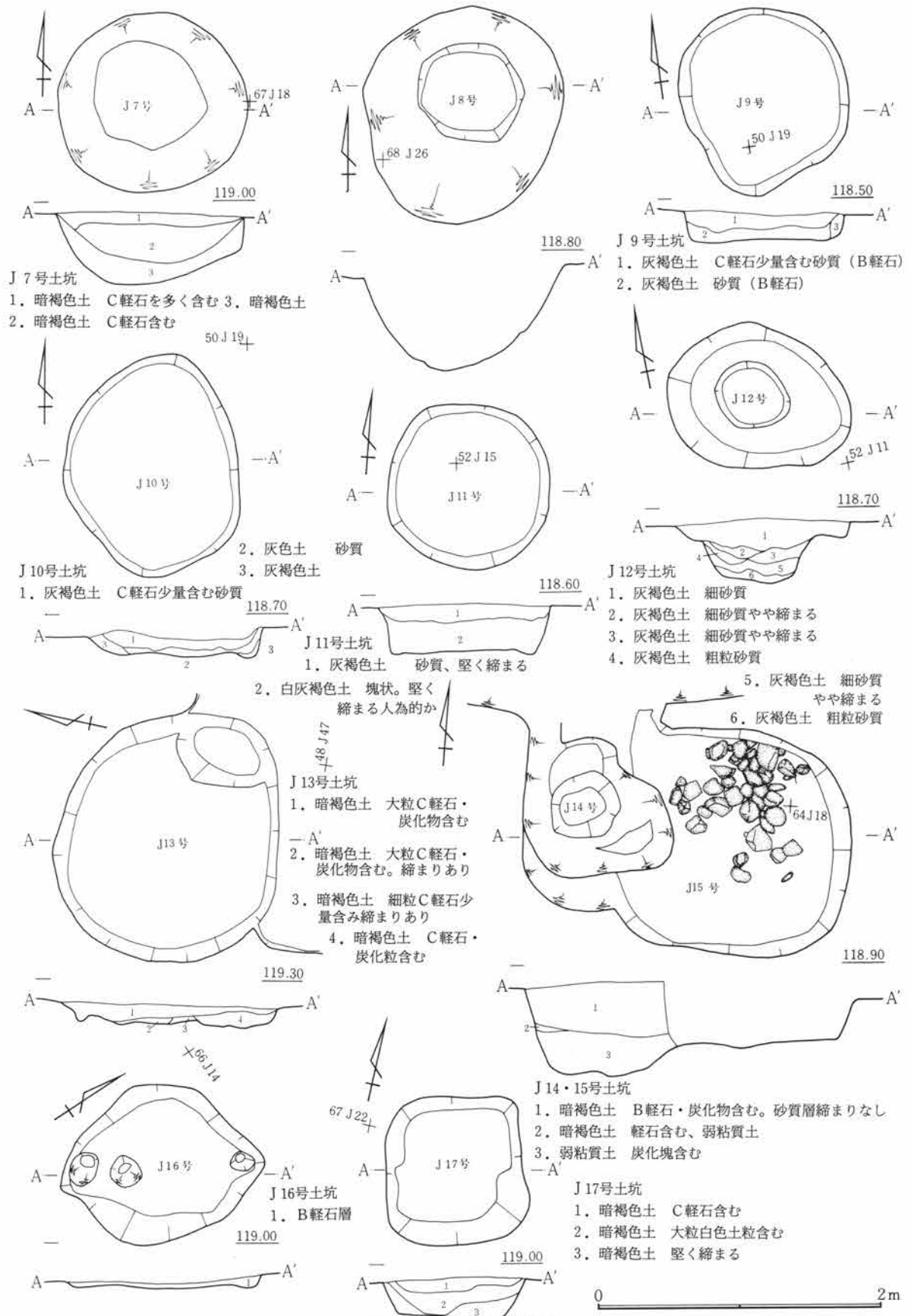


Fig. 616 J区土坑(2)

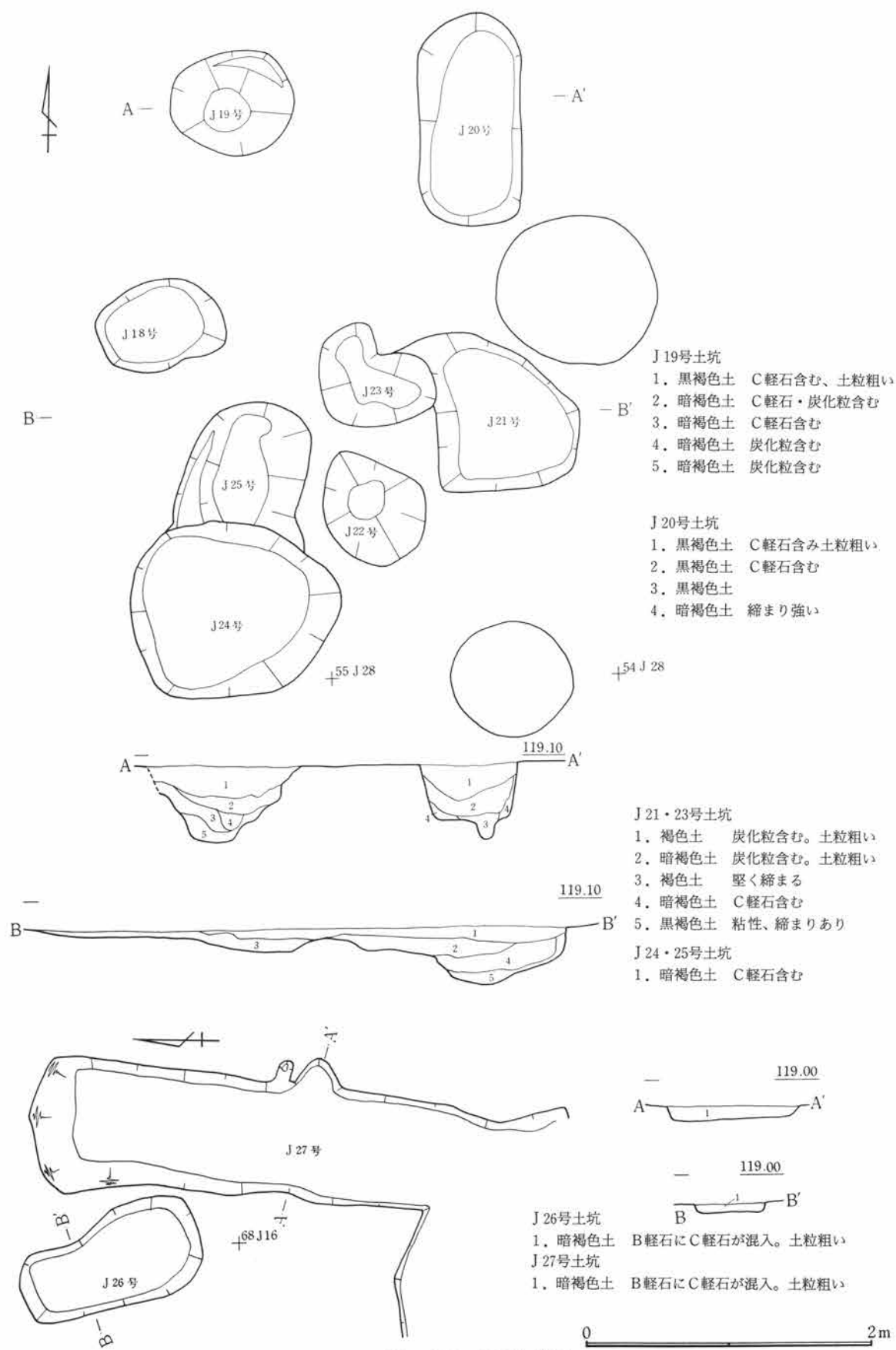


Fig. 617 J区土坑(3)

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

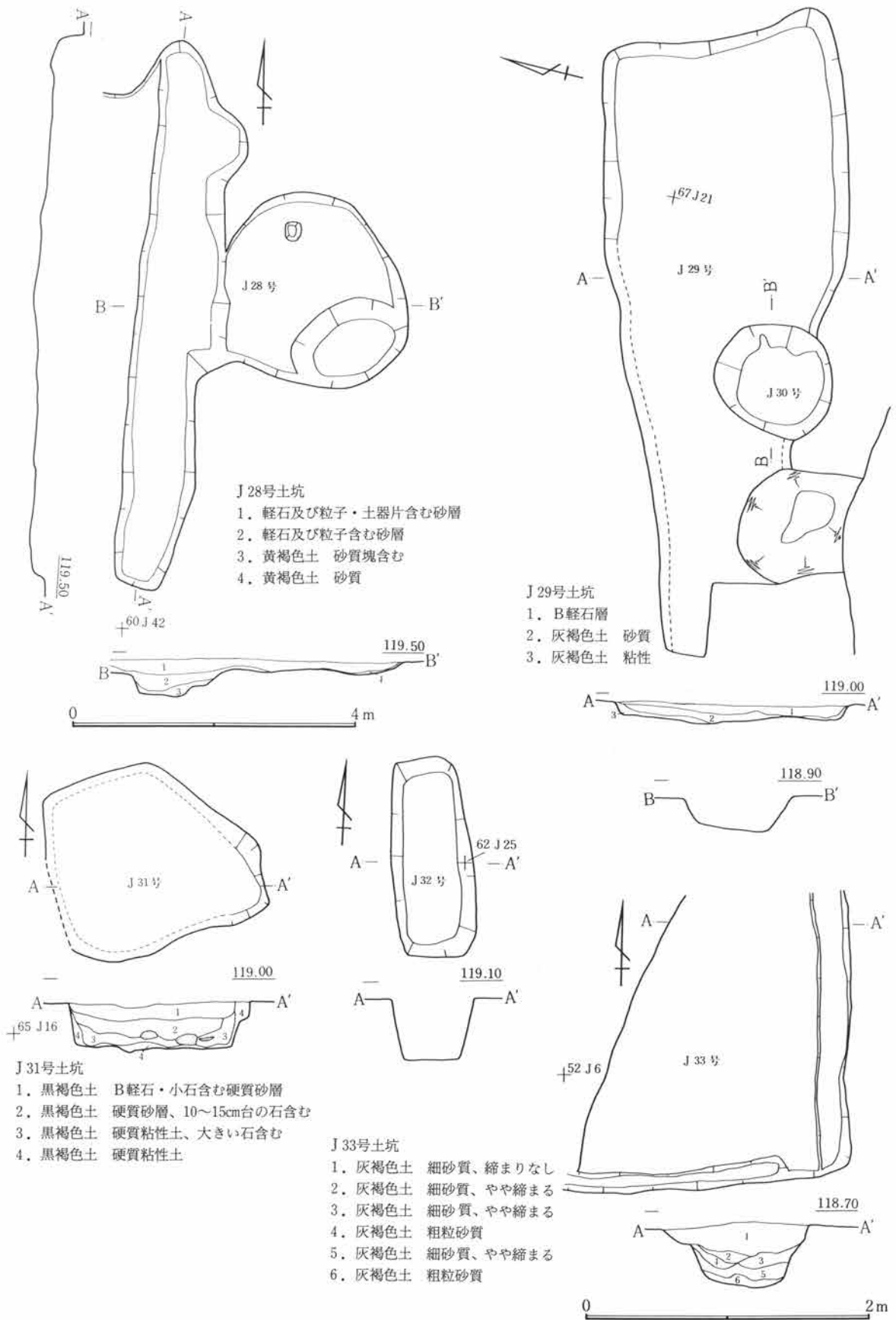


Fig. 618 J区土坑(4)

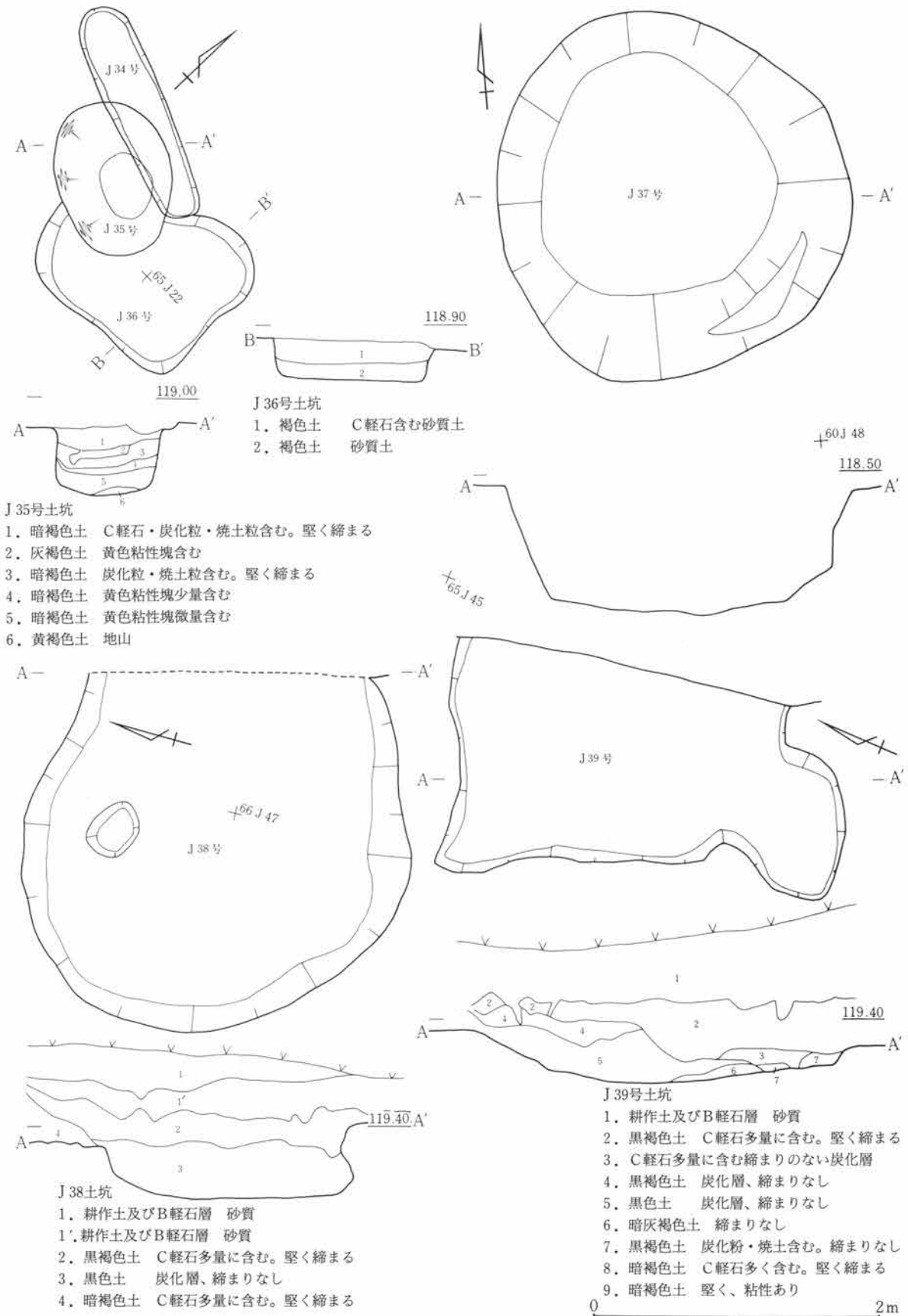


Fig. 619 J区土坑(5)

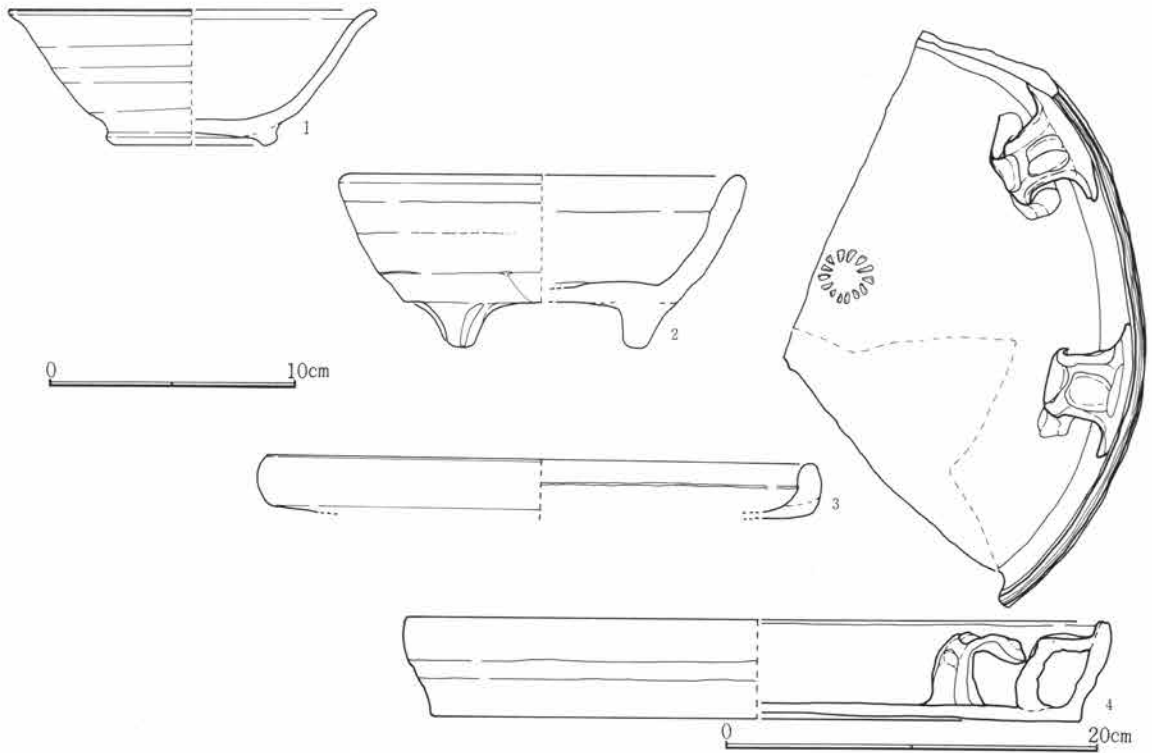


Fig. 620 J 2号1・J 9号2~4土坑出土遺物

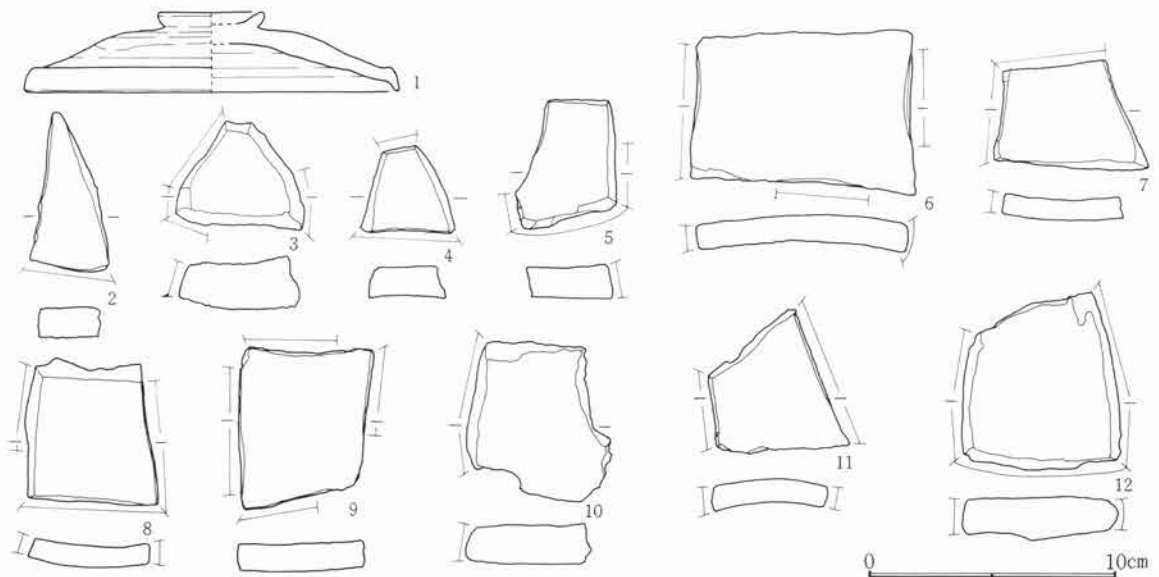


Fig. 621 J 39号土坑出土遺物

J 2号土坑出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
620-1 194-1	須恵器 碗	1/2	14.8×6.9×5.4	体部やや丸味をもつ。口縁部外反し、口唇部丸まる。付高台、断面矩形を呈し低い。轆轤成形。回転糸切り。	①還元・低温 ②灰~黒 ③精土

J 9号土坑出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
620-2 195-2	軟質陶器 香炉	1/2	16.4×11.0×6.8	体部内湾気味、三足の脚付きか。腰・底部手持ち篋削り。 口縁部内面に弱い被熱痕。	①還元・低温 ②灰黄 ③細砂混る土
620-3 195-3	軟質陶器 焙烙	小片	(30×29×2.8)	底部薄い。体部肥厚し内湾気味で浅く立つ。	①還元・低温 ②灰 ③密
620-4 195-4	軟質陶器 内耳鍋	1/2	38×34.6×5.5	平底型。口縁部比較的厚い。内外面撫で。近接して2個の内耳が付く。見込み中央部に菊花状の印花文。	①還元・低温 ②鈍い 黄橙 ③精土

J 39号土坑出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
621-1 195-1	須恵器 蓋	1/2	15.1×-×3.1 摘径4.3	環状摘。口縁部断面略三角を呈し、やや開き気味に折れる。 轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	備考	Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	備考
621-2 195-2	須恵器 転用砥石		6.3×3.2×1.2	1側面使用、壘片 良好 灰 密	621-8 195-8	須恵器 転用砥石		5.8×5.3×0.8	3側面使用、壘片 良好 灰白 密
621-3 195-3	瓦 転用砥石		4.3×5.2×1.8	1側面使用 良好 灰 やや密	621-9 195-9	須恵器 転用砥石		6.5×5.3×1.1	4側面使用、壘片 良好 灰 密
621-4 195-4	須恵器 転用砥石		3.5×3.8×1.1	2側面使用、壘片 良好 灰 やや密	621-10 195-10	須恵器 転用砥石		6.4×5.8×1.5	1側面使用、壘片 良好 灰 粗
621-5 195-5	須恵器 転用砥石		5.2×4.1×1.2	3側面使用、壘片 良好 灰 密	621-11 195-11	須恵器 転用砥石		5.8×5.7×9.0	2側面使用、壘片 良好 灰白 やや密
621-6 195-6	須恵器 転用砥石		6.6×9.1×1.0	2側面使用、壘片 良好 灰白 やや密	621-12 195-12	須恵器 転用砥石		7.1×6.4×1.7	2側面使用、壘片 良好 灰 やや密
621-7 195-7	須恵器 転用砥石		4.4×6.2×0.8	2側面使用、壘片 良好 灰 密					

4. 溝跡

J 1号溝 (Fig. 622、624・PL. 154、195、196)

J区の南に検出され、52～55 J 0～16の範囲にある。I区で検出されたJ・I 1号溝の延長部分である。J区南端はI区からの連続のまま直線的に南北走するが、現生活道下で東西区画線10付近で弧を描いて北東方向へ走行を変えている。I区を含めた検出全長は約128mに及び、J区分は38mを測りこのうち北東走部分は約20mである。溝幅約6m・深さ1mを測る。溝底面の状況はJ・I 1号溝の項で記したが当区検出の北端とI区南端では標高に約1.1mの高低差があり、北から南へ向かって緩い傾斜をもつ。走行方位は南北走部分はI区と同様でN-10°-Eを示し、北東走部分はN-60°-Eへと走行方位を変える。断面形状は緩いU字形を呈する。

埋土は検出面から底面近くまで砂質を主体にする土層で埋まり、細・粗粒砂質層の構成や、酸化層などの存在から水路的役割をもった溝であることが窺われる。出土遺物には舶載陶磁器・宝篋印塔などがある。

J 2号溝 (Fig. 622・PL. 154)

J区南に検出され、J 1号溝の東側と併走する溝である。当溝もJ 1号溝と同様にI区より連続するI 2号溝の延長部分である。しかしJ区内の東西区画線7～10の間にある現生活道以北の部分では検出されていない。検出全長はI区を含め約53mを測り、そのうちJ区分は約13mである。溝幅約1.8m・深さ45cmを測る。断面形状は緩いU字形を呈す。走行方位はおおよそN-9°-Eを示す。

埋土は検出面では砂質層が堆積するが全体に浅間山降下C軽石粒が混じる粘性暗褐色土で埋まる。

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

J 3号溝 (Fig. 622、625、626・PL. 154、196)

J区やや北側に位置し、44～60 J 37～41の範囲にわたって検出され、東西走る溝である。J 77号住居跡・J 1号土坑と重複するが前者より新しく後者より古い時期の所産である。

検出全長31.2mを測るが、J区を南北に縦断する現生活道を隔てた西半部の調査区の西端にJ 3号溝に連続すると考えられるJ 5号溝の一部とを検出しており、これを加えれば全長53.5mである。ただし調査過程の都合によって西側部分は全面検出できなかった。溝上面幅2.6～3.6m・深さ85cmを測り、断面形状は箱堀型を呈す。走行方位はおよそN-98°-Eを示すが、東端部は緩く真東へ向かう様相が見られる。

埋土は上層に厚く砂層の堆積が認められたがJ 3号溝の南を併走する近世溝が南北区画線54付近で分岐し合流したためと考えられる粘土質の黄褐色土で埋まり砂層などの堆積は見られなかった。出土遺物は土師器・須恵器杯などのほか砥石が少量検出されている。

J 4号溝 (Fig. 622、628、629・PL. 197)

J区やや北側に位置し、48～59 J 36・37の範囲にわたって検出され、東西走る溝である。北側にはほぼ併走するJ 3号溝がありさらにJ 3号溝との中間には近世に属する溝が併走する。J 90号住居跡と重複するがこれより新しい時期の所産と考えられる。東端は南北走るJ 6号溝に交わって跡切れる。また西側はJ区を縦走する現生活道下に入り、これより以西では検出できなかった。

検出全長は約24m・溝幅約2m、深さは上面の削平が著しく30cm程度の立ち上がりである。断面形状は箱堀型を呈する。走行方位はおよそN-89°-Eを示す。

覆土は厚い砂層からなり埋土は粘性黄色土層で埋まり、流水などを示す砂層の堆積は認められなかった。出土遺物は須恵器のほか瓦片・羽口などがある。なお溝底面より須恵器甕が検出されており、位置的に重複するJ 90号住居跡の範囲内にありこれに所属する遺物の可能性が強い。

J 5号溝 (Fig. 623、627・PL. 196)

J区北西部に位置し、69～71 J 40・41の範囲に検出された。東端は調査過程の都合によって検出できなかったがJ区を南北に縦断する現生活道の東側に検出されたJ 3号溝の延長上にあり、これに連続すると考えられる。南西隅でJ 1号墓と重複するがこれより古い時期の所産である。

検出全長約5m・幅1.8m・深さ75cmを測り、断面形状は箱堀型を呈する。走行方位はおよそN-93°-Eを示す。

埋土は上層に浅間山降下のC軽石粒を含む暗褐色土が、下位は粘土質の黒褐色土・白色土などの互層で埋まる。出土遺物には砥石類が検出されている。

J 6号溝 (Fig. 622、630、631・PL. 197、198)

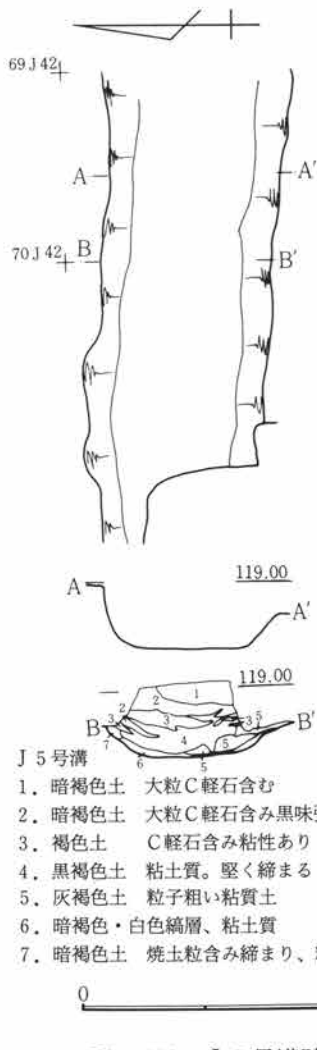
J区の調査区東縁に沿って南北走る溝である。検出範囲は43～47 J 4～41の範囲に及ぶ。全長は長く、多くの住居跡・溝跡と重複するがいずれより古い時期の所産と考えられる。

検出全長は約77mを測り、中心部は直線的に南北走るが南・北両端はU型に東へ鈍角に折れる。また南端部については溝の西壁線が東へ直角に近く折れて完結ないしはL字状に東方へ延びる可能性がある。溝幅は約2.4m・深さ約40cmを測り、断面形状は壁面が直立気味の整った箱堀型を呈す。南北走部分の走行方位はN-5°-Wを示し、これに対し、北端部は東へ32°、南端部は東へ12°の角度で折れる。



Fig. 622 J区溝 (J 1号・J 2号・J 3号・J 4号・J 6号)

埋土は粘性の強い暗褐色土・白色土で埋まり、砂層など流水を示す堆積土は認められない。出土遺物は土師器杯・滑石製模造品など古墳時代後半期に属すると思われる。



J 5号溝

1. 暗褐色土 大粒C軽石含む
2. 暗褐色土 大粒C軽石含む黒味強い
3. 褐色土 C軽石含む粘性あり
4. 黒褐色土 粘土質。強く締まる
5. 灰褐色土 粒子粗い粘質土
6. 暗褐色・白色縞層、粘土質
7. 暗褐色土 焼土粒含む締まり、粘性あり

0 2m

Fig. 623 J 5号溝跡

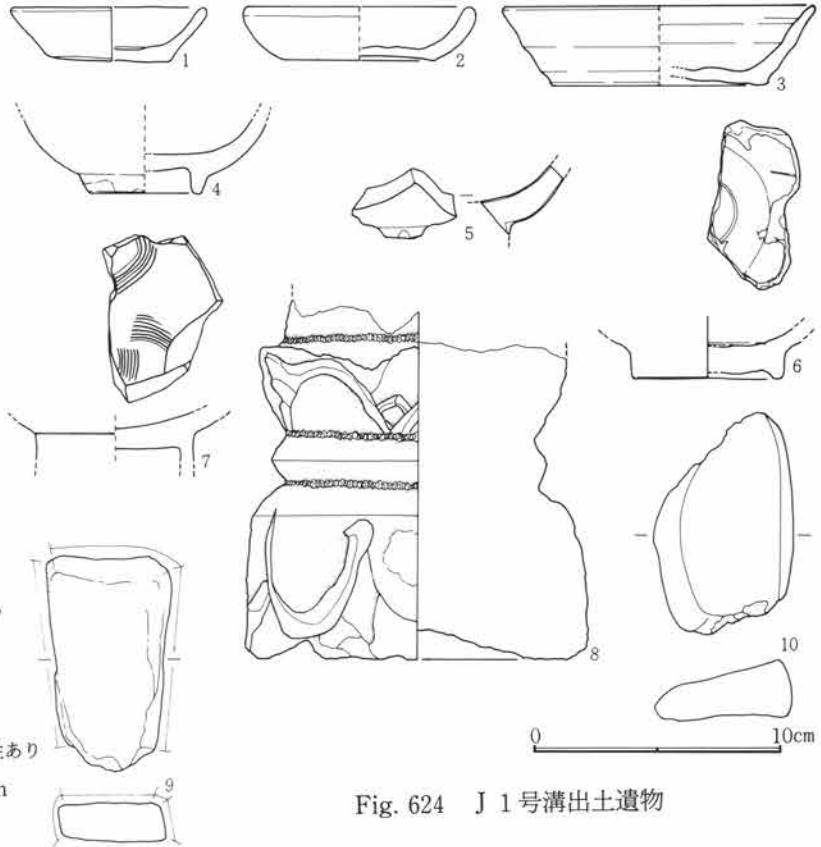


Fig. 624 J 1号溝出土遺物

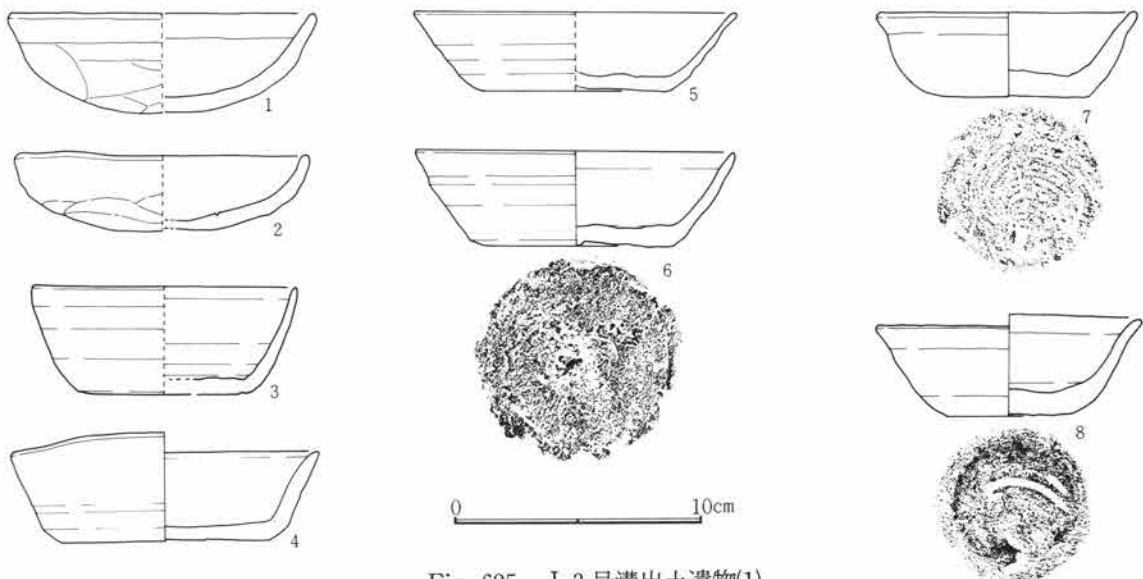


Fig. 625 J 3号溝出土遺物(1)

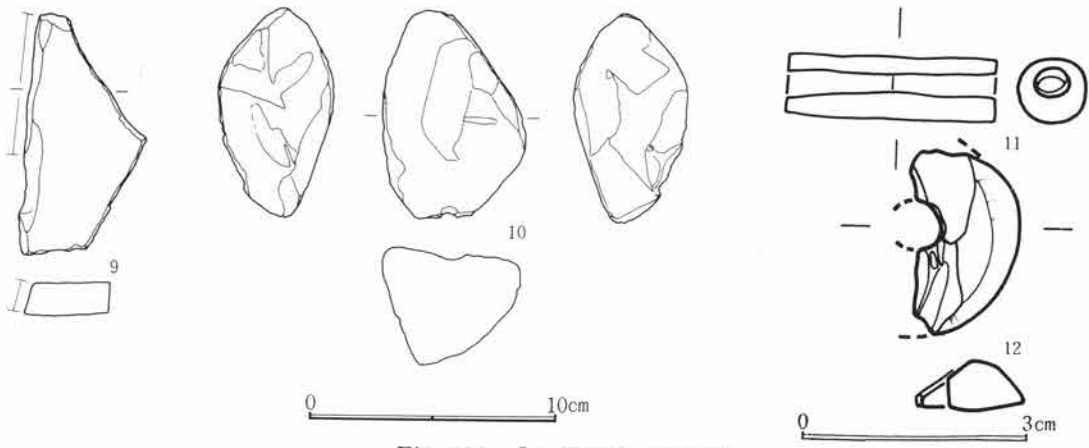


Fig. 626 J 3号溝出土遺物(2)

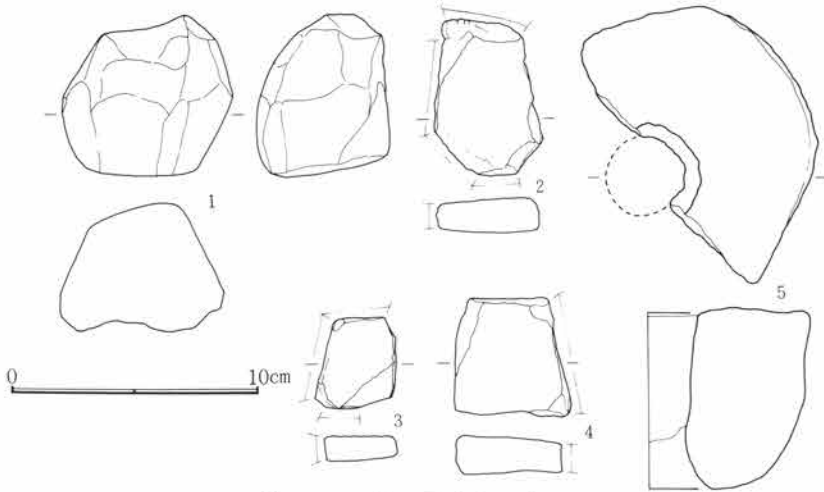


Fig. 627 J 5号溝出土遺物

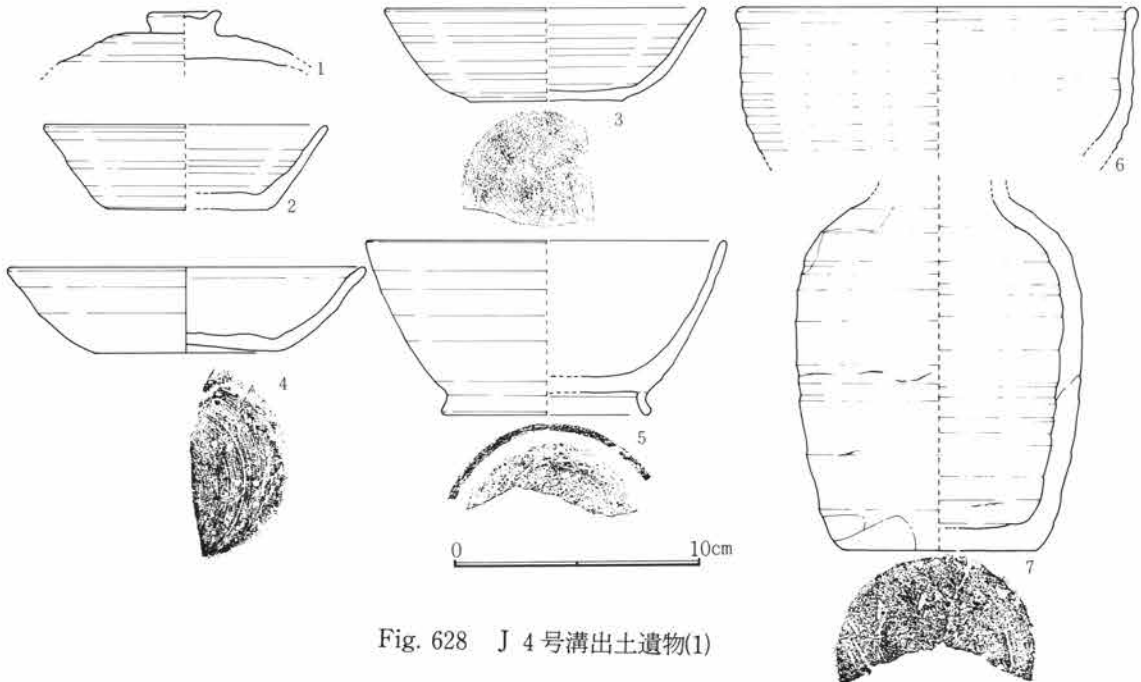


Fig. 628 J 4号溝出土遺物(1)

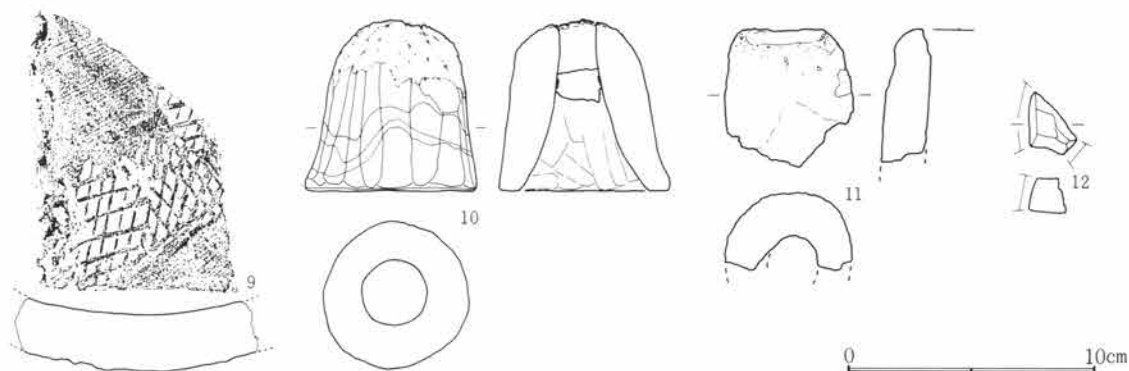
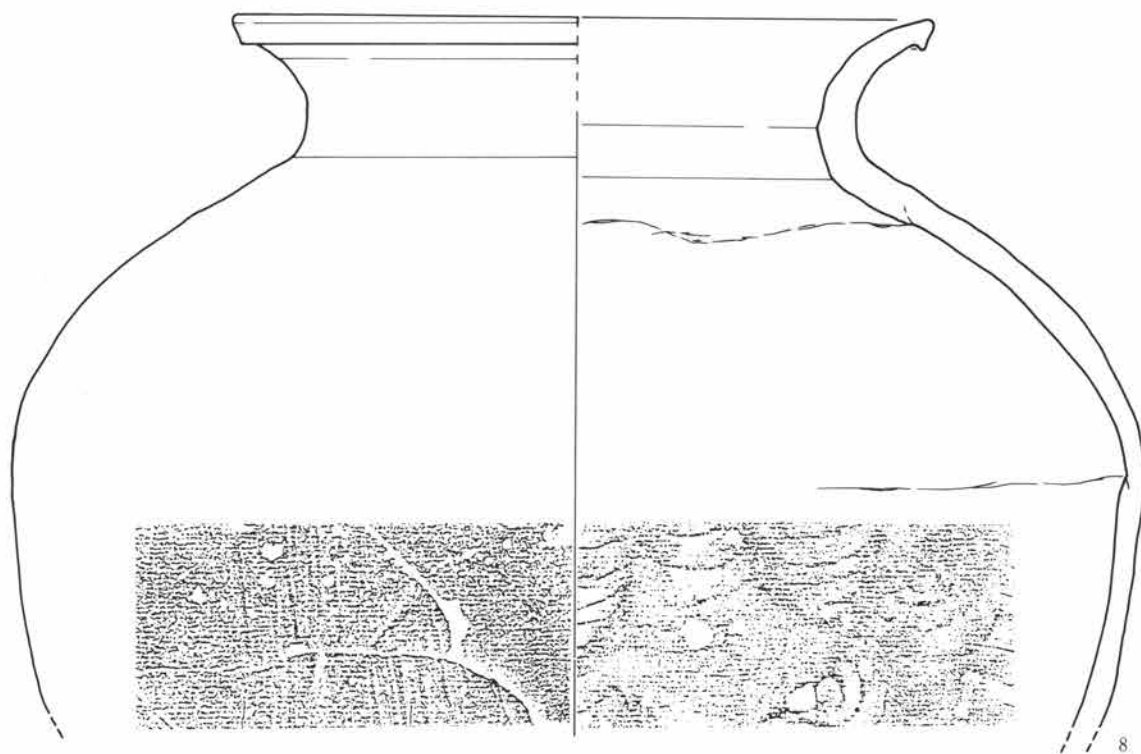


Fig. 629 J 4号溝出土遺物(2)

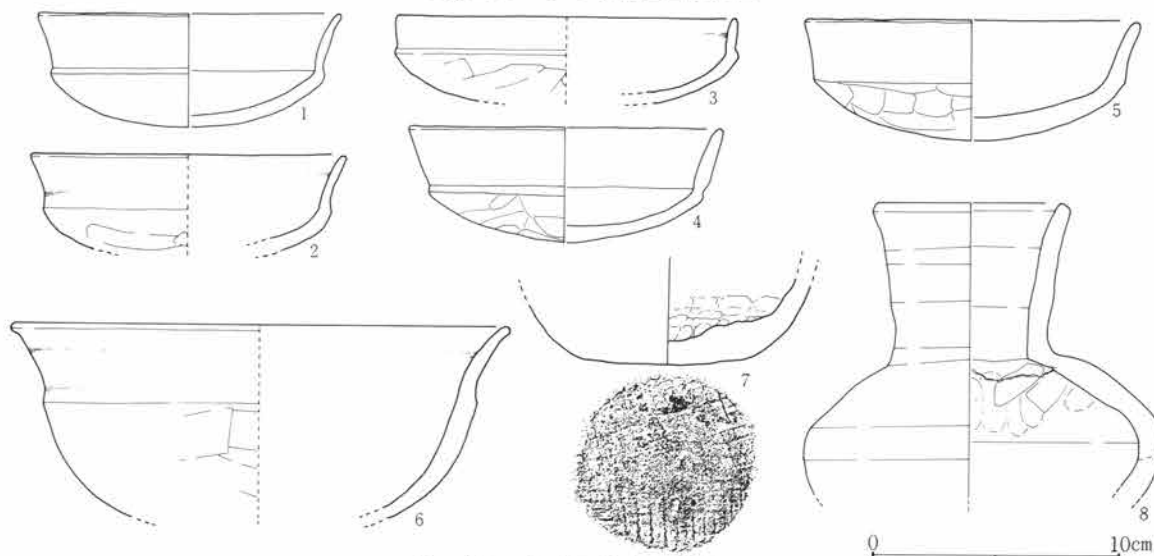


Fig. 630 J 6号溝出土遺物(1)

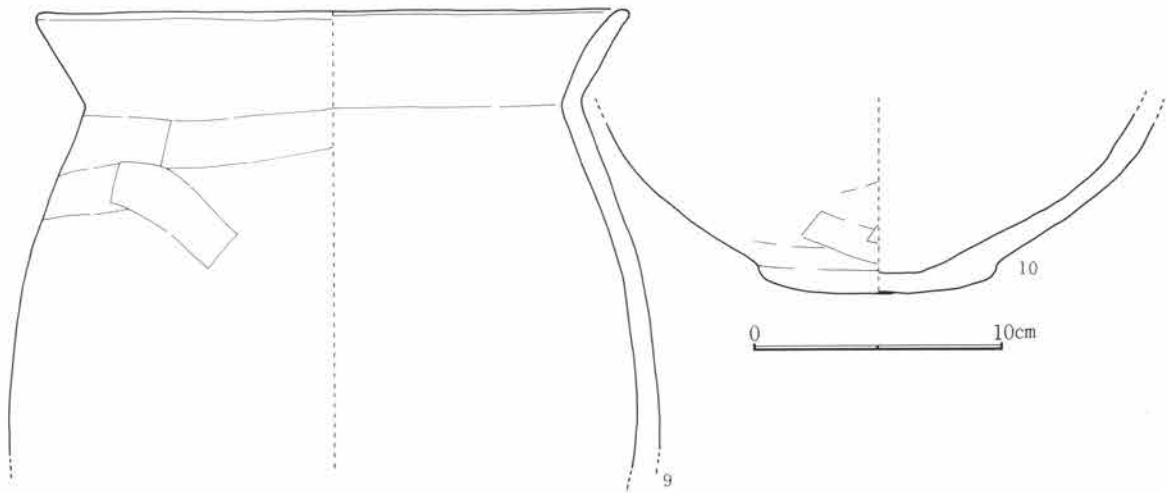


Fig. 631 J 6号溝出土遺物(2)

J 1号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
624-1 195-1	須恵器 杯	1/2	7.9×4.9×2.3	轆轤成形。右回転。口唇部に炭化物付着。	①酸化 ②浅黄橙 ③密
624-2 195-2	須恵器 杯	1/2	9.4×6.0×2.1	体部やや丸味をもち口唇部厚い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや粗・砂粒多量
624-3 195-3	須恵器 杯		13.4×3.15×8.5	底径大きく、体部直線的に外傾。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
624-4 195-4	磁器 碗	底部	-×2.9×(2.6)	染付碗。腰部1条、高台2条の線描き巡る。体部に染付文あり。一部二次被熱を受け釉が発泡。	①良好 ②灰 ③密
624-5 195-5	青磁 碗	腰部小片	-×-×(2.7)	内外面厚めの施釉。見込部に陰刻文。釉調はくすんだ黄緑色	①良好 ②灰 ③密
624-6 195-6	緑釉陶器 皿	底部1/2	-×6.0×(2.0)	碗底部を転用砥石として使用。見込部2条の凹線。見込部底部磨き。全面施釉。釉調淡緑色。割れ口使用。	①良好 ②灰白 ③密
624-7 195-7	白磁 碗	底部1/4	-×6.3×(1.9)	見込部に6~8条櫛描き文。	①良好 ②灰白 ③密
624-8 196-8	石造物 宝篋印塔 華部	相輪請 華部	径13.7×高(14.3)	半肉彫り。蓮弁葉研彫り。括れ部は連珠が巡る。	粗粒安山岩
624-9 196-9	須恵器 転用砥石		8.6×5.0×1.5	甕片転用。4側・縁面使用。	①良好 ②灰 ③やや密
624-10 195-10	石製品 砥石		8.7×5.6×2.3	多面使用。重111g。	粗粒安山岩

J 3号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
625-1 196-1	土師器 杯	1/2	12.5×-×4.0	丸底から小さくくびれて口縁部は緩く外反、内面斜位磨き、黒色処理。口縁部横撫で、底部篋削り。	①良好 ②灰褐 ③やや粗・砂粒多量
625-2 196-2	土師器 杯	1/2	11.6×-×3.0	扁平な底部。口縁部は内湾気味に開き浅い。内面に膜状黒色付着物。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗
625-3 196-3	須恵器 杯	1/4	10.6×6.9×4.3	丸味のある腰部。体部深く内湾気味に立つ。轆轤成形。篋削り後撫で調整。	①良好 ②黄灰 ③やや密・黒色粒混る
625-4 196-4	須恵器 杯	1/4	12.4×8.4×4.3	底径大。体部深く直線的で僅かに外傾して立つ。轆轤成形回転篋削り。腰部面取り状に回転篋削り。器肉厚い。	①良好 ②灰 ③やや密
625-5 196-5	須恵器 杯	1/2	13.0×7.2×3.1	底径大きく目。器肉薄く体部直線的に外傾。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
625-6 196-6	須恵器 杯	ほぼ完形	12.3×7.3×4.0	底径大き目。体部やや深く内湾気味。轆轤成形。右回転篋切り。	①良好 ②灰 ③やや密・黒色粒多量
625-7 196-7	須恵器 杯	完形	10.4×5.8×3.4	器肉厚い。腰部に丸味をもち、体部やや深い。口縁部小さく外傾。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
625-8 196-8	須恵器 杯	完形	10.7×4.9×4.1	器肉厚い。腰から体部に丸味をもち深い。口縁部外反して開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化良好 ②橙 ③やや密・細砂混る
626-9 196-9	須恵器 転用砥石		9.6×5.0×1.3	甕片転用。1側面使用。	①良好 ②灰 ③やや密
626-10 196-10	石製品 砥石		8.2×5.8×4.7	多面体。多面使用。刃痕あり。重154g。	粗粒安山岩
626-11 196-11	石製品 管玉		径0.6孔径0.3 長2.1	側面丁寧な調整。孔は中央ややはずれ2方向から穿孔。	蛇紋岩
626-12 196-12	石製品 垂飾品?	1/2	底径2.4孔径0.7 高0.7	別製品の転用か?、割れ口に不完全な調整痕あり。	滑石

J 5号溝出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
627-1 196-1	石製品 砥石		6.4×6.9×5.1	多面体。多面使用。重266g	粗粒安山岩
627-2 196-2	須恵器 転用砥石		6.2×4.4×1.3	甕片転用。多側面使用。刃痕あり。	①良好 ②灰白 ③密
627-3 196-3	須恵器 転用砥石		3.6×3.3×0.9	甕片転用。1側面使用。	①良好 ②灰白 ③やや密
627-4 196-4	須恵器 転用砥石		4.8×4.7×1.4	甕片転用。4側面使用。	①良好 ②明褐灰 ③密
627-5 196-5	石製品 不明		幅11.0×厚7.2	上面平坦。側面から底面球状。中央に表裏より穿孔、孔径4cm。器面は細かい調整工具痕顕著。	粗粒安山岩

J 4号溝出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
628-1 197-1	須恵器 蓋	1/2端部 欠損	-×-×(2.1) 摘径3.0	肉厚の環状筒。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
628-2 197-2	須恵器 杯	1/2	11.5×6.5×3.4	底径小さく、体部直線的に開く。轆轤成形。回転篋切り後回転篋削り。	①良好 ②灰 ③密
628-3 197-3	須恵器 杯	1/4	13.0×6.2×3.7	轆轤成形。右回転。底部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③密
628-4 197-4	須恵器 杯	1/2	14.2×7.2×3.4	底径大きく腰部に丸味をもつ。体部内湾気味に開き、口縁部小さく外反。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
628-5 197-5	須恵器 碗	1/4	14.6×8.5×6.9	腰部張なく、体部内湾気味に開き深い。付高台外側に張る。轆轤成形。底部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや粗・砂粒多量
628-6 197-6	陶器 鉢?	1/2	15.5×-×(6.8)	腰から底部にかけて丸味をもつ。口唇部丸まる。轆轤成形。底部から腰部は回転篋削り。内外面淡黄色の釉掛け。	①良好 ②浅黄 ③密
628-7 197-7	須恵器 瓶	1/2口頸 部欠損	-×14.0×6.8	肩部丸く張り、胴部は寸胴を呈す。底部・腰部手持ち篋削り、胴部回転撫で調整。	①良好 ②灰 ③やや粗
629-8 197-8	須恵器 壺	1/4	27.4×-×(27.6)	紐造り。輪積。口縁部から頸部横撫で。体部は叩打。	①還元 ②明青灰 ③細砂混る
629-9 197-9	平瓦		厚2.2	凹面縦・横の撫で、凸面斜格子文叩き。側面篋調整。	①良好 ②褐灰 ③やや密・細砂混る
629-10 197-10	土製品 羽口	完	長6.8径5.8 孔径2.7	最も小形。先端部溶解。孔内に溶解物付着し塞がる。	①酸化 ②褐灰 ③やや粗
629-11 197-11	土製品 羽口	先端部 小片	長(5.4)径5.2 孔径2.0	先端部溶解。	①酸化 ②褐灰 ③やや粗
629-12 197-12	須恵器 転用砥石		2.5×1.9×1.4	細片。2側面使用。	①良好 ②灰白 ③やや密

J 6号溝出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
630-1 197-1	土師器 杯	ほぼ完形	12.2×-×4.5	深目の丸底から明瞭に段をなし口縁部は外反して開く。口縁部横撫で。底部不定方向篋削り。	①やや軟 ②橙 ③密
630-2 197-2	土師器 杯	3/4	12.7×-×3.9	丸味をもち扁平な底部からくびれて段をなし口縁部は外反して開く。口縁部横撫で。底部篋削り。外面化粧土の痕跡	①やや軟 ②灰 ③密
630-3 197-3	土師器 杯	3/4	13.6×-×(3.4)	丸い扁平な底部から段をなし口縁部は短かく直立する。口縁部横撫で。底部篋削り。	①やや軟 ②橙 ③密
630-4 197-4	土師器 杯	ほぼ完形	12.6×-×4.6	やや深目の丸底から段をなし口縁部は直線的に外傾。口縁部横撫で、底部不定方向篋削り。	①良好 ②淡黄 ③やや粗
630-5 197-5	土師器 杯	3/4	13.5×-×4.8	深目の丸底からくびれて口縁部は外反気味に立つ。口縁部横撫で。底部不定方向篋削り。内面吸炭処理施すか。	①やや軟 ②褐灰 ③やや粗
630-6 198-6	土師器 鉢	3/4	20.1×-×(7.7)	深く丸い底部からくびれて稜をなし口縁部は外反して開く。口唇部丸まる。口縁部横撫で。底部篋削り。	①やや軟 ②灰 ③密
630-7 198-7	須恵器 壺?	底部	高(3.6)	平底気味。腰部丸味強い。内面底部のしほり痕及び閉塞痕明瞭。閉塞径3cm、外面格子状叩き。	①良好 ②灰 ③やや密
630-8 198-8	須恵器 瓶	胴部下半欠損	8.0×-×(11.6) 最大径14.4	肩部丸く強く張る。口頸部直線的で僅かに外傾。口唇部丸い。内面に胴部と頸部の接合顕著。	①良好 ②灰 ③やや密・黒色粒混る
631-9 198-9	土師器 甕	3/4下半部欠損	23.9×-×17.6	器肉厚い。張りの弱い胴部から口縁部はくの字状に開く。口縁部横撫で。胴上半は横篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密・小石混る
631-10 198-10	土師器 甕	底部	-×9.4×(7.2)	器肉厚い。底部やや突出気味。胴部丸く張るか。底部・胴部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗

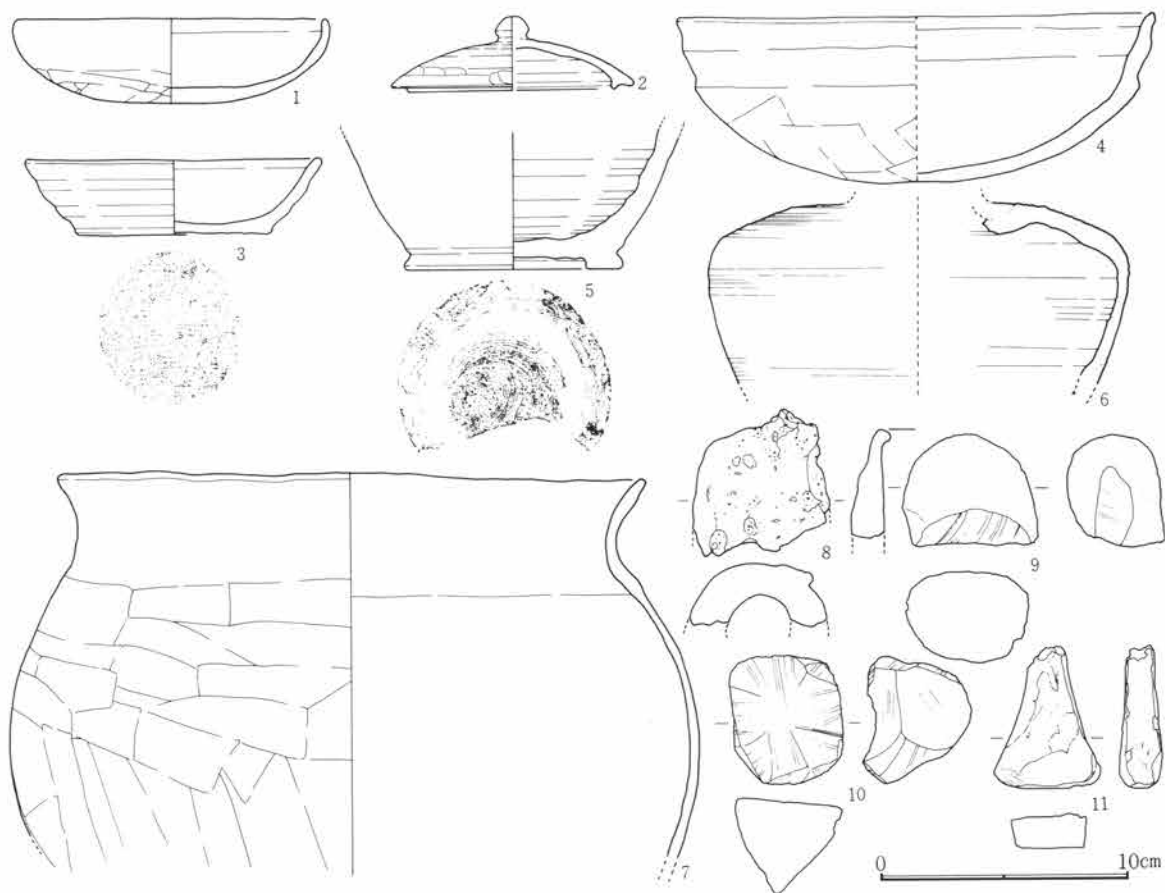


Fig. 632 J区出土遺物

J区出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
632-1 198-1	土師器 杯	完形	12.8×-×3.3	浅く丸味のある底部。口縁部内湾気味に直立。口縁端部横撫で。下位横篋削り。底部不定方向篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗・砂粒混る
632-2 198-2	須恵器 蓋	完形	9.8×-×(2.9) 摘径1.4	天井部丸く張る。内面に口縁より突出するかえり。乳頭形摘。轆轤成形、天井部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密
632-3 198-3	須恵器 杯	完形	11.6×7.5×3.0	体内内湾気味に開く。口唇部丸い。轆轤成形。静止糸切り	①酸化良好 ②橙 ③やや粗
632-4 198-4	土師器 鉢	片	19.2×-×6.7	深い丸底から段をなし、口縁部中位でくびれて段をなし、内湾気味に開く。内面黒色処理。口縁横撫で、底部篋削り	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
632-5 198-5	須恵器 瓶	底部	-×8.8×(5.6)	胴部やや丸味。付高台、断面矩形を呈し低く幅広。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②オリーブ灰 ③やや粗
632-6 198-6	須恵器 長頸壺	胴部	-×-×(7.3) 最大径16.9	肩部直に折れ強く張る。肩から胴部にかけて回転櫛目状掻き目。	①酸化気味 ②灰黄褐 ③やや密
632-7 198-7	土師器 甕	上半	24.2×-×(15.5)	短胴で丸く張る。口縁部強く外反して開く。口縁部横撫で。胴上半は横位、下半は縦位篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗
632-8 198-8	土製品 羽口	先端部	長(5.9) 孔径(2.8)	器肉薄い。孔は大きな径をもつ。先端部の溶解著しい。	①良好 ②褐灰 ③やや粗
632-9 198-9	石製品 砥石		5.2×4.5×3.8	スタンプ型。2面使用。刃痕あり。重51g	角閃石安山岩
632-10 198-10	石製品 砥石		4.5×5.5×3.6	多面使用。重48g	角閃石安山岩
632-11 198-11	石製品 砥石		5.7×4.3×1.3	多面使用。重44.5g	流紋岩

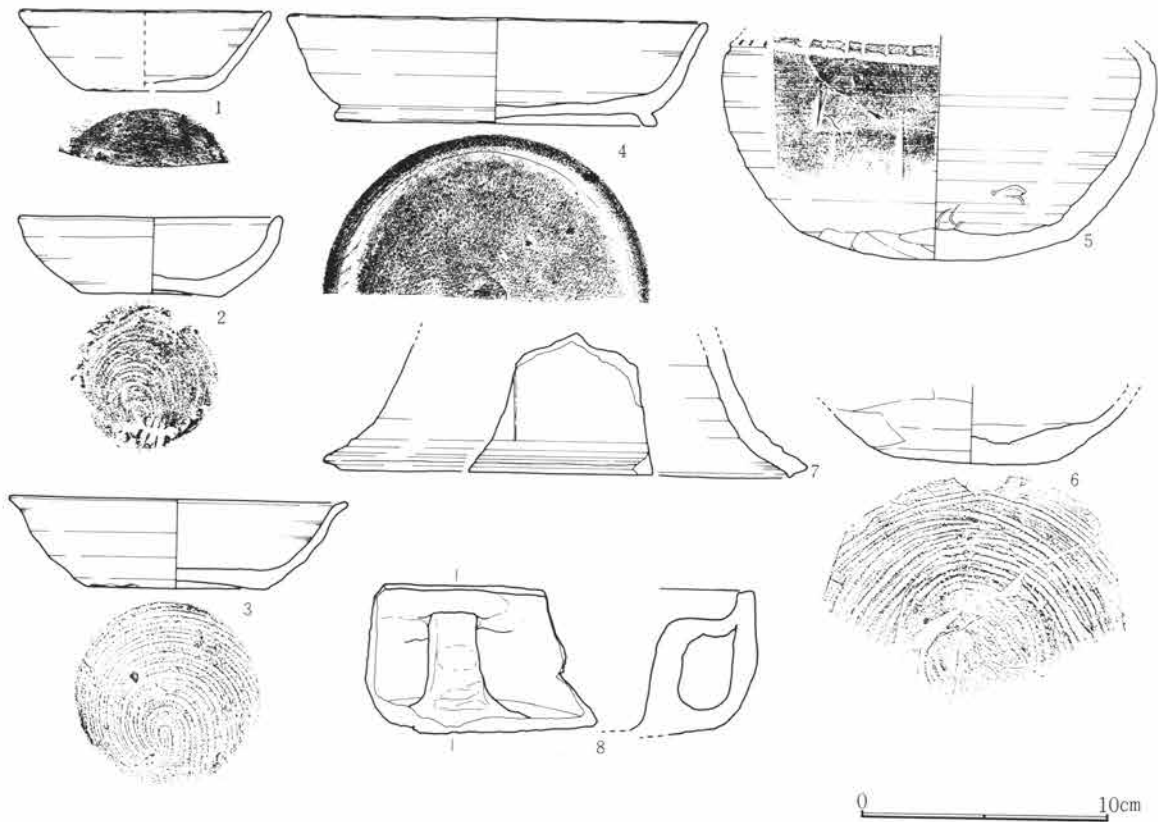


Fig. 633 J区表採遺物(1)

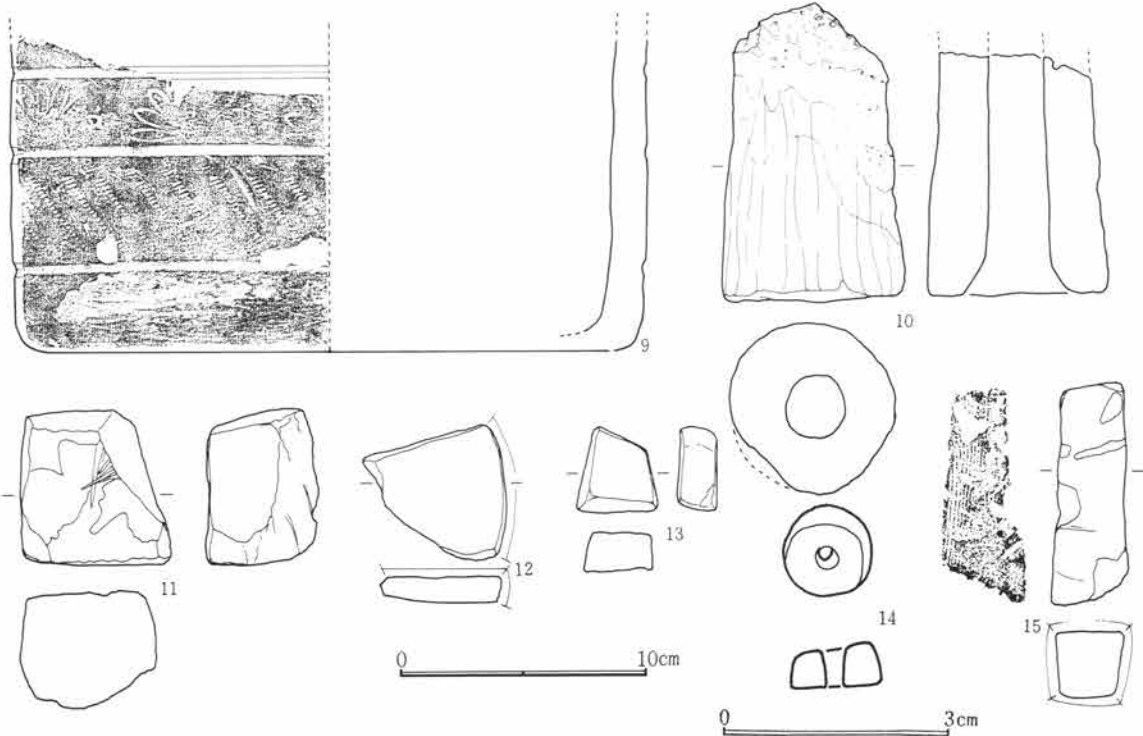


Fig. 634 J区表採遺物(2)

J区表採遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
633-1 199-1	須恵器 杯	1/4	10.2×4.8×3.2	底部張らみ味で不安定。腰部丸味をもち体部深く直線の。轆轤成形。回転筥切り後撫で。	①良好 ②灰白 ③やや密
633-2 199-2	須恵器 杯	ほぼ完形	10.7×5.8×3.3	体部丸味をもち内湾して開く。口縁部小さく外反。轆轤成形。右回転系切り	①酸化 ②橙 ③密・砂粒混る
633-3 199-3	須恵器 杯	1/2	13.7×7.4×3.6	底径大。体部丸味をもち内湾気味に開き、口縁部やや大きく外反する。轆轤成形。右回転系切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
633-4 199-4	須恵器 盤	1/2	17.0×13.0×4.2	体部浅く丸味のある腰部。体部緩く外反。付高台幅広で丸い。轆轤成形、回転筥切り後回転筥削り	①良好 ②灰白 ③やや密
633-5 199-5	須恵器 瓶	胴部	-×-×(8.5)	長頸瓶か?底部丸く不安定。胴部丸く張り上位に凹線が巡り縦位極強烈点文を施す。底・腰部手持筥削り。	①良好 ②鈍い黄褐 ③やや密
633-6 199-6	須恵器 瓶?	底部	-×7.4×(2.7)	底部丸味をもつ。外面に棒筥による同心円状かき目、底部には平行線状かき目を施す。	①良好 ②黄灰 ③密
633-7 199-7	須恵器 硯	脚部小片	-×19.4×(5.0)	円面硯の脚部。縦長の透しと縦位1条の線刻。	①良好 ②灰黄褐 ③やや密
633-8 199-8	軟質陶器 内耳鍋	破片	高(5.8)	体部中位で弱いくの字に屈する。口唇部断面矩形。体部下半横筥削り、上半横撫で。	①良好 ②黒 ③密
634-9 199-9	軟質陶器 火鉢	破片	-×23.0×(12.3)	胴部直立する。三条の凹線で区画され上下に斜行烈点文、中位に花文を施す。	①軟 ②黄灰 ③密
634-10 199-10	土製品 羽口		長11.9径6.7 孔径2.5	先端部溶解。基部の開き少なく縦位の凹状の強い撫成形。	①酸化 ②橙 ③やや粗
634-11 199-11	石製品 砥石		6.2×6.0-× 4.7	多面体。多面使用。刃痕著しい。重197g	粗粒安山岩
634-12 199-12	須恵器 転用砥石		5.8×5.4×0.1	麤片転用。1側面使用。	①良好 ②灰白 ③やや密
633-13 199-13	石製品 砥石		3.4×3.3×1.5	多面使用。重25g	流紋岩
634-14 199-14	石製品 白玉		径0.7孔径0.3 厚0.7	表裏面調整粗雑。	滑石
634-15 199-15	石製品 砥石		8.9×3.0×2.6	2面使用。3面に縦筋状の整面痕あり。重119.5g	流紋岩

第5節 K区の遺構と遺物

K区は鳥羽遺跡調査域の中央やや北側に位置し、群馬郡群馬町稲荷台に所属している。当区北側を東西走して横断する県道前橋一足門線が通る。

発掘調査は昭和57年から58年にかけて、G・H・I・J・L区の調査と会い前後して実施された。実施にあたっては関越自動車道の本線部・側道部・構造物建設部分など調査区の細切れや数期に渡る不連続な調査

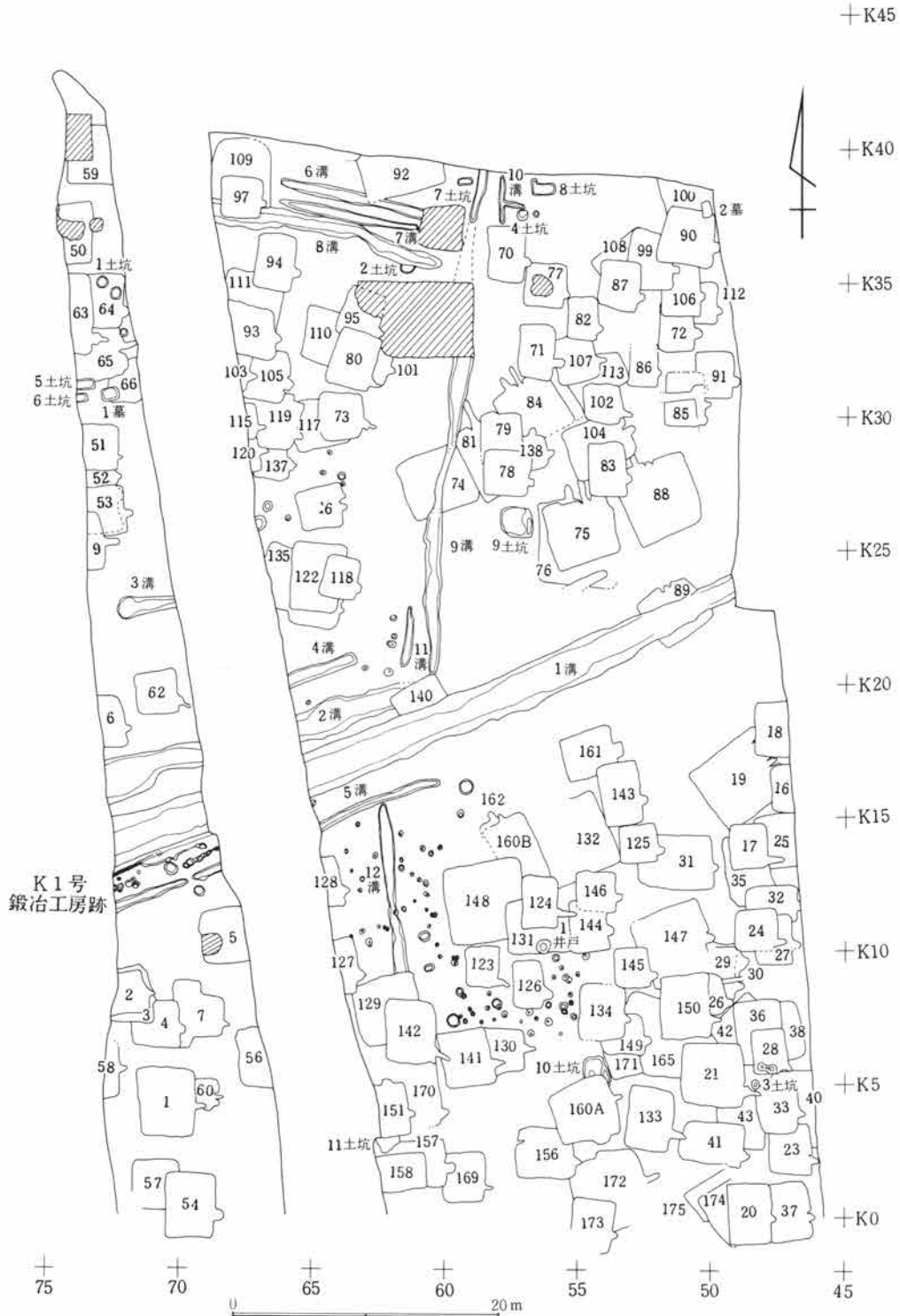


Fig. 635 K区全体図

や区内にある生活道の確保もあって遺構の整合性に著しい支障をきたした結果となってしまった。なお当区の調査面積は約3,260㎡である。

検出された遺構は古墳時代から奈良・平安時代にかけての竪穴住居跡139軒をはじめ鍛冶工房跡1棟・井戸跡・墓跡・土坑・溝などである。地勢的には、現地表面は北側にやや高く南北の高低差は約50cm程度である。しかし遺構検出面ないしはLoam層到達までの差は現地表からする南北の差はおよそ1mのひらきがある。南側とくに南西部に向かいLoam上層の暗褐色土ないしは黒褐色土の層厚が増し、南西部での遺構検出面はこれに伴って深くなる。往時は北東から南西に向かい緩い傾斜地となっていたと思われる、調査時には南西部の遺構検出面は湿気があり、遺構掘り下げでは湧水も見られた。

竪穴住居跡は古墳時代に属すると考えられるものは20軒を数え、鳥羽遺跡内でも最も多数を擁している。また住居跡群はかなりの密度で重複しているが、おおよそ南北に2群して居住空間が分かれるようである。厳密にはいいがたいが中間地帯には他遺構も含め空白部分を作り出し、広場的空間の存在が認められる。なお竪穴住居跡と鍛冶工房跡については既刊の報告書『鳥羽遺跡』I・J・K区 1988 を参照されたい。

井戸跡は1基のみの検出である。墓跡は2基検出されているが、いずれも方形土壌の形状をもち屈葬体で中世に属すると思われる。溝は大小12条があり、走行方向では3群に分かれる。

1. 井戸跡

K 1号井戸跡 (Fig. 636)

調査区中央部やや南に位置し、56K 9・10の範囲にある。K131号住居跡と重複しているがこれより新しい時期の所産である。埋土上層は浅間山降下B軽石が堆積するがunit形成が見られず、二次的な堆積と思われる。平面形は小型の円形を呈するが平面規模の割りには深さがある。上径1m・底径50cm・深さ3.9mを測る。断面上部は弱い漏斗状をなし、深さ2.7m・3.1mの部分に僅かな膨らみが見られるが壁面の崩落は無く良好な遺存状態である。このことは当井戸跡が井戸枠等の痕跡は認められず素掘井戸と考えられる。出土遺物は獣骨頭部・小枝片・竹片などが見られた。豊富帯水を持つ透水層に達していないことを示し、調査時でも湧水は無かった。



Fig. 636 K 1号井戸

2. 墓跡

K 1号墓 (Fig. 637)

調査区北西部に位置し、71・72K 29・30の範囲にある。K66号住居跡と重複しているが、これより新しい時期の所産である。平面形は東西に長軸をもち、1.3×0.95mの方形を呈する。確認面からの深さ20cmを測る。長軸方位はN-81°-Eを示す。遺体は土壌中央部に顔面を下にして頭骨が、また西隅には骨片の分布が確認されたのみで全身を窺うことはできない。頭骨の大きさから成人のものと考えられ、土壌の大きさから屈葬であったと思われる。土壌内には木棺などの痕跡は認められず直葬と思われるが東隅・北西隅に加工痕の無い棒状木片が見られた。副葬品などの出土遺物は検出されない。

K 2号墓 (Fig. 637、638・PL. 154、199)

調査区北西隅に位置し、50K37の範囲にある。K90号・K100号住居跡と重複しているが両者より新しい時期の所産である。平面形は南北に長軸を持ち、1.05×0.9mの方形を呈する。確認面からの深さ約20cmを測り、長軸方位はN-14°-Wを示す。遺体は北側に頭部を置く西向き横臥屈葬である。土壌内には木棺の存在を示すような痕跡は認められなかったが、遺体胸部には人頭大の角礫が検出され、土壌底面からは15cm程度浮いた状態にある。本来墓標的に置かれていたものが木棺の朽腐によって陥没したものであろうか。副葬品には肩部と胴部に分かれ6枚の渡来銭が検出されている。

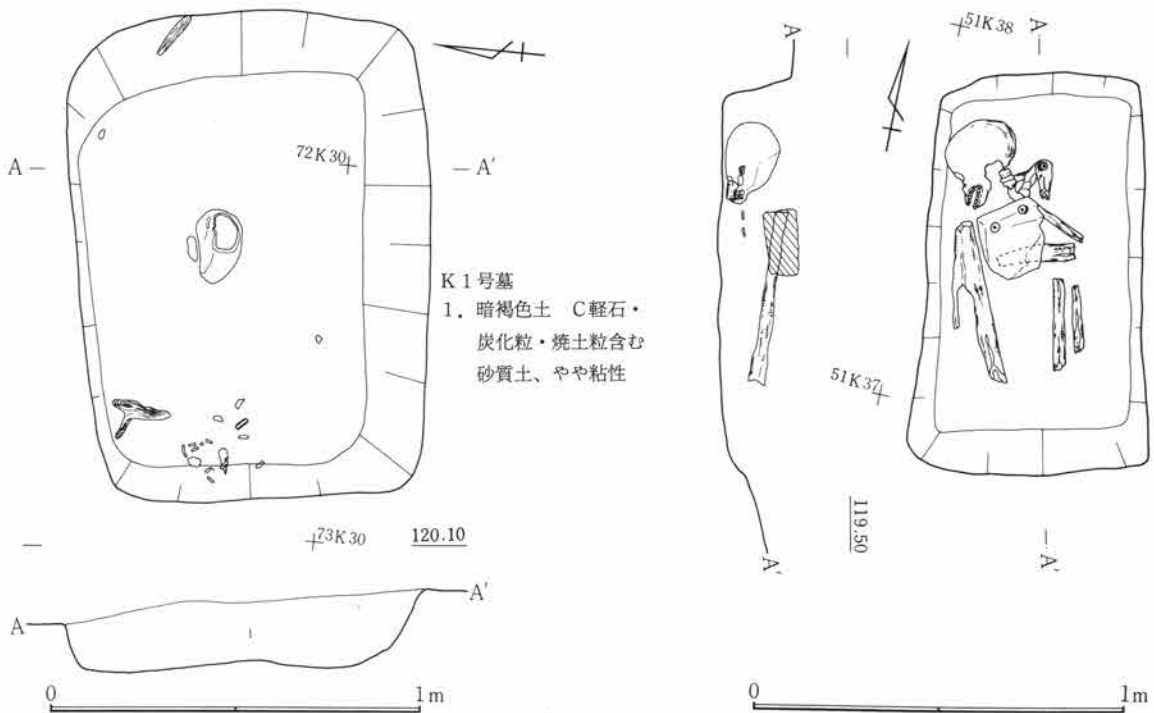


Fig. 637 K区墓 (K 1号・K 2号)

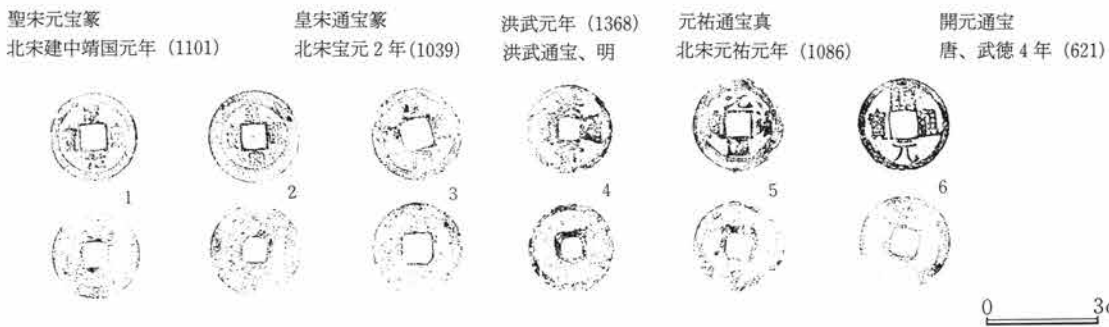


Fig. 638 K 2号墓出土遺物

K 2号墓から6点の古銭が出土している。1は北宋銭聖宋元宝（北宋建中靖国元年西暦1101初鑄）篆書。2・3は北宋銭皇宋通宝（北宋宝元2年西暦1039初鑄）篆書。4は明銭洪武通宝（明洪武元年西暦1368初鑄）。5は北宋銭元祐通宝（北宋元祐元年西暦1086初鑄）真表。6は唐銭開元通宝（唐武德4年西暦621初鑄）。

3 土 坑 (Fig. 639~644)

遺構名	位 置	形 状	長軸方位	長×短×深	備 考
K 2号土坑	61K35	楕円形?	(N-27°-E)	—×110×25	北半はK15号溝に切られる。出土遺物は多く須恵器杯3点・瓶2点。
K 7号土坑	59K38	隅丸長方形	N-81°-E	105×50×20	出土遺物無し、底面に凹凸あり。
K 6号土坑	73K30	(長方形)	(N-83°-E)	(80)×60×23	出土遺物無し、埋土は浅間山降下B軽石主体の暗褐色土、西半は調査区域外。
K 5号土坑	73K30~31	(長方形)	(N-83°-E)	(135)×70×20	出土遺物無し、埋土は浅間山降下B軽石主体の暗褐色土、西半は調査区域外。
K 4号土坑	57K37	(隅丸方形)	—	80×75×15	出土遺物無し、南壁東面に小穴を穿つ。
K 8号土坑	56K38	L字形	N-88°-E	170×80(120)×20	出土遺物無し、西側のL字部分は重複の可能性がある。底面凹凸著しい。
K 1号土坑	73K34	円形	—	80×70×35	出土遺物無し、埋土は土層に浅間山降下B軽石が堆積する。
K 3号土坑	48K 5	楕円形	N-81°-E	60×50×55	中位より土師器甕・炭化材が出土。
K11号土坑	62K 2	不整楕円形	—	—×180×40	須恵器杯・砥石出土、埋土は浅間B軽石。K151号、157号より新しい。
K 9号土坑	56・57K25・26	不整形	N-90°-E	240×230×50	小片の土師・須恵器、底面の凹凸著しく複数土坑の切り合いの可能性、遺物は平安時代後半。
K10号土坑		長方形	N-13°-W	240×190×40	K160A号住と重複、新しい。遺物多量、埋土中位に多量の炭化粒。

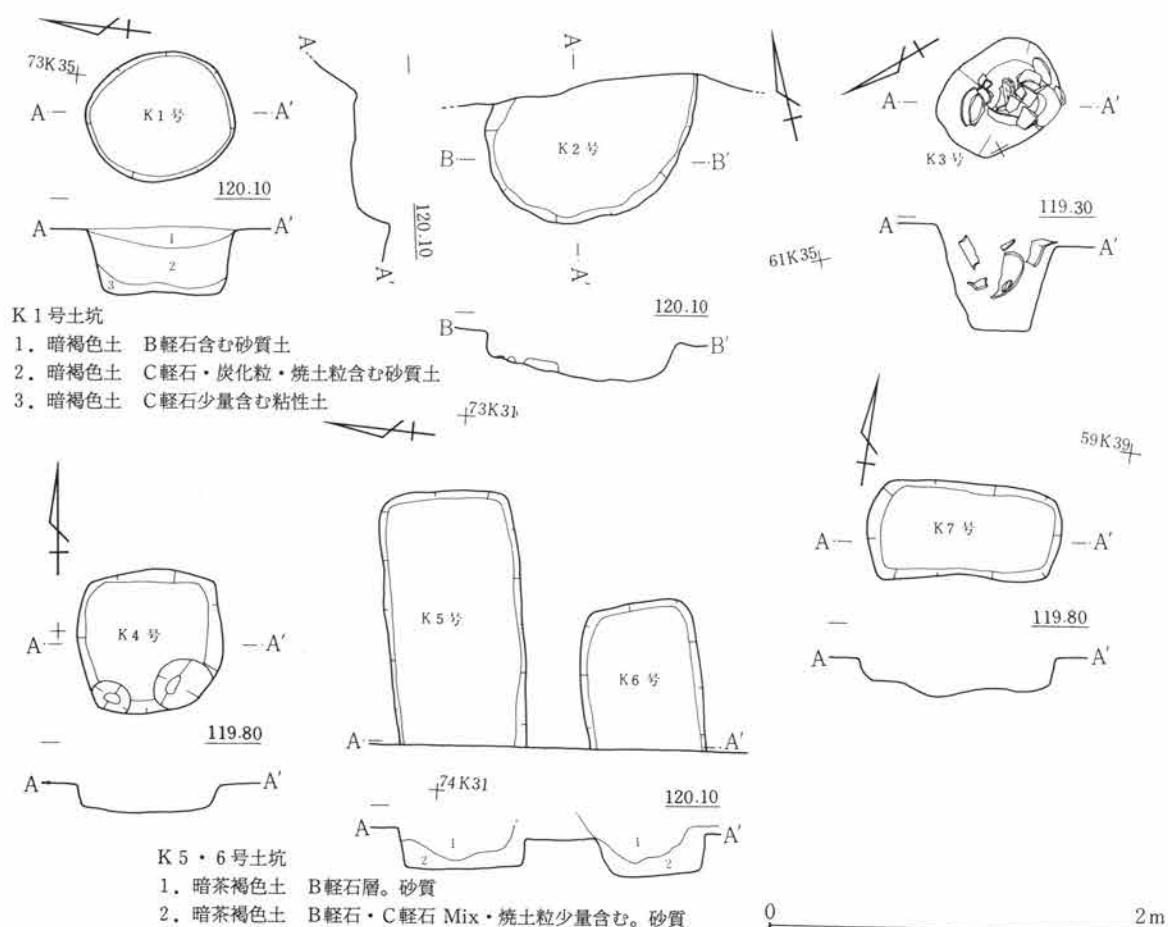


Fig. 639 K区土坑(1)

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

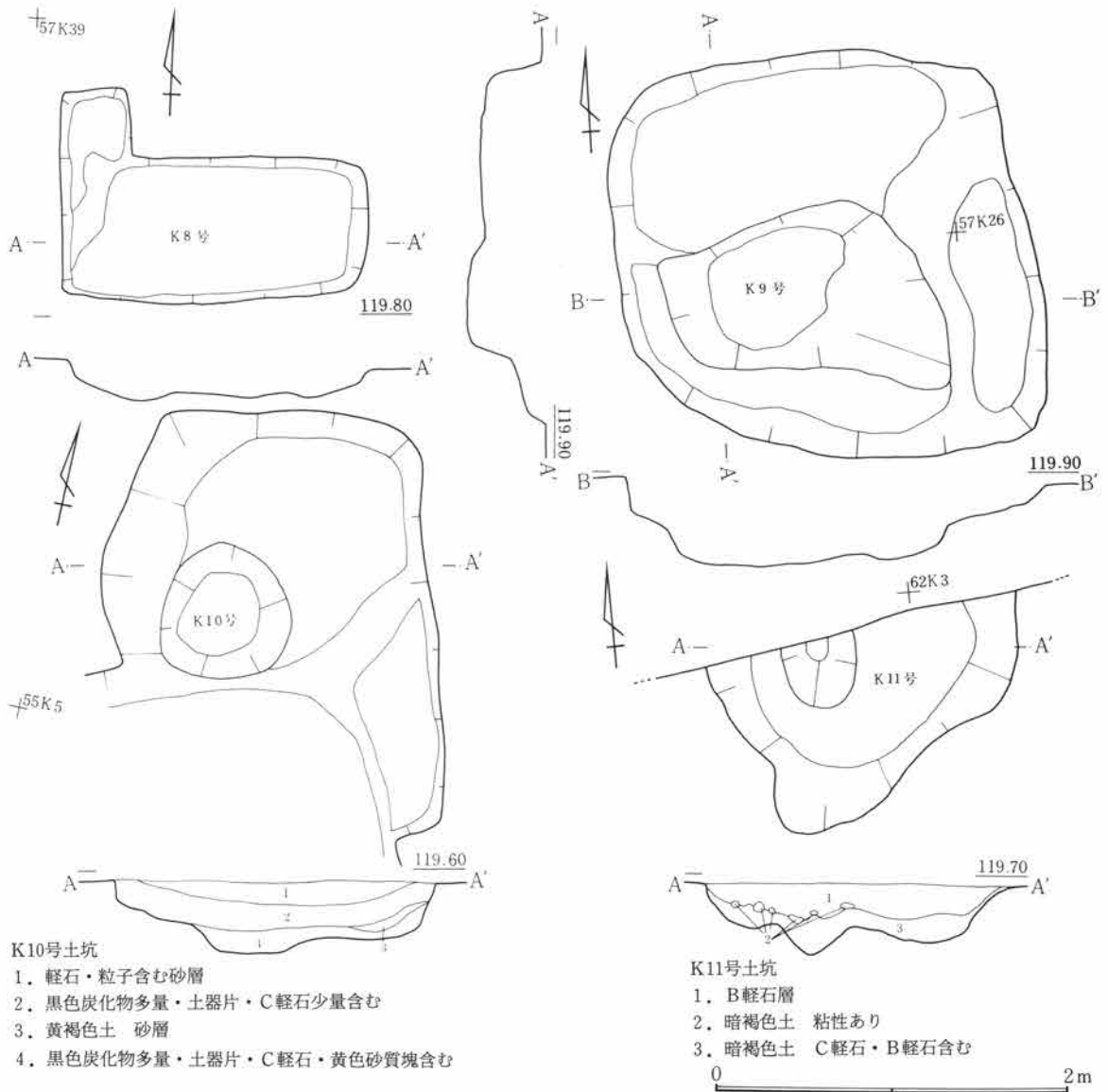


Fig. 640 K区土坑(2)

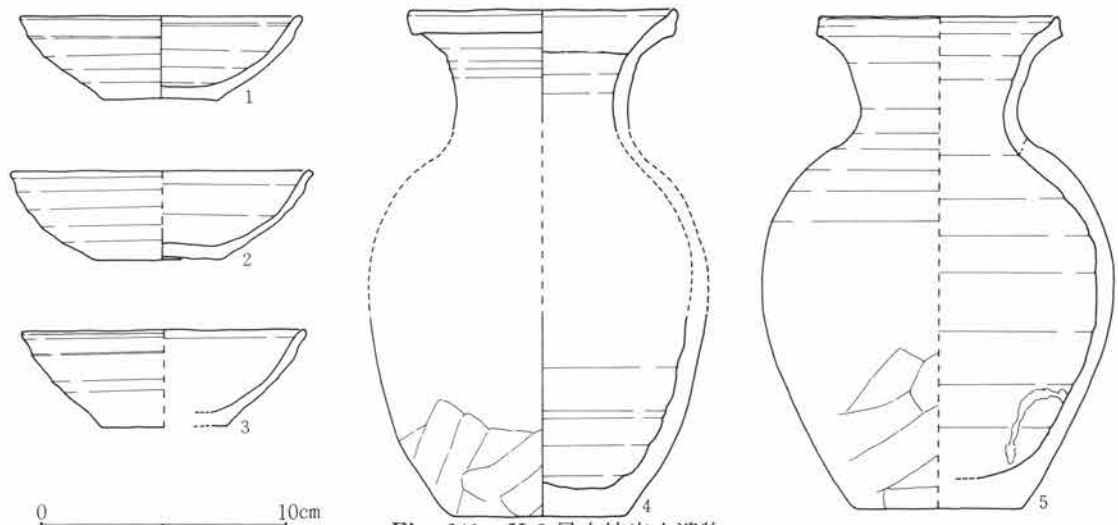


Fig. 641 K 2号土坑出土遺物

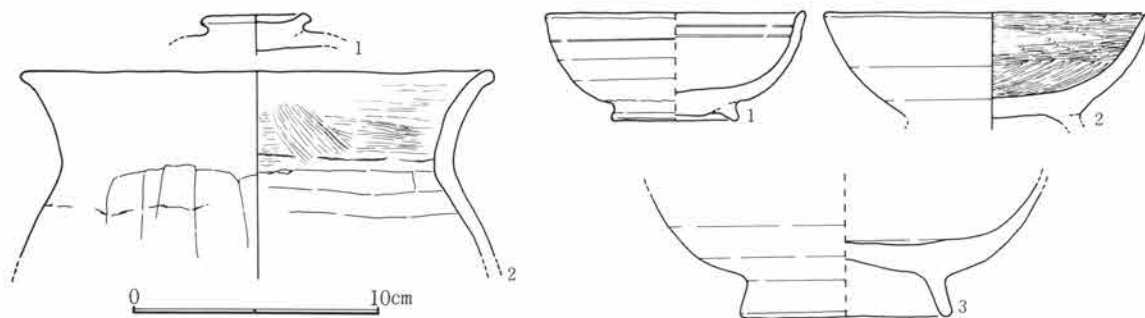


Fig. 642 K 3号土坑出土遺物

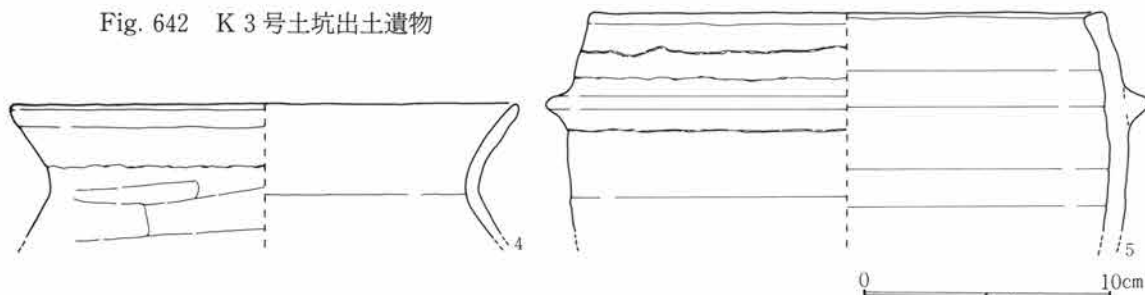


Fig. 643 K10号土坑出土遺物

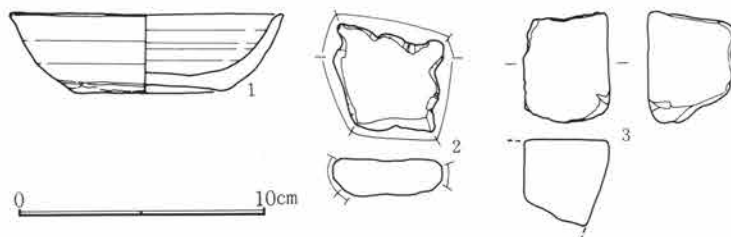


Fig. 644 K11号土坑出土遺物

K 2号土坑出土遺物

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
641-1 199-1	須恵器 杯	完形	11.3×4.5×3.3	底径小。体部内湾し丸味あり。口縁部くびれて小さく外傾。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良②鈍い黄橙 ③やや粗・砂粒混る
641-2 199-2	須恵器 杯	1/2	12.0×5.0×3.5	底径小。体部内湾し丸味あり。口縁部くびれて小さく外反して開く。轆轤成形。回転糸切り。内外面焼成時の吸炭。	①酸化・良②浅黄橙 ③やや粗・砂粒混る
641-3 199-3	須恵器 杯	3/4	11.4×5.2×3.8	底径小。体部内湾し丸味あり。口縁部くびれて小さく外反して開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良②鈍い橙 ③やや粗・砂粒混る
641-4 200-4	須恵器 瓶	胴中位 欠損	10.5×6.6 ×(19.9)	胴部全体に脹らみをもつ。頸部外反気味に立ち口縁部短かく直立。轆轤成立。右回転糸切り。胴下半篋削り。	①酸化・軟②橙 ③やや密・砂粒含む
641-5 200-5	須恵器 瓶	1/2	9.6×6.6×19.4	やや長胴を呈すが最大径胴上位にあり丸く張る。頸部外傾して立ち口縁部短かく直立。胴下半・底部篋削り。轆轤。	①酸化・軟②鈍い橙 ③やや粗・砂粒多い

K 3号土坑出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
642-1 200-1	須恵器 蓋	摘部	摘径4.4 高(1.4)	扁平な環状摘	①良好 ②灰白 ③やや密
642-2 200-2	土師器 甕	口縁部	19.5×-×(7.3)	口縁部外反気味に開き、口唇部丸まり外屈気味。口縁部横撫で。肩部縦篋削り。内面横位篋撫で。	①良好 ②浅黄橙 ③やや粗

K10号土坑出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	残存量	計 測 値	器 形 及 び 成 ・ 調 整 の 特 徴、そ の 他	①焼 成 ②色 調 ③胎 土
643-1 200-1	須 惠 器 椀	㊦	10.4×5.1×4.3	体部丸く内湾する。付高台やや低目。轆轤成形。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや密
643-2 200-2	須 惠 器 椀	高台欠 損	13.3×-×(4.8)	体部丸く内湾して開く。付高台。内面上半横・見込部斜位 篋磨き。轆轤成形。体部回転篋削り。	①酸化・良②鈍い黄橙 ③やや密
643-3 200-3	須 惠 器 椀	㊦口縁 欠 損	-×8.4×(5.2)	腰部丸く張る。付高台やや高く直線的に開く。内面黒色処 理。轆轤成形。体部下半回転篋削り。	①酸化・良好②橙 ③やや密
643-4 200-4	土 師 器 甕	㊦	20.2×-×(5.1)	口縁部外傾して開き、口唇部僅かに内湾気味。口縁部横撫 で。胴上位は横位篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗
643-5 200-5	羽 釜	㊦	20.4×-×(8.6)	銜断面略三角で強く張る。口縁部内湾して内傾。口唇部断 面矩形をなし上端面内斜。口縁・胴部撫で調整。	①酸化・良②浅黄橙 ③やや密

K11号土坑出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	残存量	計 測 値	器 形 及 び 成 ・ 調 整 の 特 徴、そ の 他	①焼 成 ②色 調 ③胎 土
644-1 200-1	須 惠 器 杯	㊦	10.9×5.6×3.1	腰部丸く、口縁外反して開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良②浅黄橙 ③やや密
644-2 200-2	須 惠 器 転用砥石		4.2×4.4×1.3	側面使用。溝状の使用痕顕著。	①良好 ②灰黄 ③やや密
644-3 200-3	石 製 品 砥 石		4.4×3.4×3.2	使用面は2面残存。重76g	粗粒安山岩

4. 溝 跡

K1号溝 (Fig. 645、649～651・PL. 154、200～202)

K区のほぼ中央部を東西走し2横断し東・西とも調査区域外へ延びる。K89号・K140号住居跡と重複するが両者より新しい時期の所産である。西側で現生活道(調査時)のため跡切れ道跡幅を除く検出全長は44.37mである。溝幅は後世削平が比較的及んでいない西側の上端面で約4mを測る。走行方位はおよそN-65°-Eを示す。底面はかなり凹凸があり、中央やや南側は帯状の高まりとなっている。この帯状の高まりは併走する2条の溝とも考えられたが数箇所の土層観察では重複を示してはいない。また底面の傾斜については検出全長で東西端の差が僅か30cm程である。

K2号溝 (Fig. 645、652・PL. 154、202、203)

1号溝の北をほぼ併走する溝である。西側は調査区域外へ延びる。また東端はK140号住居跡と重複し以東は検出されていない。走行方向は1号溝よりやや東へ傾いており合流している可能性がある。なおK140号住居跡より新しい時期の所産である。検出全長約16m、西側上端幅は約1.6mを測る。走行方位はおよそN-75°-Eを示す。

K3号溝 (Fig. 645、653、654・PL. 203、204)

K区西側中央部にあり東西走する。溝西端は完結するが東側は現生活道下に入り、道路を隔てた東側の調査区には確認されていない。検出全長は4.3mを測り、溝幅は東へ向かい僅かに細まって上端部は1.3～0.9mになる。また西端は楕円状に脹らみ1.65mである。走行方位はおよそN-80°-Eを示す。埋土には溝がほぼ埋没し僅かな窪みとなった段階で浅間山降下B軽石層の堆積がある。

K 4号溝 (Fig. 645、655・PL. 204)

K区中央部やや西寄りにあり、東西走る溝である。西側は現生活道にかかるがその延長上には確認されていない。検出全長約5.5m・上端幅0.85~1.1m・深さ30cmを測り、断面は箱堀形状を呈す。走行方位はおよそN-72°-Eを示す。埋土は浅間山降下B軽石を多量に含む砂質暗褐色土を主とする。

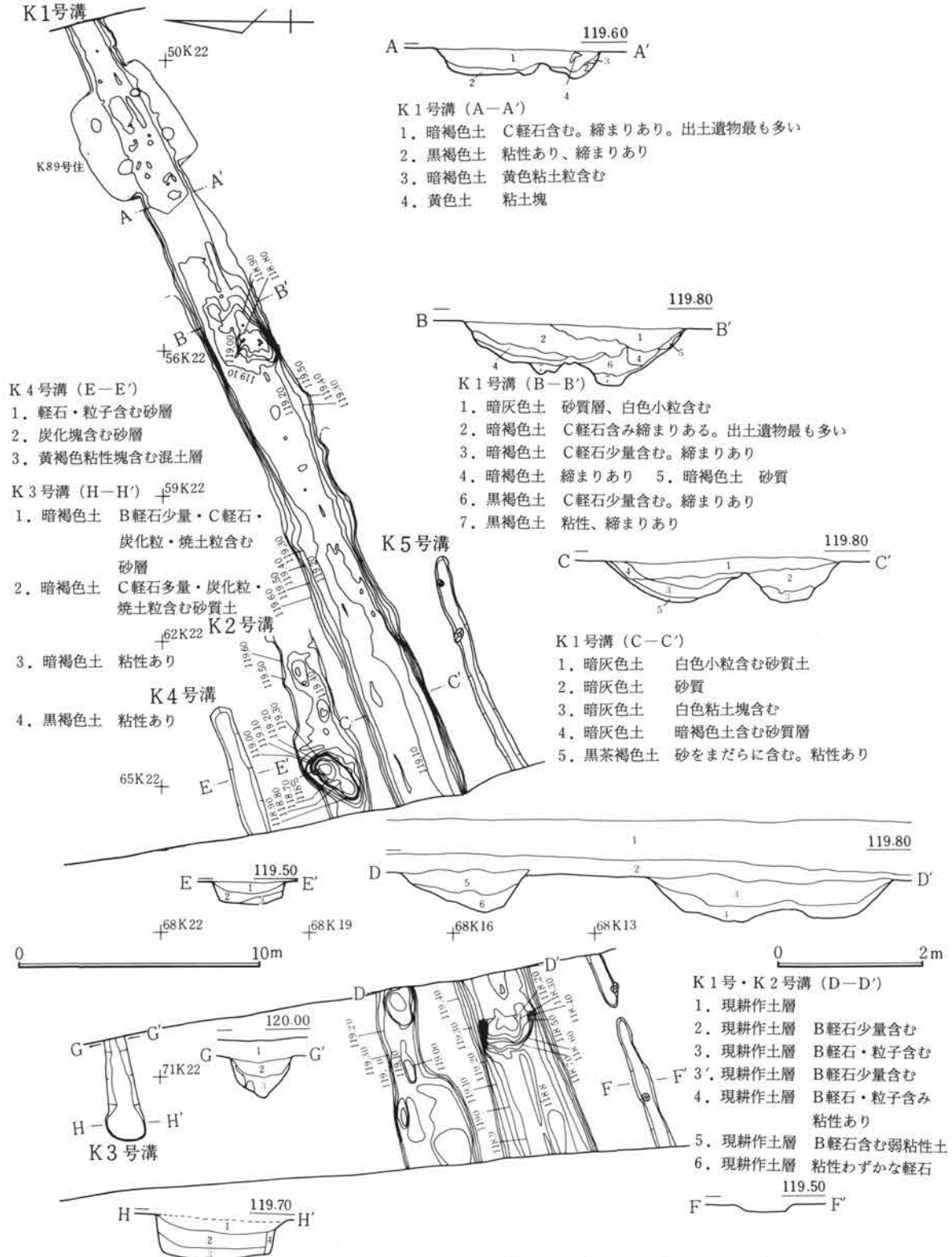


Fig. 645 K区溝 (K 1号・K 2号・K 3号・K 4号・K 5号)

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

K 5号溝 (Fig. 645)

K区中央部西側にあり、1号溝とほぼ併走し、東西走る。西側は調査区域外に延び、中央部は現生活道に入る。検出全長は道幅を含め約25m・上端幅60cm・深さ約10cm測る。断面は箱堀形状を呈する。走行方位はN-77°-Eを示す。当溝の北側には鍛冶工房跡が検出され、これに関連する施設とも考えられたが、生活道を隔てた東側に鍛冶炉は検出されていないところから関連性は薄い。

K区で検出された溝跡は大小合わせて12条である。その走行方位からおよそ3群に分かつことができる。すなわち1. 東西走る群でN-90°-E未満のもの。2. 東西走る群でN-90°-E以上の群。3. 南北走る群である。1群はK1号・K2号・K3号・K4号・K5号。2群はK6号・K7号・K8号。3群はK9号・K10号・K11号・K12号が各々に該当する。1・3は走行方位がまったく異なるが、その位置からK区住居跡の空白域に存在する状況である。1・3とも代表例として1号溝・9号溝があげられ、いずれも古墳時代に属する竪穴住居跡との重複を除きK区居住区を分割する様を呈する。1号溝は南北に、また9号溝は北半を東西に区別するような位置にある。両溝構築の時間的問題や、区割が想定される各々の住居群の変遷など考慮する点が多いが当区における集落構成に大きくかかわっていた可能性が強い。

K 6号溝 (Fig. 646、656・PL. 154、204)

K区調査域の北端にあり、L7号・L8号溝と近接して東西方向に併走している。L92号住居跡と一部重複するがこれより新しい時期の所産である。また東端は攪乱により跡切れる。検出全長約12m・上端幅1m・深さ20cmを測り、断面形状は箱堀形である。走行方位はN-103°-Eを示す。埋土は浅間山降下B軽石を多量に含む暗褐色土が主である。

K 7号溝 (Fig. 646、656・PL. 154、204)

K区調査域の北端にあり、K6号・K8号溝に挟まれ東西方向に併走する。東端は攪乱によって跡切れる。検出全長約10.8m・上端幅約95cmで東・西端は細まる。深さ約30cmを測り断面は箱堀形状を呈する。底面には径20cm・深さ20cm程度の柱痕を思わせるPitが穿たれ、とくに西半部は8個のPitが規則的に配され柵列の可能性もある。走行方位はK6号溝に平行しN-103°-Eを示す。

K 8号溝 (Fig. 646、657、658・PL. 154、204)

K区調査域の北端にあり、K6号・K7号溝と近接し東西方向に併走するが東部で若干南へ折れる。西端は現生活道にかかりその西側では確認されていない。K97号・K109号住居跡と重複しているが、両者より古い時期の所産である。検出全長は約18.2m・上端幅は1.3~1.8m・深さ70cmを測る。走行方位は西側11.2mまでN-99°-Eを、これより東側は南へ折れてN-102°-Eを示す。

K 9号溝 (Fig. 647、659・PL. 205)

K区北半部の中央を南北走る。調査段階では溝の検出範囲の北側で攪乱坑により跡切れ、北端に検出されたK8号溝とは別遺構として扱っていたが、その後攪乱坑の北に溝の痕跡が確認され連続することが判明した。K74号・K81号住居跡と重複し、両者より新しい時期の所産である。検出全長約38m・上端部は良好な部分で約1.5m・深さ30~40cmを測る。断面は箱堀状を呈する。僅かに蛇行するが走行方位はおよそN-5°-Eを示す。

K10号溝 (Fig. 647)

K区調査域の北端にある小規模な溝である。南北走る全長3.5mの溝に対し東側へ1.5mの溝が派生するトの字状を呈す。上端幅は両者とも約35cm、深さは南北走る部分が約20cm、東西走る部分は若干浅く15cm程度である。走行方位は南北走部分がN-8°-W、東西走部分はN-95°-Eを示す。

K11号溝 (Fig. 647、656)

K区中央部を南北走る全長4m55cmの小規模な溝である。溝断面は箱堀形状を呈し最大上端幅60cm、検出面からの深さ20cmを測り、北端はくびれて溝幅は半減する。走行方位はおよそN-8°-Eを示す。埋土は砂質暗褐色で炭化粒・焼土粒が若干認められた。

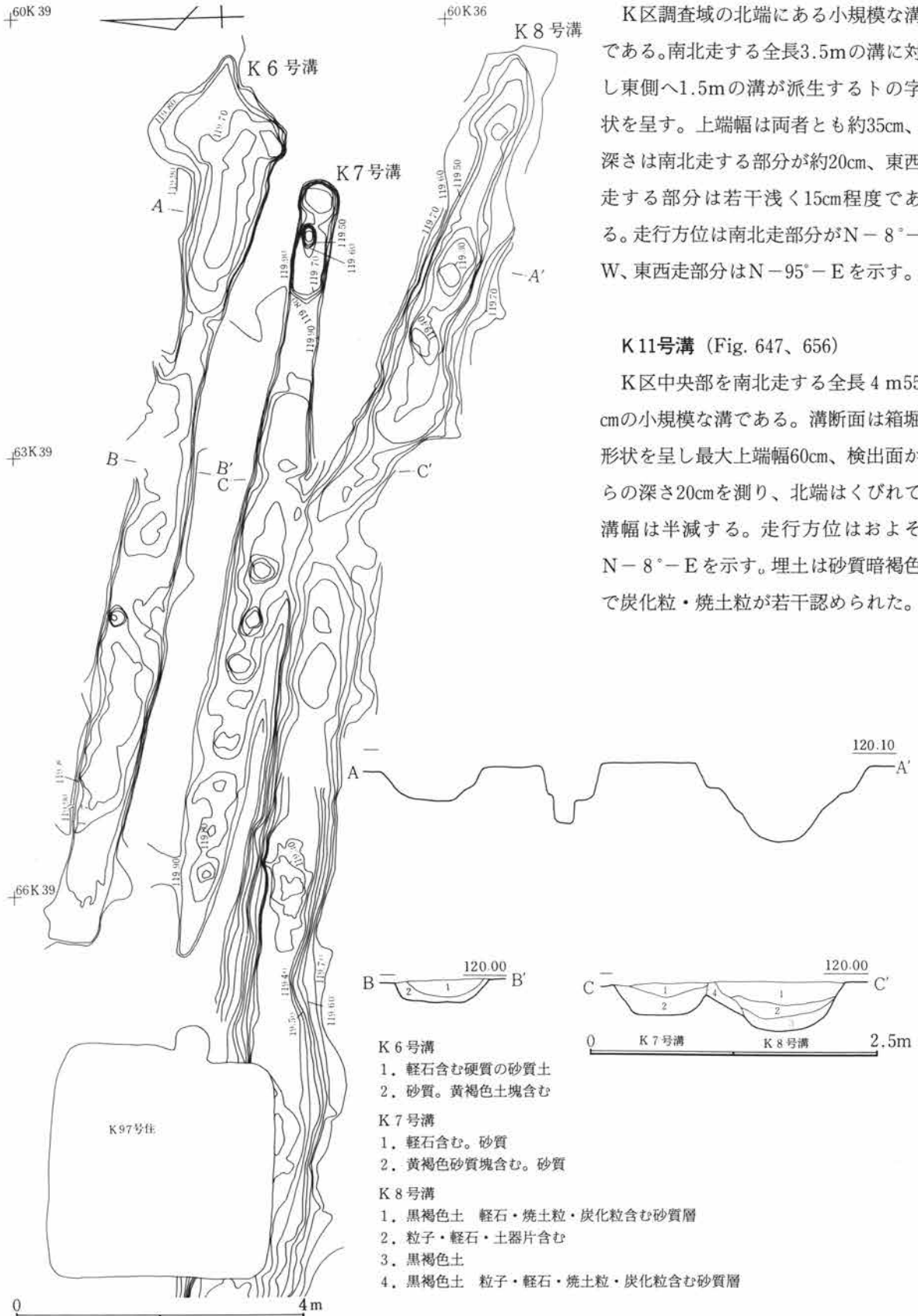


Fig. 646 K区溝 (K6号・K7号・K8号)

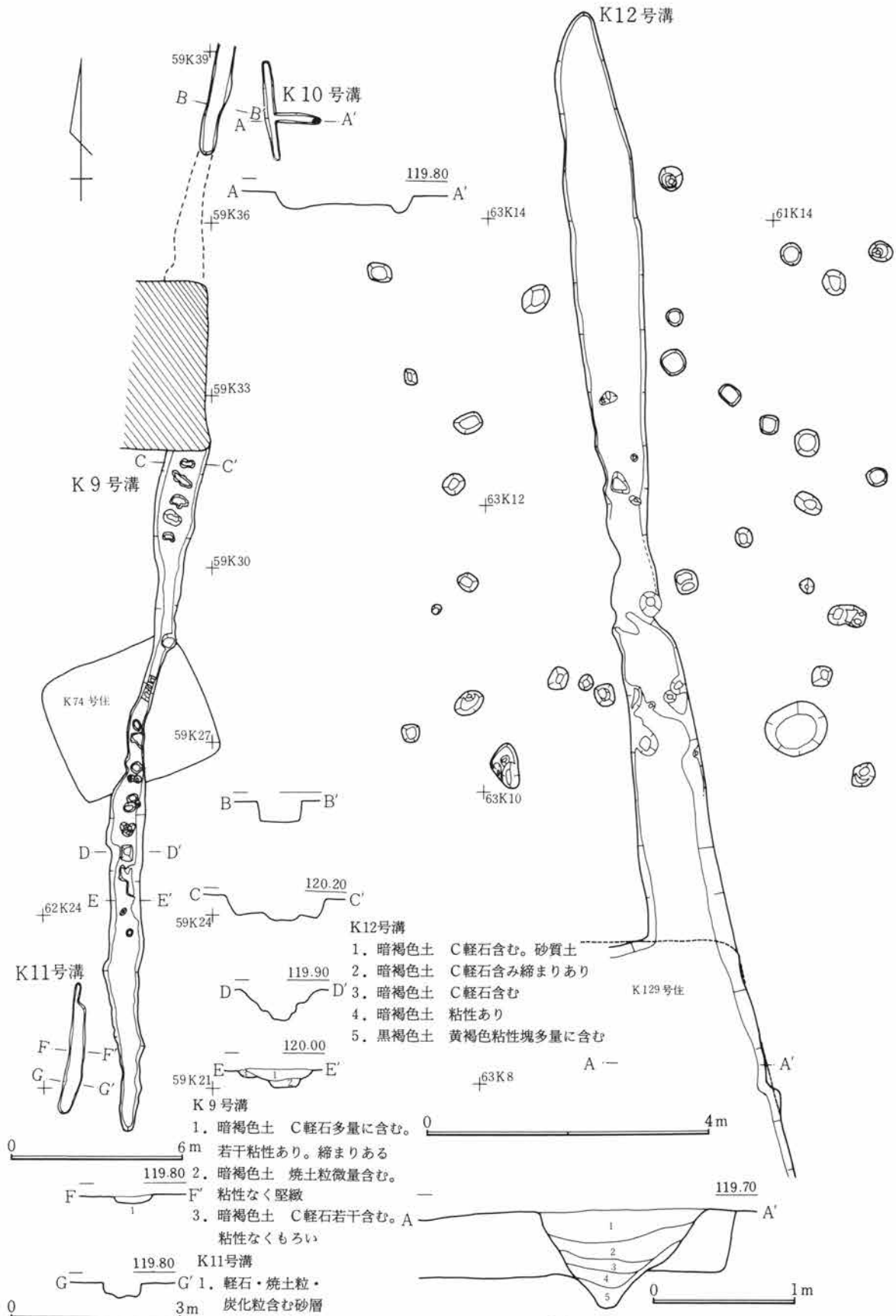


Fig. 647 K区溝 (K9号・K10号・K11号)

Fig. 648 K12号溝

K12号溝 (Fig. 648、660・PL. 205)

K区南部にあり南北走する。K129号・K142号住居跡と重複し前者より新しく後者より古い時期の所産である。南限はK142号住居跡によって不明である。検出及び確認全長は約15cmを測る。溝上端幅は中央部がやや細まるが南側で約1.2mで、深さ70cmの断面形状V字を呈する。走行方位はN-7°-Wを示す。当溝の周辺に多くの Pit 群を検出したが掘立柱建物跡などは想定できず、また相互に規則性を認めることはできなかった。

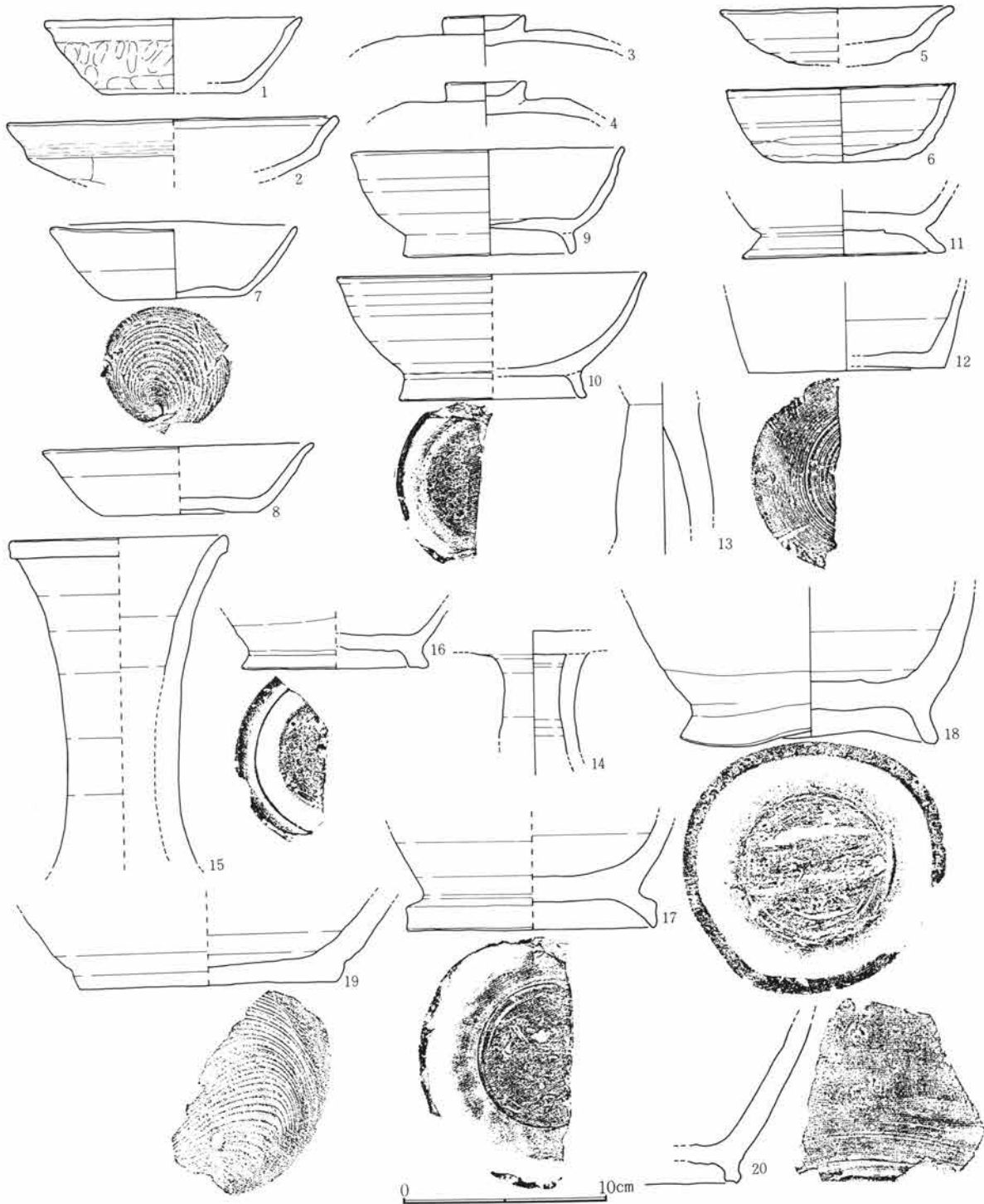


Fig. 649 K1号溝出土遺物(1)

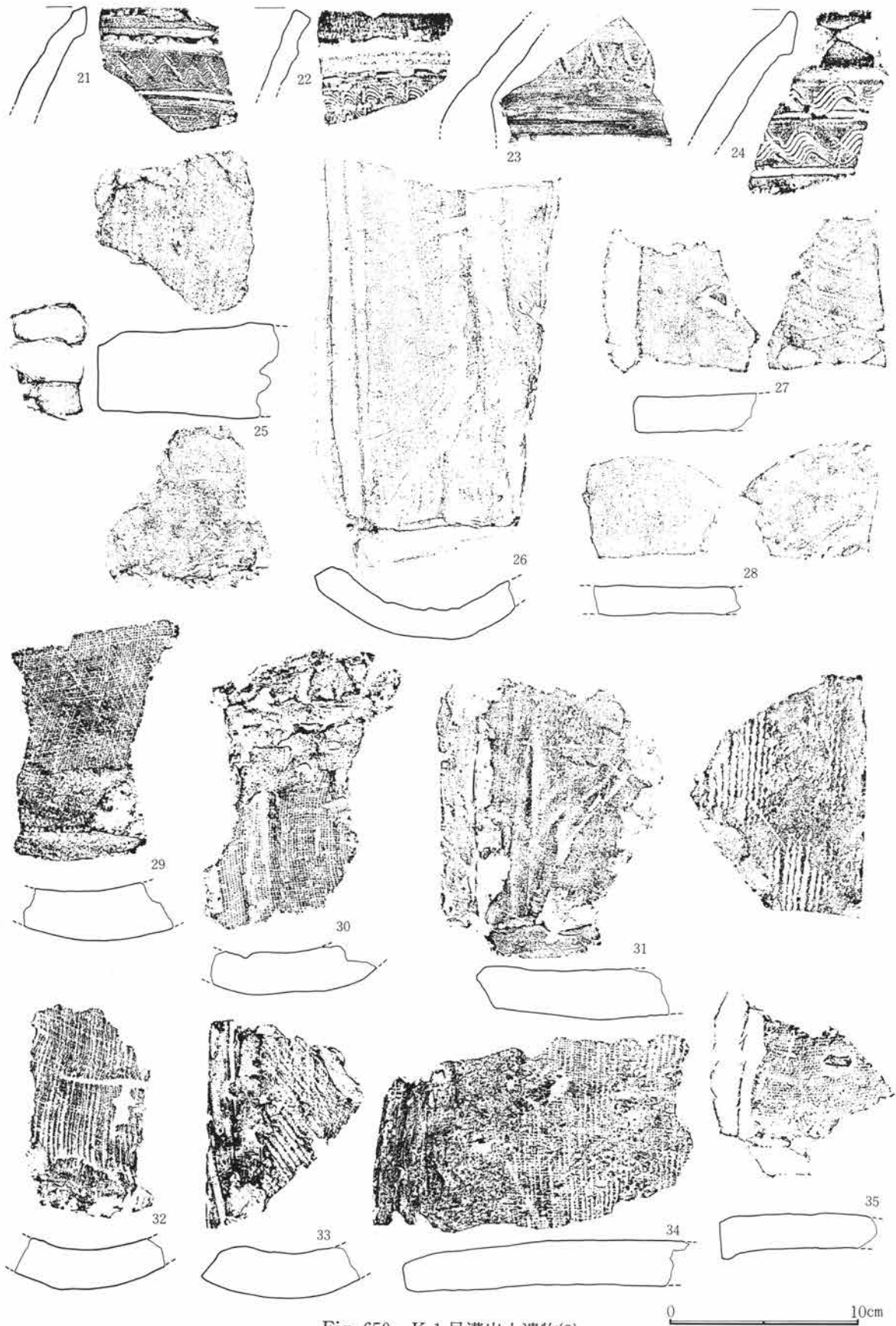


Fig. 650 K 1号溝出土遺物(2)

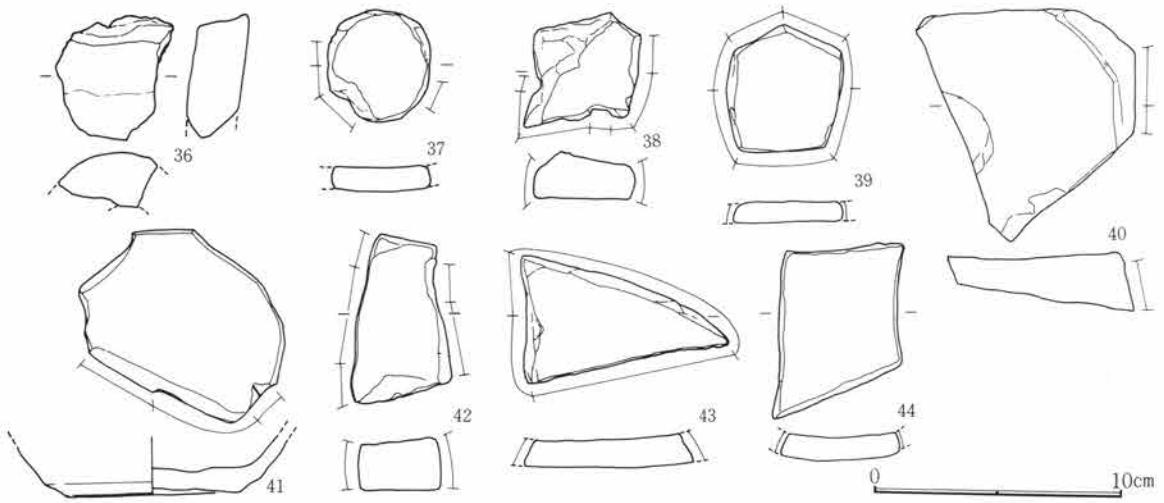


Fig. 651 K 1号溝出土遺物(3)

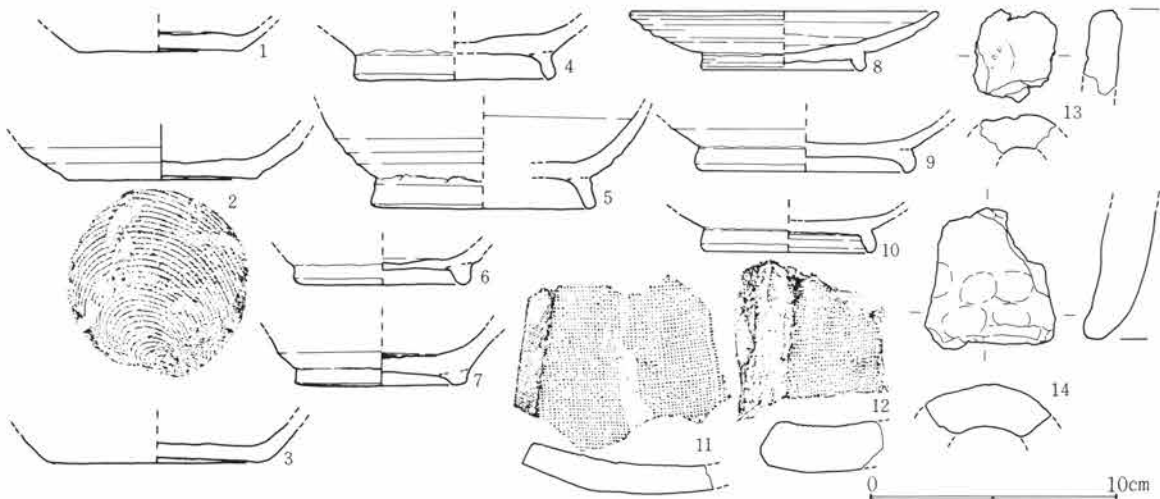


Fig. 652 K 2号溝出土遺物

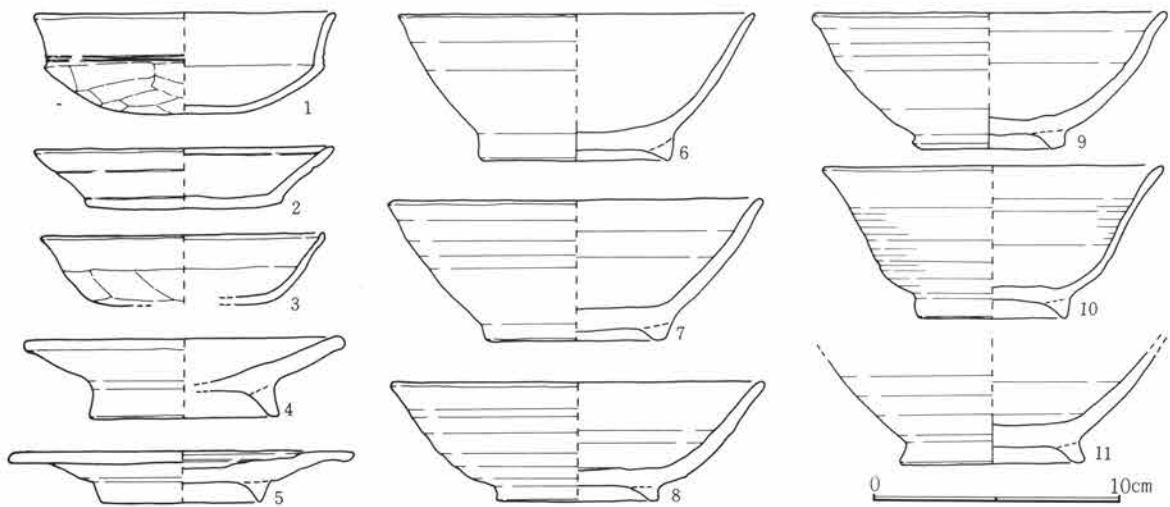


Fig. 653 K 3号溝出土遺物(1)

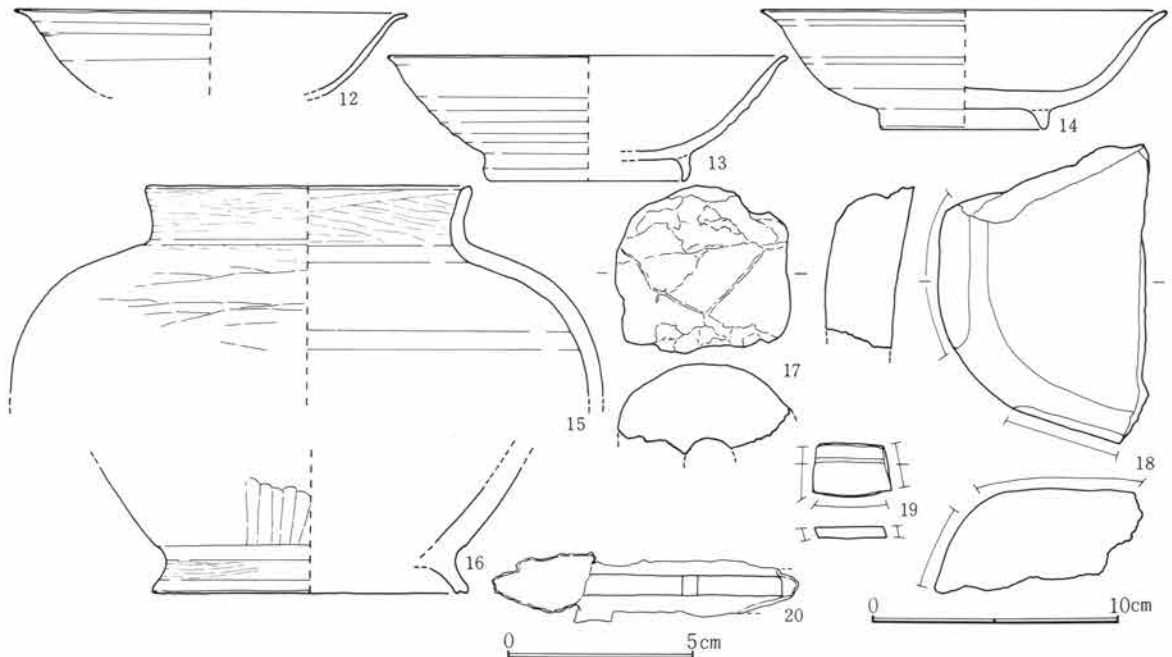


Fig. 654 K 3号溝出土遺物(2)

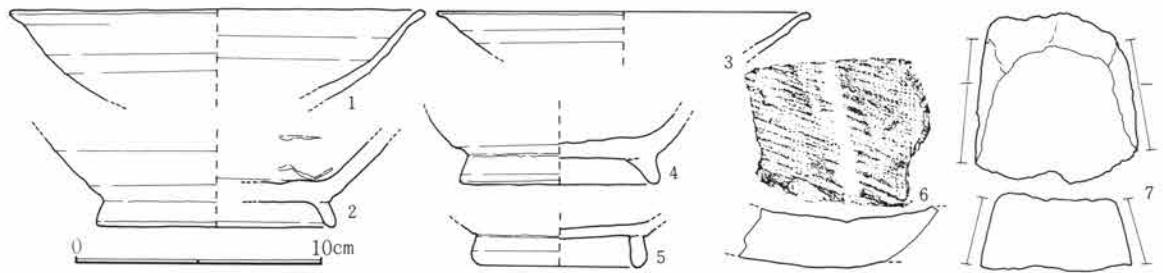


Fig. 655 K 4号溝出土遺物



Fig. 656 K 6号1・K 7号2・K11号溝出土遺物

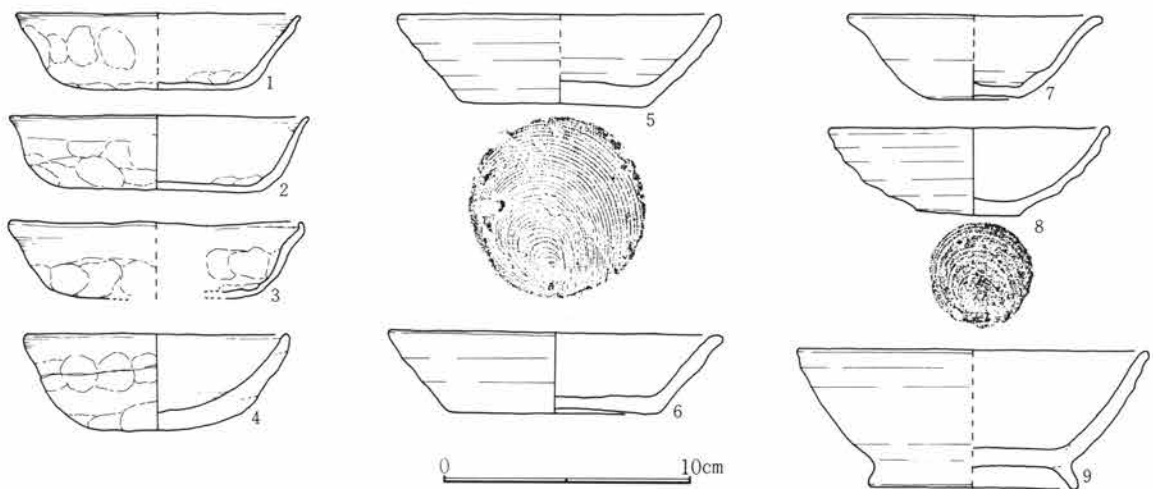


Fig. 657 K 8号溝出土遺物(1)

第5節 K区の遺構と遺物

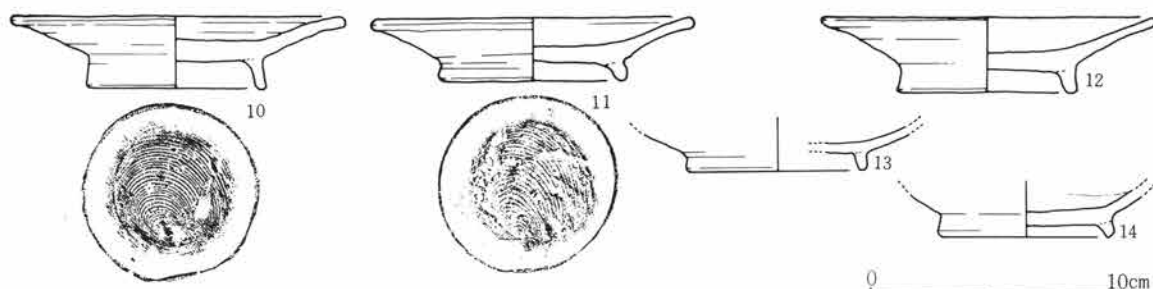


Fig. 658 K 8号溝出土遺物(2)

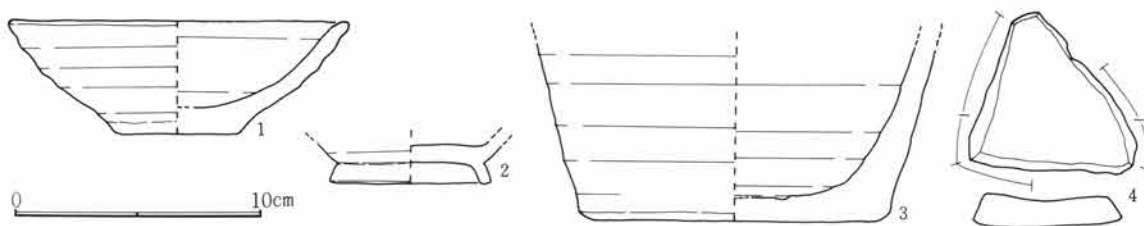


Fig. 659 K 9号溝出土遺物



Fig. 660 K12号溝出土遺物

K 1号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
649-1 200-1	土師器 杯	½	12.4×6.5×(3.6)	体部僅かに丸味。口縁部くびれて外傾。口縁部横撫で。体部指頭痕と粗い撫で。底部不定方向篋削り。	①良好 ②明赤褐 ③やや粗
649-2 200-2	土師器 杯	小片	16.0×-×(2.9)	扁平な底部。口縁部くびれて外反して開く。口縁部横撫で底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
649-3 200-3	須恵器 蓋	天井部	-×-×(1.9) 摘径4.0	環状摘。轆轤成形。天井部回転糸切り後縁辺に回転篋削り。	①良好 ②青灰 ③やや密
649-4 200-4	須恵器 蓋	天井部 小片	-×-×(1.9) 摘径3.9	環状摘。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや粗
649-5 200-5	須恵器 杯	½	11.2×-×(2.7)	腰部くびれて体部中位張る。口縁部外反して開く。轆轤成形。	①軟 ②灰白 ③やや粗
649-6 200-6	須恵器 杯	½	11.0×6.0×13.6	底部から腰部に丸味をもつ。体部内湾気味。轆轤成形。回転篋削り後手持篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
649-7 201-7	須恵器 杯	ほぼ完 形	11.9×6.3×3.7	体部に丸味をもち、口唇部丸まる。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
649-8 201-8	須恵器 杯	¾	13.0×7.5×3.2	腰部にやや丸味。口縁部緩く外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗・黒色粒混る
649-9 201-9	須恵器 碗	½	13.2×8.3×5.0	腰部強く張る。口縁部細まり僅かに外反。付高台やや高く直立気味に立つ。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	残存量	計 測 値	器 形 及 び 成 ・ 調 整 の 特 徴、そ の 他	①焼 成 ②色 調 ③胎 土
649-10 201-10	灰 釉 陶 器 椀	1/4	14.9×9.0×6.0	体部丸味をもち深い。口縁部僅かに外反。高台やや高く丸味をおび外に広がる。内面施釉するが釉飛び著しい。	①良好 ②灰白 ③密
649-11 201-11	須 恵 器 椀	底部1/4	—×9.7×(2.7)	付高台、やや高く大きく開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
649-12 201-12	須 恵 器 瓶	底部1/4	—×9.4×(3.8)	寸胴になるか。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
649-13 201-13	土 師 器 高 杯	脚 部		脚中位僅かに脹らむ。内面縦位しぼり痕顕著。	①良好 ②橙 ③密
649-14 201-14	須 恵 器 脚 付 盤	脚 部	—×—×(6.8)	轆轤成形。盤部の見込部平ら。	①良好 ②灰 ③密
649-15 201-15	須 恵 器 長 頸 瓶	口頸部	10.6×—×(15.6)	胴部との接合部で剥離。頸部上半で外傾して開く。口縁部下顎をもち小さく直立。	①良好 ②灰白 ③やや密
649-16 201-16	須 恵 器 瓶	底部1/4	—×9.0×(3.0)	付高台幅広く断面矩形。畳付沈線状に段差あり。轆轤成形腰部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密
649-17 201-17	須 恵 器 長 頸 瓶	底部1/4	—×12.0×(4.8)	付高台、上端面強く張り側面は直立する。胴部下半は回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや粗・黒色粒多量
649-18 201-18	須 恵 器 底 部	底 部	—×12.3×(7.2)	器肉厚い。高台丸味をもち外側に広がる。腰部横位の粗い篋削り。	①良好 ②明緑灰 ③粗
649-19 201-19	須 恵 器 甕	底部1/4	—×12.4×(4.0)	底部回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗・黒色粒混る
649-20 201-20	須 恵 器 瓶	底部小片	高(7.7)	外面腰部に布目痕あり。	①良好 ②灰 ③やや密
650-21 201-21	須 恵 器 甕	口縁部小片	厚3.0	頸部一条の凹線で区切り、上・下に細線波状文を施す。上段は13条単位。口縁部下顎をもち、内面に凸線巡る。	①良好 ②オリーブ灰 ③密
650-22 201-22	須 恵 器 甕		厚1.0	頸部に一条の凸線。下段に4条単位の波状文施す。口縁部下顎は強く突出する。	①良好 ②鈍い黄褐 ③やや密
650-23 201-23	須 恵 器 甕	頸部小片		胴部との接合部で剥離。不明瞭な波状文施す。	①良好 ②灰 ③やや密・黒色粒混る
650-24 201-24	須 恵 器 甕	口縁部小片	厚1.5	頸部二条の凹線で区切り上段に4条、下段に5条単位の波状文施す。口縁部下顎をなす。	①良好 ②暗青灰 ③やや粗
650-25 201-25	瓦 軒 平 瓦	端 部	厚4.3	三重弧文。下位の弧厚く追加粘土による。凹面強い篋撫で。凸面縄目叩き後撫で。	①良好 ②暗灰黄・灰白 ③やや粗
650-26 201-26	瓦 丸 瓦		厚1.4	凹面布目。輪積痕顕著。凸面撫で。側・縁面篋調整。凹面篋削り。凸面縄目叩き後篋撫で。側面篋調整。	①良好 ②浅黄 ③やや密
650-27 201-27	瓦 平 瓦	端 部	厚1.8	凹面篋削り。凸面縄目叩き後篋撫で。側面篋調整。	①酸化軟 ②橙 ③やや密
650-28 201-28	瓦 平 瓦		厚1.3	凹面細かい布目。凸面縄目叩き。	①良好 ②灰黄褐 ③やや密・白色細粒混
650-29 202-29	瓦 平 瓦		厚2.5	凹面布目。凸面撫で。側・縁面篋調整。	①良好 ②鈍い黄褐 ③やや粗
650-30 202-30	瓦 平 瓦		厚2.0	凹面布目。凸面撫で。側面篋調整。縁辺撫で調整。	①良好 ②黄褐 ③やや密
650-31 202-31	瓦 平 瓦		厚2.2	凹面撫で。凸面縄目叩き。側面篋調整。	①酸化軟 ②淡黄 ③やや密
650-32 202-32	瓦 平 瓦		厚2.0	凹面細かい布目。凸面篋撫で。側面篋調整。	①良好 ②緑灰 ③密・縞状
650-33 202-33	瓦 平 瓦		厚2.3	凹面布目。凸面篋撫で。側・縁面篋調整。	①良好 ②鈍い橙 ③密
650-34 202-34	瓦 平 瓦		厚2.2	凹面布目及び篋撫で。凸面縄目叩き後撫で。	①良好 ②灰白 ③やや密
650-35 202-35	瓦 平 瓦		厚1.8	凹面布目。凸面篋削り。側・縁面篋調整。	①良好 ②灰白 ③密
651-36 202-36	土 製 品 羽 口		長4.8	溶解物付着。	①良好 ②明黄褐 ③粗
651-37 202-37	須 恵 器 円 板 状		4.2×4.1×1.0	須恵器甕片の縁辺を打ち抜き、摩滅調整を加える。	①良好 ②暗緑灰 ③粗
651-38 202-38	須 恵 器 転 用 砥 石		4.5×4.6×1.8	3側面使用。側面に0.5~0.8cm幅の溝状使用痕3ヶ所あり甕片	①良好 ②暗青灰 ③やや密

第5節 K区の遺構と遺物

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
651-39 202-39	須恵器 転用砥石		5.0×4.7×0.8	5側面使用。甃片。	①良好 ②灰白 ③密
651-40 202-40	須恵器 転用砥石		9.1×8.7×2.2	甃頸部の接合面が光沢をもち滑らか。砥石に転用かは不明	①良好 ②青灰 ③やや密
651-41 202-41	須恵器 転用砥石	底部	—×6.8×(2.2)	轆轤成形。回転糸切り。杯底部。	①良好 ②灰 ③やや密
651-42 202-42	須恵器 転用砥石		6.7×4.0×2.0	2側面使用。甃片。	①良好 ②褐灰 ③やや密
651-43 202-43	須恵器 転用砥石		5.0×8.3×1.1	3側面使用。甃片。	①良好 ②オリーブ灰 ③やや密
651-44 202-44	須恵器 転用砥石		6.9×5.1×0.9	4側面使用。甃片。	①良好 ②灰 ③やや粗

K 2号溝出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
652-1 202-1	須恵器 杯	底部 $\frac{1}{2}$	—×6.6×(1.0)	轆轤成形。右回転糸切り。火瘡痕あり。	①良好 ②灰白 ③やや密
652-2 202-2	須恵器 杯	上半欠損	—×7.6×(1.8)	轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
652-3 202-3	須恵器 杯	$\frac{1}{4}$	—×8.2×(1.6)	底径大。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
652-4 202-4	須恵器 椀	底部 $\frac{1}{2}$	—×8.0×(2.3)	付高台。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密黒色細粒多量
652-5 202-5	須恵器 椀	底部 $\frac{1}{2}$	—×9.0×(4.0)	高目の付高台。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密
652-6 202-6	須恵器 椀	底部	—×7.1×(1.4)	付高台、低く矩形を呈す。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
652-7 202-7	須恵器 椀	上半欠損	—×6.8×(2.4)	付高台、低く幅広、矩形を呈す。轆轤成形。回転糸切り。底部に墨痕か煤付着。	①良好 ②灰 ③やや密
652-8 202-8	灰釉陶器 皿	$\frac{1}{2}$	12.4×6.6×2.3	体部僅かに内湾して開き、口唇部丸まる。高台低く断面丸い。腰、底部回転篋削り。刷毛塗り施釉。	①良好 ②灰白 ③やや密
652-9 202-9	灰釉陶器 椀	底部	—×8.9×(2.1)	丸味のある三ヶ月高台、幅広。底部回転篋削り後撫で。	①良好 ②灰白 ③密
652-10 203-10	灰釉陶器 椀	底部	—×7.0×(1.7)	高台丸味のある三ヶ月形。底部回転篋削り。刷毛塗り施釉。	①良好 ②灰黄 ③密
652-11 203-11	瓦 平瓦	小片	厚1.1	凹面細布目。凸面撫で。側面篋調整。	①酸化 ②鈍い橙 ③密
652-12 203-12	瓦 平瓦	小片	厚1.8	凹面布目。凸面篋撫で。側面篋調整。	①やや軟 ②灰白 ③やや粗
652-13 203-13	土製品 羽口	小片	長3.6 径5.0 孔径2.0	先端部小片。溶解。	①酸化 ②緑黒 ③やや粗
652-14 203-14	土製品 羽口	小片	長5.6径7.5 孔径3.5	基部小片。指頭成形痕。	①酸化 ②鈍い黄橙 ③やや粗・黒色輝粒

K 3号溝出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
653-1 203-1	土師器 杯	$\frac{1}{2}$	12.0×—×4.0	丸く深目の底部から稜をなして口縁部外反気味に開く。口縁部横撫で。底部不定方向篋削り。	①良好 ②橙 ③密
653-2 203-2	土師器 杯	$\frac{1}{4}$	12.0×7.9×2.4	極めて扁平な底部から稜をなして口縁部は直線的に大きく開く。口縁部横撫で。底部不定方向篋削り。	①良好 ②浅黄橙 ③やや粗
653-3 203-3	土師器 杯	$\frac{1}{2}$	11.3×—×(2.8)	平底気味。腰部丸味をもち体部外反気味。口唇部丸まり小さく内屈。口縁部横撫で。体部横篋削り。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	残存量	計 測 値	器 形 及 び 成 ・ 調 整 の 特 徴、そ の 他	①焼 成 ②色 調 ③胎 土
653-4 203-4	須 惠 器 皿	1/2	12.8×7.6×3.1	器肉厚いが見込部極めて薄い。体部短かく直線的に大きく開く。付高台高く幅広い矩形で強く張る。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③やや粗
653-5 203-5	須 惠 器 皿	1/2	13.7×6.4×2.0	体部水平に近く外反して開く。付高台断面三角。轆轤成形 回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
653-6 203-6	須 惠 器 椀	1/2	14.2×7.6×5.8	体部内湾気味に立ち、口縁部緩く外反。付高台、断面幅広 な三角形。轆轤成形。右回転糸切り。見込み・底部に重焼	①酸化気味 ②灰褐 ③やや粗砂粒混る。
653-7 203-7	須 惠 器 椀	完 形	15.0×7.2×5.6	体部中位で張る。口縁部弱く外傾。付高台低く断面矩形。 轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味軟 ②灰褐 ③やや密
653-8 203-8	須 惠 器 椀		15.0×6.4×4.7	体部丸く大きく開き轆轤目強い。口縁部緩く外反。付高台、 低く矩形。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
653-9 203-9	須 惠 器 椀	1/2	14.1×6.0×5.4	体部丸味をもち、口縁部緩く外反して開く。付高台、幅広 で矩形。見込み部・底部に重ね焼痕。轆轤成形。回転糸切	①良好 ②灰白 ③やや粗砂粒混る。
653-10 203-10	須 惠 器 椀	2/3	13.6×6.0×6.0	腰部張り、体部深く外反して開く。内外面轆轤目強い。付 高台断面略三角。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
653-11 203-11	須 惠 器 椀	1/2	—×7.4×(4.1)	体部内湾気味。付高台断面矩形。轆轤成形。回転糸切り。 底部に「三」墨書あり。	①良好 ②灰白 ③やや密
654-12 203-12	灰 釉 陶 器 椀	小 片	15.6×—×(3.3)	器肉薄い。体部丸味をもち、口唇部強く外反して水平に折 れる。	①良好 ②灰白 ③密
654-13 203-13	灰 釉 陶 器 椀	1/4	16.0×8.3×5.0	体部やや丸味をもち浅目。口唇部外屈。高台やや高く三ケ 月型、腰部回転篋削り。刷毛塗り施釉。焼成不完全。	①軟 ②灰白 ③密
654-14 203-14	灰 釉 陶 器 椀	1/2	16.2×6.8×4.7	体部丸く張り浅目。口縁部大きく外反して開く。高台低く 断面丸い。底・腰部回転篋削り・施釉内面、見込摩滅著し	①良好 ②灰白 ③やや粗
654-15 203-15	須 惠 器 短 頸 壺	口頸部 1/4	13.0×—×(8.3)	肩部丸く張る。口頸部直立気味。口唇部丸い。内外面黒色 処理、口頸部内外面・胴部外面横・斜位篋磨き。16と同一	①やや軟 ②灰白 ③密
654-16 203-16	須 惠 器 短 頸 壺	底 部	—×12.6×(5.0)	高台矩形を呈し外に張る。内外面黒色処理。外面横位篋磨 き。15と同一個体。	①やや軟 ②灰白 ③密
654-17 203-17	土 製 品 羽 口	先端部	長6.6径(7.3) 孔径(2.0)	先端部溶解。胎土中に植物の混入多い。	①良好 ②鈍い橙 ③粗
654-18 204-18	石 製 品 砥 石 ?		長11.8幅8.3厚4.1	平坦面及び側面に著しい摩滅痕あり。	粗粒安山岩
654-19 204-19	須 惠 器 転 用 砥 石		2.1×3.1×0.4	3側面使用。瓶片。	①良好 ②灰 ③密
654-20 204-20	鉄 器 鉄 鏃 ?		長(8.0)	平根式鉄鏃か。	

K 4号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	残存量	計 測 値	器 形 及 び 成 ・ 調 整 の 特 徴、そ の 他	①焼 成 ②色 調 ③胎 土
655-1 204-1	須 惠 器 椀	口縁部 1/2	16.6×—×(3.6)	器肉薄く体部丸味をもって開く。口縁部大きく外反。	①やや軟 ②灰 ③密
655-2 204-2	須 惠 器 椀	底部1/2	—×9.5×(3.5)	付高台、やや高目。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③密・縞状
655-3 204-3	灰 釉 陶 器 椀	口縁部 小 片	14.9×—×(1.7)	口唇部丸く、強く外反。刷毛塗り施釉。	①良好 ②灰白 ③やや密
655-4 204-4	須 惠 器 椀	底 部	—×8.0×(2.8)	付高台、やや高く断面丸い。轆轤成形。焼き上がり甘い。	①良好 ②灰白 ③やや粗・砂質
655-5 204-5	灰 釉 陶 器 椀	底部1/2	—×7.0×(1.9)	高台高く断面丸く厚手。見込部に重ね焼痕。	①良好 ②灰白 ③密
655-6 204-6	瓦 平 瓦		厚2.0	凹面布目後篋?撫でか。模骨痕あり。凸面縄目。	①良好 ②灰白 ③やや密
655-7 204-7	石 砥 石 ?		6.8×6.5×3.1	部分的に摩滅の痕跡あり。重172g	輝石安山岩(粗粒)

K 6号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	残存量	計 測 値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
656-1 204-1	灰釉陶器 椀	底部小片	-×8.0×(1.5)	高台丸味のある三ヶ月形	①良好 ②灰白 ③密

K 7号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	残存量	計 測 値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
656-2 204-2	須恵器 蓋	体部	-×-×(2.1)	扁平。内面に口縁部より突出するかえり。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密

K 11号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	残存量	計 測 値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
656-3 204-3	須恵器 椀	底部	-×7.0×(1.7)	付高台。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密

K 8号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	残存量	計 測 値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
657-1 204-1	土師器 杯	¼	11.4×-×3.0	器肉薄い。平底気味の底部。腰部丸味をもち体部は緩く波打つ。口縁部横撫で。体部外面見込部指頭痕。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗
657-2 204-2	土師器 杯	¼	12.2×-×3.0	器肉薄い。平底で体部下半に丸味。上半外反気味。口縁部横撫で。体部外面・底部強い篋削り。見込部指頭痕。	①良好 ②橙 ③やや粗
657-3 204-3	土師器 杯	⅓	12.0×-×(3.0)	器肉薄く平底気味。体部波打って開き口唇部丸まり内屈。口縁部横撫で。体部内外面・見込部指頭痕。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗
657-4 204-4	土師器 杯	ほぼ完形	10.7×-×3.8	器肉厚い。丸底気味。体部内湾し口唇部丸い。3段巻き上げ痕。口縁部横撫で。体部指頭痕。腰から底部粗い篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
657-5 204-5	須恵器 杯	⅓	13.0×7.2×3.5	器肉厚い。底径大きく体部直線的に外傾。轆轤成形。右回転糸切り。口唇部に煤状痕。外面黒灰に吸炭。	①良好 ②灰 ③やや密
657-6 204-6	須恵器 杯	⅓	13.5×8.5×3.2	器肉厚い。底径大きく体部直線的にやや強く外傾。口唇部丸く外反。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
657-7 204-7	須恵器 杯	⅓	10.2×4.0×3.3	底径小さく腰部に丸味をもち上半は外反して開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味・良好 ②灰白 ③粗
657-8 204-8	須恵器 杯	⅓	11.4×4.2×3.5	底径小さく体部丸味をもち内湾気味に開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化・良好 ②橙 ③やや密
657-9 204-9	須恵器 椀	⅓	14.0×8.4×5.5	体部深く丸く内湾気味に開く。付高台、やや高くハの字状に立つ。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密・黒色粒混る
658-10 204-10	須恵器 皿	⅓	13.4×7.2×2.8	体部直線的に大きく開き口縁部小さく外反。付高台、高く直線的に立つ。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
658-11 204-11	須恵器 皿	⅓	13.0×7.5×2.5	体部外反気味に大きく開く。口唇部丸い。付高台。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
658-12 204-12	須恵器 皿	ほぼ完形	13.4×7.2×3.0	体部直線的に大きく開く。付高台、やや高く外反して直立気味。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密・黒色粗粒混
658-13 204-13	緑釉陶器 皿		-×7.2×(1.5)	器肉薄い。腰部・底部回転篋調整。全面施釉、釉調深緑色。内面篋磨き、見込部・底部にトチン痕。	①良好 ②暗灰 ③密
658-14 204-14	灰釉陶器 椀	底部⅓	-×7.0×1.7	見込部弱く凹み内面施釉。底部回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③密

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

K 9号溝出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
659-1 205-1	須恵器 椀	1/4	13.6×5.0×4.5	底部極めて厚く突出する。体部丸味をもち内湾気味に開く 全体に器肉厚い。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化軟 ②浅黄橙 ③密
659-2 205-2	須恵器 椀	底部	-×6.4×(1.7)	付高台、断面明瞭な矩形を呈す。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③密
659-3 205-3	須恵器 甕?	底部1/4	-×12.4×(7.0)	胴部直線的。底部不定方向・腰部横位篋削り。	①良好 ②灰 ③やや粗
659-4 205-4	須恵器 転用砥石	小片	6.3×6.6×1.1	甕片転用。三側面使用。	①良好 ②灰 ③密

K 12号溝出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
660-1 205-1	灰釉陶器 皿	1/4	18.0×-×3.4	内面明瞭な段をなす段皿。体部外反気味に大きく開く。内 面施釉	①良好 ②灰白 ③やや密
660-2 205-2	須恵器 椀	底部	-×-×1.6	轆轤成形。右回転糸切り。付高台剥離。	①良好 ②灰白 ③やや密・黒色粒混る
660-3 205-3	土師器 甕	1/4下半 欠損	13.7×-×12.0	胴部下脹れを呈し、口縁部短かく直立後小さく外傾する。	①良好 ②橙 ③やや粗

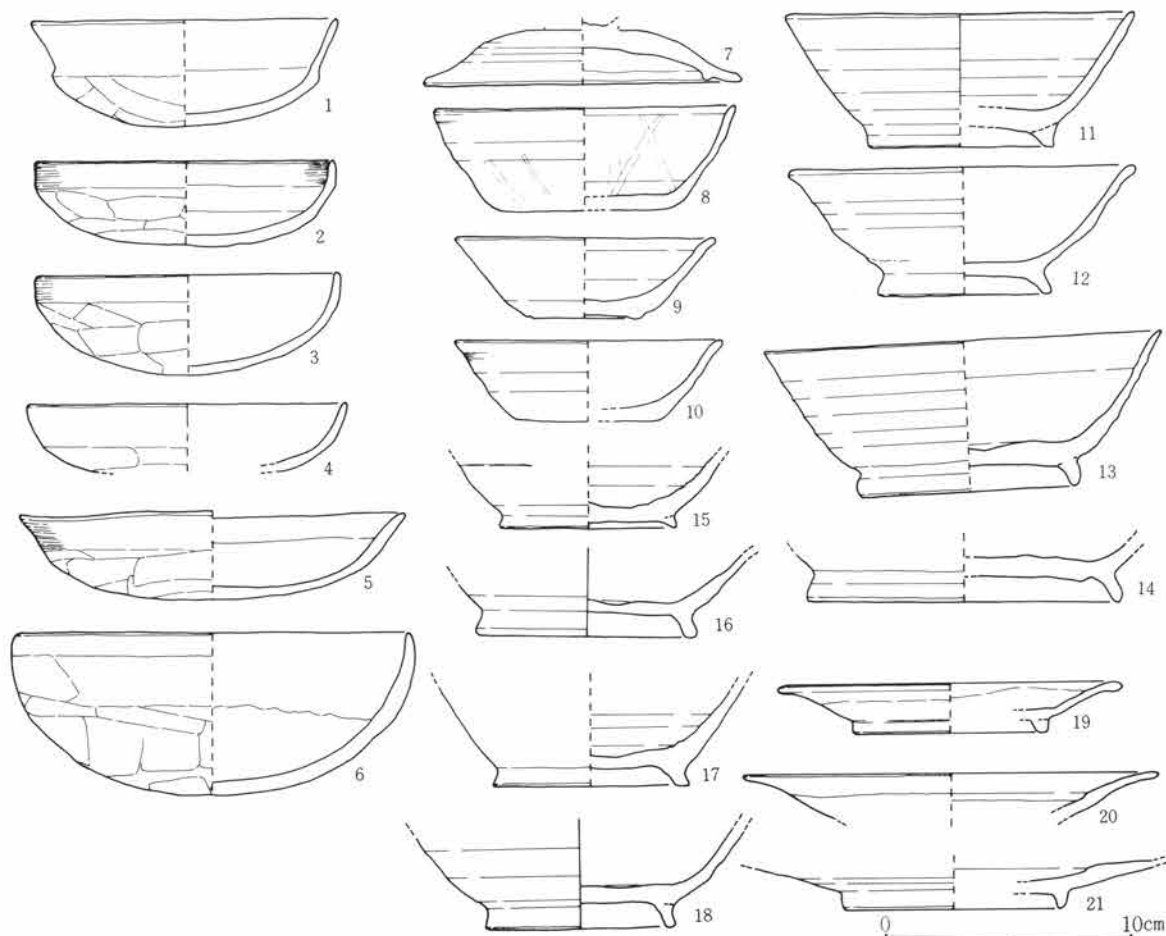


Fig. 661 K区出土遺物(1)

第5節 K区の遺構と遺物

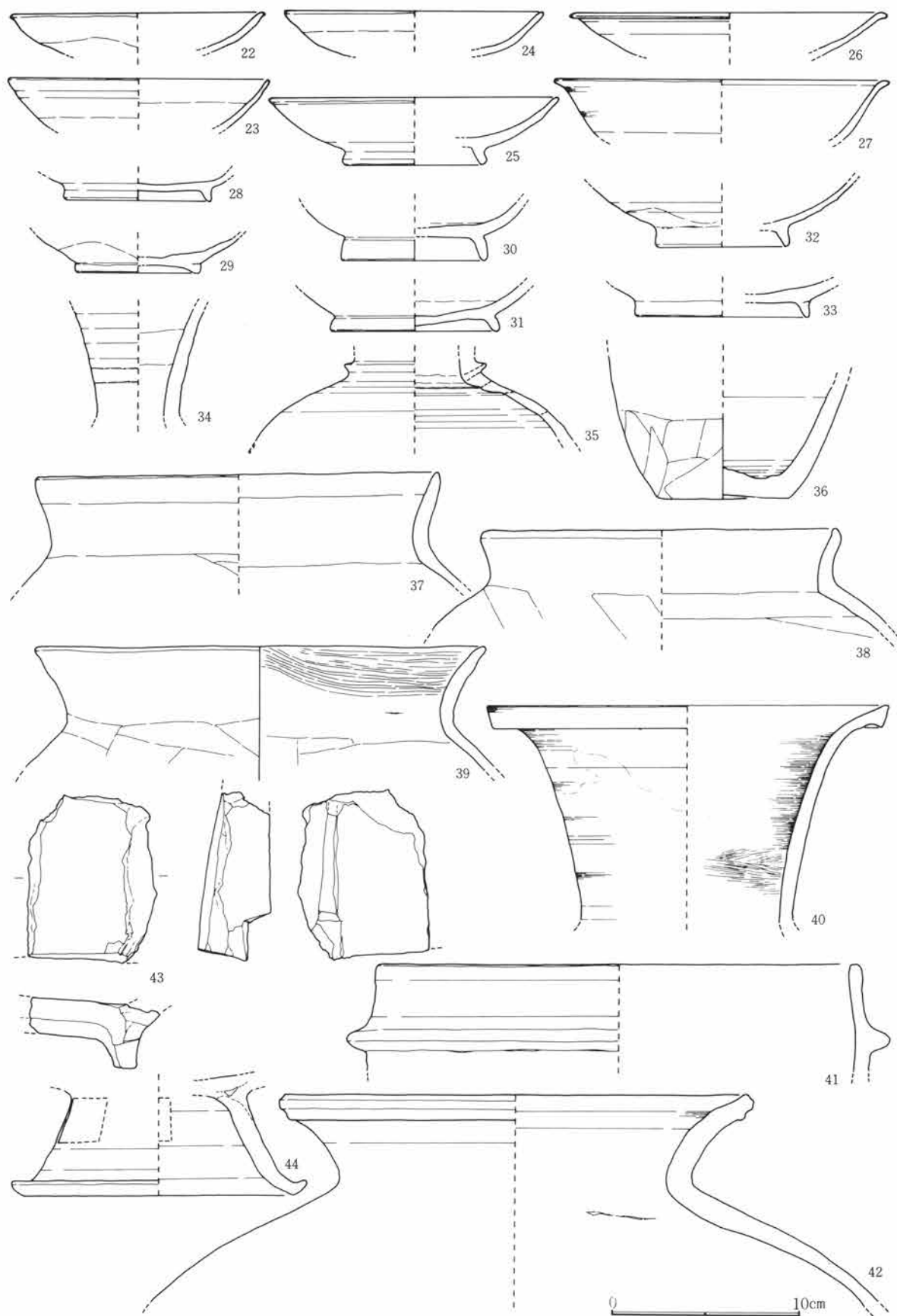


Fig. 662 K区出土遺物(2)

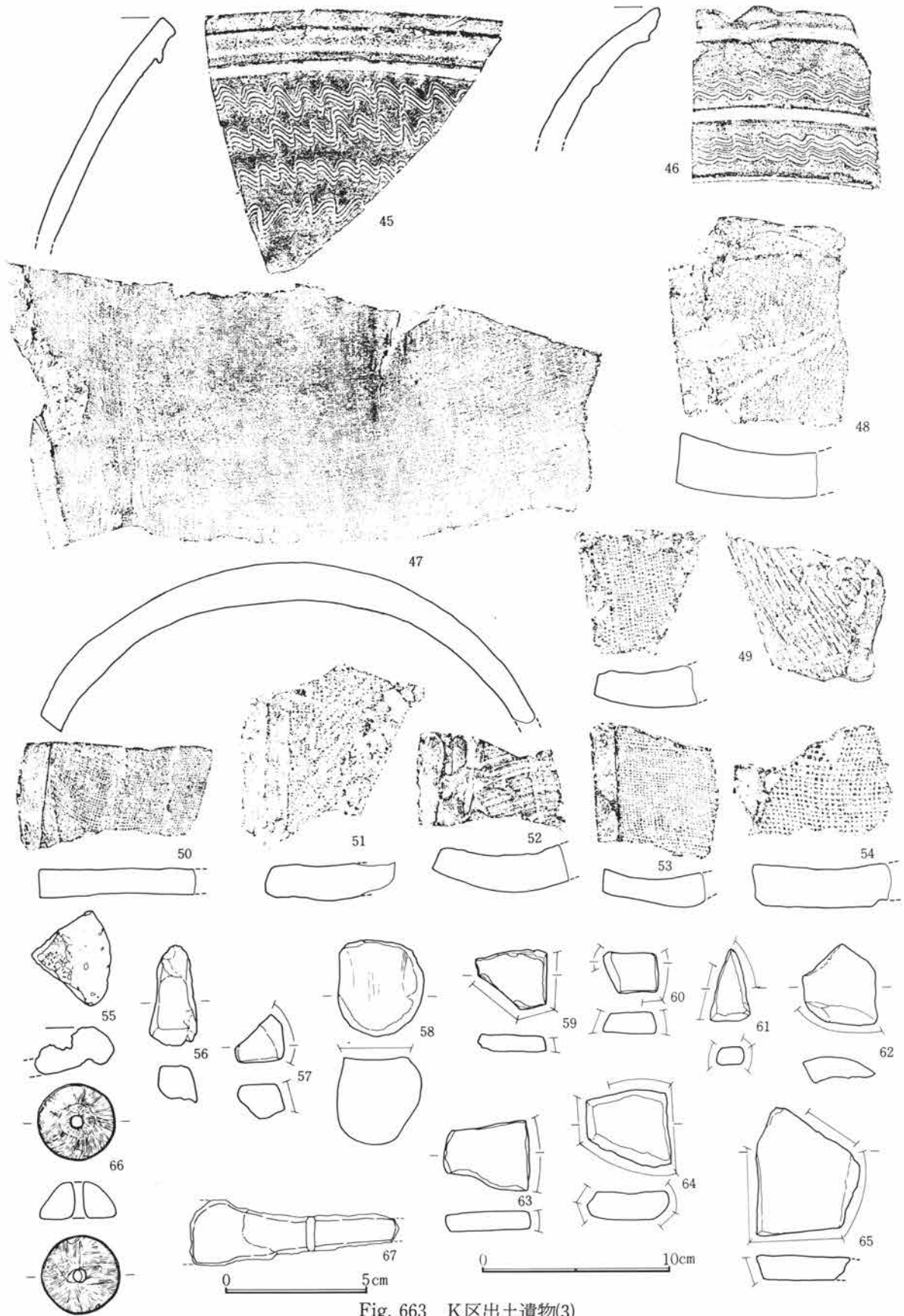


Fig. 663 K区出土遺物(3)

K区出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
661-1 205-1	土師器 杯	ほぼ完 形	12.2×-×4.2	深目の丸底から丸味のある段をなし口縁部直線的に外傾。口縁部横撫、底部不定方向篋削り。	①良好 ②橙 ③密
661-2 205-2	土師器 杯	1/6	12.0×-×3.3	丸底の底部から内湾気味に立み上がり、口縁部直立する。口縁部横撫。底部不定方向篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
661-3 205-3	土師器 杯	1/6	12.2×-×4.0	丸味の強い底部から口縁部は直立する。口縁部横撫で。底部不定方向篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
661-4 205-4	土師器 杯	小片	12.8×-×(2.8)	扁平な丸底か。口縁部僅かに外傾。口縁部横撫で。底部不定方向篋削り。	①良好 ②鈍い赤褐 ③やや密
661-5 205-5	土師器 杯	1/6	15.4×-×3.5	扁平で丸味のある底部、僅かにくびれて口縁部外反気味に開く。口縁部横撫で。底部不定方向篋削り。	①良好 ②赤橙 ③やや密
661-6 205-6	土師器 鉢	1/2	15.8×-×6.4	底部球形を呈し深い。口縁部内湾気味に直立。口縁部横撫で。底部不定方向篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗
661-7 205-7	須恵器 蓋	1/6	12.8×-×2.4	環状摺か。天井部丸味をもつ。内面に断面丸いかえり付く轆轤成形、天井部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密
661-8 205-8	須恵器 杯	1/4	12.0×7.0×4.1	体部やや深く内湾気味に開く。内外面に火禰あり。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
661-9 205-9	須恵器 杯	1/6	10.5×4.9×3.2	底径小さく腰部やや丸味をもつ。体部直線的に外傾。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 ②鈍い黄橙 ③やや密
661-10 205-10	須恵器 杯	1/4	10.7×6.8×3.2	体部直線的に開き、口縁部緩く外反。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化良好 ②橙 ③やや粗
661-11 205-11	須恵器 碗	1/2	13.9×7.4×5.3	腰部に張りなく、体部直線的。付高台、断面矩形をなし、低く直立する。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密・小石混る
661-12 205-12	須恵器 碗	1/2	13.8×6.8×5.1	体部中位張り、口縁部外反して開く。付高台、断面矩形をなし強く外に張る。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗
661-13 205-13	須恵器 碗	1/2	15.8×8.9×6.0	腰部僅かに張り、体部直線的に開く。付高台、断面丸く、内湾気味に立つ。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②緑灰 ③やや粗・砂粒混る
661-14 205-14	須恵器 盤		-×12.6×(2.3)	高台付盤か。付高台、やや高く断面丸く強く外へ張る。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②緑灰 ③やや密
661-15 205-15	須恵器 碗	上半欠 損	-×7.1×(2.7)	体部丸味をもつ。付高台、極めて低く断面三角。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③粗
661-16 206-16	須恵器 碗	上半欠 損	-×8.6×(3.3)	腰部小さく張る。付高台、断面やや丸く強く外に張る。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
661-17 206-17	須恵器 瓶?		-×7.7×(3.9)	内面の調整粗く瓶と思われる。付高台、断面矩形を呈し、低く強く外に張る。腰部・底部粗い回転篋削り。	①良好 ②暗青灰 ③やや密
661-18 206-18	須恵器 碗	上半欠 損	-×7.6×(3.9)	腰部に丸味をもつ。付高台、断面矩形を呈し外に張る。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
661-19 206-19	灰釉陶器 段皿		13.7×7.8×2.0	見込部に段をなし体部外反して大きく開く。口唇部やや肥厚し丸い。高台低く断面丸い。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③やや密
661-20 206-20	灰釉陶器 皿	底部	16.6×-×(1.8)	見込部に段をなし体部外反して大きく開く。漬け掛け施釉	①良好 ②灰白 ③やや密
661-21 206-21	灰釉陶器 段皿	底部	-×8.6×(1.9)	見込部に強い段をなす。体部直線的。高台内湾気味に立つ弱い三ヶ月、見込部に重ね焼き痕。	①良好 ②灰 ③やや粗
662-22 206-22	灰釉陶器 皿	口縁部	13.7×-×(2.1)	体部丸味をもつ。口唇部小さく外屈。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③密
662-23 206-23	灰釉陶器 碗		13.7×-×(2.7)	体部丸味をもち内湾して開く。口縁部僅かに外反。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③やや密
662-24 206-24	灰釉陶器 皿	口縁部	13.5×-×(2.3)	体部丸味をもつ。口縁部緩くくびれて内湾気味に開く。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③密
662-25 206-25	灰釉陶器 皿		15.3×7.5×3.5	体部僅かに丸味をもち開く。口唇部丸まり小さく外屈。高台丸く幅広。漬け掛け施釉?	①良好 ②灰白 ③やや密
662-26 206-26	灰釉陶器 皿	口縁部	16.5×-×(2.3)	体部弱い丸味をもち大きく開く。口唇部強く外屈。	①良好 ②灰白 ③やや密
662-27 206-27	灰釉陶器 碗	口縁部	17.6×-×(3.1)	体部丸味をもちやや浅目。口縁部強く外反して開く。腰部回転篋削り。内面刷毛塗り施釉か	①良好 ②灰白 ③やや粗
662-28 206-28	灰釉陶器 段皿	底部	-×7.8×(1.5)	高台断面丸く外反して立つ。内面施釉。底部回転糸切り残る。	①良好 ②灰白 ③やや密
662-29 206-29	灰釉陶器 皿	底部	-×6.6×(1.8)	高台極めて低く断面丸い。	①良好 ②灰白 ③密

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

662-30 206-30	灰釉陶器 椀	底部	-×7.7×(2.7)	腰部丸く深い体部になるか。高台高く内湾気味に張る。潰け掛け施釉。	①良好 ②黄灰 ③やや粗
662-31 206-31	灰釉陶器 椀	底部	-×8.9×2.4	高台断面丸く幅広、強く外へ張る。底部回転篋削り。潰け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③密
662-32 206-32	灰釉陶器 椀		-×7.0×(3.4)	体部丸味強い。高台やや高く断面丸まり、強く外に張る。潰け掛け施釉	①良好 ②灰黄 ③やや密
662-33 206-33	灰釉陶器 椀	底部	-×9.1×(1.9)	高台断面丸く直立する。内面施釉。	①良好 ②灰白 ③やや粗
662-34 206-34	須恵器	頸部	-×-×(5.6)	瓶頸部か。内面に巻き上げ痕。	①良好 ②灰 ③やや粗
662-35 206-35	須恵器 瓶		-×-×(4.4)	肩部丸く張る。頸部の基部に強い段状の凸帯巡る。内面胴部・頸部の接合痕顕著。	①良好 ②灰白 ③やや密
662-36 206-36	須恵器 瓶		-×7.0×(7.5)	胴部僅かな脹らみ。轆轤成形。胴下半斜位篋削り。底部右回転糸切り。	①酸化軟 ②橙 ③やや粗・砂粒混る
662-37 206-37	土師器 甕	口縁部	21.2×-×(5.9)	口縁部外傾度弱く内湾気味に立つ。内面は小さな段をなす口縁部横撫で。肩部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗
662-38 206-38	土師器 甕	口縁部 1/2	19.0×-×(5.0)	肩部強く張る。口縁部やや低く、弱く外傾し口唇部は内屈する。口縁部横撫で。肩部縦位篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③粗・小石混る。
662-39 206-39	土師器 甕	口縁部	23.6×-×(6.3)	胴部丸く張るか。口縁部外反気味でくの字状に開く。口縁部横撫で。肩部横篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗
662-40 206-40	灰釉陶器 瓶	口頸部 1/2	21.0×-×(11.2)	広口瓶の口頸部、頸部僅かに外傾し、口縁部外反して開く口唇部下顎をなし尖がる。内外面施釉。	①良好 ②灰白 ③密
662-41 206-41	羽 釜	口縁部	25.4×-×(5.6) 鏝径28.3	鏝断面丸く強く突出。口縁部内傾し口唇部丸く僅かに肥厚	①良好 ②鈍い黄橙 ③粗
662-42 206-42	須恵器 甕	口縁部	25.0×-×(11.0)	肩部丸く張る。口縁部外反して強く開く。口唇部断面丸く下位に丸味のある凸帯を巡らす。内面青海波状当て目。	①良好 ②灰 ③やや密・黒色粒多量
662-43 206-43	須恵器 破片 硯	破片	8.9×6.8×1.1	風字硯か。脚部は足状をなさず提帯状に巡り、硯尻部は切り込みを入れる。硯面摩擦著しく光沢著しい。	①良好 ②灰 ③密
662-44 206-44	須恵器 高杯	台部	-×13.1×(6.2)	高杯脚部、短脚の方形透し3方にあくか。脚端部は強く上方にはねる。	①良好 ②暗緑灰 ③やや粗・黒色粒混る
663-45 206-45	須恵器 甕		厚1.1	口縁部直線的に外傾。口唇部は断面矩形をなし下位に凸帯を巡らす。4～5条単位の波状文4段を施す。	①良好 ②灰 ③やや粗
663-46 206-46	須恵器 甕		厚1.2	口縁部外反し開く。口唇部細まり下位に強沈線を入れ凸帯状に突出。口縁部凹線で2分し、上下に8条単位の波状文	①良好 ②灰 ③粗
663-47 207-47	瓦 平瓦		厚2.0 幅26.0	凹面細い布目。凸面篋撫で。側面篋調整。	①酸化やや軟 ②鈍い橙 ③密・小石混る
663-48 207-48	瓦 平瓦		厚1.3	凹面布目。凸面撫で。側面篋調整。	①良好 ②灰 ③粗
663-49 207-49	瓦 平瓦		厚1.8	凹面粗い布目。凸面条線状の叩き目。側面篋調整。	①良好 ②暗緑灰 ③やや粗
663-50 207-50	瓦 平瓦			凹面細かい布目、輪積み痕あり。凸面篋撫で。側面篋調整。	①良好 ②灰 ③やや粗
663-51 207-51	瓦 平瓦		厚1.7	凹面布目。凸面撫で。側面篋調整。	①良好 ②灰 ③やや密
663-52 207-52	瓦 平瓦		厚1.9	凹面布目後条線状の削りか。凸面篋撫で。側面篋調整。	①良好 ②灰黄褐 ③密・縞状
663-53 207-53	瓦 平瓦		厚1.5	凹面細かい布目。凸面撫で。側面篋調整。	①良好 ②オリーブ黒 ③やや粗
663-54 207-54	瓦 平瓦		厚2.0	凹面粗い布目。凸面撫で印刻あり形状不詳。	①やや軟 ②灰黄 ③密
663-55 207-55	土製品 埴 埴		高2.2	内外面は暗赤褐色の溶解物及び緑青付着。	①良好 ②灰黄褐 ③やや粗
663-56 207-56	石 砥石		5.2×2.5×2.0	多面使用。重23.5g	粗粒安山岩
663-57 207-57	石 砥石		2.5×2.6×1.8	2面使用。重9.7g	粗粒安山岩
663-58 207-58	石 砥石		5.0×4.4×4.5	スタンプ型。1面使用。重88g	角閃石安山岩

第5節 K区の遺構と遺物

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
663-59 207-59	須恵器 転用砥石		3.1×3.7×0.9	3側面使用。甕片	①良好 ②灰 ③やや密
663-60 207-60	須恵器 転用砥石		2.1×2.9×1.1	3側面使用。甕片	①良好 ②緑灰 ③やや密
663-61 207-61	須恵器 転用砥石		3.8×2.1×0.9	2側面使用。甕片	①良好 ②褐灰 ③やや密
663-62 207-62	須恵器 転用砥石		4.2×3.9×1.1	1側面使用。甕片	①良好 ②灰 ③やや密
663-63 207-63	須恵器 転用砥石		3.7×4.5×1.0	3側面使用。甕片	①良好 ②暗青灰 ③やや密
663-64 207-64	須恵器 転用砥石		4.1×4.5×1.3	4側面使用。甕片	①良好 ②緑灰 ③やや粗・砂粒多量
663-65 207-65	須恵器 転用砥石		6.6×5.4×1.3	4側面使用。甕片	①良好 ②灰 ③密
663-66 207-66	石製品 紡錘車	完形	径4.0高1.9 孔径0.5	断面台形。細かく丁寧な擦痕状調整痕。	滑石
663-67 207-67	鉄製品 不明		長(7.5)幅1.2~ 2.3厚0.3	片端部幅広。	

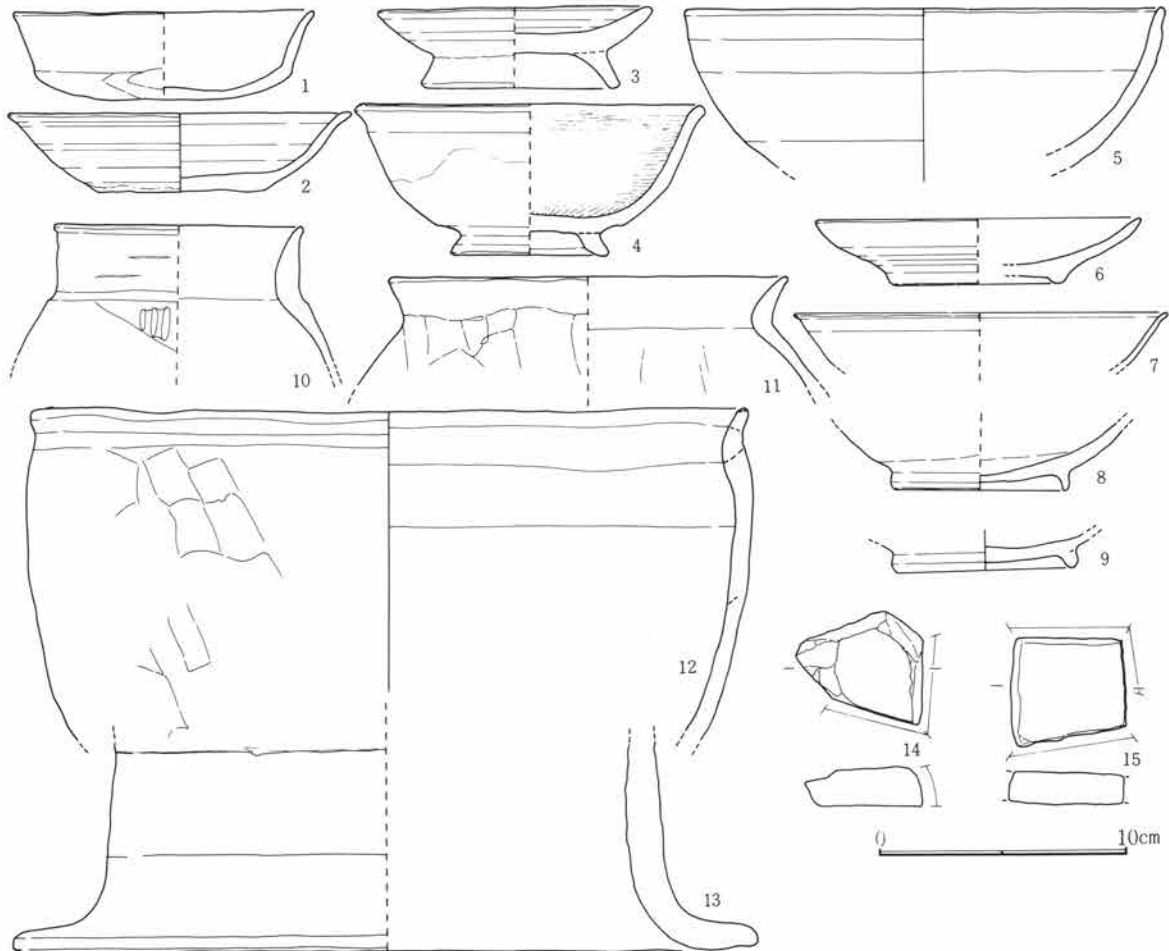


Fig. 664 K区表採遺物

第3章 G・H・I・J・K区の遺構と遺物

K区表採遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	残存量	計測値	器形及び成・調整の特徴、その他	①焼成 ②色調 ③胎土
664-1 207-1	土師器 杯	1/4	12.0×-×3.5	丸底扁平な底部から丸味のある段をなし、口縁部は外反気味に開く。口唇部外屈。口縁部横撫で。底部不定方向篋削	①良好 ②橙 ③密
664-2 207-2	須恵器 杯	完形	13.6×6.8×3.1	底径大き目。体部やや扁平で、口縁部外反して開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
664-3 207-3	須恵器 皿	完形	10.9×7.8×3.2	体部器肉厚い。内面ほぼ平坦をなす。付高台、高く外へ張る。轆轤成形。	①酸化良好 ②淡黄 ③やや粗・砂粒多量
664-4 207-4	内黒土器 椀	1/4	14.0×6.4×6.0	腰部水平に張り、体部丸味をもつ。口縁部緩く外反して開く。付高台幅広く強く外へ張る。内面黒色処理・篋磨き。	①酸化良好 ②鈍い橙 ③やや密
664-5 207-5	須恵器 椀		19.2×-×(6.3)	体部丸味をもち深目。口縁部僅かに外反。轆轤成形。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや粗
664-6 207-6	灰釉陶器 皿		13.0×6.6×2.6	腰部で弱くくびれ、体部上半は内湾して開く。高台低く幅広く断面丸い。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③やや粗
664-7 207-7	灰釉陶器 椀		14.8×-×(2.2)	体部丸味をもち浅い。口唇部丸まり強く外屈。内面刷毛塗り施釉。	①良好 ②灰白 ③やや密
664-8 208-8	灰釉陶器 椀		-×7.0×(2.7)	腰部に丸味をもち、見込み部窪む。高台三ヶ月。刷毛塗り施釉。底部回転篋削り。	①良好 ②灰黄 ③やや密
664-9 208-9	灰釉陶器 椀		-×(7.4)×(1.4)	高台低く断面丸い。	①良好 ②灰白 ③やや粗
664-10 208-10	土師器 甕		10.0×-×(5.4)	僅かに張る胴部から小さな段をなして口縁部は直立する。口唇部細く丸まって外屈。口縁部横撫で。胴部横位篋削り	①良好 ②橙 ③密
664-11 208-11	土師器 甕	口縁部 1/4	9.0×-×(4.4)	胴部丸く球状に張るか。口縁部短かくくの字状に開き、口唇部丸まる。口縁部横撫で。胴部縦位篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗
664-12 208-12	土師器 甕	上半部 1/4	28.6×-×(13.2)	胴部張りなく、口縁部短かく僅かに外傾。口縁部横撫で。胴部縦位篋削り。内面横位篋撫で。	①良好 ②明赤褐 ③粗
664-13 208-13	土師器 甕		-×29.6×(8.4)	胴部直立し、底部水平に開く。器肉厚い。外面回転篋撫で。	①酸化軟 ②橙 ③やや密・小石混る
664-14 208-14	須恵器 転用砥石		5.0×4.0×1.2	2側面使用。薬片	①良好 ②灰 ③密
664-15 208-15	須恵器 転用砥石		4.5×4.3×1.0	4側面使用。薬片	①良好 ②暗オリーブ 灰 ③密

第4章 まとめ

鳥羽遺跡は推定上野国府の西方間近にあり、奈良・平安時代を通じて国府を中心とした上野の政治的・文化的中枢を構成する遺跡の一つである。800余軒に及ぶ密集した竪穴住居跡群・大規模な鍛冶工房跡・堀と柵を巡らす特殊な掘立柱建物跡など、古代地方都市国府周辺域を形成するにふさわしい内容を備えている。しかし負うところの課題は大きく、検討すべき事柄は数多く残されている。竪穴住居跡群の構成と変遷、そして時間的な位置付け、鍛冶工房跡群出現の背景とその意義、特殊掘立柱建物跡の性格等々、これらが遺跡の構成体として互いにどのような有機的関連を持つか。最終的な命題としては上野国府の成立と変遷に対していかに系わってくるのか。遺跡のもつ情報量の割には何んらの検討もなされていないのが現状である。

当報告でも調査による成果を検討するまでに至っていないのが、1～2の遺物について様相を述べ責の一部としたい。

1. 遺物について

銅製銚帯金具

鳥羽遺跡からは巡方・丸軻合せて5個の銚帯金具が出土している。出土遺構は、G区G7号住居跡(巡方)・K区K9号住居跡(丸軻裏金)・G区(巡方)・H区(巡方)MN区第2台地下(丸軻)である。

銚帯金具は奈良・平安時代の律令官人が位階によって各々腰帯に装着した金具である。位階によって銚が区別されていることは、「衣服令」²に定められている。銚には金銀装と黒漆塗りといわれる鳥油があり、五位以上の文官と武官の衛門督と佐・兵衛督は金銀装の腰帯を、また六位以下の文官と武官の尉・志、兵衛、主帥が鳥油腰帯を装着する規定である。

伊藤玄三氏は東北地方の古墳から出土する銅製銚帯金具などから古墳の年代決定の資料として検討を加えた。これによって銚帯は707年～796年と807～810年にその使用が限定されることを明らかにし、六位以下の官人が用いる銅製鳥油腰帯には大小が認められ、鳥油腰帯にも位階の差があることを想定された³。また佐藤興治⁴・阿部義平氏⁵は平城宮出土の銚帯を分析することによって、銚帯は段階的にその寸法が異なり、大きさによる分類が可能であることを示し、巡方においてとくにそれが顕著に認められることを明らかにした。とくに阿部氏の分類は鳥油腰帯にあたる銚帯は3mm幅で変化する規格を描出し、A₁～A₈に分類した。この分類は縦幅で8段階が認められ、6位以下の正・従位に相当し、各段階の銚帯は横の長さで上・下に対応する可能性を指摘した。平城宮出土の銚帯では現在のところ巡方では最大幅3.9cm、最小幅1.5cm。丸軻は最大長4.2cm、最小長2.1cm、最大幅2.6cm、最小幅1.3cmのものが知られている。最も明瞭に段階的变化を示す巡方の寸法と六位以下の位階を対応させると右表ようになる。この表を基に鳥羽遺跡出土の銚帯に位階の対応を試みるが、H区出土の巡方と、K9号住居跡の丸軻は銅地鍍金製であり、右の分類の対象とはならない。別途に検討が必要である。

銚分類	対比位階	幅	長さ
A 1	正六位上 正六位下	3.9	4.2
A 2	従六位上 従六位下	3.6	3.9
A 3	正七位上 正七位下	3.3	3.6
A 4	従七位上 従七位下	3.0	3.3
A 5	正八位上 正八位下	2.7	3.0
A 6	従八位上 従八位下	2.4	2.7
A 7	大初位上 大初位下	2.1	2.4
A 8	少初位上 少初位下	1.8	2.1

表1 銚帯分類・対比位階・巡方規格(単位:cm)

伊藤玄三「八世紀の銚帯に示される授位」『法正史学』第36号 昭和59年の銚帯分類対比位階に計測値を加えたものである。

第4章 まとめ

G 7号住居跡出土の巡方は極めて小型品で、分類の中では最下位の部類に入る。裏金具が遺存しており革帯からの剥落とは考えられない。また黒漆の痕跡は見られない。縦幅1.7cm、横長さ2.1cmを測り、分類基準によれば縦幅が0.10cm狭くなるが、ほぼA₃類少初位に対応する。

G区巡方も漆などの痕跡は見られない。断面形は僅かに台形を呈しており計測箇所によってはその数値が異なる。大きさによって位階を区別するならば前面が基準となると考え、上端面を計測する。縦幅3.0cm、横長さ3.3cmを測り、分類A₄の規格になり従七位に対応する。

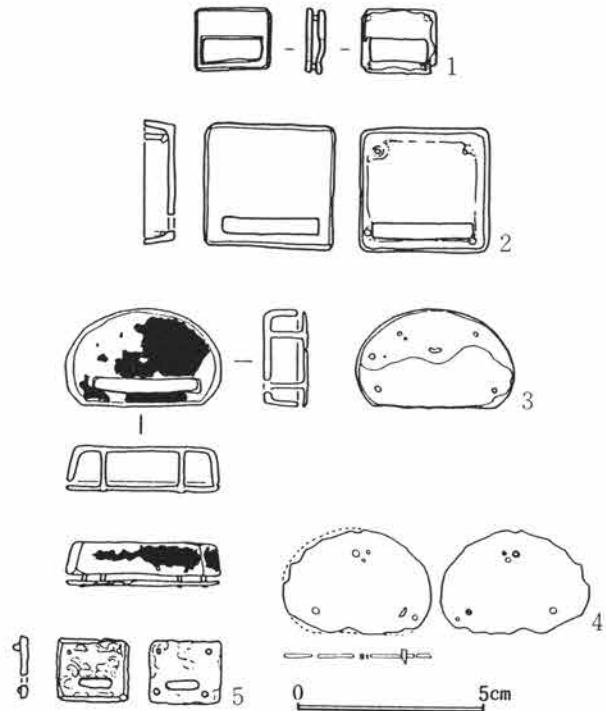
MN区第2台地下出土の丸鞆は台地下の土器留りより出土したものである。裏金具が残り、革帯より剥落したものとは考えられない。表面及び側面には黒色漆が塗られ、鳥油腰帯にふさわしいものであり、重さ34.6gでかなり重量感がある。「衣服令」に見る銜帯の制が東国の地方官人に至るま

までその規定が及ぼされている左証になろう。律令体制下における諸制度の徹底さが窺われる好資料である。計測値は横長さ3.8cm、縦幅2.4cmを測る。平城宮資料によれば最大長、最大幅の丸鞆よりやや小さく、これより1ランク下位に相当する。3mm幅の段階には合致しないが、およそ従六位に対応する可能性がある。

銜帯金具5点の中には、2点の銅地鍍金製がある。1点は丸鞆裏金具で他は打ち出し文様のある小型巡方である。金銀装腰帯が五位以上の官人が使用するものとすれば、H区・K区K 9号住居跡出土の銜帯五位以上の官人が想定できる。上野国における五位以上の位階叙位例は天平勝宝一年(749)碓氷郡石上部君諸弟・勢多郡上毛野朝臣足人や宝亀二年(771)には佐位郡檜前君老刀自など五位授位の記事が散見でき、鳥羽遺跡での五位官人の存在も十分考えられる。K 9号住居跡の丸鞆裏金は長さ4cm以上、幅2.7cm以上を測る。しかし、H区出土の巡方は縦幅1.7cm、横長1.9cm測り、鳥油腰帯の初位クラスに相当する寸法である。五位以上の金銀装腰帯が寸法規準で鳥油腰帯と同様な規格をもつことも考えられるが、この場合K 9号住居跡の丸鞆はかなりの高官に相当してしまい妥当性に欠ける。H区巡方は表面に文様の打ち出しが施され、透しの形状は小さく、通例の小型巡方とはやや意匠を異にする。これらの特徴は律令期の銜帯の形式にはみられず、より古式の様相を呈しており、古墳時代の腰帯具と考えられる。

鳥羽遺跡の銜帯から五位クラスを筆頭に六位・七位・初位の各位階を想定することができた。しかし、直ちにこれら位階に相当する官職を奉ずる官人が存在していたことにはならない。なぜなら、中央における律令官人は位階に則した官職を与えられる位階相当制であるのに対し、在地では、必ずしも位階と官職は連動するものではなかったからである。授位には様々な型があり、令制宣人になされる一般的授位の他、軍功・献上・慰撫などが考えられる。現在のところ、集落跡出土の銜帯から論及できることは位階段階に止まらざるを得ない。

銜帯金具の形態については、大・小の巡方に差異がある。初位に比定されるG 7号住居跡の巡方は偏平な



鳥羽遺跡出土銜帯

1. G 7号住居・2 G区・3 MN区第2台地・4. K 9号住居跡・5. H区

表金具を用い、下方に長方形の透しを設ける。この形状は裏金具もまったく同様である。これに対し、G区出土の巡方は従七位に相当するものであるが表金具は側面を明瞭に折り曲げ中空の台形状を呈する。裏金具に関しては、これに相当する寸法をもつ県内事例では、いずれも透しを有する資料はない。大・小の巡方を比較すると小型品により複雑・丁寧な作りが感じられ、細部では端部の面取り加工の有無にも表われている。この差異は県内で小型鍔帯を副葬する終末期古墳と、主に集落跡に見られる大型鍔帯でも看取できる現象であり、また巡方に限らず丸軋についても共通している。大・小の鍔帯の構造あるいは作りの違いはどこに原因するかは明らかではないが、位階の上・下によるものであるとすれば、初位クラスが用いる鍔帯が上位の使用より手のこんだ鍔帯具を用いるのは疑問である。G7号住居跡出土の巡方と同類の鍔帯金具が終末期古墳に多く見られる事実は古墳の年代的面からして、大・小の鍔帯には時間差が存在していると考えられ、G7号住居跡タイプは鍔帯の制施行の中でも比較的古い段階のものと思われる。

註5

1. G7号住居跡・K9号住居跡は、『鳥羽遺跡』G・H・I・区・I・J・K区、関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第11集・12集 1986・1988に各々掲載してある。また、G区・H区・MN区第2台地下の鍔帯金具は本報告資料である。
2. 『衣服令』『令義解』鍔
3. 伊藤玄三 「末期古墳の年代について—東北地方末期古墳出土遺物を通して—」『古代学』14巻3・4合併号 1968
4. 佐藤興治 「金属器」『平城宮発掘調査報告VI』奈良国立文化財研究所 昭和50年
5. 阿部義平 「鍔帯と官位制について」『東北考古学の諸問題』1976
6. 4によれば巡方横長さ最大4.2cmが知られている。
7. 『群馬県史』3原始古代 古墳 群馬県史編纂委員会 1985 御廟塚 上原古墳・御部入8号墳など

経軸軸端（経軸頭）¹

経軸軸端に関しては文献上や伝世品として知られるものが多い。過去においては石田茂作先生による正倉院文書から摘出された多数の経軸の種類や、昭和12年刊行の『仏教考古学講座』で詳しい解説がなされている。しかしながら、最近の仏教考古学関連の書物ではこの経軸そのものを取り上げてふれられることはなく、研究の対象としては影の薄い存在になっている。経軸あるいは経軸軸端は経巻そのものを構成する部分的な存在であり、経文や経巻が主体的に研究される傾向にあるためと思われる。これは、現在のところ考古学的資料の形で発見される資料の増加が望めない現状の反映であろうか。確かに考古学の調査による経軸資料は報文などでは多くを知ることは出来ない。特に関東地方では当遺跡を含め僅か3例を知るのみである。

鳥羽遺跡L78号住居跡より出土した経軸軸端は銅地鍍金製である。軸身は残存していない。下端は一部腐食しているが縁辺に僅かな鍍金がかかり、ほぼ実長体をなすと考えられる。長さ2.8cm、径1.2~1.3cmの筒円筒形で上端部は緩く反って広がる。頂部は径1.7cmの円形で僅かな膨らみをもち、いわゆる揆軸の体をなす。厚さ0.1cm・内径約1cmを測る。銅地に鍍金を施し、側面には松葉文に毛彫りを刻み、4個単位の魚魚子文を打ち出す。頂面は端部周縁に刻み文を配し、内側には不鮮明であるが3個単位と思われる魚魚子文を打ち出す。

経軸端を出土したL78号住居跡はL区第4台地の北西部にあり、重複が著しく遺構の北半部の詳細は不明である。竈は2基検出されており住居跡の建て替え、あるいは竈の作り替えが考えられる。出土遺物は経軸端の他灰釉陶器・角釘などがある。出土状況は埋土中での検出であるため厳密な意味での遺構との同時性は問えない。しかし遺構検出面から見た遺構自体の掘形は浅く、経軸の相対的水平位置は低い。経軸軸端は片端であること、また木質など軸身の残存も見られない。これらのことは経巻そのものが存在していた可能性は小さい。

関東地方における経軸の出土例は栃木県男体山山頂祭祀遺跡と本県勢多郡粕川村宇通遺跡とここ鳥羽遺跡

第4章 まとめ

の3例である。

栃木県男体山山頂祭祀遺跡²

男体山山頂の祭祀遺跡で平安時代後期を中心として、多量の仏具関係遺物が検出されている。経軸は水昌製と銅製・銅地鍍金製がある。水昌製の軸端は4個で円形・八面体・七面体の各種があり、下端の欠損する1例を除きいずれも下端部は荒い削りで細められ軸身に差し込む形式のものである。銅製・銅地鍍金製は13個検出され、鍍金製品にはおそらく毛掘り彫金で端花文・櫛歯文・四花文などの文様を彫し、これらの文様とともに魚々子文を施している製品も多い銅製・銅地鍍金には多く軸身が残存しており、中には対をなすかと思われるものもある。軸身の樹種についての記載がなく不明であるが、出土品の中には竹管を用いたものもある。

経軸の出土については経巻を納めたような遺構とは伴わず、他の多くの遺物と混在した状態で検出され、経軸の所属年代を推定することは困難であるとされる。混在する遺物群の中にはき紀年銘の刻された6点の銅板製経筒がある。報告文にもあるようにこの経筒と経軸の関係は直接結び付けることは出来ないといわれるがここでは参考のために経筒に刻まれた紀年をあげる。承久三年(1221)・安貞三年(1229)・文永元年(1264)・元応元年(1321)・元享三年(1323)・天文二年(1533)

群馬県宇通遺跡³

宇通遺跡は勢多郡粕川村にあり、昭和40年の偶然の発見から故尾崎喜左雄博士によって数次の調査が実施された遺跡である。その後やや時を経て、昭和60年度以降は粕川村教育委員会の手によって発掘調査が続けられている。遺跡は赤城山南面の中腹に位置し、標高650m付近の山岳地帯に立地する。南に張り出す尾根を階段状に開削し幾つもの平坦面を作り出している。遺構の多くはこの平坦面上にあり、現在まで12軒の建物跡が確認されている。いずれも礎石建物跡で一部の建物跡は基壇築造も見られる。建物跡は浅間山降下B軽石層で覆われ、出土遺物は10～11世紀にかけての年代が考えられており、平安時代後期の神仏習合色彩の強い仏教寺院の可能性があるとされる。

宇通遺跡で確認された礎石建物跡はA～J、X・Yと仮称されている。経軸端は2点あり、金銅製小神像・舶載磁器・緑釉陶器などがある。経軸端については粕川村教育委員会宇通遺跡調査担当者の小島純一氏より、未発表資料にも拘わらずご厚意をえて説明をいただいたのでここに掲載する。

宇通遺跡出土の経軸端

昭和62年度調査の礎石建物跡Aから2点出土した。礎石建物跡は方3間の建物である。

経軸端の一つは中央南入り口部の基壇上から出土し、いま一つは中央北よりの基壇土坑上面から出土した。前者は、底部から口縁部に向かって直線的で緩やかにすぼまる。断面形は六角形で、口縁部を欠損している。銅製で塗銀が施されている。一部に毛彫りによる唐草文状の文様が認められる。全体に腐食が著しい。

現存長21.8mm・底径16.4mm・現存口径14mm・器厚1.2mm・重さ2.4gである。

後者は、底部から口縁部に向かって緩やかにすぼまる。底部は緩やかな曲線でひらく口縁部には短い「かえり」がある。銅製で全体に腐食が激しい。

全長20.8mm・底径16.9mm・口径7.6mm・器厚0.5mm・重さ2.1gである。

経軸端の出土例は、管見した限りは当遺跡を除いて上記の栃木県男体山山頂遺跡と群馬県粕川村宇通遺跡である。男体山・宇通遺跡とも祭祀あるいは宗教関連遺跡であることは自明のことであり、遺跡の性格上当遺跡とはやや況状を異にしており同列には語れない。ある意味では鳥羽遺跡の経軸端のあり方が特殊とすべきであろう。

鳥羽遺跡は様々な遺構群から構成されているが、基本的には集落跡として据えられよう。集落跡としての遺跡に経軸端が存在する事実は、これに関わる何らかの宗教施設（仏教）を想定することができ、また少なくとも、遺物として仏教的要素が遺跡内にもたらされる機会が当時の社会的背景としてあったと思われる。『日本霊異記』には村落内の寺についての記載が知られ、寺が村人によって作られ、経営されていたことが見られる。県内の集落遺跡では「宮田寺」など墨書土器が出土し、9世紀代の集落内寺院と相定される遺構が発見された沼田市の戸神諏訪遺跡がある⁴。寺院とは異なるが、集落内には神社施設が存在していたことが知られる。儀制令春時祭田条に関する「古記」によれば、村ごとに神社があり、私的に社官をおく。公・私を問わず他国に往来するさいは社首をして神幣を輸さしす。家毎にその状態をはかり出挙の利稲で酒を造り祭田の日に飲食を供にする⁵。人々が集まるとき、国家の法を知らしめる。とあり、集落内寺院にも共通する部分があったと考えられている。律令制政治の支配体制を補うものとして流布を計られた仏教は、その象徴として建立された各国国分二寺だけでなく、一般集落にも強い影響をもたらしていたであろうと思われる。しかし、経巻の部具である経軸端の存在は一般民衆の間に権威としてしか映らなかった仏教が、本来の意味で集落跡の中に受け入れられてきた状況を示しているのではないだろうか。

宇通遺跡出土の経軸については粕川村教育委員会、小島純一氏にコメントをいただいた。感謝いたします。

註

1. 経軸の両端を呼称するに現在二つの名称が見られる。1つは（軸端）「装演」 関根龍雄 『佛教考古学講座』第10巻 昭和12年 雄山閣。2つは（経軸頭）『日光男体山』山頂遺跡発掘調査報告書 昭和38年 角川書店
2. 1と同じ
3. 石川克博 「宇通遺跡をめぐる二・三の問題」『群馬文化』第197号 昭和59年、西田健彦 「群馬県における地方史研究の動向（2）考古、歴史時代（奈良時代以降）」『群馬文化』第216号 昭和63年
4. 新倉明彦 『戸神諏訪遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第98集 1990
5. 米田雄介 『郡司の研究』 法政大学出版社 1978

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第101集

鳥羽遺跡

L・M・N・O区

《本文編》

一関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第31集一

平成2年3月15日 印刷

平成2年3月20日 発行

編集・発行／群馬県教育委員会
前橋市大手町1丁目1番1号
電話(0272)23-1111

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村下箱田784番地の2
電話(0279)52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社